DEVIL SURVIVOR-PERSONA CROSS-

亜兎羅須

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－

【Ｎコード】
Ｎ７７９４Ｍ

【作者名】
亜兎羅須

【あらすじ】
　ごく普通の高校２年生の少年、有里淳はある日、従兄であるナオヤから明日、渋谷で会わないかという電話を受ける。一体何の用かと訝しみつつも、淳は同じくナオヤに呼ばれた、親友である木原篤郎、谷川柚子と合流する。しかしそこで３人を待ち受けていたのは、とても受け入れ難い現実だった。その頃、かつて八十稲羽という街を謎の猟奇殺人事件から救った銀髪のペルソナ使いもまた、東京へとその足を運んでいた……。『悪魔使い』と『ペルソナ使い』。２つの異なる存在が交差するその時、『本来の物語』から外れた、

もう1つの『物語』が始まる！　これはアトラス原作のＳＲＰＧ『女神異聞録デビルサバイバー』に『ペルソナシリーズ』のストーリーを組み込んだ二次創作小説です。ネタバレを多分に含みますのでその点を踏まえた上でお読み下さい。また、両シリーズの公式設定に対し、作者独自の解釈も多分に含まれております。ご注意下さい。

『前書き』

どうも、亜兎羅須（あとらす）というものです。

この度は本作『女神異聞録ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ―ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ―　』に目を通して頂き、ありがとうございます。

小説情報の方でも述べましたが、改めて、ここで本作の詳しい説明をさせて頂きます。

本作はアトラス社開発、ニンテンドーＤＳ専用ソフト『女神異聞録デビルサバイバー』に、『ペルソナシリーズ』の設定を組み込んだクロス物の二次創作小説です。

時代は、『ペルソナ３』からおよそ１９年近く経った未来となっております。

また、クロスさせた『ペルソナシリーズ』の設定において、オリジナルと本作では次のような相違点があります。

●『ペルソナ３』の物語に、『ペルソナ４』の主人公が特別課外活動部のメンバーとして登場している。

●『ペルソナ３』の物語に、男性主人公と女性主人公の両方が存在したことになっている。

●『ペルソナ３』で、ニュクスを封印したのは、２人のうち男性主

人公の方で、且つ、男性主人公が息を引き取った日が、オリジナルよりおよそ2年ほど遅れている。

現在の時点で申し上げられる、クロスさせた『ペルソナシリーズ』のオリジナルの設定と、本作での相違点は、ざっとこのようなものです。

物語が進むにつれて、更に様々な相違点、及び作者独自の解釈などが多々明らかにされていきますので、そういったものが苦手な方は注意して下さい。

そして当然『女神異聞録デビルサバイバー』、『ペルソナシリーズ』のネタバレも多分に含まれておりますので、そちらにもご注意下さい。

それでもよろしいという方は、どうぞ『女神異聞録ＤＥＶＩＬ ＳＵＲＶＩＶＯＲ―ＰＥＲＳＯＮＡ ＣＲＯＳＳ―』の世界をお楽しみ下さい。

感想、誤字脱字の指摘は勿論、作者はまだ小説を書き始めたばかりの素人ですので、小説執筆などにおけるアドバイスなども広く受け付けておりますので、お気軽にどうぞ。

亜兎罹須でしたっ！

PROLOGUE

――汝（なんじ）、人の身に生まれし者よ。

――人は今や、力ある種（しゅ）。

――なれば人よ、汝は向き合わなければならない。

――己が持つ力と、そして『運命』に……。

◆

◆

――渋谷、宮下公園。

『もしもし？』

『よっ、ユズ。さっきナオヤさんからメールが来てさ、明日会わないか？　って！』

『ナオヤさんって、【彼】の従兄だよね…？　私も明日暇でさ…』

◆

◆

――平穏な日常に在りても、定めは刻々と迫りけり。

――其（これ）は、裁きなり。

――かつて汝ら人の子の言葉を分かち、驕（おご）れる力を砕いた雷なり。

◆

◆

――六本木

『……ハハッ、やっぱりダメだわ。ったく、アヤさんは何だって、この曲を私に預けたんだか……』

『焦ることはないさ……。【歌こそは境界のない言葉】。お前なりの思いで歌い上げればいい……』

◆　◆

――されど。

――神自ら在(あ)らざる限り、全ての者は、闇をも抱く…。

◆　◆

――六本木ヒルズ

『これで【召喚の器】は完成しました……。どうでしょう、このまま我々にその力を預けてくれませんか？』

『……俺は何もしちゃいないさ。【源初の共通言語(かのじょのうた)】が奴らを喚んだ。それに……俺は【神】が苦手でね』

◆　◆

――人よ、真に己（おのれ）で在りたいならば、汝は自ら、戦わねばならない。

――汝の持てる闇、『悪魔』と。

――汝、戦の定めを持つ者よ。

――挑む意志あらば、

――その名を述べよ……。

◆　◆

『ＦＲＯＭ：有里　淳

ＳＵＢＪＥＣＴ：何だと思う？

――よう、アツロウ。

さっきナオヤから電話があってさ、明日会わないかって言われたんだけど……。聞けばお前も呼ばれたんだって？

ああ、それとユズもか。

あの淡泊な従兄(バカあにき)が、ただ遊ぶ為だけに俺達3人を呼ぶだなんて、俺にはちょっと考えられないだが……。

まあ、久々にアイツの顔を見るのも悪くないか。

んじゃ、また明日！』

◆

◆

――神曰く……七つの昼夜(ちゅうや)をもって創りしこの世を、七つのラッパの響きにて滅(めっ)さん。

――意志ある者よ、その瞳に映りし、『数』を恐れよ。

――残されし、昼と夜の数を……。

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『待ち合わせ』

――渋谷９０１前

８月中旬。

高校２年の夏休みが、もうすぐ終わろうとしている。

当然、暑い。

多くの人々が行き交う中、１人の少年が暇そうに側の電柱に体を預けていた。

大きなヘッドフォンをつけており、何故かそこから伸びる針金は猫耳の様な形をしている。青い髪と同じく青い目。端正な顔立ち。二の腕の境目までしかない半端な黒い長袖（半袖？）に、赤いジーンズを履いていた。

彼の名前は有里淳（ありさとじゅん）。

……どこにでもいる、ごく普通の高校２年生だ。

淳は特に理由もなく辺りを見渡してみる。東京では既に全国的な帰省が始まっている為、渋谷の街はいつもよりほんの少し人通りが少ないように感じた。

夏休みの場合は、真面目な生徒なら（これは少数だが）既に宿題を終わらせて残りの余暇を悠々自適に過ごしているところだろうが、

彼の様な不真面目（これが大半だ）な生徒は、山の様に積まれた宿題に殆ど手をつけていない為、若干追い込まれたような危機感を感じ始めているところだろう。

そして、そういう人間は『早めに宿題やらないと……』と頭では分かっていても、『いや、まあ、明日やればいっか！』と何の根拠もない言い訳を自分にしながら今日という日を意味もなく浪費していたりする。

この少年――有里淳のように。

淳は額から流れ落ちる汗を不快そうに拭う。今日の暑さがそうとうお気にめさないようだ。

そんな彼がどうしてこの炎天下の中、屋外に身を置いているのかというと、勿論理由がある。

『ナオヤ』。

それは数年前まで淳と同居していた、彼の従兄の名前だ。

しばらく連絡をとりあっていなかったが、昨日、いきなりその従兄から今日この時間この場所に来るようにと言われて、彼はここにいるという訳だ。

やがて、あまりの暑さに一旦近くのファミレスに避難するべきか、と考え始めていた淳の耳に聞き慣れた、しかし懐かしい少年の声が聞こえてきた。

「お～い、ジュン！　こっちこっち！」

声がする方に目を向けると、白いニット帽を被り、青いTシャツ、黒いジーンズを履いた猫目の少年がノートパソコンを抱えながらこちらにかけ寄ってくるところだった。

彼の名前は木原篤郎（きはらあつろう）。

通称アツロウで、淳の親友であり、クラスメイトだ。パソコンなどの電子機器に強く、彼が愛用のノートパソコンを手放しているところを淳は殆ど見た事がない。

「よっ、お疲れ～。……ったくナオヤさんも奇遇だよなぁ、このクソ暑い日に外で待ち合わせだなんて……」

「まったくだ。あの野郎、絶対わざとだぜ？　俺が暑いのが苦手だって知りながら、わざわざ外を集合場所にしたに決まってる」

冗談ではなく。

あの従兄の性格の悪さは国宝級だからな……と、心の中でつぶやく淳。

「ハハハッ、で、どうよ夏休みは？　ガッコだと毎日顔合わすから、すっげー久しぶりに感じんな。元気だったか？」

「ああ。元気元気。ただし過去形でな。なあアツロウ、ちょっとそこのファミレスで休まないか？　いい加減、暑さで脳味噌が溶けちまいそうだ……」

まだ『ユズ』が来てないが、窓際の席だったらこの待ち合わせ場

所も確認できる。

「ん～……、そうだな……。毎日家でパソコン叩いてる俺としても、この暑さはちょっと……。いやぁ、でも良かったよ。実はプログラミングで、分からないとこがあってさ。もー困っちゃって、ちょうどナオヤさんに聞こうと――」

「あ～、いたいたっ！　探したよ～！」

アツロウの慎(つつ)ましやかな独白は、しかしとある少女の声で遮られる事となった。これもまた聞き慣れた声である。

「おっ、来たなソデコ！」

アツロウと淳の視線の先には、全身をピンクでコーディネートした青いミニスカートの、赤髪の少女がいた。

「ソデコって言うな！　私はユズよ！　た・に・か・わ・ゆ・ず！　っもう、いい加減その呼び方やめてよね！　アンタのせいで、クラスの男子にまでソデコって呼ばれるんだから！」

「へへっ、いーじゃんか！　柚子(ゆず)と袖子(ソデコ)って、字面そっくりじゃん。それに生徒だけじゃないだろ？　今も真顔で『ソデコ』って間違えてる先生、わりといるんだぜ？」

「それは、アンタみたいのが『ソデコ』って呼び倒しているからでしょ！」

ちなみに、その『みたいなのが』の中に淳も含まれているのは秘密だ。

「ははは、バレたか！」

「あ～ホラホラ、２人ともやめろよ」

さも第三者を装いながらも、淳は２人を宥める。

「だって、アツロウがソデコって、ゆーんだもん……」

アレレ、結構シュンッてさせちゃったヨ。

……でも、そういう姿も可愛いから良し。

「まあまあ、アツロウの寂しくも悲しい最大級の戯言なんかほっとけって」

「いや、お前も普段ソデコって言ってんじゃ……」

アツロウが何か言いかけたが、淳が爽やかな笑顔（ただし目は笑っていない）を向けると、すぐさま黙り込む。

ここまでの会話を見ていた者がいたなら、容易に力関係が把握できそうなやりとりだった。

「にしてもナオヤのヤツ、中々来ないな……」

あの野郎、さてはどこかで暑さに苦しむ俺を嘲笑ってるんじゃないだろうな……と淳が眉をひそめると同時に、ユズが何かを思い出したかのような顔になった。

「え……？　あ、そうだ！　さっきナオヤさんに会ってさ。ジュンとアツロウに届け物頼まれたの。急用で来られないからって」

「へぇ？」

と、淳。

アイツからの届け物。

まさか爆弾とかじゃねえだろうな……。

「え～……何だよ、ナオヤさん来れないの？　……つーか、届け物って何？」

「コレよコレ。も～カバン重くなっちゃって大変だったんだから」

そう言うと、ユズはかけていたカバンから何かを取り出した。

「……？　何だコリャ？　ゲーム機？」

淳はその内の1つ（3つあった）を手にもって、改めて確認してみる。確か、何回かCMで見た事がある。上画面と下画面とで分かれた携帯ゲーム機だ。しかし詳しい事は思い出せない。

（……何だ？　従兄から弟へのプレゼントって事か？　でも、だとしたらどうしてアツロウやユズの分まであるんだ？）

「ナオヤがコレを？」

疑問に満ちた表情で、淳がユズに尋ねる。

「うん、そうだよ？　『コミュニケーション・プレイヤー』ってヤツだよね、コレ？　ＣＭで見たことあるよ、『世界の人と遊ぼう！』ってヤツ」

「アツロウも知ってる……よな、当然」

「ああ、勿論！　つーかソデコも知ってんだ？　そうそう、それだよ。でもそれだと長くて呼び難いだろ？　コミュニケーション・プレイヤー、って。だから略して『ＣＯＭＰ』って呼ばれてんだ。実際、便利だぜ？　メールとかブラウザ機能もあるし、まあそういう意味じゃゲーム機ってより、ケータイに近いかな」

「ふうん……そういうモンなの？　ナオヤさん言ってたよ。『君たちに必要なものだ、手放すな』……って」

「『君たち』？　……ああ、だから3台な訳か……」

納得したようにうなずきながらアツロウが言う。

「……でもよ」

淳は３つある内の１つ、白いＣＯＭＰを手に取りながら口を開いた。

「アツロウ、お前確かコレ持ってなかったっけ？」

「ああ、そうなんだよな。ＣＯＭＰなんて、俺家に行けば持って……ん？」

アツロウはＣＯＭＰの１台（群青色）を開いて、不思議そうな顔をする。

「……何だコレ？　こんなトップメニュー、見たことねーぞ……？　オリジナルなのかな……？」

「オリジナルって……、自分で作ったって事？　そんな事、出来るの？」

「あれ？　そういえばユズって、ナオヤとはあまり面識ないんだっけ？　アイツ、その筋じゃ結構有名なプログラマーなんだよ」

淳が言う。

「ああ……つまり、天才プログラマーって訳だ！」

「アツロウ、それは流石に誇張しすぎだ……」

まあ……当たってるけど。

でも、自分の従兄を褒めちぎられるのって、なんかくすぐったいな……と、淳は思った。

「まあ要するに、あの人の手にかかればこんなモン、作ろうと思えば朝メシ前ってヤツだよ」

「へぇ……知らなかった。ナオヤさんってそんなに凄いんだ」

「……ん？　アレ？」

アツロウがＣＯＭＰのボタンをカチカチと押しながら、頭の上に疑問符を浮かべる。

「おっと……フォルダ開かねーや。プロテクトかかってんのかな……？」

「プロテクト……？　それって他の人が勝手にいじれないようにするヤツでしょ？　じゃあ、中身は見られないじゃない」

「まあ、確かにユズの言う通りだけど……。だとしたらなんで、わざわざプロテクトをかけたＣＯＭＰを俺達に渡したんだって話だよな」

不思議そうに首をかしげる淳。

自分達を試してるのか（可能性：中）、それとも……単にからかってるのか（可能性：大）。

ともあれ。

「まぁ、プロテクトとは言っても、アツロウなら外せるだろ？」

淳が従兄であるナオヤの存在を知ったのは随分前になるが、しかしアツロウはそれ以前からナオヤとネット上で繋がりがあったらしい。

類は友を呼ぶ。

アツロウ曰く、『俺はナオヤさんの一番弟子だ！』……だそうだ。

まあ、その言葉が言い過ぎではないぐらいにはアツロウの腕は確かなのだが。

「へへ、そのとーり！　やっぱりノートＰＣ持ってきて正解だったみたいだな……！」

「……」

（いや、お前は常にノートＰＣを持ち歩いてるだろ……？）

淳が心の中でそう突っ込んでいる事など露知らず、アツロウは持っていたノートＰＣにＣＯＭＰを繋ぎ、何か操作を始めた。

「……はあ！？　ちょ、ちょっとアツロウ！　何やってんの！？」

それを見たユズが信じられないと言う様に声を上げる。

「へへっ！　何って、ハッキングして、フォルダをこじ開けんだよ」

「こじ開けるって……、ナオヤさんに怒られるよ！？」

「安心しろよユズ。アイツが本当に中身を見られたくないってんなら、いくらアツロウでも解けない様なプログラムをかけてる筈だ」

まあ、こうしてＣＯＭＰを渡した時点でわざと自分達に中身を見せたいって事は明々白々たる事実だが……。だったらどうしてプロテクトをかけたのかというと、それはやはり……単にこちらをからかってるだけなのだろう。

「え～？　本当に大丈夫かな……」

しかしユズは、未だに心配そうである。

「分かってねーなあ、ソデコ！　あの人は俺の師匠だぜ？　あの人がわざわざ俺を呼び出して、これを渡したんなら、っと……」

アツロウは目まぐるしい速さでキーボードを操作している。淳はその画面に一体何が映し出されているのか気になったが、しかしどうせ見ても自分には理解できない内容だろうと思い、やめておいた。

「……そんなの、プロテクトを解いて、中身を見ろって事でしょ！　ま、師弟間の挨拶みたいなもんさ！」

「ぜ～んぜん分かんない！　何よ、その面倒臭い師弟関係……」

呆れたようなユズの声を、アツロウは無視する。

「さて……と、今回はどんなプロテクトでしょうかっと……。にっひっひ♪　ワクワクするよな！」

「し・ま・せ・ん！　そんなのアツロウだけですっ！」

やがて、ＣＯＭＰから『ピロリンッ♪』と軽快な電子音が聞こえてきた。

「お？　解けたのか？　アツロウ」

淳が言う。

「おうっ！　とりあえずメールだけ見られるぜ。はい、お前らの分」

「よしよし。流石はナオヤが認める生粋のパソコンフェチだ……」

「……淳、お前今、何か凄い失礼な事言わなかったか……？」

「うんにゃ全然」

しらばっくれながら、淳はアツロウから渡されたＣＯＭＰの画面からメールフォルダの中身を確認する。

そこには既に一通のメールが入っていた。

『ＦＲＯＭ：時の観測者

ＳＵＢＪＥＣＴ：ラプラスメール

おはようございます。

本日のニュースをお伝えしマす。

？１６時頃　渋谷区青山　アパート　にて　男性　が　【死亡】

肉食獣　に　食い荒らされた　傷

？１９時頃　港区青山　青山霊園　にて　大きな　【爆発】　原因

は　不明

?21時頃　東京　全域　にて　大規模　な　【停電】

みなさま良い一日ヲ』

「……」

随分悪質な悪戯だな……。

それがメールを読んで淳が抱いた第一感想だった。

（まあ、相手があのナオヤだから、これぐらいでは驚かないけれど……）

しかし、ナオヤをよく知らないユズはそう簡単には受けとれなかったようだ。

「16時頃、渋谷区青山、男性が……死亡!?　肉食獣に食い荒らされた……。……!?　何のニュース、これ。気味が悪い……」

と、至極まっとうなリアクションをするユズ。

「……確かに気味が悪いな」

とりあえずここはユズに合わせとくか、と淳。

「……だよね!?　何か淡々としてて、よけい気持ち悪いよ……」

「東京全域で停電、とかも書いてあったな……何だ、コレ。本日のニュースって……今日そんなこと起こってねーし」

アツロウにも意味がわからないようだ。

「ナオヤさん、何でこんなモンにプロテクトかけたんだ？あ、もしかして暗号とか！？」

「……なあアツロウ、俺にしてみればこの展開は、明らかにお前がとことん翻弄されて終わるってオチしか予想できないんだが……」

しかし、そんな淳の気遣いなど無駄無駄無駄無駄と言わんばかりに、アツロウは、

「青山、青山……う～ん……。ナオヤさんのアパートもあの辺だけど……。関係ないか……」

と、暗号（恐らくただの思い込み）の解読に余念がない。

そんな彼の様子を見て、ユズは「もういいよ、気持ちが悪いってば！」と本気で気味悪がっていた。

「ナオヤさん、アツロウが絶対にＣＯＭＰいじるの知ってて、悪戯したんじゃないの？」

「……うん。それが否定できない辺りがマジで困るんだよな、アイツの場合」

真剣な表情で、淳が言う。

「どうかなあ……。あの人、尋常じゃなく頭良いからさ、何か意図があると思うんだけど……」

しかし、どうやらアツロウの脳内では、ナオヤは相当美化されているらしい。

「……お前ら、もうＢＬしちまえ」

「何か言ったか！？」

「うんにゃ、何も」

やがてアツロウは、

「……う～ん、しかし、これだけじゃ分かんないな……。よし、他のプロテクトもこじ開けてみるか……！　俺は落ち着ける場所に移動するから、２人でちょっと時間潰してきてくれ。あ、そのＣＯＭＰは持ってってい～ぜ！」

「ああ。そうしないといざナオヤに会った時に、アイツの口にコレを捩込めないからな……」

「いやいや！　そーいう意味で言った訳じゃないヨ！？　……まあ、いくつかの機能は使えるみたいだから、ついでに試してみろよ。じゃ、後でな！」

そう言うと、アツロウはＣＯＭＰを解析する為に移動した。

彼の後ろ姿を見送ったユズは、呆れてものが言えないという表情

で、

「もうっ、どうせ悪戯だって！　アツロウって、こういう話になると、子供みたいなんだからっ！　……ん～と……ジュン、どうする？　アツロウも時間かかりそうだし、どっか見に行って来よっか、ね？」

「ん、そうだな」

確かに、せっかくここまで来たというのに、何もしないで帰ったのでは、余りにも消化不良ではある。

そんなこんなで淳は、ユズと２人で９０１前を後にした。

ユズと一緒に歩き出した彼の視界の端では、黒いスーツを着た銀髪長身の男性が、なんとも暑そうに額の汗を拭っていた。それを見た淳も、無意識の内に、手を団扇（うちわ）代わりにして顔を扇ぎ始めた。

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『待ち合わせ』（後書き）

※時々、この後書きに載せる予定の以下のようなキャラクター紹介は、公式設定のものもあれば作者が勝手に考えたものもあります。ご注意下さい。

●キャラクタープロフィール

・ジュン（有里淳（ありさとじゅん））

年齢：１６歳

誕生日：1月１９日（やぎ座）

血液型：Ｂｏｍｂａｙ型（Ｏ型の亜種）

身長：１６０ｃｍ（もう少し伸ばしたい）

体重：４４？（痩せ過ぎってユズに良く言われる）

家族：母。父は自分が生まれる前に死亡。他に血が繋がっている人物は祖母と伯母（おば）のみ。つーか男って俺だけじゃん……。

職業：月光館学園高等部２年Ｆ組

好きな食べ物：ガキさん（荒垣さん）の料理ならなんでも。

嫌いな食べ物：フーさん（風花さん）の料理は全部無理。つーかア

レは料理じゃなくてただの殺戮兵器だと思う。
趣味：音楽鑑賞・コサックダンス。

・アツロウ（木原篤郎（きはらあつろう））
年齢：１７歳
誕生日：６月１１日（ふたご座）
血液型：Ｂ型
身長：１７４ｃｍ
体重：５６？
家族：父、母（両親は海外在住の為、１人暮らし）
職業：月光館学園高等部２年Ｆ組
好きな食べ物：ハンバーガー、カレーライス、牛丼
嫌いな食べ物：サラダ
趣味：プログラム製作、ジュンと一緒にゲーム等で遊ぶこと。

・ユズ（谷川柚子（たにかわゆず））

年齢：１７歳

誕生日：４月１６日（おひつじ座）

血液型：Ａ型

身長：１５９ｃｍ

体重：載せるかっ！

家族：母（父は離婚し別居中）

職業：月光館学園高等部２年Ｆ組

好きな食べ物：お菓子全般（特にミルクやチーズ系）。それとチョコ。

嫌いな食べ物：セロリ

趣味：買物、Ｄ－ＶＡの音楽を聴く事。

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『翔門会の演説』

――新宿、歌舞伎町。

日本最大の繁華街であるこの街は、今日も相変わらずな賑わいを見せていた。

「さてと……どこ行こっか？　カラオケとか、映画？　う～ん……。アツロウから連絡来るかもしれないし、ケータイの通じる所がいいよね？」

淳の隣を歩くユズは、とても嬉しそうだ。久しぶりに友人と会った事で、テンションが上がっているのかもしれない、と淳は思った。

そんな中、淳がふと辺りを見回すと、奇妙な衣装を着た（フード付きで、足元まで裾（すそ）を伸ばした橙色のコートだった）怪しげな集団が路上に陣取っていた。

（……？　何だ？　新手の宗教か？）

その集団の代表らしき男が、道路に設けられた壇上で演説を行っている。

「――であるからして、かつてバベルの塔の建設を阻んだ神の試練が、今、再び訪れようとしています！」

「……」

（うわぁ……）

コイツらに関わってはいけない、と淳の本能が猛烈に訴えていた。

「うっわ……。何、あの怪しい集団」

ユズも同じ気持ちのようだ。

彼女と淳が不審な目で見つめる間も、男（紫色の髪を七三分けにした、いかにもキザっぽい風貌だった）の演説はまだ続いている。

「さあ、みなさん！　我々、翔門会（しょうもんかい）と共に、ネットの力で世界を再び1つにまとめ――」

（……今、アイツ、ネットの力でとか言ったか？）

淳の中での宗教というと、結構古風なイメージがあるのだが、最近のヤツは案外ハイテクなのかもしれなかった。

「ネットの力、だってさ。はぁもう……何か疲れちゃうよ。ジュンは、ああいうの興味ある？」

「ある訳ねえだろ…」

苦笑を禁じ得ない様子で、淳はユズの質問に答える。

「あははっ！　そうだよねぇ。服とかも明らかにヘンだし。まあ、私だって、ネットで世界と繋がるって凄いと思うし、それを否定する気はないけどさ。でも、神様とか、世界を1つに、とか言われると、ちょっと信じられないかも……」

神なんて、そんなろくでなしがこの世にいる訳がない――。

まぁ、ユズが今、そこまで酷く言った訳ではないが――少なくとも、淳はそう思っていた。

神などいない。

いるのは人間だけだ。

「……あ～あ、何か変な話題になっちゃった。ジュン、場所変えよ！」

「りょーかーい」

そんなやり取りをして、淳とユズは歌舞伎町を後にする。そこを去っていく彼らの背中を追うように、男の声が2人の耳に聞こえてきた。

「今夜から3日間、ネットの力を信じ、同じ志をもつ人々が、東京に集います。心ある方は、参加して下さい。『主上』を信じ、試練に備えて下さい。その時こそ、我々は…」

……どうでもいいが。

あの演説を聞いてると、まるで自分達が神を嫌っている、と聞こえるのは自分の気のせいだろうか……と、そう思いながら、淳は今度こそ歌舞伎町を後にした。

◆　◆

その後、淳とユズは表参道でウィンドウショッピングを楽しんでいた。

「やっぱり、この辺りのお店って、おしゃれよね～。何ていうか、大人っぽい？　中学生の頃は原宿ばかり行ってたけど、やっぱりいつかは、表参道の似合う女になりたかったんだよね」

中学生の頃か……。

その頃はちょうど、淳がまだナオヤと同居していた頃だ。

「……ね、今の私って、浮いてない？」

「え？　あ、ああ。十分いけてるよ」

咄嗟に声をかけられたので、淳は慌てて答えを返す。

「え、うそ！　やった、嬉しい！」

しかしユズはそれでも大層嬉しそうに喜んでいた。

頬を赤くして、両手で押さえながら。

「……」

（やべえ、思わずグッときた……）

「でもさ、表参道って原宿と全然イメージ違うじゃない？　何かさ、原宿っていうより、青山に近いイメージが……」

そこまで言うと、ユズは何か思い出したように黙り込む。

同時に、淳も思い出していた。

青山といえば……。

「……青山、ね……。ねえ、ジュン、今って何時だっけ？」

「……16時30分、だけど……」

「……」

「……」

（まさか、なぁ？）

淳とユズの脳裏には、先程読んだメールの内容が浮かんでいた。

「う……16時30分かぁ。何か、あのCOMPにあったメール、思い出しちゃった……。ほら、ナオヤさんのCOMPで見た、『肉食獣に食い荒らさた』……って、メール」

青山のアパートで、男性の死体を発見。肉食獣に食い荒らされた

跡あり。

あのメールにはそう書かれていた。

「たしか、場所が青山だったでしょ？　時間もちょうど今頃だしさ……」

「……いや、でも、まさか考えすぎだろ。大体、未来を予測するメールだなんて……」

淳に言わせてみれば、正直、そんなものは机の引き出しから突然、猫型ロボットが現れるよりも遥かに不気味だ。

――が、

ちょうどその時、数台のパトカーがサイレンを鳴らしながら、目の前の道路を走り抜けていった。

「……」

「……」

再び、２人の間に沈黙が流れる。

「……パトカー？　あっちって……青山の……方角……。あ、あはは！　そ、そんなワケないじゃんね！？」

「あ、当ったり前だろぉ！？　あはははは……はは…は……」

「……」

「……」

3度目の沈黙。

「……ねぇ、ナオヤさんのアパート、青山なんだよね……？　見に行かなくて……大丈夫かな？」

「……行ってみるか」

「う、うん」

ここまできたら、気にならないという方が嘘になる。

「ちょっと、怖いけど……。大丈夫だよね、行こう！」

そして2人は、ナオヤの住まいである青山のアパートへと向かった。

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『ナオヤの忠告』

――青山　住宅地。

淳とユズは、先程見かけたパトカーの後を追いかけていた。

すると――やはり、と言うべきか――辿りついた先は間違いなく、ナオヤが暮らすアパートだった。

しかも、アパートの入口――いや、最早今となっては『現場』と言った方がいいかもしれないが――には、立ち入り禁止の黄色いロープが張られ、辺りはそれを遠巻きにする野次馬で溢れかえっている。

そして。

次の瞬間、人ごみを気にするまでもなく自分のもとへと近付いてくる、１つの影を、淳は見つけた。

「あ……ナオヤさん！？」

ユズが驚いた様に声をあげる。

「……ナオヤ……」

変わってない、と淳は思った。

最後に会ってから、随分経つというのに。

肩まで伸ばした鼠色の髪、赤い狐目、時代遅れな羽織りとパンカラ下駄。

そこに立っているのは確かに、淳が知るナオヤという人間に相違なかった。

「……淳、驚いたな。こんな所でどうした？」

「……お前はいつも、そういう嘘を平気な顔してつくよな……。あ……のメールを書いたのがお前だとしたら、どうして俺達がここにいるのかぐらい、容易に想像出来るだろ？」

そう言って淳は、クイッと顎でロープで張られた現場の入口を指し示す。

「……まあ、とりあえず無事でよかった、とは言っといてやるよ。一応、家族だからな」

「……フン、相変わらずだな、お前は……。しかしだ、淳よ。ツンデレという台詞が流行って以来、その手の言葉の内実が世間で急速な変化を遂げているのを知っているか？　お前は昔から口の悪い弟だったが、しかしこれまでのお前の態度全てがツンデレだったのだとすれば、それほど悪くない生活だったと思う――」

「断じて違う！」

お前とたてるフラグはねぇ（河本〇一風に）！

「だ、大体……私達、もしかしたらナオヤさんが……と思って来た

んですよ！？」

ユズの言葉を聞いても、ナオヤは相変わらずのポーカーフェイスだ。

「……ああ、アパートでの事件の事か」

「決まってるじゃないですか！　そうだ！　大体、アレは何なんですか！？　ナオヤさんが変なメールを読ませるから、不安になっちゃったんですよ！？」

「……そうか。……そうだな、すまない。怖がらせる気はなかった」

（……ん？）

ユズに対して小さく――本当に小さくだが――頭を下げるナオヤを見て、淳は眉をひそめた。

（コイツがこんな素直に謝罪するなんて珍しいな。……もしかして、あのメールは悪戯じゃない……？）

いや、まさか。

淳は思う。

悪戯じゃないとしたら、何だ？

だが……。

「……喰われた男は、お前たちと同じ高校生だ。俺の隣に住んでい

たな……」

（……っ！！）

しかし、そんな淳の小さな疑問も、今のナオヤの台詞を聞いて、何処かへと吹き飛んでしまった。

「――おいナオヤ、俺の比較的乏しい理解力を、出来れば許して欲しいんだが……。今お前、『喰われた』って言ったか？」

「……嘘！？」

ユズは信じられない、といった表情をしている。もっとも、淳にしても同じだが……。

「じゃあ、あのメールに書かれてた事、本当に起こったんですか！？　だってあのメールが来たのは、事件が起こる前で……あれ！？　ジュン、どういう事……！？」

そう、それが問題だ。

時間、状況、全てがあのメールと一致している。

しかもそのメールは、実際に事件が起こる前に自分達へと届いていた。

考えられるとすれば……、

「未来を予知してる、とか……？」

自分でも馬鹿馬鹿しい考えだ、と淳は思う。

しかし……。

淳の言葉を聞いたナオヤは嬉しそうにクックと笑っていた。

「……大したものだ。お前の意外性には本当に驚かされるよ」

「……」

あろうことか、ナオヤから『意外性』について感心されるとは……。

何故か屈辱的な気分になる淳だった。

「普通ならば、俺がメールを送りつけ、そして実際の事件を起こしていると考えられてしまうだろう。流石は俺の従弟だよ……」

「やめろ、気持ち悪い。まぁ、それが一番妥当な推理だっていうのは俺にもわかるけど、お前がそんなバレバレな事する訳ないしな……」

なんだかんだ言って、淳はアツロウに言われるまでもなく、ナオヤの頭脳については誰よりも評価しているのだ。

ナオヤはそんな淳を見て、フッと小さく笑みを漏らすと、再び口を開く。

「……淳、お前たちがここに来た理由は分かった。だが、俺達のこの出会いは、アノマリー……不規則や、変則……。本来はありえな

い出会いだ」

「いや、ここお前の自宅じゃん」

しかし、淳のささやかなツッコミはナオヤに届かなかった様だ。

「すぐにアツロウの所へ戻るんだな。もうすぐ…始まってしまう」

「『始まる』？　何がだ？」

ふざけているようには見えない、が……。

だとしたら、一体？

（……分からない）

「ナオヤさん、一体なんの話してるんですか？」

ユズの問い掛けにも応じず、ナオヤは既に、２人から視線を外していた。どうやらこれ以上、質問に答える気はないようだ。

「……もう時間がない。２人とも、よく聞け」

視線をこちらに向けないまま、ナオヤは語り出す。

「これから起こる事から、目を離すな。怖れずに立ち向かうんだ」

やはりその口調は、いつものように自分をからかっている時とは、明らかに違う……と、淳は思った。

「その時こそ、真実の扉は開かれる……。運命を……乗り越えろ……」

「あっ……！　ま、待って下さいよっ！」

ユズの制止には応じず、ナオヤはそのまま立ち去ってしまった。

「……」

（何なんだ、一体……）

「何なんだよ、アイツ……」

「行っ……ちゃった……。何か、様子が変だったよね……？　どうかしたのかな？」

ユズが言う。

「……まあ、アイツが変でどうかしてるのはいつもの事だけどな……」

今回は、それに輪をかけておかしかった、という事だ。

『♪♪♪♪』

その時、淳の携帯電話が鳴った。ディスプレイには、アツロウと表示されている。

一瞬、淳は躊躇ったものの、次の瞬間には電話に出ていた。

『よう！　プロテクトの解き方が分かったぜ！　お前たちのＣＯＭＰも必要なんだ。こっちに来てくれないか？　渋谷の電気博物館前で落ち合おう！』

まくし立てるように、一気にそう言うと、アツロウは一方的に電話を切ってしまった。ナオヤのセキュリティが解けると分かって、興奮してるらしい。

それを横で聞いていたユズが、

「あ……と、とりあえず、アツロウと合流しよう？　何かいきなりで、頭こんがらがっちゃったけど……。アツロウの方で、何か分かったのかもしれないし！」

と言う。

「……これ以上、面倒事が増えなきゃいいけどな……」

不吉な予感を胸から拭えないまま、淳は、電気博物館がある方向へと足を向けた。

◆

◆

――渋谷、電気博物館前。

渋谷駅から山手線沿いの北、宮下公園のそばにある高架の西側に、電気博物館はある。

淳とユズの2人は、その入口で佇んでいるアツロウを見つけた。

「よう、遅かったじゃないか。どこまで遊びに行ってたんだ?」

「……ちょっと、ナオヤのアパートまでな…」

「え!?　ナオヤさんに会ってきたのか?」

こちらとは正反対なテンションのアツロウにやや戸惑いながらも、淳に代わって、ユズが先程起きた（正確には起きていた、だが）事件の一部始終を語り始めた。

事件の内容がメール通りだった事、そしてナオヤに会った事も……。

最後まで聞き終えたアツロウは、流石に混乱しているように見えた。

「……おいおい、何だよそりゃ。あのメール、本当に当たったっていうのか?　つーか、何でナオヤさんに会ったのに俺を呼ばないんだよ?　そしたら、色々聞けたのにさ」

「ごめん、色々あったからこっちも慌てちゃって」

「ん……、まあいいよ、今更言っても始まらないからな。で、何だ

って？　あのメールに書いてある事が、本当に起こるって話か……」

「……まあ、１件目のメールの内容があそこまで見事に再現されたんだ。そう考えるのが妥当じゃないか？」

勿論、当たらないに越した事はないが……。

「いやいやジュン、いくら何でも、ＣＯＭＰのメールが未来を予知してるなんて有り得ないだろ」

「……」

まあ、アツロウの反応が普通か……と、淳は思った。

「お前達こそ、ナオヤさんの悪戯か何かに引っ掛かったんじゃないのか？」

アツロウが言う。

「実際に起きた殺人事件を利用して、か？　いくらアイツでも、そんな悪趣味極まりない悪戯するか？」

「う～ん、そう言われるとなぁ……。いや、でもやっぱりそんなの有り得なくね？」

「だって人が殺されたんだよ？　警察だって来たんだから！」

アツロウのあまりにも楽観的な態度に、ユズは少なからずイライラしているようだった。

「あれが悪戯とか……、考えずらいなあ……」

「あははっ！　だって、ナオヤさんの話が本当なら、あれは犯行予告じゃないって事だろ？　だったらマジで未来でも予知しなきゃ、そんな事出来ないぜ？　ただの偶然って方がまだ信じられるよ」

「……」

（アツロウの言う通り、か…）

1人納得したように、淳は頷く。

だが、ナオヤのあの態度……そして最後の言葉……。

――『時間がない』。

確かにそう言っていた。

時間。

一体、何の時間がないというのか。

しかし淳は、心の中ではそう想いつつも、口では、

「……まあ、確かに偶然かもな」

と言っていた。

「……だろ？　あのメール、他にも爆発とか停電とか書いてあったよな？　あのメールが偶然じゃなくて本当に未来を予知してるって

いうなら……。この2つも起こらなきゃおかしいって事になるけど……。そんな様子、全然ないぜ？」

「え～、だってさぁ……」

アツロウのもっともらしい意見を聞いても、ユズはまだ納得出来ないようだ。

「まあ、い～じゃん！　プロテクト外してＣＯＭＰの中身を見れば、全部分かるって」

「……う～ん、何か納得いかないけど、とりあえずアツロウの話をしてよ。何か分かったんでしょ？」

「そういえばアツロウ、さっき電話で俺達のＣＯＭＰが必要だとか言ってたけど、アレは何なんだ？」

「ああ、まんまと騙されたよ。ナオヤさんは最初から、俺が1人で解析作業をするって分かってたみたいだ。…この3台のＣＯＭＰ、常にお互いを監視し合っていて、1台じゃプロテクトが解けないんだよ」

「アイツの性格の悪さが、モロに滲み出てるな、それ……」

淳がそう言う中、アツロウは例の如く鞄からノートパソコンを取り出すと、水を得た魚のような勢いで説明を始める。

「はは、だよな。えっと、ＣＯＭＰには、一定範囲内にある他のＣＯＭＰを、認識する機能があってだな……！」

が、そういった方面の話には何の知識もないユズが、すぐに不平を漏らした。

「あ～もう！　頭痛くなってきた……。説明はいいから、早くやってよ！」

「ったくお前はよ……。まぁいいや、じゃ、プロテクトの解除を始めるぜ？　２人とも自分のＣＯＭＰを起動してくれ！」

アツロウに促され、淳とユズは自分のＣＯＭＰを起動し、アツロウに手渡す。

アツロウが解析作業をする中、淳の胸中には嫌な予感が渦巻いていた。

予感。

理由はない、が。確かなものだ。

今、この瞬間、自分の知らない所で。

何かが起こっている――そんな、漠然とした予感。

と、その時。

解析を待っている間、淳がふと顔を上げると、道路の向こう側にナオヤらしき人影を見つけた。

渋谷の外れではあるが、人通りが途絶えており、その姿だけが妙に浮き上がって見える。

その整った顔立ちに表情はなく、それがどこか冷たい印象を与えている……。

「――よし、解けた！　んじゃ、ＣＯＭＰを再起動するぜ！」

突然のアツロウの声に、淳は一気に現実へと引き戻された。

気がつくと既に、先程の場所から、ナオヤの姿は消えていた。

そして、アツロウは３人のＣＯＭＰを再起動させると、２人に手渡した……。

しばらくすると、画面に、次の様な文字が表示される。

『Ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎ　Ｐｌａｙｅｒ.

――プロテクトの解除を確認。

――プログラムを起動します。

――ＯＫ。

――アクマ・ショウカン・プログラム、起動ＯＫ。

――アクマ・ショウカン・プログラムを起動します。

――『Ｌｅｔ'ｓ　Ｓｕｒｖｉｖｏｒ.』

次の瞬間。

ごくごく普通の、どこにでもいる不偏で至極常識的で一般的な範疇に収まっていた筈の高校生、有里淳の日常は、

――終焉を向かえた。

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『ナオヤの忠告』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・ナオヤ（直哉（なおや））

年齢：２４歳

誕生日：１０月２９日（さそり座）

血液型：Ａ型

身長：１８２ｃｍ

体重：６５？

家族：養父、養母、従兄弟（子供の頃、両親とは死別。親戚の家で育てられた）

職業：プログラマー（養父のすすめで大学は出ているが、在学中からプログラマーとして仕事をしていた）

好きな食べ物：和菓子

嫌いな食べ物：特になし

趣味：骨董品集め、弟（ジュン）の面倒を見ること。

Ｄａｙ ｂｅｆｏｒｅ『電気博物館前のバトル（１）』

突然、３人のＣＯＭＰから目を覆いたくなる程の光が溢れだし、次の瞬間には、そこから3体の『異形』が現れた。

１匹は、如何にも童話に出てきそうな小さな女の妖精。

１匹は、頭に藁帽子を被った猫（猫にしてはやたらとサイズがデカい。淳の腰ぐらいまでの高さがある）。

１匹は、鎧を着込み、こん棒を持った――しかもあろうことか、２本足で直立している――犬。そう、犬だ。

「……っ！！」

余りに唐突で、余りにも非現実的な展開に、淳はとっさに言葉を紡ぐ事が出来なかった。

「うわっ……！　こ、ＣＯＭＰから……か、怪物っ！？」

「きゃああっ、な、何これ！？」

アツロウとユズが、怯えた声を上げる。

３人が完全に冷静さを失っている中、その怪物の内の１体が喋り始めた。

「あ～あ、キュウクツだったわ……！　……ここが人間界？　ふぅん、この人間達が喚び出してくれたみたいね。さ、早く戦おうよ！　勝ったら自由なんでしょ？　行っくよー！」

「はぁ！？」

何、その飛躍的な理論！？　と心の中で盛大に突っ込みを入れる淳。

（……しかもコイツ、今、『人間界』って言ったか？）

だとしたら、この怪物達は、ここは違う世界から来た、という事になる。

「ウフフ……！　逃がさないから、覚悟してね？　ちゃんと死んでくれなきゃ、アタシが自由になれないんだから！」

妖精はそう言うと、１番近くにいたユズへと、一気に向かって行った。

「きゃああっ！　こ、こっち来ないでっ！」

「……っ！　ユズ！」

友人が、明らかに危機的状況に置かれていると知り、淳の体は反射的に動いた。

幸い、妖精の体はこちらより遥かに小さい。つまりは、足の長さならこちらの方が上だ。

そしてそれはそのまま、機動力の差にもなる。

「何する気だっ！　テメエッ！」

淳は妖精の体を握ろうと腕を伸ばすが、あと数センチというところで、ヒラリとかわされてしまう。

「何よ！　人間の癖に！　アタシの邪魔する気!?」

すると妖精の体に、バチバチと電流が帯電し始めたかと思うと、次の瞬間にはそこから電撃が発生し、淳の体に直撃した。

「……っ!!」

文字通り、頭から足のつま先まで電流が駆け抜けたかの様な痛みが、淳の体を走り抜けた。

「ジュン!?」

それを見たユズが、悲鳴に近い声を上げる。

「あ……、がっ……!?」

淳の体全体が、痙攣したかのように、ガクガクと震える。

しかし、致命傷と言う程のダメージではない。

「……なっ、何よ、コイツ！　人間の癖にやるわね！」

自分の電撃を食らっても、まだ息がある淳に対し、ピクシーは驚

きを隠せないようだった。

「ユズ！　ジュン！　ちくしょう、今行くっ！」

そう言って、アツロウが2人に加勢する為に駆け寄ろうとするが、途中で、猫の姿をした怪物に行く手を阻まれてしまう。

「ギャウッ！　人間は悪魔のエサでげす！」

「うわっ！　なんだ！？　オマエっ！」

怪物の鋭い爪が、アツロウの体へと襲い掛かる。

いきなり現れた怪物に対応できなかったアツロウの体に、3本の細い爪痕が刻まれた。

「うあぁっ！」

追撃とばかりに、怪物が再び爪を振上げようとする。

「ぎゃうっ！？」

しかし、その追撃が届くか届かないという内に、その体が吹き飛ばされた。

先程の電撃による体の痺れから解放された淳が、その怪物の体を横から蹴り上げたのだ。

「人の友達（ダチ）に、ちょっかい出してんじゃねえよ！　アツロウを虐めていいのは俺だけだ！」

「ジュンッ！」

何か最後辺りに聞き捨てならない台詞が聞こえたような気がしたが、この状況では突っ込まない方が懸命だろう、とアツロウは思った。

「ギャへ……！　何で人間の攻撃が痛ぇだ？　おら、こんなの聞いてねえ……」

「アツロウッ！　大丈夫か！？」

「あ、ああ！　アレ……？　そう言われれば、思ったほど、痛くないな……？」

「あり…おか…しいだなぁ。何で人間のクセに、そんなに硬ぇだ？」

そう。

どういう訳か、アツロウも淳も、相手の攻撃を受けてもそれ程痛くなかった。

しかし、思考に耽る暇も与えない様に、鎧を着込んだ犬の怪物が淳の背後から襲い掛かる。

「ニンゲン、俺と戦ウ！　オレ、勝ツ！」

「き、気をつけろジュン！　やらなきゃ、やられる！　戦うんだ！」

「わかってる！」

自分の友人に襲い掛かろうとする怪物の姿を見て叫ぶアツロウに対し、言われなくとも、と心の中で応じる淳。

犬の怪物は淳の頭蓋を砕くべく、その手に持ったこん棒を大きく振り上げ、彼の頭目掛けて振り下ろしてきた。

しかし、先程の妖精（ピクシー）と違い、この犬の怪物（コボルト）の身の丈は、淳の体より頭1つ分大きい。

つまり、腕のリーチも長いという事だ。

腕が長ければ長い程、接近戦での小回りは効きにくい。淳がそこまで考えているかどうかは怪しいが、何はともあれ、彼はその縦に振り下ろされたこん棒を何とかかわす事が出来た。

しかし、攻撃をかわす事は出来るが、『倒す』となると、一体どうすればいい？　と淳は思った。

コボルトはその体に、見るからに頑丈そうな鎧を身に纏っている。あそこに拳を打ち込んだ所で、文字通り『骨折り損』になるのがオチだろう。

と、なれば。攻撃範囲は相手の肌が露出している腕、脚、頭部に限られる訳だが……。

（あのいかにも鋭そうな牙が生え揃った口のある顔面に拳を打ち込むのは、ちょっと、ねぇ？）

淳は考える。

（なら、頭部以外で相手に対する有効打になる攻撃箇所は……！）

淳は一旦腰を落として両手を地面に置き、体を支えると、そのまま両足を浮かして水平蹴りを繰り出した。

両手を軸に――さながら、独楽のように。

遠心力の乗った淳の右足が、コボルトの軸足にヒットする。

しかし、コボルトもそれを黙って見ていない。

どんな格闘技でも言える事だが、攻撃する瞬間ほど、隙だらけになる状況はない。

コボルトは地面に叩きつけたこん棒を、そのまま水平に振るう。

当然、そのこん棒の行く先には、淳の体――更に詳しく言うなら、淳の頭部があった。

頭は、体の中心。

いくら独楽の外装が激しく回っていたとしても、その中心部の位置は無動に等しい。

淳の蹴りがコボルトの脚に命中するのと。

コボルトのこん棒が淳の側頭部に命中するのは――ほぼ同時だった。

頭の内側から、誰かがハンマーでガンガン叩いているような痛みが、淳を襲う。

物理的法則に逆らえず、淳の体はアスファルトの地面を二転三転して側にあったガードレールへと衝突した。

「〜〜〜〜〜っ！！」

鈍い痛みに歯を噛み締めながら、淳は直ぐさま膝立ちになって体勢を整える。

側頭部から、何やら生温い液体が流れているのを、彼は感じていた。恐らく——というよりは間違いなく——自分の血だろう、と淳には予想がついた。

だが、淳は疑問だった。

何故、今自分は、このように考える事が出来るのか？

あれほど太く、重いこん棒を頭を叩きつけられたのだ。

正直、頭蓋骨陥没くらいは覚悟していたのだが……。そのダメージが少々の流血というのは、いささか拍子抜けという感じがある。

いや、勿論抜けてくれるに越した事はないのだが……。

淳の蹴りにより地面に倒れたコボルトも、既に体勢を整えていた。

「グァウッ……！　オマエ、強い！　オレ、楽しイ！　もっト戦ウぞッ！」

（この様子を見る限り、手加減をしたという感じでもなさそうだな……）

そんな光景を傍から見ていたアツロウの脳裏には、１つの推測が浮かんでいた。

「こっ、攻撃が効いた……！　コイツら、オレたちの攻撃が通用するんだ！　……！　……もしかして、ＣＯＭＰのおかげ……なのか！？」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない！　とにかく、今は生き残る事だけを考えろ！」

「お、おうっ！」

（――やれやれ。『生き残る事だけを考えろ』、だって？）

自分でおきながらも、淳は呆れる。

全く――。

少し前までは、まさか自分がこんな台詞を言う事になるなんて、淳は思いもしなかった。

だが、これは夢の中ではなく、現実の出来事だ。

殺らなければ、殺られる。

弱肉強食。

生きる為の本能か、それとも仲間の為か。

理由はともあれ――淳の体は、自分でも驚くほど早く動いていた。

コボルトが、そんな淳の行動に気づいた時には、既にその手がコボルトの顎を掴んでいた。

「グアッ……！？」

「おおおおぉぉっ！！」

そのままの勢いで、コボルトの頭部を地面に叩きつける淳。

今度はコボルトの頭部から血が流れる番だった。

だが、先の淳とは違い、コボルトの体は地面に倒れたまま、ピクピクと力なく震えるだけだった。

どうやら――勝負アリのようだ。

「ぐ、グァウっ……。オレ、負けタカ……。喚ビ出しタ人間、勝ッタラ、オレの主人ニナル約束。コレ、『契約』ッテ言ウ。オレ知ッテる」

「……？」

突然、意味不明な事を言い出したコボルトに対し、淳は首を傾げる。

「オレノ名前、闘鬼コボルト。今後トモヨロシク……」

「……何だ？　何言ってんだ？　お前」

しかしその問いに答える事なく、コボルトの体は青い光に包まれ、消失した。

「……やった！　勝てる……オレたち勝てるぞ！　し、死んでたまるかよっ！」

そんな光景の一部始終を見ていたアツロウは、淳の勝利を見てやる気を出したようだ。

「う、うそぉ！？　た、ただの人間に、悪魔が負けるなんて……！？」

傍で見ていたピクシーは、衝撃的な現実を見て口をポカンと開いていた。

「『悪魔』？」

（コイツら今、『悪魔』って言ったか？）

しかし、淳はすぐに、今はそんな事を考えてる場合ではない、と思った。

「だ、だけど、私の相手はアイツじゃない……！　アンタさえ殺せば、私は自由になれるんだから！」

改めて、ピクシーはユズへと視線を向ける。

「い、いや……！」

「ユズ！」

先程と同じ様に、ピクシーの体にバチバチと電流が帯電し始める。

「させるか！」

しかし淳は、それを見ても全く恐れずに、ピクシーへと手を伸ばした。

電撃は確かに驚異だが、覚悟さえしていれば耐えられない程ではない。

その小さな体を、淳は右手で握りしめる。

「な、何よアンタ！　離しなさいよ！　この痴漢！　変態！」

「誰が離すか……！」

正当防衛だ。

痴漢とか言うな。

「離せって言ってんでしょっ！」

直後、ピクシーの体から大量の電流が流れる。

「ぐっ……！」

右手を中心に、全身を針で刺されているような痛みが走り抜けるが、それでも淳は、ピクシーを掴んでいる手の握力を緩めたりはしなかった。

電撃でこちらが気（或いは命）を失うのが先か。

こちらが相手を握り潰すのが先か。

（――根比べだ！）

そして、

「……う、ぐ……い、痛い痛い！　わ、わかったわよ！　降参、降参！　まいったから、は、離してよ！」

先に心が折れたのはピクシーの方だった。

それを聞いて、淳はほんの少し握力を緩めるが、しかし相手に逃げられては反撃を喰らう恐れがある為、適度に強く握ったままにしておいた。

淳はピクシーを握ったまま、アツロウの方を見る。

アツロウは自分が相手をしていた猫の怪物（カブツ）を羽交い締めにして、必死に押さえつけていた。

その顔には幾つかの引っ掻き傷がある。どうやらアツロウもアツロウなりに頑張ったらしい。インドア派のなよ野郎という今までの見解は改めなければいけないかもしれない、と淳は思った。

「……本当に、もう、何もしないか？」

視線を元に戻し、淳はジト目でピクシーを見つめる。

「ひ、酷い……！　こ、こんないたいけな少女の言葉を疑うというの！？アンタ、悪魔だわ！」

「生憎、この国では、体から電流を垂れ流すような生物を『少女』とは言わないんでな……」

お前はラ○ちゃんか。

というか。

悪魔に悪魔呼ばわりされるなんて、ちょっと複雑だ……と、微妙な気持ちになる淳。

「いやー！　痴漢！　変態！　離せったら離しなさいよ！　童貞がうつるじゃない！」

「うつるかっ！」

悪魔にも生殖行為という概念が存在するのか……？

なんて。

少し卑猥な想像を膨らませてしまったのは秘密だ。

「ね、ねぇジュン。その娘、本当に観念してるみたいだし、離して

あげたら？」

流石にかわいそうだと思ったのか、傍から見ていたユズがオズオズと進言してきた。

「……いいのか？」

コイツ、今の今までお前を殺して自由になる、とか言ってたんだぜ？　という目でユズを見る淳。

ここで離して、和平成立。そんなの、今時、週間少年ジャンプでもなさそうな甘い展開は望めないと思うのだが……。

「う、うん。大丈夫だと思う。それにさ……」

ユズは何やらモジモジとしていた。

「今のジュン、傍から見たら全身青タイツの女の子を強姦してるようにしか見えないし……ね？」

「……」

俺、頭から血ぃ、流してんだけど……。

俺、コイツから2回、電撃食らわされたんだけど…。

おかしいなぁ……。さっきまで俺をユズが守るって展開だったのに……。

いや、泣いてないよ？

そんな風に、淳はブツブツ小さく呟いた後、

「……わかったよ」

――と、ため息をつきつつ、ピクシーを解放した。

顔面を蹴られた。

「何しやがる、テメエッ！」

再びその小さい体を、両手で拘束する淳。

「いやぁぁぁぁぁっ！　いやぁぁぁぁぁっ！」

「ちょっ、ちょっとジュン！」

「うるせえっ！　見てたろユズ！　コイツは危険だ！」

それを見ていたカブソ（既にアツロウに対する抵抗をやめ、おとなしくなっていた）が、ガクガクと震えながら口を開く。

「に、人間が悪魔を強姦（レイプ）してるだ……！　都会って、やっぱおっかねぇだ！」

「黙れクソネコッ！！」

（何故だ……！　俺が一体、何をしたというんだ……！？）

――まぁ。

何はともあれ。

淳達は、突然襲ってきた災難というか不幸というか寧ろ災害というか。

とにかく、それらの不祥事から、何とか生き残る事に成功した。

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『悪魔召喚プログラム』

それから数分後。

「おらの負けだぁ。ぐへ～、負けたら服従って決まりと聞いておるもんで、ま、仕方ねぇですわ……。おら、魔獣カブソ、今後ともよろしくお願ぇしやす……」

「信じられない……！　人間に負けるなんて……。でも……契約には逆らえない。あなた達に力を貸すしかないわね……。アタシは妖精ピクシー。ちゃんと、使いこなしてよ……！」

そう言って。

カブソもピクシーも、コボルトと同じ様に、不思議な事を言い残して消えてしまった。

「……生きてる。私たち、生きてるよぉっ！　怖かったぁぁぁぁ！」

無理もない事だが、ユズは完全に怯えていた。

「ねぇ、ねぇ、何なの？　アレは一体、何だったのよ？　アツロウ、一体何をしたのよ！？」

「……オレだって知らねぇよ！　オレは、プロテクトを解いただけだ！　プログラムが勝手に起動したんだよっ！」

アツロウの場合は怯えてるというよりも、軽率な気持ちで、ＣＯ

ＭＰのプログラムを解除した自分自身に対して、憤りを感じているという様子だった。

「それじゃ……今のあれって、やっぱりＣＯＭＰのせいなの？　……そんなの、おかしいじゃん！　有り得ないよっ！　そうだ、警察！　これ、警察に届けよう？　こんなの持ってられないよ！」

ユズの意見はもっともなものだったが、しかし、淳は小さく首を振った後、

「……いや、少し待ってくれ。これはちゃんと調べた方がいい」

と言った。

「調べる！？　これ以上、何を調べるっていうの！？」

「……落ち着けよ、ソデコ。俺もジュンの言う通りだと思うぜ」

「はあ！？　アツロウまで、何言ってんの！？　また悪魔が出てきたら、どうするのよ！？」

「だから、落ち着けって！　パニックを起こすのは分かるよ！　俺だって、そうだから！　でも、あんな事があったのに、何も分かんねーまま、全部放り出して、本当にいいのかよ？　それで安全になるかなんて、今のままじゃ誰にも分かんねーんだぜ？」

２人のやり取りを聞いてる間、淳は恐らく、この中で一番冷静に物事を考えていた。

まるで、こんな異常事態には慣れっこだとでもいうように。

そんな訳は勿論ないのだが。

しかし、

しかし、彼の父親は――

ふと、淳は口を開いた。

「……そういえば、青山でナオヤに言われたな。ＣＯＭＰを手放すなって」

必ず必要になるから、と。

「う……確かに、『必要なものだ、手放すな』って言われたけどさ……」

アツロウはユズの言葉を最後まで聞くことなく、例のように鞄からノートＰＣを取り出す。

「……じゃあ、今からＣＯＭＰを調べてみるけど……いいな？」

「……わ、分かった。でも何かが出てきたら、逃げるんだよね？絶対、あんなのもうイヤだからね！？」

やがてアツロウはノートＰＣをＣＯＭＰに繋ぐと、中身を調べ始めた。

それからしばらくして…。

「……なるほど、そういう事か……」

アツロウが言った。

「何か分かったのか？」

頭にこびりついた自分の血を拭いながら、淳はそう尋ねる。

「……ああ。まず、このプログラムの名前は、『悪魔召喚プログラム』だ」

「……？　『悪魔召喚プログラム』……？」

そういえば……と、先程の出来事を、淳は思い出していた。

悪魔が出てくる前、ＣＯＭＰに、『悪魔召喚プログラム、起動ＯＫ』――という表示が出た事を。

「悪魔ぁ！？　アクマって……あの本とか、神話に出てくる奴！？」

ユズは訳が分からない、という様子だ。

まあこの場合、分かってしまう方が問題だが。

「そんなの俺にも分かんねぇよ。そもそも、プログラムで何かを喚び出せるって事が理解不能だぜ……」

言い出したアツロウにしても、まだ半信半疑らしい。

「俺の中での悪魔召喚っていうと……こう、儀式で喚び出すイメー

ジの方が強いんだが……」

と、淳が言う。

「儀式……って、あの漫画とかに出てくるようなやつか？」

「そう、それ」

「……まぁ、それで喚び出せるとしたら、呪文とか、手順をプログラム化する事は出来るかもしれないけどさ」

「……」

出来ちゃうのかよ。

プログラムとか何とか、淳にはそういうのがよく分からなかった。

「……まぁいいや。もう1つ見つけた機能は、ハーモナイザーって名前が付いてる」

「……？？　……ハーモナイザーって……何だそれ？　語源はハーモナイズか？」

ハーモナイズ。

調和、調整という意味だ。

「ああ、多分そうだと思う。さっきの召喚プログラムと同じで、構造や原理はさっぱり分からないけど…。何か波長みたいなものを合わせて、悪魔に攻撃が効くようにしたり……。逆に向こうの攻撃に

同調して、受けるダメージを軽減してくれたりしてるみたいなんだよ」

「だから、俺達はまともにアイツらと闘う事が出来たのか……」

納得する淳。

いや、勿論詳しい原理は分からないけど、分かる訳がないけど、とにかく納得する淳。

――が、ユズの場合は、そうはいかなかったようだ。

「はぁ……もう理解不能。全っ然、意味分かんないし……！　一体、ナオヤさんは何がしたいわけ!?悪魔を喚び出して、攻撃して、向こうの攻撃から守ってくれて……。で、一体、私たちに何をさせたいわけ!?」

「……」

ごもっともで。

「確かにな。あのメールも意味不明だ。ホラ、えーと……『ラプラスメール』だっけ?」

淳が言う。

「え……?　ああ、そうそう！　あの予言みたいなヤツだよね。うん……アレも気持ち悪いしさ！」

「メール?　ああ、青山の事件が起こるのを、予知してたヤツの事

か……。はは……もう、未来の予知とか……、普通に思えてくるぜ……」

小さく両手を上げ、「お手上げ侍」とばかりにポーズをとりながら、アツロウが言う。

「おいおい、アツロウ。大丈夫か？」

流石のアツロウも、度重なるショックでまいってしまったのかと、淳は心配になった。

「ああ、大丈夫……。……？……！　……待てよ……そうか！　それだ！　それだよジュン！」

「何いきなり興奮してんだお前……」

「いいから聞けって。例えばこうだ。オマエ達が見た青山の事件、あれ、動物のせいになってたよな！？」

「……？　……！　……アツロウ、まさかお前……！」

アツロウが何を言いたいのか、淳にも分かり始めてきた。

つまり、こういう事だ。

青山での事件が、動物ではなく、先程のような悪魔の仕業だったら……？

もし、ＣＯＭＰに来ていたあのメールが、本当に未来を予知しているのだとしたら……？

当然、自分達はあの事件が起こるより先に、事件の時間や、場所を知ってたことになる。

そうなれば、自分達がその気になれば、事件が起こる前から正にその時に、その現場に居合わせる事が出来ただろう。

そして今、淳達が漏っているＣＯＭＰは、悪魔を喚んだり、戦ったり、そういう用途に特化して出来ている。

ここから導き出される答えは――

「俺達はこれらの事件に立ち向かうべき……そう言いたいのか？」

淳の訝し気な問いに、アツロウは

「そうだよな……俺もそう思うんだ」

と答えた。

「ええっ！？」

ユズはまたも、信じられないという顔をする。

アツロウが言うには、このところ、都内で『変な噂』が増えているらしい。

不可能な事件自体は昔からいくらでもあるが、このところの数は尋常ではない、との事だ。

「これが全部、俺達の無関心で通り過ぎていただけで……。本当は悪魔の仕業だったとしたら？　そしてこのＣＯＭＰがあれば、その悪魔たちと戦えるとしたら……？」

アツロウが言う。

「まあ、実際に戦えたしな」

そう答える淳の隣にいるユズは、ＣＯＭＰをまるで爆発物でも見るような目つきで見つめていた。

「それじゃ……このＣＯＭＰは、そういう事を起こす悪魔と、闘う為に作られたって事！？」

「ああ……本当に悪魔が犯人なら、だけどな……」

自分で言っておきながら、アツロウは未だに信じられないといった様子だ。

「……私、ヤダからね！？　そんなの！　こんなの……ナオヤさんに返すか、誰かにあげちゃえばいいじゃん！」

「……ユズ、ナオヤの言葉を思い出せ。アイツを疑うってのか？」

淳は努めていつもと変わらぬ調子でユズに話しかける。

「いや……。そういう訳じゃないけどさぁ……」

いくらナオヤでも、ここまで手の込んだ悪戯はしない。というか、出来ない。

しかし、かといって――

「あの人は、物事の先を読む力が、ダントツに優れてる」

２人を見ながら、アツロウはどんどん自分の推理を展開していく。

「何で俺達を選んだのかはわからないけど、何か理由があるに違いない。……オレだってあんなバケモノとやり合うなんて、出来ればさけたいさ……」

そう。戦わずに済むならそれに越した事はない。

「淡い期待だけどな……」

淳がボソッと呟く。

「でも……もし事件の被害者みたいに、自分が悪魔に襲われたらって思うと、ＣＯＭＰを手放すなんて無理だ……」

「ナオヤは多分、俺達がそう考えると知ってて、このＣＯＭＰを渡したんだろうな」

相変わらずイヤな奴だ、と淳は続けた。

「ああ……。これがなかったら、俺達なんて、ただの高校生だぜ？悪魔になんて……勝てるワケない」

「もし……もし、だよ？」

これだけ説明されても、まだユズは現実から逃げたいようだ。

「アツロウが言うように、変な事件が悪魔のせいだとして。このＣＯＭＰがその悪魔たちと闘う為に作られたとしても……！　何で私たちなの!?　そんなの、警察とか……そういう人達がやるべきじゃん！」

「警察に渡すなら、いつでも出来るって。だけど渡しちまったら、もう戻ってこないんだぜ？　それでもソデコは、自分の身を守れんのかよ？」

「……」

こんな時まで「ソデコ」って言うのか、と淳は思った。

ほどほどにしてやれよ……、とも。

「……もうヤダ……。何でこんな事に……」

ユズはションボリと落ち込んでいる……。

「……」

そんな中。

ところで、と淳は思った。

先程からずっと気になってるのだが……。

「……？　どうしたの、ジュン。私の上ばっかり見て。……何か見

えるの？」

そんな淳の様子に気付いたユズが、不思議そうに首を傾げている。

「あ～……、えーと……」

実は……。

先程――厳密に言うならばあの怪物達と戦い終えた辺り――から、道行く人々の頭上に『7』、自分達の頭上には『1』と数字が表示されている事を、淳は2人に伝えた。

しかし、ユズが、

「……頭の上の数字？　何のこと言ってるの？」

と言ったので、淳は驚いた。

「……？　……お前らには、見えてないのか……？」

アツロウが頷く。

「ああ。俺達には見えないんだが……。冗談を言っている様にも見えないし、一体どうなってんだ？　……参ったなあ、これもＣＯＭＰのせいなのか？　分かんねえ事ばっかだぜ。はは、頭パンクしそ……」

「おいおいしっかりしれよアツロウ。この中で機械に強いのはお前だけなんだ。無責任に聞こえるかもしれないけど、ちゃんとしてくれなきゃ困る」

「……あ、ああ、悪い……。ちょっと混乱しててさ……」

「いいんだよ。それが普通だ」

逆に。

何故かそれほど動揺していない自分は、異常だという事だろうか――と、淳は思った。

自分でも不思議だった。

何故、

何故、自分はここまで、不自然なまでに自然なのか――？

自分で、自分がわからない。

つい最近まで、自分は至って普通な高校生だった筈なのに。

だが。

だが、彼の父親は――

「……ねぇ、やっぱりさ。ナオヤさんトコ、行こう？　さっきは何も話せなかったけど、ＣＯＭＰも、メールも、他の事も……。ちゃんと聞かなきゃ分からないよ」

いつの間にか訪れていた沈黙を最初に破ったのは、ユズだった。

そんな彼女の言葉に、淳とアツロウが同時に頷く。

「……そうだな、うん。ついでに会ったら、とりあえず最初に殴っとこうそうしよう」

淳が言った。

「物騒な事言うなよジュン……。だけど、そうだな……。オレも1度、ナオヤさんと話しておきたい。ジュン、行こうぜ。青山へ！」

そう言って、アツロウは自分の頬を叩く。

――そして3人は、青山へと向かう為、電気博物館を後にした。

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『青山霊園のバトル（１）』

――青山、住宅街

ナオヤのアパートでは、まだ現場検証が行われているらしく、立入禁止のロープが張られたままだ……。

「参ったな……これじゃナオヤさんの部屋にも近づけない……か」

アツロウがそう言った時、ユズがあるものに気づいた。

「ねぇ！　アレ見て…！」

ユズの視線の先には、大量の新聞が残されたままの集合ポストがあった。

「あれ……ナオヤさんの部屋のポストだよな？」

「ああ、間違いない」

淳にしても、ナオヤの部屋に最後に入ったのは随分前になるが、それでもちゃんと覚えていた。

「しばらく部屋に帰ってないみたいだな……」

ポストに大量の新聞が残ったままとなると、そう考えるのが普通だ。

「ああ……みたいだな。お前らが会えたのって、相当、運が良かっただけなんじゃないのか……？」

アツロウの言葉を受けて、そう……だろうか？　と、淳は思った。

淳にしてみれば、運が良いというより、あの時の再会こそが、そもそもの不幸の始まりのように思えてならないのだが……。

『♪♪♪』

その時、全員の持つＣＯＭＰがメールの着信を告げた……。

届いたメールは、２通だった。

『ＦＲＯＭ：ＮＡＯＹＡ

ＳＵＢＪＥＣＴ：成功おめでとう

＞無事ＣＯＭＰを使いこなせたようだな。

まずは、おめでとう。

そろそろ混乱も収まった頃だろう。

お前達３人にＣＯＭＰを渡したのは、今後、悪魔の力が必要になるからだ。

生き延びたければ、これを使いこなせ。

とにかく時間がない。

まずは青山霊園に向かえ。

そこでお前達は、これからの行動に影響を及ぼす人間に会うだろう』

『ＦＲＯＭ：悪魔召喚プログラム

ＳＵＢＪＥＣＴ：ＲＥＡＤ　ＭＥ

＞おめでとうございます。

あなたは悪魔使いの資格を手に入れました。

あなたは現在、契約済みの悪魔＝『仲魔』を、いつでも喚び出し、使役する事が可能です。

なお、初期設定による悪魔との『契約』は、本プログラムの初回起動時のみです。他のＣＯＭＰで喚ばれた悪魔に勝利されても、契約は成立しません。

また、本プログラムは戦いをサポートする、チュートリアル機能を搭載しておりますので、ご活用下さいませ。

それではよい悪魔召喚ライフを！』

「もう……あの人は何なのよ……。私たちの会話の先回り出来るの？　有り得ないんですけど……！」

メールを読み終わってからのユズの開口一番がこれだった。

「はは。ナオヤさんの最大の武器は、洞察力なんだよ。人が次にどう動くか、先読みする天才なんだって」

「感心してる場合か」

咎めるような口調で、淳が言う。

「あ、ああワリィ……。それより、もう一通のメール見たか？」

「悪魔使い、ねぇ……」

仲間＝仲魔。

悪魔を使役する存在。

「そう、それだよ」

そういえば、さっきの戦いで、悪魔が最後にいったあの言葉……。

勝負に負けたら、その人間に従う。

これを『契約』と言うのだ、と。

服従。

契約。

力の譲歩。

あれは、こういう事だったのか……？

淳達は、自分達で気づかない内に、悪魔使いという存在になっていたらしい。

「ちょっと待って！　……もうっ、あんまり非現実的で、頭がついていかないよ……！　えっと、つまり……？　私たちがさっき戦った悪魔を、今後から味方として、このＣＯＭＰで喚び出せるって事？」

「ああ、試してみないと、何ともいえないけどな…」

ナオヤからのメールには、今後、悪魔の力が必要になる、とあった。

つまり、また先程の様な命懸けの戦いを、これから先する可能性――いや、最早可能性どころの話ではないだろうが――があるという事だ。

「今のメールの着信で、ＣＯＭＰのトップメニューに『チーム編成』っていうのが追加されたみたいなんだ。きっとナオヤさんは、このためにこのＣＯＭＰを俺達に託したんじゃないかな？」

「……もうっ！　最初からそのつもりなら、ちゃんと私たちに分かるように教えてくれればいいのにっ！」

「まあ、落ち着けよユズ……。ホラ、アイツってツンデレだから」

多分。

自分の従兄をツンデレと言うのは、思った以上の抵抗を覚える淳だった。

淳の言葉を聞いたアツロウは苦笑しながら

「はは、あの人って頭良すぎて、時々、良く分からないんだよな……。それにしても、ナオヤさんのメール……青山霊園に行け、だっけ？」

「ああ、確かにそう書いてあったな。『これからの行動に影響を及ぼす人間に会う』、とも」

「それって、一体誰だよ？」

「俺に聞かれてもな……」

自分の従兄の思惑を殆ど把握出来ないというのも、情けない話だ。

「運命の人っぽい響きよね……。それって人間かな？」

「文面を見る限り、一応、『人間』とは書いてあるけどな……」

先程、『アイツら』とやり合ったせいで、そうじゃないという考えもどうしたって浮かんでしまうが……。

ここで取れる選択肢は２つ。

?、青山霊園へ行く。

?、メールを無視してそのまま帰る。

安全第一、と考えるならまず?を選ぶべきだが……。

果たして。

果たして、淳達が取った選択は――

淳が口を開く。

「まあ、どっちにしても今の俺達じゃ、何も分からないんだ。行くしかないんじゃないか?」

隣のユズは明らかに『もう疲れた…』という表情をしている。

「何も分からないで怖い思いするなら、ナオヤさんを見つけて聞く方が遥かにマシ！　こうなったら……仕う方ないじゃん！　２人が行くなら私も行くから！　行こう、アツロウ、ジュン！」

次に目指すは、青山霊園。

時刻はそろそろ１９時をさそうとしていた。

◆　◆

霊園に行く道中……。

アツロウが淳だけに話しかけてきた。

「さっきまでユズが感情的だったから言わなかったけど、ＣＯＭＰの機能で見つけた物を教えるよ」

アツロウが言った機能とは、次のようなものだった。

『スキルセット』

ＣＯＭＰに“魔法”を設定する事で、自分達も悪魔と同じように魔法のようなものを使えるようになる機能。

変更する場合はＣＯＭＰのメニューからチーム編成を選ぶと、スキルをそれぞれに割り振れる……らしい。

……なんだそれは、と淳は思った。

ＣＯＭＰを操作するだけで、自分達も魔法を使えるようになる、だって？

なんだその――デタラメは。

余りにも――不可解。

余りにも――非常識。

そんな簡単に魔法が使えるなら、ハ○ーポッターだって、あれ程苦労する事はなかっただろうに……。

イッツ、エンターテイメント。

ＣＯＭＰのプログラムは、使う人間の肉体にまで変化を及ぼす。

そういう事だろうか？

最早、科学とか天才で片付けられるレベルを越えている。

今更だが……このＣＯＭＰ自体にも、何らかの形で悪魔の力が絡んでいると考えていいだろう。

とりあえず淳達は、それぞれが入念に話し合った結果、淳が電撃魔法である『ジオ』、アツロウが火炎魔法である『アギ』、ユズに回復魔法である『ディア』をセットする事で落ち着いた。

自分の中で『日常』という名の外壁が静かに崩れていく音を聞きながら、淳は青山霊園へと努めて平静を装って足を進めた。

◆　◆

青山霊園（あおやまれいえん）は、東京都港区南青山にある都立の霊園である。

１８７２年、美濃国郡上藩の藩主だった青山家の下屋敷跡に開設され、１８８９年には東京府から東京市に移管された。

１９２６年、斎場の建物のすべてが東京市に寄附され、日本で初めての公営墓地となった。

面積は約２６万平方メートルで、会津藩出身の桐生氏が開いた現在の附属立山墓地が興りとされている。

園内には明治期以降の著名人の墓が多くあり、細井和喜蔵の『女工哀史』の印税で建てられた『解放運動無名戦士墓』も存在しており、なんとあの『忠犬ハチ公』の墓もある。

桜の名所でもあり、花見の季節には大勢の見物客が訪れる。

淳自身、桜を見る為に毎年欠かさず訪れている為、途中で迷うような事はなかった。

なにはともあれ――青山霊園。

数多の死人が眠る場所。

自分達もその内の1人にならなければいいが…と不吉な事を考えながら、淳と2人の友人、アツロウとユズは目的地である青山霊園へと無事、到着した。

――19時30分。

既に辺りは薄暗くなっている。

「着いたぞ……。ここに誰がいるっていうんだ?」

アツロウがそう言うが、霊園には人っ子1人見当たらなかった。

「まさか、お化けとかじゃないよね? お墓ばっかりで、何か出そう……」

ユズはというと、今度は幽霊に怯えていた。

こういうところ、自分の母親と似てるな……、と淳は思った。母もホラーの類が大の苦手なのだ(こちらがそれを指摘すると、本人は頑なに否定するが)。

青山霊園。

ナオヤが言う様な『重要人物』とやらの姿は、今のところ見当たらない。

と、そこで、

待てよ……? と、淳は思った。

青山霊園といえば……。

そのとき、淳の脳裏に閃光にも似た速さで『ある記憶』が引き出される。

「マズイな……！」

「えっ……？」

「ジュン？」

「例のメールだ！」

「えっ……！？」

直後。

爆発が起きた。

「きゃあああああああああ！？」

ユズの口から悲鳴が上がる。

けたたましい爆音に、頭をクラクラさせながら、淳は自分達がま

だ生きている事。故に爆発はここことは離れた場所で起こったと理解した。

「な……何、今の爆発!?　この森のすぐ向こうだよっ!?」

「19時頃、青山霊園で大きな爆発……!　間違いない……、メールに書いてあった通りだ!」

アツロウも瞬時に状況を理解する。

その時、淳の目に『あるもの』が映った。

「……!　2人とも、アレを見て!」

同じくその存在に気づいたらしいユズが、2人に声をかける。

『アレ』。

ユズの言った『アレ』は、こちらから見える霊園の森の入口から姿を現した。

「チッ……あの女め……!　あんな力を持った人間がいるとは!」

そして、『それ』は喋っていた。

裕に2メートルはあるであろう巨体、体中を覆った銀色の体毛、猿の様な容姿、赤い瞳。

SF番組などでよく見る雪信者などに酷似している。

「悪魔だ……！　2人とも、気をつけろ！」

淳が叫ぶ。

その時、雪信者の前に、橙色のフード付きのコートを着た人物が現れた。

「あれは、昼間の……？」

今日、最初にナオヤのアパートに行く前、歌舞伎町に寄った際、淳は似た様な格好をした怪しい集団を見かけた。

『翔門会』。

確か、そんな名前だった気がする。

「邪鬼ウェンディゴ！　待てっ……！」

翔門会の人物は勇敢にも、雪信者（ウェンディゴ）の前に立ちはだかった。

見ると、信者の頭上には、自分達と同じ様に数字が浮かんでいる。

ただし、自分達が『1』であるのに対し、何故か信者のものは『0』であったが。

そんな信者を、ウェンディゴは馬鹿にするように嘲笑いながら、

「グハハハハッ！　バカめが……！　あの女ならいざ知らず、オマエたちザコが、オレを止められると思ったか！」

マズイ！

淳は咄嗟に判断した。

「オイッ！　アンタ、逃げろ！」

あの数字は、恐らく――

ウェンディゴは、その丸太程もある右腕を振りかぶり、信者に振り下ろそうとした。

（クソッ！　間に合うか！？）

淳は自分でも驚く程の速さで動き、信者に駆け寄る。

しかし直前になって、僅かに間に合わない事に淳は気づく。

「チッ……！」

自分の細腕と、ウェンディゴの丸太の様な腕の力のどちらが強いかなど、比べるまでもないが……。

「ええい、ままよ！」

片腕を伸ばし、信者の顔面とウェンディゴの拳との間に腕を割り込ませる。

「ジュンッ！？」

淳の唐突な行動に、アツロウもユズも咄嗟には動けなかった。

――ボギンッ！！

「……っ！！」

嫌な音が聞こえた。

今一番、聞きたくない音だった。

「……ぐ、ァァァあああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！！」

淳の体を張った行動にも関わらず、淳の腕ごと巻き込む形で信者の体は吹き飛ばされてしまった。

当然、淳も。

信者の体は、墓石に。

淳の体は地面にたたき付けられてしまった。

しかし、淳の細腕でもクッション程度の役割は果たした様だ。信者は頭から血を流してはいたものの、何とか生きていた。

「大丈夫ですか！？」

「き、君は……？」

淳の視線は、咄嗟に信者の頭上へと移っていた。先程までは『0』だった数字が、今は『7』になっている。

「きゃあああっ!?　ジュンッ!?」

「大丈夫だ！　心配するな！」

ユズにはそう言ったが、勿論、実際は大丈夫ではない。

右腕が折れていた。

まあ、人1人の命を救う代償としては、安すぎる。結果オーライだ。

「ンンン？　人間め、次から次へと……。オマエたちも殺してやるわ！」

（マズイ……！　これは……本気でマズイ！）

今コイツ、極々当たり前の様に『殺す』って言った。

明らかに――自分の様な、平凡な人間が関わってはいけない類の状況である事は疑いようがない。

しかし――もう遅い。

遅すぎる。

自分は既に、関わってしまった。

「畜生……！」

思わず、毒づいてしまう。

「ん……？　貴様……」

ウェンディゴは、淳を不思議そうな目で見ていた。

「ふん……『アベル』の末裔か…。一体、どのようなものかと思ったが……所詮は虫けらよ……」

訳の分からない事を言いながら、ウェンディゴは再び腕を振り上げ、淳に振り下ろそうとする。

そして、

「ここにいましたか。ウェンディゴ……逃がしませんよ」

と、そんな声が聞こえた。

凛とした、透き通った女性の声が。

目を向けると、そこには翔門会の服を着た女性が霊園に入ってくるところだった。

紫色の髪を肩まで伸ばし、何やら派手な髪飾りを付けている。

「アマネ様！」

隣の翔門会の信者がそう言った事で、淳は、この女性が翔門会の中で特別な存在である事を理解した。

いや――

それだけではなく。

（何だ…この感じ？）

アマネなる人物を見ながら、疑問に思う淳。

この、違和感と言うか……モヤモヤした感覚は。

うまく……言えないが。

この女は、『不自然』だ。

『矛盾』――している。

と、そんは風に。

「チッ……女め、もう追いついて来たか！」

（……いや！）

今は、そんな事を気にしている場合ではない！

「グッ……！　オイッ！　アンタッ！　ここは危ないから逃げろ！」

骨折した腕の鈍い痛みを必死で噛み締めながら、淳は叫んだ。

アマネはその声に反応して淳を見ると、直ぐに側にいる信者に目を移す。

「貴方が……彼女を助けてくれたのですね。安心して下さい。私は大丈夫です。それより、貴方の方こそ早く逃げて下さい。その腕ではとても戦えません」

「そうだよジュンッ……！　私達も逃げようよ！」

ユズはそう言うが、

「くそっ……！　ユズ！　こっちは駄目だ！」

淳とユズがそう言うアツロウの視線の先に目を向けると、何体もの悪魔が霊園を取り囲んでいるところだった。

「なっ……何だよ！　悪魔って、こんなにいるのか！？」

「ど、どうすればいいの！？」

アツロウとユズは、完全に戸惑っていた。

無理もない。

一度体験したとはいえ、こんな出鱈目すぎる状況に、そうそう順応できる訳もない。

そう。

有里淳のように、こんな状況下にあっても冷静な思考を働かせられる人間など――そういる訳がないのだ。

「2人とも落ち着け！　ＣＯＭＰだ！　ＣＯＭＰを使えっ！」

「こ、ＣＯＭＰ……？」

「そ、そうか……！　よし……やってやる！　やってやるんだからなっ！」

2人は懐から、ＣＯＭＰを取り出す。

（……ナオヤ、お前が言った事は正しいよ）

自分たちには、悪魔の力が必要だ。

必ず――必要になる、と。

ナオヤは、確かにそう言っていた。

「そこの人達も……！　ここは危険です！　すぐに逃げなさい！」

アマネの忠告に対し、アツロウは弱り切った様子で

「そんな事言ったって！　この状況で、どうしろっていうんだよ！」

その時、淳はよろよろと立ち上がりながら、アマネに目を向ける。

「大丈夫だ……！」

「……？」

「俺達には『これ』がある……！」

そう言いながら、淳も懐からＣＯＭＰを取り出すが、直ぐにそんな自分が酷く滑稽である事に気付く。今の自分は、傍から見れば市販のゲーム機を掲げながらカッコつけているようにしか見えない。

しかし、アマネにはそのＣＯＭＰの意味が理解出来た。

彼女も――『同類』なのだ。

（そのＣＯＭＰは……。どうして彼らが……）

「君、そのＣＯＭＰを一体、どこで！？」

淳の隣にいた信者が驚いた様に声を上げる。

「……？　アンタ、これを知ってるのか？」

「ああ、それは――」

「２人とも、話は後です！」

アマネの忠告に、２人はハッと顔を上げる。

既に霊園を取り囲んでいた悪魔の包囲網が、徐々に狭まってきて

いた。

「こうなっては仕方がありません。協力しましょう」

そう言うと、アマネの体を何やら青白い光が包み込んだ。

「ですがウェンディゴの相手をするのはアナタ方には荷が重いでしょう……。奴の相手は私がしますので、他をお願いします」

その時、淳のＣＯＭＰから電子音が鳴った為、咄嗟に画面を覗いてみると

『＞ＣＯＭＰが戦闘モードに移行しました。

ハーモナイザーの起動により、一部の機能が使用不能になります』

「何だ!?　ＣＯＭＰの画面に文字が…！」

どうやらアツロウ達のＣＯＭＰにも、同じ様に表示されたらしい。

「……これがメールに書いてあったチュートリアル機能ってヤツか！」

「さっき戦う時も、何か出てたよ!?　見ている余裕、なかったけ

ど……。えっと、一部の機能が使用不能……？」

「ジュン！　お前のＣＯＭＰで、何か使えなくなった機能ってあるか！？」

アツロウにそう言われて、淳はＣＯＭＰに目を走らせるが、特に目だった変化は見当たらない。

そうアツロウに伝えようとすると、ふと気づいた。先程までこの場にいる全員（悪魔は除く）の頭上にあった数字が、消えているのだ。

そのことについてアツロウに伝えると

「……！？　電気博物館前で言っていた数字の事か！それって一体、何の数字なんだ！？」

「んな事気にしてる場合かっ！　２人とも、来るぞ！」

じりじりと迫ってくる悪魔たちを見ながら、淳が叫ぶ。

「う……やっぱり戦うんしかないんだよね？　さっき契約した悪魔が仲魔になってるのは、少し心強いけどさ……」

そう。

今までにはなかった、自分達の新しい力。

――『仲魔』

「来いっ！コボルトッ！」

片腕だけで何とかＣＯＭＰを操作しながら、淳は自分の新しい仲魔、闘鬼コボルトを召喚する。

「コボルト、頼む！」

「ウオオッ！　任セろッ！」

新しい主である淳の声に後押しされ、コボルトはその手に持ったこん棒を、近くにいた敵の悪魔にたたき付けた。

「アンタはここにいてくれっ！」

側にいた信者にそう言うと、淳もすぐさま戦闘へと身を投じる。

辺りにサッと目を通した結果、淳は相手の数がおよそ１０体近くだと判断した。

中には、先程手を合わせた悪魔も何体か混じっていたが……、しかし体中を緑色の鱗で覆い、黒い髪、コボルトのそれよりも更に一回り大きいこん棒を持った悪魔（オーガ）などもいる。

淳はまず、信者の安全を確保する為に悪魔達の注意を自分に向ける事から始めた。

「こっちだ……！」

今からする事は、初めての試みだ。

魔法――らしい。

先程、ＣＯＭＰのメンバー編集の画面で登録した『スキル』。

ＣＯＭＰに保存されているスキルを編集する事で、自分のような至って普通の人間いう、

人知を――越えた。

常識を越えた、『科学』。

しかしそれでも、淳には確信があった。

自分なら出来る――と。

何故？

それはわからない。

以前にも、こういう事があった？

それは有り得ない。

だが、

だが、彼の父親は――。

左手に意識を集中する淳。

すると、そこに電流が帯電し始めた。

「喰らえ……！」

ドッジボールの様に、左手に集中させた電流を手近な悪魔に放つ。

「『ジオ』ッ！」

「ギャウッ……！？」

信者に襲いかかろうとしていた悪魔の数体に、電撃がヒットした。

それ程のダメージは見受けられなかったが――しかし元より、威力を意識した訳ではない。

狙いはあくまで、自分に注意を向けること。

自分という、悪魔と戦える存在がいるという事を――認識させる事だ。

「グオッ……！　人間、殺ス！」

淳の作戦は功をきしたようで、悪魔特有（と勝手に判断）の方言を叫びながら、悪魔達は一斉に淳へと視線を向ける。

その悪魔の内の一体が、手に持ったこん棒を振るう。

何度も言うが、

何度でも言うが、淳はあくまで極々普通の一般人であり――いわゆる『戦える人間』ではない。

だが――何も、自分が戦う必要はないのだ。

こういう時の為の、『仲魔』だ。

オーガのこん棒は、淳には届かなかった。

そのこん棒に、別のこん棒が重なり、食い止める。

「俺、主、守る！　俺、主ノ為に、戦う！」

淳の仲魔であるコボルトがオーガのこん棒を防いだのだ。

「コボルト、ここは任せてもいいか！？」

「心配、するナ！」

「無理すんなよ……！」

とりあえずはこれで、信者の安全は不確かながらも確保できるだろう。

淳は素早く、アツロウとユズの様子を伺う。

２人とも、まだ流石に手慣れたという様子ではないが（自分にしても慣れている訳ではない）、それでも優秀な仲魔のサポートにより、何とか悪魔の相手をこなしていた。

２人の無事を確認した淳は、直ぐさまある場所へと走る。

それは、翔門会の女の子とウェンディゴが戦っている場所だった。

他人の心配などしている暇はないが――しかし、一人の女性が怪物と戦っているという状況をハイそうですかと見過ごす程、淳は人間を廃業していない。

「オイ、アンタ、大丈夫か！」

女の子は、淳に目を向けると

「何故こちらに……!?　今のアナタでは敵わないと言ったでしょう！　下がりなさい！」

「……」

怪物に襲われている女の子を颯爽と助けようとしたところ、邪魔だと言われた。

精神的に甚大なダメージを被る淳。

「ふん……！　飛んで火に入る虫とはこのこと、先ずは貴様から死ぬがいいわ！」

「誰が死ぬか……！」

強がってはみたものの、自分は片腕を動かせない状態だ。劣勢であるという見解は否めない。

それでなくとも、この悪魔は、明らかに他の悪魔とは格が違う――その巨体から発せられる威圧感に、情けない事に淳は屈してしま

いそうになる。

しかし、そんな事を言っていては到底明日を迎える事は出来ない。

淳は即座に覚悟を決めると、再び左手に意識――というよりは魔力を集中させる。

使ってみて初めて気付いたのだが、魔法というのは体力と精神力を非常に消費する。

そう考えれば肉弾戦という選択肢もなくはないのだが、この問いの淳はウェンディゴのその太い腕で片腕を折られている為、思わず萎縮してしまう。

「ジオ！」

悪魔に人間としての常識があるかは知らないが、少なくともこの雪信者には幽霊とは違い実体がある。

ならば――最も攻撃が効く部位といえば、恐らく頭だろうという淳の予想は、それほど的外れではないだろう。

その顔面目掛けて、全力で電撃を放った。

「グオッ！？」

目も眩むような閃光と、体を走り抜ける電流で、僅かにウェンディゴは体を麻痺させたように見えたが――

本当に、効果は僅かだった。

「……何かしたか？」

「なっ……！？」

淳の魔法は、驚く程ウェンディゴには効いていなかった。

焼け石に水。

暖簾（のれん）に腕押し。

糠（ぬか）に釘。

「フン……虫けらが……」

軽蔑した視線を淳に向けながら、ウェンディゴはその拳を淳の腹に打ち込んだ。

その攻撃を、淳は甘んじて受けてしまう。

今まで感じた事がない痛みを腹部に感じた。

激痛だった。

内臓の幾つかが破裂したのを自覚する。

避けられなかった訳ではない。

ウェンディゴの攻撃は、その巨体から予測できるように、どちらかと言えば緩慢（かんまん）な部類に入るだろう。

だが、自分の攻撃が全く通用しなかったという残酷な事実が、淳の判断力を少なからず削いでいた。

「……ッ！　……！！　……ッッ……！！」

悲鳴は上げなかった。

体内の血液が口に溢れ、上手く発音出来なかったのだ。

淳の体が、その場で力無く崩れ落ちる。

体中から嫌な汗が流れ、

視界は恐ろしく混濁（こんだく）し、

口からは大量の血が流れ出ていた。

ああ――

これで――終わりか。

これが――終わりか。

なんて――あっけない。

自分の無力さに、ヘドが出る。

実際に出たのは血ヘドだったが。

自信があった訳ではない。

だが――見ず知らずの女性に悪魔の相手を黙って譲る事など出来ない。と、馬鹿馬鹿しい騎士道精神を出してしまっただけだ。

頭が暖かくなってきた。

これは恐らく自分の血のせいだろう――と、

人間の血液って、意外と温かいんだな――と、判断している冷静な自分が、そこにいた。

ユズとアツロウが、自分を呼ぶ声がする。

仲魔であるコボルトの気配を感じる。

近くで、大きな音がした。

あの女の子が、ウェンディゴに襲われている音だろうか？

それを確かめる事すら、今の淳には出来ない。

先程までは温かった頬の感触が、今度は冷たくなっていく。

死ぬのか。

自分は――死ぬのか？

畜生。

チクショウ。

ちくしょう。

……。

まあ……どうせ、ろくな人生ではなかった。

だから、もう――

どうでもいい。

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『青山霊園のバトル（１）』（後書き）

●ＢＯＳＳ　ＤＡＴＡ

・ウェンディゴ

＞種族：邪鬼
種族特有スキル：呪縛
別称：ギガントピテクス

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『九頭竜天音』

有里淳（ありさとじゅん）は目を覚ました。

辺りには既に夜の戸張が下りており、寝起きという事もあって殆ど視界が効かなかったが――後頭部に感じる何やら柔らかい感触は、嘘や錯覚ではなかった。

淳は誰かに膝枕されていた。

（……誰だ？　ユズか？）

少しずつ暗闇に目が慣れてきた。

先ほど見かけた翔門会の女の子の顔が、そこにあった。

「……」

なんでいるの？

なんでまだいるの？

「目を醒ましましたか」

蠢（うっ）すらと微笑みながら、女の子は淳の顔に向かって笑いかける。

頭は彼女の膝に置かれていたが、首から下に当たる感触は冷たく固かったので、自分がまだ青山霊園にいるのだと悟った。

さりげなく辺りを見渡してみた。

すると、少し離れた所で、ユズが凄い剣幕でこちらを睨んでいた。

危うくまた気絶するところだった。

メッチャ怖かった。

その隣にはアツロウがおり、この状況、果たしてどうしたものかといった表情でユズと淳とに交互に視線を移していた。

「……状況を説明してくれ」

アマネの膝から頭を起こしつつ、淳はアツロウに尋ねる。

正直、名残惜しかったが、ユズの目力がそろそろビームでも出るんじゃないかと思うぐらいに達していたので、命を危険を察しての行動だった。

――『命』。

生命。ＬＩＦＥ。

死ぬとなくなる、１人の人間につき１つしかないアレだ。

先のウェンディゴの攻撃で、もしかしたら自分は死んだんじゃないのかと思ったが、しかしこの現状を把握する限り、どうやら自分は生きているらしい。

辺りには、既に悪魔は見当たらなかった。

いや、訂正。

アツロウとユズの後ろで、自分達の仲魔であるコボルト、カブソ、ピクシーが、淳を心配そうに見つめていた。

「ジュン、お前、さっきまでどういう状況だったか覚えてるか？」

アツロウが心配そうに質問してくる。

「ええっと……確かナオヤに呼ばれて渋谷に……」

淳の記憶はやや遠い昔を遡(さかのぼ)っていた。

「え……？　嘘、そんな前まで遡っちゃってる訳？　もしそうならかなり説明が面倒になるんだけど……」

「ああ……嘘々。冗談だって。確か、ウェンディゴに腹を殴られて……って！！」

そうだ。

ウェンディゴの一撃により自分は肋を折られ、内臓を潰された筈だ。

にも関わらず、自分は生きている。

「貴方には、借りがありますから」

唐突に、地面から腰を上げながら、アマネが呟く。

「借り？」

「貴方は、私の同志を助けてくれました」

「ああ……」

ここにきた際、ウェンディゴよりも少し遅れてこの霊園に入ってきたあの信者の事か、と淳は納得した。

淳は改めて自分の胸を摩る。どう考えても骨が折れているようには思えない。どころか、右腕まで完治しているようだった。

「君が治してくれたのか？」

「はい、せめてものお礼です」

アマネはぺこりと頭を下げた。律儀な性格らしい。

そうしている間も、淳に向けられるユズの視線は絶対零度を保っていた。

凍え死ぬかと思った。

次には、その場を取り繕うに、アツロウが3人の間に入って淳にこれまでの経緯を説明し始めた。

◆　◆

「邪鬼ウェンディゴよ……！　元の世界に帰りなさい！」

ウェンディゴが淳を気絶させたのを見て、アマネは顔つきを険しくすると、素早い動きで倒れている淳の前に進み出て、ウェンディゴと対峙する。

「アマネ様！」

淳にその命を拾われた信者が心配そうに声をかける。

「私は大丈夫です……！　それより貴方はその方を守りなさい」

「ハッ！」

アマネは懐から桃色のＣＯＭＰを取り出した。

「えっ？　あの子が持ってるのって……ＣＯＭＰか！？」

それを見たアツロウが驚いたように声を上げる。

自分達が持つＣＯＭＰはただのＣＯＭＰではなく、悪魔を使役し、悪魔と戦う為の道具だ。

これは紛れもない天才であるナオヤだからこそ実現できた代物な

のだ、とアツロウは思っていたが、アマネが持っているＣＯＭＰも同じ物なのだろうか？

勿論、何の変哲もない市販のＣＯＭＰだという線もあるかもしれないが、こんな危機的状況でただのゲーム機を取り出す様なマヌケはそうはいないだろう。

しかし、深く考え込んでいる暇はなかった。アツロウとユズにしても、悪魔と戦っている状況にある事には変わりない。

もっとも、優秀な仲魔の活躍もあり、その数はかなり減っていたが、最後まで油断は禁物だ。

「聖なる業火に焼かれなさい……！　『マハラギ』！」

しかし、それは杞憂（きゆう）だったかもしれない。

ウェンディゴと相対していたアマネが辺り一面に強力な魔法を放ち、殆どの悪魔を消し炭に変えてしまったからだ。

「うわあっ！？」

「きゃあっ！？」

勿論、アツロウやユズに当たらない様にアマネは火力を調整していたが、そこから発生する凄まじい熱気に、アツロウもユズも思わず顔を腕で覆ってしまう。

アマネが放った魔法は、自分達の様な付け焼き刃のソレとは、明らかに次元が違っていた。

「グオオオッッ！？」

被害を受けたのはウェンディゴも例外ではなく、その白い巨体が荒れ狂う炎の波にどんどん蝕まれていく。

しかし、流石というべきか、アマネの攻撃が収まった後も、ウェンディゴは体の形を残しているどころか、まだその足で体を支えていた。

「グッ……ウゥ…！　……！　……」

しかし、やはり相当のダメージを被ったようだ。

淳の時とはうって変わり、アマネの攻撃は明らかにウェンディゴを圧倒していた。

もしこの時、淳に意識が戻っていたのなら、きっと悔しがっていただろう。

アマネの攻撃を間一髪で避け、なんとか一命を取り留めた敵の悪魔もいるにはいたが、しかし自分達とアマネとの間にある決定的な実力差を悟ったのだろう。何体もの悪魔が既に退却を始めていた。

「ちっ……！」

それを見て、戦況が不利になりつつあると感じたウェンディゴも撤退を始める。

しかしその途中で、倒れている淳とアツロウ、ユズに憎しみの篭

った視線を向けると、

「グウッ……人間めが……。オマエ達の臭いは覚えた！　絶対に、このままでは済まさぬぞ！」

と、言い放った。

その直後、ウェンディゴの体を青い光が包んだかと思うと、次の瞬間には既にその姿を消していた。

どうやら、退却を許してしまったらしい。

「くっ……！」

アマネはすぐさまウェンディゴを追おうとするが、しかし時は既に遅かった。

ウェンディゴを追う事を諦めると、アマネはサッと辺りに視線を巡らす。

アマネの圧倒的実力を怖れて、既に大半の悪魔は逃げ出した後だった（淳達の仲間であるコボルト、カブソ、ピクシーでさえ墓石の影に隠れていた）。

「アマネ様っ！　ご無事ですか？」

淳の側にいた信者が直ぐさまアマネに駆け寄る。

「私は大丈夫です……。それより……」

アマネはツカツカと倒れている淳に歩み寄ると、その首筋に触れる。

そして、まだちゃんと脈があると気付くと、安心した様に小さく吐息をついた。

「ジュンッ！　大丈夫！？」

ユズがたまり兼ねた様に淳に駆け寄ってきたので、アマネがそれを手で制す。

「大丈夫……。気を失っているだけです。ですが、無闇に動かそうとしない方がいいでしょう。相当数の骨折に加え、内臓も幾つか破裂しているようですから……」

「ど、どのへんが大丈夫なんだ！？　それっ！？」

アツロウもユズに追いついたところだった。

「心配いりません……」

そう言うと、アマネは淳の傍に腰を落とす。

そして、淳の胸をその白い指でなぞりながら、小声で何やら歌う様な呪文を唱え始めた。

すると、淳の腹部を何やら優しい光が包み込んだかと思うと、すぐに消えた。

アマネはその指を今度は淳の右腕へと移す。先程と同じように歌

う様な呪文を唱えると、骨折により膨れ上がった淳の右腕が元通りになった。

「スゴッ……」

それを見ていたユズが思わず感嘆(かんたん)したように声を上げる。

「貴方達は既に知っているかもしれませんが、ＣＯＭＰにはハーモナイザーという機能があります。悪魔と人間の波長を合わせ、対等に戦う事を可能にする利便性の高い機能です……。が、そのハーモナイザーでさえ相手との実力差があり過ぎると彼の様になりかねません。注意して下さい」

◆

◆

「なるほど、そんな事があったのか……」

アツロウから今までの過程を逐一聞き終えた淳は、落ち込んだ様にそう呟いた。

いや、実際に落ち込んでいるのだろう。

今の話を要約すると、自分と相手の力量差も分からずに突っ込むのは愚かしい事だ、と諭されている様にしか思えなかった。

本当の、本当の、本当に――

自分は無力だ。

どうしようもなく。

「……アレ？　そう言えば、あの信者さんはどうした？」

「彼は先に本部へと私が向かわせました。貴方に礼を言っておいて下さい、と伝言を預かっています」

「礼なんて、そんな……」

……まあ、

そんな愚かしい行為によって、１つの命を救う事が出来たのだ。

自分にしては上出来かもしれなかった。

「……主、大丈夫カ？」

淳の仲間であるコボルトが心配そうにこちらに寄ってくる。

「……何とかな」

プライドの方はともかく、体は大丈夫だ。

淳はその場で軽くストレッチしてみる。

先程のダメージがまだ残っているのか、少しフラついてしまった

が、やはり目だった怪我は完治しているようだった。

魔法、恐るべし。

「にしても……まだ震えが止まらねえぜ……。俺達、よく生き延びよな……」

冷や汗をかきながら、アツロウが言う。

「仕方ないよ……。こんな事、慣れる訳ないし……」

それは――そうだ。

当たり前だ。

こんなデタラメ。

こんなオカルト。

自分のように慣れる方が――どうかしている。

「ねぇ……青山のアパートでさ、人を襲った大型の肉食獣って、やっぱり……悪魔だよね……？」

「ああ、多分な」

本音を言わせて貰えば、淳はあの事件の犯人は間違いなく悪魔だろうと確信していたが、これ以上ユズを怯えさせない為に自重しておいた。

「やっぱり、そうだよね……」

「……悪魔の仕業、か。いよいよ悪い予感の方が、当たってきちまった訳だ……」

アツロウが疲れたようにため息をつく。

実際、疲れているのだろうが。

そんな2人の様子を横目で見ながら、淳はアマネに目を向けた。

「それにしても……アンタ、……ええと……」

「アマネ。九頭竜天音（くずりゅうあまね）です」

「ああそうそう、アマネ、な。まさか翔門会と悪魔が戦ってるなんて、思いもしなかったよ」

「全員が、という訳ではありませんが。しかし、翔門会の教えに悪魔が少なからず関与している、とだけ言っておきましょう」

翔門会の教え。

淳は昼間、歌舞伎町で遭遇した男の演説を思い出していた。

……。

……。

……。

やばい。

殆ど思い出せない…。

しかし、1つだけ――1つの単語だけは思い出した。

『神の試練』。

（……とか、なんとか言ってたような……。ええい、やめやめ！）

分からない事をいくら考えても仕方ない。

「お前らの方は大丈夫か？」

淳はアツロウとユズに視線を向けるが、見たところ、目だった外傷はなかった。

まあ、さっきの話を聞いた限りではほぼ全ての悪魔をアマネが撃退したらしいから、当然といえば当然だが。

――と、淳はそこで、あることを思い出した。

ナオヤのメールだ。

青山霊園で重要な出会いがある、と。

確かにそう書いてあった。

となると、

九頭竜天音。

彼女がそうなのだろうか。

「なあ、アンタ――」

淳が再びアマネに顔を向ける。

目の前一杯にアマネの顔があった。

鼻と鼻が触れ合う程の距離だった。

淳の目をジッと見つめていた。

「うおおっ！？」

恐らくこれまでの生涯でもトップスピードの速さで、淳は急ぎ、アマネと距離をとった。

「……貴方の中に、『アベル』の因子を感じます」

「は、はあ……？」

淳の戸惑いなど露知らずと言わんばかりに、アマネは再びズンズンと淳の近くまで歩み寄ると、その両手を自分の両手で包み込む。

そんな彼女の行動に、淳を始め、アツロウとユズもひたすら戸惑うばかりだった。

『アベル』。

先の雪男も確かそんな事を言っていたような気がする。

勿論、意味など分かる訳がないが。

「貴方の名前は？」

唐突に、アマネはそんな事を聞いてくる。

ああ……。

そういえば、まだ名乗っていなかったか。

「有しャと淳」

……。

噛んでしまった。

しかしまぁ、それも仕方ないといえる。なぜなら、見知らぬ美女に両手を握られて「名前はなんですか？」などと聞かれる状況には、淳は不慣れなのだから（当たり前だ）。

「なるほど…有しャとさんですか。私の名字も大層変わっていますが、貴方も相当……」

「いや、噛んだだけだから」

それぐらい気付けよ、と淳は思った。

なんていうか、冗談とか通じない類の人間らしい。

そんなアマネは、相も変わらず淳の両手を握り続けたままだ。

淳も健全な17歳男子、流石に照れてくる。

ちょっと軽く振りほどこうとしてみた。

より強い力で握り返されただけだった。

「……」

やばい。

心の中で何かが弾けそうだ……。

「有里淳ね。あ・り・さ・と」

「有里さんですね。わかりました」

それでよろしい、とばかりに淳は頷く。

「ところで、有里さん」

「は、ハイ！　何でしょう！」

思わず敬語になってしまった。

「貴方は私の部下を助けてくれました」

「あ、ああ……。いや、別に気にしなくても――」

「神の子たる『アベル』の因子を受け継いだ貴方が、私とこの場で出会った事は、もはや運命ではないでしょうか」

……。

決まりだ。

間違いない。

この人がナオヤの言う重要人物だ。

と言うか、『運命』て。

（ヤバイ……ヤバイヤバイヤバイ！）

さっきまではときめいていた心が、今度は危機感で脈打っていた。

こんな至って真面目な顔で『運命』と言う言葉を使う人間なんて、淳は初めて見た。

助けを求める様にアツロウとユズに目を向ける。

とてつもない速さで目を背かれた。

薄情なクラスメイトだった。

「貴方と私は、再び会う事になるでしょう」

そう言って、アマネはスッと手を離す。

ちょっと落ち着いた。

「アンタには色々、聞きたい事があるんだけど」

何とか気を取り直した淳は、今度はこちらから言葉を投げかける。

「さっきの爆発って、アンタがあの雪男と戦った時に起こったのか？」

「はい、その通りです」

アマネはあっさりと肯定した。

てっきりとぼけるのかと思ったのだが……何せあれだけの爆発だ。警察も既に動き始めているだろう。ならば、普通は隠しておきたい事の筈だ。

それとも――そんな事は気にしていないのか。

「私としても、なるべく穏便に済ませたかったのですが……。しかし、ウェンディゴの力が予想より上でしたので……反省しております」

アマネは淳に向かってぺこりと頭を下げてきた。

「いや、まあ……」

自分が謝られる筋合いはないのだが。

「まあ……それは別にいいよ。それより、アンタは……いや、『アンタら』は悪魔をいつから知ってたんだ？」

「……という事は、貴方は既に気づいているのですね？　悪魔という存在が、遥か昔から存在しているものだという事を」

「……ああ」

何ともと遠回しな言い方だった。

しかしこの言い方は、翔門会も随分前から悪魔を知っている、と自ら認めているようなものだ。

「それじゃあ――最後の質問だけど、アンタら、翔門会って、一体何なんだ？」

「それは言えません」

「……」

今度も即答だった。

「いえ、厳密に言うなれば、まだ話す時ではありません」

「まだ……ね」

それは――どういう意味だ？

そういう意味なのか？

こんな都会のど真ん中に悪魔が現れ、人を襲うというありえなさ過ぎる現象。

そんな状況で、自分達は出会った。

ならば、次に会う時も、同じ状況でないという保障はない』だろう。

アツロウではないが、不吉な予感ばかりが当たってしまいそうだ。

何にしても、情報が少な過ぎる。

ただ1つ、目の前にいる、このこの少女――九頭竜天音の実力は、尋常ではない。

これだけは確かだ。

あのウェンディゴという悪魔も、アマネを随分怖れているように見えた。

「結局、よく分からないって事か……」

今まで黙っていたアツロウが、口を開いた。

その口調は、中々情報を寄越さないアマネに苛立っているようにも思える。

「メールに、悪魔に、翔門会、か……。ああ、クソっ！　考える事

が多すぎるぜ！　とにかく、今日はもう何も起こらない事を祈るしか……！」

その時だった。

辺りに灯っていた街灯が、一斉に消えたのだ。

「何だ……。街灯が、消えた……？」

「もう……！　どうなってるのよ！」

「どうなってるも何も――」

「……」

ユズやアツロウとは違い、やはり淳とアマネは落ち着いていた。

「またあのメールが当たったって事だろ？」

現在時刻、２１時３０分。

青山霊園。

「メールが……？　あ……あああっ！　それだっ！」

「どうしたのよ、アツロウ？」

「ジュンの言う通りだ。これ、停電なんだよ！　覚えてないか？　メールに書いてあった、３つ目の事件。……停電だよ、都内全域のな！」

「決定的だな」

淳は暗闇の中で両手をパンッと叩く。

「この停電が都内全域かどうかはここじゃ分からないけど、メールの内容はこれで全部当たった事になる。あのラプラスメールってヤツを、いよいよ信じなきゃな……」

もっとも。

最初のアパートの事件を見た時から、このメールが悪戯でないという事を、淳はどこかで確信していたのだが。

昔から、彼の悪い予感は外れた事がないのだ。

「あの」

そんな中、アマネが相変わらず凛とした声で会話に入ってきた。

「貴方達の言う、ラプラスメールというのは、一体何なのですか？」

「うん？」

アマネのその質問に、淳は疑問を抱いた。

「何って…、アンタのＣＯＭＰにもあるだろ？　未来を予測するメールだよ」

「未来を……？　いえ、私のＣＯＭＰにはそのような機能はござい

ませんが……」

「……？」

どういう事だ？

ナオヤ以外の人間が、この改造ＣＯＭＰを造ったとは（技術的に）考え難い。

だから彼女のＣＯＭＰも当然、ナオヤの手によるものだと思ったのだが……。

「やだっ！　ケータイ、使えなくなってる！」

しかし淳の思考は、ユズの突然の声に妨げられる事になってしまう。

「え……？　何でだよ？　こんな場所で圏外なんてあるか？」

アツロウは訳がわからないという様子だ。

淳も試しに自分のケータイを覗いてみたが、ユズのと同じように『圏外』と表示されていた。

「だってホントだしっ！　この停電のせいかな？」

「ケータイの中継基地って、自家発電とか、予備電源とかあるハズだろ？　そんなのオカシーじゃんかよ！」

「そんなの知らないよっ！　だけど、ケータイが使えないのは事実

じゃない！」

「はぁ……。一時的なものだといいけどな……。さすがに疲れたぜ……」

２人のやり取りを聞きながら、淳は空を見上げていた。

上空は、黒いペンキをぶちまけたように真っ暗だった。

それを見て、街灯のない東京とは、ここまで暗いものなのか……と、淳は少々場違いな感想を抱いた。

「ねぇ……これからどうするの……？」

ユズは不安そうな視線を――いや、実際に不安なのだろう――を、淳に向けてくる。

「どうするもこうするも……。まずは、駅に向かうべきだな」

ナオヤに詳しく事情を聞くために、彼のアパートに直行、という選択肢もない訳ではないが、しかし、アツロウもユズも明らかに疲弊していた。

２人とも心の中では、自分の家でゆっくり休みたいと願っていることだろう。淳にしてもそうだった。

「それはやめた方がいいと思います」

だが、淳の心遣いに横槍を入れる人物がいた。

アマネだった。

「あー……何で？」

そう言いながらも、淳はその理由を既に理解していた。

アツロウとユズが感じているかどうかは分からないが、少なくとも淳はハッキリ感じていた。

自分達のいるこの霊園の周りをうごめく、幾つかの気配を。

「貴方なら気付いているのでは？　ウェンディゴは自分の下僕たちをこの墓地内に放ったようです」

下僕。

それはつまり……。

「そ、それって、要するに悪魔って事！？」

ユズが再び怯え始めた。辺りが暗闇に包まれた状態での悪魔の存在は、より恐怖を引き立てたらしい。

「クソっ！　やっぱりか……！」

それを聞いて、淳は再びＣＯＭＰを取り出そうとするが、アマネがそれを、静かに手で制した。

「大丈夫です。先程、付近に簡単な結界を施しておきました。今夜はこの場を、動かぬ方がいいでしょう……」

「お、おい……！　動かない方がいいって、ここ、墓地だぜっ！？」

アツロウが戸惑うのも無理はない。アマネが言った事を直訳すると、この墓場で一晩明かせ、という事なのだ。

しかしアマネは淡々とした口調で変わらず説明を続ける。どうやら、相手の感情が高ぶれば高ぶるほどドライになる性格らしい。

「命を失うよりは良いかと思いますが？　明るくなるのを待ってここを離れ、駅へ向かいなさい」

いつの間にか命令口調だった。

常日頃、こんな風に信者に指示を出しているのだろうか……？

「それでは、私はこれで失礼します。淳さん。そしてお二方、貴方たちに『神』のご加護があらんことを…」

「ちょっ……おいっ！」

アツロウの制止も聞かず、アマネは淳達の前から姿を消した。

……『神』、ね。

本当に『神』がいるのだとしたら、こんな事にはならないだろうに、と淳は思った。

「……ちくしょう、何なんだよ！」

「明るくなるまで、ここにいろって……。ど、どうする……？」

ユズの問い掛けに対し、淳は努めて優しい口調で対応する。

「……言われた通りにしようぜ。この暗闇の中、奴らの包囲網を突破しようってのも、無茶な話だ」

まだ実際に戦っていないので何ともいえないが、暗闇では人間より悪魔の方が有利だというイメージが、なんとなく淳の頭にはあった。

「だよな…。クソ…選択肢なんてねーじゃんか。もしあの子の話が本当なら、今動くのは危険すぎる…」

「で、でも、ここ……、お墓なんだよ…？」

「……確かに、な……」

墓場で夜を明かす。

マトモな神経を持ち合わせた人間なら、まず選ばないであろう宿泊手段だ。

「大丈夫……かなぁ……？」

「まあ、悪魔がいたんだ。今さら幽霊が出てきたところで、別に驚かないけどな……」

「ちょっ……！　縁起でもないこと言わないでよ！」

ユズが少し本気で怒っていた。

それを見て、やっぱこういうところ、母親に似てるな……と淳は思った。

「ま、まぁ……どっちにしても動けないけど……。腰が抜けて……」

「……仕方ないな、交代で見張りに立とう……」

そう提案したのはアツロウだった。

「ああ、チクショウ！　こんなに朝が待ち遠しいのは、初めてだぜ……！」

「同感だ……」

アツロウとユズだけではない。淳も2人に負けず劣らず疲労していた。

もっとも、淳は体の内側を1度破壊された上でそれを作り直されたのだ。当たり前といえば当たり前だが。

――そんなこんなで。

淳は最初に自分が見張りに立つと買ってでて、先に2人を休ませた。

アツロウもユズもやはり相当疲れが溜まっていたのか、普段慣れていない（当然だ）霊園の硬い石の床の上にも関わらず、すぐに眠りに落ちた。

そんな2人を気にかけつつも、淳は霊園の入口に立つ。

辺りに気を配ってると、ＣＯＭＰにメールの着信を告げる電子音が鳴った。

静まり返った夜の中ではその音は一際大きく聞こえ、淳は瞬間、あまりに驚いて心臓を一拍、すっ飛ばしてしまった。

届いたメールは2通。

アツロウと――そして、ナオヤからだった。

「……」

アツロウ……、寝たんじゃなかったのか？

まあ……当然か。

今頃、彼の頭の中では、様々な憶測が渦巻いているのだろう。

今日は色々な事があり過ぎた。

とりあえず、淳はメールを確認する。

まずは（やっぱり気になるし）ナオヤのメールから。

『ＦＲＯＭ：ＮＡＯＹＡ

ＳＵＢＪＥＣＴ：ラプラスメールとは

＞そろそろラプラスメールの存在を、認め始めた頃だろう。

淳、この世界に起こる全ての事象は、原因と結果によって成り立っている。

もし現在起こっているありとあらゆる出来事を、データとして集積し、解析可能な知性が存在した場合、もはや未来は未来ではない。

所詮、人の手が組み上げた物だ、完全とはいかないが……。

これからの行動の指針にするといい』

「……」

未来を予知する知性。

果たしてそれがプログラムなのかナオヤの頭脳なのかは知らないが……。

――ナオヤ。

相変わらず、スケールの違う男だった。

淳は生まれてこの方、ナオヤの思考の数パーセントでも理解できた事が一度もない。

理解する気もないが。

理解出来る気もしない。

思い返せば、今日はナオヤに振り回されてばかりの1日だった気がする。

（あの野郎……）

何だか、そう思うと段々腹がたってきた。

気を紛らわす為に、アツロウからのメールを読む事にする。

『ＦＲＯＭ：ＡＴ‐ＬＯＷ

ＳＵＢＪＥＣＴ：このメール読めるか？

＞オレだよ、アツロウだ。

ちょっと調べてみたら、停電はしてるのに、この改造ＣＯＭＰの通信機能は使えるみたいだ。相手のＣＯＭＰのアドレスが分かれば、直接メールを送れるみたいだから、便利だぞ。ＣＯＭＰ同士が一定範囲内にあれば、アドレスは自動的に識別されるみたいだ。

まぁ、少し時間はかかるけどな。後でユズにも使い方を教えとくよ。

色んな事があり過ぎて疲れちまったよ、早く夜が明けないかなぁ……』

「……」

（アツロウ……）

やっぱり、疲れてるよな……と、淳は思った。

淳にしても、様々な考え事が頭の中を現在進行形で駆け巡っていた。

ＣＯＭＰ、メール、殺人事件、悪魔、仲魔、爆発、停電、翔門会。

どれか1つに絞っても、明確な答えは全く浮かび上がらなかった。

どれ1つとっても、非常識。

非現実。

いや、現実だけど。

でも、認めたくない。

「主、考エ事、か……？」

ふと声が聞こえた。

後ろを見ると、コボルト、カブソ、ピクシーが佇んでいた。

「……」

ああ。

「そういえば、大分前からＣＯＭＰから出しっぱなしだったね。お前ら……」

すっかり忘れてた。

つーか、今までどこにいたんだ、と淳は尋ねる。

「あの女が恐すぎるから、隠れてたのよ……」

手の平サイズの仲魔、ピクシーが恨めしそうに言う。

あの女。

アマネの事だろう。

「いや、アイツが敵じゃないって事ぐらい、お前らにも分かっただろ？」

確かに、あの実力は畏怖の念に値するが。

「そうじゃねえでゲス」

「？？」

そう切り出したのはカブソだ（つーか、『ゲス』って……）。

「アンタは感じなかっただか？　あの女から溢れる……こう、何と言うか、その……『違和感』を」

「それは……」

そんな事、言われるまでもない。

彼女に出会った時から発せられていた、あの奇妙な気配。

こう、上手く言葉で言い表す事は出来ないが――

やはり――『違和感』と言うしかないだろう。

プラスであり、マイナス。

上であり下。右であり左。前であり後ろ。善であり悪。陽であり陰。

とにかく、アマネの側にいる時、淳は、自分が内心で酷く戸惑っていたのを覚えている。

それは、彼女の姿を見た時から、その手を握られている間にも感じていた。

まあ、その時なぜかユズに酷く冷たい視線を投げかけられていたから、というのもあるかもしれないが。

アマネといる時の自分は、酷く落ち着かなかった。

何だろう。

あの、胸の奥に渦巻いていた、こそばゆい感情は……。

まさか……。

「恋……？」

顔面を蹴られた。

ピクシーだった。

鼻が折れたかと思った。

と言うか、こんなシチュエーション、以前にもあった気がする。

それはさておき、

「……お前、さては俺が嫌いだろ……？」

最初から薄々感じていたのだが、この妖精と自分の相性は、あまり良くないらしい。

「なにデレデレしてるのよ！　あーやらし！」

メッチャ怒ってた。

何でお前が怒るんだよ……！　と、不満に思う淳。

「それヨり、主、俺タチ、ＣＯＭＰに戻さなくて、いいノか？」

「あー……」

コボルトの言葉に、淳は少しの間、考え込む。

「いや、一緒にいてくれ。今真っ暗だし。お前らの方が夜目は効くだろ？」

「主が、そう言ウなラ」

そう言って、コボルトはその場で腰を落とす。

立っているのも疲れてきたので、淳もそれに倣う。

やたら大きな猫の外見をしたカブソは、そんな淳の膝にズシッと乗っかった。

チョコン、ではなく、ズシッ、だ。

だって、大きいもの。

（……まあ、可愛いからよし）

ちなみにピクシーはと言うと、淳の頭の上にいた。

片足でグリグリと淳の頭を踏み付けていた。

叩き落とした。

「何するのよ！」

「こっちの台詞だぁ！」

やはりコイツ、俺の事が嫌いなんじゃないだろうか？　と思わずにはいられない淳。

まあ、第一印象から最悪だったしな……。

それを言えば、コボルトやカブソにも随分酷い事をした気がするが。

「なぁジュン」

「うん？」

相変わらず方言訛りのある口調で、膝にいるカブソが話しかけてきた。

「あのユズっちゅー奴、アンタの女か？」

「違う」

即座に否定した。

「何でそう思うんだ？」

「ふっ……やたら長く生きてると、そういう事には敏感になるんでゲスよ……」

「そこで語尾にゲスを付けるな……」

今のお前、ただの卑しいオッサンだぞ、と淳が言う。

「というか、お前今何歳だよ」

まあ、悪魔って寿命とかないイメージが強いから、軽く百歳は越えてるだろうな、と淳は思った。

「１０歳」

頭にチョップを落とした。

「何するだ！？」

「まさかの回答だぜ……。つーか、俺より年下じゃねぇか……！」

齢（よわい）１０歳にして恋愛を語るな。

「……カブソ、主に対しテ失礼、だゾ」

そう言ったのはコボルトだ。

それにしても、このコボルトという悪魔、いかにも主に忠誠を誓う武士って感じである。

この場合、もちろん淳が主だ。

それに比べ、カブソはやたらフレンドリーだし、ピクシーに至っては目も当てられない。

悪魔によって、『契約』の捉え方は微妙に違うのだろうか……？

それとも、ピクシーがやたら自分に突っ掛かるのは、嫌々自分達に従う事になったからだろうか。

（……んー……）

「なあ、コボルト」

「何ダ？」

「お前らが俺達と結んだ契約ってのは、一度結んだらもう解けないのか？」

「……？　どうイう、事だ？」

「いや、もしお前らが今現在、嫌々俺達に服従してるんだったら悪いなぁー……、と思って」

初めて悪魔召喚プログラムを起動した時、コボルト達は淳達にいきなり襲い掛かり、それを彼等はなんとか迎え撃った。

そしてコボルト達の世界では、そうした場合、自分達を倒した人間に服従するのが掟なのだという。

彼等にしてみれば、淳達を倒して自由を手に入れるという結果の方が明らかに望ましかった筈だ。

ならば……。

「そレは、違う」

ややあって、コボルトは言った。

「本当か？　もしも無理してるんだったら――」

「そーいう問題じゃないのよ！」

再びピクシーに蹴りを入れられた。

そろそろ何かしらの対策を立てないと、淳の頭部がこの妖精専用のサンドバッグに成り兼ねない。

由々しき事態だった。

「……じゃあ、どういう問題なんだよ？」

「言ったでしょ。私達がアンタらに服従してるのは、それが魔界の『掟』だから！　今、私達がアンタらに反発したら、その掟に背く事になる。私達にとって、掟に背く事はこれ以上ない『恥』なのよっ！」

自由を求めて淳達に反発したら、その恥を一生背負う事になる。

だから、今自分達が淳達に従っているのは、全て自分達の意志。

そう、ピクシーは言った。

「話は分かるけど……それはやっぱり、掟だから人間に嫌々従う事になる場合もあるって事だろ？」

「……」

「……」

「……」

仲魔達は黙った。

「お～い？」

「……一応、ジュン達の方からなら」

カブソが口を開く。

「契約は、いつでも解除できるだよ」

「……あ、そうなの？」

「おみゃあの言う事はつまり、俺達が嫌々服従してるか心配してるって事だろ？　それが理不尽の場合もある、と――でもなジュン、それはおみゃあ達にも言える事なんだぜ？」

「……？」

「俺達を倒したばっかりに、おみゃあ達は俺らを使役する事になっちまったんだぜ？」

「だからその反面、契約を破棄する権利はアンタら人間にあるの。そもそも主従関係ってのは、そういうものよ」

とピクシー。

「だけど、主、勘違イ、すルナ」

そう言ったのはコボルトだ。

「俺達ハ、少なくとモ、俺ハ――お前が主デ良カった、と、思っテる」

「でも――」

「確かに、私達が人間と契約する際にも当たり外れはあるわ」

「ピクシー……」

お前って奴は……と言いたげに、淳はピクシーを見る。

「そん中でもアンタらは、まだマシって事」

「……」

「と言っても、まだアタシ達はアンタらと契約して半日足らず、そんな細かい事いちいち考える事ないんじゃないの？」

「だから主、俺達ヲ、信頼しロ」

「……」

「おみゃあらが俺らを信頼するなら、俺らもおみゃあらを信頼するからよ」

「なるほど、な」

淳は苦笑した。

「なるほどなー」

知り合い（アイギス）のお姉さんの真似。

第一、よくよく考えれば、元より自分達に選択肢はない。

ナオヤのメールを信じるならば、これから淳達には悪魔の力が必ず必要になる。

どのみち、淳達はコボルト達と上手くやっていくしかないのだ。

「……にしても、このアマネが張ったっていう決界、マジで効いてるみたいだな。さっきからチラホラ悪魔らしき影を見るけど、全然寄ってこねぇし」

「お陰で、私達はちょっと息苦しいけどね」

恨めしそうにピクシーが言う。

（……ああ、そうか）

彼等にしてみれば、悪魔を退ける決界の内側にいる訳だから、落ち着く訳がない。

どうりでやたらこっちに引っ付いてくる訳だ……と淳は思った。

「それよりアンタ、いつまで見張りやってる訳？」

「一応、1人3時間って決めてる。だからまあ、それまではこうして――」

「暇だったらちょっと付き合えよ」

――突然。

あまりにも突然に。

男の声がした。

よく通る、透き通った声だった。

それは果たして、なんと――。

淳の後ろから聞こえた。

彼は素早く、振り向く。

カブソを膝に乗せたり、頭にピクシーを乗せたてたりしてたので、少しもつれた。

見ればやはり、先程まで、誰もいない筈だったその場所に、1人の男の姿があった。

淳達の動揺をよそに、男は淡々とした口調で言う。

「俺も暇だからさ」

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『九頭竜天音』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・アマネ（九頭竜天音）

年齢：１６歳

誕生日：５月２０日（おうし座）

血液型：Ａ型

身長：１５３ｃｍ（去年の記録ですが）

体重：３８ｋｇ（去年の記録ですが）

家族：父（母親は離婚し、別居）

職業：翔門会巫女（義務教育である中学校を卒業後、家業に専念する為に、高校への進学はせず）

好きな食べ物：特になし

嫌いな食べ物：特になし

趣味：生け花

Ｄａｙ ｂｅｆｏｒｅ『ＰＥＲＳＯＮＡ４』

銀色。

眉を隠す程度に伸びた銀色の髪が、月明かりを受けて美しく輝いていた。

江戸時代から飛び出してきたかのように黒い甚平を着込み、足には明らかに手作りだと分かる草履を履いている。

一見、この青山霊園という場所では型にハマった格好とも言えた。

見た感じでは、まだ２０代で通るだろう。しかしそこから発せられる雰囲気は、何十年、いや何百年と生きているであろう荘厳（そうごん）さが滲み出ていた。

次に、その目つき。

淳はこれまで、人を視線だけで殺せそうな人間を何人か見てきた。

例えば、母親の友人である、現桐条グループの総帥などがそうだ。彼女の視線はさながらナイフのように非常に鋭く、流石は大企業の長だと感心したのを覚えている。

しかし、この男は、違う。

目つきが鋭い、とか。不気味、とか。悪い、とか。そうではなく。

――深い。

闇の様に深い。

そして、水晶の様に透き通っていた。

悪ではない。

善でもない。

例えるならば、果てしなく広大な大海平を見ているかのような――そんな感覚。

「おいおい、何だよその、まるで幽霊に会ったかのような表情は――傷ついちゃうじゃねえか。……ったく、やれやれだぜ」

男は言う。

（……いや）

淳は疑問に思った。

それよりもまず、この男。

（どうして、今の俺を見て、動揺しないんだ？）

今、淳の側には、およそ非現実的な存在――コボルト、カブソ、ピクシーという悪魔がいるというのに、しかし男は、そんな事は全く気にしてない様に見えた。

「誰ですか――貴方は」

淳は、喉から搾り出す様にそう言った。

再び――『違和感』。

アマネと会った時と、同じ様に。

いや、

今回のそれは、あの時とは比べものにならない。

心臓が、これまでにない程に脈打ってるのが分かる。

呼吸が荒くなるのを、感じる。

「誰ですか、貴方は――ってオイオイ。そりゃちょっと月並み過ぎる台詞だろ、。しかしまあ、そうだな、名前、なぁ。俺の名前は、うーん……まあ、何でもいいだろ、別に」

いくねえよ。

「まあまあ、そう警戒するなよ。別にとって喰おうって訳じゃない。というかむしろ、こっちが驚きだぜ。たかが夜中に見知らぬ男に話しかけられたぐらいで、どうしてそんなに緊張してんだよ」

そう言って。

男は、淳の頬をペチペチと叩いた。

「……！」

（なん……っ！？　ちょっと待て！）

さっきまで自分とこの男との距離は、間違いなく数メートルはあった筈なのに。

一体――いつの間に接近したというのだ？

近くで見ると、男の身長がかなり高い事が分かる。間違いなく、１９０はあるだろう。顔つきも二枚目の部類だ。そのルックスと長身が重なって、まるで俳優のようないい男が出来上がっていた。

あとは、その時代錯誤（じだいさくご）な甚平姿でなければ完璧なのだが。

バッ、と淳はすぐに銀髪の男と距離をとる。

コイツ、やっぱり――

「ただ者じゃないな。お前」

そう言った銀髪の男の姿は、

またも、淳のすぐま近にあった。

「……！」

だから。

（……いつの間に動いたんだ？）

淳の動揺には構わず、銀髪の男は、言葉を続ける。

「今の動きだけで分かる。お前、ただ者じゃあ、ないだろ？　……ん？　いや、でも、どこか素人臭い……。という事は、才能か？　コイツは――全くもって奇遇だな。こんな所で、そんな才能を持ったお前が、俺という存在に会うなんて――」

「俺みたいな『存在』……？」

と、淳。

人間ではなく、存在か。

いや、勿論、何の深い意味もなくそう言ったのかもしれないが。

「アンタ、本当に何者だよ……」

「オイオイ、勘違いするなよ。全く、やれやれだぜ。お前まさか、俺がお前を待ち伏せしてたとか、そんな事考えてんじゃないだろうな？」

「だとしたら、何ですか？」

少しムッとして、淳は銀髪の男を睨む。

「まさか、この霊園の周りにいる悪魔を無視して入ってきたなんて言いませんよね……？」

「言わないよ。この霊園の周りの悪魔を無視するなんて、俺には出

来ない」

銀髪の男は、クックと笑いながら。

「だから――無視しなかった」

「……！？」

その時、気付いた。

先程まで感じていた、霊園の周りにいる悪魔の気配が、全て消え去っている事に。

（いつの間にっ……！？）

「アンタも、悪魔使い……なんですか？」

そうとしか考えられない。

この男が悪魔使いで、全ての悪魔を倒したとしか。

（……いや）

やはり、有り得ない。

先程まで自分は、霊園の入口で見張りをしていた。

悪魔達が戦闘を起こせば、嫌でも気づくだろう。

それなのに、気づけなかった。

全く何も。

何だ――

何なんだ、この男は。

今日、自分は有り得ない出来事を沢山経験した。

それは未来を予知するメールだったり、伝承などでしか聞かない悪魔だったりと様々だ。

だが、コイツは――いくらなんでも、有り得なさ過ぎる。

「違うよ。俺は悪魔使いじゃあ、ない」

銀髪の男は言う。

「いわゆる――『ペルソナ使い』ってヤツさ」

「ペルソナ使い……？」

何だソレは。

聞いた事がない単語だった。

「ん……？　アレ？　何だ、知らないのか？　という事はお前、まだ『こっち』の人間には完全にはなってないのか……。ああ、なるほど……つまり、お前アレか、まだ『成り立て』か」

「はあ……？」

「よく言えば半人前。悪く言えばヒヨッコだ」

「……」

どちらも悪い言い方だと思う。

「ところで、オイお前、こんなところで何してんだ？」

「それは――」

「『こっちの台詞だ』、か？　まあ、ちょっと待てよ。俺は通りすがりでこの霊園に来ただけ、でお前は……」

銀髪の男は、人差し指で淳の側にいるコボルト、カブソ、ピクシーを指し示す。

「そんな悪魔を引き連れてる。この場合、何者だ？　って言われるのは、お前の方じゃないのか？」

「……」

コイツ――本気か。と、淳は思った。

本気でそんな事言ってるのか。

自分がどれだけデタラメなのか――自覚してないのか。

「ふん――まぁ、お前と俺が何者なのか、そんな事はこの際、どう

でもよすぎる事だ。重要なのは、今この瞬間、俺とお前が初めて出会ったって事だ」

そう言って。

銀髪の男は、ズイッと淳の間近に、顔を近づけてきた。

「ぐっ……」

戸惑いはした。

しかし今度は――距離をとる事が出来なかった。

まるでその視線がこちらの体を縫い付けているように、淳の体は微動だにしなかった。

全く、動く事が出来なかった。

というより――

動いてはいけない気がした。

「こんな陳腐でありふれた上に使い古された言葉を使うのは、俺としては断腸の思いだが――ここで俺とお前が会ったのは、決して偶然じゃい。運命だ」

今度ばかりは距離をとった。

目算、5メートルほど。

しかし、心の中では数千里ほど離れていた。

「あー……待て待て。引くな引くな。……ったく、やれやれだぜ。だから言いたくなかったんだ。しかしまぁ兄ちゃん。『一期一会』って言葉くらいは知ってるだろ？　人間は世界中に何十億といるが、そんな中で俺とお前は出会った訳だ。出会いというものはその瞬間だけ。どうだ兄ちゃん、ちょっと俺に付き合えよ」

明らかにカツアゲをしようとする不良の台詞だった。

「……ジュン」

肩に掴まったピクシーが、小声で、淳に言う。

「コイツに関わらない方がいいわよ。明らかに……なんというか、その、変だし」

「……ああ、分かってるよ」

分かってはいるのだが……。

この銀髪の男の言葉から、耳を離せない。

その一言一句が、その口から発せられる音の全てが、脳裏に刻まれていくようだった。

（……ちょっと待て）

淳は思う。

これじゃあ、

これじゃあ、まるで――

本当に、俺とコイツが会う事が運命だったみたいじゃないか――？

いや、違う。

気をしっかり持て。

自分は少し、疲れてるだけだ。何せ、今日は色々な事がありすぎた。だから、まともに頭が回らないだけだ。

この男からすぐにでも離れた方がいい。と、淳は判断した。

しかし、ユズやアツロウを寝かせたまま、ここに放置プレイさせる訳にもいかない。

何より、仮にこの男の言っている事が本当だとして、今は周囲に悪魔がいないとしても、この霊園をでた瞬間、また別の悪魔達が襲って来ないとも限らない。

故に、2人を起こしてこの霊園から一緒に出ていく訳にもいかないだろう。淳としては、わざわざ友人を危険地域に招くような事はしたくなかった。

幸いにも、銀髪の男は場所を変えようとしている。ここで自分がついて行かなかったら、この男はいつまでもここにいそうな気がした。

「ホラ、こっちだ。ついて来いよ」

そう言って。

こちらの返事も聞かずに、銀髪の男は、スッと淳のすぐ横を通りすぎた。

気付けば――淳は、銀髪の男について行こうと、既に歩き出していた。

「ちょっ――ジュンッ!?」

ピクシーが慌てた様に声を上げる。

「大丈夫」

そんなピクシーや、他の仲魔達を、淳は押し止める。

「すぐに戻るから、お前らはここで見張っててくれ」

元々、こちらに選択肢はない。

先程の理由もあるが、

こんな――

こんなデタラメな男との出会いを無下にする程、自分は好奇心のない人間ではない。

そこで――ふと、淳は気付いた。

自分はこの男と、知り合いに」なりたいのだと。

こんな――面白過ぎる人間と、関わりたい――と思っている自分がいる事を。

後方で自分を呼び止めようとする仲魔達の声を無視し、淳は銀髪の男を追って行った。

銀髪の男はゆっくりめに歩いていたので、すぐに追いついた。

「――で、どこに行くんですか？」

「さあ？　どこに行こうか？」

「……」

呆れ果てる淳。

「おいおい。そんな呆れた顔をするなよ。後先考えずに突っ走るのは若者の特権だぜ？」

「一体いくつなんですか、貴方は……」

「今年で３４だ」

「嘘でしょ？」

淳は改めて銀髪の男の顔を見る。

まだシワも出来ておらず、その肌は潤いを保っていた。

外見だけなら、２０代どころか、学生と言い張っても不自然ではないだろう。

「旦那さん、見た目よりお若く見えますね――って、近所の人達によく言われるよ」

「特に予定がないんだったら、俺はすぐにでも帰りたいんですけど」

「おいおい、兄ちゃん。さっきからお前、やたら俺に冷たくないか？　まるで俺が不審者みたいじゃねえか」

「いや……間違いなくそうじゃないですか。気付いてないなら言いますけど、貴方、相当変ですよ」

「やれやれだぜ。お前がそんな冷たいって事は、この出会いはあまり重要じゃなかった。って事になるのかね――最後にコミュを築いたのはいつだったかな。久しぶりに、新しいコミュを始められると思ったのに……」

「コミュ？」

何じゃそりゃ、と淳は思った。

「気にするなよ、こっちの話だ。……まあ、年長者として、少しアドバイスしてやろうか。これは俺が昔、とある長鼻の爺さんに言われた事なんだが、人の力の源は『人間関係（コミュニティ）』にあるらしい」

「人間関係（コミュニティ）…」

その話を真に受けるとすれば、自分の力など微々たるものだ、と淳は思った。

自分はあまり友人を作らない。昔から、人と関わるのを極力避けてきた。

今でも、友人と言えるのは幼なじみであるユズと、高校からの親友であるアツロウぐらいだ（中学時代までは、あともう１人いたが）。

「お前、友達少ないだろ」

銀髪の男のいきなりの台詞に、淳はグッとのけ反った。

ハッキリものを言う男だった。

いや、まあ、その通りだが。

「そういう貴方だって、どうせ友達少ないんでしょ」

ささやかな仕返しをしてみた。

「うん、まあ、ざっと１０００人程度しかいないな」

「……」

返り討ちにあった。

小学生の歌。

友達１００人、出来るかな。

の、１０倍。

「羨ましいんだったら、何人か紹介してやるけど？」

しかも、追い討ちをかけてきた。

「結構だ！」

「何だ、今、人気絶頂の女優、『りせちー』を紹介してやろうかと思ったのに」

「いぃっ！？」

まさかの提案だった。

一体、この男の人脈はどうなっているのだろう。

「話を一旦戻すが――兄ちゃん、俺とお前が会ったのは、やっぱり運命というか、必然だと思うぜ？」

「若者の意見から言わせてもらうと、その……『運命』なんて言葉は易々と使わない方がいいですよ。絶対引かれますから」

「照れ屋さんだな。……ったく、やれやれだぜ。ま、それも若者の特権か。しかし、何だ。どっか遊びに行こうにも、この停電じゃどの店もやってやしねえ。やれやれだぜ。なあお前、ここら辺は詳しいのか？」

「いや、それほどでも……貴方はどうなんですか」

「生憎と、こちとら田舎モンでね。高校2年までは都会育ちだったんだが……。お前、八十稲羽（やそいなば）って知ってるか？」

「いえ……」

力なく首を振る淳。

「何だ、知らねえのか。俺の女がそこの旅館の女将をやってんだが……。ふぅん、天城屋旅館も、もっとアピールしてかないとな……」

銀髪の男がブツブツ言ってる内に、2人の視界にとある公園に続く階段が見えてきた。

「ちょうどいい。あそこで少し休んでこうぜ。ちょっと疲れた」

「体力ないんですね……」

「うるせえなぁ、俺にはちょっと事情があるんだよ。参考までに言っておくと、八十稲羽は東北の辺りだ」

「……？」

「この不景気の時代、電車代も惜しいんでな」

「は……？」

「30過ぎのオッサンに、マラソンはキツイよな……」

……。

えーっと……。

この人、まさか……。

「走ったんですか……！？」

東北からここまでと言うと、相当な距離である。

「貴方、本当に何者ですか……」

「そうだなあ、もうナレーションで『銀髪の男』って綴るのも作者的に面倒だろうし……。もう『セト』って呼んでくれ」

『セト』？

「それが貴方の名前ですか？」

「いや、今適当に思い付いただけだ。まあ、名字をちょっともじっただけだが」

「ああ……うん……。どうでもいいです、もう」

やっぱ、ついて来ない方がよかったかな……と、今さらながらに後悔する淳。

だが、何故だろう。

この男の言葉に、逆らえない。否――

逆らってはいけない気がするのは……。

そっちの気があるとか、そういう事ではなく。

そんな事を話している内に、セトと淳の2人は、宮下公園に足を踏み入れていた。

既に夜遅くという事もあり、全く人の姿はなかった。

「お前、何か飲むか？」

セトは近くにあった自動販売機を指し示す。

「あ……じゃあ、コーヒーで」

「そうか。んじゃ、よろしく」

そう言って、セトは近くのベンチにどっかりと腰を下ろす。

「……」

奢る気はないらしい。

（この野郎……）

睨みつけてみた。

悪戯っぽく舌を出されただけだった。

「……」

器が違う。

「あ、そうそう。俺はお茶で」

しかも、自分のも買わせるつもりらしい。

数分後、淳はお茶とコーヒーを持ってトボトボとセトに所に戻って来ていた。

完全な敗北だった。

セトは淳から受けとったお茶（というか、淳が手渡す前に無理矢理もぎ取った）を、実に美味しそうに飲みながら、

「出会いってのは大切だぜ、兄ちゃん」

「今回は俺にとって、最悪の出会いですよ……」

「落ち込むなよ、そういう事もある」

「そうしたのは貴方でしょうが」

「そうツンツンするなよ、大好きな彼女に嫌われちゃうぜ」

「……？　彼女？」

誰の事だ？

「ん？　なんだ違うのか。あの霊園にいたピンクちゃん、お前のだろ？」

「違います」

コイツ、カブソと同じ事言ってるな……と、淳は呆れた。

他人からはそういう風に見えるのか、俺達。

あと、『ピンクちゃん』って呼び方はどうかと思う。

「お前、いくつだ？」

「は？」

「馬鹿、歳だよ歳、年齢。貴方は何歳ですか？　だ。つーかお前、俺に会ってからクエスチョンマーク出し過ぎだろ」

お前のせいだろうが、と淳は心の中で突っ込みつつ、

「……17です」

と答えた。

「17、か。当然、未成年だな」

「当然、未成年です」

「ちょうど、俺の半分だな」

「まあ……そうですね」

何が言いたいんだ、コイツ。

「それより、そんなトコで突っ立ってないで、お前も座れよ」

今、淳とセトの位置関係は、セトがベンチに座っており、その正面の少し離れた所で、淳が立っているという図だった。

「いや……俺はこのままでいいです」

「ヒュー、かっくイー」

「からかわないで下さいよ」

「からかいたいんだよ」

性格が悪い上に、サドだった（まぁ、性格の良いサドがいるかは疑問だが）。

「それよりお前、悪魔と会ったのも使ったのも、今日が初めてだよな？　一体何があったんだよ」

「……何で見ず知らずの他人である貴方に、そんな事話さなきゃなんいけないんですか。大体、俺はまだ貴方を完全に信用した訳じゃない」

「別に、信用しなくてもいいよ。嘘でもいいから話してみな」

「……」

嘘でもいいのか。

寛容な男である。

まあ、どうせ本当の事を話しても、信じるか怪しい内容だし、問題ないだろうと思い、淳は今日自分の身に起きた事の一部始終を話した。

これまでの会話の中で、セトはかなり口の回る男だという、勝手な印象を淳は抱いていたので、てっきりこちらが説明している間もあれこれ口出ししてくるかと思ったが、セトは時々『ふぅん』とか『へえ』とか言うだけで、最後までおとなしく、こちらの話を聞いていた。

「……ふーむ」

淳の話の全てを聞き終えて、セトは言う。

「『ナオヤ』、ねぇ…」

それは、話の中に出てきた、淳の従兄の名前だった。

「知ってるんですか？」

まぁ、アツロウの話によると、彼はネット関連の業界では相当有名らしいから、淳は別段、驚きはしなかったが。

「いや、直接会った事はないが……。ただ、『こっちの世界』では、

それなりに有名だぜ？　あの『セベク・スキャンダル』を解決した立役者――まあ、『ナオヤ』って名前は、別にそれほど珍しくないから、ただの偶然だろうけど……。つうかさ、話を聞けばお前、間違いなくその従兄にいいように踊らされてるだろ」

後半は、単にからかってるような口調だった。

しかし、次の瞬間には、それは緊迫した表情へと変化する。

「……ちょっと、質問していいかな？　お前の話を聞いてると、色々気になる事が出てきた」

「別にいいですけど」

「その、お前が悪魔召喚に用いてる機械――確か、ＣＯＭＰ、だったな。少し見せてくれ」

「……」

「安心しろよ。悪いようにはしない」

淳は渋々といった感じで、懐からＣＯＭＰを取り出すと、セトに手渡す。

「……これが、そうか」

セトはＣＯＭＰを開いたり、閉じたり、つついたり、耳元で振ったり（何やってんだ）した後、淳に返した。

そして暫く、上を向いて、何か考え込む様な顔をして首をゆらゆ

らと振ると、ややあって、淳に顔を戻す。

「そのＣＯＭＰ、どうやら次元空間を操ってるみたいだな」

「え？　ああ、はい。まあ、そうなるんですかね……。悪魔も、自分達は魔界から来た、みたいな事を言ってましたし」

「……似てる」

「は？」

「似てるんだよ、俺が知ってる、ある装置に。『セベク・スキャンダル』って、さっき言ったろ。あれは大分前に、この日本で起こった未曾有のテロ事件の事だ」

「『セベク・スキャンダル』……」

淳はしばらくの間、自分の記憶からその単語を探ったが、しかし全く聞き覚えがなかった。

「その事件でも、悪魔が絡んでたんだ。いや、絡んでたどころじゃないか……。とにかく、その時も悪魔を喚び出す際に、そのＣＯＭＰと同じような次元装置が使われたんだ。……『デヴァ・システム』。確か、そう呼ばれてたっけな……」

「……まるで、このＣＯＭＰみたいですね」

「そう、まあ、単なる偶然だとは思うんだけどな……。にしても、お前はホントに面白いなあ。一体、どんだけの『縁』が重なってんだよ」

「……偶然ですよ。第一、俺はそんな事件の事は知りません」

「……それがむしろ問題なんだよな。必然でしか有り得ない事が偶然が起こる、お前の体質……、いや、『性質』か？」

「……何なんですか。今度は褒め殺しですか」

「ふん、謙遜するねぇ……。まあ、いいさ。しかし、そう易々と悪魔召喚プログラムを制作した、そのナオヤって奴はちょっと気になるな……。それだけの技術、最早『天才』って言葉じゃ軽過ぎるだろ」

「あ、やっぱりそうなんですか」

「『やっぱり』って……。あのなぁ、今までの歴史上、悪魔召喚をデータ化して構築するなんて、その『ナオヤ』を除けば、ニコライっつー爺さんしかいないんだぜ？　……まあ、別にいいけど」

セトは少し呆れた様子だった。

「よし、兄ちゃん、２つ目の質問だ。まあ、これは事件とは関係ない、単純にお前の事が気になっての質問なんだが…高校は？　行ってるのか？」

「……そりゃ、行ってるでしょうよ。ここは日本で、俺は１７歳ですから。月光館学園ってとこに」

セトは口に含んでいたお茶を、淳に向かって盛大に吹き出した。

「……」

「あ……、いや、スマン」

この時ばかりは、決まりが悪そうにぺこりと頭を下げるセト。

「ちょっ……え……？　……マジで……？　月光館学園？」

「ええ」

「嘘じゃない？」

「こんな事で嘘ついてどうすんですか」

「ああ――そうだよな。そう、その通りだ――にしても、月光上学園、か。マジかよ……」

どういう訳か、セトは酷く動揺していた。

「17歳……年齢的にもピッタリ合う……でも……まさか……いや、外見もどこか似てる気が……」

「……？　……あの――」

「父親は？」

「今度は何ですか」

「いいから答えろって。お前の父親は？今どこで何してる」

「……父親はいません。俺が生まれる前に死んだそうです」

「……」

セトはそれっきり――黙った。

その表情はやはり、どこか戸惑っている様に見える。

「お前――『ポートアイランド・インパクト』って、知ってるか？」

「……」

またも意味不明な質問をしてきたセトに対し、淳は顔をしかめる事しか出来ない。

「……知りません」

「１９年前に起きた、『無気力症状』は？」

「知りません」

「１７年前、八十稲羽での連続殺人事件は？」

「さっきから何なんですか」

「いや、知らないなら別にいい」

セトはベンチから腰を上げ、グッと体を伸ばした。

「お前は何も知らないって事が知りたかったんだ」

可笑しそうに笑いながら、セトは言う。

先程とはうってかわり、今度はどこか嬉しそうな表情だった。

「さて――じゃあ、ここら辺が潮時だな」

唐突に、セトが言った。

「……？　何がですか？」

「俺はな、手順ってのを大事にする男なんだ。俺とお前は間違いなく初対面で、今日会ったのはまごう事なき偶然だが――しかし、ここであったが百年目。お前みたいな面白そうな奴が俺の知り合いじゃないなんて、この俺が許しはしない訳だ」

「随分、無理矢理な持論ですね……」

「そうか？　お前にだって好きなアイドルの1人や2人ぐらいはいるだろ？　そんな奴と偶然、道端で会ったらどうする？　何をしてでも知り合いになりたいと思うのが人情だろ」

「ただのナンパじゃないですか……。後、『人情』の使い方、間違ってません？」

「俺とお前はお茶をして、互いの個人情報もある程度は交換した。これでまあ、建前上は、知り合いと言ってもいいだろう？」

「……」

そういう事は、思っていても言葉にしてはいけないんじゃないだろうか（オマケに、折角の突っ込みを無視された）。

度重なる突っ込みに、淳がいい加減、辟易としていたその時、

「クマー」

と、

声が聞こえた。

「クマー」

……。

声、か…？

再び混乱の渦に思考を支配される淳。

いや、鳴き声……？　でも、『クマー』と鳴く生物が果たして、この地球上に存在するのか？

そして、

「センセェェェェェッッ！　ようやく見つけたクマアアアアッッ！」

ドーーーーーン！！　と。

背中に強烈な痛みを感じた。

突然の来訪者により、淳のファーストキスは、宮下公園の地面に奪われた。

ジャリジャリジャリ！

顔面と地面が擦れ、嫌な音がする。

口の中に、大量の砂と小石が侵入した。

「センセェェッ！　ひどいクマひどいクマ！　急にいなくなって、クマをこんな夜中に放置プレイだなんて！　クマのさびしんボーイが今の今まで『暴れまくり』してたクマー！」

「生憎、俺は今物理反射のペルソナをつけてるんでな。それと『クマ』、俺はこっちだ。」

「え、アレ……センセイ……？」

クマと呼ばれた人物は、淳の背中の上でセトの顔と淳の後頭部とを見比べる。

やがて、ようやく人違いだと気付いたのだろう。大慌て淳の背中からジャンプした。

しかし空中で上手く体勢を整えられず、片足だけ、淳の腰の辺りに落下した。

ウェンディゴに食らわされた傷に丁度ヒットした。

「おおおぉぉぉっ！？」

「何してるんだお前は！」

セトが大慌てでこちらに近寄り、クマという人物の頭をペチンと叩く。

「わわわわわっ！？　どこの誰だか存じませんが、ご、ご、ご」

当事者自身も困惑していた。

「ご愁傷様でした、クマ！」

「普通に謝れ！」

再び、セトはクマという人物の頭を叩く。

「ご苦労様でした、クマ！」

「労（ねぎら）ってどうする……！」

今度は淳がツッコミを入れた。

もはや意地だった。

「あー……、おい、兄ちゃん、大丈夫か？」

「……何とか」

セトの手を借りて、何とか立ち上がる淳。

そして改めて、自分をここまでの瀕死に追い込んだ人物に目を向けた。

その声を聞いた時から大体、予想がついていたが、やはりそのクマという人物は男だった。

セトと違い、クマの身長はやたら低かった。ただ、ハッとするような美男子という点では、セトと同じだった。金のブロンドに、青い両目、白い肌、一見、女性の様にも見える。白いワイシャツに、黒いズボン。しかも、その胸には赤い薔薇が刺さっていた。

「……」

いや、

薔薇って……。

存在してたのか、そんなものを持ち歩く人種が……。

まるで少女漫画から飛び出してきたかのようなメルヘンチックな男だ、と淳は思った。

「クマ……」

クマは困った物を見るように淳を上から下まで眺めると、

「そんな所でボーッとしてちゃ、危ないクマよ?」

今度は淳がクマの頭を叩いた。

「……兄ちゃん、気持ちは分かるが許してやってくれ。こういうヤツなんだ」

「誰ですか、この人は……！」

淳はもはや、もう何が来ても驚かないぞ、という心境だった。

「熊だ。そして、コイツは人間じゃない」

「……」

驚いた。

さっきまでと字が違う。

淳は傍らの兄ちゃんを見る。

どう見ても人間としか思えない。

「クマはクマだクマ！　初めまして、だクマ！　好きな物はホームランバーと女の子、だクマ！」

加えて変態だった。

今更だが、語尾がクマかよ。

「……この人、大丈夫なんですか？」

「大丈夫じゃない」

即答だった。

「――けどまあ、大丈夫だ」

どっちだ。

「俺みたいな保護者がいれば、な――と、おい、クマ。お前はどうやら勘違いしてるみたいだから言っておくが、俺は待ち合わせの場所にずーっと待ってたんだぜ？　なのにお前ときたら、約束の時間を9時間近く待っても現れやしねえ」

「クマ……」

クマがシュンとする。

「……」

いやいや、

9時間て……。

馬鹿じゃないのかこの人、と淳は呆れた。そんなに待ってたのかよ、と。

スゲエ根性だな。

「やっぱ、青山霊園じゃなく、もっとわかりやすい待ち合わせ場所にすりゃよかったかねぇ……」

再び、淳は驚いた。

偶然にも、待ち合わせ場所は青山霊園だったらしい。

（もしかして、あんなとこで9時間も待ちぼうけされたから、淋しくなって、俺に声をかけたのかな……って、ちょっと待て）

9時間前から、ということは……。

（俺達がまだ戦っていた時に、この人はそこにいた、という事か……！？）

セトはその時――既にいたのか？

ずっと、あの霊園に？

自分達に、気づかれる事なく？

「まあまあセンセイ、そんな遠い昔の事を引きずっても、前には進めないクマよ？」

「ほんの数時間前だ」

「そんなネチネチした性格じゃ、ユキちゃんに嫌われちゃうのさ！」

再びセトの容赦ないチョップがクマを襲う。

「いい加減にしろよ、テメェ――ったく、やれやれだぜ。変わらないのはその見た目だけで十分だっつの。少しは精神的にも成長しろ」

「クマは永遠の美兄ちゃんなのさ！」

「『美』はいらねえだろ、『美』は。おいクマ、早くこちらの兄ちゃんに謝れよ。人様に迷惑をかけたら謝るのが人間ってもんだ」

「……」

何というか、

アンタも大概、ここまで俺に散々多々累々に渡って迷惑をかけてきたじゃねえか――という目で、淳はセトを見た。

いや、それよりも今の言葉。

淳は近くでションボリしているクマに目を向ける。

――まるで、この人が本当に人間じゃないみたいじゃないか？

そこで、気付く。

今更ながら、気付く。

何故、今の今まで気が付かなかったのか、と疑いたくなる程の事に気付く。

――ない。

――数字が、ない。

――自分の頭上にも、アツロウにもユズにも、他の人々全員の頭

上にある数字が。

この2人にはない。

何故？

数字がつく人間には――何らかの『条件』があるのだろうか。

（いや、待て……）

そこでふと、淳は思い出した。

そういえば、いた。

初めてこの数字を見てから、この数字が表示されていない存在を、この人達以外に。

――『悪魔』。

――そう、あの、青山霊園での戦闘の際、ＣＯＭＰが起動した事により、戦闘中は一旦はその場の全員の数字が消えたものの、あのウンディゴという悪魔は、それ以前から数字がなかったではないか――。

悪魔にはこの数字が浮かばない。

そう考えていいのだろうか？

いや、待て。

だとしたら。

だとしたら、この2人は――

「と、ところでセンセイ！　こちらのお方は誰だクマ？」

淳の思考をよそに、クマが慌てて話題を逸らす。

「ん？　ああ、コイツは――」

言いかけて、セトは一旦、言葉を切った。

「……あ、そういや、まだ名前を聞いてなかったな。お前、名前は？」

「……」

コイツ……と、そう思いいながら、淳は呆れた。自分は一向に名乗ろうとしない癖に、他人には強要するのか。

別にいいけど。

「……有里淳です」

「……っ！！　……」

セトは再び、そこで黙った。

淳が月光上学園の生徒だと知った時とは違い、今度は慌てたりしなかった。

だが、無表情だった。

『無表情』と、文字として記載するのも、言葉として表現するのも躊躇われる程に、『無表情』だった。

「あの――」

しばらくして、セトは口を開く。

「……『有里』……」

呟くように。

そして、目にも止まらぬ速さで淳の方を振り向いた。

威圧感。

とてつもない、生まれてこのかた感じた事がない程の威圧感、プレッシャーを――淳は感じた。

「有里、有里、有里、有里、有里、有里、有里、有里――あ・り・さ・と・じゅ・ん。……それがお前の名前だな？」

「え、ええ……」

……？

「センセイ？　どうしたクマ？」

セトのおかしな様子に、クマも不思議がっていた。

「有里――先輩……死神に、魅入られた、男……救済者（メサイア）……」

「は……？」

「何てこった……」

愕然（がくぜん）と、していた。

セトは、見るからに愕然としていた。

どうやら、自分の名前――『有里淳』という名前に、相当驚いている、という事はなんとか分かるのだが、しかし悲しいかな、淳には自分の名前のどこに驚くべき要素があったのか、見当もつかなかった。

「く、くく……」

そして――

「はーはっはっはっはっはっはっ！」

セトは、笑った。

高らかに。

狂ったように。

「凄い！　凄い！　凄い！　これは凄いぞっ！　なあ、お前もそう

思うだろ、兄ちゃん――もとい、有里淳！　やっぱりこれは運命だ！　運命なんだよ！　俺とお前が会ったのは必然！　決まっていた事！　当然の因果！　当然の回帰だ！」

「お、おい――」

突然のセトの豹変（ひょうへん）振りに、戸惑いを隠せない淳。

一体――何だ？

いよいよもって――逃げる時か？

「クマァッ！」

その顔に笑顔を張り付けたまま――

セトは、今度はクマに向き直った。

あまりの出来事に、クマはビクッと体を反応させる。

「な、何クマ、センセイ！？」

「さっきは色々言って悪かったな――考えてみれば、お前が待ち合わせに遅れていなかったら、俺がコイツと出会わないまま、あの霊園を去っていただろう！　間違いない――淳！」

再び、淳の方を向くセト。

……ていうか、もう呼び捨て？

「お前は――お前は、とてつもないぞ！　実に！　正直、イザナミの代任になってからはもう、俺の『物語』は、とっくに終わったかと思ったんだが――しかし！　流石は『先輩』！　こんな『途方もない可能性』をこの世に残していただなんて――全く、アンタには敵わねえよ！　今も昔もこれからも！　流石は、ニュクスから世界を救った英雄！　鬼籍に入っても、まだリタイアする気はねえってか！　にしても、ほんの気まぐれのアルバイト感覚でこの東京に来たってのに、まさかこんな出会いがあるなんて！　全く、世界ってヤツは、イカれてやがる！　運命ってヤツは、狂ってやがる！」

「な、な、な――」

悲鳴さえ、上がらなかった。

ああ――そうか。

淳は確信する。

この人は――人間じゃないんだ。

今更ながら――しかし疑いようもなく、確信した。

根拠はない――だが、間違いない。

『コレ』が人間である筈がない。

ナオヤよりも。

アマネよりも。

遥かに――人間離れしている。

信じられない。

今まで、自分がこんな存在と会話をしていたなんて。

考えたく――もない。

思い出したくもない。

「俺と『先輩』の付き合いは、たった1年足らずだった！　そうだ、よくよく考えれば、俺と、あの人との縁があの程度な訳ない！　ここからが続きって訳だ！」

「センセイ！？　ホントにどうしたクマ！？」

「何でもねえよ、クマ――何でもねえが、とんでもない事だ。あはははははははははははは、あはははははははははははは！」

セトは、未だに笑い続けていた。

淳にはサッパリ事情が飲み込めないが、飲み込みたくもないが、しかしそれでも、この男が自分の名前を聞いて、異常に興奮しているというのは理解できた。

「――くっくっく。……淳、今回のところはこれでお別れだ」

ようやく笑いを納めて、淳に背中を向けるセト。

「自分から呼び出しといて、悪いと思うが――だけど、こんなショボい公園じゃ、俺達の接触（コミュニティ）の場としては役不足だぜ。俺達はもっと重要な場面で、更に重要な会話をしなきゃいけないんだからな。おいクマ、行くぞ」

「え……？　あ……りょ、了解クマ！」

セトはおもむろに立ち上がり、公園の出口へと向かっていった。
クマも戸惑いながらではあるが、それに続く。

「ちょっ…、どこ行くんですか！？」

「あ？　帰るんだよ。こんな夜中に出歩いたらあぶねえだろ」

「な……っ！　連れ出したのはアンタだろうが！」

自分勝手にも程がある。

そんなやり口で、まともな人間関係（コミュニティ）など築ける訳がないだろうに。

「いやいや。タクシーに住む美女から、テレビの中に住む珍生物まで、俺の人脈は幅広いぜ？」

「テレビの中……？」

どこまでが実話で、どこまでが嘘なんだ？

「センセイ、珍生物ってクマの事……？　……ムグッ」

セトはクマの顎を片手でわしづかみにしながら（あれは痛そうだ

……）階段を下りる直前で、淳の方をを振り向くと、

「ああ、分かってると思うけど、辺りにはまだ悪魔がわんさかいるから、この霊園から出ない方がいいぞ」

「は？」

何言ってんだ、コイツ？　と淳は思った。

ついさっき、自分たちはその霊園から出て、ここまで来たのではないか？

――しかし、

――次の瞬間、

淳は、青山霊園に佇んでいた。

「……？　……！！　……！？」

少し後ろで、アツロウとユズが寝息をたてている。

「主！？」

「ジュンッ！？」

「ちょっ、えっ！？　いつの間に現れたの、アンタ！？」

すぐ近くで、いきなり現れた淳に対し、コボルト達が驚いていた。

（……ッ！？　どういう事だ！？　間違いなく、俺はさっきまで宮下公園にいた筈なのに――！）

淳は急いで辺りを見渡し、セト達の姿を探す。

セトとクマは、既に霊園の入口から出て行こうとしている所だった。

「ちょ――！」

慌てて2人を追いかけようとする淳。

「やれやれだぜ。そんなに怒鳴るなよ。明日は間違いなく、『お前達』にとって忙しい1日になる。……今の内、ゆっくり休んどけ」

気付けば、霊園の周りを深い霧が包みこんでいた。

「……あ、そうだ」

セトは何かを思い出したかのような表情をすると、懐から何かを取り出し、淳に投げ渡す。

淳はそれを見事にキャッチして、確認する。

それは、メガネだった。

何の変哲もない、ただのメガネだった。

「……？」

なんでここでメガネ……？　と、頭に疑問符を浮かべる淳。

「俺のお古だ。俺にはもう必要ないからな、やるよ。見るべきものが見えない時に、使え」

それを聞いた途端、淳は強烈な睡魔に襲われた。

いつの間にか、霊園を覆っていた霧が、数センチ先まで視認できない程に濃くなっている。

頭が重くなり、視界が霞んでいった。

やがては睡魔に抗えなくなり、淳はその場で膝をつき、力なく俯(うつぶ)せになる。

閉じかけた意識の中で、淳は考えた。

何だ。

何だ。

何だ。

アイツは、

アレは、

あの存在は。

最初から最後まで。

訳が分からない。

或いは、これが始まりか。

ナオヤのメールや、殺人事件や、悪魔の存在など、

あの男に比べれば何でもない。

これだけで――淳は確信した。

自分は『巻き込まれた』のだ、と。

それが一体、どういったものなのかは分からないが、

しかし、とてつもなく大きい、自分の理解が及ばない事態が、今正にこの瞬間、着々と起こりつつある事を、淳は確信した。

まるで雲のように掴み所がなく、

霧のように深い男。

セト。

本当の、名前は、一体――

「――またな……」

セトが発したその言葉を聞いた瞬間、淳の意識は完全に閉ざされた。

Ｄａｙ　ｂｅｆｏｒｅ『ＰＥＲＳＯＮＡ４』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・セト（瀬多（せた）〇〇）

年齢：３４歳

誕生日：1月１９日（山羊座）

血液型：ＡＢ型

身長：１９５ｃｍ

体重：１０３ｋｇ

家族：母、叔父、従妹（いとこ）、妻、娘１人（父は１０年前に他界、また、８年前までには、もう1人娘がいたが、同じく他界している）

職業：翻訳家（本業）、ペルソナ使い（副業）

好きな食べ物：『愛屋』の牛丼

嫌いな食べ物：（言っちゃ悪いけど）妻の手料理

趣味：将棋、囲碁、三味線、フィッシング

１ｓｔ　Ｄａｙ『第一印象』

ある者は言った。

昨日、青山霊園の近くで巨大な爆発が起きた、と。

また、ある者は言った。

その青山霊園から出てくる『異形の怪物』を見た、と。

そして、ある者は言った。

その青山霊園にて、深夜、ぶつぶつと独り言を喋っている、挙動不審な青い髪の少年を見た、と。

ついでに、ある者は言った。

同じ時間、宮下公園でも独り言を喋っている甚平姿の男を見た、と。

更に、ある者は言った。

外人の様な金髪碧眼の少年が、「クマー」と叫びながら都内を走り回っていた、と。

最期に、ある者は言った。

何故か、都内を囲む様に多くの自衛隊員の姿を見かけた、と。

◆　◆

――池袋、衛国寺。

「いよいよだな」

東京都内でも有名なこの寺の中で、２人の男が向かい合って将棋をうっていた。

１人は背が高く、銀色の髪に黒い甚平姿の男――セト。

もっとも、セトというのは昨晩、彼が有里淳という１人の少年に対して名乗った偽名であり、本名ではない。

そしてもう１人は――明らかに人間離れした雰囲気を持つ、大柄の男。

赤銅（しゃくどう）色の肌、全身を覆う金色の鎧。

その名も、ビシャモンテン。

日本を守る四大神の１人である。

「今日をもって、この東京は封鎖される――さてさて、人類の運命や、いかに？」

完全に面白がっているのが見え見えの口調で、セトが言う。

「考えるまでもなかろう」

そんなセトに対し、ビシャモンテンはフンと鼻をならしながら、自分の銀将を進め、セトの歩兵を奪うと、

「もはや、人間に生き残る道はない――神の慈悲により、今回の試練が人間達に下されたが、生き残る確率は微々たるものだ」

と言った。

パチン、と。

今度はセトが自らの桂馬を動かし、先程、ビシャモンテンが動かした銀将を奪った。

「おいおい、そう断定的に決め付けてやるなよ。人間がかわいそうだろ？　……ったく、やれやれだぜ」

「何を今更」

その桂馬を、今度はビシャモンテンの駒がとる。

「今まで、主たる神は幾度となく人間達に機会を与えてきた……。ノアの大洪水しかり、バベルの塔しかり、阪神での大震災しかりだ」

「だけどこれまで、人間はその全ての試練を乗り切ってきた。確かにアイツらは愚かだけど、全員じゃない。第一、その神でさえ危惧してたニュクスの脅威を退けたのは、他ならぬ人間じゃねえか」

「……それについては、反論の余地はない。確かに、人間の中にも気高き魂を持つ輩はいる。だが、人間に対する試練はこれで何度目だ？　この試練の数こそが、人間の愚かしさを如実に表し、且つ滅びるべきだと証明しているのではないか？」

「あーヤダヤダ。どうして『神』に属する連中はこう、ネガティブ思考なヤツばっかりなんだろうね――ったく、やれやれだぜ」

「……そういうお主も、『神』の配下の一員であろうが。しかもただの神の使いではない。かのイザナギ様とイザナミ様の後継者――日ノ本の神々を統べる者と言っても過言ではない」

「よせよせ、そんなにおだてても何も出やしねえよ。第一、俺にしても狙ってそうなった訳じゃない。自分達が生き残る為に奔走した結果、いつの間にかそうなってただけだ」

17年前。

その時のセトは、まだ1人の人間だった――本当にどこにでもいる、ありふれた一般人に過ぎなかったのだ。

彼にとって不幸だったのは――或いは幸運だったのは、ある時、ある『女神』のちょっとした気まぐれに巻き込まれた、という事だ。

「なあ、もう一度聞くけどよ」

ポツリ、と、独り言の様に呟くセト。

「あの時のイザナミのやった事――あれは、『神の試練』とは全く関係ないんだよな？」

「ない」

断言するように、ビシャモンテンは言う。

『イザナミ』。

かつて、八十稲羽という土地に潜んでいた、神聖なる女神。

「彼女は元来、気まぐれな性格だったからな……。しかし、『神』が彼女の行動に気付いていなかった訳でもないだろう。あえて彼女の横暴を『神の試練』と割り切り、黙認していた可能性は十二分にある」

「『神』、ねえ……。俺達のトップか」

「気になるか？」

「なくはない」

いくらセトが元は人間でも、相手は全ての生命を生み出し、育んできた全知全能の存在。気にならない訳がない。

「案ずることはない。そなたの力と功績の全てを『神』は既にご存知だ。近い内にお呼びがかかるだろう」

「感謝感激、雨あられ」

おどけるように、セトが言う。

見れば、ビシャモンテンの駒がいつの間にか大分とられていた。

しかしそれでも、2人の将棋をうつスピードは変わらない。

先程から、2人は全く同じペースで、パチン、パチン、と将棋をうっているのだ。

「にしても、さっきお前から聞いた試練の内容を聞く限り、俺がする事は特にないんじゃないか？　今回の試練では、悪魔の存在が必要不可欠なんだろ？」

「やることならば、ある。……今はまだないがな。よもや、先程言った連中の事を、もう忘れているのではあるまいな？」

「『翔門会』、か」

苦々しそうに、セトは舌打ちする。

あまり、その翔門会とやらを快く思っていないようだ。

「アイツらの目的は――」

「悪人ならば誰もが思い浮かぶものだ。大いなる力を用いて、世界を自分達が望む方向へと導く……」

そこまで聞いて、セトはハァッ、と大仰に溜息をついた。

「またその手合いかよ……。いい加減、絶滅したかと思ってた。やれやれだぜ」

「確かに……しかも奴らの場合、『宗教』という皮を被っている分、厄介だ。何せ、その行いが正しい事だと信じて疑わないのだからな。自分達を選ばれた人間だと信じ、世界の救世主を気取っているらしい」

「そいつらが何企んでようが俺に理解できる訳がないが……。しかし、『救世主』を名乗ってるってのが気にいらねえな。俺が救世主だと認めてるのは、今でも『先輩』だけだ」

「随分、謙遜するのだな」

クックック、と。

ビシャモンテンは、おかしそうに笑った。

「お主も、立派な救世主であろう」

「よせよ」

そう言って、セトはバツがわるそうな顔をする。

「俺は未だに、果たして自分の選択が正しかったのか、自信が持てない……。俺があの時、イザナミを打ち倒したのは、『先輩』が守った世界を、たった2年たらずで壊されたくなかったからだ。……でも、イザナミはニュクスとは違う。ニュクスは明らかに人類の敵で、地球にとっても害だった。なにせ、全ての命に『死』を与える

っつーんだからな。アレが人類の為になる訳がない」

セトは何やら思考に耽るように、室内の天井を見上げる。ここで初めて、2人の将棋をうつペースが崩れた。

「だけど、イザナミはどうだ？　彼女がやった事は結局、人類の行く末を思っての事だった。第一、アイツの力があれば、思い立ってすぐに人類を駆逐するのもたやすかった筈だ。けど、アイツは俺達にチャンスを与えた。で、その結果として俺達は人間の可能性をアイツに示し、人類は生き残って、その後何年かして、俺はイザナミの後釜に収まった……」

日本の霊的治安は、それぞれの地域を治める神々によって保たれている。

イザナミは、その中でも重要な地位を占める存在だった。しかし、当時人間だったセトに破れ、やがてはこの世を去る事になる。

世界に影響を及ぼす程の力を持つ女神が、一介の人間に敗北したという衝撃の事実は、瞬く間に天界、魔界を問わずに広がった。

同時に、セトの本名と力も知れ渡る事となった。

ややあって、イザナミの後任は、例の全知全能の『神』が直々に、セトを指名した。

人間が神の一員になるという、極めて例の少ない事象。

「ただ、今の人間のどうしようもなさを見てると、本当にあれでよかったのか、って思っちゃう訳だ俺は」

「お前に非はない。自分を責めるな」

ビシャモンテンがセトを気遣って声をかける。

「或いはイザナミは、お主のような人間が現れるのを望んで、あのような事をしたのかもしれぬ。イザナミは人間の可能性を見極めようとしていた――お主らはその可能性を示したまで。悔やむ事はない。むしろ誇るべきだ」

それでもセトの表情は、まだ優れないままだった。

しかしやがて、それらの疑念の思いを打ち消すように、

「話を戻そうぜ――その翔門会とやらは、具体的にどうしようって言うんだ？」

と言う。

「我にしても、全てを把握してる訳ではないが……。どうやら、『ベル・ベリト』が絡んでいるらしい」

「『ベル・ベリト』……」

セトはその名を聞いて、ゆっくりと頭の中で吟味（ぎんみ）し、頭の中で何度も反芻し、数回、頷いた後――――、

「……誰だっけ？　ソイツ」

と言った。

ビシャモンテンがズッコケた。

「いや、そこまで大袈裟なリアクションをとらなくても……」

やや引き気味に、セトが言う。

「ベル・ベリトとは、『ベル神』の中でもっともベルの王座に近いと言われている悪魔だ！　それぐらい知っておけ！」

彼にしては珍しく、目に見えて取り乱していた。セトが『ベル・ベリト』なる悪魔を知らないという事が、よっぽど意外だったらしい。

「まさか、『ベルの王位争い』さえ知らぬとは言わぬだろうな……」

「あ、いや、それは大丈夫。それは流石に知ってる」

セトは慌てて顔の前で手を振った。

「しかし、王位争いの最有力候補が絡んでるとなると、この神の試練……今まで以上に、結末の予測がつかないな。下手すれば、『神』も……」

「それはさせん」

セトの台詞に対し、ビシャモンテンは力強く言葉を被せる。

「その為に、我々がおる。その為に、お主を呼んだのだ。ゆめゆめ忘れるな」

「……ジコクテンの代わりに、か？」

「……」

『ジコクテン』という名前に、ビシャモンテンは悲しそうな顔をする。

ジコクテンとは、ビシャモンと同じく、日本を守る神の１人だ。

否、１人だったと言った方が適切かもしれない。

なぜなら……。

「九頭竜天音（くずりゅうあまね）だっけ？　……半年前、ジコクテンを倒したのは」

「……ああ、そうだ、その通り。ヤツのせいで我の友人でもあるジコクテンは地に落ち、この東京と魔界を隔てる壁に僅かな歪みが生じた。あれから、東京は徐々に魔界化している」

「その九頭竜って娘だけど」

セトは眉をひそめながら、昨日、偶然居合わせた戦闘の様子を思い出す。

「昨日、たまたま見かけたぞ。だけど、俺が見る限りじゃ、あの子、それほど悪いヤツには見えなかったけどな……」

「お主が奴を見てどのような感想を抱こうとも勝手だが、しかし奴はジコクテンを殺した。これだけは絶対不変であり、揺るぎない事

実なのだ」

「別にお前の言葉を疑う訳じゃないけどさ……」

セトは「う～ん」と言いながら頭を掻く。

「お前、今回の試練については、どれぐらい知ってる訳？」

「残念ながら、あまり多くを知っている訳ではない。いや、興味がないというべきか。我の任務はこの東京と魔界との壁を保ち続ける事だけだからな」

「頼りにならねえなぁ……」

「フン、気になるならお主自らが動けばよかろう……。王手」

「……」

愕然とするセト。

どうやら、いつの間にか逆転されていたらしい。

「『待った』と言わせてやる」

「いいの！？」

「どうせ何度挑んだところで、お主は我に勝てん」

「あー！　もう、やめだやめだ！」

馬鹿馬鹿しい、と言いながら、セトは盤の上の駒をかき集めて、傍らの小箱に入れる。

「そう言えば、お主が昨日連れていたあの騒がしい男はどうした？」

ビシャモンテンが言う。

「ああ……クマの事か？」

クマ。

セトの旧友。

シャドウでありながら人間の心を併せ持つ、稀有（けう）な存在。

「アイツは自衛隊がここを封鎖する前に、八十稲羽に帰らせたよ。アイツがいてもトラブルしか引き寄せないからな」

同行させたところで、また迷子になるのがオチだ。

それ以上に、かつての仲間をこの試練に巻き込みたくない、というのもあるが。

「ハァ……仕方ねえ。りせもいないし、たまには自分の足で情報収集でもするか」

「構わないが――イザナギよ」

ここで初めて、ビシャモンテンはセトの事を「お主」以外の名称で呼んだ。

『イザナギ』という名前もまた、彼が数多く持つ偽名の内の１つだ。

彼がまだ人間だった頃の名前を知っている者は、今では数少ない。

イザナミの代任として神（てんし）の配下の座に落ち着いてからは、彼は人間だった頃の、自らの公式的記録は全て抹消してしまった。

厳密には、いくらセトといえどこの情報化社会から自らの記録の全てを根絶するのは容易ではない為、世界有数の大企業である桐条、南条の両グループの総帥に協力を仰いだのだが――それはまた、別の話だ。

そのような過程をえて、かくして人間、〇〇　〇〇は神の一員になった。

一介の人間がそのような座に収まるなど、そんな、どこにでもありふれたファンタジー小説の悪役全員が夢見るであろう、途方もない所業を、しかし彼はほぼ成り行きに任せた形で成し遂げた。

異常であり異様であり異能。

〇〇　〇〇。

彼の『イザナギ』という名前は、その手の世界では、伝説どころか正に書いて字の如く『神話』に近い存在なのだが……。

人間が住まうこちらの世界では、例えこの世界が１つの物語の舞台であり、そこに６０億人近くの名前が記されている登場人物表が

あったとしても、彼の名前だけは、そこから抜け落ちている。

人から神（てんし）の配下に。

存在から不在に。

不変から神話に。

「……イザナギよ、あまり派手に動くなよ。お主の力は、既にかのイザナミ様を越えているのだからな」

「やめろよ――ったく、やれやれだぜ。俺はとっくに隠居したジジイだ。印籠掲げて全国放浪する気にもならねえよ。第一……」

セトはそこで一旦、言葉を切り

「今回の試練で、俺以上の可能性を持つ人間を見つけたしな。今回で、俺もようやく引退できるかもしれない」

「何を馬鹿な」

冗談を言うな、という口調でビシャモンテンは苦笑する。

「お主を越える人間など、そうそういてたまるか」

「まあ……そうだな」

あくまで、可能性だ。

だからセトはその話題について、それ以上広げなかった。

しかし、気のせいではない。

冗談でもない。

本当にそう思ったのだ。

セトは、昨晩初めて会った少年の事を思い出す。

青髪碧眼の少年。

有里淳。

あの時、彼がクマとの待ち合わせ場所を青山霊園に選び、有里淳と邂逅を果たしたのは、重ねて言うが、全くの偶然である。

彼が青山霊園を待ち合わせ場所に選んだ理由は、事のついでだ。

その霊園では、彼の昔の『先輩』が眠っていたのだ。

自分の身を犠牲にし、世界を救った英雄。

死神（タナトス）に魅入られた男。

神（てんし）の配下になった今でも、セトは彼を追い抜いたどころか、追いついたとさえ思えっていない。

そんな、尊敬してやまない人物の墓に線香をたいていた際に、事は起きた。

霊園の近くで爆発が起こり、そこから悪魔が現れたのだ。

そしてそこに、有里淳とその友人達も居合わせていた。

最早、物語としてはセオリー通りの展開というか、かくしてその悪魔と彼らは激しい戦闘を繰り広げ始めた。

セトはその際、自らの能力で自分の存在を彼らの意識から隔離して、その光景を眺めていた。

助けてあげてもよかったが、曲がりなりにも神（てんし）の一員である自分が、そう安々と人間の行いに干渉する訳にもいかない。

内心、ハラハラしながらそれを見守った末、何とか彼らは生き残った。

その最中、かの九頭竜天音の姿も見かけたが、それ以上に、セトは彼らの内の１人――有里淳に興味が湧いた。

最も、この時点でセトは、彼のその名前を知らなかったのだが。

頃合いを見計り、セトは彼に声をかけた。

そして――

「……っ！！」

と、彼は驚く事になる。

（何だコイツは？）

それが――セトが有里淳の顔を、初めて正面から見た時の第一印象だった。

第一印象。

第一印象は――大事だ。

極めて、重要だ。

数多くの人々と絆を作り、その力でもってイザナミを倒したからこそ、セトは強くそう思う。

第一印象から人の人格を悟るというのは、彼が数多く持つ特技の1つだ。

だからこそ、彼には分かった。

――コイツは、マズイ

否、ある程度の覚悟はしていた。

悪魔とあれだけの戦闘を行った人間が、まともな人格を併せ持っている訳がない、と。

彼が連れていた2人の友人にしても、まだ悪魔との戦闘に慣れていなかったのだろう――傍からでも、酷く慌てながら戦闘を行っているのが、セトには分かった。

その中で、1人。

有里淳だけが、異彩を放っていた。

だから、ある程度の覚悟をもって、声をかけたというのに……。

その覚悟さえ、まだ温かったという事か。

有里淳。

彼は、死んでいる様な目をしていた。

否、死んだ目だった。

酷く濁り、酷く汚れ、酷く霞み、酷く淀んでいた。

まるで、死体が何かの間違いの上に、更にまた別の間違いを何乗も重ね、生きた人間のまね事をしているかの様だった。

正直な話、こんな濁りきった上に混沌とした眼を持つ人間（？）に人の言葉が通じるのだろうか、と激しく疑問だったが、とりあえずセトは彼と関わりを持とうとした。

最早、一度声をかけた以上、引き返せなかった。

本音を言えばその場でUターンしてビシャモンテンの所へ向かいたいくらいだったが、しかし、それでも彼がそうしなかったのは――

懐かしかったからかもしれない。

彼が――有里淳が、あの、死神（タナトス）に魅入られた昔の『先輩』に、どこか似ていたからかもしれない。

しかしそれでも、セトは動揺の方を表に出さないようにするのに必死だった。

何と言うか、出会い頭に鈍器で殴られたかの様な理不尽さを、その時の彼は感じていた。

まあ、話し掛けたのは彼の方からだが。

どのような人生を送れば、どのような黒魔術を用いれば、こんな人間が出来上がってしまうのだろう。

そう、セトは思った。

湧いてはいけない興味が湧いてしまった。

別に、この少年が大した言葉の一言さえ発していないというのに、セトは内心、酷く困惑していた。

言わせてもらうなら、この少年にどうして先程のような友人が２人もいるのか、と、セトは不思議に思った程だった。

恐るべきは、

（アイツが特に何もしてないってのに、俺がそこまで理解出来てしまった、という事だ――いや、むしろ理解させられた、と言うべきか）

まるで、タチの悪い伝染病の様に。

あの少年から発せられる負のオーラに比べれば、数ある凶悪な病毒でさえも、ものの数ではない。

正直。

もしも今回の試練を人間に課した責任者が、『神』ではなく自分だったら、まず間違いなく真っ先に舞台から下ろすであろう存在だった。

しかし、それらの不安も不満も、

彼の名前を聞いた瞬間、後片もなく消し飛んだのだが。

ああ、そういう事か――と。

納得――したのだが。

やがて、

「とりあえず、ちょっと散歩がてら、翔門会を探ってみるさ」

そう言って、セトは衛国寺の戸を開ける。

そこにはまだ、普段通りの東京の光景が広がっていた。

この日常が非日常になるのも、そう遠くない。

「……実を言うと、ちょぉぉぉぉぉっとばかし、嫌な予感がすんだよな。このモヤモヤの正体が一体なんなのか、探ってみるのも悪くない」

セトが言う。

「縁起でもないことを言うな……。まぁ、程々に頼む。ジコクテン亡き今、お主を欠く訳にはいかないのだからな」

そんなビシャモンテンの台詞には言葉を返さず、無言で手を振って答えながら、セトは衛国寺を後にした。

またあの死んだ目をした少年に会えるかな、と、期待とも不安ともとれる感情を胸に抱きながら。

１ｓｔ　Ｄａｙ『起床』

午前８時３０分。

――青山霊園。

そこの冷たい石の地面の上で、有里淳（ありさとじゅん）は目を覚ました。

「あ、おはようジュン。少しは眠れた……？」

クラスメイトである谷川柚子（たにかわゆず）の声を聞きいて、淳がそこに目を向けると、彼女は既に目を覚ましていた。

また、淳のもう１人の友人である木原篤郎（きはらあつろう）も、とうの昔に起床を終えており、何やら興味深げに、自分のＣＯＭＰの画面を覗き込んでいた。

昨日『仲魔』になったカブソ、コボルト、ピクシーの姿は見当たらなかった。恐らくは、ユズかアツロウかのどちらかが、ＣＯＭＰに戻しておいたのだろう。

まあ、人目につきやすい日が出ている時間帯に彼らを表に曝す訳にはいかないので、無難な選択といえるが。

そして、そんな２人の様子をぼんやりと眺めている淳はというと、霊園の固い地面に俯せになっていた。

どうやら昨晩、あの怪しすぎる風体をした壮年の男――『セト』

と別れてから、ずっとこの体勢だったらしい。不自然な体勢で眠りについていた為、体のあちこちから軋む様な痛みを感じる。

「それにしても――結局、昨日の夜は、悪魔は来なかったな」

ようやくＣＯＭＰの画面から目を離し、顔を上げて、淳の方へと視線を向けながら、アツロウが言う。

「ああ……」

淳はまだ痛む体のあちこちをストレッチでほぐしながら、

「あの子（アマネ）の結界が、ちゃんと効いてたって事だろ。昨日、何度か悪魔っぽい影が、霊園の入り口近くを通ったけど……。こっちには気付かなかったみたいだしな」

と言った。

「うん……私も見たよ。……も、もう明るくなったから、動いてもいいんだよね！？」

指を櫛代（くし）わりにして寝癖を直しながら、ユズが言う。

「そういや、ジュン。随分グッスリだったな～。そんなに疲れてんだったら、俺達に一声かけてから眠れよ」

にっしっし、と変な笑いを漏らしながら、淳が言う。

「……」

アツロウのからかう様な口調に、淳はしばし沈黙する。

どうやら2人は、淳が寝ていたのは昨日の疲れによるものだと思っているらしい。

本当は、もっと別の事情があるのだが……。

――と、その時。淳の足元で、何かが落ちる音がした。

彼がそこに目を向けてみると……そこには、黒い縁のメガネがあった。

メガネ。

昨日の晩、あの男――セトから（半ば無理矢理）渡された物だ。

「あれ、ジュン、それって伊達メガネ？　へ～、以外とオシャレなんだ」

淳よりも先にいち早くそのメガネを拾い、それをしげしげと眺めながら、ユズが言う。

「へぇ～、俺も知らなかったぜ。ジュン、夏休みの間にでも買ったのか？」

「え？　あ、いや、これは……」

アツロウの問いを受けて淳は、言葉に詰まった。

果たして2人に、あの怪しい男について話すべきかどうか、迷っ

たからだ。

「ねえジュン、ちょっとかけてみてよ！」

何やらワクワクしながら、ユズがそのメガネを淳の手に押し付ける。淳は一瞬、どうするべきか迷った。

まず、このメガネ。

（かけても大丈夫なのか……？）

これがただのメガネならば何も臆（おく）することはないが、しかし、あの異常なまでに不審者オーラを最大出力で展開していた男、セトから渡されたメガネとなると、淳は流石に躊躇（ためら）ってしまう。

（そういえば、アイツ言ってたな……）

『見るべきものが見えない時に、使え』

昨晩の別れ際――セトは、確かにそう言っていた。

まさかこのメガネ、かけたたら幽霊が見えるとか、そんなんじゃないだろうな……と、淳は思った。

ちらり、と横にいるユズとアツロウを見ると、何故か2人とも、期待に満ちた眼差しで淳を見詰めていた。

「……」

（や、やめろ……！　そんな目でこっちを見るな……！）

――だが。

気付けば、淳は流れるような動作でそのメガネをかけていた。

その動作たるや、あまりに流麗すぎて、残像がのこる程だった（んなアホな）。

「……」

メガネのレンズ越しに見える景色に、特に変わりはなかった。

場所が青山霊園というだけあって淳は、3流ホラー映画ばりのドッキリ展開を内心、覚悟していたのだが……。しかし、そんな事はなかった。

結果だけみれば、やはりこのメガネはただのメガネであり、メガネはメガネであってメガネ以上ではありえないという事になる。

――が、それが逆に、淳の心の中に、1つの疑念を生む事になる。

何故、こんな何の変哲もないメガネを、あの男は自分に渡したのか。

甚だ疑問だった。

そんな淳の思考など余所に、横にいるユズは「いーねージュンッ！　凄く似合うよっ！」と爽やかな笑顔で彼のメガネスタイルを賞賛している。

「……お褒めの言葉を頂いて、感激の至りだよ……」

若干拍子抜けしながらも、淳はそのメガネを懐にしまい込んだ。

淳は結局、あの男（セト）については、まだ話さないでおこう、と思った。ただでさえ混乱した状況の中、これ以上2人の友人に、不確定要素を教えて怖がらせる必要はどこにもない。今、重要なのは、自分達が無事に家まで帰る事だ。

だからこそ、淳は、

「まあ、そんな事より……。いくら日が昇ってるといっても、また悪魔が出てこないとも限らない。油断せずに行こうぜ」

と言った。

「う……ジュンのバカ！　怖がらせないでよっ！」

突然、体が寒くなったかのように、自分の体を両腕でかき抱きながら、ユズ。

「ははは、まあ墓地で眠るなんて、2度としたくない経験だけどな！　……でもさ、街灯は結局つかなかったな。明るいから分からないだけで、今も停電してるって事か……」

アツロウの言葉を聞き、淳は自分の母親へ連絡を入れてみようと思い、ケータイを開く。

電話帳のメニューを開いて『岳羽』という文字を選択し、電話をかけるが……。

「……ダメだ。電話もまだ繋がらないみたいだ」

もっとも、ユズやアツロウのケータイでは『圏外』と表示されるのがオチなので、これだけでも大した事ではあるのだが。

なぜなら、淳が持つこのケータイは、高校に受かった際、その記念として、母親の人脈でかの桐条グループに作らせた特注品なのだ。

……まあ、それでも連絡がとれない以上、意味がないのだが。

隣では、ユズが自分のケータイを見て、

「私のケータイは圏外のままだし……。夢じゃ……なかったんだね……」

と、呆然と呟いている。

その時だった。

『♪♪♪』

――と、何の前触れもなく、淳達のＣＯＭＰから、メールの着信を告げるメロディが鳴り響いたのだ。

「ＣＯＭＰに着信？　誰からだ？」

弾けるように、大急ぎで自分のＣＯＭＰを開きながら、アツロウが言う。

「誰からにせよ、とにかく嫌な予感しかしねぇよ……」

「と、とにかく読んでみようよ……」

言いつつ、淳とユズも、それぞれのＣＯＭＰを開いている。

届いたメールは、２通。

『ＦＲＯＭ：ＮＡＯＹＡ

ＳＵＢＪＥＣＴ：余命日数表示機能について

＞淳、生きているだろうな？

ＣＯＭＰの【余命日数表示】という機能について、説明しておく。

これは他人の【余命日数】を数値で表示する機能で、内容は簡単に説明すると、次の通りだ。

・【ホストリーダー】のみが視認可能。

・０～９の１桁で表示される。

・１０日以上は表示されない。

最後になるが……【余命日数表示】はあくまで、ラプラスシステム

により算出された値であり、本人の行動いかんによっては変化する場合もある。注意してくれ』

――そして、もう1通。

こちらは、昨日も淳達のＣＯＭＰに届いた、ラプラスメールだった。

『ＦＲＯＭ：時の観測者
ＳＵＢＪＥＣＴ：ラプラスメール

おハようごザいます。
本日のニュースをお伝えします。
？全日　東京　山手線内　全域　にて　停電　が　【継続】　復旧　は　不明
？全日　東京　山手線内　全域　にて　地下　から　【有毒ガス発生】　の　疑惑　駅施設　の　全て　が　封鎖　鉄道各線　全て運休　出口　は　ナシ

？13時頃　千代田区　と　文京区　にて　局地的　な　吹雪　の
発生　雪男　に　よる　【殺人事件】

犠牲者　3名　【死亡】

みなサま良い一日ヲ』

「……」

――と。

清々しい朝日とは裏腹に、心の中に突風のごとき速さで黒いシャッターのとうなものが閉められていくのを、淳は感じた。

ナオヤ。

（あの野郎……）

眉をひそめる淳。

全く――次々から次へと、手を替え品を替えては、自分達を驚かせてくれる。

良かれ悪かれ。

そんな事を考えている淳の隣で、メールを見ていたアツロウが、

「よ、余命表示……！？　何だよそれ！　他人の死ぬ日が見えるって事か！？」

と、驚いたように叫んでいた。

「そういえばジュン……。昨日、私達の頭の上に、数字が見えるって言ってたよね……」

「……っ！」

ユズの質問を受けて淳は、痛いところをつかれた、と思った。

とはいえ、この時には彼は既に、この状況の内実を、ほぼ把握しつつあったのが――それを、今のユズに教えるのは憚（はばか）られた。

その為、何とか話題を逸らす為に、淳は、

「あー……、もう1通のメールも見たか？」

と言ったのだが、しかし、その後のユズの反応を見て、どうやらそれも無駄な努力だったらしい、と思った。

「ごまかさないでっ……！　そんなの、どうでもいいよ！　見えるんでしょ、数字！」

「……」

正直に言うべきか。

それとも――言わないべきか。

「……『0』、だろ……？」

やがて、絶望の色をその声に滲ませながら、アツロウが言う。

「前にさ……お前、俺達の側に見える数字が、『1』だって言ってたよな？　あれって……昨日の話だ……。つまり、今の俺達の数値は、……『0』、なんだろ？」

「……」

淳は答えなかった。

答えられなかった。

この現実は、残酷過ぎる。

現実だからこそ、残酷だった。

しかし、そんな淳の沈黙の意味に気付いたアツロウは、

「……言えないんだな。は……はは、参ったぜ。俺、今日死ぬのかよ……」

と言った。

「もういい……もういいよ！　そんな話、したくないよ！　それより、早く帰ろ？　こんなのどうせ嘘だよ！　早く家に帰ろ……！」

「そう……だな。そうするか？」

ヒステリック気味に取り乱すユズに対して、淳は言ってしまいたかった。

ラプラスメールを見る限りでは、電車は止まっている筈だ、と、言ってしまいたかった。

しかし――淳よりも先にアツロウの方が、それを代弁してくれた。

「……電車が動いてればな」

「アツロウ……」

「……！　な、何言ってんのよ！」

大きく目を見開きながら、ユズが言う。

「落ち着けよ、ソデコ……。もう1通のメール……『ラプラスメール』を確認したんだ。……これに書いてあっただろ？　『駅施設の全てが封鎖』……ってな。もしこれが本当なら、駅は使えないはずだ」

「う……でも、でも！　行ってみなきゃ分かんないでしょ！　今度は外れてるかもしれないじゃない！」

「……」

藁（わら）にも縋るような思いでそのように叫ぶユズの隣で、淳はフウー……と、ゆっくりと息を吐き出すと、次のように言った。

「……駅に行ってみようぜ。当たらなきゃ問題ないだろ……」

『当たらなければ』。

例え、その可能性がどれだけ低くとも――！

「そうか……そうだよな！　こんなとこでくさってても仕方ない。駅まで行ってみようぜ！」

アツロウが言う。

「神様っ……。どうか、渋谷駅が無事でありますように……！」

「……」

『神』、か……。

ユズの言葉を聞いて、淳は思った。

――『神様』。

もしも、自分達のこの『運命』を、アンタが決めているのだとしたら。

――俺は、アンタを恨む。

１ｓｔ　Ｄａｙ『渋谷駅前にて』

青山霊園を抜け、表参道に出たところで、突然ユズが立ち止まった。

「ねえ、２人とも！　あれを見て……！」

ユズに言われ、淳とアツロウは道路に目を向ける。

路上には大破した車の破片が散乱し、中には乗り捨てたと思われる車両も放置されていた。

「なん……だこりゃ……。一体、何があったってんだよ……？」

アツロウが言う。

「……酷い状況ね。たった一晩電気が止まっただけで、こんな事になっちゃうの？」

「……違う」

ポツリと、淳が呟く。

「え？」

「停電のせいじゃない」

「ど、どういう事？」

「停電で信号が止まっても、車にはヘッドライトがある。こんな酷い事故になるとは思えない……。それに、あえて気にしないようにしてたけど……。こっから見えるいくつかの車のフロントガラスに、何か、赤い液体やら物体が飛び散っているような……」

サッと、ユズの顔から、一気に血の気が引いた。

「それじゃ、これも悪魔のせい……？」

「証拠はないけど、な。渋谷までもう少しだ。……急ごうぜ」

◆

◆

渋谷駅にたどり着いて、淳達は愕然（がくぜん）とした。

宮益坂の上の方まで人が溢れかえり、渋谷駅には近づけないのだ。

そして、人垣の向こう。

テレビ越しにしか見た事がない自衛隊員達が、車両と砂袋を使ってバリケードを築いていた。

その内の1人――まだ成人したばかりと思われる若い自衛隊員が、

人々に向かって声を張り上げている。

「有毒ガスが発生しており大変危険です！　渋谷駅周辺には近付かないようにお願い致します！　山手線、その他私鉄を含む、全ての経路が同様の状況です！　安全な場所でしばらくお待ち下さい！　現在、山手線に警戒網が張られており、全ての高架、踏切などの通行が、禁止されています！」

それを聞いた一般人の１人（サラリーマン風の、中年の男だった）が、憤慨したように、

「沿線って……それじゃ山手線の外へ出られないじゃないか！　おいっ、どういう事だ！　ちゃんと説明しろっ！」

と言う。

しかし、若い自衛隊員はあくまで無機質な口調で、事の内容を淡々と告げる。

「原因は、只今調査中です、我々の指示に従って下さい！　皆さんの安全の為、ご理解とご協力をお願い致します！　尚、昨晩１９時頃に青山霊園で起こった、原因不明の爆発に関しても、調査を行っています！　何かご存知の方がおられましたら、お近くの災害救助隊員まで、お知らせ下さい！」

繰り返し発せられる事務的な口調に、最初は不満げに叫んでいた人々も、渋々、口を閉じていった……。

やがては、駅前に集まっていた人々は、諦めたように方々へと散っていく。

「クソッ……！　電車の運休っていうか、駅自体に近づけなくなってるじゃないかよ……！」

事の成り行きを見ていたアツロウが、どういう事だという口調で、誰にともなく怒鳴っていた。

「有毒ガスって、本当かな……？　これも、悪魔のせいだったりしない……？」

そんなユズの言葉に対し、いや、と淳は思った。

「これに関しては……違うと思う」

「え？」

「見ろよ、あれ……」

淳は、バリケードの先にある、自衛隊のテントらしきものが集まっている場所を指差した。

「いくら何でも、毒ガスぐらいであれだけの重装備はちょっと考えられない。それに、装甲車やヘリ、戦車まで……たった一晩で、これだけのバリケードを組み上げたり、沿線をふさぐなんて出来るか？」

「どういう事だ？　ジュン」

と、アツロウ。

「これじゃあまるで、あらかじめ封鎖の用意がされてたみたいだ……」

「そ、それじゃ、これって……」

「ああ……。俺達の知らない事件が、起こっているのかもしれない」

「クソっ……！　結局あのメールが当たってる事には変わりないか。このままじゃ俺達……！」

「アツロウ！」

低く、しかしよく通る声で――淳は、アツロウの次の言葉を制する。

だが、かくいう淳も不安でないといえば嘘になる。

だが、考えなければ。

悲観してるだけでは、状況は好転しない。

考えろ。

考えろ！

その時、

『よ――表示――は――プ――』

淳の脳裏に、ある一場面が浮かび上がった。

そこには、今朝見たナオヤからのメールが映し出されていた。

『――生き――？　――余命――注意――』

そう、

そこには、確か――

『余命日数表示はあくまで、ラプラスシステムにより算出された値であり、本人の行動により、変化する場合もある――』

「……っ！」

そして、

淳は、

「余命を変えよう」

と、言った。

「え？」

「だから、余命を変えるんだよ。ナオヤからのメールに書いてあった――俺達の行動次第で、この余命は変わる事がある、って」

途端に、パアッとしたような表情になる淳。

「そ……そっか、そうだよ！　ジュンの言う通りだよ！　ナオヤさんのメールには、確かにそう書いてあった……！　だから、私達が行動して、変えちゃえばいいんだよ！　ラプラスメールで、山手線から出られないって言われたのも、今日、死んじゃうって言われたのも……全部、嘘にしちゃえばいいんだよ！」

淳の言葉を聞き、ユズはどんどん前向きになっていく。

アツロウもまた、

「全部嘘にする、か……。はは……ジュンもすげえ事考えるな。……まあ、確かに、余命表示もラプラスメールも、同じ未来予測のプログラムから算出されている筈だ……。とすると、俺達の余命は、ラプラスメールの事実が起こる事を前提で算出されている事になる……。これだけの的中率をほこる演算だ。相当、綿密で膨大な処理に違いない」

と言う。

「ち、ちょっと、考えが難しい方に飛び過ぎだって！」

慌てたような、ユズの声。

「あ……わりぃ、でも、大事な事なんだ。計算式ってのは、綿密で

あれば綿密であるほど、たった1つの違いが、結果に大きな差を生んでしまう。つまり…もし、俺達が、ラプラスメールの事実を書き換える事が出来たとすれば……全ての演算結果は無意味になり、表示された余命にも、大きな影響を与えるんだ！」

「……！　それって……やりようによっては、今日死んじゃうのも、回避できるって事……？」

「ああ、その筈だ！」

淳がそう言うと、ユズが『やったあ！』と言って、淳に抱き着いてきた。

「うおっ…、ユズッ！？」

胸が！

胸が当たってるぜ、ユズ！

「あ、ゴメン…」

ユズは顔を仄かに赤くすると、慌てて淳から離れる。

淳は、道行く人々の好奇の視線を全身で受けながらも、

「……ゴホン、まあ、別の演算から同じ結果が導き出されないとも限らないけどな。基本的には変えられると思っていいんじゃないか？」

と言った。

「本当に……出来るのね？」

なんだかんだ言って、ユズはまだ半信半疑のようだった。

「はは、何だよソデコ。自分で言い出したんだろ？」

「え……だって……！　私はさ、そんなに細かい事まで、考えたりしなかったから……」

「ははは、いいんじゃねえの？　その方が、ソデコらしいぜ。……よしっ！　何とか出口を探して、この封鎖から出てやろうぜ……！　あのメールの内、どれか1つでも嘘にしちまえば、俺達の余命を、否定する事が出来るかもしれないんだからな……！」

「うん！　早く行こう！」

「どこに？」

唐突に、淳が言う。

「「え？」」

「いや、だから、さ」

淳は、アツロウとユズの顔を交互に見ながら、

「具体的にどうするべきか、先に決めるべきじゃないか？」

「あ……！　うーん……」

困ったような表情になるアツロウ。

そうなのだ。

実際に運命を変えようにも、何をどうするべきなのか、この時の淳には見当もつかなった。

「あ、じゃ、じゃあ、とりあえず、沿線を片っ端から当たってみようよ！　封鎖とかいっても、どこか1カ所くらい、絶対に抜け道があるはずだよ……！」

「まあ、今出来る事はそれぐらいか……」

淳は、頭をかきながら「ああそれと」と言葉を続ける。

「警察とか自衛隊にも、気をつけといた方がいいな」

「え……どうしてよ？」

「忘れたのか？　俺達は昨日、青山霊園にいたんだぜ？」

「……だな。ジュンの言う通りだ」

アツロウが言う。

「駅前にいた自衛隊は、青山霊園の爆発を調べてるって言ってた。もし取り調べとかされたら、ＣＯＭＰを取り上げられちまうかもし

れない……」

「う……そうだね、分かった。それじゃ、注意して行動しようね」

と、

3人がそこまで話しあったところで、

「あ……ジュン君！」

――という、自分を呼ぶ声がした。

「？」

淳が後ろを振り向くと、そこには1人の少女が、いつの間にか気さくな態度で淳に近付いてきた。

「また会ったね！」

「……？」

少女はそう言うが――しかし残念ながら、淳は、少女の外見に全く見覚えがなかった。

ショートカットの黒い髪。

いかにも俊敏そうな、スレンダーな体型。

明るいグリーンの瞳。

短い丈のスカートの制服。

こういうのを、『ボーイッシュな女の子』とでも言うのだろうか、と淳は思った。

「……」

重ねて言おう。

誰だ。

淳は困った表情で、両隣にいるアツロウとユズに顔を向けるが、どうやら2人にも、少女が一体誰なのか皆目見当もつかないようだった。

「……もしかして、さ」

気まずい沈黙を破るように、少女が口を開く。

「私の事、覚えてない？」

「えーと……」

ヤバイ、と淳は思った。

こちらはともかく、どうやら、彼女は自分（或いは自分達）を知っているようだ。

だが、申し訳ないことに、やはり淳は、少女に関する記憶が全くなかった。

（……まずい）

もしかしたら、本当に自分だけがど忘れしてるだけかもしれない。

淳は、改めて少女の外見を注視する。

（……うーん……）

言っては何だが、取り立てて特徴と言うべき特徴が見当たらない、極々普通の女子高生という感じだった。

つまりは、

少し期間が空くと、あっさり忘れてしまうような……。

「ほら！　私だよ私！」

少女は両の人差し指をかわいらしく頬っぺたにさしながら、ニッコリと淳に笑いかけてくる。

（う……！）

少しずつ、心の中を罪悪感が占領していく。

「まさか、本当に忘れちゃったの！？」

少女はややオーバーリアクション気味にのけ反った。

「今の私があるのは、君のお陰なのに！」

（……！　ヤバイヤバイヤバイ！）

どうやら少女の脳内では、淳はやたら高位の存在らしい。

（それなのに、俺は全く覚えていないなんて……！）

「あの時は、本当にありがとう！」

なんかいきなり感謝された。

あの時って、どの時だ。

そしてついに、淳の罪悪感のリミットが限界に達した。

「ご、ごめんなさい！」

とりあえず謝ってみた。

「えぇっ！？」

再び、見知らぬ少女がのけ反る。

「ほ、本当に覚えてないの！？　ほら、私だよ私！　あの時の私だよ！」

「いや……もう少し、具体的な情報をお願いします」

「えーい！　じゃあ、これならどうだ！」

少女は手提げ鞄から何かを素早く取り出した。

その、突然の行動に対して、淳は思わず身構えてしまう。

勿論、普段なら見知らぬ少女が鞄から何かを取り出そうとしたくらいで身構えたりはしないが、しかしここ最近の、自分達の身に起きた事件の数々や、何より、昨晩のあの『セト』の一件が、淳をいつも以上に敏感にさせていた。

少女が鞄から取り出したのは、橙色の衣服だった。

それを見ると同時に、淳はあれ？　と首を傾げた。

（なんか、どっかで見た事あるような……）

そして、少女はその衣服を目にも止まらぬ速さ――そう、さながら変身のごとき速さで身に纏う。

一瞬後、そこには、翔門会の装束（しょうぞく）を着込んだ少女がいた。

「あ」

そこで淳は、やっと思い出した。

昨晩、淳が青山霊園で命を救った翔門会の信者だった。

1st Day『鮠美海狗』

「私、鮠美海狗（はやみ みく）って言うんだ」

言って、ぺこりとミクは頭を下げた。

「……」

うーん……と、淳は思った。

（女、だったのか）

少し意外だった。

「あ、大丈夫大丈夫。これはあらかじめ決まってた設定だから」

「は？」

いきなり意味不明な事を言い出すミク。

（つーか、『これは』って……）

という事は、他にはあるのかよ、と心の中で突っ込む淳。

（ま、敢えてスルーしとくけどさ）

しかし、よくよく思い出してみると、声や身長の高さは、確かに一致している。

（それに装束姿だと、男と女の区別も、つきにくい上に、顔も隠れてるしな）

とりあえず、真夏の日差しが降り注ぐ中での立ち話は厳しいものがあるので、４人は近くの公園に移動し、日陰の当たるベンチで落ち着く事にした。

「それで……わざわざ昨日の礼を言いにきたって訳？」

ユズの問いに、ミクは「うんっ！」と元気よく頷く。

「アマネ様が、『やはりちゃんとお礼をするべきです』って言ってたから！」

「別に、そんな大した事はしてないよ」

「うん、そうだねっ！」

「……」

肯定すんじゃねえよ、と淳は思った。

（まあ、別にいいけどさ……。にしてもこの子、随分明るいというか、破天荒な性格だなぁ…）

淳が見た限り、昨晩、霊園で会った時とは明らかにキャラが違う。

翔門会の装束には、人の性格を捩曲げる特性でもあるのだろうか？

「でもでもっ、助けられた以上、何のお礼もしない訳にはいかないねっ！　何か、私に出来る事はないかな？」

相変わらず、世の中を光で埋め尽くさんばかりのテンションで、ミクが言う。

「何か、って……」

そんな風に急に言われても、淳としては困惑するより他にない。

「ん……？」

いや、待てよ……と、顎に手を当てる淳。

これは、もしかして……。

「ジュン、これはチャンスだ」

隣にいたアツロウが、ボソッと淳に耳打ちする。

「分かってる」

淳にしても、このチャンスを逃す手はない、と思っていた。

今の自分達に必要なもの――それは『情報』だ。

突然、従兄に呼び出され、非現実的な事件に巻き込まれた、というこの状況。

分かっている事といえば、今、自分達は死と隣り合わせの現状を

強いられている、という事だ。

恐らくは、淳達が知らないところで、淳達には途方もつかない、大きな思惑がうごめいているのかもしれないが――いや、実際にそうなのだろうが――正直に言って、そんな事は自分達にとってはどうでもいい。

ユズの言う通り、今、最も優先すべき事は、自分達が無事に生き残る事だ。

その為には、やはり先ずは情報が必要だ。

今、目の前にいるミクに何を質問するべきか、淳は考える。

だが、次の瞬間には、何を聞くべきなのか、大体決めていた。

「じゃあ、ミクちゃん」

「いやぁん！」

突然、両手を頬に沿えて、ポッと朱くなるミク。

「会って、いきなり名前で呼ばれるなんて、恥ずかしい！」

「……いや、君も俺の事、名前で呼んでたよね……？」

折角のシリアスな空気を、壊さないでほしかった。

「はっ！？」

ミクの両目が、驚愕で見開かれる。

「ま、まさか私達、相思相愛!?」

そして、再び朱くなる。

（……まずい、こいつ馬鹿だ）

何と言うか、淳が思うに――アマネといい、翔門会の連中は、頭のどこかのネジが抜けてるような気がしてならない。

最悪なのは、本人達が（恐らく）それを自覚していない、という事だった。

アツロウとユズも、明らかに引いていた。

「こ、こういう場合どうしたら……？　命の恩人に巡りあった女がとる行動は？　待て次回！」

「この野郎、意味ありげな事言って次話に持ち込む気か？」

させてたまるか。

「と、とりあえず！　子供は何人、欲しい！？」

「落ち着け落ち着け、先ずは落ち着きたまえよ、ミクちゃん。じゃないと質問が出来ない」

「し、失礼しましたぁ！」

ビシイッ！　とミクちゃんが敬礼する。

聞き分けがいい子だった。

「ズバリ、ミクちゃん」

緊張のせいで、淳は思わずゴクリ、と唾を飲み込んだ。

「翔門会の事を、教えて欲しい」

「うん？」

一瞬、ミクは不思議そうな顔をしたが、次にはパアッと明るくなり

「そっか……。ジュン君、翔門会に入りたいんでしょっ！？」

「ええっ？」

そう来たか、と不意を突かれた表情になる淳。

いや、そう来るのが普通か？

「いいよいいよ！　大歓迎大感激！　アマネ様風に言わせて貰えば、これは『運命』って奴だよ！」

「……」

ああ、コイツもか、と心底うんざりする淳。

またもや、『運命』などという、誇大妄想甚だしい、束縛的概念

が多分に含まれた、オトメチックワードを、極普通に使用する人間と出会ってしまった。

アマネといい、あの気にくわない甚平姿のセトといい。

ミクのこれはどうやら、アマネの影響なのかもしれないが、にしても、まさか全員の信者がこんな感じじゃ、ないだろうな？　と、淳は急に心配になった。

翔門会。

やはり、この連中は苦手だ。

『神』を信じてる時点で、既に。

「アマネ様も、きっと歓迎してくれるって！　あの人、君の事スッゴく気に入ってたみたいだし！」

ミクは淳の腕をガシッと掴むと、そのまま、何処かへと引きずっていこうとする。

「ちょっ……！　待って待って！　ストップ！　ダルマさんが転んだ！」

淳は突然の事に驚きながらも、足を踏ん張ってなんとかミクの強制連行に抵抗する。

だが、それでもミクは淳の腕を引っ張るのをやめない。

「よいではないか！　よいではないか！」

「よくねえよっ！」

なんでお大官キャラ？　と辟易（へきえき）する淳。

「ちょっとアンタ、やめなさいよ！　ジュンが嫌がってるじゃないの！」

それを見ていたユズが、眉間に皺を寄せて、ミクに詰め寄る。

「何よっ！　貴女には関係ないでしょっ！」

「大アリよっ！　なに、人の友達を誘拐しようとしてる訳！？」

「誘拐じゃなーいっ！　私はただ、アマネ様の言われた通りにしてるだけ！」

「えっ？」

その言葉を聞いた淳が、足により一層の力を入れてグッと踏ん張る。

「あっ……」

ミクは『しまった！』という顔をして、思わず淳の腕から手を離していた。

「……どういう事だ、それ？　アマネがジュンを翔門会に入れたがってる……？」

「ち、違うもん！」

明らかに核心をついたアツロウの問いに、ミクは完全にキョドっていた。

淳はミクのつまらない言い訳を聞くと

「そうか。じゃあ入らなくてもいいよな」

「そ、それは駄目っ！」

「どうして？」

「アマネ様の命令だからだよ！　『有里淳を、なんとしてでも翔門会に引き入れなさい』って！」

「……」

「……」

「……」

上手くいったのは何よりだが、いくらなんでも、アッサリ引っ掛かり過ぎだろ……、と思う淳。

咄嗟（とっさ）の策が上手くいった事で、普通なら喜ぶべきところだろうが、淳達は思わず沈黙してしまう。

（おいおい……。この女、チョロいぞ……）

「――はっ！？」

再び、やっちまった！　という表情になるミク。

しかし、流石に2回目ともなると誤魔化せないと悟ったのか、彼女は、フッと不敵に笑うと、

「フフフ……。この私を嵌めるとは、貴方達――やるじゃないやるじゃない！」

「……」

褒められてしまった。

「なあ、アツロウ……」

今度は、淳がアツロウにボソッと耳打ちする。

「俺、メッチャ逃げたい……」

「……気持ちは分かるが、ジュン。今のこの子の発言で、少なくとも、どうして連中が、お前を翔門会に引き入れたがってるか、それだけでも聞いておかないとな」

「グッ……！」

そうだけどさ。

そうだけどさぁ。

従兄のナオヤに始まり、

頭にどデカイ髪飾りをつけたアマネ。

謎に満ちた甚平姿の男、セト。

（……何なんだ？　今週は『日本変態週間』なのか？　自分が知らないだけか？）

アツロウの言い分は分からないでもないが――むしろ、非常に理解出来るものなのだが。

（……これ以上、変態と接点を持ちたくないんだよ！　我慢ダメ、絶対！）

結局のところ、淳の本音はそれだった。

「ちょっとちょっと！　私を無視しないでよ。格好悪いじゃんっ！」

ミクがぷくうっと頬を膨らます。

怒られてしまった。

「ねえねえ、ミクちゃん。改めて聞くけど、どうしてジュンを翔門会に入れたい訳？」

今まで沈黙を保っていたユズが、男2人を置いてミクに話しかける。

「フフフ……それはねそれはね！」

ミクが意味ありげな間を作った後、

「アマネ様に言われたからだよっ！」

「それはもう聞いたよ」

威張ってんじゃねえよ、と、些かイラついた様子を見せる淳。

「もうちょっと詳しく聞きたいって言ってんだけど」

「クッ……」

ミクは顔に「畜生っ！」という文字を張り付けると、

「お、覚えてなさい覚えてなさーい！」

と、丸っきり雑魚キャラ感丸出しの台詞を吐きながら、踵（きびす）を返して脱兎のごとき逃走を開始した。

「逃がすか――『ジオ』！」

幸い、辺りに人気は少ない。

淳は昨日やった通りに、右手から電撃を放つ。

「グエッ！？」

その電撃が、ものの見事にミクの背中にヒットする。

そして――さながら車に轢かれた蛙のように、ミクの体が道路に俯せになった。

「手加減したから、どうせ気は失ってないだろ。おい、起きろよ」

淳達はミクの元まで近づくと、その顔を覗き込む。

白目を剥いていた。

「……」

「……」

「……」

再び、3人の間を沈黙が支配する。

「ジュン……」

隣から発せられるユズの困ったような声を黙殺し、淳はミクの頬をペチペチと叩いた。

「……」

返事がない。ただの屍のようだ。

状況を説明しよう。

逃げ行く少女に、電撃を喰らわせて気絶させた男がいた。

有里淳。１７歳。

「……」

「……」

「……」

再び沈黙。

「さて、帰るか……」

そう言って、淳はミクの遺体（？）から目を背けて、炎天下の日差しが降り注ぐ、道路へと足を踏み出す。

「お、おいジュン……」

「いいから、２人とも行くぞ」

「でも……」

「えーい！　うるさいうるさい！　俺達には自分達の余命を伸ばすという、最優先事項があるだろうが！！」

少し先に目を向けると、自衛隊が変わらずせっせとバリケードを築いていた。

そういえば、生の自衛隊を見るのは、淳は初めてだった。

（……いいねえ、自衛隊。日本の平和を守る為、頑張れ自衛隊！

カッコイイぞ自衛隊！）

「うらァァあああああああ

しかし、

「こうなったら、何がなんでも、私達が、どうしてアンタを翔門会に入れたがってるかを、話してやるーーっ！」

「へぇ？」

淳にとって、これは思わぬ収穫だった。

棚から牡丹餅。

コイツが馬鹿で良かった……と、失礼すぎる感謝の言葉を淳が心の中で呟いている内に、ミクが口を開き始める。

「アンタを仲間に引き入れたい理由……それは！」

ビシッ！　と淳に向かって指を突き付けるミク。

一体、どんな衝撃の事実が飛び出してくるのかと、淳達は思わず身構えた。

「……」

「……」

「……」

「……？」

いつまでたっても頭に疑問符を出し続けるミクに対し、頭から疑問符をポンポンと出し始める淳。

「そういえば……」

力なく、指を下げるミク。

「アマネ様に理由、聞いてなかったよぅ……」

「アンタ、マジで何しに来たんだよ」

役立たずじゃねぇか、と淳は遠慮なく言い放った。

「それじゃ、俺達はこれで……」

直後に、再び、淳はアツロウとユズの腕を掴んでミクから離れようとする。

「わー待って待って！　お願いだよジュン君！　お願いだから翔門会に入って！」

「なんでそこまで必死なんだよ……」

淳は、半ば呆れながら足を止めて、ミクに顔を向ける。

「……ＣＯＭＰ」

「は？」

「私もＣＯＭＰ欲しいの！」

途端に、「ハアッ？」という表情をする淳。

「……何言ってんだ？　アンタも翔門会の人間だったら、ＣＯＭＰの1台くらいは持ってるんじゃないか？」

淳は、翔門会に対して、次のような漠然としたイメージを抱いていた。

アイツらは、悪魔と戦う集団なのではないか？　と。

アツロウに聞いた話だと、昨晩、翔門会の信者であるアマネは、自分達のそれと同じ、改造ＣＯＭＰを用いて、悪魔達を撃退したという。

ならば、必然的に、他の信者もＣＯＭＰを常備しているものだと思っていたのだが……？

「……違うの」

ブスッとした様子で、ミクが口を開く。

「……ＣＯＭＰを持ってるのは、一部の幹部だけ。全国にいる信者の総数は相当な数。とても全員にＣＯＭＰを配る事は出来ない」

「……つまり」

ああなるほど、といった感じで淳が頷く。

「君はまだ下っ端だから、ＣＯＭＰを貰えない訳だ」

「はっきり言うなーー！」

ミクが怒った。

（うーん……）

淳は思う。

なんか、こうしてみると、ただの女子高生って感じだな……と。

感情の起伏が豊かというか。

「だから、貴方を仲間に引き入れれば、ＣＯＭＰをくれるってアマネ様に言われたの！　そういう訳だから、黙って仲間になりなさい！」

「普通に断る」

いい加減、しつこ過ぎるミクを、淳はバッサリ切り捨てた。

「う……」

ミクは一瞬、顔を歪めると

「うわあああああああんっ！」

泣いた。

盛大に、泣き始めた。

「ちょっ……！　ええっ……！？」

女子を泣かせてしまった！　と尋常じゃなく慌て始める淳。

いつの間にか、公園の外から、何人かの通行人が何事かという目で、こちらを見ていた。

気づかぬ間に、淳は（社会的な意味で）窮地に立たされていた。

「わー待て待て！　分かった！　分かったから！」

淳は大慌てで、ミクを泣きやまらせようとする。

しかし、自分が取り返しのつかない言葉を吐いている事には、気づかなかった。

「え……？　分かったって事は、翔門会に入ってくれるの！？」

「え……？」

しまった、という顔をする淳。

「あ、いや、そういう訳じゃ……」

「ううう……」

淳が前言撤回しようとした途端、再びミクの目が潤み始めた！

「だーー！　ちょっ、待っ……おい、アツロウ！　助けてくれ！」

「いやいや、俺に振るなよ！」

明らかな無茶振りに対し、途端に冷や汗を流し始めるアツロウ。

と、その時、淳の脳裏に１つの策が思い浮かんだ。

「わ、分かった！　俺、翔門会に入るよっ！」

「え？」

「え？」

「え？」

淳の言葉に、アツロウ、ユズ、ミクの３人の疑問の声がピッタリと重なった。

「ほ、本当に！？」

「ああ、勿論だともさ！　いやー実は前々から、翔門会に入りたいって思ってたんだよ、うん！」

言うまでもなく、大嘘だった。

勿論、本音では翔門会など、淳にとってはどうでもいい。

（けど、この場を切り抜けるにはこう言うしか……！　どの道、ここで自分がどんな約束をしようが、これから金輪際、コイツに近付かないようにすればいいだけだ！）

「でも、俺達、今はちょっと用事があるから、それが終わったらそっちに行って正式な手続きをするよ！　だから、それまでは待っててくれ！」

「うん、分かった！　やったーー！　これで私もＣＯＭＰが貰えるーー！」

ミクは手放しで喜んでいた。

チクリ、と淳の心を微かに罪悪感がかすめたが、それは今は無視することにした。

「じゃあじゃあ！　今日の午後辺りに、芝公園で私達の演説があるから、それまでに用事を終わらせて来てよ！」

「お、おお！　了解！」

最早ヤケクソだった。

「それじゃ、またね！」

「ああ、またね……って待て待て待て！」

言うだけ言ってトンズラかまそうとするミクの腕を、淳はガッシリと掴む。

「待てって……。まだ話は終わってない。どうして俺を翔門会に入れたがってるのか、説明しろよ」

「え～～？」

困ったような顔をしたミクを見て淳は、いや、何でお前が困ってんだよ！　困ってんのはこっちだよ！　と思わずにはいられなかった。

「だから……それについては、アマネ様に聞いてないんだって」

「それじゃあ話にならない」

淳の横から、アツロウがビシッと言った。

「そこまで必死にジュンを、アマネが仲間にしたがってるのは、それなりの理由があるんだろ？　いくら何でも、事情が分からないまま仲間になる訳ないだろ」

「でも……」

「だったら、君がアマネにその理由を聞いてきてくれ」

淳はゆっくりと、ミクの腕から手を離した。

「勿論、俺達にしてもアマネを探すけどさ……。こういった場合は、普通、そっちから事情を話すのが筋だろ？　それを聞いた上で、判断するのはこっちの権利だ」

「うっ……」

ミクは、今度は泣いたりせず、返答に困った顔をした。

淳の言い分がもっともである事を、悟ったのだろう。どうやら最低限の常識は備えているようだ。

と、

僅かに、こちらに流れが傾きかけたところで、なんと、驚くべき事に、

淳のケータイが鳴った。

「ッ！？」

淳、アツロウ、ユズの3人が驚愕する。

先日から、自分達があれ程試行錯誤しても、全く動く気配がなかったケータイが急に鳴り出したとあれば当然だ。

淳は隣にいるアツロウ、ユズに目を合わせる。

2人とも、戸惑いと嬉しさがごちゃまぜになった顔をしていた。

もしもケータイが復旧したとなれば、ようやく外部――少なくとも、家族と連絡をとりあう事が出来る。

だが、その一方で、このケータイにそう簡単にでてもいいのか…？　と淳は思っていた。

昨日あれだけ非常識な経験を乗り越えてきただけに、3人は思わず躊躇(ためら)ってしまう。

淳はケータイを開き、ディスプレイを確認する。

表示されていたのは、知らない番号だった。

「……」

「……」

「……」

淳達の胸中に、より一層の疑惑が広がる。

しばらく待っても、ケータイのコールが止む事はなかった。

「……」

やがて、戸惑った末に淳はケータイに出た。

因みに、ミクはというと、突然の出来事に順応できずに、ただポカンとしていた。

「……もしもし」

警戒を緩めずに、淳は口火をきる。

そして、

『よう、俺だ』

その相手の声に、淳は更に困惑した。

（おい……、何でコイツが、俺のケータイに電話をかけてくるんだ？）

『……おい、何とか言えよ。昨日会ったばかりじゃねえか。……ったく』

間違いない。

昨晩、淳が出会った甚平姿の男――セトの声だった。

『やれやれだぜ』

１ｓｔ　Ｄａｙ『鮫美海狗』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・ミク（鮫美海狗（はやみみく））

年齢：１７歳

誕生日：７月２９日（獅子座）

血液型：Ｂ型

身長：１５８ｃｍ

体重：ヒ・ミ・ツ☆

家族：父、母、姉、弟

職業：都立高校の２年生

好きな食べ物：モンブランケーキ

嫌いな食べ物：スナック菓子

趣味：ショッピング

1st Day『アドバイス』

電話の相手が誰なのか、淳は瞬時に悟ると、慌てて辺りを見渡した。

『あー無駄無駄。そこからじゃ俺は見つけられねえって』

ケータイの向こう側から、セトが言う。

「……どうして、俺の番号を…？」

特に理由もなく声を潜めながら、淳がそう言うと、セトは、

『超能力…』

と言った。

「……」

『…なんてな。冗談だって、ホントは昨日、お前が気絶した後に、こっそりケータイを覗いたんだよ』

「アンタ最低だな！」

思わず怒鳴ってしまう淳。

「ねえ、ジュン、誰なの？」

怪訝な表情でそのように尋ねてきたのは、ユズだ。

「え…あ…えっと…」

見れば、ユズ、アツロウ、ミクの3人が、電話をしている淳を、ジッと見つめていた。

今日が初対面であるミクは勿論のこと、アツロウやユズには、昨晩、淳が出会った、『セト』という謎めいた男について、彼はまだ話していないのだ。

『おい、ジュン。適当に相槌(あいづち)をうちながら聞け』

セトが言う。

『お前、今、その娘――ミク、って名前だったっけか?――に、翔門会に入るようにって、勧誘を受けてただろ?』

「――あ、ああ、うん」

言われた通り、適当な相槌をうって周りをごまかしながら、淳は次の言葉に集中する。

(――て、いや、ちょっと待て)

この電話が、先程のミクの勧誘から何時間も経った後ならともかく。

それほどの時間が経っていないにも関わらず、現時点で、セトがその内容を知っているという事は…。

淳は、首は動かさずに、視線だけで、辺りを見渡してみた――が、

しかし、それでもやはり、セトの姿は見えなかった。

『お前、翔門会に入れ』

と。

突然、ケータイの向こう側から聞こえてきた台詞を聞いて――。

ピタリ、と。

淳の思考が、一時的に停止した。

――いや、落ち着け。

動揺を――見せるな。

アツロウやユズに、いらぬ心配をかける訳にいかない――と、淳は思った。

何とか、周りからはごく普通の会話に見えるように演じなければ。

「ああ…それで？」

何とか気を取り直しながら、淳が言う。するとセトは、

『今、お前の頭の中では、かなり色んな考えが巡ってると思うが――悪い事は言わない。今は、その娘の誘いに乗っとけ。翔門会に入会する事で、お前らの安全は強化される筈だ』

と言った。

それは。

それは――――何となく、分かるが。

淳は思う。

翔門会が、悪魔と戦える集団であるという事は、現時点では疑いようがない。その力を盾にすれば、確かに、自分達の余命を伸ばせる可能性も、グッと上がるだろう。

しかし、それでも――――と、やはり些か、淳は躊躇ってしまう。

戸惑って――――しまう。

自分達はまだ、翔門会の事をよく知らない。

（得体の知れない宗教に入る――――というのはどうも、なんというか…、懸命な判断とは言えないよな）

淳がそのような事を考えていると、セトは、次のように言った。

『いいか――――あまり長話だと、そこにいる奴らが不審に思うだろうから、そろそろ、この電話は切断させて貰う。そしたらすぐに、その娘に誘いに乗って翔門会に入るんだ。……ＯＫ？』

「……ああ、分かった」

『ＯＫ、いい返事だ。――――ああ、それと、その娘との話が一段落したら、そこにいる２人のお友達に、俺の事を話してやれよ。どう

せもう隠せないだろうが。――――じゃあな』

そして――――。

電話が、切れた。

会話が、終わった。

淳は、なるべく動揺を表に出さないようにケータイを閉じると、何か質問をしたくて仕方ないという様子の、アツロウとユズを無視して、ポカンとしているミクに向き直った。

「ああ、スマン。特に、なんでもない電話だった――――ところで、ミクちゃん」

「んにゃ？」

「さっきも言ったけど――――俺、翔門会に入る事にしたよ」

先程まで蚊帳の外で、きょとんとしていたミクは、そんな淳の言葉を聞いて、再び、パッと笑顔を取り戻した。

「うん！うん！良かった良かった！それじゃ、私はこの事をアマネ様に伝えてくるね！よーし、これで私もＣＯＭＰを使えるぞーっ！」

「ああ…良かったね」

さあ、早く行きたまえよ。

「午後の演説には、必ず来てね！」

「ああ…分かったよ」

いいから早く行けって。

こっちは忙しいんだからさぁ。

若干、イライラしてきた淳。

やがて、ミクは淳が望んだ通りに、先程よりも遥かに、軽い足どりで淳達の前から立ち去っていった。

しばらくは、そんな彼女の後ろ姿を見詰めていた淳だったが、やがて、横の方から、

「……ジュン、ジュンってば！」

と、そう言いながら、ユズが痺れを切らしたように、彼の肩を揺すってきたので、淳はそちらの方に意識を向けざるを得なかった。

「お、おお？何だ！？」

「一体いつまで、私達を置き去りにする気！？さっきの電話の相手、誰？あと、どうして、翔門会に入るなんて言い出したの！？」

「まあ、まあ…そんな一遍に質問するなよ…。悪かったって」

どうどう、とユズを制しながら、淳が言う。

（…さて、どこから説明するべきかな…。いや、どこからも何も、

まずは、あのオッサンについて話さなきゃならないだろうな。そうしなきゃ、話が先に進まない）

「2人とも、聞いてくれ」

そう言うと、淳は、目の前にいるアツロウとユズに対して、昨晩、自分が見張りをしている時に、甚平姿の奇妙な男――『セト』に出会った事。その際に彼と自分が交わした会話、及び行動。そして先程の電話の相手が、まさにそのセトであり、自分が翔門会に入る事は、自分達の寿命を伸ばす事に繋がる――彼が自分にアドバイスをしてきた事などを話した。

「――なんていうか」

一通り、淳の話を聞いた後――それまでは黙っていたアツロウが、ゆっくりと口を開いた（因みに、ユズは事あるごとに派手な反応を示してきた為、淳は、最後まで説明するのにかなり苦労しなければならなかった）。

そんな彼の、淳を見る目には――微かに、非難の色が込められていた。

「ジュン――お前らしくないじゃないか。その人――確か、『セト』だっけ？――の言う事は、確かに興味深いけど…。でも、よくよく聞けば、どれもこれも、思わせぶりな事を言ってるだけで、信用にたる事は1つも言ってないじゃないか。お前、どうしてそんな奴の言う事を、ホイホイ鵜呑みにしたんだ？」

「うっ…」

「そうだよ！こんな状況だし、危ない人だったらどうするの！？」

「ううっ…！」

アツロウとユズからダブルで正論をぶつけられた淳は、ぐうの音も出せないまま、それらの非難を甘んじて受け入れるしかなかった。

だが――確かに、２人の言う通りだ、と、淳は思った。これだけ緊迫した状況の中、得体の知れない情報を鵜呑みにすること程、愚かしい事はない、と。

淳にしても、当然、それは分かってる。分かってはいるのだが…。

「なんつーか…。その、セトってオッサンは、こう…不思議な人なんだよ。カリスマ性があるっていうか…。とにかく、俺が抱いた感触では、少なくとも彼は敵じゃない…と、思う」

淳が言う。

そうとも。

もしも、本当に彼が敵であるなら――あの時、自分が眠ってしまった後に、簡単にトドメを刺す事ができた筈だ。

だが、彼はそうしなかった。勿論、それだけで、あの男を全面的に信用するのは、愚の骨頂でしかないが――しかし、情報が不足している、今のような状況だからこそ、どれだけ小さな情報であろうと、有効に活用しなくてはならない、とも、淳は思っていた。

何せ――下手をすれば、自分達は今日にでも死んでしまうのだ。

言うなれば、『藁にも縋る思い』というヤツである。

「それに――冷静に考えれば、この人が言う案も、中々悪くないだろ？俺達を取り囲んでいる事件が、世間一般の範疇に収まるものならともかく、相手は悪魔だぜ？つまり、警察はアテにならない――とくれば、今、この東京内で俺達の話を信じてくれる集団は、アマネがいる翔門会だけだ。こういう時こそ、長い物には巻かれないと」

淳が言う。

「う～ん…正論だけどさ、アイツらって信用できるのか？」

まだセトの事を不審に思っているであろう様子を消さないまま、アツロウが言う。

「俺――大分前から実は、翔門会については、少し知ってたんだ（ネットでも有名だし）。…で、アイツら、そこでも熱心に、誰かれ構わず、勧誘のメールを送ったりしてんるんだけど…。その内容、『神の試練』だとか、『救世主』だとか、意味不明な事ばっかりだぜ？それを踏まえて考えるとやっぱり、ちょっと、怪し過ぎるんだよなあ…」

「それは分かる」

コクン、と頷きながら、淳が言う。続けて彼は、

「だけどさ、何も、連中の教えにドップリと浸かる必要はないんだ。こっちは、余命を伸ばすか、この封鎖から抜け出せさえすればいいんだから。そうすれば、あんなとこ、いつでもやめてやるさ」

と言った。

それに――――他に有効な手だてがない、というのも事実だ。

「…そういえばさ、翔門会って、この封鎖が起こる事を知ってたのかな？」

突然、そのような言葉を発したのは、今まで黙って淳とアツロウの話を聞いていたユズだった。

「ん？」

意外な方向からの質問だな、と、ジュンは思った。

「さっき、ミクちゃんを見てて思ったんだけど…。あの娘、『この様子』を見て、全然慌ててなかったでしょ？普通、山手線内の沿線が封鎖されてたりしたら、他の人達や私達みたいに、少なからず動揺する筈だよね？でも、ミクちゃん、最後まで結局、封鎖については触れなかった…」

「ああ…」

なるほど、言われてみれば…と、淳は思った。

「いや、でもさ、翔門会の奴らって、どこか、その…オカシイところがあるだろ？何かアイツらって、仮に今、急に世界が滅びても、『これも神のご意思です』とか、普通に言いそうじゃん」

アツロウが言う。

淳はアツロウとユズの言葉、両方について考えを巡らせていた――どちらの言い分も、それなりに信憑性があるように思える。

「…まあ、翔門会がこの封鎖を予測していたかどうかはともかく――悪魔についての知識は、間違いなく俺達より豊富な筈だ。この際だし、あくまで情報収集だと割り切って、関わりを持つのもいいんじゃないか？」

言いながら――それに、と淳は思った。セトが、自分達を悪いようにする訳がない――と。

根拠もなく。

そう、確信していた。

もっとも、そんな事を言ったら、アツロウ辺りがまた、初対面の男の言葉をホイホイ信じるなよ、とでも言ってきそうだし、実際、その通りだと、淳も思うが。

しかし――どうだ、あの男の存在感は。

先程、ケータイで話していた際にも、通話口越しにヒシヒシと感じた、あの、理不尽なまでの圧力。

先程の、ケータイでの会話もそうだが――何故か淳には、あの男が発する台詞は、一見どうでもいい事でさえ、何か、重大な伏線が隠されているように思えてならなかった。

すると突然、横の方からアツロウが、

「それにしても、そのセトって人は、一体、何者なんだろうな…。まあ、今のところは、信用するしかないけどさ」

と言う。

その時、淳の脳裏に、『ある単語』がフッと蘇ってきた。

同時に――――他にも、調べるべき事柄が思い浮かんできた。

「なあ、アツロウ」

「ん？」

「お前、『セベク・スキャンダル』って、知ってるか？」

「……？ああ、一応、知ってるけど（有名だし）…。どうして今、そんな事を聞くんだ？」

怪訝な表情をしながら、アツロウが言う。

「セトが言ってたんだ。その事件でも、今回みたいに、悪魔を喚び出す装置が使われた、って」

「悪魔を喚び出す装置…それって、今回のＣＯＭＰみたいにか？つーかやっぱり、悪魔絡みの事件って、前から起きてたんだな…」

「ああ、確か『デヴァ・システム』って言ったかな…。その事件、表向きにも相当、大きな事件なんだろ？」

「あ、それ、私も知ってるよ。けど、確か、大分昔の事件じゃなかったっけ？」

ユズも知ってるのか、と淳は少し意外だった。

まあ、俺って普段からテレビとかあんま見ないしな…。母親とチャンネルの取り合いさえ、した事がない。

「ああ、ユズの言う通りだ。俺達もまだ生まれてない頃の話だよ」

「アツロウでさえ知らないのか？」

「う～ん…」

アツロウは顔をしかめて、頭のニット帽の位置を直す。

「なんつーか、その事件、規模だけなら地下鉄サリンやポートアイランド・インパクトにも劣らないんだけど…何せ、当時の現場だった町一つ――確か、御影町とか言ったっけ――を丸ごと、巻き込んだって話だしな。」

「そういうところも、今回の事件と似てるな」

「ああ。だけど、規模とは反対に、詳しい詳細は世間には知られなかったんだ。大勢の死人が出たのに、だぜ？」

『死人』というキーワードで、ユズが敏感に反応する。

「死…！やっぱり、その時も悪魔が殺したのかな…？」

「そのセトって奴が言った事が本当なら、まず間違いないと思う。だけどジュン、ゴメン。俺が知ってるのはこれぐらいだ。さっきも言ったように、殆ど世間には公表されなかったしな」

「いや、いいよ。気にするな」

ある程度、予想していた事だ。

ふぅん…しかし、なるほど、どうやらそのセベク・スキャンダルは、やはり今回の事件と、何らかの繋がりがあるのかもしれない、と淳は思った。偶然だけで済ませるには共通点が多すぎる。

まあ、分からない事をいくら考えても仕方ない。とりあえずは、頭にとめておくだけにしようと思った時――

『♪♪♪♪』

再び、淳のケータイが着信音を鳴らしたので、三人は飛び上がらん程に驚いた。

今度は、相手が誰なのか予め予想がついていたので、淳は戸惑う事なく、すぐにケータイに出た。

『よう、俺だよ俺』

「…開口一番にその台詞を述べない方がいいですよ。間違いなく詐欺だと思われますから」

『俺に言わせれば、知人と他人の声の区別さえつかない奴なんて、人間が終わってるとしか思えないけどな。因みに俺の場合、通話口越しの息遣いだけで区別する事が可能だ』

「はいはい、そうですか」

コイツさては変態か？と思いながら、淳は一旦、ケータイから顔を離し、アツロウとユズに「さっき話したセトって奴からだ」と教えると、すぐに耳を当てる。内容が気になったのか、アツロウとユズも顔を近付けてきた。

セトは、淳がそういう行動をとっていた事を見越していたのか、淳が耳を当てた途端、「ククッ」とおかしそうに笑う。

「どうやら、俺が指示した通りに、翔門会に入会――いや、まだ細かい手続きあるんだっけか？まあ、いいさ。とにかく、俺が言った通りに出来たみたいだな。重畳重畳」

そこまで言って、セトは再び「ククッ」を笑う。

そんなセトの態度に、淳は少なからずイラッときてしまう。信用できる男だが、こうも『俺は全部知ってるんだぜ♪何なら教えてやろうか？』と、言いたげな態度をとられてしまうと、少しはこちらの苦労も察してくれ、という気になってしまう。

「あの…もったいぶってないで、とっとと姿を現したらどうですか？どうせどこからかこっちの様子を伺ってるんでしょ？」

「おいおい、そうカリカリすんなよ。――ったく、やれやれだぜ。俺は２４時間、３６５日間ずっと演出ってもんを意識してる男でな。いわば、出会う人間全てを自分の物語の登場人物に割り当ててるんだ。さしずめ、今の俺は《謎多き重要人物》ってところか』

「中二病ですか」

『３０過ぎたジジイである俺に対して、その単語はむしろ褒め言葉だな。男ってのはいくつになっても少年のような夢を持ってるもんだ。そう、だから俺が少女漫画の『魔女探偵ラブリーン』の愛読者だからって、問題ないだろ？』

淳は即座に電話を切った。

『♪♪♪♪♪！！』

再び電話に出る。

『おいおいおいおいおいっ！唐突に切るなよっ！傷ついちゃうだろうがっ！』

「あ、いや、スイマセン…。精神にかかるストレスが許容範囲を遥かに超越したものですから…」

『ったく、やれやれだぜ。まあいいや、ケータイの電源はいれとけよ。時々、こうしてアドバイスしてやる。アーサーみたいにな』

「アーサー？」

『あ？何だお前、《真・女神転生》の最新作をプレイしてねえのか？もったいねえなぁ…。最近の若者は暇さえあればゲームしてんだろ？あー、じゃあ、スティール・ボール・ランのポコロコのスタンドならどうだ？』

「いや、あの…スイマセン、知りません」

『そっか…俺は若者と分かりあう為に、少年、少女漫画を読み漁ってるんだけど…やれやれだぜ。俺もまだ努力不足だな』

「随分、無駄な努力ですね…」

若者をナメんじゃねぇ。

そして話を逸らすんじゃねぇ。

因みに、淳のすぐ近くでセトの変人ぶりを初めて目の当たり（電話だけど）にしたアツロウとユズは、若干、引き気味だった。

『まあ、お前みたいな若者にとって、年寄りの説教ほど苦痛なものはないだろう。だから――二つ。最後に二つだけ、言っておく』

後半辺りからは至極真面目な口調になった為、淳は無意識に緊張し

てしまった。

全く、昨日と同じで、温度差の激しい男だった。

『今から言う言葉は、お前だけじゃない――今、お隣にいる二人の友人もよく聞いとけ』

突然、自分達の存在感を指摘されたアツロウとユズも、セトの言葉に耳を傾ける。

『まず、一つに重要なのは、《迷わない》ことだ』

「迷わない、こと…」

『お前達には今、情報という情報が圧倒的に不足してる。周りには一寸先も見えない程に濃い《霧》で覆われている筈だ。俺自身、経験があるから分かる。全ての有象無象がうやむやで、信じた事柄――この場合、お前らの言うところの《日常》が脆く、たやすく崩れさる。これほどの恐怖はない、これほどのもどかしさはない。だけど、そういう時こそ恐れるな、迷うな。

《信じるんだ》

自分で一度決めた事は決して曲げず、最後まで貫き通せ』

「信じる…」

その言葉は…。

大きい、とてつもなく大きい響きで、淳はおろか、隣のアツロウやユズの胸の内に響き渡った。

迷いを、打ち消すように。

霧を、打ち払うように。

『例えば、両親を殺されて、その犯人を怨むなんていう、《どこにでもありふれた》過去を背負って生きている人間がいたとする。大半の人間はこれだけ聞けば同情するかもしれないが、俺に言わせれば《くそくらえ》もいいところだ。そんな、他人に促された設定に従って生きること自体、もはや負けに等しい。だから《淳》』

ここでようやく、セトは淳の名前を呼んだ。

『自分で決めた事に迷いや後悔を挟むな。一度決めた事は貫き通せ。

《何がなんでも》

いいか、もしお前がこの事件の最中、何かに迷ったり後悔したりすれば、お前の末路は、間違いなく不本意な形で終わってしまうだろう。これがアドバイスその一だ』

断定的な、断絶的な喋り方だった。しかしその言わんとする事はよ

く分かった。

淳は次のアドバイスも聞き逃すまい、と神経を集中させる。

『二つ目、今回最後のアドバイスだが――これはさっきよりも遥かに重要だ。もし、最初のアドバイスを無下にしても、この言い付けさえ守れば、お前の道は正される筈だ』

「あの…回りくどい言い方をせずに、ちゃっちゃと言ってくれませんか？」

何だかんだ言って、結局長話になってるじゃねぇか。

『《絆》を作れ』

「…？それは、友達を作れって事ですか？」

『まあ、そんな所だ。人間は弱い。一人なら尚更な、お前も勿論例外じゃない。だから、頼れ。心から信頼できる友人を作るんだ』

その言葉を聞いて、淳はいつぞやの一場面を思い出す。

――だから主、俺達ヲ、信頼しロ。

――おみゃあらが俺らを信頼するなら、俺らもおみゃあらを信頼するからよ。

それは昨晩、自分に言った、仲魔達の言葉だった。

信頼、か…。

『色んな奴に出会って、《コミュニティ》を築くといい』

「……」

『まさか、あの長鼻爺さんの言葉を、俺が言う事になるとは思わなかったけど、こんな極限状態の中で頼れるのは、それぐらいだ。恋人であれ悪友であれ悪人であれ、《絆》ってのはあって邪魔になるもんじゃない。今まで敵だと思ってた奴が、実は被害者だったなんて事は、俺にも経験がある。その時、信じ合える仲間がいなければ、俺はずっと後悔していただろう』

アツロウや、ユズのように。

母親のように。

そして――ナオヤのように。

《かけがえのない》絆を作れと。

そういう――事だろうか。

『…長話になっちまったな。まあ、俺が言いたいのはそれぐらいだ。気に障ったなら忘れてくれ。じゃあな…』

そう言って、セトが会話を終わらせようとする気配がしたので、淳もゆっくりとケータイを下ろす。

「…なんていうか、初めて声を聞いたけど、確かに変な人だな」

そう言ったのはアツロウだ。

「でも、何か不思議。言葉の一つ一つが心に響くっていうか…。少なくとも、敵じゃなさそうだよね」

「ああ」

ユズの言葉に対し、淳は力強く頷く。

「…！そうか…」

「どうしたの？」

そうか。

ようやく、気付いた。

どうして自分が、セトに興味を示したのか。

どうしてこうも簡単に、あの男の言葉を信じられるのか。

ここまで危機的状況の中、余命を伸ばす為に、藁にも縋る思いだとか、そういう

《どうでもいい》事ではなく。

あの唯我独尊な性格といい。
あの強引な手引きといい。
全てを悟ったような態度といい。
背が高いところといい。
凛々しい顔つきといい。
そして、あの、人を圧倒する雰囲気――。

「あいつ、ナオヤに似てるんだ…」

『あー、そうそう』

唐突に、手に持って開いたままのケータイから、セトの声が聞こえたので、淳は酷く驚いた。

そういえば、まだ電話を切っていなかったか――て、向こうもだが。

「何ですか？」

再び、ケータイを耳に当てる。

『最後に、一ついいか？』

「どうぞ」

思わず苦笑してしまった。どうやら、面倒見はいい男らしい。きっと、善人どころか、お人よしと言われる類の人間なのだろう。

今までの悪評価を、少しばかり引き上げるべきかな、と思った。

『頼みがあるんだ』

思わず淳は、体を固くする。

しかし、不思議と嫌悪感はない。既に淳の中で、セトはただの不審者ではなかった。

自分は誤解していたのだ。この男は、いやこの人は、自分より遥かに高みにいる存在だ。ただの変態――否、変態ですらない。

そう、セトという男は――

『本屋に寄ることがあったら、《魔女探偵ラブリーン》の最新刊を買っておいてくれ』

勿論、即座に電話を切った。

台無しじゃねぇかよ。

１ｓｔ　Ｄａｙ『家庭事情』

永田町、霞ヶ関。

国会議事堂前の階段に腰かけていたセトは、有里淳との会話を終えると、立ち上がってうーんと伸びをした。

ちなみにと言ってはなんだが、彼はケータイを持っていなかった。では何故、淳とケータイで会話が成立したのかというと、そもそもセトは

《ケータイを使用せずに》、《彼が持つ特殊な力で》《遠方にいる淳との会話を》《成し遂げたのだ》。

そんなセトの周りには、真っ白な《霧》が漂っていた。

この《霧》は、１７年前に、彼に対峙していた、とある敵が使っていた能力だ。

人を惑わす力。

幻を見せる力。

「…待たせて悪かったな」

誰にともなく、セトは口を開く。

肩がこったのか、コキコキと首を回しながらストレッチをするセト。

いや、誰にともなくという表現は、いささか正確性に欠けるかもしれない。その台詞は、今もまだセトから姿を隠している――《数十人の人間に向けられていた》。

存在が気付かれた事で、姿を隠す必要性が感じられなくなったのか、やがて至る所の物陰から、頭から足元まで伸びた、橙色のフード付き装束を着込んだ人物が、ゾロゾロと現れる。

翔門会の――装束だった。

いつの間にか、セトは数十人もの信者に囲まれていたが、彼は全くと言っていいほど慌てていなかった。変わらずストレッチをしながら視線だけをそれぞれの信者へと向ける。

「…貴方が、イザナギ――人でありながら、神に《堕ちた》存在ですか」

やがて、信者の内の一人がそう問い掛ける。

「ああ、いかにもその通ぉぉぉぉぉぉりだぜ。何だよ、ゾロゾロとまぁ…、やれやれだぜ。こんな年寄りのご機嫌をとっても、お小遣なんかやらねえぞ？」

セトの言葉には応じず、信者は全員が懐から何かを取り出す。

それは、間違いなくＣＯＭＰと呼ばれるそれだった。無論、市販品ではなく、仲魔を喚び出す機能を備えた、改造ＣＯＭＰだ。

「偉大なるベリ・ベリト様に逆らう愚かなる神よ…！裁きの業火に焼かれるがいい！」

やがて強い光と共に、それぞれのＣＯＭＰから、何体もの悪魔が吐き出される。

一人につき、二体。

信者の数が目算、３０人程だから、総勢で９０もの数に、セトは囲まれた事になる。

しかし、それでもセトは慌てない。

どころか、鼻唄を歌う余裕さえある。

「…やれやれだぜ。すっかりやる気満々かよ。こんな大勢でおやじ狩りなんざ、都会は怖えなぁ…」

しかし、武器を取り出したのは、信者達だけではなかった。

いつの間にか、セトの右手には大振りの刀が握られていた。

それがそこら辺にあるただの刀ではないことは（ただの刀もそこら辺にはないだろうが）、その場にいる誰もが悟った。

人の身の丈程もあるその美しい銀の刀身は、しかしその輝きとは反対に、今まで喰らってきた犠牲者の怨念を、辺り構わず撒き散らしていた。

その名も、『十握剣（とおかのつるぎ）』。

かつて、『刈り取る者』なる存在に、セトが勝利を収めた際に、手に入れた戦利品である。

（しかし――こうも早く勘付かれるとはな。予想以上に、手が早い…。恐るべきは、翔門会の網の広さか）

セトにしても、別に隠密を意識して動いていた訳ではないが、それでも目立った動きをした訳ではない。

「…まぁ、いっか」

セトは、ニカッと笑う。

「本当はこっそりひっそり、スネーク顔負けの隠密機動に徹しようかと思ってたけど、気付かれた以上は仕方ない。――でもまあ、俺は数多くいる《神》の中でも相当な変わり種でな。お前らの今の発言が他の奴ら（神達）に知られれば、間違いなく極刑モノだろうが…」

一歩。

セトは、何気なく、３０人達の信者、６０体もの悪魔に、一歩、距離を詰める。

その、どうという事
はない――《何気なさ過ぎる》動作だけで、信者達の間に、一気に緊張が走る。

『イザナギ』

『神に魅入られた銀色』の実力を、その何気ない動作だけで、察してしまったから。

「今、お前らがおとなしく引けば、この出会いは忘れてやる。俺はお前らに出会わなかったし、お前らも俺に出会わなかった。俺が刀を抜く事も、お前らがＣＯＭＰを起動する事もなかった――お前らはまだ若い。ここで無駄に命を散らしたくないだろ？」

「愚かな」

耐え切れず、信者の一人が失笑を漏らした。

「これだけの数を相手に、勝ちの目があるとでも？」

「ハハハ、まあ、俺みたいになジジイにはちっとばかし、キツイかもな。お前らの強さは、俺にもよく分かる。翔門会の中でもエリートみたいだな…。少なくとも、そこら辺のゴミクズぐらいには強いだろうと、俺が過大な評価を下してやる」

「戯言を――行け！」

堪忍袋の尾が切れたとばかりに、信者の一人が激昂すると、側の悪

魔を、セトを始末するよう促す。

それに当てられたように、他の６０近くの悪魔達も一斉にセトに飛び掛かった。

ある悪魔はその牙でかみ砕くこうと。

ある悪魔はその爪で切り裂こうと。

ある悪魔はその魔法で撃ち消そうと。

悪魔だけではない。３０近くの信者達も、懐から短剣を取り出したりなどして、セトに殺到していた。

しかし、セトは慌てない。

少しも、全く、微塵も、金輪際に、慌てない。

しかし、小さくため息をつくと、

「こんな所でこんな事をしてる場合じゃ、ないんだけどな…。ま、仕方ないか――たくっ」

その手に持った刀を、

この世の全ての事象を断絶するように。

真横に、一閃した。

「――殺れ殺れだぜ」

◆　◆

渋谷、宮下公園

「ねえ、アツロウってさ、パソコンとかネットの事、何で、そんなに詳しいの？」

先程のセトとの会話だけで、予想以上に精神的疲労を催した淳、アツロウ、ユズのハリーポッターを彷彿とさせる仲良しトリオは、一旦休憩しようと、宮下公園の木陰に腰を下ろしていた。

先程の台詞は、そんな折にユズが発した一言である。

「ん？ああ。話した事なかったっけ？オレん家ってさ、両親共コン

ピュータ技師なんだ。シリコンバレーで働いてんの。いっつも、一緒に来ないかって誘われてるんだけどさ…、英語が出来ないから行かない訳」

そう話すアツロウの表情は何やら複雑だった。

「両親がいないから、ずっと家でパソコン弄っててさ、コンピュータの中で育ったようなものだよ」

「まさしく」

余程この暑さが応えているのか、体を寝かせて目に腕を置いていた淳が口を開く。

「まさしく、現代っ子って感じだな、お前…俺とは大違いだ」

「いいか淳、これからはパソコンが出来ない奴は置いてかれる時代だ。何ならナオヤさんに教えて貰えよ」

「アイツから個人レッスンを受けろってのか？冗談じゃなくても笑えるぜ」

まあ、アツロウの言う事には一理あるから、母親の知り合いである風花さんに教えてもらおうかな、と淳は思った。あの人もパソコンがそこそこ…というか、かなり出来た筈だ。

「ハハッ…まあ、そんな生活だからさ、家に両親がいないし、友達とかみんな塾通いで遊べないし、ネットの中でしか、友達できなくてさ」

「すっっっっげえつまんなさそうだな、それ」

「いや、そこまで強調すんなよ！第一、俺にはそもそもそれしかなかったからなぁ。…まぁ、面白いんだけど。小学生の俺でも、大人と対等に扱って貰えるだろ？」

「ふぅん…」

もしも俺だったら、顔も知らない奴だったら友達になれそうにないな、と淳は思った。

「ディスプレイ越しなら顔も見えないしな、まぁ、匿名のメリットってヤツ？知り合いの殆どが社会人だったよ」

「知り合いが多いのはいいことじゃねぇか」

そういうのも《絆》と呼ぶのだろうか。

しかし、パソコンを持たない――例え持っていたとしても、こんな状況では考えても栓なき事だ。

「ああ、やっぱ共通の趣味を持つ仲間がいるのは楽しいよ！」

そういうアツロウの顔は、今度は笑っていた。恐らく、本心からの言葉なのだろう。

「あの頃はよかったよなぁ…。色々さ、不便だったけど、ヒドイ事も、なかったからさ…」

一転して、アツロウの表情に陰がさす。今の状況を思い出してしまったのだろう。いつもならこの時間は、冷房の効いた部屋でネットを駆け回っている筈なのだ。

「その不便な日常を取り戻す為に、頑張らなきゃな」

そういって、ジュンはグッと体を起こす。休憩はもうおしまいという意味らしい。アツロウとユズもそれに倣い、木陰から強い日差しが差す日なたへと足を進めた。

◆

◆

「ところで、ソ～デコちゃんっ！」

もう一度、渋谷駅の様子を見てみようという話になり、そこへ続く道すがら、アツロウが明らかに「フ～ジコちゃんっ！」の口調でユズに話しかけた。

「な、何よ？」

「たまには、何か下らない話しようぜ？ユズの家の事とかさ！」

たまにはって…、お前は学校でしょっちゅう下らない話を俺に垂れてるじゃねえか、という突っ込みを、淳はグッと堪えた。

「ちょっと…バカアツロウ。誰の家が下らないって…？」

ユズの表情は爽やかだったが、その口調はいつも以上に凄みが効いていた。

「うおっ…あ、すみません。ついつい…」

デビルスマイル人間仕様を放つユズに、思わずアツロウが敬語になって平謝りする。

因みに、今の三人の位置関係は左からユズ、淳、アツロウと横に並んで歩いているというものだ。頼むから俺を挟んで喧嘩を始めないで下さいお願いしますイヤまじでまじで、と、淳は内心、気が気ではなかった。

しかし、すぐにユズは表情を元に戻す。

「…まぁいいや、どうせ、本当に下らない家だし。…ウチは平凡な家族よ。両親の仲は良くなかったけどね」

次第に、その表情は憂鬱なものへと変わっていく。

「それで…去年離婚しちゃってさ、そこからは母さんと二人暮らし」

「母子家庭だったのか」

アツロウにとっては初耳のようだが、幼なじみである淳には勿論、認知済みであったので、特になんの感想も抱かなかった。

「でも、嫌いな人と別れた筈なのに、母さん、前よりイライラしてるみたい。ちょっとした事で、すぐに怒鳴るし…！」

それを聞いて、淳は自分の母親を思い浮かべた。母も自分が何か不道徳な行い（例えば、街や学校で不良と喧嘩して病院送りにしたり、自室で特技のコサックダンスの練習をして騒音を撒き散らしたりなど）をすると、『馬鹿じゃないの！？ってか、馬鹿じゃないの！？』と口癖の様に怒鳴られては、よく頭を叩かれていた。

時には、学生時代の名残か（母は高校時代は弓道部“にも”所属していた）、弓矢を用いて恐怖の制裁を下す事もある。

……。

公共が認める場所以外での、弓矢の使用は大変危険です。良い子は真似しないで下さい。

「女手一つで私を養ってるんだから、大変なのは分かるんだけどさ。…私もだんだん疲れて来ちゃった。だから、最近は…。あんまり口もきかなくなっちゃってさ」

「……」

疲れた、か…。

自分の母親も――あの、誰にも弱音を吐かない、勝ち気な母も、実は疲れているのだろうか？と、淳は昨日から連絡のつかない母親の事を思った。

例え疲れていたとしても、母はそれを決して表に出す事はないだろう。

だが、もし――

「父親がいた頃の方が、良かったのか？」

自分は父親というものをよく知らない為、興味本意から淳はユズに尋ねた。

「…分かんない。嫌いだけど家庭を支える男がいるのと、離婚して気楽だけど負担が増えるのと、どっちがいいんだろうね…」

逆に問い掛けられてしまった。

淳は「どうなのかな」と適当に答えておいた。もしかしたら、ユズの家庭は以前からコミュニケーションが不足していたのかもしれない。失礼だが、それでは離婚しない方がおかしいと思った。

「ところでさ、淳の家はどうなの？私もアツロウも話したんだから、ちゃんと言いなさいよね！」

「いつからそんな、修学旅行の夜みたいな展開になったんだよ…」

まあ、別に隠すような事ではない。ユズのように下らない家庭とまでは言わないが、自分の家庭事情など、誰が聞いても特に驚きはしない程、平凡でありふれたものなのだから。

「俺んとこも、ユズと変わらず母子家庭だよ。父親が離婚じゃなくて亡くなってるってのが、唯一の違いかな」

「あ、ゴメン…」

それぐらいは幼なじみである自分も知ってるのに、と、ユズは罪悪感に苛まれてしまう。

「いや、別にいいよ。父親なんて、物心ついた時からいなかったから、特に悲しさっつー悲しさは抱いてない」

「淳の母親って、一体どんな人なんだ？」

淳とは高校からの親友で、淳の母親とは直接の面識のないアツロウが興味津々といった様子で問い掛ける。

それに答えたのは淳ではなくユズだった。

「私、家が近いから何度か会って知ってるよ。スッゴイ美人なんだよね。かなり若いし。今、いくつだっけ？」

「ええと…」

この場に母さんがいたらブチ切れそうな質問だな、と思いながら淳は記憶を探った。

「確か、今年で３６だったと思う」

「えええっ！？」

それを聞いていたアツロウは、酷く驚いていた。

「それって…ええと、お前が今17だから…19歳でお前を産んだって事か!?どんだけ早熟なんだよ!?」
アツロウの余りの驚きっぷりに、淳は思わず苦笑してしまう。
「父さんは当時、同い歳で同じ大学に通ってたらしい」
「が、学生結婚ってヤツか…」
スゲエ両親だな、とアツロウは呟いた。
「にしても、よくそんな早く結婚を親が許したな…」
「というよりは、許すしかなかったんじゃないか?聞いたところ、所謂『できちゃった婚』らしいし」
「お前の両親、焦り過ぎだろ!」
淳から更に、予想の斜め上を行く告白を受けて、アツロウは更に驚く。
「私も初めて知ったよ、それ…」
ユズも呆然としていた。
淳はまるで小学生が悪戯に成功したかのような顔をしていた。
「別に、それほど驚く事はねえだろう?近親相姦の末に生まれたってよりは幾らかマシだ。だいたい、できちゃったぐらい、今じゃそんなに珍しくない」

「…そうかもしれないけど」

「…あ、でも、俺の場合はちと違うかな？母さんが言うには、子供を作ってから両親に結婚の意思を告げる、って前から決めてたって言ってたし」

「もし、それが頑固な親に結婚を認めさせる為の策なのだとしたら、とんでもない強攻策だな…」

アツロウには刺激が強すぎたのか、プシューと頭から湯気を出している。

意外と、根は純情なのかもしれない。

二人が予想以上に面白いリアクションをとった為、淳は満足だった。

「ハハハ…或いは、早く子供を作りたい事情が、二人にはあったんじゃねえか？」

ユズの方を向きながら、淳がそう言うと、ユズは顔を真っ赤に蒸気させて、淳の背中を蹴飛ばした。

なんだか最近、背中に打撃を喰らってばっかだな、と淳は思った。

なぜ、淳の両親がそこまで若い内に子宝を授かりたがったのか――その理由を淳が知るのは、まだ先の事である。

1st Day『第3勢力』

鮠美海狗（はやみ みく）は、ごく普通の女子高生である。

少なくとも――彼女自身は、そう信じている。

ミクが先程、有里淳（ありさとじゅん）に見抜かれたように、彼女は翔門会（しょうもんかい）の下っ端であり、つまりそれは、ミクが翔門会の中でも経歴が浅い人物である、という事でもある。

だが――彼女が翔門会という、オウム以来の日本における大規模な宗教団体に属しているからといって、彼女が過激な経歴の持ち主だとか、非常に稀有（けう）な才能を持ち合わせているのではという推測は、いささか安直過ぎると言っていいだろう。

彼女の自宅は神奈川の、ごく『普通』のマンションにある。両親は健在で、父は『普通』に中小企業のサラリーマンで、母もまた『普通』の専業主婦だ。

また、3つ離れた弟と、2つ離れた姉がいるという点にしたって、世間的には『普通』の範囲内だろう。

ミクは淳と同じく高校2年生で、その高校は別に日本有数の進学率を誇る名門で、しかもミクはその中でもトップクラスの成績を誇っている――だとか、そんな事は勿論、ない。

彼女が通う高校は『普通』の公立高で、彼女の成績は中の下と、これまた月並みに『普通』だった。

初恋は『普通』に小学生の頃に経験して、そして『普通』に振られた。

休日は勿論、家にこもって勉強などはせず、『普通』に今時の女の子らしく、友達と一緒に、新宿や渋谷辺りに外出して、遊び尽くすのが主だ。

好きな食べ物は女の子らしく、『普通』にケーキやアイスなどの甘い物。だけど彼女も当然、『普通』に太りたくない為、食べる量に関しては、そこそこ自粛（じしゅく）している。

外見にしたって、取り立てて特長はない。ショートカットの黒髪と、あまり凹凸のないスレンダーな体型を、果たして特長と言えるだろうか？いやいや、こうしてわざわざ説明するのも躊躇（ためら）われる程、それもまた、『普通』の事だろう。

そして、そんなごく『普通』な彼女は、この年代の若者ならば、誰もが思うであろう願望を、『普通』に抱いていた。

曰（いわ）く。

普通にはなりたくない――――と。

ミクは、そう思う。

そう――――願う。

その願望自体が既に、『普通』の範囲内であるとも知らずに。

また、彼女は、将来働く事になっても、ＯＬとかにはなりたくない、と『普通』に願っていた。

若い女性が抱く夢といえば、大抵がアイドルや歌手などが『普通』であり、また彼女も出来ればそうなりたいと思うが――しかしそんな事は、余程の才能を持つごく少数の人間にしか出来ないと、『普通』に諦めている。

つまるところ、彼女は恐れているのだ。

『普通』という概念を、実に人間らしく、恐れている。

無論、そんな感情は、誰もが『普通』に抱いているのだが。

だから――翔門会の存在を知った時、彼女は殆ど興味本意でフラリと入会したに過ぎない。

『普通』にとどまりたくないと願い、『普通』とはかけ離れた思想を掲げている翔門会に彼女が入会した事は――今思い返せば、実に自然な流れなのかもしれない。

事実――彼女とほぼ同一の考えを持ち、入会したという同年代の若者も、最近入会した信者の中には少なくなかった。

翔門会の事は、同じ高校に通う友人から口コミで聞いたのだ。そこで興味をもったミクは、すぐさまネットで調べ、翔門会の関東支部に入会したのだが、入会するにあたって、別段苦労はしなかった。ただ、（翔門会の）先輩に簡単な質問を2、3個ほどされただけだ。

その際に、翔門会の崇高なる思想や目的などの説明を受けたかもし

れないが、ミクは、そんな事は少したりとも覚えてはいなかった。

彼女が望むのは、『普通』から『普通』に脱却する事。ただそれだけだ。今回の入会にしても、その一手段に過ぎない。

だから。

昨晩――青山霊園で、初めて『悪魔』に襲われた時は、恐怖やら感激やら戦慄やら興奮といった、そのような感情が、激流の如く、体中を駆け巡ったものだ。

しかも――その悪魔に、まさに命を奪われるかと思った瞬間に、いきなり現れた男の子に命を救われる、というオマケ付きだった。

これだ、と、ミクは思った。

翔門会に入会したのは、間違いではなかった、と確信できた瞬間だった。

また――よく見れば、なんと彼ら（助けた男の子は、2人の友人を連れていた）は、悪魔を使役していたのだ。

――凄い。

凄い凄い凄い！！

こんな常識外れな、胸躍るファンタジー。

この『非日常』こそが、自分の追い求めていたものだ。

だから、その時の少年に対しお礼を言い、尚且つ勧誘してこいという、いかにも下っ端らしいパシリ同然の依頼を、翔門会の巫女である、九頭竜天音（くずりゅうあまね）から受けた時も、ミクは別段、面倒だとは思わなかった。

昨日の少年――有里淳と再会する事は、鮫美海狗を、更にワクワクさせた。

巫女のアマネも相当だが――しかし、有里淳からは、それ以上に自分を更に、別の非日常に巻き込んでくれる筈だ、という確信があった。

しかし、傍観者（ぼうかんしゃ）の視点から冷静に判断すれば、有里淳よりも、九頭竜天音と関わっていた方が、更なる非日常に巻き込まれやすいのでは、と思う人もいるだろう。

だが、一人称なら。

昨晩、初めて有里淳と正面から向き合ったミクに言わせれば、それは――どうしようもなく、否なのだ。

その時に、確信したから。

もしも、面白い事に巻き込まれたいなら――それは間違いなく、彼なのだ。

彼女はまだ、生まれてから17年近くしか生きていないが、しかし『普通』に、それなりに様々な人間と出会ってきたつもりである。

そして、大半の人間のタイプ――性格を、様々な種類に分類し、

振り分けるという能力も、人並みには備えているのだ。

この人は明るい、暗い、悪い、良い、恐い、優しい――――など。

しかし。

有里淳は――――そのどれとも絶対的に、根本的に違う。

（この人――――本当に人間なの？）

初めてジュンを見た時――――彼女は自然と、そう思った。

それは、もし言葉にしていたら、間違いなく酷い言い草に違いないだろうが――――しかし不思議と、ミク自身は、そうは思わなかった。

むしろ――――この有里淳という人間に限れば、そんな評価さえ控えめに思えてしまう程だ。

まだそれほどの面識もないのに――――ミクにはそれが、分かってしまった。

それはまるで、死刑判決を言い表された様な衝撃に近い。

というよりは――――淳に出会った時の、その瞬間だけで、『普通』ではなく、非日常に在りたいと思っていたミクの心が、あらかた満たされてしまった程だ。

直感的に――――彼女は、理解してしまった。

この少年は――――自分のような普通の人間とは、全く逆の悩みを抱

えているに違いない、と。

非日常から抜け出し、普通になりたいと思っているに違いない――と。

そんな有里淳を、ミクは、心底恐れはしたけど。

身震いするほど、恐怖したけど。

だからこそ――――だ。

この時のミクの感情を最も的確に表すならば――――それは、『怖いものみたさ』、という単語が、1番相応(ふさわ)しい。

人は元来、それが良かれあしかれ、異常な物に、現象に、人物に――――どうしようもなく、惹(ひ)かれるものなのだ。

もっとも、それが本当に怖いものだった場合は、目も当てられない事になるだろうが。

有里淳。

ミクの目から見た、有里淳の印象は、怖くて恐くて異常で異様で異能で異相でおどろおどろしくてこれ以上になく意外性に満ちた純粋純濁(じゅんだく)の、しかしそれ以上に異性として魅力的だと感じられる――――

「――――ええぇっ？」

と。

それは――ミクが、有里淳を翔門会に勧誘し、そして成功した事で足取りも軽く、次の集合場所である永田町の国会議事堂前に、到着した時の事である。

何でも、暇が出来た信者はこの場所に来るよう、翔門会の先輩に言われていたからだ。

詳しい内容は、聞かされていなかったが、もしかしたら、大規模な悪魔との戦闘が予定されているのかもしれない――と、ミクはワクワクしていた。

先程までは。

「――やれやれだぜ」

と。

そこにいた――黒い甚平を着込み、ボロボロの草履を履いた、銀

髪の男は言った。

身長は、ミクよりも遥かに高い。一見すれば、その細身からは強靭さなどかけらも滲み出ていないかのように見えたが、しかしよくよく見れば、それは余分な肉がついていないだけで、非常に引き締まった肉体だという事がミクには理解できた。恐らくは、名匠が鍛え上げた日本刀を目にした時も、今と似たような印象を抱くに違いない。

まあ、その男は本当に刀を持っていたのだけれど。

それだけでも男がただ者ではなく、且つ危険な人物だと、ミクには理解できたが――しかし。

しかしである。

更に気にするべきは、驚くべきは。

恐怖するべきは。

国会議事堂前の、広場一面から漂う――血と内臓の匂い。

脳と、脳しょうと、眼球と、歯と、舌と、肉と、食堂と、肺と、血と、胃と、肝臓と、横隔膜と、膵臓と、小腸と、大腸と、皮膚と、体毛と、

死体の匂い。

ズバリ言ってしまえば――ミクが国会議事堂前に到着した時、そ……こには1人の男が立っていて、その足元には、大量の死体がごちゃ……

ごちゃしていた。

「やれやれだぜ」

銀髪の男は――再び、そう言った。

「もしかして、もしかしてだけどよ――1度考えたら余りの羞恥心と背徳感で足がガクガクブルブルしちゃうような話なんだが、俺の殺人現場を『人間』に見られたのは、これが地球生誕以来の話かもしれねえな。おめでとさん」

「え？あ、ありがとうございます」

思わずぺこり、と頭を下げてしまうミク。

「――て、そ、そうじゃなくて！あ、あ、貴方は一体全体、何をしてるんですか！この日本では、人を殺すのは犯罪なんですよ！」

ミクの若干のテンパり成分が配合された叱責を受けた銀髪の男は、おどけたような表情をすると、

「まあ、俺の同族――『神』や『天使』の連中に言わせれば、これを『聖なる裁き』とでも言うのかもしれないが……しかし、こんなのはやっぱり『殺人』には変わりねえよな。犯人が天使であれ悪魔であれ神であれシャドウであれ死神であれ、『人』を『殺』せば、それはまごうことなき『殺人』だろうよ。そこに、どんな理由があろうとも、だ――なあ、君もそう思うだろ？」

と言った。

「え？い、いや、どうでしょう？」

（――何だよ）

（――何なんだよ、コイツは）

ミクは男から目を離し、周りに散らばった肉片に目を向けた。奇妙な事に、甚平姿の男よりも、辺りに散乱している死体に目を向けていた方が、まだ平静を保ちやすかった。

が、しかし――それらの死体を『死体』と呼ぶことが出来たのは、単に、そこにズダボロにされた翔門会の衣服があり、尚且つ銀髪の男が、その手に血の滴る刀をさげていたからこそ、かろうじで出来た推理であり、それらの要素に気付かなければ、それらが『人の死体』だと気付く事は、ミクには出来なかっただろう。

バラバラでもなく。

スライスでもなく。

ミンチだった。

この場にいたミクの同僚である、翔門会の先輩方――或いは、同世代や後輩の人間達は、全員がミンチにされていた。

大木をチェーンソーで切り刻んだ際に飛び散る、木屑（きくず）の様に。

そして。

真っ赤――だった。

国会議事堂前の広場は、真っ赤なペンキを大量にぶちまけたかのように、真っ赤だった。

あまりにも赤過ぎて――美しくすらあった。

清々しくすら――あった。

厳密に言えば、それは薔薇の様に純粋な赤ではなく、ビーフシチュー（我ながら、場違いな例えだ、とミクは思った）の様に赤黒い――否、赤グロいものだったのだけれど。

もはや、血の池――というより、その面積を考慮すれば、むしろ湖と言い換えた方が適切かもしれないが――となったそこには、既に『屑』へと変貌を遂げた肉片が、プカプカと浮いていた（そうだと気付くのにも、かなりの注意力が必要だった。既に『それら』は、固体なのか液体なのかさえ、既に、ミクには区別できなくなっていた）。

だからこそ、ミクは、その赤い湖の淵に、ほんの少しでも足を触れないように、先程から細心の注意を払っていた。

「あ、あの！」

次に声をかけたのは、銀髪の男ではなくミクの方からだった。

「し、質問してもよろすぃでしょうか！」

思わず噛みかけた。

これなら、ハッキリ噛んだ方が幾らかマシである。

「よろすぃよ。俺は男からの質問は、友人以外からは絶対に（強調）受け付けないが、それが女だったら敵であれ悪魔であれ殺人犯であれ、２４時間３６５日受け付けてるからな。遠慮なんかする事なく威風堂々と質問しなさい」

「……」

予想以上なまでに予想外に友好的な男の態度に、ミクはしばし呆然としてしまうが、しかしすぐに気を取り直して銀髪の男が言うように質問をする。

「え…えと…、こ、この人達はどうして死んでるんですか!?」

我ながら、なんて間の抜けた質問だ、と思った。そんなの、この銀髪の男の仕業に決まっているではないか。すると案の定――

「ああ、俺が殺した」

と、銀髪の男は、自らの罪を、実にアッサリと認めた。

だが、その表情からは、罪悪感などは全く見受けられず、むしろ欠伸を噛み締めているようにさえ見える。

「な、なんで…」

「なんでって…なあ？なんでだろうなぁ？どうしてだろうなぁ？コイツらが急に襲ってきたから？それとも俺の気まぐれか？だけどよぉ――俺は、こう思うんだ」

じゅぶり、と。

ミンチになった人肉の湖に、毛程も躊躇う事もなく足を踏み出して、銀髪の男は、１歩、ミクとの距離を縮めた。

しかし――次には、１歩どころか、ズンズンと大股で歩きながら、ミクとの距離を一気に縮めてきた。

じゅぶっ！じゅぶっ！じゅぶっ！じゅぶっ！じゅぶっ！じゅぶっ！と――！

１歩、また１歩と、銀髪の男がミクへと接近する間にも、当然その足は肉の湖を掻き分けながら進んでおり、その度に、ミクの鼓膜に、不愉快なＢＧＭが響き渡る。

「ひ、ひ――！」

声にならない叫びを上げ、すぐに男から距離をとろうとしたが、しかし腰が抜けてしまい、ミクはその場で尻餅をついてしまった。

「――俺は、こう思うんだよ、人が死んだ理由なんて、考えただけで無駄なんじゃないか、って」

男はミクの目前で足を止め、肉の湖から「よっこらせえ」、と両足を順番に引き抜くと、ミクと視線を合わせる。

風景的には、電車の中で座っている時に、目の前に人に立たれた状況に近いが、しかしミクの心境は、とてもそこまで日常的なものにはなれなかった。

日常ではない――非日常。

彼女は、先程までそれを、求めてやまなかった筈なのに――。

「人が死ぬ理由なんて――どころか、人が殺された理由なんて、そんなの考えるだけ、脳細胞の無駄使いだっつうの。人が死ぬのは当たり前だ。なぜなら、人は元々そういう風に作られてるんだからな。…まあ、他人が干渉したのとそうでないのとの違いはあるけど――因みに、俺は刑事ドラマとかが嫌いでな」

「は、はあ――」

いきなり何を言い出すんだ、この男は。…と、ミクは思った。

銀髪の男は1度「フンッ」と鼻を鳴らすと、独り言のように（事実、彼にはミクに向かって話をしている意識はなく、本当に独り言のつもりなのかもしれない）話し出す。

「ドラマだけじゃなくて、推理小説も吐き気を催すほど大っ嫌いでな――何だよアレ？文字が画像になるだけで、あそこまで下らなくなるのかよ。どいつもこいつも、人が殺された動機やらトリックやらを必死になって考えてるけどよ――早い話、全員が殺し合いをして、最後に生き残った奴が犯人でよくねえか？『そして、誰もいなくなった』、なんて締め言葉を最初に考えた奴は、きっと天才に違いない。第一、トリックや動機を調べたところで――『誰が殺したのか』を調べ抜いたところで、一体誰が喜ぶんだ？何度見直しても、犯人は勿論のこと、探偵役や脇役や果ては被害者の遺族でさえ、犯人が捕まったところを見て『イエーイ☆』って手放しで喜んでるシーンなんて、全く見たことがねぇぞ」

「で、でもでも！」

流石に、あまりにも極論過ぎると思ったのか――ミクは、どもりながらではあるが、抗議の声を上げる。

「誰が嬉しがるか、なんて――そんな話じゃ、ないでしょうっ！愛する人が殺されたら、犯人が捕まるのは勿論、どうやって殺されたのか、どうして殺されたのかを知りたがるのは、当然でしょうっ！？」

「当然と正論は、一見似通っているようで、実はかなり意味が違うんだぜ、お嬢ちゃん。だけどな、――そうなんだよ。まさにその通りなんだ。どうして、世に数多くの推理小説や刑事ドラマが跋扈（ばっこ）してるのかって言うと――早い話、見ている人間は、それについて納得したいからなんだ」

「納得…？」

「納得、確信、理由――言い方は何でもいい。一寸先も見えないほど濃い霧に覆われて、ずっと平静を保てる人間なんて、そうそういやしねえだろうさ。ドラマで被害者の遺族が家族を殺されたと知って、犯人を捕まえて欲しいと思ってるのは、怒りからじゃない。『不安』だからだ。人っていうのは何か分からない事が、何か不明瞭な事が１つでもあるだけで――それをどうしようもなく、極端に恐れる。俺も若かりし頃は、連続殺人事件を解決したりしたけどよ――今思えば、あれは聞いた事のない英単語の意味を調べる行為と、何も変わんない行為だったんだろうな。多分、ドラマとか小説とかで皆がよってたかって犯人を捕まえようとしてるのは、単にその分からないという恐怖が、『死』っつースパイスを受けて、よ

り魅力的になってるからに過ぎないだろうからに違いな――――て、ああ…、面倒くさい話をしてゴメンな。けどまあ、青春を謳歌（おうか）するのが若者の特権だとしたら、若者に説教垂れるのは、俺みたいなジジイの特権だぜ。そこんところを斟酌してくれよ」

「え、えーと…」

ミクは自然と、頬が引き攣るのを感じた。

しかし――――と思う。

ここまで非日常過ぎる光景を目の当たりにしたにしては、今の自分は、それほど取り乱していないのではないか？と、冷静に自己分析する自分がいる事に、ミクは気付いた。いや、人というものは案外、精神状態が極限にまで追い詰められた際、その時の心境はこんなものなのかもしれないが――――しかし、こんな事を考えてる時点で、既に自分は、常識以上に落ち着いている、と、ミクには理解出来てしまった。

何故？

何故、自分はここまで落ち着いていられるのか――――？と、彼女は考えたが、答えはすぐに見つかった。

あの少年だ。

先程、渋谷駅で再会を果たした少年――有里淳を前にした時の『恐怖』に比べれば、何人もの仲間が殺された程度の出来事など、どうという事はない、と、ミクは思った。

思えて――しまった。

つまり、どういう事か。

そういう事だ。

最早――自分は戻れない。

戻る気もない。

現時点をもって――鮑美海狗の日常は、音もなく『終焉』した。

もう、必要ない――と、ミクは思った。

もう、非日常を求める必要は、全くない――と。

この、目の前にいる銀髪の男以前に――有里淳に会った時点で、既に自分は、日常に戻れはしない――と。

だから、もう、『非日常』に憧れる必要はない――もはや、有里淳と出会った時点で、自分は三途の川の向こう側に辿りついてしまったのだと、ミクは、誰に指摘されるまでもなく、それを理解してしまった。

その理解に、利点はない。

言うなれば、利解。

全てが――台なしになったかのような、そんな感覚。

「――さて、お嬢ちゃん、今度はこっちから質問していいかい？」

突然の男の声に、ミクは、ビクッと反応する。

「実は俺、ちょぉぉぉぉぉっとした事情で、とある少年を探してるんだけど……。中々どうして、これが非常に見つけにくくてな。連絡ぐらいならとれるんだけど……」

いつの間にか――男の手からは、先程まで握っていた大振りの刀が、霧のように消えうせていた。

それに気付いて、ミクは酷く驚いたが――しかし、銀髪の男は、そんな彼女に対して、何ら反応を示さず、

「一度目にすれば、絶対に忘れない筈なんだけれどな。……なんつーか、見てるだけで、気分がグチャグチャになっちまう奴とでも言うのか……。青い髪で、猫耳みてーなヘッドホンをつけて、女々(めめ)しい顔をした、黒い半端シャツの赤ジーンズ野郎なんだが」

と言った。

「あ、え、えーと、その方なら、先程見ましたよ！ええ！」

迷いつつもミクは、正直に答える。一刻も早く話を終わらせてこの男から離れたい、という気持ちも勿論あるが、しかしそれ以上に、この銀髪の男と、あの死んだ目をした少年が会ったら、一体どうなるのか――という、純粋な興味が湧いてしまったというのも、理由としては、少なからずあった。

ミクのその言葉を聞いた銀髪の男は、玩具を買って貰った子供のよ

うに、顔をパッと明るくすると、

「お？ホントかよ。俺の運の悪さはまさに神がかったものがあるんだが…。コイツはラッキーだぜ――――もしかしたら、アイツに会った事で、全ての不運を使い切っちまったのかね？…まあ、ここは素直になって、やれやれとは言わないでおくか。ありがとよ。――――で？どこで見かけたんだ？」

と言う。

「し、渋谷駅近くの公園です！」

「ふうん…渋谷駅近くねぇ…、渋谷…ん？渋谷ぁ？」

銀髪の男は怪訝な顔をして、ミクに顔を向ける。

「あれ？お嬢ちゃん、よく見たら翔門会の装束なんか着ちゃって――――もしかしてもしかすると、君、翔門会の人間か？」

「……」

今頃気付いたのかよ。

「…まあ、そうですよ。ええ」

ここでそんな事を認めたら、自分も先輩方と同じ様に無惨に殺されてしまうんじゃないか、とミクは思ったが、しかし、男はしてやったりという表情を作ると、

「なるほどなぁ…。なるほどなるほどなるほど。アイギス先輩じゃ

ねえけど、なるほどなー。ようやく俺にも、運が向いてきたか」

と言った。

その顔に笑顔を張り付けたまま、男はウンウンと頷く。

「じゃあ――お嬢ちゃん。とりあえずはありがとよ。ホラ、これはお礼だ」

そう言うと、銀髪の男は、いつの間にか手に持っていた、赤色のＣＯＭＰを、ミクへと放った。

慌ててそれを受けとったミクは――その手から伝わる感触に、酷く驚いた。なんと、そのＣＯＭＰが赤かったのは単に、仲間達の血液が、べっとりとこびりついていたからだったのだ（しかも不愉快な事に、何やら赤黒い物体も付着していた）。

「ところでお嬢ちゃん、おい嬢ちゃん、へい嬢ちゃん、よう嬢ちゃん。物は強制なんだが」

「で、出来れば相談でお願いします」

まさか、私を襲う（無論、性的な意味でだ。まぁ、銀髪の男の容姿はかなり好意的な印象だったので、それ程不快には思わなかったが）つもりじゃないだろうな…と、ミクは思った。

「ＯＫＯＫ。じゃあ、物は相談した上での強制なんだが」

「……」

「どうだい、お嬢ちゃん――――俺と一緒に来ないか？」

「……っ！！」

その言葉に。

ミクは、どうしようもなく――――戦慄した。

ぞくぞくぞく――――！、と。

「正直、最初の方は――――聞くだけ聞いたら、お嬢ちゃんの事も、問答無用で終わらせてやろうかと思ったんだが…興が乗ったぜ。それに、今回の事で、翔門会は――――少なくとも、お嬢ちゃんの所属している支部は、一時的に機能を鈍らせる筈だしな。まあ、この同盟条約は、お嬢ちゃんに迷惑をかけた償いっていうか、罪ほろぼしっていうか、そんな感じだ」

銀髪の男が言う。

まるで――――。

その言葉の一言一言が、無数の槍となって、自分の体中に突き刺さっていくような錯覚を、ミクは覚えた。

1度刺さったら――――もう2度と、引き抜く事は叶わない。

禁断の――――果実。

「それに――――俺といれば、ミクちゃんの大好きな有里淳に会えるかもしれないぜ？」

「な――――!?」

何で。

何で何で何で。

何で、私の名前を知ってるんだとか、何で、私が有里淳に会って、しかも恋心を抱いてしまった事を知ってるんだとかその他諸々（もろもろ）の疑問を、ミクは一気に投げかけたい所だったが――しかし彼女は、寸前のところで、それをグッと堪えた。

もう――――諦めよう。

この銀髪の男や、有里淳に対して――――『何で?』、や『どうして?』という疑問は、恐らく、何の意味も成さない、と、ミクは判断した。

それは、『どうして1＋1が2になるのか』と聞くのと同じぐらい滑稽（こっけい）な事だ、とも。

銀髪の男の言葉を借りるなら――――彼らはそういう風に出来ているのだ。

気付けば――――銀髪の男は、黙ってミクの隣を通り過ぎていた。

まるで――――言うべき事は既に言った、とでもいうかのように。

ややあって――――。

ミクもまた、何も言わず、ゆっくりと立ち上がると――――銀髪の男の背中を追って、迷う事なく走り出した。

◆　◆

「――――ところでお嬢ちゃん、名前は？」

「あ、鮑美海狗って言うです。そういう貴方は？」

「瀬多　〇〇」

これが。

翔門会と、そして、有里淳（デビルサバイバー）の仲間達以外の、第三の勢力が誕生した瞬間だった。

「瀬多さんですか…いい名前ですね！」

「まあ、それは人間としての名前だから、しばらくは『セト』って呼んでくれ」

「…？　あまり変わってないじゃないですか」

「――いや、計算式ってのは、綿密であれば綿密である程、たった1つの誤差が、全く別の結果を呼ぶ事があるのさ」

クックック、と。

セトは、実に楽しそうに、笑った。

１ｓｔ　Ｄａｙ『二階堂征志』

淳達が渋谷駅前にたどり着くと、不意に怒鳴り声が聞こえてきたので、思わずそちらに目を向けた。

「何だ？」

見ると、少し離れた所で一人のガラの悪そうなチンピラが、髭面の、いかにも上官らしき自衛隊員に、悪態をついている光景が目に入った。

「一体、いつになったら出られるんだよっ！」

多量の怒気を含んだ声で、チンピラが自衛隊員に怒鳴りつける。恐らく、この封鎖がほんの一時的なものだと、楽観的に判断したものの、予想以上に長い封鎖に、堪忍袋の尾が切れたのだろう。

しかし、怒鳴られた自衛隊員は、能面の様に無表情を保ったまま、事務的に対応する。

「安全の確認が取れ次第、封鎖を解除します。それまでの間、しばらくお待ち下さい」

そんな不躾な態度に、チンピラは更に頬を紅潮させて、怒りをあらわにする。

「ンなの、聞き飽きたんだよ！　その確認がいつ終わるのかって聞いてんだ……！」

「しつこいぞ。何度聞かれても答えは同じだ。早く安全なところに戻れ！」

その自衛隊員の言葉に、チンピラの自制心がいよいよ効かなくなってきた。

「ンだとぉ？　やんのか、コラぁ？」

「何だか、険悪なムードだね……」

それを見ていたユズが、弱り切ったように呟く。

「……ああ。だけどよく見ろよ」

淳は、顎で辺りに群がる民衆を指し示した。

「あんだけ騒いでんのに、誰も止めようとしない。巻き込まれたくないってのも勿論、あるだろうけど……。それ以上に、皆が思ってる事を、あのチンピラは代弁してくれてるから、敢えて止めないようにしてるんだ」

「あの光景は、皆の不満の延長線上に過ぎない、か……」

アツロウにも、淳の言わんとしてる事が分かったようだ。

そんな会話をかわしながら、淳達もそのチンピラと自衛隊員の言い合いを傍観していると、脇から別の人間がそれを止めに入った。

「……キャンキャン鳴くな、うるせーんだよ」

上下共に黒で統一された黒い長袖つなぎに、黒い髪を逆立てた、鋭い目つきの男だった。全体的に人を寄せつけない雰囲気があり、全身黒づくめという事もあって、鴉のような印象を受ける。

チンピラは、「あん!?　誰だコラ……」と不機嫌なまま、顔をその男へ向けるが、しかし男の姿を認めると、すぐ弱気な態度になる。

「……！　か、カイドーさん……!?　……す、すいませんしたっ！」

『カイドー』というのが、男の呼び名らしい。カイドーはつまらなそうにふんっと鼻を鳴らすと、

「ピーピー騒いでないで、とっとと消えろ。迷惑だろうが」

「は、はいっ！」

如何にも、『すたこらさっさ』という擬音が聞こえてきそうな動きで、チンピラは慌ててその場を去る。カイドーはその後ろ姿を実につまらなさそうに見ていた。

その一部始終を見ていたアツロウが、不意に何か思い出したように《あっ》と声を上げる。

「……カイドー?　アイツ、渋谷ダイモンズのカイドーか……」

「ん?　アツロウ、アイツの事知ってるのか?」

「……アツロウの知り合い？　ダイモンズって……悪魔って事でしょ？　今の状況で聞きたくない単語ナンバーワンなんですけど……」

淳とユズは知らないようだった。

「……いやいや。ったく、ソデコはよ。……悪魔はデーモンだろ？　ダイモンは守護神って意味だよ」

「守護神、ねぇ……」

またまた『神』かよ、と淳はウンザリした。

「渋谷ダイモンズは、不良共のカリスマチームで、カイドーは、そのリーダーなんだ。渋谷じゃ有名だぜ？」

「ふーん……」

不良チームという単語に、淳は少しばかり興味をもった。

というのも、これまでに淳は何回かこの辺りの不良と、少しばかりじゃれあった事があるので、その内の何人かはダイモンズに所属していたかもしれないな、と思ったからだ。

――直後、淳の頭にある考えが浮かんだ。

「待てよ……」

確率は低いかもしれないが、当たってればすばらしい……。少なくとも、試す価値はある確率だ。

「もしかして、渋谷の裏道にも詳しいんじゃないか？」

その道には、その道に詳しい人間がいる。

不良グループのリーダーであるカイドーとやらが、自衛隊の手の及んでいない渋谷の裏道を知っている可能性は、高いかはともかく、ゼロではないだろう。

「あ、そうか！　ジュン、冴えてるねっ！」

「まぁ……カイドーは面倒見がいいって、渋谷じゃ有名だしな……。う～ん、じゃあ話だけでもしてみるか！」

言うが早いか、誰の了承も得ないまま、アツロウはカイドーへと早足で向かって行く。インドア派にしては行動力あるんだな……と思いながら、淳とユズもそれに続いた。

カイドーはこちらが近付いた事に気付いたようだ。

「ん、何だオマエら？」

「あー……こんにちは」

とりあえず挨拶してみた。

「……」

無言の返答だった。

「え、えーと！　よい天気ですねっ！」

テンパった挙げ句の言葉だった。

「……」

またもや無言だった。

……そういや、喧嘩以外で不良とコミュニケーションをとるのは初めてだ。

「……有里」

「え？」

「有里淳だろ、お前」

カイドーからの対応は思わぬものだった。

「あれ？　ジュン、知り合い？」

ユズがそう尋ねてくるが、無論の事、淳はカイドーに見覚えがなかった。鮑美海狗の場合といい、どうやら自分は人の顔を覚えるのが苦手らしい、と淳は冷静に自己分析した（母さんが聞いたら絶対怒るだろうな……）。

「えーと……どっかで会ったっけ、俺達？」

「いや、会うのはこれが初めてだ……けどょお」

けどょお（→）と、語尾のイントネーションを妙に引き上げて、

カイドーは言葉を続ける。

「……お前の事は、ちょくちょく下の奴らから聞いてるぜ。月光館学園に、やたら狂暴な猫耳野郎がいるってな」

「ああ……」

そういう事か、と淳は得心がいった。つーか、もう少しかっちょいい伝わり方はしてねぇのかよ、と不満にも思った。

「……安心しろよ。俺は別に、お前の事を何とも思っちゃいねぇ……。どうせウチの連中は、どうしようもねぇクズの集まりだしな」

「……そうかい、そりゃよかった」

カイドーが予想したよりも好意的な人物だった為、淳は安心した。

「……そっちの二人は……知らねぇな」

「あ……俺はアツロウって言うんだ。で、こっちがユズ」

アツロウが自分とユズの自己紹介をしても、カイドーは特にリアクションらしいリアクションを、殆どと言っていい程とらなかった。こういうのを、リーダーの貫禄とでも言うのだろうか。

「……ああ、オレはカイドーだ。何か用かよ」

「うん、実は聞きたい事があるんだけど」

淳が言う。

「聞きたい事……？」

淳はカイドーに、山手線の外側に抜ける道がないかを質問した。

淳の質問を聞き終わると、カイドーはまたもつまらなそうに、ふんっと鼻を鳴らすと

「そんなの知ってたら、とっくに使ってる。俺達もセンター街に抜けられなくて困ってんだ」

「あ～、やっぱり駄目か……」

アツロウは、オプラートに包むことなく落胆していた。

「……まあ、この状況じゃ、どいつも同じようなもんさ。他に用がねーなら、もう行くぜ」

「あ……じゃあ、ナオヤって奴、知らない？」

ついでという感じで、淳は尋ねた。

「……あ？　ナオヤ？　何モンだ、そいつは」

「あ、えっと……！　コイツの……ジュンの従兄なんですけど、居場所が分からなくて……」

アツロウがあたふたしながらも説明し始めたので、淳も助け舟を出す。

「ああ。馬鹿みてーな鼠色の髪で、馬鹿みてーな羽織りを着て、馬鹿みてーなパンカラ下駄で……て、あー……写真見せた方が早いか」

そう言うと、淳は懐からケータイを取り出し、フォトフォルダを開く。

そこから一枚の写真を表示すると、カイドーに渡した。

そこには、ナオヤの顔写真が表示されている（何故そんなものを持っているかは、聞くな）。カイドーはそれを手に取って一瞥すると、

「……まあ、こんな状況だしな。人探しくらい手伝ってやんよ。ちょっと待ってろ……」

カイドーは右手に淳のケータイをもったまま、左手で自分のケータイを取り出すと、器用に両の手でそれぞれのケータイを操作し始める。

「赤外線通信で、この写真をオレのケータイに転送する」

少しすると、転送の完了を告げる『♪♪』というメロディが鳴った。

「……よし、ＯＫだ。ケータイが復帰したら、ウチの連中に回しておくぜ」

カイドーは淳にケータイを返すと、クルリと三人に背を向ける。

「じゃあ、またな」

「ああ、また」

やがて、カイドーの後ろ姿が完全に見えなくなると、アツロウが声を潜めて淳に質問する。

「ジュン、どうだ？　カイドーの余命……見えたか？」

「……『6』だよ」

人の余命が見えるようになったのはつい昨日だというのに、人と会ったらまずその余命を確認するというのが、淳にとってほぼ習慣になりつつあった。

それを聞いたユズが、驚いたように声を上げる。

「6日……？　そ、そんなに短いんだね……。だって、一週間以内って事だよ！？」

「馬鹿言うなって。ただの偶然だよ。6日だって、俺達に比べればまだマシじゃんか……」

アツロウの指摘をうけたユズは、自分達の状況を思い出してしょぼんとしてしまう。

「……う、うん……。でも……」

「あ……ワリィ……湿っぽくしちまった」

アツロウは気を取り直すように、頭のニット帽の位置を整えると、

すぐに表情を元に戻す。

「さ……気を取り直して行こうぜ！　自分達の余命を変えるんだ！」

「う、うんっ……！　行こう、ジュン！」

「……ああ」

未だカイドーが消えた辺りを見つめていた淳は、そこから視線を外すと、その顔に微笑を浮かべて、アツロウ、ユズと一緒にその場を後にした。

１ｓｔ　Ｄａｙ『二階堂征志』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・カイドー（二階堂征志）

年齢：１９歳

誕生日：８月９日（獅子座）

血液型：Ｏ型

身長：１８１ｃｍ

体重：６８ｋｇ

家族：父、母、祖母（死別した兄は連続吸血事件の被害者）

職業：無職（高校中退）

好きな食べ物：焼肉

嫌いな食べ物：野菜類、辛いもの

趣味：筋トレ

1st Day『同盟条約』

有里淳とその二人の友人と別れたカイドーは、特に何をする事もなく、町の歩道を歩いていた。

カイドーは、先程会った一人の少年――有里淳を思い出す。

どうも、アイツとは初対面という感じがしない、とカイドーは思っていた。いや、下の連中が散々噂していた為、妙に意識したが故にそう思っただけかもしれないが、しかし、そうではなく、確かに以前、どこかで会ったような気がしてならないのだ。

しばらく自らの記憶を巡ってみたが、すぐにその考えを放棄した。会ったとしても、恐らくは以前どこかの道ですれ違ったとか、そういう類の話だろう。

なにせ猫耳ヘッドホンなどを常備してるのだ。あんなの、意識しなくとも無意識に記憶の片隅に残ってしまう。

次に思い浮かんだのは、あの青い目だ。しかし、カイドーにはその青い目がどす黒く見えて仕方なかった。

無論、見間違いだが――しかし、暗く、暗く、暗く、暗く、闇よりも暗く、今まで見てきたどの人間よりも、生気に欠けた目をしていた。

まるで、死んでいるような。

だからこそ、やはり以前見かけた事があるかもしれない、という自分の考えは、やはりただの勘違いに過ぎないのだろう、とカイドーは判断した。あんな『不気味な奴』に出会っていたらなば、、忘れる筈がない――と。

「やれやれだぜ」

「――――っ！？」

口から心臓が飛び出したかと思った。

いつの間にか、自分の行く道を、一人の男に遮られていた。というより、男がそこに立っていると気付かずに、カイドーが歩み寄ってしまったと表現した方が適切だろうが。

眉が隠れる程度に切り揃えられた銀髪に、百九十近い長身、黒い甚平姿に、ボロボロの草履を履いている。

「よう、兄ちゃん」

男はカイドーの存在に気付くと、その顔にニヤニヤとした笑顔を張り付けながら、気さくに話し掛けてきた。

対するカイドーはと言うと、そのボンヤリと突っ立っているだけ

の男の風貌に、恐ろしくたじろいだ。いきなり目の前に立っていたから――ではない。

仮にも自分は渋谷ダイモンズを率いる男である。見知らぬ男が目の前に現れたところで、ほんの少しの動揺も見せる筈がない。

しかし、この男に限っては――そういう話じゃない、と思った。

その漆黒の甚平は、銀髪の男の内にあるとんでもない何かを、無理矢理隠しているように見える。

カイドーは以前、何十人もの不良グループと真っ向から衝突した時の事を思い出していたが、この男から感じる圧力は、それを遥かに凌駕している。

見れば、周りの人間もまた、この亡霊の存在にまったく気付いてないように見える。男に対して酷く動揺しているカイドーに不審な目を向ける事はあっても、銀髪の男には全く反応していないようだった。

「二階堂征志――噂は聞いてるぜ」

「……」

何で俺の名前を――と一瞬、思ったが、しかしよく考えれば、自分はこの渋谷近辺ではそこそこ有名なので、すぐにその疑問を放棄した。

「十九という若さにして、かの不良グループ、渋谷ダイモンズのリーダーを務めてるそうじゃねぇか。そのカリスマ性たるや、歴代の

リーダーの中でもぴか一、だとか」

「…別に」

カイドーは、銀髪の男から顔を逸らした。

「…俺は何もしてない。兄貴が抜けた後の枠に納まってるだけだ。…とんだ買い被りだぜ」

「ふん。だったら俺も、お前の事を買い被ってもいいかい？」

カイドーはウンザリどころか、呆れも軽蔑も通り過ぎた、とでも言うように、深いため息をついた。

「――ったく、オッサン。事情はよく分かんねーけどよぉ――アンタ、すっげえ変な奴だな、おい」

「やれやれ。オッサンときたか。だけどまあ、こんな歳じゃあ、もう立派なオッサンか。しかし、今は優男よりも、ナイスミドルなオッサンの方がモテる時代だしな。そう思えば、悪くない」

「……」

カイドーは、舌打ちしたい気分を必死で堪えて、銀髪の男に対して完全に背を向けた。

何だ、誰かと思えば、誰彼構わず馴れ馴れしく声をかけるだけの、ただのイカレたオッサンじゃないか――と。

「二階堂征志」

再び、銀髪の男はカイドーの名前を呼ぶ。

その声の質が、先程までと違うと気付き、カイドーは思わず足を止めた。

「お前――ダイモンズなんかやめて、俺と《つるめよ》」

「！！！！！」

心臓が一拍、鼓動をすっ飛ばした。

体中から、冷や汗が噴き出す。

足が震えるのを、感じる。

理由など、ない。全くもって、皆無だ。今のような台詞など、同じ不良仲間からは散々言われた、特に、何か重大な告白を受けた、という訳でもないのに――

ないのに――だ。

まるで、天啓を受けたかのように、カイドーは、体中が痺れるような感覚を、味わった。

「俺は今、ちょっとした事情があって、仲間――まあ、お前風に言えば、舎弟だが――を集めてる」

カイドーの動揺など、露知らずといった物腰で、銀髪の男は言葉を続ける。

「どうしてかって言うと、俺は立場上、あまり表立って、人間と関わりを持てない存在でな。必然、自分の言うことを聞いてくれる『同志』が必要なのさ」

「あ、あぁ――？」

人間と、だと？

何だそれは。

それはまるで――この銀髪の男が、人間ではないみたいではないか。

そんな――馬鹿な事があるか。

そんな『非日常』。

ありえる筈が……。

「まあ、実を言えば、少し前まではこんなちっせぇ事件、全く興味なんかなかったんだけど……。中々どうして、さっき、『面白い奴』を見つけてな、俺も一つ、『物語』に関わりたくなってきちまったのさ」

表紙のイラストがエロっちぃから、是非ともこのエロ本を買ってみよう、とでもいいたげな態度で（意味不明）、銀髪の男はどんどん自分の話を展開していく。

「それに差し当たって、お前は中々どうして、俺の利に繋がりやす

い存在だからな。お前を手中に納めるって事は、渋谷ダイモンズの面々を手中に納めるのと同じ事だ。お前もさっき、自分で言ってたろ。今ダイモンズのリーダーをやってるのは、兄貴とやらの後釜を務めてるだけだ、って。お前は、そんな誰かの代わりをやって終わるような男じゃないんだよ。お前の『居場所』を、俺が与えてやる――お前はその場所で、自分のやりたい事を思う存分やるといい」

「…おい、オッサン」

出来る限り平静を装った声で、カイドーは《ささやかな》反論を試みる。

「さっきから黙って聞いてりゃ――アンタ、マジで頭オカシイんじゃねえか？　初対面だっつーのに、馴れ馴れしいんだよ。大体、俺がアンタに従ったところで、俺になんの得が――」

「兄貴の仇を討ちたいとは、思わねぇか？」

「……っ！！？」

いきなり――

いきなり何を言い出すんだ、この男は。

三度――カイドーの体が、震える。

本当に、頭がオカシイのか？

……いや、違う。

今の台詞は、そんな解釈で済む類ではない。

「な、なんで兄貴の事……」

「――知ってるかって？　そりゃお前、俺がそれを知ってるからさ。んなの、聞くまでもないだろうが。――ったく、やれやれだぜ。俺は知ってる事しか知らないし、知らない事は当然、知らない。まぁ、それはさておき、だ。どうだ、二階堂征志。俺と遊ぼうぜ。お前は俺に従う代わりに――俺はお前の兄貴の仇を見つけてやる」

「――けっ」

ようやく、カイドーは再び、銀髪の男へと視線を移す。

「ふざけんじゃねぇよ、取引にすらなってねぇ。俺がアンタに手を貸した所で、アンタが本当に兄貴の仇を見つけてくれる保障は、どこにもないだろうが」

「――ふんっ、警戒するねぇ…。ま、それも当然か。ったく、やれやれだぜ。だけど、だ。二階堂征志、今のままじゃ、お前はその犯人を捕まえる事は出来ない、と断言してやるぜ」

「……」

それは――。

傍から聞いていれば、単なるハッタリにしか、聞こえないけど。

だが、しかし。この銀髪の男は、冗談でそんな事を断言する人間ではない。と、カイドーは直感していた。

実際、これからはともかくとして、今までにも、カイドーは兄の仇を往年に渡って探し続けてきたが、全くと言っていい程、手掛かりが掴めなかった。

『連続吸血事件』。

それは、何人もの人間が、体から全ての血を抜き取られた状態で見つかるという、あまりにも『非現実的』な事件。

カイドーの兄は――その数多くいる犠牲者の中の一人だった。

あれから、随分経つ。

もたもたしていたら、時効がきてしまうだろう。

いや、しかし……。

それでも、見知らぬ男の言いなりになるというのは…。

「セトさんセトさーんっ！」

カイドーの混濁した思考は、突然後ろから発せられた元気一杯の声に、遮られた。

振り向けば、そこには明るいグリーンの目をした、黒髪ショートカットの女子高生が、両手にビニールを提げて、こちらにちょこちょこと小走りに近付いてくる所だった。

その動作は、まるで小動物の様な愛くるしさがあり、先程までカ

イドーを覆っていたシリアスなムードが、音をたてて崩れていく。

その少女のすぐ近くで、コンビニのドアが閉まったところを見ると、どうやらコンビニからの買い物帰りという事らしい。

無論、カイドーはこんなカタギの女子高生を知り合いにもった覚えはないので、自分の側で一転、メンドくさそうな表情をしている、銀髪の男の知り合いなのだろう。

しかしまあ、この男にしても、明らかにとてもカタギには出せない様な威圧感を醸し出しているので、こんないかにも平凡な女子高生の知り合いがいるという事に、カイドーは少なからず驚いた。

少女は、銀髪の男と向き合っているカイドーの姿を認めると、きょとんとした表情をする。

「あれあれ？　誰ですか、その人？　セトさんの友達？」

先程からこの少女が、銀髪の男に対して『セト』と呼んでいる事から、どうやらそれがこの男の名前らしい、とカイドーは薄々気付いていたが、しかし随分日本人離れした名前だ、と思った。

セトは、相も変わらず尊大な態度で少女の質問を無視すると

「遅えよ、ボケ」

と、開口一番、辛辣な言葉を放った。

「たかが食料の買い込みに、どれだけ時間をかけてやがる。――ったく、やれやれだぜ」

「あう…す、すいませんすいません！」

「ふんっ、まあ、いいけどな。俺はたった今、こちらのお兄さんを仲間に引き入れようとしてたところだ」

言いながら、セトは少女が持っているビニール袋を一つもぎ取ると、そこから『週間少年ジャンプ』を取り出し、立ち読みをし始める。

「……」

いい年してんなモン読んでんじゃねぇよ、とカイドーは思った。

「カイドー」

ジャンプに目を通したまま、セトが口を開いた。

「コイツは、鮑美海狗って言って、俺にとっては、今のところ唯一の同志だ」

「鮑美海狗ですっ！　よろしくよろしくっ！」

ブンッ、と勢いよくミクは頭を下げる。やたらテンションの高い女だな、と思いながら、カイドーは無言でそれに答えた。

「…たった二人で、本当に兄貴を殺った奴を見つけられんのかよ」

「お前が入れば、三人だ」

クックック、とセトは、おかしそうに笑う。

「じゃあこうしようぜ、カイドー」

読んでいたジャンプをパンッ、と閉じると、セトはカイドーと視線を合わせる。

直に視線を合わせた事で、今まで感じていた威圧感が、より一層強くなり、思わずカイドーは一歩、退いた。

「とりあえず、今は仲間にならなくてもいい。だけどもし、俺達がお前の兄貴の仇を見つけた、或いは捕まえた時は、俺の仲間になれよ」

その顔に、微笑を浮かべたまま――

セトは、言葉を続ける。

後から会話に参加したミクは、事情が分からない為、頭に幾つかの疑問符を浮かべながら、セトとカイドーとの顔を、キョロキョロと交互に見ていた。

「安心しろよ。そう時間はかけない…。かといって、俺もそれなりに忙しい身だしな…。…よし、4日だ。今から4日後までに、犯人を見つけると約束してやる」

「四日…」

それは――

セトがどう思っているかはさておき、四日という期間は、カイドーにとっては相当に短い期間だ。自分が何年もかけて見つけられなかったものを、この男はそうも簡単に、そうも短期間に、見つけてしまおうというのか。

だが、カイドーはそれを、とんだ流言蜚語だとは思わなかった。

むしろ、この男なら――その程度のこと、いとも簡単に成し遂げてしまうだろうという、奇妙な――しかし、確固たる確信があった。

セトはそれから、何も言わなかった。しばしの間、二人の間に静寂が漂う。

カイドーには、周りにいる道行く人々の喧騒も、幾つかの店から流れる音楽も聞こえず、ただ、ボンヤリと、セトがこちらの返答を静かに待っている――否、促しているのだと、理解できた。

「……いいぜ」

それが、カイドーが口にした返答の内容だった。この一言こそが、新たなる一歩だと、カイドーは気付いていた。

「――いいぜ。乗ったぜ、オッサン。元より、俺はチームの事なんざどーでもいい。俺が望んでんのは昔から今の今までただ一つ――

――復讐だけだ。

それが終わった後なら、アンタとつるんでやってもいい」

「決まりだな」

ニヤリ、と。

心底面白いとでも言うように、セトは笑った。

そして、セトは未だ状況が掴めていないミクの首に腕を回すと、引きずるように歩き出す。

「グエッ！　ちょ、ちょっとちょっと！　苦しいですよ！　セトさん！」

当然、抗議の声が上がる。

「――と、そうだ。忘れるところだった」

しかし、やはりというか何というか、セトはミクのそんな抗議の声を無視しながら、何かを思い出したように、再びカイドーへと顔を向ける。

「同盟条約の記念だ。これをやるよ」

そう言って、セトは自由の利く方の手で、懐から何かを取り出すと、それをカイドーに手渡す。

「…あ？　何だ、こりゃ？」

渡されたのは、今流行りの携帯ゲーム機だった。

確か、今世界中で話題を呼んでいる、人気のゲーム機だった筈だ…。カイドーはゲーム自体をあまりやらないので、よくは知らないが、それでも、そのデザイン自体は、テレビのＣＭで何度か見かけた事がある。

「今のお前に、必要なモノさ」

そう言って、セトは再びカイドーに背中を向ける。

「それと、最後に一つアドバイスをしてやろう。お前が求めてやまない復讐の相手――残念ながら、ソイツが『どんな奴』かは俺の知るところじゃないが、だけど、『どんな存在』かは知ってる」

「……？」

「ソイツは――人間じゃない」

「なっ……！？」

一体、この男は――何を、どこまで知っているというのか。

「じゃあな、言っとくけど、そのＣＯＭＰ、捨てたりすんなよ」

そう言って。

今度こそ、セト（とそれに引きずられる鮫美海狗）は、カイドー

の前から姿を消した。

しばらくの間、カイドーは呆然としてしまう。

まるで、狐につままれたように。

まるで、夢でも見ていたように。

まるで、深い霧に迷い込んでいたように。

全てが――非日常。

全てが――あやふや。

カイドーは、セトと名乗ったあの男と、安易に約束を交わしてしまった事について、一瞬考えたが、すぐに考えるのを止めた。

今思い返してみても、自分の選択に、何ら後悔はしていなかった。

それが何故なのか、という疑問の結論を出すには、幾らかの時間を必要とするだろうが――しかし、だが、それでも、とにかく、誰が何と言おうとも、

後悔はしていない。

――いや、よくよく思い返せば、ただ単に見知らぬオヤジに絡まれて、で結局こちらのプライバシーなどを赤裸々に語られた上で半ば無理矢理に妙な約束をふっかけられただけのような気もするけど……。

それでも、あの男に出会えたのは、間違いなく幸運だったと、二階堂征志は、本心からそう思った。

「――ふん、まぁいいさ」

「――丁度、平凡でクソつまらねぇこの日常に、飽き飽きしてたところだ」

「――あの猫耳のガキといい、今の甚平野郎といい、今日はどうも変な奴にばっかり会いやがる」

「――だったら、無駄な抵抗なんざ、しねぇよ」

「――刺激のある出来事なら、それが蛇であれ鬼であれ――」

「大歓迎だ」

そう言って。

二階堂征志は、誰に指摘されるまでもなく、誰に促されるまでもなく、ただ本能に従うかのように、ＣＯＭＰを起動させた。

午前九時二十分。

東京封鎖の一日目は、まだ始まったばかりである。

1st Day『デビルオークション』

『神に魅入られた銀色（イザナギ）』が、二階堂征志を仲間に勧誘している頃、『死神（タナトス）に魅入られた青色』の血を受け継ぐ有里淳と、その二人の友人は、それぞれＣＯＭＰに届いた『二通』のメールに、目を通していた。

『ＦＲＯＭ：ＮＡＯＹＡ
ＳＵＢＪＥＣＴ：機能を追加した

＞淳、頑張っているか？

新しい機能を組み上げたので、渡しておく。

このメールの受信に合わせて、ＣＯＭＰのトップメニューに、悪魔オークション＝通称『デビオク』が追加されている筈だ。

おそらくオークションサイトからも、メールが送信されているだろう。

悪魔との戦いに勝利した時、手に入る魔界の通貨『マッカ』は知ってるか？

オークションには、そのマッカが必要だ。

まあ、魔界の沙汰も金次第と言うヤツさ。

どうか生き残ってくれ。

お前に会うのを楽しみにしている』

『ＦＲＯＭ：デビオク事務局

ＳＵＢＪＥＣＴ：ようこそ、デビルオークションへ

＞悪魔オークション、『デビオク』へようこそ！

当サイトは本来、面倒な駆け引きを必要とする悪魔との契約交渉を代行する、会員制のオークションサイトです。

出品者である悪魔は自らを商品として出品し、会員様は彼らと契約する権利を競売して頂けます。

落札後、契約を交わした悪魔たちは、会員様の心強いパートナーとなるでしょう。

では、背徳的な悪魔オークション、『デビオク』をお楽しみください』

「悪魔オークション……！？　な、何なのこれ……！　どういう事！？」

突然受信されたメールの内容を確認していたユズは、酷く驚いていたが、淳には事の次第がほぼ理解出来つつあった。

「……つまり、悪魔が自らを売り込んでるって事だろ？　中世の頃にあった奴隷売買みたいにさ」

もっとも、今回売買されるのは人間ではなく、悪魔だが。

「……そうみたいだな。これで一つだけ、ハッキリした事があるぜ」

何かを確信したように、アツロウは言う。

「悪魔は、ずっと前から、この世界にいるんだ。そして、それを知ってる人間もな……」

「な、何でそう言い切れるの……？」

「考えてもみろよ。オークションが成り立つには、運営側や出品者だけじゃなく、顧客も必要だ」

「俺達以外に入札者がいるって事は、このメールを受け取る以前から、オークションが存在してた、って事か？」

後半からを引き継いだ淳の説明に、アツロウは「ああ」と頷く。

「……そっか、そうだよね。でも……何だかショックだよ……。アタシたち、何も知らないで、生きて来たんだね……」

ユズは、今までの自分の無知さ加減に落ち込んでいたが、それに対して淳の中では、それと逆の気持ちが芽生えつつあった。

「……でも、チャンスだ」

自然に、その表情が綻ぶ。それを見て、アツロウも淳の考えを悟ったようだ。

「チャンス……？　……！　そうか、確かにそうだな……！」

「もうっ、二人だけで納得しないで！　アタシは全然分からないってば！」

ユズのイライラした様子に、アツロウはバツの悪い顔をすると

「ああ、悪い！　でも、いいか……俺達は今日、何らかの理由で殺される可能性が高い。……まぁ、この状況下だから、多分悪魔の仕業だろうけど……」

「うっ……」

「……でも、このサイトで強い悪魔を味方につければ、その悪魔と戦える……！　つまり、生き残れる可能性が高くなるんだ！」

「……それで、悪魔を手に入れて戦えって言うの？」

ユズは、アツロウの言いたい事は分かるが、しかし承諾しかねる、という態度だった。

「もうヤダ……！　何で戦わなくちゃいけないのよ……」

「ユズ……」

それを傍から見ていた淳は、胸が締め付けられるような思いだった。

無理もない。

全くもって――無理もないことだ。

誰だって、戦いたくはない。自分達は、つい最近までは単なる高校生に過ぎなかったのだ。

それなのに、いきなり悪魔という存在を目にして、しかも命を狙われて、それで自分達の死ぬ日まで指定されて、トドメは東京から出られないときた。

常人なら、今頃パニックを起こしていても、不思議ではない。どころか、それが当たり前だ。

ユズにしても、既にギリギリの状態なのだろう。アツロウにしても、表に出さないだけで、内心では相当まいっているのかもしれない。

だけど――

仕方ない。

仕方ない――事だ。

仕方ないで済む状況ではない、と分かっているが――それでも、仕方ないのだ。

例え今、自分達がどれだけ悲劇的な状況にいようと。

それが現実なのだから。

なるようになってしまったモノは――仕方ない。

諦めよう。

そして、進もう。

進むんだ。

進まなければ。

進むしか――ない。

それが――現実だ。

だから、言わなければ。

淳は、ユズに向かって、なるべく気を遣って言葉を紡ぐ。

「……生き残る為だ」

「う……そうだけどさ……」

ユズの悲痛な面持ちが、淳の顔に向けられる。

嗚呼――。

畜生。

どうして、言えないんだ。

『全部俺に任せておけ』、と

どうしてそう、自信をもって言えないのか。

『守ってやる』の一言さえ、言えないのか。

それはきっと――弱いから。

弱い。

俺は、有里淳は、どうしようもなく弱い。

救いようがない程に、脆い。

砂で作った城のように。

いとも簡単に――崩れる。

崩壊し、没落する。

自分の弱さに、腹が立つ。

どれだけ奥歯を噛み締めようとも、どれだけ両の手を握り締めようにも、現実は変わらない。

変わりようがない。

「で、でも、悪魔に会ったら、出来るだけ逃げようよ、ね……？」

ユズの言葉に、アツロウも頷く。

「そうだな……逃げられるなら、それに越した事はないよ……。だけど、逃げられなかった時は、そん時は腹をくくるしかないだろうな……」

「……そうだな。オークションでも何でもやって、戦う力をつけてやるさ……」

淳はそう言うと、自分達を取り巻く空気が、酷く淀んでいる事に気付く。少し暗くなり過ぎだ、と思い、淳は別の話題に切り替える事にした。

「あ、あ～それより、ホラ、ナオヤのメールに、『マッカ』とかってあったろ。アレって一体何なんだろうな？　ナオヤ曰く、悪魔を倒したら貰える通貨らしいけど、そんなモン出てこなかったよな？」

『マッカ』

『魔界の通貨』と書いて、『魔っ貨（マッカ）』と読むのかもしれないが……。

まぁ、それはさておき。それこそ、ＲＰＧじゃあるまいし、倒した悪魔から金貨がチャリンチャリンと音をたてて出てくるという事は、これまでになかった。

「あ……、そういえばそうだね……。それって、どういう事かな？」

淳とユズが当然の疑問を挙げるなか、アツロウだけはその疑問の解答を、既に得ているようだった。

「ああ、それなら多分……二人とも、ＣＯＭＰを見てみろよ」

「「？」」

二人が怪訝に思う中、アツロウは自らのＣＯＭＰを手早く操作する。そして、一つの画面にジャンプすると、二人の眼前にＣＯＭＰを翳してみせた。

「ホラ、ここに『所持金：１２３４』て表示されてるだろ？　多分、これが、ナオヤさんの言う『マッカ』ってヤツなんだよ。きっと、お前らのＣＯＭＰにもあると思うぜ？」

アツロウに言われた通り、淳とユズも各々のＣＯＭＰを開き、自分達の所持金を確認する。するとそこには確かに、アツロウのと同じ額だけの所持金が表示されていた。

「おお、ホントだ。でも、コレって一体、どんな仕組みなんだ？」

機械の類にイマイチ耐性のない淳には、未だにこの『マッカ』という物の仕組みが分からない様だ。

アツロウは、そんな淳を見て苦笑すると、

「多分だけど、ＲＰＧで言うところの経験値みたいなモノじゃないか？この場合、多分悪魔の生体エネルギーがＣＯＭＰに吸収されて、それが『マッカ』として……そう、『換金』されてるんだと思う」

「ふぅん……ようするに、悪魔を倒すだけで、ＣＯＭＰの中にその『マッカ』とやらが貯まってくって事か。便利だな」

正直、悪魔を倒した後、地面に落ちた金貨を拾い集めるという光景は、あまりにも惨めでしかないので、淳はナオヤのプログラマーとしての技術に改めて感服する（これは別に珍しくない）と共に、感謝（これは非常に珍しい）もしていた。

淳はよしっ、と一つ頷くと

「それじゃ早速、どっか落ち着ける場所に移動して、その『デビオク』ってヤツに参加しようぜ。仲魔は多いに越した事はない」

◆

◆

――渋谷、宮下公園

その中の木陰の中で、淳、アツロウ、ユズのいつものメンバーに加え、何故か彼等の仲魔であるコボルト、カブソ、ピクシーもその姿を晒していた。

無論の事、周りに他の人間がいないか、という点については、細心の注意を払っている。幸いにも、淳達以外の人間はこの公園にいなかった。

初めて悪魔の競売に参加するにあたって（当たり前だ）、本家本元である自分達の仲魔――『悪魔』の意見も取り入れるべき、と淳が提案したのだ。

アツロウとユズにしても、その意見には素直に賛成した。自らを出品している悪魔達には悪いが、万が一『不良品』を高値で売られたら堪らない。その目利き役という事で、仲魔達にも協力して貰おう、という事になったのである。

「ふ～ん、これがデビオクかぁ……」

そう呟いたのはピクシーだ。

「あ、ヤッパリ知ってる？」

「そりゃあねぇ、私は参加した事ないけど、でも、魔界で手っ取り早く金を稼ぐ手段として、デビオクは有名だったから、それなりの予備知識はあるわ」

「……他に、魔界で金を稼ぐ方法って、何があるんだ？」

大体予想がつきつつも、淳は恐る恐るといった様子で、三体の仲魔達に尋ねる。

「「「殺して奪う」」」

やはりというか、三体から帰ってきたのは、そんな答えだった。

カブソは苦虫を噛み潰したような表情で（悪魔である彼等が苦虫を噛み潰した際の表情など、当然淳は知らないのだが）、

いわく、魔界は実力主義の完全な縦社会であり、力のない悪魔は苦しい生活を送っているらしい。そういう意味では、人間の社会もあまり変わらないな、と淳は思った。

「だから、あっしらみたいな力のねぇ下級悪魔は、こういう場で自らの価値を人間に売り込むしか、手段がねぇんだ。まぁ、あっしらの場合はおみゃあらが無償で引き取ってくれたから、その必要はなかったんだけどもな～」

「ははっ……」

後半を爽やかな笑顔（明らかに猫顔である彼の表情の変化を見極めるのに、僅かばかりの努力が必要だった）を見せながら話すカブソに、淳はただ苦笑するしかなかった。

『こっちは無料でお前らを引き取った代わりに、危うく殺されそうになったんだけどな☆』という突っ込みをこの場でするのは、いささか躊躇われた。協調性がない奴だと思われるのは困る。

三人（仲魔を合わせると六人）は今、淳が開いているＣＯＭＰのディスプレイに意識を集中させていた。

一人が今流行りの携帯ゲーム機を開き、その両脇から二人の友人がその画面を覗き込むまではともかく、淳の頭にちょこんと乗っているピクシー（手の平サイズの全身タイツ女）、同じく淳の膝の上に指定席とばかりに居座っているカブソ（カッパと猫を足して二で割ったような妖怪）、唯一、立ち上がってそんな光景を見下ろしているコボルト（半獣人）までもが加わると、これほどシュールな絵面はない。

「今んところ、出品されてるのは……」

淳は、ＣＯＭＰからデビオクのサイトへ繋ぎ、その競売リストへと目を走らせる。

今回、出品されているのは、次の悪魔達だった。

・魔獣　カブソ　Ｌｖ２

・妖精　やさぐれピクシー　Ｌｖ２

・闘鬼　コボるどん　Ｌｖ３

・闘鬼　コボルト　Ｌｖ３

・妖精　セレブ御用達ピクシー　Ｌｖ３
・邪鬼　オーガ　Ｌｖ４

――以上、六体。

「おいおい、お前らの同族も売り出されてるぞ」

淳は思わず噴き出しながら、悪戯っぽい笑みを浮かべて三体の悪魔に視線を向ける。

それを受けたコボルトは、ニコリともせずに（ニコリとしたらそれはそれで怖いですよ。何せ犬顔ですし）

「悪魔にハ、下級、中級、上級、の、三ツの階級で、分けらレてル。デビオクに、出品さレて、イルのは、主に、下級の悪魔達、ダ。……稀ニ、例外はある、ガな。下級の、特徴ハ、何と言ってモ、その種族全体ノ、数の多さニあル」

「へぇ……」

何だか、トレーディングカードゲームみたいだな、と淳は思った。レア度の低いものほど数が多く、逆にレア度が高いものはその数が少ない。勿論、そんな事は口に出さないが。

「……で、誰にするんだ、ジュン？」

淳のＣＯＭＰに表示されているデビオク競売画面から目を離さないまま、アツロウは尋ねる。

「当然、俺達の『マッカ』にも限りはあるから、誰を買うかは慎重に決めたいところだぜ」

「ああ、分かってる」

ちなみに、現時点での淳達のマッカの総額は、千ちょっと、というところだった。後で分かった事なのだが、アツロウが初日に言ったように、自分達のＣＯＭＰは本当に『三つで一つ』らしい。

つまり、例えそれぞれのＣＯＭＰに表示されているマッカの総額が三だったとしても、それは三台合わせての金額らしく、合計三千という事にはならないのだ。

これからどの悪魔を落札するべきか、と淳が頭を悩ませていると、頭の上から「あ～、そうそう」とピクシーが意見を出してきた。

「因みに、出品されている悪魔の価値や値段を決めるのはオークション側で、出品者である悪魔達じゃないから、ぼったくりの心配はないわよ。安心して競売しなさい」

「あ、そうなの？」

ずっと心にひっかかっていた心配事の一つが消えて、淳達は少なからず安堵した。

「どうせだから、デビオクについて、アタシが知ってる事を全部教えてあげようか？」

「ああ、頼む」

デビオクに限らず、そもそもオークション自体が不慣れである三人にとって、ピクシーの気遣いは有り難かった。

ピクシーから聞いた『デビオク』の制度は、要約すると次の通りだ。

●自分達のように、競売に参加する人間――『悪魔使い』である会員には、オークション側が定めた『会員ランク』という物が存在する。

●『会員ランク』には『普通』・『ゴールド』・『プラチナ』・『アングラ』の四階級があり、『普通』が最低会員ランク――つまりは、今の淳達の会員ランク――であり、最高会員ランクは『アングラ』である。

●ランクが高ければ高い程、当然、出品される悪魔も強力になり、その種類も増える。

●『会員ランク』を上げるには、一定数以上の『ランクポイント』が必要である。

●『ランクポイント』とは、ポイントカードでいうところのポイントであり、悪魔を競り落とした際に得られる評価の事で、実際に支払った金額の一パーセントが加算される。また、悪魔を落札したにも関わらず、落札代金を支払わずに一方的に契約を破棄した場合は、落札金額の三パーセントの数値分のランクポイントが減少する。

●自分の会員ランク以上のランクでのオークションには参加できないが、自分のランク以下のオークションに参加する事は可能である。例えば、会員ランクが『アングラ』である会員が、『普通』のオークションに参加出来ないという事はない。

●出品される悪魔には『☆』という、オークション側が判断した評価が表示されており、一～五までの『☆』の数で評価される。『☆』の数が三を平均とし、『☆』が四～五の悪魔はレベルが高く、特殊なスキルを所持している傾向がある。逆に『☆』の数が少ないと、安価ながら能力値は低下傾向にある。

●原則として、一度の競売で出品される悪魔の数は一体だが、ランクによっては同一悪魔が複数同時出品されるオークションも存在する。

●出品される悪魔にはよっては出品名……所謂、『あだ名』のようなものが表示されている事がある。特殊な能力を所持していたり、通常より強力な悪魔には意味的にプラス方向のあだ名（例：セレブ御用達ピクシー）が、通常より弱い悪魔にはマイナス方向の出品名（例：やさぐれピクシー）がついている。

以下は、実際にオークションを行うにあたっての制度である。

●『開始金額』……出品される悪魔の、スタート時の金額。競売に参加する際は、最低でも開始金額以上のマッカを所持していないと参加できないし、しても落札出来ない。

●『即決金額』……出品される悪魔には、それぞれ『これだけのマッカを支払ったら、確実に落札できる金額』が設定されている。それだけのマッカを所持している場合は、オークション開始前に即決のメニューに移動して、設定された即決金額を支払うと、オークションを行わずにその場で悪魔が仲魔になる。

●『入札単位』……オークション中、その悪魔を落札する為に一度に上乗せするマッカの最小単位。例として、この数値が五百の場合は、値段を一度釣り上げる毎に、最低でも五百のマッカを上乗せしなくてはならない。

●『残り時間』……悪魔を競売する際には、予め競売を行う際の時間制限が設けられている。この数値がゼロになると、その時点でオークションは終了し、その時、最後に上乗せした会員に出品された悪魔が落札される。

●ただし、その段階で降参状態（以下の『ライバルの状態』参照）になっているライバルがいた場合は、ファイナルビッド（以下の『ファイナルビッド』参照）となり、一発勝負っの入札で決着をつけることになる。

●『ライバルの状態』……オークションを競う他の会員の状態は、ＣＯＭＰの画面にアイコンとして表示される。白旗のアイコンは競売から降りた事を、汗マークはそのライバルの資金的な限界が近い事を示す。

●『ファイナルビッド』……オークションでは参加している他の会員全員を白旗状態にさせる事でもその時点で落札出来るが、相手が降参しなかった場合はファイナルビッドに突入する。

●ファイナルビッドは降参していない者全員が参加する『一発勝負』で、一度だけ入札金額を提示し、そこで最高値のマッカを支払った者がその悪魔を落札出来る。

●『アクシデント』……デビオクでは、落札した悪魔に落札金額を支払う直前のタイミングで、稀に『アクシデント』が発生する事がある。

●アクシデントの内容は、主に『悪魔が無料で仲魔になる』『落札金額を半額にまけてもらえる』『落札金額の倍額を要求される』『落札したものと違う悪魔が登場する』の四種類である。

●この内、違う悪魔が登場したという場合に、その支払いを拒否しても、通常と違ってランクポイントは減少しない。

「ふ、複雑だな……」

ピクシーの語るデビオクの制度が予想以上に複雑だった為、淳は思わず狼狽してしまう。

アツロウやユズも同じように顔をしかめていたが、しかし悪魔であるカブソやコボルトの表情には、殆ど変化がなかった。一見、複雑に思える先程の説明も、魔界では常識の範疇なのかもしれない。

とりあえず、今言われた事を出来るだけ覚えておいて、分からない事があったら後でまた聞く事にしようと思い、淳は気を取り直して、競売に参加する事にした。

そして、散々話し合った結果、今回はオーガを一体、即決入札す

る事にした。コボルトやピクシーなどを購入してもよかったが、既に同じ能力を持つ仲魔がいるのに、同じ悪魔を買うのはマッカの無駄遣いだし、何より外見が同じだと指揮系統が混乱する為、このような結果になった訳だ。

勿論この際、競売で競り勝つべきか、即決で一気に仲魔にするべきか、という議論が六人の中で交わされたが、最終的に即決するという形で収まった。

即決で落札すると、開始金額の三倍のマッカを支払わなくてはいけないものの、オークション相手と競り合うことなく、その場で必ず悪魔を購入できるし、何より――これはピクシーから教えて貰った事なのだが――即決入札した際は、アクシデントは『絶対』に発生しないのだという。

無料、或いは半額で仲魔になってくれたりは歓迎するところだが、倍額を要求されたり、果ては別の悪魔がしゃしゃり出てくる事があったら、正直目も当てられない。

淳達にしても無駄な出費は抑えたいので、これからも、資金に余裕がある内は即決で落札しよう、というのが仲間内での方針になった。

まあ、そういう事もあって。

＞ジュンさんがオーガを落札しました！

「オマエ、オレ、好キなンダナ？　ソれハ良カッタゾ！　オレモおマエ好キ！　ショタイめンダケド、凄ク好キ！　オレ、オーガ。人間ノアイサツ知ッテる。……ヨソヨソシク、お願イシマス！」

（間違ってる間違ってる）

――こうして、淳達は新たな仲魔を迎え入れる事になった。

そして、早速というか何というか、新人仲魔であるオーガと、先輩という立場にあるコボルト、カブソ、ピクシー達の間で、簡単な面通しが行われた。

ピクシーが淳の頭の座り心地は悪くないだとか（ふざけんな）、カブソが自分の体についていたノミをオーガに擦り付けるという謎の行動をとったり（本人曰く、これが仲間になった事の儀式なのだそうだ）、コボルトが同じこん棒使い同士、何か通じる物があったのか、無言で力強い抱擁を交わしたり（暑苦しいからヤメロ）と、意外にも四人はアッサリと打ち解けたので、淳達は何とか上手くやっていけそうだな、と安心した。

１ｓｔ　Ｄａｙ『メールと電話』

――恵比寿駅。

初めての悪魔オークション、通称『デビオク』の初競売を無事に終えた淳達は、それぞれの山手線の様子を見るという、当初の目的に従って、恵比寿に来ていた。

「……まぁ、やっぱりこうなってるよな」

しかし、やはり恵比寿駅周辺も、自衛隊によって通行止めが成されていた。

「ええ～？　ここも通れない……」

目に見えてユズが落胆する中、渋谷駅と同じように、それぞれの自衛隊員が道行く人々に毒ガスについての注意を呼び掛けていた。

「有毒ガスが発生しており大変危険です！　……て、あ、君達！　ここから先は危険だ！　すぐに戻りなさい！」

「……と、少し近付き過ぎたか。戻ろうぜ」

こちらの存在に気付いた一人の若い自衛隊が、追い立てるように三人をバリケードから遠ざける。そんな中、淳はチラッとその自衛隊の頭上に目をやった。

しかし、自分達には表示されている余命が、その自衛隊には表示

されていなかった。しかも、それだけではなく、よく見れば他の自衛隊員にも余命が表示されていない。

ナオヤのメールを信じるなら、彼等は十日以上、生き延びるという事になる。

自分達をバリケードから遠ざけた自衛隊員が離れていくと、アツロウが苦々しい表情で毒づいた。

「畜生……本当に線路に沿って、自衛隊ばっかりだ！　こっちは今日死ぬかもしれないっていうのに……」

「せめてケータイでも繋がれば帰れない事をお母さんに伝えられるのに……」

そう言っていたユズだが、途端、何かを思い出したかのような表情をすると

「あっ！　そうだ！　ＣＯＭＰのメールなら動くんでしょ！？　外と通信出来ないかな……！？」

「その手があったか！　冴えてるなユズ！」

淳がパンッと手を叩いて、ユズを称賛する。そのユズは、淳に褒められた事で、若干頬を朱く染めていた。

「アツロウ、ＣＯＭＰからメールを送るのはどうやるんだ？」

「ああ、やり方はケータイと一緒だよ。ただ、俺達の連絡先とかはＣＯＭＰに登録されてないから、メールアドレスを自力で思い出さ

なきゃいけないけど……」

「え～!?　そ、そんなの思い出せる訳ないじゃん！」

ユズはそう言ったが、しかし淳は何かを思い出すように目を閉じると

「××××××××××．ｎｅ．ｊｐ」

と、流暢な言葉で自分の母親のメールアドレスを口にしていた。

そんな淳の記憶力に、アツロウは舌を巻いていた。

「えええぇっ……!?　じゅ、ジュン、お前、スゲエ記憶力だな……」

「褒めるのは後でいいから、早くメールを送ってくれ」

「お、おお！　よ～し、これが上手くいけば、後はジュンのお母さんに頼んで俺達の親にも連絡が送れる……って、アレ？」

ふと、話しながら淳の母親にメールを送信していたアツロウの手が、ピタリと止まった。

「ど、どうしたの……？」

ユズが問い掛ける中、アツロウは淳が予想した通りの、最悪の結果を口にする。

「『指定のサーバに接続出来ません』……だってよ」

「え……っ！？　繋がらないの？　どういう事？」

ユズの問いに、アツロウはしばらく考え込んだ後

「……このＣＯＭＰ、元からナオヤさんの組んだものだからな……。もしかすると、通常のサーバや、普通のＣＯＭＰに通信する機能なんて、ないのかもしれない……」

それを聞いたユズは、最早落胆を通り越し、むしろ諦めた様な表情を浮かべる。

「つまり……ダメなんだね。……いいよ、他のトコ、探しに行こう……？」

ユズはそのまま、まるで今の現実から逃げるように、淳とアツロウを置いて、そのままサッサと歩き出してしまった。

淳とアツロウは、沈痛な面持ちでお互いに目を交わすと、同時にため息をついた後、慌ててユズの後を追った。

◆

◆

「――よう、直斗。俺だ」

『あっ……！　その声はもしかして、先輩ですか！？　お、お久しぶりです！』

「ははっ、全くだな。こうしてお前の声を聞くだけでもかなり――って感じだ。ったく、やれやれだぜ。これがプライベートな電話だったら、まだ救いようがあるんだけどな」

『何か……困り事ですか？　風の噂によると、その……東京が封鎖された、とか……』

「ハハッ、聡いね、相変わらず。まあ、そういう事だよ。で、俺は今、その現場にいる――て、ああ、ダメだよダメダメダメッ！　いや、お前の気持ちは有り難いけど！　俺は大丈夫だから！　絶対にこっち来んなよっ！？　――ったく、やれやれだぜ。お前にちょっと、調べて欲しい事があるんだ」

『調べてほしい事……ですか？』

「ああ、『セベク・スキャンダル』って言う、随分前に、御影町で起きたテロ事件だ。白鐘の力を全て注いで、出来る限りの事を調べて欲しい」

『はい……分かりました。貴方の期待に応えられるよう、全力を尽くします』

「サンキュー直斗、愛してるぜ」

『なっ……！？』

「礼はいつもの方法で送る。言うまでもないが、これは極秘事項だ」

『そんな……お礼なんて……、僕は貴方の役にたてれば……』

「俺がそうしたいんだよ。言っとくが、俺の心配なら無用だ。陽介達にもそう言っておいてくれ」

『はい……。それじゃ、あの……先輩、どうかお気をつけて……』

「ああ――じゃ、頼んだぜ直斗」

1st Day『高城圭介』

――新宿、歌舞伎町。

「……暑い」

そう言い出したのは淳だ。

しかし、それを聞いても隣にいるユズは何の反応も示さない――その代わり、『またか』とウンザリした表情を作るだけだった。

「暑い暑い暑い

するとどうした事か、今度は一転、淳は太陽を褒め始めた。

「つまり、つまりだ。俺はこう言いたいんだよ。俺達は太陽に頼り過ぎてる。今まで散々、お世話になったんだから、そろそろ太陽にも有給休暇の一つや二つは与えてやってもいいだろうと思うんだ。一日、二日……いや、もういっその事、一年や二年ぐらいは太陽に休暇をやるべきだと、俺は声を大にして主張したい訳だ。そうすれば、俺も暑さから解放されて、太陽も悠々自適な長期休暇を貰えて、どっちも幸せになれる。正しく、一石二鳥じゃないか」

「……」

どうやら、今までの太陽を罵倒していた姿勢を改め、逆に褒めたたえる事で現実逃避するというスタイルに移行したらしい。

暑さに対して不満を漏らす少年といえば、それは酷くありふれた日常の一コマでしかないようだが、しかし、その結論を導き出すまでに有里淳がとった方法は酷く変哲だった。

それを聞いていたユズは、いかにも『仕方ないなぁ』という雰囲気を醸し出しながら、一つため息をつくと

「そうだね……暑いよね……バスもタクシーも止まってるし、もう、汗だくだよ～（超☆棒読み）」

と、調子を合わせるのだった。

「はぁ……アツロウ、まだ戻って来ないかな？」

そう言って、ユズは新宿駅へと続く道へと視線を向ける。新宿駅、及びその近隣の封鎖状況――あわよくば、その内のどこかに抜け道がないか――を見る為に、その場に向かった（ジャンケンに負けた）アツロウが帰ってくるのを、手持ちぶたさにしている淳とユズが待っているという状況だった。

そこに、ようやく偵察を終えたアツロウが帰ってきた……が、その表情があまり優れていない事に、淳は気付いた。

「……ダメだった。新宿駅から西都新宿駅まで、ガード下はぜんぶ自衛隊に封鎖されてたよ……」

案の定、その口から発せられる報告は、あまり好ましい結果とはいえない。

「自衛隊が言ってた通り、山手線に沿ってバリケードが築かれている」

しかし、アツロウの報告を聞いても、淳は諦めなようとはしなかった。

「それでも、何事においても、完璧なんて有り得ない。必ずどこかに『穴』がある筈だ。諦めずに探そう」

それを聞いたアツロウも、少しばかり元気を取り戻す。

「ああ、そうだな。……って、あれ？　あいつは……『ケイスケ』？」

「「？」」

そう、聞き慣れない名前を呟いたアツロウの視線を、淳とユズも追う。

そこには、黄色いTシャツに、黒いジーンズ。黒い髪を七三分けにし、眼鏡をかけた神経質そうな少年がいた。歳は自分達と同じぐらいだろう。向こうも、アツロウの存在に気付いたようだ。こちらに驚いた表情を向けている。

「えっ……アツロウ？」

「やっぱりケイスケか！　久しぶりだな！」

途端、アツロウは先程の偵察の不服な結果など忘れたように、嬉しそうな顔をする。

「アツロウ、知り合いか？」

「ああ、こいつ、中学校時代の友達で、ケイスケって言うんだ。あの頃はずいぶん世話になったよ。今の俺がいるのもケイスケのお陰だ」

そう言うアツロウの台詞には、一切の世辞は含まれていないように思えた。心から、このケイスケという少年に感謝しているという気持ちが伝わってくる。

それが分かって、淳は思わず頬が緩みそうになった。こんな状況下だからこそ、友人の喜ぶ姿は素直に嬉しい。

アツロウが言う掛け値なしの褒め言葉に、ケイスケは困ったよう

な表情をする。

「べ、別に……」

しかし、次の瞬間、ケイスケがこちらに顔を向けたかと思うと、その表情は驚愕と、そして怯えのあるものへと変わっていた。

「あ、アツロウ……いや、三人とも……数値が……」

ケイスケが『数値』と口にした瞬間、淳の眉がピクリと動いたがしかし、彼は何も言わなかった。同時に、サッと目を走らせてケイスケの余命が『1』である事を確認した。

アツロウも、キョトンとした表情を浮かべると

「え……？　今、何て……！？」

「な、何でもない！　ボク、もう行くから！」

ケイスケはアツロウの疑問には取り合わず、怯えたような表情を浮かべると、三人に背を向けて逃げるように姿を消してしまった。

「え？　あ、おいっ！　ケイスケっ！？　……アイツ、どうしたんだろう？」

「……余命だよ」

全くもって面白くなさそうに、淳は呟く。

「え？」

「アイツ、さっき『数値が』って言ったろ。多分――いやきっと、余命が見えてるんだ」

「えっ……？　じゃあ今の人、私たちの余命が『0』なのを見て、逃げたの！？」

それを聞いたユズが、憤慨した様に口調を荒げた。

「何それっ！？ヒドイっ……！」

だが、そんなユズを見て、アツロウは慌てた様に

「……な、何言ってんだよ、ジュン！　余命が見えてるのはCOMPを持ってる奴だけだろ？　それに……あいつは、そんな奴じゃないさ」

「……」

COMPについては、翔門会の件があるので、何かの偶然で手に入れた可能性はあると思ったが、口には出さなかった。

「……そんな奴じゃないって、アツロウ、何で知ってるの？」

「ああ、アイツは正義感の強い奴でさ、気が弱い奴らにとっては、ほんとうに頼れる奴だったよ。……俺も何度か助けてもらったなあ……。アイツがいなかったら、三年間、パシリやってたかもしれない」

「……なるほど、確かに頼れる奴みたいだな」

言いながら、アツロウが誰かにパシられてる構図がかなり似合ってるとも思ったが、勿論、そんな事を口には出さない。

しかし、アツロウの話を聞いても、ユズは釈然としない様子だった。

「ふぅん……でも、凄く弱気な人に見えたけど？」

「……うん、そうなんだよな……。マジで、何があったんだろ？高校に入ってから、いきなり連絡取れなくなっちまったんだよ、アイツ……。ところで、ジュン。ケイスケの余命ってどうだった？」

「『1』」

淳は至極完結に答えた。

それを聞いたアツロウの表情は、やはり苦々しいモノだった。

「『1』……！？　くそっ……、ケイスケも……明日には……！」

「……安心しろよ。アツロウ、ナオヤのメールにも、余命は変えられるってあっただろ？　俺達が何とかして、ケイスケ君とやらの余命を伸ばしてやればいい」

「そ、そうか……！　そうだよな……！」

「……ま、それよりも、俺達の余命の方が先だけどな……」

淳が悪戯っぽく舌を出したのを見て、アツロウとユズは思わず苦

笑いした。

1st Day『高城圭介』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・ケイスケ（高城圭介（たかしろけいすけ））

年齢：17歳

誕生日：5月2日（おうし座）

血液型：A型

身長：171cm

体重：52kg

家族：父、母、妹

職業：高校生（都立高校の2年生）

好きな食べ物：アイス

嫌いな食べ物：うどん、蕎麦（そば）

趣味：読書

１ｓｔ　Ｄａｙ『翔門会の思惑』

――品川、翔門会施設

規模的には――というより、見た目にしても――単なる、福祉施設という感じだ。市役所や警察署など、どことなくお堅い、無機質な印象を周りに与えている。

入口に彫られている翔門会のマークがなければ、そこが翔門会の施設だとは、普通の人間は気づかないだろう。

「…そうか。報告、ご苦労」

その中のやや広い間取りの一室――恐らく、二十人や三十人ぐらい集まってもまだ余るぐらいには広いホールの中に、翔門会のトップである男――先日、淳が歌舞伎町を訪れた際に演説を行っていた『教祖』と、一人の信者が話していた。

信者が事務内容を報告する中、教祖は壁際に飾られている一枚の絵画（巨大な塔が、激しい雷によって崩壊していく様子を描いた絵だった）に目を向けたまま、その報告に耳を傾けていた。

「…やはり、というか…いや、この場合、流石と言うべきか。『神に魅入られた銀色（イザナギ）』…中々どうして、予想以上に手強い男だ」

そう言う教祖は相変わらず無表情だったが、報告をしていた信者はとても渋い顔をしていた。

翔門会は、悪魔を用いる事で神の束縛から逃れ、自由を掴み取る事を信条とした宗教だ。故に、ＣＯＭＰによって悪魔を使役する信者もいるが、全員ではない。

翔門会の中である程度のキャリアを積んだもの、或いは何らかの成果を挙げた者にのみ、悪魔使いとして認められ、ＣＯＭＰを渡される。

悪魔の重要性を重んじる翔門会にあって、自分だけのＣＯＭＰを拝領される程、名誉な事はない。そんな彼等の悪魔使いとしての力量は、一般的な悪魔使いとは一線を画している。

故に、今回の任務にしても、三十人近くの、出動した信者達は皆、その胸に誇りと使命感を抱いて任務に臨んでいた。

しかし、彼等に与えられた任務の内容は、『たった一人の男を殺す事』だった。

ある者はそれを鼻で笑い、ある者は余裕のある表情で、その任務に臨んでいた。人知を越えた能力を持つ悪魔を従える彼等は、もはや一つの軍隊といって差し支えない。

対象である男の実力がどれ程のものであろうと、これだけの戦力を前に生き残る事など有り得ない、という確信が、全員にあった。

しかし――その確信は、脆く儚く、『死』という残酷な形で、後片もなく瓦解してしまう。

教祖は、何か物思いに耽るようにスッと目を閉じると

「…その後の奴の行方は？」

「今現在、何人かの同胞が追跡中です」

「…そうか。分かってると思うが、今は監視だけに留め、下手な手出しは控えておけ。これ以上、無駄遣いをする訳にはいかん」

そう言う教祖の眉は、僅かに皺を寄せていた。

『下手な手出しを控えろ』と言う事はつまり、同時にその男――セトの実力を認めるものでもあった。

教祖にとって、今回の試練にセトが関与してくるであろう事は、予め予見していた出来事ではあった。だからこそ、すぐに三十人もの人員を向かわせる事が出来たとも言える。

にも関わらず、こちらが差し向けた勢力を、いとも簡単に無力化されたという事実が、彼には腹立たしかった。

お前らなんかその気になればどうにでもなる、と嘲笑されている様な気がした。

「忌ま忌ましい…全くもって、忌ま忌ましい…」

思わず、そう漏らしてしまう。元は我々と同じ、神に自由を奪われた人間である筈なのに、あろうことか神に味方するとは何事か。

自分達人間は余りにも長い間、神に自由を奪われていた為に、それを当たり前だと感じるようになってしまっている。奴はそれらの惰性の象徴だと、教祖は思った。

しかし、セトの実力が確かに、手に余るものだというのも、また事実だった。いくら教祖といえ、渋々ながらもそれだけは認めていた。あれだけの人員を差し向けた結果がこれなのだから、その点については素直に認めざるを得ない。

元より、教祖は今回の作戦を実行する以前から、セトの実力に対してある程度の評価を下していた。今回動員された、悪魔使い三十人という数字が、それを如実に物語っている。

気にくわない事ではあるが、セトの力は過去にある様々な事実からも窺い知る事が出来る。

かつて、この世に『死』をもたらそうとしたニュクスから世界を救った救世主・『死神に魅入られた青色』のかつての仲間であり、その数年後、イザナミを討ち倒し、その後任に収まった存在。

そのたった二つのエピソードだけで、セトの力がただならぬものである事は明らかだった。

さて、どうしたものかと教祖が思っていたところに、ホールの扉が開き、一人の女性が入ってきた。

九竜頭天音（くずりゅう あまね）。

翔門会の巫女であり、教祖の一人娘でもある。

「お困りのようですね、お父様」

そう言うアマネの口調は無機質だったが、それを聞いた教祖はよ

り一層強く、顔をしかめる。

「…お前には関係ない」

教祖はぶっきらぼうな口調でそう告げると、側で報告をしていた信者に意味ありげな視線を送る。「もう行っていい」という意思表示だった。

それを理解した信者は一度頷くと、その場に流れる気まずい雰囲気から逃れるように、そそくさとホールを後にする。

ホールには、教祖とアマネだけが残された。その間に漂う空気は、誰が見ても仲睦まじい親子とは思えぬ、険悪なものだった。

つかの間、静寂がホールを支配する。

「……『イザナギ』様に信者を差し向けたようですね」

最初に口を開いたのはアマネだった。

それを聞いて、今まで視線を逸らしていた教祖は、気に入らないと言わんばかりにアマネを睨みつけた。しかしアマネはそんな視線など、どこ吹く風という様子で、話を続ける。

「ですから、私は何度も申した筈です。イザナギ様は神から直々に指名された『生き神』に属する正真正銘の天使の血族。私達には到底、理解の及ばぬ存在。いくら策を練り、どれ程の兵を注ぎ込もうとも、敵う筈がない、と」

「…黙れ、お前の指図を受ける筋合いはない」

教祖は一度、鼻でフンッと笑うと

「確かに奴は手強い…、こちらの認識不足という点については、素直に認めよう。だが、どれだけ奴が人間離れしていようとも、奴が元は人間である事に変わりはない。ならば、少なからず人間としての弱さも持ち合わせている筈。我等が崇める『主上』とは違い、完全な存在ではないのだ…」

『主上』という言葉を口にした辺りから、教祖は何かに対して陶酔したような表情になる。

それを見たアマネは、思わずため息をついた。

「お父様は、ベル・ベリトが我等に自由を与えてくれる存在だと、本当に信じているのですか？ベリトは神を討ち、この世に混沌をもたらす為に私達を利用しているに過ぎませ――」

「黙れっ！！」

意見を違う者同士とはいえ、それでも根気強く自分の父を説得しようというアマネの姿勢は、しかし、突然発せられた教祖の怒声に阻まれてしまう。

教祖の眉間には青筋が立ち、その顔は怒りで赤く変色していた。

それでも全く表情を変えないアマネを見て、教祖は口からその怒りを吐き出す様に、一気にまくしたてる。

「貴様ごときに、ベリト様の崇高なる教えが理解出来てたまるか！

――全くもって、忌ま忌ましい――幾ら鈍感な感性しか持ち合わせていない、『欠陥品』である貴様でも、いつか分かる時が来ると思って、我が翔門会の巫女の座をくれてやったというのに、やはり『欠陥品』は所詮、『欠陥品』でしかないという訳か！　貴様はただ黙って、翔門会の巫女として、『飾り』になっていればいいのだ！　殺されないだけでも有り難く思え！」

いつの間にか、教祖がアマネに対して使う呼称が『お前』から『貴様』に変わっていた。どう考えても、やはり、およそ仲の良い親子ではなさそうだった。

しかし、それでもアマネは無表情だった。だが、先程までと違って、それは無理矢理な「無表情、という感じだった。

彼女は決して感受性に欠けている訳ではない。むしろ、人並みには喜怒哀楽の感情が備わっている。ただ巫女という、人々の注目を集め、導く役割を担っている為、それを押さえ付ける事に長けているだけだ。

教祖は言うだけ言って満足したのか、先程よりは、幾らか冷静さを取り戻した表情になる。

「…有里淳とかいう人間を、勧誘しているそうだな」

「……っ！」

教祖が発したその言葉に、初めてアマネがその顔に動揺を走らせた。その件について教祖が情報を握っているという事は、アマネにとって予想外の事らしい。

「何故それを…！？」

「馬鹿が、その程度の情報を、私が聞き及んでいないとでも思ったか。それだけではない。お前がどうして、奴にそこまでこだわるのか、その理由も知っているぞ」

クックック、と。

意地の悪い笑みを、教祖は浮かべていた。

一般的見解に沿って言わせて貰えば、自分の一人娘がどこの馬の骨とも知れぬ男にご執心と聞けば、大抵の父親が可愛い娘を心配する筈だが、しかし教祖はアマネに対して、その手の気遣いというものを一切持ち合わせていないように思えた。

――否、実際にそうなのだろう。

彼にとって、自分の娘は『道具』でしかない。

何もそれは娘だけに限らず、彼にとっては自らが崇める主上、ベル・ベリト以外は、自らの理想卿を作る為の『道具』でしかないのだ。

「しかし私としても、彼――有里淳の『生態』には、非常に興味がある。いや、興味があるどころではない。彼の『生態』は、上手く使えば我々の理想を叶える為に、相当役立ってくれる筈だ」

そう言ってる間も、教祖はその顔に残忍な笑みを浮かべ続けていた。

「お前が有里淳を、我が翔門会に引き入れようという試みを、私は特に止めたりはせん。いや、むしろ推奨だ。有里淳を仲間にするのは、私にとってもお前にとっても、メリットがあるのだからな」

そう口にする自分の父である教祖を見て、アマネは不快感を隠すのに必至だった。

こちらの策を知っているにも関わらず、それを阻まない――どころか、それを薦めるという教祖の態度は、嬉しい誤算とも言えたが、アマネはそれを素直に喜べなかった。

有里淳を仲間にする事で得られるメリットの意味合いが、アマネと教祖とでは絶対的に違うからだ。

「…私は」

ようやく、アマネは口を開いた。

「有里さんを…『純粋に』――あくまで世界を救済する為に、協力させたいと思っています」

『純粋に』という部分にアクセントを置いて、アマネは力強く言う。

しかし、教祖は白々しい態度で肩をすくめると、

「ああ、私もそう思っているとも」

と、堂々とうそぶくのだった。

１ｓｔ　Ｄａｙ『神谷詠司』

――とまあ、そんな感じで、知らぬ間に（良くも悪くも）様々な人間から人気を博している件の有里淳はというと、相変わらず激しい日差しの降り注ぐ表参道の通りを、これまた相変わらず友人であるアツロウ、ユズを連れて歩いていた。

「表参道、かぁ……」

感慨深そうに、そう呟いたのはユズである。

「昨日、遊びに来た時は、こんな事になるなんて想像もしてなかったよ……」

「……俺もだよ」

淳は今更になって、『平凡な日常』というものがいかに尊く、貴重なものであるのかを強く実感した。

後悔先に立たず。

人という生き物は、何かを手放した後に、その重要さを改めて思い知る生き物なのである。

それが如何に貴重なものであろうと――そこにあるのが当たり前になってしまうと、人はその重要性を忘れてしまうのだ。

「あっ、あの人って……」

その時、ユズの視線が少し先に固定された事に気付いて、淳とアツロウがそこに視線を向けると、全体的に所謂、『いぶし銀』的なオーラを漂わせている、一人の男性が所在無さげに佇んでいた。

波のかかった黒髪をオールバックにし、鋭い眼光、渋いあご髭に、まるでバーテンダーの様な服装に身を包んだその男も、視線を向けるユズの存在に気付いたそうだ。その表情を親しみやすいそれに変えると、

「ああ、良くハルのライブで会う、ユズ……ちゃんだったか？」

と、気さくに声をかけてきた。

「はい、谷川柚子です。覚えてくれたんですね、ジンさん！」

「ああ。人の顔と名前を覚えちまうのは、職業病でね」

「あはは……！　お仕事大変そうですね！　あ、えっと……」

淳とアツロウがすっかり会話に乗り遅れてしまっている事に気付いたのだろう。こちらに向けてユズが困ったような顔を向けてきたので、淳は助け舟を出す事にした。

「あ～、こちらのいぶし銀なおじさんは、一体どちら様？」

「……俺はまだ、おじさんと言われる程、歳を食っちゃいないつもりなんだが……」

「この人はね、私の好きなインディーズ歌手がさ、『ハル』ってい

うんだけどね？その人の保護者……みたいな人かな？　ライブで知り合いになって、何度か話した事もあるの」

「へぇ」

「いや、無視しないでくれよ」

「ジンさん、面倒見がいいから、皆からもおじ……お兄さんみたいに好かれてるんだよ」

「ユズちゃん、今絶対に『おじさん』って言おうとしたよね？　そうだよね？　……というかオイオイ、持ち上げないでくれよ。ところで、こちらの二人は友達かい？　俺とは初対面だよな？」

ジンの興味深げな視線が、二人――何故か、特に淳を重点的に――向けられる。

「あ、ごめんなさい！　二人とも、自己紹介して！」

ユズからそのように御命令を受けたわまった二人の内、先ずはアツロウから簡単に自己紹介を始める。

「ども、木原篤郎っス。アツロウって呼ばれてます」

「ユズの彼氏の、有里淳です」

「は……？」

淳が放ったさりげない爆弾発言（ジョーク）に、ユズの思考回路が一瞬、機能を停止した。

しかし次には、その顔は見る見る内に真っ赤に茹で上がり、比喩ではなく、本当に顔が茹で上がっていた。

「や、ヤダ……！　な、何言ってんの、ジュン！　そ、そういう事は軽々しく言っちゃ……！　あ……あの、ジンさん！　コイツ、有里淳です！　うきゃーっっ！」

「……」

淳にしてみれば、ユズが慌てふためくのを予想しての発言だったので、悪戯が成功したのは素直に嬉しい。

が、ユズのテンパり具合が予想通りで予想以上だった為、アツロウやジンは勿論の事、当事者である筈の淳も若干引いていた。

そんな空気に全く気付いていないのか、ユズは頬を両手で抑えて、未だに顔を赤らめている。

それだけでなく、彼女はニヤニヤ笑いながら、何事かをブツブツと独り言を言い出す始末だった。

「……分かった、分かったから。少し落ち着いた方がいいな？　ユズちゃん」

流石に許容しかねたのか、まだエスカレートし続けるユズの妄想を断ち切るべく、ジンがため息まじりにユズを現実に引き戻した。

ユズが「はっ！」と言って我を取り戻し、口から垂れかけた涎を慌てて拭ってる姿を悠然と無視しながら、ジンは淳とアツロウに顔

を向けて、簡単に自己紹介する。

「俺はすぐそこでバーをやってる神谷詠司だ。まあ、皆『ジン』って呼ぶがな。……それにしても、困ったな。停電で冷蔵庫の中身が全滅だ。氷もフルーツもな……」

淳はそれを聞いて、「そういえば今は停電中だったな」、と今更ながらに思い出した。自分達の余命を変える事に夢中だった為、すっかり失念していたのだ。

ジンのような食材を扱う仕事をしている人間にとって、冷蔵庫の機能を停止させてしまうこの停電は、相当な悩みの種だろう。

「……ま、ジタバタしても始まらない。大人しく電気の復旧を待つさ。……ところで」

ジンが一転、疑惑に満ちた目線をこちらに向けてきたので、淳とアツロウは思わず身構えてしまった。

「……君達は、いつからこの辺にいるんだ？昨日から停電って事は、夜遊びか。フフ……あんまり感心しないな？早く家に帰って、親に無事でも伝えてやれよ」

ようやく自分の妄想世界から抜け出したユズは、慌てて弁解を始める。

「ち、違うんです！　ジンさんっ！　今回はそうではなくて……！」

「今回は？」

「あ、いや、えっと……」

ユズが自ら墓穴を掘り続ける中、ジンの話を聞いていた淳とアツロウは、思わず顔を見合わせていた。

――もしかして、この人は封鎖について知らないのだろうか？

「あ～、それがですね……」

淳としては、今の残酷な状況を告げるのはあまり本意ではないのだが、しかしここで言わない方がよっぽど酷だろうと思い、現在、この東京が自衛隊により完全に封鎖されている、という事を話した。

恐らく、普段はそのクールでニヒルな佇まいが似合うであろうジンも、淳からもたらされた情報に、思わず顔をしかめる。

「……駅が封鎖されて近づけないって、おいおい、マジかよ……。まぁ、テレビはつかないし、携帯も通じないからな、知るワケねーって話か。……ったく、どうなってるんだ」

「やっぱり、ですか……。俺達もケータイ通じないんですよね……」

『ケータイが繋がらない』、という問題に関しては停電で済ませる事は出来ないので、淳も頭を悩ませた。まあ、淳は元々そちら（電子関係）についての知識は疎いので、分かる訳もないが。

そちらの問題については、アツロウ辺りに一任しておこう。

「まあ……じっとしても帰れないし、出口を探そうって話になって……」

そういうユズの口調は、かなり尻すぼみな感じだった。

勿論、淳にはその理由が分かっている。先程からいくら東京中を練り歩いても、針の穴程の抜け道も見つからなかった為だ。

ユズのそんな話を聞いたジンは、かなり訝し気な様子だった。

「それは……確かに問題だな。政府が乗り出しているくらいなら、対応も早いと思うが……」

「……だといいんですけど」

その『対応』が早過ぎるから、むしろ問題なんですけど、という言葉を、淳はかろうじで飲み込んだ。

しかし、ジンは自分の中で何か結論付けたように、肩を竦めると

「ま、夜までには解決するだろう。俺は店で一眠りするよ……。何か、困った事があったら、いつでも言ってくれ」

「はい、ありがとうございます！」

やがてジンは、人差し指で目を擦りながら（どうやら、本当に眠いらしい。バーといえば夜の職業の為、当然といえば当然だが）、その場を去っていった。

ジンが完全に姿を消した事を確認すると、アツロウはケイスケの時と同じように、淳に向かって「……なあ、ジュン……。今の、ジンさんの余命ってどうだった？」と尋ねてきたので、淳は「『6』

だよ」と簡潔に答えた。

『6』といえば、今まで見てきた余命の中ではダントツの長さだ。まあ、自分達に比べれば、だが。

案の定、ジンという人間と少なからず面識があるユズは、そこまで楽観的にはなれないようだった。

「『6』……!?　何で!?　ジンさん……六日後には死んじゃうの!?　何でそんな……。もう……無茶苦茶だよ、そんなの……」

そう取り乱すユズを見て、マズイな、と淳は思った。このままでは、度重なる非日常な出来事による重圧で、ユズの精神が屈してしまうのは時間の問題だった。

淳は何も言わずに、片手でユズの頭を優しく撫でた。ユズはしばらくは肩を震わせていたが、やがて淳の手の平から伝わる気遣いを感じとったのか、「……ありがとう」と言って顔を上げた。

そんな光景を微笑ましそうに眺めていたアツロウが不意に、僅か目を見開いて「そうか……」と呟く。

「どうした?」

「ああ……、もしかして、余命の長い人と一緒にいれば、少しは俺達が生き残る確率も上がるんじゃないか?」

それを聞いていた淳とユズは、アツロウの言わんとしている事が分かった。

「そっか……余命がない人とかは、すぐに死なない可能性が高いんだもんね。何かヒントになるかもしれないね」

「余命がジンさんと同じ『6』の人だったら、そこら中にいるけどな。……ま、そういう可能性も考慮して、生き残る可能性が少しでも高くなるようにしようぜ」

そう言って歩き出す淳の足取りは、先程よりは少し軽いものになっていた。

１ｓｔ　Ｄａｙ『神谷詠司』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・ジン（神谷詠司（かみや　えいじ））

年齢：２５歳

誕生日：１１月２９日（いて座）

血液型：Ａ型

身長：１８７ｃｍ

体重：７８ｋｇ

家族：母、姉

職業：バー経営（ＥＩＪＩ）

好きな食べ物：キムチ

嫌いな食べ物：甘いもの

趣味：ビリヤード

１ｓｔ　Ｄａｙ『フリーバトル・宮下公園』

現在の時間軸から遡る事、約一年前の夏。

有里淳と、アツロウやユズが通う月光館学園に通う生徒数は、全国の視点から見てもかなりの数に上る。

高等部だけでも相当な数なのに、他にも初等部、中等部まで同じ敷地内にあるのだから、朝に見れる登下校の風景では、半端ではない数の若者が歩いているのを見かける事が出来る。

で、何が言いたいのかと言うと、まだ精神的にも成熟していない未成年がそれだけの数で同じ場所に集まると、比例して校内で流れる噂話の種が多くなる、という事だ。

その内の一つに、辰巳ポートアイランドにある、『白河通りのラブホテル街』というのがある。

文字通り、そこには男女の欲求を満たす為に、多くのラブホテルが存在するのだが、一軒だけ、ラブホテルではなく、シティーホテルとして経営されている『ホテルはまぐり』という名のホテルがあった。

とはいえ、シティーホテルとして改修を施される前までは、そこも立派な（？）ラブホテルだった。

一時期、このホテルを中心に、男女ペアが精神的障害を負った状態で相次いで発見されたという怪事件があり、それを受けて一時的

に経営状況が悪くなった為、対策としてシティーホテルとして改修された訳だ。

……が、しかし。改修されたとはいっても、そこは当時、まだラブホテルだった時の趣(おもむき)を、殆ど残していた。いや、変わったのは建前だけで、中身は全く変わっていないと言っても過言ではない。

その為、そこがシティーホテルだとも知らず、ラブホテルだと勘違いして使用するカップルも少なくなかった。

これは、有里淳達の日常が崩壊する一年前に、そのホテルの一室で、ある男女が交わした会話である――その内、男の方の父親が以前、このホテルをとある理由で訪れ、人外の存在と戦ったという歴史を踏まえれば、それは何とも奇妙な偶然だが、しかしだからこそ、ここで引用する会話としては相応しいだろう。

「ねえ、淳――」

と。

谷川柚子(たにかわゆず)は言う。

まだ夜も遅い時間、ダブルベッドの上に座っているユズは、手にしたシーツで、体の前半分を隠していたが、それ以外の衣服は一切身につけていなかった。

十六としては平均以上のスタイルが、シーツ越しに欝すらと浮かび上がり、その初々しい魅力を放っている。

しかし、頭に巻いているピンクのスカーフだけは、何かしらのこ

だわりがあるのか、外していなかった。

「幸せって、何だと思う？」

「うん？」

そんなユズの傍らで、ダブルベッドの端に腰掛け、ユズに背中を向けて音楽を聴いていた有里淳は、そのリズムに合わせて時々鼻歌を歌いながら、ユズの質問を受けて、彼女に顔を向ける。

彼もまた、黒い革のパンツこそ履いてるものの、上半身は裸で、その細身ながらも引き締まった肉体が曝されていた。

「何だよユズ、珍しく哲学的な事を聞くじゃねぇか」

「珍しい言うな。つまり、『幸せ』という言葉の定義について、真剣に考えた事ある？」

「んー……」

猫耳を模したヘッドホンを外して、淳は少し黙った。

ユズは伊達や酔狂でそんな質問をしている訳ではない。恐らくは、自分の家庭状況を踏まえた上での質問なのだろうと、淳には理解出来た。

ユズの両親は近年、仲が悪かった。

それが何らかの事情によるものなのか、或いは単純に性格が合わなかっただけなのかは、ジュンには分からないが、今年辺りからよ

り悪化したらしい。

勿論、ユズと幼なじみである淳は、そんな彼女の家庭の変化にも気付いていたが、特にユズが何も言ってこなかったので、こちらも何も言わなかったのだ。

その代わり、以前よりユズは淳と一緒に居たがるようになった。ただでさえ学園内では、二人をお似合いのカップルだと仄めかす声も少なくない。

学園で『気になる女子は?』と聞くと、大半の男子生徒がユズだと答える。学園内で彼女はちょっとしたアイドル的存在だった。

有里淳にしても、その中性的なルックスが人気を博し、ユズの様に大々的な噂にはならないものの、彼を狙う女子の数は少なくない。

だからこそ、いらぬ噂を立てられない為に、ユズと淳は積極的な関わりを持つことを、暗黙の内に自粛していたのだが（無論、友人や幼なじみとしての交流はするが）、彼女の両親が離婚した辺りから、ユズはそれを無視してまで、時間が許す限り淳と関わりを持とうとする様になった。

女心に疎い淳には、その理由が分からなかったが、かといって特にそんな彼女を拒絶したりはしなかった。

元々、前述した噂等については、淳はそれ程気にしてない。昔から彼は、他人が言う言葉は悪口であろうと何だろうと一向に興味を示さないタチだった。

しかし、敢えてそんなユズの心境の変化の根底にある理由を明か

すとするなら、それは一重に、愛に飢えていたからだろう。

父親が家庭から離れ、女手一つでユズを育てるようになった彼女の母親は、多忙な日常によるストレスから、事あるごとににユズに怒鳴り散らすようになってしまう。

その為、彼女の家庭では、そこが自分の家であるにも関わらず、ユズの居場所は徐々に無くなりつつあった。

だからこそ、彼女はよりどころを求めたのだろう。有里淳という、昔からの思い人に対して、身を委ねる事で、精神の安定を保とうとしたのだ。

もし仮に、その動機について、淳が気付いていたとしたら、彼は真っ先に自分の母方の祖母を思い浮かべただろう。

祖母も以前、当時の夫と、とある理由で別れた際、その悲しみに堪えられなくなり、多くの男と関わりを持つようになったのだと言う。

その為、一時期は娘である母と不仲になっていた事もあったそうだ。そう考えれば、奇妙な偶然もあるが――しかし、

ここで決定的に違うのは、淳の祖母が次々と男を取り替えたのに対し、ユズが淳以外の男性と交際をする事など、ありえないという事だ。

それはともかく。

「幸せとは何か、ねぇ――」

しばらく黙った後、淳はようやく口を開いた。

「俺は幸せなんて、案外つまんねーもんだと思うけどな」

「つまんない？」

「ああ。ホラ、よく言うだろ？　『幸福な家庭はどれも似たようなものだが、不幸な家庭はそれぞれに不幸である』――確か、トルストイっつー学者の言葉だっけ？　でも、どんなに幸せを求めた所で、結局は他と変わらないなんて、そりゃあまりにもつまらねぇだろ？」

「じゃあ、淳は不幸になりたいの？」

「いやいや、んな訳ねぇだろ。……んー、何というか、これってつまり、『平凡ほな日常ほど幸せな事はない』って意味にもとれるんじゃねえか？」

「平凡な日常、かぁ……。私の平凡な日常は、とっくに壊れちゃったよ」

「あんま深く考えんなよ。おばさんだって、きっとその内……」

「ううん」

淳の労いを遮るように、ユズはフルフルと首を振った。

「母さんはきっと、これからもああだと思う」

「ユズ……」

「……私は、さ。幸せって言うのは、つまり、不幸なんじゃないか、って思うの」

「はあ？」

意味が分からん、という様子で淳は答える。

「離婚した直後は、まだ家の雰囲気は良かったの。お母さんも厄介者がいなくなって、最初辺りは気分がよかったから……。でも、父さんがいなくなった事で、働かなくちゃいけないだとか、そういう現実的な問題が出てくるにつれて、段々と離婚する前の状況に戻っていった――」

だから、『幸せ』とは一時的なもので、最後には必ず元に戻ってしまうものなんじゃないか、と――。

必ず無くなると分かっている以上、そんな幸せは幸せとは呼べない――むしろ『不幸』なんじゃないか、と。

ユズは言った。

それを聞いて、淳はやれやれと言いたげに首を振ると、ベッドの上に脱ぎ散らかった自分の衣服を手にとり、それを着始めた。

「――ったく、ユズ、お前、相当溜め込んでんな……。言ってる意味分かんねぇ」

「この世の幸せって、例えばプラス一の『幸せ』が訪れたとしたら、遅かれ早かれ、いつかはマイナス一の『不幸』が来て、かならずい

つかは無くなっちゃうものなんだよ」

だったら、とユズは言葉を続ける。

「どうせ無くなると分かってるなら、最初からないほうがいい」

そんな『幸せ』は――いらない。

「……淳はどうなの？　今、自分は幸せだって、自覚出来てる？」

「さあ？」

くあーっと、眠たそうに欠伸をする淳。

「俺は自分が幸せかどうかなんて、考えた事もねーな。んなモン、正直――

どうでもいい」

◆

◆

時間軸は戻って――再び、現在。

「……ん？」

少し休憩しようと思い、再び宮下公園を訪れると、そこに複数の悪魔が出現していた。

「こんな所にも悪魔が！？」

とユズ。

「ど、どうするジュンっ！」

「どうするったって……」

んー、と唸りながら、淳は敵悪魔達を観察する。向こうもこちらの存在に気付いたようで、その体から殺意を剥きだしにして、徐々に距離を詰めてきていた。

「……放っておくと、皆が危険だしな。俺達で倒しておこう」

言うが早いか、既に淳はＣＯＭＰを取り出していた。

「来いっ、コボルト！オーガ！」

淳の目の前に、半獣人のコボルトと、全身を緑の鱗で覆ったオーガが現れる。

どちらも太いこん棒を構え、臨戦体勢に入っていた。

「よし……カブソ！」

「お願い……ピクシー！」

アツロウとユズも即座にＣＯＭＰを起動させ、自分達の仲魔を召喚する。

敵の悪魔は四体。しかし、どれも初めて見る悪魔だった。

ＣＯＭＰを確認すると、予め搭載されている、戦闘時に発動するプログラム――『アナライズ機能』が発動している為、それぞれの敵悪魔の特徴や名称がよく分かる。

全身を光沢のある紫色の皮膚に、手には巨大な農業フォークを持ち、背に藁を背負った悪魔――闘鬼・『ビルヴィス』。

赤い体毛、牛とも馬とも似つかない外見に、鋭い牙、鋭い爪を持つ――妖獣・『ワイラ』。

それぞれ二体ずつ。

最初に動いたのは、敵悪魔であるワイラだった。

その動きに、淳達は少なからず動揺する事になる。

「速っ……！」

まるで地面を『滑る』ような、そして滑空する燕の様な動きと速さで、ワイラは一気に、こちらとの距離を詰めてきた。

『妖気迅雷』。

ワイラ等の、妖獣族の悪魔が持つ種族特有スキルであり、その移動速度を極度に高める事が出来る。

気付けば、一体のワイラが淳の目前まで来ていた。

そして、その牙で淳の頭を噛み砕くべく、大きく口を開く。

勿論、淳としてもそれを黙って見てはいない――だが、こちらが相手の意図を察してから実際に攻撃を受けるまでの時間は、殆ど刹那に等しかった。

足の神経まで意思を伝達する程の余裕もなく、淳は上半身だけを後ろに引いてそれをかわそうとするが――

（間に合わない！）

ワイラの機動力はこちらの予想を遥かに上回るものだった。しかし、今更後悔しても後の祭りだ。淳は回避よりも、そのズラリと生えそろった牙が自分の肉を砕く感触に堪える為、意識を強くした。

「さセルかっ！」

だが、淳の体から血肉が飛び散る事はなかった。ワイラの牙が僅かに肩に食い込んだ瞬間、両脇にいたコボルトとオーガが、そのこん棒を持ってその体を下から上へ打ち上げたのだ。

「大丈夫カ！？　主！」

「ああ！　ありがとうっ！　――『ジオ』ッ！」

こちらを心配して声をかけるオーガに短く礼を言いながら、淳は上空に舞い上げられたワイラに対し、追撃の電撃魔法を放つ。電撃はその馬のような体駆に見事、直撃したが、決定打にはならなかった。

しかし、相手に自分達が単なる獲物ではない――気を抜けば逆に返り討ちを受けてしまう相手だと認識させるのには十分だったようだ。

そのワイラを含め、二体のビルヴィスやもう一体のワイラも、こちらを警戒するように一旦、距離を取り始めた。

「ジュン！　分かったぞ！　ワイラの方は火炎、ビルヴィスは電撃が弱点だ！」

淳、ユズよりもやや後方で、カブソと共に待機していたアツロウからそう伝えられる。

このスタイルは、初めてデビオクに参加し、オーガを落札した後で決めたものだった。

◆

◆

「もし、これからやむなく悪魔と戦闘する事になった際は、『こういう時にはこうする』ってルールを決めるべきだと思う」

そう言ったのは淳だ。

「具体的には、どうするんだ？」

アツロウに問いを受けて、淳は懐から自分のＣＯＭＰを取り出す。

「このＣＯＭＰには、敵悪魔と交戦した時は『戦闘モード』に移行して、敵悪魔の名称や弱点が分かる『アナライズ』っつープログラムが作動するようになってる」

「ああ、昨日の青山霊園の時も、敵の弱点とかが分かって、かなり助けられたよな。流石ナオヤさんだぜっ！」

「うん……まあ、お前のナオヤに抱いてる恋心はとりあえず脇に置いといて」

「抱いてねぇよ！」

淳の勘違いを激しく否定するアツロウを、淳は無視し、

「ただ……いざ戦闘した時の話だけど……いつ相手から攻撃を受けるかも分からない状況で、いちいちＣＯＭＰの画面を確認してたら危ないと思うんだよな。そこで、だ。敵悪魔と遭遇した際は、まず最初にＣＯＭＰで敵の詳細を確認する、『サポート係』を決めるべきだと思う」

「なるほど……それもそうだね。でも、誰がやるの？」

「俺がやるよ」

ユズの疑問に対し、自ら名乗りを上げたのはアツロウだった。

「こん中では、ＣＯＭＰの扱いに一番長けてるのは俺だしな。ユズは機械には疎いだろうし、ジュンはこの中で一番実戦に向いてるから、わざわざサポートに回っちゃ意味がない。だとしたら、俺が適任だろ？」

「お前がサポートに向いてるという点については大いに賛成だが……俺が一番実戦に向いてるってのはどういう事だ？」

言うまでもないが、淳にしても悪魔の存在を知ったのはつい最近で、勿論、悪魔と戦っていたという特殊な過去など持ち合わせていない。

「でも、ジュンってホラ、喧嘩とか凄く強いんでしょ？　カイドーもそう言ってたし。確か、何か格闘技とか習ってるんだっけ？」

「よしてくれ……」

ユズの自分に対する評価に対し、淳はげんなりする気持ちを抑えるのに必死だった。

確かに、彼は幼い頃から、母に連れられて様々な格闘技を習わされていた。数年間通い続けたものもあれば、たった数週間で見切りをつけたものもある。

どういう訳か、母は淳に対して自分一人を守るだけの強さを持つ事を、強く望んでいた。

では一体、どれだけの武芸を学んでいたのかというと、それはかなりの数に上る。

空手、柔道、剣道、槍術、薙刀術、弓道、柔剣道、水泳、フェンシング、ボクシング、合気道、馬術――など。

これだけの数の武芸を学んでいるだけでも十二分に異常なのに、淳の母親はそれだけでは飽き足らず、一般的日常会話ではとても耳にしないような代物――抜刀術、短刀術、十手術、捕手術、サンボ、テコンドー、ムエタイ、修斗、骨法、ＣＱＣなど――まで習わされた。

どうして自分の周りにはこれだけの武芸や格闘技が存在するんだと当然、淳は疑問を抱いたが、理由は簡単で、どうやら母の友人である現桐条グループの総帥が色々と手を回してくれた（くれやがった）らしい。

この内、今でも習い続けているのは唯一二つだけで、ボクシングとフェンシングだ。どちらも、師匠が母の友人だというのが理由である。

フェンシングは先程も言った桐条グループの総帥、ボクシングは真田という現役警察官だ。

前者は恐ろしい事に少しでも稽古の手を緩めようものなら『処刑だ！』と怒鳴りながら手に持ったレイピアを突き付けてくるし（ありえねぇ）、後者は暇さえあればプロテインを無理矢理飲ませよう

としてくるのだから困りもの（いや、マジで困る）である。

まあ、それらを考慮すれば、淳が実戦向きであるというアツロウの推測は、確かに的を射たものであった。

そういった話し合いの結果、もし敵悪魔と遭遇した際は、まずはアツロウが一旦戦線から離れ、敵の解析を行ってから、リーダーである淳が具体的な作戦を決める、というのが決まりになったのである。

◆

◆

「アツロウは火炎魔法でワイラを仕留めろ！　カブソとオーガはその援護！　ピクシー！　俺やコボルトと一緒にビルヴィスの相手をしてくれ！　ユズは回復を優先しつつ援護を頼む！」

そう指示する淳の言葉には一切の迷いがなく、まるでこれまでも、複数の仲間に指示を出す事に慣れているかの様だった。勿論、そんな特殊な経歴もまた、淳にはない。

だとすれば、或いは――

「「ジオッ！」」

淳とピクシーが二人同時に、同じく二体のビルヴィスへと電撃を放つ。淳の電撃を当てられた一体は断末魔の叫びを上げて、その体を黒い炭へと変えたが、もう一体はピクシーの電撃を危うく逃れ、一気に彼女へと距離を詰める。

そして、手に持ったフォークを一気に突き出した！

しかし、そのフォークを寸前で弾く存在がいた。コボルトだ。ビルヴィスの持つフォークを見て、相手も近接戦闘を得意とする悪魔だと悟った淳は、この時の為にコボルトをこちらのチームに加えたのだ。

「ウオオッ！」

雄叫びと共に、コボルトはこん棒を槍の様に突き出して、ビルヴィスを吹き飛ばした。堪らず、ビルヴィスは宮下公園の地面に仰向けになる。

自分を吹き飛ばした相手に反撃するべく、ビルヴィスは怒りを覚えながら顔を上げると、そこには

――自分を跨ぐように立っている、有里淳の姿があった。

「この距離なら――避けられようもないよな？」

淳はその顔に、シニカルな笑みを浮かべていた。

そして――左手でそのフォークを抑え、右手でビルヴィスの頭をわしづかみにする。

「……っ！！」

この後、自分の身に何が起こるかを悟ったビルヴィスは、激しく抵抗しようとするが、自慢の得物であるフォークを淳に掴まれ、どうにも出来ない。

「『ジオ』ッ！」

――そして、超至近距離で繰り出された電撃に、ビルヴィスの頭部が熟れた果実のように弾け飛んだ。

「ジュンッ、大丈夫!?」

「大丈夫に決まってんだろ――ピクシー、コボルト！　アツロウの援護に向かうぞ！」

「うんっ！」

「分かっタ！」

◆

◆

全ての悪魔には、魔法に対する『相性』がある。

これもまた仲魔から教えてもらった事なのだが、例えばコボルトは火炎属性に弱く、カブソは電撃属性に弱い。

また、これまでの戦闘で分かったのが、弱点を突かれた悪魔は大抵、一時的に動きが止まり、大きな隙が出来るらしい。

とくれば、悪魔との戦闘では、如何に早く相手の弱点属性を見極め、それを突けるかがポイントになってくる。淳にも段々と、悪魔との戦闘におけるノウハウが分かってきた。

……いや。

そんなノウハウは、一般人としては不要だけど。

「おおおっ！『アギ』！」

気合いの掛け声と共に、淳の視線の先にいたアツロウは、その手から火の玉を放つ。

先程、それによって二体のワイラの内一体を仕留めたが、どうやら癖を読まれてしまったらしい――残り一体のワイラを、彼は中々仕留められずにいた。

「アツロウ！」

「おおっ！　ジュンっ！」

そんな折、二体のビルヴィスとの戦闘を終えたらしい淳、コボルト、ピクシーが加勢に来た。

「ジュン、コイツ中々動きが速くて、魔法が当たらないんだ……」

「それなら、こういう時は、接近戦に持ち込んだ方が得策だ」

「理屈は分かるけど、お前の肩の傷を見るとちょっとな……」

「うっ……」

まさにその通りで、淳の肩には、先程ワイラの牙によって僅かにえぐられた傷から、血が流れ出ていた。

「だっタラ、武器を持つ俺ト、オーガが動きヲ、止める！その隙に、魔法ヲ、撃テ！」

「コボルト……よし、それで行く！　アツロウ！　いつでも魔法を撃てる様に準備しとけ！　コボルトとオーガは、左右から挟む様に突っ込んでくれっ！」

淳の指示を受けて、コボルトとオーガがワイラを左右から挟み込むように殺到した。そんな中、援護に回っていたユズが心配そうな面持ちで淳の側に寄ってきた。

「ジュン、肩の傷を治さないと……『ディア』っ！」

ユズが治癒魔法を行うと、淳の傷口を淡い光が包み込んだ。その温かい感覚を長く味わう前に、傷口はたちまち塞がった。

その少し先で、コボルトとオーガの連携により、ワイラが僅かに体勢を崩した。オーガの振るったこん棒が僅かに頭をかすめ、若干バランスを崩したのだ。

「カブソ！　アイツの足元に魔法を撃て！」

「あいさ！　――『ザン』っ！」

カブソの衝撃魔法がワイラの足元目掛けて放たれる。ただでさえふらついた状態で魔法を食らった為に、ワイラはその体を完全に横たわらせた。

序盤から今まで、その機動力により散々こちらを翻弄してきた相手に、初めて大きな隙が出来た瞬間だった。

「――っし、トドメだ！『アギ』！」

待ってましたとばかりに、アツロウが放った火炎魔法が、この戦闘の終わりを告げた。

◆

◆

『フリーバトル・宮下公園』終了時ステータス

●所持マッカ：１０３１

●有里淳（？？）
・コマンドスキル
＞？ジオ
？――
？――
・自動効果スキル
＞？――
？――
？――
・先制発動スキル
＞『――』

●木原篤郎（人間）
・コマンドスキル
＞？アギ
？――
？――
・自動効果スキル
＞？――
？――
？――
・先制発動スキル
＞『――』

●谷川柚子（人間）

・コマンドスキル
＞?ディア
?――
?――
・自動効果スキル
＞?――
?――
?――
・先制発動スキル
＞『――』
●仲魔
＞・コボルト
・カブソ
・ピクシー
・オーガ

――Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！

1st Day『東海林』

――池袋、山手線付近。

「…はぁ」

東京を封鎖するべく、ここでもバリケードを築いている自衛隊を見て、一人の女性がため息をついていた。

紫色のスーツ、鋭い目付き、肩まで伸びた黒髪を後ろで纏めている。胸元には社員プレートらしき物を付けており、そこには『東海林』と記されていた。

彼女、東海林（通称ショウジ）は今回、この封鎖内の人間の中では――この東京封鎖について以前から知っている、数少ない人物の一人である。

しかし、それについて調べ上げたのはショウジ自身ではなく、彼女の先輩だった。

ショウジはジャーナリストを職業としており、その先輩も同じくジャーナリストだったが、この封鎖について密かに調査を進めていたところ、何者かによって殺されてしまったのだ。

（――ある事件を追っていたジャーナリストが殺されてしまうだなんて）

（――まるで、刑事ドラマじゃない）

しかし、それが現実だ。

先程、ショウジの先輩が何者かに殺害されたと述べたが、しかしショウジにはある程度のアテがついていた。

（――今回、東京が封鎖されたのは、政府の決断によるもの）

（――そして先輩は、その封鎖の原因について調べていた）

だとしたら、誰が先輩を殺したかなど、容易に推測出来る。

だからだろうか。

ショウジは、人を殺すという行為を、何よりも下劣なものだと思っていた。

人が死ぬこと自体は、別に構わない。

いや、構わなくはないが、しかし、しょうがない事だと、ショウジは割り切っている。

『死』という概念は、この世に生きる全ての生命体に与えられた、唯一平等の法則だ。そこにいちいち文句をつける程、ショウジは子供ではない。

だけど――人を殺すのは、駄目だ。

絶対に。

どんな理由があろうとも。

しかし、悲しいかな――ジャーナリストとして、仕事を続けてきたショウジだからこそ分かるのだが、殺人を犯した人間の大半は、それに値する理由を殆ど持ち合わせていない。

殆どの殺人は、『その場の出来心』というのが、主な理由なのだ。推理小説やドラマのように、前々から個人に大きな恨みを抱えていて、その為に計画を練った上での殺人――など、実際には稀有な例なのだ。

今回のショウジの先輩の件は、その数少ない実例の1つだと言える。

だからこそ、聞きたい。

他の皆は――どう思っているのだろうか？

人を殺すという行為について――どう思っているのだろうか？

閑話休題。

先程言ったように、そういった先輩の働きがあって、ショウジは今回の封鎖について知ってはいたのだが、そこにある程度の補足を付けさせてもらうと、封鎖の『時期』までは、彼女は知らなかった。

だから今回、彼女が封鎖に巻き込まれた事は、ショウジ自身にとっても予想外だったのである。

それでも。

（――これはチャンスだ）

と、ショウジは思った。

この封鎖に巻き込まれた人達の、生の声を聞く事は、真実を知るのに必ず役に立つ筈だ。

「それにしても、予想以上に警戒が強いわね…」

ショウジはここまで、山手線を沿ってグルッと東京内を回ってきたのだが、どこかしこも自衛隊が監視の目を油断なく光らせていた。

まるで蟻一匹たりとも、この封鎖内から逃がしはしない、とでも意気込んでいるかのようだ――いや、実際にそうなのかもしれない。

しかしその不自然なまでの意気込みが、政府に対するショウジの疑惑を、より強くしていた。

現在ショウジは、封鎖内をその足であらかた歩き潰し、次は取り残された人々に取材をしようかと思っていた。

しかし、他の人間は自分の世話をするだけで手一杯なのか、ショウジの取材は大抵の場合、目敏く拒否されてしまった。

（――まあ、こんな状況じゃ当然よね…）

時刻は昼間に迫り、それと共に空から降り注ぐ日差しも強くなってきた。紫色のスーツ姿であるショウジにとって、この気温は余り歓迎出来るものではない。

ある程度、暑さが収まるまでどこかの日陰で身を休めようかと思った時、ふと、一つの人影が目に入った。

一人の男が、歩道に植え込まれている街路樹の根本に、だらしなく腰を下ろしていた。銀色の髪に、黒い甚平を着て、ボロボロの草履を履いているその男の姿は、道行く人々の好奇と疑惑の視線を一身に集めている。

しかし、男はそんな周りの視線など全く気にしていないという風に、手に持った団扇を扇いでいた。

男のそんな奇抜なスタイルに、ショウジは何となく興味を惹かれた。自分のジャーナリストとしての勘が、この男に話を聞くべきだ、と告げていた。

「ねぇ貴方、ちょっといいかしら？」

気付けば、ショウジはそう言って、銀髪の男に声を掛けていた。

それまで、男は頭を垂れながら団扇を扇いでいたので、その表情は見えなかったのだが、こちらの声に気付くと、ゆっくりと顔を上げた。

見ると、男は中々凛々しい顔立ちをしていた。皺が一つも刻まれていない為、童顔に見えなくもないが、恐らく歳は自分より上で、三十代半ばだろう、とショウジは思った。それを踏まえると、年季の入った精悍さ、という表現が一番しっくり来る。

そして、男の瞳がこちらに向けられると、ショウジは思わず萎縮

してしまった――ジャーナリストという職業を生業としているショウジにしてみれば、普段なら、初対面であろうとも、人の顔を見てたじろく事など殆どないのだが、しかしその銀色の瞳で見られると、まるでレントゲンで観察されているかのような錯覚を覚えた。

「…ん？　誰だアンタ？」

男が言う。

「…ああ、ごめんなさい。私はこういう者よ」

そう言って、ショウジは懐から自分の名刺を取り出すと、男に差し出した。男はショウジがジャーナリストであると記されているその名刺を手にとって一瞥しても、特に動揺は見せなかった。

「ふーん…ジャーナリストの東海林さん、ねぇ…」

「実は私、この封鎖について調べているんだけど、少し話を聞かせてくれないかしら？」

「…まあ、別に構わねぇよ。どうせ今は暇だしな」

そう言って、男は「よっこらせえ」と腰を上げる。男が立つと、その背がかなり高い事が分かった。どう低く見積もっても百九十センチはあるだろう。そのせいで、今度は逆に、ショウジが男を見上げる形になってしまった。

「――で？　俺に何を聞きたいんだ？　実は取材じゃなくて逆ナンでしたってオチなら、大歓迎なんだが」

「……」

「……いや、スマン。俺が悪かった。そう怖い顔すんなよ――ったく、やれやれだぜ」

そう言って男が肩を竦める間も、ショウジは、男から発せられる奇妙な圧力に冷や汗をかいていた。圧倒されっ放しだったと言っていい。

気を取り直して、ショウジは一つ咳ばらいをすると、男に対する取材を再開した。

「――じゃあ、とりあえず、貴方の名前は？」

「え？　…んー…」

ショウジが名前を尋ねると、何故か、銀髪の男は困ったような顔をした。ただ名前を聞いただけなのに、どうしてそんな反応をするのだろう？　とショウジは不審に思った。

「どうかした？」

「ん？　ああ、名前、名前ね。えーと…俺は花村陽介っつーんだ」

「花村さんね。ありがとう。それじゃ最初の質問だけど、この封鎖について、どう思う？」

「どうって…」

男はまたも、困ったような顔をした。

「まあ、迷惑だと思うけど」

当たり障りのない、至って普通の解答だった。

どうやら、有益な証言を得る為には、自分の方からある程度、距離を詰める必要があるらしい――と判断したショウジは、先にこちらの考えを話す事にした。

「実は私、政府が決行した今回の封鎖について、少し疑問を抱いてるの」

「疑問？」

「ええ、疑惑と言ってもいいわ。貴方はおかしいと思わなかった？政府が言うには、封鎖の原因は地下鉄から突然発生した毒ガスによるものらしいけど、その割には早朝からの自衛隊による山手線内の封鎖とか、対応が早過ぎる。…まるで、こういう事態を予め予想していたみたいに」

「…へぇ、おもしろいな」

ショウジの話を聞いて、銀髪の男はここで初めて、彼女の言葉に関心を持ったようだ。先程までの気怠い雰囲気は消え去り、真剣な眼差しを彼女に向けている。

「つまり、アンタが言うには、地下鉄からの毒ガスってのは建前で、実際には何らかの理由があって、政府はこの封鎖を前々から計画していたに違いない――って、そういう事か？」

「話が速くて助かるわ。そう、まさにそうなのよ。その理由を、口惜しい事に私は知らないけど、なんとかしてそれを突き止めたいと思ってる…。皆、この封鎖には迷惑してるのに、政府が本当の理由を隠してるだなんて、こんなの、民衆に対する一方的な圧政に等しいわ。私は何としても真相を掴んで、政府の非人道的な行いを、世間に伝えたいと思ってるの」

「…いいね」

ショウジの話を受けて、銀髪の男は嬉しそうに微笑んだ。

「こんな状況の中でも、アンタみたいな人間がいるんだな…。そうだな…よし、気に入った。アンタになら、この封鎖について少しくらいは教えてやってもいい」

「えっ？」

男が口にしたその言葉の不可解なニュアンスに気付いたショウジは、思わず事務的な態度を崩してしまう。

「…どういう事？　貴方、今回の封鎖について、何か知ってるの？」

「少しだけな」

男はおどけるように肩を竦めた。

「実は俺、ちょっとした事情から、今回の封鎖については、あらかじめ知ってたんだ」

男が言う。

「…どういう事？　貴方一体、何者なの？」

期待と興奮で、心臓の鼓動が僅かに速くなるのを、ショウジは感じた。ほんの気まぐれで話しかけた相手だったが、もしかしたら自分は、思わぬアタリを引いたのかもしれない。

「何者かって、聞かれると、かなり説明に困るんだが…そうだな…。よし、アンタは中々おもしろそうだから、少しくらいは腹を割って話してもいい。まず初めに言っておくが、さっき俺が名乗った『花村陽介』って名前――ありゃ偽名だ」

「偽名…？」

思わぬ台詞を受けて、直後、ショウジはその銀髪の男から僅かに距離をとった。偽名を使っているという事は、もしかしたら政府の人間なのではないかと思ったからだ。

だとしたら、アタリどころかかなりのハズレである。自分は気付かぬ内に、先輩の二の舞になろうとしているのかもしれない。

「違うよ。俺は政府の人間じゃない」

こちらの心境を見抜いたのか、男はそう言って手をヒラヒラと振った。

だが、男が発したその台詞は、ショウジに別の疑問を抱かせた。

「…その言い方はまるで、政府が今回の封鎖の原因を知られたくない。って言ってるみたいよ」

「おっと、鋭いな。だけどそれは半分正解の、半分ハズレだ」

「どういう事？」

「確かに、この封鎖が決行される前までは、政府はその理由について知られたくはなかっただろう…。けど、連中は今となっては、そんな事は少しも心配しちゃいない。既に封鎖が始まった以上、理由なんて知られても構わないって連中は思ってるんだ。…少なくとも、封鎖内にいる人間にはな」

「……？」

銀髪の男が口にしたその言葉の意味が、ショウジには良く分からなかった。再び、ショウジが「どういう事？」と聞くと、男はからかうように口元で人差し指を立ててみせる。

「…生憎、今言えることはこれだけだ。俺にも、色々事情があるからな」

そんな男の態度に、ショウジは少しムッとしてしまう。その振る舞いは尊大とも、唯我独尊ともとれた。

しかし――とショウジは思う。この男が言う事は、傍から聞けば何の根拠もない世迷言のように聞こえるが、ショウジは何故か、男の言葉に全くと言っていい程、疑いを持たなかった。

いや、疑いを持たなかったと言うよりは――。

疑ってはいけないような――。

「言えないって、どういう事？　貴方、本当に何者なの？」

若干、イライラした様子で、ショウジが言う。

「言えない理由は、当然、言えないからさ。その先の理由――言えない理由の理由を言っちまったら、そりゃあ、もう殆ど暴露しちまうようなもんだ。だから、言えないのさ――ショウジちゃん」

「なっ…！」

唐突に「ちゃん」付けされた事で、ショウジは思わず赤面してしまう――自分は生来より気が強い性格だと自負しているので、そういう呼び方をされたのは、随分久しぶりだった。

それはともかく、この男――名前は未だ分からず、だが――どうやら本当に、これ以上こちらに情報を渡すつもりはないらしい。何だか今すぐにでも、この場から立ち去りそうな雰囲気だった。

これでいいのか、とショウジは思う。

しかし、直接的なお願いをしても、この男は自分に対して、何1つ有益な情報を渡してはくれないだろう、とショウジは確信していた――否、させられていた。

ならば、どうする。

どうにも――出来ない。

――でも。

でも。

ここで、このまま、この男と別れたら、この男との繋がり（コミュニティ）が、ここで途切れてしまいそうな、そんな気が、ショウジにはした。

「…随分、物欲しそうな顔だな」

銀髪の男のそんな台詞が、ショウジの思考に割り込んで来る。

というよりこの会話、最初は間違いなく、自分が主導権を握っていた筈なのに――いつの間にか、この銀髪の男に、流れをグイグイと引っ張られてしまっているのは、何故だろうか？　と、ショウジは思った。

「んー…、そうだな」

そんな風に、未だに彼女が戸惑っていると、銀髪の男は腕を組んで、何事か考え込んだ。

「…よし、じゃあこうしようぜ。アンタがジャーナリストだと見込んでの頼みだ――実は俺、今ちょっとした調べ事をしてんだが…これがちょっと、行き詰まってるんだよ」

「それを調べて欲しいって事？」

ショウジが言う。

「ああ、『連続吸血事件』って、知ってるか？」

「『連続吸血事件』…」

その事件は――ショウジも知っている。

いや、知っているどころではない。

ジャーナリストとして、報道関係の人間として――その事件を知らない者など、皆無だろう。

半年程前から、東京都内で、首筋から血を抜かれた死体が、連続して見つかったという、前代未聞の猟奇殺人事件だ。

犯人は未だ、捕まっていないどころか、正体さえ分かっていない。

これに匹敵する事件は、十七年近く前に、八十稲羽という田舎で起きた、連続殺人事件ぐらいのものだろう。

「…まあ、私も一応、ジャーナリストの端くれだし…。調べられない事もないけど、でも、どうしてそんな事知りたいの？」

「それが少々情けない話でな。実は、とある不良を舎弟にする条件として、その事件の犯人を割り出す羽目になっちまったんだよ」

「それはまた、随分ハードルの高い条件ね…」

無論の事、その事件の犯人を捕らえるべく、警視庁が全力を挙げて捜査を行ったが、結局犯人は捕まっていない。

そんな相手を、この男は捕まえてみせるというのか。

無茶だ、とショウジは思うが、しかし――何故だろう？この男なら、その程度の事なら、簡単に出来てしまう様な気がした。

「まあ、そういう訳だ。実はと言うと、俺は今回の封鎖について、かなり真相に近い位置にいる人間だと思ってる――お前が俺の欲しい情報を仕入れた暁には、俺もお前に対して、今回の事を包み隠さず、話してやるよ」

男が言う。

「…ちょっと、ちょっと待ってよ」

もう用は済んだと言わんばかりに、こちらに背を向けて歩き出す銀髪の男に向かって、ショウジは慌てて声を掛けた。

「さっきから聞いていれば――貴方一体、何様なの？　貴方はどうやら私を信頼してるみたいだけど――私は貴方を信頼できない。正直言って、貴方は少し怪し過ぎるもの。第一、こちらが貴方に情報を渡したところで、貴方が本当の事を話してくれるとは限らないじゃない」

「おいおい、そんな一気にまくしたてるなよ――ったく、やれやれだぜ。別に、信用したくなければ、しなければいいだろ。それに関しちゃ、ショウジちゃんの自由だ」

「『ちゃん』はいらない。それでなくても、私がその条件を飲んだとして――その時どうやって、貴方に伝えればいいの？　今、この封鎖内では携帯も使えないのよ？」

「安心しろよ。俺は『運命』やら『因果関係』という現象の意味合

いを、何よりも重んじる男でな――もしその時、お前が俺に必要な情報を握っていた時は、お前は俺の側にいる筈だ」

「因果関係…？」

言いながら、ショウジは首を傾げる。

「原因と結果だよ。何だ、アンタ『マトリックス』を見てないのか？　俺達は全員、因果関係の虜。『運命は選択するものだ』なんて、そんな夢物語を声高に話せる人間が、一体どれだけいるのかねぇ…。だとすれば、だ。今回、アンタが俺に声を掛けた事も、間違いなくその『因果関係』の内だよ。それが『原因』だ。…それがもたらす『結果』がどんなものなのかは、今んとこは分からねぇがな」

「…貴方は、本当にこの封鎖について、詳しく知ってるの…？」

「その質問に対する解答は、既に出した筈だぜ。信じるも信じないのも、貴女次第、だ」

「いや、そんな確率論で話をされても…」

「いいじゃねえか。どの道、アンタにとっちゃ、俺が初めての手掛かりなんだろ？連続吸血事件について探ってる俺にしても、アンタは初めての手掛かりだ。お互い、助け合って損はないと思うがね」

「…そんな、話…」

信じられる訳が、ないのに。

何故だろう。

先程から、ずっとだ。

この男の『言葉』は――何故、ここまで自分に響くのか。

何故、ここまで残るのか。

こんな見ず知らずの男と同盟条約を結ぶなど、正気の沙汰ではない。

その――筈なのに。

「…分かったわ」

いつの間にか、ショウジは――自分の意識とは全く無縁のところで、そう答えていた。

「貴方が本当に、この封鎖について知ってるかは、かなり怪しいところだけど――それでも確かに、賭けるに値する可能性みたいね…。それで？　私は連続吸血事件について、調べればいいのね」

「ああ、よろしく頼む――ハハッ、これで条約成立だな。よろしく頼むぜ、ショウジちゃん」

「『ちゃん』はいらない――こちらこそよろしくね。ええと…」

「『セト』。それが俺の名称だ」

「――そう、よろしくね。セトさん」

そう言って、ショウジはセトに手を差し出す。

セトはそれに対して、一瞬驚いた様子を見せたものの、すぐにニヤッと笑って、「こちらこそ」と言って、二人は力強く同盟の握手を交わした。

その際、「どうでもいいけどアンタ、胸元開きすぎじゃねぇの？」という、セトのセクハラを受けて、ショウジが彼の左頬に大きな紅葉（もみじ）を張り付けたという、プチ騒動もあったりしたのだが、それについては割愛する。

「――ああ、そうそう」

ショウジが彼に背を向けかけた時、セトが何かを思い出したように声をかけてきた。

「コイツはちょっとしたセルフサービスとして教えとくが――もし、他の人間に取材をしようと思うなら、『有里淳（ありさとじゅん）をオススメするぜ」

「有里？」

誰だそれは？　とショウジ。

「ああ、コイツは別に、封鎖の真実について知ってるって訳じゃあないんだが、しかし、話を聞いても損はない、と俺が太鼓判を押しておくぜ」

セトが言う。

「ふぅん…まぁ、いいけど。その人の特徴は？」

「ああ、女顔で、猫耳を模したヘッドホンをつけてるから、一目で分かる筈だ」

「そう…じゃあ、もし見かけたら、話だけでも聞いておくわ。…あ、それと、私からも1ついい？」

最後に一つ。

聞いておきたい事が――ある。

「んー？」

「貴方は、『人を殺す』という行為について、どう思う？」

「つまらねぇと思う」

それが、ショウジの質問に対する、セトの答えだった。

１ｓｔ　Ｄａｙ『東海林』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・ショウジ（東海林）

年齢：２８歳

誕生日：５月８日（おうし座）

血液型：Ａ型

身長：１７４ｃｍ

体重：情報規制は大事よね。ジャーナリストとしては。

家族：父、母、兄

職業：ジャーナリスト

好きな食べ物：ブイヤベース（フランスの代表的な海鮮スープ）

嫌いな食べ物：肉類

趣味：ネットゲーム

１ｓｔ　Ｄａｙ『チネシティ広場のバトル（１）』

――新宿、歌舞伎町。

「見つからねぇなぁ」

と。

有里淳（ありさとじゅん）がぼやいた。

「そうだな……。連中、マジで東京中を隙間なく封鎖してるらしい」

と、アツロウが答える。

「いや、俺が言ってるのはそうじゃなくて……ナオヤの事なんだ」

「……ナオヤさん、かぁ」

淳の隣を、腕でも組んでるんじゃないかと勘違いしてもおかしくないほど、間近に歩いているユズが、その名前を聞いて顔をしかめる。

「あの人、本当に何考えてるのかな？　どうして、私達にＣＯＭＰを渡したんだろ……」

「それもこれも、あの野郎に直接聞けば早いんだけどな……」

淳としては、こうして封鎖に穴がないか探し回っていると同時に、

どこかにナオヤの姿がないかと、油断なく目を走らせてきたのだが、しかし一向に見つかる気配がない。

鼠色の髪に羽織り、パンカラ下駄というスタイルである以上、うっかり見落としたという事はないだろう、それだけは確かだ。

「……ん？　え、アレ？」

そんな中、アツロウがある一点に視線を固定したまま、戸惑いの声を上げた。

「どうした？」

と言うよりも早く、淳も『それ』に気付く。アツロウの視線の先、そこに、一人の見知った男の姿があったのだ。

先程も言ったように、その姿は他の誰かと見間違える筈もない。

自分達の視線の先で、脇道に入ろうとしているナオヤらしき――否、ナオヤの姿を見つけた。

「おい、ジュン！　今のナオヤさんじゃ……」

「追い掛けるぞ！」

そう言うと同時に、淳は走り出していた。

「了解！」

アツロウとユズも淳に続いて、ナオヤが消えた脇道へと入ってい

く。そのまま、その道をしばらく走っていると（分かれ道の類はなかった）、突然、大きな空間に出くわした。

――チネシティ広場。

ある時は野外コンサート等のイベントの会場であり、ある時は不良のたまり場であるその場所には、大量のゴミが辺りに散らかっており、無法地帯の様相を放っている。

「あれ？　ナオヤさん、どこ行った？」

「あっ、あそこ！」

一見すると、ナオヤの姿はないように見えるが、しかしユズが指し示した方向を見ると、そこには暗い路地裏へと姿を消していく、ナオヤらしき影があった。

「誰か向こうに行ったみたい……！　ナオヤさんじゃないかな！？」

「よしっ……！　追いかけようぜ！」

アツロウがそう言うと同時に、淳達は再び走り出す。しかし、広場の中腹まで来た途端、淳が突然、足を止めた。

「――危ねぇっ！！」

淳はユズとアツロウの片腕をそれぞれの手で掴むと、そのまま自らの方へ力任せに引っ張った。

それと同時、二人が今まで立っていた位置に、突風が吹き荒れた

かと思うと、石の床が根こそぎになった。

「悪魔だ！」

いつの間にか、三人は複数の悪魔に囲まれていた。

先程、宮下公園で出くわしたビルヴィス、ワイラの他に、体中を炎で纏った鼠の様な悪魔の姿もある。

この悪魔は『カソ』といい、炎を操る悪魔だ。その小柄の体駆は、見に纏った炎の熱で、真っ赤になっていた。

「えええっ！　何よ、この悪魔の数は……。こんな昼間から……」

「俺は悪魔っていうと、てっきり夜だけに生きる存在だと思ってたんだが……。連中、どうやら二十四時間営業らしい」

「いや、んな事はどうでもいいだろ！　今はこの悪魔を何とかしないと……！　ジュン、その鼠みたいなのは『カソ』って言って、氷結属性が弱点だ！」

淳が軽口を叩いてる間に、隣のアツロウは既にＣＯＭＰを開き、敵悪魔の解析を終えていた。

それを聞いて、淳は舌打ちしたい気分だった。生憎、自分達の中で氷結属性の魔法を扱える者はいない。

だとすれば、力でごり押しするしかないだろう。

「ジュン、どうする！？」

「敵の数が多過ぎるな……！　攻撃は最小限に留めて、ここから離れる事に集中するぞ！」

「うん……こんなのと戦いながらナオヤさんを探すなんてムリだもんね……」

「奴らから逃げられたら、ここを迂回して、ナオヤさんを追いかけようぜ！」

淳はＣＯＭＰを起動させて、コボルト、オーガを喚び出す。

それにならって、アツロウとユズもそれぞれ、カブソ、ピクシーを召喚した。

既に状況を把握し、いつでも戦えるようにと臨戦体勢を整えている仲魔達に、淳は声をかける。

「お前ら、話は聞いてたな？　ここは一旦、引き返すから。無理に敵は倒そうとしなくていい。全員固まっての、一点突破だ」

「オウッ！」

「あいさ！」

「任せて！」

「全員、くれぐれも離れるなよ！　一人の所を囲まれたら危険だからな！」

「わ、分かってるよ！　連携が大事なんだから、ちゃんと考えて動かないと……」

淳は素早く、周囲の状況に目を走らせて、敵の配置や強さなどを見抜いていた。数ある脱出プランを頭の中で組み立て、その中から最も効率のいい策を選びとっていく。

「よし……コボルトと俺を先頭に、右はアツロウとピクシー、左はユズとカブソで固めてくれ！　オーガは最後尾だ！　ユズとピクシーは回復を最優先に頼む！」

「う、うん……分かった。怖くない、怖くない……！」

そうこうしている内に、敵の内の一体であるワイラが、先頭に立っている淳に対して、『妖気迅雷』で一気に距離を詰めてきた。

しかし、これは先の宮下公園での戦闘において、既に経験している。その為、淳の対応は以前よりも迅速だった。

「『ジオ』！」

淳はその手から電撃を放つ。しかし、宮下公園の時とは違い、手を上から下に振り下ろして、電撃を放つのではなく、右から左に、鞭を振るうように、迫りくるワイラの足元を狙って、電撃を《走らせた》。

「……っ！！」

その攻撃に対してワイラは一旦、距離を取らざるを得なくなる。

自分に向かって投げつけられるような、『点』の攻撃ならともかく、これは明らかに『防御』を目的とした、言うなれば『面』の攻撃。

恐ろしい事に、おぞましい事に、有里淳は、既に魔法というものを、使いこなした上で、それを応用し始めているのだ。

その圧倒的技量に、圧倒的才能に、魔法というものをよく知る悪魔達が――敵味方を含め、驚愕していた。

しかし或いは、もしこの場にセトが居合わせたのならば、彼はこれを当然の事として受けとったかもしれない。

『ペルソナ使い』と『ペルソナ使い』という、二人の異能者との間に生まれた、『純血の異能者』。

その上――彼の父親は、母親に淳を孕ませていた時点では、既に死んでいた。

生物学的には、だが。

つまり。

彼は『純血の異能者』というだけでなく、『死んだ人間』と『生きた人間』との間で生まれた――否、生まれてしまった、異能者どころではない、異常者。

例外どころではない、本来なら有り得ない、言うなれば、生きた屍（リビングデッド）。

死神（タナトス）の因子を受け継いた男――有里淳！

「よし、行くぞ！」

迫ってきたワイラがこちらから距離をとったと同時に、淳は全員を率いて、敵悪魔の包囲網を破るべく、走り出した。

「……にしてもアツロウ、妙だとは思わないか？」

淳が言った。

「これ以上、一体何が妙なんだ？」

大口を開いて来たワイラを火炎弾で牽制しながら、アツロウがそう答える。確かに、これだけでも十分過ぎる程に妙だろう。

「そもそも、どうして俺達は、ここで悪魔達と戦ってるんだ？」

ビルヴィスの突き出したフォークを、淳はダッキングする事でかわした。その攻撃の余韻をついて、コボルトがこん棒で横殴りにする。

「ええと……確か、ナオヤさんを追ってきたんじゃないか？」

「偶然かな」

「え？」

「いや、ナオヤを追って向かったその場所に、『偶然』この悪魔達が居合わせたのは、本当に『偶然』なのかなって」

今度はカソがその小さい体で跳躍し、アツロウへと飛び掛かった。しかしカブソの衝撃魔法により、その軌道は無理矢理変えられ、地面へと叩き付けられる。

「……？　……ナオヤさんは、俺達を悪魔と戦わせたかった……そう言いたいのか？」

「ありえない、と言えれば何よりだし。そうでなくても勘違いなら最善だ。どちらにせよ、あくまで推測だ」

別のビルヴィスが突き出したフォークを、顔の正面で片手で掴み取ると、そのまま刀返しの要領で、逆にビルヴィスの腹部へとそのフォークを突き刺した。

生暖かい血が淳の腕を赤く染めるが、彼は一向に気にしようとしない。

「ただ、もしこの推測が当たってたとしたらどうだ？　じゃあ、一体何が目的で？　って話になるだろ」

「ナオヤさんが考えてる事なんて、俺達には途方もつかないよ」

「違いねえ」

オーガは後ろから追ってくる敵に対して、『呪縛』を放っていた。このスキルは、呪文をかけた相手の行動力を著しく低下させる効果がある。

お陰で、被害を被った敵とこちらとの距離が、グングン開いてい

く。

襲い掛かる敵を何とかあしらって、淳達はようやく、敵の包囲網から抜け出す事が出来た。

「アツロウ！　カブソ！　ピクシー！　こいつで一気に距離を空ける！　俺と同時に魔法を撃て！」

「よし来た！」

「任せるだよ！」

「いくわよ！」

淳とピクシーには電流が、アツロウには熱気が、カブソには疾風が纏い、凝縮されていく。

「「『ジオ』ッ！」」

「『アギ』！」

「『ザン』！」

それぞれが放った渾身の魔法が混ざり合い、とてつもない衝撃と爆風を、敵に向かって巻き起こした。舞い上がる粉塵が敵悪魔達の視界を覆い、淳達の姿を隠す。

ようやく粉塵が収まり、敵の視界が利くようになった頃には、既に淳達の姿は消えてきた。

◆　◆

――新宿、歌舞伎町。

「よ、よしっ……！　何とかなったな……」

大量の冷や汗をかきながら、アツロウは言う。

「……結局、ナオヤの奴は見失っちまったな。またアイツのケツを追いかけなきゃいけないのかと思うと、憂鬱だぜ……」

淳は苦虫を噛み潰したかのような表情だった。

「どうして悪魔が出現したのか？　どうしてオークションなんてあるのか？　こんなクソ暑い中、アイツは羽織りなんか着て暑くないのか？　あの野郎に聞きたい事は山ほどある……」

「三つ目の疑問は死ぬ程どうでもいいとして、確かに、あの人だったら俺達が抱いてる疑問の殆どの答えを知ってるだろうな……。絶対に探し出さないと……」

しかし、ユズはと言うと、二人のように冷静な思考を働かす事は出来ないようだった。

「それより、あの人には一言文句を言わないと、気が済まない！　こんな危険な目に合わせて……！」

「確かにな……。お前が言う、その『あのクサレパソコンオタク！　今度会ったらケツの穴に爆竹を突っ込んでやらあ！』という怒りは、間違いなく妥当なものだ。お前さえよければ、爆竹に火を点ける役目は俺に譲って貰えないかね。ユズなだけに」

「いやいや！　私、そこまでは言ってないよ!?　ていうか、そのダジャレ下らな過ぎっ！」

「……ゴホン、まあ、それはともかく、出口を探すのも忘れないようにしようぜ」

「ソイツは俺も賛成だ。意地でも生きてここを出なきゃ、ネットも出来ないしな！」

「はぁ……アツロウの場合は、生き残る理由もそれなのね……」

ユズはまるで、靴底の裏にへばり付いているガムでも見るような目で、アツロウを見ていた。

「そ、そんな目で見るなよ……とまぁそれより、なあジュン。俺達の余命って、『0』のままか？　ひょっとして増えてたり……？」

その質問に対して、淳はすぐには答えず、代わりにアツロウの視線を真っ向から受け入れた。

「……正直に言っていいのか？」

「……いや、いいよ。……クソ、やっぱり駄目か……。出口は見つからないし、寿命は延びない、時間はどんどん過ぎていく……くそっ！　どうすりゃいいんだよ……」

そうアツロウがぼやいていると、三人のＣＯＭＰに、メールの着信を告げるメロディが鳴り響いた。

「……と、メールだ」

「今度は何なんだか……」

「さあな……、とにかく見てみようぜ」

『ＦＲＯＭ：ＣＯＭＰ・Ｓｙｓ
ＳＵＢＪＥＣＴ：スキルセットボーナス追加

＞このメールと同時にスキルセットボーナスが機能として使用可能となります。

この機能は、戦闘中に《ある条件》を満たした場合、ＣＯＭＰに登録済みのスキルの内、コマンドスキルを仲魔へ自在にセット出来る大変便利なものです。

ただし、そのエネルギーとなる《マグネタイト》にはまだ謎も多く、

現在研究を進めています。

【現時点の調査報告】

・マグネタイトとは

＞生体エネルギーの一種と思われる。

・スキルセットボーナスの原理

＞ＣＯＭＰに大量のマグネタイトを溜め、その力を開放する事で、仲魔の能力に影響を与えるというもの』

「今度はスキルセットボーナスってヤツが追加されたか……」

最初に口を開いたのはアツロウだった。

「戦いの最中にも考える事が増えるな。だけどこの二つを使いこなせば、今後が有利になりそうだぜ？」

「仲魔に好きなスキルを覚えさせる事が出来るってのは便利だな。一体の悪魔に複数の属性スキルを覚えさせれば、戦略の幅も広がるし」

淳がこの機能の有用性について、喜々として語っていると、ユズが呆れがちに口を挟んだ。

「男って、こういうの好きだよね……。だけど、マグネタイトを狙いすぎて、危険な真似はしないでよ!?　……あ、ところで、ふと思ったんだけどさ。このメールって一体、誰から来てるんだろう?」

「んー……、差出人は違うけど……ナオヤじゃないか?」

淳は少し自信なさ気に答えた。

「え~……本当に?　何か別人みたいな文章だよ?」

そう言われても、淳にとっては判断しかねる問題だ。まあ、アイツの事だから、文面を変える事なんか朝飯前だろうが。

「う~ん、この文章を直接ナオヤさんが書いてるかどうかは別だけど、文体や単語の基礎はナオヤさんの筈だ」

「……?　……スマン、よく分からない」

「ホラ、人間の言葉を話すロボットがいるけど、結局そのプログラムを組んでるのは人間だろ?　アレと同じでさ、ナオヤさんの組んだプログラムに従ってガイド文章が表示されているのかもしれない」

「へえ、そんな事が出来るのか」

「いや、プログラマーの間では、結構常識だぜ?　自分以外の第三者が使うソフトウェアを作る時は、マニュアルを作るのが普通だからな。このメールが別人の文章に感じるのは、個人としてのメールじゃなく、万人向けのマニュアルだからだよ。……ま、この事からも、悪魔召喚プログラムが、第三者に使わせるものだって分かる訳だ」

「……ふにゅう」

意味不明な説明を受けたので、淳も意味不明な答えを返した。

「よく分からん……」

アツロウは、まるで別の生物でも見るような目を淳に向けた。

「……淳、お前、この十七年間、何をやってきたんだ？」

「どーもこーも、大抵が真田さんと桐条さんによる、スパルタ特訓の毎日だったよ」

そのお陰（？）といっちゃあなんだが、淳に内蔵されている容量の中身は、体力の多さと武術のスキルが大半を占めてしまっている。

「というか、今お前が言った第三者って、ナオヤにとってのだよな？　だとしたら、俺達以外にもいると思うか？」

「んー……、もしそれ以外にも居るのだとしたら、ナオヤさん、改造ＣＯＭＰを俺達以外に渡したって事になるのか……？」

独り言ようなアツロウの疑問に対して、淳もユズも、何も答えることは出来なかった。

1st Day『死神の遺品』

――渋谷、芝公園。

「行方不明？」

「はい」

封鎖内に取り残された多くの人々が集まるこの場所で、かの翔門会の巫女、九頭竜天音と、一人の信者が何事か話し合っていた。

アマネはその信者に背を向けながら報告を聞いているので、信者の方からでは、彼女が今、一体どのような表情をしているのか、伺い知ることが出来ない。

「確かなのですか？　その子――ええと……」

「鮫美海狗（はやみみく）、です」

信者が言う。

「そう、鮫美さんでしたね……。そうです、思い出しました……。確か、彼女にはジュンさんの勧誘を頼んでいましたね。返事が返ってこないから不審に思っていたら、まさか行方不明だとは……」

「はい。先の作戦――『イザナギの抹殺』に、増援として向かったのを最後に、その消息がプッツリと途絶えています。無論、他の者達と同じように、イザナギに処理されたのではないかとも疑いまし

たが……全ての死体の中に、彼女の反応はありませんでした」

「反応……ですか」

そこで、アマネは「はぁっ」とため息をつく。

そのため息一つをとっても、見る者を誘惑する妖艶さが滲み出ていた。

「恐らく、イザナギ様があそこまでしたのは、誰が殺されたのかを識別できないようにする為でしょう……。実際、あれではとても、パッと見ただけでは、誰がどう殺されたかなんて分かる筈もありません」

アマネの脳裏に、その現場を見た時の光景が浮かび上がった。翔門会の信者、およそ三十人余り。その全てが細切れならぬ粉切れにされ、国会議事堂前の広場は、固体か液体かも分からぬ死体で埋め尽くされていたのだ。

『三十』という数は、教祖がその任務に向かわせた人員の数を表している。

そして、その増援に向かったのは信者は、ミク一人だけだ。巫女という、組織内でも重要な地位についているアマネは、当然そのことを知っていた。

つまり、今回の死体が三十人分という結果は、ミクも殺されたと考えた場合、明らかに不自然なのである。

「――正直、あの血生臭い光景は、思い出したくもありませんが…

…。悪魔の力がなければ、あの死体の中に、ミクさんのものがないとは気付けなかったでしょう」

すうっと目を閉じながら、アマネが言う。

「……それから、もう一つ気になる点が」

信者が言う。

「何です？」

「はっ。計画が行われた――末（すえ）に失敗した場所では、一台もＣＯＭＰが発見されませんでした」

「……」

それを聞いて、アマネは今度こそ本気で分かりかねるといった様子で、顔を曇らされた。

「確かですか？」

「確かです」

「……となると」

言って、アマネは目を閉じる。

「……一体、どういう事になるのでしょうか？　こちらの情報が確かなら、イザナギ様は『悪魔使い』ではなく、『ペルソナ使い』である筈。ならば、いくら悪魔召喚機能がついているとはいえ、改造

ＣＯＭＰなど、彼にとっては無用の代物でしかないのでは……？

……分かりませんね……。勿論、これはその時信者が携帯していたＣＯＭＰの全てを、現在、イザナギ様が所持していると判断した上での推測ですが……」

しかし、それに関しては、最早推測どころの可能性ではないだろう――と、アマネは思った。だからこその、疑問だ。

通常、ＣＯＭＰを必要としない『ペルソナ使い』である彼が、何故大量のＣＯＭＰを回収する必要があったのか――という、当然の疑問なのだ。

しかし、意味のない事をする男でもない。

彼がそうした以上、必ず何かしらの理由がある。

「……それに関して、一つご報告がございます」

「……良い知らせですか？　悪い知らせですか？」

「何とも、判断しかねます――別の仲間からの報告によると、銀髪で甚平を着た男が、街中で、一般人にＣＯＭＰを渡しているのを見た、と」

「……」

銀髪に、甚平姿と言えば――アマネが思いつく限り、該当する人物は１人しかいない。

「……勿論、彼はただのＣＯＭＰとしてではなく、それが悪魔召喚

プログラムを備えているものだと説明した上で渡しているのでしょうね」

「恐らくは」

「……順当に考えれば、仲間集めでしょうが……。……しかし、やはり解せませんね。イザナギ様の強さは、恐らくは我等が崇める主上――『ベル・ベリト』にも劣らぬ筈です。いや、或いはあの『大いなる闇』にも拮抗しうるかもしれません」

「まさか」

信者のその顔に苦笑を浮かべて、アマネの背に目を向ける。

「いくらあの男といえども、そこまでの実力は……第一、元は人間でしょう？」

「それを言うなれば、かつて御影町を救ったのも、珠瑠市を救ったのも、ニュクスから世界を救ったのも、その『人間』です」

「……」

反論できない、と認めるかのように、信者は口をつぐんだ。

「『人間』であるというだけで、悪魔や天使より劣っていると決め付けるのは早計です――時には、その人間特有の弱さが、人外の強さを凌駕する事もあります」

そこで一旦、アマネは言葉を切る。

「話が逸れましたね。つまり、イザナギ様がなされた事の数々――我等からＣＯＭＰを奪ったり、仲間を増やすような真似をしたりと……私には、それがさして意味がある行為とは思えないのです」

「はあ……？」

アマネの言いたい事が分からず、信者としてはただ首を傾げるしかない。

「つまり、です。あの方はわざわざそんなことをしなくとも、既に我々とは一戦を画した存在なのですよ」

『神に魅入られた銀色（イザナギ）』。

齢十七にして、神に成った存在。

女神（イザナミ）を打ち倒せし者。

「……私達の様な卑小な存在なら、まだそういった行為には意味があるでしょう。弱さを補う為に強さを求めるのは、至極当然の事です。しかし――」

既に強さを極めた彼が。

人類最強のペルソナ使いである、瀬多　〇〇が。

何故、そのような事をする。

何故――そのような、回りくどい真似をする。

彼がその気になれば、殆どの望みを、自分一人の力だけで実現する事が出来る筈だ――

と、アマネは言った。

勿論、話を聞いている信者に、その答えが分かる筈もないし、アマネにも分からない。

「……この事は、お父様に言いましたか？」

「いえ」

アマネの問いを受けて、信者は小さくかぶりを振る。

「そうですか。では、この後すぐに報告して差し上げなさい」

「……よろしいのですか？」

翔門会には現在、二つの派閥がある。

アマネの父である教祖が唱える、『悪魔の力で神を討ち倒し、人類の自由を確保する』という考えと、巫女であるアマネの思想である、『天使達の力によって、人類の救済を目指す』という考えの二つだ。

つまりは、教祖派とアマネ派に、翔門会内の考えは別れているという訳だ。

そして、今ここでアマネと話している信者は、アマネ派に属する信者である。

「構いません。イザナギ様にしても、こちらに自分の行動が割れているであろう事は予想がついている――いえむしろ、わざとこちらに自らの行動を示しているようにも思えます。ならば、下手に抗うだけ逆効果です。イザナギ様が悪魔の側なのか、はたまた我等と同じく天使と思想を同じくする者なのかは、今の私には判断しかねますが、それは二の次です。最悪なのは、こちらが下手をうってあの方の怒りを買う事です。ただでさえ、あの方は我ら翔門会を快く思っていないようですしね……。今はまだ、様子見に徹(てっ)するとしましょう。どうせお父様にも、すぐにこの事は知れるでしょうから、今言っても言わなくても同じ事です。それよりも、今報告しないで、後で『なぜ黙っていたのか』と言われる方が面倒ですから……ところで」

アマネは、信者の傍らに置かれている、ある物を見る。

それは、一つのアタッシュケースだった。

「そちらの中の物を、拝見させて下さい」

「はっ」

頷いた後、信者はそのケースをアマネの視線の正面に置き、開く。

そこに入っていたのは、アマネが有里淳を懐柔する為に用意した代物だった。

要するに、賄賂(わいろ)である。

アマネはそれを見て、目を細めた。

「――なるほど、手に取るまでもなく分かります。これは正しく、あの『救世主（メサイア）』が用いた代物に、間違いないようですね――」

そこにあるのは――一つの拳銃だった。

一見すれば何の変哲もない、銀色の銃身を携えた、スタンダードサイズの自動式拳銃である。

しかし。

しかし――もし仮にここに『初代特別課外活動部』のメンバーがいたなら、一目で分かる筈だ。

黒いグリップ部分に埋め込まれている、黄色い羽――通称、『黄昏の羽』。

そして――銀色の銃身に彫られた、『S．E．E．S』の文字。

そう――これは十九年前に活躍した、あるペルソナ使いが愛用した武器だった。本来なら、この物語では出てくる筈のない代物だった――しかし、その一つの『器』がここにあるのは、厳然たる事実だった。かつての持ち主の覇気を纏って、それは確かに存在していた！

かつて、桐条グループが開発した、『ペルソナ』の召喚を安定させる一品――『召喚器』！

「これがあれば、ジュンさんは間違いなく、『ペルソナ使い』として覚醒するでしょう――何せ、ペルソナ使いとペルソナ使いとの交

配によって生まれた、この世で唯一の純血の存在。目覚めぬ筈がありません」

ここへきて――アマネは初めて、薄く笑った。

有里淳と、セト。

今回の試練に、自分達の予想を遥かに大きく上回る程、大きな思惑が絡んでいる事を――この時の彼等は、まだ知らない。

１ｓｔ　Ｄａｙ『春沢芳野』

――六本木。

相変わらず淳、アツロウ、ユズの三人がアテもなくさ迷っていると、不意に、六本木の路上で人だかりが出来ているのを見かけると同時に、何やら音楽も聞こえてきた。どうやら、誰かが路上ライブをしてるらしい。

「……ん、何だ？」

淳は自分をかなりの音楽好きだと自負しているが、しかし今誰かが歌っているこの音楽には聞き覚えがなかった。

しかし、隣のユズは一瞬、驚いたような顔をした後、すぐに目を輝かせる。

「えっ？　この曲って……！」

「知ってるのか？」

淳が尋ねるも、ユズは一向に反応しない。どうやら、この歌に対して完全にトリップ状態になってるらしい。

仕方なく、淳とアツロウは呆れた様に顔を見合わせると、すぐにその歌を歌っている、この喧騒の主催者へと目を向けた。

数多くの観客の、その向こうで、力強い美声を放っている一人の

女性の姿があった。

艶のある赤い髪を肩まで伸ばし、左肩には赤い刺青が彫られている。白いチャイナ服の様な物を着ているが、肩回りや胸元、スリット部分の露出が異常に激しい為、一瞬、淳は目のやり場に困ってしまった。

「バッテリーで動くポケットアンプだから、迫力出なくてごめんなっ！　恨むなら、停電を恨んでくれよ！」

女性はそう言うが、しかしその口から発せられる歌声には、アカペラでもコンサートが開けるんじゃないかと思わせる程の迫力がある。

「――まぁ、アタシの歌でも聞いて、少しでも元気出しておくれ！」

女性がそう言って新しい歌を歌い始めると同時に、集まっていた観客から、大音量の歓声が響いた。

その中には、ユズの姿もあり、先程までとはうって変わってはしゃぎまくっていたので、一体どこにそんな元気を隠していたのだと、淳は舌を巻いた。

「きゃあああああ！　ハルぅぅぅ！」

……。

「凄い元気になる～ぅっ！　きゃあああ～～！」

（……何だろう、こう、隣で異常にテンション高い奴がいると、

逆にこっちのテンションがそれに比例して冷めたものになっちゃうっていうか……）

ハルという、歌を歌っている女性も、そんなユズの存在に気付いたようだ。

「ノリのいい子が増えたね！　それじゃ、調子も出てきた事だし次の曲いくよーー！」

言って、ハルは次の曲を歌い、大勢の観客に対して、その声を響かせる。

「きゃーーー！　ハルーーー！　サイコーーー！」

なるほど、淳は今更気付いたのだが、先程、ジンと初めて会った際、ユズが話していたハルというインディーズバンドのボーカルとは、彼女の事らしい。

ハルの歌は続く。

全員の観客が、その歌の激しさに身を震わせ、その声の美しさに聴き入っていた。

しかし、その中でただ一人。

有里淳だけが、ジッとハルの歌う姿を、無表情に見ていた。

ハルの歌声は、彼の心に響いていなかった。

それは、ハルの歌に響くものがなかったからか。

或いは、響かせる為の心が彼になかったのか。

しかし、後者に関しては――淳も、常日頃からヘッドホンを常備しては音楽を聴き続けている男である。少なくとも、感動に値する音楽を聴けば、身を震わせるだけの感性は持ち合わせていた。

ならば、前者か？

いや、それよりも。

淳はそもそも、彼女の歌声には全く耳を傾けていなかった。それは、ユズ辺りが聴けば間違いなく憤るであろう事だとしても――しかし、彼の関心事は他にあった。

淳の目の先には――力の限り歌を歌うハルの姿があった。

それを淳は、実に奇妙な感覚で見ていた。

まるで、写し鏡だ。

と、最初に思った。

そこで歌っている『彼女』が、全くの別人だとは思えない。

ここでその歌を聴いている自分にしても、彼女とは違う人間だとは思えない。

まるで、ドッペルゲンガーだ、と思った。

では、そう思う根拠は？

――分からない。

そもそも、淳にしても、自分がどのような人間なのか計りかねているのだ。

いや。

敢えて言うなら、『それ』か。

未だ歌い続けているハルを見ていると、淳はこう思うのだ――彼女からは、まるで生きている気がしないと。

かといって、死にたいと思っている訳でもない。

生も死も、全てが平等。

全てが均一。

さながら、そんな事はどうでもいいとでも言うように。

ふと、目が合った。

自然に、しかしさながら必然の様に、淳の青い瞳と、ハルの橙色の瞳の向かう先が、お互いの目を端にして、平行に重なった。

そして、淳は動揺する。

しかし、ハルも動揺していた。

が、動揺といってもほんの僅かなもので、それが歌に影響する事はなかった――ユズやアツロウも含め、全ての観客はその動揺に気付かない。

淳だけが気付いていた。

それもまた、必然。

自分の変化に気付かない人間など、いないだろう？

淳とハルとでは、何もかも違う。

性別も、年齢も、ファッションセンスも。

強いて言うなら、同じ人間であるという事だけだ。

だからこそ、戸惑った。

だからこそ、動揺した。

それでも、ハルはライブを続ける。

淳も、それ以上は何も考えず、ただその歌を、さながら自分の声を吹き込んだテープでも再生しているかのような思いで聴いていた。

「きゃあああああっ！　ハルーーーーッ！」

隣にいるユズは、そのライブが終わるまで声援を送り続けた。

◆　◆

しばらくして、ハルのライブがようやくの落ち着きを見せた頃……。

「こんなところでハルのライブを観られるなんて、思ってもみなかった！　あ～、カンドーした！」

ライブが終わった後も、方々へ散っていく観客と同じ様に、ユズの興奮は冷めやらぬようだった。

「すごいパワーがある歌声だったけど、そんなに有名なの？」

そうユズに尋ねたのはアツロウである。

「インディーズでは、かなり有名だよ！　さっき言ってた、ハルって彼女の事なんだ！　昔はＤ―ＶＡ（ディーヴァ）ってバンドで歌ってたんだけど、今はハルだけがソロで活動してるんだ！」

「ソロ？　それじゃ、そのＤ―ＶＡってのはどうなったんだ？」

アツロウの問いに、ユズは少しションボリとした様子になる。

「私もＤ―ＶＡの頃は良く知らないんだけど……。メンバーの『ア

ヤ』って人が、音楽の勉強だとかでいなくなって、活動休止してるんだって」

「なるほどな～。ハル、か……。俺もファンになりそうだぜ！」

「……」

「ん？　ジュン、どうしたの？　ダンマリしちゃって」

「ん、ああ、いや……俺もファンになっちゃいそうだなーって。凄いパワフルな歌声だったよな、彼女」

「でしょ、でしょ♪　いいよね、ハルって～！」

ユズの目が、同じ趣味を持った同志を得た事で、キラーンと輝く。

「あはは……」

そのあまりのテンションの高さに、アツロウ等は苦笑を漏らしていた。

「さて、小休止はおしまいだ。……俺達には『時間』がないんだからな」

「うん、絶対に生き残ろうね！」

ユズがそう言うと、ふと淳へと視線を向ける。淳はなんとも難しい表情をしていた。

「……ジュン、どうしたの？」

「……『0』だったよ」

なるべく感情を表に出さないようにしながら、淳はそう呟く。

それは、先程確認したハルの余命だった。

「え……!?　それって……大変っ……教えてあげなきゃ！」

「ソデコ！　待てって……！」

ユズが慌ててハルの元へと駆け寄ろうとするが、アツロウがそれを制する。

「なっ……何よ！」

「行って、何て言う気だよ!?　正直に話したって、怪しまれるだけだぜ?」

「う……それは……そうかも……」

確かに、初対面の人間にいきなり『今日、貴女は死にます』などと言われても、不審者扱いされるのがオチだろう。淳達にしたって、今日自分達が死ぬなどとは、まだ完全に信じられないのだ。

「その前に、俺達自身が今日で死ぬかもしれないんだ。これを何とかしてからじゃないと、アドバイスも出来ないんじゃないか?」

「う……うん……。そうだね……。どうせ教えるなら、解決策を見つけてからじゃないと意味ないよね……」

「そういう事だな。……さ、ジュン、ユズ。行こうぜ」

そう言って、アツロウとユズはその場から歩き出すが、しかし、淳の視線は、現在、ライブの後片付けをしているハルへと向けられていた。

鏡に映された、自分の姿を。

コインの裏側に刻まれた、自分の姿を。

淳は、見ていた。

やはりハルも、そんな淳の視線に気付いて、こちらに顔を向ける。

再び、淳とハルの視線が絡み合った。

その間、二人は何も言わず、何も考えなかった。

「おーい！　ジュン、どうしたんだ！行くぞ！」

「……ああ、今行く！」

遠くで自分を促すアツロウに答えて、淳はようやくハルから顔を背ける。

その瞬間。

ハルが、淳を見て僅かに微笑んだ気がした。

◆　◆

そんな感じで、淳達を含む、自分のライブを聴いてくれた観客が一人残らず六本木の通りを退いたその場所で、ハルこと春沢芳野（はるさわよしの）は考える。

考えているのは――先程から、ずっと気になっていた、あの少年の事だった。

青い髪、中性的な顔立ち、変わった形のヘッドホンを付けていたあの少年。

名前は知らないし――勿論の事、初対面である。

それなのに、ハルは彼に対して、まるで十年来の友と出会ったかのような感覚を抱いた。

まるで、会うべくして会ったかのように。

因果関係――はたまた、運命か。

ハルには、両親がいなかった。

孤児である。

だから、彼女には凡そ『家族』という概念が分からなかったのだが――しかし、もし彼女がそれについて少しでも理解していたら、あの少年に対して抱いた感情が、正しくそれである事に気付いただろう。

まるで、弟のような。

（――いや）

（――それは……ないか）

自分は少し、疲れているのかもしれない。

だとしたら、その理由は？

こんな暑い中で、何曲も歌ったから？

それもあるだろう。

しかし、それ以上に、あの少年に対して使った精神的エネルギーの消費の方が激しい。

たった少しの間、初対面の少年と顔を合わせただけだというのに。

（――いや、ダメだ）

しっかりしないと。

どうも、本当に自分は疲れているらしい――気分で始めたライブ

も一段落した所だし、とりあえず、ここから離れた場所にある武芸館で、一人で歌の練習でもしよう。

ようやく片付けを終えたハルが、そう考えて歩き出そうとしたところに――。

「――やれやれだぜ」

そう、声をかけられた。

振り向けば、そこに黒い甚平を着た、銀髪の男がいた。

つまりは――セトである。

彼は、人間でありながらイザナミという、正しく『神』そのものを打ち倒し、かつ自らも神になったという異常な存在なのだが――しかし、ボロボロの草履を履いて、気怠そうに佇んでいるその姿からでは、ハルにはそんな事が分かる筈もなかった。

いや、普段の彼女なら――勘の鋭い彼女なら――或いは、分かった筈である。

しかし、この時は少し事情が違った。

あの少年のせいだ。

あの死んだ目をした少年の影響が――それが良かれあしかれ、ここで表れていた。

「ちょぉぉぉぉぉっと聞きたいんだけどよぉ。この辺りで、イカした姉ちゃんが野外ライブをやってるって風の噂で聞いたんだが……。ぜーっんぜんそんなの見当たらねぇんだよなぁ……。もしかして、道に迷ったかな？　なぁアンタ、何か知らない？」

そんなセトの問いかけに対し、ハルは、

「……あ、ああ」

と、曖昧な返事しか返せなかった。

完全に、不意打ちだった。

『温度差』が、激し過ぎた。

さながら、熱い熱湯に浸かっている中、冷水を浴びせられたように。

逆だ、とハルは思った。

この銀髪の男は――先程の、青髪の少年とは、まるで逆。

つまりは、自分とも逆。

マイナスではなく、プラス。

善ではなく、悪。

絶望ではなく、希望。

あらゆる要素が、自分やあの少年とは、この銀髪の男と真逆だった。

「……それだったら、多分、アタシの事だよ。さっきまで、ここでライブしてたんだ」

「ええ？　マジで？　何だよ畜生！　俺ってば運なさすぎ！　アンタもそう思うだろ？　ホラ、時々、自分だけが不幸だと勘違いしてしまう程に、不運が続く事ってないか？　少なくとも俺はそうだ。年がら年中な。今までの俺の人生、不運が連続する事があっても、幸運が連続した事はない。俺にとって『幸せ』って単語は相容れない。常に断続的なものなんだ。決して連続する事はない。――けどな、そんな俺でも時々、自分がかなりの幸せ者なんだって思える時があるんだよ」

「……」

「アンタ、何に対して、そんなに絶望してんだ？」

「……っ！！」

全てを見透かした様な、その言葉に。

春沢芳野は、戦慄した。

「いや、絶望ってのはちょっと違うか？　言うなれば……『不安』？　或いは、『虚無』？　なんつーか……アンタ、何もかもがどうでもいいとか考えてないか？　……て、あ、なーるほど。そういう事か」

「……」

セトはそう言って、何やら一人で納得する。

「アンタ、似てるんだよ。俺が最近会った、死んだ目をしたガキに似てるんだ」

言って、セトは「ははははっ」と笑う。

「……ええと、それはつまり、何？　え、アタシもしかして今、喧嘩売られてる訳？」

「――と、待て待て。早とちりすんなよ――ったく、やれやれだぜ。まぁ、今の台詞じゃ、そう思うのも無理ねえか。だとしたら謝らせてくれ。しかしまぁ、お陰で納得いったぜ」

再び、「ははははっ」と、銀髪の男は笑う。

「――どうして、俺がアンタのライブに遅れちまったのか、だ。多分、俺なりの危機回避本能が働いたんだ。何せ俺は、あのガキが苦手だからなぁ……。なんつーか、仲が悪いとかそんなんじゃなく、本能的にダメなんだ。水と油っつーの？　どうやら俺は、どう足掻いたところでアンタのライブに間に合う事はなかったらしい」

「……」

「しかし参ったな……。俺自身はアイツに会いたいと思ってたのに、俺の本能はアイツを避けてるらしい……。有里先輩と同じく、相性は最悪、か……。やれやれだぜ」

「……」

そこでようやく、ハルは気付いた。

ああ、この人――。

やばいわ。

かなりやばい。

逆であるからこそ、自分達とは脳の構造が違うらしい。

というか、やはり自分は、間違いなく喧嘩を売られているんじゃないだろうか？

しかし、ハルは不思議と、それに対して憤りを感じなかった。

それは、きっと――。

この銀髪の男が言う事が、全て的を射ているからだろう。

どうしようもなく、真実を突いているからだろう。

ハルは一つ、ため息をつくと。

「……全く、アンタ、何なんだい？　まぁ、別にいいけどさ――そんなに聴きたかったんなら、一曲聴いてくかい？　今は、何だか歌いたい気分なんだ」

それは、もしかしたら――。

この男に、早々とこの場から去って欲しかったからか。

あるいは、あの少年の事を忘れたかったからかもしれない。

「いや、いいよ」

しかし、ハルの申し出を、銀髪の男はすげなく断った。

「俺がこうしてアンタのライブを聴き逃した以上、それが俺とアンタとの因果関係だったんだろーよ。だったら、その因果を無理にひっくり返そうとは思わないさ。アンタの歌が聴けないのは残念だけど、その歌声は俺以外の、多くの人間に聴かせてやれ」

そう言って。

男はハルに背を向けて、そのまま去って行った。

そして――後には、そんな彼の後ろ姿をポカンとした表情で見送る、春沢芳野の姿だけが残った。

彼女は考える。

（――『アレ』は一体、何なんだったのだろう？）

まるで――狐に摘まれたかのようだった。

あの青髪の少年には、どうしようもなく共感できたが。

共鳴できたが。

しかし、あの銀髪の男に関しては、よく分からないというのが率直な意見だった――まるで、捕え所がない。あの男を理解しようとする事は、深い霧を手に取ろうとするぐらい、意味がないだろう。

――『霧』、そう、正しく『霧』だ。

第一、自分とあの男が今回、出会った事は、物語的に大きな意味があるのだろうか？

今回の事は、何らかの伏線になるのだろうか？

恐らく、そんな事はないだろう。

自分とあの男との出会いは、何の意味もない。

因果はあっても、意味はない。

「うーん……」

自分の頭を掻きながら、ハルは考える。

（――しかし、何というか）

「……また、あの子に会いたくなっちゃったかな……」

『あの子』。

先程、邂逅を果たした――あの、青髪の少年。

今度こそ、本当の本当に会いたくなった。

しかし――果たして、再び会えるだろうか。

……いや。

「因果が合えば、また会えるだろうさ……」

そう言う自分が、これから僅か数時間後に、再びあの少年と再開を果たす事になるとは知らず、ハルは小さく微笑んだ。

１ｓｔ　Ｄａｙ『春沢芳野』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・ハル（春沢芳野（はるさわ　よしの））

年齢：２０歳

誕生日：1月１９日（やぎ座）

血液型：Ａ型

身長：１６０ｃｍ

体重：４０ｋｇ

家族：なし（父親、母親、共に行方不明。祖母の家に引き取られて育てられていたが、高校時代にその祖母とも死別し、その後、家を追い出されて、天涯孤独に）

職業：ボーカリスト（Ｄ―ＶＡ）、バー手伝い（ＥＩＪＩ）

好きな食べ物：焼肉

嫌いな食べ物：トマト（ジュースにすれば可）

趣味：曲作り

1st Day『スキルクラック』

――池袋、サンセット付近。

気を取り直して、淳達仲良し三人組は、自衛隊の包囲網に穴がないか探していたのだが、しかしやはりというかやっぱりというか当然というか必然というか当たり前というか、相変わらず、彼等はガッチガチに警備を固めていた。

それを見て、ユズは落胆を隠そうともせずにため息をつく。

「はぁ……ここもダメなんだね。池袋駅までの道に、自衛隊がいっぱいだよ……。それに、流石に歩き疲れたよ。もう、汗ベタベタで気持ち悪い……」

「……死ぬよりマシだろ？」

ユズの愚痴に対して、アツロウはそう返すが、しかし、その淡泊な態度がユズにはお気に召さなかったようだ。

「……！　そんな言い方しなくていいじゃない！」

「……ゴメン。ちょっと気が立ってた……」

「……いいよ、私もゴメン。今は、これからどうするか話しましょ」

「ああ、そうだな」

「……ねぇ、本当にさ。山手線の外には出られないのかな……」

「……」

「……」

ユズの言葉に対して、淳とアツロウは、思わず黙り込んでしまう（もっとも、淳は先程からずっと黙っていたが）。

「……私達、このままメールの通りに死んじゃうのかな……」

「……そうはならないし、させないから、安心しろよ」

ここでようやく、淳が口を開いた。

「それに、まだ俺達は東側は調べてないだろ？　まぁ、見た通り西側は自衛隊によって完全に封鎖されてるっぽいけど……。もしかしたら、東側には封鎖に穴があるかもしれない」

渋谷、恵比寿、歌舞伎町、池袋。

東京の西側は全て封鎖されていた。

しかし、東側ならば、或いは抜け道があるかもしれない。

本心でどう思ってるかはともかくとして、淳はそう考えた。

「……そうだな。西側がダメでも東側がある。あきらめずに探そうぜ……！」

と。

アツロウが言ったところで。

『♪♪♪♪』

三人のＣＯＭＰに、歌舞伎町以来のメールが届いた。

「メールだ……。見てみようぜ……」

『ＦＲＯＭ：ＮＡＯＹＡ
ＳＵＢＪＥＣＴ：間に合ったか

＞淳、まだ生きているな？

ラプラスシステムによる余命の表示の算出が、絶対でないとしても、問題の根本を変えねば、いずれ同じ結果にたどり着く可能性は高い。

……それが、『運命』というヤツだ。

お前が運命と向き合い、切り拓くため、このメールと共に新しい機能をアップデートした。

新しい機能『スキルクラック』については、システムメールの中に

詳しい説明が届くだろう。
生きて会える日を楽しみにしているぞ』

『ＦＲＯＭ：ＣＯＭＰ・Ｓｙｓ
ＳＵＢＪＥＣＴ：スキルクラックについて

＞スキルクラックとは、対峙した敵の持つ能力を解析し、学習する機能です。

【注意事項】

・クラックを設定したＣＯＭＰの使用者を含むチームが、対象となる敵を倒す必要あり（仲魔のチームが倒した場合は無効）。

・クラックを設定する対象は、敵チーム全体ではなく、敵チーム内の指定した敵単体となる。

・クラック対象と、設定したＣＯＭＰの使用者はＣＯＭＰの上画面で確認可能』

「はぁ……ナオヤさんって、本当によく分からないよ……。危ない目に合わせたり、一生懸命に助けてくれたりさ……」

最早呆れ果てたという様子で、ユズが呟く。

「確かにな……。俺達を助けてくれる気なら、最初からこんな封鎖に巻き込まれないようにしてくれたら良かったんだ」

とアツロウ。それに対して淳が、

「……でも、実際には、この封鎖に俺達を巻き込んだのはナオヤだと言っても過言じゃない」

と言う。

「……何なんだろうな。アイツの従弟にしては情けない限りだが、しかし今回ばかりはアイツの考えが分からない……それとも、何か隠してるのか？」

アイツは、隠し事の塊みたいな奴だからな――と淳。

「うん、私もそう思う。絶対、何か隠してるって……！」

「俺達に言えないような事か、または言える段階じゃないのか……。まぁ、今考えたって分からないけどさ」

「うん……」

そう――分からない。

だからこそ、焦ってしまう。

人にとって一番の不安要素は、情報が不足、或いは遮断されてしまう事だ。

この場合、どちらもだが。

と、ここで、それまでの不安を掻き消すように、アツロウが無理矢理話題を変えた。

「なぁ、ところでスキルって、俺達が使える、魔法みたいな奴の事だろ？　それが増やせるなら、間違いなく、役に立つ筈だぜ！　これで生き残る可能性も、少しは上がるかもな……！」

「でも、スキルクラックだっけ？　悪魔の事を知らないと作れないような機能だけど……。ナオヤさんって、悪魔についてどこまで知ってるんだろう？」

そう言いながら、ユズは淳に視線を向けてきた為、淳は「分からねぇよ」と言いながら肩を竦めた。

「あの野郎とは随分長い付き合いだけど、悪魔について語ってるとこなんか見た事がない。まぁ、そもそもアイツ自身が悪魔みたいな奴だけどな……。それもこれも、直接アイツに聞けばいいんじゃないか？」

淳がそう言うと、ユズは納得したように頷く。

「……そっか、確かに直接聞くのが一番だよね」

「ああ、そうだな。まずはナオヤさんを探そうぜ。本人から色々聞き出すんだ」

「何よりも、私達は自分の余命を何とかしないといけないけどね……」

「ああ。その為にも、使えるものは使って、生き延びてやるんだ……！」

「だったら」

パン、と淳は両の手を打ち合わせる。

「早速、この『スキルクラック』ってヤツを試してみるか？　先ずは戦力の増強へと洒落込もうぜ。確か、さっきの宮下公園辺りに、まだ悪魔が出没してたろ？　ついでに、マッカ稼ぎにもなる」

淳の提案に、アツロウとユズが賛成と言って頷いた。

「うん、そうだね。……ハァ、それにしても、私達ってすっかりこの異常な日常に順応しちゃって来てるよね……」

「そこから抜け出す為に、俺達は行動してるんだろ？　じゃあ、早速宮下公園に行こうぜ！」

アツロウのそんな台詞と共に、淳達はその場を後にした。

その背後では、相変わらず多くの自衛隊が、この封鎖から誰も逃がさないように目を光らせていた。

◆　◆

そんなこんなで、現在、淳達は宮下公園にいた。

彼等の周りには、何体かの敵悪魔の骸が横たわっており、先程までの戦闘がようやく終わったところだった。

「……よ、よし……まぁ……こんなところだろ……」

やや息を切らせながら、淳は自分のＣＯＭＰの画面を確認する。そこには、先の戦闘で自分達が敵悪魔からクラックしたスキルが表示されていた。

・『ブフ』
・『ザン』
・『アムリタ』
・『一分の活水』
・『英霊の加護』
・『同族の心得・防』

『ブフ』と『ザン』はそれぞれ氷結属性と衝撃属性の下級魔法。『アムリタ』は全てのバッドステータスを回復し、『一分の活水』は体力を僅かに増加させる。

『英霊の加護』は物理攻撃の精度を上げ、『同族の心得・防』は同種族から攻撃を受けた場合、そのダメージを軽減させるという効果がある。

どれも、使い方次第では戦局をかなり有利に出来るであろうスキルだった。何より、今回クラックしたスキルと合わせて『アギ』『ザン』『ジオ』『ブフ』と４種族の魔法を揃える事が出来たのは大きい。

更に、先程の戦闘で、ナオヤのメールにあった『マグネタイト』が一定量貯まり、仲魔の１体にスキルセットボーナスを行う事が出来た。

――ので、三人で話し合った結果、ピクシーに火炎魔法である『アギ』を習得させる事にした。

「……これからも、必要だと判断したら、こうして定期的に仲魔と自分達を鍛えた方がいいな。特に、スキルセットボーナスとスキルクラックは上手く活用した方がいい。これから先、どんな悪魔が出てくるか予測がつかないだけに、出来るだけ、準備は整えておいた方がいい。『備えあれば憂いなし』だ」

淳の言葉に、アツロウとユズは納得したように頷く。

「確かにな。……いや～それにしても、俺達、大分悪魔との戦いに慣れてきたと思わねえか？　何事も慣れだよな」

「そうだね……。私も最初は凄く怖かったけど、今はそれ程でもないかな」

逆を言えば、それは――自分達が、この非日常に早くも慣れてきてしまったという事だろうが。

しかし、状況が状況なだけに仕方ない。

淳は、コボルト、カブソ、ピクシー、オーガといった、四体の仲魔に目を向ける。

四体とも、先の戦闘を終えた事で緊張が解けたのか、それぞれ、思い思いに談笑していた。

そんな仲魔の内の一体、ピクシーに、淳は声をかける。

「なぁ、ピクシー。どうだ？突然、別の魔法を覚えて違和感とかはないか？」

スキルセットボーナスは確かに便利な機能だが、悪魔の能力が、好きなように足したり引いたり出来る、さながらＲＰＧの様な都合の良いものである訳がない。

淳としては、自分の仲魔に対して、臓器移植を強制してしまったかのような罪悪感があった。

しかし、そんな淳の心配は全くの杞憂だったらしい。ピクシーはフルフルとその小さな頭を横に振る。

「全然そんな事ないよ。むしろ、今まで使ってた魔法みたいに、全く違和感ないし。凄いね、そのナオヤって人。こんな、悪魔に対して自由に魔法を覚えさせられるプログラムを作るなんて……。一体、

何者なのよ。アンタの従兄は」

「変人だよ。変人で天才だ。まぁ、これは凡そ天才と呼ばれる全ての人間に言える事だけどな」

しかし、ことナオヤに関しては、変人とか天才の一言で片付ける事は出来ない。

いや、そもそも、現在地球上に存在する如何なる言語を用いても、彼の人間性について説明する事は出来ないだろう。

それは、彼という人間を、（恐らくは）一番よく知る淳にしても例外ではない。

強いて言うなら、『よく分からない』というのが、ナオヤに対する見識としては一番真実に近い位置にあるだろう。

「なぁ、ジュン。ところでどうして、お前の『ジオ』と俺の『アギ』を交換したんだ？」

彼が一人思考に耽っていると、不意にアツロウが声を掛けてきたので、淳は顔を上げる。

先程、戦闘が終わった際に、淳は突然、アツロウに対して自分の『ジオ』とアツロウの『アギ』を取り替えようと提案してきたのだ。

そんな淳に対して、アツロウは事情がよく飲み込めないまま、彼の言う通りに、淳に『アギ』を、自分に『ジオ』をセットしたが、その理由をまだ聞いていなかった。

「ああ……それはホラ、アイツの対策だよ」

「アイツ？」

「ホラ、昨日、青山霊園で会った、あのウェンディゴってヤツ」

――『ウェンディゴ』。

昨晩、淳達が戦った、雪男のような悪魔。

恐らくは――というよりは間違いなく――自分達が会ってきた悪魔の中では、一番手強い悪魔だろう。

昨晩、アマネの登場によってやむなく霊園から逃げ出したあの悪魔は、去り際に、決して自分達を逃がさない、という台詞を残していった。

再び、あの悪魔と相見えるのも遠い未来ではない、と淳は確信していた。

それまでに、出来る限りの対策を立てておくべきだ、とも。

淳からその名前を聞いて、アツロウとユズも、ウェンディゴについて思い出したようだ。途端、二人の顔が厳しいものになる。

「ウェンディゴか……アイツ、強かったよな……。淳をたった一撃で沈めたし」

「い、嫌な事を思い出させるね君……」

アツロウの思わぬ指摘に対し、淳としては頬を引き攣るしかない。

昨晩、淳は一人でウェンディゴと戦った結果、腹部に強烈な一撃を貰い、そのまま気を失ってしまったのだ。

「だけどまぁ、俺にしたって同じ相手に二回も負けてやる程、お人良しじゃねぇよ。必ずリベンジは果たしてやる……。幸いにも、アイツの弱点属性は割れてるしな」

それは昨晩、自分が倒れた後、アマネがウェンディゴを追い払ったというアツロウとユズの話を聞いて、推測した事だった。

聞けば、アマネが放った火炎魔法に対して、ウェンディゴは極端な程にダメージを負ったらしい。

そもそも、雪男というのは、そのニュアンスからも炎が苦手という印象がある。

それらの事から、ウェンディゴの弱点は火炎魔法だろうと、淳には予測がついた（情けない事に、唯一ウェンディゴと向き合った淳のＣＯＭＰがアナライズを起動させる前に、彼が沈められてしまったので、肝心の相性が分からなかった）。

「それって……ジュン、まさかあの強そうな悪魔と一対一で戦うって事！？　駄目だよ！　そんな危ない事！」

これに対して、真っ先に異論を唱えたのが、誰よりも彼を思うユズである。

それを受けて、淳は慌てて弁解を始めた。

「いや、違うって！　あくまでも保険だよ。でもホラ、いざって時は、この中で唯一アイツと向き合った事のある、俺が一番適任だろ？」

そう、戦わないで済むなら、それに越した事はない。

しかし、それは淡い希望だろう、と淳は思う。

いずれ、ウェンディゴとは決着をつけねばならない時が来るだろうと、淳には妙な確信があった。

「勿論、もしアイツと遭遇した場合は、逃げる事を優先するさ。でも、もしそれが叶わない場合は……俺とピクシーでアイツを迎え撃つ。ピクシー、それでいいか？」

心配そうに尋ねる淳に対し、しかしピクシーはグッと親指を立て、笑顔で応じた。

現在時刻、十二時四十分。

決戦の時は、近い――。

◆

◆

『フリーバトル・宮下公園（2）』終了時ステータス

●所持マッカ：２４００

●有里淳（？？）

・コマンドスキル
＞？アギ
　？ブフ
　？――
・自動効果スキル
＞？英霊の加護
　？――
　？――
・先制発動スキル
＞『――』

●木原篤郎（人間）

・コマンドスキル
＞？ジオ
　？――
　？――
・自動効果スキル
＞？一分の活水
　？同族の心得・防
　？――
・先制発動スキル
＞『――』

●谷川柚子（人間）

・コマンドスキル

＞？ザン

？ディア

？アムリタ

・自動効果スキル

＞？――

？――

？――

・先制発動スキル

＞『――』

●仲魔

＞・コボルト

・カブソ

・ピクシー

・オーガ

――Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！

1st Day『昼食』

――芝公園。

増上寺を中心とした緑地帯であり、明治六年の開園と、都内でも上野恩賜公園などと並び評される古い公園である。

元々は、増上寺境内の敷地を公園としていたが、戦後の政教分離の考えにより、増上寺の敷地とは独立して宗教色のない都立公園として新たに遊具や運動施設などが設けられ、整備された。

その為か、現在の公園の敷地は増上寺を取り囲むような形状になっている。公園内にはホテル、学校、図書館などの施設が点在するほか、グラウンドや散策路などがあり、広大な公園施設となっている。

また、園内には前方後円墳の芝丸山古墳、丸山貝塚もあり、東端には港区役所、西端には東京タワーが建ち、特に東京タワーを正面に望む東側の散策路はデートスポットとして、又はロケ撮影地として親しまれる。

で、そんなカップル専用とも言える、芝公園の東側で、二人の男女が昼食を摂っていた。

しかし、その二人を傍から見ても、それをカップルだと判断する人は少ないだろう――それはカップルというよりはむしろ、出来の悪い娘と、その面倒を見る父親という感じだった。

男の方は、凛々しい顔付き、眉を隠す程度に伸びた銀髪で、ボロボロの草履を履き、黒い甚平を着ている――言うまでもなく、セトである。

女の方は、こちらは今まで出番が少なかったので、幾らかの説明を必要とするだろう――何せ、原作では死んでいる筈なのに、作者の気まぐれによってギリギリで生かされている様なキャラクターなのだ。無理もない。緑色の瞳、黒いショートカットという、ボーイッシュな少女――『元』翔門会信者の、鮫美海狗（はやみみく）である。

「うにゃあああああああああああっ！！」

その少女が突如、誰にともなく喚（わめ）き出した！

「うにゃあああああああっ！　うにゃあああああああっ！」

「うるせえええぇぇぇぇぇっっ！！」

パコーーンッ！！

そんな擬音が聞こえそうな勢いで、ミクの顔面に、天然水の入ったペットボトルが投げつけられた。中にはまだ半分ほどの水が残っている。

その為、中々の重量があり、それなりに痛い。ミクは「ぎゃふんっ！」と雑魚っぽいリアクションをとって、ズテーン！　と、座った体勢のまま、後ろに倒れ込んだ。

無論の事、ペットボトルを投げたのはセトである。

コメディ的な展開でごまかしつつも、年下の女性に対して暴行を奮うという、あまりにも非人道的な行いを、彼はアッサリとやっけのけた。

「――ったく、やれやれだぜ。……何なんだよ、一体。突然、大声を出しやがって……」

「聞いてくださいよ聞いてくださいよ！　セトさんっ！　実は私、先程神様から余りにも不当な解釈を受けたのです！　ですので、誰にも向けようがないこの怒りを、大声を出す事で発散させた次第であります！」

ミクはビシィッ！　と敬礼した。

「そうでありますか。しかしだミク、それはなるべく人が少ない場所で行うべきだな。お前ぐらいの歳なら、それぐらいの一般常識を知っておいてもいい筈だ」

「別にいいじゃないですかぁ。セトさんの能力で、私達の存在は周りから隠されてるんでしょう？　だったら、どれだけ騒ごうとも問題無しですよぅ」

「問題多アリですよぅ、ミクちゃん。他が良くても、君の喧騒はしっかり俺の耳に届いてしまうという事を忘れないでくれ」

現在、二人の周りには、殆ど視認できない程に薄い霧が漂っていた。

その霧の影響か、先程の様にミクが大声を出しても、周りの人間は全く気付いていないようだった。

――『混迷の霧』。

それが現在、セトが使用しているスキルの名前である。

見える物を隠し、

見えない物を晒す力。

全てを惑わし、対象を幻と虚構が支配する世界へと引きずり込む、かつてセトが倒した強敵――『アメノサギリ』が使用していたスキルである。

それを、セトは自分の意のままに操っていた。

これを用いれば、離れた相手に幻覚を見せ、会話する事も出来るし、相手に気付かれないまま、好きな様に行動する事も可能である。

「……まったく、飯のときくらいは静かになってくれよ」

そう言って、セトは手に持った握り飯（昆布入り）を租借する。

時間的にも丁度いい頃合いだという事で――現在、二人は昼食中だった。メニューは、今朝、セトとカイドーが話している際に、ミクがコンビニで買い込んでいた商品である。

それに対して、ミクはランチパック（ツナサラダ味）をモグモグと、まるでハムスターの様に頬を膨らませながら頬張っている。

飲料水は、セトは天然水（先程、ミクに投げつけてしまったが）、

ミクはポカリスエット。どちらも五百ミリリットルサイズだった。

「ううう……セトさんは厳し過ぎますっ！　ゆとり教育はどうしたんですかどうしたんですかっ！」

ミクは、二人の下に敷かれているビニールシートを、バン！　と叩いた。一々リアクションの激しい奴だなと呆れつつ、セトは顔を上げる。

「残念だったな。今は『脱ゆとり教育』という言葉があるのを知らないのか？　二千十二年には、そのゆとり教育とやらは完全に撤廃されてしまうんだぜ？」

「なんとっ！？」

ミクは『ガーンッ！』となる。

「まさか、そのような悪魔のごとき政策が推し進められているとは……果たして、神は死んでしまったのでしょうかっ！？」

「いや、勝手に殺すなよ……」

お前、仮にも元翔門会だろうが。

そんな二人の側を、何人かの翔門会信者が通り過ぎるが、しかしやはり、二人の様子には全く気付いていない。セトが使用しているスキル『混迷の霧』は、有効に作用しているようだった。

それを見て、ミクは「はあーっ」と感心したように口を開ける。

「何度見ても凄いですねぇ……、この霧。この能力があれば、どんな犯罪でもやり放題ですねっ！」

「明るい表情で何を言ってやがるんですかお前は。大体、そんな事したら俺はソッコーで今の天使としての座を剥奪されちゃうだろうが」

「はわわ～、神様の世界にも、決まり事があるんですね～」

「当たり前だ」

セトは、その手に摘んでいた握り飯の最後の一欠けらを、ポイッと口に放った。それを、モグモグと、よく租借して、栄養分を摂取する。

「まあしかし、お前のその破天荒さは、この廃れた時代では、ある意味重宝するべきかもしれないな。俺の娘にも見習わせてやりたいよ」

「えっ！？」

その言葉に、ミクは長い睫毛（まつげ）をパチクリとさせる。

「セトさんの子供って、根暗なんですかっ！？　というか、子供がいたんですかぁぁっ！？　ドカーン！　バリバリバリ！」

「語尾にあるやかましい擬音は何だ？」

「余りに驚いた事で、私の頭に雷が落ちた音ですっ！」

「へぇ、お前は驚くだけで雷を落とせるのか――って、んな訳あるかっ！」

ビシイッ！　と。

この物語において、初めてノリ突っ込みを発動したセト。

「――ったく、やれやれだぜ。……別に、俺の娘は根暗な訳じゃねぇよ。ただ、俺の妹や叔父も含めて、どうも俺の家系は、全員がこう……冷静っつうか……ドライな性格だからな。後、俺はもう三十四なんだ。子供の一人くらいはいても不思議じゃないだろ」

「なるほどなるほどっ！　確かにセトさんぐらいの歳になれば、そこらの女に自分の種子を植え付けていても、不思議ではないですね！」

「そういう言い方はヤメロっ！」

今度はセトがシートを叩く番だった。

確かにその通りだが……しかし、物には言い方というものがある。

「お子さんは、何歳ですか？」

「今年で十五だ。受験の事を考えると頭が痛い……」

そう言って、セトは本気で悩ましげに頭を抱える。そんな光景を、ミクは何とも不思議な気持ちで眺めていた。この男にも家族と呼べる人間が存在するのか、と少し――いや、かなり意外だった。

「んー……アレ？　じゃあ、セトさんはどうやってその娘さんを養ってるんですか？　それとも、神様って役職でも、給料が出るんですか？」

「いや、俺が神――つまりは『イザナギ』として活動するのは、今回みたいな、本当に稀な事態の時だけだ。それ以外は翻訳の仕事をしている」

「翻訳？」

「ああ……、高校の時は単なるアルバイトだったんだけど、好きな時間で、且つ自宅で出来るから、そのまま就職した。それ以外にも、ダチが経営してる大型デパートの応援にいったり、知り合いの探偵に協力したり、神社に居座る狐の話し相手になったりと……まぁ、色々だよ」

「デパート？　探偵？　狐？」

何だか今回の会話で、セトに対する親近感が、グッと近付いた気がする……。

「まぁ、それでなくとも、俺の女房は地元の有名旅館の女将だから、別に俺が働く必要はないんだが……。流石に働かない父親ってのはカッコつかないだろ」

「ほわわ～。何だかんだ言っても、セトさんって、根っこは人間なんですね～」

「当たり前だ。お前、俺を何だと思ってたんだよ……」

そう言って、セトはミクが持つポカリをもぎ取ると、そのまま口の中を潤し、ミクへとほうり投げる。

ミクはほんの少ししか残っていないポカリを恨めしそうに睨むと、別の話題を振った。

「それよりセトさん。さっきの女性の事ですけど、えーと……、確か……」

「ショウジちゃんの事か？」

「そうそう、そのショウジさんですけど、どうして、私やカイドーさんの時みたいにＣＯＭＰを渡さなかったんですか？　あの人の安全を確保する為にも、あそこは渡しておくべきだったんじゃないですか？」

「ん、ん、んー……」

コンビニ袋から二つ目の握り飯（梅干し）を取り出しながら、セトはミクの指摘を受けて言い淀む。

「なんつーか……言うなれば勘かな」

「勘？」

「ああ。昔から、俺はトラブルを引き寄せやすい体質らしくてな……。高校二年の時起きた連続殺人事件を皮切りに、その後も色んなトラブルに巻き込まれた。そのお陰というか、何というか……。俺には分かるんだよ、『向こう側』と、『こちら側』の人間の区別がな」

「……？」

「一体何を根拠に、って言われると正直、かなり説明に困るんだが……。人間には全員、『役割』ってもんがある。それは主人公だったりライバルだったり裏役だったり脇役だったりと様々だが……。あの人を見た時、俺は直感したんだよ。『この人をこちら側に引っ張り込むべきじゃない』ってな」

「……？　……セトさん、言ってる事が抽象的過ぎて、よく分からないですよ」

「言いから最後まで聞けって……。早い話が、『貴重』なんだよ。ああいう、普通でありながら物語に関与できる存在ってのは……。自らを『普通』と評するお前にしたって、結局は俺によって『異常』な世界に引き込まれちまった――つまりは、『保護』だな。珍しい物をそのままにしておきたい、って思うのは当然だろ？　中々いないんだよな。ああいう、ありふれた『普通』ってのは。だから、『とりあえず』は、あの人を『こちら側』に引き込む必要はない」

「……」

そう話すセトの会話の内実が、ミクには殆ど理解できなかったようだ。相当数の三点リーダーを出しながら、提灯アンコウよろしく口をポカーンと開いている。

そんなミクに対して、そういえば千枝も英語の授業を受けている間はこんな顔だったな、と思いながら、セトはやや呆れたように目をパチクリさせると、

「……つまり、あの人を厄介事に巻き込みたくないって事だよ」

と言った。

「なるほど！　それならよく分かるです！」

……。

あー、馬鹿の相手は疲れる……。

（それにしても――役割、か……）

言いへて妙だ、とセトは思う。

ならば。

ならば――自分達の役割はさておき――彼の役割は、一体どのようなものなのだろう？

主人公（にしちゃぁ暗いよな）？

ライバル（誰のだよ）？

はたまた悪役（案外似合うな……）？

或いは――脇役か（これはありえない）？

「どちらにせよ、簡単に消えていい役割じゃねえのは確かだな……」

「え？　何か言いましたか？」

「いや、何でもない」

セトは肩を竦めると、再び握り飯を貪り始めた。ミクはしばらくそれをキョトンと眺めていたが、やがて自らも昼食を再開する。

一つ補足をさせて頂くと、この時のセトとミクは、淳達の余命が現時点では『０』である事を知らない。セトが淳と直に向かい合ったのは昨晩だけだし、その時、彼はＣＯＭＰを持っていなかった。ミクにしても同じである。

だからこそ――或いは、もしセトがこの時、淳達の余命が『０』であると知っていたのなら、彼は、こうしてここで暢気に昼食を摂ってはいなかっただろう。

彼の性格上、あからさまに手助けして淳を甘やかす事はなくとも、様子を見に行くぐらいはした筈なのだ。

現在時刻、十三時十二分。

今この瞬間に、自分が気にかけている有里淳が、一体の雪男と死闘を繰り広げている事を、セトは知らない――。

１ｓｔ　Ｄａｙ『ドーム球場前のバトル（１）』

――水道橋、東京ドーム前。

淳達が特にアテもなく歩いていると、彼等はいつの間にか、こんな場所に来ていた。

「ここ……遊園地？　懐かしいな……昔、家族と一緒に来た事あるよ……」

思い出を懐かしむように、そう話すユズ。勿論、まだ彼女に父親がいる頃の話である。

淳にしても、一度も来た事がないとは言わないが、しかし、彼にとっての遊園地に関する思い出と言えば、幼い頃に母親と行った巌戸台近くの遊園地の方が大半を占めている。

淳は、母がお化け屋敷に対して極端な苦手意識を持っているのを知っていたので、何度もそれをからかったというのも、今となっては良い思い出だ。

この後楽園という場所に関しては、母の高校時代の先輩である『真田さん』に、何度かプロボクシングの試合に連れて行かされたというものの方が印象深い。

閑話休題。

そんな思い出深い後楽園は、この時間ならば、いつもは多くの人

で賑わっている筈だが、しかしこの時ばかりは勝手が違うようで、辺りには人っ子一人見当たらなかった。

不気味な静寂が東京ドーム前――どころか、後楽園全体を支配している。

「……？　誰もいないね、いつもは混んでるのにさ……」

ユズもその変化に気付いたのか、目線を伏せて落ち込んでしまう。しかし、落ち込んでいても仕方ないと悟ったのか、顔を上げて気を取り直すと、

「……ねぇ、ジュン！　乗り物はどれが好き？」

と言った。

その質問に対して、淳は僅かに思考した後、

「そりゃあ、なんと言っても観覧車かな」

と答えた。

「いやん、気が合う～！　それ、私も好き♪」

淳の返答を聞いて、手放しで喜ぶユズ。

「……」

……いや。

（気が合うも何も、お前とは何度も遊園地に来てるから……で、当然、お前の好きな乗り物は知ってるから、それに合わせて答えただけなんだけど……）

――確信犯か？

まぁ、喜んでるからいっか、と淳は思った。

そんな彼の隣では、アツロウがキョロキョロと辺りを見渡している。

「文京区後楽……か。遊園地と野球場が有名なトコだな。それにしても……」

そこまで言うと、ふと、アツロウは眉をひそめた。

「……なぁ、ここって、やけに涼しくないか？」

アツロウの疑問に対し、そう言われると確かにそうだ、と淳は思った。余り気にしていなかったが――しかし、言われてみれば、夏の昼間であるにも関わらず、先程から自分は汗の一滴もかいていない。

「……ん？」

そこまで考えた時、淳の頭の中で、何かが引っ掛かった。些細な、しかし重要な何かだ――しかし、それが一体何なのかを、淳は思い出す事が出来ない。

そんな中、ユズも、現在自分達が置かれている、奇妙な現象に気

付いたようだ。

「そういえば……そうだね。クーラーでもあるのかな？　それとも自家発電、とか……？」

ユズとアツロウ、二人の雑談を傍で聞きながら、淳の脳裏には、数々の単語が、さながらジグソーパズルのピースの様に、パラパラと浮かび上がって来ていた。

（――頃――千代田区――と――にて――）

「いくら何でも屋外まで冷やさないだろ。変だな……」

（――時頃――千代田区と――にて――局地的な――に――よる――件】）

「そっか……。でも、涼しくて気持ちいいじゃない。……にしても、あ～、暑さが気にならなくなったら、お腹減ってきたよ……」

（時頃――千代田区――文京区――て――局地的――な――生――よる――事件】）

「そういえば……もうそんな時間か……」

アツロウのその言葉で、淳の脳裏において、強烈なフラッシュバックが起きた。

（もうそんな時間……って、『時間』！？）

現在時刻――十三時丁度。

「……おいおい、これってマズイぞ……」

淳が言う。その口調は、僅かに震えていた。

「え？」

何を言ってるんだ？　という様子で、淳を見るアツロウ。

（――十三時頃、　千代田区と文京区にて　局地的な吹雪の発生――雪男による、【殺人事件】！！）

「メールの事件を思い出せ！」

淳が叫ぶ。

「メールの事件……？　……て、ああっ！！」

ここへきてようやく、アツロウも事態が飲み込めた様だ。

「どうしたの？　二人共」

対して、ユズは未だに状況を把握出来ていない。

しかし、アツロウの顔から冷や汗がとめどめなく流れているのを見て、ぎょっとした表情になったところから察するに、ただ事ではないという事だけは理解したようだ。

「……ここが……メールの場所だ。……時間も……合ってる……」

アツロウが言う。

「え……、どういう事！？」

と、ユズ。

「ラプラスメールに書いてあったろ……、雪男による殺人事件……」

「……！？」

流石に、ここまで聞くと、淳とアツロウが何に気付いたのか、ユズにも分かったようだ。その顔から一気に血の気が引いていく。

「それじゃ……犠牲者三名って、私たちの余命『０』って……！」

ユズがそこまで言ったところで、少し先の方の上空を見ながら、淳が叫ぶ。

「二人とも、見ろっ！」

アツロウとユズが、瞬時にその方向へと顔を向ける。

そして三人の視線が、同じ方向へ向くのとほぼ同時に。

――最悪が、降ってきた。

「ウオオオッッ！！」

『それ』は淳達の姿を認めると、高らかに咆哮を上げた。

「見つけたぞ！　お前らは俺の獲物だ！」

昨晩、青山霊園で遭遇し、結果的に敗北を喫してしまった悪魔――邪鬼ウェンディゴ！！

「あれって……昨日の雪男!?」

ユズが言う。

「局地的な吹雪の発生……、場所も時刻も……間違いない！」

アツロウの口から漏れ出るその言葉は、もはや悲痛の叫びに近かった。

「クソッ……！　余命から逃げてるつもりで俺達、自分からメールの通りに動いちまってたんだ！　俺達が自分で、メールを現実にしちまってたんだっ！」

「……」

（――俺達が、メールを現実にした……？）

しかし、アツロウのそんな言葉を聞いても、何故か、淳の頭は冴えきっていた。

――『冴えきっていた？』

何故？

淳は思う。

まさしく絶体絶命と言えるこんな状況において――何故、自分は落ち着けるのか？

最早、どうにもならない事だと諦めているから？

――それは違う。

自分で言うのも何だが、自分はかなり諦めの悪い方だという自負が、淳にはある。

「ここは暑い……だが、お前らごとき、ひねり潰してやるっ……！」

実際、そんなウェンディゴの死刑宣告を耳にしても、淳は全くと言っていいほど動じていなかった。

そんな事を言われて、なお冷静でいられる自分を、淳は自分の事ながら怖くなった。

自分の二倍程もある巨体を誇るウェンディゴを見ても、しかし淳は全く怯える事なく、ただ「あ、何かデカイのがいる」と思っただけだった。

淳の隣では、未だにアツロウが冷や汗を流しながら、この状況に

運悪く遭遇してしまった自分自身に対して、怒りをぶつけていた。

「クソッ……やっぱり死んじまうのかよ！？　運命なんて変えられねーのかよ！」

アツロウが言う。

しかし。

「……安心しろよ」

――と、そう話す淳の言葉は。

――やはり、自分でも軽く引いてしまうくらいに、冷静なものだった。

「ジュン……？」

そんな彼に、アツロウが怪訝な表情を向けると、淳は、

「ナオヤの言葉を思い出せ！」

と叫んだ。

その台詞に、つかの間、きょとんとした様子を見せるアツロウ。

「ナオヤさんの……言葉？　それって……」

つかの間、アツロウは黙る。

淳も口をつぐんで、アツロウとユズが覚悟を固めるその瞬間を静かに待った。

やがてアツロウが、

「……そうだよな！　俺達が運命を切り拓くんだ！　アイツを……ぶっ倒すんだっ！」

と言い放ち、自分に対して活を入れる。

次いで、ユズ。

「……私さ、人前では頑張ってるフリして、本当はいっぱい逃げてた……。失敗したら格好悪いから、仕方ないじゃないって顔して、失敗しそうな事から逃げてた……！」

それは。

それは――およそ、自分達のような年代なら、全員に言える事だろう。

「でもさ……これって、失敗したらもう終わりなんだよね……？」

問題は、それを自覚出来るかどうか、自覚出来たとしても、それを改善するように努力出来るかどうか。

幸いにしてユズは、それを認識し、改めようとする事が出来る、強い娘だった。

「……私、やる！　死にたくないから、逃げない！　だから……二

人とも、絶体に死なないで！」

決意を固めた少女は、その手に持つＣＯＭＰを起動させる。

淳とアツロウも同じようにし、自分達の余命を変えるべく、ＣＯＭＰから仲魔を喚び出す。

敵にしても、現れたのはウェンディゴだけではない――今まで見かけてた事のある、ビルヴィスやらワイラやら、その他何体かの悪魔が現れていた。

「ジュン……」

仲魔の内の一体、ピクシーが、いつになく心配そうな面持ちで淳の横顔を見つめていた。

「……安心しろよ。いや、安心するのは無理でも、心配はするな。予定通りだ。あの時つけられなかった決着が、今つけられるってだけの話だ」

予定調和。

運命、か……。

こんな時に思い浮かぶのは、やはり、あの男。

あの甚平姿の男なら、こんな時、自分に何とアドバイスを送るだろう。

いや、案外何も言わずに、おもしろおかしく眺めてるだけかもし

れない。

そんな事を考えていると、淳は、自分の体が微かに震えている事に気付いた。

しかし、それは恐怖からではないし、武者震いでもない。ウェンディゴの出現により、後楽園一帯の気温が、更に低下し始めたのだ。

先程までは炎天下に晒されていた事で、三人の体に残っていた汗が、更に体温の低下を促す。生理的機能が働き、淳の体がシバリングによって体温を調整しようとするが、それも余り効果はないようだった。

「予め決めた通り、ウェンディゴは俺とピクシーが相手をする。アツロウ達は他の露払いを頼む。ピクシー、なるべく敵の攻撃が届かない場所から火炎魔法で援護してくれ」

「ああ」

「うん、分かった……ジュン、お願いだから死なないで……！」

ユズの気遣いに対して、淳は苦笑する事で答えた。

（――死ぬ訳がないさ。こちらと、普段から生きてるとさえ実感出来てないんだからな）

「オオオオッッ！！」

最初に動いたのはウェンディゴだった。

獣の咆哮をあげて、その巨体からは信じられないスピードで、淳へと向かっていく。

それに対する、淳の対応は以外なものだった。

「ジュン！？」

ピクシーが、信じられないというように驚きの声を上げる。

何と、向かってくるウェンディゴに対して、迎え撃つように走り出したのだ。

明らかに、接近戦を臨んでいる。

勿論、単純な肉弾戦では、間違いなくウェンディゴが有利だ。

淳にしても、元来大柄な体型ではないし、筋肉質であるとも言えない。

傍から見れば、正に大人と子供。

しかし。

淳は思う――自分には、これまで真田や桐条によって研磨された

体術がある。そもそも、武術というのは、大半が小柄な者でも大柄な者に遅れをとらない様に考慮された作りになっている。特に、日本武術にはその傾向が強い。

何より、中距離での戦闘では、リーチのあるこの雪男に軍配が上がるだろうが、超至近距離での戦闘では、返ってそのリーチは邪魔になる。一度突き出した腕や足を元の位置に戻すのに時間が掛かるからだ。

ウェンディゴは、まさか正面から向かってくるとは思ってなかったのか、一瞬、驚いた顔をしたものの、直ぐにその丸太程もある腕を振りかぶり――そして、眼下にある淳の体目掛けて、一気に振り下ろした。

しかし、そんなウェンディゴの攻撃は、淳にとっては十分に回避できるものだった。

第一、体がデカ過ぎるのだ。相手はこちらに向かって走ってきている――つまりは、足を激しく動かしているので、そのまま足技に持っていく可能性は薄い。

なおかつ、自分の胴回り程もある相手の腕が振りかぶられたとあれば、次に何が起こるのか容易に想像できる。

淳はそれを、首を下げるどころか、上半身ごと一気に下げるダッキングによって、難無くかわした。

そして、走っていた勢いをそのまま利用して、そのまま固く握り込んだ右拳を、ウェンディゴの鳩尾にめり込ませる。

「グオッ……！？」

ウェンディゴの肉体は、さながら鋼の様な強度を誇っているが、しかし鳩尾部分に関しては、人間と同じで他の部分よりは脆いらしい。悪魔にしても、その辺りの肉体的構造は人間とさほど変わらないようだ。

それでも、ウェンディゴが呻いたのは僅かに一瞬。

すぐにその左拳を、淳に背中に向けて振り下ろす。

淳にしても、自分のたった一撃のカウンターでウェンディゴを沈められる等と、甘い幻想を抱いてはいない。

そのままウェンディゴと擦れ違うように、二転三転、前転する事で、その拳を回避すると共に、ウェンディゴから距離をとる。

「貴様……！」

ウェンディゴがその赤い目を、驚愕で僅かに見開く。

淳のカウンターによるダメージは、皆無と言っていい。

しかし、ウェンディゴは驚愕していた。

ウェンディゴにとって、人間など自分達悪魔にとっては単なる食料に過ぎず、地べたを這いずり回る虫にも等しい存在だった。

しかし、この人間はどうだ。

自分よりは遥かに小柄でありながら、全く臆する事なく立ち向かってきた。

次には、その体を怒りが支配する。

「生意気な……」

身の程も弁えぬ虫ケラには、どちらが高等なる存在であるかを思い知らせねばならない。

淳はそれに対して、さも面白そうにほくそ笑んでいた。

「これで、貸し借り無しだ」

淳は言う。

先程のボディブローは、攻撃を目的としたものではない。あくまで牽制だ。自分が単に、追いかけられるだけの獲物ではないと分からせる為の威嚇だ。

これで昨晩、肋を折られた借りは返した。

しかし、不敵に笑っていた淳の顔が突然、歪む。

彼は慌てて、自らの右拳を見た。

それは先程、ウェンディゴの腹部に撃ち込んだ拳だった。

見れば、僅かに凍傷している。

「おいおい……」

この辺りの気温が、ウェンディゴの出現によって急激に低下したという事実を、淳はすっかり失念していた。

ほんの一瞬、その体に触れただけでもこれである。

どうやら、体格云々を抜きにしても、肉弾戦を挑むのは得策ではなさそうだ。

全体を針で突き刺した様な痛みが、右拳から伝わってくる。

少し離れた場所では、アツロウやユズ、他の仲魔達が、ウェンディゴ側の悪魔と激しい戦闘を繰り広げている。

それに対して、淳はいささかの心配もしていない――そう言うと薄情に聞こえるが、しかしそれは、仲間達に対する絶対的な信頼からくる感情だった。

――と言えば聞こえはいいが、

「……情けない話、正直、自分の事で手一杯な訳ですね。これが」

軽口を叩きながらも、淳はウェンディゴに向けて火炎魔法を放つ。

どうやら、火炎魔法がウェンディゴの弱点属性だという淳の推測は、当たっていたらしい――昨晩は淳の放った電撃魔法を真っ向から受けても平然としていたウェンディゴだが、こと火炎魔法となると話は別だった。

両手を体の前で交差させて、その威力を最小限に抑える。

ここで動いたのがピクシーだ。

ウェンディゴの真上から、その頭部に火炎魔法を撃ち放つ。

既にその両手を淳からの攻撃に対応させていたウェンディゴは、それを防げる事なく被弾する。

「――がぁっ！」

しかし、頭から黒煙を上げながらも、ウェンディゴは対してダメージを負っていない様だった。

頭上にいるピクシーの存在を認めると、五月蝿そうにその腕で叩き落とそうとするが、予めそういった反撃を予測していたピクシーは、危うくそれをかわした。

「……なるほど、手強いな」

淳がポツリと呟く。

弱点属性の魔法を続け様に二回受けても尚、反撃に転じる事が出来る耐久力。

その反撃にしたって、今の自分達にとっては致命傷になりえる程の威力がある。

やはり、このウェンディゴという悪魔は、今までに出会った相手とは一味も二味も違う。

その後も、淳とピクシーは何度かその巨体に火炎を浴びせたが、しかし、ウェンディゴが倒れる気配はない。

本当に火炎魔法が弱点なのかと疑いたくなる程だったが、しかしCOMPのアナライズ結果を見る限りは間違いない。単純に、ウェンディゴの防御力がズバ抜けているのだろう。

流石に、二人は苦戦した。

しかし、淳は諦めない。

ピクシーも諦めなかった。

相手がどれ程の強敵であろうと、淳はどうすれば戦局をこちらに傾けられるかを考えていく。そして、ピクシーはその判断を信じて、即座に実行するだろう。

彼女が淳に抱いているのは、主従関係から来る忠誠心か、はたまた異性に対する恋心か。

確かなのは、彼女が有里淳に対して、全幅の信頼を置いているという事だ。

様々な角度から攻撃を浴びせ、淳はウェンディゴが見せるその動きから、いくつかの癖を読み取り、何か穴はないかと冷静に観察する。

彼はこれまでの戦いで、単純な力量か、或いは戦術に勝るものが勝利を収めるという事を学んでいた。勿論、今回彼が選択したのは

後者である。

ウェンディゴにしても、ただ翻弄されてばかりではない。

『氷の乱舞』

相手に対して、幾多もの氷塊を撃ち付けるその魔法を、何度も二人――主に、地上にいて狙いがつけやすい淳に対して――に放つ。

淳はそれを、時にはかわし、時には火炎魔法で相殺させる事で、危なげなく対処していた。

このまま、じり貧の展開が続くかと思われた。

アツロウ達がこちらの応援に駆け付けるまでこうした、不毛なやり取りが続くのかと。

だが、むしろ淳としては、この雪男を早々と片付けて、アツロウ達の加勢に向かいたいぐらいだった。昔からそうなのだが、彼は何をするにしても、他人に頼った事が殆どない。

やがて、彼は気付いた。

「角……？」

思わず、そう漏らす。

『角』。

ウェンディゴの頭部には、天に向かって大きく伸びた、一本の巨

大な角があった。

まさか、と思う。

しかし、間違いない。

そこに火炎魔法を浴びせた時だけ、ウェンディゴに反応があった。しかも、それ以外の部位に対する攻撃は、例え弱点属性の魔法であろうとも受け止めていたのに、角への攻撃だけは回避していたのだ。

「まさか、あんな堂々と弱点をさらけ出してるとはな……ピクシー！」

言うと、淳は自らの頭をポンポンと叩く。

その意味をピクシーは理解していた。

「何とかコイツの気を逸らしてくれ！」

「任せて！」

ピクシーは力強く頷くと、再び上空から魔法を放った。

それは相手に損傷を負わせるのではなく、なるべく、相手の気をそらす――なるべく、こちらを邪魔に思わせて、注意を引き付ける為の攻撃だった。

「貴様……悪魔でありながら、人間に味方するか！」

怒りの咆哮を上げて、ウェンディゴがピクシーへと顔を向ける。

『氷の乱舞』を放つが、しかしピクシーはその全てを紙一重でかわした。

その時には淳が走り込んでいた。

ウェンディゴとの距離を一気に縮め、その頭部目掛けて跳躍する。

ウェンディゴがその行動に気付いた時、淳は既にその角を両手で握り締めていた。

「『アギ！』」

その細身の体からは凡そ信じ難い程の握力で、その角を握り潰そうとすると共に、両手からあらん限りの力で火炎を放つ。

「アアアアァァァッッ！？」

ウェンディゴが悲鳴を上げる。

魔界にいた時でさえ味わった事のない感覚が、その体を支配した。

それは、『死』。

どんな存在であろうとも抗う事は叶わない、絶対絶無の摂理。

その一寸先も見えない程にどす黒い事象が、自らの未来を覆うのを感じながらも、しかし、ウェンディゴは《最期》の悪あがきをした。

固く握り込んだ右拳を、頭上にいる淳に向けて放つ。

『絶妙打』。

自らの生命力に比例して、その威力が増大する物理攻撃。

傍から見れば、これ程無理な姿勢はない。

だが、その攻撃は吸い込まれる様に、淳の脇腹へと向かっていった。

しかし、淳はそれを見ても避けようとはしない。

まだ――ウェンディゴは力尽きていない！

こんな策が二回も通じる程、この雪男も馬鹿ではないだろう。

ここが正念場だった。

石でも握り込んでいるのではと思う程の破壊力を伴って、それは淳の腹部へと減り込む。

「――っっ！！」

「――っっ！！」

お互いが、声にならない叫びを上げた。

淳の手から放たれた火炎弾の高熱が、ウェンディゴの頭部を、そしてその中にある脳髄へと侵略する。

ウェンディゴの『絶妙打』が、再び淳の肋を砕き、幾つかの内臓を破裂させた。

それでも、淳は魔法を放つのを止めない。

自らの意識が続く限り、その両の手から至近距離で『アギ』を放つ。

ウェンディゴも、一度に留まらず、何度も何度も同じ箇所に『絶妙打』を放った。

淳の命が砕け散るのが先か。

ウェンディゴの命が燃やし尽くされるのが先か。

（――根比べだ！）

内出血によって漏れ出た血液が、自らの臓腑を蝕んでも、やはり淳は攻撃を止めなかった。このまま自分の命が許す限りウェンディゴの頭蓋を高熱で責め続けるだろう。

それによって悶絶するウェンディゴにしても、決して拳を振るうのを止めはしない。その拳から感覚が無くなろうとも、この雪男に残った悪魔としてのプライドが、愚かな人間を叩き潰すべく、その体を突き動かす！

そんな光景を、ピクシーは上から見下ろしていた。

見下ろしながら――見とれていた。

淳の援護に向かうのも忘れ――見とれていた。

思い出されるのは、昨日の出来事。

自分が有里淳の仲魔になるきっかけとなった、あの電気博物館前での戦闘だ。

あの時も――淳は、自分に対して我慢比べで決着を着けようとし、結果として敗北したのはピクシーだった。

その時から、これまで時間を共にして、ピクシーは彼に対して、一つの回答を導き出していた。

いわく。

『有里淳は、揺るがない』

例えこれから何が起ころうと、この先にどれだけの地獄が待ち構えていようとも、『彼』は『彼』であり続けるだろう――果たしてそれが『誰の影響』なのかは、ピクシーの知るところではないが。

改めて――彼女は、淳とウェンディゴを見た。

二人とも、傷だらけである。

ウェンディゴの頭は焼け爛れていき、その拳からは血が滲んでいた。

淳も火炎魔法使い過ぎで両手には深い火傷を負い、その口からは

大量の血を吐き出している。

お互い、満身創痍。

どちらも、生き残る事より、相手を仕留める事しか考えていないようだった。

なんて――醜い。

なんて――汚い。

全くもって、美しくない。美しくないが、しかし――

素晴らしかった。

美しくはないが、素晴らしい。

素晴らしいまでに、感動的。

感動を覚える程の芸術。

やがて一方の体から、力が一気に抜けていくのが、傍から見ていたピクシーにも分かった。

しかし――力が抜けても、その体勢は崩さない。

もう片方にしても、相手が事切れたと知っても、そのまま動かなかった。

ただ――激しく息切れしていた。

しかし、それでもピクシーの目には、その命を賭けた責めぎ合いが、永遠に続くのではないかと思った。

あまりにも芸術的なその様は――全ての悪魔にとっても、全ての人間にとっても、誇り高くも美しい光景だった。

生き残ったのは、果たして――。

◆

◆

有里淳と邪鬼ウェンディゴ。二人が互いに与えたダメージの総量に明確な差が現れた原因は、何よりも使用したスキルの性質の違いが上げられる。

注目すべきは、ウェンディゴが立て続けに放った『絶妙打』という物理スキル。

前述したように、このスキルは術者の生命力が多ければ多い程、それに比例してその威力が増すという性質を持つ。

ウェンディゴがそのスキルを何度も使用する間、淳は火炎魔法によってウェンディゴの体力を徐々に、しかし確実に削っていった。

それでなくとも、物理スキルの大半は使用するだけでも体力を消費する。魔法スキルと違って、魔力を必要としない代わりと言えた。

対して、淳が使用していた『アギ』には、そのような設定はない。ただ単純に、その手から火炎を放つだけである――いや、勿論、魔法を使えばそれ相応の魔力を消費するが、この場合、淳の魔力の消費量よりも、ウェンディゴの体力の消費量の方が上回ったという事だ（淳の攻撃と、スキルの使用によって、その消費量が二乗になった為）。

その『差』。

お互いが攻撃を続ける中、ウェンディゴのスキルだけが、その使用回数や淳の魔法によって、徐々にその威力を落としていったのである。

勿論、淳はそこまで考えていた訳ではないが――しかし、要は結果論。

生き残ったのは、有里淳だった。

彼は現在、後楽園へと続く道の上に、大の字になって横たわり、

青い空を見上げている。

その側では、ユズとピクシーがかいがいしく彼の傷の治療を行っており、それをアツロウが心配そうに見ていた。

ウェンディゴ以外の敵悪魔の姿は、既にない。

聞けば、淳がウェンディゴを倒した途端、逃げる様に去っていったとの事だ。

「あいつら、相当ビビってたぜ。『本当に人間か……！？　弱っていたとしても、あのウェンディゴを倒すなんて……！』って言って、そのまま逃げていったよ」

アツロウはそう得意気に話すが、しかし淳はその台詞に疑問を抱いた。

「弱っていたとしても？」

「ああ……ホラ、アイツ多分、昨日食らったアマネの魔法のダメージがまだ残ってたんだと思うぜ？」

「……なーる」

淳は納得した。昨晩はたった一発ボディブローを受けただけで意識が飛んだというのに、今回はそれを何度か受けても意識を失わなかった事に、少なからず疑問を抱いていたのだ。

「つー事は……何だ。アイツは今回、本調子じゃなかったって事か……。ふーん……」

生き残れた事は素直に嬉しいが、どこか釈然としない。

「まあ、そんな事はいいじゃねぇか！　何にしてもやったぜ！　俺達は生き残ったんだ！」

ここへ来て嬉しさを爆発させるアツロウに、ユズも呼応した。

「うん、うん！　やったね！　あの雪男、ちゃんと倒したんだし……、私達、もう大丈夫だよね！？」

「ああ！　やっぱり、あのメールにあった三人って、俺達だったんだな！　だけど、それでも俺達は、死の運命に打ち勝ったんだ！」

そう話す二人を微笑ましい思いで眺めていた淳は、ふとある事に気付いた。先程までは『０』だった自分達の余命が、いつの間にか『２』になっていたのだ。

「そうだ……なあ、ジュン！　俺達の余命ってどうなった？」

「ふふふ……、アツロウ、０×２はなんだと思う？」

「へ？　０だろ？」

「……」

「……」

小学生の様な間違いを冒してしまった。

「ぜ、０＋２は……？」

「……」

「ジュン……」

「い、いいじゃねえか別に！　とにかく、余命は『２』に増えたんだ！　素直に喜べ！」

「う～ん、『２』かぁ……。まぁ、少なくとも二日間、猶予が出来たって事だからな。それまでに、出口を探して、山手線から出ちゃえばいいんだろ？」

「二日間は安心だ……とも言えるけど、それは裏を返せば二日間しか猶予がないって事だからな。なるべく急いで出口を探そう」

というより、あと二日間もこの封鎖内にはいたくない。とっとと家に帰りたいというのが淳の本心だった。

まぁ、日を跨いで帰ってきた自分に対して、あの母親（ゆかり）からどんな制裁が下されるかを考えると若干……いやかなり気が重いが、そこは何とか説得するしかないだろう。

「ああ、そうだな！　必ず、あと二日で出口を見つけてやる！」

「うん、私達は運命を越えられただもん、きっと出口も見つけられるよ！」

そう嬉しそうにはしゃぐ二人を見て、淳は改めて『よかった』と思った。

この笑顔を見ただけで――先程のあの、雪男との苦しい戦いは無駄ではなかったのだと思えた。

アツロウとユズの隣でパタパタと羽ばたいているピクシーに、そっと視線を移す。

それに気付いたピクシーは、一度ニコッと笑うと、そのまま淳のＣＯＭＰへと戻っていった。

その中で、他の仲魔達――コボルト、カブソ、オーガも喝采を送ってくれている……ような気がした。

今までの人生で一番苦しい時間だったが、しかし――二人の友人の笑顔が見れただけでも、十分に救われる思いだった。

この二人がまた笑ってくれるなら――。

俺は、また戦える――。

そう、思った。

「あっ……！　そうだ、言い忘れてた！」

急にそう言い出したのはアツロウである。

「なっ、何よ……！　ビックリさせないでよね！」

「違うんだ、さっき気付いたんだけど、少しヤバイ事になってんだよ」

「どうしたんだ？」

アツロウがいつになく真剣な表情をしていたので、淳は寝かせていた上半身だけをゆっくり起こした。ウェンディゴによって負わされた傷の数々は、ユズとピクシーの回復魔法によって、ある程度は回復している。

「重大な事を忘れてたんだよ。俺達が戦うのには、このＣＯＭＰが絶対に必要だろ？」

「まあ、そうだな」

「ＣＯＭＰはバッテリーで動いてる。でも今、街は停電したままだ……」

そこまで聞いて、淳はアツロウが何を言いたいのかを悟った。

「……ああ～、ハイハイハイ。なるほどなー。そう言う事か」

「え？　何？　何なの？」

「正直、盲点だったぜ……。いや、俺達がど忘れしてただけで、普通に常識か。要するに、今のままじゃ、ＣＯＭＰを充電する事が出来ない」

「ああ……そういう事だよ。このままじゃ、いつか俺達のＣＯＭＰは、動かなくなる……」

「ど、どうしよう……ねぇ、ジュン！」

困り果てたユズが、救いを求める様な目で淳を見るので、彼は必死に解決策を考えた。

そして、ある事を思い付く。

「よし、アツロウ。今この場で充電器を作りたまえ」

「無理だ！」

……勿論、こんな無理難題をしれっと言った訳ではなく、

「……手動充電器なら、この状況でも使えるんじゃないか？　電気屋をしらみ潰しに探してみようぜ」

と提案した。

「だったら、秋葉原に行ってみないか？　勿論、出口も探せるし、充電器も探せる筈だ……！」

「――電気街、か。確かにあそこなら、手動充電器ぐらいはありそうだな……」

こうして、一行は手動充電器を求めて、日本一の電気街である秋葉原へと向かって行った。

――しかし、この時三人は気付いていなかった。

たった一度余命を変えた事で、浮足立っていたという事もあるだろう。

だが、この戦いはまだ序の序の口だった。

前哨戦ですらない。

今、この瞬間もゆっくりと、しかし確実に、一つの大きなうねり――『ベルの王位争い』が進められている事を、彼等は知らない。

そして、自分達が気付かぬ内に、その争いの渦中へと近付いているという事も。

――彼等はこの時、全く予期していなかったのだ。

◆

◆

――『ドーム球場前のバトルＰＡＲＴ１』終了時ステータス

●クラックしたスキル

＞『氷の乱舞』
　『耐氷結』
●所持マッカ：３３２８

●有里淳（？？）

・コマンドスキル
＞？アギ
　？氷の乱舞
　？――
・自動効果スキル
＞？英霊の加護
　？――
　？――
・先制発動スキル
＞『――』

●木原篤郎（人間）

・コマンドスキル
＞？ジオ
　？ブフ
　？――
・自動効果スキル
＞？一分の活水
　？同族の心得・防
　？――
・先制発動スキル
＞『――』

●谷川柚子（人間）

・コマンドスキル

＞?ザン

?ディア

?アムリタ

・自動効果スキル

＞?耐氷結

?――

?――

・先制発動スキル

＞『――』

●仲魔

＞・コボルト

・カブソ

・ピクシー

・オーガ

――Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！

1st Day『因果調整』

――芝公園。

「――あ、アマネ様ですよ」

簡単な昼食を終えた頃、突如、ミクがそう言ったので、セトは思わず顔を上げた。

「ん？　どこだ？」

「ホラ、あそこのド派手なカチューシャを付けてる人です」

「ああ……」

ミクが指し示す方向を見ると、なるほど確かに、そこには嫌でも目を引くほど奇抜な髪飾りを付けた少女がいた。

彼女はどうやら、公園に集まっている人々に対して、演説を行っているらしい。

その物腰は実に堂々としており、その美貌も相まって、正しく翔門会の巫女に相応しかった。

そしてその外見を見る限り、昨晩、セトが青山霊園で見かけた翔門会の少女に間違いない。

（なるほど、やっぱりあの娘がアマネか……）

真っ先に思い浮かぶのは、やはり、今朝ビシャモンテンと交わした会話の内容である。

数年前、東京を守護する四神が一体――ジコクテンを討伐した少女。

（しかし……どうだろう……）

相手が女性である事など全く構わないという風に、セトはアマネをジロジロと観察する。

とは言っても、こちらの姿は『混迷の霧』を使用している為、向こうが自分達の存在に気付く事はない（ハズ）のだが。

（……やっぱり、それほど悪い奴には見えないんだよな……）

それが、アマネを見てセトが抱いた正直な感想だった。

『ワイルド』のペルソナ使いとして、誰よりも『人間関係』を重んじる彼は、一目見ただけでその人物の人となりをある程度は把握する事が出来る。

（……けど、彼女がジコクテンを殺したのは間違いない）

それも事実。

まさかあのビシャモンテンが、何の確信も持たずにあそこまで断言するとは思えなかった。

（……まあ、どんな赤ん坊でも数年経てば親に暴行を振るう事もあるだろうし……）

ジコクテンを倒してから数年。

その間に、彼女の心境に変化があったという事か。

しかし、人格云々を抜きは抜きにして、まずセトが気にかかったのが……。

「……出来るな、アイツ」

「はいぃ？」

水〇豊の様な疑問符を浮かべて、ミクが目をパチクリさせる。

「どうしたんですか？　セトさん。いきなりバトル漫画みたいな台詞を言い出して」

「……直接手を合わせなくても分かる。ありゃ、相当な手練だ」

こちらとアマネの距離は随分開いているが、しかしそれでも、その小柄な体駆から溢れている尋常ではない魔力が、セトには――セトだけには感じ取る事が出来た。

しかし――アマネに対して、セトが理解出来たのはそこまでだった。

或いは、これが有里淳であったなら、そんな彼女の内にある『矛盾した気配』に気付いた事だろう。

「さて、どうするか……」

今、自分の内にある数多くの疑問の答えを、恐らく彼女は知っているだろう。

ならば、直接聞いた方が早いのだろうが、しかし――それは流石に躊躇われる。

先刻行われた、セトに対する翔門会のもてなし方を見れば、そのような警戒心は当然と言えた。

そんな状況で、わざわざこちらから歩みよろうとするのは愚の骨頂。

仮に状況が逆だったとしても、あちらも同じ事を考えただろう。

このまま、静観しているしかないのか――と、そこまで考えて、セトはある事を閃いた。

期待に満ちた眼差しで、正面に座っているミクに顔を向ける。

「？」

ミクはそんなセトをきょとんとした表情で見ていた。

セトは考える。

この鮑美海狗が今、自分の仲間である事は、自分達二人しか知らない。いや、厳密にはカイドーも知っているのだが、まさか奴が翔

門会に告げ口する道理もないだろう。

――ならば、それを利用して、ミクをスパイとして翔門会に送り込めばよいのではないか？

メタルギアよろしく、隠密捜査に当たらせればよいのでは？

「……さっきから、何をジロジロ見てるですか？　セトさん。……あ、はは～ん。分かりましたよ」

そんなセトを見て、ミクは真犯人を名指ししたコナン君の様な顔を見せる。

「セトさんは、ミクちゃんの体を見て、思わず欲情しちゃったんですね？　駄目ですよ～セトさん。三十過ぎのおじ様が、未成年の少女に手を出すのは、この日本では犯罪なのですっ！！」

「……」

駄目だ。

やっぱり駄目だ。

絶対に駄目だ。

こんな女に、スパイなど務まる訳がない。

逆に、こちらの情報を流してしまいそうで怖かった。

「……ったく、とんだじゃじゃ馬を引き取っちまったぜ……。お前

を見てると、高校生の頃に餌をあげてた猫を思い出す」

「何、失礼な事言ってるですかっ！　私を誘ったのはセトさんなんだから、最後まで責任はとって下さい！」

「……お前な、もう少し言い方ってもんを考えろよ。今の台詞、事情を知らない人間は絶対変な風にとるぞ……」

「……？　どんな風ですか？」

「んなもん、決まって……いや、やっぱりいい」

何だか馬鹿らしくなって、セトは再びアマネへと視線を戻す。

彼女は相変わらず、事務的な口調、事務的な態度、事務的な表情で、まるで中身のない言葉だけの演説を、民衆に向かって問い掛けていた。

「――あっ！」

そこで、何かを思い出したように、ミクが声を上げる。

「どうした？」

「そういえば、ですよ！　セトさん！　今日、この後、この場所に来るように、ジュン君に言っていたのを忘れてました！」

「え？　そうなの？」

その情報は、セトにとって正しく青天の霹靂だった。

今日、自分は再び有里淳に相まみえる為に、わざわざ東京中を歩きまわっていたのだが……。しかしなるほど、そんな事をしなくとも、このままここにいればアイツと会う事が出来た訳か。

つまり。

（自分が有里淳と会う事を望もうがそうでなかろうが、どの道、アイツと俺は会う運命だったという事か――）

因果関係。

「……だけど」

セトは思う。

本当に――そうなのか？

自分と有里淳は――ここで再び会うべきなのか？

「……ミク、そろそろ移動するぞ」

セトは、ビニールシートから腰を上げる。

「え？　ジュン君と会わないんですか？」

「……本来なら、そうするべきなんだろうけどな」

普段のセトなら――。

こんな、『因果』に逆らう様な事はしない。

運命には逆らわない。

流れには従う。

もし、それが自分の意にそぐわない流れだったとしても――従った上で、流れ自体を変えようとする。

「なんとなく、なんだが……。今、俺とアイツが会うのは、マズイような気がするんだ」

「えー！？　そんな、嫌ですよ！　私、ジュン君に会いたいですっ！」

「――ったく、やれやれだぜ……。いいか、昔から俺の悪い予感は外れた試しがない……。何でかは分からないが、今回は運命がそうであるにも関わらず、それに従わない方がいいという、極めて稀な事態だ。そんな気がする。因果に逆らおうと決めた以上、行動はなるべく早い方が役得かつお勧めだ――ほら、行くぞ」

「ぜーんぜん全くもって言ってる事が分かりませーーんっ！　そんなの知らないですよ！　セトさんにどんな事情があろうとも、恋する乙女の邪魔はいけないのです！」

「ふん」

セトは一転して、新しい玩具を見つけた子供の様な笑みを見せる。

「淳を自分の物にしたいってんなら、残念ながらかなりハードルが

高いと言わざるを得ないぜ――俺の見たところ、ありゃ相当モテるタイプだ。いつも隣にいるピンク色の姉ちゃんは知ってるか？」

「えーと……たしかユズさんとか言いましたか。ええ、知ってますけど、それが何か？」

「あの二人、多分恋人同士だ」

「うえええっ！？」

「そうじゃなくても、女の方は相当、淳に入れ込んでる」

「な、何で分かるんですか？」

「勘、だな」

自分達が食べた携帯食の後片付けをしながら、セトが悪戯っぽく笑う。

「全く――アイツは父親に似て、かなりの女ったらしだよ。しかも天然のな。まあ、だとすればアイツには付き合ってる意識がないかもしれないから、お前にも突け入る隙があるかもだけど」

「だ、だったら尚更、私はここにいるもんっ！　大体、話が違うじゃないですか！　またジュンさんと会わせてくれるのを条件に、私は貴方の仲間になったんですよ！」

「あっ、そう？　じゃあ、俺はお先に行ってるから、後は好きなようにすれば？」

そう言うと、（残りの日数分の食料を持って）、セトはそのまま歩き出してしまう。

「え！？　あ、む、む～～っ！」

しばらくの間ミクは、餌にあぶれた獣よろしく、ウロウロとしていたが、やがて渋々といった感じでセトの後に続く。

「一つ言わせて下さい」

「あーん？」

「セトさんって……実は、かなり性格悪いですよね？」

「それがウリだからな」

クックック、と。

セトは心底愉快そうに、心底自虐的に笑った。

こうして。

本来、この場で再会を果たす筈だった有里淳とセトの因果関係は、セトの独断によって、無理矢理に変更された。

次に彼等が再会するのはいつなのか、そして、その時は一体、どういった状況なのかは――有里淳にも、そしてセトにも分からなかった。

１ｓｔ　Ｄａｙ『６日後の何か』

――秋葉原。

言わずと知れた、日本最大の電気街である。

そこにある線路下は自衛隊により封鎖され、駅や路線には誰も近付けずにいた。

そこに、三つの影がある。

勿論、淳、アツロウ、ユズの三人だ。

「やっぱり、ここも出られないのね……」

ユズは、相変わらず監視の目を油断なく辺りに光らせている自衛隊を見ながら、ウンザリしたように呟く。

「渋谷や新宿と同じだな……。本当に、山手線でグルリと封鎖されてるって事か？」

正直、淳としては最早、自衛隊がそこまでしているとしか思えなかったが、しかしそんなアツロウの指摘から目を逸らす様に「とりあえず、充電器を探すぞ」と言った。

「……だな。せめて充電器くらい見つけないと、せっかくここまで来た意味がないぜ！」

幸いな事に、これまでの道中では一体の悪魔とも遭遇しなかった――が、ＣＯＭＰを見ると、電池の残量が相当危険な状態にあると分かった。あまりうかうかしてる暇はない。早く手動充電器を見つけなくては。

――が、しかし。

「クソッ、参ったな……」

思わず、淳は毒づいてしまう。

いつもならとっくに開店している時間であるにも関わらず、全ての電気街のシャッターは下りたままだった。

「……！　……店が全部、閉まってやがる！　どこか一カ所くらい……！」

アツロウが必死になって辺りを見渡していると、不意に、ある一点を見据えたまま、その視線が動かなくなった。

「……あれは……、ケイスケ！？」

見れば、そこには先程、歌舞伎町で遭遇したアツロウの友人――高城圭介の姿があった。

向こうもこちらに気付いたかと思うと、まるで幽霊にでも出くわしたかの様に、彼は酷く驚いていた。

「あ、アツロウ！？　君達……どうして……？」

「え、どうしてって……」

ケイスケが余りにも驚いている為、アツロウは思わず面食らってしまう。

「探し物があるから来たんだけど……て、ん！？　その手に持ってるのは……！」

見れば、ケイスケの片手には、小さなハンドルの付いた小型の鉛筆削りを思わせる機器が収まっていた。それは正しく……、

「手動式の充電器じゃないか！　しかもＣＯＭＰ対応の高発電版……！　ケイスケ、教えてくれ！　それ、どこで買えるんだ！？」

アツロウの言葉を受けて、ケイスケにもこちらの事情が分かったようだ。

「……君達もＣＯＭＰ対応版を探してるんだね」

「そーなんだよ！　何がなんでも、ＣＯＭＰを充電しなきゃマズイんだ！」

「……」

二人のやり取りを聞きながら、淳はケイスケの余命をさりげなく確認する。先程会った時と同じく、残量は『1』のままだった。

「そっか……うん。事情は分かった。案内してあげる、こっちだよ」

どうやらケイスケは、この辺りの地理に詳しいようだった。彼が

淳達を案内したのは、秋葉原の裏通りの個人商店である。そこだけは他の店と違い、このような状況でもいつもどおり経営されていた。

ちなみに、充電器の価格は、一個辺り三千円と、（アツロウが言うには）通常より少し高めだった。見れば、髭面（ひげづら）の店主は人の悪そうな笑みを浮かべている。

恐らく、今は自分の店しか経営されていないと知って、こちらから搾れるだけ搾っておこうという魂胆なのだろう。

早い話が、ぼったくられてしまった。

一人一個とすると、合わせて九千円。

別に、ただ充電だけを目的とするならば、一つだけを買って三人で使いまわせばいいのだが、それでは時間的ロスがかなりのものになる。

そうしてる間に悪魔に襲われたたら、とてもじゃないが笑えないので、ここは予算よりも安全を重視して、三つ買う事になった。

支払ったのは淳だった。

高校生としてはおいそれと払える額ではないが、命には代えられない。淳はアツロウとユズに必ずいつか返すようにと固く誓わせ、この店のレジに九千円を納める代わりに、手動式充電器を手に入れた。

まあどの道、こんな状況では、どれだけ金があろうが何の役にも立たない。

してやったりという顔をしながら、「まいどあり～」と言い放つ店主（メッチャ殴りたい……）に背を向けて、淳達は再び秋葉原の路上へと戻ってきた。

「これで……いいんだよね？」

ケイスケが言う。

「ああ、これで安心だ。ありがとよ」

淳は入手した充電器を大事そうに懐へ納めながら、ケイスケに礼を言った。

「どういたしまして。困った時はお互い様だよ」

「でも、本当に助かったよ！　サンキューな、ケイスケっ！」

アツロウは早速、手動式充電器を使ってＣＯＭＰに電力を供給していた。

しかし、アツロウの感謝を無視して、ケイスケは何やら感心した面持ちでこちらを見ている。

「君達は……スゴイね……。そんな人たち、初めて見たよ……」

「えっ……？」

「余命……『０』だったのに……。今は『２』になってる。死の運命を、乗り越えたんだね……」

「……やっぱり、君もＣＯＭＰを持ってるんだな」

淳は確信した。

「……そうだよ。僕もＣＯＭＰを持ってる。恐らく……君達と同じ、改造されたＣＯＭＰをね」

そう話すケイスケの表情は、何かを悟り切ったかのようだった。しかし、淳の隣にいたユズはそれを白々しい告白と受けとったようだ。歌舞伎町でのケイスケの態度を思い出し、怒り心頭に達した様に彼に詰め寄る。

「……！　さっきは私達の余命を見て、逃げ出したくせにっ……！」

「ユズっ！　やめろって……！」

ここまできてそれでも尚親友を庇おうとするアツロウの心意気は立派だが、しかしユズの怒りも無理からぬ事だ、と淳は思った。

だが、淳はというと、それほどケイスケを怨んではいなかった。

むしろ、仕方ない事だと思っていた。

誰だって――近くにいる人間が近い内に死ぬと分かったら、とてもじゃないが普通に接する事など出来ないだろう。

ケイスケにしても、それを自覚しているらしい。

「……いいんだ、いいんだよアツロウ。本当の事だから……、僕は逃げ出したんだ……」

「ケイスケ……」

「……お詫びに、一つ教えてあげるよ。君達は、ここに来るまでの間に誰かに会った……？」

「誰かに、って……、そりゃあ、何人かは……」

「それがどうかしたのか？」

淳にもアツロウにも、ケイスケが何を言いたいのかが分からなかった。

「……この山手線内に、閉じ込められた人達の中に、今現在で６日より長い余命を持ってる人はいない。少なくとも、僕の見た人達の中には、一人もいなかったんだ……」

「！」

それを聞いて、ケイスケの言葉の裏に隠された意味が、淳には理解出来た――否、出来てしまった。

「六日より長い人がいないって……え……？どういう事だよ……」

「……六日後」

「ジュン？」

「六日より余命が長い人間がいない……。これはつまり、六日後にはこの封鎖内の人間が全員死んでいるって事だ」

「「……っ！」」

アツロウとユズが、サーッと青ざめる。

「六日後に……何かが起こる」

淳はそう呟くが、しかし『それ』が何なのかは、想像もつかなかった。

「……な、何かって……何だよ！　何が起こるっていうんだよ！？」

アツロウが困惑する。それとは逆に、ケイスケは落ち着いた――というよりは、何か諦めきったように、冷静だった。

「……何が起こるのかは分からない。ただ一つ、確実に言える事は、何か確実な崩壊が六日後にやって来て、山手線内にいる人は――」

「――全員死ぬ」

ケイスケの言葉を、淳は引き継いだ。

「なっ……！　お前ら、何言って……！」

「……信じても、信じなくてもいい、これは余命機能の故障なんかじゃない」

ケイスケの言い分はもっともだった。淳は、今も少し先でバリケ

ードを築いている自衛隊員の頭上を見る。

そこには相変わらず、自分達と違って余命が表示されていない（つまりは、十日以上生き残る）。これこそが、ケイスケの推理を暗に裏付けていた。

「マジかよ……、って事は……」

「少なくとも、天災とかの類じゃないのは確かだな。じゃなきゃ、山手線内の人間だけが死ぬなんてありえない――ただ人為的で、とてつもない何かによって、六日後に、封鎖内の人間は全滅する。これだけは確かだ」

「……そういう……事だよな。六日後にやってくる『何か』は、山手線の内側だけにやって来る。そして、それが起こった時、俺達は……全滅するんだ」

「……」

「……」

「……」

「……」

四人の間を、不気味な静寂が支配する。しかし、それぞれがその頭に最悪の結末を思い描いている事は、わざわざ口に出さなくても全員が理解していた。

その空気を、最初に破ったのはケイスケだった。

「……分かったよね？　ごめん……じゃあ、僕は行くね」

そう言って、彼は立ち去ろうとするが、しかしその後ろ姿を、淳が呼び止めた。

「……何で、そんな事を教えてくれたんだ？」

「……分からないよ」

ケイスケはこちらに背を向けたまま答える。

「……ただ、死の運命さえも、自分達の手で変えた君達なら……『何か』を……例えば六日後に来る、致命的な出来事を、止めてくれるかもって思ったんだ……」

「……期待してくれてるのか？」

淳のその問いは、同時に「お前には変える気がないのか？」という意味もあった。

しかし、ケイスケはその事には気付かないようだ。

「……もし、今日や明日を生き延びたとしても、六日後に来る何かを止められなきゃ、みんな死んでしまう……。その何かを止められるのか……？　もし止められないなら……助かる方法は山手線の外に出る事だ……」

ケイスケは、それ以上何も言わず――。

以前と同じように――まるで逃げるように、淳達の前から姿を消した。

「あっ、おい！　ケイスケっ……！」

「行っちゃった……ね。何か……悪い事したかな……」

ユズは、先程のケイスケを責めた自分の言動を悔やんでいるようだ。

「いや……アイツ、ああいう奴なんだよ。何かあって、変わっちまったけど、本当は正義感の強い、昔のままのケイスケなんだ……。安心したよ」

そう話すアツロウは、やはりどこか誇らしげだった。二人の中学時代、一体何があったのか、淳は少し気になったが、しかし今はそれを聞く時ではないだろう。

「……それにしても、ケイスケ君の言ってた話……本当かな」

ユズが言っているのは、勿論、先程ケイスケが言った『六日後の何か』についてである。

「六日後に、みんな死ぬってヤツか……。今の状況じゃ、軽々しく否定は出来ないよな」

「事実、今さっきも危うく死にかけたしな（俺が）」

場を和ませる為に、明るい口調で淳はそう言ったが、逆効果だった。

「でもさ……山手線の内側にいる人が、全員死ぬって……何があったら、そんな事起こるの……？」

ユズの問いを受けても、アツロウとしては首を振るしかない。

「……分からない。でも、注意だけはしておいた方が良さそうだぜ……」

「それと……もし、出口を見つけたら、他の人達に教えた方がいいだろうな」

まさか、『六日後に皆死ぬ』などと言っても、誰も信じる筈がないだろうという事は、淳にも容易に想像できた。その為、六日後の『何か』から人々を救うには、出口を教えて逃がすしかない。

『♪♪♪』

そんな事を考えていると、全員のＣＯＭＰからメールの着信を告げるメロディが鳴ったので、淳は思わず顔をしかめた。今となっては最早、この着信音が不幸を運んで来ているように思えてならない。

「またメールか、今度はなんだよ……」

呆れたように呟くアツロウの声を余所に、淳はＣＯＭＰを開いてメールを確認する。

内容は、次のようなものだった。

『ＦＲＯＭ：ＣＯＭＰ・Ｓｙｓ
ＳＵＢＪＥＣＴ：邪教の館．ｅｘｅ機能追加

＞ＣＯＭＰに【邪教の館．ｅｘｅ】が追加されました。

邪教の館とは悪魔同士を『合体』させて新たな悪魔を生み出す為、“古くから存在する施設”です。

本プログラムは、邪教の館に遠隔でアクセスし、ＣＯＭＰに登録された悪魔を合体させるものです。より強い悪魔を得る為、ご活用下さい。

【注意事項】

・二体の悪魔を合体させ、全く新しい別の悪魔一体を生み出す。

・合体前の所有スキルは引き継ぎ可能。

・合体前の能力成長分は、一定の法則で引き継ぐ。

・オークションに出品されていない強力な悪魔を生み出す事が可能』

「――オークションの次は『合体』？　別の悪魔に変化する？　どういう事だ？」

「……少なくとも、連中にとっては常識的な技法なんだろうな。メールにも昔からあるって書いてあるし」

淳は冷静に物事を理解しようとしていたが、隣のユズは頭から煙を出していた。

「もう、ワケ分かんない！　私の中の常識が壊されちゃう……。本当に悪魔って、私達人間の常識が通用しない存在なのね……」

「だけどさ、その悪魔の力で、雪男に殺されずに済んだんだぜ？」

「そりゃ、そうだけどさ！　私達の命を脅かしてるのも悪魔な訳じゃない？　コレって私にとってはかなり複雑なわけ！　……ナオヤさんって、私達を弄んでるのかな？」

「……いや、それはないだろ」

昨晩までならともかく――。

今となっては、ナオヤが悪戯目的で、自分達をこのような状況に追い込んだ訳ではないことを、淳はとっくの昔に悟っていた。

「そう、淳の言う通りだよ。今までも、俺達が生き残れるように、いろんな対策を教えてくれているし……。今回の悪魔合体だって、俺達を心配して作ってくれたんだ――」

「強い悪魔を作れ！　そこまでしないと生き延びれないぞ！　……

って事でしょ？」

我慢ならないとばかりに、ユズがアツロウの言葉を遮ってそう言った。

「……そこまでは分からないけどさ。でも俺達にとって、有利になる事には、違いないだろ？」

「ＣＯＭＰの性能を使いこなせ、ねぇ……」

淳は、ＣＯＭＰを指先で器用にクルクルとボールの様に回転させる。

「……それもこれも、出口がなかったらの話だけどな」

「わ、それヤダ……。絶対、出口を探そうね！」

「当たり前だろ。その為にはまず……」

淳は再び、自らのＣＯＭＰを開く。

「この邪教の館ってのヤツを、詳しく知らないとな」

1st Day『小牧翠』

悪魔合体というプログラム――『邪教の館』を利用するにあたって、まず淳達が考えた事は、『合体素材になる悪魔はどうなってしまうのか？』というものだ。

今いる仲魔達は、まだ一日足らずの付き合いだとはいえ、それでも自分達がまだ生きていられるのは、この仲魔達のお陰であるのは間違いない。

その仲魔を犠牲（？）にして新しい悪魔を生み出す――つまりは、今まで世話になった仲魔と別れてしまうのは、流石の淳といえども抵抗を覚えた。

しかし、例によって、それもまた杞憂だったらしい。

仲魔達曰く、合体前（この場合、『前世』と言うべきか）の記憶は、合体した後もスキル同様に引き継がれるらしい。つまり、仲間を合体させるにあたって、自分達が悲壮感を覚える必要は全くない訳だ。

それは一体どういう理屈なんだ、と淳は激しく問いただしたい気分だったが、しかし、こんな事で一々疑問を唱えていたら、この先身が持たないと判断し、何も言わないでおいた。

そもそも――仲魔達は、合体する事で全く別の悪魔になる事に対して、全く悲観していないようだった。むしろ、強い悪魔になれるとしって、全員が期待に胸を踊らせていたくらいだ。

「当然よ」

流石にこの態度には疑問を保留する事が出来ないと判断し、ピクシーに対して何故なのか聞いてみたら、彼女は「馬鹿言わないでよ」という口調でそう返した。淳も、幼い頃から母親に対して何度もこの口調を使ったものだ。

「前に言わなかったかしら？悪魔の世界は弱肉強食。外見なんか二の次よ。……それに合体して強くなれば、これからも貴方達の役に立てる」

他の仲魔達の台詞も、皆似たようなものだった。

しかし、淳はそう話すピクシーがどこか悲しげである事に気付いた。恐らく、今の自分の力では、これから淳達の役に立てない自分を、惨めに思ったのだろう。

だから――悪魔合体は、彼女達にとっても、望むところだったのだ。

――『オレぁ、誰かとくっついちまうのかぁ！　だったら、すんごいのにしてくれ！　すんごい、筋肉なヤツを希望するっ』

と話すオーガと。

――『あ～ん、何なにぃ～？もっとナイスバディになれって事ぉ？も～エッチなんだからぁ！キャハハッ！』

と言うピクシーからも分かるように、やはり仲魔達は悪魔合体を

拒否しない――どころか、歓迎さえしていた。

結局。

三人で協議した結果、淳達はピクシーとオーガで幻魔ジャンバヴァンを。

「……私は幻魔ジャンバヴァン。私を産んだ貴方がチカラを望むなら、共に行きましょう」

（中々紳士な奴だな）

コボルトとカブソで妖精キジムナーを生み出した。

「ケキキキッ！　オレ、妖精キジムナー！　オレの力が欲しいんだろうっ？　さぁ、一緒に行こうぜっ！」

（『ケキキキッ』って……どういう風に声帯を動かしたらそんな発音が出来るんだ……）

しかし、ここで問題が発生した。

現在、仲魔の数がたった二体と、これからの戦闘を乗り切るのには全く足りないのだ。

だが、考えてみれば当たり前である。二体を合体させて一体を生み出すという悪魔合体の性質上、合体だけをしていてはその都度、仲魔が一体ずつ減っていくのだから。

「だったらジュン、またデビオクを利用しないか？　さっきチラッ

と確認したんだけど、どうやら何体か新しい悪魔が出品されてるみたいなんだ」

「たった数時間で新しい商品が入荷されるとは……飽きさせないねぇ」

そう皮肉りながら、デビオクの出品リストを確認してみると、なるほど、確かに数体の悪魔が新しい顔を連ねていた。

その中から、三人は『美しきモー・ショボー』（運がいい事に、高ランクだった）を即決落札した。理由は、今の仲魔達の誰も所持していない氷結スキル、『ブフ』を持っていたからだ。

先程の戦闘で改めて痛感したのだが、いざという時に敵悪魔の弱点をつけるよう、手数はなるべく多い方がいい。

デビオクの規定に従い、即決金額である三百マッカを支払う。

「――はい、確かに受取致しました。ご主人様、がよろしいかしら？　それともお名前でお呼びしましょうか？」

「ご主人様でお願いしますっ！！」

「何言ってんのよアンタはっ！」

思わずオタク気質を発動させてしまったアツロウに、鋭いキックをかましているユズを横目で見ながら、淳は新しい仲魔達に頼もしさを感じ、「これからもよろしくな」と挨拶する。

コボルト、カブソ、ピクシー、オーガは死んだ訳ではない。新し

い仲魔達の中で、間違いなく生き続けているのだ、と淳は思った。

三人のサバイバル生活は、まだ始まったばかりである（因みに、モー・ショボーには名前で呼ばせる事にした）。

◆

◆

淳にとって『魔女っ娘』という存在は、『コスプレ好きの超能力者』という存在以外の何者でもない。

そもそも、どうして魔法を使う前に一度変身する必要があるのか、淳には疑問で仕方なかった。そうでもしないと、魔法が使えないとでも言うのだろうか？よしんばそうだとしても、だったら最初っから変身しておけばいいと思う。

そうすれば、戦闘の際に一々変身する手間が省けるし、そんな事をしてる間に、敵に反撃されたり逃げられたりしたら、正直カッコ悪過ぎる。

まぁ、魔女っ娘というのは大抵が学生だから（これも淳が抱いている疑問の一つだ。こと戦闘においては、明らかに子供よりは大人の方が有利に違いないのに、なぜ魔女っ娘というのは書いて字の如く少女ばかりなのだろう？）、そんな魔女っ娘特有のけばけばしい

衣装を着ていると、様々な場面で問題が起こるというのは理解できるが、しかし『悪』から社会の平和を守るという立場である以上、それぐらいの障害には目をつぶるべきだと思う。

後、魔女っ娘全員に必ずと言っていい程付き纏っている、あの小マスコット動物達の存在も意味不明だ。たまたま魔女っ娘アニメに目を通してから何年経っても、淳にはアレの存在が分からない。どう考えても目障りである。

何はともあれ――場所は、池袋駅に続く通り道。

淳達はそこで、何ともド派手な衣装を身に纏った少女と出会った。

「も～、どうやったら帰れるのよ！」

「「「……？」」」

プクウッと頬を膨らませながら、そう言って少女は憤っている。どうやら自分達と同じく封鎖によってこの山手線内に閉じ込められた人間（ここにいて且つ自衛隊でない以上、当たり前だが）のようだ。

明らかに大き過ぎるリボン、鎖骨と胸元が見える程度に露出のある繋ぎの衣装、その下の部分はミニスカートになっているが、何と前半分が全開だった。それならば普通は中が丸見えになってしまう筈だが、そこはさながらエプロンのような白い前掛けで隠している。因みにそれ以外の衣装は全てがピンク色で、ユズと若干キャラが被っていた。スカイブルーの瞳には、赤い縁の眼鏡を掛けており、腰まで伸びた薄紫色の髪を、前述したリボンで束ねている。

……。

ヤバイ……。

淳はそう思った。

何だか、彼女からはセトや鮑美海狗の様に、変人&トラブル引き寄せ成分が漂っているように思えてならない。

どうしよう……もうこれ以上の厄介事はゴメンだし、とっととUターンすべきかもしれないと思ったら、悲しい事に、先に向こうが気付いてしまった。

（うおっ！　何だかスゴイ格好の子だぜ!?　コスプレかな!?）

アツロウがそう淳に耳打ちすると同時、その少女がそれに対して「……あ～、今、アタシの事見てたでしょ？」と、ジト目で指摘してくる。

「えーと……、気に障ったのならゴメン。ただ、余りにも派手な格好だったもんでつい……」

さながら、「やれやれだぜ」と思いながら、淳はそう弁明する。

「あ、この格好？　見せる為のコスプレだし、別に気にしてないけど。実は昨日、イベントだったからさ～」

「イベントって言ってもなぁ……。着替えとか持ってこなかったの？」

アツロウがそう質問する中、淳も少女の身なりを確認するが……なるほど、確かにその衣装の替えが入るような入れ物などを、彼女が持っている様子はなかった。

「だって都内で足止めされるなんて、思ってなかったもん！　それに、この程度なら、ちょっと派手な普段着ってレベルでしょ？」

「は、はは……まぁね……」

そうアツロウが弱り切った反応を見せる中、淳は「んな訳あるか！」と言いかけたが、しかし自分の母親も普段着の時は中々派手な格好をしている事を思いだし、口をつぐんだ。

母も既に三十を越えているが、しかし外見はそれよりも十歳程若く見える、と身内である淳にしてもそう思っていた。そのせいで、近頃は二人で買い物に行った時などは、道行く人にカップルだと間違われてしまう事もある程だ。

「それにしても、どこからなら帰れるんだろう？　新宿から歩いて、ここまで来たのに……お兄さん達、出口知らない？」

「お兄さん達にしても、さっきから出口を探してるんだけど……。一向に見つからないんだよね」

言いながらふと少女の頭上に目を移した淳は、僅かに息を呑んだ。少女の余命は、他の人々とは違い、五日間も短い『1』だったのだ。つまり、彼女は明日には死んでしまう運命にあるという事になる。

「そうなのかぁ……。まぁいいや、見つけたら教えてよ」

そう言って、少女は爽やか且つ魅力的な笑みをこちらに向ける。

「アタシは小牧翠（こまきみどり）。よろしくね☆」

そう言い残すと、コスプレ少女・ミドリは走り去ってしまった。

「……」

「☆」って……。

何だか、ミクと同じで、やたらハイテンションな娘だったなぁ、と淳は思った。というか、あんな衣装を着ていて暑くないのだろうか？

「いやぁ、スゴイ子だったなぁ……」

とアツロウ。これに対して、今まで沈黙を保っていたユズが疑問の声を上げた。

「へ～？　アツロウが知らないなんて、以外ね～」

「なんだよ、そのトゲのある言い方は？」

「だってあの子、有名なネットアイドルでしょ？　ドリーとか言う……。気取ってないところが、女の子にも人気なんだって」

「『ドリー』？」

淳もその名前は知らなかった（まぁ、元々彼は余りネットを利用しない）。

「ウソッ！　そうなの？　あの子がドリー！？　全然気付かなかった！　くっそ～……！　サインもらっときゃ良かった！」

しかし、アツロウはその名前だけで、彼女が何者なのか理解したようだ。どうやら、知っていたのは名前だけだったらしい。

しかし、アツロウがここまでの反応を見せるという事は、あのミドリという少女、中々の有名人のようだ。

「あ～あ、言うんじゃなかった。このオタクロウが……」

アツロウの新しいあだ名が生まれた瞬間だった。

「ななな何だそのあだ名は！　オタクで悪いかっ！」

二人のそんないがみ合いを聞きながら、淳はミドリの余命が『1』――つまりは、ケイスケと同じ余命であるという関連性について、考えを巡らせていた。

１ｓｔ　Ｄａｙ『小牧翠』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・ミドリ（小牧翠（こまきみどり））

年齢：１５歳

誕生日：７月１８日（かに座）

血液型：Ｏ型

身長：１６２ｃｍ

体重：そんなモノないよ？アイドルだもん☆

家族：母、弟（父は仕事中に事故死）

職業：中学生、ネットアイドル

好きな食べ物：シーフードピザ

嫌いな食べ物：にんじん

趣味：コスプレ、アニメ観賞。

１ｓｔ　Ｄａｙ『高官の集い』

日本人ならば誰もが知っている周知の事実だが、日本の政治、経済の中心は東京である。

しかし、現在のような『東京封鎖』という状況では、当然それも機能する訳ではなく、であるから当然、そんな所に政界の重要人物達がいつまでも東京にいる訳がなかった。

場所は――東京より大分離れた地方にある、政府が所有する公共施設（ただし、その場所の存在は公には知らされていない）の一室だった。

そして、その部屋に続く廊下を進む、一つの影がある。日本警察機関のトップ、現警視総監である。

趣のある、重圧な木製のドアを開け、執務室に入る。

そこには、巨大な丸テーブルを取り囲むように、革張りのソファーが六つ程、置かれている。そこには五人の人間が座っており、一つだけ席が空いていた（言うまでもなく、警視総監の席である）。

内閣総理大臣、総務大臣、文部科学大臣、防衛大臣、内閣官房長官。

日本の中核に属するこの六人こそが、現在の東京封鎖を実行した張本人である。

警視総監は既に自分以外の人間がこの場に集まっているのを見ると、小さく頭を下げた。

「遅くなってしまってすいません。封鎖に巻き込まれた警察官の『整理』に、予想以上に時間を食ってしまいましたので」

「構いませんよ、警視総監」

座っている内の一人――防衛大臣は、人の良さそうな――しかし、どこか作り物めいた笑みを浮かべる。

「我々にしたって、似たようなものです」

今回の封鎖に巻き込まれた事情を知らない警察官は、ざっと数百人を越える。

その全員に『もしも』の事態が起きた場合、その家族や友人には、勿論説明が必要だろうが――しかし、この封鎖の表向きの理由は、『突然、山手線構内から発生した有毒ガス』である。

このような事件の捜査は、常に危険と隣り合わせだ。警察としては、もっともらしい理由を幾らでもでっち上げる事が出来る。

「全員揃ったところで、早速話を始めたい」

警視総監が空いたソファーに腰を納めたのを確認すると、総理大臣が口火をきった。

防衛大臣が手元にある書類に目を通しながら、報告を始める。

「我々による封鎖は、完全に体制が整えられたと、先程、今回動いた部隊の責任者から報告がありました」

「それまでの間に、東京を抜け出した者は？」

「いません、総理。一人もです。一先ず、こと封鎖に関しては、成功したと言っていいでしょう」

「よろしい。何としてもその状態を維持してくれ。我々が行うべきは、今の状況から誰一人として逃がさない事だ。もしそれが叶わなければ、全人類の未来が潰える事になる」

『全人類の』というくだりで、その場にいた全員の表情が、より一層引き締まった。

その変化を見て、総理大臣は、全くどうしてこんな事になったのか、という気持ちを禁じえなかった。

勿論、ここにいる六人はその理由を知っている。しかし、その原因は直接彼らの管轄には関係のない、『馬鹿な連中』の不祥事によるものだった。

馬鹿な連中――最近、巷で話題の、『翔門会』という宗教団体の事だが、しかし彼らのした事を『不祥事』と表現するのは些かの誤りがある。

前もって報告を聞いていた総理は、翔門会が明らかにこの封鎖を招く事こそを目的として、あれだけ目立つ行動をしていたのだと確信していた。

この場にいる面々の前にある書類には、その翔門会の主な幹部達が写った写真がクリップで止めてある。その内の一枚――翔門会のトップである『教祖』が写っている写真に目を向けると、総理はあからさまに顔をしかめた。

もしも、人類がこの事態を乗り切ったあかつきには、この男の行った事がナポレオンのロシア侵攻以上の、人類歴史上最大の過ちとして記録される事は間違いない。

「『例の仕掛け』について、何か問題はなかったか？」

「先程、施設の者に確認をとりました。東京内にある電子チップの受信感度は今でも良好で、指示さえあればいつでも作動させる事が可能だそうです」

「ありがとう。もっとも、使わない事にこした事はないが……」

今言った仕掛けとは、下手をすれば核爆弾以上の兵器だ。

もし『それ』をやむなく使うような事になれば、その最終決断を下した自分は、残った人々に人類最大の狂人として記憶され、子供達には大勢の人間を殺した殺人犯として、歴史の教科書によって教えられるだろう、と総理は覚悟していた。

「東京の外側にいる民間人の中で、この封鎖の真相に気付いている人間は？」

「それにしても、問題はありません。……もしや総理は、数日前のジャーナリストについて、気になっているのですか？」

警視総監の躊躇いがちな質問に、総理は「言うまでもない事だ、警視総監」

と答えた。

彼らが言うジャーナリストとは、勿論、現在封鎖に巻き込まれているジャーナリスト、ショウジの今は亡き先輩の事である。

「彼についての報告を聞いた時は、冷や汗が止まらなかったよ。もし、彼の調べた事が外部に漏れたらと思うと、気が気ではなかった」

「大丈夫です。こちらが極秘裏に動かせる工作員を何人か動かせ、彼、そして彼が残した記録の全ては『処理』しましたので」

そう防衛大臣に自信満々に言われては、総理としても頷かざるをえない。しかし、心配そうな表情を崩す事はなかった。

「……封鎖と言えば」

と、文部科学大臣。

「例の『抜け道』については、どうなっているのでしょう？　確かに『あれ』については民間人に対して秘中の秘ではありますが、しかし、知ってる者は知っているでしょう？」

――『抜け道』。

赤坂トンネルの中にある、極秘に作られた、東京の外に続く『とある道』の事だ。

「無論の事、ぬかりはありません。伏見三佐を隊長とした部隊に、そちらは警戒させています」

それらの報告を聞いて、とりあえず、六人は安堵した。この封鎖で自分達が行うべきは、あの東京に翔門会信者を閉じ込める事。

そう考えれば、既に自分達の仕事に関しては、一つの山のようなものを越えられたと思っている。少なくとも、ここまでは『天使』に指示された通りにする事が出来た。

（天使、か……）

少し前までは、そのような存在など、信じもしなかったあの頃の自分を思いだし、総理は小さくため息をついた。

１ｓｔ　Ｄａｙ『ハルと翔門会』

先程決めた通り、まだ調べていない駅を調べてみようと思い、先ずは上野駅に来てみた淳達だったが、しかし三人が抱いた期待も虚しく、そこもやはり多数の自衛隊員によって通行止めになっていた。

「ここもダメか……」

とアツロウ。

「暑いよ～、もう足が疲れたぁ！」

心からそう思っているようで、ユズは天に向かって毒づいていたが、淳にしても似たようなものだった。

「う～ん、そうだな……。交通機関が麻痺してるってかなりつらいよな……」

それを聞いて、淳は自分達の高校があるポートアイランドを思い出していた。よくよく考えれば、あそこも政府が『その気』になれば簡単に封鎖できる作りになっている。

何せ、海に浮かんだ人工島。陸地と繋がっている交通機関はモノレールだけだ。あれさえ遮断してしまえば、あっという間に絶海の孤島の出来上がりである。

「まぁ、そう考えればこの状況はまだマシって事か……」

「ん？　ジュン、何か言ったか？」

「いや、別に」

「ていうかクーラー欲しい～！　も～、電気の復旧はいつなのよ～！　あと、お腹空いた～！　アツロウ、何か買って来てよぅ！　もう歩けない～！」

あまりにも過酷な状況によって、ユズが満腹キャラになってしまった。

「うは～、超ワガママ！　つーか、何かって何だよ？」

「何でもいいよぅ……。さっきコンビニあったから、行って来てよ～！」

そう言えば、そろそろ昼飯時である事を思いだし、淳は自分の腹が先程から空腹を訴える様に小さく鳴り続けている事に気付いた。

「……じゃあ、俺も行くよ。行こうぜ、アツロウ」

「ったく、仕方ねぇなあ……。よし、ちょっと待っとけぃ！」

そう言って、淳とアツロウは先程見かけたコンビニへと駆けていった。

――が、驚いた事に、そこにはコンビニの店主らしき男性が、店

を閉めようとしてる光景があった。

「わー！　待った待った！　何で閉めちゃうんですか！？」

そう叫ぶ淳に対し、店主は一瞬、驚いたような顔を見せると、

「何でって……こんな状況じゃ、商品を仕入れる事も出来ないだろう？　だから、封鎖が解けるまでは店を閉めていようかと思ってるんだ」

「じゃ、じゃあせめて、残りの商品で構いませんので、俺達に売って下さい！」

「……まぁ、別にいいけど。でも、もう殆ど何も残ってないよ？今朝来た元気のいい女の子が、随分沢山買い込んで行ったからねえ」

畜生、同じ事を考えてる奴がいたか――そう思いながらも、淳は「構いません。お願いします」と言って、アツロウと一緒に、本当に残り僅かになっていた携帯食やパン、飲料水等を買っておいた。

それらの入ったビニール袋を持って、二人はユズの元へと戻る。

「……危なかった……。商品が仕入れられないからって、閉めようとしてたぜ」

「……間一髪だったな……」

「えええええっ！　じゃあ……」

「安心しろって、とりあえず、売れ残ってたパンとかなら買っておいたから」

そう言って、ユズにコッペパンを渡す淳。ユズは「ありがとう」と言ってそれを受けとった。

そんな光景を見ながら、ポカリスエットを口に含んでいたアツロウは、顔をしかめて封鎖を行っている自衛隊に視線を移す。

「でもさ……こりゃ思った以上に深刻だぜ。東京って本当に、他の都市からの流通に頼ってたんだな。公園から水が出る内はいいけど、それが止まったら、水も出ねえんだ……。怖ぇぇぇ……」

確かに、そうなっては由々しき事態ではある。しかし……、

「……氷だったら、いくらでも出せるけど？」

そう言って、手の平から『氷の乱舞』を出そうとする淳を、アツロウとユズが慌てて止めるというプチ騒動を起こして、この場での会話は打ち切りになった。

◆

◆

場所は変わって、六本木の通り道。

この時、有里淳は一人の少女を背負いながら歩いていた。

先程、デビオクで落札した、霊鳥、モー・ショボーである。

この中で最も暑さを嫌う有里淳は、一体この凶悪的な暑さをどうするべきかと頭を悩ませていたが、そんな中、氷結魔法を得意とする彼女と体を密着させれば、かなり涼しくなるんじゃないかと思い、早速実践しているのだ。

結果から言えば、それは成功だった。

どうやら彼女は、常時その体から冷気を出しているらしい。こんな暑い中、どうやったらそんな厚着で過ごせるのかと、淳は甚だ疑問ではあったのだが、それで納得がいった。

幸いな事に、彼女の外見は自分達人間と酷似している。その為、道行く人々に『なぜあんな厚着なのか』と好奇の視線を向けられる事はあっても、恐怖にかられて逃げられる事はなかった。

そんなこんなで、現在、有里淳はモー・ショボーを簡易冷房代わりにする事で、何とも気持ち良さそうな表情をしていた。

そんな彼を、ユズは「ジュンって、ロリコンだったの……？」と蔑みの言葉を投げかけていたが、淳に言わせれば、先の猛暑を凌ぐ為ならば、その程度の批評は甘んじて受け入れる次第だった（勿論、彼は幼女趣味ではない）。

「どうですか？　ジュン。気持ちいいですか？」

「あ～～……。いい……。最高だぜモー・ショボー。病み付きになる。ずっとこうしていたいくらいだ」

「えへへ～、嬉しいです♪　ジュンさえよければ、いつでも喜んで私の体を使わせてあげますね！」

「……」

「……」

などと。

台詞だけを聞いてれば間違いなくあらぬ誤解を招くような会話を淳とモー・ショボーが繰り広げ、それに対しアツロウとユズが沈黙している内に、何やら三人の耳に誰かが苛立った様に話す声が聞こえてきた。

「ん……あれって、もしかして、さっきのハルって人じゃ？」

そう言うアツロウの視線を追っていくと、確かにそこでは見知らぬ男と話すハルの姿があった。彼女の表情は険しく、明らかに微笑ましい会話をしているという風ではない。

見知らぬ男が、無表情な顔で言う。

「本当に大丈夫ですか？　我が翔門会に来れば、不自由なく……」

「……！　……アイツ、翔門会の人間なのか……」

淳は、咄嗟に近くの物陰に身を隠し、二人に見つからない様にした。

「ジュン？」

「忘れたのか？　連中は俺を引き入れたがってる。まぁ、今はハルも勧誘中みたいだけど」

「あ……、そっか……」

ようやく事態が飲み込めたアツロウとユズも、淳と同じように彼と同じ場所に身を潜め、少し先で話している二人の会話に耳を傾けた（モー・ショボーはＣＯＭＰに戻しておいた）。

男の誘いに対し、ハルは苛立ったような口調で、彼の誘いを素気なく断る。

「……ったく、しつけぇな。さっきから平気だって言ってるだろ？　アンタのその耳は飾りか？」

そう言うハルの口調は、正にヤンキーそのものだったが、しかし何故かそう話す彼女は堂に入っていた。もしかしたら、あれが地なのかもしれない。

「……そうですか、では、今日は帰りましょう。ですが、困った事があったら、ぜひ我々を頼って下さい」

見知らぬ男は、ハルに背を向ける。

「……私、東と申します。以後、お見知りおきを」

そう言うと、東は完全にハルの前から姿を消した。

「誰が頼るかっつーの……」

そう呟くハルを余所に、淳達は東が確かに去っていったのを確認すると、頃合いを見計らって物陰から姿を現した。

ハルも、そんな三人の姿に気付いたようだ。

「……ん？　アンタらは……、今朝のライブに来てた子だね」

「えええっ！？　駅に来たファンを覚えてるんですか？」

ユズは、ハルの記憶力に舌を巻いているようだったが、しかしそれは単純な話だった。

「ハハッ、たまたまさ。アンタは、良くライブに来てくれるだろ？いつもは一人で盛り上がってんのに、今日は二人もいたからさ。……ま、一人はアタシの歌になんて、興味もなさそうだったけどね。アハハハッ……！」

最後の一言は、明らかに淳に対して向けられた言葉だったので、彼は居心地が悪そうに体をモゾモゾさせた。

「……もうっ！　ジュン！　せっかくのライブなのに……！」

「い、いやぁ……」

「いいんだよ、音楽の好みなんて、人それぞれさ……ねぇ？」

「い、いやあの！　ちゃんと聴いてましたよ！？　もー俺、完全にファンになっちゃった！　今度、貴女のＣＤをまとめ買いしちゃおうかなーとか思っちゃったり！」

明らかに慌てふためく淳に対して、ハルは苦笑する。

「別に気にしちゃいないって」

「あ……そういえば、ハルさん。さっきの男の人って、翔門会の人ですよね？」

と、ここでユズが二人の会話に疑問を話す。

「ああ、さっきの男ね。翔門会の幹部だかなんだか知らないけど、『困っていたら助ける』だってさ。だったら、この停電を何とかしてくれってんだ。停電じゃ曲作りも出来やしない」

（『困っていたら助ける』、か……）

それだけを聞けば人が良さそうに聞こえるが、しかし、そう当てつけがましく好意を表す人間に限って、腹の中に黒いものを抱いている場合が多いという事を、淳は知っていた。

「あはは……。新曲の完成、楽しみにしてますね！　あ、ハルさん、この二人は私の友人で、えーと……」

ユズの意図に気付いて、先ずはアツロウが慌てて自己紹介を始め

る。

「あ、俺、木原篤郎っていいます。で、こっちが……」

「……」

アツロウが淳に紹介を催促するようにするが――しかし、淳は、それには答えず、ジッとハルを見ていた。

ハルもまた、何も言わずに淳と視線を合わせている。

淳は思った。

やはり――他人という感じがしない。

どうにも――初対面という気がしない。

まさしく、写し鏡。

生まれて、初めて出会う――『同類』の姿。

「……ジュン？」

そんなユズの訝し気な声で、淳は我に帰った。

「ん？　ああ――ええと、俺、有里淳って言います」

「……そう、私はハル、春沢芳野（はるさわよしの）って言うんだ。よろしくね」

それは、さながら――。

自分の名前を繰り返し聞いている様な、そんな違和感を覚える言葉だった。

そう、簡単に自己紹介をして――淳達は、ハルと別れた。

その直前、こちらに背を向けたハルが、不意に淳だけに意味ありげな視線を向けて、何やら呟いたが、しかし声が小さ過ぎて淳には聞き取れなかった。

聞き取れなかったが、しかし――淳は、その口の動きだけで、彼女が何と言ったのかを悟った。

アツロウとユズは、そんな二人の様子に気付いていない。

――『またね、そっくりさん』

現在時刻、十五時三十分。

有里淳と、春沢芳野。

二人の関係（コミュニティ）は、まだ築かれたばかりである。

１ｓｔ　Ｄａｙ『不確定因子』

「――『イザナギ』？」

場所は再び、六人の官僚が集まる、とある施設の一室に戻る。

「イザナギと言えば――確か、昔から伝わる神話に登場する、あの男神のことかね？」

そう話す総理大臣に対して、しかし官房長官はゆっくりと首を振った。

「確かに、そうですが――しかし、この場合の『イザナギ』とは、あるペルソナ使いを指す言葉になります」

「ペルソナ使い……」

そのような存在については――総理も知っていた。

今回の事件の根源とも言える、『悪魔使い』とはまた別の、『異能者』。

人知を越えた存在。

しかし――官房長官が言う、『イザナギ』という名のペルソナ使い個人については知らない。

「私も――」

ここで、防衛大臣が躊躇いがちに口を開く。

ゴホン、と言いにくそうに、一つ咳ばらいをすると、次のように言葉を続けた。

「私も――その男については、些かの知識を持ち合わせています」

「……防衛大臣？」

「立場上――ですが……。私が防衛大臣である以上、決して無視出来ない存在である為、『イザナギ』というペルソナ使いについては、かつての防衛大臣より、引き継ぎの際に申し送られておりました」

そう話す防衛大臣は、顔から何筋かの冷や汗を流していた。

「……立場上……という事は、何かね。その男は、あー……軍事的な意味で、無視出来ない存在だと？」

「……」

「……何者かね？　その……イザナギとやらは。そもそも、その名は本名なのかね？」

「いえ、イザナギというのは、彼が数多く持つ偽名の一つです。彼は『仕事』の際に様々な偽名を使いますが――『戦神』『神に魅入られた銀色』『愚者（ワイルド）』『一騎当万』『アメノサギリ』『個人災害』――『イザナギ』というのは、その中で世間的に最も一般的な彼の総称です。本名に関しては――今となっては、誰も知りません。諸説は幾つかありますが……」

そこまで言うと、もう喉がカラカラになったとでも言うように、防衛大臣は手元に置いてあるお茶で口を潤した。

それを見て、警視総監が説明を引き継ぐ。

「総理、及び総務大臣、文部科学大臣。今まで黙っていてすいませんでした――しかし、彼の存在によって与えられる政界への影響もまた、とてつもなく大きいのです。無用な混乱を避ける為に黙っていた――と。その事情を理解して頂きたい」

「それについてはこの際、構わんが……。しかし、具体的には何者なのだね？」

総理の言葉を受けて、官房長官、警視総監、防衛大臣の三人は、説明を譲り合うように幾度となく目配せをし合あう。

やがて、口を開いたのはこの件について最初に言い出した防衛大臣だった。

「……なんと……説明したものか……。ただ……一言、彼について最も適切な言葉を述べるなら――

――『強い』。

それも、規格外に……です」

「ああ……、つまりは、とてつもない財力――或いは、権力及び土

地を支配していると、そういう事かね？　個人資産が飛び抜けた財界人……。もしくは、かつてのオウム教祖のように、民衆に対して多大な影響を持つ宗教人とか……？」

「違います」

防衛大臣は即座に否定した。

「確かに、彼は『その世界』ではとてつもない財力や、権力――世界中の要人と強いパイプで繋がっていますが……しかし、それ以上に、それよりも遥かに、彼が持つ力の中で驚異的なのは――いやゆる、『純粋な力』なのです」

「純粋な……？」

「ええ、超人……というか……馬鹿げた言葉を使えば、その……『腕っ節が強い』、『喧嘩が強い』と言えば……まぁ、大体合ってます」

「……は？」

「……」

「ああ……、つまりは、暴力団のボス――」

「いえ、ヤクザやマフィアの人間ではありません。彼は表向きには一般人です。片田舎で翻訳の仕事をしています。驚いた事に妻子もいる、とか」

そこまで聞いて、総理は「ハハハッ」と面白い冗談を聞いたかの

ように笑った。

「……やれやれ、『スーパーマン』や『スパイダーマン』でも見ておくべきだったかな、防衛大臣。君の話を聞いていると、まるでその男が、個人の力だけで、日本政府に多大な影響を及ぼす事が出来る――と、そう言ってる様に聞こえるぞ」

「そう申し上げております」

「馬鹿馬鹿しい」

文部科学大臣が、ここでようやく口を開いた。

「お三方、残念ながら、今は冗談や戯言を言っていられる程、呑気な状況ではないのですよ――」

「真面目な話です」

防衛大臣は、根気強く説明を続ける。

「まぁ、確かに君の話も分かる」

総理は顔の前で人差し指を振った。

「『ペルソナ使い』については、私もある程度の知識を有している――が、しかしだ。彼らの力は確かに素晴らしいが、しかし、警察や防衛庁という、強大な戦力を持つ組織の前では無力だ。そんな事は私が言わなくとも、君達なら分かるだろう？　この日本は法治国家なのだよ。防衛大臣」

「あの、よろしいでしょうか？総理」

警視総監も話に加わる。

「何かね？」

「はい、総理。しかし彼らペルソナ使いこそが、十九年前に起きた『終わり』にまつわる事件や、八十稲羽で起きた連続殺人事件――他にも、あの『セベク・スキャンダル』を解決した立役者である事は、ご存知でしょう？」

「勿論知っているとも、警視総監」

総理大臣は、今にも欠伸をしかねない様子だった。

「私は別に、彼らの力を軽視している訳じゃない。しかし、彼らが活躍できるのは『そちら側』だけであり、『こちら側』の世界には、介入出来ないだろう？　第一、我ら日本を脅かす存在という事は、それはつまりアメリカを脅かす存在でもあるという事だ。そんな、正しく『怪物』としか言いようがない存在が、一体どこにいると言うのだ？」

「この日本にいるのです、総理大臣。何度でも言いますが、これは冗談ではありません。全て本当の話なのです」

「……」

そこまで言われては――流石の総理大臣も、沈黙せざるを得ない。

「分かりやすい話をしましょう」

と、官房長官。

「昔、巖戸台近くの人工島で起きた事件――『ポートアイランド・インパクト』についての極秘資料が盗まれるという事件が、かつて起こったのを覚えておりますか？」

「無論だが――しかし、あれは管理員の不備によって一時的に起こった――いわゆる勘違いの延長だろう？」

「いえ、実際に盗まれたのです。ここにいる全員は、当時まだ地位を固めていなかった為に知らないでしょうが――私も、知ったのはつい最近ですが――あれは、とあるテロ支援国家に所属する、犯罪組織が起こした事件だったのです」

総理大臣は、露骨に顔をしかめた。

「そんな事、私は聞いていないぞ」

「どうやら、当時の総理大臣が、いらぬ混乱を避ける為に箝口令を敷いたそうです」

それについては、その場にいる全員が納得した。

あの事件――ポートアイランド・インパクトでは、事故の後、その責任を当時の主任研究員だった男になすりつける為に、多くの政府高官が汚い事に手を染めていたというのは、彼らにとっては暗黙の事実だった。

話に出た資料には、それに関わる当時の政界人について記載され

ている。もしその内容がメディアの耳に入れば、日本政府はその原形を保てない程に大きなダメージを受けていただろう。

「――それを避ける為に、その『イザナギ』に事態の収拾を以来したのが――」

「――当時の総理大臣。そうです」

官房長官が頷く。

「あの事件は、なるべく極秘裏に――且つ迅速確実に解決する必要がありましたので……彼は、その……うってつけだった」

「……その解決方法は？」

「正面突破です」

横からそう話す防衛大臣の回答は、実にシンプルだった。

「当時の犯人側の勢力は、小国の軍隊にも劣らない――数百名からの完全武装した機動隊でしたが……。それに対して、彼は堂々と隠れる事なく正面から突入し、そして、犯人達を一人残らず『処理』して見せました≫」

「ば――馬鹿な」

最早、総理大臣は頬を引き攣らせる事しか出来ないようだった。

「そんな、魔法のような事……いや、勿論、彼らペルソナ使いが魔法のような力の持ち主である事は知っているが――しかし……その

ような事は余りにも、その、『非現実的』過ぎる」

「確かに、信じ難い事です――が、それが事実である以上、信じるしかありません」

防衛大臣は、額の汗をハンカチで拭いながら頷いた。

「……いや、やはり待ちたまえ」

何かを思い出したように、総理大臣が口を開く。

「我々国家には、軍事力という最大の『力』がある。その男がペルソナ使いとしてどれだけ優れていたとしてもだ。まさかミサイルや、果ては核にまで対抗出来る筈がないだろう」

「今のご時世では、核など撃てないでしょう。仮に撃てたとしても、彼を仕留められるとは限りません」

「馬鹿な……ん、いや、ちょっと待ちたまえ」

そこで総理は、何かに気付いたかのように顔をしかめる。

「何故――この時、この場所でそのような男の話を出すのか分からなかったが……まさか……」

「お察しの通りです、総理――未確認ですが、今回の事件に、この男が関与しているらしいとの情報がありました」

そう話す防衛大臣の言葉に――自分達の計画に割り込んだ不確定な因子の存在に、その場にいる全員が顔を強張らせた。

１ｓｔ　Ｄａｙ『アマネとの再会』

――東京駅周辺。

淳達はこれまでの散々な結果は頭の中から叩き出し、心機一転の気持ちをもって東京駅まで来てみたが――最早、敢えて言う必要もないだろう。東京駅周辺も、自衛隊によって完全に通行止めされていた。

「やっぱり、こっちも駄目か……」

淳と同じく、殆ど期待していなかったのか、そう話すアツロウの表情は特に落胆していなかった。

そんな彼の隣で、

「……喉、渇いた……。どこかで水飲もうよ～」

とユズが言う。先程コンビニで買った数本の飲料水は、既に三人で飲み干してしまっていた。

「……公園があったら寄っておこうぜ。水分だけは取っておかないと、熱中症になっちまう……」

「だな。モー・ショボーや俺の氷結魔法を溶かして、飲料水代わりにしてもいいけど、いざという時の為に、魔力の無駄遣いは出来るだけ避けたいし……」

そう話す淳は、今はモー・ショボーを背負っていなかった。彼にしても、そういつまでも少女を背負いながら活動し続ける程、体力に余裕がある訳ではない。

「……それにしても、マジで歩き疲れたぜ」

アツロウが言う。

「……いくら停電でも、バスとかタクシーは動いてるんじゃないの？」

そうユズが推測するが、しかしアツロウと淳にはそれが不可能である事を知っていた。

「……ざ～んねん。路上は事故車やら瓦礫やらで一杯です……」

「もーっ！　封鎖の馬鹿っ……！」

アツロウの指摘に、やり場のない怒りを感じるユズ。

「……とりあうず、休憩にしないか？　芝公園にでも行って休もうぜ」

淳が言う。彼にしても、既にヘトヘトで、喉もからからだった。芝公園なら、飲み水の確保も難しくないだろう。

（……でも、何だろう……？　何か、大事な事を忘れているような……）

――そんな感じで、僅かな引っ掛かりを心に残しながら、淳はア

ツロウ、ユズと共に、芝公園へと足を運んだ。

◆　◆

――芝公園。

「思い出した……何が引っ掛かってたのか、とてつもないまでに思い出した……」

――話は、そう後悔した様に淳が呟くより少し前に遡る。

三人が芝公園に来ると、そこには既に自分達と同じように、封鎖に閉じ込められた大勢の人間が集まっていた。

「この人達も家に帰れないんだね……。それにしても芝公園って、帰れない人達が避難している場所の中では、かなり大きいね……人も多いしさ……」

予想以上の人の多さに目をパチクリさせながら、ユズが驚嘆の声を上げる。そこへ、この辺りの地理に詳しいアツロウが助け舟を出した。

「立地の関係かもな。増上寺を中心として、その周囲を囲むように出来てるのが芝公園だ。公園の中には、学校や図書館、それにホテ

ルまで建ってる。人が集まるのも道理だろ？」

「なるほどね。それに東京タワーの隣だから、避難所として、ここを目指しやすいしね。……それにしても、本当に人多いね……。個人じゃどうにも出来ないから、ただ封鎖を解ける事を待つしかないんだ……」

ユズが言う。

「まあ、改造ＣＯＭＰを持ってる俺達にしたって、何か出来てる訳じゃないけどな……」

それに、淳にしても、この人の多さは悩みの種だった。生粋の都会育ちであるにも関わらず、彼は昔から人の多い所が苦手なのである。

「うん……そうだよね……。困ってるのって、私達だけじゃないんだよね……」

「……そうだな。早く山手線の外に出られるようになって欲しいもんだぜ」

そう言うアツロウに対し、淳は危うく「自衛隊はもう、封鎖を解く気がないんじゃないか？」と言いそうになったが、既に二人がお通夜にでも行くような面持ちだった為、自重しておいた。

と、そこで。

――芝公園に集まった多くの人々を前に、翔門会の信者が、何かの演説をしている光景が目に入った。

……。

「思い出した……何が引っ掛かってたのか、とてつもないまでに思い出した……」

うっかりしてた……、と淳は思った。

今朝、ミクが話していたではないか。『今日の午後、芝公園で翔門会の演説が行われる』、と――。

しかし、だからと言ってどうする。

見たところ、この公園がこの辺りの場所の中で、一番の避難所である事は間違いない、アツロウもユズも、そして自分にしても、そろそろ休憩をとらないと、流石に倒れてしまうだろう。

信者の目を逃れる為に、物陰に隠れようとするには、余りにも周りの目が多過ぎる。どうやら、運良く翔門会の連中がこちらに気付かない事を祈るしかなさそうだ。

すると。

「――皆さんは、『バベルの塔』の話をご存知でしょうか！」

と、そのように、周りに教えを説いている翔門会の中ではリーダー格の男（よく見れば昨日、歌舞伎町の通りで演説していた男だった）が、声高にそう話しているのが淳の耳に入った。

「――かつて人は、神に近づこうと巨大な塔を築こうとし、おごりの報いとして言語を分断される試練を受けました。しかし人類は、長い年月の果てに、自らの知恵と技術でコミュニケーションの壁を乗り越えてきたのです。それは『インターネット』という形で、我々の前に具現化し、今日まで人々を支え続けてきました！」

「アナログなんだかハイテクなんだか、イマイチよく分からねえ連中だな……」

淳は、教祖の話を聞いて、欠伸をしそうになるのを必死で堪えていた。

「……ですが今！　人間は再びおごり、ついに神の『試練』は、形となって現れました！　この試練を乗り越える為に、今こそ人間は、手を取り合い、強く結束しなければなりません……。さぁ、皆さん……！　我々『翔門会』と共に、神の試練を乗り越えましょう！」

「……とんだ夢物語だな」

とうとう堪えきらずに、淳は大口を開けて欠伸をしてしまった。

「結束」？　「手を取り合う」？

何だそれは。

それが出来ないから、人類は未だに大量の核を地下に隠してるんじゃないか。それが出来ないから、日本の総理大臣が短期間でコロコロ変わってるんじゃないか――と、大声でそう言ってやりたかった。

「翔門会の教祖が演説してるな……」

アツロウも、彼らの存在に気付いたようだ。

「ネットによる異文化間のコミュニケーションは、バベルの塔の試練を越えた証、か……。なのに、また『試練』が来るのかよ？　……まさか、青山霊園で悪魔と戦っていたのが『試練』じゃないよな……？」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。どっちにせよ、俺達がやるべき事は一つだ」

淳が言う。

「ああ、そうだけど……ただ、そうである可能性は高いよな？　タイミングが良すぎるし……て、ん……？　あの子って……」

それには、アツロウの次に淳も気付いた。演説している翔門会の一団の中に、一際目立つ少女の姿がある。一人だけ太股が見える程丈の短い装束を着ており、頭には派手過ぎる髪飾りをつけていた。あれは正しく――。

「アマネ……」

思わず、淳は呟く。そして、再び感じていた。昨晩、青山霊園で

も感じていた――アマネから発せられる、矛盾した気配を。

アマネもまた、教祖と同じく、辺りの人々に声をかけて回ってるようだった。

「――皆さん、今回の不運は、誰の身にも平等に訪れました。辛いのは、誰も同じです。慌てずに待ちましょう。互いに手をさしのべ、助け合うのです……」

「『待ちましょう』って……。何をだよ」

言ってる事が抽象的過ぎて、よく分からん、と淳。

「……昨晩の女の子だな。神秘的というか、良く見たら可愛いよなぁ？」

アツロウが言う。なぁ（→）と、彼は明らかにスケベ根性を丸出しにしていた。それを聞いて、淳も改めてアマネを見る。

あの少女を見ていると、先程述べたような、妙な雰囲気に意識が偏ってしまう為、今までは余り気付かなかったが――なるほど確かに、注意して見れば彼女が相当な美貌の持ち主である事が、淳にも分かった。

「ん～……確かに」

淳が言う。するとアツロウは、にやにやしながら、

「だよな～。お前、ああいうの好きそうだもん」

と言った。

「……」

（……え？　俺ってそんな風に見られてるの？）

「こ～ら、男子諸君っ、何ボソボソ話してんのよ、イヤらしい……」

そんな二人をユズが冷ややかな目で見ていると、突然、三人の前に翔門会の信者（女）が近付いて来た。その為、淳はウンザリした態度を表に出さないよう、必死にに我慢しなければいけなかった。

「こんにちは、我々は翔門会と申します。お時間があるようでしたら、お聞きになって行かれませんか？」

――と、淳達が返事する暇も与えずに、信者は一気にまくしたてるように話し始めた。

「今は技術が進み、電話やインターネット、新しいコミュニケーション手段が一般的になりました。それに伴い、この交流手段を肯定する人々の正しい生き方が、重要になってきました」

「……」

「翔門会では、現代に相応しい、価値ある『人間関係（コミュニティ）』の素晴らしさを、皆様に知って頂きたいと考えております」

そこまで聞いて、淳は心底「くだらない」と思ったが、しかしそう答えようとした時、今朝、ミクに対して自分から（建前だが）翔門会に入会する意志を示していた事を思い出した。

どうやら、この信者は自分の事に関して気付いていないようだが、今、彼女の話に対して否定的な答えを返した後、彼女がそのことに気付いた場合、極めてめんどくさい事態になってしまう。だからこそ、淳は、

「……素晴らしい考えだと思います」

――と答えた。信者はそんな淳の返答に対し、素直に喜んでいた。何かもう、今にも頭から音符が飛び出してきそうだ、と淳は思った。

「賛同して頂けて嬉しいです！　是非、前の方にいらして教祖様のお話を……」

そのように、翔門会の信者が一気に話し始めると、見覚えのある少女が近付いて来て、2人の話を遮った。

「……あまり、無理にお誘いしてはいけません」

そう話す少女――アマネの姿を認めると、信者は「これは、アマネ様……」と畏まった態度になり、その場からそそくさと去って行った。

そしてアマネは、淳と正面から顔を合わせる。

「……昨日、お会いしましたね。改めて自己紹介させて頂きます。私は九頭竜天音（くずりゅうあまね）。翔門会の巫女をしております」

「巫女……？」

どうりで、他の信者とは恰好が違う筈だ、と淳は納得した。

「……はい。人知を超えた力を持つ存在である『神魔』。その声を聞く事が巫女の仕事です」

「……？」

『神魔』……と言うのは、悪魔とは違うのだろうか……？

そう疑問を抱く淳をよそに、アマネは話を続ける。

「古来より人間は、己の信じる者を『神』、そしてその対極に位置する者を『悪魔』と区別してきました。しかし、その基盤はあくまで人間の主観でしかなく、本来は神も悪魔も、とても崇高な存在なのです……」

「……」

（相変わらず……電波発信しまくってるなぁ……この娘）

「貴方にも、『神魔』の声が聞こえているのではありませんか？姿が見えているのではありませんか？」

……。

見える訳ねーだろ……。

見える訳ねーだろっ！

しかし、淳は、

「うん、そうだな。俺にもバッチリ聞こえてるよ。『神魔』は確かに実在する」

と、凄まじい嘘をついた。

しかし、汚れを知らない翔門会の巫女様は、そんな淳の回答を、いとも簡単に鵜呑みにしてしまう。

「……流石は改造ＣＯＭＰを使いこなす者、『神魔』の存在を身近に感じるのですね。『アベル』の因子を受け継いでいる貴方ならば、尚の事でしょう」

「……」

いや……知らんし（『アベル』って何？）。

「……ところで一つ、お伺いしたい事があります。あなた方は、一体どこでそのＣＯＭＰを手に入れたのですか？」

アマネが言う。

「……」

（おおっと……）

いきなり色々核心を突くような質問をしてきたので、淳は一瞬、言葉に詰まってしまうが、しかし、よく考えれば別に隠すような事でもない。

「……『ナオヤ』っていう、俺の従兄から貰ったんだ」

『ナオヤ』という単語を淳が口にした時、アマネの肩がピクリと動いた。

「『ナオヤ』？　……まさか……彼が……。そうでしたか、何となくわかりました」

何となくかよ。

次に、淳の頭の中に、ふと疑問がわいた。

（ん？　というかこの娘……ナオヤと知り合いなのか？ただでさえ重度の引きこもりであるアイツに、知り合いがいるというだけでもかなり驚きなのに……。それがよりにもよって翔門会の巫女とは、一体どんな事情があるのだろう？）

と。

しかし、次にアマネの口から出てきた答えは、意外なものだった。

「実は、彼に悪魔召喚プログラムの製作を依頼したのは、われわれ翔門会なのです……」

――すると。

アマネは突然、淳にその体を預け、密着させてきた。

「……??　……！　……っ！?」

突然の出来事に、淳の思考回路が一瞬、フリーズしてしまう。それを隣で見ていたユズが「ちょ、ちょっとアンタ！いきなり何してんの！?」と、驚きと非難の声を上げるが、アマネは一向に取り合おうとしない。

「……またいずれ、あなたとはお会いする事になるでしょう」

淳の耳に吐息がかかる程の至近距離で、アマネはそう呟く。そんな2人に、周りから好奇の視線が向けられるが、先程のユズの言葉と同じく、アマネはそれに対して一向に構う気配を見せない。

流されていてばかりでは駄目だ。淳は気を強く持った。自分も何か言わなければ――と。

そこで淳は今朝、自分のケータイにかかってきたセトの話を思い出した。確かアイツは――。

「そ、そうだアマネ」

「はい?」

未だ密着しているアマネを何とか引きはがそうとしながら（しかし、彼女は離れなかった）、淳はそう切り出す。

「ミクって女の子から聞いてないかな？　俺、実は翔門会に入会したいんだけど……」

翔門会の教えなど、正直言って全く理解出来ないが、しかし、セトが言うように、今のような状況では、翔門会のような集団に属する事が一番の安全策なのだ。

しかし、アマネの口から返ってきた言葉は、実に意外なものだった。

「実は……鮑美海狗は現在、行方不明なのです」

「え？」

行方……不明？

なんで？

「こちらでも消息を追っているのですが、依然として行方が知れません。しかし、貴方がそのような事をおっしゃる以上、彼女は貴方を勧誘するという仕事だけは果たしたようですね……」

驚く事に、アマネは淳の背中に手を回してきた。もはや周りの視線などなんのそのと言った様子である。女性特有の甘い香りが淳の鼻について、彼はクラクラする頭を何とか正常な状態に保つのに必死だった。

「しかしです。ジュンさん……。今、我々の同志になるのは、やめておいた方がいいでしょう」

「……？　……それは、どういう――？」

「残念ながら、詳しい事情は話せないのです……。しかし、ご安心下さい」

そう言って、ようやくアマネが体を離してくれたので、淳は小さく安堵の吐息をついたが、しかし次の瞬間には、アマネが自分の手で淳の両手を包み込んでいた。これでは、また昨晩の状況に逆戻りである。

「……貴方が望むなら、私がいつでも駆け付けます。私は貴方の味方です」

言って、アマネは魅力的な微笑みを見せるが、しかし――何故か淳は、そのアマネの表情に、何とも言えぬ寒気を覚えた。

「お前、一体何を――？」

「では、有里淳さん……失礼します」

結局、淳の主張など殆ど受け入れず（まぁ、翔門会に入らずに済んだのは、彼にとって嬉しい誤算ではあったのだが）、アマネは三人の前から姿を消した。

「……ジュン、聞いたか？」

と、アツロウがここでようやく口を開く。

「『翔門会がナオヤに依頼した』……って部分の事か？」

淳が言う。

「ああ……、そうだ。問題は、何の為に依頼したかだ。翔門会が悪魔を喚びたがる理由って、何だろうな？」

「……動物園でも開くんじゃねぇの？」

淳としては、そんな事は今更どうでもよかった為、そう答えたのだが……。そんな彼を、アツロウが険しい目つきで睨んできたので、淳は真面目に答える事にした。

「あー……じゃあ、ホラ、悪魔を使って神の試練をやる……とか？」

（……ん？　アレ？）

自分でそう言った後、淳は考える。

これは単なる思いつきではあったが……しかし、そう的外れな考えでもないのではないか？　先程の教祖の話と照らし合わせて考えてみれば、なるほど、その方法でなら自作自演で大衆の賛同を得る事が出来る。

「――翔門会が良く演説で言ってるヤツだな。神の試練が来るから、その前に結束しましょう、ってヤツか」

アツロウが言う。

すると、ここへきてユズが、たまり兼ねた様に口を挟んだ。

「……自分達の教えを実現する為に、自分達で神の試練を起こして

るって事……？　もし本当なら最低だね……」

「……全くだな」

ユズの意見に同調しながら、淳は空を見上げた。真夏の風景を象徴するかのように、そこには青い空が一杯に広がっている。

こんな青空をあと何日間、見続ける事が出来るだろう――と、淳は一抹の不安を感じたが、しかし、すぐにその考えを取り払うように、小さく頭を振った。

現在時刻、十六時十七分。

東京の空は――まだ、青かった。

1st Day『カラオケボックスにて』

「――――♪――――♪――――！」

「……」

信じられねぇ事に、こんな状況で歌を唄っている奴がいる。

と、彼――二階堂征志（にかいどうただし）はそう思った。

場所は、都内にある一軒のカラオケ屋である。

外にいる分には聞こえないが、打ち破られた自動ドアを抜けると、その歌声は嫌でも耳についた。

カイドーは、受付にいる女性を一瞥すると、そのまま二階へと続く階段を上っていく。

そんなカイドーに対し、受付にいる女性は何も言い咎めたりはしなかった。

まあ。

首から上が無くなっていては、当然である。

真っ赤に染まっている受付をなるべく視界に入れないようにしながら、カイドーは歌声のする部屋へと向かった。

「一――――♪♪――――♪――――！！」

それにしても、まるで演歌のようにやたら小節の効いた歌だな、とカイドーは思った。しかも、その凄まじい声量は、どうやらアカペラによって生み出されているらしい。

停電となってマイクも機能しないこの状況では当然といえば当然だが、それなら待ち合わせ場所をカラオケ屋にする意味はなかったんじゃないか、とも思う。

まぁ、二人でこっそりと密談するにはうってつけかもしれないが。

歌声の発生源は二十二号室だったが、そこへたどり着くまでの間に、幾つかの人間の死体をカイドーは見付けた。

それらには、いたる所に食いちぎられた跡があったものの、しかし、悪魔の姿は何処にもなかった。恐らく、ここにいる従業員をあらかた満喫した後に、何処（いずこ）かへと去って行ったのだろう。

スモークのかかったドアを開けると、そこには片足をテーブルに乗せて、ノリにのって熱唱している1人の男の姿があった。

艶やかな銀髪で、黒い甚平を纏った長身の男はカイドーの存在に気付くと、

「よう、カイドー」

と言って、ピッと親指を立てる。

カイドーはそれに対して何も応えずに、ボックスの中にある赤い

ソファに座り込んだ。クーラーなど動いている訳がないのに、何故か、この部屋だけは妙に涼しかった。

そして彼は、そのままその男――セトが歌い終わるまで、ソファに座りながらジッと待つ。セトにしても始めから歌いきるつもりだったようで、それからしばらくの間熱唱を続けた後、彼はようやく、マイクを机の上へと置いた。

「……なんつーか、アンタがカラオケボックスにいるのって、恐ろしく似合わねぇナ」

パチパチパチ、と気のない拍手をしながら、カイドーは言う。

「いやぁ、俺も普段はあんまり歌わないんだけどよ。ついさっき、楽しみにしてた路上ライブを聴き損ねたから、自分で歌う事でストレスを発散させようと思ったんだが……。う～ん……やっぱ駄目だな。俺、実は歌が苦手なんだ。トランペットとかの楽器なら、高校時代に散々吹いてたから得意なんだが」

「それもそれで、かなり似合わねぇけどな……」

セトは、カイドーの正面にどっかりと腰を落とした。

「久しぶり――と言いたいところだけど、実際には一日と経ってないんだよな。やれやれだぜ」

大きくあくびをしながら、セトが言う。

その後、二人はお互いに得た情報を交換し始めた。役に立たない情報、役に立つ情報など、それは様々だったが、中でも、例の『連

続吸血事件』の犯人が、この封鎖内にいるのは間違いないというセトからの情報は、カイドーにとって大いに意味のあるものだった。

「どうしてそんな事が分かる？」

「つい最近、ジャーナリストの友達が出来たんだよ」

「ふぅん……」

一体、この男の人脈はどうなってるんだと思ったが、それを口に出す事はなかった。最早、セトという男の異常性については、カイドーにもある程度の適性が出来つつある。

「そういや、もうＣＯＭＰは機動させたのか？」

セトがそう質問すると、カイドーは露骨に顔をしかめて見せた。

「ああ……とっくの昔にな、つうか、一体何なんだヨ、ありゃ。電源を押したら、いきなり訳分かんねぇ化物が飛び出してきやがるし……。アンタ、ＣＯＭＰを機動させればああなるって知ってたんだろ？　どうして先に言わねえ」

「やれやれだぜ。甘えんじゃねえーよ。それとも何か？　さしものカイドー様も、悪魔相手にゃ俺がいないと心細かったのか？」

「ナメた口聞いてんじゃねぇ、殺すゾ」

このようにドスの効いた台詞を吐くだけで、大抵のゴロツキは逃げ出すのだが、目の前にいる男はさも面白そうにクスクス笑うだけだった。

「いいねぇ。出来る事なら是非そうしてくれ。まぁ俺は一度、黄泉の世界に片足を突っ込んだ身だがから、それほど楽しみでもねぇけどな」

「ハッ、御託はいい……。ところで、肝心の犯人の正体は誰なんだよ」

「それなら、お前にもある程度は察しがついてるんじゃねぇか？」

「……悪魔、か」

数時間前、カイドーはセトから渡されたＣＯＭＰをその場で機動させ、そこで彼は生まれて初めて悪魔という存在に出会った。

その時、彼を襲った悪魔は、何とか倒す事が出来たが……。しかし、初めて悪魔を目の当たりにした時の驚愕と戦慄は、今でもハッキリ思い出す事が出来る。

「さっき話したジャーナリストの情報によれば」

セトが言う。

「まぁ、これは世間でも知られてる事だが……。事件現場にはおよそ犯人に繋がるような痕跡は見つからず、犯人は結局捕まってない。ただ被害者には共通点があった。体の一部分には必ず二つの小さな穴が空いていて、そこから全身の血を抜き取られて死んでいた、と……」

セトはゆらゆらと頭を振る。

「正しく、吸血鬼さながらの犯行だよな。でも、俺はここで一つの仮説を立ててみた。もしこの犯人が悪魔だったら？　というものだ」

「普段の俺なら、そんな推理はシカトして終わりだけどヨ――」

カイドーは懐からＣＯＭＰを取り出すと、それをマジマジと見つめた。

「コイツを手に入れた今となっちゃ、あながち的外れでもなさそうだな」

「ああ、それならある程度の説明がつく。まず、犯人に繋がる痕跡が一切見つからなかったという部分だが――悪魔の仕業だと考えればそりゃ当然だ。そもそも、犯人は人ですらないんだからな。その事件に対して、『人が人を殺した』と、無意識に決め付けていた捜査員達か犯人を上げられないのも当然だ。けど……」

セトはそこまで言って、何か考え込むように顔を伏せた。

「……？　……何だヨ？」

「そう考えると、一つ疑問がある。勿論、犯人が悪魔であると仮定しての話だが……。その悪魔が、『どうやってこちらに喚び出されたのか』という事だ」

「『喚び出された』？」

その台詞の微妙なニュアンスに、カイドーは眉を寄せる。

「どういう事だヨ？　そりゃ。単に、その悪魔が人間を襲いたくてこっちに来たってだけの話じゃねぇのか？」

カイドーの指摘を受けて、セトは首を横に振った。

「オレは悪魔は専門外だけど、その線はないと思う」

そもそも、この人間界で悪魔を見かける事自体、非常に稀な事なのだ。

仮に見かける事があったとしても、それは殆ど実体を持たないようなガス状の悪魔である場合が殆どである。

一つ、ここで魔界と人間界を繋ぐ境界線についての話をしよう。

通常、その二つの世界を繋ぐ道は普段から閉ざされている。

いつからそうだったのかは誰にも分からない。遥か昔からそうだったのだ。そして、魔界にいる悪魔の力で、人間界へと赴く事は基本的に不可能である。

突然変異に近い境界線の異変や、人間界にいる人間からの働き掛けによって、初めて悪魔が人間界へと現れる訳だが……そうでない場合、実体を持った悪魔が通れる程の道など、余程の事がない限り開かれはしない。

その為、人間界に侵入してくる悪魔は、前述したように大抵がガス状の輩である。

しかし、それらの悪魔にしても、そのままの状態ではそう長く人

間界に居続ける事は出来ない。空気の質が魔界と人間界ではまるで違うからだ。

その為、彼等はまず人間界で活動する為に、様々な物質を依代（よりしろ）として、肉体の代わりとする事が一般的だ。

無論の事、物であれば何でもいいという訳ではない。悪魔によってある程度の好みはあるが――大抵が、『人の気持ちに多く触れてきた物質』である。故に、精密な機械類などには憑依できない。

古めいた人形（髪が勝手に伸びる日本人形の話などは、貴方も聞いた事があるだろう）、古典的な処刑道具、日本では『九十九神（つくもがみ）』と言った方が分かりやすいだろうか。

中には、死体に取り憑く悪魔もいる。事実、セトも数年前にそういった悪魔が数多く出現した事件に関わっていた。

ここで一旦、話を戻そう。

「その悪魔が用いた殺害手段が『血を吸い取る』というものである以上、実体を持ち、且つある程度高位の悪魔である事は間違いない。だとしたら今の状況でも、そう簡単にこっちの世界に出てこれる筈がないんだが……」

「ちょっと待てヨ。肉体のある悪魔だったら、ここに来る途中にも結構見かけたぜ？」

「ああ……。それについては、俺はとっくに理由を掴んでるからまぁいいとして……この場合重要なのは、その事件が起きた時、まだ東京は『成り切ってなかった』って事だ」

「……？」

「早い話が、その頃はまだ悪魔が出にくい状況だったって事だよ。だけど……」

唐突に、セトはカイドーが持っているＣＯＭＰを指差した。

「『それ』を使ったとなりゃあ、話は別だ」

「……これって……ＣＯＭＰか？」

翔門会がいつからＣＯＭＰを開発していたのかを、セトは詳しく把握していないが、件の『連続吸血事件』が勃発したのは僅か半年程前の事だ。改造ＣＯＭＰの有無はともかく、悪魔を召喚する術自体は知っていても不思議ではない。

「話はよく分からねぇが、つまり……」

カイドーは顎に手をかけて考え込む。

「兄貴を殺した仇を、こっちに喚び出した奴がいるって事かヨ……」

「そう考えていいんじゃねぇか？」

「クソッタレが……！」

カイドーは歯軋りした。

自分が制裁を加えるべき相手は、セトが言う悪魔だけではない。

それを喚び出した人間も標的なのである。

未だ得体の知れない相手だが――しかし、自分が確実にその連中と距離を詰められている事を確信し、カイドーは心の内に点っている憎しみの炎を更に激しく燃え上がらせた。

自然と拳を握り込み、歯軋りを鳴らす。

そんな彼の様子を、セトは少し心配そうな面持ちで眺めていた。

１ｓｔ　Ｄａｙ『武芸館前のバトル（１）』

「んっ……？」

九段下の武芸館近くに通りかかると、淳は不意に足を止めた。

「どうしたの、ジュン？　武芸館前に何かあるの？」

ユズの疑問には取り合わずに、淳は耳を澄ませる。すると、どこかから――というよりは、間違いなく武芸館の方角から――聞き覚えのある女性の歌声が聞こえてきた。

「……今、何か……、歌声が聞こえたような？」

アツロウも気付いたようだ。そして次には、ユズもハッとしたような表情になる。

「これって……！　ハルの曲だよ！　行ってみましょう！」

そう言って、ユズが脱兎の如く駆け始めたので、淳とアツロウも慌ててその後に続いた。

そんな中、淳は『同類』であるハルの気配をこの先に確かに感じながらも――しかし、同時にその周辺で蠢く人外なる者達の気配も、確かに感じていた。

◆　◆

「アヤさん……」

武芸館前の階段に佇みながら、ハルはそう呟く。

その表情はどこか悲しげで、遠い過去の思い出に浸っているようにも見えた。

――『アヤ』。

それは、ボーカリストである自分の良き師匠であり、生き方を教えてくれた恩人であり――そして、自分が居場所を奪ってしまった人の名前だった。

尊敬してやまなかったその女性の姿は、もう自分の隣にはない。

いや、今だけではない。恐らく、これからも……。

と。

彼女がそこまで考えたところで。

「キャーッ！　ハルさんっ……！」

どこからか、悲鳴混じりに自分の名前を叫ぶ声が聞こえたのは。

「んっ……？」

そんな慌てた声とは明らかに逆ベクトルの感情を抱きながら、ハルは後ろを振り返る。

そして、気付いた。

いつの間にか、自分の周りを大勢の『悪魔』が取り囲んでいたのだ。

「……！」

その数の多さに、思わず後ずさってしまう。

それを見て、先程叫んだ少女――谷川柚子は、再び顔を青ざめて叫んだ。

「危ないっ！　逃げて！」

そんな彼女の隣には、先程ハルが見かけた、二人の少年も姿もある。一人は、確か木原篤郎という白いニット帽を被った少年。そしてもう一人は……。

「アンタは……」

勿論、そんなハルの呟きなど、彼等とは距離があり過ぎて聞こえる筈がないのだが――しかし、まるで何か特殊な波長でも感じ取ったかのように、その少年、有里淳はこちらに目を向ける。

「ハルさん！　そこは危ないんで、早くこっちに来て下さい！」

アツロウという少年も、そう焦ったよう様子でこちらに呼び掛けるが、

「何言ってんのよ！　そんな事したら危ないじゃない！」

「でも、しょうがねえだろ！　あんなに囲まれてるんだぞ！」

そう言い争う二人を他所に、しかしハルは至って落ち着いた様子だった。

「あー……しまった。失敗したかな、はは……」

いや、それは落ち着いてるというよりも――何かを諦めたかのような表情である。

大勢の悪魔に囲まれているという、この危機的状況の中、それでも動揺を見せないこちらの様子を、アツロウは疑問に思ったようだ。

「……？　あの人、全然焦ってないけど、大丈夫なのか？」

「馬鹿、そんな事言ってないで、早く助けないと！」

「お、おうっ！」

「ハルさん！　危ないから逃げて！　私達が、そいつらを何とかします！」

勇敢にも、そう言い放つユズに対して、ハルは疑問を抱いた。何

の根拠や自信も無しに、あのひ弱そうな少女がそんな事を言うとは思えない。

という事は、彼女もまた――自分と同じく、悪魔に対抗出来る手段を持ち合わせているという事だろうか？

――『悪魔』。

単なる一般人ならばおよそ知る筈のないその存在を――しかし、彼女は知っていた。

そして、それに抗う為の術も。

「いや、そんなのいいよ。自分の身は自分で守るさ……」

ハルは傍らに置いてある一つの音楽機器、通商『シーケンサー』を手に取ると、赤い電源ボタンを押す。

実はこのシーケンサーにも、淳達が持つ改造ＣＯＭＰと同じく、悪魔を喚び出す為の機能が施されているのだ。

が、しかし……。

「ん……？」

先程から、何度も電源ボタンを押しているのだが――しかし、シーケンサーは一向に起動する気配を見せない。

どうやら、電池の残量が底をついてるようだ。

「電池切れ……か。はは……」

あまりのタイミングの良さに、ハルとしては笑うしかない。

「あー、これは……。やばい、かもよ……。アヤさん……」

「ハルさん！　早くっ！」

そんなユズの叫び声も、ハルにとってはどこか夢のように遠く感じられた。

◆

◆

こちらが何度呼び掛けても一向に慌てるそぶりを見せないハルに、三人は戸惑いを隠せない。

否――厳密には、有里淳だけがそんな彼女の態度に、少なからず共感を抱いていた。

当然である。

二人は――『同類』なのだから。

「あの人、どうして逃げないんだよ！？」

「あれだけ大勢の悪魔に囲まれてちゃ、それも仕方ないとは思うが……」

しかし、それだけではないだろう。

――重なる。

今、淳の視線の先にいる春沢芳野と、先程再会を果たした高城圭介の姿が、重なる。

まるで――全てを諦めた、自殺志願者のような雰囲気を、彼女は纏っていた。

もっとも、そんなハルの心情に気付いた淳が示した反応といえば、僅かに首を傾げただけだったのだが。

「……こっちから助けに行くしかないな」

「うん、早く行こう！」

しかし、状況は思わしくない。

こちらとハルの距離が大分離れているのに対し、悪魔達は徐々に彼女との距離を縮めつつある。

その時、その悪魔達の内、一体が何かを呟いた。

「見ツケタゾ……」

「「……！？」」

「オマエノ、チカラ、ワガ主に、サシダスノダ……」

「アタシの……力……？」

「……？　何言ってんだ、アイツ……？」

ハルと淳は、意味が分からないという風に怪訝な表情をする。

どうやら、この悪魔達はハルが持つ、『何らかの力』を求めて彼女を襲ったらしい。

しかし、淳が知らないというのはともかく――肝心のハルにしても、その『力』について、全く身に覚えがないようだ。

瞬間、何の前触れもなしに、悪魔達が一斉にハルへと接近する。

「やべっ……！」

「ハルさんっ！」

それを見て、慌てて淳達も行動を開始した。

ハルへと群がる悪魔達を見て、淳は一瞬、『氷の乱舞』で一気に蹴散らしたい衝動に刈られたが、すぐにその考えを放棄した。この魔法は、有効範囲こそ広いものの、正確な狙いを定めにくいからだ。

そういう意味では、悪魔の向こう側にハルがいるというこの状況で、『氷の乱舞』を使用するのは懸命な判断とはいえない。かとい

って、体術だけで仕留めるには数が多過ぎる。最終的には、魔法に頼らざるを得ないだろう。

とすると――やはり、まずすべき事は、ハルの安全を確保する事だ。

「……どこに行っても……悪魔、悪魔……。アタシの事なんて、放っておいてくれりゃあいいのに……」

そう自虐的に呟くハルの元へと走り出した淳の背後では、アツロウとユズが慌ててＣＯＭＰから仲魔を喚び出しているが、淳としてはそこまで悠長としてはいられなかった。

そんな彼に、一体の悪魔が向かって来た。一見、それは青い鳥のように見えるが、しかしだからといってこの鳥を『幸運の青い鳥』と結び付ける人間はいないだろう。

何せ、本来頭があるべき場所には、不気味な髑髏（どくろ）があるのだ。闇の様に深い眼窩には目がなく、正に悪魔さながらといった外見だった。

その髑髏が、鋭い牙で淳を噛み切ろうと大口を開けたのを見て、淳はその横っ面を裏拳で殴る。走り過ぎる淳の顔の横で、その悪魔（イツマデ）の口がカツンと鳴るのが聞こえた。

次いで、近付いてきた他の悪魔にも蹴りを入れる。

この攻防を見て、連中がこちらへと標的を変えてくれればとも思ったが、無駄だった。相変わらず、悪魔達はハルを第一として行動してる。

意識を極限まで集中させれば、もしかしたら『氷の乱舞』を制御できるかもしれないが、ハルと悪魔達の距離は既に相当な近さだ。どれだけ精密なコントロールをしても彼女に当たらないとは言い切れない。

かと言って、このままでは間に合わないのも事実だった。

淳は右手に魔力を集中させると、その手の平を地面に叩き付ける。同時に、先程まで発動を躊躇っていた『氷の乱舞』を放った。

手の平と武芸館前の地面との間で発生した魔力の奔流が行き場を失い、淳の体を上空へと打ち上げた。華麗に舞い上がる、とはお世辞にも言えない。

まるで、自転車のブレーキを掛け間違えて前方へと投げだされているかのようだった。細かい位置調整は不可能だが、せめて自分の体がハルの盾になってくれればいいと思った。

「ハルさん！」

何とか、淳はハルの目前へと降下（落下）する事ができた。

それで僅かに気が緩んでしまったのか。

例え自分がハルに近付こうとも、相手との勢力差が依然としてあるままだという事実を、淳はすっかり失念していた。

「……くっ！？」

いつの間にかハルとの距離を縮めていたワイラが、その鋭い爪を振りかぶっていた。

「しまっ……！」

「きゃああっ！　ハルさんっっ！」

その時、淳は近くの悪魔を『氷の乱舞』で蹴散らしているところだった。

どんな抵抗をしようとも、ハルの細く柔らかい肢体ではワイラの爪を防ぐことなど出来はしない。

一瞬、淳はハルの体から生温かい鮮血が飛び散るのを覚悟したが、ここで予想外な事が起きた。

「ってえな！　クソ悪魔っ！　……？」

なんと――（淳が見た限りでは）一般人である筈の彼女が、悪魔の攻撃を受けても、先程のように悪態をつくことが出来たのだ。

「あ……れ……？　……アタシ……死んでない……」

これは……？

瞬間、淳は悟る。

これと同じ状況を、彼は以前に経験していた。

淳達が改造ＣＯＭＰに搭載されている機能の内の一つ、『ハーモ

ナイザー』について知ったのは、昨日の事である。

簡単に言うと、これは敵悪魔と自分との波長を合わせて、受ける攻撃を減らしたり、逆にこちらが与えるダメージを増やしたり出来る機能だ。

恐らくだが――この『ハーモナイザー』はＣＯＭＰの持ち主である自分達だけでなく、一定の範囲内にいれば、その有効範囲内にいる人間全員に働くのだろう。

しかし――当然ではあるのだが、いくら防御力を高めようとも、攻撃を受けた以上は全くダメージがないという事はありえない。

ワイラの爪が侵したハルの腕部分には、細長く赤い痣が出来ていた。

が、あの程度なら、まだ簡単な回復魔法だけで何とか出来る。重要なのは、これ以上彼女に深手を負わせない事だ。

淳は、ハルを傷付けたワイラを、怒りに任せて蹴り飛ばす。『英霊の加護』によって強化されたその攻撃を受けたワイラは、さながらピンボールのように吹っ飛んだ。

そして、左手でハルの腕を引き寄せると、そのまま彼女の腰に手を回して、自分との距離をゼロにする。

「え……！？　ちょ、ちょっと……！」

淳の突然の行動に、ハルは年甲斐もなく慌ててしまうが、勿論、彼はやましい気持ちでそのような事をしたのではない。

淳は三度、右手に魔力を集中させる。今回の戦闘では間違いなく最大であろう魔力が、そこに集まっていた。

「『氷の乱舞』！」

『氷の乱舞』は、前述したように細かいコントロールは難しいものの、しかし自分に当たるような事は流石にない。彼がハルを抱き寄せたのはその為だ。

尋常ではない冷風と氷塊が二人を中心に四散し、辺りを囲んでいた悪魔達を蹴散らす。氷結属性に耐性のあるビルヴィスだけが、何とかその場に留まったが、どうという事はない。

数さえ少なければ、あのウンディゴを退けた淳にとって、最早ビルヴィスなど敵ではなかった。

少し離れた場所では、アツロウが使役するジャンバヴァンが『アギ』で数体のワイラを焼き払い、ユズの側にいるキジムナーが『ジオ』によって敵悪魔達を感電させていた。

こちらも、決して楽になった訳ではない。一度はあれだけ倒したのに、まだ敵悪魔の数はこちらより多かった。

その余りの数に、さしもの淳も呆れてしまう。

「ハルさん、凄い人気ですね」

言いながら、ここでようやく淳は自分のＣＯＭＰから霊鳥・モー・ショボーを召喚する。

「こんな連中に名を売った覚えはないよ」

「でも、さっきから貴女ばかりを狙ってますよ」

「いい迷惑だ」

「D―VAのボーカルも大変ですね、こんな奴らに付き纏われて。相手は選んだ方がいいですよ？」

「ふざけてないで……」

何処からか湧いてきた悪魔が急接近してきたのを見て、ハルは黙り込んだ。

イヅマデ、ビルヴィス、ワイラ、他にも、今まで見かけた悪魔がちらほらといるし、何やら不気味な仮面を付けた原住民のような悪魔（オグン）もいる。

「モー・ショボー、援護を頼む！」

「はいっ！」

モー・ショボーと淳のコンビネーションは、先程顔を合わせたばかりとは思えない程のものだった。

せわしなく向かって来た敵悪魔達を、《2人》は近付いて来た順に対処する。

既に、淳は悪魔との戦いに完全な適性を目覚めさせていた。

その手に持った槍を真っすぐ突き出すというだけの、オグンの単調な攻撃をかわすと、鳩尾に強烈なボディブローを放つ。

「ジュン！　そいつの弱点は氷結属性だ！」

離れた場所からそう叫ぶアツロウの声を聞いて、淳はモー・ショボーと目配せすると、そのオグンから距離をとる。

二人の手から放たれた氷弾が、そのオグンを含む数体の敵悪魔の頭部に命中した。

だが、仲間の頭部が微塵に砕け散っても、他の悪魔はその屍を乗り越えて二人に迫ってくる。

そんな敵悪魔の態度に、淳は眉間に皺を寄せる。いくら悪魔といえども、死に対する恐怖は皆無ではない。

事実、ウンディゴ戦の時の悪魔達は、リーダー格であるウンディゴが淳に倒されたと知ると、即座にその場から去って行った。

しかし今、淳の背後にいるハルを狙うこの悪魔達は違う。

まるで、命をとしてでも成し遂げなければならない事があるかのように、無我夢中でハルへと迫ってきた。

「アンタ達は……」

淳がビルヴィスの細長い頭部を器用に固定して、そのまま首をへし折る中、ハルが声をかけた。

「何か言いましたか!?」

戦闘による喧騒と魔法の爆発音で、よく聞こえない。

「アンタ達は……アタシの事なんて放っておいて、逃げた方がいいよ」

思わず、淳は振り向いた。

そこには、沈痛な面持ちで俯くハルの姿がある。

「……必ず助けます」

淳は言った。

力強く、ハッキリと。

ハルは、そんな淳に一瞬、酷く戸惑った様子を見せると、

「……あぁ、ありがとう。まぁ、ムリしないでいいから」

と言った。

余りにも投げやりなその態度に、淳は一瞬ムッとしてしまうが、しかしそれを指摘する時間はない。

淳は、二体目のビルヴィスの手を捩ると、その手から連中の武器であるフォークを奪い取る。

悪魔を倒すと、何故かその悪魔が持っていた武器まで消えてしまうのだが、こうすれば問題ない。

丸腰になったビルヴィスを後ろ回し蹴りで吹き飛ばすと、その回転の勢いを利用して、横から回り込んできたワイラをフォークで殴りつける。

アツロウとユズも、激しい戦闘を繰り広げていた。

しかし、淳のように接近戦を挑むような事はない。

それは彼のように格闘術に長けた人間だけが出来るのであって、そのような技量を持ち合わせていない二人にしてみれば、魔法により中距離攻撃や、仲魔による援護が主な戦闘手段となる。

キジムナーの『ジオ』によって体を麻痺させた相手を、ユズが『ザン』で切り刻む。

アツロウは『ブフ』でオグンを仕留め、側にいるジャンバヴァンが『アギ』によって、ワイラを屠るという、相手の弱点を的確についた戦いを展開していた。

残る厄介な敵は、空を飛ぶイツマデである。

上から距離をとって魔法を放たれる以上、翼など生えている訳がない淳としては厄介極まりない敵といえたが――しかし、仲魔であるモー・ショボーには、その羽があった。

淳は上空に向けてアギを放つ。既にＣＯＭＰのアナライズ画面で、イツマデが火炎属性に耐性を持っている事は知っていたが、『耐性がある』という事は、『少なからず効く』という事である。

流石に相手も、正面でその魔法を受け止めるという愚は犯さなかった。

それこそが、淳の狙いだった。

彼はこの火炎魔法を、殲滅ではなく『誘導』目的で使用していた。

イツマデの体より、僅かに逸れた左右どちらかの方向に『アギ』を放つ。

当然、意識的であろうとそうでなかろうと、イツマデはその方向とは逆の方へと回避した。

そこに合わせて、モー・ショボーが『ブフ』で狙い撃ちにする。

その連携も見事ではあったが――それ以上に、目を見張るべきは淳の魔法に対する『制御力』にあった。

先の戦法は、相手が取る行動を数手先まで読まなければ到底実行する事は出来ない。

普段、魔法など使い慣れている筈のない『人間』としては、この

コントロールは正しく神がかり的なセンスと言えた。

それによって誘導された、最後のイツマデがモー・ショボーの氷弾によって死滅された時、ようやく武芸館前に静寂が戻った。

1st Day『板挟み』

「ハルさん、無事で本当に良かった！」

そう嬉しそうにユズが声をかけている、ハルの頭上に浮かんでいる余命を、淳はチラッと盗み見た。先程までの『0』ではなく、『2』になっている。

一瞬、どうして自分達と同じ余命なのかと疑問に思ったが、今はハルを救えた事が素直に嬉しかったので、考えるのをやめた。

「……どうも、ありがとう。アンタたちも、悪魔が喚べるんだね」

それなのに、ハルは相変わらずの態度である。

「え……ええ……。でも私たちより、ハルさんの方が驚きですよ！あんなに悪魔に囲まれても、悲鳴の一つも上げないなんて……」

少々戸惑い気味なユズの指摘を受けて、ハルは小さく微笑む。

「シーケンサーが使えれば一人でも大丈夫だったんだけど、生憎、電池が切れちゃっててさ」

「『シーケンサーが使えれば』……？　どういう意味ですか？」

淳は、ハルが持っている音楽機器へと視線を移した。

彼女が言った事から推測するに、これがあれば先程の状況でも何

とか出来たというのだ。

考えられるとすれば……。

「アンタ達も悪魔使いだろ？　アタシとは方法が違うみたいだけど。アタシはシーケンサーに合わせて歌うと、悪魔を喚び出せるんだ」

「歌う事で悪魔を喚び出す……」

それは……どうなのだろう？　悪魔を喚び出す度に一々歌っていたのでは、随分疲れるだろうし、何よりその隙は敵にとって絶好の狙い目となってしまうのでは、と淳は思った。

が、しかし、ユズの感心事は他にあるようだ。

「えっ……！？　ハルさんも悪魔を喚べるの！？」

と、ユズ。隣にいるアツロウは感心した様子で、

「それでさっき、シーケンサーを取り出してたのか……」

と呟いた。

その時、淳の脳内で、ある推理が成り立った。

「もしかして、そのシーケンサーも、ナオヤが作ったのか……？」

既存の機械類を改造して、そこに悪魔召喚プログラムを組み込むなど、ナオヤぐらいにしか出来ないだろう。そう考えるのが普通だ。

しかし、ハルが返した答えは、

「ナオヤ……？　誰、ソレ？」

であった。

「……」

違うのかよ。

「これはアタシの知り合いから借りてる。もう半年程前からね……」

「半年……」

現在、ナオヤが自分達に改造ＣＯＭＰを渡すより（少なくとも）半年も以前に、そのシーケンサーには悪魔召喚プログラムが搭載されていたという訳だ。

いや、待てよ……。

「その知り合いって誰ですか？」

淳が聞いた。

もしかしたら、ナオヤが偽名を名乗って彼女に手渡したのかもしれないと思ったのだ。

「ああ、Ｄ―ＶＡ時代の先輩さ。『アヤさん』っていう人からね……」

「アヤ……」

知らない名前だった……が、ナオヤではないだろう。偽名であるかどうか以前に、以前聞いたユズの話によると、Ｄ―ＶＡのメンバーは女だけだった筈だ。

「……」

まさかアイツに女装趣味があったとも思えないし……。

嫌だ……。

それだけはマジで嫌だ……。

（と、なると……ナオヤ以外に、悪魔召喚プログラムを開発した人間がいた……？）

それこそ――考え難い事だが。

「まあ、今は電池がないから、ちょっと動かないけど……。でもやっぱり、持ってると落ち着くよ……」

「落ち着く……ですか」

それは、きっと自分のヘッドホンのように、何かしらの大事な思い出が、そのシーケンサーにも納められているという事だろう。

「……何となく分かります」

「あはは、話せるね、キミ」

ここで、ハルが初めて本心からだと思われる笑顔を見せた。快活で、純粋な笑顔を。

そんな二人の横で、アツロウが鞄から、先程、秋葉原で買った手動式充電器を取り出している。

「だけど、電池切れじゃ大変でしょ！？　すぐに電池を替えた方がいいっスよ！　ちょっと端子を見せて下さい」

「……？　ああ……どうぞ？」

ハルは怪訝な表情を見せながらも、シーケンサーをアツロウに手渡した。

最初、アツロウはそれを注意深く観察していたが、すぐにその表情を曇らせる。

「……。クソ……やっぱりムリか」

「どうした？」

横合いから、淳もそのシーケンサーを覗いた。

「……手動式の充電器が使えるかと思ったんだけど、このシーケンサーとはタイプが合わないらしい」

つかの間、四人の間に陰鬱な空気が立ち込めるが、それを最初に取り払ったのはハルだった。

「……ありがと、気を遣ってくれたんだね。ま、動かなくてもさ？これは精神安定剤代わりになるから……」

「……？　精神安定剤代わり……？」

アツロウは首を傾げる。

「あはは！　深く考えんなって！」

「あ、ええ……」

空気を入れ換えようと、次には淳が口を開いた。

「……にしても、半年も前から悪魔を喚んでたんですか？」

淳にしてみれば、ハルは初めて出会う『自分達以外の悪魔使い』だった。

「いや、初めて喚んだのは一か月程前だよ」

「あ、そうなんですか。まあ、俺達は昨日からですから、それでも先輩には変わりないですけどね」

淳の発言に、ハルは目をパチクリさせる。

「昨日から？　凄いね、たった二日であそこまでとは……」

「何事も慣れですよ」

しかし――自分で言っといて何だが、既に悪魔との戦いを『当然』

と捉え、それに順応してきている自分を、淳は心底不思議に、心底不気味に思った。

まるで――このような事は、慣れているとでも言うように。

それは昨日、初めて悪魔と出会った時にも感じた事だが……特に、あの雪男――ウェンディゴを倒してからは、更に顕著になっている様に感じる。

「ねぇ、君」

考え込んでる淳に対して、不意にハルが声をかけた。

「ちょっとだけいいかな？」

「え？」

ハルは、今いる場所より少し離れた場所を指し示した。どういう訳か、二人だけで話をしたいらしい。

そして、ハルは淳と一緒に、アツロウとユズに声が聞こえない程度に、自分達が離れた場所に移動した事を確認すると、淳に笑顔を向ける。

「改めて、だけど――さっきはありがとね。助けてくれてさ」

「いや、別に礼を言われる程じゃ……というか、それだったらアイツらにも言ってあげて下さい」

謙遜する淳に対して、ハルは「アハハッ」と笑う。

「でも、アタシの目の前に飛び込んできた時のアンタはカッコよかったよ。しかも、その後は抱き寄せられたし……。あんなに男と体を密着させたのは初めてだ」

「……」

恥ずかしい記憶を引き出されて、淳は今更ながら赤面してしまう。そんな彼の態度を見て、ハルはクスクスとおかしそうに笑った。

「……ゴメンゴメン。ただ、こういう風に言えば、アンタがそんな感じで困った態度を見せるって分かってたからさ」

そう言って、淳の顔を見つめる。

「……」

それは、まるで――全てを、見透かされているような。

否、『ような』では済まないだろう――彼女は正しく、有里淳の心の内を見透かしているのだ。

何ら難しい事ではない。

『同類』なのだから。

しかし、淳が見た限り、彼女は自分と同じレールにいながら、自分よりも少し先に立っているように見える。

「ちょっと、ごめんね」

そう言うと、ハルはその白い指で、まるで陶芸でも扱うかのように淳の顔を優しく掴むと、そのまま彼の顔を、更に近くから覗き込んだ。

突然、彼女の顔が間近に迫ってきて、淳は一瞬身構えたが、不思議と、抵抗をしようとは思わなかった。

離れた場所にいるユズ達から見たら、もしかしたら二人がキスしてるようにも見えるかもしれない。

「……」

そんな状況が、数秒、或いは数時間程続いたような気がして――、

不意に、ハルが淳の顔から手を離した。

「……うん、やっぱりそうだ。君、危ない香りがする」

「危ない……？」

「アンタだって感じてるんだろう？　アタシと初めて出会った時からさ――アタシ達は、『一緒』だって。似てるんじゃなくて、一緒なのさ。……フフッ、嫌いじゃないよ。君みたいなタイプ……」

そう呟くハルの声は、近くにいる淳でもやっと聞こえる程度のものだった。当然、アツロウやユズには聞こえる筈がない。

「今、分かったよ」

再び、ハルが口を開く。

「あの男が言ってた『死んだ目をしたガキ』ってのが誰なのか……」

「……あの男って……？」

一体、誰のことなのか。

もしかしたら、何処かで会っているような気もするが……？

やがて、話が一段落すると、二人はアツロウとユズの所へ戻って行った。

「それじゃ、今日はありがとう。アタシはもう行くから。また会えるといいね」

淳と話せた事で満足したのか、そう言うと、ハルは足早にその場を去ってしまった。

「まさか、あの人も悪魔を喚べるとはな……」

と、アツロウ。

「やっぱり悪魔は、俺達が知るより前から、ずっと東京にいたんだ」

「……そうなるね。翔門会の人達なんて、ずっと前から悪魔を使ってた感じだし……て、あ！　そういえば、ジュン！　ハルの余命は!?　前見たとき『0』だったんでしょ？」

「ああ、それなら大丈夫だ。ちゃんと『2』に増えてる」

淳の返答に、ユズは顔に両手を当てて喜んだ。尊敬するボーカリストの命を救えたとなれば、それも当然だろう。

「きゃ～！　やった、やったのね！　私達、ハルの運命を救ったんだ！」

ユズが手放しでそう喜ぶ一方で、淳は別の事に気付いていた。

「……という事は、だ。変えられる余命は、自分達のだけじゃないって事になる」

淳の推測を、アツロウが悟る。

「そっかー！　他人の余命も変える事が出来るんだ！　これって凄くね？」

「スゴイに決まってるじゃない！　ね、ジュン？」

「当然。まぁ、『2』っていうのがちょっと気になるけどな……」

他の人々の余命が『6』であるのが大半であるのに対し、

――何故、彼女の余命が『2』しかないのか。

その理由を、この時の三人が知るべくもない。

「……確かにな。でも、『余命は変えられる』。これだけは事実だ。この調子で、六日っていう山手線内の人々の余命も、増やしちまおうぜ！」

そう言った直後、アツロウは「……それにしてもさ」と別の話題をふる。

「ハルはＣＯＭＰじゃなくて、楽器で悪魔を喚び出すんだろ？」

「そう言ってたな。まぁ、厳密には楽器で喚び出すんじゃなくて、楽器に合わせて歌う事で召喚するみたいだけど」

「ああ、そうだっけか……。まぁ、どっちにしてもだ。それって一体、どういう仕組みなんだろうな……」

「お前はどう思ってるんだ？」

「う～ん……。ＣＯＭＰとシーケンサーには、何かしら悪魔召喚の為に必要な共通点があるのかも、ぐらいしか……」

突然、難しい話題へとシフトしかけたのを見て、ユズはあからさまに顔をしかめた。

「また、すぐに考えこむっ！　そんな事、今はいいじゃん！　私は、ハルが助かったんだから、大満足だよ！」

だがここで、不意にユズは顔を曇らせた。

「……まぁ、助かっても、それほど嬉しそうじゃなかったのがちょっと気になるけどさ……。ロック歌手特有の、冷めたポーズならいいんだけど……」

「それにしちゃあ、ちょっと様子がおかしい気がしたけどな……」

かと言って、淳にしてもその理由は分からないのだが。

同類なのに。

だからこそ――不安ではあるけれど。

と、ここで、突然ユズが不意打ちに近い質問をしてきた。

「ところで、ジュン」

「ん？」

「ハルと何してたの……？」

「え？　あ、い、いや、ええと……べ、べべべべ、別にぃ？」

「……」

「……」

……しまった。必要以上に慌ててしまった。

特に、何か後ろめたい話をしていた訳でもないのに……。

そんな淳の返事を聞いて、何故かユズは

「ふ～ん……内緒なんだ？　あ～、そう……」

と、不機嫌そうな顔をする。

淳はどうして、ハルと二人きりで話しただけでそんな顔をされなければならないのだろう？　と、少し理不尽に思った。

◆　◆

――『武芸館前のバトルＰＡＲＴ１』終了時ステータス

●クラックしたスキル
＞『怒りの一撃』

●所持マッカ：３６４２

●有里淳（？？）

・コマンドスキル
＞？アギ
　？氷の乱舞
　？怒りの一撃
・自動効果スキル
＞？英霊の加護
　？――
　？――
・先制発動スキル

＞『――』
●木原篤郎（人間）
・コマンドスキル
＞？ジオ
　？ブフ
　？――
・自動効果スキル
＞？一分の活水
　？同族の心得・防
　？――
・先制発動スキル
＞『――』

●谷川柚子（人間）
・コマンドスキル
＞？ザン
　？ディア
　？アムリタ
・自動効果スキル
＞？耐氷結
　？――
　？――
・先制発動スキル
＞『――』

●仲魔
＞・ジャンバヴァン
　・キジムナー

・モー・ショボー

――Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！

１ｓｔ　Ｄａｙ『不審な行動』

――品川、翔門会施設前。

「ん？　あれって……」

淳達が品川駅から少し離れた住宅街を歩いていると、市役所にも似た施設の前で佇む神谷詠司――通称ジン――を見付けた。

ジンが見詰める施設に、淳も視線を向ける。すると、ガラス張りのドアに、見知ったマークが貼られている事に気付いた。

（あれは……確か、翔門会のシンボルだよな）

という事は、目の前にある施設は翔門会に関係するものだと見て間違いないだろう。

「ジンさん」

彼が余りに真剣な様子で翔門会の施設を眺めている為、淳はなるべく気さくな態度を心がけながら声をかけたのだが……。

「……！？」

淳達の存在に全く気付いていなかったのか、ジンは大袈裟と言ってもいい程に驚いた顔をする。

「……あ、ああ……。驚かすなよ、君達か……」

「ジンさん、こんな所で何してるんですか？」

とユズが尋ねるが、ジンは肩をすくめるだけだった。

「いや、別に大した意味はない。何となく散歩してただけさ」

二人が会話してる間に、淳はジンの余命を確認する。そして、昼間会った時と変わらず『6』であった為、とりあえずは安心した。

「す、すまないが少し忙しいんだ。俺はこれで失礼するよ」

ジンは余り長い間ここに留まりたくないかのように、自分達とは雑談さえしないまま、足早に三人の前から去って行った。

「散歩してたのに忙しいって……メチャクチャ矛盾してんじゃん」

アツロウは、ジンらしくもない不審な態度に疑問を持ったようだ。

「……意味のない顔じゃなかったよね。翔門会の施設なんか見つめて、ジンさん、どうしたんだろう……？」

ユズがそう尋ねてくるが、勿論その理由が淳にも分かる筈がない。

「……まぁ、あの人に限って、入会希望者って訳じゃないのは確かだろうけど……」

片や怪しい宗教団体、片や表参道にある一軒のバーのマスター。

うーん……。

とてもではないが、接点など見当たらないが……？

第一、翔門会の施設を見つめていた時の、ジンの表情も気になる。眉間に皺を寄せ、口を真一文字に結びながら施設を睨んでいるあの姿はまるで、親の仇でも見ているかのような様子だった。

『親』。

一人の肉親。

『母親』と『父親』、二人いれば『両親』だ。

淳の場合は、母親だけだが。

「……」

今頃、自分の母親は何を思って、何をしているのだろう？

流石に――心配だった。

淳と血が繋がった人間は、この世では現在三人のみ。

母と祖母、伯母のみである（つーか、男少ないな……）。

普段は、何かと口うるさいし、つまらない事で口論にもなったりするが、しかし――。

淳は知っていた。

そんな母親が、実は何よりも、自分を大事にしてくれているという事を。

うっとおしいまでの気遣いも、数々の口煩い説教も、全てが愛情の裏返しだという事を。

きっと――今頃は、未だ帰らず、且つ連絡さえ取れない自分を、相当心配してるに違いない。

（ああ……畜生）

「ちょっと会いたくなっちゃったじゃねぇかよ……」

「？ジュン、何か言った？」

「いや、何でもない。……さ！　俺達もそろそろ行こうぜ」

つかの間、哀愁の海に沈みかけた自分の心を必死で鼓舞しながら、ジュンはさっさと歩き出す。

そんな彼の後ろを、アツロウとユズは若干戸惑い気味についていった。

◆

◆

――水道橋、ドーム球場前。

「ん……？」

セトがブラブラとドーム前を歩いていると、彼はある気配を感じ取って、不意に立ち止まった。

が、知らない内に多数の悪魔に囲まれていたとか、そういう事ではなく――いや、それと大分近いかもしれない――この辺り一帯に漂っている、微かな『残り香』を嗅ぎ取ったのだ。

「こりゃ……血の匂いだな……」

呟き、目を閉じる。

セトは意識（というよりは嗅覚）を集中させると、その匂いの根源の正確な位置を把握した。

そして、殆ど予備動作なしにその場で跳躍する。まるで子供が水溜まりを飛び越えるかのような感覚で、数十メートル近く先の通路へ着地すると、そこで彼は何者かの『血痕』を見付けた。

『血痕』。

血の痕。

悪魔のものではない――人間界の法則は悪魔やシャドウといった存在には適応されないので、自身の肉体を持つ悪魔が出血した場合、生死に関わらず、悪魔が死亡した際と同様に、その血痕もまた何事

もなかったかのように消え失せてしまうのだ。

悪魔が人類の起源よりも遥か昔から存在しているにも関わらず、彼等の存在が今の人類に広く知れ渡っていないのには、そういった理由がある。

「……となると、人間か……。でも、よくよく見ると、そこかしこに激しい戦闘の跡があるな……」

他にも気になる事があった。心なしか、この辺りの気温はやけに低いような気がする。既に時刻は１８時を過ぎている為という事もあるかもしれないが、それにしたってこの涼しさは八月下旬という時期には似つかわしくない。

セトはその場でしゃがみ込み、その何者かの血液を指で掬った。

若干だが、それにはまだ湿り気が残っている。つまりは、この血液の持ち主がこの場で出血してから、まだそう時間は経ってない。

「……ジュン、か……？」

残念ながら、血液に触れただけではこの場で出血した人物が誰なのかは、正確には分からない。そんな芸当が可能なのは、山岸風花や久慈川りせといった、索敵タイプのペルソナ使いぐらいだろう。

セトが持つ特性――『ワイルド』は、通常は一人につき一体であるペルソナを、複数宿す事が出来るという特殊なものだが、索敵タイプのペルソナだけは決して真似する事が出来ない。

次にセトは、その辺りに残っている筈の『足跡』を探した。通常、

この様なアスファルトの通路では足跡など視認できる筈もないが、彼の超人的視力と、卓越した観察眼がそれを可能にしていた。

その結果、彼は幾つかの足跡を発見する。足跡の人数はおよそ十人前後といったところだ――が、人間の足跡はその内三人分しかない。他は全てこの地球上に存在しない――つまりは悪魔のものである。

今、彼の目にはその足跡の上で活動する、ぼんやりとした影が見えていた。勿論、実際にはそんな影など存在しない。今動いている影は全て、彼のイメージである。

これは『トラッキング』といって、数年前、外国を訪れた際に友人となったインディアン達から教わった技術だ。

彼等は残された足跡を細かく観察するだけで、その人物の年齢、性別、体重、身長などといった、あらゆる情報を読み取る事が出来る。世界的なトラッカーであるトム・ブラウン・ジュニアの名前は、もしかしたら知ってる人もいるだろう。

トム程ではないが、セトにしてもある程度はトラッカーとしての技術を会得していた。

足跡の一つは、大きさとその沈み具合を見ると、恐らくは成人前の少年らしいという事が分かる。これだけで、この場で戦っていた人物が有里淳である事を、セトはほぼ確信した。

そもそも、足跡を見る限り、この人物が相当洗練された動きで悪魔と対峙していた事が分かる。現在の東京内で、これだけの動きをしながら悪魔と戦える未成年の少年となると、その人物はおのずと

限られていた。

「お？　ここで途切れてるな……」

有里淳の足跡は、一際大きい足跡の手前で、プッツリと途切れていた。

否、正確にはそこより少し離れた場所にも彼の足跡があるのだが、その足跡は他のそれと違い平坦で、爪先部分がかすれていない。つまりは歩いていた訳だ。そしてその足跡はこの水道橋から離れた場所へと続いていた。

その両脇には、別の人間の足跡が二つ、同じような足取りで続いている。

「……という事は、この足跡は、戦闘を無事に終えて、そのままお仲間の2人と歩き去った時に出来たって訳か……にしても」

セトは再び、視線を下にある足跡へと移す。

「……この足跡だけ――特に左足の部分が――他よりも明らかに、沈み具合が激しいな。つまりは、何らかの理由があって、有里淳はこの場で跳躍したって事になるんだろうが、しかし……」

セトは次に、その足跡の近くにある、一人分の大きな足跡を観察した。

「……こりゃ、かなりデカイな。今の東京じゃ、まだこれだけの大型悪魔は珍しい……もしかして昨日、青山霊園で見かけた雪男か？」

つまりまとめると、淳達がたまたまここを通りかかった時、そこ

で偶然にもあの雪男が鉢合わせて……で、戦った結果、淳が何とか勝利を収めて、その後にここを去った……てとこか」

ならばその勝因は、一体？

「このジャンプした足跡……これ以降の足跡はここから歩いていくものしかない。つーことは、やっぱりこの足跡を作った後の行動が、勝利の決め手となったのは確実だ。飛び掛かった相手は……まぁ、考えるまでもなくあの雪男だろうな。大方、弱点である大角に対して、至近距離から魔法を放ったってとこだろう。さっきの血痕は、その際反撃を受けた時に出来たって訳だ。……まぁ、ちっとばかし泥臭いけど、今のアイツにしちゃ及第点か」

そこまで独り言のように呟くと、セトは立ち上がってゆっくりと伸びをした。

足跡だけでここまでの推測を立てられる彼の慧眼（けいがん）は、相当なものである。

「……けど、昨日までのアイツだったら、まず間違いなく敵わない相手だったろうな……」

だが、それでも彼は、勝利を収めた。

「流石は『先輩』の息子なだけある……たった一日でここまでの成長を遂げるたぁ、とんでもねぇ才能だぜ。蛙の子は蛙って言うけど、それなら鷹の子も当然、鷹って事か。これなら当分、俺も楽出来そうだ」

セトは本来、『天才』という言葉を使いたがらない――が、しか

し。あの『先輩』に限っては、その言葉が相応しかったのではないか、と思う。

初めて出会ったのは、まだ彼が十五歳――中学三年生の頃だ。

その時、彼は『奇跡』を目にした。

『奇跡』という言葉もまた、彼があまり好まない言葉である――『奇跡』や『希望』といった抽象的であやふやな言葉は何故か力のない、未来のない人間の言い訳にしか聞こえないからだ。

初めてその『先輩』に出会った時、彼は今までの自分が井の中の蛙である事を、どうしようもないまでに、抗いようもない程に思い知らされた。

いや、自分だけではない。恐らくはこの『先輩』を除く全ての人間が井の中の蛙だったのだ。

その衝撃は、天啓にも似ていた。今までの自分は死んでいて、その時にようやくこの世に生まれ落ちる事が出来たのではないかと思った。

それまでの自分は、少しばかり運動と勉強の得意な、単なる若造でしかなかったのだ。

同時にセトは、この世に存在する全ての人間は決して平等などではなく、生まれた時から予め、その『位』が決められているのだという事実を知った。

福沢諭吉はこう言った、『神は人の上に人を作らず』と。

しかし、そもそも人を作るのは神ではなく人間である。そして、人間という種は、建前では平和をうたっていながらも、本心では常に他の存在よりも上に立つ事ばかりを考えているのだ。

――いや。

そのような解釈すら、あの『先輩』には当て嵌まらない。

あの人はそもそも人ではない。『人を超越した何か』だ。

――だからこそ。

だからこそ、その先輩が亡くなったと連絡を受けた時、セトはすぐにはその事が信じられなかった。何故、何故、何故と、何度も自問自答を繰り返した。

現在セトは、ある時は『神（イザナギ）』と呼ばれている。

勿論、世間一般で言う『全知全能の神』は自分などではなく、もっと別、もっと高位の存在なのだが、それですら、あの『先輩』の前では霞んでしまう。

だが、その『先輩』は既にこの世にいない。

しかし、彼はこの世を去る直前、一つの『可能性』をこの世に残した。

それが、『有里淳』という『可能性』である。

あの『先輩』が、ニュクスを倒し、ともすれば現在の『神』にも匹敵しうる程の力を持った『先輩』が、どのような紆余曲折を経て、一人の女性を愛し、そして子を設けたのか、それはセトの知るところではない。

セトが十五歳の頃に月光館学園に転校してきた時、『先輩』とその女性は既に交際してたからだ。

既に三十路を過ぎた今となっても別段、興味など湧きはしない。

セトにとってそれよりも重要なのは、『先輩』が世界を救った英雄である事。そんな『先輩』が参ってしまう程に、その女性が魅力的だったのだろうという事だ。

そして、その二人の魂を受け継ぐ人間が存在しているという事。

『救世主（メサイア）』たる『先輩』の伝説は、表の世界では殆ど知られていない事だが、一度裏の世界に入れば、その『先輩』の名を知らぬ者など皆無である。

だが、そんな『救世主（メサイア）』に息子がいたとなればどうか。

大騒ぎどころではない。

正しく驚天動地だ。

正直に言ってしまえば、セトにしたって有里淳の存在を知ったのはつい最近なのである。恐らくは、淳の母親やその友人である桐条グループがグルになって、その存在を裏の世界から遠ざけていたのだろう。

だが、昨晩の霊園での身のこなしを見る限り、ある程度の体術は習得してるようだ。これもまた、『万が一』の時の為に、彼女達が淳にかけた『保険』という事なのだろう。

現に、淳はつい最近まで一般人であったにも関わらず、この非日常に異様な速さで適応し、自分の身の丈を遥かに上回る悪魔を打ち倒してみせた。

恐るべき――才能。

否――それは最早、『才能』という言葉で片付けてしまってもいいレベルなのか……？

セトは思う。

いつか、誰だったか忘れたが――『人』であるにも関わらず、『神（イザナギ）』でもある自分を、『怪物』と呼ぶ人間がいた。

しかし、自分の事を『怪物』と呼ぶのなら――有里淳は、正しく『魔物』である。

「……この短期間でこの成長っぷり……いや、これは『成長』っつーよりも『開花』に近いな。既に備わっていた資質が徐々に開いてきたっていうか……。潜在能力だけを見れば、俺以上かもな、アイツ……」

そんな風に、セトはそこまで独り言のようにブツブツと呟くと、懐から煙草の箱を取り出す。

「……て、あと一本しかねぇじゃんか……」

この辺りに煙草の自動販売機とかあったかなと考えながら、セトはその最後の一本を口に挟むと、同じく懐からマッチ箱（彼はライターではなく、マッチで煙草の火をつける事に妙なこだわりを持っていた）を取り出し、火を灯す。

彼はヘビースモーカーという訳ではない。煙草は、高校時代に世話になった叔父の影響によるものだ。

そんな感じで、暫くは肺に送られる煙によって頭をスッキリさせていたセトの背後に、ゆっくりと忍び寄る気配があった。

一人の女性である。

それは人の形こそ保っているものの――決して人ではありえない。何せ体中の至る所から大量に出血しており、肌は蒼白で、何より、腹部からは腸がはみ出していた。そんな状態で生きられる人間などいはしない。

そう、悪魔の中には、このように死体にとり憑く者も存在するのだ。

そして、そんな悪魔に侵された屍が、その口でセトの首筋を噛み切ろうとして、大口を開けると――

「……っっ！！」

――そのまま、口を閉じる事はなかった。

「……ん？」

そこでようやく、セトは口に煙草を挟んだまま、後ろを振り返る。

そこには口の半分から上を消し飛ばされた女性の死体があった。

「……あ、メンゴメンゴ」

そんな風に、まるで道で肩をぶつけた相手に謝罪するかのような気軽さで謝るセトの頭上には、いつの間にか一体のペルソナ――主に疾風属性のスキルを得意とする、『スパルナ』の姿があった。

一体、いつ召喚したのだろうか。

セト自身、殆ど無意識の内にペルソナを喚び出したかのように見える。

彼はもう1つの人格であるペルソナを、召喚器を用いないどころか、全くの予備動作なしに、且つ無意識に近い状態で、喚び出したのである。

ペルソナ使いとしては――あまりにも異常。

あまりにも異様。

セトはそんな今の自分でも、例の『先輩』には決して敵わないと確信しているが、しかしその『先輩』が亡き今、この世で最も強いペルソナ使いは、やはり彼なのだ。

彼の目の前では、女性の死体が、疾風魔法によって切り裂かれた

傷口から大量の血を噴水のように噴き出しているところだったが、そんな光景など、最早、今の彼の興味の対象にはなりえない。

セトは、さっさとそれに見切りをつけるように振り返ると、

「……ま、何はともあれ、思ってたよりは楽しくなってきたみたいだな……」

口元には軽薄そうな笑みを浮かべながらそう言うと、セトは東京ドーム前を後にした。

１ｓｔ　Ｄａｙ『青山霊園でのバトル（２）』

――青山霊園。

霊園へと続く道に、五人の若者がバイクを走らせていた。どの若者も軽薄そうな――所謂、チャラチャラした雰囲気を醸し出している。

明らかに改造したとわかる派手な外見のバイクから、わざとたてているとしか思えない喧しいエンジン音を辺りに響かせて、彼等は青山霊園の前でバイクを停めると、そのままそこにたむろし始めた。

彼等はそんな風に、意味もなくバイクを乗り回しては、意味もなく様々な所でたむろし、意味もなくそこで長時間バカ話に花を咲かせるのが大好きだった。

今回、彼等が霊園前にバイクを停めたのは、そこに都合よく何台かの自動販売機がある事と、人気が少ないという理由からだった。

暴走族、という訳ではない。その様な輩は、最早今の時代では絶滅危惧種だ。見たところ、全員が『普通』の若者のように見える。

最も、耳につくエンジン音をたてて昼夜構わず街を走り回るという意味では、暴走族と大差ないかもしれないが。

その内の二人は長く伸ばした髪を金色（片方は茶色）に染め、もう一人は周りからは目が見えない程色の濃いサングラスをかけている。

後の三人はとりたてて特徴がないように思えるが、しかしその内の一人はまだ中学生なのではないかと思われた。にも関わらず、その少年は煙草を吹かしていた。

その内の一人が何かを言うと、それを聞いた四人が大声を上げて笑う。

人の少ない静寂としたその一帯で、彼等の大声はよく響き渡った。

その内の一人――髪を金髪に染めた青年――砂川砂鉄（さがわさてつ）は、月光館学園の高等部に通う生徒（当然、未成年である）だった。

当然、校内では髪を染める事が禁止されているが、そんな事は彼にしてみれば知ったこっちゃなかった。彼にとって重要なのは、そうする事で自分が少しでも一般人離れしているという事を実感する事だった。

その欲求自体が、既に一般人の範疇に納まるものである事も知らずに。

彼は十七歳。つまりは二年生だった。

少し前までは『なんとなくカッコ良さそうだから』という理由でバスケ部に所属していたのだが、意味もなく疲れるだけで得られるリターンが少なかった（と彼は判断した）為、数ヶ月と経たない内に辞めてしまった。

代わりに、『髪を染めればカッコイイんじゃないか？』と思った為、彼は迷う事なく髪を脱色させた。

今まで部活をしてた時間は、テレビゲームをしたり、こうして気の合う連中とつるんだりする事に終始するようになった。

そんな今の生活が彼は大好きだったが、それに対して一々小言を言ってくる両親には頭を悩ませていた。正直、うっとうしくて仕方ない。それを聞くのが嫌で、こうして連中とバイクを乗り回し、深夜まで外にいる事が多かった。

仲間の内の中学生と同じく、彼もまた煙草を吸っていた。

彼はマイルドセブンを口に挟みながら自動販売機の前に立つと、ここに来る途中に気の弱そうなサラリーマンからカツアゲした金を入れて、ファンタのボタンを押す。

そんな彼の視界の端に、ふと一人の男の影が映ったので、彼は思わずそちらに目を向けた。

そこには、足首まである長さの黒いコートを着込んだ、鋭い目付きの男が、霊園の中で腰をかがめて『何か』をしていた。

しかし、砂川がその行動に興味を持つ間もなく、男はさっさとその場から立ち去ってしまう。その為、砂川もそれには特に関心を示さないまま、視線を仲間達の元へと戻し、そこで繰り広げられている会話に加わった。

話されている会話は、自分達の中で一体誰が一番『犯ったこと』があるのか――といった、まぁ、結局そんな話だ。

四人の内の一人（サングラスをかけた青年）、永瀬永門（ながせながと）もまた、

砂川と同じく月光館学園高等部の二年生だった。

特にやる事もなくぶらついてた砂川を今の仲間に誘ったのも彼だった。煙草やバイクにしても、彼の影響である。

そんな永瀬はヤンキー座りをし、ガムを噛みながら、つい最近済ませた『狩り』について声高々に話していた。この男は、暇さえあればガムを噛んでいるという印象が、砂川にはある。

砂川は自分のバイクに腰を落ち着かせながら、その話を聞いていた。

他三人の内一人は彼と同じようにバイクに跨がって、残りの二人は永瀬と同じくヤンキー座りをして、その顔にニヤニヤ笑いを張り付けながら、彼の話を聞いている。

「まぁ、一度最後まで犯りゃあ『あ、こんなモン？』て感じだよ」

永瀬はどうやらそれを武勇伝のように話している節がある。その証拠に、彼の顔は緩み切ったままだった。

正面にいた中学生が、その言葉に感心しきったように何度も頷いた。

「スゲェなあ、相手は誰だよ？」

「学生服を着てたけど、ウチのとは違ったから、多分、他校の生徒だろうな。けど、年の割に顔も良くて胸も大きくてよ、ソッコーで自宅まで連れてってやったぜ。な？　砂川」

「ああ」

永瀬に視線を向けられて、当時の事を思い出した砂川も、ニヤニヤ笑った。

彼が永瀬とつるむようになって、一番良かったと思えるのが、その事だった。永瀬は高校生であるにも関わらず、女を無理矢理犯す術を異常なまでに心得ていた。

やり方は『その筋』では一般的なものだ。ネット等で仕入れたクロロフォルムをハンカチに染み込ませて、目についた女が人通りの少ない場所を通りかかった時、背後からそのハンカチを女の口に押し当てる。

ハンカチを使うのは決まって永瀬だが、この時砂川が何をするのかというと、まず最初に女に適当な口実で話しかけて、気をひきつけているのだ。

永瀬曰く、その後は覚醒剤などを用いれば、その女はどんな言うことでも聞くらしい。実際、今まで砂川が見てきた限りではそうだった。

しかも、犯している間は、デジカメで録画した映像をビデオに納めている為、被害を受けた女性はそれが流出するのを恐れて、警察に届け出る事はない。

そんな手口で何度も犯行を繰り返す内に、二人はすっかり味をしめてしまった訳だ。もしこんな話を有里淳やセトが聞いていたら、問答無用で彼等を半殺しにしているところだろう。

勿論、現在、この東京で山手線が封鎖されているという現状を彼等は把握しているが、そんな事は彼等にとってどうでもよかった。

どの道、全員が親のいる家庭には余り居たがらないし、むしろ日常とはかけ離れた、この『東京封鎖』という状況に、微かな興奮さえ覚えていた。

「ん？」

話が盛り上がってきた頃、永瀬が不意に何かに気付いたように顔を上げた。

「どうした？」

砂川が永瀬の視線の先に目を向ける。見れば、そこは先程、あの目付きの鋭い男が腰をかがめていた場所だった。

「いや、あそこに何かあるような……」

永瀬はそう呟くと、迷う事なく霊園へと足を踏み入れていく。砂川を含む他の四人も好奇心にかられて彼へとついていった。

そこに置いてあったのは、二台の携帯ゲーム機だった。ゲーム好きである砂川は当然、それが何なのかを知っている。

「あ、これってＣＯＭＰじゃねぇか？しかも、殆ど新品だし」

「お、マジで？ラッキー！」

髪を茶髪に染めた青年が喜声を上げた。

「中古屋に売っ払えば、いい小遣いになるかもな」

そんな彼の側で、永瀬はその二台のＣＯＭＰを興味深そうにしげしげと眺めていた。

「確かにな。でも、どんなゲーム機なのか、少し気になるぜ。ちょっと電源でもいれてみっか」

永瀬は相変わらず顔にニヤニヤ笑いを張り付けたまま、噛んでいたガムを脇にペッと吐き出すと、そのまま迷う事なくＣＯＭＰを起動させた。

数分後、その五人の若者達は一人残らず死んでいた。

後には血まみれになった若者達の死体と、霊園をうろつく数体の悪魔だけが残った。

◆

◆

――青山霊園。

そんな場所を淳達が通り掛かったのは、それから二十分近くが経った頃の事だ。

「……？」

青山霊園の前を通り過ぎようとした際、唐突に淳が足を止めた。

「ジュン、どうしたの？」

そんな彼に、ユズが怪訝な表情を向ける。

「……何か、変じゃないか？」

淳の第六感は今、この霊園で蠢いている幾つかの気配を捕らえていた。

アツロウもそれに気付いたらしい。

「……ああ。分かってる、何かの気配が、ウジャウジャしてるな……」

「……え？　な、何かって……悪魔だよね……。どうする？」

今度は一転して、憂鬱な表情を淳へと向けるユズ。

だが、最早自分達に選択肢は残されていないという事を、淳は把握していた。

「……どうやら、逃げようと思っても手遅れみたいだ」

振り向けば、そこにも数体の悪魔の姿が見受けられる。

「……やるしかない、か」

アツロウは腹をくくったようだ。

アツロウとユズが臨戦体制に入る中で、しかし淳は悪魔とはまた違う、別の気配を感じていた。

道端で悪魔に襲われるという事態は、これまでも何度か経験してきたことだが……この気配は、何かが、どこかが違う。

少し辺りを見渡せば、その原因はハッキリした。

「……！　おい、あれ！」

淳が指し示す方向に、二人も視線を移す。

三人から少し離れた場所に、何やら禍々しい光を発している、赤い結界のようなものがあった。

「あそこだけ空気が歪んでる……！？　何だろう、この感じ……、凄く気持ち悪い……」

ユズがそんな感想を漏らした瞬間に、異変は起こった。

突如、その結界からスパークのように激しい光が発せられたかと思うと、そこから一体の悪魔が現れたのだ。

「悪魔が出てきた……!?　ジュン、アツロウ、見て！　あそこから悪魔が生まれてる！」

「なるほどなー。一日で突然、悪魔が現れた理由が、これでようやく分かった」

淳が言う。

「という事は……！　アレを何とかしないと……、悪魔はずっと出てくるって事か？」

アツロウの切羽詰まった問いに、淳はＣＯＭＰを取り出しながら頷く。

「いずれにせよ、あんな風に怪しさオーラをフルスロットルで展開してる現象を、おいそれと見逃す訳にはいかねぇだろ。何とかして取り除けりゃいいんだが……」

「だな……！　もしかしたら、悪魔の出現を止められるかもしれない！」

三人はほぼ同時に仲魔を召喚した。

淳が見た限り、悪魔が出現してくる障気は全部で二つあった。一つは霊園の奥、そしてもう一つは今、自分達がいる位置より真横に数十メートル離れた地点にあった。

「俺は奥のヤツを何とかするから、二人はそこにあるのを頼む」

「ああ」

「うん、分かった！」

今回の戦闘では、どの敵も今まで戦った事のある相手ばかりなので、アツロウに弱点を教えてもらう必要はなかった。

問題なのは敵の数だ。現時点でこそその数は決して多くないが、あの障気がそこに存在している以上、時間が経てば経つ程敵の数が増えるであろう事は明白である。

しかし、数時間前の武芸館前の戦いとは違い、今回は誰かを庇いながら戦う必要がない。その為、先程よりは戦いやすかった。

いや、厳密にはアツロウやユズにも気を配らねばならないだろうが、二人共、もはや悪魔使いとしての戦いには（淳程ではないにしても）適応しつつある。少なくとも、自分の身を自分で守る事ぐらいは出来るだろう。

「行くぞっ、モー・ショボー」

「はいっ」

淳とモー・ショボーが霊園の奥にある障気へと向かうと同時に、オグンが槍を突き出してきたので、それを淳は難無くかわすと、脇腹に『怒りの一撃』を放った。

この物理スキルは威力こそ高いものの、その高さ故に細かいコントロールがつけにくい。しかし、今回に限っては、何とかその一撃をオグンへ叩き込む事に成功した。

淳の拳と全く同じ大きさの穴が脇腹に空き、オグンはそこから大量の血と臓物を撒き散らしながら、その場で悶絶した。

淳はそれに追い討ちをかける事もなく、例の障気へと向かう。今優先すべきは、敵の殲滅よりもあの障気を何とかする事だ。

だが残念な事に、敵はそんなこちらの意図に気付いてしまったようだ。まるでその障気を庇うかのように、淳の前へと数体の悪魔が立ちはだかる。

「うざってえな……」

呟き、右手に魔力を集中させる。一瞬後には現時点で淳が持つ中では最強のスキルである、『氷の乱舞』が炸裂した。

それによって、何体かの悪魔が冷気によって体を氷漬けにされ、氷弾によって凍りついた体を砕かれる。他何体かは生き残ったものの、殆どが冷気によってその機動力を落としていた。

完全にガラ空きとなった訳ではないが、それでも淳達が走り抜けられるぐらいの道が空いた。

――後は、あの障気を何とかするのみ！

「きゃあっ！」

と、そんな淳の耳に、後方で別の障気へと向かっていたユズの叫び声が響く。見れば、その障気から更に別の悪魔が現れたところだった。

その悪魔は、今までに見た事がない姿をしていた。一見、童話に出てくる『赤ずきん』を思わせる――というよりは、正しく赤ずきんそのものの恰好をしているのだが、それを纏っている悪魔の姿は赤ずきんのそれとは似ても似つかない。

まるでアリクイだ、と淳は思った。極端に小さな目、そして、前方に長く鋭く伸びた口は、正しくアリクイを思わせる。

その光景に一瞬気を逸らしていたのが仇になったのか。

「ジュン、あれ！」

モー・ショボーの声で我に帰った淳が目にしたのは、前方の障気より現れる1体の悪魔の姿だった。これもまた、今までに見なかった外見をしている。

が、こちらは先程の悪魔（キキーモラ）よりは遥かに馴染み深い外見をしていた。どのようなものかというと、それはまんま犬の姿である。

体の大きさは仔牛程で、種類的には『むく犬』と言うべきか、体中の青い体毛は伸びきっており、目が隠れていた。

この悪魔は『ヘアリージャック』といって、イギリスなどでは死を招くとされる犬の悪魔だ。

つかの間、淳はユズ達の元へ加勢に行くべきかどうか迷ったが、そんな彼に対しアツロウが、

「ジュン、こっちは大丈夫だ！　お前はそっちの障気を早く何とかしてくれ！」

と、遠くから呼び掛ける声を聞いて、淳はヘアリージャックと相対した。

（――大丈夫。あいつらはそう簡単に死ぬタマじゃない）

そう己に言い聞かせて、アツロウとユズの無事を信じながら、淳は再び『氷の乱舞』を放つ。

しかし直撃こそしたものの、氷結属性に耐性を持っているのか、相手は僅かに体をよろめかせただけで、すぐに淳へと飛び掛かった。

その間に、先程まで動きを止めていた数体の悪魔達も、一斉に活動を開始した。

淳は舌打ちすると、やむなくバック転をしてそこから一旦距離をとる。

休む暇も与えず、敵悪魔の内の一体であるビルヴィスがそのフォークをバットでたたき付けるようにスイングしてきた。淳は咄嗟に左足を上げて、足の裏でそれを受け止める。

その衝撃は靴底がある程度吸収してくれたものの、若干、足が痺れてしまった。

それによって、脇から迫ってきたワイラに対し、僅かながら反応が遅れた。かろうじで体を逸らしたものの、鋭い爪が右腕を微かに切り裂いたのを見て、思わず顔をしかめる。

ワイラの爪は一見、三角錐状ではあるものの、あれ程のスピード

で振るわれると刃物と変わりない。事実、掠めただけだというのに、思いの外『ざっくりと』やられていた。

「――ってぇな！」

怒り、そのワイラを右の裏拳で殴りつけると、左足で捕らえていたビルヴィスのフォークを蹴り上げる。

得物が弾かれた事で、一瞬体勢が崩れたビルヴィスに、淳は『怒りの一撃』を放つが、スレスレで外してしまった。

このスキルのコントロールがつけにくい事は前以て知っていたとは言え、いざ本番で外してしまうと、思わず舌打ちしてしまう。

だが、外した拳の勢いを利用して、淳はそのまま体を回転させると、後ろ回し蹴りをおみまいした。

ＣＯＭＰに登録されたスキルではない、純粋な体術である為、『怒りの一撃』程の威力はないが、それでもビルヴィスの体を吹き飛ばすには十分な威力だった。

その傍らでは、淳の裏拳によって体をよろめかせたワイラを、モー・ショボーが『ブフ』によって凍らせている所だった。

淳は氷の彫刻と化したワイラをさもうっとおしそうに蹴り砕くと、残る一体の悪魔を見据える。

ヘアリージャック。

しかし、淳の本当の目的は依然として変わらない。それは悪魔が

出てくるあの障気を何とかする事。しかしそれを邪魔しようとするヘアリージャックを無視する事は出来ないだろう。

かといって、この血気盛んなむく犬とじゃれ合っている間に、別の悪魔が現れても困る。

この悪魔を上手くあしらいながら、なるべく早くあの障気を何とか出来れば最善だ。

「モー・ショボー、少しの間だけでいいから、あの犬の気を逸らしてくれ」

淳が言う。

「分かりました」

頷くと、モー・ショボーは次々と氷弾を放ち、ヘアリージャックを足止めする。

その間に、淳はＣＯＭＰのアナライズ画面を確認して（現在、アツロウはユズと一緒にキキーモラの相手をしている為、彼を頼る事は出来ない）ヘアリージャックの弱点属性を探したが――それが電撃属性だと知って、淳は思わず毒づいた。

生憎、淳もモー・ショボーも、電撃属性のスキルは持ち合わせていない。

となれば、物理スキルによる力技か、二人の内どちらかが囮になる事でもう一人が障気へと向かうかのどちらかが、今考えうる最善の策のように思えた。

だが、見た目的には少女であるモー・ショボーを囮にするのは、『女子供は男が守れ』を信条とする淳としては非常に忍びない。

かといって彼女をあの障気に向かわせた所でちゃんと処理出来るかと言うと、若干の不安が残る。

ならば、やはり力技で押し切るしかない。

「モー・ショボー。少し離れてろ」

物理スキルを使うとなると、必然的に接近戦となる為、モー・ショボーによるブフの援護は帰って危険になる。そう考えての配慮だった。

それを察したモー・ショボーは「はいっ！」と返事をすると、戦いに巻き込まれないように、『飛翔』によって上空へと舞い上がり、淳の邪魔にならないようにした。

準備が整った事を確認した淳は、ヘアリージャックと真っ向から対峙する。相手は決して小柄ではないが、ウンディゴと比べればそれ程脅威ではない。

だが、淳が行動するよりも先に、ヘアリージャックが動いた。

突然、その口を大きく開いて、淳へと迫ってくる。

「うおっ！？」

相手が犬と変わらぬ外見である以上、その攻撃自体は予想出来た

ものだったが、咄嗟にサイドステップでかわした淳の耳に届いた風切り音に、彼は思わず目を見張った。

それはまるで、淳の持つスキルの一つである『怒りの一撃』にも似ている。だが、握り拳など作れる筈がないヘアリージャックのそれは、さながら『怒りの牙』と言ったところか。

やはり命中精度も同じく低い様だが、犬の噛む力というのは洒落にならない。恐らく、威力はこちらより上だろう。

そんな淳の少し後方でも、アツロウとユズがキキーモラ、そして他の数体の悪魔達と戦いを繰り広げていた。

キキーモラの弱点が既に衝撃属性である事を把握していた二人は、キジムナーのザンによって既にキキーモラの体力を相当削っていた。

武芸館前の時と同じく、相手の弱点を的確に突いた戦法はここでも有効だった。ビルヴィスにはジャンバヴァンの『ジオ』が、オグンにはアツロウの『ブフ』が効果的に作用する。

途中で何度か相手の攻撃が二人の体を掠めたが、それはユズの回復魔法によってたちまち回復していった。

場面は再び、有里淳とヘアリージャックとの戦闘へ移る。

『野生の勘』という言葉があるが、ヘアリージャックのそれはとくに敏感らしい。この犬は淳の狙いを即座に察知して、一度攻撃を仕掛けてはすぐさま距離をとるというヒットアンドアウェイに徹してした。

淳は舌打ちしながら、何度か右拳を意味もなく開いては閉じるという作業を繰り返す。

こういう相手は一気にケリをつけなければ駄目だ。時間が経てば経つ程警戒を強められるだけだろうし、何よりそんなモタモタしていてはあの不気味な障気から次の悪魔が出てきてしまう。

淳はそれを意識し、先ずは『氷の乱舞』で牽制する事から始めた。

『氷の乱舞』もコントロールがつけ難いが、それでも右か左かに放つぐらいの大雑把な制御は可能である。

淳から見てヘアリージャックの軸より僅かに右側へと氷弾を放てば、自然とヘアリージャックは左側へと移動してそれをかわす。それこそが淳の狙いだった。

ヘアリージャックが移動するのと同時に、淳はすぐさまその悪魔との距離を詰める。

彼の行動に気付いたヘアリージャックは、慌てたように方向転換しようとするがもう遅い。その時には既に、淳の『怒りの一撃』がその則頭部を捕らえていた。

頭をハンマーで叩かれたようなものだ。

分厚い体毛によってある程度ダメージを緩和されてしまったのか、致命傷とまではいかなかったものの、これによって戦いの流れをこちらが掴んだという事実は大きい。

ヘアリージャックが大きくよろめいている隙に、淳はようやく例

の障気へとたどり着く事が出来た。

その中心にある物を見て、淳は驚いた。

そこにあったのはＣＯＭＰだった。まず間違いなく、自分達のものと同じ改造されたＣＯＭＰだろう。そのＣＯＭＰを中心に四角形の結界が張られており、そこから障気が漏れ出していた。

「……とんだおもちゃ箱だな。こんな機能もあるのかよ」

だが、障気の発生源が見たこともない未知の何かだったというよりは、遥かにマシだ。

そんな淳の背後で、唸り声のようなものが聞こえた。目を向けると、既にヘアリージャックがダメージから回復しつつある。

上空にいるモー・ショボーが『ブフ』を連発する事でなんとか足止めしようとしていたが、ヘアリージャックの興味は淳だけに固定されているようで、耐性のあるスキルの連発などには見向きもしない。

瞬時に時間がない事を悟った淳の足元で、障気を放っている改造ＣＯＭＰがブルブルと震え出した。恐らくは、次の悪魔を魔界から喚び出そうとしてるのだろう。

最早、手段を選んでる暇などないと判断し、淳はすぐさま決断した。片足を大きく上げると、そのまま下にある改造ＣＯＭＰを力の限り踏み付ける。ＣＯＭＰはまるでクッキーのようにたやすく砕けた。

荒療治ではあったが、どうやらそのやり方で正しかったらしい。改造ＣＯＭＰの周りにあった結界は消えうせ、障気を噴き出す事もなくなった。

外見だけではない。先程まで感じていた禍々しい気配も、今となっては一切感じられなかった。

だが油断は出来ない。まだアツロウ達の方のＣＯＭＰが残っている。もしかしたら既に壊した後かもしれないが、それを確かめる為にもまずは……、

「……来いよ、犬っコロ。散歩の時間だ」

淳がチッチと舌を鳴らしながら茶化すように手招きすると、ヘアリージャックは憤慨したように牙を剥き出しにして一気に飛び掛かってきた。

ダメージと怒りによるものなのか、その行動には先程までの警戒心は一切ない。

これならば、わざわざスキルを使うまでもなかった。淳は到底人間業とは思えない速さで足を振り上げると、飛び掛かってきたヘアリージャックの頭部に、強烈な踵落としを食らわせる。

先の『怒りの一撃』によって僅かに耐久力を落としていた頭部は、淳の踵によって地面にたたき付けられると、そのままトマトのように破裂した。

服にはねてきた血液や脳しょうが不快だったが、やがて人間界に現れた悪魔が死滅した時の法則によって、遺体を含めたそれらの痕

跡は煙のように消えていった。

そのまま淳は休む間もなくアツロウ達の元へと走り出す。途中、先程トドメを刺さなかったビルヴィスが襲ってきたが、首をへし折って仕留めた。

そして、淳がアツロウ達の元に駆け寄ると、既に二人は暴走したＣＯＭＰを破壊し終わった後だった。

◆

◆

――『青山霊園のバトルＰＡＲＴ２』終了時ステータス

●クラックしたスキル
＞『毒追加』
『一分の魔脈』

●所持マッカ：４２０１

●有里淳（？？）

・コマンドスキル
＞？アギ
？氷の乱舞

？怒りの一撃
・自動効果スキル
＞？英霊の加護
　？毒追加
　？――
・先制発動スキル
＞『――』

●木原篤郎（人間）

・コマンドスキル
＞？ジオ
　？ブフ
　？――
・自動効果スキル
＞？一分の活水
　？同族の心得・防
　？――
・先制発動スキル
＞『――』

●谷川柚子（人間）

・コマンドスキル
＞？ザン
　？ディア
　？アムリタ
・自動効果スキル
＞？耐氷結
　？一分の魔脈

？――
・先制発動スキル
＞『――』

●仲魔
＞・ジャンバヴァン
・キジムナー
・モー・ショボー

――Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！

１ｓｔ　Ｄａｙ『もう１つの世界』

「…ふぅ、終わったな…」

もう辺りに悪魔がいない事を確認すると、アツロウが安心したように一息ついた。

「にしても…まさかＣＯＭＰから勝手に悪魔が出てくるとは…」

「俺達のだとそんな事はないっつーのに……故障か何かか？」

ちなみに、淳と違って、アツロウとユズは暴走ＣＯＭＰを停止させる際、壊したりはせず普通に電源を切ったらしい。

というか、それが普通だ。

そう考えると、淳は足で踏み砕くという短絡的な解決法を用いた自分が酷く間抜けに思えたが、よくよく考えれば、あの状況でそんな呑気な事をしていてはその間に敵の反撃を甘んじて受けていただろう。

「…でもさ、何であのＣＯＭＰは、あんなとこに落ちてたのかな？」

不意に、ユズがそんな質問をしてきたので、淳の思考は殆どそちらに偏ってしまった。質問自体はさりげないものだったが、それは非常に重要な問題である。

考えられる事は幾つかあるが、敢えて一つだけを挙げるとするな

ら…、

「…恐らく、俺達と同じだったんだろうな」

「同じ？」

「ああ。多分、ここで誰かがこのＣＯＭＰを起動させたんだと思う。俺達が初めてＣＯＭＰを起動させた時の事はまだ覚えてるだろ？俺達は何とか生き残ったけど…、多分、これを起動させた奴――又は奴ら――はそうはいかなかったんだろうな」

「え…じゃあ、その人って…」

淳の話を聞いたユズは、そこまで言うと目を伏せて口を閉じてしまう。淳が何を言いたいのかはユズもアツロウも分かっていたので、わざわざ答えを促そうとも思わなかった。

つかの間、三人の間に沈黙が漂う。

「…あ、でもさ、あの障気の中から悪魔が出てきたって事は、あの向こうは『悪魔の世界』に繋がってるのかな？」

やがて、重い空気を入れ換えるように、ユズが口を開いた。

「さぁ…あの中がどうなってるかまでは分からないけど、その可能性はあるな」

アツロウが例の元暴走ＣＯＭＰをしげしげと眺める。

その時、淳はこの霊園に漂っているとある『違和感』に気付いた。

（死体は――人間の死体はどこにある？）

悪魔を殺せば――一体どんな構造をしてるのかは知らないが――奴らは瞬く間に黒い霧のようになって、その存在と痕跡の一切が人間界から消えうせる。

だが、人間ならば必ずどこかに死体が残っている筈だ。

しかし、淳が見渡した限りではそのようなものは見当たらない。

（まさか――喰われたのか？）

悪魔が人間を喰らう。

言葉だけならばありふれているが、昨晩から今までの出来事が出来事なだけに、淳は背筋をながれる冷や汗を感じずにはいられなかった。

しかしである。

もし体を悪魔に食いちぎられたとなれば、少なからず何処かに飛び散った血痕が残っている筈だ。

しかし、これもまた見当たらない。

とすれば、何処かに連れ去られた後、ゆっくり堪能されたとか――そこまで考えて、淳はそれについて考えるのをやめた。あまりじっくりと考えたい事じゃないし、恐らく今となってはどうしようもない。

「――ところでさ」

再び、ユズが口を開く。

「私たちの持ってるＣＯＭＰって、一体どんな仕組みで悪魔を喚び出してるのかな？」

しかし、残念ながら淳にとって専門外な方向からの質問だった。

だが、この手の話に強い人物がこの場に一人。

アツロウである。

「ああ、昨日ＣＯＭＰを調べた時に分かったけど、悪魔召喚って属性はクライアントなんだよ」

「……」

「……」

二人を気遣ってそう話すアツロウだったが……。残念ながら、この時点で既に二人はアウトだった。

「クライアント…？　分かるように話してくれない？」

「はは、全くソデコはよ！　…それじゃ、ざっと説明するぞ？」

アツロウ曰く、プログラムには単体で動くものと、ネットワークで動くものがあり、この内、ネットワークで動くものには、サーバ

ーとクライアントがあるそうだ。

サーバーは文字通りサーバーで動作するプログラム（ここまで聞いた所で、ユズはあからさまに顔をしかめていた）。

それに対してクライアントとは、サーバーを利用する為のプログラムらしい。

アツロウがここまで説明してもユズはイマイチ分からない様子だったが、淳の頭の中では漠然としたイメージが生まれていた。

早い話が、単体で動けるプログラムと、他の力を借りなければ動けないプログラムがあるという事だ。

「む～、私は良く分かんない……！　もっと詳しく教えてよ」

「はいはい。クライアントがする事は、あくまでサーバーにリクエストを出して、その結果を受け取るだけなんだ。実際の計算はサーバーでも行うから、処理能力が低いマシンでも、クライアントとしては使用できる」

「え～と、つまり…」

ここまで詳しい説明を聞けば、流石にユズの理解力も何とか追いついたらしい。

「ＣＯＭＰの場合にも、他にサーバーっていうのがあって…。そこに入ってるプログラムで、実際の処理をやらせて、ＣＯＭＰは受けとった結果だけを表示する…って事？」

「おお、ご明答！　そんなところだ。携帯ゲーム機でしかないＣＯＭＰで、複雑な処理を行う為の仕掛けだよ。ＣＯＭＰ自体、ネットワーク端末としてはいい出来だからな。重たい処理はサーバーで行うんだ」

ここまでの2人のやり取りを黙って聞いていた淳は、ふとある事が気に掛かった。

「…何となく分かったけどよ、それなら、そのサーバーってのは何処にあるんだ？」

「流石にそこまではな…。今は調べる手だてもないし。パケットの流れを監視できれば、突き止める事も不可能じゃないけど、普通のパソコンからじゃ入れないからなぁ…」

後半からは意味が分からなかったが、とにかく今はアツロウにもサーバーの場所が分からないらしいという事だけは理解出来た。

「でも、もしサーバーの所に行けたら、悪魔召喚プログラムをいじり放題だ。理論的には、悪魔を自在に出したり消したり出来ると思うぜ？」

「そうなのか？」

淳にしてみれば、そんな物を目の当たりにしても、とてもじゃないが思い通りにプログラムを置き換える事など出来はしない――が、アツロウやナオヤぐらいのレベルになると、そんな事は朝飯前なのだろうか？

まぁ、アツロウが出したその推理は重要だし、淳も面白いとは思ったが……。

「…ま、今は出口を探す事が先決だけどな」

アツロウが自分の考えを述べつつも目をキラキラと輝かせていたので、淳はそう釘を刺しておいた。

目先の情報に躍らされて、本来の目的を見失っては元も子もない。

「何でだよ～、ノリが悪いなぁ…」

「いや、こんな時にノリを求められても…」

「今は出口を探す方が大切でしょ！」

淳は呆れ、ユズは怒った。

「はいはい、分かってますって！　行こうぜ、ジュン！」

アツロウがそう促しながら歩き出すので、淳とユズは苦笑しながらも後に続いた。

彼等がここまでの間に学んだ事の中に、『長時間、同じ場所にいてはいけない』というものがある。悪魔達に決まった徘徊ルートのようなものがあれば話は別だが、流石にそれはないだろう。

連中はターミネーターなどではない。自己的な意識を持つ生き物なのだ。

生き物――そう、生き物だ。

悪魔という種もれっきとした生物だ。淳は、高校での生物学の教師から聞いた話を思い出していた。

『――生態形の中では、どのような生物であろうとも少なからず『弱肉強食』のサイクルに組み込まれています。

全ての生物は、必ず生きる為に何かしらの種族を糧とし、またどの生物も生きる上で他の生物の糧にされているという法則です。

この弱肉強食の頂点に立っているのが…そう、我々人間なのです。人類は、他の種族とは比べものにならない程に多くの生物を犠牲にしています。

氷河時代の人類が、多くの肉食獣を自分達の生活の為に乱獲し、その結果幾つかの種が滅びてしまったというのは事実です。

現在でも、絶滅とまではいかなくとも、人間によってその寸前まで追い込まれている種族は数え切れません。

特筆すべきは、野生動物としては、決して秀でた身体的能力を持ち合わせていない人間が、その『知識』だけでここまで上り詰めたという事です。

ならばもし、我々人類よりも知能が高く、尚且つ肉体的にも優れた生物が突如現れようものなら、長年築かれていた生態形が崩壊し、人類はその生物によって【駆逐】されてしまうかもしれません……』

淳は思った。

――悪魔は、その二つの条件を満たしている。

人類が一体何年もの間、生態形の頂点に君臨していたのかは知らないが、今回でそれが覆されてしまうかもしれない――いや、既に覆されているのか。

そうなって初めて、自分達は捕食される側の恐怖を味わう事になるのか――そして、そうなった時に人類はどのような行動をとるのか…。淳は、不思議とどこか冷めた思考でそう考えた。

――まるで人類が滅びる事など、どうでもいいとでも言うように。

◆

◆

高城圭介に案内され、淳達が手動式充電器を購入した場所でもある秋葉原を、セトは歩いていた。

歩きつつも、至る所に立ち並んでいる電気店を横目で順番に確認していく。

彼は『ある物』を探していた。そして、それはこのような場所の方が見つけやすいのだが…。

道行く電気店の全ては、入口をシャッターで閉ざしている。状況が状況なので仕方ないと言えば仕方ないが、流石にここまで来ると、少しは『だいだら』並に商売精神のある人間はいないのか、と思ってしまう。

場所を変えるべきかな、と思いかけた時、ある光景がセトの目に映った。

少し先にある電気量販店の前で、一人の男性が横たわっていた。その顔からは血の気が完全に失せており、明らかに死んでいると分かる。

悪魔が着々と東京を侵食しつつある中、それ自体は特に珍しくもない、ここに来る途中にも何度か見かけた光景ではあるものの…その男性の腹部でモゾモゾ動いている物体を見た時は、さしものセトも閉口した。

一体のアメーバ状の悪魔が、その男性の腹部に、顔を突っ込んでいた。

食っているのだ。

人間を――悪魔が。

悪魔が――人間を。

その悪魔はがつがつと、まるで獣のようにその男性を貪っていた。

辺りには肉を裂き、骨を砕いて、内臓を喰らう音が響いている。

すると、どうやらその悪魔はセトが背後にいる事に気付いたようだ。

男性の胆汁に塗れたその顔をセトに向けると、意味不明な唸り声を上げて突進してくる。

それまでの動作や動きから、この悪魔が人語さえ扱えないような低級悪魔である事が伺える。

もし、そうでなければ気付いた筈だ。

天地さえ短く思える程に開いている、自分とセトとの間にある実力差。

ペルソナを喚び出すまでもない。

まるで腕に止まった蚊を叩き潰すかのような気楽さで、セトが手刀を横に振ると、その軌道上にあった悪魔の首が真っ二つになった。

傍らで断末魔の叫びを上げながら消失していく悪魔には目もくれず、セトは先程まで悪魔の夕食となっていた哀れな遺体に目を向ける。

よく見れば、その男の瞳孔は開ききっており、その表情は苦痛で

歪んでいた。

それを見て、もしや生きたまま喰われていたのでは、とセトは思った。今でこそその男は死んでいるが、生きたまま腹を食いちぎられた時の男の気持ちを考えると、セトは少し胸が痛くなった。

セトが中途半端なところで悪魔の食事を妨害した為、男性の腹部はまるで真っ赤なグラタンのようになっていた。だがそんな事は全く気にしない風に、セトは男性の傍らで腰を落とすと、口の中で小さく神の名を呟く。

そして、黙祷。

しばらくの間、男の側で手を合わせ、目を閉じた後、次にセトが目をつけたのは、男が倒れていた場所よりすぐ近くにある電気量販店だった。

そこの入口も他と同じくシャッターが降りていたが、しかし肝心のシャッター自体に無理矢理破られたかのような大穴が空いていた。

注意深く観察すると、シャッターのあちこちには大小様々な引っ掻き傷がある。

「おいおい…、まだ一日目だぞ…」

封鎖によって発生した人間の負の感情か、或いは例の改造ＣＯＭＰの影響かは知らないが――『汚染』がこれほどの速さで進行するとは、流石のセトも予想してなかった。

そういった状況は決して好ましくないものの――この電気量販店

に入る為の入口が出来ていた事は有り難い。セトの知覚は、この店内に生きた人間はおらず、無人である事を既に認知していた。

故に、堂々と不法侵入に及んでも全く問題はない。いや、なくはないが――とにかく、今の状況を考えれば、容認されるべき微罪だろう。

男の死体を跨いで、その店へと入る。

するとどこからか生きた人間の匂いを嗅ぎ付けたのか、数体の悪魔が彼へと向かってきた。

だが、並の悪魔が何体群がろうと、彼にとっては赤子同然である。

キキーモラの爪をかい潜り、その腹を手刀で串刺しにする。

ビルヴィスの頸骨をへし折り、向かってきたワイラを蹴り飛ばして仰向けにすると、その頭を踏み潰す。

店に入って最初に目についたのはＰＣコーナー、及び携帯コーナーだ。その次はＰＣの周辺機器、デジカメ、携帯音楽プレイヤーと並び、その先でようやく、彼はお目当ての物を見つけた。

それはテレビだ。

そこには様々な種類のテレビが並び、いつもなら画像の美しさをアピールする為に何かしらの映像が流れている筈だが、停電中である今となっては、どのテレビの画面も真っ黒にそまっている。

少し歩くと、セトはすぐに程よい大きさのテレビを見つけた。長

身のセトでも楽に体が収まりそうな大画面を持つ液晶テレビだ。

最後に『この世界』に入ったのはいつだったか――そんな事を考えながら、セトは手の平をその画面に押し付ける。

すると、今まで何も映していなかった筈の画面に、セトの手を中心に白い波紋が広がったかと思うと、次の瞬間には、その手が水に沈んでいくかのように、テレビの中へと吸い込まれていく。

手だけではない。

一気に肩まで、セトの腕がテレビの中へと消えていった。

だが、セトは全く慌てていない様子だ。

次には頭、腰までもが沈み、最終的には彼の両足が床から離れ――そして、セトの姿はその場から完全に消え去った。

1st Day『母親』

岳羽（たけば）ゆかりはとあるマンションのリビングで、一人の女性と一緒に、手元にある『装備』の数々を点検していた。

彼女にとって、昨晩から今までの丸一日は、全くもって酷い時間だった。実の息子である淳の現状は、未だに分からない。彼の身に何が起こっているのかも、その生死さえも……。

（――ダメ、気をしっかり持たないと）

心の声がきっぱりと言い、ゆかりの心を正気に保つ。息子は生きている。生きているに決まってる。そうでなければならないし、それ以外の可能性など、考える事さえおぞましかった。

昨晩から何百、何千回と自分に言い聞かせていたが、既にその可能性が薄れてきているのを、ゆかりは心のどこかで感じていた。

無論、青春真っ只中である十七歳の息子が、たかが1日だけ家を空けたというならば、本来はそれほど心配する事ではない。

事実、淳は幼なじみである谷川柚子という少女と共に、どこかで泊まってきた事もある。その時、ゆかりは『ああ、いつの間にかこの子もそういう歳になったんだな』と、どこか感慨深くなったものだ。

――が、今回は、少しばかり事情が違う。

桐条グループを経由した情報網から、かの東京が完全に封鎖されている事を知り、その中に淳が閉じ込められているらしいと知った時の衝撃を、ゆかりは今でも忘れられない。

同じく桐条グループに協力を扇いで、淳が持つ携帯会社に問い合わせたところ、一昨日、彼の携帯にとある人物からメールが送られてきたらしい事が分かった。

そして、その人物が一時期、淳の面倒を任せた事のある『ナオヤ』という青年である事を調べ上げるまで、余り時間は掛からなかった。

情けない話だが、ナオヤという人物について、ゆかりはそれ程多くの事を知らなかった。あの時はどうしても仕事の都合で少しの間家を空けなければならない事情が出来た為、やむなく、彼に淳の世話を頼んだのだ。

精々知ってる事と言えば――ゆかりが後で淳に聞いたところ――彼がいわゆる、『変人』であるという事ぐらいか。

流石にメールの内容までは分からなかったが――しかし彼が、淳が封鎖に巻き込まれているという現状に少なからず関与している事は間違いないだろう、とゆかりは睨んでいた。

更に最悪なのは、その封鎖に、なんと『悪魔』の存在が絡んでいるらしい事だ。

この情報は、かつて、彼女が高校2年生の時の後輩から流れてきたものだった（その後輩は、彼女が三年生に進級すると同時に、八十稲羽という田舎の学校へと転校してしまったが）

息子がちょっとしたトラブルに巻き込まれたと聞くだけなら、まだ耐えられた。

しかし、そこに悪魔が関わり、且つ淳が既に殺されているかもしれないと思うと……ゆかりは、胸が張り裂けそうな気持ちになった。

だが、今の彼女に出来る事と言えば、召喚器を携え、単身自衛隊の包囲網を破って息子の元へと駆け付けたいという気持ちを必死で抑える事だけだった。

そして、彼女と全く同じ気持ちを抱いた女性が、この場に――正確には、ゆかりが座っている場所の向かい側に――いた。

ゆかりは世間一般では間違いなく『美女』の部類に入るが、彼女の正面に座っている女性も、まごうことなき『美女』だった。艶のある金髪を肩まで伸ばし、その碧眼はまるでサファイアの様な美しさを放っている。何故かヘッドホンともカチューシャともつかない物を頭につけ、水色のワンピースを着ていた。

街中で見かけたなら、誰もが振り返る程の美人だ――今のように、腕をパックリと開き、そこに弾薬を詰めていなければ、だが。

彼女の名前は『アイギス』。

人間――――ではない。いや、心だけなら間違いなく人間だが――実は、彼女はかつて桐条グループによって、とある目的の為に開発された『ロボット』なのだ。

そして彼女もまた、ゆかりに負けず劣らず、有里淳の身を案じて

いた。

アイギスが弾薬を詰め、それぞれの摩擦部分に油をさしていく中、ゆかりは一旦解体した拳銃のようなもの――『召喚器』を、一つ一つ入念に点検していく。

アイギスがズラリと並べた弾薬から出る火薬の匂いに、最初こそゆかりは顔をしかめていたが、今となってはそれさえ気にならない。

ゆかりは、アイギスがここまで口を閉じてくれている事に対して、感謝と安心感を覚えていた。壁にかけられている時計が刻む針の音だけが、カチッ、カチッと規則的に鳴り響いている。

現在の桐条グループの総帥であり親友でもある桐条美鶴（きりじょうみつる）から新しい連絡が入る事を祈りながら、ただただ装備の点検に勤しむ事で、何とか彼女は平静を保っていた。

もしかしたら白鐘探偵事務所からも連絡が来るかもしれないが、例の後輩曰く、そちらには別の事件について捜査を頼んでいるらしいので、あまり期待は出来ない。

いつもなら、ゆかりはまだ仕事場にいる時間だが、今は東京の封鎖によって日本中がパニックに陥っている。誰にしたってとても仕事どころではない。

ゆかりは昨晩から一睡もしてなかった。数時間前に食事の為に数分程休んだが、それも倒れる寸前だったからだ。

アイギスや他の仲間達からは、少しは休んだらどうかと言われていたが、こうしてる間にも、息子は悪魔がひしめく東京に閉じ込め

られているのだ。そう思うとおちおち休んではいられない。

仲間達にしても、そんな彼女の心境を痛い程理解していたので、無理に休ませようとはしなかった。

今朝、ゆかりは、仲間の1人である伊織順平（いおりじゅんぺい）が桐条グループの自家用機に乗って、アメリカから日本に向かっているというメッセージを、本人から受けていた。

隣の部屋では、淳の家庭教師であり、優秀なハッカーでもある山岸風花（やまぎしふうか）がノートパソコンに向かい、何とか封鎖についての情報を探れないかと奮闘している。

有里淳が封鎖内にいると知ってから、彼女もまた、ゆかりと同じく殆ど寝ていない。そして、他の仲間達――真田明彦（さなだあきひこ）、荒垣真次郎（あらがきしんじろう）、天田乾（あまだいぬい）（後は、コロマルという忠犬も仲間だが、犬である彼に出来る事は少ない）――の三人は現在、八十稲羽、御影町に出向いて、他のペルソナ使いの協力を扇いでいる。

今回の封鎖を、日本政府が前々から計画してたらしいという、その程度の情報は、ゆかりは既に掴んでいた。

そうなると、有里淳の救出にあたって、相手が自衛隊という『軍隊』を所持しているのに対し、こちらの人数は圧倒的に少ない。

しかし、それに関してゆかりは殆ど心配していなかった。例え人数で劣ろうとも、こちらにはそれを補って余りある結束力と能力、そして意志の力がある。

ゆかりが愛した夫は、彼女が淳を身篭っている最中に亡くなって

しまった。それによってポッカリと空いた心の穴を埋めてくれたのは淳だった。

彼は幼い頃から歳に似合わず聡明で、人を気遣うに能力に秀でており、ゆかりの心を幾度となく癒してくれた。

お互いにとって、家に帰ればそこにいるたった一人の肉親という事もあって、二人はかなり緊密な関係を築いてきた。ゆかりは誰よりも息子を理解し、淳は誰よりも母親を理解していた。

（――まぁ、つまらない事で口論になる事も多いけど）

淳の性格は、深いところでは父親に似ているものの、表向きには学生時代のゆかりの男版という感じだった。父親の一人称は『俺』ではなく『僕』だったし、性格ももっと大人しめというか、少し暗い感じだった。

それに比べて有里淳は活発で明るく、感情の起伏が激しい。何より、自分の主張を決して曲げないその負けず嫌いな精神は、間違いなくゆかりから受け継いだものだ。

「ゆかりちゃんっ！　ちょっと来て！」

突然、隣の部屋にいる山岸風花からそう呼ばれて、ゆかりの心臓は喉まで跳ね上がった。アイギスと目を交わせば、彼女も似たような気持ちを抱いている事が分かる。

ゆかりは長時間、椅子に座り続けた事で強張っている足腰を無理矢理動かしながら、風花のいる部屋へと急いだ。

ちなみに、彼女がいる部屋は淳の私室だ。コンピュータを使った情報収集と共に、彼の部屋の中から何かしらの手掛かりを探すという目的で、風花自身が希望したのだ。

彼女は淳の家庭教師として、何度も彼の部屋に上がった事がある為、ゆかりとしてもそれほど抵抗は感じなかった。

それを言うなら、淳は他にもアイギス、美鶴、西脇結子（にしわきゆうこ）や伏見千尋（ふしみちひろ）など、多くの女性を部屋に上げている。

勿論の事、誰一人としてやましい理由で上がらせた訳ではない（ハズだ）が……。恐らく、この辺りに住む同年代の男子の中では、もっとも多くの頻度で女性を部屋に上げている男と言えるだろう。

閑話休題。

淳の私室でパソコンと格闘していた風花の表情を見ただけでは、果たして彼女の掴んだ情報が良い知らせなのか、悪い知らせなのかは分からなかった。どちらにしたって、何かあったのなら早く知りたい。

そう思ってゆかりが口を開こうとした時――、

「ジュン君は無事みたい」

と、風花は言った。

彼女が発した言葉はそれだけだった。

そして、それで十分だった。

一瞬、ゆかりは風花の言葉の意味を把握しかねたが、彼女のニッコリとした笑顔を見ると、安心感が波のように押し寄せてきた。まるで、今まで自分はずっと呼吸を止めており、今やっと息継ぎする事が出来たかのようだった。

今まで自分が、どれだけ不安定な精神状態だったかを知ったゆかりは、今まで平静を保てていた自分が不思議で仕方がなかった。

「本当ですか！？」

隣にいたアイギスも、驚きと喜びが入り混じった表情をしている。淳が『彼』の息子という事もあって、彼女の有里淳に対する想いもまた、並々ならぬものがある。

今では高校時代よりも性格が人間的になっている為、下手をすればかつての『彼』以上に、淳を想っているのでは、とゆかりは少し心配だった。

アイギスが自分よりも大袈裟なリアクションをとった為、それを見たゆかりは、少し落ち着く事が出来た。

「当然でしょ？　私の子なんだから」

東京封鎖という過酷な状況の中、まだ無事でいる息子の逞しさに、ゆかりの胸は誇らしさでいっぱいだった。

しかし、喜んでばかりもいられない。息子が無事というのはこれ以上ないニュースだったが、ただ無事という訳ではない筈だ。

「さっき、瀬多君からメールが来たの。これ、見て」

ゆかりはかつての後輩の顔を思い浮かべながら、風花が指し示したモニターを覗き込んだ。

『昨晩、貴女の息子らしき人物を見かけました。有里淳という高校生です。有里という姓で、且つ月光館学園に通っているのだから、間違いないでしょう？

それにしても、父親そっくりだ。政府の連中には気をつけて。貴女達の行動を見張っています。これから自分はテレビの世界に入り、そちらからいざという時の為の脱出ルートを確保するつもりです。

貴女の息子に関しては、なるべく気にかけるつもりです。貴女と先輩の息子である以上、余り心配はしていませんが』

瀬多からのメールを見て、ゆかりは複雑な心境だった。今の今まで自分と『彼』の間に息子がいた事を、ゆかりは、瀬多には秘密にしていた。

だがそれは瀬多を嫌っていたから、という訳ではない。そちらの世界に関わらせる事で、かつての『彼』のように、愛する息子を失いたくない、というゆかりの切なる願いからだった。

十字架を背負うのは、自分達の世代だけで十分だ。あの子には一切責任がないし、幸せになる権利がある。

だが、やむを得ないとはいえ、瀬多に対して淳の存在を隠していた事に、ゆかりは少なからず罪悪感を感じていた。

果たして、彼は怒っているのだろうか？

それとも、尊敬していた先輩に実は息子がいたと知って、喜んでいるのだろうか？

……いや、それについては後で謝罪するとしよう。それよりも、今は他に考える事がある――と、ゆかりは思った。

「政府や翔門会は、ジュンさんの正体に気付いているのでしょうか？　つまり、ジュンさんが『彼』の息子だという事に」

そう言ったのはアイギスだ。

「瀬多君のメールには、そんな事は書いてないし……とりあえずは、大丈夫なんじゃない？」

風花が話す。二人の意見を聞きながらも、ゆかりの視線は未だ瀬多からのメールが表示されているモニターに注がれていた。

「……分からないかもよ？　瀬多君も『彼』と同じで、問題をなるべく一人で解決しようとする傾向があるし……」

そんなゆかりに対して、風花が真剣な口調で反論した。

「ネガティブに考えちゃ駄目だよ。それに、政府も翔門会も、まだ一日目という事もあって、封鎖や悪魔の対応に手一杯の筈。とても、ジュン君のことまで気なんか回らないと思う。それに今重要なのは、あの子が生きてるって事でしょ？」

風花の言葉を受けてぼんやりと頷きながら、ゆかりは、一体どう

すれば息子を救えるのかを考えていた。

自衛隊の包囲は厄介だが、桐条グループの協力を得ればそれほど脅威ではない。彼女は悪魔と戦った経験がなく、その存在も話だけでしか知らないし、そもそも人外の存在と戦う事さえ、淳を産んでからは殆ど無くなったのだ。

戦闘の勘を取り戻すまでに少しばかりの時間が必要になるかもしれないが、そこは気合いで何とかするしかない。

（――とくれば、早速準備しないと）

ペルソナ召喚を安定させる為の召喚器は勿論、弓、そして大量の矢も物置から引き出さなければ。後は携帯食や医療道具、出来れば代えの衣服も……。

「私も行きます」

――と。

そんなゆかりの考えに気付いたアイギスが、名乗りを上げた。ゆかりと彼女は、高校時代にはルームメイトだった事もあり、気心の知れた長年の友人だった。それに続いて、

「じゃ、じゃあ私も……」

そう風花が言いかけた所で――、

「……やめとけ」

と、部屋の入口から低い男の声が聞こえた。

見ると、そこには八十稲羽から戻ったらしい荒垣真次郎（あらがきしんじろう）の姿があった。その外見は高校時代から今も変わっておらず、黒いニット帽、紺色のコート、黒いパンツと、八月という事を考えれば頭がおかしいんじゃないか、と思う程の厚着をしていた。

「荒垣先輩！　帰ってたんですか？」

風花が驚いたような声を上げる。

「ついさっきな」

荒垣は淳の私室に入ると、壁ぎわのベッドに腰を下ろした。

だが、ゆかりやアイギスは、とても懐かしむような気持ちに浸れなかった。

「『やめとけ』って、どういう事ですか？」

ゆかりが言う。

「そのままの意味だ……。ロクに考えも纏めず、突っ込もうとすんなよ……」

そんな荒垣の台詞によって、ゆかりと、そしてアイギスの抗議に、更に拍車がかかる。

「……瀬多からのメールを見たろ。政府の連中が、俺達を見張ってやがる」

荒垣の口調自体は先程と一緒だったが、その中には反論を一切許さないという雰囲気が滲み出ていた。

「ここも、既に安全とは言えねぇ。桐条の奴に頼んで、別の拠点を作るべきだし――そうなると、今下手に動いて連中にこちらの動きを悟られるのはマズイ。何より、伊織やアキの奴もここに向かってる事を忘れんな」

「そう……ですけど」

荒垣の指摘が、実に正論である為、ゆかりはすぐに反論する事が出来なかった。

「それに、俺達は高校時代からのチームだ。どんな行動を起こすにせよ、先ずは全員の意見を聞かなきゃならない。それが俺達、特別課外活動部だ」

「……」

それもまた正論だ。しかし――、

「……先輩。私のたった一人の息子が、今の東京にいるんです」

ゆかりが言う。

「岳羽……」

「仮に私とあの子の立場が逆だったら、ジュンもきっと同じ事を言った筈です。私も……そして、死んだ『彼』も、2人共が、家族を

亡くす悲しみを知っています。私は、あの子まで失いたくなりません」

それを聞いては、流石の荒垣といえど胸が痛くなる。今度は、彼が反論できなくなる番だった。

「……いつもなら、この時間になるとジュンはリビングでテレビを見てるんです。自分の部屋にもテレビがあるのに。それをあの子は『ここのテレビの方が大きいから』、と言っていますが、本当の理由を、私は知っています。ジュンが、帰ってきた私を迎える為に、いつもリビングで待ってくれている事を。その後は、私が夕食を作って、それで、適当にそれをつまみながら、ジュンがいつものように、宿題がメンドくさいとか、あの先生がうるさいだとか愚痴って、それを私が適当に叱って……」

最後の方は段々尻窄みになっていき、最終的にゆかりは押し黙ってしまった。

当たり前の日常、当たり前の生活、それが突然、予期せぬ形で崩れてしまうものである事を、ゆかりは幼い頃から知っていた。にも関わらず、よりにもよって自分の息子がそれに巻き込まれるなんて……。

「分かった……じゃあ、せめて桐条と連絡が取れるまで待て。話はそれからだ」

荒垣が言う。

ゆかりの強い意志を改めて知った今、これが、彼の張れる最後のラインだった。

ゆかりにしても、息子の為に動く彼女は何も恐れはしないだろうが、決して愚かではない。ゆかりは沸き上がる激情を抑えつつ、冷静に状況を見極める能力を、高校を卒業してから今までの間に会得していた。

「……仮に行く事になったとしても、せめてこいつを連れていけ」

荒垣はゆかりの側にいるアイギスを指差した。それを聞いたアイギスは、一度力強く頷き、直後に、ピッと背筋を伸ばす。

荒垣の言葉を聞いたゆかりが、何か反論しようと口を開きかけたが、先手を打ったのは荒垣だった。

「お前もさっき自分で言ってたろ？　ジュンの奴に家族を失う気持ちを味わわせる訳にはいかない。ジュンは、『アイツ』が残した唯一の生きた証だ。『アイツ』を黙って死なせちまった俺達には、ジュンを守り抜く義務がある。……だが、もしお前の身に何かあったらジュンはどうなる？その時には、お前の代わりになってくれる『人間』が必要だ。ジュンを心から想って、最後まで見届けると信じられる人間がな」

今の荒垣はいつになく饒舌（じょうぜつ）だったが、それが逆に彼の気持ちを如実に表しているようにも見えた。

きっと、先輩もそうしたいんだ。

ゆかりはそう思った。

荒垣真次郎と有里淳は決して浅い仲ではない。ゆかりが夜勤や残

業でどうしても食事が用意出来ない場合は、彼が淳に手料理を振る舞っていた。時々、暇さえあれば料理を教えていると聞く。

荒垣にとって、淳は天田乾と同じく、弟同然の存在なのだ。

それを無理矢理抑えて、彼はゆかりを諭(さと)している。そんな彼の気持ちを思うと、ゆかりやアイギスは、今まで取り乱していた自分達を恥ずかしく思うと同時に、いくばくかの冷静さを取り戻していた。

「……皆、とにかく今は落ち着こう？」

暗い空気を和ませようと、風花が言う。

「私だって、ジュン君が心配だけど……。でも、考えなしに行動して、もしもの事があったら、誰があの子を助けるの？　今は、とにかく他の皆が来るまで待とう？」

この中で最も状況を理解できているのは、恐らく彼女だ。それが分かっているからこそ、ゆかりは素直に頷く事が出来た。

「うん……そう、だよね……」

「……」

そんな風に、ゆかりは曖昧ながらも風花の意見に肯定したが、アイギスは無言だった。

それを見て、ゆかりは、アイギスがまだ、今すぐ淳の救出に行く事を諦めていない事を悟った。

もしかしたら、淳に対するアイギスの気持ちは、ゆかりが思っているよりも遥かに深い物なのかもしれない。アイギスの頬が先程から僅かに紅潮してる事にも、ゆかりはとっくに気付いていた。

一瞬、息子とアイギスの仲はどの程度のものなのだろうか？　と、ゆかりは気を揉んでしまった。

まあ、アイギスは基本ロボットだし、『できる』訳がないのだが――精神的な距離はどうだ？　最近の子供は、親が思っているよりも進んでいるらしいし……。

いや、そういう事は、淳が無事に家に帰ってきてから、彼に直接聞いてみるとしよう――と、ゆかりは心の中で、自分自身に言い聞かせた。

その後は、あの子が気に入っている『わかつ』で、一緒にお祝いをするんだ。平凡な日常が如何に貴重かつ稀少で、掛け替えのないものであるのかを噛み締めながら。

今のところ、淳は無事らしいが、かといってこれから先、息子の身に何が起こるのかは『神』のみぞ知る。

ゆかりは、自分が助けに行くまで生きていますようにと、その『神』に祈りながら、また今夜も眠れそうにない、と覚悟した。

1st Day終了

――『有毒ガスってどういうコトー？　マジ意味分かんないんだけど……』

――『僕、ママとはぐれちゃったんだ。駅の近くにこんなに人がいたら、ママがどこか分からないよ……』

――『電気が止まったまんまだから、カラオケは出来ませんよ。あ、でも、数時間前に、別のカラオケ屋で歌を唄っている人がいるって聞きましたけど……。まぁ、こんな状況だし、どうせデマでしょうね』

――『涼しい場所を探していたら、変な叫び声が聞こえて……バケモノがいたんだ！本当だよ！本当に見たんだよ！』

――『折角、買い物に来たっていうのに、停電じゃ、電気街の意味ないよ……。あ、でもついさっき、そこの量販店に男の人が入っていくのを見たよ。え、特徴？　まぁ、かなり風変わりな人だったかな。髪は銀色で身長はかなり高かったし、しかも甚平を着てたしね。まるで時代劇から飛び出してきたみたいだ。その後、その人がどこに行ったかまでは知らないなぁ』

――『マジ見たんだよ！　バケモノっつーの！？　ハンパねーの！　超ヤベーよ！』

――『突然の停電に驚いたが……、まぁ、暑いのは我慢すればええじゃろ。暗くなると本が読めんのは困るがな。そうそう、本と言

えば、昼頃に背の高い若モンが『漢シリーズ』っちゅう本は置いてないか？　って聞いてきたのぅ。あのシリーズの魅力に気付くとは、最近の若モンも捨てたもんじゃあるまいて。……まぁ、そん時は在庫が切れてたから結局、その若モンは肩を落として帰っちまったがの……』

――『せっかく東京観光に来たのに何なのかしら！？　さっさと何とかしてほしいわ！　え？　銀髪の男？　知らないわよ。そんな目立つ外見なら、忘れる筈がないしね』

――『昨日、近所で殺人事件があったんだよ。アタシはまた吸血事件が起こったのかと思っちゃったけど、猛獣ですって！　怖いわぁ』

――『駅周りは見てきたかい？あんな風にされてるんじゃ、仕方ないね。大人しく少しの間待ってるよ』

――『六本木のライブ、マジやべぇ！　サイコーだったっしょ？　次はいつやるのかな？　あ、それと大ニュース！　そのライブを開いたハルが今日、男を探してたらしいぜ？　それってやっぱ彼氏かなぁ。あの人に探させて貰えるなんて、マジそいつが羨ましいしっ！』

――時刻は十九時丁度。

場所は、渋谷駅近く。

先程までの台詞は、情報収集がてら、淳達が道中の人達から聞いた話だ。

中には、既に悪魔の存在に勘づき始めている人もいる。今でこそまだ保たれているが、人々の心の均衡が崩れるのは、そう遠い事ではないだろう。

歩道を歩いていたユズは、憂鬱そうな面持ちで空を見上げた。

「もう陽が暮れちゃったね……。なのに、まだ外に出られない」

それにアツロウが答えた。

「確かにな……。封鎖が解ける気配は今のところないし、夜に悪魔と戦うなんて、こっちが不利だ。早いところ、居場所を探そうぜ。山手線内で、誰か知り合いの家とか知ってるか？」

アツロウにそう言われて、淳は必死で脳内のアドレス帳から、この山手線内に住んでいる友人や知人のはいないかと探してみるが、精々思い当たる人物と言えば……。

「俺が知ってるのは、ナオヤの家ぐらいだけど……まだ警察がいるだろうしなぁ……」

「私も、いないなぁ……。親しい子の家って、山手線の外側ばっかりだよ。せめてケータイが使えたら、友達のツテで探せるのに……」

二人の芳しくない返答を聞いたアツロウは、流石に落胆の色を隠しきれないようだ。

「参ったな、俺も同じだ。ネットに繋げりゃ、すぐに探せるんだけど……こんな状況だからな……」

「けど、こういう場合は大抵、近くの学校とかが避難所として解放されてるだろ？　早く探そうぜ。でなきゃ野宿だ」

「ん～……、歩き疲れちゃってて、どこでも休めればいいって感じだけどね……。悪魔に襲われたくないし、汗も拭きたいし……」

ユズがそう言ったので、淳も、昨日から自分がシャワーさえ浴びていないという事に気付いた。昼間の炎天下によって流れた汗もあってか、流石に匂いが気になってくる。女性であるユズなら尚更だろう。

ユズに続いて、アツロウも空を見上げた。濁った空気で覆われた東京の下では、それほど多くの星が見れる訳ではないが、月が発する淡い月光が、かろうじで淳達の視界を保っている。

「雨の心配はなさそうだから、公園もいいかもな。人も多いし、水くらい出るだろ。……にしても、腹が減ったぜ……」

「お昼にパンを食べただけだもんね……。流通が止まってるって事は、明日はご飯、食べられないのかな？」

「……もしそうなったとしても、俺が探してやるよ」

淳が言うと、アツロウも力強く頷いた。

「だな、俺も頑張って探すよ」

二人の友人から励まされて、ユズも僅かだが不安が薄れたようだ。
薄く微笑むと、「二人とも、ありがとう」と感謝の言葉を述べる。

「気にすんなって。にしても、今日は色んな事があったな……」

勿論、昨日も大変だったが、今日はそれ以上だ。

淳は、今日一日だけで自分がどれだけの人と出会い、どれだけの出来事が起こって、驚いてきたのかを思い出していた。

ラプラスメール。

デビルオークション。

邪教の館。

どれにしたって、完全には理解出来ない。まぁ、自分達にとって役に立つシステムである事には違いないが……。これでは、正体も分からない味方をつけているようなものだ。せめて、直接ナオヤに会う事が出来れば……。

「……それ全部、ＣＯＭＰのシステムだよね……。ナオヤさんはコレを使いこなせっていうこど、いつまで耐えればいいのかな……」

「ナオヤ曰く、この状況は長く続くらしいけどな……。にしても、最初よりは随分機能が多くなったな……」

「それもナオヤさんなりの配慮だろうな。最初から多機能より使いこなす内に機能が増えた方が、俺達も楽だ……」

「もし、そうだとしたら……アイツは、最初から俺達を巻き込むつもりだったって事になるけど？」

淳の妥当な指摘に、アツロウが顔を伏せる。

「そうか……。そういう事になるよな……」

「どっちにしても、ヒドイよ！　私達を巻き込む必要なんてないじゃない！」

昼間もさんざんナオヤをけなしていたユズが気炎を上げるが、アツロウは……、

「う～ん、きっと何か理由が……」

と、何とか自分のプログラマーとしての師匠の考えを把握しようとしていた。

「……そんな理由、あるかどうか分からないでしょ！」

ユズの沸点がそろそろ頂点に達しかけてきたのを見て、淳は慌てて仲裁に入る。

「……ま、まままあ。とりあえず、この話はやめようぜ？　分からない事を幾ら考えても仕方ない。そういう事は、アイツに会った時に聞きゃあいいんだ」

「あ……ゴメン、うん……そうだよね……」

その後、結局三人は宮下公園で野宿する事に決めた。

途中で拾った何枚かの段ボールを敷布団代わりにするものの、やはり寝心地は自宅のベッドの方がいい。そう思うと、三人の中にある『日常に戻りたい』という気持ちが、より一層強いものになった。

「寝る前には、ＣＯＭＰの充電もしとかないとな」

と、淳が言う。彼は今、自分達の仮寝床である大きな木の根本の周りに、簡単な『見張り』を築いているところだった。

公園にあるゴミ箱からなるべく沢山の空き缶を取り出し、その中に砂利を少量いれた後、小さな穴を開けて、そこに糸を通す。それに寝床を円の形で囲むように地面に刺した棒に張り巡らせれば、『見張り』の完成だ。

空き缶以外の紐や棒は、少し歩いた場所にある工具屋で入手した。

その店も当然のように閉まっており、店主も既に休もうとしていたが、事情を話すと快く協力してくれた（とはいえ、流石に見ず知らずの人間である淳達を店に泊めさせようとしなかった辺り、『お人よし』という訳ではないかもしれないが）。

もし、この『見張り』に張られた紐に悪魔や第三者が足を引っ掛ければ、それにつけられた空き缶が揺れ、その中の砂利によって音が鳴るという仕組みだ。まぁ、この程度じゃ見張りとも言えないだろうが……。

要は紐を跨げばいいだけだし、よしんば引っ掛かったとしても、その音でこちらが起きるという保証はないだろう。

それでも、何もしないよりは百倍マシだ。相手がこちらの理解が及ばぬ存在――悪魔である以上、考えられる対応は幾らしても足りはしない。

「そうだな。ＣＯＭＰは俺達の生命線だ。何があってもいいように備えないと」

アツロウが答え、ユズがそれに続く。

「それと……寝る時は、交代で寝た方がいいよね？」

そこまで言うと、不意にユズは自分の両手で自らをかき抱いた。そして、ポツリと一言。

「……家に帰りたいよ……」

その声は小さかったが、それは今日聞いたどんな音よりも――ハルの路上ライブや、ウンディゴの恐ろしい雄叫びよりも――淳とアツロウの耳に残った。

一瞬、淳はユズの体を力一杯抱きしめて、慰めの言葉をかけながら、朝まで一緒にいたいという衝動に刈られたが、アツロウがいる為、すんでのところで思い留まった。

やがて、それぞれの考えを抱きながら、三人は封鎖一日目の夜を過ごしていく（因みに、最初の見張りは淳が買って出た）。

『見張り』の外側で胡座をかきながら、淳は携帯を取り出す。

考えているのは、あの銀髪の男――セトの事だ。

ここに来るまでに出会った人達から聞いた話の中にも、彼の姿を見たという証言がチラホラとあったが、どれをとっても『よく分からない』というのが正直な感想だった。

待受画面から着信履歴を呼び出すが、今朝、間違いなくあの男から電話がかかってきたにも関わらず、あの見知らぬ番号は保存されていなかった。

それでもあの時、一瞬だけ番号を見た淳は、驚異的な記憶力で十一桁の数時を記憶していた。

が、そんなスパイ顔負けのスキルを発動したにも関わらず、携帯から流れ出てくるのは、『現在、この番号は使われていないか、或いは――』という、無機質な女性の声。

淳は舌打ちしつつ、携帯を仕舞った。あの男は必要な時がくればまた電話すると言っていたが、その『次』とやらは一体、いつになるのだろうか？　それ以前に、携帯のバッテリーがそろそろ寿命を迎えそうだ。

まぁ、ここまでもっただけでも大したものだが。流石は桐条グループの特注品。ここから更に連絡が取れるようになれれば最高なのだが……。

――いや、いいんですよ？　別に。そこまで期待してませんから。ただ、連絡のとれない携帯が果たして何かの役に立つのかなーと思っただけで。愛してますよ美鶴さん。

淳は空腹を感じ、僅かに視界がぼやけた。いつもなら母の――そ

うでなければガキさんの――手料理に舌鼓をうっている頃だがしかし、今日自分が摂取した食物と言えば、コンビニで買ったパン一つだけである。

背後で定期的に上がるアツロウとユズの寝息以外に静寂を破るのは、時々、ガサガサと鳴る得体の知れない枝や草の擦れる音だった。その音が鳴る度に、淳の神経は敏感に反応した。

次に見張りを交代するまであと三時間。そう考えると少し憂鬱になる。

同時に、二　人にこんな不安を味わわせるくらいなら、朝まで自分が見張りをやるべきだろうか？とも考えた。

夜の戸張が降りた事で訪れた闇は思った以上に深く、淳には数メートル先までしか見えなかった。『アギ』で火を点せば少しは明るくなるかもしれないが、そんな事をすれば悪魔が寄ってくるかもしれない。

――連中は獣と違って、火を恐れないからな。

こんな状況で何もせずに、且つ辺りが静かだと、ロクなことを考えない。淳はなるべく幸せな記憶を思い出して、自分を慰めようとした。

幼稚園の頃、淳は絵を描くのが好きだった。取り立てて上手な訳ではないが、何かを描く度に母が『ジュンは絵が上手いね』と褒めてくれたので、彼は素直に嬉しかった。

そんな淳を、幼なじみであるユズは一緒におままごとをしようと何度も誘っていた。

小学校の入学式の前日、淳は母親に連れられてデパートに赴いた。そこで彼はピカピカのランドセルを買って貰った。それを高々と掲げて喜んでいる淳の側を、別の小学生が通った。

その子の隣にはそれぞれ母親と父親らしき人物が仲良く手を繋いでいた。それを見た淳は、ふと疑問に思った——どうして自分には父親がいないのだろう？

そう思ってその家族を見つめていた淳に母が気付き、手を掴むと急いでその場から離れた。驚いた淳は、一体どうしたのかと聞こうと思ったが、母の頬に一筋の涙が流れていたのを見て、何も言えなくなった。

ああ、そういえば——淳は思い出した。丁度その後だ。母に学生時代の友人達を紹介されたのは。伊織順平、山岸風花、アイギス、桐条美鶴、真田明彦、荒垣真次郎、天田乾、後は……コロマル。

もしかしたら、父親がいなくて淳が寂しい思いをしているのかもしれないと悟り、そういった人達を紹介したのかもしれない。

だとしたら……言っちゃ悪いが、とんだ的外れだ。事故とかで亡くなったならまだしも、自分が物心つく前から既に、父親は他界していたのだ。その為か、それほど悲しいとは思っていない。

時計を見れば、まだ十分しか経っていない。やれやれだぜ、と淳は思った。あと二時間五十分もの間思い出し続ける程、自分は幸せ

な思いをしていただろうか……？

昨日はみっともなく途中で寝てしまった為、今日は絶対眠らないようにと、淳は何度も何度も頬を叩いた。

闇は相変わらず深く、その光景は永遠に続くかと思われたが、彼は最後まで気を抜かなかった。

「……俺は諦めない」

誰にともなく、闇に向かってそう呟く。もしこの封鎖を生き延びたら、母と一緒にお気に入りのレストランに行こう。そう思うと、淳は少しだけ幸せな気分になった。

◆

◆

『ＦＲＯＭ：ＡＴ－ＬＯＷ
ＳＵＢＪＥＣＴ：ナオヤさんは凄い

＞悪魔召喚プログラムって凄いよな。アレのお陰で、今日は何度命を救われたか。

ナオヤさんは、この世界に悪魔がはこびる事を知っていたから、これを作ったのか？それともナオヤさんが、この事件を起こしてい

る犯人なのか？情報が多いのか少ないのか、イマイチ整理できないんだよな……。

結局答えは出ないから、話すのをやめたけど……。ナオヤさんの目的が何なのか、それは俺も気になっているんだ。

山手線の封鎖はしばらく続くってメールに書いてあったけど、現状維持で済むとは思えない。状況はどんどん悪くなる一方だろ？

そうなったら、一体どうなっちまうんだろう？

もう少し情報が欲しいよなぁ……』

『ＦＲＯＭ：ＹＵＺ

ＳＵＢＪＥＣＴ：やっほ～！ユズだよ！

＞昨夜は仕方なかったけど、丸一日たってもまだ帰れないなんて思わなかったから、超びっくりだよ（；ω；、）

いつ出られるか分からないって、やっぱり不安。昼間は皆がいるから平気だけど、夜に色々考え始めると、考えがどんどん悪い方向に行っちゃって……。

せめてケータイが使えたら、こんな不安もなくなるのに……。

あ～あ、せめて熱いシャワーがあれば気分転換できるかもしれな

いのにさ！

こんな時は、近くに知り合いの家があれば良かったと思うよね…

…』

『ＦＲＯＭ：ＮＡＯＹＡ

ＳＵＢＪＥＣＴ：メール機能について

＞本来ＣＯＭＰが持っている筈のメール機能だが、悪魔召喚プログラムがサーバーと頻繁にデータをやり取りする時間帯には、負荷が掛かり過ぎて動作が不安定だった。

対処として、昼の間はサーバーからの送信と、管理者である俺以外は、メール機能を使えないように制限をかけてある。

悪いが、お前達のＣＯＭＰでメールを送信できるのは夜だけだ。ガマンしてくれ。

自分一人で出来る事など、たかが知れている。『コミュニティ』の力を使え』

◆

◆

――神はかつて、七つのラッパを響かせ、世界を滅ぼした。

淳達の封鎖一日目は、こうして終わりを告げる。

既に一つ目の音色は奏でられた。

滅びの時までに残された音色は、あと六つ……。

〈１ｓｔ　Ｄａｙ：Ｔｏｋｙｏ　ｂｌｏｃｋａｄｅ〉ｉｓ　ｔｈｅ　ＥＮＤ！！

デビサバ外伝―『プロジェクトP　進行状況報告書』（前書き）

これは、作者が暇つぶしに書いた、本作の外伝であり、内容は、「ペルソナ3」で語られている、桐条グループが行っていた非人道的実験の内容を、当事者の視点から、報告書のような形でまとめたモノです。それでも「仕方ないから見てやんよ」という寛大な心を持つ方のみご覧下さい。

デビサバ外伝―『プロジェクトP　進行状況報告書』

【報告書Ｎｏ．１】

当計画、『プロジェクトP（フィレモン）』は、ペルソナ使いとしての素質を自由に開花させることが出来る、『フィレモン』という謎の人物の力を再現し、シャドウに対抗できる存在――『ペルソナ使い』を人工的に生み出すことを目的としたものである。

責任者は、桐条鴻悦（きりじょうこうえつ）。及び、エルゴノミクス研究所の一員、幾月（いくつき）修司（しゅうじ）。

また、本プロジェクトは、グループ内でも極秘として扱う為、当会社の経費は出来るだけ使わず、この計画の協力者であり、桐条と親交のある『瀬多財閥』の現党首、瀬多総呉（せたそうご）からの援助金を、主な資金とする。

実験サンプルは、主に五～十二歳までの子供とする。

これは、現時点で唯一確認されている、自然覚醒型ペルソナ使い――党首の孫娘、桐条美鶴の特徴に、なるべく近付ける為である。

調達方法は主に、桐条、及び瀬多財閥の系列下にある孤児院や、当研究に携わっている職員の子供などから『調達』することにする。

また、本プロジェクトと同時進行で行われる、『七式特別兵装開発計画』も遅れが出ないよう、抜かりなく行うこと。

【報告書Ｎｏ．２】

現時点で、約三百体程のサンプルを『調達』完了。

数としては十分であると判断し、一旦、サンプルの補給活動は停止とする。

その後、全員に第一次実験を行ったが、その内の約六十パーセント以上が『破損』。

不要になったサンプルは、一旦、死体安置室に保管し、後日、焼却炉にて『廃棄』することを予定。

【報告書Ｎｏ．３】

残ったサンプルの全てに第二実験、第三実験を施したが、最終的に生き残ったサンプルは、僅か四体のみ。

以降から、それぞれを区別し、個々に実験を行う為、これらのサンプルの被験体名を決めることにする。各サンプルの名称は、次の通り。尚、被験体は本プロジェクトに参加している研究員の名から採られたものである。

以降に、それぞれのサンプルの特徴を記す。

?:被験体名『チドリ』
・性別：雌
・髪の色：赤
・ペルソナ：『メーディア』

?:被験体名『ジン』
・性別：雄
・髪の色：青
・ペルソナ：『モロス』

?:被験体名『タカヤ』
・性別：雄
・髪の色：白
・ペルソナ：ヒュプノス

尚、四体目のサンプルである『ミナト』については、他の三体と特異点が多い為、次の報告書に分け、まとめて記載する。

【報告書Ｎｏ．４】

四体目のサンプル、『ミナト』について。

両親は、どちらも当研究所の職員。

また、母親の有里淋（ありさとりん）は、本プロジェクトと同時進行している『七式特別兵装開発計画』で製造途中の、対シャドウ兵器『アイギス』の、人格パターンのモデルとなっている。

双子の姉がいるが、こちらは第一実験を行う以前から、適性なしと判断され、サンプル候補には挙がらなかった。

性別は雄。

髪の色は、元々は赤色だったが、投与した数々の薬品が色素に影響を及ぼしたのか、実験途中で、青色に変色する。

瞳の色はブルー。

残った四体のサンプルの中で唯一、ペルソナ使いに自然覚醒（・・・・）した稀有な個体。

ペルソナは『オルフェウス』。

第二実験の内容は、人格を操作する様々な薬品を立て続けに投与するというもので、他の三体が、投与直後に発狂したのに対し、このサンプルには全く異常が見られなかった。

基本的身体能力、及び潜在的知能値数のテストを、全てＳＳ判定でクリア。

これからは、このサンプルの詳しい情報を抽出することを、本プロジェクトの基本方針とする。

【報告書Ｎｏ．５】

被験体名『ミナト』の人格を更に細かく調整する為、二十四時間毎に、記憶制御薬を投与することが決定。

以後、これを実行に移す。また、このサンプルは『チドリ』、『ジン』、『タカヤ』とは隔離して実験を進めることにする。

サンプル補給の為、更に二百体近くを、孤児院などから『調達』。

第四実験開始。

数体のシャドウを格納した巨大倉庫へ、先に調達したサンプルに、『チドリ』、『ジン』、『タカヤ』、『ミナト』を含めた全てのサンプルを放置。

第四実験、終了。サンプルの内百五十体を失うという結果に終わる。

実験に用いたシャドウは『ミナト』のオルフェウスにより、全てが消滅。

【報告書Ｎｏ．６】

被験体名『タカヤ』の体の至る所に、謎の刺青（タトゥー）が出現。

詳しく研究したところ、これは制御仕切れないペルソナの力が、文様として滲み出たものであると判明。

後に、『チドリ』、『ジン』の体にも、僅かであるが、同じ文様が出現。

【報告書Ｎｏ．７】

異常事態発生。

当社の系列下にある孤児院の１つの責任者が、本プロジェクトの極秘情報を持ち出したとのこと。早急に策を練りたし。

【報告書Ｎｏ．８】

以前、報告した孤児院の責任者の対処について、以下の『処理』を決行。その内容を記す。

・対象が盗んだ書類が、例の孤児院にあることを確認。

・職員、子供を含む、孤児院内の全ての人間が就寝した時間を見計らい、『処理』を開始。

・睡眠ガスにより、対象を含む全ての人間が、急に目を覚まさないようにした後、孤児院の各所に灯油を流す。

・灯油に火を放ち、孤児院もろとも、対象を焼却。

・焼却完了。

・ただし、睡眠ガスの効きが浅かったのか、孤児院に預けられた子供の内、次の二名が生存。

●真田明彦（さなだあきひこ）

●荒垣真次郎（あらがきしんじろう）

・この内、真田明彦の妹は、『処理』に巻き込まれ、対象と一緒に焼却された模様。

・生き残った二人の生存は、本プロジェクトの脅威になりえないとみなし、放置しておくことを決定。

・対象の経歴に関する公式的記録を、全て削除。『処理』の全行程を完了。

以上。

【報告書Ｎｏ．９】

被験体名『ミナト』の体内から、謎の細胞が発見される。以下に、その詳細を記す。

・地球に現存する全ての生物形態に当て嵌らない、未知の細胞。

・シャドウ、及びペルソナとは、全く関係ない模様。

・研究の結果、シャドウと同じく未知の存在である、『悪魔』の因子に、限りなく近いものであることが判明。以降、この細胞を『Ａ＝ベル（アー＝ベル）ｂｅｌｌ細胞』と呼称することにする。

・被験体名『ミナト』の優秀な身体能力や知能値数の高さは、この細胞の働きによるものだと思われる。

・ただし、当プロジェクトには何の利益にもならないと判断し、この細胞については、一先ず保留することを決定。

【報告書Ｎｏ．１０】

異常事態発生。

別のプロジェクトの主任研究員である、岳羽詠一郎（たけばえいいちろう）の裏切りにより、エルゴノミクス研究所にて、巨大な爆発事故が発生。

それにより、研究に使用されていた大量のシャドウが、ポートアイランド内に逃走。

同時に、その混乱に乗じて、サンプルである『チドリ』、『ジン』、『タカヤ』が逃走。

早急に対策を練ること。

尚、最重要サンプルである『ミナト』については、再び大量の記憶制御薬を投与し、睡眠薬で眠らせた後、このサンプルの両親に、巖戸台へと繋がる大橋を経由して、一旦、研究所から隔離することを決定。

事態の収拾を計る為、『七式特別兵装開発計画』によって開発された、対シャドウ兵器、『アイギス』を起動。アイギスの前号機の全ては、起動する前に、シャドウによって破壊されてしまう。

ムーンライトブリッジ付近にて、『ミナト』を搬送していた車が、謎の大型シャドウの襲撃に遭う。その際、この車を運転していた『有里涼(りょう)』及び『有里淋』が死亡。

同時に、その場へ駆けつけた『アイギス』が、件の大型シャドウと交戦し、機能停止。

サンプルである『ミナト』は全身骨折の重体。意識不明。

尚、この件に少なからず関与していると思われる、神取鷹久(かんとりたかひさ)という男については――。

（ここから先は、大量の血痕が飛び散っており、文章を解読することが出来ない）

デビサバ外伝―『岳羽ゆかりの手記』（前書き）

これは、作者が暇つぶしに書いた、本作の外伝であり、「ペルソナ3」の世界から、約三年後に、岳羽ゆかりが女性主人公に宛てた手紙が内容となっております。あくまで補足みたいなもので、これを読まないと、物語を読み進めていく上で大きく分からない部分が出てくるという訳ではありあません。それでも「仕方ないから見てやんよ」という寛大な心を持つ方のみご覧下さい。

親愛なる有里澪（ありさとみお）へ。

淳（じゅん）の誕生祝いに、素敵なプレゼントを送ってくれて、ホントにありがとう！　一歳だっていうのに、貴女がくれたオモチャのバスケットボールで遊びまくってて、とっても楽しそうなの。

写真を見れば分かると思うけど、やっぱり、全体的には『彼』に似てるかな。だとしたら将来は必ず、とってもカッコよくなるんだろうなぁ。あ、でも、目の形だけは、私の方に似てるかも。美鶴先輩もそう言ってたし。

それとアイギスは、自分の仕事がない時は、ずーっと淳に付きっきりなんだよね。まぁ、私としても、中々家に帰れないから、アイギスが淳の世話を見てくれるのはありがたいんだけど……。

でも、あの子を見るときのアイギスの目って、な～んか怪しいんだよね……。どう見ても、高校の頃に、『彼』を見てた時と、おんなじ目なのよ。とは言え、淳はまだ一歳だし、まさかとは思うけどさ……。

ところで、話は変わるけど……。やっぱり私、淳を一度、ベルベットルームに連れて行きたいと思う。

今はまだ何ともないけど、私には、いつか必ず、この子も『彼』と同じように、『ペルソナ使い』に覚醒してしまいそうな気がして仕方ないの。

それだけは、絶対にダメ。この子にだけは、幸せに生きて欲しい。

万が一にもそうならないように、私、今の内に、淳の『ペルソナ使い』としての能力を封じたいと思う。自分の息子に、『彼』やお父さんみたいな人生を歩ませたりなんか、私、絶対にしたくないの。

ミオだったら、私のこの気持ち、分かってくれるよね？

以前、真田先輩の上司の周防さんって人から、あのベルベットルームにいる、イゴールって人には、人の内側に眠るもう一つの人格を抑えたり、封印したり出来る力があるって聞いたの。

昔起きた、珠瑠市の事件で、多くの人々の心に生まれた『ジョーカー』って人格を、イゴールに頼んで何とかしてもらってたって、周防さん、確かにそう言ってた。

つまりそれって、やりようによっては、まだ覚醒する前の『ペルソナ』の力も、抑えられるって事なんじゃないかなー……って、私は思うんだけど、どうかな？

とにかく私、近い内に、淳をベルベットルームに連れて行く。でも、『ワイルド』の力を持ってない私じゃ入れないから……。貴女が持ってる『鍵』が必要なの！　お願いミオ！　協力して！

お返事、待ってます。

――２０１３年１月１９日。

岳羽ゆかり

十五歳の誕生日を迎えてから数日後、サンフランシスコに旅行に行っていた父から、珍しくメールが届いた。

前半は、いつものように『定期テストではちゃんと一番をとったか』、『何か問題は起こしていないか』という、息子である俺よりも、明らかに自分に対する世間体を意識した内容だった。

父は、俺の事を息子とは思っていない。父にとって、俺はただの、利益を生む為の道具でしかない。

いずれは、最近、父が興した会社を継ぐ事になるだろう。

腹が立つことに、その会社の景気は良いらしい。

十五年間、俺は父の言いなりになって生きてきた。

母だけが俺の味方だが、その母も仕事で忙しく、殆ど顔を合わせない。

『いい子』を演じてきた、今までの日々。

いや、これからもそうなのだろう。

幼い頃からの英才教育のお陰か、運動でも、勉強でも、今まで俺に敵う奴はいなかった。

そんな俺に対し、大人達は賞賛の言葉を投げかけるが、クラスメイト達からは、そんな俺の存在がお高くとまって見えたのだろう。誰も、俺に寄り付こうとはしなかった。

だから、『友人』というのがいったいどのようなものなのか、俺には想像をつかない。

今も、昔も。

或いは、これからも。

最悪なのは、そんな生活を送っているにも関わらず、俺にそこから抜け出そうとする意思が全くない事だ。

そもそも、世間から見れば、俺は決して不幸ではない。

生まれつき背が高かったからか、イジメにあった事もない。

父が満足する成績をとれば、欲しい物は何でも手に入った。

発売されたばかりのゲーム機も、漫画の新刊も、かっこいいマウンテンバイクも、クラスメイトの皆が、喉から手が出そうになる程欲しがる物を、俺には簡単に入手できた。

だが、何一つとして満たされなかった。

そんなものよりも、公園で気の会う友人達と楽しそうに遊ぶクラスメイトの方が、百倍羨ましかった。

金では決して手に入らないものを、他の皆は持っている。

話が逸れた。

父からのメールの後半には、こうあった。どうやら俺は、八月頃に、日本に帰国して、今いるパリの学校から、『月光館学園』という所に転向する事になったらしい。

つまり、帰国子女ってやつだ（『帰国生徒』の方が正しいかもしれないが、まぁ、どっちでもいいだろう）。

俺は純粋な日本人だが、幼い頃からずっと外国暮らしだった為、日本の学校が一体、どのようなものであるのかについては、少しだけ興味がある。

もっとも、住む場所が変わるだけで、生活自体は今までと変わらないだろう――親の機嫌をとる為に、学年トップの成績を取り続ける生活は、全く変わらないだろう。

敷かれたレールの上を、ただ歩いていくだけの人生。

誰でもいい。

誰でもいいから、俺に思い知らせてくれる人間はいないだろうか？

世の中は、俺が思っているよりも、もっと素晴らしいものである事を、思い知らせてくれる人間はいないだろうか？

いる訳がない。

そうと分かっていても、しかし――そんな夢物語を見たくなって

しまうぐらいには、その『月光館学園』という日本の学校に、少しだけ――ほんの少しだけ、期待はしている。

……やれやれだ。

そんな妄想を抱いてる暇があるなら、とっとと帰国の準備をしよう。海外生活が長いため、日本語も少し練習しなくては。

そういえば、父からのメールには、俺が何故、その月光館学園とやらに転校する事になったのか、その理由が書かれていなかった。

別にどうだっていいが。

どうせ向こうに行っても、自分に友達が出来るとも思えない。変に期待して失望するよりは、最初から諦めていた方がずっと楽だ。

そして今日もまた、いつもと同じように、自問自答を繰り返す。

果たして俺は――何の為に生きているのだろう？

◆

◆

日本に帰国し、月光館学園に向かう電車に乗る直前、妙な人物に会った。

なんでも、俺が入る事になる寮の先輩で、わざわざ迎えに来てくれたらしい。

やれやれ、物好きな人間もいるものだ。

その先輩から、一緒に電車に乗っている時、驚くべき事を聞かされた。

何でも、自分は、予定されていた男子寮ではなく、『特別な人間』が集う、別の寮に入る事になったらしい。

『特別な人間』とは一体何なのか、俺は少し気になったが、大方、名誉欲に溺れた父が、妙な手回しをしたに違いない、と納得した。

それにしても、今日、俺を迎えに来てくれた例の先輩――確か、有里　〇とかいう名前だった気がする――からは、何とも奇妙な印象を受けた。

上手く言えないが、この人の近くにいると、どうも落ち着かない。心の内側で、何かが蠢いているかのような錯覚を受ける。

そう――錯覚だ。

錯覚の、筈だ。

今まで、友人が一人もいなかった俺だ。人を見る目がないと言われればそれまでだが――。

それを差し引いても、この先輩からは、何というか、こう……普

通ではない。そんな感じがする。

こんな人が同じ寮内にいるなら、もしかしたら――少しは面白い学生生活を送れるかもしれない。

デビサバ外伝―『何者かの手記?』

俺は今日『奇跡』を目の当たりにした。

これから、月光館学園に入学する事で、俺の新しい住まいとなる巌戸台分寮にも当然、門限はあるが、それをちょっとした気まぐれで破った俺は、どこに行く事もなく、気ままにその辺りをブラブラしていた。

すると突然、目の前に今まで見た事もない生物が現れた。不気味な青い仮面を被った、汚泥のような物体の化物（後に聞いたところ、それは『シャドウ』と呼ばれているらしい事が分かった）。

次には、シャドウはそれが当たり前のように、俺に襲い掛かってきた。俺は近くにあった鉄パイプ等をを武器にして、何とか応戦しようとしたが、やがて追い詰められた。

俺はその時、完全に疲れ切っていた。

間近に迫っていたシャドウに対し、俺は『死』を覚悟した。

だが、俺は死ななかった。

突然、轟音と共に、目も眩むような閃光が目の前を走り抜けたかと思うと、次にはそのシャドウが消えていた。

俺を助けたのは、あの『有里』という、現在高校二年生の『先輩』だった。

辺りからシャドウの姿が消えた後、俺は先輩に促されるまま、混乱しきった頭で寮に戻ると、もう一人の先輩である桐条美鶴という人に、まず開口一番、ガミガミ怒られてしまった。

門限を破ったのだから、当然といえば当然だ。

その後、他の寮生や理事長などから、先程の『シャドウ』のこと、そしてシャドウに対抗出来るのは人間では『ペルソナ使い』だけだという事、更に、これが今日一番、俺が驚いた事なのだが――何と自分も、その『ペルソナ使い』であるらしいこと。

最後には、そのシャドウから人々を守る為、自分達の仲間になって欲しい、ときた。

初め、俺は拒絶した。自分にそんな力はない。もしあったとしても、あんな怪物に立ち向かえる自信がない――今にして思えば、あの時の俺は酷く情けなかったように思う。

今まで何不自由ない生活を送り、親を満足させる為だけに生きていた人間の根性など、案外こんなものかもしれない。

やれやれだ。

全員が混乱している俺を必死に宥めている中、不意に、『先輩』が口を開いた。

「向かうも逃げるも、好きな方を選ぶといい」

「君の自由だ」

それだけ言って、薄く俺に笑いかけると、『先輩』は、さっさと自分の部屋に戻ってしまった。

しばらくの間、俺だけでなく他の寮生も含め、全員がポカンとしていた。

しかし、『先輩』の言葉は、俺の心を強く打った。

『君の自由だ』。

そんな事を言われたのは、親が敷いたレールの上をただ言われるがままに歩いてきた俺にとって、恐らく、生まれて初めてだった。

この『先輩』は、やはり不思議だ、と俺は思った。少なくとも、俺が今までに見てきた、どの人間とも全くタイプが異なる。

弱きを守り、悪を討つといった、反吐が出るようなヒーロータイプではなく、普段は物静かだが、ボソッとたまに漏らす一言が核心を突くような、そんなタイプだ。

少し経つと、俺は自分でも気付かない内に、この『特別課外活動部』のメンバーになる意思を固めていた。

しかしそれは、人々をシャドウから守る為だとか、そんな崇高な理念を持つようになったからじゃない。

俺に、生まれて初めて『選択肢』を与えてくれた、一人の『先輩』の背中を見ながら、この寮で過ごしていきたい、と思ったからだ。

不思議と、『シャドウ』や『ペルソナ』といった、まるでゲームのように奇天烈な力よりも、その『先輩』の方に、俺は興味を持ったのだ。

とはいえ、俺はまだその肝心の『ペルソナ』とやらに目覚めてはいない――ので、早くも明日から、戦闘訓練を開始する、と、この部の部長でもある桐条先輩から言われた。

もしかしたら、また『先輩』が戦うところを見れるかもしれない。

この日は俺にとって、今までの中で一番の恐怖を味わったと同時に、今までの中で一番の期待感を覚えた日になった。

デビサバ外伝―『何者かの手記？』

今日は、『特別課外活動部』の先輩達に連れられて、『タルタロス』という、いわくつきの場所に訪れた。

驚くべき事に、この『タルタロス』という建造物の場所は、俺が通う事になる月光館学園と全く同じ位置にあった。

桐条先輩が言うには、『影時間（昨晩、俺がシャドウに遭遇した時間）』になると、校舎が消え、この、頂上が見えないほど高い塔が出現するという。

まさか、正式な転校手続きをする前に、こんな常識離れした環境に身を置く事になるとは、夢にも思わなかったが、この時、俺が抱いていた感情は、『不安感』よりも『期待感』の方が大きかった。

因みに、新しくこの部のメンバーになったのは俺だけではなかったようだ。

順番的には俺が最後だが、天田乾（あまだいぬい）という小学生と、コロマルという犬も、今日、初めて、このタルタロス内において、探索に参加するらしい。

…いやいや。

犬と小学生って…。

以前、『先輩』が言ったように、この部、マジで『素質』さえあ

れば誰でも入れるようだ。

理事長曰く、この『タルタロス』の謎を解き明かす事こそが、今、巷で流行している『無気力症状』を解決する鍵になるらしいのだが、本当だろうか？

どうも、あの理事長は気に入らない。何故、と聞かれたら、正直回答に困るが…とにかく、気に入らないのだ。

本能があの男を拒否してるというか。

ともあれ。

タルタロスを探索する際は、指揮系統がとりやすいように、四人一組のチームで行動するのが、この部の基本らしい。

この日のメンバーは初の探索となる俺、天田君、コロマル、そして…リーダーである『先輩』の四人に決まった。

というか、このチーム決めの際に、『先輩』がリーダーだという事を、俺は初めて知った。しかし、昨日、目の当たりにしたこの人の圧倒的な実力を考えれば、それは至って当然の事かもしれない。

探索するにあたって、当然、俺や天田君らは、この部に在籍していく上で必須となる力、『ペルソナ』の出し方、使い方等を、先輩達から教わった。だが、特に面倒な手順があるわけではない。弾の入っていない拳銃――『召喚器』で、自らの頭部を撃つ。それだけだ。

しかし、弾が出ないとは分かっていても、銃口を自分の頭に押し

当てて、引き金を引くという作業は、精神的に、かなりくるものがある。

それでも、いざ本番となった時に「怖くてペルソナを召喚できませんでした」では、笑い話にもならない。その時になっても迷う事なく引き金を引けるように腹をくくると、俺は『先輩』、天田君、コロマルと一緒に、タルタロス内へと入っていった。

◆

◆

タルタロス内で初めての戦闘を経験してから、数日が過ぎた。

今ではもう、召喚器の引き金も平然と引けるし、シャドウとの戦闘も、完璧とまではいかなくとも、先輩方の足手まといにならない程度の働きが出来るようになりつつある。

しかし、『ペルソナ』『シャドウ』『タルタロス』『影時間』と、ファンタジーもここに極まれりな存在にも驚いたが、それ以外にも、俺が戸惑った事がある。

それは、『友人』が出来た事だ。

個性豊かで、一緒にいて楽しいと感じる事ができる、特別課外活動部のメンバー達。

いや、もしかしたら友人といえる程親密な仲ではないかもしれないが――少なくとも、俺は今まで、こんなに人と話した事はない。こんなに人と話すのが楽しいと思った事がない。

今までの俺は、もしかしたら死んでいたのかもしれない。

岳羽先輩は『先輩』の彼女で、本人は認めないが、怖いものが苦手だ。

伊織先輩はムードメーカーで、かつ弄られ役（特に岳羽先輩から度々弄られている）。

風花先輩はとても優しい、が、料理が下手だ。恐ろしく下手だ（重要な事なので、二度書いた）。

アイギス先輩はロボで、岳羽先輩と同じく、『先輩』の事を想っている。その為、岳羽先輩とは度々口論している。

桐条先輩はあの桐条グループのお嬢様。その点に関しては、俺も似たり寄ったりの身の上なので、よくそれぞれの苦労話に華を咲かせている。ただ、俺と違って父親をえらく尊敬しているらしい。

俺と同じく、幼い頃から様々な英才教育を受けている為、勉強、運動は大得意。ただ、訳分かんないタイミングで『マリンカリン』使うのはやめて下さい。

真田先輩はボクシング部のエースで、プロテインをこよなく愛している。あまりにもプロテインや牛丼を摂取している光景を何度も目にする余り、俺は、この人がいつかプロテインと結婚するんじゃ

ないかと密かに心配している。

ここから先の事は口には出さないが、体力はともかく、この人のおつむは若干残念な部類に入るようで、桐条先輩の『マリンカリン』よろしく、この人も意味不明なタイミングで『タルンダ』ばかり使っている。

それを見る度に、俺は心の中で「この腐れ脳筋タルンダ野郎が」と罵倒しているが、この事は『先輩』にしか話していない。

荒垣先輩は見た目は怖いが、根は優しい人だ。後、周りに人がいないときは、この人がコロマルに甘々な態度をとっているのを知っている。今度このネタをちらつかせてからかってみよう。

天田君は、メンバーの中では唯一俺より年下だが、かな～り大人びている。時々、彼の表情に暗い影が差しているように見えるのは、俺の気のせいだろうか？

コロマルは犬。メンバーの中で唯一（当たり前だ。そんなにたくさんいてたまるか）、動物でありながらペルソナを使う事ができる。柴犬の中ではメラニン色素の薄い『アルビノ』という部類に入るらしく、幼犬の頃は、紫外線に滅法弱かったらしい。

それにしても、小学生、ロボときて、次には犬ときたか。最終的には、宇宙人や幽霊がメンバーになったりしないだろうな。

澪（みお）先輩は『先輩』の双子の姉で、極度のブラコンだ。多分、この人は万が一『先輩』が刃物で人を刺したとしても、被害者に対して、「みっくんに刺されて死ねるなんて、何て運がいいんだろう」と言うに違いない（多分）。

そして…『先輩』。

俺が『この世界』に足を踏み入れる事になったきっかけを作った人物だ。

そして、俺が初めて『尊敬』という感情を抱いた人でもある。

思い上がっていた訳ではないが、俺は勉強も運動もその気になれば、誰にもひけをとらないと思っていた。

しかし、それは違った。

上には上がいる――――そんな言葉ぐらい、俺だって知ってはいたが、実際に、自分より明らかに優れている人物を目の当たりにすると、この言葉の意味が身に染みて理解できる。

『先輩』は、俺にとって大事な人間だ。

大事と言うなら、この部のメンバー全員が大事だが、その中でも、『先輩』は俺にとって、恩人とも言える人間だ。

この人に会ってから、俺の世界は変わった。

同時に、これまで自分が歩んできた人生が、如何に無駄で無価値で無機質なものであったのかを思い知った。

あんまりこの人に対する尊敬の言葉をここに書き連ねると、いらぬ誤解を招きそうなので念を押してくが――――『先輩』は男だ。そして、俺も男だ。だから、俺は決して先輩に対して恋愛感情を抱い

ている訳ではない。変な嗜好の持ち主でもない。

仮にそうだったとしてもだ――俺と先輩では、到底釣り合わないだろう。あらゆる面で比べても、俺と先輩はスケールや世界どころか、次元が違う。俺があの人に勝ってるのは、精々身長ぐらいだ。

その事を『先輩』の彼女である岳羽先輩に話したら、この人はクスクス笑いながら、「〇〇君は有名人だからね。尊敬してるのは君だけじゃないよ」と言った。

聞けば、『先輩』はやはり、この辺りでは相当な有名人らしい。恐らく、この辺りの高校生を捕まえて尋ねたら、まず間違いなく殆どの人間が知っていると言うに違いない、との事だ。

とある事情で今年の五月頃に、月光館学園に転校し、瞬く間に、そのあらゆる面で飛び抜けた才能をもって頭角を現し、いつしか『先輩』は月光館学園始まって以来の秀才と言われる程になった。

あのスーパー超人である桐条先輩がいながらもそう言われている事から、これが如何に凄まじいことかが分かる。先程、桐条先輩をスーパー超人と言ったが、それなら『先輩』はスーパーサイヤ人だ。

男にしては異常と言っていいほど艶のある青い髪、ともすれば女性と間違えてしまいそうな整った顔立ちを持つ『先輩』は、岳羽先輩という彼女ができた今でも、多くの女性から狙われているらしい。

とはいえ、真田先輩のように万人にモテるタイプではない。『先輩』は存在感が余りにも強すぎるが故に、逆に近付き難い雰囲気があった。

同じ人間だとは、とても思えない。

自分とほぼ同じ歳である学生が何かのスポーツでテレビに出てるのを見て、冗談混じりにそう思ったことはあれど、本音の本気の本心からそう思ったのは、もしかしたら、『先輩』を見たその時が初めてだったかもしれない。

テストの成績は常にトップ。

所属しているバスケ部ではエース的存在で、全国大会にも行ったらしい。

特別課外活動部のリーダーで、その実力も、満場一致のダントツで部内ナンバー一だ。

天才という言葉さえ、『先輩』には釣り合わない。

地球でさえ、『先輩』には小さ過ぎる。

正直、尊敬する事さえ、躊躇われる。

それでも、身に余る思いだとは知りつつも――俺は『先輩』の背中を追いかけていきたい。とても追いつく事は出来なくとも、足元に及ばなくとも、背中が見える程度の距離を保つ為に、追い続けていきたい。

少なくとも、『先輩』を尊敬してるという、この気持ちだけは――誰に強制されたわけでもない、自分で決めた意思だ。

ペルソナに目覚め、正式にこの部のメンバーとして活動する事に

なった今、これから先の生活は決して楽ではないだろうし、良い事ばかりでもないだろうが、俺はそれでも――この部のメンバーになって、自分の人生の価値観を変えてくれた『先輩』に出会えて、本当に良かったと思った。

2nd Day『青色と銀色』

「――そうか、もうかれこれ六回目の転校……。君も、親に振り回されて大変だね」

「いや、そうでもありませんよ。もう慣れました」

本来なら後数時間早く着く筈だった電車は、人身事故とやらでかなりの遅れが出ていた。

既に真夜中間近である為か、車内には殆ど人がおらず、ガラガラである。

そんな中で、二人。

学生服を着た二人の青年が、思い思いの会話を繰り広げていた。

どちらもが、俗に言う美男子である。

一人は、銀髪を眉の辺りまで伸ばした長身の男。若干ほりの深い顔立ちをしており、まるで時代劇に出てくる俳優のようだった。

もう一人は、銀髪の男よりは背が低く、男と比べると、恐らく百七十といったところか。肩まで伸ばした髪は青く、前髪が片目を隠している。

銀髪の男ががっしりした体格であるのに対し、青髪の男は細身で、顔立ちも「かっこいい」というよりは「かわいい」という形容詞の

方がしっくりくるという、同じ美男子でも、それぞれタイプが違っていた。

二人の着ている制服は、この電車が向かう先にある場所に最も近い学園――月光館学園の制服だった。

「そういう先輩も、親には苦労してるクチですか？」

「ううん、そうじゃないよ。何せ両親自体、既に亡くなってるしね」

青髪の男が発する声は、まるで鈴の音のように美しく、透き通っていた。その為、決して大声で話している訳ではないのに、全ての車両に聞こえてるんじゃないか、と銀髪の男が心配してしまった程だ。

「あ……スイマセン」

不躾な事を聞いてしまったと悟り、銀髪の男はバツが悪そうな顔をする。

「いや、別にいいよ」

青髪の男は、その顔に微笑を浮かべながらヒラヒラと手を振った。

それを見て少し安心した銀髪の男は、別の質問を投げかける。

「先輩は、どうしてわざわざ俺を迎えに来てくれたんですか？」

と、銀髪の男。

それを受けて青髪の男は、

「君が月光館学園に転校するにあたって、これからの生活を男子寮で過ごすって話は聞いてるよね」

と言った。

「ええ、そりゃまぁ」

「それ、急遽変更になったから」

「えっ!?」

銀髪の男は、驚いたように青髪の男へと顔を向ける。

「ところで、寮から少し歩いた先にある、『はがくれ』ってラーメン屋だけど、あそこのラーメンは全くもって――」

「いやいやっ！　勝手に話を逸らさないで……もとい、終わらせないで下さいよ！　ちゃんと事情を説明して下さい！」

「えー……、何で?」

「いや、何でって……」

それを聞くのか。

聞いてしまうのか。

「どうでもいい……」

「よくねぇよっ！」

うっかりタメ口になっちゃったり。

「つまり……君の男子寮入寮が、急遽キャンセルされて、僕のいる巌戸台分寮に住む事になったって事さ」

「いや、だから何でですか！？」

「さぁ……？」

「いや、『さぁ』って……」

自分は、何かこの先輩の気に障る様な事でもしただろうか？　と、銀髪の男は少し心配になった。

「理由なんて……どうでもいい」

「だから！　よくありませんって！」

いや、寧ろ、極端にメンド臭がりなだけか！？

ゆとり教育恐るべし！

「まぁ……そういうのは、その寮にいる先輩に聞いてよ」

「はぁ……て、あれ？　ちょっと待って下さい。俺はまだ中三ですよ？　高二の先輩とは住む寮が違いますよね？」

なのに、この先輩は先程、『僕のいる巖戸台分寮に』と、間違いなくそう言った。

「ああ……僕達が向かっている分寮はちょっと特殊でね。学年とかは関係なく、『ある素質』を持つ人だけが集まるんだ」

「ある素質……？」

銀髪の男は必死で、何か自分に取り立てて得意な事やずば抜けた才能があったかどうかを探ったが、全くもって思い当たらなかった。

「何なんですか？　それって」

そう尋ねるが、しかし、青髪の男は再び微笑を浮かべと、

「それにしても……面白い『因果』だよね。実は僕も今年の春に、こうしてこの電車に乗って、君が住むことになる巖戸台分寮に向かっていたのだけれど、その時も電車にトラブルがあったとかで、丁度今ぐらいの遅い時間になったんだ」

と、完膚なきなまでに銀髪の男の質問を無視した。それは「この話題はここまで」という意思表示にも見えたので、銀髪の男も、それ以上その話題には触れなかった。

「はぁ……そうなんですか」

確かに面白い偶然ではあるが――かといって、『因果』と言うほど大袈裟な話か……？

「僕が何を言いたいか分かる？　世の中にはね、間違いなく『運命』

や『因果』の類が存在するんだ。多かれ少なかれ、良かれ悪しかれ、ね。そこに『なぜそうなったのか?』と理由を求めるのは、かなり愚かしい上に、無駄な事だと思う」

「……」

「ああ、勘違いしないでくれよ――僕は別に、運命は予め決まっていて、抗いようがないとか、そんな負け犬の遠吠えよろしくの理論を説きたい訳じゃないんだ。寧ろ逆だよ。全くの逆だ。運命とは流されるものではなく――『流す』ものなんだ」

「『流す』?」

「そう。更に言えば、運命とはそもそもそこに在るだけで、決して流れないものなんだ。例え世の中に『人は運命に流されている』なんて言う人間がいたら、それはきっと、何かを諦めてる証拠なんだよ。キツイ言い方をすれば、その人は紛れも無くただの『敗者』だ」

「い、いや、ちょっと待って下さいよ」

流石に極論過ぎると判断したのか、銀髪の男が思わず異を唱える。

「『自分じゃどうしようもなかった』状況ってのも、世の中にはあるんじゃないですか? ホラ、例えば、道を歩いている時に、たまたま何かの偶然で交通事故に遭っちゃった場合とか……」

「それは違うよ」

ピシャリ、と青髪の男は銀髪の男の台詞を遮った。

それに対して、銀髪の男は、別に怒鳴られた訳でもないのに、思わず口を閉じてしまう。

「一つ言わせて貰うと――僕は、『たまたま』とか『偶然』とか『万が一』とか、そういう類の言葉が一番嫌いなんだ。この世に起こりうる全ての事象には、『たまたま』も『偶然』も『万が一』もない。そこにあるのは、『原因』と『選択』によって導き出された『結果』だけだ。そこには確率論なんで1ミリたりとも――否、一ピコたりとも入り込む余地はない。そう、例えばさっきの君の話……ええと、そう言えば君、名前は？」

「〇〇　〇〇……ですけど」

「ああ、そうなんだ。ゴメンね。僕も色々と忙しくてさ（大嘘）、君に関する資料にはまだ目を通してないんだ。それにしても、瀬多……か。うん、いい名前だ。恐らく『瀬多』という単語は、人類が残した中でも最も偉大な単語の一つだよ」

「えーと……ありがとうございます……？」

何か褒められたっぽいので、とりあえず礼を言ってみた。

「さて……話を戻そうか。例えば、さっきの瀬多君の話だけど、つまり君はこう言いたい訳だ。突然の交通事故によって死んでしまった哀れな人間は、決してそうなるように運命を流していた訳ではない、と。その主張は分からなくもないけどしかし、しかしだよ瀬多君。僕はそれを声を大にして異議を唱えたい。そうだな……、例えば瀬多君、君は数学が得意だったりするかな？」

「……まぁ……多少は」

「そうか。それはいい事だ。やっぱり人間、数学くらいは出来ないとね。順平の奴に聞かせてやりたいよ。さて、ここで既にそこにある『運命』を数式とし、『選択』を手順に、『結果』を数式の解としよう。言うまでもなく、その数式の答えは一つしかない。ここでさっきの話に戻るけど、その事故に遭った人間が、例えば通学路を歩く学生だったとしよう。恐らくその学生は、殆ど無意識に自分が歩くべき道を『選択』している筈だ。そしてその先には、例の『事故』という『運命』が待ち受けている。それはつまり、その生徒が事故という運命も含めて、それを選択したという事なんだ」

「いや、でも先輩。そんな事、その生徒に分かる筈がないでしょう？　まさかその先で事故が起こるなんて、それじゃ選択のしようもない」

「そんな事はないさ」

再び。

青髪の男は――そう、断言する。

「それじゃあ、数式の例え話に戻ろうか？　言うまでもないけど、その式の解を導き出したところで、それが正しいとは限らない。けど、それは間違いなくその式を解いた人だけの責任なんだ。それ以外の誰の責任でもない。当然さ、その式に取り組んだのはその人だけなんだから。それはさっき言った生徒だって同じだ。その生徒だって、その道を『選択』した先にある『運命』が『事故』だなんて、予想だにしてなかっただろうけど、その生徒はその気になれば、別の道から学校に行くという『選択』も出来た筈なんだ」

「……」

流石に――ここまで雄弁に、ここまで達者に言葉を並べられては、幾ら瀬多と言えども沈黙してしまう。

「ここで重要なのは、数式などとは違い、『運命』の『結果』には、決まった答えがないという事だ。『選択』によって導き出される『結果』の数はごまんとあるだろうけど、そのどれにも正解もなければ不正解もない。全てが正解で、全てが不正解とも言えるし、そもそも正解、不正解と区別する事は的外れだと主張する事も出来るだろう。さて、瀬多君」

――と、ここで、

青髪の男は初めて、瀬多へと顔を向けた。

その視線を、瀬多は思わず正面から受け止めてしまうが、しかし――すぐに後悔した。

暗かった。

青髪の男の、その瞳は――どこまでも暗かった。

目付きが『悪い』でもなく、『良い』でもなく、『鋭い』でもなく、ましてや『深い』訳でもない。

暗い。

余りにも暗い。

暗い。暗い。暗い。暗い。暗い。暗い。暗い。暗い。暗い。暗い。暗い。暗い。暗い。暗い。

暗過ぎる。

まるで――闇のように。

余りにも暗過ぎて。

何を考えているのか――分からない程に。

瀬多は堪らず目を逸らしたが、青髪の男はそんな事などまるで気にもしない風に、言葉を続ける。

「――さて、瀬多君。つまり僕が何を言いたいのかと言うと、君と僕の出会いは、間違いなく『運命』の『結果』である、という事だ」

「……」

え……？

この人、まさか……ただそれだけの事を言う為だけに、あんな回りくど過ぎる例え話をしたのか……？

意味が分からん。

「……やれやれだぜ。何つーか、先輩って、その、『変わった奴』って、よく言われません？」

本心から出た質問だった。

「さぁ？　よく言われるかもしれないし、言われないかもしれない。まぁ、仮にそうだったとしても、その『運命』は僕が『選択』した事だから、どうしようもないけどね」

「……そーいう考え方って、何か、息苦しくありませんか？」

「そんな事はないし、仮にそうだっとしても、それも僕が『選択』した事だからね。そうだな、丁度『選択』についての話が出たついでに、もう少し入り込んだ話をしてみようか。よく、『人生最大の買い物はマイホームだ』と言うように、僕達にも必ず、人生最大の『選択』というものがある。それが何か、瀬多君には分かるかな」

「いや……皆目」

「そうか。まぁ、君は僕より年下だから、それも無理らしからぬ事かもしれないね。人生最大の『選択』、それは『結婚』だよ。厳密に言えば、一生付き合うことになる恋人を『選択』する事こそ、人生最大の『選択』なんだ」

「へぇ……」

意外とまともな事を言うんだ……と、瀬多は少し感心した。しかし、僅か十七歳でその境地に達してしまうのは、少々枯れ気味なのでは？　とも思うが。

「元々、人生は選択肢の連続だけど――こと異性との付き合い程、人がそれを強く実感する時はない」

「先輩の事だから……その場合、結婚したって事が、その『選択』

の『結果』なんだって言いたいんですよね？」

「瀬多君がそう思うのならそう思ってもいいけど、僕の考えは少し違うかな。僕は、その恋人と子供を作って、そしてその子が生まれ、幸せな家庭が築けてこそ、初めて『結果』と言えるんだと思う」

「……」

流石の瀬多も閉口する。

この人……恋人を選ぶ時は、そこまで考えてるのか？

「先輩……流石にそれは考え過ぎじゃ……？」

「いやいや、そんな事はないさ。というのも、最初に言ったように、僕は両親のいない、天涯孤独の身でね。『家族』という存在を、何よりも貴重だと思ってるんだ。瀬多君はどうやら、ご両親の都合で今回のように転校する事が多いらしいけど、もしかして、そのせいでご両親と不仲だったりするのかな？」

「え？　あ、いや……」

いきなりそう質問されて、瀬多は若干答えにくそうな――困ったような顔をする。

「まあ、仮にそうだったとしても、それが君の『選択』だったとしても、気持ちは少し分かるよ。僕も昔からそうだった。両親が死んでから、周りに群がる大人は全員が全員、遺産目当ての人間ばかりだったからね――僕は単なるオマケ扱いだった。厄介払いでもされるかのように、何度も親戚の間をたらい回しにされたよ。だからこ

そ、瀬多君の気持ちも分からなくはないが――しかし、しかしだよ瀬多君。瀬多君の両親は、そういう理由で君を何度も転校させてる訳じゃないだろう？　君を愛しているからこそ仕事をして、その仕事を続ける為に、様々な場所を転々としてる訳だ。これはつまり、全ては君を育てたいが故、愛してるが故の『結果』なんだ。君は両親に愛されている。下手をすれば、僕が軽い嫉妬を覚えてしまうぐらいに、ね」

「まぁ、そうでしょうけど……」

青髪の男の話を聞いて、瀬多は彼の身の上に対して同情するべきか、反論するべきか迷ったが、結局反論する事を選んだ。瀬多が知る限り、こういった不幸な過去を持つ人間は、それに対して下手な同情を持たれる事を極度に嫌う。

「先輩の言う事は分かりますけど――俺の両親って、なんて言うか……ウザいと言うか、メンドくさいと言うか、とにかく、苦手なんですよね……」

「ふぅん……」

しかし、青髪の男は、そんな瀬多の反論に、短くそう答えただけだった。もしかしたらこの人、他人の話は聞かずに、自分の主張ばかり押し通すような人じゃないだろうな、と瀬多は少し心配になる。

「まぁ、君の『それ』が果たして反抗期によるものなのか、或いは更に込み入った事情によるものなのかは知らないけど、やっぱり家族は大事にするべきだ。こればっかりは、おいそれと『選択』出来るものじゃないしね。人は『それ』を無くして初めて、『それ』の大切さを実感するとはよく言うけど、もし『それ』が家族だった場

合は、とても『後悔』の二文字じゃすまないだろう。けど、僕には両親がいない。だから僕は家族が欲しいんだ。こう言うと瀬多君は少し引いてしまうかもだけど、僕は至って真剣でね。愛する女と、愛する家庭を築きたい。ただそれだけなんだ」

「そんな先輩の志は、立派だとは思いますけど……」

瀬多はやや緊張したかのように、言葉を選ぶように唇を舐める。

「でも――その考えを受け入れてくれる女性が、果たしていますかね？　気を悪くしないで欲しいんですけど……。大抵、女性が男性と付き合う場合は、そこまで考えてないと思うんですけど……」

「ん……？　ああそうか、そういえばまだ言ってなかったね。実は、僕には既に彼女がいるんだよ。勿論、さっき僕が言った理想を受け入れてくれた上での彼女がね」

「え？」

それを聞いて、瀬多は少なからず――というかかなり――驚いた。こんな変わった人と交際しているだけでも驚きだが、先程の話を聞く限り、その女性もまたこの先輩と同じく、子供を作る気でいるという事だ。

「マジでか……」

思わず、そう呟いてしまう。

昔、『十五歳の母』というドラマがあったが、十七歳でそういう考えを持つという事も、かなり早熟だと思う。

「さっきの話は別にのろけ話ととってくれてもいいけど。どうせいつかは君にも知れる事だしね。何せ、彼女もまた、僕達の住む巌戸台分寮の一員なんだから」

「……寮内間での交際はアリなんですか？」

「おおっぴらにそれを表すのはマズイけど。それはそれ。ちゃんと場所さえわきまえれば、少しぐらいは容認してくれる。僕達にしたって、寮内では余りイチャイチャしないというのが、暗黙の了解になってるしね」

「場所をわきまえれば、ですか……」

それなら……人目のつかない場所では、どれぐらいイチャイチャしてるのだろう？

ちょっと気になった。

「だけどまぁ、悩みの種が全くないと言えば嘘になるかな。僕の彼女は何というか、その、ちょっと《派手》でね。見ての通り地味な僕とは、釣り合いがとれないんだよ。変に気を遣わず正直に答えてほしいんだけど――瀬多君、僕の外見はどちらかと言うと地味だろう？」

「えー、あー、まぁ、普通だとは思いますけど」

瀬多はなるべく言葉を選びながらそう答えたものの、その表情が青髪の男の質問に対する瀬多の肯定を、如実に物語っていた。

「いやいや、別に構わないんだよ。僕自身そう思ってるし、そう在りたいと『選択』したんだからね。けど、僕の彼女はそうではないらしい。元々なのか脱色してるのかは知らないけど、髪は茶髪だし……。いや勿論、それぐらいなら例え脱色していたのだとしても別に構わない。けどねぇ……アイツ、制服改造なんかしてるんだよ。信じられるかい？　制服改造だよ制服改造！　スカートの丈は短過ぎるし、一体何を考えてるのか、上着はピンクのニットを着て、コナン君顔負けの馬鹿でかいリボンを蝶結びにしている。オマケにハートのチョーカーを首輪代わりになんかして……、一体何を好き好んで首輪なんかしてるんだか。そもそも、制服改造までしてそんな派手な格好をしながら、学校へ行く事に何の意味がある？　私服も私服で派手だ。何せ、夏服冬服問わずに、鎖骨が丸見えなんだよ。鎖骨はまずいだろう鎖骨は。確かに彼女は魅力的だけど、そんな格好でうろついて、変な連中に絡まれたらどうする？　それでなくても、隣を歩く彼女のそんな姿が、他の人間に見られていると思うだけで、気が気じゃなくなってしまうというものだ」

アンタもアンタで中々の変人っぷりだ俺としては寧ろそんなアンタと付き合えてるその彼女を褒め讃えたいぐらいだよ――とは言わず、瀬多は「なるほど、そうですか」と無難な返事をする。

ここまでの話から推測するに、下手な反論をするのは懸命とは言えないだろう。

しかし、

「なんだ――そういう先輩も、彼女との仲が悪いんじゃないですか？」

と、今までのお返しとばかりに、少し茶化してしまった。

「うん？　いやいやまさか、そんな事はない。今のこそ惚気話、可愛さ余って憎さ百なんとかかってヤツさ」

「『倍』ぐらい覚えましょうよ……」

この人、中々高度な物忘れをしていらっしゃる。

「更に言ってしまえば、僕達ぐらい仲睦まじいカップルはいないと思うよ。それこそ銀河系中を探してもね」

「銀河系ですか……」

ウルトラマンセブンの両親も真っ青だな。

いや、誇張しただけだろうけど。

「そうだなぁ、自慢話のついでだけど、いつの日だったかは忘れたが……彼女から財布をスッた馬鹿な不良が数人いてね。幾ら釈迦や仏が思わず感涙する程の心の広さを持つ僕といえど、その時ばかりは我慢が効かなかったよ。気がついたら、彼等の骨をあらかた折り終わった後だったな。全く、僕も短気だよ。まぁ、愛する彼女の為なら、それぐらいは当たり前だけどね」

「……」

普通なら明らかな作り話だと判断するところだが、この青髪の男ならそれもやりかねないと思ったらしく、瀬多は緊張したように口をつぐんでいた。

「しかしまぁ、いくら僕の彼女にちょっかいを出した阿呆とは言え、そのまま放置プレイに移行するのは流石の僕といえど気が引けたから、そこは救急車が来るようにお祈りしてあげたけどね」

「いや、そこは普通に電話で呼びましょうよ！」

思わず突っ込んでしまった。

「おいおい、そんな怒鳴る事でもないだろう？　第一、僕がしてあげたのはそれだけじゃない。慰謝料として、彼等のポケットにアイスの当たり棒を入れてあげたんだ。これを道徳的と言わず、一体何と言う？」

……ありがた迷惑だろ。

ありがた迷惑だろっ！

それにしても、その『彼女』の事を話す時の青髪の男の表情は、とても幸せそうだった。どうやら、その『彼女』を愛してるという気持ちに偽りはないらしい。

しかも、この調子だとまだまだ自慢話は続きそうだ。そんなこんなで、これから始まるであろう自慢話について瀬多が腹を決めようとすると、幸いな事に、自分達の目的地の名前を告げるアナウンスが車内に響き渡った。

どうやら、この電車の旅はそろそろ終わりを迎えるらしい。

「おっと――どうやら、そろそろみたいだね。やれやれ、すっかり遅くなっちゃったよ。電車のトラブルによって時間が遅れると、途

端に自分がこの世で一番不幸な人間じゃないかって思うのだから不思議だ」

「いや、それは流石に大袈裟でしょうよ」

二人はそれぞれが座っていたシートから腰を上げると、同時に電車が停止し、ドアが開いた。当然のように、2人はガランとしたホームへと踏み出す。大体の私物は先に郵送していた為、瀬多の荷物は少なめだった。

「――あ、そういえば」

と、巖戸台分寮へと向かう道の途中で、瀬多が何かを思い出したかのように質問する。

「先輩の名前を、まだ聞いてませんでしたけど」

「ああ、そういえばそうだったね。全く僕ときたら、これから同じ釜の飯を食べる事になるというのに、仕方ないったらありゃしない――と、ああ、ゴメン。名前だったね。僕の名前は、『〇〇　〇』って言うんだ」

何でもない風に、青髪の男はそう名乗った。

◆

◆

こうして、今まではごく普通で普遍で平凡で当たり前だった青年、『〇〇　〇〇』と、今までもこれからも普通ではなく普遍ではなく平凡ではなく当たり前でもない青年、『〇〇　〇』の第一接点（ファーストコンタクト）は終わりを迎えた。

これはまだ――東京が封鎖されるより、二十年近くも昔の出来事である。

２ｎｄ　Ｄａｙ『出口を求めて』

――宮下公園。

時刻は、六時丁度。上空を飛び交うヘリコプターのローター音と、拡声器から流れる放送で淳は目を覚ました。といっても、彼はただ目を閉じていただけで、実際には殆ど眠れていなかったのだが……。

余りにも多くの事を考えていたからだ。

まぁ、体を動かさずに横たわっているだけでも、体力はある程度回復する。

『一昨日十九時頃、青山霊園で発生致しました。爆発の原因は……流出した有毒ガスに送電線の火花が引火したものと確認されました。繰り返します。爆発の原因は、流出した有毒ガスに対する、火花の引火と判明致しました。各所及び駅付近で発生した有毒ガスは、可燃性である事が確認されており、現在も流出が続いております。現在、ガス流出の原因調査と、成分の分析が進んでおります。皆様には、引き続きご理解とご協力をお願い致します』

「……はいはい、爆発の犯人はとっくに俺がぶっ殺しましたよ……」

空を飛んで街中に放送を流しているヘリコプターに向かって中指を突き立てながら、淳は怠そうに体を起こした。

近くには、先程まで見張り役をしていたアツロウが、ヘリコプターに向かって恨めしそうな視線を向けている。

「いいなぁ、ヘリコプターはよ……。のんびり空なんか飛んで、俺達を嘲笑ってるみたいだぜ……」

「そんな言い方しないの……」

淳のすぐ隣では、今の今まで夢の世界にいたユズが、寝起きであるにも関わらずツッコミ役としての義務を果たしながら、ゆっくりと体を起こしていた。

ユズは大きく伸びをすると、

「それにしてもさ、有毒ガスへの引火ね……」

「ああ……どこまで嘘かは分からないけど、いよいよ、政府を信用するわけにはいかなくなったな……」

「俺は最初っから、連中なんてアテにしてないけどな……。第一、まさか政府が『爆発は翔門会が悪魔と戦ってたせいです☆』なんて言えないだろうし」

淳は、昨晩自分達の周りに張り巡らせていた見張りを片付けている所だった。

「最後の『☆』についてのツッコミは一先ず置いといて……ねぇ、本当に政府は、悪魔の存在を知らないのかな？」

ユズの質問に、アツロウが即座にかぶりを振る。

「そんな事ないだろ。これだけド派手なバリケードに、完全装備の

自衛隊員……。オマケに二十四時間体制の監視だぜ？　悪魔に備えてる以外、何がある？　何もかも全部知っててわざと封鎖を解かないとしか思えねぇよ……」

「政府の奴らが、何を考えてるかなんてどうでもいいけどよ、朝は必ず『時価ネット田中』のテーマソングで目を覚ましている俺としては、早くも禁断症状が起こりそう――」

淳がそこまで言ったところで、ＣＯＭＰからメールの着信音が聞こえてきた為、彼は思わず顔をしかめた。『時価ネット田中』のテーマソングの代わりが、今日一日の不幸を記したメールの着信音とは、余りにも酷すぎる。

「おっ？　今日のラプラスメールが来たみたいだぜ？」

そう言うアツロウがＣＯＭＰを開く中で、淳とユズもそれぞれのＣＯＭＰの画面に映されたメールの内容を確認した。

『ＦＲＯＭ：時の観測者

ＳＵＢＪＥＣＴ：ラプラスメール

＞おはヨうございます。

本日のニュースをお伝えしマす。

？十七時頃　港区　芝公園　にて　怪物　が　【出現】　翔門会

の　活躍　で　犠牲者　ゼロ。

？十八時頃　豊島区　池袋　にて　怪物　による　【死傷事件】
犠牲者　は　５０名　以上。

？全日　怪物　の　目撃　が　多数　【悪魔】　と　暫定的　に
呼称。

みなサま良い一日■』

――とまぁそんな感じで、やはり今回のラプラスメールにも、未来に起こる出来事を暗示した内容が記されていたが、中でも淳達の興味を引いたのは、２つ目の事件を示唆する部分だ。

それに気付いたユズが、気分が悪いとでもいうように眉をひそめる。

「池袋に謎の怪物、死傷者五十人……。謎の怪物って……悪魔だよね？」

「……そうだろうな」

アツロウも呆然としている。

「しかも、三番目の内容を見る限り、今日にでも他の皆は、悪魔の存在に気付くだろうな……」

それはつまり、そうなる程にこの東京に存在する悪魔の数が多くなってきている、という事だ。

「ああ、そうなるよな。それにしても五十人かよ……。……昨日よりも悪魔が増えてるからなのか、それとも、もっと強い悪魔が出現するのか……」

アツロウの推理は妥当なものだったが、どちらにせよ最高の未来だな、と淳は心の中で皮肉った。もし、今の東京が封鎖なんてされていなかったら、ドーナツ現象では済まないだろう。

と、そんな淳に対して、ユズが恐る恐るといった様子で声をかける。

「ねぇ、ジュン。私たちの余命って、どうなってる？」

「『1』だよ」

一瞬、ユズを気遣ってオプラートに包もうとしたが、どの道、真実からは逃れられないと判断し、なるべく短く、ハッキリと淳は現在表示されている余命を告げた。

しかし、ユズは何故かホッとしている。

「よかった……。『1』って事は、その池袋の事件に巻き込まれて死ぬ事はないよね……」

……ああ。

なるほど、そういう事か、と淳は思ったが、しかし、淳はその考

えに両手を上げて賛同する事は出来なかった。

「いや、そうとも限らないだろ」

「……えっ？」

「余命は絶対じゃないって、昨日証明したのは、他ならぬ俺達だろ？　俺達の行動次第で、余命を増やす事も可能だが、もしかしたら減るって事も有り得る」

と、淳が言うと、アツロウも「ああ、油断は禁物だぜ？」と念を押した。

「う……そっか……」

「……犠牲者五十名以上……か」

淳は再びＣＯＭＰに表示された池袋の事件の内容に目を通す事で、それが見間違いでない事を確認する。

池袋の事件。

犠牲者五十名以上。

自分達の命を優先するなら、本来関わるべきではないが、しかし……。

「……かといって、見逃す訳にもいかないだろ」

三人の心の内に漂っていた思いを、淳が代弁した。

「ああ……そうだな」

緊張を紛らわす為か、アツロウは頭に被ったニット帽の位置を直す。

「昨日で悪魔との戦いにも、大分慣れた気がしたけど……やっぱ、ビビるよな」

「うん……。まだまだ、悪魔の事なんて、何も知らないしね……。戦いに慣れても安心出来ないよ」

「肝心の余命も『1』だしな……」

淳が呟く。『1』ということは、遅くとも明日に、自分達の身に何か重大な出来事――具体的には、下手をすれば死に至ってしまうような出来事――が起こるという事だ。

「そうだよな……。ようやく雪男に勝ったっていうのに……、このまま明日になっちまったら、また同じ事の繰り返しだ……。俺達の余命は『明日』まで、他の人は『5日後』……。俺達の世界って、一体、どうなっちまったんだろうな？」

「……」

（俺達の世界、ねぇ……）

一般的に、世界と言えば、正に自分達が住んでいるこの地球を指すが、淳にとっての世界とは、母のいる自宅、及び知人友人がいる学校等がそうだった。

淳にとって『世界』の総人口は六十億人ではなく、母を含んだ数十人の人間だけなのだ。

そう考えれば、この東京という場所は、自分の世界とは全く関係のない場所だ。しかし、この封鎖を生き延びて、再び自分の『世界』に戻る事が出来るだろうか……？

「ねぇ……明日までに出口、見つかるかな？　もうヤダよ……こんなの……」

思わずマイナスな方向に向きかけた淳の思考に、そう呟くユズの声が聞こえたので、思わず彼は顔を上げた。

そうだ。自分が弱気になってどうする。昨晩、自分で『絶対に諦めない』と誓ったばかりじゃないか――。

「弱気になるなよ、ソデコ！」

と、同じ事を思ったらしいアツロウがユズを励ました。

「俺は死にたくない。もし出られなければ、また三人で運命を変えてやるさ！」

「う……うん……」

とりあえずはユズが落ち着いたらしいと判断したアツロウは、一つ咳ばらいをすると、淳に視線を向ける。

「それでさ……これからどうする？　今日も色んな所を歩き回るの

か？」

アツロウにそう言われて、淳はしばし考えた。携帯やＰＣなどのメディア機器が使えない以上、情報は自らの足を使って探し、確かめるしかない。

かといって、ただ無闇に歩き回るだけでは体力の無駄遣いだ。そうなると……。

淳は再び原点を振り返る。自分達のそもそもの目的は、この封鎖から抜け出す為の出口を探す事だ。とは言え、この東京が自衛隊によって完全に封鎖されているという事は、自分達で確認してしまったし……。

（……ん？　……いや……待てよ……）

淳の脳裏に、とある考えが閃いた。

「そうだ……地上以外なら、まだ可能性があるんじゃないか？」

それを聞いたユズは、首を傾げる。

「地上以外って……？　さっきヘリコプターを見たからって何を言い出すのよ。まぁ、本当に空を飛べたら、こんな封鎖なんて、簡単に飛び越えられるのにね」

「ヘリも悪くないけど、俺が言ってるのはもう少し現実的なヤツだよ。えーと、ホラ、例えば地下なんかどうだ？　よく映画とかでも、下水道から街を逃げ出すような話があるだろ？」

そうは言ったものの、淳はだんだん自分の閃きに自信が持てなくなってきているのを実感していた。

現実は映画のように都合よく出来てないし、そうであったとしても、自衛隊の徹底振りから見て、そちらも封鎖されていてもおかしくない。

「ん……？　待てよ……」

しかし、そんな中、アツロウが何か考え込むかのように額に手を当てた。

「……？　どうした、アツロウ？」

「あっ……首都高！　そうだよ！」

「だから何だって……」

「いや、もしかしたら、線路を跨ぐ首都高を使えば、封鎖から抜けれるんじゃないか！？」

そこまで聞いて、淳はなるほど、と頷いた。アツロウの発送は、正に僥倖と言ってもよかった。

同じく事情を把握し、パッと明るくなったユズは、

「そっか……！　渋谷駅の隣を通ってるし、ちょうどいいかもね！」

「よしっ！　んじゃ善は急ぐか！」

淳は胸の前で自らの掌を拳で叩く。

「うん！　何もしないよりマシだもんね！」

そんなこんなで――明確な目的と一筋の光明が見えた事で、気分が高揚してきた三人は、確かな足取りで宮下公園を後にした。

2nd Day『本多保行』

そんな感じで、三人は首都高へと向かったのだが、どうやら他にも同じ事を考えていた者がいるらしく、そこにはちょうど五～六人の集団が、首都高から降りてくるところだった。

――『降りてくる』という事は……。

そこから導き出される結果に、淳は狼狽を隠せない。

その集団の中で一人、淳達に声をかけた人物がいた。オールバックの髪に、鋭い眼差し、灰色のスーツをキッチリと着こなした男である。

「……君達もひょっとして、首都高で山手線の外に出ようとしているのかい？　だったらムダだよ、封鎖されてる」

「……それはそれは」

余りにも落胆の気持ちが大きかった為、淳はそう答えるのが精一杯だった。

そんな淳の目の前で、その男の視線が妙な方向へ動いた為、淳は思わずその視線を追った。そして、男がどうやら自分が持っている改造ＣＯＭＰに興味を持ったらしい事が分かった。

「……ん？　面白い物を持ってるね。こんな時でもゲームで遊ぶのかい？」

「え？　あ、まあ、暇潰しぐらいにはなりますから」

淳は歯切れを悪くしてそう答えながら、咄嗟に男の目からＣＯＭＰを隠した。まさか見ただけでこれが悪魔召喚を可能とする改造ＣＯＭＰであるとばれる筈がないとは思うが、それでも余り人に見せたい物ではない。

「そうか……。確かにこの状況じゃ、する事もないからね」

てっきり怒られると思っていた淳は、心底同情しているらしい男の台詞を聞いて、少し驚いた。どうやら、この男は物分かりのいい大人の部類に入るらしい。

「私は本多保行（ほんだやすゆき）だ。閉じ込められた者同士、助け合おうじゃないか」

言って、ホンダは淳に手を差し出してくる。淳は中々紳士的な人だな、とやや面くらいつつも、その握手に応じた。ここまでの印象から判断するに、ホンダの正体はエリート商社マンと言ったところだろうか。

「どこかで会ったら、その時はよろしく頼むよ」

その後、淳達も簡単な自己紹介を交わし、それを聞くとホンダはその場から立ち去って行った。

淳の隣では、アツロウが失望を滲ませた視線を、首都高へと続く道に向けている。

「もしかしたら……って思ったけど、そんなに甘くないか」

「……まぁ、向こうに行く前に分かっただけでもよかっただろ。……にしても、首都高が駄目となると、他の方法を探すしかないか……」

そう話す淳に対して、ユズが「……他の方法って何よ？」と尋ねてくるが、勿論、淳にしたって明確な次案がある訳ではない。

「……とにかく、ひたすら歩き回って、情報を集めるしかない」

「結局そうなるのね……」

正直な話、自衛隊の警戒がここまで厳重となると、最早脱出を諦めて別の解決策を見つけるしかないんじゃないか、というのが淳の本音だったが、流石にそれを口に出す事は出来なかった。

しかし、情報云々の前に、新たな問題があちこちで発生していた為、淳達はそれらの変化に対応しなければならないという、新たな問題も出てきた。例えば、新宿の歌舞伎町を通り掛かった時などがそうだ。

いつもなら人混みの激しい歌舞伎町も、この状況では閑散としてしまっている……というのが、昨日の状況だったが、この時は違かった。大勢の人々が、押し合いへし合いしながら何かに群がっており、辺りには喧騒が響き渡っている。

「……何だ？」

淳が少しだけ首を伸ばすと、人々が群がる先に、トレーラーのコンテナのみが歌舞伎町の通りに放置され、そこに向かって人々が殺

到している光景が見えた。

その状況を見て思わず唖然としている淳達に対して、側を通りかかった男性が、（別にこちらは何も言ってないし、してないのに）何故か怯えたような表情をこちらに向ける。

「な、何だお前達は！　こ、この食糧は俺のものだからな！　欲しかったら自分で取って来いっ……！」

そう言うと、男性は持っていた食糧を淳達から隠すようにして、その場から去ってしまった。淳は明らかに平静を欠いていると分かるその男性に向かって、少しの間、不機嫌な視線を向けた後、再びコンテナの中を覗く。

なるほど、そこには確かに、食糧品などの救援物資が入っていた。

まず間違いなく自衛隊の――つまりは政府の――措置だろうが、半ばパニックと化した人々によって、中には潰されるなどして、利用価値を無くしてしまった物資があちこちに散乱していた。

近くを通り掛かった別の人間から詳しく話を聞くと、やはり自衛隊のヘリが、コンテナを落として飛び去って行ったらしい。

ようやく状況を把握する事が出来た淳とアツロウは、慌ててその喧騒の中に飛び込み、食糧品の回収に向かった（流石にこのような役目を女性であるユズにさせる訳にはいかない）。

「いててて……」

数分後、淳とアツロウは服を乱れさせ、体のあちこちに擦り傷や

引っかき傷を作りながら、何とかある程度の食糧品を手に持って戻ってきた。

「……水と、固形食糧。味気ないけど、これで明日一杯はＯＫだな……にしてもよ～！」

未だパニックが続いている現場を離れた位置で見ながら、アツロウは憤慨する。

「配給っていうのは、普通だったらちゃんと配るんじゃないのか？これじゃ、動物の檻に餌を放り込むみたいじゃないか！」

「……なんか、ヤ～な予感がするな……」

アツロウがそう自衛隊をけなす中、しかし淳はそれとは別に、この状況に対し、得体の知れない不安感を感じていた。

「そうだよな、嫌な予感がプンプンするよ……」

「えっ？　嫌な予感って？」

と、ユズ。淳は持ってきた食糧品を整理しながら、

「昨日の封鎖に対する手際の良さや、警察ではなく、自衛隊の警戒網。そして、今みたいな不躾な配給……」

そこまで言った淳の説明を、アツロウが引き継ぐ。

「ああ……。これじゃ、政府が俺達をすぐに助ける気がないって言ってるようなもんだ」

「そんな……。じゃ、私達はどうなっちゃうの？」

最早、政府に見捨てられたであろう事は、ほぼ確定したようなものだが、そんな事を言ったらユズに無駄な不安を与えるだけだと思い、淳は何も言わずに黙っていた。

アツロウはどうやら、そんな淳のユズに対する配慮に気付いたらしく、こちらも敢えてユズの質問には答えずに、「さて……。とにかく、他を探してみようぜ」と言う。

もってあと数日だな――と、歌舞伎町から離れるように歩きながら、淳はそう思った。政府のざっくばらんな対応、そして何より、『悪魔』という未知で危険な存在に、薄々ながらも感づいている者は、決して少なくないだろう。

いずれ起こりうる本格的なパニックに遭遇しても、決して心が折れないように腹を決めている淳と、アツロウ、ユズの三人はその場を後にした。

２ｎｄ　Ｄａｙ『本多保行』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・ホンダ（本多保行（ほんだやすゆき））

年齢：３２歳

誕生日：９月２２日（乙女座）

血液型：Ｂ型

身長：１８３ｃｍ

体重：８４ｋｇ

家族：息子のみ（幼い頃に、父は病気で、母は事故によって死別）

職業：（表向きには）一般企業の会社員

好きな食べ物：寿司（すし）

嫌いな食べ物：ピザ

趣味：ゴルフ

2nd Day『ハルを捜す男』

『テレビの世界』は、現実の世界をほぼ忠実に再現する。

その為、現実世界ならば山手線の線路沿い、もしくは高架があるであろう場所に、何か目に見えない障壁のような物が張られていても、セトは別段、驚きはしなかった。

恐らくは、現実世界での『東京封鎖』という現状が、人々の心――集合的無意識――を通して、この世界に反映されてるのだろう。

もし必要とあらば、セトは力任せにそれを打ち破る事も出来たが、流石にそんな事はしなかった。

それが成功した所で障壁が破られている時間はほんの数秒で塞がってしまうだろうし、そもそもこの障壁が破られたからといって、それが現実の世界に反映するとは限らないだろう。

その障壁は一見すれば透明で、目には見えなかったが、そこにはまるで地下から水が天に立ち上っているかのように、空気が波打っていた。

若干躊躇いながらもそこに手を触れてみると、触れた部分で激しいスパークのような現象が起こった為、セトは慌てて腕を引いた。少なくとも、もしここに体ごと突っ込んだら火傷どころでは済まないだろう。

セトはいざという時の為に、この世界にあるデパートのコインロ

ッカーに大まかな装備と食糧、医療用キットを共にしまっていた。

ちなみに、彼の仲間の一人である鮑美海狗の面倒は、現在、ショウジに任せている。あのじゃじゃ馬を体よく押し付けてしまったかと思うと、僅かばかりの罪悪感が込み上げてきたが、かといって、この危険な世界に連れて来る訳にもいかないだろう。

現在のセトの装備は、『十握剣（とうかのつるぎ）』という、一振りの刀だけだった。

それだけでも――どころか、徒手空拳でも――この封鎖を生き延びられるという自信が彼にはあったが、しかし彼は傲慢という訳ではない。『人事を尽くして天命を待つ』という言葉を、彼は自分にとって正しく金科玉条だと思っていた。

テレビの世界は、昔と変わらず今も深い霧が覆っており、視界が殆ど効かない。

てっきりアメノサギリやイザナミを倒した今となっては、最早霧が出る事はないだろうと思っていたのだが、どうやら彼女達の存在は二次的なものに過ぎなかったらしく、この世界はまだ、依然として深い霧が支配していた。

これも、人々の心の影響なのか、とセトは思った。人は皆、本性の上に自分で作り出した人格――仮面を被って生きている。その仮面を長い間被っていると、いずれは当の本人でさえ、その本性の存在を忘れてしまうのだ。

それこそまるで、『霧』に紛れてしまったかのように。

セトがまだ未熟だった頃なら、この霧の中でも視界がきく『眼鏡』

が必要になっただろうが、既にペルソナ使いとして熟達しきった今となっては、それさえも彼には必要ない。

長年の経験によって鍛え上げられた五感が、彼に眼鏡をかけた時以上の状況把握能力を獲得させていた。

現実世界でいう所の歌舞伎町の通りを歩いていると、不意に彼は足を止めた。そして、自らの足元を見つめる。

その真下の空間――恐らくは下水道だろう――で、何か蠢く存在があった。シャドウか、はたまた悪魔かは分からないが、準備運動には丁度いいと思い、彼は目指すべき目的地を、一先ずは『そこ』に変更した。

少し歩くと、すぐに下水道へと続く大きめのマンホールをみつけた。彼はその重い鉄の板を、何とシールでも剥がすかのように片手で剥ぎ取ると、ポッカリと空いたその円形状の空間に体を滑り込ませる。

「かのイザナギ様が、下水道なんかに忍び込んでると知ったら、またレミエル辺りから説教をくらいそうだな――ったく、やれやれだぜ」

そう自虐的に呟き、セトは悪臭漂う下水道を注意深く進んで行く。

テレビの世界特有の霧以前に、そもそも地下である為、中は一切の光が届かぬ暗闇が支配している。下水道の天井は（セトにとっては）低かった為、彼は少しだけ身を屈めながら進まねばならず、それが少し不快だった。

彼は少しの間迷った後、結局、下水に浸かりながら進む事にした。

膝下まで伝わる汚水の感触も不快だったが、少なくともこれで身を屈めなくて済む。同時に機動力も若干落ちてしまうだろうが、百戦錬磨のセトには勝算があった。

未だ刀さえ鞘から引き抜かぬまま、セトは途中の分かれ道を右に進む。例え視認できなくとも、セトの直感はその方向にいる敵の存在を確かに捉えていた。

だが、分かれ道を進み切る前に、セトは後ろを振り返ると、唐突に側にある壁を殴った。

たった一撃の右ストレートで、下水道の壁に亀裂が入り、崩れる。その向かいにある壁も同じように殴り崩すと、やがて先程まで彼の歩いていた通路が瓦礫で満たされた。

完全な行き止まりとは言えないものの、いざという時に敵の退路を塞ぐ為には、十分な役割を果たしてくれるだろう。

しかしこれは、彼自身の退路も絶った事になる。だが、勿論彼が逃げ出す事などありえない。仮にそれで命を落とす事になろうとも、彼にとっては本望なのだから。

そう――例えこの先で、魔界からこちらの世界に紛れ込んだ強大な悪魔――ベル神達と遭遇する事になろうとも、彼が逃げ出す事など有り得ないのである。

◆　◆

三人が表参道を歩いていると、少し先で、何とカイドーとジンが何か話し込んでいる光景が目に入った。

どう見ても初対面という風でもない為、二人が以前から知り合いであったろう事は間違いない。

それを見て、淳はあの二人に一体どのような接点があるのかと、少し不思議に思い、二人の会話をギリギリ気付かれないであろう距離から、アツロウ、ユズの二人と一緒に耳を傾ける事にした。

「マジで、凄いんスよ。昨日会った、変な銀髪ジジイに渡されたんスけどね」

と、そう言いながら、カイドーは手に持ったＣＯＭＰをジンに見せている。ジンはそれに対して、異常とも思える程の関心を示していた。

「これが、その……か？　……だとしたら、あのお客が置いてった『アレ』も……」

しかし、ジンの声は呟いているかのように小さく、カイドーの時と違って途切れ途切れにしか聞き取る事が出来ない。

「……一体、何を話してるのかな？」

と、ユズが淳の耳元で囁く。

「……分からない」

淳は短くそう答えると、再びその会話に耳を傾けた。

未だカイドーのＣＯＭＰを見つめるジンの目には、並々ならぬ関心の色が宿っていた。それに気付いたカイドーは、不思議な表情をする。

「ジンさん……？　どうしたんスか？」

「……いや、何でもない」

ここでようやく、ジンはＣＯＭＰから目を離した。

が、しかし、その目には未だに、何かしらの強い意志が宿ったままである。

「そうスか……。俺はダイモンズの連中に会うんで、これで失礼します」

そうカイドーが告げると、やがて二人は会話を打ち切り、その場から去って行った。二人が完全に去ったのを確認すると、早速淳達は先程の二人の会話について議論を始める。

「カイドーが持ってたアレって……ＣＯＭＰだよな？」

とアツロウが言えば、

「しかもきっと、ただのＣＯＭＰじゃなくて、俺達のと同じ改造ＣＯＭＰだろうな」

と、淳が補足する。

「どうやって手に入れたのかな？」

そうユズが疑問を唱えるが、淳にはおおよその見当がついていた。カイドーの言った『変な銀髪ジジイ』という単語と、淳の知っているある人物とを関連付ける作業は、それほど難しい事ではない。

問題は、『アイツ』がどうやって改造ＣＯＭＰを手に入れたのか？　そして、それをカイドーに渡したのは何故か？　という事だ。

――と、そんな風に淳達が思案していると、突然、背後から「ああ、君達……」と、見知らぬ男性に声をかけられたので、思わず淳はそちらを向いた。

見れば、そこには若干やつれた感じ――先程のホンダとは対象的な、全体的にひ弱な印象の男――の、サラリーマンらしき黒いスーツ姿の男が佇んでいた。男の余命は『５』と表示されている為、少なくとも悪魔ではないだろう。

「……？　え……何ですか？」

と、ユズが若干、不審な目をその男性に向ける。

「君達、ハルと知り合い？」

そんな男性の口から思わぬ質問が出た為、淳は思わず首を傾げた。同時に、ユズはますます警戒心を強めながら、慎重にその質問に答える。

「え、ああ……。話した事ぐらいはあるけど……、あなた誰ですか？」

「いや、昨日の路上ライブで彼女を見かけてね、凄く感動したんだよ」

と、男性が話す。その顔には、確かに彼女の歌に感動したらしい事を表す、僅かな笑みがあったが――しかし、淳はその笑顔が若干作り物めいてる事に気付いた。

この男は……？

「ポケットアンプにも関わらず、あんな素晴らしい歌声を聞いたのは、生まれて初めてだ……！　実は私、レコード会社の者なんだが、彼女とぜひ話をしたい。君達、彼女を紹介してくれないかな？」

それを聞いた淳は、どうしてこの男は、自分達がハルと知り合いである信じて疑わないんだろう？　と疑問を感じずにはいられなかった。

まぁ、昨日、ハルとは六本木、及び武芸館前と話しているので、もしかしたらその光景をどこかで見ていたのかもしれないが……。

しかし、ハルがプロになるかもしれないと知ったユズは、彼女の大ファンである事も重なって、そんな疑問も感じず素直に喜んでい

た。

「うそっ……！？　ハルがメジャーに行くの！？」

「ああ、社長に電話したら、ぜひ、契約を取ってこいと言われてね。それで、彼女を探してるという訳さ」

淳はそれを聞いて、ユズと同じように「それは凄い！」と素直に喜びそうになったが、同時に、男性の言葉の裏に隠れている、妙な違和感も感じていた。

最初は、その違和感の正体が分からなかった淳だが……すぐにその原因が分かった。同時に、その男性に詰め寄る。

「……嘘だな」

と、淳が断言するようにそう男に告げると、男は途端に顔から汗を流しながら、挙動不審な態度を見せる。どうやら、淳の予想は当たったらしい。

「な、何だとこのガキ！」

先程までとはうって変わり、男は乱暴な口調になっていた為、段々と化けの皮が剥がれてきたな、と淳は思った。

「何を根拠にそんな事を――」

「社長と電話で話したんだろ？」

「……え？」

淳の言葉に、男は不意打ちでも受けたようにほうけた表情を見せた。

「……そういう事」

見兼ねたアツロウが、横から淳を加勢する。。

「オッサンはハルのライブを見て、社長に電話したんだよな……？」

「だ、だからどうした……！」

アツロウの問いを受けても未だに自分のミスに気付かない男に、淳は少なからず苛立ちを覚えた。

「おいおい、いい加減にしろよ。どうしてオッサンのケータイは、封鎖の中なのに繋がんだよ？」

「……！」

まるで犯人を問い質す名探偵のように、淳は男を追い詰めていく。

「いや……それは……！　そうだ、日付を間違えたんだよ！」

「……」

淳は男の襟首を掴んで、側の壁にたたき付けたいという衝動を何とか堪えなければならなかった。何故この男は、自分でどんどん墓穴を掘ってしまっている事に気付かないのだろう？

「……アンタ、最初に言ったよな？　『ポケットアンプにも関わらず、あんな素晴らしい歌声を聞いたのは、生まれて初めてだ』って。まさか、ハルが昔っからポケットアンプだけでライブしてたとでも言うのか？」

「クッ……！」

ここまで言われては流石の男も言い逃れは出来ないと悟ったらしく。今となってはただギリギリと音をたてて歯軋りをするだけだった。

そして、突如目をクワッと見開くと、

「お、覚えとけガキども！　今日はこれで失礼するっ！」

男はそれだけを言い残すと、そのまま淳達の前から逃げるように姿を消した。

「……」

（うわぁ……漫画やテレビ以外で『覚えとけ』なんて言う奴、初めて見た……）

「あっ……逃げた！　ま、待ちなさいよっ……！」

ユズが慌てて追おうとするが、淳がその手を掴んで制した。

「いいってユズ、メンドくさい。それに、深追いは禁物だ」

しかし、ユズは未だに男が消えた曲がり角を険しい表情で凝視し

ていた。

「うぬぬぬぬぬ……！　アイツ一体、何者よ！？　どうしてハルさんの事を探してんの！？」

「ただのストーカーなら別にいいけど……いや、それもよくないけど、そんな感じでもなかったしな……」

淳にしても、男の狙いが分からなかったが――しかし、同時に『あること』を思い出していた。

それはつい先日の出来事――武芸館前で、ハルを守りながら悪魔と戦った時だ。あの時も確か、悪魔達がハルの、或いはハルの持つ何かを狙っていたではないか。

……となると、あの男もそれを求めてハルを狙っているのか……？　しかし、今回は悪魔ではなく人間だ。つまり、ハルの『何か』は、悪魔にとっても、そして人間にとっても価値のある『何か』だという事か？

そう考える淳の隣で、アツロウもユズと同じように、男が消えた辺りを見つめていた。

「アイツの目的は分からないけど……。何か企んでるのかもしれないし、機会があったら、ハルにも教えとこうぜ？」

アツロウのその台詞で、とりあえずこの話は打ち切りとなったが、淳は未だに、ハルの事が心配だった。『同類』だからかもしれないが――会ってまだ1日しか経っていないのに――ハルとは既に他人だという気がしない。

だから――心配だった。

しかし――今、自分が出来る事といえば、次に彼女と運よく再会した時に、先程の男について教えてあげる事ぐらいだろうと、淳は冷静に判断した。

２ｎｄ　Ｄａｙ『テレビの世界でのバトル（１）』

縦横無尽に入り組んだ下水道の要所要所を、壁を崩した際に生じる瓦礫によって、シャドウ（もしくは悪魔）の退路を塞ぎながら、セトは下水道を進んで行く。

汚水から発生する悪臭によってすっかり鼻が馬鹿になっていた為、今となってはそれさえも気にならなかった。

いや、この暗闇では嗅覚も貴重な情報源となりうる為、気にならないと言えば嘘になるが、少なくともそれぐらいで臆してしまう程、セトは自分の力を信じていない訳ではなかった。

セトが通っている道以外にも、水だけが通る小さい道などがあちこちになり、敵にとっては絶好の不意打ちポイントになっている。

途中、背後の横穴から何度か敵の頭らしきものだけがこちらを覗くように突き出しているのにセトは気付いていたが、しかし悠然とそれを無視した。敵にしても、結局今までは不意打ちを仕掛けていない。

お互いが同じ事を考えている、とセトは確信した――まだ戦いの時ではない。

そうしている内に、突然、目の前で異常なほど広い空間が現れたのを見て、思わずセトは目をパチクリさせた。

そこは、現実の世界では洪水や大雨の際、その被害を抑える為に

大量の水を蓄える超巨大な貯水槽――いわゆる、水害対策トンネルだった。

小さな体育館の程の広さがあり、少なくとも先程の下水道よりは遥かに戦いやすいのは間違いない。

「……やれやれだぜ。まさしくおあつらえむきな場所だな」

口ではそう軽口を言うものの、セトは近い内に始まるであろう戦闘を思い浮かべて、僅かに胸を弾ませている。

相手もこの場所を決着の場所に選んだらしく、何体もの敵がこの空間に向かって一斉に集まってきてるのを、セトの五感が敏感に察知していた。

戦闘が始まるまでの間に、セトは辺りの広々とした空間をグルッと見渡すと、その位置関係、及び大まかな構造を頭に叩き込む。そして、どの位置から敵が飛び出してきても対処出来るように、トンネルの中心へと足を運んだ。

そんな彼へと殺到する敵の多くは、その人型の生物に宿る尋常ではない圧力を、確かに感じていた。しかし、彼らの脳内では恐怖という感情を上手く捉える事が出来ない為、その行進スピードは一向に緩む気配がない。

そんなセトの隣に、遂に一体のシャドウがボトリ、と水滴のように垂れ落ちてきたが、彼はそれを横目で一瞥しただけで、戦闘の構えさえとろうとはしなかった。

まだだ……あともう少し。

そして、そのシャドウが甲高い鳴き声の混じった奇声とも威嚇音ともつかぬ声を発すると、さながら雨でも降り注ぐかのように、何体ものシャドウ、及び悪魔が彼の周りに落ちてきた。

「なるほど……両方か」

悪魔がこの世界に存在している事について、セトは一々疑問を抱こうとはしなかった。別に、テレビの世界に悪魔が入る事が出来ないという法則など存在しない。

むしろ――人間の欲望がダイレクトに作用する為――この世界を中継地点に人間界に出没する悪魔の方が多いくらいだ。

遂に、戦闘開始を告げるゴングが鳴った！　セトは十握剣を鞘から引き抜くと、そのまま抜刀した勢いで、最初に向かってきたシャドウを真っ二つにする。

次の戦いもあっという間だった。

大きく跳躍した悪魔の一体が、その鋭い牙でセトに噛み付こうとするが、セトはその場で体を回転させてそれを紙一重でかわして見せる。

そして強烈な膝蹴りを叩き込み、その悪魔が悶絶した所を狙って、無防備になった首を片手で握ると、そのまま首の骨をへし折った。

同時に、彼の真横から強烈な冷気が吹き荒れる。その攻撃が氷結魔法の上位スキル、『ブフダイン』によるものだと悟ると、セトはその魔法を放った悪魔へと視線を向けた。

「今は八月だからな……。クーラーには丁度いい」

次の瞬間、突然、彼の体からその吹雪に対抗するかのように、猛烈な熱風が噴き出した。

いや、正確にはセトの体ではなく、その熱風は彼が喚び出したペルソナ――『マダ』から発せられたのだが、『マハラギダイン』を発動させてからペルソナをしまうまでのモーションが余りにも早過ぎて、その場にいる全てのシャドウ、そして悪魔が気付けなかったというだけの話だ。

荒れ狂う熱風と炎によって、『ブフダイン』を放った悪魔が一瞬で塵と化す。

一流のピアニストが一々鍵盤を見なくとも美しい音楽を奏でられるかのように、セトもまた、常人には到底知覚できない程の速さでペルソナを召喚し、スキルを発動する事が出来る。

二十年近くに及ぶ経験によって洗練された――ペルソナの召喚速度。

通常、ペルソナを召喚する際は召喚器を使ったり、現れたカードを破壊したりという予備動作を行うのが殆どだが、彼は違う。

常に相手の『先』を行く――後出しでも先制をとれる程の速さこそ、彼が『最強』と謳われる由縁なのだ。

巨大な斧を持つ悪魔が二体、彼へとその斧を振り付けるが、セトはその二つ共を、片手で持った刀の刃だけで受け止めた。

その衝撃に堪えうる刀の強度にも驚きだが、その防御を片手だけで成し遂げて見せた、セトの超人的な『腕力』にも注目したい。

斧を振るった悪魔の体駆は、セトの数倍程もある。彼はその木の幹のような腕を足場にして、一気にその頭部へと駆け寄ると、目の前の側頭部に手刀を突き刺した。

一気に腕の第二間接まで差し込み、悪魔の脳をえぐると、すぐにもう一体の悪魔の頭上に飛び移る。そして、十握剣で頭のてっぺんから一気にその巨体を二分割にした。

着地した先にいたカブトムシを思わせるシャドウの頭を踏み潰すと、再び神速の速さでペルソナ――『ヴィシュヌ』を召喚し、『メギドラオン』を放つ。その一撃だけで、着弾点に群がっていた数十体の悪魔は一瞬で灰となった。

「どうした？　手を抜いてないで、少しは本気で相手をして欲しいな」

彼は茶化すようにそう言い放つが、無論のこと敵達は微塵も手など抜いていない。

「スザク――『マハスクカジャ』」

セトが自らの機動力を高める補助呪文を唱えると、彼の姿は殆ど見えなくなった。

突然、一体のシャドウが木っ端みじんになる。

次にはもう一体、更に次にはもう一体と、次々に何体もの敵が、とてつもない速度で移動するセトによって、その命を落としていった。

……チョロイな。

余りのたやすさに、セトは少し退屈だと思い始めていた。この場合、敵が弱い訳では決してなく、彼が強すぎるのだが――しかしその時。

突如、セトの足元にある地面が盛り上がったかと思うと、次の瞬間には、一気にそこが爆発した。

「――――っ!!?」

突発的に発生した熱風と、コンクリートの破片を全身に受けながら、セトの体が数体の敵と共に上空へ舞い上がる。

咄嗟に腕を交差させて何とか顔だけでも守るが、そのせいで他の部位全てに深い火傷を負ってしまった。

危うく壁にたたき付けられそうになったが、猫の様な柔軟さでその衝撃を足で殺すと、そのまま音もなくトンネルの地面に着地する。

彼はすぐさま視線を先程爆発の起きた地点へと向けた。あの爆発が突然現れた乱入者によって引き起こされたのはまず間違いない。そして、その気配を彼は全く感じなかった。

つまりは、彼に悟られぬように気配を隠せる程の相手だという事だ。

恐らくは爆発によって空いたであろうその大穴から、何者かの影が現れたのをセトが見た時、今度は突風が吹き荒れた。台風という表現さえ生易しく思える程の嵐が、セトの体を痛め付ける。

「～～～～～～っ！」

セトが火傷した片手で目を守りながら思いつく限りの悪態をつくが、轟々と吹きつける風の音によって、その声は誰にも届いていない。突然の乱入者によって、完全に形成を逆転されてしまった。

「『……』っ！」

『ブフダイン』と叫んだものの、その声さえ突風によって掻き消される。

しかし、かといってスキル自体が無効になるかといえばそうではなかった。セトの目の前には突如、分厚い氷が現れ、それを盾代わりに一先ず彼は体制を整える事が出来たが、未だに状況は劣勢であると言えた。

「んん……何やら、匂うな……？」

そんな風に突然、セトの耳に何者かの声が響く。それがあの大穴から出てきた何者かのものである事に、彼は一切疑問を持たなかった。

「臭い……！　臭いぞ……！　我が嫌う、『神』に似た匂いだ……」

未だ、姿の見えぬ相手が放った業火は一向に留まる気配を見せない。セトが盾代わりにしていた氷壁も、徐々に溶け始めていた。

必然、氷が溶けた事で彼の足元に水が溜まっていく。

そんなセトは、自らが作り出した氷壁の向こう側で何かが光るのを見た。その閃光の意味を彼は本能的に悟るが――もう遅い。

何かが弾けるような炸裂音がしたかと思うと、凄まじい電流がセトの全身を貫いた。足元に広がっている水溜りも手伝って、その威力は数倍高くなっている。

常人ならばとっくの昔に焼きあがっている程の電圧だが、セトは歯を食いしばって何とかそれを堪えた。しかし、その顔には先程まで浮かべていた余裕の色が一切伺えない。

セトは自らの五感を極限まで高めると、その何者かの正体を探った。しかし、舞い上がった粉塵と先程のダメージも重なって、中々相手の姿を確認する事が出来ない。

かといって、りせや風花がいない以上、自分の視界以外は頼れそうになかった――今までの敵とは桁の違う『何か』が、あの大穴にいる！

しかし、相手の姿が見えないからと言って臆するような男ではない。セトは暗闇と粉塵によって視界の効かない空間へ迷うことなく身を投げ出すと、そのまま迷う事なく駆け出した。

相手との距離が先程までの約半分くらいになると、その輪郭がボンヤリながらも浮かび上がってきた。一見、大きな体を持つ悪魔――或いはシャドウ――のようにも見えるが……？

しかし、その距離が近づくにつれ、セトの五感は、それとはまた『別』の気配を感じていた――相手は一体ではない！

「何者かは知りませんが――丁度いい。貴方には最初の犠牲者となって頂きますよ！」

しかも、その悪魔は人語を話していた（しかも無駄に紳士的な口調で）。それだけでも、この悪魔が凡百の悪魔よりは遥かに高等な位に属する事が分かる。

（コイツは……！）

その悪魔の正体を、セトは知っていた。

『ベル・ゼブブ』。

巨大な蝿を思わせる外見に、燃えるように赤い複眼。人間の頭蓋骨によって作られた杖と首飾り。全てが事前にビシャモンテンから聞いていた情報と一致する。

しかし、セトは確信していた。

先程まで、自分に浴びせられていた炎撃、風撃、電撃は全て、この悪魔の仕業では《ない》と。

目前で羽ばたく蝿の姿をした悪魔は、確かに相当な力を持つもの

が――かといって、この悪魔があれ程の攻撃を放てるとは思えなかった。

正直に言って、この程度の悪魔なら、ペルソナを使わなくとも倒せる自信がある。

それほどまでに――――セトの実力はずば抜けているのだ。

だが――しかし。

セトは、ベル・ゼブブの背後で蠢いている、別の悪魔の存在を、先程からハッキリと認識していた。

この悪魔こそが――先程まで、セトに攻撃を仕掛けていた張本人である。

「まるで、悪魔の詰め合わせだな……」

思わずそう漏らしたセトの視線の先には、正しく彼が言った通り、さながら何体もの悪魔を肉団子のように固めたような外見の悪魔がいた。

大きさはベル・ゼブブと同じぐらいだが、その内に宿る魔力は比べ物にならない。肉団子の下部分に蜘蛛のような足が何本も生えており、この世のマイナスな感情を全て足し合わせたらこんな姿になるのでは、とセトは思った。

そしてこの悪魔についても、セトは知っていた。

『ベル・ベリト』

現在行われている、『ベルの王位争い』において、最も王位に近い悪魔である。

そんな悪魔が。

それ程の悪魔が。

セトのような男に。

セト程のペルソナ使いに。

出会った。

一人の人間に、二体のベル神。

普通なら、勝負が見えてるどころではない、勝負なんて成立さえしないであろう組み合わせ。

巨像と蟻の戦い。

だが勿論――セトという男は、間違いなく疑いなく一分の隙もないほどに普通などではない。

人でありながら、神。

東京が封鎖されていながら、まだ一日しか経っていないにも関わらず、早くも人知を超えた戦いが今、始まろうとしていた――。

2nd Day『テレビの世界でのバトル（1）』（後書き）

●BOSS DATA

・ベル・ゼブブ

＞種族：ベル神
種族特有スキル：闇の右腕
別称：蠅の王

・ベル・ベリト

＞種族：ベル神
種族特有スキル：荒ぶる神
別称：バルベリト

2nd Day『望月麻理』

――神田駅前。

淳達が神田を通り抜けようした時、ビルの影で涼む女性を見かけた。

その女性を見たアツロウが、突然ハッとしたような表情になったので、思わず淳は足を止める。

「あれ？　あの人は……」

「……知り合いか？」

淳がそう尋ねたものの、その女性に意識が完全に固体されてしまったらしいアツロウに耳には届かなかったようだ。

何も答えないままアツロウがその女性の方に近付くのを見ていた淳とユズは、一体何事だろうと怪訝に思いつつも、彼の後に続いた。

この炎天下の中であるにも関わらず、その女性は白衣を着ていた。身長は淳よりも僅かに低いが足がスラリと長いため、実際よりも高く見える。黒い前髪は左右で額が見えるような形で左右に垂れ下がっており、後ろは大きめの赤いリボンでツインテールにしている。若干垂れ気味の両目と、穏やかで優しいという印象がある。

白衣の女性も近付いてくるアツロウの存在に気付いたようだ。

「あら……？　ひょっとしてアツロウ君？」

「やっぱり、マリ先生だ！　お久しぶり！」

「久しぶりね、アツロウ君。元気だった？」

「元気！　元気！　元気があふれて困ってますよ！」

「……」

こんな状況でよくそんな見栄張れるなと、淳は思ったが、こんな状況だからこそ、いつになく明るい様子のアツロウの笑顔を大切にしたいと思い、言葉には出さなかった。

「もう、相変わらずね……」

そんな中、そろそろ蚊帳の外にいる事が我慢ならなくなったらしいユズがアツロウに詰問する。

「ねえ、ちょと、アツロウ！　アツロウのお知り合い？」

「おう、紹介するよ！　この人は、中学時代に家庭教師をしてもらったマリ先生だ」

「へぇ……」

家庭教師だとするならば、その白衣には一体何の意味が……？

いや、あえて聞かないでおこう。世の中にはあまり深く詮索してはならない事が確かにある。

（にしても、家庭教師ねぇ……）

淳も山岸風花（やまぎしふうか）という女性を家庭教師に持っているため、思わず彼女のことを思い出してた。

そういえば、このマリという女性と風花の纏う雰囲気はどこか似ている。もしかしたら、家庭教師というのはこのような優しい雰囲気を持つ人間に適した職業のかもしれない。

マリは、淳やユズにも同じように優しく微笑みながら、簡単に自己紹介する。

「望月麻理（もちづき・まり）です。よろしくね。今は、小学校の養護教育やってます」

最後の部分を聞いたアツロウが、再び顔を明るくする。

「えっ？　それじゃ、保健室の先生になれたの？　おめでとう？」

「あー……、俺、有里淳って言います。アツロウのクラスメイトです」

「私もアツロウのクラスメイトで、谷川柚子って言います。よろしくね！マリさん」

勝手にはしゃいでいるアツロウをよそに、淳とユズも簡単に自己紹介を済ませた。

その際、さりげなくマリの余命を確認した淳は驚いた。彼女の余命は、他の人々と違い、自分達より一つ多いだけの『2』だったからだ。つまりは、少なくとも二日後までに、マリの身に『重大な何

か』が起こるということだ。

「淳君と、それにユズちゃんね。うん、元気があっていいわね。……それにしても、停電はいつ直るのかしら？　マンションだと水も出なくなるのよね」

「マンションに住んでるんですか……。それで外に？」

淳自身もマンション暮らしであるため、あまり他人事とは思えなかった。

「うん、そういうこと。公園に行けば、水もあるから」

そう言った後、マリは突然、真剣な表情になる。

「今日一日くらいなら耐えられるけど、これがしばらく続いたら、大変な事になるわ」

「大変なこと……？」

その言葉が彼女自身だけにに向けられたものではないと悟り、淳は小首を傾げる。

「ええ……、体力のない子供や老人が倒れたり、ストレスで暴力に走る女性が出てくるはずよ。これが本当に災害で、悲惨な状況を目の当たりにしていたなら、状況は別なんだけどね……」

「別って、どうなるんですか？」

マリと同じように不安な表情をしているユズがそう尋ねると、マ

リはさも言いづらそうに目を伏せた。

「悲惨な状況では、人間の秩序は保たれるものだけど、今回は違うわ。ただ閉じ込められて、不自由な生活を強いられているだけ。このままじゃ、いずれストレスが秩序を乱すことになるわよ……。せめて電気が回復してくれて、日常生活に戻れれば、ストレスは山手線の外に出られないだけになるのに……。一体、政府は何をしているのかしら……」

その疑問には全面的に同意だが、しかし淳達にしても政府がなぜもっとしっかりとしないのか、或いは《何がしたいのか》を知っている訳ではないので、首を傾げるより他にない。

「一応、物資コンテナならありましたけど」

「……そう、配給ぐらいは来たのね。じゃあ、政府も一応、何とかしようとは考えているのかしら……。こんな平穏は、保って今日一杯ね。明後日にはきっと……壊れるわ……」

その『壊れる』という言葉の意味が何なのか、淳には大体分かっていた。

「壊れるというと……やっぱり、暴動とかですか？」

「ええ……。一人の人間が暴動を起こせば、負の感情は他の人にも伝染する。……とても危険な事よ。でも」

ここでマリはようやく顔を上げ、淳達の顔を順に見た。

「……もしそんなことが起こっても、君たちは冷静な行動をしてち

ょうだい。お願いよ？」

つかの間、その問いに対して淳は戸惑ったものの、結局最後には「はい」と答えた。

それを聞いたマリは、とても嬉しそうにニッコリと笑う。

「いいお返事で、よろしい！花マルをあげましょう！」

「花マルって……」

小学生じゃないんだから。

その後、マリは顔なじみのアツロウと適当に雑談すると、やがて「それじゃ、皆も気をつけて」と言って、淳達と別れた。

「暴動かぁ……、そんなのが起きる前に、この封鎖を抜け出せたらいいんだけど……。そう上手くはいかないよね……」

これまで幾度となく封鎖を突破しようとしたにも関わらず、その全てが失敗に終わっていた為、流石のユズも昨日よりは現実を見始めていた。

「まぁ……。仮に《そういう》状況に陥ったとしても、こっちには改造ＣＯＭＰがあるから、それほど心配しなくてもいいだろうけど……覚悟はしておかないとな」

ユズが言った案の次に良い案が、その暴動自体起きないように、こちらが何らかの行動を起こすというものだが……。恐らく不可能だろう、と淳は思った。

マリが予見した暴動とは、一人一人に表示されている余命とは違い、もっと大きなうねりによって起こるであろうもので、個人個人の余命を変えようとするのとは訳が違う。とてもではないが、自分達に何とか出来る問題ではない。

とすれば、問題を解決するのではなく、その問題が起こった後、こちらがどう対処するべきかを考えた方が遥かに効率的というものだ。

そのように淳はアツロウとユズに告げたものの、情けないことに、淳にしても考えている対策は「暴動が起こってもなるべくそれから逃れられるように、早く封鎖の出口を見つける」ぐらいだった。

「でも現実問題、出来る事と言えば、せいぜいそんくらいだよな……。あとは、ナオヤさんを探すくらいだけど、そこはカイドーに期待するより他ないし……」

そのようにアツロウが言うと、ユズがもう一つの対応策を述べた。

「ねぇ……。それともさ、どこが安全な場所を見つけて、封鎖が終わるまでそこに篭城してるっていうのはどう？　それならそれで、どうしても必要な時だけ外に出れば、後は安全だし――」

「そんな事をしてる内に、俺たちの余命の日が来ちまう。俺たちの死ぬ原因が何かがハッキリと分からない以上、篭城したとしても完全に安心とは言えない」

「そっか、そうだよね……」

「まぁ、明日までに政府がこの封鎖を解いてくれるってんなら別だけど、連中の態度を見る限り、それも期待出来そうにないしな……」

もしも、本当に――。

政府が最初から封鎖を解く気がないのだとしたら――彼らは一体、何を考えているのだろう？

「……政府は一体、何を考えてるのかな？」

全く同じ事を考えていたらしいユズが、そう呟く。

この質問にはアツロウが答えた。

「そりゃ、悪魔を東京から逃がさない為だろ」

そんなアツロウの推理は確かに妥当なものだ。政府が前以て悪魔の存在を認知していた事を考慮すれば、それほど難しい推理ではない。

――しかし。

淳は感じていた。

――『違和感』。

今回の政府の封鎖の裏で見え隠れする――『矛盾』。

が、その矛盾の正体が一体何であるのかも、淳には見当がつかない。

第一、違和感を感じたからといって、アツロウの推理が間違っているとは思えなかった。『この封鎖は悪魔を東京から逃がさない為に行われている』――そう、恐らくそれは間違いないだろう。

ただ、それだけではない――という事だ。

その矛盾を解き明かそうとするには、情報が少な過ぎる。

今、自分達が知ってる事といえば、『政府は悪魔の存在を予め知っていた』、『その上で山手線を封鎖した』、『彼等は当分、自分達を封鎖から出す気はない』……ぐらいか。

「ハァ……私、政治とかあまり興味なかったけど……でも！　こんなのってあんまりじゃないっ！？　どうして政府は私達を閉じ込めたのかな……」

淳が思考を巡らす中、ユズがやり場のない怒りを政府にぶつけている。

「本当だよな……。今まで政府がやってくれた事といえば、精々食糧の配給くらいだし……」

「……っ！」

最後のアツロウの言葉で、淳の脳内で何かが弾けた。

『食糧の配給くらいだし――』

（そうか、分かった……！）

（何が不自然なのか……！）

もしも、自分が政府側の立場だったらどうする？

ある日、何かの拍子で悪魔の存在と、その人知を超えた力を知ったとして……。

そして、もしそれがまだ東京にしかいないと知ったら？

そう、その時は普通、東京を封鎖して悪魔を閉じ込めようとするだろう。仮にそれで他の一般人を巻き込む事になろうとも、だ。

そこまでなら、今回の政府の行動とピッタリ合致するが――。

ここからが違う。

これまでの対応を見る限り、政府は東京を封鎖し、食糧の配給をしているだけで、それ以外は何もしてない。

これこそが――矛盾の正体。

自分だったら、それだけでは済まさない。

そこから更に、悪魔を殲滅しようとする。

当たり前だ――『悪魔』などという未知で危険な存在がそこにいると知ったら、国民の命を預かる身として、まず何よりも悪魔を排除しようとするのが自然だ。

しかし――淳が見た限りでは、政府がそれに向けた措置をとっていないのは間違いない。ただ東京を封鎖しているだけだ。

自分なら、今すぐにでもこの東京に自衛隊を送り、そのまま悪魔の掃討に当たらせるだろう。

本当に政府が悪魔の存在を予め知っていたのだとしたら、必ずそうした筈……！

では何故、連中はそうしないのか。

当然、悪魔をすぐには殲滅できない理由があるのだろう。

ならば、その理由とは？

ここで更に、別の仮説をたててみる。

政府が今すぐ悪魔を殲滅しないという現状の、背景。

（悪魔を殲滅する手立てがないからこそ、封鎖しか出来ないのか――）

（――悪魔を殲滅できる手立てがあるにも関わらず、手を出さないのか）

前者ならば、非常に由々しき事態だが、矛盾はない。

しかし――もしも後者だった場合は、非常に話がややこしくなる。

政府が、《その気》になれば悪魔を掃討できるにも関わらず、未

だに封鎖しかしていない、理由。

核爆弾……？

淳の脳裏に、物騒な単語が浮かんだ。

なるほど、確かに核を用いれば、いくら悪魔といえど一たまりもないだろう。

もっとも、その場合は自分達のような封鎖内の一般人も木っ端みじんになってしまうし、落とされた場所は当分、放射線が支配し、人間が生きられない死の世界になる。

悪魔を殲滅できるリターンは大きいが、それによって生じるリスクもまた、限りなく大きい。

（いや……そんな事、政府は気にしないんじゃないか……？）

そうだ……そもそも、食糧の配給を空からコンテナを落とすという不躾なやり方で行う連中なのだ。

大勢の罪なき人々が死に、向こう数年、東京が人の住めない土地になろうとも、悪魔によって生じる危険を考えればやむを得ない犠牲だと、政府なら考えるのではないか……？

（……どう考えても、おかしい……）

一見、手際よく見えるが、よくよく考えれば、今回の政府の対応には矛盾点が多過ぎる。

これでは、まるで――。

まるで、政府の人間ではない、政府とは考えの違う何者かが、政府を裏で操っているかのような――。

今回の封鎖も、その何者かの意思によって、決行されたのだとしたら？

かなり無理矢理な上に、確たる根拠もない。

勘づいてるという言葉どおり、正しく勘そのものの推理だが――今回のような有り得ない出来事には、有り得ない推理でしか真実を掴めない。

（それだ……！　そう考えれば、政府のちぐはぐな行動にも説明がつく！）

人間でも悪魔でもない、『別の存在』が政府の陰にいる――これこそが、今考えられる最大の可能性！

……そう、少なくとも悪魔ではないだろう。そうなるとまた矛盾が生じてしまう。悪魔が悪魔を閉じ込めたという事になるからだ。

「……ジュン、どうかしたの？」

突然、ユズに声をかけられて、淳はハッとした。

「あ……、いや、何でもねーよ」

この推理をアツロウやユズに話す事は、まだ出来ない……！　あくまでも憶測に過ぎないし、余計な不安を煽るだけだ。

「それじゃ、ひき続き情報収集に徹するとしようぜ」

根拠のない推理をいくら突き詰めても仕方ない。そういう固定観念を持つ事が一番危ういのだ。そう思い、淳はまるで何かを取り払うかのように早足で歩き出す。後ろでは、アツロウとユズが戸惑いながらも、そんな淳の後に続いた。

２ｎｄ　Ｄａｙ『望月麻理』（後書き）

●キャラクタープロフィール

・マリ（望月麻里）

年齢：２３歳

誕生日：２月１４日（みずがめ座）

血液型：ＡＢ型

身長：１６２ｃｍ

体重：重さじゃその人の健康的美しさは計れませんよ？

家族：父、母（二階堂家とは家族ぐるみでの付き合い）

職業：小学校養護教師

好きな食べ物：さぬきうどん

嫌いな食べ物：きゅうり

趣味：観賞魚の飼育

2nd Day『テレビの世界でのバトル（1）―2』

ベル・ベリトは〇〇 〇〇の恐ろしさを知らない訳ではない。むしろ、彼の力量に対して、誰よりも高い評価をつけていた。

故に、自分達の前にいる甚平姿の男が、まさしくその〇〇 〇〇であると知った時、ベル・ベリトは先程までの高慢な態度を一変させ、極限にまでその集中力を高めた。

『〇〇 〇〇』。

こちらの世界では――『イザナギ』という呼び名の方が有名だ。

かといって、ベリトは恐れている訳ではない。

『イザナギ』は確かに強い。しかし、自分とて凡百の悪魔とは一線を画す――どころか、悪魔の中でも強大な力を持つベル神の中でもさらに指折りの実力者、『ベル・ベリト』なのだ。

自分の力ならば、かの人類最強のペルソナ使いである『イザナギ』にも匹敵しうる。と、そう確信していた。

ベル・ベリトの最大のカード。それは、技術も何もない――己が身に宿る、莫大な魔力だ。

いくらイザナギが『人類最強』を誇ろうと、それはあくまで『人類』の枠組みでしか通用しない。当然のことだが、人間と悪魔との間には、生まれた時からの魔力の総量に、圧倒的な差がある。

まして、こちらには自分の右腕であり、且つベル神でもある『ベル・ゼブブ』もいるのだ。その実力は、下手をすればベリトとそれほど大差ない。

これだけのカードがあれば、これほどのカードがあれば、あのイザナギにも十分すぎるほどの勝機がある――と、ベリトは認識していてた。

しかし、とはいえ、それでも。

ベル・ベリトは――全ての不安を拭えた訳ではなかった。

――この男。

イザナギという、『神』の異名を持つこの男。

人間にしては随分背が高く、短く眉の辺りで切りそろえた銀髪は、この薄暗い地下でも美しく輝いていた。漆黒の甚平服は先程ベリトの放った火炎魔法によって所々が焼け焦げており、彼の鍛え抜かれた上半身がほぼ露になっていた。

それにしても――と、ベリトは思う。

どうにも――この男と相対すると、人間と向き合ってるという気がしない。

だが、この男は間違いなく人間の筈だ。確かにこの男を『神』と称する輩は多いが、それはこの男の力が遥かに人間離れしているからであり、生物的な意味で神に成ったという訳ではない。

『〇〇　〇〇』は、あくまで人間なのだ。

しかし――。

その力。

その体から発せられる何かの圧力だけは、どう考えても人間の域を超えている。

「――やれやれだぜ」

人間離れした男が、そうつぶやいた。

そして、なんとあろうことか――なんの警戒心もなく、つかつかと大股で、二体のベル神へと近付いてくる。

それを見て、ベリトもゼブブも思わず身構えるが、イザナギ――現在、表の世界では『セト』と名乗っている――は、二体からおよそ数メートルもない位置で、足を止めた。

「しかしまあ、世も末だよな……」

「……何がだ」

「考えてもみろよ。魔界でも指折りの地位を有する二体のベル神と、イザナミも代任であるこの俺がテレビの世界で、しかもこんな下水道じみた場所で、突然出会ったかと思えばいきなりの殺し合いだ。……下水道だぜ？　下水道。どう考えても、俺らぐらいのクラスの奴らが戦うような場所じゃねえだろ」

「……随分と余裕じゃありませんか」

二体のベル神を前にしながら、全く恐れる様子を見せないセトに対して、ゼブブが苛ただしそうに反応する。

「別に余裕ってわけじゃない。愉快なだけだ」

見れば、セトの顔には、僅かな微笑みまで浮かんでいた。

「ところで、お前らが一旦この世界に来たのは、『王位争い』に加わる前に、まずは力を溜めようとでも思ったからか？　確かに、人間の欲望を糧としてその力を増す悪魔にしてみれば、その人間の思念によって形成されたこの世界は、まさにうってつけの場所って訳だ」

「……分かっているではないか」

ベリトは、唇の端を吊り上げた。

「もっとも、貴様がいると知っていれば、多少は予定を変更したかもしれんがな……」

「今からでも遅くないから、そうしたらどうだ？」

「……その必要はない。そこに障害があるのだとすれば、叩き潰せば良いだけの事だ」

「やれやれだぜ。『叩き潰す』とは、また大きく出たじゃねえか。俺を叩き潰すだって？根拠のない自信も、ここまで来れば愉快を通

り越してもはや滑稽だな」

「……貴方は、私たちと口喧嘩をしたいのですか？」

ゼブブは侮蔑するように、上からセトを見下ろしている。

「そんな暇があったら、早くかかってきたらどうです？もっとも、そうしたら貴方の命は数分と持たずに散るでしょうから、なるべく口を動かして、なるべく長生きしようとする方が懸命とも言えますがね」

「おーおー、言うじゃねえか。その自分の力を信じて疑おうとしない高飛車な性格、足立の奴を思い出すぜ。まぁ、そこまで言うなら胸を貸してやるよ。もし敵わないと思ったらいつでも言いな。それは決して恥ずかしくないし、俺としても有難い。なにせ、昨日の夕方にこの世界に入ってから、実は一睡もしてねえんだ。勿論たかが数日寝なかったからといって、俺にしてみればんなもん何でもないんだが、それでも生きている時間の中で最も幸せな時間は寝ている時だという持論を、俺はそうそう変えるつもりはない」

「貴様……」

あまりにも舐めきったセトの言い分に冷静沈着が売りベル・ゼブブといえでも、不快そうに顔を歪ませる。

前述したように、セトとゼブブ達の距離は、どちらかが動けばすぐに手が届くであろう高さであり、お互い決して油断できる距離ではない。

「幾らなんでも、それは我々を――ベル神を舐めすぎではないか？

人間」

ゼブブに続いて、ベリトも反論する。

「『舐めすぎ』？　いやいやそんなことはないし、そんなつもりもない。もし気に障ったのなら謝らせてくれ。俺はただ真実を述べただけなんだ」

「……確かに、貴様の実力は世界最強の――否、歴代最強のペルソナ使いと言っても過言ではないが、所詮人間は人間だ。生まれた時からこの世の頂点に立っている我等ベル神とは、根本的に内実が違う」

と、その時。

「……ちょっと待てよ、オイ」

何かが気に障ったのか、突然、セトは表情を一変させ、その顔に僅かながら――しかし確実に、憤怒の色を浮かべた。

「幾つか、間違いを正してやる――まず第一に、俺如きを最強なんて言うな。それは『先輩』に対する最大の侮辱だ。つまりは、俺に対する侮辱と同じだ。しかも、並の侮辱じゃねえ。俺の『生き甲斐』を根本から揺るがしかねない、最低最悪の侮辱だ。『先輩』に比べれば、俺の強さなんて無きに等しい。いいか、『最強』っつーのはな、最も強い存在にだけ与えられる、唯一無二の称号なんだ。それをあろうことか、『先輩』じゃなく俺如きに使うなんて、いくら仏のように心の広い俺でも、ちょおおおおおおおおおおっとばかしカッチーンときちゃうだろうが」

そう言って、セトはただでさえ短い相手との距離を、さらに一歩、踏み出して縮めてくる。

「『先輩』はな、俺ともお前らとも、最初（ハナ）っから住んでる世界が違うんだよ。言ってみりゃ、俺達は街灯にたかる虫と一緒だ。俺達にとって『最強』っつーのは憧れ、畏れるべきものだが、『先輩』にとって最強であり続ける《・・・》ってことは、呼吸することと一緒なんだ。『あの人』と俺達を同じ枠組みで考えるな。勝つか、負けるかの世界にいる俺達と、ただ勝つだけの『先輩』を比べようとすんのは、もはや滑稽どころかただの道化もいいところだ」

唐突に、セトは片手に持っていた『十握剣』から手を離す。

ある意味で、それは戦いを諦めたかのように見えるがそうではない。セトは刀を手放して開いた手をそのまま顔の近くまで持っていくと、次にはその手から一枚のカードと青白い光があふれ出した。

「「――――――っ！！」」

その光と同時にあふれ出す尋常ではないセトの力にあてられて、ベリトもゼブブも素早く臨戦態勢に入る。

「会ってまだ数分も経ってないのに何だが、あの人を侮辱したお前らに、生きてる価値はないよ。だから、今ここで、俺に殺されてあっさりし死ね。――ったく」

『イザナギ』が。

『戦神』が。

『神に魅入られた銀色』が。

『愚者（ワイルド）』が。

『一騎当万』が。

『個人災害』が。

『アメノサギリ』が。

「――殺れ殺れだぜ」

全く怯えることなく、二体のベル神の懐へと、入った。

2nd Day『ハルを捜す男2』

――東京、日谷比公園。

一旦、水分補給をしようと淳達が日比谷公園に寄った時、ユズが突然、淳とアツロウに切羽詰まった様子で小声で話しかけてきた。

「ね、ねぇアレ見て！　アイツ、表参道でハルを探してたオッサンじゃない……！？」

ユズの言った方向に二人が目を向けると、そこには確かに、先程表参道で会った不審な男性がいた。

「……ホントだ！　おい、オッサン！」

アツロウが咎めるように声をかけると、相変わらず病弱な印象を漂わせている男がバッ！　と三人の方を振り向く。

「お、お前らは……」

流石に、まだ先程の表参道での会話を忘れていなかったらしい男は三人を――特に淳を――怯えるように見ていた。

「……よう」

淳は射抜くような視線を男の顔から離さないまま、ただそう言った。

年下の少年のそんな態度をとられて、流石に気に食わなかったのであるろう。男は首の辺りを赤く染めると、ワザとこちらに聞こえるようにしているとしか思えない舌打ちをたてる。

「……チッ！　クソガキめ……」

男がそんな態度を見せても、不思議と淳は殆ど憤りを感じなかった。だが、それは恐らくこの男が探しているハルの事を心配するがあまりに、そのような感情を抱く余裕がなかったのだろう、と淳は冷静に自己分析した。

そう、それもまた、淳が抱いている疑問の一つだ――なぜ自分は、これほどまでにハルを気にかけているのだろう？

「今度は、ここでハルを探してるのかよ。一体、アンタ何者なんだ？」

アツロウがそう問いかけるものの、表参道の時と同じように、男はこちらの話に対に対してまともに取り合おうとしない。

「お前たちには、関係な――！」

そこから更に何か淳達を罵倒する言葉を吐こうとした男の口からは、しかし何も聞こえることはなかった。

突然、淳が男の襟首を掴んだかと思うと、そのまま近くの木に押し付けたのだ。男はそれに対して咄嗟に反応することが出来ず、不意に胸を圧迫されたことで、「グエッ」と苦しそうに呻くのがやっとだった。

「関係なくねえよ」

普段の彼からは想像もつかないような、その冷徹とも言える声の響きに、男のみならずアツロウとユズも戦慄した。

知っている、とアツロウは思った。

自分は、この状態の有里淳を知っている、と。

アレは確か、自分と淳が高校の入学式の日に初めて出会った時だ。自分と淳が親友となるキッカケとなったあの日。

あの時も、淳は初対面であるにも関わらず、アツロウの為に本気で怒って、そして助けてくれた。

有里淳は、他人の為にしか怒らない。アツロウはそのことを知っていた。

だからこそ、分かる——今、この時の淳も、恐らくは誰かの為に怒っているのだと言うことを。

いや、「恐らくは」ではない。きっと、あの人の為に怒っているのだ、とアツロウは悟った。あの女性——昨日会ったボーカリスト、春沢芳野（はるさわよしの）の為に。

その細身には似つかわしくない淳の膂力（りょりょく）に、男の顔からは血の気が失せ始め、段々青くなりつつあった。が、勿論淳は、そんな事など気にしない。

「……アンタ、怪しすぎんだよ。答えろ、何でハルさんを探してる

？」

男の顔が酸素不足で段々紫色に変色していくさまを見ながら、淳は改めて詰問する。

しかし、圧倒的に不利な状況にも関わらず、男は未だに傲慢な態度を崩そうとしなかった。それが余計に淳の気分を逆立てる。

「クックック……お、お前たちこそ、あの女が持つ『力』が欲しいんだろ……？」

「……あ？」

（ハルさんの……『力』？）

「ハ……ハハ……！　とぼけるなよ……！　あの女の『力』……お前だったらなおさら欲しいだろう？　わ、私がお前の正体に気付いてないとでも思ったか……！　残念だが、あの女の『力』は我が主のものだ……。お前などには渡さん！」

淳に首を絞められていることで途切れ途切れではあるものの、男の声は自信と確証で満ちている。だが勿論のこと、淳には男の言っていることが分かる筈もない。

「……アンタが何言ってんのか、俺にはサッパリだ。まずは正しい日本語のしゃべり方から教えてやろうか？」

「ヒッ……！」

淳が言葉に凄みを利かせたことで男は一瞬たじろいだものの、ス

グに元の態度を取り戻す。

まただ、と淳は思った。

最初に会った時から、この男の態度は不自然だった。少しでも何らかの感情が昂ぶったかと思うと、次の瞬間には平静を取り戻している。まるで、見えない何かがこの男の感情をコントロールしているかのようだ。

「バ……バカが……！　その手には乗らんぞ！」

その瞬間、淳は男の首から手を離さざるを得なくなる。

突然、男の首を掴んでいた淳の手のひらに、まるで鉄を熱したかのような高熱が走ったのだ。

「……ッ！」

淳の手が男の首から離れた刹那、男は大急ぎで淳達から離れる。

「覚えておくがいいっ！　お前も、低俗な人間共も、聖なる炎で焼かれる運命なのだ！」

最後にそういい捨てると、男は脱兎の如く逃げ出す。言い分は立派だが、行動は雑魚キャラそのものだ。

「あっ……！　こら、待てっ……！」

アツロウが慌てて追おうとするものの、彼が駆け出そうとした時には、既に男の姿は消えていた。

「クソッ……逃げられた！」

「いいよ。あんな如何にも雑魚キャラオーラを出してる奴なんかほっとけって」

淳は、先程高熱を感じた手のひらを見ていた。軽い火傷を負ってしまったらしく、若干赤くなっている。

「聖なる炎に焼かれる……？　何の話をしてたんだろう？」

「あんな奴の言う事を真面目に捉えようとすんなよユズ。大方、ただの破滅思想者かなんかだ」

淳がそう言ったものの、しかしユズには肝心の『破滅思想者』の意味がよく分からなかったらしい。

「破滅思想……って何？」

「簡単に言うと、『いつかこの世界って滅ぶんじゃね？』って考えてる奴らのことだよ。まぁ、悪魔なんてのがいるくらいだし、そんな事を考える奴がいても別に驚かねえけどな」

ようやく先程の男が消えた位置から目を離したアツロウが、淳の説明に補足を加える。

「……ネットでその情報を掘り起こしてみるとさ、結構前に『世紀末思想』てのが、よく出てくるんだ。あとは、十九年くらい前の『ニュクス教』も有名だ。例えば『世紀末思想』とかだと、もうすぐ世界が滅ぶから、それを機に新しい世界を創ろうって考える連中が

増えたんだよ。……それに、今回は悪魔が実在してるって分かっちゃったからな。悪魔を崇拝するオカルト系の宗教は、動きが活発になって当たり前だ」

「全く、そういう連中は、どうしてそう目に見えないにも関わらず、そんなものを信じられんのかな。全く、俺たちの世代よりはよっぽど夢がある。心底羨ましいよ」

「ハハッ……。ま……どっちにしろ、あまり素晴らしい事を企んでる連中じゃないのは確かだな……」

「正直、あんな変態野郎が何考えてっかなんてどうでもいいけどよぉ――ハルさんを狙ってるってのは、ちょっとばかし気になるな」

淳の言葉に、ユズが頷いた。

「……うん。少なくとも、あの人がハルを狙ってるてのは確かだよね？」

「悪魔にも狙われて、あんな野郎にも狙われて――と、全く、インディーズバンドのボーカルってのも大変だな」

「そうだよね……ハルってさ、とにかく何か、危険な事に巻き込まれそうなのは事実だと思う」

「ああ……ハルの『力』、か。シーケンサーで悪魔を喚べるってのも、ある意味じゃ特殊な力だよな？　俺たちや、他の悪魔使い達は（多分）改造ＣＯＭＰで悪魔を喚ぶ訳だし」

確かに、『悪魔を喚べる』というだけでも随分な力だが、しかし

淳には、あの男が狙っている力が本当にその程度のものなのか？と些か疑問だった。

「う～ん、今考えても分からないけどさ。とりあえず、次にハルに会った時、こんな事があったって伝えた方がいいよね？」

ユズの言葉を受けて、淳は小さく嘆息した。

「……ま、実際、今俺たちが出来る事といえばそんぐらいか……」

「うん！　注意しておいた方がいいもんね！」

「……にしても、『次会った時』、ねえ。ユズの台詞じゃないが――確かに、ハルさんって毎回トラブルに巻き込まれてるようなイメージがあるしな。今度会った時も、この間みたいな修羅場じゃないことを祈るよ」

しかし、その言葉とは裏腹に、淳は確信していた。それはつまるところただの予感でしかないが、予感というには余りにも確信的な直感だった。

あの人は俺と同じ。

だからきっと――次もトラブルに巻き込まれている。

そう――思った。

そんな事を考えていた淳は、ふと、自分を見つめる二つの視線に気付いた。言うまでもなく、アツロウとユズである。アツロウは何故かニヤニヤしており、ユズは何故かムスッとしていた。

「……？　なんだ？」

「なぁ――ジュンってさ……実は年上が趣味なワケ？」

「へ？」

と、アツロウが相変わらずのニヤニヤ笑いでそう尋ねてくる為、淳はつかの間、ポカンとしてしまう。

「だってさ、お前、随分ハルの事気にしてんじゃん。いくらあの人がいろんな連中に狙われているからといって、お前が一人の女にそこまで関心を持つなんて珍しいじゃんかよ～」

「いや、別に俺だって女は嫌いじゃないし……ってそうじゃなくて、んなモン、ただの気のせいだろ。タチの悪い酔っ払いかお前は」

「そうか～？」

相変わらず、アツロウの緩みきった頬は緩む気配がない。それを見て、淳は思わず、自分にとっては兄でもあり友人のような存在である伊織順平（いりじゅんぺい）の事を思い出した。

あの人も、淳にちょっとでも色のある噂がたったと聞くと、ことある事にちょっかいを出しにきたものだ。

もっとも、その度に母親や彼のガールフレンドであるチドリに襟首を掴まれて強制退去されているので、むしろその時は呆れよりも同情の念の方が強いのだが。

「まあまあ、そう照れるなって！　なんなら、俺が幾つかアドバイスしてやろうか？」

「お前は俺にそんなことを教えられる程、恋愛経験が豊富なのかよ」

同い年じゃねえか。

淳は再びため息をつくと、

「んなことより、とっとと公園で休もうぜ。もうすっかり喉がカラカラだ」

「――と、そうだった！　俺も早くトイレに行かないと！　う～、漏る！　漏る！」

突然、生理的欲求に目覚めたアツロウは、大急ぎで公園に設けられているトイレへと走っていった。それを見て、何とか話題を逸らすことが出来たな、と淳はホッとしかけたが、どうやら安心するのはまだ早いらしい。

自分も一旦水を飲んで喉を潤そうと思い、水道へと向かいかけた途端、ユズが淳の腕を後ろから掴んだ。

怪訝に思って振り向くと、そこには少し顔を赤く染めたユズの姿があった。ユズはしばらく何か悩むように視線をウロウロさせていたものの、やがて意を決したように口を開く。

「……本当に、何とも思ってないの？」

「え？」

「……ハルの事」

「……ああ」

なるほどそういう事か、と淳は合点がいった。

この友人は、時々こうして、さも自分の保護者のような態度を取ることがある。恐らくは、自分が本当にハルにご執心になって、本来の『この封鎖から無事に脱出する』という目的を忘れていないか、心配になったのだろう。

次に淳は、お前は俺の母さんかと心の中で突っ込み、思わずクスクスと笑ってしまう。

「……心配？」

「なっ……！」

途端、ユズの顔がボッと赤く茹で上がる。何か言いたそうに口をパクパクと動かすものの、上手く話せないようだった。

堪らず、淳は「ハハハッ」と笑ってしまう。

「心配しなくとも、俺の女癖はそこまで悪くねーよ。こういうところは、（マジメな）母さんの遺伝かもな。だから心配すんなって」

言って、淳はユズの肩をポンポンと叩く。ユズは未だに何か言いたそうな表情をしていたものの、結局、淳のそんな言葉に満足したようにコクンと頷いた。

二人はそれ以上何も話さず、アツロウに続いて、そのまま公園へと入っていった。

2nd Day『テレビの世界でのバトル（1）―3』

現実の世界での現象がテレビの世界に影響を与えることがあっても、テレビの世界での現象が現実の世界に影響を与えることはない。

これもまた――この世界である程度経験を積んだ者なら、誰もが知っていることだ（そうでなければ、現実世界は軽く数十回は間違いなく滅んでいる）。

そう考えれば、セトがこの世界で二体のベル神と遭遇した事は、ある意味で好都合だったと言える。周りに人がいない為、そちらに気を遣いなが戦う必要がないからだ。

「そうだな……確かに、不測の事態ではあったが、決して不運じゃないな、これは。――ったく、やれやれだぜ」

セトのそんな呟きが、どこからともなく聞こえてくる。

テレビの世界の、とある場所――現実世界でいうところの、東京タワーのちょうど真下の位置に、まるで隕石でも墜ちたかのような、超巨大なクレーターが出来ていた。

その穴はさながら地獄まで続いているのではと思われる程深く、地上からでは底の様子が全く確認できない。

――と、その時。

その超巨大な穴から、更に超巨大な火柱が立ち上った。

東京タワー周辺の気温が一気に上昇し、その火柱に触れた物質は、高熱によってたちまち赤く変色する。

同時に、三つの影が飛び出した。

〇〇　〇〇。

ベル・ゼブブ。

ベル・ベリト。

全員が、そちらの世界では知らぬ者がいないと言ってもいいほどの強者である。

そして先程の火柱は、その内の一人――セトが放ったスキル『ラグナロク』によって生じたものだ。

現在、彼の傍には、ペルソナ『スルト』が召喚されている。

勿論のこと、スルトを憑けているセトには火炎スキルに対して耐性――どころか、反射効果があるため、自らの魔法によって傷を負うなどという、そんなマヌケ極まりない状況には陥らなかったものの、それによって生じる衝撃までは無効化できない。だからこそ――。

――彼は現在、地上から約百メートル近い上空へと、身を投げ出している訳だ。

当たり前だが、命綱などつけていない。

並の人間なら――というか、並だろうと中だろうと大だろうと、人間であれば誰もが発狂してもおかしくない状況である。

しかし、セトはそんな事に対して、全く気にしていなかった。

否、百メートル近い上空にいる事に関しては、全く気にしていなかった――と言うべきか。

気にしている事は――別のこと。

気にするべきは――別のこと。

セトは、上空で上手く体勢を整えつつ、下方にいるベル・ゼブブに視線を移す。

もっとも、下方は下方でも百メートル近くの上空にいるセトにとっての下方なので、ゼブブもまた、彼と同じように上空へと身を躍らせていたのだが。

それはともかく。

「……なるほど、思ったより厄介だな、ベル神って連中は……」

ラグナロクの衝撃によって生まれた力の慣性がここでようやく切れたのか、上空２００m辺りでようやく地上へ向けてゆっくり落下していきながら、セトは呟く。

丁度、セトとベリト達が真っ向から向かっていく形となった。

「――まず、見かけによらず動きが速い」

二体のベル神の内が一匹、ベル・ゼブブは姿こそ蝿そのものだが、その体積は小さな鯨ほどある（大きいんだか小さいんだかよく分からない例えだった）。

普通なら、その巨体とそれに比例した重量が災いして、機動力が鈍ってしまうところだが――驚くことに、ゼブブの敏捷さは、実際の蝿と比べても遜色ない程のものだった。

考えてもみて欲しい――普通の蝿と全く同じスピードで、超巨大サイズの生物が迫ってくるのだ。

『動きの速さ』だけをみれば、地球上の生物全体で見ても、蝿のそれは間違いなくトップクラスに入る。

普段は豆粒程度のサイズのため、それほど気にはならないが、しかしいざその大きさが人間以上となると、正直言って洒落にならない。

そして、速さだけではない。

「攻撃力も――並じゃない」

間近に迫ったゼブブが、片手に持った巨大な杖を棍棒代わりにしてセトに振るう。

セトはその体格通り、力も強い。故に、普段ならその攻撃を片手で防ぎきることも可能だったろう。

だがそれは、彼の体を支える足場があってこその話である。

土台がない状態で攻撃を受けては、流石のセトも物理的法則には逆らえない。咄嗟に両腕を交差してその攻撃を防ぐが必然、重量の少ないセトの体が一方的に吹っ飛ばされる形となった。

「やべっ……！」

人類最強のペルソナ使いである彼がそう言うのは、極めて稀なことだった。

長年鍛えてきたペルソナの補助によって極限にまで高められた彼の鋼の肉体は、人間は勿論、並の悪魔さえ遥かに凌ぐ程の耐久力を誇っている。

その為、通常の悪魔の攻撃など、そもそも回避する必要さえない。どころか、進んで受ける事さえある。それが余程のものでない限りは――だが。

上空二百メートル余りからの急降下。

さしものセトでも――鼻で笑い飛ばせるような状況ではない。

セトは体を捻って、すぐさま地面に向けて魔法を放つことによって何とか墜落の衝撃を和らげようとするが――しかし。

「間に合わない、か」

これほどの速さで落下した時の衝撃を緩和するには、ある程度、魔法の威力を高める為の時間がいる。セトの体が東京の地面に衝突

するまで、恐らく数秒もないだろう。

（……仕方ねぇ）

どうやら、ある程度のダメージは覚悟しないといけないらしい。

セトは大きく息を吸い込むと、そのまま腕、足を交差させて体を丸める。同時に体から発した魔力を身に纏うと、いずれ襲ってくるであろう衝撃に覚悟を決めた。

直後、セトの体がコンクリートで固められた東京の地面に墜落する。

落下した場所はそれによって陥没し、セトの体と接触した部分は粉々になった。

通常ならば命がないのは勿論、体が床に叩きつけたトマトのようになってもおかしくない筈だが、しかし彼が負ったダメージといえば、精々左腕を脱臼したくらいだった。

「き――貴様……！」

上空で羽ばたいているゼブブが、平然と立ち上がるセトに向かって狼狽の声を上げる。

セトは脱臼した左腕を乱暴に掴むと、そのまま元の間接に捻じ込んだ。

痛みで一瞬ではあるが顔が引き攣り、脂汗が滲む。

別にペルソナの回復魔法で治してもよかったのだが、この程度の怪我に対して魔力を無駄にする気は、セトには毛頭なかった。

それ以前に、ペルソナには新陳代謝機能を高める能力もあるのだ。

まぁ、流石に一度外れた間接が勝手に繋がるという事はないから、セトは仕方なく先程のような処置を施した訳だが、墜落の際にできた細かい擦り傷や切り傷などは、完全に治るまでに一秒もかからなかった。

セトが首をコキコキと鳴らした時、彼は横の通りの先から、尋常ではない魔力が迫ってきているのを感じた。

「……やっぱり来たな」

思わず舌打ちする。

それはまるで雪崩のようだった。

しかし、迫ってきているのは『雪』ではなく――『氷』である。

彼の目の前の通りから、視界全てを埋め尽くさんばかりの氷塊が迫ってきた。

それを見るや否や、セトは神速の速さで装備ペルソナを脳裏で切り替えると、これまた信じられない速さでそのペルソナを召喚する。

喚び出されたのは、金色の羽を両腕に纏い、白銀の衣装に身を包んだ女性――『イシス』というペルソナだった。

まるで世界そのものが揺れているんじゃないかと思う程の振動が伝わったかと思うと、セトは迫ってきた氷塊の波に、体を押し潰された――否、そうはならなかった。

彼が現在憑けているペルソナ『イシス』は、氷結魔法を『反射』させる特性がある。相手の魔法の威力がどれだけのものであろうとも、セトが装備ペルソナを『イシス』に変えた時点で、この勝負の結果は決まっていた。

『反射』。

その系統に属した魔法を受けた場合、威力や速さ等は一切関係なく、魔法を放った相手にそれを跳ね返す特性――なのだが。

「……とんでもねぇ威力だな」

確かに、セトの体に触れるか触れないかというギリギリの所で、全ての氷塊はまるで油に水をかけたように彼から弾かれるものの、この魔法を放った相手にまでは届かない。

『反射』という特性に対して、威力は関係ない。しかし――関係ないことを関係なくする程、この魔法の威力が高すぎるのだ。

この魔法を（恐らくは）放ったであろうベリトの姿はこちらから視認する事は出来ない。が、その莫大な魔力が放つ気配から、セトにはベリトがいるであろうおおよその位置が掴めていた。

今、セトが立っている道路は、見渡す限り全てが氷りついており、まるで北極にでもワープしてしまったかのような錯覚を覚えた。

それが更に、ベリトの魔力がかなりのものである事を如実に物語っているが――セトに言わせれば、そんなことは問題ではない。

真に恐るべきは――その『攻撃範囲』だ。

「なるほど……ビシャモンテンが言ってた通りだな」

聞いたところ、ベリトにはどんな場所にいる敵にも攻撃が届くという、『荒ぶる神』という特性があるらしい。

セトが持つ特性、『混迷の霧』と同じく、他の者には真似する事の出来ない、『種族特有スキル』と呼ばれるものだ。

相手の五感を意のままに操る――『混迷の霧』。

どの場所からでも攻撃を当てる事が出来る――『荒ぶる神』。

どちらも、かなり強力なスキルではあるものの、この場合はベリトの方が有利だろう――と、セトは冷静に判断した。

『混迷の霧』の能力は確かに素晴らしいが、このスキルは人間にしか効果がないという、重大な欠点を持つ。

実際、十七年近く前に、セトはこの霧が立ち込める世界に足を踏み入れる機会が多々あったが、その時もこの霧の影響を受けたのは、自分のような人間だけで、シャドウなどの人外の存在は至って普通に活動していた。

ペルソナ使い、及び悪魔使いなどの『人間』に対しては、ほぼ無敵に近いこのスキルだが、それが悪魔やシャドウとなると一転、無

能なスキルへと成り果ててしまう。

気配を辿る限り、ベリトと自分との距離は、ざっと二キロ程離れているらしい事がセトには理解出来た。これだけ距離が離れていると、幾ら自分でも相手に魔法を当てる事は難しい。

いや、当てるぐらいならもしかしたら可能かもしれないが、少なくとも先程のような高威力を維持させたまま届かせるのはまず無理だろう。

さて、どうするか――と、セトは対策を練ろうとしたが、どうやらこちらにそんな猶予を与える心意気は、向こうはないようだ。

遥か上空で滞空していたゼブブが、一瞬、身を引いたかと思うと、次にはセトとの距離を一気に詰めてくる。

改めて、『蠅』という生物の移動速度を思い知らされる。

ただ一直線に突っ込んでくる訳ではない。途中途中で瞬間移動ともいえるような瞬発力で、右に左にとトリッキーに動いてこちらを翻弄しながら近付いてくるのだ。

しかし、その全ての動きを、セトは完全に見切っていた。

ベリトの魔法によって出来た氷の壁を蹴り、上空のゼブブへと向かっていく。

これだけの近距離で魔法を放てば、最悪、自分の身を巻き込みかねない。ゼブブには、その手についた鉤爪でセトを切り裂くという選択肢しか残されていなかった。

その爪が体に触れる寸前、なんとセトは自分に振るわれたその爪を足場代わりにして、更に高く飛び上がった。

そして、兜を思わせる、如何にも頑丈そうなゼブブの頭上に立つ。

拳を振り下ろしてその頭蓋を砕こうとするが、直ぐさまゼブブが体を回転させたことで、セトは振り下ろされてしまった。

だが、実を言うと、この時のセトの狙いは、ゼブブにダメージを与える事ではなかった。

ベリトの『超』遠距離魔法だけならば、なまじ距離が離れ過ぎている為に回避するのは容易だが、そこにゼブブの異常な俊敏さが加わると厄介としか言いようがない。

本当の狙いは、少しでも長く、ゼブブに隙を作らせること。

ゼブブの体から足が離れると同時に、セトはペルソナを憑け替えていた。

「ホルス！　『マハンマオン』！！」

セトの体から全身にまゆばい光を発する金色の鷲が現れたかと思うと、更に明るい光をゼブブに向かって放つ。

破魔属性スキル、『マハンマオン』。

魔を祓い、一定の確率で相手を即死させるという能力が、破魔属性の特徴だ。

勿論、そんな神頼み的なスキルは、ゼブブやベリトのような高位の悪魔には通用しない――が、しかし、それによって発せられる光自体は、目くらまし程度の効果がある。

「なっ……！？」

突然、目の前に太陽が現れたかと思う程の光量に、ゼブブの視力はつかの間、その機能を失う。

その隙に、セトは走った。

目指すは、この少し先にあるデパートの中の、コインロッカーだ。

途中、何体かのシャドウと遭遇したが、そんな連中を相手にしてる暇はない。殆どの敵は横を走り抜けてやり過ごし、どうしても無視できない時は、殴る蹴るなどをして、ほぼ一撃で仕留めた。

やがて、目的地のデパートへとたどり着く。

完全に閉ざされていた自動ドアをたった一度の回し蹴りで破壊すると、すぐにコインロッカーのあるスペースへと向かう。

念のため、そのコインロッカーにも予め鍵をかけておいたが、セトはそれを外そうともしない――どころか、扉を開けようともせず、直接そのロッカーを右手でブチ抜いた。

セトがその中にある自分の装備品が入ったバッグを手探りで掴むと同時に、彼の近くにある柱が爆発する。どうやら、既に目眩ましから覚めたゼブブが追ってきたらしい。

「見つけましたよ！」

蠅の表情というと変化が非常に掴みにくい為よく分からないが、どうやら獲物を追い詰めたことで僅かに興奮してるらしいという事ぐらいはセトにも分かった。

「……けど、やっぱり勝つのは俺だ」

ゼブブが衝撃属性スキルの高等魔法、『マハザンダイン』を仕掛けた時には、既にセトがそのコインロッカー内の鞄から、二丁の拳銃を取り出した所だった。

『ジャッジオブヘルム』、そして『ブラックホール』と名付けられたその二丁の拳銃は、セトの友人が、昔愛用していたものである。

セトは基本的に戦いの際は刀を使うが、敵の特性や状況によって、様々な武器を使い分ける器用さも持っていた。

そして、このゼブブを相手取るにあたって、今の手持ちの武器の中では、これが一番相性がいい。

ゼブブの移動速度は確かに脅威だが――流石に、音速を超えて飛来する銃弾よりも速いという事は有り得ないだろう。

「直斗、悪いが力を貸して貰うぜ」

セトはニヒルな笑みを浮かべると、ゼブブに狙いを定めた拳銃の引き金にかけた左右の人差し指に、グッと力を込める。

そして。

そして、銃声が――。

2nd Day『テレビの世界でのバトル（1）―4』

一発の銃声が響く。

いや、正確には、一発の銃声しか聞こえなかった――と言うべきか。

ベル・ゼブブがセトに向けて放った『マハザンダイン』。

衝撃スキルの中でも、最高クラスの威力を誇るその魔法は、ほぼ同時にセトの両の手に収まっている二丁の拳銃から撃ち出された無数の弾丸によって阻まれた。

大気を揺るがす魔法と、音速を超えた弾丸の嵐が衝突した事で、金属を無理矢理擦り合わせたような不快な金属音が辺りに響き渡る。

ただでさえ人間の理解を超えた火力を誇る、『ブラックホール』と『ジャッジオブヘルム』は、この武器の元々の所有者である、機械いじりが趣味のセトの友人によって、限界以上にまで改造が施されていた。

この二丁拳銃を扱う以前から、セトは様々な銃器を使用していたものの、数年前、アメリカでとある任務についた際、それらの殆どを――というより全てが使い物にならなくなってしまった。

並の銃器では、彼の異常な連射速度に耐える事が出来ないのだ。

アメリカで全ての銃を失った事を踏まえ、彼は日本に帰国した後、

すぐに昔からの友人である彼女に連絡をとった。

正直、自分と違い、ペルソナ使いを引退して既に短くない彼女がそれらを持っているかは疑問だったが、幸いな事に彼女はそれらを大事に保管していた。

『いつか、貴方がコレを必要とする日が来るんじゃないかと思って』

彼女はそう言って、例の二丁の拳銃をセトに授けたのである。

その言葉が本当の事なのか、或いはその場の思いつきで言った事なのかはセトには分からなかったが、何はともあれ、彼女から授けられた『ブラックホール』と『ジャッジオブヘルム』は、彼が今まで扱ったどの銃よりも使い心地がよく、そして強力だった。

彼の引き金を引く速度は人知を超えており、普通のハンドガンを使用する時でもそれがマシンガンに成り果ててしまう。

だからこそ、これまでに使用した武器の全ては、彼に使い潰される形で、駄目になってしまったのだ。

その点、彼女から頂戴したこの二丁拳銃は、遥かに使い勝手がいい――元々が、人間界に存在しない物質で作られている銃である。そのおかげで、セトのスパルタ的な連射速度に耐える事が出来ていた。

最も、そんな速さで引き金を引ける人間はこの世でセトだけであり、また、そんな使用に耐えられる銃も、この世ではその二丁の拳銃のみだろうから、その組み合わせは必然と言えば、正にそうとしか言いようがない程に必然だろう。

自分の魔法が相殺されるなど思ってもみなかったのか、ゼブブが戸惑っている隙に、セトは追撃とばかりに、更に引き金を絞る。

ほぼ同時に何十――いや、下手をすれば何百発と放たれた弾丸は、ゼブブを怯ませるには充分な威力ではあったものの、ゼブブの体が大き過ぎる為か、致命傷と言える程のダメージは与えられない。

引き金を引き続けながら、セトはゼブブの頭上目掛けて跳躍した。

弾丸をその身に受けながらも、ゼブブは鉤爪のついた腕を振り回してセトを遠ざけようとする。

だが、セトはその全てを紙一重のところでかわした。

ゼブブの利点が体の大きさによる頑丈さであるとするならば、セトの利点はゼブブより体が小さい分、素早く動けるという事だろう。

ゼブブの頭蓋に直接二つの銃口を押し付けると、フルオートのマシンガン顔負けの速さで撃ち込んだ。

すぐに弾倉が空になる。

弾丸を補充する為、一旦、セトはゼブブの頭から飛び降り、予備の弾丸の入った先程の鞄の元へと急ぐ。

その隙を見逃さず、ゼブブが再び『マハザンダイン』を放つが、セトの素早さの方が一枚上手だった。

ゼブブを小馬鹿にするようにそれを避けつつ、二丁の拳銃のそれ

ぞれのシリンダーにマガジンを収めていく。

再度、セトはUターンしてゼブブに急接近した。

彼が先程から仕切りに接近戦を挑んでいるのは、これだけ密着すれば、ゼブブの素早さ、及び魔法を無効化できることと、そして何より彼自身、接近戦には絶対の自信を持っているからだ。

だが――今回ばかりは、その自信は驕りであったと言うしかない。

戦闘の空気に身を置く事で分泌されたアドレナリンが、彼から僅かばかりの冷静さを奪っていたのかもしれない。

「調子に乗るのも――いい加減にしなさいっ！」

突然、ゼブブの尻尾（？）の先から、何かが吐き出された。

「！？」

まさかそんな反撃が返ってくると予想だにしていなかったのか、セトはそれを無防備に受けてしまう。

直撃したのは、左肩辺りだ。

見ると、そこにはバスケットボール程もある、ゼリー状の何かが、彼の左肩で蠢いていた。

更によくよく見れば、その半透明の粘体物質の中で、小さな幼虫の様な生物が、何体も身をくねらせていた。

これは、卵だ。とセトにはすぐ分かった。

生理的嫌悪感に襲われ、すぐにそれを引き剥がそうとするが、卵の外装はヌメネメした粘膜で覆われており、指が滑ってしまう。

剣で切り裂いたり、銃で撃ち抜いたりという選択肢もなくはないが、そんな事をしたら自分の肉ごと削ぐ事に成り兼ねない。

いや、例えそうなってでも、この卵は自分の体から離すべきだ――セトはすぐにそう考えを変えたが、もう襲い。卵の中の幼虫は驚くべき速さで成長すると、やがて粘膜を突き破って飛び出してきた。

先程までは幼虫であった筈のそれは、既に蠅の姿にまで成長している。

サイズこそは遥かに劣るものの、その外見はゼブブと全く同じだった。

子ゼブブ達は一斉にセトの体中に纏わり付くと、口から溶解液のような物を分泌させ、彼の肉を溶かし、啜ってくる。

そこまでの動作にものの数秒もかかっていなかった。生まれたばかりだというのに、恐ろしく統率のとれた動きである。

「そのまま、私の子供達の食糧になりなさい」

「～～～～っ！」

自らの肉を貪られている間、その傷口から悪魔特有のどす黒い感情が、セトの意識の中に流れ込んできた。

自分の体から異物を引き剥がすべく、子ゼブブの一体を掴む。

投げ捨てる動作も勿体ないとばかりに、そのまま握り潰した。

必然的に、彼の手の平が赤や黄色の体液でベトベトになる。

それに嫌悪感を感じる間もなく、右足の太股部分に、何かが捩込んでくるような痛みを感じた。

今度は何だと思って見ると、子ゼブブの一体が、尾の先をセトの体に突き刺しているところだった。

勿論、すぐに引き剥がそうとするが、手で掴もうとした寸前、もう役目は終えたとばかりに、子ゼブブはさっさと離れてしまう。

すると、何かをされた太股に、焼けるような痛みが走ったかと思うと、次の瞬間には何も感じなくなる。試しに右足を動かそうとするが、ブルブルと痙攣するだけで、全く言うことをきかなかった。

どうやら、神経性の毒を注入されたらしい。

尤も、再び卵を――しかも、今度は直接体内に――産め込まれるよりは遥かにマシだと言えるが。

そうしている内に、今度は顔の右半分に、二体の子ゼブブが張り付いてきた。

無論、すぐに引き剥がしたが、離す直前に鉤爪で引っ掻かれてしまい、セトの顔には幾つかの引っ掻き傷が残ってしまう。

親ゼブブにしても、セトがもがいているこの隙を、黙って見逃す筈がない。セトの右足が動かないのをいい事に、一気に距離を詰めては、その首を切り裂こうとする。

セトは上半身を落とす事でそれをかわすが、すぐに失敗だと気付いた。ゼブブの本命は、身を屈めたセトに繰り出したもう一本の鉤爪の方だったのだ。

右足は未だに動かす事が出来ない。

セトは鉤爪が触れるか触れないかというギリギリのところで、無理矢理身をよじり、不様に転がって何とか真っ二つになる事は避けたものの、左肩から右の脇腹にかけて、大きく肉を裂かれてしまった。

そこから、筋繊維の断面が見える。流石に、これが自然に治るには少しばかり時間がいるだろう。

血の匂いを嗅ぎ付けたらしい子ゼブブ達が、そこへ一斉に群がってくる。

セトは左足だけで、無理矢理後方へ飛ぶと、着地するまでの間に、『ブラックホール』と『ジャッジオブヘルム』で子ゼブブ達を撃ち抜いた。

弾け飛んだ体液が、腐臭を放ちながら彼の体に降り注ぐが、もうそんな事を気にしている場合ではない。

すると、前方から得体の知れない圧力を感じた。

少し先で親ゼブブが魔力を溜めているのを確認したセトは、少しの間躊躇った後、麻痺した右足に『ジャッジオブヘルム』の銃口を押し当てると、そのまま引き金を引いた。

弾が貫通し、セトの太股から血が噴き出す。

その痛みが気付けの役割を果たした事で、何とか麻痺した足を動かす事が出来た。

同時に、ゼブブがこれまでの中で最大の威力の『マハザンダイン』を放つ。

最初は、近くにあった大きな柱に身を隠そうとしたが、この威力では柱ごと消し飛ばされかねないと判断し、全速力で真横へと走る。

すぐ近くにあるエスカレーターの手摺りが吹き飛んだ直後に、セトは思いっきり体を投げ出した。

彼の背後で、魔法の射程内にあった物質の全てが粉々になる。

セトは体を床にたたき付ける前に、上手く手の平を置いて前転し、体勢を整えた。

振り向き、目の前にある壁を撃つ。

その壁の向こう側にゼブブがいる事を、セトの五感は感じ取っていた。

対して、壁によってセトが銃を撃った事を確認出来なかったゼブ

ブは、壁を貫通してきたその弾丸を直接浴びる事になる。

「ぐっ……！？」

今まではこちらが優勢だったのに、ここぞという機会を逃さずに反撃してくるセトを、ゼブブは改めて脅威だと思った。

撃ち込まれた弾丸によってヒビの入った分厚い壁を、セトは後ろ回し蹴りで壊し、瓦礫と共にゼブブへと飛び掛かる。

ゼブブが慌てて鉤爪を突き出し、セトを切り裂く。

セトの体は、もはや無数の切り傷に侵され、体中が子ゼブブや自分の血液でドロドロに塗れていた。

切り裂かれながらも、セトは鉤爪のついたゼブブの腕を脇で挟むと、もう一方の手でわしづかみにする。

そしてそのまま、ゼブブの巨体を、抱き寄せるように引っ張った。

重量差などものともしないセトの並外れた怪力に、ゼブブが戸惑った事が彼には分かった。

ゼブブが体勢を崩し、上半身がやや前のめりに倒れる。

その顔にある深紅の複眼に、セトは銃口を押し当て、引き金を引いた。

マシンガンのような速さで弾丸を眼窩に撃ち込まれては、流石のゼブブもただでは済まなかった。

悲鳴のような金切り声を上げると同時に、セトの体を突き飛ばす。

もんどりうってセトの体はゼブブから離れるものの、その頃には既に、勝敗は決していたと言ってよかった。

だからこそ、油断したのかもしれない。

先程の油断は、戦いによる高揚感からだった――そして今回は、戦況を有利に進められた事で生じた油断だった。

いや、油断というよりは、もはやハッキリ忘れていた、と言っていい。

このデパートに入ってから、今まで一度も、何もしてこなかったが故に、彼は忘れていた。

どれだけ離れていても、どこからでも攻撃を届かせる事が出来る存在――『ベル・ベリト』の存在を。

種族特有スキル、『荒ぶる神』。

果たして、それが起こった時、セトがベリトの事を思い出したかどうかは定かではないが――。

一つだけ言える事があるとすれば、それは、結末がどうであれ、彼等の戦いの場がこのテレビの世界であった事は、セトにとっては間違いなく幸運だったという事だ。

もし、今回の戦闘が現実世界で行われていたら、封鎖とか、ベル

の王位争いとか、神の試練とか、『彼』の息子だとか、そんな事は一切合財反論の余地もない程完膚なきなまでに関係なく、東京という街は滅んでいただろうから――。

セトが再びゼブブへと向かっていこうとした瞬間。

世界が、爆発した。

◆

◆

それから、数十分後。

先程まで、壮絶な戦いが繰り広げられていたテレビの世界の中の東京は、瓦礫の山と化していた。

その内の、とある場所。

元々は、とあるデパートがあった（と思われる）場所の瓦礫の一

つが、グラリ、と揺れた。

次には、そこから半径数メートル以内にある瓦礫が、まるで内側から強力な爆風に当てられたかのように吹き飛ぶ。

果たせるかな、そこには、体中を埃塗れにした男がいた。

勿論、セトである。

「……やれやれだぜ」

恒例の如く、彼はそう呟く。

比喩でもなく冗談でもなく韜晦でもなく、彼は今の今まで気を失っていた。

と言っても、時間にすれば、それはおよそコンマ数秒にも満たない間でしかなかったが。

それからの間は、辺りが静けさを取り戻すまで、ずっと瓦礫の陰に身を隠していた。

だが、たかがコンマ数秒いえど、それだけの時間があれば、セトならば裕に数十回は人を殺せる。

「なるほど……俺がデパートに入ってから、ベリトの奴が何もしてこなかったのは、こうする為に魔力を溜めていたからなんだな。つーか、マジで距離とか関係ねぇんだな、あの肉団子。ビシャモンテンから聞いていたとは言え、完全には信じてなかったぜ。すげーな、本当。流石はベル神のエース」

遠距離砲でも超遠距離砲でもない、言うなれば、全距離砲。

単純な魔法の火力だけで言えば、セトでも敵わないだろう。

どうやら、あの二体のベル神の目的は、最初から如何に自分を倒す事ではなく、如何に自分から離れられるかにあったらしい。

ベリトがあの超巨大な魔法弾を放った際に起きた爆発に紛れて、ベリトはセトの前から完全に姿をくらました。

つまりは、逃げられてしまった。

ゼブブは、決して無事ではない筈だが、それでも、周囲の気配を探る限り――ベリトと同じように、ここから立ち去った事が分かる。

それが果たしてどのような理由なのか――セトには敵わないと判断したのか、或いは他の事情があるのか――セトには分かるべくもないが、ただ確実なのは、今から自分が追い掛けたところで、決して連中には追いつく事は出来ない、という事だ。

あの二体は現在、ここよりもっと離れた場所――そう、下手をすればこのテレビの世界ではなく、本来自分達がいるべき魔界にいるのかもしれない。

というより、恐らくはそうだろう。

このテレビの世界も、別次元的空間でありながら、現実の『東京封鎖』という状況に影響されて、山手線を沿うように巨大な結界が施されている（もしかしたら、人間ではない彼等には作用しないの

かもしれないが）。

この東京内において、セトが彼等の気配を感じないという事は、恐らくそういう事だ。

「あーあ、逃げられちった。でも、こりゃアイツ等の作戦勝ちっつーよりは、単純に俺の注意力不足だな――ったく、やれやれだぜ。俺もまだまだだ」

『ペルソナを使わなくとも勝てる』と言って（思って）おきながらも、なんだかんだ言ってゼブブに対して魔法を使ってしまった辺りからも、それは窺える。

「『先輩』だったら……こんな不様な結果にはならないんだろうな」

『先輩』。

有里――先輩。

セトがこの世で唯一、尊敬している人物。

尊敬というよりは――心酔している、と言った方が適切かもしれないが。

『彼』ならば、敵との相性を気にして一時的に戦線離脱する事も有り得ないだろうし、そもそも、うっかり敵の存在を忘れたりする事もないだろう。

「……」

そう考えると、セトは少しだけ、腹が立ってきた。

思い出すのは――あの二体と戦う直前の会話だ。

あの時、セトが尊敬する『先輩』を侮辱した（世間的に見れば、それは侮辱でも何でもないのだが）2体に、セトはこう言ったのだ――『あの人』を侮辱したお前らを許しはしない、と。

だが――逃げられた。

逃げられて――しまった。

もしかしたら今頃、あの二体は、『何だ、あの男は。偉そうな事を言っておきながら、結局自分達を殺せてはいないじゃないか』とせせら笑っているかもしれない。

そして、『この分では、あの男が言っていたあの人とやらも、たかが知れる』――と嘲笑しているかもしれない。

腹立だしい。

どうしようもなく――腹立だしい。

自分が馬鹿にされる事も勿論だが――それ以上に、それ以前に、自分のような男の責任で、今、有里　〇の評判が下がってしまっているかもしれない、という事が、非常に腹立だしかった。

そんな事は、許さない。

何に変えても、許さない。

殺す。

『あの人』を理解出来ない、しようともしない、あの下等な二体の生物を殺す。

今まで生きてきた事を後悔する程の、苦痛と苦悶と苦難の中で殺す。

勿論、他の誰かが――例えば、『あの人』の血を受け継ぐ有里淳辺りが――殺してくれても構わないが、出来れば自分の手で、とセトは思った。

奴らを殺す。

殺し尽くす。

決してそのような態度は表には出さず、意識の内側だけで、彼は自らの怒りを再確認する。

二十年近く前の彼――まだペルソナ使いとして覚醒して間もない、高校生だった頃の彼ならば、こうはいかなかったかもしれないが、幸か不幸か、これまでの長い年月を、とある理由から、ペルソナ使いとしての活動に費やしていた彼は、精神的な意味でも鍛え抜かれていた。

「……行くか」

そして、彼は歩き出す。

岳羽ゆかりには悪いが、どうやら、このテレビの世界を脱出通路として使用する事は叶わないようだ。

だが、他の方法を探るにしても、まずはあの二体を殺してからだ。と、セトは思った。

そして、これもまた岳羽ゆかりにとっては悪い情報だが、恐らく、ベリトやゼブブが現実世界に現れるまでに、あと数日は掛かるだろう、とセトは思った。

先程の大型魔法で、ベリトは相当な魔力を消費しただろうし、ゼブブにもセトがかなりの深手を与えている。二体が万全の体勢に戻るまでの時間は、それ程短くはない筈だ。

ならば、それまでに自分はどうするか、という話になるが――それは、現実世界にいる、自分の仲間のミクやショウジと合流してから、ゆっくり考えよう、とセトは思った。

彼は歩く。

歩き続ける。

今までの人生も、そうやって生きてきたかのように。

2nd Day『ホンダとカイドーの合流』

淳達が渋谷駅前を通り掛かると、カイドー、そして、先程高架で出会ったホンダという男が何かを話していた。

「……？　さっきのジンさんといい、また随分と意外な組み合わせだな。アイツの顔が広いって事は知ってたけど、それって不良以外のジャンルにまで及ぶのか？」

そう言いつつも、淳は近くの物陰に隠れて、二人から見えないようにした。アツロウとユズも、同じようにしてくる。

「……なるほどね。気に入ったよ、カイドー君。我が社にも君のような人材がいれば……」

『我が社』と言っている辺りから判断するに、やはりホンダは何処かの企業のサラリーマンらしい。

だが、ホンダから送られた世辞が、カイドーにはお気に召さなかったようだ。

「ああ？　オレもアンタは気に入ったが、そこまでする気はねぇよ。大体、もうオレには……」

そこまで言って、カイドーは急に口を閉ざしてしまう。

今、彼の脳裏には、とある銀髪の男の姿が浮かんでいた。

「オレには……何だい？」

「な、何だねぇよ！ボケ！」

「フ……、まあいい、そのハッキリとした物の言い方、益々気に入ったよ」

ホンダは肩を竦めると、途端に今度は真剣な顔つきになって、カイドーが持っているＣＯＭＰに視線を注いでくる。

「ところで、君の持つその……ＣＯＭＰというヤツについて、詳しく聞きたいんだが……」

「……人前で話す事じゃねぇ。場所を移そうぜ。ついて来いよ」

やがて、二人は人目のつかない場所を求めて移動を始める。

流石に尾行してまで話の続きを聞きたいとは思わなかったのか、淳は物陰から姿を現すだけで、去っていく二人の後ろ姿を眺めていた。

「……行っちゃったね。にしても、本当に不思議な組み合わせだよね。カイドーとホンダさんって……。一体、何の話をしてたのかな？」

ユズは目をパチクリさせていた。

「聞いた感じじゃ、ホンダさんがカイドーの何かを気に入って、自分の会社にスカウトしてるって感じだったけど……」

「何かって何だ？　カイドーの奴、不良に見えて、実は何か特殊な免許でも持ってたとか？」

「いや、というよりは、カイドーの人間性について何か気に入ったって感じだったような……」

しばらくは、そんな感じで淳とアツロウの議論が展開されていたが、難しい話がよく分からないユズは、やがてイライラしたように、

「ハイ、ストップ！　もう、確かに気にはなるけどさ！　今はそんな事より、封鎖の出口に関する情報を集める事でしょっ！」

「あ……ワリィ」

淳が素直に謝るものの、ユズは頬を膨らましてプイッと横を向いてしまった。

「……もうっ！」

「けどよ、実際、どうするんだ？」

気を取り直したアツロウが、そう聞いてくる。

「高架はダメだったし……。自衛隊のあの徹底ぶりを見る限り、一般的に考えられるような出口は、全部封鎖されてると見るべきだろうな……」

「……一般的な出口はな。……となると、後は一般的に知られてない抜け道ぐらいだが……。あのカイドーでさえ心当たりがないんだもんなぁ。そんなもん、俺達みたいなのがどうやったら見つけられ

るんだよ」

淳はイライラしたように頭を掻いている。

その時、淳の近くを数人の女子高生グループが通り掛かった。

彼女達も淳達と同じようにこの封鎖に巻き込まれたのは間違いないが、彼等とは違い、彼女達はこの封鎖が本当に有毒ガスの漏出だと信じて疑っていない。

恐らく、どうせこんな封鎖は政府が近い内に解決して、すぐに解かれると思っているのだろう。

淳達にしてもそうなってくれれば何よりもありがたいが、なまじ普通の人間よりは（一端とはいえ）この封鎖の裏側に触れてしまっただけに、そこまで楽観的になることは出来なかった。

勿論、渋谷駅前という現在地を踏まえれば、例え今のような東京封鎖という状況でも、彼女達の姿は特に珍しいものではないので、淳は当然のようにそのグループを辺りの一風景と同じように扱ったが、彼女達の会話の一部分がたまたま耳に入った事で、そういう訳にもいかなくなってしまう。

女子高生の一人が言った。

「ねぇねぇ、さっきから、何かヤクザっぽい怖い人達が、東京タワー下に向かってるって聞いたんだけど」

「え〜、何それ〜、怖〜い」

それを聞いた別の女子高生がキャハハ、と笑う。

「しかも、その集まってる人全員が、何故か携帯ゲーム機なんか持って行ってんのっ！　ＣＯＭＰって知ってる？　いい大人が寄ってたかって、ゲーム機片手に同じ場所に集まってるとか、マジ受けるんですけどっ！」

……とまぁ、そんな当たり障りのない、何気ない会話をしながら、彼女達は淳の横を通り過ぎて行った。

「……」

「……」

「……」

だが――女子高生達にとっては当たり障りのない、何気ない話題であろうとも、それを近くで図らずも聞いてしまった淳、アツロウ、ユズにとって、その話題は当たりも、障りも大いにある、何気なくなど全くない話題だった。

「……聞いてたか、今の？」

と、淳は二人に尋ねる。ユズはコクン、と頷くと

「うん、さっきの人達が言ってたのって……もしかして、ＣＯＭＰの事かな？　単なる勘違いだといいけど……」

ユズがそう言うものの、アツロウは否定の意を示す。

「……その可能性は低いと思うぜ。こんな状況でなくとも、ヤクザみたいな人間が、見た目的にはただの携帯ゲーム機のＣＯＭＰを持って、しかもその全員が同じ場所に集まってるなんて、どう考えても不自然だしな」

真っ向から正論を突き付けられたユズは参ったようにアツロウから目を逸らした。

アツロウばかりに辛い役目を負わせるべきじゃないと判断した淳は、アツロウが言いたい事を代弁する事にする。

「……念の為、様子だけでも見に行かないか？　どうせ、今の俺達にはやることがないんだし」

「う……分かった……。でも、悪魔が出たりとか、何か怖いのだったら、すぐに逃げるんだからねっ！？」

「ああ、勿論だよ」

内心では、この先で起こる出来事からは逃れる事は出来ない、とどこかで根拠のない確信を抱きながら、淳は東京タワーへ向かう為、昨日立ち寄った芝公園のある方角へと目を向けた。

◆

◆

「あら、セトさん。お帰りなさい……って、うわっ！　どうしたの!?　何で血まみれ!?　一体何があったのよ!?」

「……」

テレビの世界から帰ってきたセトは、池袋のある通り道で、仲間であるショウジと合流した途端、いきなりそんな事を言われた。

テレビの世界での激闘のせいで、セトのお気に入りだった甚平の上半分は完全に焼失していた。

代えの着替えも、その世界に隠しておいた武器の入ったバッグに入れておいたのだが、ベリトが最後に放ったあの超巨大魔法のせいで、全てダメになってしまったのだ。

食料品や医療道具などについても同じである。

無事だったのは、八十稲羽の自宅兼職場である天城屋旅館から持ってきた、幾つかの装備品だけだ。それらは、ここにくる前に他の隠し場所に仕舞っておいた。

ちなみに、テレビの世界から出てきてから、ここに来るまでの道中、セトはお得意のスキル『混迷の霧』を使っていない。

テレビの世界で消費した魔力はそれ程でもないが、そもそもあの世界はかの『影時間』と同じく、通常よりも遥かに体力の減少が激しい。

セトは、成人していながら未だにペルソナ使いとして活動しているという変わり種だが、テレビの世界に限っては本当に久しぶりだった事と、何より、昨晩から全く寝ていないというのが疲労の主な原因だった。

そんな状態でも『混迷の霧』は使えなくもないが、あのスキルは実は微細なコントロールを必要とするもので、うっかりすると見ず知らずの他人を発狂させる事に成り兼ねない。

そんな理由から、彼はここまで『混迷の霧』を使う事が出来なかった――つまりどういう事かと言うと、上半身裸で、しかも血まみれのまま、彼は白昼堂々とここまで歩いて来たという事だ。

ある意味勇者である――が、当然、そんな彼はここに来る途中、周りの人間からいつぞやのミス☆コンに出た時と大差ない羞恥心と、その時と全く同じ種類の視線を浴びてここまで来た訳だが、何故か先程のショウジのリアクションが一番、セトを凹ませた。

セトは詰問してくるショウジの言葉を悠然とスルーしながら、

「なんか、拭くものあるか？」

と尋ねた。仲間となった証として、彼女にも予め、幾つかの食料、及び衣類などを渡していた為、セトは彼女がタオルなどを持っている事を当然知っている。

『今の自分の身なりについて、一切質問は受け付けない』、というセトの態度を理解したのか、その件についてショウジはそれ以上触れようとはせず、片手に下げていたビニール袋から白いタオルを取り出すと、無言でセトに手渡した。

セトは「サンキュ」と短く礼を言うと、体にこびりついた血液や肉片などを拭い始めた。

もっとも、ゼブブに負わされた左肩から右脇腹にかけての切り傷も含めて、全ての損傷は彼の圧倒的な新陳代謝によって治癒しているのだが……。単に、それによって体に付着したままの血液などが不快だっただけである。

その後二人は、恐らくは悪魔のせいで無人になった仕立て屋（その証拠に、店の中には心臓のみをえぐられた死体が散乱していた為、ショウジを気遣って、先にセトがその後始末をしなければならなかった）に入り、適当な衣服を掴むと、そのまま試着室へと入る。

「覗くなよ？」

「普通逆じゃない？　その台詞」

数分後、試着室から出てきたセトは、今度は赤い甚平を身に纏っていた。

そんな服をチョイスするセトの感性にも疑問だが、それ以前に、そんな服を仕入れているこの店の発注担当者も相当な変わり者に違いない、とショウジは思った。

尚、セトは律儀にも――どこから取り出したのか――財布から一万円札を取り出すと、カウンターに置いていった。

次に、同じく無人の薬局へ行き、包帯や消毒液、抗生剤、軟膏などを手に取る。出血こそ止まっているものの、シャワーさえ浴びて

いないこの状況では、破傷風なども気にしなくてはならない。

血糊のついていた皮膚を消毒し、抗生剤の軟膏を塗る。血は止まっているものの開いたままの傷口は多少の痛みは我慢して自分で縫った（特に、胸の切り傷を縫う時の痛みが一番酷かった）。

勿論、今度もセトは代金として一万円を置いていった。

次に、包帯を巻く。この辺りは一人では難しいので、ショウジにも手伝ってもらった。最終的にはミイラのようになってしまったが、この封鎖があと数日も続けば、そんな事を気にする人間はいなくなるだろう。

最後に痛み止めを注射すると、二人は落ち着いて話せる場所へと移動した。

セトがここまでの流れを全てペルソナを使わずに手作業で行っているのは、ショウジをこちら側の世界に引き込みたくないという気持ちもあるが、それ以上に、彼のポリシーによるところが大きい。

彼はペルソナ使いとしての業務を行う時以外は、なるべく雑務などにペルソナを使わないようにしている。余り便利なものに頼り過ぎると人間性が退化してしまう事を知ってるからだ。

人通りの少ない通りの公園にベンチに腰を下ろしながら、まずはセトが口を開く。

「……で、ショウジちゃんの方の取材は、順調にいってるのか？」

「『ちゃん』はやめて。……正直、難航してるわ。貴方に頼まれた

『連続吸血事件』にしろ、今回の『東京封鎖』にしろ、ね。皆、自分の事で手一杯みたい」

「ふぅん……ま、そりゃそうか」

「貴方が言っていた……ええと、『ジュン君』、だっけ？その子もまだ見つからないし」

それを聞いて、セトは何故か可笑しそうに「ハハハッ」と笑った。

「そうだろうな。アイツは、そういう風にできてる。何たって、『あの人』の息子なんだ。どんな物事でも、アイツが絡むと全ての予定が破綻する。それでこそ、『死神』の息子だ」

「……？　……何を言ってるの？」

「気にすんなよ。こっちの話だ」

「……まぁ、いいわ。で、貴方の方はどうなの？何か分かった？」

「ああ……まあな」

勿論、セトは立場上、今回の封鎖に関してある程度の事情を把握しているので、厳密には今までに調べ上げた事を教えているのではなく、予め知っていた事を伝えているだけなのだが、それについては敢えて言わない事にする。

「まず、この封鎖から出られるかもしれない出口があるらしい事が分かった」

まるで世間話でもするような口調だが、その言葉はショウジの関心を引き付けるのに十分だった。

「出口？　……それって本当なの？　自衛隊は山手線は勿論、高架を含む全ての出入口を封鎖してるわ。もう、この封鎖には穴なんてないって、この間貴方も言ってなかったっけ？」

「まぁ、話は最後まで聞けよ。ジャーナリストのショウジちゃんなら、もしかしたら知ってるんじゃねぇか？　首都高が地下鉄と繋がってるって話」

それは――確かに、ショウジも知っていた。しかし……。

「聞いた事はある……けど、それはあくまで噂で、都市伝説程度の話でしょ？」

「ところがどっこい、本当らしいんだな、これが」

「……大体、首都高って高架じゃない。どうやったら地下鉄と繋がるのよ？」

「確かにそうだけどな。けど、高架の中にも、一部には地下を通ってる部分もあるんだ。えーと、『赤坂トンネル』って知ってるか？」

「『赤坂トンネル』？　……ああ、丁度、迎賓館がある辺りね……けど、それが事実でありながら噂程度にしか知れ渡ってないって事は、どうせそこは正規の通路じゃないんでしょ？」

「その通り。そこは政府の中でもほんの一握りの連中しか知らない極秘のルートだ。一体どんな目的でんなもんを作ったのかは知らね

ぇが、この『極秘』って部分がポイントだ。言ってる意味、分かるか？」

ショウジは最初、セトの言う『意味』が分からないようだったが、やがて、何かを察したのか、ハッとした表情になる。

「そうか……！　政府内でさえ秘密の通路なら、もしかしたら自衛隊の警備が行き届いてないかもしれない……！」

「プリリアント！　その通りだ」

セトは、かつての高校時代の先輩の真似をしながら、顔の前で両手を打った。

「まぁ、もしかしたら、その秘密を知る数少ない別の自衛隊員が配置されてるかもしれないが、どちらにせよ手薄な筈だ。確認する価値はあると思うぜ？」

セトは「よっこらせ」と言いながら、ベンチから腰を上げる。

「ふぅん……なるほどね……。じゃ、次の質問だけど……」

勢いに乗ったショウジが別の質問を投げかけようとした時、セトが「ちょっと待った」と言って手の平を彼女に向けてきた。

「最初に決めたろ？　アンタが『連続吸血事件』の情報を渡す代わりに、俺が今回の封鎖について教えるって。今回、アンタはそれについて情報を掴んでくる事が出来なかったから、俺が渡せる情報はここまでだ」

「……随分、けちくさいのね」

ショウジはセトをきつく睨むが、彼はおどけるように肩を竦めるだけで、全く怖じけづく様子はない。

「そう言うなよ。こっちだって必死になって手に入れた情報なんだ（大ウソ）。ギブアンドテイクといこうぜ」

それでも、ショウジはまだ何か言いたげだったが、結局、最初に自分もその考えに同意してセトと結託した事を思い出すと、やがて「ハアッ」とため息をついた。

そんなショウジの態度を年上であるセトは可笑しく思ったのか、クスクス笑うと、

「まぁ、そう気を落とすなって、今はさっきの情報で十分だろ？で、その赤坂トンネルの件はどうする？　何だったら、一緒に行ってやってもいいけど」

「んー……、いや、今はいいわ」

「おやおや」

「まだ、この封鎖内にいる人達に、十分な取材を出来てないしね……。せめて、貴方の言う『ジュン君』に会うまでは、東京に残るつもり」

「ふぅん……そうか。それならそれでいい。それがアンタの『選択』ならな。いい『結果』が出る事を願ってるよ」

もう話す事は話したと判断したのか、セトは一度、その場で「う～ん」と伸びをすると、やがて、

「じゃあな、ショウジちゃん――また会おうぜ」

「『ちゃん』はいらない。……あ、そうだ。最後に一つだけ、いいかしら？」

ショウジの言葉に、セトは片方の眉を吊り上げながら彼女の方に振り返る。

「何だ？　さっきも言った通り、もう教えるべき情報はねえぞ？」

「違うわよ。そうじゃなくて、もっと簡単な質問。貴方は――

――セトさん、貴方は一体、何者なの？」

するとセトは、怪訝な表情を一変させ、ニヒルな笑みを浮かべながら答えた。

「何者でもないし。何者にもなりうる――愚者（ワイルド）、瀬多　〇〇だ」

2nd Day『東京タワー下のバトル（1）』

――芝公園、東京タワー。

最早、説明など不要であろう、日本人ならば誰もが知っているその場所に、明らかに観光目的で来たとは思えない者達の姿があった。

スキンヘッド。

リーゼント。

葉巻。

眉無し。

今時、小学生でさえ一目見れば『あれはヤクザだ』と断言出来てしまう程、明らかに明らかな格好をした男達。

その内の一人、恐らくはこの中ではリーダー格であろう、スキンヘッドの頭に値が張りそうな白いスーツを着た大柄な男が、下っ端から手渡された一台の携帯ゲーム機を覗き込んでいた。

「コレがＣＯＭＰってヤツか。へっ……こりゃあいいモン、手に入れたじゃねえか、オウ」

「へへっ、全くですぜ！　ヤバイ事でも何でも、悪魔にやらせ放題！　笑いが止まらねぇすよ、へへっ！」

「そうだな……だが、まだだ。まだ数が足りねぇ。……やいテメェら！　コレをもっと集めるんだ！　その辺の避難所でも行って、そのＣＯＭＰってヤツを、かき集めて来い！」

……そして、そんなヤクザ達の姿を、少し離れた場所から見ている者達がいた。

いや、者達――と言うよりは、少年少女達、と言った方がより正確だろう。

明らかに、東京タワー下でたむろしている連中とは真逆の世界の住人であるのは間違いない。ヤクザの真逆が一般人なのかと聞かれれば、それは甚だ疑問ではあるが。

少年二人。

少女一人。

その中の、白いニット帽を被った少年――木原篤郎（あつろう）が、離れた場所で悪巧みしている先程のヤクザ達の姿を見ては、冷や汗を流している。

「うわ、やっぱり……明らかにその筋の人達だぜ……は、初めて見た……！」

隣にいる淳にしても、ヤクザを生で見るのは初めてだが、今はそれよりも、その視線はヤクザ達が持つＣＯＭＰ（勿論、ただのＣＯＭＰではなく、悪魔召喚プログラムが組み込まれた改造ＣＯＭＰに違いない）に向いていた。

「アイツら……一体、どうやってＣＯＭＰを手に入れたんだ？」

「……ていうか、あの人達、どう見てもＣＯＭＰを悪い方向で使おうとしてない……？」

ユズもまた、アツロウと同じように怯えた表情をしている。現在、この三人の中でヤクザ達に全く物怖じていないのは、淳だけだった。

「まぁ……馬鹿の考える事は皆一緒だな」

「ああ……にしても、クソ……ＣＯＭＰを悪用する奴が出てくると思ったけど、よりによってあんな連中かよ……！」

「どうしよう、ジュン？　相手が相手だし、このまま放っておく？」

「いや、相手があんな相手だからこそ、このまま放っておく訳にはいかない。そうしたら、まず一番近くの芝公園の人達が被害を受けるだろうからな……。今、ここで連中からＣＯＭＰを取り上げるのが最善だ」

淳の言う事は正に正論だが、アツロウとユズはそれでもまだ怯えたままだった。

そんな二人に、淳は若干ながらも苛立ちを覚えてしまう――今まで、魑魅魍魎を彷彿とさせる悪魔達と何度か死闘を繰り広げてきたのに、なにをヤクザくらいで怯えているのだろう？

それを聞いたアツロウが、鳩が豆鉄砲を食らったかのような表情をする。

「うえっ!?　マジかよ?　その筋の人と……戦うの!?」

思わずそんな大声を上げたアツロウに気付いたのか。

――或いは、その少し前から、こちらの存在に気付いていたのかは分からないが、ヤクザの内の一人、先程、スキンヘッドの男にＣＯＭＰを手渡していたリーゼントの男がこちらに近寄ってきた。

「……あ、ニイさんら、何か用か?　オウ……て、ん?」

リーゼントの男の視線が、淳が持っているＣＯＭＰの辺りでピタリと止まった。アツロウ達には悪いが、どうやら、時既に遅しの状況らしい。

「ほほ～、ＣＯＭＰを持ってるじゃねぇか。それ貸してくんねぇかな、オウ」

続いて、リーダー格のスキンヘッドの男も、リーゼントの男の後ろからこちらに近付いて来た。

「なぁに、ちょっと借りるだけだぜ?　すぐに返してやるからヨ、なぁ?」

しかし、昔からこういう人間の相手には慣れている淳は、未だに平然とした様子だ。

淳がすっかりやる気になっているらしい事を察知した幼なじみであるユズが、

「ど、どうするのよ?」

と、アツロウに尋ねる。

「ジュンがやるって言ってんだ、やるしかないんじゃないか？　……ちょっと腹も立ってきたしな！」

そんな三人の会話に痺れを切らしたのか。

「ゴチャゴチャ言ってねぇで……とっととＣＯＭＰ渡せコラァッ！」

リーゼントの男が淳に向かって猛然と突っ込んできた。

そして、右拳を大きく振りかぶり、そのまま淳に向けて突き出す。

しかし、

（うわっ、おっそ）

こと拳を使った戦闘において、無類の強さを発揮する男――真田明彦から長年、拳闘術の教えを受けていた淳に対して、そんな隙だらけの攻撃は、余りにも無防備だった。

ゴキンッ！　――と、何かが折れる音が、辺りに響き渡る。

淳に対して向けられた筈の拳は、何とリーゼントの男に向けられていた。

何と、と言ったが、しかし実際は、何という事はない。

リーゼントの男が突き出した腕の間接を淳の右手が掴み、拳を左

手が掴んで、そのまま拳を握った左手を、間接を掴んだ右手をこてにして、男の方向にへし折った――と、ただそれだけの事だ。

そう、言ってみれば確かに単純明快明瞭明白だが、淳が行ったそこまで一連の動作が余りにも速く、且つ鮮やかであった為、リーゼントの男が全く反応出来なかったのである。

「えっ……？」

リーゼントの男は何が起こったのか咄嗟に理解出来なかったのか、つかの間、呆然としていたものの、次の瞬間には、右腕の神経から伝わってきた激痛に、悲鳴を上げる。

「……！　……ギャアアアッ！　俺の腕がぁっ！？」

「……しまった、軽くいなすだけにしようかと思ったのに、うっかり折っちまった」

「このガキがぁっ！　調子に乗りやがって！！」

それを離れた所から見ていた、他のヤクザ達が、その目に狂暴な光を湛えがら、一斉に淳達の方へと駆け寄ってきた。

中には、手に入れたばかりのＣＯＭＰから、悪魔を召喚する者もいる。

「く、来るよっ！」

「ああっ！」

流石に、それを黙って見ている程のお人よしではない。アツロウ、ユズも、それぞれのＣＯＭＰから仲魔であるジャンバヴァンやキジムナーを召喚した。

「聞け、お前ら」

淳は、ヤクザ達にというよりは、アツロウ、ユズに呼び掛けるように言う。

「一つ、コイツら、潰す！二つ、コイツら、ぶっ潰す！ＯＫ！？」

もし、この場にセトがいたならば、思わずニヤリとしたであろう台詞を言いながら、淳はヤクザの群れに、まるで身を投げ出すように走り出した。

今までの人生も、そうやって生きてきたかのように。

◆　◆

『……悲しいなあ。可愛そうだなぁ、俺。……でも、何もかもウザいと思っているのは……自分のほうだっつーの！　アハハハハッ……！』

その少年の発する声からは理性という物が一切感じられず、正気

を保てていないのは明らかである。

いや、保てないのではなく、そもそも保つべき正気がないかのような――そんな印象を、その場に居合わせた瀬多　〇〇は受けた。

「この反応……『シャドウ』だクマ！」

彼の側にいる、クマの着ぐるみを着た何かしらの生物が、緊張を滲ませてそう叫ぶのを聞く傍ら、瀬多はもう一人の、別の人間に目を向けた。

自分もこのような状況にあって中々冷静を保つ事は出来ていないが、それよりもこちらの方が心配だ。何故なら――

「何だ、コイツ……。何で、俺と同じ……」

『外見なんだ？』という言葉は、その少年――耳元まで伸ばした茶色の髪に、大きなヘッドホン、赤い縁のメガネをかけている――からは出てこなかった。

それに被せてくるような形で、その少年と全く同じ外見をした、もう一人の少年が言葉を発したからだ。

『いつまで媚びへつらっていいヤツ面して生きてんだよ？　商店街も！　ジュネスも！　全部ウゼーんだろ！？』

「な、何言ってる……？」

『そもそも……今の生活が、田舎暮らしがウゼーんだよな！？』

黄色い目をした、隣にいる瀬多の友人と全く同じ外見をした少年――『クマ』が言うところの『シャドウ』は、「ヒャハハハッ！」と高らかに笑った。

その狂気の沙汰とも思える態度に恐怖感を抱いたのか、瀬多の友人、花村陽介はシャドウから距離をとる為、二、三歩後ずさる。

『何焦ってんだ！　俺には全部お見通しなんだよ！　だって俺は――――お前なんだからな！！』

シャドウが断言するようにそう言い放った時、瀬多の友人が恐怖で目を見開き、絶句した。

分かっているのだろう。

わざわざ言われるまでもなく――このシャドウが、自分の写し鏡である事を、どこかで理解しているのだろう。

『ここに来たのも、お前は単にワクワクしてたからだ！　小西先輩の為に来たなんてのはただの口実さ！　大好きな先輩が死んだっていうのにな！』

「シャドウ……生まれたては初めて見たクマ。それに、センセイみたく直接出て来たものだから凄い力を感じる……」

クマの言葉は、このシャドウが瀬多の友人から直接出て来た事を、暗に決めつけているようなものだった。

それに対してなのか、はたまた自分のシャドウの言葉に対してなのかは定かではないが、瀬多の友人はそれでも尚、全てを認めないとでも言うように激しく首を振っている。

「違う！！　お前……誰なんだ！　誰なんだよ！」

『違わないさっ！！　……いいぜぇ……もっと、もっと言いな！』

「ふ、ふざけんなっ！　お前なんか……俺じゃない――」

『足りねぇ……もっと！　もっとだ！！』

マズイ、とセトは思った。友人がシャドウに対して否定的な事を言う度に、シャドウの力が上がっていくのを感じたからだ。

以前の学校にいた際、とある少女（厳密には少女型ロボット）が言っていた事を思い出す。ペルソナとシャドウは元々同じ存在。良くも悪くも、宿主の心によってその力は増減する――。

多分、次で最後だ。

後一回でも、このシャドウを拒絶するような事を言えば、このシャドウは自分の友人の支配下から逃れ、同時に、今度は自らが友人の体を支配するべく襲い掛かるに違いない。

「お前なんて――」

「オイッ、花村、よせっ！」

だが、時は既に遅かった。

「お前なんて、俺なんかじゃないっ！！」

その瞬間――シャドウが動きを止めた。

そこには、先程までの荒れ狂ったような態度は微塵も見当たらない。

ただ、静かに――。

不気味な程、静かに――その黄色い眼差しで、瀬多の友人を睨んでいた。

『……ああ……そうさ……』

シャドウが呟く傍ら、瀬多は、友人とシャドウの間に割って入る形で、シャドウの前に立ちはだかった。

『もう……俺は俺だ！　お前なんかじゃない！　俺は、俺の好きなようにする……だから』

いきなり、シャドウの体から、黒い蒸気のような物が溢れ出した。

次には、その蒸気がシャドウの体を覆い、そこからミンチをこねるような音が辺りに響き渡る。

『ここも、この商店街も、ジュネスも！　そしてお前も！　全部ぶっこわしてやんよおおおおぉぉぉぉぉぉっ！！』

「……っ！！」

そこから感じられるのは、尋常ではない量の負の感情。

これは――これだけの力は、予想外だ。

少なくとも、自分達が今いる、このような狭い屋内で戦うべき相手ではない。

「クマ、花村、来いっ！　こっちだ！」

瀬多は二人（一人と一匹）を出口に促し、シャドウが急速に進化――ある意味それは、『退化』と言った方が正確かもしれないが――していくのを傍目で見ながら、最後に自分が外へと飛び出した。

そのタイミングを見計らったかのように、彼の背後で、先程まで自分達がいた場所――こちらの世界のコニシ酒店が爆発する。

「……クソッ！　やれやれだぜ」

瀬多が後ろを振り向けば、そこには、最早先程までの面影など少しも残していない、怪物の姿があった。

『ジャジャジャジャーーーン！！　ひゃはははは！　たぁのしいーぜっ！』

「クマ！　花村と一緒に下がってろ！　ここは俺が殺るっ！」

――終わったと思っていた。

『先輩』がニュクスを倒した以上、もう自分がこれを使う事はな

いだろうと思っていた。

だが――実際には、何一つ終わっていなかったという事か。

それじゃあ、一体――『先輩』は、何の為に戦ったと言うのだろう？

……いや、

それを考えるのは後でいい。

今、自分がするべき事は――、

◆

◆

現在時刻、十二時十一分。

東京封鎖の二日目。

赤い甚平にコスチュームチェンジしたセトは、とある公園で目を覚ました。

「……」

――やれやれだぜ。

と、呟いて、体を起こす。

「そうだよな……夢、だよな。普通……」

一瞬ではあったが、また昔からやり直せると喜んだ自分が酷く恥ずかしい。

今思えば、あの時こそが、自分の『物語』の始まりだったような気がする。

それまでの出来事――月光館学園中等部三年F組の生徒として生活を送りつつ、傍らで特別課外活動部のメンバーとして、日々シャドウを討伐していたあの頃の物語の『主役』は間違いなく『先輩』で、自分はただの脇役に過ぎなかった。

どうやら、ショウジと別れた後、別の公園に移動した末、そのままベンチで寝てしまったらしい。

だったらわざわざ移動する必要はないじゃねぇかと、セトは自分にツッコミを入れたが、もしかしたらショウジの前で『謎めいた雰囲気を残したまま去っていく男』という演出をして、カッコつけたかっただけなのかもしれない。

それにしても、どうして自分はあんな昔の事を夢で、しかもこの状況下で見たのか、とセトには疑問で仕方なかった。

別にその夢に出て来た二人（一人と一匹）の内、どちらかが死んでいるという訳でもないし、そもそもセトは死んだ人間が夢の中に

出てくるという話について否定的だ。

悪魔やら天使やらに関して浅からぬ知識を持つ、彼らしくもない意見だが、人間が死んだら天界か魔界かどちらかに行く事はあろうとも、死んだ人間の魂が、まだ生きている人間の夢に出てきたりはしない事を、彼は立場上知っている。

立場上と言ったが、敢えて『立場』ではなく『役割』と言い換えるなら、彼の役割は多岐に渡る。天城屋旅館の板長だったり、今年十五歳になる娘の父親だったり、翻訳家だったり、そして今のような――

『神の使いの一人である貴方にしては、やけに隙だらけですね。もしや、寝起きだったのですか？』

「――っ！」

何故、今まで睡眠をとっていた自分が急に目を覚ましたのか、セトは後ろにいた人物を見て、瞬時に悟った。

感じたからだ。

自分に近付く――『同類』の気配を。

「君は……」

そこにいたのは、セトが予想だにしてなかった人物だった。

派手な髪飾り。

橙色の装束。

肩まで伸ばした紫色の髪。

セトでなくとも、一度見れば忘れないだろう。

だが――あの時は、芝公園で見かけたあの時は、こんな感じじゃなかった。

有里淳ではないため、上手く言えないが――まるで、全くの別人であるかのような……。

「確か……九頭竜（くずりゅう）……天音（あまね）……とか言ったか」

『いいえ』

そこにいた彼女、九頭竜天音――否。

セトと同じく、神に使える者の一人、天使『レミエル』は、厳かに首を振った。

『この姿でお会いするのは、初めてでしたね、イザナギ。……まずは、どこか落ち着ける所に移動しましょう、お互い、色々と聞きたい事もあるでしょうから』

2nd Day『危険な兆候』

芝公園、東京タワー。

「ぐああっ！　て、テメェ！　面ぁ、覚えたぞ！」

「わ、分かった！　これは持ってけ……！」

そんな捨て台詞を吐きながら去っていくヤクザ達の後ろ姿を見ながら、よくよく考えれば、それ程心配する事ではなかったかもしれない、とアツロウは思った。

今までは『悪魔』という未知の敵が相手だから仕方なかったが、元々、自分の親友である有里淳が、相手が誰であれ、喧嘩に負けたところを、アツロウは一度も見た事がない。

彼は、幼い頃より、対人戦を想定した、様々な格闘術を教え込まれているのだ。悪魔ならともかく、ただの人間相手に、遅れなどとる筈もない。

外道悪魔使いとでも称すべき数人のヤクザ達との戦いは、文字通り、『あっという間』に決着がついた。

いや、仮に淳がこの戦いに加わらなかったとしても、結果は変わらなかっただろう――数日前までは『一般人』の部類に入っていたアツロウやユズも、今となってはある程度の戦闘経験を積んだ、立派な『悪魔使い』だ。

対して、先程のヤクザ達は、全員がついさっき改造ＣＯＭＰを手に入れたばかりの素人である。流石に瞬殺とまではいかなくとも、アツロウやユズだけでも、それほど苦労せずに勝利を収める事が出来ただろう。

「ねぇジュン、アイツらから奪ったＣＯＭＰはどうします？」

倒したヤクザ達が置いていったＣＯＭＰをかき集めて戻ってきた一体の仲魔、モー・ショボーが、主人である淳にそう尋ねてくる。

「当然、壊しておいてくれ。そこら辺に放置しておくのは危ないし、かと言って、そんなにたくさんのＣＯＭＰを持ってても仕方ないからな……」

「分かりました」

モー・ショボーは一礼すると、淳から少し離れた場所で、ヤクザ達が所持していた改造ＣＯＭＰの全てを『ブフ』で破壊した。そしてすぐに、また淳の元へ駆け寄ってくる。

その様は主従関係というよりも、兄の言う事をよく聞く妹といった感じだ。そんな彼女の頭を淳が撫でてやると、モー・ショボーは満足げな表情で彼のＣＯＭＰの中へと戻っていく。

淳の側にいたユズが、ヤクザ達が自分達の前から完全に姿を消したのを確認すると、ホッと息をついた。

「はぁ～、怖かった……！　ＣＯＭＰがなかったら、あんな人達と、まともに戦えないよ……」

アツロウが自分のＣＯＭＰを、ノートＰＣが仕舞ってあるショルダーバッグに入れながら、ユズの言葉に頷く。

「……同感だ。でも、連中の数が少なくて良かったぜ……」

「……けど、危険な兆候だな……」

淳は殆ど独り言のように、自分に言い聞かせるかの如くそう呟いたのだが、アツロウには聞こえたらしい。

「ああ、そうだな。確かにヤバイ雰囲気だ……」

「……何が？」

例によって、ユズだけがキョトンとした表情になり、淳とアツロウの顔を交互に見比べている。

そんなユズに対して、淳は肩を竦めながら、今、自分とアツロウが想像している事を話し出した。

「例えば――いや、もう例えばどころの話じゃないだろうが――ＣＯＭＰの力に気付いた連中が、それを悪用し始めたら、一体どうなる？」

「どうって……本当に危険だよね、それ……。こんな状況じゃ、当然とも言えるけど……。普通の人にはない、特別な力があったら、それを悪用したくなるだろうし……」

「だとしたら、これからもＣＯＭＰを悪用しようって連中は増えるだろうな……クソっ！」

アツロウは、ストレスを発散する為に、近くのガードレールを蹴飛ばしたが、思いの外硬かったらしく、すぐに爪先を抑えて呻きだした。

そんなアツロウの天然一人ギャグを、ただ冷ややかな視線を浴びせるだけで、完膚なきに無視しながら、ユズが淳だけに話しかける。

「そのうち、ＣＯＭＰを使った犯罪なんて出て来たら、警察じゃ何も出来ないよ？　それとも警察もＣＯＭＰを持つの？」

「それは……ムリだろうな、流石に……」

だとしたら、やはり状況は思わしくない展開に向かっていると判断せざるを得ない、と淳は思った。

もし仮に、自分達が無事にこの封鎖を抜けたところで、元の日常に戻った後も、改造ＣＯＭＰが巷に流出しようものなら、日本はたちまち秩序を失う事になるだろう。

それと比べれば、現在、自分達が巻き込まれているこの『東京封鎖』などは、まだマシかもしれない。

……いや、待てよ……。

淳は思った。

それらの事を考える以前に――そもそも、あのヤクザ達が持っていたＣＯＭＰは、一体どこから出回っているのだろう？

足の痛みから回復したらしいアツロウにその疑問を告げると、彼は「確かに、無視できない問題だよな」と言って、顎に手を当てて淳と一緒に考え始めた。

「私達は、ナオヤさんから貰った訳だけど……。誰か他に、ＣＯＭＰを配ってる人がいるなら、それって、何のためだろ……」

「何を企んでるにせよ、相当なまでに頭のネジがぶっ飛んだ、はた迷惑な馬鹿野郎ってのは間違いないだろうな……。まぁ、ありきたりな話だと、『世界を壊すため』、辺りが妥当じゃねぇか？」

ユズの問いに対し、淳はそう答えたものの、今もどこかで改造ＣＯＭＰを配っているであろう人間が狙っている事は、そんな単純な話ではないような気がした。

「世界を壊す、か……。だとしたら、壊した後は、どうしたらいいんだろうな？」

アツロウが相変わらず気が滅入ったように目を伏せたまま、そう呟いたが、淳にも、ユズにも、その答えが分かる筈がなかった。

◆

◆

――『東京タワー下のバトルＰＡＲＴ１』終了時ステータス

●クラックしたスキル
＞『S疾風の秘法』
『S軽業の秘法』
『S的中の秘法』
『同族の心得・攻』

●所持マッカ：４７６６

●有里淳（？？）
・コマンドスキル
＞？アギ
？氷の乱舞
？怒りの一撃
・自動効果スキル
＞？英霊の加護
？毒追加
？同族の心得・攻
・先制発動スキル
＞『S疾風の秘法』

●木原篤郎（人間）
・コマンドスキル
＞？ジオ
？ブフ
？――
・自動効果スキル

＞？一分の活水
　？同族の心得・防
？――
・先制発動スキル
＞『S的中の秘法』

●谷川柚子（人間）

・コマンドスキル
＞？ザン
　？ディア
　？アムリタ
・自動効果スキル
＞？耐氷結
　？一分の魔脈
？――
・先制発動スキル
＞『S軽業の秘法』

●仲魔
＞・ジャンバヴァン
　・キジムナー
　・モー・ショボー

――Mission Complete!

◆　◆

セトがもたらした『赤坂トンネルに、この封鎖から抜ける事が出来る（かもしれない）秘密の通路がある』、という情報はそれなりに魅力的ではあったが、ショウジはすぐにそこへ向かおうとは思わなかった。

そもそも彼女はこの封鎖の真実を暴き、それを世に伝えるという目的で、封鎖にすすんで巻き込まれたのだ。そういう意味では、残念ながら、まだこの封鎖の真実に辿りついたとは言えない。

流石に『地下鉄から大量の毒ガスが流出した』という事がガセである事は知っているが、そんな事はこの封鎖内にいる人間なら殆どが勘づいているだろう。

ショウジが求めているのは、その嘘の裏側に隠された、一切淀みのない真実だ。

警備が敷かれているのか否かを確かめるだけでも、セトが言った赤坂トンネルへ向かう価値はあるが、せめて彼が以前言っていた『有里淳』という少年を見つけてからにしよう、とショウジは思った。

――と、そんな事を考えながら歩いていた彼女の視線に、正しく絶好のタイミングで、三人の少年少女達が歩いているのが見えた。

そして、その内の一人は、青い髪、青い目、半袖とも長袖ともつかない黒い服に、赤いジーンズを履き、そして何より、猫耳型のヘッドフォンをつけている。

間違いなく、セトが言っていた、『有里淳』という少年に違いない。

善は急げ。

まぁ、明らかに一般人とは思えない、セトという男が推薦した人物だ――となると、もしかしたらあの少年に取材する事が果たして『善』になるかは、ショウジには甚だ疑問ではあったけれど、他にやるべき事がない以上仕方ない。

「……キミたち、ちょっといいかな？」

三人に近寄りながら、なるべく親しみを込めてそう声をかけると、三人はその目に若干の警戒を滲ませながら、こちらに顔を向けた。

「……貴女は？」

例の猫耳ヘッドフォンの少年が、そう質問してくる。

「君、もしかして、有里淳君？」

「そうですけど……何で俺の名前を？」

「ある人から、取材するなら君がうってつけだって聞いたのよ」

「ある人？」

「そっ。まぁ、それについては、一先ず置いといて……」

言いながら、ショウジは無意識に淳と視線を合わせる。

その時、ショウジは初めて彼の顔を正面から見た。

「……」

（……かわいい）

それが、彼女が抱いた第一印象だった。

近くで見るとよく分かる。少年の顔立ちは恐ろしく整っており、セトからの事前情報がなければ、ショウジは彼を男装した少女だと思ったかもしれない。

恐らく、まだ高校生……下手したら中学生だろう。だとしたら、学校ではさぞかしモテるに違いない。

などと。

果たして、ショウジがショタコンなのかそうでないのか真剣に考えなければならないような感想を彼女が抱いている内に、少年はその目に湛えた不信感を益々強めていた。

「……あの」

いい加減、何の用なのかと言いたげな少年の態度を受けて、ハッ

としたショウジは、慌てて懐から名刺を取り出すと、「突然、ごめんなさい。私はこういう者よ」と言いながら、少年に渡す。

「あ、記者さんでしたか」

「ええ。私は、今回の『東京封鎖』の事を記事にしようと、色々調べているの。……まぁ、『東京封鎖』ってのは、私が勝手に呼んでるだけなんだけどさ……。そういうワケで、君達から少し、話を聞かせて欲しいんだけど、ノー・プロブレム？」

「ええ、構いませんけど」

「良かった。皆、自分の事で手一杯で、インタビューもままならないの。ありがとう」

「そりゃ、インタビューされたって、電気がなきゃ放送されないもんな。誰も答えたがらないよ……」

そう言ったのは、淳の隣にいる、白いニット帽を被った別の少年だ。

こちらと、それともう一人の赤髪の少女は名前が分からなかったので聞いてみたところ、白いニット帽の少年は木原篤郎、赤髪の少女は谷川柚子という名前である事が分かった。

「そう、アツロウ君と、それからユズちゃんね。ありがとう。ところで、さっきアツロウ君が『インタビューしても、電気がなければ放送出来ない』って指摘したけど、これはそういう問題じゃないわ。この封鎖は、人権と報道の自由を奪う、狂気の行為なのよ。それに……」

一瞬、ショウジはこの事を言ってしまうべきか迷ったが、どうせまだ本当かどうかも確かめていないネタなのだから問題はないだろうと思い、結局言う事にした。

「それにね……外に出る秘策があるの」

ショウジの言葉を聞いた三人は、正に目から鱗が落ちんばかりの様子だった。

「そ、外に出る秘策!?　マジかよっ！」

「ただし、それを教えるのはこっちの質問に答えてくれた後よ。それじゃ、先ずは簡単なところから……」

ショウジは三人にというよりは、淳にだけといった様子で質問を始める。

「……昨日はどこで寝ましたか？　つまり、ウェアで寝たかを答えて」

「公園で野宿です」

「では、そこで困った事は?」

「……家に帰れない事です」

そのように答える淳の目は、どこか寂しげだった。

「やっぱりそうか。そうよね、家に帰りたいわよね……。それじゃ、

最後の質問ね。この封鎖は、いつまで続くと思いますか？」

「それは……」

淳は少しだけ迷ったように目を伏せたが、結局最後には「ちょっと分かりません」と答えた。

ショウジは一つ頷くと、

「……なるほど、当然ね。『あたぼーよ』って感じね？　ありがとう、色々参考にさせてもらうわ。因みに、山手線内に何人が閉じ込められているか、正確な数は分からないけど、数十万人単位である事は確かよ」

「数十万人……」

場所が東京という、あらゆる意味で日本の中心である所の為、その数は決して以外ではない筈だが、今までこの封鎖を生き延びる為に必死だったからだろう。

自分達以外にも、それだけの数の人間がこの封鎖内にいるという事を、彼等はすっかり忘れていたようだ。

「ええ。それなのに、この状況に対する政府の対応は、何もしていないに等しいわ。これは、民主主義にあるまじき、非常識かつ、異常な事なの！　もし、封鎖が解除されたら、私はその理由を記事にして、全世界に向けて公表するわ！」

後半辺りから、ショウジは感情が高ぶってしまった為、思わず大声になってしまった。

「頑張って下さいね！　応援していますから！　……っと、そうだ、それより、外に出る秘策って何っスか！？　そんなもの、本当にあるんスか？」

アツロウが急に勢いよく尋ねてきた為、ショウジは若干引きながらも、

「ええ……。キミ達、こんな話は知ってる？　『首都高が地下鉄と繋がっている』って……」

「聞いた事がないですけど……」

そう言って、淳が顎に手を当てるが、セト曰く、この通路は政府内でもほんの一握りしか知らない極秘のルートである為、その反応が普通だろう。

それに続く形で、淳の隣にいるユズが、目を見開きながら言う。

「そうだよね？　首都高って、高架でしょ！？　地下鉄が繋がるワケないよ！」

これは、ショウジが初めてセトからその事を聞いた時、彼女が返した反応と全く同じものだ。

「……首都高も、一部は地下を通ってる（らしい）のよ。ちょうど迎賓館の辺り、赤坂トンネルと呼ばれている（らしい）わね。坑内に一般車両は行けない枝道があって、それが地下鉄と繋がってる……、そういう噂よ」

ここまでの会話から察するに、この三人は封鎖の真実についての情報を全くと言っていいほど持っていないようだ。

ならば何故セトはこの少年――有里淳を紹介したのだという話になるが（セトが予め、『有里淳は封鎖の真実については知らないが、話を聞いておいて損はない』と言っていた事を踏まえても、だ）、どちらにせよ、これ以上取材を続ける意味はなさそうだ。

まぁ、自分とセト以外の人間に、赤沢トンネルの件について教える事が出来ただけでも、十分に意味はあったと思うが。

「私はまだやらなきゃいけない事があるから、まだこっちでレポートを続けるわ。もし、そっちから脱出できそうなら教えてね」

そう言ってショウジは踵を返そうとするが、途端、今度は逆に、淳が彼女に質問してきた。

「あの、封鎖の理由は分かりましたか？」

ショウジはゆっくりと淳に顔を向けると、

「……正確な事はまだ分からないけど、『怪物を逃がさない為』……という噂よ」

ショウジがそう言うと同時に、淳の肩がピクリと動いた。

普通なら鼻で笑われても仕方ないような話だが、流石に、こんな状況では『怪物』という単語だけで怖がってしまうのも無理はない、とショウジは少し同情する。だからこそ彼女は、

「まぁ、怪物と言われてもね……。どうせデマだと思うけど」

と言っておいた。

「あ、あはは……」

淳の隣では、何故かユズが渇いた声で笑っている。

「それにしても、皆良くパニックを起こさなかったですね～」

そんなユズの言葉は、まるで何かをごまかすかのようだったが、ショウジは特に気に留めたりはしなかった。

「ちゃんとした理由を聞かされたから、パニックを起こさなかったのよ。例えそれが嘘であってもね。有毒ガスが出たので、立ち入り禁止。地下で爆発があり、送電線が切れた。安全が確認されるまで行動は慎重に。パニック映画みたいな事って、実際には中々起こらないわ。……逆にそれで手遅れになる事もあるの」

「えっ！？　手遅れ……！？」

「そもそも、なぜ人がパニックを起こすのか、そのメカニズムを考えた事がある？」

ショウジの質問を受けて、淳、アツロウ、ユズはしばし沈黙する。

やがて、淳が口を開いた。

「……最悪の想像をするから」

「……そうね。じゃあ、どういう時に最悪の想像をするとパニックを起こすと思う？」

淳は再び沈黙するが、やがて「情報が足りない時、とか？」と、やや自信に欠けた口調で答えた。

しかし、まさにその通りである。

「……よく知っているわね。その通り、『情報が不足』している時に、『最悪の状況を想像』してしまう事から、『パニック』は起こるのよ。だから、さっき言ったみたいに、例え間違えていようとも、ちゃんと情報さえ与えておけば、パニックはコントロール出来るの」

「……じゃあ、政府が俺達に伝えてる情報はやっぱり……」

「でまかせでしょうね。間違いなく、いや、それより悪いわ。何故なら、今回の『パニックコントロール』は、周到に準備され、そして綿密な計画に基づいて、実行に移されているわ。……昨日は『有毒ガスの発生』。そして、『原因不明だから調査中』という、対応中の演出をする。そして今日になり『有毒ガスは可燃性』という風に情報が更新される。……この、情報が更新されるという部分が重要なの」

「どうしてですか？」

「政府の発表により情報が更新されて、調査は解決に向かっていると思えるから、最悪の結末を想像しなくなるワケね。勿論、懸命な人は、政府の発表を疑うでしょうけど、情報操作が功を奏して、その声が公になる事はないわ。人々は疑念を抱きながらも、黙って救助を待ち続け、真実に気付いた時は、既に手遅れになってしまうワ

ケよ」

正直、ここまでの長く複雑な説明に、この三人がどこまで理解出来るのか、ショウジは少し心配だったが、少なくとも淳は物覚えがいい部類に入るらしく、「そうなるでしょうね」と言って頷いた。

「ええ……。そして、対策を取れていない人が、今度こそパニックを起こすの。そうね……早ければ明日か……、おそらく明後日あたりから暴動が始まるんじゃないかしら。……そうなったら、一般人は一斉に暴走するわよ」

「げっ!?　マジかよ……!」

突然、そのような事を言われて、アツロウが目を見開き、ユズの顔が青冷める（淳だけは、いずれはそんな事態になるだろうと思っていたのか、何のリアクションも見せなかった）。

「本当ですか!?　本当に、明日以降は……暴動が……?」

「今まで耐えてきた人が暴走を起こして、秩序は崩壊し、暴力が支配する世界が訪れる……。このまま封鎖が続けば、イヤでもそうなるでしょうね。そうならない事を祈るけど……。それじゃ、また会いましょう!」

と、言って、今度こそショウジは三人と別れようとしたが、最後に一つだけ、ある事を有里淳に質問してみたくなり、少し歩いたところで、彼等の方を振り向いた。

この質問をした時、セトは『つまらない』と答えた。

ならば――そのセトが推薦した、この有里淳という少年は、なんと答えるのだろう？

「そうだ。ねぇ、ジュン君」

「何ですか？」

「貴方は、『人を殺す』という行為について、どう思う？」

そんなショウジの質問を受けて、淳は一瞬、きょとんとした表情になったが、すぐに元の表情に戻って、こう答えた。

「――メンドくさいと思う」

2nd Day『芝公園の難民』

――芝公園。

先程のショウジの話（後もう少しすれば、封鎖内でパニックが起こるという話）に影響されてという訳ではないが、それ以前の外道悪魔使い達の事もあるし、休憩も兼ねて、芝公園の状況を確認した方がいいんじゃないか、という淳の提案に沿って、淳、アツロウ、ユズの三人は、一旦、芝公園へと戻って来ていた。

「気のせいかもしれないけど、芝公園に避難している人の数って、昨日より増えてるみたい……」

ユズが芝公園をグルッと見渡している中、淳は大きく溜息をついた。

「気のせいじゃねぇだろうな……。昨日は閉じ込められてすぐだったけど、ここにいる連中は、まさか一日以上閉じ込められるとは思わなかったんだろうよ。それでいて、いつまで閉じ込められるか分からないから、こういう、人の多いところに集まっちまうだろうな……」

「……なるほどね」

そんな二人の側に、両手に持ったペットボトルに水道水を補給したアツロウが戻ってきた（ジャンケンで負けた為、空きのペットボトルに飲み水を入れてくるという雑用を、彼がする事になったのだ）。

「……ったく、早く山手線の外に出られるようになってほしいよな。……けどよ」

アツロウは淳とユズにペットボトルを渡した後、芝公園に集まった人々を見ながら、露骨に顔をしかめる。

「……どうした？」

「いや、一人よりは安心かもしれないけど、こんなに集まってたら余計に危ないんじゃないかって思ってさ……」

「……ああ」

アツロウが何を言いたいのか、淳は瞬時に悟った。

「ああもうっ！　またそうやって、二人で勝手に納得しないでよ！　何？　ジュンとアホロウって付き合ってるの！？」

「んな訳あるかっ！」

「アホロウって言うなっ！」

ユズの冗談も冗談とは思えない程、ピッタリのタイミングで二人は突っ込みを入れた。

「で、結局、何の話？」

アツロウはしばらく口をパクパクさせていたが、やがて『ハァ』と溜息をつくと、説明を始める。

「考えてもみろよ。こんなに人が多いところに悪魔が出たら、一体どんな事態になる？」

途端、淳もユズも、陰鬱な表情になる。

「……考えたくもねぇな」

「確かに……悲惨だよね」

「そんな惨状にならない事を願おうぜ。まぁ、一応、俺達に出来る事はやっておいた方がいいと思うけどさ」

「出来る事？」

手に持ったペットボトルの水で、一旦喉を潤した後、淳がアツロウに代わってユズの質問に答える。

「色々あるだろ？　ここに悪魔が現れないように、見つけた悪魔の対処をしたり、後はまぁ、これは俺達の為でもあるけど、他の連中が早く帰れるように、脱出方法を探したり、とかだな」

「私は早く脱出方法を探したい！　だって明日にはまた余命が『０』でしょ？　余裕があるのって今日だけだよ！？　だから脱出方法、絶対見つけようね……！」

ユズの言葉に対し、淳は首肯する。

「だとしたら……やっぱり『アレ』だよな」

『アレ』。

時間は少しだけ、ほんの少しだけ戻って、ジャーナリスト・ショウジからのインタビューを受けた直後の池袋。

◆　◆

「くそ～！　早ければ、明日からパニック状態か……」

ショウジ去っていくのを見ながら、アツロウが地団駄を踏んだ（余談だが、ショウジの余命残数は、他の大多数の人々と同じく、『5』だった）。

「もし暴動とかが起こったら、悪魔の他に、人間とかからも身を守らなきゃならなくなるな」

「うん、そうだね……」

「それにしても、あの人、この封鎖の原因は怪物を逃がさない為って言ってたな……」

「あの人は信じてなかったけど、多分、真実だろうな。……とすると、やっぱり政府の連中は、悪魔の存在を知ってるんだろうな。間違いなく」

淳の言葉を聞いて、ユズがシュンとなる。

「そう……だよね。やっぱり私もそう思う……」

アツロウは指で額を揉んでいた。

「ああ……だとすれば、ただ待ってるだけで、この封鎖が解かれる可能性は、殆どなくなる訳だ……。だったらさ、ショウジさんが言ってた首都高と地下鉄が繋がってるって話、確かめた方が良くないか？上手くいけば、封鎖の外に出られるかもしれないぜ……？」

そうは言うものの、アツロウの表情は自信満々とは言い難かった。

そんな彼を横目で見ながら、淳が口を開く。

「……アツロウ、わざわざ言わなくても、お前なら分かってると思うけどよ……。多分、そこにも何人かは自衛隊員が張ってると思うぜ？」

「う……いや、まぁ、そうだろうけどさ……」

「でも、私は賛成。可能性があるなら、何でも試してみようよ」

ユズの前向きな発言を受けて、しばし沈黙した後、淳は頷いた。

結局、ユズの言う通りだ。

今の自分達には、それぐらいしか封鎖から抜け出る糸口が掴めていないのだから、仮にハズレだったとしても、そこからまた別の新しい情報が得られるかもしれない。

◆　◆

――そして、時間は再び、三人が芝公園の様子を見に来た時点に戻る。

「……行くしかないか、赤坂トンネルへ」

この場合、成功率は関係ない。大事なのは、どれだけ迅速に動けるかだ。

そして、迷わない事。

情報が少なく、迷いやすい今だからこそ、迷ってはいけない。

「アツロウ、今、俺達の手持ちはどれくらいある？」

「えーと……」

アツロウは、肩にかけていた鞄を開けて、中身を確認する。生憎、淳もユズも入れ物になる物を持っていなかった為、食料や飲料水等は、彼のショルダーバッグに仕舞っていた。

「飲み水の入ったペットボトルが三本。それと、今朝のコンテナか

ら取ってきた携帯食が、まだ大分余ってるな」

「一応、赤坂の方が駄目でも、後数日は堪えられる、か……。よし、じゃあ、駄目元で行ってみるか」

「ああ！」

「うん！」

今ではすっかりリーダーとなった淳の言葉に、アツロウとユズが力強く頷く。

こうして、一同は赤坂トンネルへと向かった。

◆

◆

『どこか落ち着ける所で話したい』、とアマネ――否、天使レミエルはセトに申し出たが、残念ながら彼は普段から東京によく来る訳ではないので、そんな場所がどこにあるか、そもそもあるのかさえ（いや、探せばきっとあるのだろうけど）分からない。人間でないレミエルは尚の事だ。

その為、昨晩から睡眠時間を帳消しにしてまで働いた事によって生じた肉体の疲れと、精神の気怠さを無視して、セトは半ば無理矢

理に、『混迷の霧』を発動させねばならなかった。

少なくとも、天使であるレミエルに対しては、この霧はあくまでただの霧でしかない。つまりは、力加減を誤って発狂させてしまう心配はない訳だ。そう考えると、セトは少しだけ肩の荷が降りた気分だった。

『レミエル』。

宗教によっては、『イェレミエル』、『ファヌエル』、『ラミエル』、『ルマエル』、『イェラメエル』、『エレミエル』とも呼ばれる。それらが「神の慈悲」、及び「神の恵み」などと解釈されるように、彼は、比較的善良な天使だ。

『彼』……そう、『彼』だ。

セトは改めて、正面に立っているレミエルを見た。といっても、彼は現在、九頭竜天音という『女性』の体を借りてこの人間界に降りてきている為、その外見はどう見ても、十代の少女のそれだ。

だが、実際に彼の目の前に立っているのは、およそ何億年という時を生きた大天使である。

場所は、先程と同じ、とある公園だ（『混迷の霧』を使った為、レミエルが言うように一々場所を変える必要はなかった）。

セトは近くの自動販売機の前に立ち、一応、社交辞令として、「何か飲むか？」と、レミエルに尋ねたが、まるで異星人でも見るような目を向けられただけだった。恐らく、自動販売機という存在も知らないのだろう。

「……やれやれだぜ」

ギリギリ、レミエルには聞こえない程度の声で小さく呟くと、セトは１２０円を入れて、ボスブラックのボタンを押した。

やがて、ガタンゴトンという音と共に、よく冷えたコーヒーが下に落ちる。

セトはそれを拾い上げて、プルトップを開けながら、改めてレミエルの元に戻った。

「さてと、先ずはこっちから質問させてくれ。一体、お前はどういう経緯でその子の中にいるんだ？確か、翔門会は天使を毛嫌いしてる筈だろ？」

『ええ、確かに。ですがこの子と、この子の考えに賛同する数人の信者は違います。天音は私の声を聞き、『神』の教えに共鳴してくれました。ベル・ベリトの召喚を目論んでいる翔門会を監視するには、天音の中にいる方が１番都合が良いのです』

レミエルの言葉に、セトはゆっくりと首を振った。

「ベル・ベリトねぇ……」

『勿論、貴方が異世界で、ベリト、及びゼブブを退けた事は、私も、そして『神』も知っておられますよ。イザナギ。それについて、『神』は今回、貴方の行いを非常に高く評価しています』

「別に、狙ってやった訳じゃねぇけどな……」

レミエルはセトの言葉を無視して、構わず話を続ける。

『今回の件で、『神』は貴方に、私と同じ、【神前の七天使】の地位を与える事をお決めになりました』

「へぇ？」

『神前の七天使』と言えば、『神』と直接顔を合わせる事も許される、天界でも相当な権力を誇る位だ。元は人間であるセトのような存在に対し、そのような称号を与えるのは、恐らく前例がないだろう。

『厳密には、貴方が加われば【八天使】になる訳ですが……。先ずは、それについて、賛辞の言葉を送らせて頂きます』

レミエルは小さく頭を下げながらそう言ったが、正直な話、セトは天界の地位には毛程も興味がないので、余り嬉しさというものは感じなかった。

「そんな事より、ビシャモンテンが言うには、その子……アマネがジコクテンを殺したって聞いたけど、それについてはどうなんだ？まさか、お前が殺したってオチじゃないよな？」

『有り得ません』

レミエルがズバッと切り捨てたが、セトはそれに対し、

「ふぅん……そうか」

とだけしか言わなかった。

そんな『どうでもいい』とでも言いたげな態度に、レミエルは僅かに眉をひそめる。

『……聞かないのですか？　この子が何故、そしてどうやって、ジコクテンを殺したのかについて』

「いや、別にいいよ」

セトはヒラヒラと手を振った。

「ただ、幾つか、質問してもいいかな？」

『どうぞ』

「お前がその子に憑いたのはいつ頃の話だ？」

『彼女が十五歳の頃です』

「ジコクテンを殺したのは、それ以前の話か？」

『はい』

「……そうか、なるほど、なるほど、なるほどなー」

セトは薄く笑った。

「大体分かった」

『……？　……今の受け答えだけで、天音が何故ジコクテンを殺したのか、私が何故、天音に憑いているのかが分かったというのですか？』

「……大体はな。俺が予め知っていた事と照らし合わせて考えれば、それほど難しい問題じゃない。……それで、本当の用件は何だ？　まさか、俺の昇進を伝える為だけに来た訳じゃないだろ？」

『……その通りです』

一体、セトがどこまで事の真相に気付いたのかどうか、一瞬、レミエルは聞きたくなったが、結局、寸前で思い留まり、本題に入る事にした。

『……単刀直入に言います。イザナギ、私に協力して下さい』

「……随分、唐突だな」

セトがレミエルと視線を合わせる。

「俺の主義は知ってるだろ？　俺は――」

『天使にも、悪魔にも味方しない。従うのは自分で決めた事のみ――でしたね。勿論、それは分かっています。ですが』

レミエルは一旦、そこで言葉を切った。

『この頼みは、私からでも、『神』からでもありません。この子――九頭竜天音の頼みとして、聞いて頂きたいのです』

「……アマネの？　どういう事だ？」

『この子が今、何を望んでいるのか、貴方には分かりますか？』

「まぁ、ここまでの話を聞く限り、お前ら天使と、神による人間の『救済』ってとこだろ？」

『救済』。

そう言えば、聞こえはいいが、しかし――。

『ええ……。確かにそうですが、しかしそれ以上に、この子が強く望んでいる事が、もう一つあります』

「……？　……『神』の教え以上に大切な事、か？」

『ええ。と言っても、天音の様な年代の女性なら、大体の者が考えている事です。同時に、人間が持ちうる感情の中で、最も純粋で、最も強い望みと言えるでしょう』

「何だ？　勿体ぶらずに早く言ってくれよ。俺だってそんなに暇じゃないんだ」

突き放すような言い方に、レミエルは思わず仏頂面をしそうになった。

こっちだって、宿主が翔門会の巫女という、忙しい立場であるにも関わらず、何とか一人になれる時間を作って、こうして会いに来たのだ。この男を、ほんの少しでも慌てさせてやりたい、という気になった。

「どうした？」

『いえ』

レミエルは一度目を閉じて、気持ちを整える。

『この子――九頭竜天音は』

レミエルはセトの目を正面から見据えて、言葉を続けた。

『恋をしてます』

「へっ？」

セトが素っ頓狂な声を開けた。

「恋って……『恋』だよな？『鯉』じゃなくて」

『当たり前でしょう』

若干の混乱の末、咄嗟に出したセトのくだらないギャグ（いや、マジでくだらない）にも、天使であるレミエルは一切、乗ってこようとはしなかった。

セトは心を落ち着かせる為、手に持ったボスブラックの中身を半分程、一気に飲み干した。

普段なら知り合いとも言えない女性が恋をしていようと、別に彼は何とも思わないが、翔門会の巫女である天音がそういった感性を

持っている事が余りにも意外だったので、少し興味を持ったのだ。

それに、いざ彼女が恋をしていると聞くと、その相手が誰なのか、セトには既に予測がついていた。だからこそ、彼はここまで動揺したとも言える。

「えーと……誰に？」

それでも敢えて、彼は聞いた。

『有里淳、という少年です』

しかしやはり、返ってきた答えは、セトが予想した通りのものだった。

『勿論、その少年についても、私は立場上、ある程度の事は知っています。しかし、念のために言っておきますが、天音が彼に恋心を抱いているのは、そういった特別な力があるからではありません。純粋に、無垢に、真摯に、異性として、女性として、彼の事を好いているからです』

「……」

セトは腕を組み、目を閉じると、一旦、顔を下に向けて、やがてふぅーっと息を吐いた。

「正直、予想外だな。お前の事を、ちょっとばかし甘く見てたかもしれない。――ったく、やれやれだぜ。お前が俺に会いに来た瞬間から、お前が俺に『神』に協力するように言ってくる事は分かってた。だからこそ、どんな事を聞かされようと、さっさと帰って貰う

つもりだったんだが……まさか、如何にも色事とは無縁そうなその子が、恋とはね」

『恋、というのは些か誇張し過ぎたかもしれません。そもそも、天使である私には、そういった感情は、よく分かりませんからね……。ですが、天音が有里淳に対して、何か特別な感情を抱いてるのは確かです』

「言ってる事が矛盾してないか？　恋愛感情が理解出来ないのに、どうしてそう断言できるんだよ？」

『一昨日、あの少年と出会ってから、天音の精神が時折、不安定になるという事が起こり始めました。一人になった時は常に上の空で、時々「淳さん……」と呟いては、溜息をついていました。特に、昨日、芝公園で彼と遭遇した時は、自らすすんで彼に話しかけていました。これは一見、何でもない事のように思えて、実は人見知りである彼女にとっては、非常に珍しい行動です』

「……」

なるほど、確かに、そこまでくれば、レミエルがそう判断するのも頷けるが……。

「けどよ、あの二人って確か、一昨日、霊園で初めて顔を合わせて、その後も数える程しか顔を合わせてないんだろ？　なのにどうして、いきなり恋心なんて……」

『流石にそこまでは分かりませんし、案外、単純な一目惚れかもしれません。或いは、実は以前、どこかで会った事があるのか……。いずれにせよ、恋愛というものに、これといった理由をつけるのは

難しいでしょう』

レミエルは、セトがこの話題にハッキリと興味を持ったのを確信し、静かに勝利感を味わった。

対するセトは、参ったように頭を掻いている。

「……やれやれだぜ」

セトが弱りきったように呟く傍ら、レミエルは僅かに微笑んだ。

『イザナギ。恐らくは貴方も知っているでしょうが、アマネは今回の封鎖において、我々が望んでいる結末を作り出す為には欠かせない存在です。そんな彼女が一人の男に入れ込んでいるとあっては、計画に支障をきたさないとも限りません。かといって、その恋路を断ち切っては、益々彼女の心が不安定になるだけでしょう。ならば、いっそのこと早めに、アマネの恋を叶えてしまった方がいい――と、私は判断したのです』

「……」

『セト、貴方がどんな考えを持っていようと、私と同じく、【神】のしもべであることは変わりありません』

「……何で、俺なんだ？　もっと仕事ができる奴に頼めばいいだろ」

『政府に封鎖を決行させた、我々天使が動き回る訳にもいかないでしょう。その点、貴方が我々の側の人間であることは、政府にも伝えてませんから、堂々とこの2人の仲を深めさせる事が出来る筈です』

セトは首を二、三度捻って、コキコキと鳴らす。

……なるほど、レミエルが一体何故、ただ一人の少女の恋の為にそこまで奔走しているのかは、些か疑問ではあるが、とにかく、アマネと淳をなんとかして接触させたい、という気持ちが本物である事は十分に分かった。

そして、なんとしてでも自分を協力させるつもりだということも。

となると、先程レミエルが言った、セトの昇進の話の意味合いも、大分変わってくる――彼をなるべく『神』に近い位置に置いて、プレッシャーを与える事で、これから先、今までよりも天使達に協力させようという魂胆なのだろう。

――恐らく、セトがここでレミエルの誘いを断りでもすれば、昇進の話がなくなるだけでなく、何らかの形でペナルティを負わされる事は間違いない。

レミエルはここまで終始、やや下手に出て頼み事をしているように見えるが、これはもう、殆ど強制に近かった。

どうやら、元々、自分に拒否権はないらしい。セトは一つ溜息をつくと、

「……分かったよ。やってやるよ。とは言え、成果の方は保障できないけどな……。何せ、アイツの事を（色んな意味で）狙ってんのは、アマネだけじゃないんだ」

『構いません。御協力、ありがとうございます』

いけしゃあしゃあと、レミエルは言った。

「で、だ。具体的に、俺は何をすればいいんだ？　まさか、アマネの代わりにラブレターを代筆しろとか言うじゃないだろうな？」

『違います』

再び一蹴。

本当、天使って連中には冗談ってもんが通じないよな……とセトは思った。

『まずは、有里淳が悪魔に殺されないよう、影から手助けする事。そして、彼を何とかして翔門会の行いに協力させること』

「前者の方はもうやってるが……。何だ、アイツ、まだ翔門会に入会してなかったのか？　ちゃんと俺の方からも言っておいたのに」

『その辺りに関しては、どうやら、この子の父親が障害になっているようです』

「アマネの父親っていえば……確か教祖だったな。淳が入る事に反対してるのか？」

『いえ、寧ろその逆で、あの男もまた、有里淳を翔門会に引き入れようと暗躍しているそうです。その狙いが分からない以上、迂闊に仲間にする訳にもいかない、と言っていました。そのせいで、彼を引き入れる為に用意したアレも、芝公園では渡せずじまいだったようですし」

「アレ？」

アレ、とは何だ？

しかし、レミエルは『気にしないで下さい』と言い、教えようとはしない。

『だからこそ、やはり貴方に頼むしかないのです……。貴方は翔門会の人間ではありませんから、有里淳に入会を促しても、あの男に感づかれることはないでしょう』

その考えもまた、分からないでもないが……。

やはり、やっぱり、返す返すも、とにかく、そもそも、一人の少女の恋を叶える為に、いくら天使とはいえ、あのレミエルがここまでするとは考えにくい。

とするならば、何か別の目的があって、セトに協力を扇いでいると考えるのが普通だ。

それが一体何なのかについては、まだセトには分からないが……。

それを探る意味でも、レミエルに協力する価値はある。

結局、裏切り合える関係の方が楽なのだ。

勿論、そんな事を言うのは心の中だけで、表には出さないが。

レミエルは『もう用は済んだ』、とでも言いたげな態度でセトに

背を向けると、そのまま歩き出すが、途中で足を止める。

『伝えるべき事は伝えました。ああ、それと、今回、貴方に【神前の八天使】の称号が与えられた事について、近いうち、『神』から直々に御呼びが掛かるでしょう。その際には、そのような汚い服装ではなく、ちゃんと正装してきて下さい。それと、言葉遣いも正すようにお願いします。では……』

それだけ言うと、レミエルは再び、セトに背を向けて遠ざかっていく。

その背中に、セトは一つ、声をかけた。

「お前は一体、何を望んでるんだ？」

『神の望みが、私の望みです』

ならば、アマネと有里淳を引き合わせる事は、行く行くは『神』の望みに繋がる、という事だ。

何だか、結局、いいようにしてやられた気分だ――セトはボスブラックを一気に飲み干すと、スチール缶である事など一切構わず、その場で握り潰した。

2nd Day『赤坂トンネルのバトル（1）』

――赤坂トンネル。

「……あのジャーナリストさんの情報だと、この先に地下鉄への通路が隠されているのね！」

「あくまで噂だから、実際には分からないぜ？」

興冷めな事を言ったアツロウの頭を、恐らくは殆ど無意識に叩きながら、ユズは正面にポッカリと大きく空いたトンネルの穴を見据える。

「分からなくても、行ってみなきゃ！　私たち明日には余命が０でしょ？　ここから脱出できれば、死なずに済むんだもんね！」

「だな」

淳が頷く。

「それにしても……酷いな、こりゃ、辺り一面、事故車だらけだ」

ユズに叩かれた頭を摩りながら、アツロウが辺りを見渡す。

そこには、酷い玉突き事故でも起きた後のように、使い物にならなくなった大小様々な車が、何台も放置されていた。

いや、一概には玉突き事故と決め付ける事は出来ないかもしれな

い。

何故なら……。

「よく見ると……壁とか道路に、不自然な傷跡があるな……」

それは見ようによっては、大きな爪のあとに見えなくもない。

「だとすると、これは全部、悪魔の仕業か……」

アツロウも呆然としていた。

しかし、血痕や肉片の類はどこにもない。もしかしたら、被害に遭ったのは車だけで、乗っていた人々は外に逃げ出したのかもしれなかった。

もっとも、血や肉を撒き散らさないまま、悪魔に丸呑みにされたか、連れ去られたという事も考えられなくもないが……どの道、既に終わってしまった事だ。いくら考えても仕方ない。

「……怖いよ。ねぇ、早く地下鉄に繋がってる道、探そう？」

言いながら、ユズが淳の袖を引っ張ってくる。アツロウも、

「そうだな……先を急ごうぜ」

と言って、歩き出した――が、すぐにその足を止める。

その後ろで、淳が彼の腕を掴んだからだ。

「ジュン、どうした？」

淳はアツロウの質問には答えず、無言で前方を顎でしゃくった。

不審に思ったアツロウ、ユズがそちらに目を向けると、すぐに何故、淳がアツロウを引き止めたのか、その理由を悟った。

「あっ！　アレ見て、あれ！」

小さい声――且つ切羽詰まった声――を出しながら、ユズがある一点に人差し指を向ける。

そこには、2体の悪魔がいた。

蝙蝠のような羽、全身を覆う桃色の体毛、鷲の如き嘴と手足、僅かに宙に浮いている上、距離があるので分かりにくいが、体の大きさは淳達と大差ないだろう。

その内の1体が言った。

「コレカ……。コレデ仲間ヲ喚ビ出セルノカ……」

そう言う悪魔（ガギソン）と、もう1体の手には、なんと――、

「……！　……アレって、ＣＯＭＰじゃねぇ――ムグッ！？」

悪魔である筈のガギソン達が、ＣＯＭＰを持っているのを見て、思わず大声を上げそうになったアツロウの口を慌てて塞ぎながら、淳は引き続き、おとなしくガギソン達の様子を観察した。

見た目は、人間界ではポピュラーな携帯ゲーム機であるＣＯＭＰとはいえ、悪魔であるガギソンには扱い方がよく分からないのだろう。

最初は電源を入れるどころか、ＣＯＭＰを開く事さえ戸惑っていたが、やがて……。

「タシカ、アノ人間ハコンナ具合ニ……」

と言って、ＣＯＭＰの電源を入れた。

すると当然、そこからはＣＯＭＰに内蔵された悪魔召喚プログラムによって、別の悪魔――ビルヴィスが召喚される。

ＣＯＭＰから魔界の仲間を喚び出せた事で、ガギソン達は、狂喜に満ちた笑い声を上げた。

「ナルホド、呼ベルゾ、仲間ガ！　クックック……！　世界ヲ嘆キデ埋メ尽クシ、『アノ方』ヘ捧ゲルノダ……！」

それを見ていた、淳、アツロウ、ユズの３人は、流石に驚きを禁じ得ない。

「なっ……！　悪魔がＣＯＭＰを操作してるのか！？　どうやって手に入れたんだ！　人を殺して奪ったのか！？」

「そんなこと言ってる場合かっ！」

先程までは悪魔達に気付かれない内に、一旦、この場を離れようと考えていた淳だが、流石に先程の光景を見てしまうと、そんな事

は言ってられない。

「そ、そうだな……！　悪魔にＣＯＭＰなんて使われたら、奴らがどんどん増えちまう！」

「ジュン、どうしよう！？」

ユズが困り果てた声でそう聞いてくるが、勿論、淳の答えは決まっていた。

「当然、放っておく訳にはいかないだろ……！　最低限、連中が持ってる改造ＣＯＭＰは壊しておかないとな」

「……うん！　分かった！　放っといたら、どんな事になるか、分からないもんね！」

「来いっ！」

淳はＣＯＭＰから、ここに来る途中、デビオクで購入した2体の悪魔――ガギソンと同じく蝙蝠のような羽、青い長髪の妖艶な女性の姿をした鬼女『リリム』。

そして波打った黒い長髪、琵琶のような楽器を弾いている女神『サラスヴァティ』を召喚する。

アツロウ、ユズも、それぞれヘアリージャックやガルムといった、今までにいなかった新しい仲魔を喚び出していた。

時間が経つ毎に強くなってくる悪魔達に備えて、３人は『デビオク』と『邪教の館』を活用して、仲魔を強化・補充し

ておいたのだ。

「2人共、先ずはＣＯＭＰを持ってるあの鳥モドキを狙ってくれ！最悪、ＣＯＭＰさえ壊せば、後は撤退してもいい！」

言うと、淳はすぐに走り出す。アツロウとユズもそれに続いた。

流石に、悪魔達も3人の存在に気付いたようだ。

「何ダ！？　人間如キガ――邪魔スルナッ！」

1体のガギソンは先ず、一番最初に走り寄ってきた淳に狙いを定めると、手から大量の電流を放ってくる。

淳はすぐに悟った。

これは『ジオ』とは全く威力の異なる、更に強力な電撃魔法に違いない、と。

これは『雷の乱舞』と言い、『氷の乱舞』と同じく無差別に、強力な電撃を辺りに撒き散らす魔法だ。

「……っ！　リリム！」

「任せてっ！」

だが、『雷の乱舞』なら淳の仲魔であるリリムも使う事が出来る。

リリムは淳と電撃の間に割って入ると、自分も『雷の乱舞』を放って、ガギソンの魔法を相殺した。

それによって2つの魔法の中心で爆発と強烈な衝撃波が発生し、近くにあった何台かの車が吹き飛ばされた。

同じく淳の体も後方に大きく吹き飛ばされたものの、空中で1回転して上手く体勢を整え、無事に着地する。

そして、また直ぐに走り出した。

彼は守るよりも、攻める方が好きなのだ。

途中、横に放置されている軽自動車に目が止まった。

その対角線上には丁度、先程のガギソンが羽ばたいている。

淳はニヤリと笑うと、思いっきり右拳を振りかぶり、そのまま『怒りの一撃』を繰り出す。

淳の右ストレートによって、名前に反して、実は決して軽くない筈の軽自動車がまるでピンボールのように飛んでいき、ガギソンへと向かっていく。

流石に、『雷の乱舞』であろうと、これを迎え撃つ事は出来ない。

すぐさま、ガギソンは横に飛び、それをかわした。

それこそが、淳の狙いだった――ガギソンが飛びのいたその先には、ガルムの背に跨がったユズが待ち構えていた。

ガルムの種族特有スキル――『妖気迅雷』によって、あらかじめ

先回りしていたのだ。

東京封鎖が始まってから僅か1日しか経っていないにも関わらず、3人のコンビネーションはほぼ完璧になりつつあった。

「ユズッ！　その悪魔の弱点は衝撃属性だ！」

淳の後ろから駆け寄ってきたアツロウが、ユズにアドバイスする。

衝撃属性と言えば、まさに今、ユズが会得している魔法の内の1つが、その衝撃属性を有する『ザン』である。

「うん！　分かった――『ザン』！」

ユズが『ザン』を放つと、淳の攻撃をかわした直後で、空中で僅かに体勢を崩しているガギソンに、それが見事に命中する。

弱点属性の魔法を無防備に受けた1体のガギソンは、断末魔の叫びを上げて、その場で消滅した。

そのガギソンが持っていたＣＯＭＰが、空中に放り出され、アツロウがそれを見事にキャッチすると、そのまま力任せに地面にたたき付けた。

強い衝撃を受けた事でＣＯＭＰが大破し、その機能を停止させる。

だが、まだ終わりではない。

後もう1体、改造ＣＯＭＰを持ったガギソンがいる。

そのガギソンが言った。

「『ベル・デル』様ヲ愛デル者タチヨ！　今コソ、ココニ出デヨ！　アノ方ヲ、冥界カラ解放スルノダ！」

淳達がそちらを振り向いた時には既に、ガギソンがもう1体のビルヴィスを召喚しているところだった。

「また増えちゃったよ！　急がなきゃヤバいよ！」

ユズが慌てたようにそう言うものの、淳が気になったのは、敵悪魔が増えた事よりも、先程、ガギソンが言い放った言葉の方だった。

「アツロウ！　今の聞いたかっ！？」

「ああ……！　コイツら、何か目的があるぞ！」

「来イ来イ！　ドンドン出テ来イ！　アノ方ノタメー！」

勿論、敵悪魔がどんどん増えていくのを黙って見ている程、淳達もお人好しではない。

「あいにく、もう閉店なんだよっ！　とっとと還れ！」

淳がガギソンに向かって、『アギ』を放つ。

しかし、ガギソンに向かっていった炎弾は途中で、2体のビルヴィスの巨大なフォークで防がれてしまった。

淳はチッと舌打ちする。そんな彼の側で、アツロウが、

「ジュン、コイツらの弱点属性は、俺が会得してる『ジオ』、つまり電撃属性だ。ここは俺に任せて、お前はあの鳥みたいな悪魔を頼む」

と言った。

そう言いながら、アツロウ、そして彼の仲魔であるヘアリージャックはズイッと淳の前に進み出て、2体のビルヴィスと対立する。

淳はつかの間、迷うような素振りを見せたものの、次には「ああ、頼む」と言ってアツロウの肩を叩いた後、再び疾走した。

「ユズ！　アツロウのサポートをしてくれ！　リリムとサラスヴァティは俺と来い！」

そう言いながら走る淳に、2体のビルヴィスが手に持ったフォークを突き出してきた。

「させないっ！」

ガルムの『妖気迅雷』によって、3人の中で1番速く動く事が出来るユズが、ガルムの背に跨がったビルヴィスに急接近する。

突然現れた乱入者に驚いて動きを止めたビルヴィスに、すかさずユズとアツロウの仲魔であるガルムとヘアリージャック、それぞれの爪が2体を襲った。

ビルヴィス達の体から吹き出した血を浴びながら、淳はＣＯＭＰを持ったガギソンへ駆け寄る。ガギソンは既に、オグンやオーガと

いった、2体の悪魔を新たに召喚しているところだった。

「いいね。丁度3対3だ」

ガギソン達から約数メートル離れた所で、淳は急ブレーキをかけた。

しばらくは淳側のチームとガギソン側のチームの睨み合いが続いたが、やがて淳が動いた。いつの間にか手に持っていた石をなるべく小さいモーションでガギソンに投げつける。

本能的にガギソンがそれを回避すると同時に、淳は横に放置されたスクーターバイクを持ち上げると、そのままガギソン達に投げつけた。

その細身からは想像する事も出来ない、恐ろしい腕力だ。

そのバイクをかわす為にガギソン達が散ったと同時に、今度は仲魔であるサラスヴァティが動いた。

手に持った琵琶を美しく奏でると、ガギソン達に荒れ狂う風の波――『嵐の乱舞』が襲い掛かる。

衝撃属性が弱点であるオーガは、その攻撃をまともに受けて叫び声を上げる間もなく絶命するが、ガギソンとオグンはなんとかそれを逃れた。

だが、それさえも、淳の計算の内だった。

身を切り裂く様な疾風から間一髪で逃れたオグンの正面には、淳

が待ち構えていた。

「残念、ここは通行止めだ」

今更になって完全に嵌められたと気付いたオグンだが、今、この悪魔に出来る事と言えば、そんな淳に対して槍を突き出す程度だ。

淳はそれを自分の体に届くギリギリの位置で、しかしメンドくさそうに槍を掴むと、そのまま力任せに自分の方へ引っ張る。

必然、前のめりになったオグンの腹部に淳が強烈な右膝蹴りをお見舞いすると、オグンは悶絶し、その場で倒れた。

足元でもがいているオグンの頭部を容赦なく踏み潰すと、彼は離れた場所にいるガギソンを睨みつける。

既に相手が召喚した悪魔を2体とも倒し、状況は3対1と、こちらが有利――というよりは、最早こちらの勝利がほぼ確定した状態だった。

――だからこそ、彼は気付けなかった。

先程、彼はガギソンが召喚した悪魔は2体だけ――と決め付けていたが、実際にはそうではなかった。

自分の視界に映るガギソンが、不意に邪悪な笑みを浮かべたのを見て、淳は一瞬怪訝（けげん）に思った後、すぐに振り返った。

その気配に気付いたのは流石だった。

だがもう遅かった。

親友であるアツロウの後ろにある車の陰から、１体のビルヴィスが飛び出してきたのだ。

「アツロウ！」

「――っ！」

淳は急いで彼に駆け寄ろうとするが、とても間に合わない。

次にはビルヴィスのフォークが、彼の背中を切り裂いた。

アツロウの体が空中でキリキリと回って、そのまま倒れる。

痛みで、しばらくは立ち上がれそうにない。

淳はすぐにそのビルヴィスの首をへし折ると、アツロウに駆け寄って傷の具合を見た。

内臓には届いていない。つまりは致命傷とまでは言わないが、それでもかなり深い傷だった。

「馬鹿ガ……。人間ノ分際デ、悪魔ニ逆ラウカラ、コウナル！」

まるで道化でも見るようにアツロウを助けようとした淳を嘲笑しながら、ＣＯＭＰを持ったガギソンは、トンネルの中へと逃げていった。

「アツロウ……くそっ！　リリム！　サラスヴァティ！　来てくれ

！」

「はい！」

2体と共に、ユズ達も駆け寄って来る。

淳はアツロウの傷口に触れた。傷口から流れ出ていた赤い血が指につく。それが妙に生々しかった。

リリム、サラスヴァティ、ユズがそれぞれの治癒魔法でアツロウを治療しているのを横目で見ながら、淳はアツロウの顔色を伺った。

「大丈夫か？」

淳が尋ねると、アツロウは薄く笑ったが、余り大丈夫そうではなかった。

それを見た時、淳の中で怒りの炎が激しく燃え上がった。まるで、自分の肉親を目の前で傷付けられたかのような気分だった。

淳はサッと立ち上がると、そのままガギソンが逃げて行ったトンネルに向かって走り出す。

「あ、ちょっと、ジュン！　どこに行くのっ！？」

「あの鳥モドキをぶっ殺してくる――お前らはアツロウを見ててくれ！」

ユズや他の仲魔達が背後で引き止めようとする声を聞きながら、淳はトンネルに巣くう暗闇の中へと入っていった。

2nd Day『赤坂トンネルのバトル（1）―2』

トンネル内の照明は先程のガギソンか、或いは他の悪魔が破壊したのか、大半が使い物にならなくなっていたものの、残りの幾つかは生きていた。

そのお陰で完全な暗闇とは言わないが、それでも数メートル先が朧げに見える程度だった。

トンネルに入った淳は途中から走るのを止め、慎重に歩き出した。

どの道、アツロウを傷付けた悪魔も、黙ってやられっ放しという訳ではないだろう。仲間を喚び出してすぐに戻ってくる筈だ。ならばこちらが急がなくとも、おのずと再会する事になる。

途中で、幾つかの死体に遭遇した。中には、自衛隊の制服を着た者の姿もある。それぞれの腹部からはサラミソーセージのような内臓がはみ出していた。

「……しばらく肉は食えないな」

呟き、淳はそれを視界に入れないようにしながら、慎重にトンネル内を歩いていった。

その少し先では、何かが絶えず動き回っている気配があった（言うまでもなく、先程のガギソンだろう）。しかし、トンネル内の闇は思ったよりも濃く、目で見る事が出来ない。

突然、コツンと何かが足に当たり、淳は飛びのいた。

そこにも自衛隊員の死体があり、しかも首から上がなかった。

淳が溜息をつくと同時に、何かが彼の目に止まる。その死体の右手には、一丁のカービン（扱いやすくする為に、８０センチ以下に設計された銃）のような物が握られていた。

「……」

暫く考えた後、淳は身を屈めて、その手からカービンを抜き取る。

グリップ部分についたヌメリとした血が癇に障ったが、この際は気にしない。他にも、死体のポケットに納められていたマガジンを幾つか頂戴した。

自分の事を至極模範的な一般人だと思っている淳は当然、そんな物は触った事さえないものの、使い方などの知識は（警察官である真田明彦の影響で）ある程度理解していた。

手に持ったカービンをあらゆる方向から隈なく観察し、すぐ使えるようにその構造を頭に叩き込む。

少し経つと、彼はセーフティの位置、装填の仕方、暗視装置の作動方法などを理解した。その後、実際に銃を操作してみる。

マガジンを装填し、コックを引いてセーフティロックを外すと、スコープを乗せるレールについた暗視装置の電源を入れた。この暗闇で暗視装置はありがたい。

驚くべき事に、淳はこの短時間でそのカービンの仕組みを理解し、扱えるようになっていた。

その時だった。先程まで前方で動いていた気配が、いつの間にか淳の背後にまで来ていた。何の前触れもなく、その何かが淳にぶつかる。コンクリートの地面に倒れ込んだ拍子に、手に持ったカービンが吹っ飛んだ。

地面に手をついたまま顔だけを後ろに向けると、ぼんやりとではあるが、その悪魔の顔を見る事が出来た。ガギソンではない。牛の頭部、青い体、禍々しく光る赤い目、手には巨大な斧を持っている。

その悪魔――ゴズキは、またも攻撃を仕掛けてきたが、淳は鋭い斧の一撃をかわし、すぐにゴズキの右腕を掴むと、関節を外した。

だが、ゴズキは一向に動きを止めようとはしない。それとは別の腕で彼の首を絞めると、そのままグイッと持ち上げた。

「……かぁっ……！……はっ……！！」

気管支を圧迫され、上手く呼吸する事が出来ない。

淳が新鮮な空気を求めて抵抗しようとすると、ゴズキはそのまま、近くの自動車のフロントガラスに彼の頭をたたき付けた。

淳の頭が車内に入り、砕けたガラスが降り注ぐ。

フロントガラスにはダライバーの安全を考えて、事故の際、一気に粉々に砕けてしまう物と、少しのヒビが入るだけの二種類がある。

どうやら、このガラスのタイプは前者らしい。もし後者であったなら、（いくらハーモナイザーで耐久力が高まってるとはいえ）淳の頭部は無事では済まなかっただろう。

尚も、ゴズキは彼の首を絞め続けている。

自分の意識が段々薄れていくのを感じながら、淳は自分の首を絞めているゴズキの腕を両手で拘束し、更に両足を相手の首の後ろに回すと、思いっきり自分の方へ引っ張った。

『三角絞め』という、柔道技の一種だ。今度は逆に自分が首を絞められる事になったゴズキは堪らず淳の首から手を離すと、すかさずその拳で淳を殴る。

鈍器で殴られたかのような痛みを感じた淳もまた、ゴズキにかけた絞め技を解かざるを得なかった。

激しく咳込みながら、淳は車から転げ落ち、どうにか膝をつくと、ＣＯＭＰから仲魔であるモー・ショボーを召喚する。

「モー・ショボー、少しだけでいい、アイツの動きを止められるか！？」

「任せて下さい！」

モー・ショボーは『ブフ』によって氷の槍を作り出すと、それをゴズキに投げ付ける。

恐らく、単純な実力なら彼女よりもゴズキの方が上だろうが、どうやら氷結魔法が弱点だったらしい。氷の槍はいとも簡単にゴズキ

の胸を貫いた。

だが、致命傷には至らない。無論、人間ならば、間違いなく即死の一撃だ。

衝撃によって後ろに倒れつつも、ゴズキは腕を思いっ切り引いて、巨大な斧をモー・ショボーに向かって投げた。

「危ねぇっ！」

淳は彼女に飛び掛かり、自分よりも小さいその体をしっかり抱きしめると、そのまま倒れ込んだ。後頭部の上スレスレを斧の刃が通り、数本の髪が切り取られる。

顔を上げると、ゴズキが近くの車両の陰に身を隠すところだった。

「大丈夫か？」

淳はモー・ショボーを抱いたまま起き上がると、彼女をゆっくりと地面に下ろす。

「あ、ありがとうございます」

「油断するなよ。嗅覚に頼って、闇から不意打ちを仕掛けてくるかもしれない」

「はい」

せめて、リリムかサラスヴァティのどちらか一体だけでも連れてくるべきだったか、と淳は悔やんだ。今は二体とも、悪魔の攻撃に

倒れたアツロウを回復させる為、トンネルの外に残っている。

ふと、淳の目に、正面にある車のガラスが見えた。そこに何かが映っている。

彼はばっと床に飛び、かろうじでゴズキのパンチをかわした。不意を突かれはしたが、しかし、直前になって初めて気付いたにも関わらず、こうして回避出来たところを見ると、動きはそれ程速くないらしい。

ゴズキの拳が地面にめり込み、そこを中心に亀裂が入る。

淳は起き上がり様にゴズキの着ている衣服の襟首辺りを掴むと、そのままゴズキの体勢を崩し、背負い投げの要領で投げ飛ばした。

だが、相手の体を床にたたき付けた際に生じる感覚は、彼の手には伝わってこなかった。

見れば、何と驚くべき事に、ゴズキは自分の背中が床にたたき付けられる寸前で、腕で地面を支え、ブリッジのような姿勢でギリギリ踏ん張っていたのだ。

傍から見れば滑稽以外の何ものでもないが、淳はとても笑う気にはなれなかった。恐るべき腕力である。

これは、問題になりそうだ――それを見たショックで一瞬、動きを止めてしまった淳の顔を、ゴズキが手の甲で殴りつける。淳は一台の車の上を飛び越え、その向こう側に落ちて行った。

ゴズキのパンチで口の中を切った淳は、咥内に溜まった血を吐き

出す。すると、彼の右手に何か冷たい物が触れた。

それは、淳が先程、ゴズキの不意打ちにあった際に、何処かへと放り投げてしまったカービンだった。

考えてる暇はない。ゴズキは彼に追い討ちをかけようと、今、この瞬間にも近付いてきている。

足止めしようと、モー・ショボーが立ちはだかったが、そんな彼女をゴズキが鬱陶しそうに横に殴ると、車を一つ二つ越えて、彼女の姿は見えなくなった。

だが、それだけでも、淳がカービンを手に取り、安全装置を外して、ゴズキに照準を定めるには十分な時間だった。

セーフティはフルオートに設定している為、彼が引き金を引くと、何発もの弾丸が立て続けに発射された。それにより、ゴズキの巨体が数歩下がり、少なからず血肉を宙に弾かせる。

これは、問題にならない。十分に効いている。淳はそう思った。流石に、悪魔である相手を即死させるには至らないものの、とにかくダメージを受けているのは確かだ。

いける。接近戦となると厄介だが、この銃を用いれば、安全圏から一方的に攻撃することが可能だ。

勿論、淳がその気になれば、接近戦でもゴズキに勝つ事は出来るだろう――少なくとも、ゴズキの実力は以前戦った、あのウンディゴという悪魔よりは遥かに見劣りする。

そして淳は、そのウンディゴに対して、接近戦で勝利を収める事が出来た。ならば今回、ゴズキに接近戦を挑んだとしても、その勝率は決して低くないだろう。

だが、勇敢と無謀は違うのだ。ウンディゴの時は、それ以外に勝つ方法が見当たらなかったから接近戦を選択しただけで、他に妙案があれば、彼は迷わずその策を選んだ筈だ。

ゴズキがそこからなるべく動けないようにする為に、淳はカービンを扱う際、特に足を重点的に狙った。

やがて、とうとうダメージが限界に達したのか、ゴズキがガクンと膝を落とす。

この時を待っていた。

淳は持っていたカービンを脇に捨てると、右手に魔力を集中させる。

淳が持つ氷結系スキル――『氷の乱舞』。

限界まで溜め込んだ魔力により、威力を極限にまで増加させた氷の嵐が、容赦なくゴズキの体を飲み込む。その余波で、近くにあった何台かの自動車が横転した。

やがて、氷の嵐が収まったころ、先程までゴズキがいた場所には、それとほぼ同じ形をした氷の彫刻が残されていた。

淳は今や氷漬けとなったゴズキの傍まで歩み寄ると、たった一回の右ストレートでそれを砕く。

「ジュン！」

彼が一息ついているところに、ゴズキに殴られたダメージから回復したモー・ショボーがチョコチョコと走りよって来た。

そんな愛くるしい動作が、この薄暗く、不気味なトンネル内となんだかミスマッチな気がして、淳は思わず頬を綻ばせる。

「大丈夫ですか？」

モー・ショボーが下から心配そうに彼の顔を覗き込んできた為、淳は「まぁな」と言って肩を竦めた。

実際には、それほど大丈夫ではない。特に、首を絞められた際のダメージが思ったよりも酷く、彼は今でも若干の息苦しさを感じていた。

モー・ショボーをＣＯＭＰに帰すと、淳はもう外に戻ろうかな、と考えた。

アツロウを傷つけられた事により茹で上がった頭も、今ではスッカリ冷え切っている。恐らく、先程のゴズキはＣＯＭＰを持ったガギソンが時間稼ぎの為に召還したのだろう。

ガギソンがこれまでの間に、全く手を出してこなかった事からも、それが分かる。ならば、もうとっくに逃げられている筈だ。

となると、ここで無理に深追いするのは得策ではない――そもそも、先の戦闘で先手を取られた事からも分かるように、この薄暗い

空間ではやはり、悪魔（あいて）の方に分がある。

アツロウを傷つけた事に関して許す気は毛頭ないし、いずれその事についてもケジメはつけるつもりだが、とにかく、今は一旦仲間と合流しなければ。

いい加減、ユズやアツロウ達も、トンネルに入って行った淳の事を心配し始めている頃だろう。

そう。

もう既に、この場に悪魔はいない――そう、淳は推察した。

それは、現在の状況を冷静に分析すれば、至極常識的な判断と言えるだろう――しかし。

彼は一つ、重要な事を忘れていた。

いや、その事に関して、『忘れていた』と彼を責めるのはお門違いだろう――そもそも、彼はセトやアマネとは違い、悪魔と初めて出会ってからの期間が余りにも短すぎるのだ。

それでも、もしこの場に二人がいたら、彼等はこう言った筈だ。

曰く。

悪魔（れんちゅう）には――常識というものが一切通じない、と。

今、淳の後ろには、一台のトラックがある。

そのボンネットの上に――まさにその、ＣＯＭＰを持ったガギソンがいた。

敵は淳から逃れる為に、このトンネル内に逃げ込んできたわけではない。この暗闇を利用し、別の悪魔と戦って、疲れている彼に不意打ちする為に、このトンネルへ、彼をおびき寄せたのだ。

『悪魔』。

暗闇に住まう者。

ボンネットの上に潜んでいたガギソンが彼に飛びかかった。その爪に、淳が持っていた改造ＣＯＭＰが弾かれる。

「……っ！！」

マズイ！

アツロウが以前言ったように、ＣＯＭＰは自分の生命線だ。これを失うと、自分がこの封鎖で生き残れる確立は大きく下がってしまう。

今の一撃で壊れたかどうかは定かではないが、それを確かめる為にも、先ずは弾かれたＣＯＭＰを回収しなければ。

だが次には、咄嗟に受身をとってなんとか魔の手を逃れた淳は、今度こそ自分が驚愕する番だと知った。

新たに現れた悪魔は、例のガギソンを含めて三体！まず間違いなく、他の二体は、ガギソンがＣＯＭＰから召還した悪魔だろう。淳

はつくづく、悪魔がＣＯＭＰを手に入れたらどれだけ厄介なのかを知った。

再び、戦闘が始まった。とはいえ、淳としては何よりも先にＣＯＭＰを回収しなければならない。交戦するにしても、撤退するにしてもだ。

彼はＣＯＭＰへと駆け寄るが――当然、そんな彼の狙いを、悪魔（あいて）が把握してない筈がない。走った彼の真横から、一体の悪魔（キキーモラ）が『ザン』を見舞った。

吹き飛ばされ、近くの車に体を打ちつけながら、淳は冷静に状況を分析した。どうやら、悪魔達（れんちゅう）を相手にせずに、自分のＣＯＭＰへとたどり着くのは、ほぼ不可能と言っていいらしい。

かといって、素手で三体の悪魔を何とかしろというのも、馬鹿げた話だ。

確かに彼は並の人間よりは体術に長けているものの、あくまで、それは人間が持つ常識の枠内での話であって、普段から『悪魔』と戦う事を想定して体を鍛える程、彼は想像力豊（イタい）かな人間ではない。

最早、祈るしかないように思われた。

だが、淳は祈ろうとはしなかった。

そもそも彼は、不幸な人間を神が救ってくれるなどという幻想を、少したりとも信じていない。暢気に神に祈る暇があったら、自分の力で生き残るべく、諦めず最後まで全力で向かって行くべきだ。

彼はそう思っていた。

一気に距離を詰めて来た別の悪魔（ワイラ）が大口を開けたところを、横に殴って軌道を逸らす。

顔のすぐ脇で、カツンと顎が重なる音が聞こえた。ガギソンの『嵐の乱舞』を、近くの車の上に飛び乗って逃れるが、そこにはキキーモラが待ち構えていた。顔目掛けて振るわれた鋭い爪を、首を捻ってなんとかギリギリでかわす。

だが、そのせいでバランスを崩し、車の上から落ちてしまった。そこへ狙い済ましたかのように、ワイラの『アギ』が襲い掛かる。

今度は避け切れなかった。咄嗟に顔の前で腕を交錯させるが、余りの熱さに、逆に火傷を負った際の痛みも感じなかった。

状況は劣勢だった。

どうしようもなく劣勢だった。

それでも、彼は諦めなかった。

彼は自分の力を信じ、最後の最後まで足掻き続けた。

どれだけ傷だらけになろうとも、どれだけ血反吐を吐こうとも、どれだけ倒れても、どれだけ気を失いかけても、どれだけ骨が軋んでも――彼は決して、揺ぎ無く、諦めようとはしなかった。

そして――どうやら『神』は、そんな彼の願いを聞き届けたらしい。

突然、銃声が響いたかと思うと、目の前にいたワイラがパタリと倒れた。

次にはキキーモラが。

次にはガギソンが。

そこまでに響いた銃声の数は、三発。

つまり一発につき、一体の悪魔を倒したという事。

先程、カービンを扱っていた時の淳以上に、正確な射撃だった。

一体誰が。

銃を用いている以上、（多分）悪魔ではないと思うが……？

彼は銃声のした方へ目を向けるが、そこには既に、淳を助けた何者かの姿はなかった。

淳は首を傾げた。トンネル内という、音が反響しやすい状況の為、正確な判断はしづらいが、それでも、その位置から何者かが銃を撃って、彼を助けた事は間違いない筈だ。

すると、次の瞬間には、彼の体は、後ろから押し倒されていた。

「……っ！」

彼がその何者かの姿を見るか見ないかという内に、彼の左腕は後

ろに引っ張られ、関節を固定されてしまう。謎の人物は、そのまま、うつ伏せになった彼の背中に抱きつき、空いた片手で淳の右腕を掴んだ。

そこまでの動作があまりにも早すぎて、淳にはまったく抵抗する暇がなかった。

恐らく、悪魔と戦っていない、万全の状態の彼でも、抵抗する事は出来なかっただろう。それほどに、その何者かの拘束技はとても迅速で、且つ正確だった。

「動くな！」

頭のすぐ横から聞こえてきた声は、女性のものだった。となると、現在、淳は見知らぬ女性に生殺与奪の権利を握られている事になる。そう考えると、少し情けなかった。

首だけでもなんとか捻ってその女性の姿を確認しようとするものの、暗闇のせいで、その姿をハッキリと捉える事が出来ない。

不意に、掴まれていた右腕から、女性が手を離した。チャンスとばかりに、淳は拘束から逃れようとするが、次には背中に拳銃を突きつけられてしまう。手を離したのは、どうやら単純に、銃を引き抜く為だったようだ。

それにしても、先程の拘束術の手際の良さといい、ただの一般人にここまでの事が出来るとは考えにくい。

となると、恐らく軍事関係者か、或いはその系列に属する機関の人間だろう。ここに来る途中に見た何体の死体から判断するに、自

衛隊の一員だと考えるのが妥当か。

「ようやく、『ターゲット』に会えたわ」

急に、女性が意味の分からない事を言った。だから、淳としては、

「は――はぁ？」

と、返すより他にない。

「とぼけないで」

凄みのある声を出すと共に、女性は更に強く、淳に対する拘束を強めた。

左腕が本来曲げない方向に無理やり曲げられ、悲鳴を上げている。あと数センチ、いや、数ミリでも曲げられれば、間違いなく骨折してしまうだろう。

恐るべきは、この女性がその事を理解した上で、淳がギリギリ骨折しないように力加減をしているという事だ。

相手に尋問をする際は、あっさり骨を折ってしまうよりも、そちらの方が相手に恐怖感を与えやすい。そう考えての力加減だろうか？　だとしたら、悪魔がいなくなったとはいえ、状況自体は余り変わっていないと言うしかない。

要するに、ピンチ。

大ピンチだった。

「さっき、そこの機械から、貴方が悪魔を召還して、使役してるのを見たわ――この封鎖内にいる悪魔の出現は、貴方のような人間の仕業でしょう！？　さぁ！　今スグ奴等を止めるのよ！」

「ちょ――ちょっとタンマ！　アンタ今、とてつもない勘違いをして……！」

「黙りなさい」

ガチャッ、と脅すような音をたてて、女性が淳の頭を拳銃で小突いた。

「貴方に発言権はないわ。貴方はただ黙って、私の言うとおりに、悪魔（れんちゅう）を消せばいいのよ」

「……」

どうやら……話が通じる相手でも状況でもないらしい。

だとするならば、先ずは何とかして、この女性の拘束から逃れなければならない。そしてその後、ＣＯＭＰを拾ってそのままトンネルの外へと逃げられれば最高だ。

そう――確かに、それが最高だ。同時に、最高にご都合主義な考え方だ。どう考えても、普通、そこまで上手く物事が回る筈ないだろう？　今の自分の状況を見れば、それは明らかだ。

だが、それ以外に方法がない以上、やるしかない。

幸い、今、彼の頭の中では、一つ、この拘束から逃れる方法が浮かんでいる。しかし、この方法は一度しか使えない上に、失敗すれば取り返しのつかない事になるという、無視出来ないリスクを孕んでいた。

淳は覚悟を決めると、ゆっくり息を吐き出した。チャンスは一度っきり、迷っている暇はない。

「早く答えなさい！　さもないと――」

女性の言葉の途中から、淳は既に行動を開始していた。息を止め、自分の左腕に意識を集中させると、そのまま自分の意思で、左腕の間接を外した。

ゴキッと鈍い音がトンネル内に響き渡る。無論、それなりの痛みが淳の体を駆け巡り、額から脂汗が滲んだが、彼は唇を噛み締める事によってそれに耐えた。

「――なっ！？」

今まで握っていた左腕から、支えとなる骨が機能しなくなった事により、女性の拘束が効果を失う。女性が戸惑っている内に、淳は女性の体を右手だけで突き飛ばすと、落ちているＣＯＭＰに向かう。

「待っ――！」

自分を引きとめようとする女性の台詞を最後まで聞こうとはせずに、淳はＣＯＭＰを拾うと、そのままトンネルの出口に向かって走り出した。

2nd Day『赤坂トンネルのバトル（1）―3』

――赤坂トンネル入口前。

「よし、治った！」

そう勢い良く叫んで、木原篤郎はバッと立ち上がった。

ビルヴィスに負わされた背中の傷が、ようやく回復したのだ。けっして浅い傷ではなかった為、大きな痣が残ってしまったものの、服を着れば他人の目から簡単に隠せるので、それほど気にならない。

「早く、ジュンの後を追おうぜっ！　まさかアイツが負けるとは思わないけど、やっぱり心配だ」

「ちょっと、アツロウ！　まだムチャしちゃ駄目だよ！」

「そうですよ。マスターが無事に帰ってくるのを信じて、ここで待つべきです」

すぐにでも淳を追ってトンネルへと向かおうとするアツロウを、ユズやサラスヴァティが引き止める。

「うっ……！　で、でもよ……！」

「それにさぁ、私達、アンタに治癒魔法使い切って、もう魔力が殆どないんだよね。アンタだってまだ病み上がりだしぃ、行っても足手まといになるだけじゃん？」

リリムがトドメを刺した。

「それにしても、私、悪魔を甘く見てたかも。まさかＣＯＭＰを使おうとするなんて……」

ユズは、先の戦闘でアツロウが破壊したＣＯＭＰの残骸に目を向けている。

「それに、何か変な事も言ってたし……。『あの方を解放する』、とか何とか……。何なのかな？　あれ」

「ああ……。『ベル』……何とかって言ってたな。アイツ等の親玉か……もっと上位の悪魔とか、そんな感じか？　冗談じゃないぜ……！」

「悪魔が『様』なんて付けてんだよ？　どっちにしろ、喚び出されちゃ困る奴に決まってるって……！」

「だよな……。そんなモン喚び出されたら、今よりももっと状況が悪くなるぜ……。ああ畜生、早くジュン、帰ってこないかな……って、アレ？」

「どうしたの？」

「アレって……ジュンじゃねぇか？」

アツロウの視線をユズ達が辿ると、正にその通りで、トンネルの入口から、有里淳がこちらに駆け寄ってくるところだった。

「あっ！　ホントだ！　良かったぁ……。無事だったんだ……」

ユズはホッとしたようにため息をついているが、しかしアツロウは、無事、悪魔を倒し終えた後にしては、どこか淳の様子がおかしい事に気付いた。

激しく息を切らし、大急ぎでこちらに向かって来る様は、まるで何かから逃げて来ているようにも見える。

そして、どこか様子がおかしいと判断された当の有里淳は、アツロウ達の前で急ブレーキをかけると、その場で激しく咳き込んだ。

「ど、どうしたの！？　ジュン！」

「お前ら、今すぐここから逃げるぞっ！」

「えぇっ！？　抜け道はどうするのよ！？」

「もしかして、別のもっと強力な悪魔がいたのか！？」

「いや、悪魔っつうか、悪魔みたいな女っつうか……」

言いながらも、淳は慌てた様子で、リリムやサラスヴァティといった、自分たちの仲魔をＣＯＭＰに戻していく。

しかし、そんな事をしている内に、淳の言う『悪魔のような女』が、トンネルの出口から駆け出してきた。

女性は、淳達から十メートル程離れた位置で急停止すると、スタンディング・ポジションで手に持った銃を構える。

「動くな！　……他にも仲間がいたのね……！」

突然、見知らぬ人物から銃を向けられた事で、当然の如く、アツロウとユズは酷く慌て始めた。

「いっ！？　今度は何だよ！？」

「あ、あの人、銃持ってるよ！　普通じゃないよ！　やばいって！」

「どうも、このトンネルも見張られてたっぽいんだよな……」

淳が苦笑いしていると、女性の後ろから、一人の男性が現れた。銃を構えている女性と似た格好をしている為、まず二人は仲間だろうが、トンネル内では、淳はこの男性を見かけなかった。

もしかしたら、淳と女性が揉み合っている音を聞きつけてやって来たのかもしれない（二人の余命残数には『5』と表示されていた）。

「何があった、報告しろ」

男が言う。

「は、現状報告します。数体の悪魔がトンネル内を占拠しておりましたが……。彼等……少なくとも、そこの少年が悪魔を使役して、それらの悪魔を排除しました」

トンネル内が薄暗かった為、先程は女性の容姿を確認する事が出来なかったが、今ならハッキリと分かる。

紅色の髪は耳が見える程度に切り、髪と同じく紅色の瞳からは、強い意志が伺える。普段滅多に見る事が出来ない、『美しい』というよりは『凛々しい』という容姿をしているが、今は銃を突きつけられている為、淳はちっとも幸せな気分になれなかった。

男の方は、流石にセトには遠く及ばないが、それでも淳よりは断然背が高く、がっちりした体格をしている。黒髪をスポーツ刈りにし、その目からは狩る側の人間特有の、見る者を威圧させる迫力があった。

淳が悪魔を使役していた、と女性から報告を受けた女性の上官らしき男性は、目を大きく見開く。

「な……悪魔を使役、だと!?　まさか、コイツが『ターゲット』か！　クソッ……！　これ以上の『汚染地域』の拡大は、何としても食い止めなければならんっ……！」

言うと、男性も淳達に――というよりは、淳一人に対して、銃を構える。

「お、汚染地域!?　おいジュン……、ヤバそうな雰囲気だぜ……」

「うん。見りゃ分かる」

「な、何!?　ど、どうしたらいいの!?」

アツロウとユズがいよいよ本格的なパニックを起こし始めるが、そんなこちらの事情など一切構わないという風に、男性は淳達との距離を詰めて来ていた。

「答えろ！　お前達、ここで一体をしていた！さもないと……」

「う、うわぁっ！　逃げろ！」

そう淳達に言う否や、アツロウは我先にとばかりに逃げ出す。淳やユズもそれに続いた。

「待てっ！」

男性の横で、同じように銃を構えていた女性が、慌てて三人の後を追って来たが、しばらくすると、淳達は何とか女性を振り切る事に成功した。

◆

◆

――『赤坂トンネルのバトルＰＡＲＴ１』終了時ステータス

●クラックしたスキル

＞『雷の乱舞』

●所持マッカ：２０６８

●有里淳（？？）

・コマンドスキル

＞？ジオ

？氷の乱舞

？怒りの一撃

・自動効果スキル

＞？英霊の加護

？毒追加

？同族の心得・攻

・先制発動スキル

＞『Ｓ疾風の秘法』

●木原篤郎（人間）

・コマンドスキル

＞？アギ

？ブフ

？雷の乱舞

・自動効果スキル

＞？一分の活水

？同族の心得・防

？――

・先制発動スキル

＞『Ｓ的中の秘法』

●谷川柚子（人間）

・コマンドスキル

＞？ザン

？ディア
？アムリタ
・自動効果スキル
＞？耐氷結
？一分の魔脈
？――
・先制発動スキル
＞『S軽業の秘法』

●仲魔
＞・ヘアリージャック
・ガルム
・モー・ショボー
・リリム
・サラスヴァティ

――Ｍｉｓｓｉｏｎ Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！

◆

◆

後ろを振り返り、完全に先程の女性から逃れたのを確信すると、

三人は一先ず立ち止まって、それぞれ息を整えた。

額の汗を拭いながら、先ずはアツロウが口を開く。

「怖かった……。マジでやばかった……銃とか、ありえねぇよな……」

「ああ……、そうだな……」

淳にしてみれば、それ以前のトンネル内での攻防――突然、見知らぬ女性に抑え付けられ、体の自由を奪われた事の方が遥かに恐ろしかった。

あれじゃ逆レイプも同然だ。齢十六歳にして、そんな特殊な経験はしたくない、と淳は思った。

「それにしても……さっきの連中、何者なんだろう？」

「……思い出してみれば、服装も自衛隊とはちょっと違かったし、良く分からねぇけど……。悪魔の事を知ってたってのは、無視出来ないな」

淳がそう言うと、アツロウは深刻そうに頷く。

「ああ、そうみたいだな。……銃を持ってたし、あの二人、同じ制服を着てた。警察とか、自衛隊だろうけど……。淳の言うとおり、どっちとも微妙に違ったような……」

「……それに、あの人達が言ってた、『汚染地域』って……どういう事？」

ユズが二人に尋ねるが、勿論、彼等にもそれが何を指すのかは分からない。

「多分……悪魔の出没地域かなんかじゃないか？」

「ああ、そんな感じがしたな。『悪魔』って単語を使わずに、この状況を話す為の隠語かもしれない。政府のやりそうな事だぜ……！」

「どっちにしても、アイツらが悪魔の存在を認識してるのは確かだな……」

「つまり、政府はとっくに、悪魔がいる事を知ってたって事だよね……。じゃあ……やっぱり山手線の封鎖も、前から準備されてたって事かな……」

「そう考えるのが妥当だよな」

淳が頷く。それに、気になってる事は他にもあった。

「……あと、俺達の事を『ターゲット』って呼んでたな。……なんか、いや～な感じだよな。アレ」

まるで、自分達が人に害を及ぼすウイルスか何かみたいではないか。同じ人間でありながら、そういった無機質な呼び方をされた事に、淳は少なからず憤りを覚えていた。

「うん……とにかく、あの人達がいるんじゃ、トンネルの中にも入れないよ」

「でも、あの中に何かあるのは確かだろうな。アイツらって、やっぱり、自衛隊とはどこか違うし……。そういう連中が見張ってるって事は、きっと何か理由があるんだと思う」

淳が釘を刺すように言うと、ユズは「うん！」と力強く応じる。

「そうだよね！　あそこから出られるかもしれない！」

「まぁ、そうだろうな。奴らがあそこから入ってきたとしたら、それはつまり、外と通じる場所があるって事だ。とにかく封鎖の外に出られれば、生き延びる事が出来るんだし……ここで諦めるのは、惜しい気がするぜ」

アツロウは、自分達が走ってきた方向に目を向けると、

「……よし。時間が経ったら、さっきの連中もどっかに行くかもしれないし……。また後でチェックしてみようぜ」

と言った。

淳が思うに、トンネルに向かう前に予想した通り、確かに先程の女性を含む何人かの見張りはいたものの、あのトンネルの奥に何かがあると分かっただけでも大収穫だ。

そう考えると、先程までの死闘もまんざら無駄ではない。悪魔がＣＯＭＰを使えた事に関しては、どちらかというと悪いニュースに違いないが、それも知らないままでいるよりは遥かにマシだ。

少なくとも、これから先、外道悪魔使いなどからＣＯＭＰを取り上げたりした場合、取っておかずにスグ破壊した方がいいのは間違

いない。

少しだけ、ほんの少しだけではあるが――状況は、間違いなく良い方向に進んでいる。

そう、淳は信じた。

2nd Day『悪魔の出現とCOMP』

――表参道。

「なぁ……悪魔はCOMPがないと、出現できないのかな？」

突然、アツロウがそのような事を言い出したので、淳は首を傾げた（因みに、外した腕の関節は、既に戻しておいた）。

「そんな事はねぇだろ？　このCOMPをナオヤが作ったのは（多分）つい最近だろうし、悪魔はそれよりも前からいたんだ。だったら、その頃はCOMPを使う以外の、別の方法で喚び出してたことになる」

淳が答えると、ユズも「それを聞いて、どうしたいの？」とアツロウに尋ねた。

「ああ、悪魔がこの世界に現れる目的って、一体、何なんだろうって思ってさ。昔は儀式で、今はCOMPだけど、どっちも人間が悪魔を喚び出すのは、自分達の欲望を叶える為だろ？」

「まぁ……私達の場合、最初はイレギュラーな感じだったけど。今は、自分達が生き残りたいから悪魔を喚び出すんだもん。それだって、欲望の1つだよね……」

「言うなりゃ、生存欲……ってところか？」

淳がポツリとつぶやく。

「……じゃあ、悪魔は何故、人間の呼びかけに応えて、この世界に現れるんだ？」

「それは……んー、アレ？　どうしてだろうな？」

再び、淳は首を傾げた。そもそも、悪魔という生物が、普段から何を望んでいるのかさえ、彼には分からない。それでも無理矢理考えて、一番妥当な事を考えると……。

「契約だからじゃないか？」

「確かに、悪魔は契約に縛られてるけど、じゃあ、どうして契約するんだ？　そんなモン、ない方が自由だろ。実際に、契約に縛られないまま、この世界に潜んでる悪魔だって、いる筈なんだぜ……？」

「えっ？　契約してない悪魔って？」

「たとえば、以前からある、怪事件がそうだ」

「……ああ、『連続吸血事件』の事か？」

淳は、半年程前に世間を騒がせた、とある事件を思い出していた。

東京都内で、何人もの人間が体中の血を全て抜き取られ、干からびてしまうという、酷く猟奇じみている上に、これ以上なく残酷な事件だ。

「ああ……それもそうだけど、他にも、赤坂トンネルの前で、悪魔が別の悪魔を喚び出してたじゃないか。この世界に来るのに、契約

が必要なら、あれって悪魔同士が契約してるのか？　俺にはそうは見えなかったぜ？」

「言われてみると……そうだよね」

「まぁ、中には召喚した人間を殺して、自由になった悪魔もいるとは思うけどさ。ソイツらを別にしても、いま東京にいる悪魔の中には、契約に縛られずに活動してる奴らがいると思うんだよ。だとしたら……」

一拍の間を置いて、アツロウは次のように続けた。

「だとしたら、奴らはどうして、わざわざ俺達の世界へ、やって来る必要があるんだ？」

「……」

アツロウの問いを受けて、淳はしばらく考え込んだが、やがて、ある事を思い出した。

「そういや、首都高で悪魔が何か言ってたな」

「あっ……！　『あの方』を開放するって、確かに言ってたね！」

ユズも思い出したようだ。

『あの方』。

確か、『ベル』……何とかという悪魔だった筈だ。

「……！　……まさか、悪魔の目的は、そのベル何とかって奴を、この世界に喚ぶ事だってのか!?　冗談じゃないぜ……！　今でさえ、悪魔だらけだってのに、そんなもの喚ばれたら、一体、東京はどうなっちまうんだ……！」

「……何とかして、止められないかな」

淳がそう言うと、ユズは「信じられない」という顔をして、彼を見た。

「とっ……止める?　冗談でしょ!?　そんな奴、とても相手にしてられないって！　アツロウ、ジュン！　早く行こう、出口を探そうよ！」

ユズがそう促しても、淳は何も答えなかったが、アツロウは「ああ……そうだな」と言って、早足で歩き出した彼女の後について行った。

「早く出口を探せば、閉じ込められた人たちも、助けられるだろうしな。よし、ジュン。行こうぜ……！」

「……ああ」

淳にしても、この封鎖から逃れたいというユズの気持ちは、痛い程分かっていた。しかし、心のどこかで、「この封鎖に出口はない」と妙な確信を抱いている自分がいる事にも気付いていた。

駄目だ、と思い、淳は首を振った。封鎖に閉じ込められてから二日目の為か、段々ネガティブになってきているらしい。

いや、もし本当に淳がネガティブになりつつあるなら、先程の、ベル何とかという悪魔を止められないかと提案したのと矛盾してしまう。

ならば何故、淳はこうも早くこの封鎖内に残された出口の可能性を捨ててしまっているのだろう？

後にして思えば、この頃から既に、彼はこの封鎖には出口などない事に気付いていたのかもしれない。そして後に起こる、『ベルの王位争い』という壮絶な戦いに巻き込まれる事も、覚悟していたのかもしれない……。

2nd Day『レミエルの見解』

今回の封鎖において、セトという男のもっとも不可解な点は、その人間性や実力は勿論だが、それ以上に、『何故、彼が神の側についているのか』――という事が挙げられる。

セトの流儀は、以前レミエルが言ったとおり、『天使にも、悪魔にも味方しない。従うのは自分で決めた事のみ』だが、それに則って考えるとすると、セトは『ある目的があって、自分の意思で神に仕えている』――という事になる。

物語はまだまだ序盤であるため、流石にその全てをここで明かす訳にはいかないが、それでも少しだけ――彼が『神』に仕えている理由の一端を、ここでお見せするとしよう。

◆

◆

レミエルがセトが初めて出会ったのは――なんとまあ、こんな事を言うとやけにロマンチックな響き過ぎて、セトならばかえって気味悪がるかもしれないが――夢の中での事だった。

しかし、そもそもレミエルとはそういう天使なのだ。彼が持つ力

の中で最も代表的なものは『幻視』と呼ばれるもので、これは他人の夢に干渉する力を持っている。

古来から、夢とは『神』と人間の出会いの場とされており、それを可能とするレミエルの『幻視』は、非常に重宝されていた。今の彼の地位があるのは、そのお陰と言っても過言ではない。

人間側としても、昔は、『神』からの啓示や教えは夢の中でされる事が多く、古くから神の教えを聞く方法として、夢の価値は非常に大きかった。

ただ、夢の中で実際に『神』が現れる事はなく、教えや予言というものを伝えたのはその使いである『天使』だった。

レミエルはそれを可能とする『幻視』を司る天使として、大昔から、選ばれた人間に『神』の言葉を伝える事を責務としていた。

『選ばれた人間』――即ち、『神に選ばれた人間』だ。

セトは、その内の一人である。

もっとも、彼はまだ、この頃には『セト』という偽名を使っておらず、『イザナギ』や、そのまま人間としての『瀬多　〇〇』といった名前を用いて、ペルソナ使いとしての日々を送っていたのだが――それはともかくとして。

当時のセトの活躍ぶりは、レミエルのいる天界にまで及んでいた。

一介の人間でありながら、『女神』である『イザナミ』を討ち倒した英雄。その後も、ペルソナ使いとしては珍しく、成人した後も

毎日、血を血で洗う戦いの日々を送り、数多くの功績を残している。

いよいよもって、セトの存在が天界の者達も無視出来ない程になった時、『神』は彼を天使の眷属として迎え入れる事を決定した。その旨を伝えるように言われたレミエルは早速、彼に接触を試みた。

彼の夢に――入り込んだ。

『幻視』である。

そして、驚いた。予想していたより、彼が余りにも、人間的な性格だったからだ。とても大らかな性格で、『自由奔放』という言葉は、この男の為にあるようなものだ、と思ったのをよく覚えている。

『神』が仲間にしたがっている事を伝えると、再びレミエルは驚く事になる。

彼は驚くことも慌てることもなく、こう言ったのだ――「この時を待っていた」、と。

聞けば、セトがこれまでペルソナ使いとして活動してきたのは、自分の存在を『神』に知らしめ、仲間に引き入れてもらう為だったのだらしい。

ならば、レミエルが彼の夢に入り、天使の眷属になるよう説得したのは、セトにとっても願ったり叶ったりだったわけだ。

『俺には、やらなきゃいけない事がある』

『その為には――アンタら天使の力が必要だ』

その後、レミエルは、彼に天使の眷属となる上で、一つ重要な話をした。天使の眷属とは、即ち『神』のしもべになるということで、つまりは、『神』の命令は絶対で、逆らう事は許されないという事だ。

彼はそれに対しても一切不満を見せることもなく、素直に聞き入れた。

しかし、レミエルを含む天使達は、すぐに、セトが如何に扱いづらい男であるかを思い知った。

彼が天使の眷属となってから数年も経つと、セトに対する天使達の統一意見は、とにかくよく分からない面倒な男だという認識が常識となっていた。

レミエルは、天界では新米である彼の世話役として、最初の内の短期間は彼の面倒を見ていたという事もあってか、言葉の上ではそれに対して反論をとなえてはいるものの、それは実に言いえて妙だと思っている。

無論、天界の住人の中にも常識の通じない、異常とも称される者達は少なからず存在するものの、その中でさえ、彼の異常さは、人間であるにも関わらず、際立っていたという事だ。

『よく分からない』。

とにかく――よく分からない。

だからこそ、セトという人間を一体どう表現するべきか、レミエ

ルとしても非常に判断に困るところではあるのだが、とにかく、普段は軽薄そうな性格を辺りに振りまいておきながら、いざという時には、誰よりも早く、誰よりも適切な判断をし、そして誰よりも大きな功績を挙げる時もあれば、そこが天界であっても、だらしなく大口を開けて昼寝に興じている事もある。

また、彼は天使の眷属となった後も、その住まいを変えようとはしなかった。

それもまた、彼が異常視される要因の一つだ――人間でありながら天使の眷属となったのは何も、彼が初めてではないが、それでも、普通、一度そうなれば、人間であった頃の生活を捨て、全ての人間（コミュニティ）関係を絶ち、天使として、人間の上に立とうとするのが当たり前だ。

しかし彼は、『神』に仕える存在となりながらも、それまでの人間としての生活を一切変えず、休日になると娘と妻を引き連れて、暢気にピクニックに行く事もある。

その時の彼からは、とても自分達の仲間であるという事実を、レミエルは感じ取る事が出来ない。

人間でありながら、そこまでの異常性を持つ存在を、レミエルは過去に一人しか知らない。

かつて、『星を食らう者』から世界を救った、一人のペルソナ使いの少年の事である。もっとも、レミエルも彼の存在は噂で聞いている程度で、詳しくは知らない上に、既に死んでいる以上、どうしても過去形になってしまうが。

ペルソナ使いであり、翻訳家であり、天使であり、一児の父親だ

ったりするセトは、返す返すも、やはりよく分からない男である――が、そんな彼について、ただ二つの事柄の正しい事の内の一つが――彼の、その突き抜けた実力なのだ。

彼は――セトというペルソナ使いは、とてつもなく強い。

果てしなく強い。

彼が八十稲羽で起きた謎の連続殺人事件を解決し、その後、ペルソナ使いとして、政府から、民間企業から、個人から様々な仕事を受け、確実にこなしていく内に、彼は名実共に、誰からの反論も一切寄せ付けない程に、人類最強の称号を欲しいままにしていた。

彼に対して、『強さ』で拮抗しうる存在は、人間界、天界、魔界の全てから探しても、数える程しかいないだろう。

『人類最強のペルソナ使い』。

だから、人間界でも、天界でも、魔界でも、畏敬の念を込めて、セトはそう呼ばれている。

そう考えるとやはり、そんな彼をなるべく近くに置いておきたいと考えた『神』の考えは、レミエルとしても大いに賛同できるものではあるのだが……。

そしてもう一つ。

人類最強と呼ばれるセトについて、ただ2つの事柄の正しい内の二つ目が――彼が、先程チラッと名前の出た、『とあるペルソナ使い』に心酔しているという事だ。

セトの功績を『伝説』と評するならば、別名、『死神に魅入られた青色』とも、『救世主（メサイア）』とも呼ばれる彼の偉業は、最早『神話』と讃えてもいい。

だからこそ今回、そんな『彼』に、実は『有里淳』という息子がいると知ったときは、レミエルも相当驚いたものだ。

そんな『彼』とセトは、セトがまだ中学生だった頃に出会ったらしい。セトがペルソナ使いとして覚醒したのも、丁度その頃だと、レミエルは聞いている。

もしかしたら、セトの性格の、よく分からない部分も――そんな『彼』から影響された部分が多いのかもしれない。少なくとも、この男がセトに大きな影響をもたらしたのは間違いないだろう。

レミエルは、セトのそのよく分からなさ加減について――今まで口に出して認めた事はないが――少なからず、『恐怖』を感じていた。

普段は飄々（ひょうひょう）とした態度を崩さず、いつでも人を食ったようなニヤニヤ笑いを浮かべているが、目の奥にある光には、天使である自分にさえ計り知れない何かがある。

この世の全ては、自分の力でどうにでもなる、お前らが何を考えていようと、自分には全てお見通しだ――と、そう暗に警告されているような気がした。

レミエルに言わせてみれば、彼のように普段から笑っている人間は、非常に危険だ。危険極まりない。

あの男は恐らく、自分の実力など、わざわざ証明する必要もないと考えている。そしてそういう人間は、まず間違いなく異常だ。

セトとは敵でなくて良かった。

レミエルは、普段からそう思っていた。

いや、思っているというよりは、言い聞かせていた。それはつまり、彼の敵にはなりたくない、という願いの表れでもある。彼を敵に回すのは、非常にまずい。

ともかく、セトの事について心配するのは、後でいいだろう。それよりも今は、しなければならない事がある。

◆

◆

『急ぎましょう。少し遅れています』

傍らにいるセトに対して、アマネに憑いているレミエルは急かすようにそう言った。

セトの服装は、これまでの甚平服ではなく、ネクタイまできっちりと締めた背広姿だった。同じ人間でありながらも、その着こなし

っぷりは、さながら別人のようである。

現在、レミエルの近くには、彼が作った異次元の扉が開いており、そこから直接、自分達天使が崇めてやまない『神』の下へと行く事が出来る。

今回、セトがテレビの世界で強大な悪魔であるベル・ベリト及びベル・ゼブブを退けた功績を讃え、彼に『神前の八天使』の称号を授けた事で初めて、彼と『神』が直接面会する機会が与えられたのだ。

本来ならば、元々はセトの世話役だったレミエルが案内役を勤めるところだが、現在、彼はアマネの体内に潜伏し、翔門会の動きを見張るという任務に就いている。

その為、彼に出来る事といえば、今のように、『神』の元へと通じる扉を設けることぐらいだった。

「やれやれだぜ……。少しは、ゆっくり準備させてくれよ。ただでさえ、さっきまでミクっつーじゃじゃ馬の面倒を見てて、大変だったんだ」

「そうですか。とにかく、急いでください」

いつものように、セトの軽口をバッサリ切り捨てて、レミエルは再び、彼を入口へと促す。

「はいはい」

「『はい』は一回です」

「……はい」

「とにかく、よかったですね――今回の昇格で、貴方の『目的』も、より達成しやすくなったのではないですか？」

彼の目的。

それは――。

「まぁな。けどそれは同時に、お前らの目的でもあるだろ？」

セトはニヤリと笑った。

それを見てレミエルも僅かに微笑んだ。

「そうですね」

そしてセトは、レミエルが作った異次元の扉に入る直前、彼の方に振り返り、こう言った。

「レミエル――事が上手く運べば、この封鎖が終わる頃には、世界が変わる。『先輩』が夢見た世界の実現は、もうすぐそこだ。その時に備えようじゃねえか」

その言葉を言い残し、セトは異次元の扉の中へと、完全に姿を消した。

2nd Day『神』

セト。

本名、瀬多　〇〇。

三十四歳。

男。

妻子あり。

そして――ペルソナ使いであり、また神のしもべでもある彼は、現在、どこまで続くか分からない程、とてつもなく長い階段を上っていた。

純白の大理石で作られた、美しい階段である。

だが、セトはとても、その美しさに感動する気にはなれなかった。

彼が陰鬱な表情で後ろを振り返れば、もう既に、最初に上った部分の段差は見えなくなってしまっている。

別に、数えたわけではないが――恐らく、もう八百段近く上ったのではと思われた。

「おいおい……冗談じゃねえよ……。イザナミの時の黄泉比良坂もそうだったけど、何だ？　神って連中は人を呼ぶときは、わざわざ

こんな長い道のりを歩かせたがるのか？」

おまけに、この階段の急勾配は、筆舌に尽くし難いものがあった。

この階段をまったいらな平地にすれば、案外、それほどの距離ではないのかもしれないが、『歩く』のと『上る』のとでは使う筋肉が全く違う。

それでも、流石は人類最強と言ったところか、セトはここまで疲労から出た愚痴は一言も漏らしていない。だが、上り始めてから既に、そこそこの時間が経過している。性格的には、普段からどこかせっかちなところがあるセトは、早くもイライラし始めていた。

せっかちというよりは――短気なだけともとれるが。

しかし、たとえセトでなくとも、この場面ではイライラしたくもなるだろう。彼の現在の服装は、この急な階段を上るという重労働にはとても似つかわしくないものだった。

全身を（これまた）純白の、かつブランド物のスーツで固め、ネクタイまでキッチリ締めている。普段前髪を下ろしている髪はオールバックにし、靴は草履ではなく、ジョン・ロブの一品だった。

十七歳までならいざ知らず、高校二年生の終わり、海外に留学してからはこれまでラフな格好で通してきたセトからは、およそ考え難いスタイルである。

そう。これは人間としてのセトではなく――神の使いとしての、セトの姿だった。

セトはチラッと横目で、今自分が上っている階段の外側に目を向ける。

そこには、広大な青空が広がっており、まるで山の頂上にでもいるかのように、幾つかの雲が漂っている。

この場所が地上からとてつもなく高い位置にあるのか、或いは、そもそもここが既に天界の敷地内であり、人類の土地など存在しないのか、それは定かではないが、それよりも驚くべきは、何と、この階段の脇には手すり等が一切なく、もし誤って足を踏み外そうものなら、真っ逆さまに転落してしまうということだった。

いっそのこと、ペルソナの力で飛んでいってしまおうかと思ったのも一度や二度ではないが、その点については、必ず自力で上るようにと、レミエルから念を押されていた。

「――神は、貴方の行動の全てをご覧になってます」

「――怠惰な誘惑に負け、楽な方法でこの階段を上ろうものなら、あの方は決して、貴方と顔を合わせてはくれないでしょう」

……。

そうですか。

「けど、ペルソナだって、立派な俺自身の力じゃねえかよ……。やれやれだぜ」

とかなんとか言ってる内に。

やがて（ようやく、と言うべきか）、彼の目の前に、巨大な、ここはゴジラ専用の扉なのかと思える程、巨大な石造りの扉が見えてきた。

いや、冗談抜きで、この扉の大きさときたら、セトがブリッジして見上げても、その頂上が雲に隠れて見えないぐらい大きかった（勿論、これはただの比喩であり、実際に彼がそんな間抜けな姿勢をとったわけではない）。

先程までの階段といい、どうもこの扉の向こうにおわす『神』とやらは、何でもかんでも（大きかろうが長かろうが）ビッグスケールで表現しなければ気が済まないらしい――とセトは思った。

当然、大きさに比例してその重量も相当なものである筈だが、しかしセトは扉に片手を当てると、大して力を入れた風もなく、ポン……と一回押すと、あっさり扉は開いた。

そして、彼は驚くことになる。

そこは、先程までとはうって変わり、ちゃんと地面のある草原だった。

心地よい風が吹き、優しい太陽の光に照らされた柔らかな草の香りには、見る者の心を落ち着かせる働きがある。

その中央に、一軒の家がある。

この家の他に建造物らしき物もなければ、他の空間へ続く扉らしき物もない以上、この一軒家に『神』がいるのは間違いない――のだが、セトは、すぐにその結論を出す気にはなれなかった。

何故なら、その家は全てがお菓子で出来た――所謂、『お菓子の家』だったからだ。

……。

「帰りてぇ……」

思わず、セトはそう呟いてしまった。

（何てこった……まさか、お菓子の家なんて、そんな代物が、この世に存在するとは……！　お菓子の城ほどではないが、それでもかなり現実離れした代物であるのは間違いねぇ……）

勿論、マイナスの意味で。

しかし、とはいえ、セトがここへ来たのは、そもそも『神』に会いに来たからであり、その為には、このお菓子の家のクッキー（もしかしたらビスケットかもしれないが、そんな事、今は果てしなくどうでもいい）で出来た扉を開けなければならないのも、また事実だった。

随分とふざけた場所に住んでいるようだが、それでも、この扉の向こうに、今まで全ての天使達を束ねてきた『神』がいるのかと思うと、セトは少なからず緊張してしまう。

自分の服装に乱れがないかをチェックした後、意を決してクッキー（断定）の扉を開ける。

元々のサイズから予想出来る通り、室内の面積もまた、決して広

いとは言いがたい。家具の類は殆どないが、外側と同じく、中身も全てが様々なお菓子で出来ている為、かなり賑やかな印象を受けた。

あるのは、一つの丸テーブルと、二つの椅子。そして、その内の一つに、一人の少年が座っていた。

『神』だ。

この少年こそ――全ての聖なる者達を束ねる光の長。『神』その人だ。

普通なら、こんな少年を一目で『神』だと思う筈がないが、セトは、予めレミエルから『神』の容姿がどのようなものなのかを聞いているので、すぐにそうだと確信出来たのである。

少年は、右手にティーカップを持ち、左手を行儀良く膝の上に乗せているものの、首を下げている為――つまりは顔が下を向いている為、セトからはその素顔を伺い知ることができない。

第一印象。

第一印象は――大事だ。

見た目で人を判断するな、とはなんとまあ大層なお言葉だとセトは思うが、それを全面的に肯定したくはなかった。

確かに、見た目だけでは、精々その人物の人間像を三割程度しか理解することは出来ないだろうが――三割理解したとなれば、それ

は十割理解したのと同じことだ。

そして、ここまでの道のりといい、このお菓子の家といい、正直セトが『神』に感じた第一印象はそれほど良いものではなかったが、かといって、こちらの印象まで悪くする理由にはならない。

セトは『神』の傍らまで歩くと、そのまま騎士が主君に忠誠を誓うように、片膝をつき、頭を垂れる。

重ね重ね言うが、相手は『神』だ。レミエルが以前忠告したように、いつものようなくだけた態度で接してはならない。

「神よ」

言った後、一度咳払いをして、続ける。

（上手くやらないとな）

「神よ。私の名前は瀬多　〇〇。『イザナギ』とも呼ばれています。この度は、『神前の八天使』という身に余る称号を与えていただき、ありがとうございます。同時に、今回、偉大なる貴方様のお側にお呼びいただき、今私は、言葉に言い表せない感動を覚えております」

『神』は動かない。未だに顔を下に向けたままだ。セトも顔を下げているので、それを目で見たわけではないが、気配でそれが何となく分かった。

「そして、個人的にも、貴方様にこうして会えたことを、光栄だと思っています」

とりあえず、挨拶としてはこれで十分だろう。セトは、やがて『神』が言葉を口にする、その瞬間を待った。

「……」

「……」

「……」

「……？？」

セト眉をひそめた――いくらなんでも長過ぎる。三分は待ったかもしれない。ファイナルアンサーを引っ張ってる時のみのも○たじゃあるまいし、一体何時になったら、自分達の会話は始まるのだ。

痺れを切らし、セトが顔を上げると（セトは今、身を屈めている為、そうするだけで『神』の表情を伺い知ることが出来る）、神は――。

寝ていた。

目を閉じ、口を僅かに開けて、寝ていた。

「……」

寝てんじゃねぇよ。

何で寝てんだよ。

さっきまでの時間を返せ。

利子をつけて返せ。

セトは、わざとらしく大きな咳払いをしてみる――が、それでも『神』は目を覚まさない。もう一度同じようにしてみたが、同じ事だった。

仕方ない、とセトは思った。許可もなく『神』の体に触れては、後でレミエルから説教を食らうかもしれないが、この状況ではやむなしだろう。

「……あの、すいません、『神』。起きて下さい」

肩を掴み、ユサユサと揺する。

が、それでも起きない。

自分達の首領（ドン）たる『神』は、相当寝つきのいい方らしい。

もっと強く揺すってみた。

すると、いきなり顔面にパンチを食らった。

「……っ！」

「ふあ～あ、よく寝た。ん～～～」

無事に起床した『神』は、腕を上げ、体を伸ばす。

次には、足元で顔を抑えているセトに気付いた。

「あれ……瀬多君じゃない。こんな所で何してるの？」

今日、初めて出会った筈の『神』が自分の顔と名前を知っていることにも驚いたが、しかしそれ以上に、今しがた、親切にも夢の世界から出してくれた人間に行った暴挙を何とも思っていない――或いは行った自覚さえしてないその神経に、セトはただ驚くばかりだった。

いや。

アンタが呼んだんだろーが。

上司（？）だからって図に乗んじゃねえ。

ゴシゴシと眠たそうに目を擦っている『神』は今、顔を上げている。その為、先程までは曖昧だった『神』の様相が、今ではしっかりと確認できた。

首元まで伸ばした青い髪、まだ若干の幼さが残る顔には、二つの青い目がある。左耳にピアスをし、明らかに部屋着だと思われる白い服を着ていた。

それを見ていると、セトは、わざわざ似合わない（と思っている）スーツを着ている自分が、酷く馬鹿らしく思えた。

「……あ～、そうかそうか、思い出したよ、うん。そういえば僕が瀬多君を呼んだんだよね。ごめんね。わざわざ忙しいところ、無駄

足を運ばせちゃって」

「……『神』、恐れながら、一つ訂正させて下さい。正しくは、『足を運ばせて』、です」

いや。それとも間違えてないのか？

だとしたら、あんまり過ぎるぞ……。

「ま、どっちでもいいじゃない？　そんな事は。それより、そんな畏まらなくたっていいよ。座って座って」

『神』は、空いている方の椅子に、セトを促した。それを受けて、セトは「では」と言って、言われた通りに、神の向かいにある椅子に腰を下ろす。

こうして、改まって向かい合ってみると、『神』の外見年齢が如何に低いものであるかが分かった。

セトも大概、実年齢に反した若々しい外見をしているが。もし、この二人の年齢が見た目通りだとしたら、間違いなく『神』の方が年下だろう。

妥当な判断を下すとするなら――おおよそ、高校生辺りか。

それにしても、とセトは思う。

とても何億年という月日を生きてきたとは思えないほど、若々しい外見にも驚かされたが、それよりも、あの鉄仮面という表現さえ生温い、さながら鉄そのもののような堅物（良く言えば品行方正だ

が、敢えて悪く言った）キャラであるレミエルが崇拝するものだから、てっきり、その性格もレミエルの延長線上だと思っていたのだが――話してみれば、なんとまぁ、『神』というお方は、中々くだけた性格をしている。

「先ずは、瀬多君。君がこうして、『神前の八天使』に昇格した事を、僕は心から嬉しく思うよ――いや、これでもまだ、君の功績には釣り合わないぐらいだ。正直なところ、僕は君を、メタトロンと同じように、『神の代行者』にしたいぐらいなんだ」

「……買い被り過ぎですよ」

セトは、くすぐったそうに肩を竦めた。どうやら、少し照れてるらしい。

「それに――私には、そのような称号は、些か荷が重過ぎます。賢明なる『神』ならば知っておられるかもしれませんが――私は生来、進んで表舞台には出たがらない性分なのですよ」

「おやおや、随分自信なさげだね。そんなんじゃ、君の『目的』は果たせないよ？」

「……」

『神』が自分の『目的』を知っている事に関して、セトは別段、驚いたそぶりを見せなかった。

当然だ。そもそも、彼が『神』に仕えている理由は、自分の『目的』が、天使達――ひいては、『神』が作ろうとしている『楽園』を作る上で利害が一致するものだからだ。

いや、彼のそれは、最早『目的』というよりは――『宿願』と言える。

「何か食べる？」

グイッと、『神』は丸テーブルの上に置いてある、様々な種類の菓子が入った盆を、セトに差し出す――そこにある菓子は、チョコだったりキャンディだったりマシュマロだったりと、とにかく様々だ――が、セトは「いえ、大丈夫です」と言って、やんわり断った。

彼が今相手にしているのは、これまでの金づる達とは違い、この世の殆どを思い通りに出来ると言ってもいい存在である。呑気に菓子を食いながら対応できる相手ではない。

『神』は「そっか、残念」とだけ言うと、セトに構わず、キャンディを一つ取って、包み紙を開き、中身（黄色い飴玉だった。レモン味だろうか？）をポイッと口の中に放ると、舌の上でコロコロと弄び始めた。

返す返すも、セトは、本当に、目の前にいるこの少年が自分達が言う『神』なのかと疑いたくなってしまう――幸せそうな表情で飴を舐めているその表情はとてもあどけないもので、どう見ても幼い子供のそれだ。

いや――。

案外、自分のような人間には、到底理解の及ばぬ境地にまで達した存在というのは、往々にしてこのような性格になるのかもしれない。

思えば。

かつて、彼の故郷で起きた連続殺人事件の真犯人だったり。

イザナミだったり。

そして――『先輩』だったりと。

自分が知る、理解出来ない境地に達してしまった者達は、全員、よく笑っていたものだ。

目の前にいる、この『神』のように。

「ま、お互い、そこまで暇じゃないしね――ボチボチ、話を始めようか」

唐突に、『神』はそう切り出してくる。

「話――というのは？」

対して、セトは首を傾げた。

「やだなあ――瀬多君。いくら何でも、君の昇進を祝う為だけに、僕が自分の住まいに君を呼び寄せる訳がないだろ？」

「……」

自分を呼び出した本当の理由云々の話はともかくとして――このふざけたお菓子の家が自宅だという『神』の言葉に、セトはどのよ

うなリアクションを取ればいいのか見当がつかなかった。

「本当の用件っていうのはさ――当然、今回の封鎖の事だよ」

「……」

「大体は、予定通りなんだよね。政府のおバカさん達は、こっちが言った通り、東京を完全に封鎖してくれたみたいだし――全く、今までの僕の忠告は散々無視してきた癖に、いざピンチになると、やけに潔よいんだから、本当にしょうもない連中だよ、『人間』っていうのはさ」

「それでも……貴方は、そのしょうもない人間を、救いたいのでしょう？」

その上で――『平和な楽園』を作る。

それが、『神』の願い。

つまりは、天使達の願いだ。

そして、セトの『宿願』は、その願いに、少なからず――共通点がある。

だからこそ、彼等は協力し合っているのだ。

「まぁね。やれやれ、我ながら損な性格だと思うよ。僕は心底、人間がそれほど嫌いじゃないらしい」

「立派な事だと思います。そしてきっと、楽園を作ることが出来る

でしょう。私も、そしてレミエル達も、いつか人間に理解させられる日が来ると、信じております」

理解される、ではなく。

理解させられる、だ。

「ま、だといいけどね」

『神』は肩を竦めた。

「で、話を戻すけどさ。今回の封鎖で、少し、ほんの少しだけど――想定外の事態が起きたんだよね。それに対策を練る上で、瀬多君の意見を聞きたいと思った訳さ」

「想定外、ですか」

心なしか、セトの滑舌が、若干悪くなっていた。『神』が話題に出した、『想定外の事態』。それが一体何なのか、彼にはおおよその見当が付いていたからだ。

呼ばれたのが、本来、彼よりも高い地位を持つメタトロンではなく、まだ『神前の八天使』に任命されたばかりのセトだったという点からも、それが伺い知れる。

「有里淳……のことですか……。『先輩』の――『死神』の因子を受け継ぐ、あの、『ペルソナ使いの申し子』の」

「うん。そう」

ニカッ、と『神』は屈託のない笑顔を見せる。が、目は少したりとも笑ってはいなかった。

有里淳。

その少年にセトが出合ってから、まだほんの数日しか経っていないが――それでも、セトにとって、あの少年の存在は、特別なものになっていた。

無理もない。

有里淳は、セトがかつて尊敬してやまなかった、今は亡き『先輩』の血を受け継いでいるのだから――全くもって、無理もない。

しかし、有里淳。

当の本人は、自分が如何に特別で、如何に奇異で、如何に異常な存在なのかを、全く理解していない。

世間の人間と同じく、自分を何の変哲もない、単なる一般人だと思っている。

彼の父親が、どんな人間なのかを知っているセトとしては、それは心の底から笑ってしまいたい事ではあるけれど。

本当に。

心の底から、片腹痛い。

（まぁ……そういうところは、『先輩』と似てるんだけどな……。

あの人も、自分がどれだけの力を持っているかなんて――少しも自覚しちゃいなかった）

「正直」

『神』は言う。

「『彼』に血を分けた息子がいるなんて――僕でさえ、想像だにしてなかったよ。『彼』の動向は、それとなく、そして抜かりなく、観察していたんだけどね。一体全体、どうして、これまでその『有里淳』という少年を、僕が、天使が、悪魔が、果ては瀬多君でさえも知らなかったのか、甚だ疑問だよ」

「一言で言うなら、『親心』でしょうか」

「『親心』？」

『神』はキョトンとした表情をする。だよな、とセトは思った。『神』にはそもそも『親』という存在さえいないだろうし、だからこそ、その概念さえ把握出来ないだろう。

全知全能の存在――しかしそれは、孤独の裏返しでもある。

「これはあくまで私の憶測ではありますが、岳羽先輩――有里淳の母親ですが――それから、『先輩』と共に活動していた初代特別課外活動部（S.E.E.S）のメンバーは、有里淳がこちらの世界に入り込まないよう、常に保護、悪く言えば監視していたのではないかと。愛する夫を早くに失った岳羽先輩の気持ちを考えれば、それは無理もありません」

「ふーん」

『神』は相変わらず、よく分からないという顔をしている。

「ま、理由の方はともかくとして。なるほどなー。確かに、あの子達が全力で、情報を隠そうとするならば――しかもそれが、たった一人に対して行われたのなら、いくら僕や瀬多君でも、よほどの事がない限り、気付けないよね。ま、この場合、『彼』にもしかしたら息子がいるんじゃないか、っていう発想が湧かなかった、僕達が間抜けだったという見方も出来るけど」

「死んだ時の年齢が、僅か十九歳だったという事もありますからね。私もまさか、そんな若くして、岳羽先輩との間に子を成していたとは、思いもしませんでしたよ」

「あれ？　そういう君も、確か十九歳で子供を作ってなかったっけ？」

「さて、何のことやら」

セトはあからさまにとぼけて見せる。

「ま、いいんだけどさ。にしても、今まで必死になって隠してきたのに、こんな偶然で僕達に存在がバレちゃうなんて、あの子達もついてないよね――ところで、その淳って子、もう既に、何度か悪魔と交戦してるんでしょ？　どう？　瀬多君の目からみて、彼の実力……いや、才能は」

「素晴らしいと思います」

迷いなく、そのように断言するセト。

「いえ、素晴らしいというよりは、末恐ろしい――でしょうか。彼の成長速度は、並ではありません。悪魔を知ってから僅か一日で、決して弱くわない悪魔であるウンディゴを倒すなど、正直、馬鹿げています」

第一、セトとしては、有里淳がこれまで、ただの一度もこちらの世界に足を踏み入れたことがないという事実を、未だ疑っていた。

虚実としてならまだしも――あれほどのモノが、今まで無名だったなんて、とても信じられない。ノストラダムスの大予言の方が、まだ頷けようというものだ（二十一世紀になった今は、それも無理だけど）。

分からない。

セトには分からない。

あれほどの異常性を孕んでおきながら、有里淳が、これまでの十七年間、その溢れんばかりの才能を開花させなかったという、その事実が。

もし彼がこれまでに、万を超える悪魔やシャドウの亡きがらを跨いできたと知っても、別に驚きはしないが――しかし、それどころか、ペルソナ使いにさえ覚醒していないといのは、異常が過ぎる。

「返す返すも、『どういうことだ』と言いたくなりますよ。私の娘でさえ、向こうにいられたのは、僅か十二年間だというのに。そう考えると、末恐ろしい彼の『末』が、一体どれほどのものなのか、考えたくもありませんね」

「んー、そう？　むしろ僕としては、その『末』に、かなり期待してるんだけどな」

言った途端、『神』の目に、何とも形容し難い、それでいてとても強い、怪しい光が、セトには見えたような気がした。

「……どういう事ですか？」

「それを話す前に――瀬多君、今一度、君の『宿願』が何なのかを、を確認しようか」

「何故、急にそのようなことを？」

「いーから」

「……私の『宿願』は、当然、××××××××××、××××××――ですが」

それが一体、どうしたというのだ。

「実は今、僕の頭の中にはね、その宿願を、この封鎖が終わる頃に実現できる、とある計画があるんだよ」

「それが、有里淳と関係していると？」

「うん。いや、関係しているどころじゃない――彼が主役さ。今から話す僕の計画は彼、『死神に魅入られた青色』にしか出来ない、彼なしでは始まらない、彼なしでは終わらない、彼なしでは進まない、彼なしでは止まらない。そんな物語なのさ」

相変わらず、『神』のギラギラと光る目の輝きは、少しも衰えていない。

そして、『神』は話した。自分の計画を。有里淳を主軸とした、一つの物語のプロットを、セトに余すところなく伝えた。

それに対して、セトは始めの方は驚き――やがては、『神』の計画に、非常に乗り気になっていた。『神』が話した計画の実現は、同時に、彼の『宿願』が叶うものであると分かったからだ。

「なる……ほど、それは――」

興奮の余り、セトの口調はかなりおぼつかなくなっていた。

「それは――確かに、素晴らしい考えです。正に、私にとっては僥倖、目から鱗、泣きっ面に蜂と言ったところでしょうか」

「でしょ？　まぁ、今君が言った三つ目のことわざの使い方がとんでもなく間違っている事については、一先ず置いといて、我ながら出来すぎだと思うぐらい、この計画は最高だよ。これなら、無駄な犠牲を出さずに、僕達が望む楽園を作れる」

『神』の台詞が言い過ぎだとは思えない程、確かに、その計画はよく出来ていた。

しかし、どんなことも百パーセントはありえない。全く問題がないという訳でもなかった。

「しかし、『神』。その計画を成就させるには、淳が『ベルの王位

争い』に加わる事が、最優先事項です。確かに、彼はその『資格』を有しているようですが――その『資格』を『資格』たらしめる為には、少なくとも一体。淳がベル神を倒す必要があります」

「そーなんだよねぇ。そこが、この計画最大の必須点であると同時に、最大の不安点さ。そこで、どう？　瀬多君の目から見て、淳君は、この戦いで生き残れると思うかい？」

「何とも、判断の難しいところです」

首を傾げるセト。

「もし、彼がただの人間であれたなら、強者……曲者揃いのベル神達に敵う筈もありませんが、しかし、彼は『死神』の血を受け継いでいます。それは、人間などという脆い特性を帳消しにしてしまう程の要素です。実際、彼は日に日にどころか、一分毎に強くなっていくという印象を受けます。それでも、流石に初戦からベリトやゼブブといった輩が相手なら厳しいでしょうが、それほど力のないベル神から、じっくり経験を積んでいけば、或いは……」

「あー、それなんだけどね」

セトの口上を途中で遮った『神』は、

「淳君が最初に戦うベル神の相手、もう決まっちゃってるみたい」

と言った。

「そう……なのですか？　で、相手は一体……」

「『ベル・デル』」

『神』の返答は、実に簡潔だった。

「ベル・デル……」

視線を落とし、口の中で、その名を呟くセト。どうやら、記憶の中から、その悪魔の情報を引き出そうとしているようだ。やがて彼は、ハッと顔を上げる。

「『不死の者』――ですか」

不死。

死なない者。

いや。

……死ねない者、と言うべきか。

「うん」

『神』は頷いた。

「不死だよ」

「それは――初戦の相手にしては些か、淳にはハードルが重いですね。不死とあっては、強いも弱いもありません。無策で挑めば、無惨に散るのがオチでしょう」

或いは、『死神（デス）』の力を、淳が使いこなせるようになれば、そんなベル・デルの特性など、ものともせずに済むだろうが……いくらなんでも、今の淳にそこまで求めるのは、酷な話だろう、とセトは思った。

自分でも、『女神（イザナミ）』の力を手なずけるまでに、数年の時間を要したのだ。

とはいえ、淳の『死神』の力が先天的なものであるのに対し、セトの『女神』の力は後天的なものだから、あまり参考にならないかもしれないが。

「けど、最早この未来は、変えようがないんだよ。僕でさえもね。どうやら、君がベリトやゼブブと遊んでる間に、奴（やっこ）さん、コソコソと動き回ってたみたいだし。今は、誰の手にも届かない、自作の空間に身を隠して、その時を待ってる状態だから、もう僕達にはどうしようもないさ」

「……申し訳ございません」

自分が二体のベル神と戦っていたばかりに、他のベル神の侵攻を許してしまったのを知って、セトは申し訳なさそうに頭を下げた。

「おいおい、瀬多君が謝る事じゃないだろう？　君がああしなければ、ベル・デルが来ない代わりに、ベリトとゼブブが来るところだったんだ。そっちの方が、遥かに厄介だよ。でも」

と、言って。

『神』は腰を下ろしていた椅子から立ち上がると、そのまま向か

いに座っているセトの隣に歩み寄った。

彼はそんな『神』の行動を、若干緊張した面持ちで見ている。

「それでも、瀬多君が、ベル・デルの出現に、責任を感じているというなら、そしてその責任を払いたいと思うなら――君に、一つ仕事を頼みたい」

「頼みたい」と言っておきながら、しかしそこには、拒絶することは許さないと言わんばかりの、有無を言わさぬ迫力があった（豹変したと言ってもいいそんな『神』の態度を見て、セトは何故、この男が先程までのような、ふざけた性格を演じていたのかが分かった気がした）。

「何でしょう？」

「いみじくも君が言ったように、淳君にはまだ、ベル・デルの相手は荷が重い。どうせ戦うなら、『アレ』を用意するとかして、入念な準備をしてからだ。それでも、どうしようもない場合もあるだろう。例えば……まさか、こんな事が起こるとは万が一にも思わないけど――ベル・デルが出てきた正にその場所に、淳君がいないとも限らないしね」

……何というか、何かの伏線を張ってるような言い方だった。

「瀬多君には、もしそうなった場合に、彼の『手助け』をしてあげて欲しいんだ。言ってる意味、分かるよね？」

「無論です」

セトは頷いた。元より、そのつもりだった。

それにしても、レミエルにアマネの恋のキューピット役を頼まれたり、今のように、淳の手助けを『神』に頼まれたりと、自分の人に頼まれたら断れない性格は、今もまだ健在らしい、とセトはぼんやり思った。

「ありがとう。瀬多君ならそう言ってくれると信じてたよ。僕はね、瀬多君の事を、仲間の中では、誰よりも頼りにしてるんだ。誰よりも信じてるんだ。誰よりも必要としてるんだ。きっと、僕は瀬多君なしじゃ生きていけないに違いない」

「……」

自分の雇い主からの賛辞である。本来なら、飛んで喜んでもいいのかもしれないが……何故かセトは、素直に喜べなかった。

どころか。

説明のつかない悪寒を――感じてさえいた。

「じゃ、一応、決まりみたいなものだから正式に、瀬多君にお願い――ううん、『命令』するね。じゃないと、後でフィレモンあたりが五月蝿いからさ」

直後。

『神』の表情が、一変する。

そこには、先程までの、穏やかな笑みはない。

冷たい。

どこまでも冷たい。

冷気にさらされたナイフのように、冷たい表情。

同時に、感情を感じさせない表情で、『神』は命じた。

人間としての瀬多　〇〇ではなく、天使としての、『イザナギ』に、命じた。

「『イザナギ』。『神』たる俺のしもべである『イザナギ』。お前に使命を下す――レミエルやアマネと共に、有里淳を救世主にしろ。何をしてでもだ」

2nd Day『衛国寺のバトル（1）』

――池袋、衛国寺。

池袋内にあるこの寺は、流派は真言宗豊山派であり、山号は神齢山。詳しくは神齢山悉地院衛国寺と称される。あの徳川綱吉の母、桂昌院の発願によって千六百八十一年に創建された。

開山は亮賢。

本尊は如意輪観音。

江戸三十三箇所観音霊場の第十三番札所でもある。

衛国寺に隣接し、衛国寺と一体のものとして存在した『衛持院』は、新義真言宗僧録であり、新義真言宗ではかなり格式の高い寺院だった（もっとも、これについては、当時かなりの争論を呼んだが）。

その衛持院は明治時代、衛国寺と合併。

近代以降は宮家の墓所が造られた。これは千八百七十三年、明治天皇の皇子の薨去を機に護国寺境内の東半分が皇族墓地とされた。

……というのが、以前、有里淳が中学生の頃、この衛国寺に社会科見学に来た際、当時の教師から聞いた説明である。

それを聞いて、淳は。

「なるほど」、と思った。

ただそれだけだった。

普通に感心しただけだった。

もっとも、実際にはその説明の十分の一さえ理解出来ていなかった彼だが、何となく、この寺には長い伝統があるんだろうなー、という事ぐらいは分かった。

別に、歴史の授業が嫌いという訳ではないし、実際にそういった歴史深い物に触れたりすれば、そこに感心出来るぐらいの『心』はある。

「『心』、『心』か」

当時。

その『心』の声が口に出てしまったのか――淳の隣で、同じように教師の話を聞いていた一人の少年が、そのように呟いた。

淳は昔から、およそ『友人』というものを殆ど作らないタチであり、この頃にも、校内では、友人どころか、知り合いと言える間柄の人間さえ、僅か二人しかいなかった。

一人は、幼なじみの谷川柚子。

もう一人が、この少年である。

この時、淳は若干、間違った中学デビューをしてしまい、肩口まで伸ばした髪を金髪に染め、首にはイヤリングをさげ、学生服は勿論、ボタンなどかけずに、前を全開にしていた。

これで背が高ければかなり威圧感のある不良の出来上がりなのだが、残念ながら、当時の淳の身長は、高いどころか平均以下だった。クラス内どころか、中学校一背が低いと言っても過言ではない。

だからこそ、彼は周りから嘗められた態度を取られないように、そんな奇抜なファッションセンスを披露しているのかもしれないが、どう考えても逆効果だった。

対して、淳の隣にいるこの少年は、何とも大人しめな格好をしていた。短い髪は淳のように染めてはおらず、黒色である。学生服も第一ボタンどころかホックまでキッチリとかけ、当然、アクセサリーの類などは、どこにも身につけていない。

普通だ。

余りにも、普通過ぎる格好だ。

普通過ぎて――それが逆に、目立ってしまう程に。

まるで、少しでも目立つことを、極度に恐れているかのようだった。

にもかかわらず、およそ正反対のスタイルを貫いている淳と、この少年とは、不思議と気が合っていた。

いつから親しくなったのかは、どちらもよく覚えていない。いつ

の間にか、自然に、不自然なほど自然に、彼等は親しくなっていた。

「あ？　何だ、今の俺の心の声、口に出ちゃってたのか？」

少年の顔を見上げながら、淳は言う。

「いーや」

対して、少年は首を振った。

「ただ、何となく、ジュンがそんなことを考えてるような気がしてさ」

「お前はエスパーか」

「いーや……人間だよ」

そして、何が可笑しいのか、少年はクスクスと笑い始める。

「ところで、ジュン。唐突な質問で悪いけど――人間にとって、『心』は必要だと思うかい？」

「はぁ？」

淳はつかの間、『何言ってんだコイツは』という目線を少年に向けていたが、やがて、

「そりゃ、まぁ、必要だろ、当然」

と言った。しかし、少年は再び、「いーや」と言いながら、首を

振る。

「そんな事はない――『心』なんて、そんなもの、僕達には必要ないさ」

「いや、何言っちゃってんだよお前。馬っ鹿じゃねぇの？　ていうか、馬鹿じゃねぇの？」

うっかり、母親譲りの口癖を出してしまった淳。

「『心』がなきゃ、俺達は生きられないだろうが。もしそうなったとしたら、それはもう、殆ど死んでるようなもんだろ？　何も考えず、何も感じず、何も自覚せず、何も意識しない――そんな状態、俺だったら耐えられないね」

「いーや」

またも。

先程までと同じように、首を振って、淳の言葉を否定する少年。

「それは間違いだよ、ジュン。むしろ、僕は声を大にして言いたい。『心』なんて、あるよりはない方が百倍マシだと」

「……何で？」

「考えてもご覧よ。『心』と一口に言っても、そこにある『心』は1つじゃない。細かく分ければ『愛』、『友情』、『信頼』、『勇気』、その他諸々――こういった感情は、大体の人達が口を揃えて『必要だ』と言うかもしれない。けど、僕は昔から疑問に思ってる

んだ。どうして、こういった、人間に必要なものばかり、肝心なものばかりが、手に触れられない、見ることも出来ない物なんだ、ってね」

淳は大きくため息をつくと、あからさまに欠伸をして見せた。

「まーたカンちゃんが訳の分からない事を言い始めた……。付き合ってられねぇよ、全く」

「まぁ、そう言わずに、聞いてよ。そこで僕は逆に考えてみた。目に見えない以上、『心』なんて、実はそれほど必要ないんじゃないかって」

「いや、いやいやいや」

淳は、少年の腰の辺りをペチペチと叩きながら、小刻みに首を振る。

「もし、仮にそんな奴がいたとしたら、ソイツはもう、人間じゃねぇだろ。『心』がない人間なんて……」

「いーや」

今度は。

淳の台詞を遮るように、少年は首を振った。

「じゃあ、ジュン。もし『心』がない人間がいたとしたら、それは一体、どんな人間……いや、どんなモノなんだろうね。笑ったりはしないだろう。『心』がないんだから。泣いたりもしないんだろう。

『心』がないんだから。喜んだりもしないだろう。『心』がないんだから。悲しんだりもしないだろう。『心』がないんだから。そう、ジュンが言うように、こんな人間は最早、死んだも同然だ。けどね、ジュン。何に対しても、何も感じない人間。これって、ある意味――『最強』だとは、言えないかい？

――僕は、そう思う。『心』がない人間。それこそが、人間の完成形（ハイエンド）だと」

「……」

いよいよ、少年の言うことが理解出来なくなったのか、少年の言葉に対し、沈黙で答える淳。

「『心』は、人間にとって、どう考えても欠点でしかない。一々何かに傷ついて、一々何かに影響されて、『心』（けってん）があるという事。それは則ち、変わってしまうかもしれないという事だ。これを欠点（こころ）と言わずして、何て言うんだい？　だったら僕は――そんな『心』（けってん）はいらない」

結局。

淳にとって数少ない友人の一人だったその少年は、彼が中学を卒業すると同時に、家庭の事情で引っ越してしまい、それ以来、何の連絡も取り合っていないけれど（今考えれば、そんな事では『友人』とは言えないかもしれない）、その時の会話は今でも、淳の心の中に、強く残っている。

――『心（けってん）』なんて、ない方がいい。

――そんなモノは、簡単に傷ついてしまう。

――ある意味、地球上で最も栄えている人間にとっての、唯一の弱点だ。

――ならば。

――『心（けってん）』がない人間こそ、人間の完成形（ハイエント）ではないか。

――ジュン。

――君も、そう思うだろ？

だから。

淳は、その時の会話を、その少年の名前を、一度も忘れたことはない。

かつての友人。

神取善久（かんどりよしひさ）の名前を――忘れたことは、ない。

◆

◆

「疲れた……もう……限界だよ」

そんな、色んな意味で淳にとって思い出深い地、衛国寺で、そう疲れきったように呟いたのは、淳の数少ない友人の一人である、谷川柚子である。

あれから、赤坂トンネル以外にも、封鎖の出口がないか探していた淳達だが、一向に見つからない為、無駄に疲労を重ねるだけとなっていた。

「クソ……本当にどこにも出口がないな……」

淳のもう一人の友人、アツロウは、手の甲で額の汗を拭っている。そんなに暑いのならそのニット帽を脱げばいいじゃないか、と淳は思ったが、直前で飲み込んだ。

「やっぱり、どうにかして、赤坂トンネルに忍び込むしかないのか……」

「……マジで？」

アツロウの言葉を聞くと、淳はあからさまに嫌そうな顔をした。今、彼が考えているのは、自分を組み敷いた、例の女性のことである。

あのトンネル内での、衝撃的な出会いのせいか、淳はあの女性に対して、かなりの恐怖心を抱いていた。

「……あの人達がいる間は無理だよ。私たちが悪魔使い（ターゲット）だって、ばれちゃってるし……」

「そうそうっ！　その通りっ！」

ユズの台詞に、ブンブンと勢いよく、首を縦に振る淳。

「それにしても……疲れたぜ。……衛国寺、か……。神様のとこなら、少しは悪魔も寄り付かないかな？　ちょっと休んでいこうぜ？」

「は～い……さ、賛成……」

「りょ～か～い……」

ユズは疲労で、淳は暑さで（彼は極度の暑がりなのだ）、既に疲れきっている為、アツロウの提案に対し、異存はなかった。

――が。

いざ、衛国寺に続く階段を上ると、そこには大勢の悪魔が跋扈（ばっこ）していた。

「……」

「……」

「……」

「アツロウ……」

むんず、とアツロウの頭をニット帽の上から掴む淳。

「な、何でしょう？」

「さっき、お前がここの階段を上る前に言った台詞を、もう一度リピートしてみろ」

「か、『神様のとこなら、少しは悪魔も寄り付かない』……だったかな。いや、でも、仕方ないじゃん！　普通、こんなことになってるとは思わないって！」

こんなこと。

本来、神を奉るべき場所で、悪魔がうろついているという、この状況。

「つーか……なんっ……だよ、これ……。はは……ついてねー。恨むぜ、カミサマっ……！」

「き……気付かれない内に、逃げられないかな……？」

が、時既に遅し。

悪魔の内の一体――リリムが、淳達の存在に気付いてしまった。

「あ、また人間が来た……。アラ、例の装置を持ってるわ。ちょうどいいじゃない？」

「例の装置って……」

淳は無意識の内に、ＣＯＭＰを握っていた。

「コイツら、ＣＯＭＰを狙ってるのか……？」

頭に浮かぶのは、数時間前、赤坂トンネルで戦った、ＣＯＭＰを扱うガギソン達だ。

「チクショウ……来るぞ……！」

アツロウがそう言った頃には、いつの間にか、淳達の周りを悪魔が取り囲んでいた。そしてジリジリと、その距離を縮めてくる。

「はは……逃がしてくれる気もないみたいだね……」

「さぁ、人間……、その機械をよこしなさいな。我らが主、『ベル・デル』様のために！」

『ベル・デル』。

赤坂トンネルの時の、ガギソン達の口からも出てきた、（恐らくは）この悪魔達の統率者の名前。

その言葉を信じるなら、その『ベル・デル』とやらを喚び出すためには、自分達のＣＯＭＰが必要らしい。

「ふっ……ふざけんなっ！　悪魔の親玉なんて、喚ばせてたまるかよ……！」

と、アツロウが言った、その時だった。

淳達の前方にある衛国寺の陰から、一人の男が現れた。

「……よお、悪魔ども。オマエらの命、貰いにきてやったぜ？」

黒い繋ぎの服に、逆立った髪、狂暴な野獣を思わせる、獰猛な目つきをした男――不良グループを束ねる『ダイモンズ』のリーダー、二階堂征志（にかいどうただし）である。

そして、もう一人。

カイドーの後ろから、別の男性が現れた――こちらも、淳が知っている顔である。髪をオールバックにし、こんな状況だというのに、灰色のスーツをキッチリと着こなしている。首都高で出会った、ホンダという男だ。

二人共、余命残数には『5』と表示されていた。

「……おや、どうやら先客がいるようだ。どうする、カイドー君」

ホンダに言われ、カイドーも淳達の存在に気付いたようだ。

「あ、オマエら……？」

「かっ、カイドーと……、ホンダさん……！？　な、何で二人が一緒に！？」

意外な組み合わせの二人組が現れたことで、アツロウは酷く驚い

ている。

そんな中。

（意外な組み合わせ、か）

そんな場合ではないと知りながらも、淳は、かつての友人の姿を、思い出していた。

（アイツ、今頃何してんだろう？）

アツロウに向けて、カイドーは口の端を吊り上げる。

「へっ……利害の一致ってヤツだ。んな事より、面白そうな連中と遊んでんじゃねぇか」

「危ないぞ！そいつらは悪魔なんだ！　早く逃げろっ！」

そんなアツロウの警告を聞いても、カイドーとホンダはどこ吹く風といった様子である。

「……危ない？　はは……面白い冗談だな、オイ」

「その悪魔は改造ＣＯＭＰを狙ってるんだよっ……！　逃げてくれっ！」

「ほぉ……」

それどころか、カイドーは一歩、また一歩と、淳達を取り囲む悪魔達に近付いて来た。

「……上等だ。人様のＣＯＭＰを狙うとは、いい度胸してんじゃねぇか。丁度いい……俺には『マッカ』が必要なんでな……。返り討ちにしてやんぜ！」

「マッカって……」

『マッカ』。

悪魔オークション――通称、『デビオク』で、悪魔を落札する際に必要となる、魔界の通貨のことである。

「……アイツら、ここの悪魔とやり合うつもりらしいぜ？　ジュン、どうする？」

「願ったり叶ったりだろ。こんな数の悪魔と戦うんだ。味方は多い方がいい」

もっとも。

彼等が、本当に自分達の味方なのかどうか、淳にはまだ分からなかったが。

「よし……！悪魔が倒せるなら、協力して損はない……。イッチョウやるか！」

ＣＯＭＰから、仲魔であるヘアリージャックを召喚するアツロウ。

淳も同じように仲魔（サラスヴァティ）を召喚した時には（結局、赤坂トンネルで受けたダメージはそれほどでもなかったらしく、ＣＯＭＰに異常はな

かった）、敵の内の一体であるジャックフロスト――二頭身で青い角帽子を被り、まるで人形のような外見をしたかわいらしい悪魔だ――は、淳に向かって、いきなり、『氷の乱舞』を放ってきた。

「――って、おいおいおいっ！」

咄嗟に横に転がり、淳はそれを危ういところでかわす。

（キュートな外見とは裏腹に、とんでもねぇ魔法を使うぞ、コイツ！）

オマケに、淳には、ジャックフロストが魔法を撃つまでの動作が、殆ど確認出来なかった。その理由は、考えずとも分かる。

この悪魔の体は、とても小さい。流石にピクシーまでとは言わないが、それでも、本来それほど背が高くない淳から見ても、その体は小さいのだ。

つまりどういう事か。それは、攻撃を行うまでの予備動作が、その分小さい――確認しづらい、ということだ。

こちらも『氷の乱舞』で迎え撃つべきか、と一瞬、淳は考えたが、すぐにかぶりを振った。

こちらは今までの経験から判断するに、悪魔は自分の得意魔法と同じ属性を持つ魔法に対して、まず間違いなく耐性を持っている。

人間である自分には氷結魔法だろうと何だろうとしっかり効いてしまうが、相手のジャックフロストに関してはその限りではないだろう。

「だったら！」

淳はチラリとアツロウに目配せした。

淳の意図を理解した彼は、頷くと同時に、ジャックフロストの横側へと走り出す。

淳が右手からジオを放つ。

ジャックフロストはコミカルな動きで（どんな動きだよ）それをかわすが、そこへ狙い済ましたかのように、アツロウの『アギ』が襲い掛かった。

体全体を炎で包まれたジャックフロストは、火に当てられた氷のように、あっという間に溶けていく。

「よしっ！　やっぱコイツ、火炎属性が弱点みたいだな！」

と、アツロウ。

「そりゃ、あんな分かりやすい外見をしてればな……」

まんま雪だるまだし。

「ぐ、うぅう――べ、ベル・デル様……。八頭身には勝てなかったホ……。ごめんホ……」

「……」

謝るポイントは、そこじゃないと思う。

しかし、背の低さに悩んでいるという点では、淳も一緒なので、その言葉を笑い飛ばすことは出来なかった。

（何だろう、この虚しさは……）

しかし、哀愁に浸っている暇はなかった。周りのあちこちから、次々と別の悪魔が現れ始めているからだ。中には、ガギソンやゴズキといった、今までに戦ったことのある悪魔もいる。

「うそ!?　また新しいのが出てきた!?」

「チッ……メンドくせぇな……。オイ、有里」

時間と共にその数を増やす悪魔を見たカイドーは、つまらなそうに舌打ちすると、淳に声をかける。

「うん？」

「今からちょっとばかし暴れるが――頼むからお前、足手まといにはなんなよ？」

それを聞いた淳は、数回、瞬きした後、「ははははっ」と笑った。

「こっちの台詞だ――って、普通なら言うとこだろうけど、そうだな、まぁ、精々頑張らせてもらうぜ」

「へっ、謙虚な野郎だ」

胸の前でコキコキと拳を鳴らしながら、全く恐れることなく、敵悪魔達へと近付いていくカイドーに、トントン、と爪先で地面をうちながら、戦いのリズムを整える淳。

「援護は任せとけ」

「あぁ？　何だ、ビビってんのかよ？」

「んな訳ねーだろ、アンタに華を持たせてやるって言ってんだ。それに――」

実際、淳には興味があった。

「まぁ、この際だし、とくと拝見させて貰うぜ――ダイモンズのリーダー、二階堂征志の実力が、どれ程のものなのかを、よ」

そして――。

淳とカイドーは、ほぼ同時に、悪魔の群れへと、飛び込んで行った。

2nd Day『衛国寺のバトル（1）－2』

有里淳が何時から格闘技を習い始めたのか、それは彼自身でさえも、よく覚えていない。

物心がついた時には既に、桐条美鶴や真田昭彦らによる指導を受けていた。

無手――つまりは、武器を使わない、素手での戦い方は真田昭彦から教わり、武器を使った戦い方は桐条美鶴から教わる。そんな毎日。

中学に上がる頃にもなると、美鶴の『十三歳になった以上、そろそろ将来のことを考えなければならない』という（嫌過ぎる）指摘により、そういった稽古の時間は減り、逆に山岸風花の家庭教師による勉学の時間が増えるようになったが、この頃になると、淳は既に格闘技の基礎をしっかりと身につけており、自分の得意な戦い方も分かっていた。

彼は、取り立てて背が高いという訳ではない。

むしろ、下手をすれば一般的な女子よりも小柄なくらいだ。これは彼の数あるコンプレックスの一つである。

実は、高校に入学してからこれまでの二年間で、淳の身長はなんと二十センチも伸びたのだが、そうなった今でも、先程言ったような体格であることを考えると、淳が如何に小柄だったのかが分かるだろう。

そのせいで――小学生の頃は、イジメられた事もあった。

それはさておき。

そんな彼が得意とする格闘スタイルは、主に足技である。

しかし、空手家のように、どっしりと構えて渾身の一蹴りを繰り出すのとは違い、淳はとにかく、やたらめったら動き回る。腕力も並ではないが、彼は脚力も異常に発達しているのだ。

いや、腕力より脚力の方が強いというのは、二足歩行を主とする人類にとっては明々白々たる事実だが、それを差し引いても、彼の脚力はずば抜けているのである。

どれぐらい凄いかと言うと、その小柄な体格で、中学二年の時には既に、バスケでダンクシュートを決めていたぐらいだ。

となると、厳密には脚力ではなく跳躍力と言うのが正確かもしれないが、そんなこと、いちいち言い分ける必要もないだろう。

彼が得意な体力テストの種目が、五十メートル走、反復横飛び、立ち幅飛びだと説明すれば、更に分かりやすい。

その俊敏性を考慮すれば、彼が不良グループ『ダイモンズ』の連中から、『猫』と恐れられている（？）のも頷けようというものだ。

対して。

都合よく――というか、あからさまに話を繋げたところで、もう

一人。そのダイモンズの現リーダー、二階堂征志の戦闘スタイルについて、説明したい。

カイドーの戦い方。

それを淳は、この封鎖された東京内にある衛国寺で、初めて知った。

その戦い方は、自分とは全く違うものだった。淳が喧嘩の際、とにかく跳(と)んでは跳(は)ねて相手を翻弄するのに対し、カイドーは正に空手家の如く、その場でどっしりと構えて、相手を真っ向から迎え撃つ。

手技か足技かと聞かれたら、どちらかというと、手技の方が多い。

武力をもって、暴力を制す。

相手が悪魔であろうと関係ない。

フェイントも何もなく、ただただ力任せに、『絶妙打』や『怒りの一撃』で、相手を殴り倒す。

馬鹿正直過ぎる戦い方とも言えたが――しかしなるほど、と淳は得心がいった。

不良グループを纏めるリーダーというのは、自分のように、素で曲芸のような真似をしながら動き回って戦うよりも、カイドーのように、真っ向から殴り倒す、制圧するという戦い方の方が、力に憧れる不良達の心を掴みやすいのだろう。

勿論、ＣＯＭＰによるハーモナイザー機能――人間の身体能力を、悪魔と戦えるように底上げする機能――の力もあるのだろうが、それがなくとも、カイドーなら十分に悪魔と渡り合えるのでは、と淳は思った。

カイドーに肉弾戦を挑もうとする悪魔は彼に任せ、その少し離れた場所から、魔法で不意打ちしようというＫＹ（悪魔に言っても分からないだろうな、コレ）な輩には、淳の『氷の乱舞』や、サラスヴァティの『嵐の乱舞』をお見舞いする。

勿論、カイドーも改造ＣＯＭＰを持ってして、自分の仲魔を召喚していた。

先程、赤坂トンネルで見たゴズキに、土偶のような顔、青い体の周りに赤い煙を漂わせている、ランプの精を思わせる、幻魔『トラロック』の二体だ。

しかし淳が見る限り、カイドーは相当、血の気の多い性格であり、それ故に、自分から率先して悪魔に向かって行ってるため、仲魔達よりはむしろ、彼の方が目立っていた。

いや、これまでの淳の戦いを省みれば、彼も人の事は言えないだろうけど。

「行くぜ、オラ！　仲魔ども、しっかり働けっ！」

そんなカイドーは既に、悪魔使いとして相当な実力をつけているように、淳には思えた。少なくとも、今朝、東京タワー下で戦った外道悪魔使い達の、誰よりも強い。

体だけではなく――心も強い。

どれだけ場数を踏んだ不良でも、人外の存在である悪魔と対面すれば、足がすくんで、いつも通りに戦う事など、とてもではないが出来ないだろう。

ＣＯＭＰを使い始めた当初の、アツロウやユズの慌て振りを思い出せば、それは明らかだ。

またも、自分のことは棚に上げて、そんなことを考える淳。

――と、その時。

淳の視界に、拳を振るうカイドーの少し離れた場所から、ひょうたんから無数の蛇がはい出ているかのような外見をした悪魔（トウビョウ）が、カイドーに向けて、その無数の蛇の頭を、今にも襲い掛からんともたげている光景が映った。

位置的には――丁度、淳とトウビョウが、カイドーを直線上で挟んでいる状態である。

そして、カイドーはと言うと、他の悪魔に気をとられていて、そんなトウビョウの動きに、全く気付いていない！

「――ったく！」

やれやれだぜ、とぼやきながら、淳は、撃った魔法が軌道上でカイドーに当たらないように、サイドステップで横に移動する。

そして自分とトウビョウとの間に何の障害物もないことを確認す

ると、トウビョウの蛇達が、一斉に頭を突き出したのを見て、そのまま投げるように、『ジオ』を放った。右手から閃光と共に、雷撃が迸る。

狙うは、ひょうたんのような体部分ではなく、蛇達が首を伸ばした、トウビョウとカイドーの間の空間だ。

あのひょうたんを破壊すれば、或いはこの悪魔は即死するのかもしれないが、そんな保証はどこにもない。最悪、あれはさながらヤドカリのように、ただの入れ物として扱っているだけかもしれない。

それを破壊しただけでは、肝心の『トウビョウの攻撃からカイドーを守る』という目的が果たせないだろう。ならば、その攻撃部分だけを狙うのが一等だ。

しかし。

淳は思い違いをしていた。

トウビョウが狙っていたのは、カイドーではなかった。一斉に突き出されたその頭は、淳に目掛けて飛んできたのだ。

「……っ！」

しまった！　と淳が思った時にはもう遅い。蛇達は驚嘆すべき長さで、驚愕すべき速さでその首を伸ばすと、瞬く間に、淳の体に巻き付いてきた。

当然である。

カイドーを守る為の攻撃では――自分に向かって来る攻撃を、防げる筈がない！

もしも淳が、トウビョウが自分に向けて攻撃を仕掛けてこようとしているのを悟ることが出来たなら、彼は、トウビョウの攻撃に曝されることはなかっただろう。

それは、トウビョウの外見にも原因があったのかもしれない。

ある程度、人に近しい外見をした悪魔なら、目線や首の動きだけで、淳はその危険を察知出来た筈だ――しかし！　トウビョウの外見といえば、宙に浮いたひょうたんから、無数の蛇が頭を覗かせているという、異常な外見（もの）である。

その内の一匹や二匹がこちらを向いたところで、実はカイドーではなく自分を狙っているなど、誰が予想するだろうか？

ヌメヌメした感触が体中を駆け巡り、淳は生理的不快感に苛まれる。

「う、お、ぉ――――！？」

勿論、すぐに引きはがそうとするが、彼が一匹引きはがそうとする度に、トウビョウは二匹の蛇を、淳へ差し向けてくる。数秒後には、彼の姿が蛇の波に飲まれて、殆ど見えなくなっていた。

その頃には、彼は手掴みで蛇達を引きはがすことを諦めていた。代わりに、別の方法を思いついていた。

しかし果たして、こんな方法が上手くいくだろうか？　何分、初

めての試みだし――仮に成功したとしてもまず、無事に済むとは思えない（ていうかこの状況、赤坂トンネルの時と殆ど一緒だ）。

だが――やるしかない！

蛇の何体かが、淳の首や腕に噛み付いた。しかし淳はそれに構わず、目を閉じ、意識を集中させる。

大事なのは――イメージすることだ。

淳は思った。

これまでの戦いを思い出せ。

魔法を手から放つ時の、あの感覚。

そう、淳は普段から、魔法を右手から放っている――このやり方が一番、感覚的に魔法を使いやすいからだ。

それを。

いつもは手から発動させている魔法を――全身から、一気に放つイメージ。

直後、彼の体全体を、『ジオ』による電撃が包み込んだ。

これは言わば、一度放った電撃を、自分の体で受け止めているようなものである。悪魔のように、魔法に対する耐性も何もない淳にとっては当然、それなりに痛い。

「が、ががががが！！」

口から、奇妙な音を発する淳。

まるで、壊れかけのロボットのような。

声帯まで電撃に侵されてしまい、まともに叫ぶことさえ出来ないのだ。

しかし、そんな所にまで電流が及ぶということは、当然、彼の体に巻き付いている無数の蛇達も、しっかりその被害を浴びているという事である。

何匹かの蛇が、ボトボトと、力尽きて落ちた。

それでも、しつこい者は、未だに彼の体に巻き付き――或いは噛み付き、離れようとしない。

それらを含めた、全ての蛇が、自分の体から離れるまで、淳は激痛に堪えつつも、電撃を我が身へと浴びせ続ける。

「ががががががががががががががっ！！」

淳は痛みで叫び声を上げようとするが――やはり失敗する。

やがて、とうとう最後の一匹が力尽きて、淳の体から、力無く地面へと落ちた。

何とか、トウビョウの束縛からは逃れたものの、やはり予想通り、彼の体は無事では済まなかった。

体中のあちこちが火傷で膨れ上がり、体内の水分が蒸発して、それが湯気のように立ち昇っている。

「テメエっ……！」

しかし、その痛みも、今の淳には気にならなかった――今はただ、その怒りに満ちた眼差しを、例のトウビョウへと向けている。

その余りの迫力に。

心なしか――トウビョウの体が、僅かに震えたように見えた。

人間である筈の淳に対し、悪魔にとっては、食料以外の何者でもない筈の、人間（ジュン）に対し、恐れを抱いていたように見えた。

「少しくらい、我の分身を倒したくらいで――いい気になるなよ、人間」

そんな恐怖心を無理矢理打ち消そうと、トウビョウは言う。

「……」

いや。

「喋れたのかよ……」

まぁ、悪魔が喋ること自体は、今更どうでもいいとしても、ひょうたんから伸びている蛇の数が多過ぎて、どの蛇が今の台詞を言ったのか、淳には分からなかった。

再び、トウビョウは何匹かの蛇を、一気に淳へと伸ばしてくる。

しかし、今度は彼にも準備が出来ていた。

伸びてきた蛇の頭が自分の体に触れる寸前に、彼はトウビョウとの距離を、あっという間にゼロにしていた。

前述したように、淳の戦闘スキルにおいて最も特筆すべきは、その小柄な体格を生かした俊敏性にあり、更にその俊敏性を生み出している、爆発的な脚力にある。

見れば、彼が履いている靴から、一筋の、薄い煙が漂っていた。彼が自分に発した『ジオ』によって、靴も一緒に焼けたから――ではない。

先程の、瞬間移動さながらの、重力という法則を無視した高速移動によって、衛国寺の石の床と、彼の靴の裏面が激しい摩擦を起こした結果である。

信じられない。桁外れという言葉も生易しい運動能力だった。

これは、ハーモナイザー云々の話ではなく、彼がＣＯＭＰにセットした先制発動スキル――悪魔との戦闘に突入した際、ＣＯＭＰが自動的に発動させるスキル――『Ｓ疾風の秘宝』の効果によるところが大きい。

このスキルには、術者の神経を研ぎ澄ませて、反応速度を上げる力がある。ペルソナ使いで言うところの、『スクカジャ』のようなものだ。

元々、高い身体能力を備えていた淳は、短距離ならば、音速に近い速さでの、超人的な移動が可能になっていた。

「……っ！！」

本来、表情など分かる筈もないトウビョウから、しかしハッキリとした動揺が表れていることを、淳は悟った。

そして、その動揺は——戦いの最中の動揺は、付け入る隙となる。

それを見逃す、有里淳ではない。

トウビョウのひょうたん（こう言うと駄洒落みたいだ）部分に手を当て、『氷の乱舞』を放つ。

彼は普段から、この魔法を使う際はこうして、至近距離から発動することにしていた。そうすれば、命中率が安定しないというこの魔法の欠点を、一切合財関係なくする事が出来るからだ。

「ギャアアアアアアアアアッ！！」

耳をつんざく叫び声を上げるトウビョウの体が、次々と氷の弾丸にその身を貫かれ、蝕まれていく。

この時の淳はそれを知らなかったが、トウビョウは氷結属性が弱点なのだ。

或いは、彼は本能的に、トウビョウの弱点を見抜いていたのかもしれない——もしそうだとしたら、そんな事は、悪魔使いになった

ばかりの淳には、到底出来なかった筈だ。

そう考えると、これより少し前の時間帯に、『有里淳は日に日にどころか、一分毎に強くなっている』という、セトの言葉は、ある意味的を射ているのかもしれない。

「ク……ククッ……！」

「……？」

しかし、自分の命の灯が消えようとしているにも関わらず、トウビョウは、笑っていた（外見が蛇だから、厳密に言うと、笑い声が聞こえただけなのだけれど）。

心底、愉快そうに――笑っていた。

「もうすぐ……もうすぐ蘇る……。『不死』の力を持つ、あの方が……オマエ達など、あの方の前に死に絶えるのだ！」

「『あの方』？」

それは、やはり。

赤坂トンネルで戦ったガギソン達が言っていた――『ベル・デル』という悪魔の事だろうか？

しかし、トウビョウが次に取った行動によって、そんなジュンの疑問は一気に、何処かへと吹き飛んでしまった。

手負いの獣は恐ろしいというが、それならば、手負いの悪魔もま

た、非常に恐ろしい。

見れば、トウビョウの蛇の1体が、淳のＣＯＭＰを巻き取り、次には、それを空高く放り投げていた。

距離にして、およそ、十メートル近くといったところか。これは、三階建ての学校とほぼ同じ高さである。

「なっ！？」

先程の赤坂トンネルと違い、この状況で、このままＣＯＭＰが地面に落下したら、今度こそ、間違いなく使い物にならなくなってしまうと確信した淳は、すぐに落下地点を予想し、その場所へと駆け出す（それにしても、赤坂トンネルの時といい、自分が悪魔と戦ったら、ＣＯＭＰが放り投げられる決まりでも出来たのだろうか？）。

どうせ、トウビョウが最後の悪あがきで、あてずっぽうに打ち上げただけだ。どうという事はない――と、淳は思っていたが、すぐに、そんな自分の考えが、如何に甘いものだったのかを悟った。

トウビョウは、あてずっぽうにＣＯＭＰを打ち上げた訳ではなかった。

淳のＣＯＭＰが落下した先には――否、落下する途中で、衛国寺の屋根の上にいた何者かが、淳のＣＯＭＰを、空中でキャッチしていた。

そしてその何者かは、再び、衛国寺の屋根へと着地する。

それが悪魔であることを、淳は本能的に確信していたが、それに

しては、この悪魔は非常に、人間に近しい外見をしていた。

片手に身の丈程もある長い槍を持ち、青銅の防具で身を固めたその姿は、中国の昔話にでも出てきそうな衛兵によく似ている。

「俺の名は、妖鬼モノムフ。偉大なる不死の王、『ベル・デル』様の為に、このＣＯＭＰは俺が頂く」

鼻につくニヤニヤ笑いを浮かべながら、その悪魔――モノムフは言った。

「では、さらばだ」

次には、踵を返し、衛国寺の屋根の向こう側へと消えていくモノムフ。

「待ちやが――グッ！？」

淳は、すぐに追い掛けようとするものの、先程の戦闘のダメージのせいで、体が上手く言う事を聞かない。

「――ッチ、だから、足手まといになんなっつったろうが」

そんな淳の後ろから、他の悪魔を殲滅し終えたカイドーと、アツロウやユズ、ホンダなどの面々が駆け寄って来る。

「ジュンっ、大丈夫！？」

所々が火傷に侵された淳の体を見たユズが、真っ先に彼の体を支えて来る。

「お前らは、有里を見てろ」

モノムフが消えて行った衛国寺の屋根の上に視線を向けながら、カイドーが言う。

「俺がアイツを追い掛ける」

「お、おい」

ヨロヨロと立ち上がりながら、淳がカイドーに「待った」をかけた。

「奪われたのは俺のＣＯＭＰだ。自分（テメエ）のケツくらい、自分（テメエ）で――」

「拭ける訳ねぇだろうが。そんな体でヨ。黙って寝てろ。それに、アイツはもう、俺の獲物だ。だから、俺1人でヤる。俺がアイツと戦ってる内は、絶対に手を出すな」

淳が、その問いに対して、何か反論を唱えるよりも、遥かに速く――カイドーは、自分の仲魔のトラロックの肩に乗って、衛国寺の屋根の上へと、その姿を消した。

「ホンダさんは……行かなくてもいいんスか？」

アツロウがそう尋ねると、既にＣＯＭＰを懐へと閉まっていたホンダは、

「カイドー君が一人でやると言った以上、私がそこへ介入する理由はない」

と、迷いなくそう言った。二人が一体、何時からコンビを組むようになったのかは知らないが、ホンダとカイドーの間には、もうある程度の信頼関係が築かれているらしい、と淳は思った。

そんな淳はというと、現在は黙ってユズとサラスバティによる介抱を受けている。

「それに」

ホンダは言った。

「彼について心配する必要もまた、同じように、全くもって必要ない。皆無どころか、絶無だ。何故なら彼は私よりも、君達よりも、そして誰よりも強いのだからな」

2nd Day『衛国寺のバトル（1）－2』（後書き）

●BOSS DATA

・モムノフ

＞種族：妖鬼
種族特有スキル：凶化
別称：モノノフ

2nd Day『衛国寺のバトル（1）―3』

二階堂征志（にかいどうただし）。

彼は今でこそ、渋谷の不良チーム、『ダイモンズ』のリーダーという椅子に収まっているが、しかしながら当然、彼にも子供時代というものは存在したわけで、その頃の彼はまだ、友達と校庭で遊んだり、流行りの携帯ゲーム機に熱中する、ありふれた子供の内の一人に過ぎなかった。

当時の彼の特徴を強いて挙げるとするならば精々、他の子供達より、少しだけ体が大きくて、少しだけ体育が得意だという、それぐらいの事しかない。

ならば、彼が高校に入学した辺りから、急に素行が悪くなり出したのには、何か訳があるのだろう――という意見もあるかもしれないが、その理由も別に大したことはなく、単純に彼が『普通』でいることに飽きて、髪を染めたり、喧嘩ばかりしている不良達を、「カッコイイ」と思ったからそうなった――というだけのことである。

が、しかし。

十九歳の頃、突然、そんな彼に転機が訪れる。

自分が尊敬する、当時の不良チーム『ダイモンズ』のリーダーだった実の兄が、何者かに、全身の血を抜かれて殺害されるという事件が起きたのだ。

具体的には、入学を志望していた大学に行き、そこに合格したことを確認して（この頃の彼は、勉強もそこそこ出来たのだ）、少しだけ機嫌を良くしながら家の玄関の扉を開けたその時に、まるでミイラのように干からびた兄の死体を見つけたのである。

カイドーは家に帰る道中、正にその兄から『大学に入学出来たことを祝して、パーッとお祝いでもしよう』という提案を受けたのだが、いざ帰ってみると、そこには既に自分の知る兄の姿はなく、代わりに、全身の血を抜かれた、兄だったモノと、辺りに飛び散っていた夥しい血痕だった。

最初、彼は何が起きているのか、理解出来なかった。

確かに最近、自分が住んでいる家の近くで、全身の血を抜かれて殺されるという、謎の猟奇殺人事件が、連続して起きていることは、彼も知っていたが――しかし、そんなことは、テレビの中だけの出来事であり、自分の身内が巻き込まれる訳がない、と思っていた。

彼が何をすることもなく呆然としていると、やがて両親が帰宅し、当然、その惨状を目撃して、すぐに警察に通報した。

そこから先はカイドーにとっては、あっという間だった。気付いた時には、兄の葬式は既に終わっていた。自分もその場にいた筈だが、よく覚えていない。

やがて彼は、志望した大学に合格したにも関わらず、高校の三学期が終わる直前、高校に退学届を提出していた。

兄を失ったショックが余りにも大き過ぎて、全てがどうでもよくなってしまったのだ。

彼の幼なじみであり、姉のような存在である望月麻里（もちづきまり）もまた、兄の死を受けて、かなり打ちのめされていた。

当然だ。彼女と兄は恋人関係にあり、将来を約束しあった仲なのだから、カイドーに言わせてみれば、そこで気丈に振る舞える方がどうかしている。

今では、そんなマリをネタにして、兄をからかう事も出来なくなってしまった。

やがて彼は、自分の人生を徹底的に狂わせた――兄を殺し、マリを悲しませた――犯人を憎み、復讐を誓うようになった。

いつかその犯人を見つけ出し、自分の手で殺してやる、と。

とはいえ、実際には、単なる一般人の一人である彼に出来る事など、たかが知れている。

いくら身内だからといって、警察に聞いても、詳しい事情を教えてはくれないだろうし、例え彼等がそこまで親切だったとしても、大した情報は手に入らなかっただろう。

兄を殺した犯人は、この時もまだ捕まっていなかったのだから。

いつの日だったか、そんな彼が、未だ犯人が見つからない事にムシャクシャしながら、街の外を歩いていると、黒髪の少年が、一人の女性ジャーナリストから、事件についてインタビューを受けている光景が目に入った。

一体、どんな話がなされているのか、興味を持ったカイドーは、都合よく二人の近くにあった、電柱に貼られているチラシを見詰める振りをする事で、その話にさりげなく聞き耳をたてた。

あからさまに視線を向けては気付かれてしまうので、カイドーは、一体インタビューを受けている少年が何者なのか、じっくりと観察することは出来なかったが、少年の体からは、得体の知れない雰囲気が滲み出ていた。

まるで、道端でたまたま、車に轢かれた猫の死体でも見つけた時のような感情を、この時のカイドーは背中越しに抱いていた。

それが強く印象に残ったせいか、その時の会話もよく覚えている。そんな異常な雰囲気を放っていたからこそ、たまたまここを通り掛かった女性ジャーナリストも、その少年にちょっとインタビューをしてみよう、と思ったのだろう。

ここから先は、その時の二人の会話である。

――ゴメン、そこの君。ちょっといいかしら。

――何ですか？

――私、ジャーナリストのショウジという者だけど、今、巷を賑わせている『連続吸血事件』について、色んな人から話を聞いてるところなの。だから少しだけ、時間を頂いてもいいかしら？

――別にいいですよ。暇ですし。

――ありがとう。君の名前は？

――神取善久（かんどりよしひさ）です。

――そう、いい名前ね。じゃあ神取君。君は最近、この辺りで頻発してる、『連続吸血事件』について、どう思う？

――連続吸血事件？

――知らないの？　多くの人々が、正体不明の何者かに、全身の血を吸われて殺されてる、って事件なんだけど。

――ああ、アレですか。ええ、当然知ってますよ。ただ、そんな名前だったとは知らなかった、というだけで。

――それでも、普通は気付くと思うんだけど……まぁ、いいわ。それじゃ、早速質問。貴方は、今まで、この犯人がしてきたことについて、どう思ってる？

――んー……まぁ、『凄い』とは思いますけど。

そこまで聞いて、カイドーは益々強い関心を持って、その二人の会話に聞き耳を立てた。犯人の犯行を、『酷い』や『最低だ』などと、ありふれた言葉を使わず、まるで感心したかのように『凄い』と言うその少年に、興味を持ったからだ。

少年に話を聞いているジャーナリストにしても同じ気持ちだったのだろう。若干、狼狽を滲ませた声で、『どうしてそう思うの？』と、少年に尋ねている。

――だって、人を一人殺すのって、大仕事じゃないですか。それ

も立て続けに、しかも警察に捕まることもなくやり続けるのって、普通にスゴイと思いますけど。

そう話す少年の声には、「どうしてそんなことも分からないのか」、と疑問に思っている響きがあった。

――そして逆に、警察は馬鹿だと思います。

――ど、どうして？

今や、その女性ジャーナリストは、完全に動揺しきっていた。

――だって、そうじゃないですか。どうして警察は、犯人を捕まえようとしてるんですか？　僕には、それが分かりません。

――ど、どうしても何も、それが警察の仕事だからでしょ？

――いーや、違いますよ。

女性ジャーナリストの問いを。

その少年は、即座に否定した。

――警察の仕事は、犯人を捕まえることでも、僕たちを守ることでもない。法を守ることです。警察は体面上、僕たちを守るとか言ってますけど、あんなのは嘘っぱちです。だってそうでしょう？極端な話、警察と僕たちは、事件が起こる前までは、赤の他人同然なんですから。『実は、貴方たちの事なんか心底どうでもよくて、嫌々事件の捜査をしてるんです』と言う方が、まだ信じられますよ。

――で、でも、そんな事を言ったら、犯行の被害に遭った人間は、どうなるの？　彼等の気持ちは、無念は誰が晴らすの？

――そんな気持ち、誰にも晴らすことは出来ませんよ。仮に、この世に名探偵がいたとして、その人が被害者の身内の前で、犯人を見つけたとしても、被害者の無念は少したりとも晴れはしないでしょう。現実なんて、そんなものです。だから、警察のやってることは、世間体を気にして、犯人を捕まえてるだけで、結局は無駄なんです。

――無駄って……。

――無駄ですよ。無駄、無駄、むーだ。もう犯行を犯してしまった犯人を捕まえたところで、別にその被害者が生き返る訳じゃありません。そもそも、人を殺す行為の、どこが悪なんですか？

――そ、そんな事、わざわざ言わなくても……。

――いーや、分かりませんよ。僕には分かりません。人が人を殺すのは当然です。人が人を傷つけるのは当然です。人が人を憎むのは当然です。人が人を怨むのは当然です。『心(けってん)』がある以上、それは仕方がないことなんですよ。だから、僕は声を大にして言いたいですね。『人が人を殺した場合、悪いのは殺した側の人間ではなく、殺された側の人間なんだ』、と。結局、世の中は殺(や)られた側の意見よりも、殺(や)った側の意見の方が、まかり通るように出来てるんですよ。有り体に言ってしまえば――力がない人間は、誰に何をされても仕方ないんです。

『神取』、と女性ジャーナリストに名乗った、その少年の言葉をそこまで聞いてから、カイドーは、早足でその場を離れた。そして、

人目につかない路地裏に入ると、すぐに、胃の中の物を吐き出した。

それ程までに――あの少年の言葉は、激しくカイドーの心を揺さぶった。

（……何だったんだ？）

カイドーは考える。

（『アレ』は何だったんだ？）

『気持ち悪い』。

あの少年の言った言葉の、全てが。

――しかし。

なるほど、『確かにその通りだ』――と、カイドーは思った。

決して、あの少年に影響された訳ではないが、それでもカイドーは、今までつまらない理由で、兄を殺した犯人を怨んでいた自分を恥じた。

悪いのは犯人ではなく。

殺された兄のほうなのだ、と。

とは言え、かと言って、しかし、それでも、カイドーが犯人を追うのを止めた訳ではない。

ただ、動機が変わっただけだ。

悪いのは自分達だが――かと言って、それが犯人を許す理由になる訳ではない。

この時の彼の心情を言い表すとするなら、今まで一方的にイジメをしてきた人間が、ちょっと反抗的な態度を取られただけで、理不尽に逆ギレしているのと同じ――と言ったところか。

その少年を見たのは、その時だけだし、これからも会うことはないだろうけど――カイドーは、

（欲しがって何が悪い？）

（ムカついて何が悪い？）

あの少年の言う通り、結局、世の中は『力』が全てだ。

それ以上に正しい答えが、この世にある訳がない。

だから。

自分を、自分の兄をコケにした犯人を、必ず見つけ出し、自分の手で殺してやる。

そうすることで、自分の『力』を証明してやる。

――と、そう考えるようになった。

それからまだ、たった半年しか経っていないが、しかしその、約四千三百二十時間もの間、彼が『力』を欲さなかったことは、なかったと言っていい。

◆

◆

「ん……？」

仲魔のトラロックの力を借り、衛国寺の屋根の上に降り立ったカイドーは、少し驚いた。

そこには先程、淳のＣＯＭＰを奪った悪魔（モノムフ）が一人（一体、と言うべきか）、まるでカイドーを待っていたかのように、そこに佇んでいたからだ。

「意外だな……てっきり、そのまま尻尾を巻いて逃げんのかと思ってたぜ」

「笑止」

カイドーを見て、モノムフは笑った。

「人間如きに、背を向ける俺ではない。ここに上ったのは、やって来た他の人間を、順番に仕留める為だ」

「ハッ……そうかヨ」

そんなモノムフに対して、カイドーも鼻で笑うと、隣にいるトラロックを、自分が持っているＣＯＭＰへと帰還させる。

それを見て、淳から奪ったＣＯＭＰを懐に仕舞いつつ、モノムフは顔をしかめた。

「……何のつもりだ？　悪魔の力なしで、この俺に勝てるとでも？」

「別に、そんなんじゃねーよ、ただ俺は、一人に対して二人で挑むほど、臆病じゃねーってだけだ」

そう言いつつ、拳をパキパキと鳴らすカイドーに対し、モムノフは一瞬、虚を突かれたような表情をした後、そのすぐ後に、大声で笑い出した。

「人間風情が、一丁前にプライドを語るな！　言っておくが、俺をその辺りの、凡百の悪魔と同じだと思うな――俺はモムノフ！　偉大なる不死の王、ベル・デル様の配下が一人だ！」

思わず、カイドーはため息をつきたくなった。今までにも、何体かの悪魔と戦った事があるが、中にはこのように、聞いてもいない

のに名を名乗るような輩がいるのだ。

どうも、悪魔という生き物は、自己顕示欲が強いらしい。別に、カイドーにしてみれば、どうせ殺す悪魔の相手など、世界一どうでもいいのだが、向こうから嬉しそうに名乗ってくる。

「テメェが誰だろうと知ったことか。とっととそのＣＯＭＰを俺に渡せ。そうすりゃ、今ならまだ見逃してやる」

「……ほざけっ！」

本来、自分より下等な存在である筈の人間に、そこまで言われたことに、とうとう堪忍袋の尾が切れたのか、モムノフはそう叫ぶと、カイドーに向かって突進を始めた。

だが、突進とは言っても、それはほんの二、三歩、大きく足を踏み込んだというだけのことだった。そして、その勢いを利用して、モムノフは両手で持った槍を、カイドーの腹部目掛けて一気に突き出してきた。

「……！　……ッチ！」

槍が自分の体を貫くギリギリの所で、何とか体を回転させてそれをかわすカイドー。

その回避の仕方は、槍を使う相手に対しては、正解と言っていい。もしここで、彼が後ろに跳んだりするなどしてその攻撃をかわそうとしたら、槍のリーチから逃れ切れず、きっと串刺しにされていただろう。

果たして彼がそれを理解していたからそうしたのか、或いは本能的に悟ったからなのかは彼のみぞ知るが、もし後者だとしたならば、流石はダイモンズのリーダーと言ったところである。

追撃が来る前に一旦、モムノフから距離を取ろうとするカイドー。

しかし、その行為に、果たしてどれだけの意味があるのか。

いや、意味があるかどころではない――槍を持つ相手から一旦、距離を取ろうなど、明らかに失敗だった。

「逃がさんっ！」

カイドーが作った空間を、その槍で一気に潰してくるモムノフ。

（……くそっ！　やりづれぇ！）

カイドーは思った。モムノフが持つ槍による攻撃は、思ってた以上に厄介だ。

何度目かの槍の刃先を、一気に後ろに数歩下がって、少しでも体勢を整えようとするが、それによって生まれる余裕は精々、息をつく時間ぐらいのもので、彼が反撃をしようと思った時には、既にモムノフが次の攻撃を仕掛けて来る。

つまりは、攻撃が速い。

通常、この手のリーチを売りとする武器は、その攻撃範囲の広さ故に、手数が稼ぎにくい筈だが、しかしそんなことはない。

モムノフは槍を突いては戻す――つまりは、押しては引くという動作を、実に素早く、そして正確に行っていた。

それだけではない。

ならば、と、直線的な攻撃に対し、カイドーは横から回り込もうとするが、すかさず、そこへモムノフが、さながらバットでも振るように、カイドーの体に槍の柄部分を叩き付けてくる。

カイドーから見れば、槍の最も重要な部分とは、刃先――所謂、槍頭という部分であり、柄の部分など細くて、叩けば簡単に折れてしまうだろうと思っていた。

だからこそ、その攻撃に対し、柄部分に中段蹴りをお見舞いするという対処法を選んだのだが――甘い甘い。結果は、カイドーの足が酷く痺れただけで、モムノフの槍にはヒビ一つ入らなかったというものだった。

それもその筈。そもそも柄とは、槍の構造では最も重要な部品であり、柄の造りで槍の強度が左右されると言っても過言ではないぐらいなのだ。

また、状況によっては、先程のように柄自体も打撃武器となり得る為、強度に関してはむしろ、槍頭よりも柄の方に力を入れて作られている物もある。モムノフの槍は、正にそれだった。

（コイツ……どうやら、魔法よりも物理攻撃が得意なタイプみたいだな）

恐らく、そう考えて間違いないだろう、とカイドーは推測した。

彼自身、ＣＯＭＰにセットしているスキルが物理属性中心なので、それがよく分かる。

いや――この際、モムノフの得意分野が魔法であろうと物理であろうと、そんな事はどうでもいい。

今重要なのは、相手が使う、あの厄介な槍をどうにかすることだ。その対策を考えつかない限りは、淳のＣＯＭＰを取り返すどころか、自分の命さえ危うい。

この状況を後数分でも続けようものなら、モムノフの槍がカイドーの体をえぐることになるだろう。

だが、カイドーには、次に自分がどうすればよいのか、ある程度の見当がついていた。

再び、モムノフの視界の外へと逃れようとするカイドー。

当然、先程と同じように、モムノフは槍の柄で、カイドーの体を突くのではなく、薙ごうとしてくる。

そして、それこそがカイドーの狙いだった。

「――らぁっ！！」

気合いの掛け声と共に、振り回された柄を飛び越えるように、体を捻りながら跳躍するカイドー。そのまま、モムノフの顔面目掛けて、空中後ろ回し蹴りという、とてもただの不良とは思えない技を繰り出した。

もっとも、実際に彼は、ただの不良ではないのだが。

渋谷を拠点とする不良グループ『ダイモンズ』のリーダー、二階堂征志である。

武器を使う相手との喧嘩も――これまでだって、なかった訳ではない！

槍による攻撃がどれだけ長かろうが、どれだけ速かろうが、それでもやはり、こういったリーチの目立つ武器の弱点が、近距離戦であることには変わりない。カイドーはそれを見抜いていた。

いや。

厳密には――見抜いていたと思っていた、と言うのが正解だろう。

そう、近距離戦が槍の弱点だというカイドーの読みは、外れていたのだ。

余りにも――浅はかだった。

「甘いわっ！」

モムノフもまた、カイドーと同じように体を回転させると、その柄の末端部分で、カイドーの腹を突いてくる。

それを受けた時、彼が空中にいたことを差し引いても、攻撃中に、しかもカウンター気味に、そのような攻撃をされては、カイドーとしては避けようがない。

体を回転させた分、十分な遠心力もかかっているので、威力もまた尋常ではなかった。

「あ……がっ……！！？」

その衝撃で、攻撃を中断させられるどころか、一気に後方まで吹き飛ばされるカイドー。

勿論、すぐに立ち上がろうとするが、途端、果てしない激痛に襲われ、口から粘着質の血を吐き出した。もしかしたら――いや、確実に、今の攻撃で、骨の何本かを折られたことを、カイドーは悟った。

これほどのピンチに陥ろうとも、それでも仲魔をＣＯＭＰから喚び出そうとしないのは、彼のプライド故か。

否。

もし、彼がそのようなプライドの持ち主でなくとも、ＣＯＭＰを操作して、仲魔を喚ぶことは叶わなかっただろう。

それ程までに、この時、彼が受けたダメージは、甚大だった。

絶対――絶命。

「……なるほど。単なる愚か者ではないらしい。あれほどの大見えを切るだけはある。確かに、人間にしては中々の『力』だ――しかし、ついていなかったな。俺はベル・デル様の配下の中では最強の悪魔、モノムフだ。何も恥じることはない。むしろ、誇りに思うがいい。俺にここまで言わせたことをな。運が『悪かった』と、諦め

ろ」

言いながらも、モノムフは、激痛で身動きが取れないカイドーに、1歩、また1歩と、距離を詰めてくる。

それに対して、カイドーは、

「……ちょっと……待てや……」

と言った。

それを聞いたモノムフが、僅かに目を見開く。

「これは驚いた……。確かに、槍頭による攻撃とは違い、今のは柄による『打撃』だったから、即死には至らないだろうが……。それでも、随分な致命傷な筈だ。にも関わらず、まだ喋れるとは、素直に驚いたぞ、人間」

カイドーの正面でピタリと、モノムフは足を止める。

「……っ、……っ」

肺を傷つけられたことで、呼吸気管の機能が著しく低下し、過呼吸を繰り返すカイドー。

それでも彼は、自分にトドメをさそうとしているモノムフに対し、一つ物申さずにはいられなかった。

「運が……悪い、だと？」

カイドーは混濁してきたその目で、強くモノムフを睨む。

「冗談じゃねぇ……。そんなちっぽけな理由で、俺が負けてたまるかヨ。もし、ここで俺が死ぬのだとしたら――そりゃ、悪いのは『運』じゃねぇ。『力』がない俺の方だ」

「……」

「力は絶対だ。力だけが絶対だ。俺は今の今まで、それだけを信じて生きてきた」

そうだ。

そうでなくてはならない。

そうでないと――。

自分が、自分ではなくなる。

「……フン」

そんなカイドーを見て、見下すように笑うモノムフ。

「だから何だ？　それがどうした？　そんなものは、どちらでも一緒ではないか。悪いのがお前だろうが運だろうが――そんなもの、どちらでも同じことだ。どの道、貴様はここで死ぬのだから」

「……ハ、ハハッ」

さながら死刑宣告にも似た、モノムフのその言葉に、しかし今度

は、カイドーが笑った。

「……何が可笑しい」

「悪いのが俺だろうが、運だろうが、そんなのはどっちでも一緒、だと？　ちげぇよ。全然ちげぇ。全くちげぇ。何つったって、死ぬのは俺じゃねぇ。お前の方なんだからな」

「……ほざけ。最早、今の貴様に、勝ちの目などない。今の一撃で、間違いなく骨を何本か折った筈だ。仮にそうでなくとも、俺の槍術を、貴様は攻略出来てない。この状況からどう転ぼうが、貴様は俺には勝てないんだよ」

「いや……方法はあるぜ。見ろよ……この状況」

『この状況』。

――とは、つまり、二階堂征志が膝まづいており、その正面に、モムノフが立っている、という状況である。

「……？」

モノムフが、その言葉を意味を計るよりも先に――カイドーは動いた。

「なっ！？」

その行動に、モムノフは驚愕せずにはいられなかった。これだけの傷を負いながら、喋れるだけでも、十分異常だというのに、その上、まだ動けるなどとは、思ってもみなかったのだ。

しかし。

「馬鹿め！　無駄な足掻きだ！」

その程度の不意打ちで出し抜けるというなら、最初から、カイドーはここまで追い詰められていない。モムノフは殆ど予備動作なしに、前蹴りをカイドーの顎目掛けて繰り出した。

繰り出したが、避けられた。

「――っ！？」

そのことが、モムノフを更に驚愕させる。

「やっぱり、蹴ってきたな！」

カイドーは振り上げられたモムノフの足を、片手でガッシリと掴むと、そのまま力任せに、引き倒した。

柔道で言うところの、双手刈りである。いや、この場合、片手で行っているから、片手刈りと言うのが正確かもしれないが。

モムノフの槍術も、柄による棒術も、カイドーにとっては、知り

もしない、未知の攻撃法だった。しかしそれでも、『下から攻撃すれば、そういうのはやりにくいんじゃないか』、ということぐらいは分かった。

事実、槍術、棒術に限らず、下からの攻撃に対して、完全に対処できる武術など、そう多くはない。

何故なら、武術の世界において、相手が自分の目線より下にいるという場合は――しかも、それが膝まづいていると言うなら――それは大抵の場合が、既に勝敗が決した状況だからだ。

しかし、それはあくまで、武術の世界での話である。勿論、武術よりは『殺し合い』を日常とする、悪魔のモムノフがその理屈に捕われていた訳ではないが、それでも、足元からの攻撃に慣れている訳ではない。

だが、カイドーが普段行っているのは、武術でも、ましてや殺し合いでもない――『喧嘩』である。

故に、一旦、負けたと見せかけて、下から攻撃するなど、彼にとっては常識なのだ。

相手の虚をつき、裏をかくなど、『そんなことは』、彼のように、喧嘩の毎日を送る不良にとっては、卑怯の内にも含まれない、常套手段なのだ。

「ぐ、ぅうあっ！？」

ズドン、と、カイドーに足を引っ張られたことで、モムノフが頭から後ろに倒れる。槍を一旦引き、カイドーを貫いて反撃しようと

するが、すぐにそれが無理だと悟った。

理由は、至って簡単である。

槍を引くということは、同時に『肘を引く』ということだ。しかし、倒されたモムノフの肘のすぐ『後ろ』には、衛国寺の屋根がある。それが邪魔して、槍を引くことが出来ないのだ。

ならば、柄による打撃――否、最早、槍から手を離して、無手による攻撃で応戦しようとするも、モムノフがその考えに至るよりも、カイドーが次の攻撃に移る方が、まだ早い。

「モムノフ……だったか？」

酷く冷たい口調で、カイドーが言う。

「言ったろ？　悪いのは俺の『運』でもなければ、俺自身でもねぇ――悪いのは、『お前』だけだ。お前の『弱さ』だけだ。だからお前は黙って、俺に殺されろ。力がない奴は、誰に何をされても仕方ないんだからヨ」

カイドーがＣＯＭＰにセットした、物理スキル『絶妙打』が、ここにきて初めて、恐怖の表情を見せたモムノフの胸の肉を貫き、骨を砕き、内臓を穿ち――宣言通り、モムノフの命を、あっさりと奪った。

「ホラよ、お前のCOMPだ」

口元の血を拭いながら、モムノフから取り替えした改造COMPを、カイドーは淳へと手渡す。

カイドーも、そして淳も、戦闘で受けたダメージは、既に仲魔の回復魔法で治療を終えていた。

「悪いな。迷惑かけちまって」

淳が言う。

「……別に、礼を言われるような事はしてねぇヨ」

そんな彼に対し、バツが悪そうに顔を背けるカイドー。

（……もしかして、照れてるのか？）

淳は、カイドーの意外な一面を垣間見た気がした。

「――なぁ、有里。お前、『ダイモンズ』に入らねぇか？」

すると唐突に、カイドーが言った。

「はぁ？」

「さっきの、お前の戦いを見てたけどよ――カタギにしとくにゃ勿体ねぇぜ。俺のチームに入れば、他の奴らに因縁つけられることもねぇし、悪くねぇと思うけどな」

しかし淳は、そんなカイドーの台詞の途中から、既にクックと笑い始めていた。

「お誘いはありがたいけど、俺は見ての通り、超絶非暴力平和主義者だからな。喧嘩とかは嫌いなんだよ」

今の今まで、散々悪魔を殺しておきながら、平然とそんな事を言ってのける淳。

それにしても、と淳は疑問に思った。カイドーは随分と自分を評価してくれているみたいだが、果たして自分は、そこまでの評価を受けるに値する行動を、この男の前で取ったことがあるだろうか？

それ以前に、こうして顔を合わせること自体、まだ数回程度の筈だが……。

よく分からない。

「フン、謙遜しやがって……まぁ、いいさ。けど案外、俺はマジで、お前のことは認めてんだぜ？　だから、暇があったら今の話、考えといてくれヨ。んじゃな――おい、行こうぜ、ホンダさん」

「ウム。それではまた会おう、有里君」

そう言って。

カイドーとホンダは、やがて淳達の視界から消えていった。

しかし、二人が去っ行くのを見送った後の、淳の表情は、決して晴れやかなものとは言えなかった。

そんな彼の隣で、

「とりあえず、悪魔は全部倒せたね……」

と、ユズが言う。

「だけど、さっきの何よ!?　私たちがすぐに死ぬって!?　一体、何が起こるっていうのよ……!?」

ユズが話しているのは、先程倒した敵の悪魔達が言っていた、謎の悪魔についてだ。

「……今度はしっかり覚えたぜ。『ベル・デル』、だ。奴ら、確かにそう言ってやがった……」

顔をしかめるアツロウに対し、淳は「やれやれ」とでも言いたげに、首を振った。

「十中八九、連中の親玉だろうけどよ……。それ以前に、何か『不死』とか、そんな迷惑極まりない単語を漏らしてなかったか？アイツら」

「『不死』って……、死なないって事でしょ!?　そんな奴が出てきたら、勝てるワケないじゃない……！」

「……チクショウ！　アイツら、ベル・デルの復活は、もうすぐだって言ってた……！！　とすれば……俺達の余命が『1』なのは……」

皆まで言わずとも、アツロウが何を言いたいのか、淳とユズには簡単に予想がついたが、アツロウが最後まで言い切る前に、ユズが、

「なっ……何で！？　何でそうなるのよっ！」

と、彼の台詞を、強く遮った。

「私たちがソイツと戦わなきゃならないなんて、まだ決まってないでしょ！」

「ああ、決まってねぇよ！」

すると、アツロウが怒鳴った。

ユズ以上の、大きな声で。

アツロウにしては珍しい、その余りの剣幕に、ユズはビクッと体を竦め、淳は訝しげな視線を、アツロウへと向ける。

封鎖に閉じ込められ、精神的に追い詰められていたのは――何も、ユズだけではなかったのだ。

今まで、冷静な態度をとっていたように見えたアツロウもまた、衰弱仕切っていたのかもしれない。

悪魔との戦闘後で、若干、心の均衡が崩れていたということもあ

るのだろう。それが、ユズのヒステリックな言葉を受けて、一気に爆発したのだ。

「でも……俺達は、この封鎖から出られないのに、悪魔の親玉がもうすぐ蘇るんだ！　普通に街を歩いてるだけで、こんだけの悪魔に会うんだぞ！？」

しかし、言うにつれて、アツロウの言葉は、段々尻すぼみになっていった。

「だから、ソイツに出会わない保証なんて、どこにもねぇじゃんか……！」

「……」

「……」

しばらく、三人の間を、沈黙が支配する。

そんな中、淳は考えた。

確かに、アツロウの言う通りだと思う。

あの悪魔達が言っていた、不死の存在――『ベル・デル』に明日、自分達が遭遇する確率は、極めて高いだろう。

否。

高いどころではない。

淳には、妙な確信があった。

いつ頃からそう思っていたのかは分からない。赤坂トンネルで、初めてその名を聞いた時からかもしれないし、或いは、それよりも以前から、自分は『そのこと』を確信していたのかもしれない。

明日、自分は必ず、ベル・デルに会うに違いない、と――。

この際だ、自分が何故、そこまでの確信を持っているのかはいい。問題は、その事態を、どうやって乗り越えるかだ。

一番、現実的なのは、ベル・デルが蘇る前に、この封鎖から出て逃げることだが――残念ながら、この策が成功する確率は低いと言わざるを得ない。

今のところ、目処と言えば、例の赤坂トンネルしか立っていないし、そこにしても、あの凶暴な女性がいては（最早、トンネル内で淳を組み敷いたあの女性は、彼の中で完全なトラウマになりつつあった）、脱出することは不可能だろう。

（くそ……！）

とは言え――ベル・デルを倒して生き延びるというのも、余り現実的な策とは言えない。

もし、本当にこの悪魔が『不死』なのだとしたら――勝敗以前に、そもそも勝負自体が成立しないだろう。悪魔と人間という、元々の種族の違いを抜きにしても、その立ち位置は、彼岸と此岸の如しだ。

……。

……いや。

待てよ？

一瞬、その案を捨てかけた淳の頭の中で、何かが「待った」をかけた。

何か――見落としていないか？

何か、重要な事を。

淳は、これまでになされたベル・デルに関する会話を、一つ一つ、必死に思い出していった。

『ク……ククク……！　もうすぐ……もうすぐ蘇る……。「不死」の力を持つ、あの方が……。オマエ達など、あの方の前に死に絶えるのだ！』

『「不死」って……、死なないって事でしょ！？　そんな奴が出てきたら、勝てるワケないじゃない……！』

……。

……っ！

そうか！　と――この時、淳の頭の中で、一つの可能性が生まれていた。

……もしかしたら、まだ諦めるのは早いのかもしれない。

ややあって、淳は言った。

「ソイツを――ベル・デルとかって奴を、倒す方法を見つけよう」

それを聞いたユズが、「信じられない！」と言いたげな表情を、淳へと向ける。

「たっ……倒すって！　どこまで強気なのよ！　そんなの、無理に決まってるじゃん！　ソイツ、不死なんでしょ！？　死なない奴なんて、どうやって倒すのよっ……！」

「まぁ、聞けって」

淳は、ユズを宥めるように、手を「どうどう」と動かしながら、言った。

「今までの連中の会話で、気付かないか？　アイツらの話には一つ、矛盾がある」

「矛盾？」

アツロウが首を傾げた。

「矛盾って、何だよ？」

「アイツらが言ったこと、お前らは、どの程度まで覚えてる？」

「どうって……」

ユズはしばらく、先程の淳と同じように、これまで記憶を引っ張り出している様子だったが、やがて、

「やっぱり、そのベル・デルが『不死』だって事しか、分からないよ」

と言った。

「違う。他にもあるだろうが――奴ら、言ってたろ？　ベル・デルは、近い内に蘇るって」

「それがどうしたんだよ？」

アツロウは、未だに分からないようだ。

「考えてもみろよ、肝心なのは、『蘇る』って部分だ。『蘇る』。つまり、これはどういう事だ？　こういう事だ！　ソイツは――ベル・デルは今、死んでるか、封印されてるか、或いはそれに近い状態にある！」

「だから、それが一体――」

何だって言うんだよ、とアツロウは言おうとしたが、直前で、淳が言いたい事に気付いたようだ。

「そうか……もし、そのベル・デルって奴が今、封印されてたりするなら、昔、そうした奴がいたって事だ！　つまり――」

アツロウの台詞を、淳が途中から引き継いだ。

「ベル・デルは、完全に無敵って訳じゃない！　何か、ソイツを封じるか、殺せる方法があんだよ！　そうだろ？　それが何かさえ分かれば――俺達でも、ソイツと十分に渡り合える！」

「で、でもさ」

盛り上がりかけた二人の会話に、ユズが遠慮がちに割り込んで来た。

「仮にだよ？　もし、そうな方法があったとして……淳には、そのアテとかはついてるの？」

「……ない、です」

ユズの現実的な問いに対し、淳は果てしない沈黙の後、そのように答えた。

そう答えるしかなかった。

しかも敬語で。

「でも……これから『それ』が何なのかを探し出せれば、もしかしたら、明日、生き残る事が出来るかもしれないだろ？」

淳は、自分が正気だと分からせるかのように、なるべく、キッパリとした口調で言った。

「でも……実際、手掛かりも何も無いんじゃな。誰か、悪魔に詳しそうな知り合いがいればいいんだけど……」

アツロウの台詞を受けて、淳はすぐさま、これまで出会った人達の中で、そういった知識が豊富だと思われる人物をピックアップした。

真っ先に思い浮かんだのは、九頭竜天音（くずりゅうあまね）という、翔門会の巫女だが、もし、次に彼女に会ったら、今度こそ、（無理矢理）翔門会に入会させられそうなので、出来れば避けたいところだ。

後は、自分達をこの封鎖に巻き込んだ張本人と言っても過言ではない、淳の従兄であるナオヤが挙げられるが（次会ったら殴る）、この従兄に関しては、そもそも見つけることさえ難しいだろう。

だが、この二人を除外してしまったら、淳にはもう、悪魔に詳しそうな人物が思い当たらない。というか、当たり前だ。悪魔に精通した人間なんて、知り合い以前に、世界の視点から見渡しても、一体どれだけいるというのだ。２人思い浮かんだだけでも奇跡である。

いや。

違う……よく思い出せ。

淳の記憶を、何かが揺すぶっていた。

他にもいただろう……確か、あともう一人……。

途端に、淳の頭に、パッと閃くものがあった。黒い甚平を身に纏い、銀色の髪が、月明かりで美しく輝いていた、あの男――。

「セト！」

淳は叫んだ。

「「えっ？」」

そんな彼に対し、アツロウとユズが、おうむ返しに、しかも同時に聞き返した。

「セトだよ！　昨日の朝、渋谷で俺に電話をかけてきたアイツだ！　覚えてるだろ？　アイツなら、もしかしたらベル・デルの弱点とかを知ってるかもしれない！」

アツロウとユズは、相変わらず当惑した様子だった。そもそも、この中で、実際にセトに会ったのは淳だけで、二人は顔さえも知らないのだから、無理もないことかもしれない。

やがて、ユズが口を開いた。

「でも……その人って、信用できるの？　昨日の電話を聞いた限りじゃ、悪い人じゃないかもしれないけどさ……」

「……」

またしても、淳は沈黙せざるを得なかった。確かに、認識があるかないかという話は別にしても、会ってまだ一日かそこらの人間を信用しろというのは、無理な話だ。

「とにかくさ」

ユズが言った。

「そのベル何とかっていう悪魔に――」

「『ベル・デル』な」

「――そのベル・デルって悪魔に弱点があろうとなかろうと、そんなの、どうだっていいよ！　今はとにかく、この封鎖から出る事を考えよう？　それが一番確実なんだからさっ！」

「じゃあ今度は、俺が逆に聞くけど、そのアテはあるのか？」

自分の考えをあっさりと無下にしたユズに、若干の苛立ちを覚えつつ、淳は聞いた。

「赤坂トンネルがあるじゃないっ！」

「ああ。そりゃー素晴らしい案だな」

淳は両腕を高く上げるという、大袈裟なリアクションを取って皮肉って見せた。

「ただし、ちょーっとだけ欠点があって、銃を持った凶暴な女が待ち構えてるけどっ！」

「それでも、今ジュンが言った、突拍子もない考えよりは、よっぽど現実的でしょ！？」

しかし、淳は殆ど聞いていなかった。何とかしてセトに連絡をとろうと、懐から携帯電話を取り出すが、ここ最近、全く充電をしてないため、とっくの昔に電池が切れていた。

まぁ、そうじゃなかったとしても、こちらからセトに連絡が取れたとは思えないが。

「お前はどう思ってるんだ？」

苛々しながら、淳はアツロウに意見を求めた。しかし、淳やユズとは違い、彼は一人、この中で一番早く、冷静さを取り戻していた。

「……悪ぃけどさ、この話、ちょっとやめにしようぜ」

アツロウは言った。

「今話しても、どんどん感情的になるだけで、答えなんて、出るワケねぇ……」

「……」

それに対して、淳は沈黙で答え、

「あ……うん……。ゴメン……」

ユズは申し訳なさそうに謝った。

「……とりあえず、『ベル・デル』って名前だけ、頭に叩き込んでおいて、出口を探そう。そうすれば、何かきっかけがあった時、ソイツの情報も手に入れやすいだろ」

「うん……そ、そうだね」

「……そういえばさ、カイドーとホンダさんが、ＣＯＭＰを使ってたな」

微妙な空気を入れ換える為に、アツロウは急に話題を変えた。

「うん……手に入れたばかりなのに、でも、もうだいぶ戦いに慣れてるって感じだったよ……」

「マッカを集めてるみたいだけど……何に使うんだろ？」

「そりゃ……」

何だかんだ言って、話題が変わったことで、淳もほっとしたような顔をしていた。

「オークション……『デビオク』だろ？　それ以外に考えられない」

「だよな……それだ！　アイツら、オークションで、強い悪魔を集めるつもりなんだよ！」

「でも……どうして？　生き残るためかな……」

ユズは目をパチクリさせていた。

それに対して、淳は頭をゆらゆらと振り、「分からない」、と態度で示す。

「……どっちにしろ、アイツらの動きにも気を配るべきかもしれないな。よし、じゃあ、出口探しを続けようぜ……！」

そのアツロウの言葉で、この会話は打ち切りとなった。

しかし、衛国寺の階段を下りながらも、淳は未だに、どうすればセトに出会えるのかを考えていた。あの男は、絶対に何かを知っている筈だという、これまた妙な確信があった。

しかし……こちらから連絡を取る手段がない以上、アツロウが言うように、今は『ベル・デル』という名前を覚えておくしかないだろう。

確かに、先程までの自分は、少し感情的になり過ぎていたのかもしれない。後で、ユズに謝っておかねば。

時刻はまだ十五時を過ぎたばかりだというのに、淳には、東京の青い空が、少しだけ暗く、重くなったような気がした。

◆

◆

――『衛国寺のバトルＰＡＲＴ１』終了時ステータス

●クラックしたスキル

＞『絶妙打』
『嵐の乱舞』
『クロスレイ』
『炎の乱舞』
『耐衝撃』
『封魔追加』

●所持マッカ：３０７０

●有里淳（？？）

・コマンドスキル
＞？炎の乱舞
？氷の乱舞
？怒りの一撃
・自動効果スキル
＞？英霊の加護
？毒追加
？同族の心得・攻
・先制発動スキル
＞『Ｓ疾風の秘法』

●木原篤郎（人間）

・コマンドスキル
＞？アギ
　？絶妙打
　？雷の乱舞
・自動効果スキル
＞？一分の活水
　？同族の心得・防
　？封魔追加
・先制発動スキル
＞『S的中の秘法』

●谷川柚子（人間）

・コマンドスキル
＞？嵐の乱舞
　？クロスレイ
　？アムリタ
・自動効果スキル
＞？耐氷結
　？一分の魔脈
　？耐衝撃
・先制発動スキル
＞『S軽業の秘法』

●予備スキル
＞・ザン
　・ブフ
　・ディア
　・ジオ

●仲魔
＞・ヘアリージャック
・ガルム
・モー・ショボー
・リリム
・サラスヴァティ

――Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！

2nd Day『自衛隊との交渉』

――渋谷駅前。

淳達が、情報収集と共に、悪魔が出没していないか確認する為のパトロールを兼ねて歩き回っていると、

「……そこを何とか！」

と言って、必死に一人の自衛隊員に何かを訴えている、ホンダの姿が目に入った。

その表情は先程、衛国寺で会った時とは打って変わり、何か焦っているようにも見える。

「ムリだ。ここを通すわけにはいかん」

詰め寄るホンダに対し、そう冷たくあしらう自衛隊員の言葉を聞いて、どうやら封鎖から抜ける為に、ホンダが自衛隊と交渉しているという状況らしい、と淳は理解した。

「有毒ガスが出ているんだぞ？　死にたいのか？」

「自分の身なんて、どうでもいい！　……息子の手術があるんだ……。頼むから、外に出してくれ！」

「どんな事情がおろうと、誰も、通すなとの命令なんだ。これはお上の決定なんだよ。……ここだけの話だが、我々には、銃器の使用

も許可されている」

自衛隊員の最後の言葉は、『これ以上うるさく言うなら、発砲も辞さない』という暗の警告を、ホンダに分からせるには十分だった。

「残念だが、諦めてくれないか。これも仕事でね……」

「……くそ！」

結局、最後にはホンダが折れた。

そのやり取りを、少し離れた場所から見ていた淳達の内、ユズが、悲しそうに目を細める。

「アレって、ホンダさんだよね？外に出たくて、交渉してたんだ……」

「有毒ガスって言葉で追い返そうとしてるけど、ホンダさんも悪魔使いだから……」

アツロウの台詞の途中で、淳が頷く。

「……この封鎖の原因が、ガスなんかじゃないって、とっくに気付いてるだろうな」

「ああ……だよな……って、アレ？　こっちに来るぜ？」

アツロウの言葉に反応して目を向けると、確かに、自衛隊と交渉することを諦めたホンダが、淳達に近付いて来ていた。

「……やあ、君達」

「どうも」

淳は小さく頭を下げた。

「……さっきは、ありがとうございました。ま、ホンダさんもＣＯＭＰ持ってるんスもんね」

アツロウが言う。しかし次には、彼は少し怒ったような口調で話し始めた。

「……っていうか、ヒドイっスよ～。会った時はＣＯＭＰの事知らないフリしてたクセに～！」

頬を膨らませているアツロウを見て、ホンダが苦笑いをする。

「ああ……その事か。すまない、悪く思わないでくれたまえ。今朝、君達と会った後に、『偶然』手にいれたんだ。まさか、あんな機能があったなんてね……」

ホンダはそう言うが、しかし、淳はアツロウの隣でそれを聞いても、まだ幾つかの疑問点を解消し切れずにいた。

「……にしては随分、すんなり使いこなしてませんでした？」

淳は訝し気な目でホンダを見ながらそう尋ねるが、しかしホンダは、

「あはは、そうかい？　じゃあ私には、悪魔使いの才能があるのか

もしれないね」

と笑って答える。どうにも掴みどころがない、やりにくい人だ。

と、淳は思った。

「さっき自衛隊と口論してましたね。交渉は失敗ですか……」

未だ、バリケードに沿ってズラリと並んで佇んでいる自衛隊員達を睨みながら、アツロウが言う。するとホンダは若干、驚いた表情を見せ、

「はは……見られていたか」

と言って、指で鼻を掻いていた。どうやら、先程の自衛隊とのやり取りの一部始終を見ていた自分達に、全く気付いていなかったらしい。

「……お子さんの手術って、本当なんですか？」

その時のホンダの言葉を思い出したらしいユズが、遠慮がちに尋ねると、途端に、ホンダの表情にサッと暗い影が差した。

「ああ、本当だ。……数日後が手術の予定でね。このままじゃ、傍にいてやれない……」

「……」

それを聞いた時、自分の胸の中で、何とも形容しがたい感情が渦巻くのを、淳は感じた。

息子の身を案じる父親（ホンダ）。

しかし――淳には、その父親がいない。顔さえも知らない。

だから、息子の手術に、何としても駆け付けたい、と言うホンダの姿を見ていると――。

何と言うか、こう……。

「息子さんの手術っスか……」

淳の隣で、気の毒そうに目を伏せながら、アツロウが呟く。

「でも、山手線内じゃなくて、良かったっスね。こっちには、電気が来てないし……」

「まぁ……そうだが……」

アツロウの励ましの言葉を受けても、ホンダの表情は相変わらず暗いままである。

「だが、たった一人の肉親が傍にいない事で、あの子は寂しがっている筈だ……」

「……」

それを聞いた時、再び自分の心にチクリ、と何かが刺さったのを、淳は感じた。

――たった一人の肉親が傍にいないことで。

――あの子は、寂しがってる筈だ。

（そういう……ものか）

何となく、淳は、ホンダから目を逸らさずにはいられなかった。

「たった一人の肉親!?　奥さんは、いないんですか?」

自身も母子家庭であるが故に、何か感じた部分があるのか、ユズが目を見開いて、ホンダに聞き返した。

「ああ、妻は既に他界した。……私にとって、息子だけが生きる望みなんだ」

まるで自分に言い聞かせるような口調で、ホンダが言う。

「だから、何としても、傍にいてやりたい。手術の前に、勇気づけてやりたい。なのに……！」

そこから先は、言葉に詰まったように、ホンダは黙り込んでしまった。

勿論、淳達には、ホンダが何を言いたいのかが分かる。これから手術を受ける息子の傍にいてやれない自分を、ホンダは許せずにいるのだ。

やがて、ホンダは、次のように呟いた。そこには、僅かに、ほんの僅かではあるが――危険な、狂気にも似た感情が含まれていた。

「いっそ、このＣＯＭＰを使って、強行突破してみるか……」

「ほ、ホンダさん！？」

何を言ってるんですか！　と、驚いた様子で、ユズが大きく目を見開く。

「ああ……ほんの冗談だよ」

しかしホンダは、肩を竦めると、すぐに元の状態に戻った。

「息子の為にも、私が犯罪者になるのはまずいからね……。ところで、君達とは今日知り合ったばかりだというのに、随分とよく合うな。山手線内と言えど、それほど狭くはない筈だが……。ハハ、そう考えると、僕と君達とは不思議な縁で結ばれてるんじゃないか、と、そう思うよ」

ホンダは、興味深いと言いたげな視線を、淳達に向けてくる。

（縁――『運命』、か）

セトやアマネ辺りが好きそうな言葉だよな、と淳は思った。

縁。

運命として定まっているめぐりあわせ。

まぁ、そう言われると、ホンダに限らず、淳は一昨日から、様々な人物に出会っている。この際、悪魔は除外するにしても、従兄のナオヤや、先程言ったセトやアマネに始まり、ミク（女子高生）、

カイドー（不良）、ケイスケ（アツロウの旧友）、ジン（バーのマスター）、ハル（ボーカリスト）、ミドリ（魔女っ娘）と、もう、何でもござれだ。

「折角だし、その縁に乗っ取って、君達に一つ、聞いておくか……。君達は、半年程前に、浅草の寺社で謎の爆発が起きたのを知っているかい？」

すると突然、ホンダはそのように言って、別の話題を持ち出してきた。しかし残念ながら、淳はホンダが言ったその事件に、全く心当たりがない。だからこそ、

「……？　……いえ……」

と、言うしかなかったのだ。アツロウとユズの様子を見る限り、どうやら二人も知らないらしい。

「そうか……まぁ幸い、被害者は一人も出なかったから、大きなニュースにはならなかったがね」

ホンダは言った。

「ただ、あの事件と今回の封鎖……。私には、奇妙に符号する点が多くあるように思えてならないんだ」

「どこがですか？」

「どちらも原因が不明で、今回も前回も、『爆発』が起こっている」

「『爆発』……」

ホンダが言う、今回の爆発とは、一昨日、自分達が青山霊園に足を踏み入れた直後に起こった、あの爆発のことだろう。

今朝の自衛隊のヘリからは、原因は、地下鉄から流出したガスが引火したものだと放送されていたが、当然、現場に居合わせた淳達は、本当の理由を知っている。

アレは、ガスの引火によるものでは、断じてない。悪魔――恐らくはあの雪男、ウェンディゴの魔法によるものだろう。

もっとも今、この場でホンダにそれを告げても仕方ないだろうと思ったので、淳は敢えて黙っていたが。

しかし、次のホンダの言葉で、淳の関心は青山での爆発ではない、別のものに移ることになる。

「更に、浅草の事件で率先して避難を手伝ったのは、翔門会だという話だ」

「翔門会？」

何故――そこで、そんな事件で、翔門会が出てくるのか、淳には分からなかった。普通は、警察や自衛隊が出動すべきではないのか。

「まぁ……ただの偶然かもしれないが、ちょっと出来すぎている気がしないか？　私の思った事は、それだけだ」

そこまで言って、ホンダは、小さくため息をつく。

「……どちらにしろ、外に出してもらえなきゃ、浅草まで調べに行けないからね。では、私は失礼するよ……生きていれば、また会おう……」

やがて、ホンダはそのように言うと、一人でブツブツと呟きながら、何処かへと去って行った。

「浅草での爆発か……。ホンダさんじゃないけど、確かに、似てる点は多いよね」

ホンダの背中を見送った後、ユズが言う。

「半年前……」

その時、アツロウがポツリと、そのように呟いた。

「アツロウ、どうした？」

「いや……何か、『半年前』に起こった事件って、他にも何かなかったかなぁ……って。ジュンは、何か引っ掛からないか？」

「え？　うーん……」

アツロウに聞かれ、淳もまた『半年前』、『事件』という単語から、何かヒットする項目が自分の脳内にあるかを検索してみるが、特にこれといった情報は出てこなかった。

だが確かに、アツロウが言うように、淳もまた、半年前に起きた何か他の事件について、どこかで聞いたような気がしていた……。だが、あくまで気がしただけで、どれだけ考えても、気が付くこと

はなかったが。

「ま、この話は一先ず置いといていいだろ。……にしても、息子のため……か。親って大変だなぁ……。俺には、よく分からないけど」

自嘲気味にそう呟くアツロウを見て、そうか、と淳は思った。

確かそれを聞いたのは昨日だったか、アツロウの両親は、どちらも仕事で海外に行っている為、彼は現在、1人暮らしで生活してるらしい。

だから、息子を心配するホンダの様子が、彼には新鮮に映ったのだろう。

アツロウの言葉を受けてユズも、

「……私もお母さんに、迷惑ばかりかけてる……。帰ったら、謝ろう……。だから、絶対に家に帰るんだ……」

と言った。

「……だな」

淳が頷く。

「その為にも、何とか、封鎖(ここ)から出る方法を探そうぜ」

「うん……。悪魔なんかに負けないで、絶対に生きて家に帰ろうね……」

そう言ってユズは、笑って気丈に振る舞おうとするが、やはりその笑顔はどこか、弱々しいものだった。

「……ねぇ、ジュンもやっぱり、自分のお母さんに会いたい？」

悲しみを紛らわす為か、突然、ユズがそんな事を淳に聞いてきた。

「え？あ、うーん……」

余りにもいきなりな質問だったので、淳としては、回答に困ってしまう。

「……そりゃ、まぁ、少しは」

淳としては、そう答えるのが精一杯だった。

無論、そんな彼の本心は、

『凄く会いたい』

――というものだったのだが。

普段することと言えば、大抵が、口喧嘩ばかり。

それでも。

自分を大事にしてくれる、母。

岳羽（たけば）――ゆかり。

彼女が、息子（ジュン）を大好きなように。

淳もまた、そんな母親（ゆかり）が大好きなのだ。

だから――

「……いや、違う。俺はマザコンじゃない」

「……？　別に俺ら、何も言ってねぇけど？」

突然、そんな風に、意味不明なことを言い出した淳に対して、アツロウとユズは、訝しげな目を向けるのだった。

2nd Day『吸血鬼事件』

「よぉ……オマエら、ちょっと話聞かせてくんねぇか？　『連続吸血事件』の事なんだがヨ……」

時刻は、午後三時過ぎ。

場所は、神田のとある古書店街。

そこで淳達は、突然出会ったカイドーに、突然質問されていた。

いや、厳密には、『突然』だと感じたのはあくまで淳達だけで、カイドーが至極落ち着いた声で先程のような質問をしているのを見る限り、どうやら、彼の方が淳達を待っていたと見るのが正確かもしれない。

それにしても、先程渋谷で再会したホンダと、ここにいるカイドーは、衛国寺で見た時は確かにコンビを組んでいたように見えたが、別に淳達のように、四六時中一緒に行動してるという訳でもないらしい。

まぁ、そちらの方が、カイドーらしいと言えば、カイドーらしいのだが。

話を戻そう。

神田を通り掛かった淳達は、突如現れたカイドーに、『連続吸血事件』を知らないかと聞かれたが、それを受けて淳は、

「聞いたことはあるけど……詳しくは知らないな」

と答えた。

「……知らねぇか？　大勢の人間が、血ィ抜かれて、干乾びた状態で見つかるって殺人事件だ」

『殺人事件』。

昼ドラのミステリー物ではよく聞くワードだが、しかし、フィクションではなく、こうして現実で耳にすると、また違った響きがあるな、と淳は思った。

「半年くらい前からニュースになってるが、犯人はまだ捕まってねぇ……。首筋に傷があるモンだからヨ、吸血鬼の仕業だって言われてんだ」

「ハハハ……」

思わず、淳は小さく笑ってしまった。

確かに、首筋に傷でも残っていれば、そのような噂が流れるのも無理はないが、現実的に考えれば、それはどう考えても、そんな噂を流すことで、犯人が満足感を得る為に、ナイフや針などで作為的に残した、吸血鬼とは関係ない、ただの傷痕だろう。

しかしカイドーは、そんな淳に対して、

「……いや、俺的には、改めて考えてみるとヨ、コイツはマジに吸

血鬼の仕業じゃねぇかって、思えてきてな」

と、言った。

「……なんでそう思うんだ？」

「テメェら、ＣＯＭＰを持ってんだろ。普通のじゃねぇ、悪魔を喚び出せるヤツだ。……オレも持ってんだろ？　そのＣＯＭＰをヨ。それで、あの事件を起こしたのは、悪魔の一種なんじゃねぇかって、そう思うようになった」

「……」

カイドーの考えを聞いた淳は、なるほど、と思った。

確かに、そういう考えても出来る。むしろ、そちらの方が、確率としては高いくらいだ。全ての犯行が悪魔の仕業だと考えれば、未だに犯人が捕まっていないというのも、納得がいく。

そもそも、殺人事件の犯人が捕まらないなど、法治国家であり、優秀な警察機関が存在する、この日本においては、かなり珍しいことなのだ。

実際、この国で起こる殺人事件の検挙率は、約九十五パーセントと、かなりの数字を誇っていることを、淳は何かのテレビ番組で見たことがある。

「フン……だからヨ、テメェらに聞きゃ、何か分かるかと思ったんだが……。昔からＣＯＭＰを使ってるって雰囲気じゃねぇみたいだな？」

「いや、当たり前だろ」

どれだけ異常な過程を辿れば、こんな物騒な代物を常備しなければならない、ありえない生活環境が出来上がるというのだ。

カイドーは一つ、ため息をつくと、

「……まぁ、仕方ねぇ」

と、言った。だが次に彼が発した言葉に、淳は僅かながらも、戦慄することになる。

「オレぁヨ……コイツを使いこなして、吸血鬼ヤローを見つけ出し、ゼッテーにブッ殺す……！」

そこには、微かな――しかし確かな、憎悪の感情が含まれていた。

そんなカイドーは、まるで――

「……吸血鬼に恨みでもあるのか？」

淳は聞いた。

すると途端に、カイドーの表情が暗いものになる。

「恨み……か。そうかもしれねぇな……」

それは、淳にと言うより、自分自身に対して語りかけているようだった。

「……オレの兄貴は、あの事件で死んだんだ」

「えっ？」

思わず、淳は目を大きく見開いた。

しかしそれは、例の事件の被害者達の中に、実は、カイドーの兄が含まれていたのを聞いたからではない。

そんな重要なことを、出来ることなら、他人には吹聴したくない筈のことを、自分にアッサリと打ち明けたカイドーの態度が意外だったからだ。

「恥さらしが……首から血ぃ流してヨ、不様にブッ倒れてやがった」

「は、恥さらしって」

身内に対して、まるで軽蔑しているかのような言葉を吐くカイドーに、淳の隣にいたアツロウが、何か言いたそうな顔をしたが、彼が何かを言う前に、カイドーが、

「おっと……悪ぃな。話ってのはそれだけだ。何か情報があれば、提供してくれヨ」

と言ったので、そこでこの話は打ち切りになった。

「ああ……それから、オマエの従兄の話だがヨ？」

しかし最後に、ついでという感じで、カイドーは言った。

「何か分かったのか？」

「何人かは、直に指示しといたが、ケータイが通じねぇせいで、連絡が上手く取れねぇンだ。悪ぃがこの状況が続くようじゃ、見つけるのは難しいかもしれねぇ」

「そうか……」

カイドーの言葉は、淳にとっては残念なものではあったが、かといって、ここでカイドーを責めるのは、お門違いだろう、と淳は思った。第一、こんな状況であるにも関わらず、自分のような赤の他人の頼みを聞いてくれるだけでも、十分に有り難いのだ。

ならば、過度な期待を彼に押し付けるのは、かえって失礼だろう。

「別に構わねぇよ。こんな状況だし。悪いな、面倒なことを頼んじまって」

淳がそう言うと、カイドーは目を逸らしながら、「別に、気にしちゃいねぇよ」と言った。

「……」

淳はそんなカイドーから、僅かなツンデレ気質を垣間見たような気がした。

別に萌えないけど（当たり前だ）。

「ま、悪ぃが……そういう事だ。じゃあヨ……」

やがてカイドーは、相変わらず、決まりが悪そうな表情のまま、淳達の前から姿を消した。

「カイドーの兄貴って……あの事件の被害者だったんだな……。知らなかったぜ」

アツロウが言った。

「でも、よく思い出してみれば確かに、半年辺り前に、ダイモンズでちょっとしたゴタゴタが起きてるって聞いてたけど……」

アツロウの言葉に、淳が頷く。

「当時のリーダーが突然死んだことによる混乱は勿論、次のリーダーも決めなくちゃならなかっただろうからな」

「……で、結果的に、カイドーがリーダーになったんだよね？」

今までの会話を黙って聞いていたユズが、ここに来て口を開いた。

「まぁ、前リーダーの弟となれば、妥当な線じゃないのか？　それにホラ、昨日の朝、渋谷駅でカイドーが、自衛隊に詰め寄るチンピラを窘めてただろ？　たった半年で、あれだけのカリスマ性を身につけるなんて、元々の素質もあったんだろうぜ」

淳が微笑みながらそう言うと、アツロウが、「ん？」と、何か引っ掛かるとでも言うように、お気に入りのニット帽の上から、頭を押さえた。

「半年前……」

「アツロウ？」

「……あ、そうだ！　思い出した！」

「いやだから、急にどうしたんだよお前……」

突然、テンションをガラリと変えてきたアツロウに対して、淳とユズは少し引いていた。

「ホラ、ジュン、さっき渋谷で、ホンダさんが言ってたことを覚えてるか？　あの後、俺とお前で、「半年前と言えば、他にも何か、別の事件が起きてなかったか」って言っただろ？　アレ、今話してた連続吸血事件の事だったんだよ」

「あ、そうか」

そうか――どうりで、ホンダの話を聞いた時、心で何かが引っ掛かったように感じた筈だ、と淳は得心がいった。

浅草での爆発についてはあの時、ホンダの口から聞くまでは淳は知らなかったが、連続吸血事件に関しては、半年前から、毎日のようにニュースで流れているのだ。

だからこそ、余りテレビを見ない淳でさえ、頭のどこかにその情報が残っていたのだろう。

「え……じゃあ、ホンダさんが言ってた、浅草の寺社の爆発も、さっきの連続吸血事件っていうのも、どっちも半年前に起きてたって

こと？　……それって、偶然かな……？」

そう話すユズが疑問に思うのも当然だ。淳やアツロウにしても、この奇妙な符号点を、ハイそうですか、と無下にすることは出来なかった。

しかし。

「……」

淳は考える――確かに、無視出来ない偶然ではあるが、かと言って、奇妙過ぎると言う程の偶然でもないだろう。大体、山手線沿いを封鎖され、その内側で悪魔などという、魑魅魍魎が跋扈するこの東京内において、今更、何が奇妙だというのだ。

過去の事件のタイミングが、たまたま同じだったというぐらいで、いちいち頭を悩ませていれば、これから先、身がもたないだろう――と、そう思い、淳は無理矢理納得することにした。

ただの偶然だ。

必然ではない。

そうに決まってる。

じゃないと、またどこからかセトが「運命だよ！　運命運命！　これは運命だ！」と、メイメイうっせーんだよ、お前は羊か、的なノリで現れかねない。

いや、セトが現れることに関しては、今の淳にしてみれば、大い

にウエルカムな展開ではあるのだが――何せ、淳はあの男から、『ベル・デル』という悪魔についての情報を聞きたくて聞きたくて仕方がないのである――あの男は本当に神出鬼没で、今もどこで何をしているのか、淳には想像もつかない。

まさしく、掴み所のない、霧のような男なのだ。

「まぁ……その二つの事件の関連性については、今は考えなくてもいいだろ」

ややあって、淳は言った。

「でも、連続吸血事件に関しては、こっちの方も、封鎖から出る抜け道と同じように、情報を集めとくべきかもな……。その事件に悪魔が関連してるっつーカイドーの推測も、あながち根拠がない訳じゃないし」

もっとも、それについてのカイドーの見解は、最早推測などではなく、セトの働きによって、ほぼ確信へと変わりつつあるのだが、そんなことは、この時の淳には知る由もなかった。

「それに、アイツにはナオヤを探すのを手伝って貰ってるしな。借りを作ってばかりいるのは、俺の趣味じゃない」

「だよなぁ」

アツロウが頷く。

「衛国寺でのこともあるし、俺達も、少しはカイドーに恩返ししなくちゃな」

「……でも、その事件について詳しく知ってる人なんて、今まで会った人達の中で、誰かいたかな？」

言いつつ、ユズは首を傾げた。

「『知ってる』だけなら、そりゃ、大きな事件だし、俺達も含めて、大体の人間が知ってるだろうけど……。『詳しく』となると、どうかな。咄嗟には思い付かないな……」

アツロウの言葉で、う～んと、三人は一斉に押し黙ってしまう。

しかしやがて、淳が「あっ！」と口を開いた。

「そうだ、昼間頃に出会った、ジャーナリストの……えーと、確か――そう！　ショウジさんとかならいいんじゃないか？　あの人は、そういう情報を集めることを仕事にしてんだから、うってつけだろ」

「あ、そうだよ、その手があったじゃん！　ジュン、冴えてるね！」

「いや～それほどでも……ある！」

有里淳、プチナルシスト化。

ともあれ。

「確かに、いい考えではあるな。それにもしかしたらあの人、赤坂トンネル以外に、他に何か抜け道を知ってるかもしれないし、会っておいて損はないだろ」

アツロウの言葉で、話は更にトントン拍子に進む。

「じゃあ、芝公園に行ってみない？　あそこなら、人がたくさんいるし、ショウジさんだって、この封鎖について、色んな人にインタビューしたいって言ってたから、いる確率は高いと思うよ」

そんな訳で。

淳、アツロウは、ユズの提案に乗り、再び芝公園へと向かうことにした――まさかその先で、大量の悪魔が出没し、人々を襲っているという事態に巻き込まれるなどとは勿論、考えもせず、三人は何の迷いもなく、芝公園へ続く道へと、足を進めるのだった。

2nd Day『カイドーとマリ』

セトは現在、神田の古書店街を、何をすることもなく、ただブラブラと歩き回っていた。

天界で『神』と会った時とは違い、服装は既に、白いスーツから、赤い甚平へと着替えている。燃えるような赤と、彼の髪が放つ銀色の輝きとが何ともミスマッチで、余り似合っているとは言えない。

そんな彼は現在、仲間であるレミエルと、上司（？）である『神』から、それぞれ1つずつ、頼み事を受けていた。

レミエルからは、かの翔門会――この『東京封鎖』に少なからず関与している、とある宗教団体――の巫女、九頭竜天音と、有里淳という少年を、何とか接触させること。

そして『神』からは、その有里淳を、『救世主』に仕立て上げろ、と言われている。

どちらもが、『有里淳』絡みだ。

「もっとも、レミエルと『神』とじゃ、立場に絶対的な差があっから、どうしても、『神』の命令の方が優先されるけどな……」

有里淳。

青い髪、青い目の、端正な顔立ちをした、猫耳ヘッドホンの少年。

しかしこれは外見的な特徴であり、彼について、セトが抱いている認識の根源は、更に別のところにある。

有里淳――彼は、知る人ぞ知る、世界を救った英雄――『死神に魅入られた青色』の、実の息子なのだ。

だからこそ、分かる。

有里淳を『救世主』にし、セトの『宿願』を叶えると同時に、世界をより良い方向へ導きたいという、『神』の考えは、セトにもよく分かる、理解できるものだった。

「……んー……」

しかし。

セトは思う――先程はああ言ったが、『神』が言うように、ジュンを『救世主』にするならば、先ずは、ジュンとアマネを接触させて欲しいという、レミエルの頼みを実行するべきではないのか――と。

レミエルは、アマネがジュンに『恋』をしているから、何とかその仲を取り繕って欲しい――と言っていたが、しかし、実際のところはどうなのだろう、とセトは思った。

思い返してみれば、アマネの恋心について語っていたのはレミエルだけであって、肝心のアマネ自身は、そんな事は一言も言っていなかったではないか。

だとすれば、その話は一から十まで、レミエルの虚言である可能

性もある。

いや、というか、間違いなくそうだ。彼の役割は昔から、選ばれた人間に『神』の言葉を伝えることであって、別に、男女間の仲を取り持つことではないのだから（そもそも、自分達天使は、人間の恋愛事情には、全く興味がない）。

「いや、一から十ってのは、ちと言い過ぎか……」

もしかしたら、アマネがジュンに恋心を抱いているというのは、本当かもしれない。

「……まさかとは思うけど……。女癖の悪さまで遺伝してねぇだろうな……」

ジュンの父親もまた、大勢の女性の心を惹き寄せる心の持ち主であったことを、セトはよく知っている。

「やれやれだぜ……。もし、今度会ったら、そこんところも指導してやるか……」

ある意味、女との付き合いは、悪魔やシャドウよりも厄介だからな――と、彼が自分の過去も踏まえつつ、そう呟きながら頷いていると――少し先の通りで、知った顔の人間がいるのを見つけた。

誰あろう、渋谷を牛耳っている不良グループ『ダイモンズ』のリーダー、二階堂征志。通称カイドーである。

「ん？」

しかし、よく見れば、彼は一人ではなかった。彼は現在、セトが知らない女性と、何かを話し込んでいる最中だった。二人の間に漂う空気は、どこか重々しい。

セトは何となく、カイドー達から見えない場所に身を隠して、その会話に聞き耳を立てた。

「タダシ君……危ない事は、もうやめて？」

見知らぬ女性（こんなクソ暑い中であるにも関わらず、何故か白衣を着込み、薄い青色の髪を赤いリボンでポニーテールにしていた）が言う。

「もしケガなんてしたら、お兄さんが悲しむもの……」

セトは物陰に身を隠し、二人に気付かれないように、こちらは顔を出さず、声だけを聞いていたが、突如、ガンッ！　と何かを強く蹴り飛ばしたような音がした為、思わず、気になって顔を出してしまった。

見れば、カイドーが顔を強張らせ、横のガードレールを蹴りつけているところだった。どうやら、先程の女性の言葉が、カイドーの中の何かを、酷く刺激させたらしい。

「……何度言わせんだ……。アイツの事を口にするんじゃねぇ……！」

（……）

カイドーが言う『アイツ』とは、『連続吸血事件』の被害者でも

ある、彼の兄のことだろうか？　と、セトは思った。

だとしたら、随分な言い草である。

「……ごめんなさい。でも、元はといえば私が……」

やがて、女性が遠慮がちに口を開いた。

「……聞こえねぇのか？　それをやめろって言ってんだヨ」

「……ごめんなさい」

「クソヤロウ……。普通に死ねばいいものを、オレの邪魔にばかりなりやがる」

再びカイドーは、怒りの矛先を横のガードレールに向け、そこを蹴りつけた。

ＣＯＭＰのハーモナイザー機能によるものか、或いは、彼の元々の脚力なのか、たった2回蹴りを入れただけで、その哀れなガードレールには、大きな凹みが出来ていた。

「フン……あんなアニキ、俺が殺してやりゃ良かったぜ」

言葉とは裏腹に、彼の言葉には、悲しみを必死で堪えている響きがあった。

「……タダシ君、そんな事、冗談でも言わないで……！」

「……るせぇヨ。テメェこそ、首突っ込むな。『アレ』は……オレ

の獲物だ。オレが始末を付けてやんヨ……。オマエは、大人しく引っ込んでろ……！」

そう言うと、女性の返事も待たずに、カイドーが何処かへと立ち去ってしまった。後には、やるせなさそうに佇む、白衣の女性だけが残った。

「……ごめんなさい。タダシ君。あなたの気持ちは嬉しいけど……。でも、私にも、引けない理由があるの」

やがては女性も、踵を返すと、その場から歩き始めた。しかし、セトにとっては悪いことに、彼女が歩き出した方向は、何と、セトが隠れている裏路地の、すぐ近くだった。

（おっと！）

セトは慌てて、女性に見つからないように、『混迷の霧』を身に纏いつつ、念のため、壁に背中を張り付けると、女性が通り過ぎるのを待った。

そして――例の女性が、セトのすぐ脇を通り過ぎようとした、正にその瞬間。

（……ッ！？）

セトは――感じた。

女性から発せられる、ある気配に。

人には、到底出しえない、闇の世界特有の、冷気にも似た気配。

長年、ペルソナ使いとして、悪魔と、そしてシャドウと戦ってきたセトだからこそ、分かる。

（……間違いない）

これは――悪魔の気配だ。

悪魔のオーラだ。

（だとしたら、マズイ！）

セトは更に、胸の動悸を激しくした。

自分が持つ特殊スキル、女神（イザナミ）の力である『混迷の霧』は、人間のあらゆる感覚から、自身の存在を隠してくれるが、それ以外の存在――シャドウや悪魔、天使など――には、その効果が一切及ばない。

果たして、この女性自身が、そもそも人に姿に化けた悪魔なのか、或いは、人間に取り付いた悪魔なのかは、セトには分からないが、一つだけ分かるのは――ここでこうして『混迷の霧』を発動させつつ留まっていても、必ず、見つかってしまうということだ。

そして――。

『……ッ！？　……誰だ！』

その女性、望月麻理（もちづきまり）は、セトが身を潜めている場所の真横に近付くと、（何故か、先程までとは全く違う口調で）バッとその場所に目を向けた。

……が、そこには既に、セトの姿はなかった。ただ、埃っぽい路地裏の、薄暗く無機質な空間が広がっているだけである。

『……？　……気のせいか……。てっきり、【クドラク】の手下がつけてきたのかと思ったが……』

それでも、彼女――否、『彼』はしばらく、その路地裏に、注意深く目を走らせていたが、ようやく、やはり勘違いだったかと納得し、その場から姿を消した。

「……」

そして、そこより少しだけ上の位置。

具体的には、その路地裏の脇に建つ、一軒の古本屋の屋上の屋根から、ひょっこりと、セトが顔を覗かせていた。

そして、完全にマリがいなくなったのを確認すると、まるで忍者のように身軽な動作で、アスファルトの道路の上に飛び降りる。

「ふぅ……危なかった」

まさか、あんな大人しそうな女性の体内に、悪魔が潜んでいるなどとは、思いもしなかった。

どうやら彼女は、アマネと同じく、何らかの形で悪魔と契約を交わし（アマネの場合は天使だが）、その身を提供している人間らしい、とセトは判断した。

少なくとも、悪魔が一方的に彼女の体を乗っ取っている訳ではないだろう。それならば、彼女とは親しい（と思われる）仲のカイドーが、気付かぬ筈がない。

「アマネならともかく……あんな、普通の姉ちゃんまで、悪魔と契約してるだと……？　やれやれだぜ」

まぁ、セトはマリという人間について、この時点ではよく知らない為、果たして、彼女が本当にただの一般人なのかは知らないが――仮に、彼女が以前まで、悪魔について何も知らなかった人間だとしら……。

それはつまり。

普通の人間でも悪魔と契約出来るほど、この東京の魔界化は進んでいる――と、そういう事になる。

……。

「……いや」

別に……いいか。と、セトは思った。むしろ、有里淳を『救世主』にする、と『神』が決定した今となっては、（友人であるビシャモンテンには悪いが）東京の魔界化は早ければ早いほどいい。

それよりも、セトにしてみれば、先程、マリ（？）が口にした、『クドラク』という名前の方が気になった。

『クドラク』。

その名前に、セトは聞き覚えがあった――何せその名前は、吸血鬼というジャンルに限定すれば、かなりの有名所だからだ。

吸血鬼。

吸血鬼と言えば、そう、真っ先に連想するのはやはり――カイドーの兄が巻き込まれた、あの連続吸血事件だ。

「……」

うーん、と、セトが唸る。

「偶然じゃあ、ねえよな……」

どうやら――ショウジに頼るまでもなく、期せずしてではあるが、自分は、この事件の真相に、かなり近付いて来てるらしい、と、セトは冷静に判断した。

勿論、一番真相に近付いているのは、自分ではなく、あの白衣の女性なのだろうが。

「……だ・と・す・る・と」

セトの独り言が続く（悲しい奴とか言うなや）。

「あの姉ちゃんと契約してる悪魔ってのも、大体予想はつくよな……。にしても、やっぱりこの事件、メンドくせぇ悪魔が絡んでやがったか。よりにもよって、『クドラク』かよ……」

ワリぃな、レミエル。

そして、『神』。

どうやら、アンタ等の頼み事を実行するのは、もう少し先になりそうだ――と、そのように呟いて。

やがてはセトも、一人、思案に耽りながら、古書店街から離れ始めた。この時、彼の脳裏には、この手のオカルト話に詳しい、一人の女性の姿が浮かんでいた。

2nd Day『東京タワー下のバトル（2）』

――芝公園、東京タワー下。

赤坂トンネル以外の封鎖の抜け道、及び連続吸血事件などの情報を得るべく、淳達は昼頃に出会ったジャーナリスト、ショウジに会う為、この東京内において、最も人が集まっているであろう芝公園へとやって来たのだが――。

悲しいかな、そこで彼等を待っていたのはショウジではなく、数体の悪魔達だった。

「わっ、悪魔がいる……！　気付かれたら面倒だよ、今の内に戻った方が……」

そこより少し離れた場所から、悪魔達に聞こえない程度の声で、ユズが淳に耳打ちする。

だが、次の瞬間には、その隣にいたアツロウが、すぐさまユズの提案を却下した。

「……ッ！！　……いや、おい、見ろ！　引き換えしてる場合じゃないぞ！」

見れば――。

「い、いやぁ……！　誰か、助けて！」

「な、何だ、このバケモノ！　く、来るなぁ！」

そこにいたのは、悪魔だけではなかった――何と、約十人程の一般人が、今まさに悪魔に襲われようとしているところだった。

いや、『何と』という表現は、些か的外れかもしれない。ここ、東京タワー下は現在、多くの人々が集まっている芝公園のすぐ近くにある。

ならば、ここにも一般人の何人かは、いても不自然ではないだろう――同時にそれは、このままだと近い未来に起こる、もう一つの最悪の出来事を示唆していた。

「あの人たち……、悪魔に襲われてる！？」

ユズの目が、驚愕で大きく見開かれた。

無論、この東京内において、悪魔が人間を襲っているのは知っていたが、実際にその現場に居合わせたのは、今回が始めてだった。

「クソっ……！　ヤベェなっ！」

淳が額から一筋の汗を流しながら言った、その時だった――彼より、数メートル離れた横の地点に、一人の男性警察官が現れた。

「……！　何だ、今の悲鳴は！？」

「えっ！？　警官が……？」

ユズが驚く。

やがて、その警官はすぐに、前方で繰り広げられている、現実離れした光景に気付いた。その顔から血の気が一気に引いていくのが、離れた場所にいる淳にも分かった。

「なっ……何だこのバケモノは！　クソっ、民間人が危ないっ！」

警官は、すぐさま民間人を助けようと走り出そうとしたが、直前で、淳達の存在に気付いたようだ。腰に差していた警棒を取り出しつつ、顔だけを淳達の方に向けて怒鳴る。

「き、キミたち、早く逃げるんだっ！」

……。

いや、アンタが逃げろよっ！

――と、淳は言いかけたが、寸前で思い留まった。よく考えれば今の状況下での、この警官の言葉は、全くもって妥当なものだ。

確かに、自分達は改造ＣＯＭＰを持った、悪魔に対抗できる存在――『悪魔使い』ではあるものの、傍から見れば、民間人とは区別がつかないだろう。

かと言って当然、淳達にしても「あ、そんじゃ、お言葉に甘えて、ここはトンズラさせて頂きますネ！」と、素直に警官の言葉に応じる訳にもいかない。

どうやら、襲われている民間人を助けるよりも、先ずはこの警官を説得する方が先決らしい。

「どうしよう、ジュン？」

困り果てたという表情で、淳に尋ねるユズ。

「どうするもこうするも……あの警官じゃムリだろ」

淳は言った。その言葉に、アツロウが小さく頷く。

「そうだな……！　ＣＯＭＰもない警官じゃ悪魔と戦えない！　オレたちが何とかしなきゃ……。取り合えず、この人を巻き込む訳にはいかない。ここはウソをついてでも、避難してもらうんだっ！」

「……う……うん……」

そんなユズの相槌は、「言ってることは分かるけど、じゃあ一体、どんなウソをつけばいいのか？」と、２人に対して暗に語りかけていた。

が、淳達がそんな事を話し合っている内に――

「何をしてるんだ、キミたちっ！　私があのバケモノ共を食い止める！　その間に、キミたちは早く逃げろっ……！」

何と恐ろしいことに、その警官は、自ら死亡フラグを立て始めた。

自分が食い止めるから、その間に逃げろって……。

まさか、そんな台詞を、現実世界で聞くことになろうとは、淳は夢にも思って見なかった。

（――いやもう、ＣＯＭＰの有無とか関係なく、あの人にこの場を任せちゃいけねぇ！）

淳は決意した。

「あ、オレたちは大丈夫っス！　それより芝公園へ行って下さい、バケモノが一体、そっち行ったんスよ！」

そんな中、咄嗟に機転を効かせたアツロウの台詞に、警官の意識が、一気に彼の言葉へと引き付けられる。

「し……芝公園だと！？　あそこには、多くの民間人が……！」

もう一押しだ、と判断した淳が、力強く叫んだ。

「ここは俺達に任せて、早く芝公園へ行って下さい！」

相手が警官なので、一応敬語。

仮にも国家権力だし。

「そうだよ、芝公園をお願いします！　ここの人達は、俺達が何とか逃がしますから！」

アツロウの言葉に、警官はしばらく迷うような素振りを見せたが、やがて、意を決したように頷く。

「……すまない！　絶対にムリはするな！　キミたちもちゃんと逃げるんだぞ！」

言った後、すぐに、その警官は芝公園へと向かって走り出した。

――そしてそのすぐ後ろを、一体の悪魔がついて行った。

「って、おいおいおい！」

余りにも自然な流れで、その悪魔（ガギソン）が警官の後を追った為、淳は、うっかりそれを見過ごしてしまった。

次には、ユズがその事に気付く。

「なっ……！　ちょっと、悪魔が警官について行っちゃったよ！」

「ま、マズイぞ！　早く追わないと……！」

「アツロウ！　気持ちは分からなくもないけど、先ずはここの人達を助けるぞ！」

淳の檄により、アツロウは僅かながらも、冷静さを取り戻す。

「わ、分かった……！　ジュン、やろう！　ユズも……準備はいいなっ！？」

「もうっ……分かってるよ！　悪魔を逃がさなければいいんでしょ、逃がさなければ……！」

「ああ、早くコイツらを倒して、逃げた悪魔を追わないとな！　これ以上、悪魔達を芝公園へ向かわせる訳にはいかない！」

言うが早いか、アツロウの台詞が言い終わる頃には、既に三人は、ＣＯＭＰから悪魔を喚び出していた。

今回も、淳達は『デビオク』や『邪教の館』などを駆使して、何体か、新しい悪魔を加えていた。

淳は天使『エンジェル』、女神『サラスヴァティ』を。

アツロウは幻魔『トラロック』、龍王『マカラ』を。

ユズは妖精『ジャックフロスト』、及び『ジャックランタン』を、それぞれ召喚した。

それを見た、一人の女性の民間人が叫ぶ。

「きゃああっ！　あの子たち、バケモノを連れて来たわ！」

「えっ？　あ、えぇっ！？」

さあ助けよう！　と勢い良く駆け出そうとした淳は、そんな女性の思わぬ言葉に対して、戸惑いを禁じ得ない。

だがすぐに、まぁ、これもやはり、当たり前の反応なんだろうなぁ、と淳は思った。

悪魔もＣＯＭＰも知らない一般人から見れば確かに、自分達の仲魔と、今、彼女達を襲おうとしてる悪魔との区別なんて付きはしないだろう。

「あ、いや！　コイツらは大丈夫ですからっ！　俺達を信じて下さ

い！」

有里淳、必死。

その必死さが功を喫したのか、その女性は、さっきよりは大分、落ち着きを取り戻したように見えた。

「ほ、本当に！？」

……それでもまだ、完全な信頼を得た訳ではなさそうだが。

「本当です！　証拠に貴女達を守りますからっ！」

有里淳、超必死。

少し涙目になってきた。

意外と、彼は繊細な心の持ち主らしい。

だが、ギャグパートはここまでだった。

そんなやり取りをしている間も、敵悪魔達は待ってはくれない。

一気に、民間人達との距離を詰めて来る。

「……っ！　やっべ……！」

近付いて来た悪魔（キキーモラ）が、その女性社員を、指先の鋭い爪で切り裂く直前に、何とか淳は、女性とキキーモラとの間に割って入る事が出来た。

だが、女性を守ることは出来ても、自分自身の体も無傷で済ますことは出来なかった。

勢いのついたキキーモラの両手の爪先は、淳がその手首を掴んだにも関わらず、それまでの慣性が働いたせいで、数センチ程、淳の肩の肉に食い込んでしまう。

「あ……あぁぁっ！？」

ズブリ、と。

肩の筋繊維が、キキーモラの爪によって、確実に何本か断裂される音を聞きながらも、しかし淳は、キキーモラの腕を押し、肩に刺さった爪を抜こうとはせず、キキーモラの腕を掴み続けた。

そう、これでいいのだ。

肩に異物が食い込んだままというのは、淳にとってもいい気はしないが、こうして自分がキキーモラを抑えている内は、後ろの女性の安全は確保される。

アツロウが言うように悪魔を逃がさず、一般人の安全も確保する為には、確かに、この方法が一番確実だ――もっともそれは、自分の身も省みない程の、強靭な精神力を持つ、有里淳だからこそ取れる作戦だが。

「おいアンタ！　今の内に、早く逃げろっ！」

淳は叫ぶ。

……って、アレ？

この言葉、さっきの警官が言った台詞（死亡フラグ）と一緒じゃね？

しかしまぁ、この先、淳がどうなるかはともかくとして、彼の努力は無駄にはならなかったようだ。

淳の背後にいた女性は、つかの間、突然現れた少年が目の前に現れ、自分の身を守ってくれたという現実を認識出来ずにいたが、やがてハッと我に返ると、

「ご、ゴメン、ありがとうっ！」

と言って、真っ先に逃げ出した。

「よしっ……！」

淳は女性が十分に離れた事を確認すると、

「――らあっ！！」

と、気合いの掛け声と共に、キキーモラの両肩を、それぞれ右足で、交互に蹴った。

『交互に』と言っても、技の繋ぎが余りにも早過ぎて、傍からは、一回蹴った分の音しか聞こえなかったのだが。

キキーモラが仰向けに倒れたところを、サラスヴァティが『嵐の乱舞』で追い討ちをかける。

弱点属性である衝撃魔法を、無防備に受けたキキーモラはそれだけで、叫び声を上げる間もなく絶命した。

「ナイスだ。サラちゃん」

「いえ、礼には及びません」

『サラちゃん』というのは、『サラスヴァティ』という名前が、非常に呼びづらくウザったいという淳の提案により（ヒドい）、彼が独自に付けたネーミングである。

だが今のところ、彼だけが頑張って広めようとしているだけで、それほど普及していない。

「しかし、お気をつけ下さい。まだ敵は残ってます」

「ああ……分かってる」

そう、まさか今回の敵が、先程のキキーモラだけなど――そんな事、ある訳がないのだ。まだ数体程の敵悪魔は、依然として健在である。

気を緩めるのは、まだ早い。

と、淳が他の敵悪魔達を見据え、集中力を高めたその時――まるでラッパを大きく鳴らしたかのような音が聞こえた。

それは。

車のクラクションの音にも――似ていた。

「え？　何！？」

驚いたユズが顔を向けたその場所に、淳とアツロウが視線を向けると――信じられないことに、一般人を襲おうとする、敵悪魔達の背後から、一台の大型バスが全くスピードを緩めることなく突っ込んでくる光景が目に入った。

「マジかよ……オイっ！　止まれ！」

淳が手を大きく広げて、運転席に座っているドライバーに大声で訴えかけるが、彼はすぐに、そんな自分の行動が無意味なものであることを悟った。

なぜなら――フロントガラス越しに見えるドライバーの体を、何体もの大型犬のような悪魔が喰らっていたからだ。

淳の脳裏には、赤坂トンネルで見た、何台もの事故車の映像がフラッシュバックしていた。

恐らくは、悪魔の襲撃に遭い、使い物にならなくなった車両の数々――目の前のバスも今、正にそれらの事故車と、同じ運命を辿っている最中らしい。

幾つかの赤いカラーコーンを吹き飛ばし、バスが淳達へと向かって来るのと、そのドライバーの頭部が、一体の悪魔に噛み砕かれるのは、ほぼ同時だった。

フロントガラスに、ストロベリー・サンデーをグチャグチャに掻

き混ぜたような物体が飛び散る――このままでは、自分達は勿論、守るべき民間人達まで、バスに押し潰されてしまう！

「や、やべぇぞ、ジュン！」

「きゃあああ！」

アツロウとユズも、完全に落ち着きを失っている。もっとも、淳にしても似たり寄ったりな精神状態ではあったが。

勿論、突然の事態により、民間人のパニックも最高潮になっていた。全員が、「うわあああっ！」や、「ヒイイイッ！」といった、言葉にならない叫び声を上げ、全速力でそのバスの進路から逃げ始める。

だがそれでも、迫り来るバスの速度を見る限り、このままでは、民間人の虚しい逃走が失敗に終わるであろう事は、淳には既に予測がついていた。この状況を切り抜けるには、このバスを何とかして止めるしかない！

しかし――幾ら魔法を使えるからといって、これだけの大きさ、これだけの速さで向かってくる物体を、果たしてどうすれば止められるというのか？

……いや！

しかし、淳は気付いた。

何も、バスを止める必要はない――要は、仲間と民間人の命さえ助かればいいのだから。それは、このバスの速度を少しだけ緩める

だけでも達成できる。

ならば！

「サラちゃん！　タイヤを狙ってくれ！」

「承知しましたっ！」

淳の意図を察知したサラスヴァティが、タイヤに向けて『嵐の乱舞』を放つ、否、『嵐の乱舞』は狙いが付けにくい為、バスの下半分を大雑把に狙っただけなのだが、それでも、当たりさえすればそれでいい。

結果的には、サラスヴァティが放った『嵐の乱舞』は、見事にバスのタイヤを巻き込んだ。

が――。

「ジュン、駄目です！　止まりませんっ！」

バスは一瞬、ガタンと揺れはしたものの、その速度を殆ど緩めてはいなかった。

「まだだっ！」

しかし淳とて、（サラスヴァティには悪いが）それだけで止められるとは思っていない。サラスヴァティの魔法によって、バスの速度が衰えたのはほんの一瞬だが、その一瞬だけでも、淳が魔力を溜めるには十分過ぎるほど十分な時間だった。

「これならどうだ！」

魔力が凝縮され、淡い光を放っている両手の内、右手だけを地面につけると、淳はそのまま『氷の乱舞』を発動した。

彼の目の前に、巨大な氷の壁が形成され、次には、それが一気にバスへと向かっていく。

しかし当然、これだけではバスのスピードは衰えない。いや、確かに、氷の壁を突き破る際、ほんの少しよろめきはしたものの、まだその勢いは、完全には消えていなかった。

しかし！

「もう一つ！」

淳はそれさえも見越していた。そもそも、魔法を覚えてからまだ数日しか経っていないにも関わらず、自意識過剰になる程、彼は自惚れた人間ではない。

次に彼は、魔力を溜めたもう一方の手――左手を地面につけると、再び『氷の乱舞』を発動した。

また同じことを――と、そうは思うなかれ。この時の彼は、先程のように氷の壁を作ったりはせず、地面そのものを凍らせたのだ。

最初の二回――サラスヴァティと淳の魔法により、ただでさえ、僅かながらも安定感を欠いていたバスが、淳が作った即席のスケートリングが決め手となったのか、ものの見事にスリップする。

鼓膜を揺さ振るような轟音を立て、巨大なバスが横転した。

だが、淳が取った作戦は、「バスを横転させる」という意味では正解でも、「バスを止める」という意味では失敗だった。

何故なら。

氷は――滑るのだ。

バスは倒れはしたものの、そして、スピードこそ、先程よりは大分衰えたものの、それでも、氷の地面を滑ったまま、淳達へと向かって来た。

自分が立てた作戦の浅はかさを知った淳は、サラスヴァティを突き飛ばし、自身も横に大きく転がって迫るバスから逃れると、すぐに、後方にいるアツロウ、ユズ、そして民間人達に向かって、大声で叫んだ。

「逃げろおおおおぉぉぉぉぉぉっっ！！」

普段の彼からは想像だに出来ない声に当てられ、全員が散り散りになって、突っ込んで来るバスを躱す。

そして、カーリングよろしく滑りに滑った大型バスが、淳が作った氷の床を飛び出し、その先にある別のバスに衝突した瞬間、巨大な爆発が起こった。一瞬遅れて爆風が発生し、次には爆音が辺りに響き渡る。

「……っ！！」

反射的に、淳は顔を腕で覆った――爆発の恐ろしいところは、爆熱は無論のこと、それによって起こる爆風にある。

果たして、彼がそんな雑学を知っていたからこそそうしたのか、それは定かではないが、その防御法に限れば、淳のとった行動は正解だった。

結果として、彼が負った傷は、半端な長さの袖口から露出した肌への、軽い火傷だけだった。

やがては爆風も収まった頃、彼は今度からは長袖にしようかな、と思いつつ、ユズやアツロウ、民間人達がいるであろう方向に視線を向けた。

しかし見えたのは、爆発によって横転した車、及び激しい炎と、そこから立ち上る黒煙だけで、肝心の仲間達の姿が見えなかった。

冷静に考えて、最悪の事態でないならば、彼等は、バスを避けた後、車と炎によって離れ離れになってしまったと見るのが妥当だろう。

「アツロウ！　ユズ！　無事か！？」

おぼつかない足取りで立ち上がり、頼むから無事でいてくれと思いつつ、淳は声を張り上げた。

すると。

「その声はジュンか！？　こっちは無事だ！」

というアツロウの声と、

「私も……他の皆も無事だよ！」

というユズの声が聞こえてきた。

二人の台詞から察するに、彼等もまた、別々に分断してしまったらしい事が分かる。だが、無事であるのは間違いない。

思わず、淳は大きく安堵の息をついた。ユズが言った「他の皆」とは、悪魔に襲われていた民間人のことだろう。もしそうならば、何とか、一人も死なせずに済んだということだ。

しかし。

どうやら、安心するのはまだまだ早いらしい――と、淳はすぐに思い知らされることになる。

よくよく考えてみれば、自分達が避けられたということは、敵の悪魔達もまた、避けることは不可能ではなかったということだ。

見れば、淳の視界のあちこちから――今までどこに隠れていたのか――数体の悪魔が沸いて来るところだった。

それだけではない。例の大型バスに乗っていた悪魔達もまた、ゾロゾロと這い出して来ているではないか。あれだけの爆発である。淳としてはてっきり、焼け死んだものだとばかり思っていたのだが……。

火炎属性に耐性でもあったのだろうか？

（……まぁいい）

やるべき事は変わらない。

「アツロウ！　ユズ！」

炎の向こう側に向かって、淳が叫ぶ。

「お前らは、その人達を連れて芝公園に行け！」

「お前はどうするんだ！？」

と、アツロウ。

「生憎、俺はバスから降りて来た団体客の相手で手一杯だ！」

淳は両手をグッ、と握っては開き、握っては開いてを繰り返した。

火傷こそ負ったものの、神経系に影響はなかったらしい。

「そんな！　ジュン一人なんて――」

「るっせぇよボケ！　いいから行け！！」

何か言いかけたユズの言葉を、淳が遮った。

「最初の目的を忘れんな！」

まずは、民間人の安全の確保。

それが第一だ。

しばらく、炎の向こう側にいるユズは沈黙した様子だったが、やがて、

「うん……分かった、ジュン！　お願い、死なないで！」

と言った。

「任せろバカヤロウ！　……それからアツロウ、ユズ！」

再び、二人の名前を呼ぶ淳。

それを受けて、アツロウとユズが、「おう！」「何！？」と返す。

そして、淳は一言。

「任せたぞ！！」

と言った。

最初、見えない位置にいるアツロウとユズが、驚いたような気配がしたが、やがて二人は「分かった！」「任せて！」と力強く答える。

次には、芝公園へと向かうべく、走り出した2人と、民間人達の足音が聞こえたので、淳はゆっくりと、目の前に広がる悪魔達を見渡した。

「東京を観光するにあたって、東京（ここ）タワーを選んだのはなかなか殊

勝な心掛けだが……。どう考えてもマナー違反だろ、お前ら」

そして淳はスッと僅かに腰を落とすと、

「つーか俺、実は東京タワーに来んの、今日が初めてなのに……見事に台無しだろうがぁっ！」

と叫んで、一気に駆け出した。

その背後で、一体の悪魔が、スッと燃え盛る炎を飛び越え、彼の仲間――アツロウかユズのどちらかを追い掛けて行ったことに、淳はとうとう、最後まで気付かなかった。

2nd Day『東京タワー下のバトル（2）―2』

――東京、野外音楽堂。

「……という訳でぇ！　『ジュン君とアマネ様とミクちゃんを、上手くくっつけちゃおう大作戦！』の計画内容を、今から話し合いたいと思いまーすっ！！」

「……はっ？」

その観客席の一つに腰掛けていたセトが、一人の少女の大声に対し、呆然としていた。

目の前では、彼が世話を見ている元翔門会の少女――鮠美海狗（はやみみく）が、ズズーンと仁王立ちしている。

「だ・か・ら！　どうすればジュン君とアマネ様とミクちゃんをベターッ、とくっつければいいのか分からないセトさんの為に、このミクちゃんが知恵を貸してやろうってんじゃないですか！」

「何で遥かなる高みから物を言ってんだよ、テメェは」

セトが言う。

ちなみに、そんな彼の隣では、ショウジこと、東海林が座っていた。

先程まで、セトとショウジは、お互いが持つ情報を交換していた

ところだったのだ。

そんな中、軽い世間話のつもりで、セトはレミエルから頼まれていた事を、ポロッと漏らしたのだが（無論、天使であるレミエル自身のことは伏せている）、彼は早くも、それを後悔し始めていた。

ミクは今を生きる女子高生。この手の話が大好物なのだ。そんな訳で彼女は、すっかりテンションを上げてしまったのである。

「大体、ジュンとアマネだけならともかく、何でお前まで頭数に入ってんだよ」

そんなセトの言葉に対し、ミクは「ふっ」と不敵な笑みを浮かべる。

「当たり前じゃないですか！　私だって、ジュン君に惚れてるんですよ！　ほてってんですよ！」

「ほてってんのかよ……。何かエロいな、その表現。つーか諦めろよ。アイツはきっと、お前のことなんか覚えちゃいねーぞ」

「本来なら、ジュン君と誰かがくっつくなど、ミクちゃんとしては見過ごせないのですが……」

「馬鹿なっ！？　完膚なきなまでにシカトしただと！？」

「しかぁし！　相手がアマネ様となれば、流石のミクちゃんも一歩退かるを得ないですよ！　ですから私は、甘んじて愛人のポジションに収まりましょう！」

「お前、その言葉の意味分かってて言ってんのか！？」

「勿論、知っていますとも！　いわゆる、セックスフレンドでしょう？」

「違ああぁぁぁ……うと断言出来ないところが辛い！」

他にも、中国などでは、普通に恋人関係という意味で認識されており、愛人＝不埒な関係とは限らないのだ。

「いや、そこは否定してあげましょうよ……。人生の先輩として」

流石に突っ込みたい気持ちを抑え切れなくなったのか、セトの隣に座っていたショウジが、ため息混じりに呟く。

そう。

有里淳を初めとする、例の仲良し三人組は、このショウジという女性ジャーナリストが、現在、芝公園にいると踏んでおり、だからこそ、ここより少し離れた場所――東京タワー下において、命懸けの戦いを繰り広げているのだが……ショウジがここ、野外音楽堂にいる以上、そんな目論みは、見事に外れてしまっている事になる。

「つーか、お前の意見なんかいらねぇんだよ！　俺とショウジちゃんは今、大事な話をしてんだ！　どっか行け！」

「いやだから、セトさん。『ちゃん』はやめてって言ってるでしょう？　そろそろ本気で訴えるわよ」

ジロリ、とセトを睨みながら、ショウジが言う。

「ま、まぁとにかくだ」

誤魔化すように、セトがコホン、と咳ばらいをした。

「なぁミク、確かにジュンとアマネを会わせるのも大事だけど、今はそれどころじゃないんだよ。連続吸血事件、知ってんだろ？　今の俺には、そっちの方が重要なんだ」

「そこが甘いっつってんですよ！！」

ビシイッ！　と、人差し指をセトへと向けるミク。

「……何かお前、段々、俺に対する口の聞き方が悪くなってない？」

最近、めっきり出番が少なかったから、フラストレーションが溜まっているのだろうか？

「『ローションが溜まってる』？　何、変態チックなこと言ってるんですかセトさん」

「言ってねえっ！！」

そもそも、ローション＝変態という方程式にも、セトは大いに異議があった。

「ほほぅ？　では一体、何を思って『ローション』などという言葉を口にしたのですか？セトさん」

「いやだから、言ってねぇって……あ～ホラ、アレだ！　ローショ

ンには、『化粧水』って意味もあるだろ！」

「フムフム。でも、『化性水』と書いても、『けしょうすい』と読むことは出来ますよね？」

「確かに出来るっちゃあ出来るが、何故、わざわざそんな書き方をするよ！？　しかも、異常に分かりにくいし！　無駄に読者を混乱させるなや！」

ミクのキャラクターが、確実にエロ路線へと向かっていることに対して、ヒシヒシと危機感を覚え始めるセト。

そんな中。

「でも、セトさん」

と、ここでショウジが口を開いた。

「私、事情はイマイチ分からないんだけど、恋愛事に関しては、セトさんよりもミクちゃんの方が詳しいんじゃないの？」

「む……」

「ミクちゃんはホラ、今時の女子高生だし」

「むむ……」

確かに、ショウジの言うことにも一理ある……とセトが思いかけたと同時に、ミクがトドメの一撃を放った。

「つまり恋愛事に関しては、三十を過ぎたオッサンよりも、私のようなピチピチの女子高生の方が、うってつけって訳ですよ！」

「ぶっ殺してあげましょうかぁ！？」

既に年老いた自分では、とても若者のセンスにはついていけない……セトがそう思ったのと、そこより少し離れた東京タワー下において、巨大な爆発が起きたのとは、ほぼ同時だった。

◆

◆

それより数分後。

「なっ、何よコイツ！？」

悪魔に襲われたバスの突然の乱入により無理矢理、仲間である淳、そしてアツロウと隔離されてしまった谷川柚子（たにかわゆず）は、突如、目の前に現れた謎に悪魔に対して、動揺を隠し切れずにいた。

いや、『悪魔と思われる存在に対して』――と、言った方が正確かもしれない。何せ、いきなり出現したソレは、限りなく、人間に近い外見をしていたからだ。

黒い革張りの繋ぎの服に、死神を彷彿とさせる大鎌。何故か、頭

の上からスッポリと白い布を被っている。そのお陰で、顔立ちは勿論のこと、性別さえも分からなかった。体だけを見れば女性のようにほっそりしているが、よく見れば、細身な訳ではなく、必要な部分に、必要な分だけの筋肉がついていることが分かる。

「私は、今は眠りし不死の王、ベル・デル様の配下が一人、マカーブルという者です。どうか、お見知りおきを……」

そう言って、スッと、マカーブルは恭しく一礼する。

「……」

何と言うか、何で無駄に礼儀正しいんだよとか、行儀良くしたところで、そんな大きな鎌を持ってる以上、余り意味はないんだとか、何で頭に布を被せているのだとか、ユズとしては、とにかく突っ込みたい気持ちが満載だったのだが、それよりも彼女が気になったのは、マカーブルが呟いた一言――『ベル・デル』という名前の方だった。

『ベル・デル』。

不死の悪魔――らしい。

「う、うわぁ、また何か出たぞ!?」

「た、助けてぇ!」

勿論、マカーブルの出現に対して、驚いていたのはユズだけではない――彼女が引き連れていた何人かの民間人もまた、酷く動揺していた。

改造ＣＯＭＰなど、悪魔に対抗できる手段を何一つ持ち合わせていないだけに、その度合いはユズよりも激しい。

「……皆、ここは私に任せて、先に行って下さい！」

そんな彼等に対して、ユズは言った。

「え！？　で、でも……」

いくら自分の命が惜しいとは言え、一人の女の子を置いて逃げるなど、流石に気が引けたのか、民間人達の何人かが、戸惑った表情をする。

「私は大丈夫ですから！　早く、安全な場所に行って下さい！」

更に強い口調で、ユズが叫んだ。

そんな彼女の隣では、仲魔であるジャックフロスト、ジャックランタンが、油断なくマカーブルを見据えている――いつでも来い、といった様子だ。

「わ、分かった……スマン！　ありがとう、君も、どうか気をつけて……！」

最後までユズを気にかけながら、彼女の後ろにいた民間人達は、マカーブルを避けるように、芝公園に続く道へと走り出した。

そんな彼等を邪魔しようと、マカーブルが妨害を仕掛けるに違いないと踏んだユズだったが――驚くことに、マカーブルはアッサリ

と彼等を見逃した。

見れば、マカーブルは去り行く民間人には見向きもせず、少し下を向いて、ブルブルと震えていた。

そして、何だろう？　と、ユズが思った次の瞬間、マカーブルが、バッと顔を上げ、

「す、素晴らしいぃぃっ！！！」

と、大袈裟なまでに感動していた。

「……」

「自分の身を犠牲にし、か弱き命を救おうとするなど、何ということでしょう……素晴らし過ぎるじゃありませんか！！　今の時代、人間の心は酷く荒んでるとの噂を聞きましたが、貴女はなんといい方なのでしょう！　もし、貴女がその珍妙な機械さえ持っておらず、別の形で出会っていたなら、きっと、私と貴女は、最高の友達同士になれたに違いありません！」

「あー…」

それを聞いて、遅まきながらもユズは気付く。どうやらこの悪魔は、民間人達よりも、悪魔を喚び出すことが可能の改造ＣＯＭＰを持つ、自分の方を優先したらしい。

見れば、マカーブルは感動の余り、その両目から、大粒の涙を流していた――否、厳密には、先に述べた通り、彼は頭からスッポリと白い布を被っていたので、よく分からないのだが……。

恐らく、目があると思われる場所から、透明な液体が滲んでいた為、多分そうなんじゃないかな、とユズは思ったのだ（鼻水という線もなくはないが、それは嫌過ぎる）。

……というか。

「もしかして、実は悪魔って馬鹿なの……？」

と、そんなユズに呟きに対し、彼女の両脇で臨戦体勢をとっていたジャックフロストとジャックランタンが、「違うホ！」「誤解だホ！」と、必死に目で訴えていたのだが、残念ながら、ユズはその事に気付いていない。

いや、或いは気付いている上で、無視しているのかもしれないが……。

「ふぅむ――」

やがては感動の涙も収まり、確認するように頷くマカーブル。

「そちらの麗しきお嬢さん――言うまでもなく、どうやら、貴女は女性のようだ」

相も変わらず、マカーブルは馬鹿丁寧とも言える口調で話し続けるが――しかし、その丁寧さが返って、ユズが抱いている不安感をより大きくさせていた。

「私の部下の報告では、貴女の仲間の中に1人、『アベル』の因子を持つ少年がいる筈なのですが――はて、あの青い髪の少年がそう

なのでしょうか？　或いは、白い帽子を被っていた彼なのか……ふぅむ」

「……？？」

（『アベル』？）

マカーブルが何を言っているのか、ユズには皆目分からなかった。

「しかしまぁ――いいでしょう。『アベル』の子孫を追い掛けるのは、貴女を殺し、そのＣＯＭＰを奪ってからにしましょう」

ニイッ、と微笑んで（るように、ユズには見えた）、マカーブルはそう言った。

そしてゆらあっと、流れるような動作で、鎌を大きく振りつつ、一歩、また一歩と、ユズに近付いてくる。

依然として、ユズにはマカーブルが何を言ってるのか分からなかったが、それでも、ここでこの悪魔を自分が倒さなければ、次には、他に改造ＣＯＭＰを持っている淳か、アツロウのどちらかが危ない、という事だけは理解出来た。

自分が――やらなきゃ。

自分が――戦わなきゃ、いけない。

「……」

本当は、怖い。

怖くて、仕方ない。

自分は淳のような度胸も力もないし、アツロウのように頭が良く、機転が利く訳でもない。

どこにでもいる――ただの女子高生だ。

出来れば、今すぐにでも逃げ出したい。

でも。

でも！

（淳は私に――『任せたぞ』って言った！）

「だから私は――頑張る！　お願い！　ジャックランタン、ジャックフロスト！私に力を貸して！」

「ホ！」

「任せるホ！」

ユズの掛け声に、二体の悪魔は、確固たる意志をもって頷く。

そんな彼女に対し、マカーブルはクスクスと、可笑しそうに笑った。

「『勇敢』と『無謀』は違う、とはよく言いますが――私にしてみれば、勇気も無謀も一緒ですね。だってそうでしょう？　恐怖や不

安を恐れずに立ち向かうことを、世間では『勇敢』と言うそうですが……恐れたり不安を感じたりするぐらいなら、最初から目を背ければいいのです。にも関わらず、無理に立ち向かおうなど……これを『無謀』と言わずして、何と言いますか？」

マカーブルは言う。

「今の貴女も、正しくそれと同じです。だから、優しくて優しくて仕方ない私が、教えてあげましょう――『勇敢』と『無謀』は違いませんが、無駄な勇気を出すぐらいなら、いっそその場で逃げ出すぐらいなら、むしろ愚かであるべきだ、と！」

「うるさいっ！　愚かだろうと何だろうと――それでも私は、彼（ジュン）の為なら、戦う！」

不死の王に仕える悪魔と、何者でもない、ごく普通の十七歳の少女。

そんな、誰がどう見ても、結果など知れている戦いの火蓋はこうして――切って落とされた。

2nd Day『東京タワー下のバトル（2）―3』

場面回想。

谷川柚子（たにかわゆず）の場合。

彼女が有里淳（ありさとじゅん）に初めて出会ったのは、今から約十三年前のことだ。

十七歳になったとあれば、普通なら、四歳の頃の出来事を克明に思い出せる人間は稀だろうが、ユズはそれでも、淳と出会ったあの日、あの時の出来事だけは、今でも、その場で起きているかのように、ハッキリと思い出すことが出来る。

その時ユズは、家のリビングで一人、絵を描いて遊んでいた。両親はどちらも用事で家を空けていた為、リビングどころか、家全体の視点から見ても、そこにいるのは彼女だけだった。

そんな時、不意に、玄関の方からチャイムが鳴り響いた。両親は出掛ける前に、誰か来ても出てはいけない、と彼女に言い付けていたが、まだ脳機能が完全に発達しきっていなかったユズは、アッサリとその言い付けを破った。

彼女が幼い声で『はーい』と言いながらドアを開けると、そこに二人の男女が立っていた。

栗色の髪の美しい女性に、その脚にしがみついて、ユズの視線から隠れている自分と同い年くらいの、一人の少年。どうやら、親子のようだった。

艶のある、青い髪のその少年は、どうやら人見知りが激しい性格らしく、恐る恐ると言った感じで、母親の脚の横から、こっそりと顔を覗かせ、ユズと目を合わせた。

そしてその時、ユズの体を何かが貫いた。

何て綺麗な目をしてるんだろう、とユズは思った。

この世に生まれ落ちてから、僅か四年しか生きていない彼女はまだ、何かに見とれたり、美しさの余り感動したという事はなかったが、その少年を見たとき、彼女は生まれて初めて、それを理解した。

二人の親子は最初、幼い自分が出たことに一瞬、虚を突かれたような表情をしたが、すぐに気を取り直して、母親は岳羽(たけば)ゆかりと名乗り、例の少年は有里淳(ありさとじゅん)と名乗った。

しかし、その名前を聞いた後、二人が何を喋ったのか、ユズはろくに覚えていない。だが、その時の、幼き日の淳の緊張した表情や、一回一回瞬きした際の様子などは、今でも彼女の記憶にしっかりと残っている。

有里淳と知り合うようになってから、彼女の人生は一変した。彼と一緒に遊ぶ時は勿論、夜寝る時に、明日また彼と会えると思うだけで楽しかった。ユズには、有里淳という存在自体が、一つの奇跡のように思えた。

そう、彼女が淳に対して抱いていた感情は、友情というよりは恋に近かった。しかし、彼と男女の付き合いをしようなどとは、ユズは全く考えていなかった。

そんな勇気がなかったというのもあるし、何より、自分と彼とでは、とても釣り合わないんじゃないかと思っていた。

それでいい。別に、特別な関係になれなくとも、自分は有里淳という少年の側にいるだけで、最高の至福を味わえるのだから。気持ちを打ち明けようとはせず、この恋が片思いで終わったとしても、彼女は満足なのだ。

だが、『東京封鎖』という、異常な事態に巻き込まれていく内に、そんな彼女の考えは、徐々に変わりつつあった。

彼女はまだ、この封鎖を二日しか経験してないが、それでも、平穏な日常というものが、如何に脆く、崩れやすいのかを悟るには十分だった。

同じように人の命も、この状況では、いともたやすく、儚く散ってしまう——情けない話、自分もいつそうなるか分からない。

ならば、例え駄目元でも、彼に自分の気持ちを伝えたいという気持ちが、この封鎖を過ごしていく内に、彼女の中で徐々に芽生えつつあった。

正直、もし淳がいなかったら、自分はとっくにこの封鎖を生き延びる事を諦めていただろう、とユズは思っていた。

悪魔が我が物顔で闊歩（かっぽ）し、人々を襲うという状況において、それでも自分の心が辛うじで折れずにいるのは、一重に、彼の存在が大きい。

淳が喜ぶのなら、自分も嬉しい。

淳が泣くなら、自分も悲しい。

そして、淳が生きてこの封鎖から出ることを諦めないと言うならば――自分も決して、諦めることはないだろう。

彼の役に立とうとするのは、ユズにしてみれば当然のことだった。淳がいなければ、今の自分もないのだ。谷川柚子という人間は、有里淳がこの世にいてこそ、初めて存在出来るのだ。

だから。

有里淳の役に立つ為ならば、彼女は恐れを振り切って、自分がどこにでもいる一般人であることも忘れ、悪魔にさえも立ち向かおうとするだろう――例えそれが、『ベル・デル』という、強大な悪魔の配下であろうともだ。

◆

◆

「――おやおや、お嬢さん。脚が震えていますよ？」

「……っ！」

嘲りを多分に含んだ声で、そのように、目の前の悪魔――マカーブルに指摘されたユズは、今更ながらに、確かに自分の脚が細かく震えていることに気付いた。

なんとか止めようとするが、まるで脚だけが自分とは別の生き物のように、震えは一向に収まる気配を見せない。

「どうやら、かなり前から、その妙な機械を使っていたという訳でもなさそうですね――フム、となるとやはり、貴方ではなさそうだ」

「……？」

マカーブルが最後に付け足した言葉の意味がよく分からず、柚子は眉をひそめる。すると、それを見てとったのか、マカーブルはこちらが聞いてもいないのに、勝手に自らの話を広げ始めた。

「いやね、実は数時間前から、私と同じく、ベル・デルの仲間である、『モムノフ』という悪魔と、連絡が取れないのですよ。最後の報告では、彼はその妙な機械を持つ悪魔使いを襲撃しに行ったとあるのですが――この封鎖内で、その機械を持っている人間は、まだそれほど多くはないでしょう？　ですから、てっきり彼が襲った悪魔使いとは、貴女達のことではないかと思ったのですが、そうなると――ふぅむ。とても残念でなりませんね。彼はああ見えて律儀な性格ですから、無事に任務を成功したなら――否、仮に失敗したとしても、まだ命があるなら、私に連絡を寄越さない筈がないのですが……。となると、やはり――ということでしょう。なるほど、全くもって残念です」

口調こそ淡々としたそれであるものの――その台詞を一言一句進めていくと同時に、自分に向けて放たれるマカーブルの圧力（プレッシャー）が、少

しずつ強くなっていくのを、ユズは確かに感じた。

モムノフとは――これは、ユズの単なる当てずっぽうに過ぎないが――恐らく先程、衛国寺でカイドーが倒した、あの青い鎧を着た悪魔のことだろう、とユズは察した。

それをマカーブルに教えるのは簡単だが、彼女はそうしなかった。

まず、これはあくまで自分の勘であり、確証は1つとしてないし、何より、そんなことを言ったところで、よりマカーブルの怒りを買うことになるのは間違いないからだ。ただでさえ勝率が少ない勝負だと言うのに、更に自分からそれを下げるような真似をする程、彼女は愚かではなかった。

『勝負』――そう、勝負だ。

今から自分がするのは、思春期の子供同士の殴り合いや、口喧嘩とは違う。全く違う。次元が違う。

殺すか、殺されるか。文字通りの――『殺し合い』、なのだ。

しかもその相手が人間ではなく、悪魔とくれば、例えユズでなくとも、脚は勝手に震えようというものだ。

「しかし、まあ――ここで私が貴女を殺し、更に貴女の二人のご友人も始末したとなれば、私はめでたく、彼に代わって、ベル・デル様の右腕になれるという事ですか」

愉快そうに微笑んで――マカーブルはそう言った。

「それにしても……フフフ」

マカーブルは再び、ゆらあっと、さながら孔雀のように腕を広げた。その片手には当然、初めからユズの目について仕方ない、あの不気味な大鎌が握られている――刃の部分は所々が赤くなっており、それが、この大鎌が今までどれだけの血肉を喰らってきたのかを物語っていた。

「こうして、獲物を追い詰めた時の雰囲気と言ったら、とても、筆舌に尽くし難いものがありますね――これから獲物を仕留めるという高揚感。同時に、寸前で手痛い反撃を受けるのではないかという緊張感。その二つの感覚が微妙にブレンドされるこの瞬間が、私は好きで好きで仕方ないのですよ。では――」

と、言って。

マカーブルは自然に、余りにも自然に、流れるような動作で、手に持った鎌を、大きく振りかぶった――それに対し、ユズも一気に緊張感を高め、身構えこそしたものの、果たして、そこからどのような攻撃がなされるのか、彼女には全く分からなかった。

何せ、自分とマカーブルとの距離は、五メートルはまだ離れている。いくらあの大鎌のリーチが長いとは言え、そんな位置からでは、ユズには掠りもしないだろう。

だが、それは間違いだった。

「ユズ！　避けるホ！」

すぐ横から聞こえるのは、仲魔であるジャックランタンの、焦っ

た声。

「えっ――きゃあっ！？」

そのお陰で、ユズは何とかギリギリのところで、マカーブルが放ったその攻撃を、バッと上体を屈めることで、何とかかわす事が出来た。

「物理属性スキル、『ベノンザッパー』」

マカーブルが言う。

確かに、マカーブルの大鎌自体は、彼女のいる位置までは届かなかった――だが、彼が振るった大鎌から、まるで鎌鼬（かまいたち）のような衝撃波が発生したかと思うと、それが一気に、ユズに向かって襲って来たのだ。

（危なかった……）

ジャックランタンが直前に言い放った、あの警告がなかったら、今頃、自分の体は腰を境に二等分にされていただろう。

改めて、自分は何の力も持たない、ただの一般人であることを、ユズは思い知らされた。

だが――それを補う為の、仲魔だ。

「いい気にならないでよね……。ジャックフロスト！　お願い！」

「お任せホ！」

ユズが、地面から立ち上がりつつ叫んだその声に反応して、もう一体の仲魔であるジャックフロストが、口から氷の弾丸を、次々と吐き出す――氷結属性スキル、『氷の乱舞』だ。

大粒の氷塊が、確固たる敵意をもって、マカーブルへと向かって行くが、しかし、彼は全く慌てる様子もなく、

「甘いですよ」

と、静かに呟いたかと思うと、再び鎌を大きく振り、先程の『ベノンザッパー』を繰り出して来たのだ。

『氷の乱舞』の、更にその上を行く威力で向かって来た『ベノンザッパー』は、ジャックフロストが放った氷弾を次々と弾き飛ばすと、そのまま全く勢いを落とすことなく、ユズへと向かって行った。

「――きゃあっ！！」

ユズにしても、ジャックフロストの魔法に対して、マカーブルが何らかの対応をしてくるであろうことは、何となく予想はしていたものの、まさか躱すでもなく、防御するでもなく、そんな方法で反撃してくるとは思わなかったので、一瞬、対応が遅れてしまった。

それでも、右に体を投げ出して、何とか直撃を避けることが出来たのは、一度は同じ攻撃を見てるが故だろう――しかし、左肘から肩にかけて、大きな切り傷が出来てしまった。

「～～～っ！！」

ユズの体が、本人の意思とは関係なく、地面に手をついたまま、ガタガタと震える――しかしそれは、マカーブルの攻撃による痛みからではない。

恐怖からだ。

ここまで、マカーブルが自分に対して放った攻撃は二回。そのどちらもが、直撃すればまず命を失っていたであろう攻撃だった。

（怖い……怖いよ……！）

今までにも、この封鎖内で悪魔と戦ったことはあるが、いずれもが淳とアツロウといった頼りになる仲間が一緒だったし、基本的に、自分は後方から支援するのが主で、前線に立つことはまずなかった。

しかし今は、淳もアツロウもいない。ならば当然、敵悪魔も、彼女だけを狙うようになる――有り得ない。とユズは思った。

『殺すか、殺されるか』。そんな命の奪い合いから生み出される重圧（プレッシャー）がここまでのモノであるなど、ユズは予想だにしていなかった。

自分に向けられる、まるで、喉元に冷たい刃を押し当てられたかのような、圧倒的な殺意。

顔から嫌な汗が流れ出して止まらない。あと数分もここにいれば、気がおかしくなってしまう。淳やカイドーは、今までこんな重圧（プレッシャー）の中を生き残って来たというのだろうか。

「ああ――いいですね」

ユズの怯えた表情を見たマカーブルが、恍惚としたような声で言う。

「その怯えたような表情が、また何とも堪りません。うら若き少女を痛ぶるのは、私の主義ではありませんが――ついつい、悪い癖が出てしまう」

「……近寄らないでっ！！」

いつの間にか、ツカツカと歩き寄ってきたマカーブルの足音を聞き、ユズの危機感が恐怖を上回った。心から沸き上がる生存本能に従い、彼女はすぐに立ち上がると、そのまま、右手から『嵐の乱舞』を放つ。

「むっ！？」

この時、マカーブルは初めて、狼狽したかのような表情を見せた。

最早、ユズが戦意喪失したと見て、近付いたところを不意打ち気味に反撃されたというのもあるが、しかしそれだけではない。

例えばこの時、ユズが放った魔法が、先程のジャックフロストのように『氷の乱舞』であったとするならば、マカーブルは向かってきた全ての氷弾を弾き落とし、それで終わっていただろう。

しかし、この時ユズが発動させたのは、『嵐の乱舞』――荒れ狂う突風を生み出し、その衝撃によって、相手にダメージを与える魔法である。

『氷の乱舞』が固体を利用した攻撃であるのに対し、『嵐の乱舞』

は、気体を利用して攻撃する――つまりはどういう事かと言うと、『氷の乱舞』と違い、『嵐の乱舞』は、弾く事が出来ない、という事だ。

無論、戦闘のプロでもない彼女が、そこまで計算してこの魔法を放った訳ではないし、仮にそうだとしても、この時ＣＯＭＰにセットしていた魔法の中で、攻撃魔法がこの『嵐の乱舞』しかなかった以上、それはとても計算とは言えないだろう。

「ぐうっ！！」

その攻撃を避ける間もなく、マカーブルは、ユズの手から放たれた突風により、遥か後方へと吹き飛ばされる。

その軌道上にあった何台かの車に体をぶつけ、最終的にマカーブルの体は、道を塞ぐように放置されていた一台の大型トラックの荷台にめりこんだ。

「ぐっ……ふっ……！？」

流石は、あの『ベル・デル』の配下なだけあって、さほどダメージは負っていないように見えるが、それでも、つかの間とは言え、動きを止められたのは――戦いの流れを変えられたことは、非常に大きい。

この隙を、ユズは見逃さなかった。

（――チャンス！）

「ジャックフロスト！　ジャックランタン！　今の内に、お願い！」

「合点ホ！　『ブフーラ』っ！！」

「『アギラオ』っ！！」

ジャックフロストの足元から、巨大な氷の柱が次々と現れ、それが一気にマカーブルへと向かって行く。同時に、ジャックランタンが持つランタンから、燃え盛る業火が迸(ほとばし)った。

二体共、『乱舞』系のような狙いがつけ難い、拡散型の魔法ではなく、それぞれが得意とする属性の、一点集中型の魔法を使用していた。

どのように相手が対応するか分からない場合は、前者の方が有効だが、今のように相手の動きが止まっている状況なら、後者の魔法を使った方が確実に相手を仕留めやすいからである。

しかし、そんな二体の作戦は、途中までは正解だったが、途中からは失敗だった。

二つの魔法が迫り来ようとする、その途中で――マカーブルは既に、体勢を立て直していたのだ。

「格下風情か――私に盾突こうなど、百年早いですよ！」

言いながら、マカーブルはトラックの荷台から身を踊らせ、地面に着地すると、例によって、大鎌を振り出した――しかしそれは、先程までとは違い、一回だけではない。むしろ二回、三回と、まるで独楽(こま)のように、大きく回転し始めたのだ。

悪魔（マカーブル）本来の、身体能力の高さに、リーチの長い大鎌の遠心力も加わって、マカーブルを中心に、小規模な竜巻が発生する。

「う、うそ！？」

ユズが驚くのも無理はない――マカーブルが引き起こしたその竜巻によって、ジャックランタンが放った炎はおろか、ジャックフロストの『ブフーラ』による氷の柱さえも、その竜巻によって、消し飛ばされてしまったのだ。

いや、むしろそれは竜巻にと言うより、とてつもない速さで振り回されている、その大鎌に切り裂かれたと見るのが妥当かもしれないが、どちらにせよ、二体掛かりの魔法を、そのような力技で掻き消してしまうなど、ただ事ではない。

やはり、このマカーブルは、他の悪魔とは一味も二味も違う――。

「……でも！　まだ終わりじゃないんだからっ！」

ユズは再度『嵐の乱舞』を放つ為に、意識を集中させた。

マカーブルにしたって、いつまでもそのように、大鎌を振り続けられる訳ではないだろう。要するにユズは、マカーブルのスタミナ切れを狙ったのだ。

これが彼女一人だけなら、勝算は薄いかもしれないが、今彼女には、他にも二体の仲魔がついている。本来、『戦う』人間ではない彼女にしてみれば、現状で考えうる、最良の策と言えるだろう。

だが。

「……え？　アレ？」

突如。

彼女の体を――何かしらの異変が襲った。

魔法を放とうと、その手を後ろに引いた体勢のまま――彼女の体は、まるで糸の切れた人形のように、ガックリと、膝から崩れ落ちた。

（――な、何？　どういう事？）

手を動かすことさえ出来ないまま、彼女の体は、顔面から墜落する。次には、全身と言う全身を、痛みと言う痛みが、満遍なく駆け巡った。

動かない。

小指どころか――恐ろしいことに、瞬き一つさえ、まともにする事が出来ない。

脳と神経が、完全に切り離されているかのようだった。

体中の筋肉が弛緩している――にも関わらず、何故か、意識だけはハッキリとしていた。今も断続的に自分を襲う痛みを感じる限り、痛覚も残っているようだ。

全身が言うことを聞かないというのに、頭だけが妙に冴えているというのは、彼女にとって、全くプラスには働いていなかった――

これでは近い内、自分が無抵抗なままマカーブルに痛ぶられるという、最悪な未来を予想できてしまうからだ。

「ゆ、ユズ！？」

彼女の異変に気付いたジャックフロストとジャックランタンが、一旦攻撃の手を止めて、彼女の側へと駆け寄って来た。

そこへ。

「ふぅ……ようやく、効いてきたようですね」

（恐らく）今の自分を状況を作り出した、マカーブルの声が聞こえてきた。

「私が先程、貴女に放った攻撃……覚えていますか？　あの鎌鼬のような衝撃波、『ベノンザッパー』の事ですよ――あのスキルには、その攻撃に触れた相手に、毒を負わせる効果があるのですよ」

それほど近い距離にいる訳でもない筈なのに、マカーブルの声は、まるで耳元で囁かれているかのように、ハッキリと聞こえた。

『毒』。

となると先程、その『ベノンザッパー』とやらが、左肩を掠めた時には既に、自分の体を、毒が蝕み始めていたのだろう。

「まぁ、直撃ではなかった為に、若干、回るのが遅かったようですがね――フフフ、どうやらこれで、私の『勝ち』は決まったようですね？お嬢さん」

身動きの取れない彼女に対し。

マカーブルはゆっくりと歩み寄りながら――そう言った。

2nd Day『東京タワー下のバトル（2）―4』

そもそも、『悪魔』という存在は、如何にして生まれるのか――これは、情報化社会が極限まで発達した現代にあっても、ようとして知れていない。

彼等は、人類が生まれるよりも遥か昔から存在し、同様に、彼等と人類の戦いの歴史も相当に長い――どころか、今でも続いている――のだが、それでもまだ、分からないままなのだ。

ただ、有名な説としては、『悪魔とは、人の欲望や負の感情が凝り固まることによって生まれた、超自然的な存在なのではないか』――というものがある。

これは、彼等とは別（と考えられている）の、異形の存在、『シャドウ』を参考に立てられたものだ。

結論から言ってしまえば、その仮説は、大体は正解である。

確かに、悪魔の中には人の思念の影響を受けて誕生する者も、多数存在する。その一つの例が、現在、谷川柚子と交戦中の、『マカーブル』という悪魔だろう。

だが一般的に、その単語は悪魔の名前よりも、とある『踊り』の名と、その意味を示す場合の方が多い。

その名も、『ダンス・マカブル』――『死の舞踏』である。

そもそも、『マカーブル』という言葉には、『死』という意味があり、この踊りは別名、『髑髏の舞』とも呼ばれる。

時は遡り、十四世紀。

場所はヨーロッパ。

この時ヨーロッパ全土では、黒死病（ペスト）などの、非常に致死率の高い病気が大流行していた。どれぐらい恐ろしい病気かと言うと、当時の人口の三割が罹患（らかん）して命を落としたと言われる程である。

だが、この病気の真に恐ろしい点は、その症状の現れ方にあった。皮膚が黒く変色していき、突然、多くの人々が倒れていくその様は、人の命がどれだけ儚いものであるのかを、当時の人々に知らしめるには十分だった。

この年はちょうど、百年戦争の真っ最中だったこともあり、そこへ『ペスト』による病死者も加わった為、各地で葬儀や埋葬が追いつかないという事態が続発した。

最初の頃こそ、人々は祈祷などで心を落ち着かせていたが、やがて、それだけでは心を慰め切れなくなり、どうしようもなくやり場のない、理不尽な『死』に対する『怒り』や『悲しみ』といった感情は、やがてはユダヤ人による陰謀だという、荒唐無稽な説にまで発展し、ユダヤ人の大量虐殺――知る人ぞ知る、歴史に残る凄惨な事件を、人類の歴史に刻むまでに至った。

原因不明の事態に襲われ、やがてはパニックに陥るという意味では、現在、谷川柚子、及び有里淳らが巻き込まれている『東京封鎖』に繋がる部分があるが、しかしそう考えると、彼等にとっては何と

も皮肉な話である。

とにかく。

ヨーロッパ各地で多くのユダヤ人が虐殺される中、教会などでは、生き残った人々に対して、『死を想え（メメント・モリ）』という説教が行われていた。

簡単に説明すると、いつか訪れるであろう『死』に対して備えよ、という意味だ。

これには恐らく、最後には必ず死ぬからこそ、何時そうなってもいいように、入念な準備を怠るな、という前向きな意味もあったのかもしれないが、結果的に、人々は死への恐怖と生への執着に取り憑かれてしまう。

次には、墓地や広場などで、大勢の人間が半狂乱に陥り、倒れるまで踊り続けるという出来事が相次いだ。

この集団ヒステリーを思わせる、異常な様相こそが、後に、『死の舞踏（ダンス・マカブル）』と呼ばれるようになる踊りの原型である。

『ジグ、ジグ、ジグ、墓石の上♪

踵で拍子を取りながら♪

真夜中に死神が奏でるは舞踏の調べ♪

ジグ、ジグ、ジグ、ヴァイオリンで♪
冬の風は吹きすさび、夜は深い♪
菩提樹から漏れる呻き声♪
青白い骸骨が闇から舞い出で♪
屍衣を纏いて跳ね回る♪
ジグ、ジグ、ジグ、体を捩らせ♪
踊る者どもの骨がかちゃかちゃと擦れ合う音が聞こえよう♪
静かに！
突然踊りは止み、押しあいへしあい逃げていく♪
暁を告げる鶏が鳴いたのだ♪』

これは、フランスの有名な詩人、アンリ・カザリスによって、当時の人々の暗い心の闇を表すものとして歌われたものだが、実はこれこそが、後に『マカーブル』と呼ばれる悪魔の誕生の瞬間を、克明に綴ったものである事は、意外と知らされていない。

『死』を恐れる心。

『生』を奪われることに対する、恐怖。

全身黒づくめの、大鎌を携えたその姿は、正にマカーブルがその時の人々の思念に影響して生まれた存在であることを、証明しているようでもある。

そんなマカーブルは、『死』という概念によって生まれた自分の事を、自分の存在を、誇りに思っていた。

悪魔とは、人々に恐れられ、恐怖を与える存在。

ならば『死』という、人々に恐れられる現象において、これ以上ない要素を持って生まれた自分こそ、悪魔の中で至高の存在なのではないか、と。

自分こそ、最も完成された悪魔の形なのではないか、と。

だが、この時の彼はまだ知らなかった。

自分が生まれるよりも遥か以前から、その『死』を体現した――どころか、正しく『死』という概念そのものを生み出した存在が、この世に存在する事に。

『夜の女王』と呼ばれる、『ニュクス』に――『死』の生みの親である彼女の存在に、この時の彼は、全く、気付いていなかった。

◆

◆

「――むうっ！？」

『ベノンザッパー』の毒により、体の自由が奪われたユズへと近付いたマカーブルは、突如、彼女の体から発せられた突風に、思わず目を閉じた――否、厳密には、それは体から放たれた訳ではなく、彼女が地面に置いていた右手から発せられたのだが、マカーブルにしてみれば、そんな事はどうでもよかった。

重要なのは、完全に毒が回り切ったと思われていた目の前の少女に、まだ魔法を放つだけの余力が残っていた、ということだ。

「くっ……！」

今度は、体を吹き飛ばされるよりも僅かに早く、マカーブルは後方へと飛びのいた。

ユズが放った魔法――『嵐の乱舞』は、彼女の手の平と地面の間という、極めて狭い面積から放たれた為、行き場を失った衝撃波が、さながら間欠泉（かんけつせん）のように噴き出したのだ。

だからこそ、マカーブルも咄嗟に回避する事が出来たと言える。

圧縮した密度で放たれた『嵐の乱舞』は、それに比例して、攻撃範囲も狭（せば）まっていたからだ。

しかし――。

吹きすさぶ疾風から逃れた後も、マカーブルは未だに、動揺を隠し切れずにいた。

彼女は、谷川柚子と言うあの人間の雌は、つい最近までは間違いなく、どこにでもいる一般人だった筈だ。これまでのユズの戦い方を顧みる限り、それは間違いない。

まさか、『あの男』じゃあるまいし、悪魔と戦う事に慣れていた、という訳ではないだろう、とも。

それだけではない。

仮にマカーブルの計算とは違い、彼女の体に、まだ完全に毒が回り切っていなかったとしても、あれだけの実力差を見せつけられれば、大抵の人間は、抵抗することさえ諦めてしまってもおかしくはない。と言うよりは、それが当たり前だ。

にも関わらず、彼女は反撃してきた。そして、結果として――。

「……おや？　コレは……」

突風が止み、辺りが静寂を取り戻した頃、マカーブルは先程までユズがいた場所を見て、次には、左右を見渡し始めた。

何故なら、マカーブルが目を開けた時、そこからは既に、ユズの姿が消えていたからだ。どうやら、先程の魔法でマカーブルが怯んでいる隙に、何処かへと身を隠したらしい。

「……どうやら、ただの女の子だと思って、少々嘗めていたようですね……。中々、楽しませてくれるじゃありませんか」

フフフ、と楽しそうに笑いながらも、マカーブルは再度、辺りを見渡す。やはり、何度確認しても、現在、自分がいる位置からは、ユズの姿を確認することが出来ない。

「……」

マカーブルは考える――彼が目を閉じてから、ユズのいた場所に目を向けるまで、それほど長い時間は経っていない。

となると、彼女は始めから、身を隠すことを前提に、先程の魔法を放ったことになる（「頭から布を被ってるんだから、そもそも目を閉じる閉じない以前に、視界なんか効かないんじゃ……？」という突っ込みは、出来れば控えて欲しい）。

「つくづく、侮れませんね……」

普通ならば、マカーブルがこうして思考を巡らせている内に、ユズはとっくに逃げてしまっているだろう――しかしマカーブルは、彼女がまだ、それほど遠くない場所にいるであろうことを確信していた。

同時に何故、つい数日前までは単なる一般人に過ぎなかった彼女に、ここまでの戦いが出来るのかについて、自分なりの結論を下していた。

『少し前までは一般人だったのに』――ではない。この場合は恐らく、『少し前までは一般人だったからこそ』と言うのが正確だろう。

つまり彼女は今、ちょっとした高揚状態にあるのだ。今までは想像だにしなかった特別な力を得たことで舞い上がり、自分を弱き者を救うヒーローだと勘違いしている。

今までの好戦ぶり（パフォーマンス）も、度胸がある訳ではなく、自分ならこの敵を倒せる、と思い上がっているからに違いない――と、マカーブルは推測した。

ならば。

このまま、自分を放置して、逃げ出すという事もないだろう――もしここで逃げれば、自分という、民間人に対する危険因子を放置することになる。

彼女が今、無駄な正義感に目覚めている最中だとするならば、そんな事態を許しはしない筈だ。

「ふぅむ……このまま彼女を放っておいて、逃げて行った民間人の方々を始末しに行ってもいいのですが――ま、せっかくですし、最後まで付き合ってあげるとしましょう。どうせ、隠れられる場所は限られてます。少なくとも、向こうから私を視認できる位置に隠れているのは間違いない筈ですし……。いやいや本当に、若い女性を手にかけるのは、気が引けるんですけどね？」

そんな事は露ほども思っていないという様子で、獲物を追い詰めた狩人特有の笑みを、マカーブルは浮かべた。

◆　◆

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ」

激しく息切れしつつ――勿論、今も物陰から見えているマカーブルに気づかれない程度の音で、だが――谷川柚子は、この状況を何とか打開すべく、必死で頭を働かせていた。

そんな彼女のすぐ近くには、仲魔のジャックランタンとジャックフロストが控えている。

実を言うと、ユズに対するマカーブルの考察は、全くの見当違いだった。彼女は別に、ＣＯＭＰを手に入れたからといって舞い上がってはいないし、英雄を気取っている訳でもない。

こうして咄嗟に身を隠したことにしたって、実は彼女が魔法を撃った直後に、一旦、体勢を立て直すべきだと思った仲魔の二体が、彼女を近くの物陰に引きずった、というのが正確なところだった。

そう、マカーブルが始めに読んだ通り、彼女はまだ、どこにでもいる、ごく普通の一般人に過ぎないのだ。

しかし。

一つだけマカーブルの読みが当たっているとするならば――それは彼女が、この場から逃げたりはしない、という点だ。

この時のユズには、マカーブルの目を避けつつ、安全な場所まで逃げるという選択肢もなくはないのだが――果たせるかな、彼女はそうしようとはしなかった。

これはひとえに、彼女が逃げて行った民間人の身を案じているから――ではない。先程まで赤の他人同然だった人間に命をかける程、彼女は勇敢ではないのだ。

同時に、それは決して、人徳に反する行動では、決してない――少なくとも有里淳なら、ここでユズが逃げ出したところで、彼女を咎めたりはしないだろう。

一緒に命をかけて戦った仲間なら、それは救う価値のある存在だが、あの民間人達は、自分達では何もせず、ユズに頼り切ったまま逃げて行ったのだ。

それを悪いとは言わないが、かと言って、快い印象を受けるかと言えば、そうではない。にも関わらず命をかけて彼等を守ろうとするその行為を、淳は絶体に、『勇敢』とは言わないだろう。

そう。

『勇敢』と『無謀』は――違うのだ。

ならば何故、彼女がまだここに残っているのかというと――。

「……ユズ、大丈夫ホ？」

「うん……何とか……」

心配そうな顔をして問い掛けるジャックランタンに対し、強張った笑みを向けながら、ユズが答える。

「……『アムリタ』」

ボソッ、とユズが全ての状態異常を回復させる魔法を唱えると、一瞬、彼女の体を暖かい光が包み込み、すぐに消えた。体内の毒が浄化され、次第に、呼吸が楽になっていく。

だが、それと同時に頭も冷えてきた為、ユズは逆に、状況は相変わらず、自分が劣勢なまま変わっていない、と悟ってしまった。

ユズとマカーブルとの間に広がっている実力の差は、彼女が思っている以上に、大きなものだった。一介の女子高生と、生存競争の激しい魔界で、今まで生き残ってきた悪魔ともなれば、それは当然のことかもしれないが。

自分の力では、到底敵いはしない――今、ここで大声で叫べば、それを聞いた淳やアツロウが駆け付けてくれる可能性も、決して低くはないだろうが、そうなる前に、同じようにその声を聞き取ったマカーブルに自分の居場所がバレてしまい、殺されるのがオチだろう。となると、この手は使えない。

それに。

先程のように、毒を受けたにも関わらず、ああして反撃した以上、マカーブルは自分には毒が効かないと思い、次からは確実に、一撃で仕留めようとして来るだろう――と、ユズは思った。

一時的に窮地を逃れはしたものの、状況は相変わらず、絶体絶命

なままだと言える。

何か付け所があるとするならば、それはあの悪魔の、防御に対する意識が、意外と低いということだろう――何度でも言うが、ユズはどこにでもいる一般人だ。

にも関わらず、そんな彼女の攻撃を二度も受けていることから、それが伺える。

ならば、至近距離からの魔法発動による、一撃必殺を狙えば、或いは、それで勝利を収められるかもしれないが、そこで障害になってくるのが、マカーブルが持つ、あの禍々しい大鎌である。

あの長さは伊達や酔狂によるものではない。そのリーチから生み出される遠心力は、同時に、とてつもない切れ味をも生み出す。下手に近付けば、体を綺麗に真っ二つにされるのは間違いない。

「……」

これがもし、身体能力――と言うよりは、戦闘能力に秀でた、ユズの幼なじみである有里淳ならば、それさえも悠々とかい潜って、マカーブルを見事に打ち倒してみせるだろうが、残念ながら、彼女にはそこまでの能力はない。

だから自分にはそんな真似は出来ないし、しようとも思わなかった。

いや、仮にそんな事が彼女に出来て、何とかマカーブルと距離を詰めることに成功したとしてもだ――とてもではないが、そこから魔法を放つ事など、自分には出来ないだろう、とユズは思った。

そんな距離から魔法を放てば、自分の身もただで済む筈がないからだ。

「もう、どうしろって言うのよ……」

思わず、ユズは弱音を吐いてしまう。生まれてから一度も味わったことがない危機感に、心がどうにかなってしまいそうだった。

つくづく、淳は凄い、と彼女は思った。彼はこれまで、このような死闘の数々を自分の身も顧みずに、乗り越えて来たと言うのか――。

と。

そこまで考えて、ユズはハッとなる。それはあたかも、頭の中でスパークが鳴ったようだった――その手があったか、と。

「ユズ……？」

ユズの僅かな異変に気付いたらしいジャックフロストが、何事かという様子で、彼女の顔色をうかがう。そんなジャックフロストと、ジャックランタンに対し、交互に目を向けた後、ユズは口を開いた。

「ジャックランタン、ジャックフロスト――二人共、今から私が話すことをよく聞いて。考えがあるの」

ここからが。

東京タワー下の戦いにおける、谷川柚子の反撃の始まりだった。

◆　◆

「……おやおや？」

その頃マカーブルは、ユズが隠れている物陰より少し離れた場所に付着している、ある物に気付いた。

それは――血痕だった。

恐らく、彼女が毒を負う原因になった物理スキル『ベノンザッパー』が、ユズの左肩を切り裂いた際に、流れ出たものだろう。それが地面に点々と残り、彼女が隠れているであろう場所へと続いていた。

「フフフ、早くも見つけましたよ……お嬢さん」

その言葉に対する返事は返ってこないが、マカーブルは既に、自分の目の前にある大型車の裏に、ユズがいることを確信していた。

「……おやおや、無視ですか？　悲しいですねぇ……。何と言うか、そんな冷たい態度を取られると――無理矢理にでも、姿を見たくなってしまうじゃありませんか！」

言って、マカーブルは恒例の如く、大鎌を後ろに引くと、それを、軌道上にユズが身を隠している大型車が接する形で、横に一気に振り抜く――事が出来なかった。

その直前に背後から、マカーブルの背中に、大きな火の玉が直撃したからである。予想しなかった方向からの攻撃に、マカーブルは大きく前につんのめった。

「むうっ！？」

すぐに後ろを振り向けば、そこには、ユズの仲魔の1体――ジャックランタンの姿があった。

追撃が来る前に『ベノンザッパー』で、ジャックランタンを牽制しつつも、マカーブルは考える――これだけの距離まで近付かれていたにも関わらず、自分が気付かぬ筈がない、と。

だが、ジャックランタンの姿を改めて見て、その疑問はすぐに解消された。

この悪魔には足音を立てる以前に、そもそも、その足自体がない。目と口の形で穴を空けたカボチャに、青いマントと言う、正しく幽霊さながらの姿なのだ。これでは、足音など聞こえる筈がない。

だが、マカーブルがジャックランタンを牽制したのとほぼ同時に、今度は別の方向――具体的には、視界の左端から、ジャックフロストによる、『ブフーラ』が襲って来た。

だが、ジャックランタンの奇襲によって、警戒を強めていたのか、マカーブルは大鎌を1度横に振るだけで、これを弾いた。

なるほど、どうやらジャックランタンの不意打ちを皮切りに、こちらの死角から立て続けに攻撃を放つことで、安全に決着を付けるつもりらしい――と、マカーブルはユズの作戦を考察した。

「全く、臆病風に振かれましたか――多少の危険も覚悟せずに、私に勝てるとでも――」

「思ってないわよ！」

マカーブルが、思わず声を荒げたその瞬間。

その背後から、谷川柚子の声が響いた。

そして、マカーブルが振り向くよりも早く――鎌を持ったその手を、ガッシリと掴む。

ジャックランタンの攻撃もそうだったが、しかしマカーブルにしてみれば、この時のユズの行動の方が、遥かに驚きだった。同時に、激しく動揺もした。

遠距離且つ死角からの魔法によって、安全に戦うつもりかと思ったその矢先に、ユズは、今度は自らが危険地帯に飛び込み、こちらの攻撃の要である、大鎌を持つ手を押さえに来たのだ。

（一体――この娘は、何を狙っているのだ！？）

だが、マカーブルがその事に対して疑問を抱いている時間は、殆どなかった。次には別の方向で、大量の魔力が一点に集中していくのを感じ取ったからだ。

「今度は何です……っ！？」

ユズに片腕を捕まれたまま目を向けると、そこでは、ジャックフロストがより強力な攻撃を仕掛けようと、魔力を溜めているところだった。

まさか、とマカーブルは思う。直前まで自分の体を抑えておいて、そこに仲魔の魔法を直撃させることで、勝負を決めるつもりか、と。

しかし。

皮肉にもその行動が、マカーブルの頭から、『焦り』という感情を払拭させ、冷静さを取り戻させてしまった――ユズが選んだ作戦は、中々勇敢なものではあるが、マカーブルには既に、この作戦の穴が見えていた。

確かに、如何にマカーブルと言えど、ジャックフロストが限界まで威力を高めた魔法の一撃を受ければ、ただでは済まないだろう――しかし、それは今現在、マカーブルの片腕を掴んでいるユズにも言えることだ。

ならば、魔法が当たるギリギリのタイミングで、彼女が手を離し、距離を取ろうとするのは間違いない。

逆に言えば。

それはつまり、魔法が当たるギリギリまで、彼女はわざわざ、こちらの手の届く所にいてくれるということだ――と、マカーブルはそう思い、思わずほくそ笑みそうになった。

正直な話、今ここでユズの手を振りほどくことなど、マカーブルにとっては正に文字通り、『赤子の手を捻るようなもの』なのだが、敢えて、マカーブルはそうしなかった。

一秒……いや、その十分の一秒でも前にユズが手を離せば、それだけの時間でも、ジャックフロストが放つ魔法をかわし、ユズを仕留める自信が、マカーブルにはあった。

何も難しいことではない。次に相手が何をするのか分かっている以上、それはとても容易なことだ。

（……いいでしょう。貴女の思惑に乗ってあげましょう――しかし！）

ユズにこちらの思惑がバレないよう、決してそれを顔に出さないように心掛けながら。

マカーブルは静かに、自分の勝利を確信する。

（次に手を離したその時こそが――貴女の最後です！）

自分の勝利を確信しつつも、しかしマカーブルは、魔法を放とうとするジャックフロストから、少したりとも気を抜こうとはしない――この抜かりのなさは、流石、ベル・デルの配下と言ったところである。

「お願い！　ジャックフロスト！」

マカーブルの片腕を掴みつつ、ユズが必死に叫ぶ。

それを聞いて、馬鹿が、とマカーブルは思った。そんな事を叫んで、自分に作戦が筒抜けになったらどうする――まぁ、既にそうなっているのだが――そんな大声を出すぐらいなら、自分の片腕を掴む力の方に注ぐべきだ。

ユズの声を聞き、ジャックフロストは更に魔力を充満させた。

同時に、いよいよだと思い、マカーブルも同じく、更に意識を集中させた――そして次の瞬間には、マカーブルの視線の先にいるジャックフロストが、十二分に魔力を溜め込んだ『ブフーラ』を一気に撃ち出した！

そこから先の時間は、マカーブルにとっては、まるでスローモーションのように感じられた――ビデオをコマ送りで再生しているかの如く、ジャックフロストが放った巨大な氷塊が、着々と自分に迫ってくるのを、マカーブルはどこか冷静になって見ていた。

――が、すぐにマカーブルは、その冷静さを失うことになる。

何と驚くべきことに、ユズはまだ、マカーブルの手を掴んだまま離そうとはしていなかったのだ――流石に、拳銃から飛び出した弾丸並みとまではいかないが、それでも、ジャックフロストが発動させた『ブフーラ』は、かなりの速さで向かって来ている。

ここで一度でも瞬きをしようものなら、瞼を閉じたその瞬間に、二人に氷塊が直撃するぐらいの速さだ。

――にも関わらず、谷川柚子は未だに、マカーブルの手を掴み続けている！

「き、貴様――！」

ここでマカーブルは初めて、ユズのことを『貴女』でも『お嬢さん』でもなく、『貴様』と呼んだ。

『肉を切らせて骨を断つ』とは、よく使われる例えだが――しかしこのままでは、マカーブルもユズ関係なく、お互いの骨が断たれてしまうのは明白である。

（――まさか！　自分の命を犠牲にしてまで、俺を殺すつもりか！？）

有り得ん、とマカーブルは思った。何故、ユズがそこまでして自分を倒そうとするのか、マカーブルには全く分からなかったからだ。

いや、それ以前に、つい最近ＣＯＭＰを手に入れたばかりのユズに――本質的には一般人と全く変わらない筈の彼女に――そんな度胸がある訳がない、と。

だが、その「何故」が頭の中で解消される前に、ジャックフロストの『ブフーラ』が、マカーブルを――そしてユズを直撃した。

「……が……あ……ぁ……あ……っ！！？」

氷塊を当てられたことによる痛みと、それに伴う冷気が、マカーブルの体をあっという間に蝕んでいく。

ユズを振りほどき、その場から逃れようとしたが――既に遅い、遅過ぎる。『ブフーラ』による凍結効果は、今や大鎌を持つ腕の間

接にまで届いていたからだ。

そうでなくとも、指がかじんで、握力さえも奪われてきている。最早今のマカーブルには、この現状を打破する手立ては全くないと言ってよかった。

「がっ……！　……馬……鹿……な！　何……故……！？」

分からない。

マカーブルには分からない。

その『何故』は、相変わらず――どうして、自らの命を犠牲にしてまで、自分を倒そうとするのか、というものだった。

明らかに――不自然。

まさか、極限の状況に置かれて、これまでになかった勇敢さに目覚めたという訳でもあるまい――そんな、少年漫画よろしくの、馬鹿馬鹿しい理由で自分が命を落とすなど、マカーブルにはとても認めることが出来なかった。

それは、誇り高き悪魔である自分が、こんな小娘に負ける筈がない、というプライドも理由の一つではあったが――更にもう一つ。

次の瞬間には、そもそも、『考える』ということ自体が――脳を働かせること自体が、不可能になったからだ。

マカーブルは、自分の体が『ブフーラ』によって、完全に凍り付いた感覚を味わった。

そして、とうとう心臓までもが凍り付いた感覚を味わうのを最後に――マカーブルの意識は、ブッツリと、途絶えた。

――だが、忘れてはならない。

ジャックフロストの『ブフーラ』を受けたのは、マカーブルだけではない。そうさせる為に、マカーブルの動きを封じていたユズにもまた――その魔法の威力が、余すことなく伝わっていたのだ。

ジャックフロストの、最大限の魔力を溜めた『ブフーラ』をまともに、同時に受けた二人。

マカーブルと、谷川柚子。

その内のマカーブルが、命を落とした。

つまり。

谷川柚子も、また――。

2nd Day『東京タワー下のバトル（2）―5』

死ななかった。

谷川柚子（たにかわゆず）は、結局のところ、この時のこの場所――東京タワー下の戦いにおいて、死ぬことはなかった。

当然である。

何故、当然なのかと言うと、そもそも今回、ユズがマカーブルに仕掛けた特攻まがいの作戦は、一見、命をかけた行動のように見えて――実は、彼女自身が必死になって思い付いた、現状考えうる、最も安全な作戦だったからだ。

順を追って説明しよう。

まず初めに言っておかねばならないのは――もういい加減しつこいと言われそうで、大変恐縮ではあるのだが――彼女、谷川柚子は、あくまで、どこにでもいる、ありふれた女子高生に過ぎない、ということである。

これを聞いて、しかし、と、異を唱えたい方もいるだろう――本当にごく普通の女子高生なのだとしたら、先程のような作戦をとるわけがない、と。

『先程のような作戦』。

先ず最初に、谷川柚子は、自分の仲魔であるジャックランタンと

ジャックフロストの力を借りて、マカーブルに奇襲を仕掛けた。

しかも、幸い、少し前に突入してきたバスの爆発により、辺りには瓦礫や事故車や散乱していたので、身を隠す場所も多くあった。

ユズはそれを利用し、仲魔と共に、常に動き、常にマカーブルの視界の外から――遠距離からの、魔法による不意打ちを次々と浴びせたのだ。

これはまあいい。

そもそも、マカーブルと戦う時のユズの心には、『怖い』、『戦いたくない』、『傷付きたくない』といった感情が、常にあった。

淳やカイドーではあるまいし、自分の身も顧みず、悪魔に戦いを挑むなど――やはり、彼女には出来なかった訳だ。

そういった点を踏まえれば、この『死角からの奇襲』という戦法は、中々悪くない。『奇襲』とは、相手の意表をつくからこその『奇襲』だ。

どれだけ戦いに秀でた達人でも、意識の外側からの攻撃を受けては、反撃することは難しい――つまりは、この戦い方ならば、自分の身に返ってくるリスクを最小限に抑えつつ、相手に一方的にダメージを与えることが出来る。

自分の命を大切にしたいという、ごく一般的な感情を持ち合わせている谷川柚子がとる作戦としては、何ら不自然はないだろう。

問題は。

問題は、この次に彼女がとった行動だった――あろうことかユズは、マカーブルの意識が、仲魔達の攻撃に削がれたタイミングを見計らって、例の大鎌を持つ、マカーブルの片腕を握り締め、動きを封じたのだ。

その行動自体は、決して不自然ではない――マカーブルの強さの秘訣として、その大鎌が大きなアドバンテージを占めている事は、疑いようもない事実なのだから。

特に、そこから放たれる物理スキル『ベノンザッパー』には、攻撃を受けた相手の体内に、毒を流すという効果もある。ならばまず最初に、その大鎌を何とかしようと思うのは、当然のことだろう。

不自然なのは――それを行動に移したのが、他ならぬ谷川柚子である、ということだ。

不自然。

どう考えても――不自然だった。

いくら、先ずは相手の得物を押さえるのが有効な手立てであるとは言え、それを実行することに、全く危険がないわけではない。むしろ、危険の方が大きいくらいだ。

相手の武器を抑えようとすることは、自らがその武器へと近付くのとイコールなのだから。むしろ、反撃を受ける確率の方が高いと言える。

それだけではない。

彼女は、マカーブルの片腕を抑えたまま――仲魔のジャックフロストに、限界まで魔力を溜め込んだ『ブフーラ』を撃たせたのだ。

これは、この作戦を行う前、マカーブルに見つからないよう、物陰に隠れていた時に、ユズがジャックフロストに指示したことである。

勿論、初めの内は、ジャックフロストはその提案を拒否した。確かに、身動き出来ないところに、高威力の魔法を撃ち込めば、いくらマカーブルと言えど、タダでは済まないだろうが、それはユズにしても同じことだ。

彼女がマカーブルの腕を押さえているところへ魔法を放つ以上、必然的に、ユズもその魔法を、ほぼ直撃に近い形で受けることになる。

これでは、マカーブルと共倒れになるのがオチだろう――いや、むしろ、マカーブルが生き残り、彼女だけが死ぬという、最悪の事態が起こりうる可能性の方が高い。悪魔と人間とではどうしたって、根本的に肉体の耐久力が違うのだから。

これでは特攻のような作戦――ではなく、ただの自殺と一緒である。

しかし。

ジャックフロストがそう言っても尚、ユズはこの作戦を行動に移すと言って聞かなかった。そして結果として、彼女が生き残り、マカーブルが死ぬという、通常の予想とは全く逆の状況が出来上がっ

ていた。

何故か。

それは、この話より大分前に戻り、『衛国寺のバトル（1）－4』の終わりの方を見れば、明らかになる――この戦いが終わった直後、ユズは自分のＣＯＭＰに、『耐氷結』というスキルをセットしていたのだ。

『耐氷結』。

――とは則ち、氷結属性の魔法を受けた時のダメージを軽減させる――というものである。

単純な話だ。

氷結属性に耐性のないマカーブルと、耐性のある自分が、同時に魔法を受けたら、間違いなく、自分が競り勝つのではないか――と、ユズはそう考えたのである。

そうする事で勝とうとする方が、一番安全である、と。

しかし、この場合の『安全』とは、『全く痛みを伴わずに勝つ』ということと、イコールではない。ユズにとって、この戦いに臨むに当たり、最も強く願っていたことは『絶対に傷付きたくない』よりも――『絶対に死にたくない』、である。

それならば、別にユズでなくとも、大多数の人間が思っていることだろう――という意見もあるかもしれないが、残念ながら、これまで、この物語で紹介してきた戦いにおいて、自分の命を心底大事

にしながら戦ってきた人間は、殆どいない。

有里淳はどんな敵にも、最後には必ず勝利を収めていたが、それには必ず、骨折やら内蔵破裂やらの、ユズにしてみれば一生経験したくない怪我を負いながらというのが通例だし、相手が1人だからと言って、自らも仲魔をCOMPに戻し、体1つでモムノフと対峙したカイドーも然りだ。セトに至っては、最早言うまでもないだろう（もっとも、ユズはまだ、この男とは面識がないが）。

絶対に死にたくない。

だからこそ、『最も死ににくい戦い方』を選んだ――ただ、それだけの事である。

しかし。

「イッタ～～……」

マカーブルが心臓までカチコチに凍り付いたその傍らで、ユズは体の所々にある打撲のあとを、何とも痛そうに摩っていた。

これもまた、当然である。

第一、『耐氷結』とは、文字通り、氷結に耐える性質だ――この、『耐える』という部分が重要なのである。

つまり、全く痛くないという訳ではないのだ。その点を、彼女は見逃していた。体中に出来た打撲は、それが原因で出来たものである。

死にはしなかったものの、残念ながら彼女は、全くの無傷で勝てた、という訳ではなかったのだ――まぁそれでも、こうして命があるだけで、彼女にしてみれば九死に一生を得た気持ちなのだろうが。

だが。

よくよく考えてみればこの作戦、以外と穴が多かったりする。

谷川柚子に言わせれば、正に『自分が最も安全に勝てる戦い方』だったのかもしれないが、果たして、有里淳やカイドーが彼女の立場であったなら、今回の戦いは、全く違った展開を見せただろう。

勿論、そこには基本的な戦闘能力の違いというのもあるが、それを差し引いたとしても、彼等はとてもではないが、彼女と同じ戦法を取る気にはならなかったに違いない。

先ず、武器を持つ手を押さえるまでは同じだとしても、淳とカイドーならば、そこから仲魔に魔法を撃たせたりはしなかっただろう。

他人にトドメを譲るのは、彼等のプライドが許さないから――ではない。腕を押さえてから、仲魔が魔法を撃つまでに、マカーブルがその手を振りほどこうとする可能性が、全くないとは言い切れないからだ。そういう意味では、この二人に限らず、同じく、ユズに負けず劣らずの一般人である木原篤郎にしても、ユズと同じようにはしなかったに違いない。

今回でこそ、マカーブルは、ユズ自身が自ら近付いてきた為、敢えてその手を振りほどこうとはせず、ギリギリまで魔法を引き付けてから、巻き添えを恐れて、彼女が手を離したところを狙う為に、わざと振りほどこうとはしなかったが――マカーブルがその気にな

れば、何時でもそうすることが出来た筈なのである。

同時に、それによってユズが体勢を崩したところを、自慢の大鎌で切り裂くことも、出来なくはなかったのだ。

にも関わらず、マカーブルがそうしなかったのは――今となっては、最早それを確かめる術はないが――ひとえに、マカーブルが持つ、生来の残虐性に起因しているのだろう。

相手が図にのったところを見計らって、一気に叩き潰す――という、如何にも悪魔らしい、陰湿な魂胆が、そこにあったからに他ならない。

ようするに。

酷い事を言ってしまえば、今回、谷川柚子がマカーブルに勝てたのは――単に、運が良かっただけなのだ。

それだけの事で。

それ以外の、何でもない。

「……ん、もういいよ」

――と、やがてユズは、先程から、自分の両脇で、治癒魔法（おまじない）を唱え続けていたジャックフロスト、及びジャックランタンに対し、そう言った。

まぁ。

こうして、結果的にマカーブルが死に、谷川柚子が生き残ったという状況を見る限り、それがマグレであろうと何だろうと――この戦いの勝者は、谷川柚子。これだけは疑いようがない事実である。

「……じゃ、そろそろ私達も行こうか？　もしかしたらもう、淳やアツロウは芝公園に向かってるかもしれないし」

その言葉に、ジャックランタンとジャックフロストが頷いたのを確認すると、ユズは彼等をＣＯＭＰに戻す。そして、若干おぼつかない、ヨロヨロとした足取りで、芝公園に続く道へと向かったのだった。

◆

◆

「おー！　ユズ、良かった！　無事だったか！　ま、お前のことだから、全く心配しちゃいなかったけど、いやホント、無事で何よりだ！」

「……」

どうしてこの友人は、何の取り柄もない自分に対して、そこまで高い評価を下しているのだろう、とユズは思った。

先程の戦いから、ほんの数分後の出来事である。

既に、芝公園の入口を、その視界の端に捕らえたところで、谷川柚子は、有里淳（ありさとじゅん）、そして木原篤郎（きはらあつろう）という、二人の友人と合流した。

実際に離れていた時間は一時間にも満たないと言うのに、ユズにはそれが、まるで十年の時を越えて再会したかのように感じられた。

「服は、少し乱れてるけど――うん、とりあえず、目立った怪我は負ってないみたいだな」

そう言ったのは、アツロウである。

実際には、先の戦闘において、マカーブルの『ベノンザッパー』により、左肩に大きな切り傷を作っていたのだが、仲魔が治療したことにより、淳とアツロウにはそれが分からないのだ。

そんなアツロウに対し、ユズは「ハアッ」とため息をつくと、一言。

「気楽でいいわよね……アンタは」

と言った。

「な、何だよ……。機嫌悪いな……」

「別にそんなんじゃないっての！　それより、ジュンやアツロウは、他の人達を無事に避難させられたの？」

ユズの質問を受けて、アツロウは「ああ」と頷く。

「途中、悪魔に襲われたりしたけどな。そこは仲魔と一緒に足止めをかけて、その間に皆を逃がしたんだ。ジュン、お前は？」

アツロウに顔を向けられた淳は、肩を竦める。

「俺の方には、そもそも民間人が残ってなかったからな。その代わり、バスから湧いてきた悪魔の対応で大忙しだったけど」

確かに、ユズが見ると、淳の体には、目立ちはしないものの、小さな傷痕が沢山残っていた。それを見ていると、ユズは何だか、胸を締め付けられるような感覚を覚えた。何故か、先程マカーブルと戦った際、自分が傷を負った時よりも、淳の体についた傷痕を見た時の方が、ユズは心が痛んだ。

しかし、ユズはそれを振り払うように、小さく頭を振ると、改めて2人を見る。

「それにしても、何とか……誰も死なずに済んだね。私達、やれたんだ……」

「ああ……正直、あの暴走バスが突っ込んで来た時は、一体どうなることかと思ったけどな。ジュンのお陰で助かったぜ」

アツロウに褒められると、ジュンはくすぐったそうな顔をした。以前、淳はカイドーという、一人の男の事を内心で『ツンデレ』と評したことがあるが、案外、彼も人のことは言えないのかもしれない。

「よせよ、俺にしたって、かなり慌ててたしな……。お前らが無事に済んだのは、殆ど偶然みたいなもんだ」

若干、顔を赤くしつつ目を背けた淳を見て、思わずアツロウは小さく笑ってしまう。それにつれられて、ユズも何となく笑った。

（――やっぱり、ここはいい）

彼（ジュン）の隣にいるだけで、自分の心は安らぐ。

「あーもう！　笑うんじゃねぇよ！　それよりも早く、最初に逃げた悪魔を追おうぜ！」

淳がそこまでの話題を振り払うように、ブンブンと手を振りながらそう言うと、途端にアツロウは、神妙な顔になった。

「――だな！　あの警官はＣＯＭＰを持っていない。あれじゃ悪魔と戦えないぜ！　今すぐ芝公園に向かおう！」

アツロウの言葉に、まだ安心する時ではないと悟った淳達は、全員で目を合わせ、頷いた後、再び、芝公園へと向かうべく、足を早めた。

2nd Day『東京タワー下のバトル（2）―6』

「……っ！……止まれ！」

あとはこの通りを抜ければ、すぐにでも芝公園にたどり着く――という位置で、それまで走り続けていた有里淳は、そう叫びつつ、いきなり急停止した。

「な、何だ？」

「ど、どうしたの……？」

――と、淳の隣で、同じように先程まで走っていた二人の人物――木原篤郎と谷川柚子も、淳に倣って足を止めた。

二人はそれぞれ、それまでの疾走が体に応えたかのように、激しく息切れしている。ただでさえマカーブルとの戦闘で疲れ切っていたユズの方は、特に苦しそうだった。

しかしただ一人、淳は息切れもせず、そんな2人に顔も向けないまま、正面にある曲がり角を見詰めていた。

「……ジュン？」

様子がおかしい、と感じたアツロウが、再度、淳に声をかける。そこでようやく淳は、口を開いた。

「……何か来る」

「え？」

「……何かって……何？」

「分かんねぇ」

曖昧なことを言いつつも、しかし淳は何か確信があるかのように、相変わらず、その曲がり角を見続けている。

「――ただ、そこの曲がり角の先に、何かが近付いてくる。これだけは間違いない」

「……もしかして、悪魔か？」

もし、他の人間が、現在の淳のような態度をとったならば、アツロウやユズは、それを気のせいだと笑っただろう。

しかし、二人は昔から淳のこういった野生的『勘』が外れたことがないのを知っている為、素直に彼の言葉を信じ、同じく例の曲がり角に目を向け、緊張感を高めた。

一方、淳はと言うと、何とも奇妙な感覚を、現在進行形で抱いていた――この曲がり角の先から、何者かが、自分達に向かって近付いて来ている。それは間違いない。

だが、それが一体、何者なのかが――否、何なのかが分からないから、問題なのだ。

曲がり角の脇には、芝公園特有の並木が生え揃っている為、その

何かの正体を、現在の淳の位置からは確認することができない。

その一方で、三人が息を潜めている内にも、その何かは、確実に淳達へと近付いていた――その気配の動き方から、どうやら、歩いているらしい、と淳は察した。

（人間じゃ……ないな）

それは間違いないだろう――かと言って、じゃあ悪魔なのかと言われれば、それも少し違う。

悪魔のような気もするし。

或いは、それ以外の何か――であるような気もする。

だが淳は、この奇妙な感覚を以前、どこかで味わっているような気がしていた。

あれは――いつのことだったろう？　そう、確か……。

「……っ！」

やがて。

その曲がり角から、三人の人物が現れた。全員が、フード付きの、橙色のコートを着ている――そして、その内一人に、淳は見覚えがあった。

「アマネ！？」

「貴方は……淳さん？」

淳の目の前に現れたのは、誰あろう、現在、この東京内に拠を構えている、『翔門会』という宗教団体の巫女を務める少女――九頭竜天音だった。

アマネは最初こそ、突然の淳との再会に驚いていたようだったが、すぐに元の無表情な顔に戻すと、脇にいる二人の信者に対して、

「先にお行きなさい……。私もすぐに行きます」

と言った。

それを聞いた二人の信者は、どちらも無言で頷くと、この先にある芝公園へと向かって走り出した。

淳はそれを、「あんな格好じゃ、さぞや走りにくいだろうなぁ」と、少々場違いなことを考えながら、見送っていた。

彼の後ろにいるアツロウとユズもまた、アマネとの再会に動揺していたが、アマネは、そんな二人に対して全く興味を示していなかった。いつもの思慮深い目で、ただひたすらに淳を見詰めている。その視線に、淳は何とも言えない妙な不安を抱いていた。

しかし、と淳は思う――先程までの奇妙な感覚は、ここにいるアマネのものだったのだろうか？　しかし目の前にいる彼女は、どこからどう見ても、正真正銘の人間である。

やはり気のせいか――どうやら先程、東京タワー下で大勢の悪魔と戦ったせいで、神経が過敏になっているらしい、と淳は判断した。

「……ジュンさん」

アマネは言う。

相変わらず、感情の読みにくい、無機質な口調で。

「もしや貴方も――この先で、悪魔に襲われている民間人の方々を、助けに行くところだったのですか？」

「え？　あ、ああ」

（――正確には、「貴方」じゃなくて、「貴方達」だけどな）

アマネが何故か、自分の背後にいる二人の友人を完全に無視しているらしいことに、若干の戸惑いを覚えつつも、淳はそう応えた。

「そうなんだよ。実はさっき、悪魔に襲われてた民間人を、この先に誘導したんだけどさ、一匹逃がしちまったから、ソイツを追ってるとこだったんだ――って、アマネもそうか？」

「ええ」

コクン、とアマネは頷く。

「信者の一人から、芝公園へ多数の悪魔が出現したと報告を受けたので、こうしてやって来たという訳です」

「そうか……」

淳は、芝公園があるであろう方向に目を向けた。

「じゃあ、目的は一緒だな。早く行こうぜ！」

「そうしましょう――しかし」

と、そこで、アマネは淳の体を、頭の上から足のつま先まで、ジーッと観察してくる。淳はそれが、まるで体中を撫で回されているようで、少し気恥ずかしかった。

「ジュンさん。貴方の体は今、少々痛んでいるようです。もしや先程まで、悪魔と戦っていたのですか？　だとしたら、少し休まれた方がよろしいでしょう――ここから先は、私に任せて下さい」

「え？　いや、でも――」

流石に、一人の少女に厄介事を押し付けるのは気が引けたのか、淳が何か言おうとすると、

「任せて下さい」

と、強い口調で、同じことを言われてしまった。

「貴方が傷付いたら――私が悲しいですから」

「……」

アマネのその言葉を聞いて、淳は、巫女っていうのは、やっぱり大変だな、と思った。

仮にこの時、悪魔と戦闘した後でなくとも、アマネは自分に休んでいろと言った筈だ。アマネから見れば、改造ＣＯＭＰを持っているとは言え、自分も、翔門会が守ろうとしている他の民間人と同じなのだ、と。

しかし――淳には疑問だった。ならば何故、今「貴方が傷付いたら」、などと言ったのだろう？

ここには自分以外にも、アツロウやユズもいるのだから、「貴方達に傷付かれたら」、と言うのが正確ではないのか。

「でも、アマネ……その、お前一人に任せて、大丈夫か？」

「心配はご無用です――たかが悪魔如きに、遅れをとる私ではありません」

そう言って。

アマネは最後、淳の顔に、一瞬微笑んだかと思うと、次には、芝公園に向かって、一気に駆け出した。

「うおっ！？」

それに対し、淳はかなり驚いていた――普段は大人しめな印象を受けるアマネが、『駆け出す』という動作をとったことも意外だったが、何よりも彼女の足が、予想以上に速かったからだ。

鋭い風きり音と共に、あっという間に彼女の背中が小さくなっていく。

「マジかよ、アイツ……。まあいい、俺達も行こうぜ。アマネはああ言ったけど、やっぱり、このまま放っておく訳にはいかない」

「ああ、そうだな！」

「……」

後ろを向きながら言った淳の言葉に、アツロウはそう返したものの、何故かユズだけは無言だった。

「……ユズ？　どうした？」

淳が不思議そうに尋ねても、ユズは「別に」と、極限に低い声で呟きつつ、彼からプイッと顔を背けてしまう。

明らかに、機嫌が悪そうだった。

「……？」

そんなユズの様子に、淳はまだ疑問が残るという表情をしていたが、とにかく今は民間人を助けるのが優先だと判断したらしく、「急ぐか」、と一言だけ言うと、アマネの後を追うように、一気に走り出した。

その後に、アツロウ、ユズと続く。

途中、ユズが淳の背中に向けて、「……バカ」と小さく呟いたが、残念ながらその声は、先を急ぐ淳の耳に届くことはなかった。

◆　◆

――東京、芝公園。

「いやあああぁぁぁ！　助けてぇっ！」

この時、公園内に避難していた多くの人々は、途方もないパニックに襲われていた。

それは、公園の入口近くに、そこの人々――いや、彼女達に限らず、世界中の殆どの人間が見たこともないであろう生物が出現していたからだ。

『悪魔』。

常時、闇に身を置き、時として人間を襲う、異形の存在。

「ひ、ひいぃぃぃ！　ば、バケモノだぁ！」

恐怖に耐え切れなくなった、一人のサラリーマンらしき男性が、卒倒したかのように、情けない声を上げる。

そこにいたのは、先程、東京タワー下で起きていた戦いにおいて、淳達の手を逃れた、あの悪魔（ガギソン）――だけではなかった。一体どこから現れたのか、トウビョウやゴズキなど、他の悪魔達も集まって来て

いる。

しかし、状況がどんどん悪い方向へと進む現状にあっても、中には冷静さを失わず、気丈に振る舞う人間もいた。

「皆さん、落ち着いて下さい！　パニックを起こさずに、安全な場所へっ……！」

そこにいたのは、同じく、東京タワー下において、淳達と出会った、一人の男性警察官だった。

淳は、改造ＣＯＭＰを持たない――つまりは、悪魔と戦う力を持たないこの男を、自分達の戦いに巻き込まない為に、この芝公園にも悪魔が出没しているという『嘘』をついたのだが――それを聞いた男性警察官が芝公園へと向かう際、そこにいた例の悪魔（ガギソン）がついて行ってしまった為、皮肉にも、淳の『嘘』は『嘘』ではなくなってしまったのである。

男性警察官は、相変わらずパニックに陥っている民間人達を宥めつつ、彼等を安全な場所へと避難させようとするが、彼の説得も虚しく、民間人達が一向に落ち着く兆しを見せないのと、至る所から、次々と別の悪魔が現れつつあることが重なって、それも叶わずにいた。

「クっ……！　このままでは誘導も出来ない！　悪魔め……！　民間人を殺させてなるものか！」

それでも、彼は諦めようとはしなかった。この圧倒的に不利な状況に置かれて尚、民間人達を守るべく、強靭な精神力をもって、目の前にいる悪魔達と対峙している。全ての警官が見習うべき、日本

警察官の理想像が、そこにあった。

その気持ちが天に届いたのか。

「――悪魔め、去れ！　ここは通さんぞっ！」

突然、その警官と悪魔の間に割って入る、二人の人物がいた――どちらも、踝まで伸びた橙色のフード付きコートを着ている為、翔門会の人間であることが分かる。

一人の信者が悪魔を睨みつける中、もう一人の信者――声の高さから、恐らく女性だろうと思われる――が、後方にいる民間人達に向かって叫んだ。

「皆さん、安心して下さい！　我々が命に代えても、あなた方を守り――」

しかし、その言葉が最後まで言い終わることはなかった、突然の来訪者を快く思わなかった悪魔達の一体――トウビョウが、その長い触手を鞭のようにしならせると、次には、一気にその女性信者の体を打ち付けたからだ。

「きゃあっ！！」

衝撃に耐え切れず、女性信者は体を一気に吹き飛ばされてしまう。それを見た一人の女性の民間人が、目を見開き、ヒステリー気味に叫んだ。

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁっ！　やっぱり私達も、殺されてしまうんだわっ！」

そんな彼女に、ジリジリと迫っていたガギソンは、まるで、今にも舌なめずりをしそうな表情をする。

恐怖に囚われ、最早、生きることを諦めた人間を、じっくりとなぶり殺す――悪魔が常に、本能的に抱いている感情を満たすその瞬間が、待ち遠しくて仕方がない、という様子だった。

そして、女性との距離を一気に、あっという間に詰めると、その手にある鋭利な爪で、女性の柔らかい肢体を、ズタズタに切り裂くべく、腕を大きく後ろに引いた。

――だが。

「おおおおぉぉおおぉぉおおぉぉおおぉぉおおおお！！」

更にもう一人。

民間人達を守ろうとした男性警察官、そこへ駆け付けた二人の翔門会信者に続き、更にもう一人――この状況を打開するべく、その場に駆け付けた人物がいた。

その場にいる人間――いや、人間に限らず、悪魔までもが、思わず身を竦めてしまいそうな怒号をあげて、猛然と走り寄ってくる、一人の少年。

「おおおおおおおおぉぉぉぉらあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

青い髪。

青い目。

有里。

有里淳。

有里淳は怒号を上げながら、女性を襲う悪魔より数メートル離れた位置から、一気に跳躍する。

ガギソンは、突然現れた淳に対し、一瞬、戸惑うような仕種を見せたが、すぐに彼へと向き直った――ガギソンにしてみれば有里淳は、まだ先程、東京タワー下において、一度見ただけの存在だが、彼の内に宿る、ただならぬ何かを、敏感に感じとったのだろう。その表情を、すぐに険しいものへと変える。

――が、既に遅い。

跳躍した勢いを全く落とさぬまま、淳は空中で体を捻るように、横に回転させると、左足の裏をガギソンの額に勢いよく打ち付けた。

それまでの突進によって生まれた慣性と、体を回転させたことで発生した遠心力によって、半端ではない威力が篭った淳の蹴り技が、ガギソンの額に、見事に直撃する。

「……っ！」

先の女性信者に続き、今度は、ガギソンが吹き飛ばさる番だった。

唯一違うのは――何と恐ろしいことに――そのたった一撃の攻撃

によって、ガギソンの首が折れ、そのまま絶命した、ということだった。

悪魔を含めたその場にいる全員が、余りにも突然過ぎる登場を果たした淳に対し、呆気にとられたように彼を見詰めていたが、当の本人はというと、そのような視線は全く意に介さず、ゆっくりと、その場にいる悪魔達を見渡していた。

「お前ら……」

そんな淳の呟きは、とても小さなものだったが、そこに込められたただらなぬ怒気に気付いた数体が、思わず身を震わせる。

「あ、貴方は……」

そんな淳に対し、彼に助けられた例の女性民間人が、何かを思い出したように、淳の顔を見ていた。「ん？」と、その声を聞いた淳も、女性と顔を合わせる。次にはお互いに、先程の東京タワー下での出来事を思い出していた。

「あれ？　貴女は……」

そう、この女性は、東京タワー下において、ＣＯＭＰから仲魔を召喚していた淳に対し、『バケモノを連れて来た』と叫んでいた女性だったのである。

つい数十分前の出来事だ。二人共、お互いの顔を忘れてはいなかった。

「やっぱり……貴方、さっきの人ですよね！？　よかった……」

「いえ、貴女こそ、無事でよかった――今はまだ」

自分を信じろ、と、そう言った淳が再び現れたことに対し、女性は微かな感動さえ覚えていたが、すぐにその表情を、暗いものへと変えてしまう。

「でも……また助けに来てくれたのは嬉しいけど、もう無理。こんなに沢山の悪魔が相手じゃ――」

「――諦めてはなりません！」

再び。

悪魔と民間人が大勢集まっている、芝公園の入口近くにやってくる、一人の人物がいた（因みに、最初その場にいた人間、及び悪魔達は「今度は誰だよ！？」と言いたげな表情をしていたが、そんなことを言えばシリアスな雰囲気をぶち壊してしまう為、あえて黙っていた）。

その人物――橙色のコートに、頭に大きな髪飾りを付け、紫色の髪をした少女、九頭竜天音は、先程トウビョウに吹き飛ばされた女性信者へと歩み寄って行く。

「あ、アマネ様……」

「大丈夫ですか？　さぁ……」

アマネが女性信者の体に手を向けると、彼女の体を優しい光が包み込む。そして次には、女性信者が負った打撲などの傷痕が、全て

消えていた。

無事に自分の治癒魔法が効いたのを確認したアマネは、その場ですっくと立ち上がると、背後にいる民間人達に体を向けて、凛とした声で叫ぶ。

「皆さん、落ち着いて下さい！　悪魔は人間の怯えや恐れといった、負の感情を求めています！　怯えては悪魔の思うつぼです！　心を静め、救いを信じるのです！　天は信じる者を見捨てません！」

「アマネ……」

これだけの悪魔を前にしながらも、それだけハッキリと自分の考えを示すことが出来るアマネに対し、淳は感心した面持ちで頷いていた。

もっとも、冷静な観点から見れば、有里淳にだけは、この時のアマネに感心するのは、どう考えても不自然なのだけれど。

だが、アマネの言葉（淳にとって、それはむしろ説法のように聞こえた）は、それだけでは終わらなかった。

「おお、我等が慈悲深き主上よ！　我に力を与えたまえ！　悪しき者を退け、我らを守りたまえ！」

「……」

淳はその言葉（というよりは口調）に対して、何か色々と突っ込みたいことがありそうな表情を見せたが、結局、口をモゴモゴさせるだけに留めた。

やがて、アマネの言葉に反応したかのように、彼女の正面で、目も眩むような光が発せられる。その余りの眩しさに、淳が思わず目を閉じ、次に瞼を上げた時には、そこに一体の悪魔が出現していた。

しかし、すぐに淳は、「いや、違う」と、思った。そこに現れた一人の女性――輝く金髪に、踊り子を思わせる軽快そうな衣装を着ている――は、まるで悪魔と言うよりは……。

「ひっ！　あ……あれは、悪魔か？　翔門会が、悪魔を喚んだ！？」

それを見た、一人の民間人が、情けない声を上げる。

だがその言葉を、淳の側にいた、例の女性民間人が否定した。

「でも……あれ、普通の悪魔と違うみたい……！　まるで、神様みたいな……」

「……」

女性の言葉に対して、淳は肯定もしなければ、否定もしなかった。

「かっ、神だ……。女神様なんだっ！　俺達、助かるんだっ……！」

「勿論です――ラクシュミ！」

アマネが一声叫ぶと、その『女神』――ラクシュミは、クルッと優雅な動作で、その場で一回転して見せる。

同時に――その踊りが魔法を発動させる条件だったのか、一体の

敵悪魔を、明るい光が包み込んだかと思うと、その悪魔の体が、光と一緒に跡形もなく消えた。

「お、おお！　やったっ！　悪魔を一撃で……！」

一人の民間人が、感動しきった声を上げる中、自分の同族がたった一回の攻撃で倒されたのを見た悪魔達は、目に見えて動揺し始めていた。

「グ、ググク……！　ラクシュミ、ダト……！？　……オノレ……退クゾ！　同胞達ヨ！」

有里淳と、九頭竜天音。

現在、封鎖された東京内において、極めて高い戦闘能力を誇るこの二人を前にして、自分達では敵わないと悟ったのだろう。悪魔達は一目散に、その場から退却を始めた。

やがて、アマネはその場から全ての悪魔が立ち去ったのを確認すると、民間人達の方へと向き直る。

「……皆さん、悪魔を恐れてはなりません。翔門会が必ず、皆様をお守り致します！」

そう声高に唱えるアマネの言葉には、どこか不思議な力があった。それを聞いた民間人達は、両手を叩き、彼女を――引いては、翔門会を讃え始める。

「おおおっ、翔門会は本物だった！　翔門会が信じる『主上』って奴は、本当にいるんだ！」

「す、凄い！素晴らしいわ！　女神様を喚び出せるなんて……」

淳の隣にいた女性も、いつの間にか立ち上がり、まるで本当の女神がそこにいるかのように、アマネを見詰めている。

「……」

しかし――そんな中で淳だけが、何故か複雑な面持ちをしていた。どうも、この状況には、どこか釈然としないものがある――と、そんな顔である。

しかし、それが一体、具体的に何なのかは、結局、この時の彼には最後まで分からなかった。

◆

◆

「ちょっと～～～っ！ジュンっ！！」

やがて。

芝公園の入口近くにおける、アマネの大活躍の一部始終を見ていた淳の背後から、激しい息切れと共に、怒ったように叫びながら、谷川柚子が走り寄って来た。その背後には、同じく汗だくになって

いる木原篤郎の姿もある。

「お、やっと追いついたか」

そんな二人に対して、淳は嫌味としか思えない、爽やかな笑顔を向けた。

「お、おい――ジュン――ハァ、ハァ――お前――ゲホッ――ちょっと速いぞ！」

淳の近くで足を止め、必死で息をアツロウ整えながら、アツロウが言う。

「お前らが遅いんだよ」

「いや、ジュンが速過ぎ……」

ユズも同じく、既に疲労困憊（こんぱい）といった様子だった。

どうやら、淳とアマネの足が余りにも速過ぎるが為に、アツロウもユズも、極端に遅れて来たらしかった。

「ま、いいじゃねぇか。結局、アマネが全員助けてくれたよ。あの警官も無事だ」

お陰で、俺の出番は殆どなかったけどな――とは、淳は言わなかった。

「そ……ハァ……そうか……ハァ……それはよかった……！」

「それにしても……あの警官の人、本当に度胸があったよね。ＣＯＭＰも持ってないんだよ？」

いち早く息を落ち着かせたユズの言葉に、淳はしみじみと頷く。

「俺達や民間人を守ろうとして、必死になってくれたんだろ。ああいうの見ると、やっぱ警察官ってスゲぇなあ、って思うよ」

「……そう言えばジュン、さっきアマネが全部やってくれたみたいなこと言ってたけど……」

ようやく息が整ったらしいアツロウの質問を受けて、淳は「ああ」と言う。

「中々どうして、見事なもんだったぜ」

やがて淳は、自分が見たことの一部始終を話し始めた。

自分達が睨んだ通り、例の警察官と、民間人達が、ここで悪魔に襲われていたこと……。そこへ翔門会とアマネが現れ、ＣＯＭＰから女神を思わせるような女性（確か『ラクシュミ』とか、そういう名前だった気がする）を召喚し、あっという間に悪魔を退けてみせたこと……。

その話を聞いて、ユズなどは素直に感心した風だったが、しかしアツロウだけは、何か考え事でもするかのように、手を顎に当てていた。

「……？　おい、アツロウ、どうした？」

「ん？　あ、ああ」

気になった淳が声をかけると、途端にアツロウは、ハッとした表情をする。

「なんて言うか……随分、都合がいいな、って思ってさ」

「『都合がいい』？」

それはどういう事だ――と、淳がアツロウに尋ねようとした、その時だった。

「……あ……あの……」

「ん？」

背後から、随分畏まった様子の言葉を聞き、淳が振り返ると、そこには、先程彼が助けた民間人の女性の姿があった。

「どうしたんですか？」

淳がなるべく優しい声で対応すると、女性は若干、緊張した面持ちで、

「ええと……た、助けてくれてありがとう……。それと、さっきはごめんなさい！　だって、あんな『バケモノ』を連れてるもんだから、つい……」

と言った。

「ああ……。いえ、別にいいですよ。無事で良かったです」

心の中で、『バケモノとか言うんじゃねぇよ』と反論しつつも、淳はそう応える。

「今はまだアマネがいるんで、ここが一番安全ですから、しばらくは他のところに行かない方がいいですよ」

ちなみに、そのアマネはと言うと、突然の悪魔の出現によって混乱している、他の人々の心を落ち着かせる為だとかで、芝公園内を歩き回っている（実は、一緒に来て手伝って欲しい、と淳はアマネに言われたのだが、彼はそれをやんわりと断った）。

「うん……そうする。本当に、ありがとう」

無事に助けて貰った礼を言えて一安心したのか、女性は最初の頃よりは幾分、血色の良さそうな表情で小さく微笑むと、そのまま淳の前から立ち去った。

淳はその背中が見えなくなるまで、その姿を見送っていたが、同じくそれを見ていたアツロウが、唐突に口を開いた。

「……こういうことだよ、ジュン」

「あ？　何がだよ？」

「目の前で悪魔を召喚したりしたら、今の女の人みたいに、普通は怯えられるものだろ？」

「ああ……そのことか。でも、仕方ないっちゃ仕方ないだろ。俺達

だって、このＣＯＭＰを持ってなけりゃ、同じ反応をしたと思うし」

「確かにそうだ。でも、ジュン。お前の話じゃ、アマネは俺達と違って、割とアッサリ皆に受け入れられたんだろ？」

「あ……」

アツロウにそう指摘され、淳は、「確かにそのとおりだ」、と思った。しかし「何故」と思うよりも遥かに早く、淳はその疑問に対する回答を導き出していた。

「……女神を喚んだからじゃねぇか？　お前らにも話した通り、さっきここでアマネが召喚したのは、悪魔ってよりは正しく女神ってかんじの存在だったからな」

「うん……。見た目って重要だもんね」

ユズが言った。

「それにホラ、翔門会は昨日から堂々と人助けをしているから、信頼もされやすいだろうし」

「……まぁ確かに、俺達が悪魔を喚び出すのとは、ちょっと状況が違うかもな」

「それだよ」

その言葉を待ってましたと言わんばかりに、アツロウはピッ、と人差し指を彼に向けた。

それに対して、淳が訝し気な表情をすると、アツロウは自らの考えを語り始める。

「さっきも言ったろ？　『都合がいい』って。……こう言うのも何だけどさ、俺にはこれが、どうも翔門会の自作自演に思えて仕方ないんだ」

都合がいい――とは、つまり。

先程の悪魔の襲撃は、正に翔門会にとって都合の良い出来事だったのではないか――と、アツロウは言った。

「えっ……！？」

それを聞いたユズが、目を大きく見開く。

「覚えてるか？　ナオヤさんが悪魔召喚プログラムを組んだのは、翔門会の依頼だって、前にアマネが言ってただろ？」

「そういや、そうだったな」

淳にしてみれば、アツロウがそう言うまで、そのことはすっかり忘れてしまっていたのだが（暢気過ぎる）。

「だから、俺はこう言いたいんだ――翔門会は、そのプログラムを利用して、自作自演してるんじゃないか、って」

「……」

何か意見が欲しそうなアツロウに対して、淳はしばらくの間黙っ

ていたが――やがて、

「それはないんじゃないか？」

と言った。率直な気持ちだった。

「う～ん、そうかなぁ？」

だが、そんな淳の言葉を聞いても、アツロウはまだ何か引っ掛かるという顔をしていた。

「……私も、ジュンの意見に賛成かな」

今度は、ユズが口を開いた。

「だってさ、今あふれてる悪魔の中には、ＣＯＭＰで喚ばれたんじゃないっぽい奴もいるじゃない。それはどう説明するの？　第一、最初の日だって、青山霊園で翔門会は悪魔と戦ってたんだよ？」

ユズの台詞を聞き、淳は首を傾げる。

「確かに……アレにしたって、俺達は偶然見たにしても、他には誰もいなかったしな。人に見せようとしたとは思えない」

「……そっか、確かに宣伝効果を狙うなら、人の見てる所でやる筈だもんな。……とすると、自作自演の可能性は、限りなく低くなる訳か……」

「……」

しかし。

先程は、ああ言っておいて何だが――淳にしても、アツロウの意見を真っ向から否定する気にはなれなかった。

自作自演の件はともかくとして、確かに、翔門会絡みでの、不審な出来事というのは各地で起きている。中でも、彼等が作った筈のＣＯＭＰが様々な人間の手に渡っているというのは、簡単には無視出来ない問題だ。

これではまるで、自分達でＣＯＭＰを広めているかのようである。

「……？　広めるって、今朝のヤクザとかが持ってた、あのＣＯＭＰの事か？」

アツロウが言った。

「う～ん……」

それに対しても、淳はしばらく下を向いて唸ってばかりいたが、やがて、パッと顔を上げると、

「……何なら、確かめてみるか？」

と言った。

「……え？　ど、どうやってだよ？」

「決まってんだろ。直接、翔門会（アイツら）に聞いてみるんだよ。ただ、その辺の下っ端とかじゃ、詳しい事情を知らない可能性もあるから……。

そうだな、信者の中でも、なるべく重要なポジションにいる人間から聞くのが望ましいな」

「それって……アマネの事か？」

「まぁ、そうだ。と言うより、アマネしかいない。それにホラ、俺って人見知りするだろ？　よく考えたら、アマネ以外には翔門会に知り合いがいないし……あ、あとはミクとかもいるけど……アイツ、自ら自分の事を下っ端って言ってたしなぁ。アテには出来ないだろ」

「人見知りって……」

どの口が言ってんだよ、という目でアツロウは淳を見るが、彼はどこ吹く風といった様子である。

「まぁ……別にいいけどさ。けど、もしそうするなら、ジュン。お前一人で行けよ？」

「え、何でだよ？　メンドくさいのか？」

アツロウからの予想外の返答を受けて、戸惑いを隠せない淳。

「そうじゃなくて――アマネにしても、その方が話しやすいだろうしさ」

「……？？」

いよいよ、アツロウの言ってることが分からなくなったのか、淳は、ユズに対して求いを求めるような目を向けるが、何故か彼女は、淳が顔を向けた瞬間に、プイッと顔を背けてしまった。

「だってさ」

そんな中、アツロウは言う。

「俺が思うに、アマネって、確実にお前に惚れてるだろ？」

余りにも飛躍し過ぎた、突拍子極まりないアツロウの発言に対し、淳はただ、苦笑いするしかなかった。

◆

◆

――『東京タワー下のバトルＰＡＲＴ２』終了時ステータス

●所持マッカ：１４３９

●有里淳（？？）

・コマンドスキル
＞？炎の乱舞
　？氷の乱舞
　？怒りの一撃
・自動効果スキル
＞？英霊の加護
　？毒追加
　？同族の心得・攻
・先制発動スキル
＞『S疾風の秘法』

●木原篤郎（人間）

・コマンドスキル
＞？アギ
　？絶妙打
　？雷の乱舞
・自動効果スキル
＞？一分の活水
　？同族の心得・防
　？封魔追加
・先制発動スキル
＞『S的中の秘法』

●谷川柚子（人間）

・コマンドスキル
＞？嵐の乱舞
　？クロスレイ
　？アムリタ

・自動効果スキル
＞?耐氷結
　?一分の魔脈
　?耐衝撃
・先制発動スキル
＞『S軽業の秘法』

●予備スキル
＞・ザン
・ブフ
・ディア
・ジオ

●仲魔
＞・モー・ショボー
・リリム
・サラスヴァティ
・エンジェル
・ジャックフロスト
・ジャックランタン
・トラロック
・マカラ

――Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！

２ｎｄ　Ｄａｙ『散歩』

――東京、芝公園。

真夏の暑い日差しが差し込む中、その公園内を歩く2人の姿があった。

一人はフード付きの、橙色の衣服を着た少女である――ハッとする程の美少女で、頭には派手な髪飾りを付けていた。彼女は無言、且つ無表情で――感情を読み取らせない態度で、隣の人物にペースを合わせながら、歩を進めるのだった。

九頭竜天音（くずりゅうあまね）――である。

その九頭竜天音の隣を歩くのは、青い髪に、猫耳を思わせる形をしたヘッドホンをつけている少年――瞳もまた、髪と同じ青色で、下手をすれば女性だと間違えてしまいそうな、端正な顔立ちをしていた。彼は現在の炎天下が実に気にくわないとでもいうように、先程から、手を団扇（うちわ）にして、顔をパタパタと扇いでいた。

有里淳（ありさとじゅん）――である。

淳は、現在、封鎖のあちこちで広まっている改造ＣＯＭＰについて、アマネから何か聞き出そうとしたのだが、彼にしては珍しく、隣にはアツロウやユズがいなかった。

アツロウが「アマネと話すならば、お前一人が行った方が都合がいい」と言って、彼一人をアマネの元へと向かわせたのだ。その間、

自分達は他の信者から話を聞いてみる――と、そう言って。

淳がアマネを見つけるまで、それほど長い時間はかからなかった。彼女はまたしも、芝公園のあちこちで、集まった人々に対し、声高に演説をしていたからだ。

ただ、見つけたはいいものの、アマネは翔門会の中でも、『巫女』という極めて重要な立ち位置にいる為か、一人になる様子を全く見せなかった。身辺警護の為か、単なる取り巻きかは知らないが、彼女の周りには、常に数名の信者（主に女性）が付き添っていたからである。

しかしやがて、淳がそれに対し、どうするべきかと悩んでいるところに、アマネの方から気付いた。やがて彼女は、ツカツカと淳に歩み寄ると、「少し、お時間をよろしいですか？」と言ってきたのだ。

淳としても、彼女と話がしたいと思っていたので、これは好都合だと思い、公園内を歩きながら話そうという事になった訳だ（理由は、現在となっては、かなりの数の人間がこの公園に集まっている為、二人っきりで話せる場所がないからである。ならば、歩きながら話した方が、まだマシでしょう、とアマネの方から提案したのだ）。

そして、現在。

「えーと……」

やがて。

随分と長い間、二人の間に会話はなかったが――とうとう、その沈黙に耐え兼ねたかのように、淳が口を開いた。

口調からも表情からも、若干、緊張した様子が見てとれる。

「それにしても、アマネ。お前も大変だよな。俺と殆ど同い年だって言うのに、翔門会の巫女として、悪魔から人々を救ってるだなんて――」

「いえ」

そんな淳の言葉に対し、アマネは小さく頭を振りながら、言葉を返した。

「大変だとは思っていません――ジュンさん。これは、私自身が選んだ道です。それに、あの程度の悪魔の相手など、私には苦にもなりませんから」

「……」

本当に立派だな、と淳は思った。

しかし、そこで、この会話は途絶えてしまった。再び、二人の間に沈黙が降りてくる。

「……」

「……」

（やりづれぇ……）

そういえば、と、淳は自分の過去を振り返った。

思えば、親友である谷川柚子以外の、同い年の女性と、こうして二人きりになるのは、彼にとっては初めてである――故に、こういう時、どうやって自分から話を振ればいいのか、彼には全く分からないのだった。

それでも。

「ええと、さ――」

と、再び淳は、口を開いた。

「なあ、アマネ。実はちょっと聞きたいことがあるんだけど――お前達、翔門会が使ってるＣＯＭＰって、どうすれば手に入るんだ？」

「我々のＣＯＭＰ……ですか？」

アマネは小さく首を傾げた。

「……もしや、ジュンさん。ご自身のＣＯＭＰに、何か異常でも？」

「あ、いや、そういう訳じゃないんだけどさ……。ちょっと、気になって」

「……？　……そうですか」

淳の言葉を聞いても、アマネはまだ、納得がいかなさそうな顔をしていたが、すぐに「まあ、いいでしょう」と言って、淳の質問に

答え始めた。

「……残念ですが、我々が用いてるＣＯＭＰは、人々に配布するようなものではございません」

「……やっぱり？」

淳は何故か、アマネがそう答えるだろうと分かっていた。

「ええ。我々の同士となり、お父……教祖様の下で教えを学んだ後、人を救う心を持って、初めて授けられるものなのです。その為、翔門会の中でも、ＣＯＭＰを持つ人間は限られています」

「翔門会に入会したところで、すぐに貰えるとは限らない、か……」

「そういう事です」

「……」

アマネの言葉に、きっと嘘はないだろう、と淳は信じたかったが――しかしそれを鵜呑みにしては、説明がつかない事が幾つかある。

「けどよ、アマネ。信者でもないのにＣＯＭＰを持ってる人間を、俺は何人か見てるんだけど……」

「……」

淳の疑問に対し、アマネはしばらく黙っていたが、やがて、

「……それは、恐らく市販品ではありませんか？　我々のＣＯＭＰ

が、一般の方の手に渡るような事は有り得ませんよ」

と、言った。

「……」

そう言われても、事実、今朝のヤクザ達が持っていたＣＯＭＰは、市販品などではなく、紛れも無く改造された――悪魔召喚プログラムが施された物であったのは間違いない。彼等がそこから悪魔を喚び出すところを淳は見ている為、それは断言できる。

だが、これ以上尋ねたところで、アマネから有益な情報は得られないと悟った淳は、既にこの件について彼女に聞くことを諦めていた。

「聞きたいことは――それだけですか？」

アマネが言う。

「え？　あ、ああ」

どちらかと言うと、淳は普段からよく喋る方なのだが、どうも、この少女の前ではいつものようにはいかないらしい。

「そうですか……。ならば、淳さん」

相変わらず、美少女と2人っきりという状況に、淳がどぎまぎしていると、突然、アマネが彼に顔を向けた。

ほぼ反射的に、淳も彼女と目を合わせた――淳の目を見つめなが

ら、アマネは彼に話しかけてくる。

「貴方から質問されたことで、こちらからも質問をしやすくなりましたが……。一つ、確認しておきたいことがあるのです」

「……？　なんだ？」

そういえば、と淳は思った。彼にしても、アマネとは話がしたいと思っていたが、そもそも、自分達がこうして歩きながら話し合うことになったのは、彼女の方から淳に「少し、お時間をよろしいですか？」と言ってきたからだ。つまりアマネもまた、淳に聞きたいことがあったという事になる。

「ええ」

やや畏まったように、アマネは頷いた。

次にはまた、先程までと同じように、淳と視線を合わせる。

「ですがその前に――少し、歩くのに疲れました。あそこにあるベンチに座りながらでよろしいですか？」

少し離れた場所にある、誰も座っていない横長のベンチを指差しながら、アマネはそう尋ねてくる。

それに対し、淳は「別にいいけど」と言ったが、すぐに、ある異変に気付いた。先程、現在の芝公園には、二人っきりになれる場所はないと述べたが、どういう訳か、そのベンチの周りにだけは誰もいなかったのだ。

そこを通りかかろうとする人々も、まるで見えない壁があるかのように、そのベンチには近付こうとしない。

だが、淳がその疑問についてアマネに尋ねるよりも早く、彼女は既にベンチへと歩き初めていた。仕方ないと思いつつ、淳もそんなアマネの後を追う。

アマネはまず、自分はベンチに座らずに、どこからかハンカチ（花の模様が施された、全体的にピンク色の、かわいらしいハンカチだった）を取り出すと、それをベンチの上に広げる。

そして、「どうぞ」と言いながら、淳をそこへ座るように促した。

「……」

気持ちは嬉しいが、普通それは、男がやるべきじゃないのか？

淳はそれをやんわりと断ろうとしたが、アマネは頑として引かなかった。こういうところは頑固である。最終的には淳が折れ、彼は何とも情けない気持ちで、アマネが敷いたハンカチの上に、腰を下ろした。

それを見たアマネも、

「では、私も」

と言って、彼の隣に座った。

隣は隣でも、肩が触れそうなぐらい——いや、実際に肩が触れてしまう程の隣に、アマネは座った。

「……」

え……？　と、淳は改めて、自分達が座っているベンチを見た。

どう見ても、楽に四人は座れそうな程のスペースがある。にも関わらず、何故この少女は、こんな――ともすれば、密着してるとさえ言えそうな程近くに、座っているのだろう？

「聞きたいこと、と言うのは」

そんな淳の混乱など、全く気にもせずに、アマネは会話を再開させる。

「貴方がこれまで戦った悪魔の中で――どれが1番強かったか、ということなのです」

「……」

『誰が』――ではなく『どれが』、だ。

アマネらしいと言えば、アマネらしいが。

しかし、それにしても何故、アマネはそんなことを質問してきたのだろう――少なくとも今、この時に必要な質問であるとは思えない。淳が戸惑いながら、アマネにそう告げると、彼女は、

「別に……深い意味などありません。ただの個人的な興味です」

と言った。

「……」

興味、ねぇ。

まぁいい、どうせ、いちいち秘密にするようなことでもない。そう思い、淳は考えてみた――そしてすぐに、答えは出た。

「やっぱ……水道橋で戦ったウェンディゴが一番かな」

「ウェンディゴ、ですか」

「ホラ、俺とお前が初めて青山霊園で出会った時、そこにいた悪魔だよ」

「ああ……なるほど、思い出しました」

何か納得した表情になるアマネ。

「一昨日、貴方をたった一撃で気絶させた、あの雪男ですね」

「……」

その通りだけどさ。

その通りだけどさぁ！

まぁ、悪意はないんだろうけど。

……ないんだよな？

「雪と氷を操り、それだけではなく、その巨体を利用した、肉弾戦にも秀でた悪魔――ウェンディゴが、今まで戦った中で、最も苦戦した、と。その理由は？　やはり、今回の封鎖において、初めて黒星をつけられた相手だからですか？　でしたら、ジュンさん。それほど落ち込むことはないでしょう。恐らく、あの時の貴方はまだ、ＣＯＭＰを手に入れて間もなかった筈です。それで勝てる方が不思議ですよ」

「そうかもしれないけどさ――やっぱ、あそこは勝たなきゃいけない場面だろ」

当時のことを思い出しながら、淳がやや落ち込みつつそう言うと、アマネは、

「そうかもしれませんね」

と、否定もしなければ、肯定もしなかった。

「いや、まぁ、苦戦したって意味じゃ、俺って割と、これまでの戦いでも結構な数の苦戦をしてるんだけど……赤坂トンネルの時なんか、かなりやばかった。その中でも特に印象に残ったのが、ウェンディゴと水道橋で戦った時――って感じかな」

「印象に残った？」

淳の言葉の意味が分からず、アマネは眉をひそめる。

「ああ、今までの苦戦の原因ってのは、大抵が悪魔らしい不意打ちが主だったからな。その中で唯一、ウェンディゴは小細工なし、小

手先なしで、俺とまっすぐに戦ってくれた悪魔なんだよ」

淳にしても、どちらかと言えば好戦的な性格なので、これまでも、不意打ちよりも、真っ正面から悪魔に向かっていくことの方が多かった――彼は幼い頃から、様々な格闘技を学んでいる為、どうしたってそのような戦い方の方が多くなるのである。

そして。

ウェンディゴもまた――そんな彼と同じように、真っ向から相手と戦うタイプの悪魔だった。魔法よりも、むしろ殴る、蹴るといった肉弾戦を好むという傾向も、淳と共通している。

だからこそ。

ウェンディゴという悪魔の存在は、淳がその手で仕留めた今となっても、かなり強く、彼の印象に残っていた。自分と同じ土俵で戦ってくれた――だけではなく。

「それに――ホラ、一応、俺、アイツにはいっぺん負けてる訳だし」

うん。

いいや、認めちゃおう。

人生、諦めが肝心だ。

「なるほど、分かりました……」

アマネが頷く。そして、

「ですが」

と、続けた。

「ジュンさん。貴方はもうじき、そのような事は言ってられなくなるでしょう――貴方には今、大いなる脅威が近付いて来ています。ウェンディゴとは比べ物にならない、とてつもない脅威が」

「え……？」

突然の話題の振り方に、淳が戸惑っていると、アマネは、

「『ベル・デル』」

と。

唐突に、言い放った。

「……」

本当に唐突だったので、淳は思わず沈黙してしまった――同時に、アマネが何故、自分と話したがっていたのかも分かった。

恐らく、先程までの淳に対する質問は、単に場をほぐす為のもので、こちらの――『ベル・デル』に関しての話の方が、本命なのだろう。

だが。

「……有り難いね、わざわざそっちからその話題を振ってくれるなんて」

淳は言った。

そう、彼にしても、アマネには『ベル・デル』のことについて聞きたかったのだ――少し前に、淳がアマネと話がしたい、とアツロウに提案した本当の理由も、そこにある。

それまでの彼は、アマネからその悪魔について聞くことに対し、若干消極的な姿勢を見せていたのだが、先程の東京タワー下における、悪魔達との戦闘を経て、その考えを改めたのだ。ユズから聞いた話によると、道中、彼女に襲い掛かってきた悪魔もまた、自らを『ベル・デル』の配下だと名乗ったらしい。

赤坂トンネル、衛国寺、東京タワー下と、その全てに現れた悪魔全員が、ベル・デルの配下だったことになる。最早ここまで来ると、いつその『ベル・デル』とやらが現れてもおかしくはないと判断した淳は、この芝公園についた時から既に、アマネと話がしたいと思い始めていたのだ。

「教えてくれよ、アマネ――ソイツは、その『ベル・デル』って悪魔は、一体何者なんだ？　部下の悪魔達は、全員がソイツを『不死』とか言ってたけど、だとしたら、どうすれば倒せる？」

「それは」

まくし立てるような淳の質問にも、しかしアマネは、全く慌てなかった。

「――まるで、『不死』と呼ばれているにも関わらず、『ベル・デル』にはちゃんと倒す方法があるのだと、確信しているかのようですね」

「そうじゃなきゃ、やってられないからな」

実際には、彼がそうだと信じているのは、そんな根性論からではなく、もう少し理論的な部分から来ているのだが、それについてわざわざ詳しく説明する必要なはないだろう、と淳は判断した。

「……なるほど」

再び、アマネは頷く。

「しかし――残念ながら、淳さん。ベル・デルを倒す方法なんて、私は知りません」

「え？」

思いもよらぬ言葉に、思わず淳は、大きく口を開けた。

「し――知らない？」

「……申し訳ありません」

どうやら、嘘をついている訳ではないらしい。実際、アマネは、本当に申し訳ないというように、ベンチに座ったまま、深々と頭を下げていた。

「んー……」

参ったなぁ、と淳は思った。……って、アレ？だとしたらコイツ、どうして自分から『ベル・デル』の話なんか振ってきたんだ？　――とも。

正直な話、淳はベル・デルについて、倒し方以外の情報には、全く興味はないのだけれど。

「そもそも、ベル・デルの弱点について知っている存在は、それほど多くはないのです。それを知っている者は、その昔、ベル・デル自信が皆殺しにしてしまいましたからね……。彼が魔界の中で『冥府』と呼ばれる場所に封印されてから、かなりの月日が経っているのも、理由の一つです。彼の弱点を知っているのは――今となっては、『神』か……或いは、『イザナギ』ぐらいのものでしょう」

「……？　『神』は何となく分かるけど、その『イザナギ』って言うのは誰なんだ？」

……だが、気のせいだろうか？聞いたこともない名前だというのに、どこかで会ったような気がする……。

淳の質問に対して、アマネはしばらく、何かを考え込むような仕種を見せたが、

「まぁ……そうですね。それぐらいなら、話してもいいでしょう」

と言った。

「それは、知ってるけど言えないことがあるって事か？」

アマネの言葉の裏に隠れた意味を、淳が目敏く指摘する。

「それをどう判断するかは、貴方の自由です」

しかしアマネは、そんな淳の指摘を軽く受け流した。

（……手強いな）

もっとも、この程度の引っ掛けに乗るようでは、とても翔門会の巫女など務まらないだろうが……。

九頭竜天音。

やはり、かなりの曲者だ。

既に、自分とアマネの体が密着していることなど、淳には気にならなくっていた。今はただ、心中で警戒を強めつつ、淳もアマネの顔を見詰めている。

「『イザナギ』というのは……そうですね。まず初めに聞いておきたいのですが、貴方は、『ペルソナ使い』という存在を知っていますか？」

「『ペルソナ使い』？　……いや」

だが、すぐに淳は、「待てよ……？」と思った。

『ペルソナ使い』……自分はどこかで、この単語を聞いたことはなかっただろうか？　しかしこれもまた、先程、『イザナギ』という名前を聞いた時と同じく、上手く思い出すことが出来ない。

「言うまでもないことですが」

淳が自らの記憶を必死に探っている中、アマネは話を続ける。

「普通の人間では、とてもではありませんが、悪魔には太刀打ち出来ませんが――しかし、これに対抗できる存在が、二つ存在します。一つは、私や貴方のような『悪魔使い』。そしてもう一つが――先程言った『ペルソナ使い』です」

「ふぅん――で？」

「この二つの存在の、決定的違いは、その力の出し方にあります。悪魔使いは、何らかの方法で仲魔を喚び出さないことには、悪魔とは戦えません。つまり私達は、悪魔という存在がいて初めて、悪魔と戦うことが出来るのです」

「皮肉だな」

「皮肉ですよ」

思わず、淳は笑った――が、アマネは笑わなかった。

「対して、ペルソナ使いは悪魔には頼りません。彼等は――何と言えばいいのか――『心の力』を使います」

「『心の力』？」

何だソレは。

「ええ。細かい説明は省きますが、彼等は自分の心を悪魔のような怪物に具現化させ、それを使役して戦わせるのです」

「はぁん」

淳としては、それ意外にどういった反応をすべきか、分からなかった――最早、魑魅魍魎、有象無象、人外魔境ここにありという感じだ。

「でも、ま、それって便利だよな――俺達とは違って、体一つあれば、悪魔と戦えるってんだから」

「そうなりますね。それゆえに、ペルソナ使いは、悪魔使いと比べても、極めて数が少ないのです。専用の道具さえ用いれば、誰でも悪魔使いになれるのに対し、ペルソナ使いはその特性上、どうしたって才能に起因する部分が多いですから――まぁ、それはともかく、今言った『イザナギ』というのは、現在確認されているペルソナ使いの中で、最も強いと言われている男なのです」

「最も、強い……」

つまりは、『最強』。

人類最強――という訳だ。

「『イザナギ』ならば或いは、ベル・デルを倒す術を知っているかもしれません――彼は本来、別の方の専門ですが、それでも、悪魔に関する知識は並ではありませんから」

「へぇ……。このＣＯＭＰを手に入れた時から、薄々勘づいてはい

たけど……やっぱ、いるんだな。悪魔とかを専門にしてる人間って」

そして、恐らくは。

目の前にいるこの少女にしても、その部類に入るのだろう――と、淳は思った。

「実は」

その少女が言った。

「未確認ではありますが――その『イザナギ』が、この封鎖内に紛れ込んでいる、という情報を掴みました」

「え、そうなのか？」

だとしたら、好都合だ。

「それじゃ、ソイツの特徴とかを教えてくれ。この後、すぐにでも探さないと……。俺達にはもう、時間がないんだ」

「そうでしょうね」

アマネは頷く。次には、その視線を、淳の頭より少し上の位置へ向けた。

「先程出会った際、貴方の余命が『1』であるのを見た時から、その事は察しがついていました――ジュンさん。貴方は明日、ベル・デルと戦う運命にあるのですね？」

無表情ではあるものの、その口調には若干、淳を気遣っているような節があった。

「……ま、そうなんだろうな。きっと」

ユズに言わせれば、そうとは限らない、らしいが――流石に淳は、そこまでポジティブにはなれなかった。

「しかしです、ジュンさん」

ここで。

ただでさえ、肩と肩が触れ合っているところに、そこからアマネは更に、顔までも、グッと淳に近付けてきた――淳は一瞬、身構えはしたものの、顔を遠ざけようとも、目を背けようしなかった。何故か、そうしてはいけないような気がしたのだ。

「私なら、そんな呪われた運命から、貴方を助け出せるかもしれません」

「え？」

いきなり何を言い出すのか、という目で、淳はアマネの目を、間近で見返した（因みに、最早アマネが淳に抱き着いていると言っても過言ではない状況に、周りの人間の多くが2人に向けて好奇の視線を向けていたが、淳は敢えてそれを無視していた）。

「ジュンさん。以前貴方は、この芝公園で、私にこう言いましたね？　自分を翔門会に入れてくれないか、と。今からでも遅くはありません。そうしませんか？」

「な、なんで――」

「貴方を守る為です」

一方的に、アマネは言った。

「貴方が正式に、我々の同志になれば、貴方を本部に匿うことが出来ます」

本部、というのは恐らく、先日、ジンが見つめていた、あの施設のことだろう、と淳には予想がついた。

「実は既に、貴方の部屋を用意してあります。明日は一日中、そこに留まっていればよろしいでしょう。その間に我々は、先程言った『イザナギ』からベル・デルの弱点を聞き出し、そして倒してみせます。もっとも、一度入会した以上は、その後も我々の同志として活動して頂きますが、そこはご容赦下さい」

「……」

鼻と鼻が触れ合う程近くにある（と言うか、実際に触れている）アマネの目を、淳は黙って見詰めていた。

同時に、淳はアツロウから聞いた話を思い出していた。それによると、この少女はどうやら、自分のことが好きらしい。

一体どんな根拠があって、アツロウがそんな事を言い出したのかは知らないが、もしその話を聞いてなければ、淳は、アマネの神経を疑っていただろう。さほど親しくもない人間に対し、ここまで親

切にしてくれる人間が、一体どこの世界にいると言うのだ。

第一、そんなことをすれば、アマネもまた、ベル・デルと戦う事になる。いくら彼女が強力な悪魔使いだとはいえ、下手をすれば死んでしまうことになるのだ。

いや。

それよりもまず――確か以前、アマネは、自分が入会を希望した時、「今はやめておいた方がいい」、とか言ってなかっただろうか？にも関わらず、今、こうして自分に入会を促しているのは、一体何故なのだろう？

……？

よく分からない。

やがて。

「……いや、アマネ。気持ちはありがたいけど、そりゃ無理だ」

と、そのように、淳は言った。

「アツロウとユズを残したまま、俺だけが安全地帯でのうのうと過ごす訳には――」

「勿論、貴方が望むのであれば、二人のご友人にも、貴方と同じ措置をとらせましょう」

再び、アマネは淳の言葉を遮った。まるで、淳がそう言った場合

はそう答えることを、予め決めていたかのようだった。

「ですが、貴方以外の人間を匿うのは、その二人が限界です。それに――これは先に言っておきますが、仮に貴方かあの二人の命、どちらを選ぶかという状況に陥った場合、我々は真っ先に、貴方の命を優先するでしょう」

「……」

その台詞が言い終わると同時に、淳はアマネをきつく睨みつけたが、しかしアマネは、全く怖じけづいたりはしなかった。

「そんな顔をしないで下さい。あくまで、仮定の話です」

「……そうかよ」

「それで？　どうでしょう？　ここは1つ、我々の同志になりませんか？そうすれば、貴方の安全は保障しましょう」

話を戻され、淳は大いに迷った。先程、アマネが言った例え話は不愉快ではあったが、彼女の提案自体は、受け入れたくなるようなものだった。

だが、と、淳はこうしてアマネと話す前の、アツロウとの会話を思い出していた。現在、封鎖内の各地で人々が悪魔に襲われているところを、翔門会が助けているのは、実は彼等の自作自演なのではないか、という話だ。

淳はそんなアツロウの考えを、言葉では否定したものの、内心では、淳もそれなりに翔門会の事を疑っていた。

「先程は明日一日と言いましたが、貴方さえ望むなら、封鎖が終わるその日まで、本部に留まってくれても構いません。無論、食料、衣類、寝具などは提供致しますし、何人か警護もつけます。他に、仮設的なものではありますが――浴室なども用意しています。流石に、何日も野宿していては、貴方もご自分の衛生状態が気になるでしょうし、この封鎖を乗り切る為には、健康状態が良であることに越したことはありませんからね」

「うぉっ……」

魅力的過ぎる……！

特に、浴室の件に関しては、ユズ辺りが泣いて喜びそうだ。

だが――。

「いや……アマネ、スマン。気持ちはありがたいけど、やっぱベル・デルは、俺達の力だけで何とかしてみるよ」

「おや」

「その、俺って実は、母子家庭でさ。余り、他人の言うことをホイホイ鵜呑みにするな、って、母親にキツく言われてんだ」

「それはつまり――私のことを疑っている、と？」

「……まぁ、その、ぶっちゃけ、な」

うん。

まぁ、ここまで来たら、わざわざ隠す必要もないだろう。

「翔門会の巫女という肩書きでは、信用するにあたりませんか？」

「……」

あたりません。

全くあたりません。

むしろ、怪しさ満点といった感じだ。

「その……肩書きとかだけで信用するな、とも母親に言われてるし……」

有里淳は、何とかこの状況を切り抜ける為、「母親に言われてるから」を連発し始めた。

有里淳、マザコン疑惑。

まぁ実際、彼はマザコンなのだけれど（あ、言っちゃった）。

「……弱りましたね」

実際には、全くそんなことなさそうに、アマネが言う。

「女の子のような顔をしているから、てっきり、押しに弱いのかと思っていましたのに」

「……」

喧嘩売ってんのか、この娘。

「仕方ありません……」

「分かってくれたか」

「更に待遇を良くしろ……と、そういう事でしょう？」

「……アマネ……俺、今から凄い失礼なこと言うけど……、この封鎖が解けたら、すぐに脳科か精神科に行ったほうがいいぞ？」

「では、私達が貴方に施せる待遇の限度が、どれぐらいかについてですが……」

淳の言葉を、アマネはこともなげに無視した。

女の子に自分の言葉を無視されるのって、結構凹むな……と、淳。

「先程は、貴方に何人かの警護をつけますといいましたが、そうですね……『警護』というのが不満なら、『部下』でも構いません」

「え？」

部下？

「貴方の命令には何でも従う部下を、こちらで用意しましょう。つまり貴方は、入会したその時点で、幹部の座につくことが出来るということです。しかし、幾ら何でも、入ったばかりの貴方にそこま

での待遇をしては、反発する信者も少なくはないでしょう。ですから必然、貴方の部下として用意出来る人間は、私が個人的に信頼を置いている、女性信者だけになってしまいますが、そこはどうか我慢して下さい」

「……」

え……？　……ちょっ……え？

「あ、アマネさん」

思わず敬語。

「そ、それはつまり……俺がここで首を縦に振れば、どんな命令も従順に聞いてくれる、専属の女性信者がついて来る、と、まさかそういう事でしょうか！？」

「何やら、言葉の節々に卑猥なエッセンスが感じられますが……まぁ、その通りです。私が差し上げた部下は、貴方の好きなようにして構いませんよ」

「……っ！！」

有里淳＞『混乱』＋若干の『魅惑』状態。

ヤバイヤバイヤバイ！

この娘……！　純そうに見えて、その実、かなり未成年男子の扱い方を理解してやがる！

それとも、この程度の人心掌握術は、翔門会の巫女ならば当たり前、必然必修必須のスキルだとでも言うのか！？

だが――。

ここでアッサリと情欲に屈する程、淳は愚かではなかった。

流石にここまで来ると、かえって猜疑心（さいぎしん）の方が強くなってくると言うものだ。少なくとも、単純に淳の命を救いたいから、というのが本当の理由ではないのは確実だろう。何か、裏があるとしか思えない。

では、その『裏』とは？

それが分かれば――苦労はしない。

「……その答えは、後でもいいかな？」

悩みに悩んだ末、淳は言った。自分がどう思うかはともかく、先ずは、アツロウやユズ――特に、アツロウの意見を聞いてからにしたい。

「最早、ベル・デルが貴方に会うまで、それほどの時間が残っているとは思えませんが……まぁ、いいでしょう」

言うと、アマネはようやく、淳と体を離し、スッとベンチから腰を上げた。その仕種一つをとっても、どこか気品があると言うか、優雅な感じがする、と淳は思った。

立てば更によく分かる、十六歳という、自分と同い年とは思えな

いほど落ち着いた雰囲気に、蠱惑的なプロポーション。なるほど、以前アツロウが「よく見るとかわいい」と言っていたが、今の淳にも、その時の彼の気持ちがよく分かった。

けれどもやはり、淳がアマネから感じる印象は、優雅よりも気品よりも何よりもまず――『違和感』と、この一言に尽きる。

青山霊園で初めて会った時からそうなのだが、九頭竜天音というこの少女は、決定的なところで何かがおかしかった。

例えるならば――外見だけを人と全く同じにしたロボットのようだった、。いや、女の子に対する表現としては、これはあんまりにもあんまりだし、淳自身、そう思った自分を、すぐに恥じたのだが（何より、実際、彼の家には、正しくその人の形をしたロボットがいるので、この比喩はちょっと洒落にならない）、しかし、まぁ、彼がそう考えてしまうぐらいには、アマネはやはり、どこかが違っていたのだ。

「――あ、ちょっと待ってくれ」

既に、話すべきことは話したとでも言うように離れていくアマネの背中に対し、淳は声をかけた。

「はい、何でしょう」

そんな彼に、クルリと、アマネは体を向ける。

「アマネ――お前は、今回の封鎖について、どれぐらい知ってるんだ？」

「……」

「ここまでの話を聞いてれば、どんな馬鹿でも分かる。お前が、この封鎖の『真実』に、かなり近い位置にいるってことはな――さっきまでの話にしたって、どこかまだ、ぼかしてる部分があるんじゃないのか？」

「ええ、ありますよ」

意外にアッサリと、アマネは答えた。

「ですが、それが果たして、何か問題になるのでしょうか？」

「……どうだかな」

問題なのか、問題じゃないのか――それは、淳にも判断がつかない。

だからこそ問題なのだ。

「ですが――これだけは信じて下さい。私が貴方に対して、何か不利になるような事をするつもりはありません。今、貴方に必要以上の事を教えないのも、やはり、貴方の為なのです」

「……」

淳は何も答えなかった。

「安心して下さい。時が来たら必ず、私が知ってることを、包み隠さず教えますよ。そう、例えば……」

再び、淳に背を向けつつ。

アマネは、何ということもなく、アッサリと、言った。

「貴方の父親のこと――とか」

2nd Day『不死の者』

――『魔界』。

悪魔、及び堕落した天使などが住まう、闇の世界。

その世界のとある場所に、一軒の瀟洒（しょうしゃ）な館があった――外見上は、人間界で言うところの、中世のヨーロッパ等で見られる貴族の館と酷似していたが、その中から溢れ出ている気配は、とても人間のものとは思えないほど暗く、禍々しいものだった。

やがて、どこからともなく、その屋敷の入口にある巨大な鍛鉄（たんてつ）の門の前に、２つの影が音もなく現れた。

「首尾は？」

その内の一体の悪魔――堕天使『ビフロンズ』が言った。

「ハッ！　バッチリに決まってんだろ？」

もう一体の悪魔――妖魔『カラステング』が、それに答える。

魔界の空は、何も、視界が効かない程の暗い漆黒の闇に覆われている――という訳ではなかった。しかし、かと言って明るい訳でもない。その空にしても、やはり『禍々しい』という表現が、一番しっくりくるだろう。

青い空があるべき場所は、大量の血でも塗りたくったかのように

真っ赤になっており、浮かんでいる雲にしても、色は白ではなく、深みのある黒色だった。

その下を、ビフロンズとカラステングが、先を急ぐように歩いている。

「それにしても、まさか」

ビフロンズが言った。

「モムノフとマカーブルが、たかが人間相手に、命を落とすとはな――」

「それなんだけどよ」

ビフロンズの言葉に、カラステングが「待った」をかける。

「どうも、その二人だけじゃねぇみたいだぜ？　その二人の部下の――下級悪魔の何体かも、地上の人間に殺られてるって話だ」

「……それもまた、信じ難いことだ。確かなのか？」

「だろうぜ、何せ、目撃者がいる。俺達は地上で死んだら、その場で死体が消滅しちまうけど、危うく人間に殺されそうになったところを、命からがら逃げてきた奴がいるらしいぜ――ああ勿論、そんな根性無しは、その報告を聞いた後、ベル・デル様がすぐに『ミルメコレオ』の餌にしたけどな」

「……まったく」

カラステングの話を聞きながら、ビフロンズはため息をついた。

「そんなことでは、ベル・デル様は相当おかんむりだろうな？」

「ハッ！　まぁ、そうだろうな。けどそりゃ、モムノフやマカーブルみたいな、適当な連中に任せたからだ。最初っから、俺に任せときゃよかったんだよ」

「……大した自信だ」

ビフロンズの言葉に対し、カラステングは「ハッ！」と小さく笑っただけで、そのまま何も言わなかった。

気がつくと、二人は例の鍛鉄の門の前に立っていた。カラステングは迷うことなくその門を押し開き、その脇を、ビフロンズが通り過ぎる。それを確認したカラステングは、再び元のように門を閉めた。

「さっきの話の続きだけどな」

再び、カラステングが口を開いた。

「どうも、モムノフやマカーブルを殺った人間ってのは、『悪魔使い』らしい」

「それぐらい、私も知っている」

ビフロンズは、フンと鼻を鳴らした。

「人間が悪魔を殺したとなれば、むしろ、そう考えるのが当たり前

だろう。今更、何を言っているのだ？」

「まぁ、最後まで聞けって」

やがて、二体が通る道は、狭い小道から、広い馬車道へと変わっていた。

「目撃した兵の証言を聞く限り、どうも、悪魔（オレたち）を殺ってるのは、悪魔使いだけじゃないらしい。中には、特殊な兵器を使う奴もいたって話だ」

「特殊な兵器？」

何だそれは、とビフロンズ。

「それは、例の『コンプ』という機械とは違うのか？」

「違うみたいだぜ、どうも。俺も詳しくは知らねぇしな。ただ、人間はその兵器を『ジュウ』って呼んでたそうだ。他とは違う、緑色の服を着た連中が使ってたらしい。パッと見た感じでは、ただの鉄の塊なんだが、人間がソレに指をかけたかと思うと、予め空いていた穴から、超高速で鉛玉が飛び出してきたって言うんだよな」

「ほう……」

カラステングの話を聞いて、ビフロンズは少し感心した様子だった。

「私が最後に地上に出てから、既に何百年という月日が経っている……。その間に、人間の文明はかなり発展していた、というこ

とか」

「ハッ！　まぁ、ビビる事はねえさ。いざとなったら、その兵器を奪って、逆にこっちが使ってやればいい。奴らが使えるってんなら、人型の悪魔である俺やアンタにも使えるってことだしな」

カラステングの前向きな発言に対し、ビフロンズはつかの間、何か思案するような表情を見せた後、

「そうだな」

と言った。

「……唯一、危惧すべきは、人間がその『ジュウ』とやら以外にも、何かしらの兵器を持っているかもしれんという事か。下級悪魔ならともかく、我々クラスの悪魔に通用する兵器となると、数は限られてくるだろうが……それでも、不安の芽は早く摘んでおくことにこしたことはない」

ビフロンズがそこまで言ったところで、2体は館の玄関にたどり着いた。今度はビフロンズがそのドアを開け、2体は館の中へと入って行く。

屋内は明かりが全くないどころか、そもそも明かりをつける器具自体なく、ビフロンズがドアを閉め、外からの光が遮断されたことで、最早、完全な暗闇となっていた。だが、ビフロンズにしてもカラステングにしても、それに対しては一切、不平を漏らしたりはしなかった。

当然である。

彼等は『悪魔』――暗闇どころか、完全なる『闇』こそを住処（すみか）としているの存在――なのだから。

二体は広々としたホールを通り過ぎ、重圧な雰囲気を醸し出している木造りのドアの前に立つと、一瞬、立ち止まったが、すぐにカラステングが銀色の取っ手を回した。

そこは、何十人もの人間が入っても（この部屋に人間などいないが）まだ余るぐらいの広さを兼ね備えた客間だった。

中央に置かれてている、部屋に相応しい装飾が施された長テーブルは、黙りこくった大勢の悪魔によって埋め尽くされており、テーブルの中央に置かれた1本の蝋燭に灯っている青白い炎だけが、僅かに部屋を照らしている。

そして。

ビフロンズとカラステングが視界を向けている先――客間の最も奥に位置する場所に置かれた、豪奢（ごうしゃ）なひじ掛け椅子に、1体の悪魔が座っていた。

他の悪魔と比べて、段違いに体が大きく、また、限りなく人に近い外見をしている――が、当然、その場に集まっている者達と同じく、決して人間ではない。筋骨隆々の肉体を覆っている肌は、鈍い銀色の光を放っている。

しかし、この悪魔の最も注目すべき点は、その両手、両足首に巻き付いている鎖の方だろう。驚くべきことに、その鎖の先は、下の床へと溶けるように続いており、先がどこと繋がっているのか、確

認することが出来ない。

やがて。

『来たか』

その悪魔――不死の王、『ベル・デル』は、その場で聞いた者全員が思わず身を竦めてしまいそうな、恐ろしい、低い声で、未だ入口近くに佇んでいるビフロンズとカラステングに声に向かって口を開いた。

『少し遅れたようだが――まぁいい、座れ』

二体は言われた通り、それぞれ空いている席に座った（集まっている悪魔達の中には、到底椅子に座れなさそうな体型の悪魔もいたので、そういった者は、直接床に座り込んだり、宙に浮いたりしていた）。

そして、自分の主な配下が全員集まったことを確認すると、再びベル・デルは口を開く。

『報告しろ』

「ハッ、主（あるじ）」

ビフロンズと話していた時とはうって変わり、畏まった様子で、先ずはカラステングが現状を報告し始めた。

「我々の度重なる地上への進出、及び進撃を受けて発生した、人間の『負』の感情は、着実に、貴方様が通れるだけの次元の穴を開き

つつあります。早ければ、あと数時間足らずで、貴方様は地上へ舞い戻ることが出来るでしょう」

『……』

カラステングの報告を受けても、ベル・デルはしばらくの間は無言だった。それを見て、何体かの悪魔が不安そうにそわそわし始めると、ようやくベル・デルは口を開いた。

『あと数時間……か。悪くない』

ベル・デルの『悪くない』という言葉を聞いた途端、カラステングの顔に、一気に安堵の表情が広がった。

「私とビフロンズは、この談議が終わり次第、何体かの部下を引き連れ、地上へと進出するつもりです。それで更により多くの人間を仕留め、必ずや、今日中に貴方様が通れるだけの通路を、大量の人間（サエ）の命をもって開けてみせましょう」

カラステングの言葉を聞いた悪魔達は、感心するような目で彼を見ていたが、しかしベル・デルだけは、相変わらず無表情だった。まるで、自分がいつ地上へ出ることになろうと、全く興味がないという様子だった。

『……そうか』

やがて、ベル・デルは言った。

『まぁ、どうせ、いつ地上へ出ることになったところで、我の望みが叶うとは思えんがな――』

ベル・デルの言葉を聞き、その場の悪魔全員が、気まずそうに口をつぐんだ。ベル・デルの『望み』が一体なんであるのか、彼等は知っているからだ。そして、その望みが叶う可能性が、限りなく低いということも。

『我が聞いた話では』

ベル・デルが話し始めると、全ての悪魔が息を潜めた。

『どうやら地上には、無能な人間共の他に、何人かの悪魔使いも紛れているそうだな？』

「おっしゃる通りです」

ベル・デルがビフロンズへと目を向けながらそう言った為、彼は素直に頷いた。

『数は？』

「現在確認されているだけで、およそ五～六人と言ったところです」

『……そして、モムノフもマカーブルも、その悪魔使いに殺されたと見て、まず間違いない――そうだな？』

「それは……は、ハイ、おっしゃる通りです」

一瞬、ビフロンズは何か弁明を計ろうとしたが、すぐに首を縦に振った。

テーブルを囲んでいる悪魔達の面々も、どこか不安そうな表情で、ベル・デルとビフロンズを交互に見ていた。全員が、自分が悪魔使いに同志を殺された責任を負わされるのではないか、と不安になっているのだ。

だが、ベル・デルは誰も咎めようとはしせず、何か思うところがあるように、客間の天井を見詰めていた。

『だが』

ややあって、ベル・デルは言う。

『どうせ、その悪魔使い達にしても、我を殺すことなど出来んのだろうな』

「勿論でございます。主」

ベル・デルが自分を咎めるつもりがないと分かり、ビフロンズは目に見えてホッとしていた。

『……フン』

しかし何故か、ベル・デルは、そんなビフロンズの言葉を聞いても、全く嬉しそうではなかった。むしろ――

『つまらん』

ポツリと、ベル・デルは呟く。

『まぁいい――ところで、カラステングよ』

「はっ」

突然声をかけられ、咄嗟に、カラステングは身を固くする。

『先程、お前が言った作戦だが――最初の内は、人間を襲いはしても、すぐには殺すな』

「と、言いますと？」

『逃げ惑う連中を一カ所に集め、例の悪魔使い達をおびき出す為のエサにするのだ。もし、連中をおびき出す事に成功したら、貴様とビフロンズの手勢で、すぐさまソイツ等を包囲しろ。奴らが束になって向かってきたところで、どうせ我を殺すことは出来んだろうが、目障りなハエは、早めに叩き潰しておいた方がよかろう』

「かしこまりました。主」

ビフロンズがペコリ、と従順に頭を下げた、その時だった。ベル・デルの右隣りにある椅子に座っている1体の悪魔が、ゆっくりと手をあげた。

「主。少し、よろしいでしょうか？」

そんな、どこか落ち着いた雰囲気のある発言を聞いて、そこにいる全ての者の視線が――ベル・デルも含めて――その悪魔へと注がれる。

そこに座っていた悪魔は――しかし悪魔でありながら、この場に集まっている悪魔達の中で、最も人間に近い外見をしていた。腰ま

で伸ばした藍色の髪に、透き通るように白い肌。全身には、所々に紫色の紋様が施された銀色の鎧を纏っている。

種族は『幻魔』。

名を――『クー・フーリン』と言う。

クー・フーリンは、隣に座っているベル・デルと目を合わせると、静かな――しかし、よく通る声で話し出す。

「主、つい先程、私の部下が――未確認ではありますが――あの『イザナギ』が、今回の『試練』に紛れ込んでいる、という情報を掴みました」

クー・フーリンの言葉を受けて、テーブルの周りが一気に色めき立った。しかし今回、全員が抱いている感情の中には、驚きばかりではなく、疑惑や恐れなども混じっていた。

「『イザナギ』……」

ベル・デルは、一旦目を伏せ、そのように繰り返した後、すぐにまたクー・フーリンと視線を合わせた。その目には、ここまでの会話では見られなかった、ある種の烈(はげ)しさが宿っている。

その余りの視線の強さに、傍から見ていた何体かの悪魔が、恐れ慄(おのの)いたかのように目を逸らした――しかし、クー・フーリンだけは、感情の読めない目で、静かにベル・デルの顔を見つめ返していた。

それから、沈黙がおよそ数分間続いた後、ようやくベル・デルが口を開いた。

「『人類最強のペルソナ使い』……か。クー・フーリンよ。先程、お前は未確認だと言ったが――お前がこうして、この場でそんな事を言う以上、それはかなり信憑性が高い情報と見てよかろう』

今度は、それまでベル・デルに現状を報告していた、ビフロンズやカラステングと言った悪魔が、恨めしげにクー・フーリンを見た。自分の主であるベル・デルが、自分達の報告よりも、クー・フーリンの言葉に興味を示したことが、面白くないという様子だった。

クー・フーリンは二、三回程、何も言わず静かに頷くと、

「ええ……その通りです、主。私個人の考えを言わせて貰えば、『イザナギ』が今回の『試練』に介入しているということは、ほぼ間違いないでしょう」

ベル・デルの口元が僅かに傾き、笑うような形になった。

『そうか、ならば――』

「主！」

突如。

ベル・デルが何か言おうとした、まさにその時、ビフロンズが２人の会話に割り込んできた。ベル・デルとクー・フーリンは一旦口を閉じ、他の悪魔達は、一斉にビフロンズの方へと顔を向ける。

「主、私が得た情報は、少し違っております」

その声が聞こえていない訳がないだろうが、ベル・デルは依然として、クー・フーリンと顔を合わせたままだった。

ビフロンズもまた、そんなベル・デルの様子には構わず、自分の話を進める。

「私の方の部下が仕入れた情報では、『イザナギ』――十九年前に、『女神（イザナミ）』を打ち倒した、あのペルソナ使いは、現在、『周防克哉（すおうかつや）』と交戦中とのことです」

それを聞いたクー・フーリンが、にやりと笑った。

「残念だが、ビフロンズ殿――それは些かならず古い情報である、と言わざるを得ない。確かに、『イザナギ』と周防克哉がやり合っていたのは紛れもない事実だが、それは数日前までの話だ。あの二人の戦いは、今回の『試練』が始まる二日前には、既に終わりを告げている」

しかしビフロンズは、クー・フーリンの言葉には耳を貸さなかった。

「主、私が保証いたします。奴（イザナギ）は間違いなく、現在は、周防克哉と戦っている真っ最中です――その為、今回の件に、『イザナギ』が絡んでいる可能性は、限りなく低いかと……」

しかしベル・デルは、指の太い、巨大な岩石を思わせる白い手を挙げて、ビフロンズの言葉を制した。ビフロンズはたちまち口をつぐみ、再びクー・フーリンを睨みつけた。

『その二人が交戦していることは、我も以前から知っておった』

ベル・デルが言う。

『しかし、それが終わり、且つ【イザナギ】が今回の【試練】に紛れているとなれば必然、【イザナギ】は見事、周防克哉に対して、勝利を収めたことになる――そうだな？クー・フーリン』

「はい、主」

クー・フーリンが頷く。

『ならば当然……周防克哉は、【イザナギ】にその命を奪われたと――？』

「いえ」

今度は頷かずに、クー・フーリンは首を小さく横に振った。

「重症ではあるものの、一命は取り留めたようです――むしろ、『イザナギ』自身も、なるべく彼を殺さずに済むようにと、所々で手を抜いていたそうですし……」

『……フン』

くだらん、と、ベル・デルは鼻を鳴らした。

『まぁ、奴の【目的】を考えれば、そうするのが当たり前か。もしそこで周防克哉を殺していようものなら、本末転倒も甚だしいからな……』

気のせいか、ベル・デルの言葉には、どこか哀愁が漂っていた。

しかし、とベル・デルは言葉を続ける。

『たとえ【イザナギ】と言えども、我を殺すことは出来んだろうな……。やはり、我を殺すことが出来る存在は、【あの男】しかいない……いや、いなかった、と言うべきか』

そんな独り言にも似た、ベル・デルの言葉を、全ての悪魔達は黙って聞いている。

『【あの男】は、我と対等に渡り合える唯一の存在だった。しかし、かの【ニュクス】を封印する為、奴は自らの肉体と魂を犠牲にして、この世から去った……。奴がいない今となっては、我を満足させられる存在など、もはや皆無であろうよ。あの忌まわしき、【神】にしても、同じことだ』

いや。

厳密には、あと1人、ベル・デルと渡り合える――彼の弱点を知る存在がいるのだが、まさか、あの気まぐれな男が、この件に関わることはないだろう、とベル・デルは思った。

『とにかくだ』

ベル・デルが言う。

『ビフロンズ、カラステング――それから、クー・フーリン。お前達三人は、これから地上に赴き、最後の仕上げをしてこい。遅くとも明日までには、我が地上へ出られるよう、全ての準備を整えるの

だ』

――と、その時だった。客間全体に、苦痛に満ちた、長い呻き声が聞こえてきた。

テーブルを囲んでいた全ての悪魔が、その声がする方向――ビフロンズとカラステングの背後にある、客間の入口へと目を向ける。そこでは丁度、一体の悪魔が部屋に入ってくるところだった。

クー・フーリンとはまるで対象的に、その悪魔――妖虫『ミルメコレオ』の姿は、最早、人間離れしているどころではなかった。悪魔の中でも、ここまで奇っ怪な姿をした存在は少ない。その姿は、一見すれば獅子のようにも見えるが――しかし驚くべきことに、本来、尻尾や後ろ足があるべき体の後ろ半分には、本来の獅子の体ではなく、昆虫の下半身がついていたからだ。

前半分には獅子の体。

後ろ半分には蟻の体。

それが、妖虫『ミルメコレオ』の特徴である。

だが、客間に集まった全ての悪魔の目は、そんな醜悪な外見ではなく。ミルメコレオが口に加えて引きずっていた、一人の人間の男に向けられていた。

「た、助けて！助けてくれぇっ！」

その男は、まるで海に溺れているかのように、顔を真っ赤に充血させ、苦しそうにもがいていた。

これは、魔界を覆っている空気が、人間界とは別の、特殊なものである為だ。悪魔が人間界の空気を吸っても、彼等の体には何の影響も出ないが、特別な訓練を積まない限り、普通の人間にとって、魔界の空気は毒でしかない。

ミルメコレオは、口から今まで咥えていたその人間の足を離すと、ペタペタと足音をたてて、ベル・デルの傍へと近寄った。ベル・デルはそんなミルメコレオの頭の辺りを無意識に撫でながら、

『……ソイツは何だ？』

と、誰にともなく聞いた。

「調べてみます」

男の一番近くにいたカラステングはそう言うと、足の爪先で人間の腹を蹴り上げた。すると、男の苦痛に満ちた声と共に、その懐から、一台の機械が転がり落ちた。

「……？　これは……」

最初、カラステングはそれが何なのか分からない様子だったが、すぐに、それが現在『試練』が行われている、人間界の『東京』という都市で、密かに流通し始めている『改造ＣＯＭＰ』だと分かった。

『なるほど』

カラステングからそう告げられたベル・デルは、納得したように

頷く。

『それが、お前達が言う【コンプ】という機械であったか……。たまたまそれを持つ人間を、地上で見つけたミルメコレオは、何か役に立つだろうと思い、ここまで連れてきたという訳だ……』

クックック、とベル・デルは笑う。

『……ある意味、お前達2人よりも、良い仕事をしたのではないか？』

ビフロンズとカラステングに向けられたベル・デルの言葉を聞いて、テーブルの周りから一気に嘲笑が巻き起こった。遠慮なく大声で笑う悪魔もいれば、笑い過ぎて、逆に腹を抑えて苦しんでいる悪魔もいる。クー・フーリンだけが、ミルメコレオが連れてきた男を、冷たい表情で見ていた。

実は、今連れられて来たこの男は、およそ五時間ほど前に、人間界での東京タワー下において、有里淳とその仲間達から、ＣＯＭＰを奪おうとしたヤクザ達のリーダーなのだが、無論、そんなことはベル・デル達には預かり知らぬことだ。スキンヘッドに白いスーツを着たヤクザの肌は、今や魔界の空気に侵され、薄い緑色へと変色しつつあった。

『ちょうどいい』

ベル・デルが言った。

『その機械があれば、より多くの同士を連れていく事が出来る。……しかし欲を言えば、あと何台かは欲しいところだ』

ベル・デルはしばらく能面のような表情で、床でもがき苦しんでいるヤクザを見下ろしていたが、やがて口を開いた。

『カラステングよ。他にその機械を持つ人間を知っているかどうか、聞き出すのだ』

「はっ」

そう短く応じるやいなや、カラステングは、どこからともなく自分の身の丈以上もある金色の槍を取り出し、尖った先の部分を、ヤクザの腹部に刺し込んだ。

致命傷に至るほど深くは刺していないが、同時に、そこからほんの少しでも手を捻れば、すぐに内臓を切り裂ける程度の深さだ。カラステングは絶妙な力加減で、ヤクザをいつでも殺せる状況を作り出していた。

たちまち、ヤクザは身の毛もよだつような、苦悶の声を口から漏らしたが、魔界の障気が既に喉の部分にまで侵食している為、大きく悲鳴を上げたりはしなかった。

ヤクザの顔は汗と涙でグチャグチャになっていたが、カラステングを含む全ての悪魔達は、それを檻の中にいる動物を見るような目付きで見ている。

「話は聞いてただろ？　他にその機械を持っている人間を知ってるなら、とっとと吐くんだ」

慈悲など芥程(あくた)も感じさせない声で、カラステングがヤクザに語り

かける。

「あ、ああ！　話す！　何でも話すから、頼む、助けてくれぇっ！」

「うるせえ。黙って質問に答えろ」

ぐりぃ、と、カラステングは、ヤクザの体に刺したままの槍を、軽く捻った。たちまち、ヤクザの腹部から、血がとめどめなく溢れ出していく。それを受けて今度こそ、ヤクザは短い悲鳴を上げた。

「け――今朝！」

啜り泣きながら、ヤクザは叫んだ。

「お、同じようにＣＯＭＰを持ってる、三人のガキを見つけた！な、名前は知らないが、一人は、目立つような青い髪に、猫耳みてーな形をしたヘッドホンをつけていたから、すぐに分かる筈だ！」

『青い髪……？』

何か思うところがあったのか、ベル・デルはその特徴を聞いて、何か考え込むように眉目を寄せた。

『……まぁ、いい。欲しい情報は手に入った』

ベル・デルはヤクザを拷問しているカラステングに目を向けると、無言で頷いた。それを見たカラステングも、同じく無言で頷く。そのやり取りの意味を本能的に理解したヤクザは、恥も外聞もかなぐり捨て、必死に命乞いを始めた。

「やめろ……やめてくれ！　頼む、助けて……お願いだ……助けてくれ！　助け――！」

ヤクザの最期の言葉は、カラステングがその腹部に刺したままの槍を一気に突き出したことで遮られた。

ヤクザは目を大きく見開き、つかの間、口をパクパク動かしたかと思うと、最後に一度大きく痙攣したきり、そのまま動かなくなった。

『さて……クー・フーリンよ』

ベル・デルは死んだヤクザから一切の興味をなくすと、隣にいるクー・フーリンへと顔を向けた。

「分かっております。主」

ベル・デルが何か言う前に、クー・フーリンが頷く。

「青い髪に、猫の耳を模した装飾品をつけた少年ですね……。すぐさま、部下に探させましょう」

そして、クー・フーリンはサッと椅子から立ち上がると、そのまま客間のドアに向かって歩き出した。ビフロンズとカラステングも、その後に続く。

やがて、三体が客間から完全に立ち去ったのを確認すると、ベル・デルは誰にともなく、

『死体を片付けておけ』

と言った。それを聞いた悪魔達や、ベル・デルの足元にいたミルメコレオが、その言葉を待ち兼ねたかのように、一斉にヤクザの死体へと群がっていく。

やがて、悪魔達の晩餐が始まった。全ての悪魔達が、ヤクザの体に食らいつき、食いちぎり、租借していくが、既に死んでいるヤクザは当然、叫び声など上げはしない。

肉や内臓が客間に飛び散り、死体を中心に血溜まりが広がっていく。

『……』

（――まったく）

そんな中、ベル・デルだけがその食事には参加せず、ただ黙って目の前に映っているその光景を、無表情な顔で見詰めていた。

（たかがこの程度のことで死んでしまうとは……。人間というのは相変わらず、何とも弱く、そして――羨ましい生き物だな）

人間界でいうところの『東洋アンズ』において、大量の悪魔が出現するのは、これより約一時間ほど後の出来事である。

2nd Day『トランシーバー』

――秋葉原。

普段は大勢の人間で賑わいを見せている日本最大の電気街も、『東京封鎖』という異常事態に見舞われた今となっては、すっかり閑散としてしまっている。

しかしそんな場所を、例によって、淳、アツロウ、ユズの仲良し3人組は、横に並んで歩いていた。

「――と言う訳だ」

淳が言う。

短時間とはいえ、それまで別行動をとってた友人であるアツロウ、及びユズと芝公園で合流し、一旦その公園を離れてから、数十分ほど経った後での事である。

話の内容は当然、現在、封鎖された東京内に拠を構えている、とある宗教団体――『翔門会（しょうもんかい）』の巫女である、九頭竜天音（くずりゅうあまね）から、先程、芝公園にて聞かされた情報についてだ。

芝公園にて、偶然にもアマネと再会した淳は、何とか彼女と二人っきりで会話する機会を作り出し、彼女に対して、『ある質問』をしたのだ。

『ある質問』――とは則ち、現在、封鎖内で密かに流通し始めて

いる改造ＣＯＭＰについて、翔門会が関与しているのかどうか、という事だ。

勿論、そのような事を、何の捻りもなく、直接尋ねた訳ではない――そんな質問をして、仮に、本当にこの件に翔門会が関与していようものなら、アマネが正直に答えてくれる筈がないからだ。

だからこそ淳は、なるべく自分達が抱いている疑念が彼女に悟られぬよう、さりげなく、「翔門会で使われているＣＯＭＰを、自分達も貰えるのか」と、まぁ、大体こんな風に聞いたのだが――結果として、アマネが淳に返した答えは否だった。

翔門会で使用されているＣＯＭＰは、配分するようなものではなく、仮に翔門会の信者であろうとも、全員が持つのを許されている訳ではない。教祖の教えを完全に理解し、人を救う心を持って、初めて授けられる――とのたもうだ。

勿論、この説明だけで、淳が完全に理解した訳ではない。アマネはそう言うが、実際、今朝の東京タワー下や赤坂トンネルにおいて、淳達は改造ＣＯＭＰを見かけたからだ。

しかしだからと言って淳は、アマネに告げられたことの全てを、一概に否定することは出来なかった。実際――ここで、時間軸を現在の秋葉原へと戻すが――淳が、アマネから伝えられた情報の殆どを話し終えた後、アツロウは、

「……まぁ、確かに、簡単には配らないよな」

と、言ったのだ。機知に富んだアツロウがそう言ったから――という訳ではないが、淳にしても、その点は同感だった。

第一、もし翔門会が表立って改造ＣＯＭＰを配布しているとするならば、今頃は、とっくに噂になって、東京全体に広がっていてもおかしくはない筈だ。しかし、これまでの道中において、淳達はそんな噂を一度も耳にしてはいない。

だが、その台詞の後にアツロウは、

「……けど、ナオヤさんが翔門会の依頼で、改造ＣＯＭＰに搭載されてる、悪魔召喚機能のプログラムを組んだ事は事実だ。……とすると問題は、何の為に翔門会がプログラムの制作を依頼したか、だよな」

と言ったのだ。

「う～ん……悪魔を喚び出してまで、したい事って何だろ？」

首を傾げながら、ユズが言う。

「……ま、金やら権力やら怨みやら不老不死やら、人間の欲望なんて、数え出したらキリがないだろ」

淳は頭が痛い、とでも言いたそうに、額を指で揉んでいた。

「つーか、それにしたって、悪魔を『大量』に喚び出す必要はねぇしな……」

「だよなあ」

ハァッ、とアツロウがため息をつく。

また、アマネが淳に告げたことは、それだけではなかった。何と彼女は、淳に対し、翔門会に入会するように薦めてきたのだ。

――いや。

アツロウに言わせれば、そのこと自体は別に、驚くほどのことではないらしいのだが――淳に言わせれば、滑稽な上に、酷く的外れな推測だが――どうやらアツロウは、アマネが淳に恋愛感情を抱いている、と推測しているらしい。

だからこそ、想い人である淳を匿おうとするのは、当たり前だろう、と。

「いや、流石にそれはねぇだろ」

そんなアツロウに対し、淳は言った。

「今までのアマネの行動をどういう風に解釈すりゃあ、そんな突飛な発想が出て来るんだ？　さっきは敢えてスルーしたけどよ――やっぱ、あんな美少女が俺みたいな奴に好意を抱くなんて、ありえねえって」

「『俺みたいな奴』、ねぇ」

随分、被虐的なことを言うんだな、と、アツロウは薄く笑う。

「もし、お前にそう見えてるんだとしたらそれは、俺がこの封鎖が始まる前日に、青山霊園でミクを助けたからだろ。下っ端とは言え、ミクも翔門会の一員だしな――アマネって、見るからに律儀そうな

性格だし、仲間を助けた俺に対して、少しでも恩返ししたいと思うのは、自然な流れじゃねぇのか？」

「そうかなぁ？」

やたらニヤニヤしながら、アツロウは言う。

「でもホラ、アマネって、やたらお前にベタベタしてくるじゃん」

「ベタベタぁ？」

思わず、淳はアツロウの台詞を反芻していた。果たして今まで、アマネが自分にベタついてきたことなど、あっただろうか？

――と、彼がアツロウの言葉に対して、そのような疑問を持ったその時、

「……あるでしょ？」

突然。

二人の会話に、そう言って入り込んでくる人物がいた――言うまでもなく、ユズである。淳が顔を向けると、何故か彼女は酷く不機嫌そうな表情淳を見ていた。

いや、不機嫌どころか、もうハッキリと『怒っている』と言った方がいいかもしれない。淳の顔に向けられているその目にはどこか、有無を言わせぬ雰囲気が漂っている。

「ゆ、ユズさん？」

彼女から向けられている余りのプレッシャーに、思わず「さん」付けで彼女の名前を呼ぶ淳。

「覚えてないの……？　ジュン、青山霊園の時はあの子に膝枕されてたし、一回目にここで会った時も……なんか抱きつかれてたじゃない……」

「え、ええと……」

今や、ユズの体からは、何か得体の知れない、どす黒いオーラが溢れ出ていた（ように、淳には見えた）。

今にも、ダースベイダーのテーマソングが流れてきそうだ。

そんな中、ああそう言えば、と、淳は思い出す。

青山霊園で、確かに自分は、アマネに膝枕された。

そして先程、自分達がいた場所――芝公園で一回目に会った時は、（何故か）抱き着かれた。

更に――これはユズがその場にいなかった為、彼女も知らないのだが――先程、芝公園で、二人でベンチに座っていた時も、何故か彼女は体を密着させてきた（その時は抱き着いてきた訳ではなく、淳に対して一方的に体を預けてきたのだが、密着したという意味では、どちらも一緒である）。

「ねぇ、ジュン」

「は、ハイっ！　何でしょう！？」

常人では到底敵わないような雪男、ウェンディゴという悪魔を打ち倒した有里淳が、一介の女子高生であるユズに対し、完全に畏縮（いしゅく）していた。

情けないにも程がある。

因みにアツロウはと言うと、さも自分は無関係であるかのように、両手を頭の後ろにあて、上空を見上げながら、わざとらしく口笛を吹いていた（腹立つ、メッチャ腹立つ）。

「別に、いいんだよ？」

ユズは言った。

「……？」

（「いい」って……何が？）

「別にね、私は、いいんだよ？」

「……」

二回言った。

（だから……何が？）

「別に、ジュンがアマネとイチャイチャしてようと、私には関係ないしぃ？」

「……」

えーと……。

どうやら、淳とアマネの不埒な行為に対し、ユズは酷く怒っているらしかった。

何故、ここで彼女が怒るのか、淳には皆目分からなかったが――とにかく、怒っているらしかった。

しかも、語尾の部分の発音を、「だしぃ？（→）」、と伸ばしてきた。

……。

……怖っ。

「ジュンって、モテモテだよねー」

「えっと……」

ユズさん？

「学校でも、よく色んな女子から告白されてるし、桐条さんや山岸さんともラブラブだし」

「ラブラブとか言うな……」

単に、友人である母の息子だから良くしてもらってるという、そ

れだけの話だ。

「しかも、家政婦のアイギスさんとは、よく一緒に寝てるし……」

「い、いや、あの人はホラ、何と言うか、抱き枕の代わりと言うか……」

問題発言。

まぁ、ロボット産業においてもその手を広げている、桐条グループの秀作である彼女は、そのボディにちゃっかり体温調節機能（ロボットである彼女に対し、「体温」という表現は、やや矛盾しているかもしれないが）を備えている為、確かに、寒い冬の夜などは、淳は彼女に頼んで一緒に寝て貰っているのだけど（超・問題発言）。

しかし、淳に言わせて貰えば、そんな事を頼めるのは、アイギスが彼にとって、物心がついた頃から知っている「お姉ちゃん」だからであって——決して、やましい気持ちがあるからではない。

うん。

まぁ、確かに、淳は「アイギスお姉ちゃん」の事が大好きなのだが——それもやはり、恋愛感情などでは決してなく、弟が姉に甘えようとするソレに近い。

——筈だ。

「え、えーと！　とにかくさ！」

と。

ここで、ようやく見ていられなくなったのか、アツロウが慌てた様子で、淳とユズの会話に口を挟んできた（それでも、淳にとっては遅過ぎたようで、彼はそんなアツロウの事を、キツく睨みつけていたが）。

「それで？　ジュン？　アマネが言ってたことは、それで全部か？」

「あ、いや、まだ幾つかある」

それでも、話が変わった事に関して、淳は少なからずホッとしたようではあったが。

そして淳は、アマネが他に言っていたことを、二人に話した。『ペルソナ使い』という存在、『イザナギ』という、謎の人物――そしてアマネが、『ベル・デル』の弱点について、全く知らないという事も。

その三つともが三つとも、アツロウとユズを少なからず驚かせたようではあったが、しかし中でも、アマネがベル・デルの弱点について全くの無知であるという事は、２人にとっては予想外だったようで、アツロウに至っては、落胆を隠そうともせずに、両手で顔を覆っていた。

「マジかよ……まさか、アマネでさえもベル・デルって奴の倒し方を知らないなんてな……」

『ベル・デル』。

不死の王。

そして――明日恐らく、自分達の命を奪うであろう、悪魔の名前。

「……じゃあ、あと心当たりがあるのは、封鎖の前日にジュンが会ったって言う、例の『セト』ってオッサンだけか……」

「いや、あと一人いるぜ」

淳が言う。

「さっきも言ったろ？　『イザナギ』って言う、とある『ペルソナ使い』だ。ソイツなら、必ずベル・デルの弱点を知ってる筈だって、アマネが言ってた」

「確かに言ってたな……けど、アマネからは結局、その『イザナギ』って奴の外見的特徴は聞かなかったんだろ？　一口に山手線内と言っても、決して狭くはないんだ。そんな奴をアテもなく――且つ、しらみ潰しに探してたら、そうしてる間に余命のタイムリミットが来て、俺達がベル・デルに殺されちまう。だったら、見た目だけでも分かってる、その『セト』って人を探すのが得策だ」

「……まぁ、そうだな」

アツロウの現実的な判断を前に、淳としては、グゥの音も出ない。

「まぁ、それはそれとして――アマネが他に言ってたのは……ホラ、ええと……『ペルソナ使い』、だっけ？」

アツロウの言葉に、「ああ」、と淳が頷く。

「俺達とはまた別の、悪魔に対抗できる存在だとよ。まぁ、俺達みたいに、悪魔を使役して戦う人間がいる以上、今更驚きはしないけどな……ただ……」

淳は、何か考え込むかのように、顎に手をあてた。

「どうしたの？」

そんな淳を見て、ユズが不思議そうに首を傾げる。

「俺、この『ペルソナ使い』って単語を、この封鎖に巻き込まれてから、どこかで聞いたような気がすんだよな……。でも、それがどこで、いつだったのか、どうしても思い出せないんだ」

淳が言う。

「気のせいじゃない？　私は、この封鎖に巻き込まれてから、ジュンとは一緒にいるけど――そんな言葉、今初めて聞いたよ？」

「そうかぁ？」

未練がましく食いついてくる淳に対し、ユズは「そうだよ」、と力強く頷く。

「そもそも、そんな頭に残るような単語を聞いたら普通、忘れる訳がないじゃん。……アツロウはどう？」

ユズがアツロウにそう尋ねると、彼は首を小さく横に振りながら、

「いや、俺もないな」

と言った。淳にとって、コレは痛手だった。ユズだけが聞き覚えがないと言うならば――失礼な話、淳はまだ彼女の記憶力を疑っていただろうが、アツロウにまでそう言われると、淳としては頷くしかない。

彼の記憶力、及び推理力に対して、淳はかなり高い評価をつけているからだ。となると――どこかでこの『ペルソナ使い』という単語を聞いた事がある、という自分の考えは、やはり単なる勘違いだった、という事だろうか？

或いは――残された可能性があるとするならば、アツロウ、ユズが近くにいない時に、自分だけがこの言葉を何かの拍子で耳にしたという事が挙げられるが、それに関しては、先程ユズが言った通り、東京に来てから、淳は常に2人と一緒にいる為、かなり低い可能性だと言わざるを得ないだろう。

「……で？　ジュン。お前がアマネから聞いた情報って、それで全部か？」

少し前に言ったのと同じ台詞を、アツロウは繰り返す。

「ん？　ああ、ええと……」

アツロウの問いを受けて、つかの間、淳は逡巡した後、

「そう、これで全部だ」

と言った。

そんな淳を見て、アツロウは一瞬、彼を訝しむような目つきで見ていたが、すぐに表情を元に戻すと、「そうか」、と頷いた。

そして、フウーッと、長く、大きく息を吐き出す。

「……結局、分かった事と言えば、今、封鎖内で広まりつつあるＣＯＭＰに関して、翔門会は無関係らしい事と、後は、『イザナギ』って言うペルソナ使いなら、『ベル・デル』の弱点を知ってるかもしれないって事だけか……」

アツロウが言う。

「けど、ＣＯＭＰについては、アマネの言ったことが全部本当だったらって話だし、その『イザナギ』って奴にしても、結局、名前しか聞いてないしな……」

淳が言う。先程アツロウが言ったように、それだけでは探しようがない。

「やっぱ、あのオッサンに頼るしかねぇか……」

今、淳の脳裏に浮かんでいるのは言うまでもなく、嫌でも人目を引く銀髪に、黒い甚平を着たセトの姿だ。

「赤坂トンネルにいた、あの銃を持ってた女の人の事もあるし、問題は山積みだね……」

ユズが言う。その台詞を聞いて淳は、

「やめてくれよ……。せっかく忘れかけてたのに……」

と、本気で嫌がっていた。

「あの物騒な女のことを思い出す度に、俺は気が変になりそうだ……」

「ジュンって、本当にあの女の人が苦手なんだね……」

ユズは若干、呆れた様子だった。

「俺自身、理由はよく分かんねぇけど――どうも、あの女は苦手だ。とにかく苦手だ。とことん苦手だ。何だろうな……本能的に無理、というか」

「……」

本人がこの場にいないことに、淳は言いたい放題だった。

あのトンネル内において一体、淳は何をされたのだろう――と、ユズが疑問に思ったその時だった。三人が歩いている位置より少し先の場所で、どこか見覚えのある人物が佇んでいた。

「……ん？　アレって、ホンダさんじゃないか？」

アツロウが言う。同時に、淳とユズもそうだと気付いた。オールバックの髪に、灰色のスーツをキッチリと着こなしたその男は、今朝、首都高において自分達と知り合いになった、ホンダという人物に相違なかった。

「本当だ……何してんだろ？」

と、淳が言う。よく見るとホンダは、ただ立っているだけではなく、手に持った小さな機械のようなものを口元に近付けて、ブツブツと何かを喋っているところだった。

「応答せよ……応答……、チッ……やはり通じないか……」

「……ホンダさん？」

そんな彼からおよそ数メートルほど後ろに離れた地点で、淳はやや遠慮がちに声をかけた。ホンダの表情が、余りにも真剣だったように見えたからだ。

背後から聞こえた淳の言葉に対し、ホンダは一瞬、ビクッとした様子を見せたが、やがて、声をかけてきたのが淳だと分かると、途端にホッとしたような表情を見せた――と同時に、手に持っていた小さな機械を、サッとスーツのポケットに仕舞った。淳は、自分だけがそれに気付いていると思ったが、やがて、アツロウの目も同じように、そんなホンダの手の動きを追っていることに気付いた。

しかし、そんな二人の視線に気付いたからか、ホンダが、

「ああ……ちょっと携帯電話を試してみたんだ。やっぱり、ダメだったけどね……」

と言ったので、淳は「ああ、なるほど」、と納得した。

「私達のも、ずっと圏外で……。ホント、困っちゃいますよね！」

ユズが言う。彼女は、そこから更に続けて、

「ケータイが繋がるだけでも、みんな安心できるのに……。政府は何を考えてるんだろ？」

とも言った。

「……そうだね。封鎖を行ってから、既に二十四時間以上が経過している。となると最低でも、悪魔の出現ぐらいは報告されている筈だ」

そう話すホンダの口調には、既に政府など信用していないという思いが、ハッキリと現れていた。

「……それなのに、封鎖線には何の動きもない」

「動く気がないんでしょうよ。きっと」

淳としては、もはやそれ以外に納得がいく理由が思い付かなかった。

「ああ、私もそう思うよ」

言った後、ホンダは大きくため息をついた。

「政府は知っていても、動く気がないのか……、或いは動いた結果がこれなのか。……どのみち、推測の域を出ないが、明らかに様子がおかしいのは事実だ」

そう言うと、ホンダは何か急ぎの用事でもあるのか、「君達も気

をつけて」とだけ言い残して、淳達の前から去って行った。

「気をつけてって言われても……」

そんなホンダの背中を見送りながら、ユズが言う。

「これ以上、気をつける事が増えたら堪らないよね……」

「だよなぁ」

やれやれ、と淳は首を振った。

「さっきお前も言ったけど、ベル・デルに、セトに、改造ＣＯＭＰの流出に、イザナギに、そして赤坂トンネルの抜け道に――と、何はともあれ、気にすべき事が多過ぎるぜ。まぁ、そう言う小難しいことは、我等が誇る名参謀の、アツロウ君に任せるとしますかね。なぁアツロウ――アツロウ？」

その時、淳はアツロウの様子が少しおかしいことに気付いた。既にホンダの姿は三人の視界から消えているが、アツロウだけがまだ、ホンダの姿が消えた位置を、難しい表情で見詰めている。

「……アツロウ、どうしたの？」

ユズがそう尋ねたところで、ようやくアツロウは口を開いた。

「あの人、何者なんだろう……」

「……？？　ホンダさんの事か？」

淳は眉をひそめた。

「ジュンも見ただろ？　あの人が俺達に気付いた時、慌ててスーツのポケットに何かを仕舞ったのを」

「ああ――」

やはり、アツロウも気付いていたようだ。

「けど、アレは単なる携帯電話だろ？　ホンダさん自身がそう言ってたし」

「そう……かな？　俺が見た感じ、アレは携帯電話じゃなくて、トランシーバーのように見えたんだけど……」

「と、トランシーバー……！？」

ユズはそんな言葉など聞いた事がないという調子で、素っ頓狂な声を上げた。

「トランシーバー……って、よく玩具屋とかで見かける、あの小さな無線機みたいなヤツか？」

「正確には、大型の無線機でも、トランシーバーと呼ぶらしいけどな……。まぁ、それはともかく」

アツロウは、目の前にある見えない何かを両手で持ち、脇に置くような動作をした。

「もし本当にトランシーバーだとしたら、どうして、ホンダさんは

あんな嘘をついたんだろう？」

「それは、確かにトランシーバーだったのか？」

淳が鋭く聞いた。

「いや、はっきりとは見えなかった」

アツロウは手を頭にあて、必死に思い出そうとしていた。

「俺が見たのは、ホンダさんの手の平に収まっている、黒くて小さい何かだ。ただ、携帯電話にしちゃ、やたら無骨な感じがしたから、もしかしたらトランシーバーかなーって……」

だが、話していく内に、アツロウは自分の推理に対して、段々と自信を無くしていってるようだった。

そんなアツロウを見て、淳はゆらゆらと首を振ると、

「……見間違いじゃねぇの？」

と言った。

「……そうかな？気にし過ぎただけなら、いいんだけど……」

首を捻っているアツロウの脇で、ユズが断定するように「そうだよ」と言った。

「それに、通じないなら、携帯電話でもトランシーバーでも、余り変わらないんじゃないの？」

ユズの言葉に、完全に納得した訳ではないだろうが、それでも、アツロウは「そうだな」、と無理矢理自分を納得させるように頷いて、この話に終止符をうった。

やがて、三人は再び、秋葉原の通りを歩き出した。アツロウまだ、先程、ホンダが慌てて隠した物がトランシーバーだったのがどうか、考えているように淳には見えたが、彼自身は、アツロウとは別の事を考えていた。

それは先程――ホンダと出会うより前に、2人と話し合っていた、芝公園でアマネから聞いた情報についてだ。

「……」

淳は、彼女から聞いた情報はもう既に、全部伝えた――と、アツロウに言ったが、それは嘘だった。

封鎖内でのCOMPの流出について、ベル・デルの情報について、アマネが淳を翔門会に勧誘した事について、ペルソナ使いや、『イザナギ』という謎の人物について――これらは全て、アマネから聞かされた通りに、アツロウとユズに包み隠さず話したが、あと1つだけ、淳はアマネから告げられた事があった。そして、淳としては、アマネから聞かされた他のどの情報よりも、その時アマネが発した台詞の方が、強く頭に残っていた。

――安心して下さい。時が来たら必ず、私が知ってることを、包み隠さず教えますよ。そう、例えば……貴方の父親のこと――とか。

「……」

父親。

淳の父親。

彼が生まれるより前に亡くなったとされる――淳の父親。

聞かされた言葉から推察するに――アマネが自分の父親について、何かを知っているらしい事は、ほぼ間違いない。単に、淳をからかう為に見栄をきっただけという線もなくはないが、言ったのがあの九頭竜天音である。その可能性は極端に低いだろう。

「……」

淳は考える。

（……問題は――）

何故、彼女が自分の父親を知っているのか。

そして――父親の何を知っているのか、だ。

どうして、ここで自分の父親がストーリーに食い込んでくるのか、淳には皆目見当がつかなかった――まるで、不意打ち気味に頬を殴られたかのようだった。

同時に、自分がまるで、何者かの手の平の上で、いいように躍らされているような――そんな居心地の悪い、気味の悪い感覚を、彼は覚えた。

その感覚自体は、淳達をこの封鎖に巻き込んだ、彼の従兄であるナオヤから渡された改造ＣＯＭＰの画面から、突然、悪魔が現れた時から抱いている感覚ではあったのだが――アマネが自分の父親について何かを知ってると、彼女自身の口から聞いて、淳は更に、その感覚が自分の中で強くなっていくのを感じた。

「……」

――とは言え。

淳の頭の中は結局、再び、ベル・デルの弱点についてや、セトの現在の居場所などで埋めつくされてしまった。アマネが自分の父親について知っていたことについては、なるほど、確かに淳にとっては意外ではあったが、かと言って、取り立てて考え込まなければいけないほど、重要なこととは思えなかった。

これが、僅か一年前に、離婚によって父親と別れることになったユズならば、或いは幼い頃の父親との思い出が少なからずある為、何か思うところがあるかもしれないが――前述したように、淳の父親は、彼が生まれる前には既に他界してしまっている。

つまり、淳の記憶には、父親との楽しい思い出など、一つもあり

はしないのだ。

今となってはそれほど重要ではない、『イザナギ』というペルソナ使いの情報と比べても、父親のことに関しては精々、淳には食玩のオマケ程度の魅力しか感じなかった。

つまり淳にとって、アマネが握っている父親の情報など、その程度のものなのである。

――いや。

ハッキリ言ってしまえば――要するに淳は、父親のことが、それほど好きではないのだ。どちらかと言えば、むしろ嫌いなくらいである。

何故か。

淳の母親――岳羽（たけば）ゆかりは、在りし日の淳の父親について語る時、とても嬉しそうな顔をする。彼女が夫について話すことなど、それこそ、たまに酒に酔った時くらいであり、普段はそんな機会は滅多に訪れないのだが――学生時代、高校の寮の入口で初めて出会った時について教えてくれた時も、そして二人で将来を誓い合った時について語った時も、本当に嬉しそうな、幸せそうな表情をするのだ。

それが――淳には気に入らない。

何故だが分からないが――とにかく、父親について語る時の、母の幸せそうな表情が、淳は気に入らないのだ。

……まぁ、

「要するに、ただの嫉妬なんだけどさ……」

「……？　ジュン、何か言った？」

かなり小さな声でポツリと呟いた淳に対し、ユズが不思議そうに首を傾げるが、淳は、

「いや……何でもねぇよ、ただの独り言だ。気にすんな」

と言った。

今回の『東京封鎖』に、自分の父親が少なからず――と言うより、かなり密接に関係しているという事を淳が知るのは、まだまだ先の話である。

2nd Day『幼なじみ』

――東京、野外音楽堂。

「よし、決めた」

そこの観客席のつに腰を下ろしている一人の男が、やや捨て鉢気味に、そう言った。

背の高い男である――少なくとも、百九十センチぐらいはあるだろう。体格はどちらかと言うと細身だが、決して華奢（きゃしゃ）と言う訳ではない。着ている衣服の隙間から時おり垣間見える肉体には、必要な部分に、必要なだけ筋肉がついており、凹凸が激しく、まるで彫刻のようだった。それだけでも十分目立つというのに、髪の色は明るい銀色で、更に血のように真っ赤な甚平を着ているのだというのだから、見る人間によっては、この男はむしろ、わざと目立とうとしているのではないか、と疑っても仕方がないような外見だった。

『セト』――と言うのが、この男の名前である。

いや、通称と呼ぶべきか。

彼はこの他にも、『イサナギ』や『アメノサギリ』など、様々な通称を持っているが、その全てが偽名であり、本名ではない。

本当の名前――人間としての名前である、瀬多（せた）　〇〇という名前は、今となっては彼の家族、および親しい友人達しか知らない。

そんな彼は今、隣の席に座っている、一人の少女の顔を見ながら、何かめんどくさそうに欠伸をしていた。そして、眠そうに片目を擦りながら、

「――もう、難しい事を考えるのはやめて、いっそのこと、アマネか淳のどっちかに『マリンカリン』でもかけちまおうぜ」

と言った。それに対し、隣の少女が、きょとんとした様子で、首を捻っている。

「……？　『マリンカリン』って、何ですか？」

「簡単に言うと、術をかけた相手に対して、強制的に恋愛感情を植え付ける魔法だ」

「駄目に決まってるじゃないですかっ！　そんなの！」

セトが発した言葉の意味を理解したその少女――鮠美海狗（はやみ　みく）が、猛然と抗議の声を上げる。

女の子にしては短めの黒い髪に、いかにも俊敏力に長けていそうな、スレンダーな体型。明るいグリーンの瞳に、丈が短いスカートの制服を着ていた。

一見すれば、単なる女子高生のように見えるが――しかし、外見とは裏腹に、彼女もまた、かの有里淳と同じく、改造ＣＯＭＰを持つ悪魔使いであり、また、以前までは、九頭竜天音が所属している、翔門会の信者でもあった。

もっとも――『以前までは』と言った事から分かるように、彼女

は既に、翔門会の人間ではない。とある事情により、現在はセトに面倒を見てもらっているのである（ちなみに、少し前までこの場にいた、女性ジャーナリストのショウジは、既にセトとの情報交換を終えた為、今は2人と別れ、再び封鎖に巻き込まれた人々から、現場の声をリアルタイムで聞こうと奮闘している）。

――とは言え、ここでは、何故、彼女がセトに面倒を見てもらうようになったのか、その理由を説明するよりも、今の二人が何について話し合っているのかについて説明したい。もし、前者の方を知りたいと言う方がいるならば、それは、物語を遡って、ミクとセトが初めて出会う部分を読み返して頂ければいい話だ。

セトは現在、自分の仲間――職場仲間、と言えば更に正確だが――である、『レミエル』という『天使』から、ある事を頼まれている。それは簡単に言うと、前述した九頭竜天音と有里淳を、何とか接触させて欲しい、というものだ。

一口に『接触』と言っても、そこには少し複雑な意味がある。レミエルが言うには（これはあくまでレミエルがセトにそう言っただけの事であり、彼はまだ、それについて確認をとっていないのだが）、なんとアマネは、淳に恋をしているらしいのだ。

しかし勿論、たかが一人の少女が、一人の少年に恋をしたところで、神の指揮の元、世界を管理する仕事に就いている『天使』が、そんな事を気にかける訳がない。

では何故、それでもレミエルが、この二人の仲を気にしているのかと言うと、そこにもやはり、それ相応の理由があるからだ。

実は、レミエルは現在、とある人物の肉体を借りて、この『東京

封鎖』に紛れ込んでおり、その『とある人物』こそが正に、九頭竜天音その人なのである。

レミエルが何故、九頭竜天音の肉体を借りて、現在の東京に身を置いているのかについていちいち説明すると、更に話が長くなってしまうので、ここでは敢えて省略するが――要するに、自分の目的を果たす上で、宿主がある個人に特別な感情を抱いているという状況は、レミエルにとって好ましい状況ではないのだ。

かと言って、恋する少女に、その想いを頭から切り離せと言うのも無理がある。それぐらいは、『天使』であるレミエルにも――そしてセトにも分かっていた。

ならば、どうするのが1番良いのか――結論としてレミエルは、だったらいっそのこと、アマネの恋をさっさと叶えた方が、効率が良いと判断したらしかった。

その判断はまぁ、概ね間違ってはいないのだが、レミエル自身は、アマネの恋を手助けする事は出来ない。

それは、彼がその手助けをする相手である少女本人の体に宿っているから、というのも大きいのだが、そもそも根本的に、レミエルは――いや、レミエルに限らず、『天使』という連中は、恋愛感情というものが、今いちよく分からないのだ。元より、人間と『天使』は種族からして違う為、当然と言えば当然なのだが。

そこで、白羽の矢がたったのが、レミエルと同じく、『神』の配下にありながら、人間でもあるセトである。

レミエルは彼に、アマネの淳に対する想いを伝えた後、この二人

の仲を取り持ってほしいと頼んだ。それに対しセトは、終始、そんな事を頼んできたレミエルを、訝しんではいたものの、最終的には、その頼みを引き受けた。

――とは言え。

セトにしたって、恋愛感情と言うものを――取り分け、十代の少年少女達が抱く恋愛感情というものを、完全に理解している訳ではなかった。

いや、彼には現在、結婚している女性がいるし、子供も1人いる為、全く理解できない訳がないのだが――そもそも、そういった感性というものは、歳を重ねるにつれて変化していくものである。

高校時代にこそ、時には年下の女子生徒から、恋愛観に関する相談を受けたりしていたこともある彼だが、三十四歳となった今となっては、その時、自分が何を考え、どのように対応し、その女子生徒に何とアドバイスしたかなど、セトはとっくに忘れてしまっていた。

どうもレミエルは、同じ人間であれば、それだけでアマネの恋を叶えさせる事が出来るだろう、と思っているらしいが、セトとしては、それは大きな間違いだと言いたかった（もっとも、彼がそう言ったところで、レミエルが自分の考えを曲げたとは思えないが）。

だからこそ――彼は現在、こうして東京、野外音楽堂にて、どうすれば淳とアマネの仲をより親密なものに出来るのかと、巣にたかろうとするスズメバチのように、頭をウンウン唸らせているのだが、一つとして妙案が浮かんでこなかった。

それにセトは、こうしている間にも、自分は一体、何をしてるんだと考えずにはいられなかった。彼としてはそんな事よりも、例の連続吸血事件について調査したり、自分の『宿願』を達成させる為の努力に力を注ぎたかった。

大体、その方が効率がいいとは言え、どうしてレミエルはただ一人の少女の恋愛に、そこまで肩入れしているのかと、セトは、これまでに何百回は考えたであろう事を、再び考えた。

そういった理由は、実際にはただのこじつけにすぎず、レミエルが自分にそんな事を頼むのは、何か別の目的があるからだ――と、セトはそこまでは毎回考えるのだが、では、その目的とは？という疑問を抱いたところで、思考が行き詰まってしまうのも毎回の事だった。

「――だからセトさん、そんな突飛な考えより、私が思い付いた計画の方が、よっぽど確実ですって」

そのような事をセトが考えている中、ミクが言う。

「へぇ……で？　その計画って何よ？」

セトとしては、協力してくれてるとは言え、この如何にも知能値数が低そうな少女に対し、何の期待も抱いてはいないのだが（ヒドい）、それでも一応、そう尋ねてみた。

ミクは、一度「ふっふっふ」と不敵に笑うと、

「名付けて、『パンをくわえて曲がり角を曲がった所を、偶然ぶつかってしまった作戦』……っ！」

と、さも何か重大な事実でも告げたかのように、わざとらしく声を低くしながらそう言った。

「……」

セトは、その作戦名を聞いただけで、既にミクが何を考えているのかに対し、全ての興味を無くしていた。と言うか、その作戦名こそが、そのまま作戦の内容がどんなものであるかを、如実に表していた。

「ふっふっふ」

再び、腹が立つような、不敵な笑いを漏らすミク。

「聞きたいですか？セトさん？ミクちゃんが考案した、『ラブプラス』の制作スタッフでさえ真っ青になるような、この革命的とも言える作戦を……っ！！」

「いや、全然」

ミクの言葉を、セトはバッサリ切り捨てた。

「お前が考えられるような事なんざ、単細胞生物でも数秒で考えつくわ。そんなチンケな作戦と、現在話題沸騰中の恋愛ゲームを同列に並べんじゃねぇ」

ついでに言わせて貰えば、あのゲームはそもそも、恋人になるまでではなく、恋人になってから後の方に主題を置いている為、今、ミクが言ったようなアイデアとは、そもそも比べる対象にすらなら

ないのだが。

それはともかく。

「大体、食パンをくわえながら曲がり角を曲がった瞬間に、異性と衝突するなんてシチュエーションは、俺の世代でさえ、既に絶滅してんだよ。馬鹿かお前は」

「ええ!?　何でそんなこと言うですか!?　食パンをくわえて曲がり角を曲がったところで異性とぶつかれば、その相手と必ず恋に落ちるという、この世の絶対的法則を、セトさんは知らないんですか!?」

「そんな法則はこの世にねーよ。お前の存在くらいねーよ。と言うか、昔から疑問だったんだけど、どうしてそこでパンをくわえてる必要があるんだ？　何か別の物でもいいじゃねぇか」

「朝、口に何かをくわえながら走るというシチュエーションにおいて、食パンがもっとも不自然ではないと、昔の方々は考えたんじゃありませんか？」

如何にもそれっぽい理屈を、ミクが語る。

「まぁ確かに、そう考えてみれば、食パンが一番自然ですよね。これがもし焼き魚とかだったら、ぶつかった相手はときめくどころか、普通にドン引きでしょうし」

「それはマジで嫌だな……」

魚を口に挟みがら疾走するって……。

サザエさんのオープニングテーマじゃねえんだから（分かりにくいな、この例え）。

――と、そこまで考えたところで、セトは現在、自分達がいる、この野外音楽堂に、何者かが入って来たのを感じた。

もしや悪魔かと思い、セトはパッと振り向いたが、そこにいたのは悪魔ではなく、彼がよく知る人物――二階堂征志（にかいどうただし）、通称カイドーだった。

カイドーもセトの存在を認めたらしく、遠くから彼と目を合わせると、ズボンのポケットに両手を入れながら、スタスタと近付いてきた。

セトと、そしてやや遅れて現在の状況に気付いたミクは、カイドーが、二人が座っている観客席の傍に歩いてくるまで、黙って彼を見ていた。

ややあってカイドーは、二人と数メートルと離れていない場所にまで近寄ると、まずミクに向かって口を開いた。

「悪ぃが、コイツと二人っきりで話すことがある……。ちょっと退いてろ」

セトの記憶にある限り、カイドーの方からミクに声をかけたのはこれが初めてだったので、彼は少し驚いた。それを受けて、ミクは戸惑いつつも、それまで座っていた席から立ち、一瞬だけセトと目を合わせると、その場を離れ、何処かへと去って行った。

彼女が離れたことを確認したカイドーは、

「……アンタ、前に俺とマリ姉がもめてんの、見てただろ」

と言う。

セトは一瞬、何とかごまかせないものかと思ったが、カイドーの声に確信が満ちているのを感じた為、結局、やめた。

まぁ、正直な話、セトにしても、カイドーに自分があの場にいた事はバレているだろう、と心のどこかで覚悟していた。彼の勘の良さはセトも認めているし、何より、自分のように背の高い人間は、遠くからでも目につく。

それでもセトは、遠くで話しているカイドーの姿を見た時に、咄嗟に身を隠したのだが、まだ知り合いにもなっていない、あの白衣の女性――マリならばともかく、セトという人間を少なからず知っているカイドーにとってはそれだけで、セトがその場に残って、自分達の話をどこかで聞いている筈だと推測するには十分だったのだろう。

だからこそセトは、カイドーの指摘に対して、

「ああ、まぁな。バッチリ見てたよ」

と、アッサリとそのことを認めた。

悪びれるどこか、悪戯っぽくウインクしながらそう言うセトに対し、カイドーは、げんなりした表情を見せる。

「……ったく、相変わらず、アンタは怖ぇモンなしかヨ？普通、俺にそんなこと言われりゃ、隠そうとするモンだろうが」

「そうした方がよかったのか？」

ニヤニヤ笑いながら、セトが言う。

「んな訳ねぇだろ」

例によってカイドーは、そんなセトのからかい半分の言葉を一蹴するが、次には僅かに――本当にごく僅かに、だが――畏まったような態度になったので、再び、セトは驚いた。この男が自分に対してそのような態度をとるのもまた、今回が初めてだった。

「……どうかしたのか？」

セトが少し心配になってそう尋ねると、カイドーは、

「……聞きたいんだがよ、アンタ、好きな女とかいんのか？」

と言った。それを聞いたセトは、もはや目をパチクリさせる事しか出来なかった――全く、一体全体、コイツはどうしちまったんだ？何故そんな事を、この時、この場所で自分に尋ねてくるんだ？

その疑問の答えが、決して気にならない訳ではなかったが、ややあってセトは、まぁ、カイドーにはカイドーの考えがあるのだろう、と無理矢理納得し、素直に答える事にした。

「ああ、まぁ、いるけど……。お前にはまだ、言ってなかったっけ？　俺には妻がいるんだ。今年で十五歳になる娘もな」

今度は、カイドーが驚く番だった。目を平常時より僅かに大きく開き、セトをまじまじと見ている。どう考えても、「こんな男にも妻がいるのか」、と意外に思っているのは間違いなかった。そんなカイドーの反応に「失礼な」と思いつつ、セトは、

「……何で、そんなこと聞くんだ？」

と尋ねた。

「……実はな」

コホン、とカイドーは一度、小さく咳ばらいをする。

「……実は、俺にもよ、気になる女がいる。ケッ……らしくもねぇ話だが、どうにも出来やしねえ……」

「……」

それを聞いて、セトはようやく、「ああ」、と納得した。要するに、どうすれば好きな女と一緒になれるのか、自分にアドバイスを貰いたいらしい――ならばどうして自分に？と、セトは一瞬思ったが、よく考えれば、そんな悩みを相談出来るのは、今のカイドーには自分くらいしかいないのだ、と理解した。

プライドの高いカイドーのこと、彼の傘下にある、渋谷の不良グループ『ダイモンズ』の舎弟達には、そんなことは口が裂けても相談出来ないだろうし、（恐らく）両親にしても同様だろう。

セトが思い付く限り、彼が気を許して言葉を交わすのは、あの白

衣の女性と、そして有里淳ぐらいだと思っていたが、こうして、そ……のような悩みを自分に打ち明けてきた事から判断するに、自分も、少しずつ信頼されてきているのだろうか？と彼は思った。そう考えると、少し嬉しかった。

セトは自分の顔に、再びニヤニヤ笑いを張り付けると、

「……それってもしかして、あの白衣を着た姉ちゃんか？」

と言った。途端に、カイドーの顔がサッと紅潮したので、どうやら図星らしい、とセトは確信した。

「……あ……アッサリ言うんじゃねぇ！」

カイドーがあらん限りの声量をもって怒鳴るが、セトは軽く肩を竦めただけだった。

「……まぁ……そうだけどヨ……」

そんなセトの態度に、もはや、どれだけ威嚇するような態度をとっても無駄だ、とカイドーは悟ったらしく、急に弱々しい口調になった。

「マリ……望月麻里（もちつきまり）っていうのが、アイツの名前でヨ。アイツとは、幼なじみなんだ」

「へぇ……」

薄々そうだとは勘づいていたが、改めて本人の口から聞くと、やはり意外だ、とセトは思った。コイツは、ああいうおっとりした感

じの女が好みなのか、と（ちなみに、セトの妻の性格は、残念ながら「おっとり」とは程遠い）。

「ガキの頃は、オレと……オレの兄貴と、マリ姉で、よく遊んでた……」

カイドーの言葉は、後半から段々と尻すぼみになっていった。

「オレは、アイツより年下だからヨ。いつまで経っても『弟』扱いだ。ったく、ムカついてしょうがねぇ……」

「……」

今度は、セトは笑わなかった。そう話すカイドーの気持ちが、セトにはよく分かったからだ。

現在でこそ、彼は十七歳の時に引っ越しした先の八十稲羽で知り合った、その場所の高校のクラスメイトと結婚しているが、それ以前――中学三年の時（無論、八十稲羽に引っ越しする前までにいた学校だ）、彼が所属していたとある部活の部長に、彼は一時期、想いを寄せていたのだ。

結局、当時高校三年生の、その女性の気持ちが、自分ではなく別の男性に向いていると分かった時点で、セトは潔く身を引いたのだが、それでも、その時の事が彼にとって、紛れも無く初恋であったのは間違いない。

――だからこそ。

セトは、カイドーの気持ちが――分からなくは、ない。

思うところが――なくも、ない。

「――アンタさ、如何にも、普段から遊んでそうじゃんか。……あ
あ、気に障ったら悪ぃ……。何か、年上の女に、ビッと決まる口説
き方とか、知らねぇかヨ？」

カイドーが言う。

「……」

セトとしては、「それが人にものを頼む態度か？」と、思わなく
もなかったのだが、それでも、カイドーが、彼なりになるべく誠意
をもって尋ねている事が分かったので、素直に答えることにした。

「そう……だな……。……う～ん」

何とか有用なアドバイスを送る為、そして年長者としての威厳を
見せる為に、セトは何とか、自分と現在の妻が結婚するきっかけと
なった時の事を、必死で思い出そうとする。いや、この場合は結婚
ではなく、恋人関係になった時の事を思い出すのが得策だろう。

そう、あれは確か……。八十稲羽の商店街にある、とある神社で
の事だったか。あの時、自分は確か……。

そこまで考えたところで、セトの脳裏に、その時の記憶が一気に
蘇った。

「『ピンチを助ける』、とかはどうだ？」

セトは、「これこそまさに、グッドアイデア！」と、非常に得意そうな顔をするが、残念ながら、カイドーの反応は、

「ピンチだぁ……？　あ～、封鎖ん中にいる限り、いくらでもありそうだがヨ……」

と、あまり芳しいものではなかった。

「……」

「第一アイツ、厄介事に首突っ込んでやがるからな。余計に心配だぜ……」

「厄介事って……」

セトの頭の中で、今度は、数時間前にカイドーとマリが言い争っていた時の、会話の内容が浮かび上がった。

「やっぱあの姉ちゃんも、お前と同じように、吸血事件の犯人を追ってるのか？」

セトが言う。

「ああ……」

得に隠そうともせず、素直に頷くカイドー。

「こんな状況になって、アイツも、あの事件の犯人が、悪魔なんじゃねえかって、思い始めたに違いねぇ。だがよ、アイツは悪魔使いじゃねぇ。犯人を見つけたところで、逆に殺されちまうぜ……」

「……」

そんな台詞を受けてセトは、どうやらあの女性が悪魔と契約し、その身に宿している事を、カイドーは知らないらしい、と理解した。

まぁ、彼が悪魔を初めて知ったのは、ほんの数日前の事だから、それは無理もないだろう（『純血』である有里淳ならば、或いは気付いたかもしれないが）。

このことをカイドーに教えるべきか……と、セトは一瞬迷ったが、結局黙っている事にした。

単純に面倒だというのもあったが（オイ）、教えたところで、カイドーの心配事をさらに増やしてしまうだけだろう、と思ったからだ（誰だって、自分の知り合いの身体に、実は悪魔が宿っているのだと知ったら、とてもではないが、いい気分にはならないだろう）。

「……だったら、先に犯人を捕まえればいい。そうすりゃ、あの姉ちゃんは安全だ」

少なくとも、その件に限っては――と、セトは心の中で、文章を完結させた。

「ああ、そのつもりだ……」

頷きながら、カイドーが言う。

「どっちにしろ、吸血事件の犯人は、俺がぶっ殺して……ん？」

そこまで言って、カイドーは何かに気付いたかのような表情をする。

「……そうか。それをやりゃ、オレの株も急上昇するんじゃねえか？」

「……まあ、少なくとも、弟扱いされる事はなくなんじゃねぇか？」

セトの言葉に、「だろ？」と応じた後、「ククク……」と、カイドーは笑う。

「……いいぜ、好都合だ。ビッと決めてやんヨ……！　ありがとヨ。色々アトバイスくれて」

「ん？　あ、まぁ……役に立てたんなら何よりだが……」

セトにしてみれば、それほど気の利いた助言をしてやれたとは思えなかった。同時に、「やっぱミクが言うように、もう三十を過ぎた俺じゃ、十代の奴らが抱く恋愛感情は理解できそうにねえなぁ」、とも思った。

「……何だか、しまらねぇ会話で悪かったな」

ようやく元の調子を取り戻しながら、カイドーが言う。

「おっと……アンタ、分かってんだろうが、今オレが言ったこと、ゼッテー他の奴らに言うなよ？　もし話したら――」

カイドーが何を言いたいのか理解したセトは、再び、ニヤッと唇の端を吊り上げると、

「――どうなるっていうんだ？んん？」

と、からかうように、カイドーの言葉を遮った。

そんなセトに対し、カイドーは一瞬、言葉に詰まったかのように、「ウッ」とした表情を見せた後、

「……考えとく」

と言った。それが、カイドーにとっての精一杯だった。

念のために言っておくが、これは決して、カイドーが小心者だからという訳ではない――単純に、セトの存在感が強過ぎるのだ。

国会議事堂前の広場や、テレビの世界にて、セトが戦っていた時、カイドーはその場にいなかった為、彼はまだ、セトの実力がいか程のものであるのかを、具体的には知らないが――それでも、こうして対峙しているだけで、本能的に、セトの戦闘力が自分のそれを遥かに上回っている事ぐらいは気付いているのだろう。

そうでなければ、カイドーがセトと手を組むなど、ありえないことなのだ。

彼が――本来は誰ともつるもうとしない、一匹狼の二階堂征志が手を組むのは、セトやホンダ、そして有里淳のように、彼が心から認めた相手だけなのだ。

ともあれ。

今度は、セトの方が、「ククク」と笑う。

「まぁ、どうせ今は暇だしな。他に何か困ったことがあんなら、気軽に相談してみろよ。俺みたいな壮年のオッサンでよければ、いくらでも相談に――」

と。

そこまで言ったところで。

「……っ！！」

セトは、まるで今まで座っていた客席が、急に高熱を帯びたかのように、バッと立ち上がると、自身の足元――野外音楽堂の、コンクリートで固められた地面を見つめる。

いや、視線こそは地面を向いているものの――彼の意識は、そのさらに下にある、何かに向けられているように見えた。

「……？？　何だ？　どうしたんだよ？　いきなり」

無論、そんな突然過ぎるセトの行動を、カイドーが理解出来る訳もなく、怪訝な表情をセトへと向けている。

「……」

しかし、セトはカイドーの問いには答えず、黙って地面を見つめたままだった。

「……十……二十……いや、もっと多いか……？　……とにか

く、かなりの数なのは間違いない、か……。速く動かねぇと……」

やがてはそのように、ブツブツと独り言のように喋り始めるセト。

「……オイ！　一体、何だって――」

――いうんだよ！　と、いい加減じれったいと思ったのか、カイドーはセトに詰め寄ろうとしたが、途端に、セトが勢いよく、真剣な表情でピンと背筋を伸ばした為、思わず口をつぐんだ。

「カイドー。悪いがさっきの『今は暇だしな』ってのは無しだ。まもなく――あと数分も経たない内に、相当な数の悪魔の軍勢が、この東京に攻め込んでくる！　今すぐ、人が多く集まってる場所に向かうぞ！」

言うと同時に、セトはその長身からは想像もつかない俊敏さで、野外音楽堂の出入口に向かって、一気に走り出す。カイドーもまた、急な展開に追いつけず、少なからず戸惑いながらも、そんなセトの後に続いた。

２ｎｄ　Ｄａｙ『東洋アンズ前のバトル（１）』

――池袋、東洋アンズ近隣。

「カイドーとマリ先生が幼なじみぃ？」

とんだお笑い草だ、とでも言いたげに、淳は「ハハハッ」と笑った。

時刻は既に、午後の六時を回り、昼間には澄み切ったような青色だった空も、今ではほんのりと赤みがさしてきている。

「それって本当なの？　アツロウ」

未だ、脇でクスクス笑いをしている淳の脇腹を、咎めるように肘で小突きながら、ユズが言う。

「ああ、多分間違いないと思う」

と、アツロウ。

マリ先生――とは勿論、現在、ここは少し離れた場所にある野外音楽堂にて、セトとカイドーの話の中でも話題に挙がった、望月（もちづき）麻里（まり）の事である。

「俺がまだマリ先生に家庭教師をやってもらってた頃、先生、時々言ってたんだ。自分には、『タダシ』って言う、４歳年下の幼なじみがいるって」

「あーハイハイ、なるほどなー」

ようやく笑いが収まったらしい淳が言う（どうやら、野生的なカイドーと、おしとやかな性格をしたマリ――どう考えても対照的な二人が、実は幼なじみだと聞いて、かなりツボにはまったらしい）。

「カイドーの本名って、確か『二階堂征志』だっけ？なーるへそ。俺達は今まで『カイドー』って呼んでたから気づかなかったけど、確かに、下の名前は……プッ……クックッ……！……た、『タダシ君』だな……ハッ、ハハハハハッ！！」

「……」

「……」

今度は、不良グループのリーダーが「タダシ君」と呼ばれている事に対し、笑い始める淳。そんな彼を、ユズとアツロウが、若干冷めた目つきで見つめている。

それから、しばらくして。

「――ふぅっ、さて……」

と、再び笑いを収めた淳が、今度は真剣な表情で、横で歩いているアツロウに目を向ける。

「でも――そうなると、一つ気になる事があるよな。それは、今回の封鎖における、マリ先生の立ち位置だ」

淳が言う。

「え？　どういうこと？」

その言葉の意味を、完全に把握出来なかったらしいユズが、キョトンとした表情をする。

「つまり」

淳が口を開きかけたところで、彼に代わってアツロウが、ユズに説明をする。

「前にホラ、カイドーが言ってただろ？　『俺は必ず、兄貴を殺した、連続吸血事件の犯人をぶっ殺してやる』――みたいな事をさ。でも、マリ先生だって、このお兄さんの知り合いだった事は間違いないんだ」

そこまでアツロウの説明を聞いたところで、ユズが「ああ、そういうこと」と、納得したような表情をする。

「そっか……カイドーがあれだけ怨んでるんだもん。……マリ先生だって、事件の犯人に復讐したいって思ってても、不思議じゃないよね……」

「カイドーは、犯人の正体は悪魔だって決め付けてるみたいだけどよ……マリ先生はどう思ってんだろうな？　少なくとも、前に会った時は、まだ悪魔の事とか知らないように見えたけど……」

淳が言う。

「あれからもう、二十四時間近く経ってるし……流石に気付いてるだろ。だから――」

「――カイドーと同じように、犯人が悪魔だと思ってもおかしくないな。うん」

アツロウが言いたい台詞を、淳が引き継いだ。

「え!?　それじゃあ……!」

突然、ユズがハッとした表情になる。

「マリさんもカイドーみたいに、その犯人に復讐しようとするかもしれないってこと!?」

余りにも意外そうにユズが言うので、淳は思わず、片方の眉を吊り上げていた。

「そんなに意外か？　むしろ必然だろ。自分の親しい知り合いが殺されたとなりゃ、その後に考えることは、皆一緒だ」

「そう……かなぁ？」

淳の言葉を聞いても、ユズはまだ得心がいかないようだった。

「マリさんって、凄く優しくて、おとなしそうだから……。てっきり、『復讐』とか、そんな怖い事はしないと思ってたんだけど……」

しかし、そんなユズの台詞の途中から既に、淳は首を横に振っていた。

「いや、ああいうおとなしそうな人に限って、一度、自分でハッキリと決めたことは、絶対に最後まで曲げないもんさ。もし、マリ先生が心の底から、例の犯人に復讐したいと思っているなら、あの人は、それをやり遂げるまで、絶対に止まらないだろうな……」

アツロウと違い、望月麻里という人物と、まだそれほど多くの面識をもっていない筈の淳がここまで言い切れるのには、それなりの理由がある。

今、淳の脳裏には、よく自分に勉強を教えてくれる、一人の家庭教師の姿が浮かんでいた。

彼女もまた、マリと同じように、普段はおっとりとしているが、本質的には、心の芯が強い、まっすぐな人で、普段は、「『勉強』というものは、人類が作り出した文化の中で、最も愚かしいものの1つだ」と豪語している淳が、それでも平均以上の成績を取ることが出来ているのは、ひとえに、彼女の――山岸風花（やまぎしふうか）のお陰だと言える。

「……うん、確かに、俺が知るマリ先生は、そういう人だった。……でも、やっぱり心配だよな。一応、今度会ったら、復讐なんか止めるよう説得してみるか？」

アツロウが言う。

「そうだな。まぁ、あの人が本当に、今、俺が言ったような性格の持ち主だとしたら、それも無駄だろうけど――」

そこまで言ったところで、突如、淳が黙り込んだ。どこか遠くで、

誰かの叫び声が聞こえたからだ。

「……？　な、何？　今の……」

ユズが叫び声の主を探そうと、視線を左右に走らせようとするが、その必要は皆無だった。次の瞬間には、三人の目の前にある曲がり角から、一人の民間人の女性が現れたのだ。息を荒げ、体中からは冷や汗を噴き出している。

淳達を見て、一瞬、女性はビクッとしたが、三人が自分に危害を加えるような存在ではないと分かると、その場で力なく、ヘナヘナと腰を下ろした。

「ど、どうしたんですか！？」

戸惑い気味にユズが尋ねると、女性は弱々しい口調で、

「か、怪物が……あっちに怪物が出たの！」

と言った。

「か、怪物……！？」

女性の言葉を聞いて、ユズの頬に、一筋の汗が流れ落ちた（その背後では、淳とアツロウが顔を見合わせていた。２人共が――僅かではあるが――恐怖の表情を浮かべている）。

「あ、『悪魔』みたいなバケモノよ！」

ヒステリック気味に、女性が叫ぶ。

「な、何匹もいたの……！　男の子と、女の子が逃げ遅れて……！」

「ふ、２人も！？　大変、助けなきゃ！」

女性の言葉を聞いたユズが、背後にいる淳とアツロウを見ながら言う。淳は彼女に対し、「分かってる」、と短く答えると、例の女性民間人に近寄り、

「……その人達の特徴とかは分かりますか？」

と尋ねた。

「あ、アニメのキャラみたいな格好をした女の子と……男の子は覚えてないわ！」

「アニメのキャラみたいな格好？」

女性の口から、思いもしなかった言葉を聞いて、一瞬、淳は戸惑ったが――すぐに、頭の中で、ある記憶が蘇った。

「……もしかして、『ドリー』って子かな？」

アツロウ、ユズと、二人の顔に対して、交互に視線を向けながら、淳が言う。

『ドリー』。

無論、それは通称であり、本名は確か、小牧翠（こまきみどり）だった気がする――と、淳は必死で、昨日、その少女に出会った時の記憶を、正確に

思い出そうとしていた。あれから色々な事があり過ぎて、淳にはもうその時の出来事が遥か昔の事のように感じていたが、あれだけ個性的な外見は、中々忘れられるものではない。

「――うん！　きっとそうだよ！」

淳の推測に対し、ユズは、確信があるかのように、力強く頷いた。

「……いや！　ちょっと待て！」

その時、何か思い当たったかのように、アツロウが二人に対して、パッと開いた手を向けた。

そんな彼に、「なんだよ？」と言いたげに淳が顔を向けると、アツロウは、

「……もしかして……今の時間からすると、これって、ラプラスメールの事件じゃないか！？　場所だって間違いない！」

と言った。

アツロウの言葉を聞くと同時に、淳は、自分の腹の中に、何か重い物がドスンと落ちたかのような錯覚を覚えた。

そうだ、間違いない――淳も思い出していた。十八時頃、豊島区の池袋において、『怪物』の襲来により、五十名以上の犠牲者が出る――と、今朝、自分達が持つ改造ＣＯＭＰに届けられた、未来を予測するメールに、確かにそう書いてあった。

同じく、それに気付いたユズの顔から、サーッと血の気が失せて

いく。

「どどど、どうしようっ……！！」

「メールの内容を信じるなら、危ないのはその二人だけじゃない……。犠牲者は五十人以上だ……！」

淳が言う。

「……！　ダメ……、そんなの、助けなきゃ！　行こう、ジュンっ！」

「分かってら！」

ユズの言葉を受け、淳は力強く、自分の胸を拳で叩くと、再び、女性民間人の方へと向き直り、

「なるべく急いで、ここから離れてください――あと、出来ればでいいんですが、もし途中で、誰か他の人を見かけたら、しばらくは池袋に近付かないように言って下さい」

と言った。

そして無意識に、目の前の女性が、命からがら逃げて来たであろう場所――『東洋アンズ』がある方向へと目を向けた。

幻聴かどうか、淳には自信が持てなかったが、遠く離れたその方角から、何か大きな音が聞こえたような気がした。それは、自然的には決して発生しない筈の――さながら、一昨日、青山霊園で起きた爆発の音にも似ていた。

2nd Day『東洋アンズ前のバトル（1）－2』

――池袋、東洋アンズ前。

ここも秋葉原同様、普段なら、大勢の人間で賑わっているが、山手線沿いに東京を封鎖され、且つその内側で、大量の悪魔が徘徊するようになった今となっては、すっかり人気がなくなっていた。

――先程までは、の話だが。

現在の東洋アンズ前は、大量の悪魔と、それから逃げ惑う人々によって、混乱の極みに陥っていた。

「うわあああああああああっ！！　嫌だあああああぁぁぁぁぁぁっっ！！」

「助けてっ！　助けてっ！　お願いっ！　誰か――」

「止まれ！　止まれ！　来るな！　来るなあああああぁぁぁぁぁぁっ！！」

「頼む！　友人が怪我をしたんだっ！　誰か手を貸してくれ――オイッ！　誰でもいいから、とにかく手を貸せって言ってるだろうっ！」

「終わりだ……。もう、何もかも終わりだ……あ、あああああああああ！？」

阿鼻叫喚。
地獄絵図。
それら二つの二字熟語が、ぴったり当て嵌まるような最悪の状況が、そこに出来上がっていた。
――しかし。
そんな中でもただ一人、正気を保ち、何とか、襲われている全ての人々を助けようと、必死に考えを巡らせている少年がいた。
黄色いTシャツに、黒いジーンズ。いつもなら七三分けにキッチリと揃えられているであろう黒い髪は――先程まで激しく体を動かしていたのか――すっかり乱れきっていた。頭からは血を流しており、黒い縁のメガネが、若干ずり落ちている。
高城圭介（たかしろけいすけ）――である。
「くそっ……！　一体、何なんだ……!?」
先程も述べたように、彼は決して、混乱などはしていない――混乱はしていないが、しかしそれでも、狼狽せずにはいられなかった。
先程、ケイスケがたまたまここを通り掛かった時には、まだ彼の他には人っ子一人おらず、かなり閑散としていたのだが――突然、どこからともなく悲鳴が聞こえてきたかと思うと、次の瞬間には、至る所から大量の悪魔と、それから逃れようとする人達が、一気に流れ込んで来たのだ。

――そして、現在に至る。

ケイスケの視界に映っている範囲だけでも数ヶ所、東洋アンズ前の各所が、悪魔で溢れ返っていた。

人々は恐らく、東洋アンズの真下にある地下街へと向かう為に、この場所へ逃げ込んできたのだろう、とケイスケは推測した。

だからこそ――東洋アンズ前の広場は、人の群れに無数の悪魔が混ざり込んでくる、という最悪の様相を呈していた。先程から、ケイスケは何度も自分のＣＯＭＰから仲魔を召喚しようとしているが、この状況で悪魔のスキルなどを発動したら、確実に民間人にも被害が及ぶだろうと思い、寸前で思い止まっていた。

徒手空拳で人の群れに駆け込もうにも、逃げ惑う人々の流れに、すぐ押し返されてしまう。

そうこうしている間に、何人かの民間人が、悪魔の餌食となっていった。血肉が宙に舞い、一人、また一人と、広場に転がる死体が少しずつ増えていく。

だが、それは同時に、逃げ惑う人々の数が減っていく、という事でもある。ケイスケは、次第に群集の間に出来た僅かな隙間を確認すると、迷うことなく駆け出した。

人に当たらぬよう細心の注意を払いながら、ケイスケは右手から、何度か『ブフ』を放った。たちまち、何体かの悪魔の足元が凍り付き、その起動力を奪う。

致命傷には至らないが、その隙に、今の今まで襲われようとして

いた民間人達は、地下街へと避難する事が出来た。

（――倒すのは後でいい。まずは、コイツらを皆から遠ざけないと！）

一体どこから湧き出したのか、悪魔の数は異常と言ってもよかった。

今、この場にいる人間と悪魔の数はほぼ一緒だが、襲い掛かる悪魔に対して戦う意思を見せている人間は、ケイスケだけだった。改造ＣＯＭＰがあるとは言え、これでは流石に手を焼く。

だが時間が経ち、全ての人が地下街へと避難すれば、巻き添えを食らわせてしまうかもしれない、と心配する必要はなくなり、仲魔を召喚することが出来る。そうなればしめたものだ、とケイスケは思った。

次々と迫り来る悪魔に対し、ケイスケが何度も『ブフ』を撃ち出して牽制していると、不意に、彼の視界の端で、一人の少女が立ちすくんでいる光景が目に入った。

まるでアニメの世界から飛び出して来たかのような、奇抜過ぎる衣装に身を包んだその少女――小牧翠（こまきみどり）の足元には、何体かの死体が転がっている。どうして逃げないのか、とケイスケは一瞬、訝しんだが、すぐに、彼女の足が激しく震えている事に気付いた――悪魔に対する恐怖のあまり、体を動かすことが出来ないのだ。

ケイスケがミドリのいる方向に体を向けると同時に、何体かの悪魔も、彼女の存在に気付いた。その内の一体――ガルムが高く跳躍し、その鋭い牙で、ミドリの細く柔らかい肢体を噛み砕こうとする。

「クソッ！」

悪態をつきながら、ケイスケもまた、ミドリがいる場所に向かって、跳ぶように駆け出した。当のミドリはというと、襲ってくる悪魔に気付いているのか気付いていないのか、未だその場から動こうとしない。

――まさに、間一髪だった。ケイスケは何とか、その牙がミドリの肌に触れるかどうかというところで、『ブフ』によって瞬時にミドリの前に一枚の氷の壁を作りだし、飛び掛かってきたガルムを弾き返すことが出来た。

地面に叩き付けられ、予期せぬ乱入者に気付いたガルムは、ケイスケに対して脅すように喉を鳴らし始めたが――それでも、全く警戒してないという訳でもないようで、すぐに向かっては来なかった。

ケイスケはガルムから決して目を離さないまま、手探りで横にいるミドリの肩を掴むと、

「……キミ！　ねぇキミ！　しっかりして！　早く地下街へ逃げるんだ！」

と言った。同時に、この広場に残っている人間は、後は自分とこの少女だけだという事に気付いた。どうやら他の人々は、何とか地下街へと避難する事に成功したらしい。

今まで、恐怖で目を閉じていたらしいミドリが、ケイスケに声をかけられた事で、現在、自分が置かれている状況に気付く。

「な、何なのよ……何なのよコレ！　こんなのヘンだよ！　助けてよぉ……パパぁ……！」

激しく鼻を啜り上げながら、ミドリが言う。

「ホラ、頑張って！　他の皆は、もう先に行ったよ！　あそこの入り口から――」

ケイスケは、地下街へと続いている、東洋アンズの入り口を指差した。

「――地下街へ降りられる！　君も早く、地下街へ逃げるんだ！」

必死なって叫ぶケイスケだったが、しかしミドリは――未だ、恐怖で足を縛られている為か――力無く首を横に振ると、

「ムリ……、そんなのムリだよぉ！」

と、完全に怯えきった声を出した。

ケイスケは舌打ちしたい気持ちをグッと堪えながら、自分達と地下街への入り口までの間に、どれぐらいの距離があるのかを確認した――決して、近い距離とは言えない。

一瞬、ミドリを担いででも逃げるべきかとケイスケは思ったが、この距離では、入り口に辿り着くよりも前に、間違いなく敵悪魔に追いつかれてしまうと悟り、すぐに自分でその考えを放棄した。

――ならば、どうする？

「……仕方ない……」

ケイスケは、サッと懐から改造ＣＯＭＰを取り出すと、目にも止まらぬ速さで、そのスイッチを押す。

「悪魔召喚プログラム、起動っ！　……ジャックフロスト！　ジャックランタン！　出てこいっ！」

偶然にも、数時間前の、東京タワー下の戦いにおいて、谷川柚子がマカーブルに対して召喚したのと全く同じ組み合わせの悪魔が、ケイスケのＣＯＭＰから、強い光と共に召喚された。

だが、例え人間であるケイスケによって召喚された悪魔といえど、改造ＣＯＭＰの事など知らないミドリからすれば、ただ単に恐怖の対象である悪魔が、更に増えたようにしか見えなかったらしい。その顔から一気に血の気が引いたかと思うと、

「きゃあっ！　……何これ！　何これえっ！？」

と叫んだ。

だがケイスケは、そんなミドリの反応は予め予想がついていたかのように、極めてしっかりとした口調で、彼女に事情を説明する。

「怖がらないで！　この悪魔達は僕の仲魔だから！　キミを傷付けたりはしないから！」

「う……う～……！」

ケイスケの説明を聞いても、ミドリはまだ完全に納得してはいな

い様子だったが、それでも、みっともなく取り乱すのだけは止めたようで、涙声とも呻き声ともつかない声を、口の隙間から漏らす。

そうこうしている間にも、周りにいる敵悪魔達は、ジリジリと二人に近寄ってくる。

いつでも敵の攻撃に反応出来るように、神経を極限にまで尖らせながら――ケイスケは考えた。

（……ボクの余命は、今日で『0』だった。……だとすると、多分これが、ボクの最後の戦い……）

――だったら。

（せめて……せめて死ぬ前に……この子の命だけでも救うんだ……！）

無意識の内に、ケイスケは、自分の胸をさすっていた。

それはまるで、まだ自分がちゃんと生きてそこにいるのかどうか、確かめているようにも見えた。

（……アツロウ）

そんな彼の頭に、フッと、かつての――中学時代の友人の顔が浮かんだ。

（……ボクにも、キミ達みたいに、運命を変える強さがあればな……）

――そして。

次の瞬間には、全て敵悪魔達が、一斉に彼へと跳び掛かった。

2nd Day『ドーム球場前のバトル（2）』

――水道橋、東京ドーム前。

その場所を、先程、野外音楽堂にて、『何か』を感じとったらしいセトと、それに無理矢理付き合わされたような形のカイドーが走っていた。

走りながら少し前に、カイドーは、一体自分達は今、どこへ向かっているのか――とセトに尋ねたが、彼の答えは、

「俺にもよく分かんね。でも、ここよりもう少し先だ」

――という、実に頼もしいものだった。

「……」

……いや。

それじゃあ、俺達は今、マジでアンタの感覚だけを頼りに、その大量の悪魔が出現しているかもしれない場所へと向かっているのか――と、そのように、カイドーとしては、セトを思いっ切り問い詰めたい心境ではあったのだが、それでも、前を走るセトの足取りが、あまりにもしっかりしているので、ここまで言い出せずにいた。

――まぁ。

実際にはそれだけではなく、カイドー自身が何故か、この男は嘘

をついていない、と心のどこかで確信しているのも、大きな理由の一つではあるのだが――それについては、彼にも上手く説明できないので、これ以上は説明しないでおく事にする。

それはともかく。

そんな感じで、カイドーがセトと共に、東京ドーム前を通りかかった――正にその時。

唐突に。

余りにも唐突に。

一人の男が、まるで最初から既にそこにいたかのではないかと錯覚してしまうほど唐突に、走る二人の目の前に現れた。

「……っと」

突然の乱入者の存在を認めたセトが、その場で急停止したので、一瞬遅れて、カイドーもそれに倣う。

腰まで伸ばした藍色の髪。

まるで、精巧に作られた蝋人形のような、整った顔立ちに、白い肌。

体には、至る所に、奇妙な紫色の紋様が施された、銀色の鎧を纏っていた――。

数多（あまた）の悪魔を従える、不死の王、ベル・デルの配下が1体。

幻魔、クー・フーリン――見参（けんざん）である。

――とは言え、彼を初めて目の当たりにしたカイドーの反応はと言うと、単に、その奇妙な外見に目が止まっただけなのだが――セトは違った。

僅かに目を見開き、顔色を、少々驚いたとでも言いたげなそれに変えて――、

「……へぇ。こいつはビックリだな。まさかこのタイミングで、お前ほどの悪魔が出てくるなんて。一体、どうしてこんな所にいるんだ？」

と言った。

クー・フーリンはそんなセトに対し、

「そんなことは――」

と言い返す。

「――言うまでもない、『イザナギ』殿。当然、貴殿に用があったからだ。このように会うのも久しぶりだ。こうして正面から見ただけでも分かる。相変わらず、その力は健在のようで――私としても、嬉しい限りだ」

「んーな見え見えのお世辞なんか、どうだっていいんだよ。一体、俺らに何の用だ？」

セトが言う。

「『何の用だ？』――とは、イザナギ殿。貴殿らしくもない、実に陳腐な質問だ。私がこうして貴殿と対峙してるだけで、その問いに対する答えは明白ではないか？」

「いや、俺は別に、お前とそこまで密接なライバル関係を築いた覚えはないんだが……」

「そうか？　私は今でも覚えておるぞ。貴殿との激闘が延々と続いた、あの百年以上も昔の日々を」

「いやいや。俺、生まれてねぇじゃん、それ。多分、俺の両親すら生まれてねぇじゃん、それ。どこの誰かと間違えてないか？」

「ん？　そうだったか……？　ウム、まぁ、余り多くの事は、覚えていないものだ」

「もうちょっと頭の良さそうな会話をしようぜ。折角のお前の知的なイメージが、早くも崩れかけてるぞ」

――と。

セトとクー・フーリンが、そこまで会話したところで、

「……おい、オッサン。誰なんだよ、コイツは」

と、自分を置き去りにされたまま交わされる二人の会話にたまり兼ねて、遂に、カイドーはセトの向かってそう言った。

セトはそんなカイドーに対し、まるで今の今まで、彼がそこにいるのを忘れていたかのように、「ああ……」と返すと、

「アイツは、『クー・フーリン』って言う悪魔だ」

と言った。

それを聞いて、カイドーは少なからず驚いた――クー・フーリンが余りにも人間に近い外見をしていた為、てっきり、少々おかしな格好をしただけの、生粋の人間かと思っていたのだ。

「ここまで走ってくる途中で、散々話した、例の『ベル・デル』って悪魔の配下だよ。階級的には、お前が倒したっつー『モムノフ』がこの悪魔より上だが、実力で言えば間違いなく、コイツがベル・デルの部下の中でも、間違いなくナンバーワンだ。冥府に繋がれたままのベル・デルが、今でもまだ魔界で台頭し続けていられるのはひとえに、コイツの活躍のお陰だって話もある」

「――いや」

セトの言葉に対し、クー・フーリンは、小さく首を振って見せる。

「それは違うな、イザナギ殿。あのお方が魔界にその名を轟かせておられるのは、あくまで、あのお方にそれだけの力があるからだ。あの方の力の前では、私ごときの力など、微々たるものだ――それ程のお方であるからこそ、私が忠を尽くすに値する」

「へぇ、そりゃーまたまた、大した忠誠心だな」

セトが言う。

「貴殿がそう言うのは、些か筋違いというものではないか？　イザナギ殿」

「はぁ？」

クー・フーリンの指摘に対し、眉をひそめながら首を傾げるセト。

「貴殿にしても同じ筈だ――いや、同じだった、と言うべきかな。私がベル・デル様に忠を尽くしているのと同じように――貴殿もまた、『あの男』に忠を尽くしていたのだろう？あの……かつて『ニュクス』を封印した、伝説のペルソナ使いに」

そう言って――クー・フーリンは。

まるでそれが、自然な流れであるかのように、どこからともなく、全体に雷を帯びた、光る剣を取り出した。

「イザナギ殿。恐らく貴殿は、この先で戦っている、幼き悪魔使い達を手助けするおつもりなのだろうが、残念ながら、そうはさせない――この私、クー・フーリンが、この場で足止めさせて頂く」

「……へぇ？　それはつまり、自分なら、俺に勝てると思ってるって事か？」

クー・フーリンの言葉を聞いて、セトは、今度は些か、カンに障ったかのような調子で、そのように答える。

そんなセトに対して、クー・フーリンは、

「いいや」

と答えた。

「先程も言ったが――私の力など、全くもって微々たるものだ。イザナギ殿――あの女神（イザナミ）や周防克哉（すおうかつや）に勝ったペルソナ使いが相手では、どれほどの策を練り、弄したところで、私ごときでは相手にもならんよ。ベル・デル様も、そう言っておられた。ここでの私の役割は、あくまで足止め――時間稼ぎだ」

それにしても――と、クー・フーリンは続ける。

「イザナギ殿――貴殿の功績には、毎度毎度、本当に驚かされる。正直、今この瞬間にしても、私は動揺を隠しきれない程だ。齢十七にして女神（イザナミ）を倒したというだけでも、とても信じられないというのに、貴殿はつい最近、あの周防克哉さえも打ち倒してみせた。これほど凄まじい話はない――これほど恐ろしい話はない。私程度の存在では、時間稼ぎさえも、貴殿が相手では難しい――と、そう思ってしまう程にな」

「……」

セトは、そんなクー・フーリンの言葉を、一体どこまで信じてよいのか判断しかねるとでも言うように、鋭く彼を睨みつけた。

セトの隣では、カイドーが、全く二人の話についていけず、まるでテニスのラリーでも観戦しているかのように、セトとクー・フーリンの顔を交互に見ている。

そんな中。

「……カイドー、おい、カイドー」

――と、セトが声を潜めつつ、彼に声をかけた。

その声は、いつになく慎重で――同時に、少なからず緊張しているように聞こえたので、カイドーは少々驚きつつも、セトの調子に合わせて、「……何だヨ」と、同じく声を潜めながら応じた。

「念のために言っておくが――カイドー、アイツの前で気を抜くなよ。アイツは、今までお前が出会ってきた他の悪魔とは、全くの別格だ――」

『クー・フーリン』。

ケルト神話においては『英雄（ク・ホリン）』とも讃えられ、そして、ベル神でないにも関わらず、ベル神と同等の実力を持つ――と言われている悪魔。

「お前は、少し下がってろ――今のお前じゃまだ、コイツの相手は荷が重いぜ」

セトが言う。

だが。

「……ああ？」

カイドーは、そう警告するセトに対して、実に不快そうに――実に不満そうに、眉を吊り上げるのだった。

目の前の悪魔がどれほどの実力の持ち主なのか、カイドーにはまだいまいちよく分からないが――例え、どれだけ強大な力を持った敵が相手であろうとも、それを目の前にして、自分が『退く』という事はありえない。

そんな事は、不良グループ『ダイモンズ』を率いる、彼のプライドが許さない。

例え、相手が誰で――何であろうと。

彼は――二階堂征志は、決して怯えたりはしないのだ。

だから。

「おい、テメエ――」

と。

カイドーは、全く恐れることなく、クー・フーリンに顔を見据えて、口火をきった。

「ワリィが、俺達は先を急いでんだ。テメエが言う、ベル何とかって奴が、何を企んでるのかは知らねぇが――」

しかし。

カイドーがそこまで言ったところで。

「……」

スッ……と。

クー・フーリンの右手が、動いた。

とは言え――カイドーから見れば、それはとても、ハッキリ『動いた』と断言できるほど、目だった動作ではない。

僅かに。

ほんの僅かに、ではあるが――刹那、クー・フーリンの、剣を持った手が、ピクッと、震えたように見えた。

その瞬間。

――パンッ！

と、そんな音が、ドーム球場前の空間に、鳴り響いた。

それはまるで、何かが音速を超えた速さで動いた時に発せられる――さながら、銃器から弾丸が発砲された時の音にも、似ていた。

だが。

「……っ！　カイドー！！」

と。

そんな音がする直前に、セトもまた――動いていた。それは『反応』と言うよりはむしろ、『反射』と表現しても良い程の機敏さで、

彼は、頭で考えるよりも遥かに速く、体を動かしていた。

セトは叫びながら、左手でカイドーの繋ぎの服の、首根っこ部分をガシッと掴むと、そのまま力任せに――あまりにも力任せに、カイドーの体を、持ち上げた。

およそ七十キロ程の体重を持つカイドーを、そのような雑な動作で、なんの技術もなく、なんの工夫もなく、ただ1つ、その腕力のみで――しかも片手で持ち上げるセトの腕力には、果てしないものがあるが、それについては、もはや今となっては感心する程のことでもないだろう。

まさか、セトから突然そんな事をされるとは思ってもみなかったカイドーには、それに対して抵抗する暇などある訳がなく、見事に持ち上げられてしまう。

そしてそのまま――他にどう表現すればよいのか分からないので、このように記すが――思いっきり、ぶん投げなれた。

カイドーの体はそのまま、セトが立っている場所より、数メートルほど右側に離れた地点の地面に、容赦なく叩き付けられた。セトにしても、投げの動作の勢いを咄嗟に殺す事ができず、その場で体を小さく一回転させる。

そして、その一瞬後に。

パンッ！

――という、そんな音が響いたのである。

「て、て、テメェ！　このジジィ！　いきなり何しやがる！」

至極当然の事ではあるが、地面からバッと体を起こしつつ、カイドーは憤慨したように怒鳴った。

まだ三十四歳であるにも関わらず、早くも一人の若者に「ジジィ」呼ばわりされた事について、セトは軽いショックを受けながら、

「落ち着けよ、カイドー」

と言った。

「落ち着けだぁ！？　いきなり首根っこ捕まれて、それでポーンとぶん投げられて、落ち着ける訳ねぇだろうがヨ！　一体何のつもり――」

「俺が何のつもりでお前をポイしたのか知りたいなら、今の自分の服を見てみろ」

「ぽ、ポイしたって……」

些か幼稚な表現を使ったセトに対し、カイドーは若干呆れつつも、言われた通り、自分の身なりを確認する。

そして、驚いた。

黒い繋ぎの、カイドーにとっては馴染みのあるスタイル――しかし、その服が今となっては、前半分の右肩から、左脇腹にかけての部分が、すっぱりと切断されていたのだ。

それはまるで、外科医が人の体をメスで切り開いたかのごとく、鋭い切り口だった。

「間に合わなかった――いや、ギリギリセーフか？」

そんなカイドーの、現在の状態を心配そうに見ながら、セトが言う。

「な、な、な……！？」

対するカイドーはと言うと――流石に混乱していた。何故こうなったのか。いつこうされたのか分からない――と、そんな様子である。

そして。

「……少年」

と、ここでようやく、クー・フーリンが、静かに口を開いた。

静かではあるが――同時に、溢れんばかりの怒気に必死に抑えているかのような、そんな口調だった。

「『ベル・デル』だ」

クー・フーリンが言う。

「『ベル何とか』、などと――大した実力もない癖に、二度と言うな」

どうやら、カイドーの不用意な発言に、強く気分を害したらしい。

結果としてセトは、自分の仲間を危うく殺されかけた形ではあったが――同時に、「まぁ、当然だな」という思いも、少なからずあった。

何故なら、この時のクー・フーリンの態度は、少し前に――セトが『テレビの世界』にて、ベル・ベリトやベル・ゼブブに対して憤りを感じた時と、全く同じものだったからだ。

――『忠誠心』。

心から忠義を尽くすこと。

セトが『彼』に忠を尽くしているのと同じように。

クー・フーリンもまた、『ベル・デル』に忠を尽くしている――と、そういう事だ。

セトにしたって、もしも、かつての先輩である『彼』を、『どこかの誰か』みたいな言い方をされたら、非常に腹が立つ。

セトがそんな事を思っていると、

「――それにしても、驚いた」

と、クー・フーリンが言う。

「やはり貴殿は侮れんな、イザナギ殿。私としては、かなり不意を突いたつもりなのだが――そして同時に、かなりの速さで剣を振る：

ったつもりなのだが、何とまあ、恐るべき反応速度、否、反射速度だ。流石は、『あの男』の一番弟子、と言ったところか？」

そしてクー・フーリンは、今度はカイドーではなく、セトの顔を睨みつける。

カイドーを見ていた時とは違って、その目からは憤慨の色が消えていたが――かと言って、とても安心はできない、とセトは思った。

「……ビックリしたのはこっちの方だ」

ややあって、セトが言う。

「お前の剣を振るう速度が、それこそ雷と全く同じ速さだって事は聞いてたが、まさかここまでの速さだとは思わなかった」

そう。

先程の『パンッ！』という、あの音は――クー・フーリンの振るった剣が、音速を超越した速度で振るわれた時の音だったのだ。

それこそまさしく、雷のごとき轟音を発する程の、想像を遥かに絶した速度――。

音が聞こえた時には――既に、攻撃が終わっている。

「……」

セトもセトで、自分の攻撃速度には、それなりに自信があった。

昨日――偶然にもこの場所において、背後から悪魔に襲われた際、あっという間にその悪魔を、『ペルソナ』のスキルによって消滅させた事から分かるように、クー・フーリンが剣術の速度に長けていると言うならば、セトは、ペルソナの召喚速度に長けている。

しかし。

ペルソナの召喚が、どうしたって――どれだけの速さで行おうとも――『意識を集中させる』、『ペルソナを召喚する』、『スキルを発動する』という三つの過程をこなさなければならないのに対し、クー・フーリンは、『剣を振る』という、たった一つの行動を行うだけで攻撃が済む。

故に――僅かにではあるが、攻撃速度に限れば、クー・フーリンに分がある、とセトは認めざるを得なかった。

まぁ、だからと言って、自分の方が弱いなどとは、微塵も思わなかったが。

「……カイドー」

再び、セトはカイドーに向かって、そう声をかけた。

「お前だって馬鹿じゃないんだ――今ので、アイツの実力がどれ程のもんか、理解できなかった訳じゃないだろ。もし、今お前が、何か変な意地を張ってるなら言っとくが――」

ここで首を回し、カイドーに顔を向けながら、セトは言葉を続ける。

「――『勇敢』と『無謀』は、違うんだぜ？」

「……っチ」

セトの言葉を受けて、カイドーは、不承不承、且つ、極めて不本意そうではあったが――それでも、二、三歩程、その場から後ろに退いた。

それだけではとても、クー・フーリンの剣術の間合いから完全に安全な距離だとは言えないが――それでも、このすぐ後に始まるであろう、セトとクー・フーリンの戦いに、自分は関与しない、と意思表示するには十分だった。

「それでいい」

カイドーの顔から、即座に、少し離れた場所に立っているクー・フーリンへと視線を移しながら、セトが言う。

そして――そんな彼の両手には、いつの間にか一対の刀が握られていた。

二刀流――である。

その刀は一見すれば、鳥の羽の一部のようにも見えた。しかし、世界広しと言えど、これだけ大きな羽を持つ鳥は――少なくとも、地球上には存在しないだろう。

二刀流と言えば、片手でも扱いやすいよう、なるべくシンプル、かつ扱いやすいように作られている事が通例だが、それに反して、セトが握っている剣は、少々無骨で、重そうな感じがした。峰のな

い刀身はまるで肉切り包丁のように分厚く、鍔と柄の部分には、金と橙色の装飾が施されている。先に述べたように、全体的に大きく見えるものの、それを握るセトの体がそもそも大きい為、彼にはちょうどよい大きさに見えた。

その昔、セトがまだ高校生だった頃、同じペルソナ使いである彼の親友、花村陽介が使っていた、二本で一本の剣――『マルアーク』。

セトは、クー・フーリンと戦う上では、この武器が1番相性が良い――と、そう考えたのだ。

そしてセトは、クー・フーリンの方から見て半身になるように体を回すと、そのまま僅かに腰を落とし、左手の剣の切っ先をクー・フーリンへと向け、右手の剣は、頭より僅かに上の位置に持ち上げつつ――やはり、その切っ先も相手へと向ける。

油断なく。ぬかりなく。

二本の鋭い剣と、鋭い視線を――クー・フーリンへと、向ける。

そのクー・フーリンもまた、セトがそのように構える様子を、黙って見てはいない。

両の手で握った剣――全体に電流を帯びた、身の丈程もある光る剣の先を、地面に向けると、セトと同じように半身になり、腰を落とす。

「……へぇ」

そんなクー・フーリンの構えを見て――セトは少し、意外そうな声を上げた。

「西洋の鎧に身を包んでるもんだから、てっきり剣術も西洋のソレを模したものかと思ってたけど――その構え方は、むしろこの国、日本のものだよな？」

「如何にも」

セトの問いに対し、特に隠そうともせず、クー・フーリンは答える。

「『ケンドー』……というものだ。私は昔から、様々な国の剣術を調べるのが趣味でな。中でも、日本の剣術は素晴らしい。その種類も歴史も、明らかに他の国とは一線を画している。それらを調べ、実践を繰り返す内に、この構えこそが、私に一番合っている事を確信した。とは言え――」

言いつつ。

ジリッ……と、クー・フーリンは1歩、擦り足でセトとの距離を詰める。それを見て取ったセトも、剣を握る両手の力を、若干強めた。

「――この構えを人間に試すのは、今回が初めてだがな。その記念すべき初めての相手が、あのイザナギ殿とは――少々、厳しいとは思うが、まぁ、相手にとって不足はない」

「そいつは光栄だな」

たっぷりと皮肉を込めた口調で、セトが答える。

そして――二人共、前置きはそれで十分だと思ったのか。

お互いを見つめるその視線を、更に鋭く、強いものへと変えた。

「偉大なる不死の王、ベル・デル様の配下が一人、クー・フーリン――いざ、参る」

「『元』八十神高等学校二年二組、瀬多　〇〇だ――ったく」

――やれやれだぜ、という、セトのその呟きとほぼ同時に。

耳を覆いたくなるような凄まじい金属音が、ドーム球場前に、大きく響き渡った。

２ｎｄ　Ｄａｙ『東洋アンズ前のバトル（１）－３』

――池袋、東洋アンズ前。

水道橋、東京ドーム前において、セトとクー・フーリンの激闘が始まったのとほぼ時を同じくして、淳、アツロウ、ユズの三人は、東洋アンズ前の広場へと到着していた。

つい先程、ラプラスメールの件を思い出した時から、薄々感づいていた事ではあったが――案の定、そこには何体かの悪魔が跋扈していた。

「やっぱりか……」

と、淳がそう呟いた時、隣にいるアツロウがある一点に顔を向けたまま、大きく目を見開いた。

「あれは……ケイスケ！？」

「「えっ？」」

淳とユズが、同時に疑問の声を上げながら、アツロウの視線を追うと――果たせるかな、そこには確かに、昨日淳が初めて出会った、アツロウの中学時代の友人、高城圭介（たかしろけいすけ）の姿があった。

とは言え、アツロウが名前を叫ばなかったら、淳はもしかしたら、そこにいる少年がケイスケだとは気付かなかったかもしれない。七三分けにされていた髪はすっかり乱れ、口の端からは血が流れてい

る。体の至るところに青い痣があり、それが何とも痛々しかった。メガネは――悪魔との戦闘の際には邪魔にしかならないと判断したのか――ズボンのポケットに入れており、ツルの片方が外にはみ出ていた。自分達が来るまでに、どれだけ激しい戦闘を行っていたのかが伺える。

「……もしかして、アイツの余命が『1』だったのって……」

アツロウが恐々とそのように言いながら、淳へと顔を向けてきたので、淳は、

「……ここで死ぬからだ」

と、なるべく何の感情も込めずにそう言った。ここで変に気を遣うのは、かえって逆効果だと思った。

「……！　冗談じゃないぜ……死なせてたまるかっ！」

アツロウが言う。

「ね、ねぇ……。ラプラスメールには、５０人以上の犠牲者が出る、って書いてあったけど……。そんなにたくさんの人、一体、どこにいるの！？」

辺りをキョロキョロを見渡しながら、ユズが言う。つられて、淳も同じように周囲を確認してみたが、確かに、そんなに大勢の人間の姿は見当たらない。

しかし淳は、ユズの疑問にはあまり深く取り合わずに、

「さぁな……どっちにしろ今、俺達の目の前では（淳は、ケイスケがいる場所に向けて顎をしゃくった）、一人の人間が、ああして悪魔に襲われようとしてんだ。五十人だろうと一人だろうと、そんなのはどうだっていいだろ？」

と言った。

「ケイスケ！　……おーい！　ケイスケ！」

そんな淳の隣では、アツロウが、まだこちらに気付いていないらしいケイスケに、大声で呼び掛けていた。

周りにいる悪魔に対してだけ神経を尖らせていたらしいケイスケは、突然、意識の外から自分の名前が呼ばれた事で、一瞬、体をビクッと震わせたが、すぐにアツロウの姿を認めると、口をあんぐりと開けた。

「……！？　アツロウ！　どうしてここに……！？」

「どうだっていいだろ！　そんな事！　とにかく、今助けに行くから待ってろ！」

アツロウが怒鳴る。

「あ……！　このビルの地下街に、人々が逃げ込んでるんだ！　悪魔を通す訳にはいかない。協力してくれ！」

「当たり前だろ！　馬鹿！　それよりお前も逃げろっ！」

しかしケイスケは、アツロウの呼び掛けに対して、小さく首を振

ると、

「僕にはＣＯＭＰがある！　それより、彼女を……！」

と言って、今自分がいる場所より少し離れた位置に、人差し指を向けた。

「彼女？」

ケイスケの言葉を聞いていた淳が、彼が指差す所と同じ場所に目を向けると、そこには、大きな瓦礫の影に身を隠している、一人の少女の姿があった。

同時に淳は、ここに来る少し前に、自分が出した予想が当たっていた事を確信した。身を隠している為、淳の方からは体の半分しか見えないが――それでもあの、全身を派手なピンク色の衣装に包んだ、魔女っ子のような外見は見間違いようがない。

小牧翠（こまきみどり）――こちらもケイスケと同じく、昨日、初めて淳と出会った、ネットで人気を博しているコスプレイヤーの少女である。

ミドリはこれ以上なく怯えた表情で、ケイスケの周りに群がっている悪魔達を見詰めていた。離れた場所にいる淳にも、彼女が震えているのがハッキリと分かった。

「――ああ！　任せろ！」

淳と同じく、ミドリの姿を確認したアツロウが、再びケイスケに向かって叫ぶ。

淳、アツロウ、ユズはＣＯＭＰを取り出すと、すぐさま手持ちの仲魔を召喚した。魔獣『ネコマタ』、霊鳥『スパルナ』、神獣『シーサー』の三体で、全てが、数時間前の東京タワー下のバトルのすぐ後にメンバーに加わった、新しい仲魔達だ。

「……っ！！　な、何なのアンタ達！　どうして怪物を！？」

三人が仲魔を召喚したのを見て、ミドリがヒステリック気味に叫んだ。淳達がこの広場に来てから、ミドリが言葉を発したのは、これが初めてだった。

そんなミドリの台詞を聞いて、淳は、彼女を助けようと思っていた気持ちが、若干落ち込むのを感じずにはいられなかった。

先の東京タワー下においても、ＣＯＭＰから仲魔を召喚した自分達を、一人の民間人の女性が極度に怖がっていた為、全く予想していなかった訳ではないが、かと言って、気にならないという訳でもない。

「いいから！　今は指示に従って！　絶対に守るからっ！」

ミドリの一番近くにいるケイスケが、イライラを隠さずに叫ぶ。

――と、そこで、周りにいる悪魔の内の一体が、口を開いた。

「――おい、お前」

全身を黒い忍装束で覆い（しかし、肩から先にかけては、肌が露出していたが）片手に身の丈以上もある長い槍を携えた悪魔――カラステングが、その槍の先を淳に向けながら、気取った口調で言う。

「なんだ？」

何故、五人もいる人間の中から自分だけに向けて声をかけてきたのか、と疑問に思いつつも、淳はそのように答えた。

カラステングは淳の事を、頭のてっぺんから足のつま先までジロジロと観察しながら、

「ハッ！　青い髪に……変な形の耳飾り……どうやら、間違いねぇな……。突然で何だが、お前が持ってる『コンプ』って機械を、俺達に渡せ」

「はぁ――？」

突然、意味不明な要求を突き付けられた為、淳がカラステングに何か言い返そうとすると、

「……！　ジュン！」

と、すぐ隣から、アツロウの緊迫した声が聞こえてきたので、咄嗟に言葉を切った。

淳は「どうした？」と小声でアツロウに聞こうとしたが、すぐにその必要はないと悟った。いつの間にか、ケイスケとミドリの周りだけではなく、淳達の周りからも多数の悪魔が現れ、あっという間に三人を包囲したからだ。

同じく淳の近くにいたユズが、恐怖で息を呑んだ。離れた場所にいるケイスケもそれに気付き、「アツロウ！」と、叫んだ。

すぐにアツロウ、ユズの二人と、ネコマタ、スパルナ、シーサーと言った彼等の仲魔達は、淳のすぐ側へと固まり、いつ襲われても対処できるように、周りを警戒した。

「ハッ！　さあ、とっととその妙な機械を渡しやがれ！」

カラステングが繰り返して言った。

その言葉を聞きながらも淳は、横目でこの広場にいる悪魔の数を確認した。トラロック、ゴズキ、カラステング、マカラ、ガルム――そして、淳が今まで見たことがない悪魔が一体の、総勢六体だ。

「……待ち伏せされてたみたいだな」

コッソリと、淳はアツロウに耳打ちした。そのすぐ後に、アツロウが僅かに頷く気配を淳は感じた。こちらが気付かぬ内に、これだけアッサリと包囲されたとあっては、そう考えるのが自然だ。

「さあ、早く渡せ」

今度はカラステングではなく、別の悪魔――先程、淳が今まで見たことがないと判断した悪魔が、老人のような嗄(しわが)れた声でそう言った。

黒いスーツに、鳥類の頭蓋骨のような、無骨な仮面を被った悪魔。

ビフロンズ――である。

「どうして、そんなにコレを欲しがるんだ？」

何故、悪魔達が改造ＣＯＭＰを欲しがるのか――勿論、これまでの戦いを経て、淳はとうにその理由を知っていたが、時間を稼ぐ為に、淳は敢えてそう尋ねた。

また、脇でユズが小さく身動きしたので、淳はさりげなく彼女の足を踏んだ。

「まだだ……まだ何もするな……」

「ハッ！　おいおい聞いたか？　このガキ、俺達と戦うつもりらしいぜ？」

淳の声を聞き取ったカラステングが、さも面白い冗談だとでも言うように、他の悪魔にそう呼び掛けた。全ての敵悪魔が、大声で笑った。

「ハッ！　やれやれ」

全くどうしようもねぇな――と、そう言いながら、カラステングは首を振った。

「聞いた話じゃ、今までお前らは、何度か俺達の同族とやり合ってるらしいが――それでいて、何とか生き残ってきたらしいが、そんなザコい連中と、俺達を一緒にされちゃ困るぜ？　何せ俺達はあの、偉大なる不死の王、ベル・デル様の部下なんだからな！」

カラステングはまるで、これ以上に名誉な事はないだろうという調子で、胸を張った。

「さあ、少年。とっととその機械を渡すのだ」

今度は、ビフロンズが言う。

それを聞きながら淳は、他の敵悪魔達も、まだ身動きしていない事に気付いた。どうやら、カラステングやビフロンズが、この悪魔達のリーダーのようなもので、2体が攻撃を指示するのを待ってるのだろう、と淳は思った。

「ハッ！　大方、悪魔使いとしての力を持ったから、自分達なら何でも出来るとでも思ってんだろ？」

カラステングが言う。

「さあ、それを渡せ、さもねぇと、俺達はお前らを殺しちまうかもしれねぇぞ？　もっとも、渡したところで見逃すとも限らねぇが――」

「やってみろ」

淳は歯を剥き出しながら、両手の骨を脅すようにパキパキと鳴らした。

仲魔のネコマタは次々と敵の悪魔それぞれに視線を移しては、その度にシャーッと威嚇していた。アツロウ、ユズ、そして他の仲魔達や離れた場所にいるケイスケも、同じように臨戦体勢を取った。

「ふーん……。分かった、いいだろう」

それを見たカラステングの顔から、今までの嘲るような表情がス

ッと消えた。突然滑らかになったその口調に、淳は何か危険なものを感じた。

「それがお前らの選んだ答えだっつーんなら、俺達にしても、気兼ねなく殺れるってもんだ。そうだろ？　その結果、例えこの後、何が起ころうと――」

口元を黒い布で覆ってはいたが、カラステングがニターッと下品な笑みを浮かべたのが、淳には分かった。

「――お前らが決めた事だ」

しかし、カラステングが何かをする前に、既に淳は動いていた。

彼は驚くべき瞬発力でカラステングとの距離を一気に縮めると、左の拳を、容赦なくその脇腹に打ち付けた。不意を突かれたカラステングは反撃する暇もないまま、口から呻き声を漏らし、たちまち体を『く』の字に曲げた。

次には、アツロウが動いた。僅かに崩れた包囲網を突破して、中学時代の親友であるケイスケの元へと全力疾走する。

その後ろから、ゴズキが手に持った巨大な斧で、アツロウの背中を斬り付けようとしたが、間一髪、シーサーが『マハジオ』を食らわせた事でその体が一時的に電撃によって麻痺し、アツロウは無事、ケイスケのすぐ近くへと行くことが出来た。

「テメェ――！」

カラステングは手に持った槍を、淳の頭目掛けて横向きに振るっ

たが、それより一瞬早く、淳は頭を下げていた。

そのままの勢いで、淳は両脇でカラステングの足を抱えると、渾身の力でグイッと引っ張った。柔道で言うところの『双手刈り』だ。

見事、カラステングが仰向けに倒れた事を確認すると、淳はバッと後ろに跳躍し、ユズのすぐ近くへと移動した。

「アツロウの所へ行くぞ！」

淳が叫ぶ。

ユズが頷くと同時に、二人とネコマタ、スパルナといった仲間達は、アツロウとケイスケの元へと急いだ。途中でトラロックが『炎の乱舞』を放ってきたが、ユズが『嵐の乱舞』でそれを相殺させた。

淳達はアツロウ、ケイスケと合流すると、さながら前もってうち合わせいたかのように、すぐに円になるように陣形を組んだ。そこから離れた場所では、カラステングがモタモタと立ち上がろうとしていた。

「ユズ！　スパルナと一緒に、その子を守れ！」

ミドリを指差しながら、淳がユズに向かって叫んだ。

「それから――ケイスケ、どうだ？　戦えるか？」

アツロウの脇で片腕をさすっていたケイスケは、淳と顔を合わせると、力強く頷いた。口から血を流してはいたが、その目には、ギラギラした光が宿っている。

「大丈夫！　やれるよ！」

「ジュン、どうする！？」

アツロウが聞いた。

「そうだな、少なくとも、尻尾を巻いて逃げる訳にはいかないだろ。そんな事をしたら、この×××野郎共は――」

淳が敵悪魔を×××野郎と言ったので、アツロウとケイスケは複雑そうな顔をしたが、淳は無視した。

「――すぐにこのビルの地下街に下りて行って、五十人近くの人々を殺しちまう。だとすれば……」

「戦うしかない、か」

淳の後半の台詞を、アツロウが引き取った。

「テメエら……！　ぶっ殺してやる！」

完全に頭に血が上ったらしいカラステングが、気炎を吐きながら猛然と淳達の方へ向かってきた。淳が動くよりも早く、ケイスケはバッと彼の前に飛び出すと、開いた右手をカラステングへと向けて『氷の乱舞』を放った。

無数の氷弾が向かっていったが、カラステングは信じられない速さで槍を持った手を動かし、全ての氷弾を防いだ。

その後ろから別の敵悪魔――マカラが『ジオ』を、ケイスケ目掛けて撃ってきたが、ケイスケは横に大きく飛んでそれをかわした。

魔法を発動した直後に出来た隙を見逃さず、淳のすぐ隣にいたネコマタが、指先から生えた鋭い爪でマカラの体を切り裂いた。

マカラが断末魔の叫びを上げると同時に、空中に赤い鮮血が噴き出した。淳とアツロウは咄嗟にそれを避ける事が出来ず、ドロリとした赤い液体を全身に浴びてしまった。

淳が小声で悪態をつきながら、顔についた血だけでも拭おうとすると、真横から、ガルムが大きく口を開いて飛び掛かってきた。淳は体をクルリと半回転させて、その攻撃を殆どスレスレでかわした。

ガルムは地面に着地すると、次の攻撃に移ろうとしたが、仲魔であるスパルナが上空から襲い掛かり、足の爪で体中をやたらめったら引っ掻いてきた為、中断せざるをえなかった。

その様子を見ていたアツロウが、不意に、何かに思い当たったかのような顔をすると、ケイスケに向かって、

「そう言えばケイスケ！　お前の仲魔は？」

と聞いた。

「君達が来る少し前に、酷い怪我を負ってね！　今はＣＯＭＰの中で休ませてる！」

ケイスケの言葉を聞いて、淳は小さく呻いた。すぐ近くでは、スパルナがとうとう、『嵐の乱舞』によって、ガルムにトドメを刺し

たところだった。

「あまり、いい気にならないで頂きたい！」

どこからかそんな声が聞こえたので、淳、アツロウ、ケイスケは、その方向へと顔を向けた。

見ればビフロンズが、どこからともなく、三本の蝋燭が刺さった燭台を取り出していた。次にはその蝋燭に火が点ったかと思うと、それはあっという間に激しく燃え上がり、炎の波となって三人へと襲い掛かってきた。

淳は素早く『氷の乱舞』を発動させたが、ビフロンズの火力の方が上だったらしく、無数の氷弾は、瞬く間に空中で蒸発した。

「避けろ！！」

淳が叫んだ時には既に、アツロウとケイスケは体を投げ出していた。淳自身も、その場で大きく後ろに飛び、ビフロンズの『マハラギ』の有効範囲から、かろうじで逃れた。

しかし、地面に両足をつけた直後、淳は横から、誰かに頭を強く殴られた。淳の回避動作を見切ったカラステングが、淳が体勢を立て直すよりも前に、槍の柄の部分を彼の頭に叩き付けたのだ。

「がっ……！？」

頭から頬にかけて、何か生温かい液体がドロリと流れたのを感じて、淳は、今の一撃で自分が血を流した事を悟った。

だが、それを拭き取る暇はなかった。カラステングは淳を殴りつけた勢いを殺さぬまま、返す刀ならぬ返す槍で、今度は刃のついた部分で淳の右脇腹を薙ごうとした。

淳は咄嗟に体を後ろに反らしたが、刃が僅かに腹をかすめ、自分の筋繊維が何本が断ち切られたのを感じた。

「ジュン！どけ！！」

淳が歯を食いしばって頭と腹の痛みに耐えていると、アツロウが叫んだ。彼が何をしようとしているのかを敏感に察知した淳は、すぐにその場から飛びのいた。

アツロウのいる方向から『雷の乱舞』が放たれ、暴力的な雷の矢が次々と飛んできた。

淳より一瞬遅れてアツロウの攻撃に気付いたカラステングもまた、背中から生えた黒い翼をはためかせ、上空へと舞い上がる事で、自分に向かってきた魔法をかわした。

カラステングの足の下を幾筋もの電撃が通り過ぎ、ミドリが身を隠していた大きな瓦礫に直撃した。瓦礫は木っ端みじんに砕け、ミドリは小さく悲鳴を上げて、大急ぎでユズとシーサーの背後へと回った。

アツロウの『雷の乱舞』によって、辺りにはもうもうと粉塵が舞い上がっていた。ビフロンズはそれをうっとうしそうに顔の前で払い、叫んだ。

「人間ごときが！　悪魔に逆らうな！！」

「悪魔ごときが、人様に手を出すんじゃねぇよ！」

淳はビフロンズに向かって叫び返すと、『炎の乱舞』を放った。しかし飛んで行った火球はビフロンズの顔のすぐ脇を通り過ぎた。ビフロンズのドレッドヘアーのような髪が何本か焦げはしたが、当然、大したダメージは与えられなかった。

ビフロンズが再び『マハラギ』を発動させようと燭台を向けてきたので、淳は近くの瓦礫の陰に身を屈めた。危うく淳の『炎の乱舞』で顔を丸焼きにされるところだったビフロンズは、怒りに体をワナワナと震わせながら、叫んだ。

「焼け死ねっ！！　この汚らしい人間が――」

「させない！」

ミドリを守っていたユズが叫び、『嵐の乱舞』を右手から放った。突風が弾丸のように飛んでいき、魔法を発動しようとしたビフロンズに直撃した。

それによって、燭台から噴き出した業火は僅かに狙いをそれ、淳の左側にある地面に直撃した。淳は左腕で顔を覆い、辺りに飛び散った炎から顔を守った。

淳が心配になって、彼に目を向けていたアツロウにはトラロックが、ケイスケにはゴズキが襲い掛かった。カラステングはユズの魔法を受けたビフロンズの元へ、大急ぎで飛んで行った。

アツロウはトラロックの『アギ』を危ういところでかわし、二、

三回程、『雷の乱舞』を発動した。その内の一発がトラロックの頭部に直撃し、まるで風船のように、その頭部は弾け飛んだ。

淳が、先程のビフロンズの魔法によって、服の袖についた小さな火を大急ぎで消していると、ふと視界の端で、ゴズキがケイスケの首を切断しようと、斧を大きく振りかぶっているのが見えた。

淳は、ケイスケが頭を下げて、ゴズキの凶刃をかわすのを見た。だが、続けて左足から放たれたゴズキの蹴りからは逃れられなかった。ケイスケの体は、まるでゴムボールのように、遠くへ吹っ飛ばされた。

ケイスケは死んではいなかったが――それでも、骨の何本かを折ったらしく、地面にうずくまりながら、体をビクビクと震わせていた。

その一部始終を見ていた淳の怒りが爆発し、他の考えは全て、頭の中から吹き飛んでしまった。気付いた時には、淳はゴズキに向かって走り出していた。

ゴズキは慌てて斧を振るったが、淳はそれを高く跳躍する事で回避した。そしてそのまま、空中で大きく体を回転させると、ゴズキの首目掛けて足刀をお見舞いした。

ゴキッ、という嫌な音がしたかと思うと、ゴズキの首がありえない方向へと曲がり、そのまま力無く倒れた。

「『エンジェル』！」

絶命したゴズキに見切りをつけると、淳は、ＣＯＭＰから仲魔で

ある『エンジェル』を召喚した。

「何でしょう？　主」

透き通った声で、エンジェルが言う。

「ケイスケを回復させてくれ――出来るだけ急いで！」

「承知しました」

そう言うと、エンジェルは横たわっているケイスケの元へと向かった。

「スパルナ！　お前はエンジェルがケイスケを回復させるのを誰にも邪魔されないよう、二人の所へ行くんだ！」

仲魔であるスパルナに顔を向けて、アツロウが言う。エンジェルと同じように、スパルナもケイスケの近くへ移動した事で、残った淳達の側の主な戦闘員は、淳、アツロウ、そしてネコマタのみとなった。

ユズや他の仲間達は、全員、ミドリやケイスケを守る為、三人からは離れている。その気になれば参戦するように命令できたが、淳はそうしなかった。そうした途端、最初、自分達が突然囲まれた時のように、どこからともなく別の悪魔が現れ、その隙を突いてこないとも限らないからだ。

淳は、一度体勢を立て直さなければ、と思った。

「アツロウ、ネコマタ！　こっちに戻れ！」

アツロウとネコマタは、即座に淳の側へと駆け寄った。その直後、淳のすぐ後ろでアツロウが、

「……？　オイ、アイツらはどこ行った？」

と言ったので、淳は眉をひそめた。

「アイツら？」

淳が言う。

「アイツらはアイツらだろ。ホラ、お前の腹を切った悪魔と、ユズが吹き飛ばした悪魔の二体だ」

辺りに視線を巡らせながら、アツロウが言う。

「そういえば……」

言われてみて、淳も気付いた。まだ倒していない筈なのに、どれだけ辺りを見渡しても、あの二体の悪魔の姿が見えない。

――しかし。

「……っ！上だ！！」

突然、上空からただならぬ威圧感を感じ、淳が叫んだ。同時に、バッと上を見上げると、そこではカラステングがビフロンズを脇に抱え、淳達の真上に滞空していた。

どちらの顔にも、勝ち誇ったかのような笑みが浮かんでいる。何故そんな笑みを浮かべているのか、淳にはすぐに理解出来た。ビフロンズが持つ燭台に刺さっている蝋燭の炎が、これ以上ない程に激しく燃え上がっていたからだ。

（……マズイっ！！）

「逃げ――！」

淳がアツロウとネコマタに叫び終える直前に、ビフロンズは既に『マハラギ』を放っていた。

次の瞬間には、東洋アンズ前の広場で、巨大な爆発が巻き起こった。空中では、勝利を確信したカラステングとビフロンズが高らかに笑い、離れた場所でミドリを守っていたユズは、大声で淳とアツロウの名前を叫び続けていた。

2nd Day『ドーム球場前のバトル（2）―2』

――水道橋、東京ドーム前。

そこで。

ギィンッ！

――という金属音が、一切途切れることなく、2つの人影を中心に響き渡っていた。

不死の王『ベル・デル』の配下である、『クー・フーリン』と。

かつては、月光館学園において、特別課外活動部――通称、『S.E.E.S』の一員でもあり、その後、八十神高校に転校した後は、『自称特別捜査隊』のリーダーも務めた、歴戦のペルソナ使い、『セト』との戦いである。

セトは左足を軸に、体を独楽（こま）のように一回転させると、そのまま左手に持った剣を、対峙するクー・フーリンの首筋目掛けて、一気にたたき付ける。

しかし、クー・フーリンは全く慌てない。頭を僅かに後ろに反らし、文字通り、間一髪のところで、セトの凶刃から逃れる。

切っ先がクー・フーリンの睫毛を何本か刈り取り、それらが地面に向かってゆっくりと落ちようとした時には、既にクー・フーリンの反撃は始まっていた。

「せぇいっ！」

有り得ないことだ。

クー・フーリンの得物が、その両手で握っている雷の剣1本だけであるにも関わらず、セトに向かって放たれた斬撃は十や二十では到底足りない程だった。

クー・フーリンの剣が、たちまち幾筋もの突風と化して、セトへと襲い掛かる。

如何にセトと言えど、その全てを受け切ることは到底不可能に思われた。

しかし、その斬撃のどれ一つとして、セトの体に届く事はない。

「いいねぇ、ちょうど、この夏の暑さにウンザリしてたところだ。いい扇風機代わりになる」

――というような軽口を叩きつつ、その長身からは想像もつかないフットワークで、セトは全ての斬撃を紙一重でかわしてみせる。

あまりにも軽やかに避けるので、傍目から見れば、まるで踊っているかのように見えるだろう。

「流石だ、イザナギ殿」

「褒めるのはまだ早いぜ？　俺は尻上がりなんでな」

これ以上なく激しく動いているにも関わらず、2人の口調からは、息を乱している様子が全く伺えない。

まだまだ序の口――今はまだ、お互いに手を探り合っているだけ、とでも言うような、そんな余裕さえ見られる。

「では、これならどうだ?」

再び、クー・フーリンの剣が唸り声を上げる。

獣の咆哮のような風切り音と同時に、クー・フーリンの右手から、無数の突きが繰り出される。

これまた、凄まじい速さだ。

しかも、速いだけではない――その一撃一撃が、槍どころか、下手をすればライフル弾でさえ凌駕しかねない威力を誇っている。

人間では勿論、悪魔の中でさえ、ここまで速さと威力を併せ持つ剣術の使い手は、そうはいないだろう。

しかし、セトが見せた動きもまた、人間と悪魔、その両方の存在を、遥かに超越していた。

突きのリーチと、次の攻撃に移るまでの間隔、クセまでをも一瞬で見抜き、それに連動して、両手に握った双剣『マルアーク』を、クー・フーリンに負けない程の速さで動かす。

伸びてきた剣が、自分の肌に到達するよりも前に、セトはその刃を、側面からマルアークで弾く事によって、全ての突きを防ぎ切っ

て見せた。

「動きがデカ過ぎるぜ。これなら、片手でも全部弾ける」

「ほう、言うではないか。だが、まだまだこれからだ」

そして、ガキィィン、という金属音と共に、二人は剣技の応酬を再開する。

――そして。

その光景を、二人の戦いに巻き込まれない程度に遠く、かつハッキリ確認出来なくなってしまわない程度には近い位置で見ている人間が、一人いた。

現在、セトと共に行動している、不良グループ、『ダイモンズ』のリーダー。

二階堂征志――である。

彼は今、愕然としていた。

愕然としていて、唖然としていた。

目の前で繰り広げられている戦いを――正確には、戦いらしき現象を、飲み込めずにいた。

今の彼には――離れた位置から見ているにも関わらず――セトとクー・フーリンの戦いは、二つの霞（かすみ）のような陰が、目まぐるしい速さで動いているようにしか見えなかった。

それが彼の。

二階堂征志の――限界だった。

（こりゃ……一体何だ？）

そう思わずにはいられなかった。

セトとクー・フーリンが戦い始めてから、およそ三分が経過している。

しかし、そのたった三分だけでも、この2人と今の自分との間に広がる実力の差に、カイドーが気付くには十分過ぎる時間だった。

その強さも、速さも。

とにかく、セトとクー・フーリンが行う行動の全てが――カイドーには到底、理解出来なかった。

（……今、一体どっちが攻撃した？　いや、どっちが攻撃したにせよ、どうしてアレを食らってまだ生きて……って、もうあんなトコにいやがる……！）

「は、ははっ……」

思わず、笑ってしまう。

というより、笑う事しか出来ない。

次元が――違う。

それだけは、理解出来た。

「……クソッタレ……！」

甘かった――と、カイドーは、そう思わざるを得なかった。

とは言え、彼は今までずっと、セトが戦っているところを、呆然と眺めていた訳ではない。これでも、何度かはセトを手助けする為に、戦いに参加しようとしてはいたのだ。

しかし、そうする為に足を踏み出した瞬間、またもや突然、自分が着ている繋ぎの服の左足部分が、大きく切り裂かれた時から、彼はとっくにその試みを諦めていた。

最初の時――つまりは、カイドーの不用意な発言が原因となり、クー・フーリンから突然、右肩から左脇腹にかけて、服を切り裂かれた時――と同じく、カイドーはその攻撃を、全く見切る事が出来なかった。

その攻撃が果たして、自分達の戦いに介入するなという意味なのか、はたまた外側に外れた斬撃の一つが、偶然にもカイドーの方へ向かって行ってしまったのかは定かではないが（前者に関しては、クー・フーリンではなく、セトがやった可能性もなくはない）、僅かに残っていたカイドーの戦闘意欲を消し去るには、それで十分だった。

正直カイドーは、この時まで、今の自分の実力は、現在の封鎖された東京内では、かなりの上位に入ると思っていた。

そう思っていた彼を傲慢だと言う事は、誰にも出来ないだろう。

悪魔使いとしての力を手に入れれば、誰しも多少は有頂天になってしまうだろうし――何より、封鎖初日に改造ＣＯＭＰを手に入れてから、これまでに経験してきた悪魔との戦いにの全てにおいて、彼は勝利を収めてきたのだから。

少しくらい自分の力を過信するようになったとしても、それは無理からぬ事だ。

しかし、現実は違った。

目の前で戦っている、セトとクー・フーリンの動きを見ていると、カイドーは――自分の実力は、上位に入るどころか、遥か格下である事を、ハッキリと自覚してしまった。

「……」

絶望感が、ジワジワと胸の内を侵食していくのを、カイドーは感じていた。

だがカイドーは、ここでそのような負の感情に押し潰されてしまう程、弱い男ではなかった。

「……俺は諦めない」

ポツリと、カイドーはそのように呟く。

偶然にも――それは昨晩、宮下公園にて、有里淳が自分に檄(げき)を入

れる為に呟いた台詞と、全く同じ言葉だった。

（まあ――いいさ）

（耐えるのには、慣れてる）

カイドーはそう思っていた。

そうでなければ、どうして、この半年間ずっと、兄の仇をうつ為に、連続吸血事件の犯人を探し続ける事が出来たというのか。

今の自分に出来ること。

それは、目の前で戦っている二人から決して目を逸らさず、少しでも多くの技を盗む事だ――と、カイドーはそう判断した。

何故なら自分は、強くならなければいけないのだから。

力がなければ、いけないのだから。

兄を殺し、幼なじみである望月麻里を悲しませた犯人に復讐する為に。

どうしても――力がいるのだ。

その為ならば、自分はどんな事でもしよう。

「……」

気付けばカイドーは、脇に下げた両の手を、強く握り締めていた。

そして、唇を噛み締めながら、目の前で繰り広げられている戦いを、黙って見詰める。

自分の力の無さに、これ以上なくはらわたを煮え繰り返しながら。

◆　◆

セトは苦戦していた。

「――とっ！」

クー・フーリンが放つ斬撃を、ことごとく防ぐ。

クー・フーリンの剣を振るう速度は、セトでさえも、内心、舌を巻く程のものではあったが――とは言え、これをかわすこと自体は、セトにとって、何ら難しい事ではない。

そもそもセトが今回、親友であり、同じペルソナ使いでもある花村陽介から拝借した、双剣『マルアーク』を、今回の戦いにあたって用いたのは、ひとえに、クー・フーリンの太刀筋に、完全に対抗する為なのだ。

双剣。

聞いて分かる通り、セトは現在、二本の剣を携えて、クー・フーリンと対峙している。

対して、クー・フーリンはと言うと、身の丈程もある、自らの魔力で形成した、雷の剣を一本、両手で握っている。

セトの得物が二つであるのに対し、クー・フーリンは一つ。

ここが重要なのだ。

如何に、クー・フーリンの斬撃が速かろうと――その斬撃を繰り出す為の、肝心の剣が一本だけである以上、一度に放てる攻撃は一回のみである。

それに比べ、セトは剣を2つ用いて今回の戦いに臨んでいる為、必然、攻撃に関する動作も、防御に関する動作も、相手の二倍の数で行う事が出来るのだ。

無論、持っている武器の数が相手の2倍であるからと言って、手数まで相手の二倍になるとは限らないが故に、それは言うほど簡単な事ではないだろうが――セトのずば抜けた身体能力が、それを可能としていた。

一撃一撃の速さでは――僅かではあるが、クー・フーリンには敵わない。

セトは、かなり早い段階で――具体的には、最初にクー・フーリンがカイドーの服を切り裂いた時から既に――その事を、実に潔く認めていた。

以前にも、どこかで同じ事を述べたかもしれないが――彼は決して、傲慢ではないのだ。そして、謙虚でもない。ただ、そこにある厳然たる事実を、正確に受け止めるだけである。

だからこそセトは、攻撃の『速さ』で敵わないと言うならば――攻撃の『手数』で対抗すればいいと、そう考えたのだ。

だからこその、二刀流。

だからこその、『マルアーク』である。

更にもう一つ、このマルアークには、まさしくクー・フーリンにお誂えたかのような『特性』がある。

世に存在するペルソナ使いは、大抵、自分専用の武器――時には刀だったり、弓矢だったり、ハンマーだったりと、様々な武器を携帯している事が常だが、中には、人間界に存在する物質ではなく、悪魔やシャドウの体の一部や、魔界にしか存在しない、摩訶不思議な物質で構成された武器を使う者もいる。

そして、そういった武器には大抵、何かしらの特殊な能力が備わっている事が多い。

この双剣『マルアーク』も、そういった武器の1つだ。

これには、使用者の神経伝達速度を極限にまで速め、相手の物理攻撃に対する回避率――そう、まさに今、クー・フーリンが放ち続けている攻撃だ――を高める効果があるのだ。

クー・フーリンのような、攻撃の速さをウリにする悪魔を相手どる上で、これ以上相応しい武器はないと言っても、過言ではない。

しかし、それでも。

セトは――苦戦していた。

「どうされた？　イザナギ殿――防御ばかりしていては、ラチがあかんぞ！」

言いながら――クー・フーリンは再度、雷の剣を振るう。

閃光にも似た速さで、幾多もの斬撃が、セトの体に襲い掛かる。

しかも――。

（コイツ……マジかよ！）

柄にもなく、セトは驚愕していた。

攻撃の嵐を何とかかい潜り、左の手首を返して剣を持ち帰ると、グリップの部分で、クー・フーリンの側頭部を殴りつけようとする。

しかし、そこには既に、クー・フーリンの姿はない。

一瞬セトは、相手が五人にも十人にも増えたように見えた。

そう錯覚してしまう程に、クー・フーリンの足捌きは見事なものだった。

そして次の瞬間、クー・フーリンは、いつの間にかセトの背後に回り、彼の首を真っ二つにしようとしていた。

「……っ！！」

かろうじで。

セトは膝を曲げ、僅かに上体を下ろしながら、勢いよく体を回転させる事で――何とか、致命傷だけは免れた。

しかし、無傷では済まなかった。

「ぐ、う、ぅ――！」

つうっ……、と。

右の瞼より少し上の位置から、血が流れ落ち、頬を伝う。

（やっぱりだ……！）

咄嗟に後ろに飛び、一旦距離を開けて、体勢を整えながら――セトは確信した。

（コイツ――どんどん速くなってきてやがる！）

戦い始めた時点でこそ、セトは、マルアークを用いれば、それだけで十分、対処出来ると思っていたが――とんだ見当違いだった。

今までは、風の噂でしか聞いた事がなかった、という事も大きいだろう。セトは、クー・フーリンの実力を侮っていた。

先程、セトは自分の事を、尻上がりに強くなっていくタイプだと語ったが――それはどうやら、セトよりもむしろ、クー・フーリンに相応しい台詞だったらしい。

二人が戦い始めてから、およそ四分。

その四分の間に――クー・フーリンの斬撃は、更に速くなっていた。

尻上がりに、速くなってきていた。

しかも、ただ速いだけではない――その一撃一撃がとても重く、また正確に急所を狙ってくるのだ。時には、敢えて避けやすい攻撃を放つ事で、セトが移動する場所を誘導する事も――つまりは、斬撃自体を囮とする事もある。

（これだけ激しく動きながら、十手……いや、下手したら百手ぐらいは先まで読んでるかもしれねえ）

これならば、いっそやたらめったらに剣を振り回してくれた方がありがたい――どうやら、ただ強いだけではなく、知能の方も、極めて高いようだ。

――そして。

そして、再び斬撃が――。

「いくぞ」

連撃。

一体、どのように腕の筋肉を動かせば、そのような攻撃が繰り出せるのか――クー・フーリンは、上から下へ、そして下から上へと、ほぼ同時に、その二つの攻撃を放った。

しかし、繰り出された斬撃が二つならば、セトはまだ、十分に対処できる――上からの攻撃は右手の剣で、下からの攻撃は左手の剣で、何とか防いで見せる。

剣同士がぶつかった部分からは、激しく火花が飛び散り、その幾つかが顔に当たったので、セトは思ず顔をしかめた。

しかし残念ながら、クー・フーリンの攻撃は、それで終わりではなかった。

飛び散った火花がセトの顔に当たる頃には、彼パッと握っていた剣から手を離したかと思うと、体を大きく回し、その遠心力を利用して、セトの顔目掛けて後ろ回し蹴りを放っていたのだ。

先の連続斬りを防いだ事で、腕が痺れていたセトは、全く抵抗する暇もなく、その蹴りをまともに受けてしまう。

「あ……ぅっ……！！」

（クソッ……！　体術も半端じゃねぇ！）

たたらを踏むセトを尻目に、スッと足を元の位置に戻すクー・フーリンの表情には、殆ど変化はない。

しかし戦況の方は、極端な変化を見せていた。

「まだだ、イザナギ殿。まだ終わりではない」

「――――！！」

そこから繰り出されるは、上下左右から、さながら機関銃のを乱射するかのように放たれる、殴打と蹴りの嵐。

これらもまた、ウンザリするほど強く、速く、そして正確だった。

常人ならば、一発受けただけで骨が折れ、二発受ければ体に穴が空くだろう。

「お、お、おっ――と、っと！　中々、どうして！　やるじゃね、え、か……っとと」

セトの口調は相変わらず気軽なそれだったが、精彩さを著しく欠いていた。

いつの間にか勝負の主導権は、完全にクー・フーリンが握っていた。

「はあっ！！」

そして遂に、渾身の一撃が、セトの左脇腹にヒットする。

頭部への左ジャブを囮にした、強烈な右フック。

セトは、寸前で自分から体を投げ出したものの、その威力を完全

に殺す事が出来なかった。

「ぐ、ご、ああっ……！」

吹き飛ばされた体は、まるで水面に投げつけた小石のように、一、二度小さく跳ねた後、公共用の、やや大きめに作られたゴミ箱に衝突した。

腐った食べ物や、空になったカップ麺などが、セトの美しい銀髪へと降り注ぐ。

「や、野郎っ……！」

「どうした？　イザナギ殿。貴殿の本気はそんなものではないだろう。それとも、私程度では本気を出すにも値しないと？　それならそれで、このまま一方的に痛ぶり続ける事になったとしても、私は全く構わないが」

「俺が構うっつーの――ったく、やれやれだぜ」

口の端から血を流しながら立ち上がったセトと、息一つ切らしていないクー・フーリン。

とは言えセトは、追い詰められたかのような表情を全く見せていないし、クー・フーリンにしても、勝ち誇ったかのような笑みなど浮かべてはいない。

――そう、二人共が、ここまではほんの小手調べで、勝負はここからだという事を理解しているのだ。

しかし、これからはもう、違う。

セトの顔からは、いつものニヤニヤ笑いが消え、クー・フーリンの手には再び、あの雷の剣が握られている。

つかの間、二人はそのまま――戦い始めた時と同じように、お互いの武器を構えたまま、全く動かなくなる。

しかし、その周囲を纏う空気は、これまでにない程に、急激な変化を遂げていた。

二人の戦士が立っている場所より、ちょうど真ん中の位置にある地面に、次々と亀裂が走っていく。ただでさえ熱気の立ち込めるドーム球場前の空気が、更に熱せられたかのように思えた。

そして。

ズルッ……、と。

二人の戦いを、離れた場所から見守っているカイドーのポケットから、彼の改造ＣＯＭＰが、ゆっくりと、地面に落ちようとしていた。

それは最初、クー・フーリンに服を切り裂かれた際に、服の全体的なバランスが崩れてしまった為なのだが――それはともかく。

当のカイドーは、目の前の戦いに意識を集中させている為、その事には全く気付いていない。彼は今や、恐怖と興奮が入り混じった奇妙な気持ちで、二人の姿を見つめていた。

やがて。

――ガシャンッ！

――と、ポケットからずり落ちた改造ＣＯＭＰが、地面の上で、無機質な音をたてる。

それが、硬直した場の空気を、瞬時に解き放った。

しかし今回は、二人が同時に動いた訳ではなかった。

先に動いたのは――セトだった。

先程までの戦いからは考えられない程の速さで、彼は、クー・フーリンの懐へと、一気に距離を詰める。

「なんとっ！？」

ここへきて始めて、クー・フーリンが、心の底から驚いたかのような表情をした。

何よりも、攻撃の速さをウリにする彼が、相手の移動速度を見て驚くなど、普段ならありえない事である。

それほどまでに、セトの動きは、これまでの戦いのそれとは、比べものにならない程に速くなっていたのだ。

何故、そんな事が起こりえたのか――無論それにも、ちゃんとした理由がある。

セトは――武器を『マルアーク』に変えただけではまだ、クー・フーリンの速さに十分に対抗できないと考えた。

そこで彼は、自分の機動力を更に高める為に、心の中で、現在装備しているペルソナを付け替えたのである。

元より、彼の異常とも言える身体能力は――長年鍛え続けてきた、ペルソナの『補正』によるものだ。そして、『補正』の値は、ペルソナによってそれぞれに違う。

故に彼は、ペルソナを付け替えるだけで、自分の身体能力を自由自在に操る事が出来る――！

いつの間にか彼は、その体に、青い光を纏っていた。

「く、うぅ、う――！」

クー・フーリンは上体を後ろに反らしながら、剣を後ろに引き抜くようにして、セトの体を掻き切ろうとする。

しかしそれでも、セトが付け替えたペルソナを召喚するのよりも、まだ遅い。

「クー・フーリン」

コンマ何秒かの間の攻防であるにも関わらず、セトは、限りなく冷めた口調で言う。

「お前の動きは、確かに速い――けどな、何もそれは、お前だけの専売特許じゃないんだぜ？　さて、コイツの攻撃とお前の攻撃――果たして、どちらの方が速いのかな」

セトの頭上に現れるは、赤銅の鎧に身を包み、両の手に同じ長さの日本刀を携えた武者――『塔』のアルカナに属するペルソナ、『ヨシツネ』。

「『八艘飛び』！！」

上から二回、下から二回、右から二回、左から二回の、合計八回にも及ぶ、ヨシツネの斬撃が――クー・フーリンの体を、容赦なく切り裂いた。

2nd Day『ドーム球場前のバトル（2）―3』

街の中を駆ける影がある。

それは――1人の男だった。

「……何とか…離れられたか…っ！」

男は激しく息を切らしつつ、一旦立ち止まり、今、自分が走ってきた方向を振り返る。

「……」

男はしばらく、その方向をじっと見つめていたが、やがて、現在、思っている事を振り払うかのように、小さく頭を何度か横に振ると、すぐに、先程と同じように、今見ていた場所とは逆の方向に向かって、走り始めた。

男は、全身に大量の汗をかいているように見えたが――それは決して、体を激しく動かした事により、高くなった体温を調節する為、という訳ではない。

汗は汗でも、それは冷や汗だった。

その男は――セトか？

或いは――クー・フーリンか？

否、そのどちらでもない。

見れば男は、上下を繋いだ、黒い衣服を着ていた。とは言え、右肩から左脇腹の部分にかけては大きく切り裂かれている為、一見すれば、上半身裸に見えなくもない。

二階堂――征志だった。

念のために言っておくが――彼は断じて、自衛隊の封鎖網を突破する為に、山手線沿いの道路へと向かっている訳ではない。

今の彼の関心は、そんな事にはない。

彼は走る。

ただ、走る。

まるでその先にあるであろう――東洋アンズという場所に、自分がそこへ向かわなければいけない、確固たる理由があると確信しているかのように、走り続ける。

「間違いねぇ…、何となく分かるぜ。この先にいやがるな…！」

走る。

とにかく走る。

ひたすら走る。

その目に、激しい炎を点して。

まるで、彼の生き様を、そのまま表すかのように。

闘志と戦意を漲らせた、その体を動かして。

「待ってろヨ…！　有里！」

◆　◆

「……」

その頃――セトは、相変わらず、双剣『マルアーク』を両手に持ったまま、東京ドーム前の広場に佇んでいた。

身に纏っている赤い甚平の所々に、更に真っ赤な鮮血が付着している為、その部分が黒く汚れている。その血は、つい先程、セトが自らのペルソナ、『ヨシツネ』の攻撃によって、合計8回の攻撃を叩き込んだ相手――魔剣士、クー・フーリンのものだ。

では、そのクー・フーリンは現在、どうしているのかと言うと――セトより数メートルほど正面に離れた位置において、こちらもまた、彼と同じように、自分の得物である雷の剣を片手で持ったまま、構えもせず、ただその場に佇んでいた。

「…やれやれだぜ」

クー・フーリンから決して目を逸らさぬまま――セトは、そのように呟く。

「確かに、今の一撃――いや、正確には八撃で、確実に仕留めたと思ったんだけどな。『人類最強』と謳われ、『イザナギ』の異名を持つペルソナ使いも今は昔、ってか？」

そう――セトにとって、これは掛け値なく本当に、驚きの事態だった。正直彼にしても、何故、今の自分の攻撃を受けて、クー・フーリンが生き残ったのか――その理由を理解するまでに、およそ数秒程の時間を要した程である。

彼のペルソナ、ヨシツネの『八艘飛び』によって繰り出された合計８つの斬撃は、１つとして逸れる事なく、クー・フーリンの鎧に食い込んだ――そう、それは間違いない。

セトにしたって、彼の手には今でも、その時の鎧を切り裂いた――細かい事を言うなら、『切り砕いた』という表現が適切かもしれないが――感触が、しっかりと手に残っている。

しかし。

セトの攻撃は、クー・フーリンの鎧を傷付ける事は出来ても、その肉体を傷付ける事は出来なかった。

特筆すべきは――その白銀の鎧が誇る、『防御力』。

凄まじい硬度。

凄まじい強度――である。

とは言え――セトは、その鎧を破壊する事自体は、見事に成し遂げていた。先程までクー・フーリンが身につけていた鎧は現在、粉々に打ち砕かれた残骸となって、2人が睨み合ってる場所の、ちょうど中間の位置に放置されている。

『ヨシツネ』は数多く存在するセトのペルソナの中でも、彼がかなり気に入っているものの内の1体だし、『八艘飛び』もまた、彼が繰り出し得る物理攻撃の中では、相当な自信をもって発動できるスキルの1つである。

だからこそ――クー・フーリンの鎧が、どれだけ硬かろうとも、こうして、無惨に破壊されたという結果は、彼にしても想定内ではあったのだが…。

それでも、『八艘飛び』によって発生した攻撃が、その鎧に触れた時、全く影響がなかったのかと言えば、無論、そんな事はない。

当たり前の事ではあるが――クー・フーリンの鎧がダイヤで作られていようと、紙で作られていようと――ヨシツネの刃が彼の鎧に食い込んだ瞬間、僅かにではあるが、その攻撃速度が遅くなったのだ。

『攻撃速度』。

今回の、セトとクー・フーリンの戦いにおいて、重要な要素となっている『攻撃速度』が――遅くなったのだ。

それを生かさないクー・フーリンではない。

それによって遅れた攻撃が、クー・フーリンの体に到達するまでの時間は、ほんの一瞬にも満たないかもしれないが――彼にとっては、それだけでも十分な時間だったのだろう。

むしろ、瞬き1つすら許されない戦いを、これまで、魔界において何度も経験してきたクー・フーリンにとって――その時間は、永遠にも等しいものだったのかもしれない。

ともかく。

一見、大した事もなさそうな、その、ほんの小さな差異こそが、クー・フーリンの命を救ったのだ。

果たせるかな、それによって彼は、セトの攻撃が自分の肌に触れるよりも僅かに速く、『八艘飛び』の有効範囲より大分離れた位置まで、移動することが出来たのである。

「…やれやれだぜ」

再び、同じ台詞を呟くセト。

（――まぁ、どうやら）

セトはチラッと、自分が立っている場所より、数メートルほど後方の位置に、視線を向ける。

そこには先程まで、二階堂征志という、自分の『同志』が立っていた。

しかし、どうやらカイドーは、先程のヨシツネの攻撃――『八艘飛び』によって、この戦いに生まれた、僅かな『隙』を見逃さなかったようだ。

結果――どうにかしてカイドーは、このドーム球場前の戦いから、離脱する事に見事に成功したらしい。恐らく、ここでただ漫然とセトとクー・フーリンの戦いを眺めているよりは、その方が色々な意味で合理的だと判断したのだろう。

それでいい、とセトは思った。

もしかしたら、先程までカイドーは、自分やクー・フーリンから何かを得ようと思って、自分達の戦いをじっと見ていたのかもしれないが――そんな事をしているよりも、この先で繰り広げられているであろう別の戦いに参加した方が、遥かに彼のためになるというものだ。

正直に言ってしまうと、セトにしてみれば、これで常に気にかけなければならない存在がいなくなって、ようやく、心置きなくクー・フーリンと戦えるとさえ思っていた。

故に、それがどれほど僅かな値であろうとも、先程よりは確かに、クー・フーリンと戦いやすくなった筈なのだが――それでも。

それでも――である。

「参ったな。いやいや、本気の本気で参った。お前の実力が、まさかここまでとはな。認めよう、正直俺は、お前の事を侮ってた――ってな。つーかお前の実力って、、下手したらベル・ゼブブや、

或いはベル・ベリトにさえ匹敵するんじゃねえか？」

「……そんなに褒めても何も出んぞ、イザナギ殿」

クー・フーリンが言う。

「油断による隙ぐらいは見せてくれるかなーって思ったんだが」

「生憎と、その程度の世辞でのぼせてしまう程、弛んだ精神は持ち合わせていない」

「そうかい。そいつぁ重畳」

――そう言って、セトは再び目を細めて、クー・フーリンを睨みつける。

確かに、今彼が放った台詞の８割以上は、クー・フーリンを油断させる為のそれではあったものの、本音から出た言葉も、幾つかはあった。

実際、セトはクー・フーリンがここまでの実力を持つ悪魔だとは思ってもみなかったし、だからこそ、多少なりとも辟易（へきえき）している部分はある。

こんな状況を、自分が尊敬している、かつての『先輩』ならば、一度クスリと笑って、

『全く、とんだくせ者に出会ってしまったものだ。とは言え、こうして僕が君に出会った事にしても、僕が過去に何かを【選択】した事によって起こった【結果】だというなら、僕は喜んで、潔（いさぎよ）く、全

く抵抗する事なく、君という存在を受け入れる事に、少したりとも抵抗はしないけどね』

――とでも評するのかもしれないが、残念ながらセトは、自分に降りかかってきた逆境に対して、そこまで前向きな思考を生み出せる程の脳みそを持ち合わせていなかった。

実際、わざわざ借りてきた親友の武器を振るい、手持ちのペルソナの中でも、殆ど最強に近い『ヨシツネ』を召喚するなど、こちらの手の内をかなり披露したにも関わらず、それでも仕留められないとなった今、クー・フーリンという悪魔は――セトにとって、これ以上なく警戒しなくてはならない、油断が入り込む隙間など、1ミリたりとも存在しない、そんな相手になっていた。

（『忠誠心』……とか、確か、そんな事を言ってたっけか）

自分は、不死の王であるベル・デルを、自分の主である『ベル・デル』を――この上なく尊敬している、と。

そんな風な事を――クー・フーリンは、最初に言っていた。

セトは知っている。

そのような、1本の芯が通っているかのごとき、揺るぎなき忠誠心が、どれだけの力を生み出すのかを、彼はよく知っている。

何故なら。

（――分かっちゃうんだよな）

（――なんせ俺も、同じように、『先輩』を尊敬していて）

（――だからこそ、俺はここまで『強く』なれたんだから）

（――やれやれだぜ）

（――正直…マズイかもな）

（――闘(や)りづらいんだよなぁ…）

（――自分(テメエ)と同じ主義の奴とはよぉ…）

「しかし――イザナギ殿」

そんな事をセトが考えていると、不意に、クー・フーリンが口を開いた。

「『正直、ここまで強いとは思わなかった』――と言うのらば、私としても同じ気持ちだ。無論、総合的に見れば、間違いなく私よりは貴殿の方が強いのだろうが……。それでも、『速さ(スピード)』だけは、私の方が上だと思っていた。だがそれさえも、貴殿のペルソナ――確か、『ヨシツネ』だったか――に、破られてしまったとあってはな……。全く、ペルソナ使いの中でも、『ワイルド』というのは特に、計算というものが通じんな。貴殿1人でさえ手に余るというのに、現在、この封鎖に紛れている『ワイルド』は、貴殿を含めればこれで2人目だ。頭痛がするという表現は、こういう時に使うのだな、と、私は今、しみじみそう思っている」

「……『2人目』？」

クー・フーリンが発したその単語に対し、疑問を感じるセト。

「……誰だ？　ソイツは。俺の他にも『ワイルド』が紛れてるなんて、俺は聞いてないが…。周防（すおう）さん…じゃあねぇよな。あの人は数日前に、俺が念入りに壊しておいたし…。そもそも、あの人が俺の『計画』を邪魔したり出来ないように、俺はそこまでやったんだしな。……となると、一体誰だ？そのもう1人の『ワイルド』ってのは」

言うまでもなく、『先輩』でもないだろう――と、セトは思った。

何せ自分は、彼が死んだ時、まさにその現場にいたのだから――。

セトの問いを受けて、クー・フーリンは一瞬、「しまった」という顔になったが、すぐに、元の冷静な表情に戻すと、次のように続ける。

「……藤堂尚也（とうどうなおや）だ」

「――――――っ！！」

その名前を聞いて。

セトは――動揺した。

これ以上なく、動揺した。

『藤堂尚也』。

その名前を、セトは知っていた。

と、言うより――彼に限らず、ペルソナ使いであれば、誰でも知っているだろう。その名前は、知名度だけで言えば、セトが尊敬している『彼』に、全くひけをとらない。

しかしクー・フーリンは、そんなセトの心情に一切構うことなく、話を進めていく。

「当然、この名前はよく知っているだろう？　イザナギ殿。あの『フィレモン』を除けは、この世で最初に生まれた『ワイルド』であり、近代のペルソナ使いの歴史の、全ての始まりとも言われる、あの男だ」

「…馬鹿な！　ありえないっ！！」

気付けば。

セトは、そのように――自らの動揺を、一切隠すこともなく、クー・フーリンの言葉を、激しく否定していた。

「ソイツなら…！　もうとっくに死んでる筈だ！　お前の方こそ、そう言って、俺を油断させようとしてんじゃねえのか！？　……戯

言はやめやがれ！」

「否、彼は生きている……。否、否、死んでなお、生き続けている――と言った方が、正確かもしれんがな」

対するクー・フーリンはやはり、セトとは違い、全く慌てている様子がない。

「貴殿にしても、彼が本当の意味で死んだところを目撃した訳ではなかろう――当たり前だ。そもそも彼は、厳密には、死ぬことなど出来ないのだからな…。ただ、彼の行方を誰も知らないが故に、勝手に1人歩きしていた噂を、貴殿が信じ込んでいた、というだけの事だ。……もっとも、人間とは大抵、そういった障子紙のごとき、曖昧な認識を持っていなければ生きていけないだろうから、無理もないかもしれんが」

「……」

――仮に。

仮に、クー・フーリンの言ってる事が本当だとするならば、セトにとっては、これ以上の驚きはない。この時、その台詞を聞いたのがセトではなく、レミエルやメタトロン、果ては『神』だったとしても、同じように驚いただろう。

正直セトとしては、クー・フーリンの相手などせず、今すぐにでもこの勝負から抜け出し、この事をレミエルや『神』に伝えたいぐらいではあったが――同時に、更に詳しく、その話を聞きたいという気持ちも、少なからずあった。

「…何だ？　お前…どこまで知ってんだ？　いや、それ以前にどうして、そんな事を知ってんだ？　お前は一体…何なんだ？」

セトが言う。

「そう矢継ぎ早に質問されても困る。それに私としても、全てを知っている訳ではないしな…。ただ、1つだけ、私がなぜ、『藤堂尚也が生きていて、しかもこの封鎖に紛れている』と確信しているのか――その理由ぐらいは教えてやろう。それは…」

――言いつつ。

クー・フーリンは、構えた。

戦い始めた時と同じように、腰をおとし、剣先を地面へと向けて、構えた。

ありったけの敵意と。

これ以上ない殺意を、放ちながら。

当然、セトもそんなクー・フーリンの動作に反応し、瞬時に構える。

ありったけの覇気と。

これ以上ない闘気を、放ちながら。

「その理由は――」

グッと、左足を地面に押し付けながら、クー・フーリンが言う。

「何故なら私は、気付いているからだ。今回の『神の試練』において起こっている、本来の物語では起こる筈のない『矛盾』の数々に――――！！」

「……っ！？」

セトを襲うのは――――2度目の驚愕。

（――――本来の物語では起こる筈のない『矛盾』、だと？）

（――――コイツ…！　今度はいきなり、何言ってやがる！？）

そして、同時に。

『隙』が、生まれた。

セトの警戒心が、クー・フーリンの思いがけない台詞によって散漫した事によって、どうしようもない『隙』が、彼に生まれたのだ。

そして、やはり。

そんな『隙』を――――クー・フーリンが、見逃す筈が、ない。決して、ない。

彼は――――やはり、信じられない程の速さで、剣を振るった。

それ自体は、先程までと同じだが――――しかし！

そこから発生した斬撃は、これまでのそれとは、明らかに一線を画していた――！

音速どころか、光速にも匹敵しかねない速さで振るわれた剣から、一陣の『風』が巻き起こる。

先程、セトのペルソナ、ヨシツネが放った『八艘飛び』は、合計8回にも及ぶ斬撃を繰り出していたが――対して今回、クー・フーリンが斬撃を放った回数は、1回だけだった。

だからと言って――その威力までもが、決して劣っている訳ではない。たった一撃だけであるが故に、その威力は、まさに書いて字のごとく、『一撃必殺』と評しても、何ら遜色のないそれだった。

発生した風は、やがて突風となり。

突風はやがて、嵐となる。

「……チッ！！」

しかし――それでも。

セトは、気付くのが遅すぎて、もはや不可能かと思われる反撃を――それでも、半ば無理矢理に、繰り出して見せる。

「ペルソナ！　『ヨシツネ』――」

「我流！　奥義――」

それはまるで、先程までの戦いを仕切り直し、もう1度、やり直

しているかのようだった。

先の戦いも、最初はこうして、お互いの攻撃をぶつけ合う事から、始まったのだ。

違うのは――その時の攻撃がほぼ同時であったのに対し、今回は、セトの方が若干遅れて攻撃しているという事。そしてお互い、様子見や小手調べなどではなく、全力で攻撃を放っている、という事だ。

セトは8回。

クー・フーリンは1回。

それぞれに――斬撃を放つ。

「『八艘飛び』！！」

「『妖花烈風（ようかれっぷう）』！！」

ドーム球場前の戦い。

ペルソナ使い、セト　対　魔剣士、クー・フーリン。

第2ラウンド――開始。

2nd Day『ドーム球場前のバトル（2）―4』

「あ、ああ、あああああああああっ！！」

喉も裂けよ、とでも言うかのように、大声で叫ぶ男がいた。

「あ…うぅ…ぐ、う、ぅ――――！」

続いて――――セトは、苦悶と苦痛と苦渋に満ちた呻き声を漏らす。

そんな彼の前には、クー・フーリンが、相変わらず右手に雷の剣を持ったまま、仁王立ちし、地面にうずくまっているセトを、何とも表現しがたい目で見下ろしていた。

現在、彼の左肩からは、とめどめなく血が流れ出ていた。

彼の――――先程、鎧を砕かれた事で露出された――――上半身が、下半身が、そして足元までもが、みるみる内に、血で染まっていく。

どうやら、セト（のペルソナである『ヨシツネ』）が放った『八艘飛び』が、左肩に直撃したらしい――――出血の量から考察するに、相当に太い動脈を切られたであろう事は、恐らく間違いない。

即死する程のものではないが、かと言って、このまま放置すれば、遠からず命を失うであろう程度には――――重傷だった。

だが、しかし。

見れば、そんなクー・フーリンの表情は、肩の痛みにより、多少は顔を歪めていたが――しかし、口元だけは、まるで、既に勝負は決したとでも言うように、ニヤリと笑みを浮かべているではないか。

そう。

彼の表情からも分かるように、ことの勝敗は既に、決まっていると言ってもよかった。

何故なら――。

「ぐ…う、ぅう、う――はぁっ！　はぁっ！　はぁっ！」

ようやく、呻くのを止めたかと思えば、次には、激しく息切れし始めるセト。

見れば、なんと。

彼の右肩から先の部分が――失くなっていた。

『切断』――されていた。

「ぐうぅ…う、う、うっ…！」

まるで、蛇口を限界まで捻ったかのように、彼の肩からは、ボタボタと、大量の血が流れ落ちていた。

原因は――言うまでもなく、つい先程、クー・フーリンが渾身の力で放った『妖花烈風』である。

クー・フーリンがその技を仕掛けてきたのより僅かに遅れて、セトはヨシツネの『八艘飛び』を繰り出したものの――神速の攻撃速度を持つクー・フーリンには、それでも遅すぎたくらいで、結果、右腕を切断されてしまった、という訳である。

否。

あえて、言い方を変えれば――それでも、何とか反撃することが出来たからこそ、この程度の傷で済んだのかもしれない。

もしこの時、攻撃を受けたのがセトではなく、他の誰かだったとしたら――間違いなく、反撃する隙もなく、右腕どころか、胴体を真っ二つにされていただろう。

切り離された腕はと言うと、現在は、彼とクー・フーリンが立っている場所より大分離れた位置に、無造作に放置されていた。

その腕の先にある手の平は、切り離された今となっても、双剣『マルアーク』の内の1本が、しっかりと握られている。

時間がたてば、死後硬直によって、その手から剣を引き抜く事は困難になるだろう。

もっとも、厳密に言えばセト本人は死んだ訳ではないので、もしかしたら死後硬直と言うのは、些か語弊があるかもしれないが――まぁ、体から分断されたとあっては、その腕に限れば、もはや『死んでいる』と言っていいだろう。

それに、セト本人にしたって、後もう少しすればそうなってしま

うのかもしれないのだから――。

いずれにせよ、時間の問題である。

「恐らく――」

クー・フーリンが言う。

「――貴殿が今回の戦いにおいて、その双剣を使用してきたのは、私より僅かに劣っている攻撃の『速さ』を、二刀流による『手数』で補う為だろう？だがその戦術も、今のように片腕を切り離されたとあっては、もはや意味はなさない――そもそも、剣を握る為の腕がないのだからな。どうやら、この勝負――」

私の勝ちと見て、間違いなさそうだな、と――クー・フーリンは、そのように言った。

「……」

それに対して、セトはしばらく沈黙を保っていたが、やがて、

「……ハッ、ハハハッ…！」

と、小さく笑った。

これだけの絶望的状況にありながら。

それでも、彼は――如何にも彼らしく、笑うのだった。

「お前…なーに勝ち誇ってやがんだ？」

そして――セトは言う。

「知らねぇのか？　俺はあくまで『ペルソナ使い』であって、『剣士』じゃねえ。例え片腕をもがれようが――『心（ペルソナ）』さえ無傷なら、俺は何度だって戦える」

そして、セトは、苦しそうに口から息を漏らしながらも――それでも、心をしっかりと保って、ペルソナを喚び出そうとする。

確かに、片腕を切られたのは二重の意味で痛いが――それでも、ペルソナの治癒魔法を使えば、命の危機を脱するくらいの応急処置は可能だろう。

「ペルソナ――」

が、しかし。

そこで彼はようやく、自分の身に起こっている、ある異変に気付いた。

彼は――ペルソナを召喚する事が出来なかった。

「…？　…？？　……っ！？」

最初は、よく状況が飲み込めなかったセトではあったが――たちまち、その顔を伝っている、苦痛による脂汗の中に、冷や汗が混じり始める。

「なっ…！？　どういう事だ！？　どうして、ペルソナを召喚でき

ねえ！？」

そのように、セトが混乱の極みに陥っていると、その様子を薄氷のように冷たい目で見ていた、クー・フーリンが、

「……『妖花烈風』」

――と、静かに言った。

「……？」

「我と同じ、偉大なるベル・デル様の部下の中に、『マカーブル』という悪魔がおってな――もっとも、こやつはつい最近、何者かに殺されてしまったようだが――こやつが持つスキルの1つ、『ベノンザッパー』には、その攻撃を当てた相手に、一定の確率で『毒』を負わせる能力があるらしい」

「……っ！！」

そこまでクー・フーリンの説明を聞いて――セトは、自分が何をされたのかを、一瞬で理解した。

そんなセトの様子に、決して気付かなかった訳ではないだろうが――それでもクー・フーリンは、あえて説明を続ける。

「実は先程、私が放った『妖花烈風』にもまた、その『ベノンザッパー』と似たような効果があるのだ――攻撃を食らった相手を、一定の確率で『魔封』の状態にする、という効果がな」

「…！　くっ…！」

（やっぱり――そういう事かよ！）

薄々わかっていた事ではあったが、それでも、やはり当のクー・フーリンの口から、直接その事を告げられると――セトは、内臓を見えない手で締め上げられるかのような、気味の悪い感触を覚えられずにはいられなかった。

『魔封』――とは。

端的に言えば、その被害者が――ペルソナ使いならばペルソナのスキルが、悪魔ならば魔法などの――特殊攻撃を封じられた状態を指す言葉である。先程、例として挙がった『毒』や、『麻痺』、および『石化』などと並び、『状態異常』と呼ばれるものの内の１つだ。

「ちっ……！」

思わず、セトは――そのように舌打ちする。

まさか、クー・フーリンが放った『妖花烈風』に、そのような付随効果があるなどとは、セトは思いもしなかった。

（――これが『毒』や『麻痺』だったら、まだ少しはマシだったかもしれねぇ…。そんなもん、すぐに『アムリタ』か『メシアライザー』で回復すればいいだけの話だからな）

肩から大量の血が流れ出ている為に、働きが鈍りつつある脳を必死で回転させながら、セトは考える。

（――けど、『魔封』は厄介だ。何せ回復させようにも、そうする為のペルソナのスキル自体が使えない、とあっちゃな…。とは言え、これは時間が経てば自然に治る類の状態異常だから、こういう場合は『魔封』の効力が切れるまで、なんとか粘り切るってのが常套なんだか…）

しかし――今回は、それさえも叶うまい、とセトは思った。

なぜなら現在、彼の右肩からは、今もなお、大量の血が流れ落ちているからだ――この状態で『魔封』の効力が切れるまで待っていたら、その間に、自分は失血死してしまうだろう。

ペルソナのスキルが使えないとあっては、『魔封』は勿論のこと、この傷にしても、治癒魔法で治す事は出来ない。

（やべえな…冗談抜きで、本当にやべえ…）

無論、ペルソナの『スキル』自体は使えなくとも、ペルソナを『憑けて』いない訳ではないから、それによるペルソナの身体能力の底上げ――引いては、新陳代謝の度合いも上がっている為、多少の傷ならば時間が経てば自然に治るだろう。

しかし、今回セトが受けた傷は、どこからどう見ても、擦り傷や打撲といった類のものではない。何せ、腕を丸々1本、切り落とされているのだ――にも関わらず、ここでペルソナの『補正』に頼ろうとするのは、余りにも愚かしい事だと言わざるを得ないだろう。

（それなら…）

セトは一旦、その場で大きく息を吸い込むと、全ての意識を、切

断された右肩の筋肉へと集中させる。そして次には、

「ぬ……があああああああっ！！」

――と、獣のような咆哮をあげながら、あらん限りの力で、肩の筋肉を収縮させた。

ミチミチミチ――という、何かを強くこねるかのような音と共に、今まで、セトの右肩にある切断面から流れ落ちていた血液が、ピタリと止まった。

「ほう」

そんな荒療治にも程がある芸当を見て、クー・フーリンは思わず、目を大きく見開いた。

「ハァッ、ハァッ――ナメんなよ――ハァッ――この程度の傷だったら――ハァッ――別に、ペルソナのスキルなんか使わなくても――ハァッ――簡単に治せんだよ…！」

セトが言う。

だが勿論、実際には、言ったほど簡単に治せた訳ではない。筋肉を締め上げる直前、全ての意識を傷口へ集中させた為、そこから発せられる痛みもまた、彼はハッキリと感じてしまったのである。

故に、この止血法には、かなりの苦痛が伴ったのだが――そこで弱音を上げる事は、セトのプライドが許さなかった。

「全く…見上げた根性だ。普通、腕を1本切断されたとあっては、

大抵の人間ならばそれだけでショック死してもおかしくないと言うのに」

クー・フーリンが言う。

「ハッ…！　冗談…！　この程度、ほんのかすり傷だっつーの…！」

言うまでもなく、セトのこの言葉は、１から１０まで、全てが虚勢である。

今や、彼の顔からは血の気が引いており、蒼白になっていた。

「……フン」

そんなセトの強がりに気付いてか、クー・フーリンは、鼻で小さく笑うと、一旦、手に持った雷の剣を消し、その手をそのまま、激しく出血している自分の左肩へと押し当てた。そして――、

「……ヌンッ！」

と、気合いの唸りと同時に、肩に押し当てた手の平から、大量の電流を流した。気絶しない程度には強すぎず、逆に、軽すぎない程度には強めながら、絶妙の力加減で電流の威力を調節する。

それによって、彼は、傷口を電流で焼く事で、皮膚と肉を溶かし、傷口を塞いで見せた。

こちまもまた、先程のセトに負けず劣らずの荒療治ではあったが――元々の傷の深さが違う為か、その表情からは、今のセトほど体力を消耗した様子は伺えなかった。

「さて……一体、ここからどうする気だ？　イザナギ殿」

自らの左肩から立ち上る、何かを焦がしたかのような匂いに、僅かに顔をしかめながら、クー・フーリンが言う。

「今の貴殿は、片腕を――――しかも利き腕である右腕を失い、『魔封』によってペルソナも使えない。もはや、今の貴殿では、ここから私に勝つことは出来ないだろう」

言って――――クー・フーリンは、開いた右手に魔力を集中させ、一旦消した筈の雷の剣を、再び形成する。

「故に、もしここで貴殿が退くと言うのならば、私は決してその邪魔をしない。否――――私としてはむしろ、そうして欲しいくらいだ。今の貴殿ほどではないとは言え、私もまた、随分な深手を負った為、見た目ほど余裕はないからな――――そもそも、ベル・デル様が私に与えられた任務は、貴殿をここで『足止め』し、この先で起こっている戦いに参加させない為だ。ここで貴殿が素直に退けば、その任務は無事に達成させる。お互いの利益と命の事を考えれば、それほど無理な取引ではあるまい？」

「……」

しかし。

そんなクー・フーリンの取引に対して――――セトは、小さく首を振った。

首を、小さく、横に振った。

それは、クー・フーリンの取引には、決して応じない、という姿勢の表れであった。

そして――、

「……『先輩』はさ」

と、セトは静かに言った。

「？　……『先輩』？」

「ああ、最初辺りにお前も言ってた――俺がまだ15歳だった頃の、『先輩』だよ」

「……」

全くもって意味不明な事を言い出したセトに対し、クー・フーリンは、少々面食らってしまう――なんだ？まさか、そんな精神状態まで、追い詰めてしまったのだろうか？だとしたら、これでは逆に、降参させる事が難しくなる――。

だが、そんなクー・フーリンには構わずに、セトは、一方的に自分の話を進める。

「こんな俺でも、今じゃ『人類最強のペルソナ使い』とか言われてるけどさ、正直、俺の強さなんて……あの頃の『先輩』に比べれば、どうって事ねぇよ。全然、大した事はない――その『先輩』が死んで、もう17年近く経つのか。何つうか、すっげえ懐かしいや…」

「……？　貴殿が言ってるのは、あの――――かつてニュクスを封印した『死神に魅入られた青色』の事か？　と言うより、それが一体、どうしたというのだ？　何故、こんな時に突然、そんな事を言い出す――――」

「でもさ」

クー・フーリンの言葉を、無理矢理遮るかのように、セトは、力強い声で、話を続ける。

「それほどまでに『先輩』は強かったって言うのに、俺なんかよりもずっと、『最強』に近い筈なのに……。１７歳という若さで命を落としたせいで、他の人間達には――――厳密には、ペルソナやシャドウの存在さえ知らなかった人間達には、その『強さ』が知れ渡る事はなかった」

右腕を失いながらも。

ハッキリと、力強く。

まるで、自分自身に言い聞かせるかのように――――セトは言う。

「俺には……それが我慢ならない」

「……」

「あれ程の人を、あれ程の強さを全く認知せず――――自分達がそうやってのうのうと生きてられるのは、偉大なる『先輩』のお陰だとは全く知らずに生きている人間達の存在が……俺には、どうにも我慢ならない。許容できない。許せない」

何故。

何故、あれ程の人の存在を、世間の人間は、誰も知らずに生きていられるのか――。

「でも、当の『先輩』が既に亡くなってしまったとあっちゃ、『先輩』自身が、その『強さ』を証明する事は、もう出来ない――このまま、誰かが何もしなければ、いずれは……あの人の『強さ』を世間に伝えられる可能性は、全くの零になっちまう」

「……」

「分かるか？　要するに、誰かが証明しなくちゃいけないんだ。あの人の『強さ』を。あの人が『最強』だったという事を――！」

「何を言っているのだ？」

遂に。

もうこれ以上は、こらえきれないとでも言うように――クー・フーリンは、セトに問うた。

いつまでも、無駄話には付き合ってはいられない。

「私の取引に対する答えを、早々に頂きたいものだ。イザナギ殿――引くのか？それとも、引かないのか？」

「引かないよ」

再び。

力強く、セトは言った。

「だって俺は――――勝ち続けなくちゃいけないんだからな。『先輩』の為に。若くして亡くなってしまった為に、『最強』である事を証明できなかった『先輩』の為に――――！」

見れば。

セトの両目には、とても死にかけの人間のものとは思えない、激しい炎が点っていた――――そのあまりの視線の強さに、思わず、クー・フーリンはたじろいでしまう。

「『先輩』がまだ生きていた頃……俺は、修業の一貫で、何度も『先輩』と手合わせしたんだけど、よぉ――――結局、俺は最後まで、1度たりとも、あの人に勝つことは出来なかったんだ……つまり！」

――――ザンッ！　と。

大きな音をたてて、セトは一歩、クー・フーリンへと近付いた。

「……つまり、こういう事だ！俺が勝ち続ければ――――あの人に1度も勝てなかった俺が勝ち続ければ、あの人こそが最強であると証明する事が出来る――――！」

――――だから俺は、相手が誰であろうと。

絶対に逃げない。絶対に負けない。

『先輩』の為に、俺は、絶対に逃げる訳にはいかないんだ――――
と、セトはそう言って。

クー・フーリンを、強く睨んだ。

「……」

それを受けて、クー・フーリンはしばしの間、沈黙を返していたが――――やがて、ゆっくりと口を開きながら、

「…それは、私も同じだ」

と言った。

「私の主である、ベル・デル様もまた――――現在は、『呪いの鎖』で冥府に繋がれているが為に、自由に戦う事が出来ず、その『強さ』を証明する事が出来ない。故に――――私もまた、決して、貴殿に負ける事は出来んのだ。私は、ベル・デル様こそが、ベル神の中で――否、この世で『最強』の存在であると信じている。だが、今のあの方には、それを証明する術（すべ）がない。ならば、私が勝ち続ける事で、あのお方が最強であると証明するしかないだろうよ」

「この世で最強なのは、『先輩』だ」

セトが言う。

その台詞に対して、間髪入れずに、

「違うな。『ベル・デル』様こそが最強だ」

と、クー・フーリンが言った。

そしてお互いに、クックと笑う。

「どうやら俺達って、似た者同士みたいだな」

「ああ、そうだな」

やがて――2人はほぼ同時に、それぞれに構える。

クー・フーリンは、最初の時と同じように、手に持った雷の剣の切っ先を地面へと向けると、セトに対して半身になり、軸となる左足に体重をかけ、僅かに膝を落とす。

対するセトはと言うと――こちらは、あろうことか右腕を切り落とされている為、最初の時と同じように構える事は出来ない。

クー・フーリンと同じように、相手から見て半身になるように体勢を整え、左手の『マルアーク』を逆手に持つと、それを自分の目線と同じ高さにまで上げ、刃が地面と水平になるように構える。

「だが――あえて、もう一度言わせて貰おう、イザナギ殿」

クー・フーリンが言う。

「どう考えても、この状況から勝つことなど、貴殿には不可能だ。片腕もなく、そしてペルソナも使えない――そんな状態から、見事に形成逆転してみせるなど、『死神に魅入られた青色』にも、そして藤堂尚也にも不可能だ」

「……藤堂尚也、ねぇ――――」

そう言えば――――と、ふと、セトは思った。

この悪魔はつい先程、藤堂尚也というペルソナ使いがまだ生きていて、しかも、この封鎖に紛れ込んでいると言っていたが――――それは一体、どういう事なのだろう、と。

（――――まあ、いいか）

そんな事は（余裕さえあれば）この勝負が終わった後に、ゆっくりと聞く事にしよう。

果たして、セトは思考を切り替えると、

「勝ち目がない、だって？　いやいや、そうとも限らねえぜ、クー・フーリン――――こうしてお前とくっちゃべってる間に、俺は1つだけ、妙案を思い付いた」

と、言った。

「妙案……だと？」

「ああ。と言っても、もう、今の俺には、この案以外でお前に勝つ方法が思い付かない――――もし、これが失敗したその時は、冗談抜きで、俺が死ぬ時だろうな。でも、例えそれ程のリスクがあろうとも、全てをかけてもいいと思える程の魅力が――――この案には、ある」

「ほう、大した自信だ。では、見せて貰おうか、その『妙案』とや

らを」

「言われなくとも――そうしてやるさ」

ピリッ、と。

そのやり取りと共に、場の空気に立ち込める緊張感が、更に高まったかのように、思えた。

「恐らく、一瞬で決着がつくだろう」

クー・フーリンが言う。

「当然、俺の勝利でな」

セトが言う。

「否、私の勝利でだ」

「おいおい、おいおい、おいおいおいおいおいおい、おい。言ってくれじゃねえかよ――ったく」

殺れ殺れだぜ、と。

そう言って――セトは、一気に駆け出した。

瞬時に、クー・フーリンの剣の間合いの中にまで入ってくるのかと思いきや――その直前で、横に大きく跳ねる。

「むっ……!?」

1度だけではない。

右に、左に、上に、下に、前に、後ろに――とにかくセトは、やたらめったらに、クー・フーリンの周囲を、全速力で駆け回り、縦横無尽に跳び跳ねた。

「……」

しかし――そんなセトの動きを見つめるクー・フーリンの視線は、実に冷ややかなものだった。

この時、既に彼は、セトの狙いが何であるのかを悟っていたのだ。

恐らくセトは、激しく動き回る事で、わざとこちらの攻撃を誘い、その後に出来た『隙』を突いて、反撃をするつもりなのだろう――と。

確かに、現在のセトのコンディションを考えれば、その案は決して悪くはないだろう――だが、クー・フーリンにしてみれば、それは何とも、正視するに耐えない悪あがきに見えて仕方なかった。

なぜならその案は、こうして相手がそれに気付いてしまった以上、全く意味を成さないものになるからだ。

クー・フーリンの考えは――セトの考えの先を行っていた。

「だらあああああああああああっ！！」

やがて、セトは遂に、最速の動きで、クー・フーリンの元へと突

貫する。

「ぐっ……！」

クー・フーリンは、如何にもセトの動きに対して慌てているかのように、小さい呻き声を口から漏らすと、そのまま、突っ込んでくるセト目掛けて、『妖花烈風』を繰り出す。

しかし、そこそこに手を抜いて――だ。

セトが思い付いた『妙案』とやらが、クー・フーリンが考えている通りのものならば、セトはきっと右か、左か、或いは上などの――とにかく、自分の視界の外側から、こちらの『隙』を突いてくるに違いない、とクー・フーリンは考えたのだ。

だからこそ。

彼は――あえて手を抜いた攻撃をする事で、わざと隙を作ったのだ。

慎重に、かつ、自然に。

相手（セト）を誘い込む為に。

隙を――作った。

そして、クー・フーリンは、攻撃を放つのとほぼ同時に、自分の視界の外へと、意識を向ける。

（さあ、どこから来る？）

右か？　左か？　それとも上か？

だが。

セトは――――その、どの方向からも、攻撃してはこなかった。

「……っ！？」

クー・フーリンは一瞬の内に、両の目を全ての方向へと向けたが、しかし――――右にも、左にも、上にも、こちらがわざと作った隙に突っ込んでこようとするセトの姿は、全くなかった。

（馬鹿な…？　一体、どこにいる！？）

だが。

次の瞬間。

クー・フーリンは、全てを理解した。

（ま…、まさかっ…！）

いや――――この状況で、『まさか』はない！

「な……っ、あっ、あ！？」

クー・フーリンの口から、驚愕の声が上がる。

なぜなら、セトは、クー・フーリンの右からでも、左からでも、

または上からでもなく――――何と、彼の真っ正面から突っ込んできたからだ。

半分が血で染まっているその顔には、ニヒルな笑みが浮かんでいた。

（いや…、待て…！）

そこで、クー・フーリンは、この状況の裏に隠された、ある事実に気づく。

先程、彼は、真っ正面から突貫してきたセトに対し、『妖花烈風』を放った。

――――にも関わらず、セトは、攻撃を放った後である今になっても、まだ、真っ正面から突っ込んできている。

と言うことは。

つまり。

「ま――――まさか、イザナギ殿！　貴殿は、もしや！」

「ああ、如何にも、その『もしや』だぜ。お前が俺の考えを読むであろう事を、俺は読んでいた」

セトが言う。

「だから俺は――――あえて、お前の攻撃をかわさなかった」

「……っ！！」

無論。

そんな事は――――クー・フーリンは、言われるまでもなく、分かっていた。

なぜなら。

今の、目の前にいるセトには――――右腕どころか、左腕さえもなかったからだ。

セトは――――最初から、クー・フーリンの『妖花烈風』を避けるつもりなど、毛頭なかった。

クー・フーリンがこちらの考えを読み――――わざと手を抜いた攻撃をするであろう事を、彼は見抜いていたからだ。

否、と言うよりはセトの方がクー・フーリンに、そうするように仕向けたと言った方が、適切かもしれないが。

「い、イザナギ殿、もしや貴殿は、自らの左腕を――――？」

「ああ、そうだ」

今や、クー・フーリンとの距離を、限界まで詰めたセトが言う。

「避けないとは言っても、防御ぐらいはしなきゃ、妙案以前に、俺が死んじまうからな――――だから、しょうがねえ。クー・フーリン――――俺の左腕も、お前にくれてやるよ」

「ぐっ……！！」

そう。

セトの左腕は現在、クー・フーリンの『妖花烈風』を防いだ事で、右腕と同じように、切断されていた。

これこそが――――セトの狙いだった。

先程、『セトはクー・フーリンの攻撃を避けるつもりはなかった』、という風な事を述べたが、更にもう1つ付け加えるとするならば、そもそも彼は、今の自分が、クー・フーリン相手に無傷で勝つ事など、出来る訳がない、と、潔く認めていたのだ。

ただでさえ神速の攻撃速度を持つクー・フーリンに対し、片腕とペルソナを失ったとあれば、そう考えるのが普通だろう。

だからこそ、彼は、それとは全く逆の発想をした。

つまり。

無傷で勝つ事が出来ないのならば――――傷を負ってでも勝てばいい、と。

そして、彼は。

残り1本となった腕――――つまりは、左腕さえも犠牲にする事で、クー・フーリンの間近へと接近する事に、成功していた。

それは、近距離――――という言葉では、とても足りない。超近距離だ。

「だ、だが――――それもまた、無駄な足掻きだ！　イザナギ殿！　確かに、これで私の間近へと接近する事は出来ただろう――――しかし！　その為に、残り1本の腕を犠牲にした今の貴殿には、もはや、ここから私に攻撃する手段など、残ってはいまい！」

「いーや」

確実に的を射ているかと思われた、クー・フーリンの指摘を聞いても、セトは、全く慌てた様子を見せなかった。

「よく見ろよ、クー・フーリン――――両腕を失い、ペルソナさえも使えない俺だが、そんな俺にもまだ、武器が2つも残ってるじゃねえか」

「……っ！！」

つまり。

『攻撃』とは、何も、ここまでの戦いでセトが行ってきた、『剣で』、『斬る』。『ペルソナを』、『喚び出す』――――というものだけではあるまい、という事だ。

「『足で』、『蹴る』っていうのも、立派な『攻撃』の1つだ――――と言うことはつまり、『足』もまた、時と場合によっては、立派な『武器』になるって事だよ！」

そのように叫ぶ、セトの両足には――――いつの間にか、奇妙な外

見の具足が履かれていた。

脛を覆う部分は、赤と黒との斑模様が施された厚革で覆われており――どのような意味があるのか――そこには白い縄がグルグルに巻かれている。肝心の足首より下の部分は鉄製で、毎日磨き抜かれているかの如く、美しい銀色の光沢を放っていた。

花村陽介と同じく、セトの高校時代の友人であり、ペルソナ使いでもある、里中千枝という女性が、かつて使っていた具足――『モーセの奇跡』。

それが、今――セトの両足に、しっかりと装着されていた。

どこからともなく、これまでに影も形も見せなかった武器を取り出すというセトの所業――しかし、これに関しては、特にクー・フーリンは驚かなかった。

何せこの男は、あの『女神』の力を取り込んでいるのだ。別の時空間に予め用意していた武器を瞬時に取り出し、装備する事ぐらいは、平気の平座でやってのけるだろう。

むしろ、クー・フーリンは――そこまでして勝とうとするセトの気合いに、そして気概に、驚いていた。

「き、貴様――死ぬのが怖くないのか！」

「ああ！？　怖くねーよ！　そんなもん！　本当に怖いのは――自分が負ける事で、『先輩』の名を貶る事、ただそれだけだ！！」

「ぬ、う、ううっ…！！」

ほんの少し前の事だが、セトはこう言った。

――『知らねぇのか？俺はあくまで【ペルソナ使い】であって、【剣士】じゃねえ。例え片腕をもがれようが――【心（ペルソナ）】さえ無傷なら、俺は何度だって戦える』

そう、或いは、この言葉を聞いた時から、クー・フーリンは既に、無意識の内に、セトの『力の本質』を見誤っていたのかもしれない。

彼の真の実力とは――つまり、『ペルソナ』を使ってこそ、発揮されるのだと。

だが、それは決して間違いではなくとも、真実を突いてはいなかった。

セトの本当の力の出所とは、その身体能力でも、ペルソナでもない。

その、揺るぎなき――『先輩』に対する『忠誠心』だったのだ。

――故に！　片腕を切り落とし、ペルソナを封じる事が出来たぐらいで――その程度のことで、クー・フーリンは、安心するべきではなかったのだ！

迂闊だった。と、クー・フーリンは思わずにはいられなかった。

その純粋なまでの『忠誠心』が、一体どれだけの力を生み出すのか――『ベル・デル』に忠を尽くす自分は、それをよく知っているというのに！

「よ、『妖花――――！」

クー・フーリンは――――あまりにも、セトとの距離が近過ぎるが故に、振ることさえままならない雷の剣を、それでも無理矢理、体を後ろに傾けつつ、振ろうとする。

――――が、

「遅ぇっ！！」

と。

そんな声と共に発せられた、セトの回し蹴りによって、その振ろうとした雷の剣は、上空へと打ち上げられた。

そうすれば、必然、それにつられて、剣を握っていた両手も上がり――――。

もはや、ほぼ『万歳』に近い、クー・フーリンのその体勢は、相対するセトにしてみれば――――これ以上ない、『隙』だった。

先程のように、クー・フーリンが自分でわざと作ったような『隙』とは違う――――セトの予想外の攻撃によって、予想外に出来た、これ以上ない『隙』だった。

「……っ！」

無論、既に述べてある通り、セトの『マルアーク』とは違い、クー・フーリンの剣は、彼の魔力で形成された物なので、わざわざ取

りに行こうとしなくても、その場で魔力を集中させて、再び作り出せばいいだけの話かもしれないが――しかし！

クー・フーリンがそうするよりも。

やはり――セトが次の攻撃を繰り出す方が、遥かに速かった。

「言っとくが――覚悟しといた方がいいぜ、クー・フーリン。何せ、俺の女友達は、今までに何百体ものシャドウを、この蹴り1発で星にしてきたんだから、よ――！」

里中千枝。

人智を越えた脚り技を持つペルソナ使い。

彼女のその一撃必殺の蹴り技には、高校時代に、セトも何度も助けられたものだ。

そしてセトは、その技を。

里中千枝直伝の、天下無双の蹴脚術（しゅうきゃく）を。

一気に――繰り出す。

セトは、先程の回し蹴りの遠心力を利用し、そのまま二段回し蹴りへと移行させ、さながら大砲のように左足を突き出しながら――あらん限りの、喉が潰れんばかりの雄叫びを上げた。

「どーーーーーーーーーーんっっ！！」

◆　◆

ドーム球場前の戦い。

ペルソナ使い、セト　対　魔剣士、クー・フーリン。

これにて――――決着。

2nd Day『ドーム球場前のバトル（2）―5』

――池袋、東洋アンズ前。

「……おっと、生きてたか」

地上よりおよそ十メートルほど離れた上空にて、脇にビフロンズを抱えているカラステングは――そんな風に呟いた。

背中に生えた鴉（からす）のような翼を、空中で羽ばたかせている彼の視線は現在、先程、仲間のビフロンズが放った『マハラギ』が着弾した場所へと向いていた。

その視線の先には現在、二つの影があった。

『マハラギ』によって舞い上がった大量の埃が邪魔をして、少々見分けがつきにくいが――それでも、人間のそれを遥かに凌駕した視力を持つカラステングには、その二つの影の正体を、ハッキリと認識する事ができた。

一人は、白い帽子を被り、袖の短い、青い衣服を着た、猫目の少年。

もう一人は、奇妙な形をした耳飾（具体的に言うと、まるで猫の耳の形のような）をつけた、青髪の少年である。

確か――と、カラステングは、先程までの戦いにおいて入手した幾つかの情報を、脳内から検索する。

確か、前者の方は『アツロウ』と呼ばれ、後者の方は『ジュン』と呼ばれていた筈だ。

人間というのは悪魔と違い、大多数が自らの名前を『姓』と『名』という種類で成り立たせている筈だから、おそらく、この二つの呼び方は、彼らの仲間内での呼称なのだろう、とカラステングは推測した。

――もっとも、これから殺す人間の名前など、カラステングにとっては、果てしなくどうでもいい事なのだが。

ビフロンズが『マハラギ』を放つまでは、この中にあともう一人――正確には、一体と呼ぶべきなのかもしれないが、それはさておき――『ネコマタ』という、この二人の人間と主従契約を交わしている悪魔がいた筈だが、どうやら、どちらかの人間が既に、例の『コンプ』とかいう機械に戻した後のようだった。

まあ、あの悪魔では、現在、空高く舞い上がっている自分達に対し有効な攻撃手段など持ち合わせていないだろうから、あの人間達にしてみれば、今となっては、ネコマタは足手まといにしかならないのだろう。

だからこそ、あえて戦線離脱させたのかもしれない。

懸命な判断だ――と、カラステングは思った。

「危なかった……」

と、地上にいる、『ジュン』という人間が口を開いた。彼は現在、

それまで上に向けていた右の手の平を、ゆっくりと元の位置に下ろしているところだった。

それを見ただけでカラステングは、この人間が一体どのようにして、ビフロンズの『マハラギ』を防いでみせたのか、大体の予想がついた。

大方――『氷の乱舞』か『炎の乱舞』のどちらかで、ビフロンズの魔法を、途中で相殺させたのだろう。

すると、そんなカラステングの思考を読み取ったのか、彼の脇で抱えられているビフロンズが、

「……相性的に考えれば、恐らく、『炎の乱舞』の方だろうな」

と言った。

それについては、カラステングも同意見だった。

ついぞ数分ほど前に、この『ジュン』という人間は、ビフロンズの『マハラギ』を、『氷の乱舞』で迎え撃とうとして、見事に失敗していたが――それは何も、彼の魔法の威力が弱かったからという訳ではない。

たった今、ビフロンズが示唆したように、『相性』が悪かったのだ。何せ、『氷の乱舞』は、文字通り『氷』による攻撃であり、『マハラギ』は『炎』による攻撃なのだから――ここまで言えば、もはや詳しい説明は不要だろう。

故に今回、『氷の乱舞』ではなく、『炎の乱舞』を用いた事によ

るジュンの防御策は、何とか成功した訳だ――目には目を、とは良よく言ったものだが、淳はビフロンズの『炎』による魔法に対し、同じ『炎』による魔法で対抗したのだ。結果――淳はからくも、自分とアツロウが焼死するのを防ぐ事ができたのである。

そんな事をカラステングが考えていると、地上にいる、例の『ジュン』という人間が、隣の『アツロウ』という人間に対し、

「アツロウ！　大丈夫か！？」

と言った。

「ああ――何とかな」

言って――衣服についた大量の煤を、パッパと払いながら、アツロウが上空にいるカラステング達に向けて、キッと敵意のこもった視線を向ける。

だがその視線は、同時に、どうすればあれだけ高い位置にいる相手に対して、攻撃を当てる事が出来るのか――そんな事を、必死に考えているようにも見えた。淳にしても、似たり寄ったりの視線をカラステング達へと向けている。

そして。

そんな二人のさまを、（今のところは）安全圏である上空から、カラステングはジッと観察していた。

否、厳密には、この時の彼の視線は、その二人の人間両方にではなく――有里淳、ただ一人の人間のみに向いていた。

半端な長さの袖の黒い衣服は、先程のビフロンズの『マハラギ』による被害を、多少被ったのか――所々が焼けており、そこの部分からだけ、彼の鍛え上げられた肉体が露になっている。

決して大柄ではないが（むしろ小柄だ）、だからといって虚弱さなど微塵も感じさせない、細身ながらも筋肉質な体。

すらりと伸びた手足。

これまでの戦闘において、体中に大小様々な傷を負ってはいるものの、その全てが、今となっては殆ど完治しているように見える。

それでいて、息もまったく乱れてはいない――それらの観察結果を経て、カラステングは素直に感心した。どこをとっても文句がない。

ちなみに、念のために言っておくが――普段から、人間とは虚弱で貧弱で脆弱であり、悪魔に一方的に駆逐されるだけの存在である、と声高に主張しているカラステングにしてみれば、淳に対して下したこの評価は、非常に珍しいものである。

淳の年齢は十六であり、それは悪魔として長い月日を生きてきたカラステングにしてみれば、ほんの数日にも満たない程度の期間にしか感じられないが――にも関わらず、この有里淳という人間が、その期間には不釣合いな程に、自らの体を鍛え上げているであろう事は、容易に推測できた。

彼の母親の知り合いである、桐条美鶴や真田明彦という人間の指導によって、かなりの高みにまで鍛錬されたその肉体は、さながら、

一つの芸術品のようだ――カラステングでさえ、思わず、ほんの僅かな間ではあるが――見蕩れてしまう程の。

「……惜しいな」

だからこそ、カラステングは思わず、柄にもない、そんな言葉を呟いた。それを聞いたビフロンズが、「何がだ？」と彼に尋ねる。

「いや、あの青い髪のガキの事だ――アイツ、人間の器に留まっているには、少し惜しい、と、そう思ってな」

カラステングが言う。それに対してビフロンズは、「ああ」と得心がいったように頷いた。

「確かに――たかが人間と思って、侮ってはいたが……中々どうして、あの少年の動きはずば抜けている。野生的ではあるが――かといって、後先を考えない獣という訳でもない。先程など、ゴズキの決して細くはない首を、たったの一蹴りでへし折ってたぐらいだしな」

「……いっその事、仲間に引き入れてみるか？俺達――ベル・デル様の配下の中でも、『幹部』の地位に就いてる悪魔――の特権で、よ」

ほんの思いつきだという口調で、カラステングが言った。しかしビフロンズは至って真面目な口調で、

「いや、それは無理だろうな」

と答えた。

「あの少年との出会いが、偶然、その辺りの道端で出会った――というものであれば、或いはその選択肢もあったかもしれんが、残念ながら我々は今、ベル・デル様直々の命令により、彼らが持つ『コンプ』なる機械を強奪せよ、という極めて重要な任務を与えられている。ならばそんな状況で、予測のつかん不確定要素を、軽率に組み込むべきではない」

フン、とビフロンズは鼻を鳴らした。

「全く……かわいそうな奴らよ……。ここで我等に出会ったのが運のつきだ」

「だな」

――と。

二体がそんな会話を交わしていると、地上にいる淳が、自分のＣＯＭＰから新たに別の仲魔を召喚した。

鬼女『リリム』――淳が以前、赤坂トンネルでの戦いにおいても参戦させていた、手足が丸々露出している白いタイツに、青い長髪、背中から蝙蝠（こうもり）のような大きな羽を生やした悪魔――である。

もう一人の人間、アツロウはと言うと、こちらもまた自分のＣＯＭＰから、別の仲魔を召喚していた。

霊鳥『モー・ショボー』――日本の古い、赤い民族衣装のようなものに身を包み、背中から鷲のそれに似た翼を生やした、少女のような外見をした悪魔――である。

そして次の瞬間、それぞれの悪魔は、淳、そしてアツロウの体を後ろから抱えると、そのまま、カラステング達が羽ばたいている場所と同じ高さにまで上昇した。

二体共が、背中に羽を生やした悪魔であるが故に、それは十分に可能である――なるほど、とカラステングは思った。仲魔の力を借りて、空中戦で決着をつけるつもりか、と。

恐らく、この作戦を立案したのは、あの『ジュン』という少年だろう――どうやら、状況に応じて、頭を臨機応変に働かせる能力にも長けているらしい。

だからこそ、カラステングは余計に、やっぱり惜しいな――と、本当に柄にもない事を考えてしまった。

まあいい。

ありていな言葉を使うなら、巡り合わせが悪かった、と言うしかないだろう。

だったら、さっさと考えを切り替えて、さっさとこの少年達を殺し、さっさと『コンプ』を手に入れ、さっさとこの任務を終わらせてしまおう――と。

カラステングはそんな風に考えて、にんまりと、心底邪悪そうに、笑った。

◆　◆

――水道橋、東京ドーム前。

「……」

セトはそこの地面に、大の字になって横たわっていた。否、彼は現在、両の腕を切断されている為、正確には『人』の字になっていると表現した方が正確かもしれないが――それはともかく。

重要なのは、今、この場のにいるのは彼1人だけであり、先程まで彼と死闘を繰り広げていた相手――不死の王、『ベル・デル』の配下である悪魔、『クー・フーリン』の姿がどこにも見えない、という事だ。

「……つーか、またかよ」

思わず、セトはそう呟く。

「今朝のベリトやゼブブの時といい、一日の内に、二回も相対した敵を逃すなんて……。どうやら、マジで俺、体がなまってるみたいだな……。最近、サボりがちだったからか？」

無論――実際には、セトが渾身の力で放った蹴脚（しゅうきゃく）を、まともに受けたのにも関わらず、クー・フーリンがからくも彼との戦いから戦線離脱できたのには、ちゃんとした理由がある。

しかも今回は、セトが『八艘飛び』で勝負を決めようとした時とは違い、クー・フーリンは鎧を纏っていなかった――にも関わらず、彼は何故、生き延びる事が出来たのか？

その最大の理由は、セトが蹴りを放つ前に、彼は、両腕を切り落とされていた――という事にあった。

もしかしたらここで、『使用した攻撃は蹴り技なのに、何故、ここで両腕を失ったことが関係してくるのか？』という疑問がどこからか上がるかもしれないが、とんでもない。

少しでも格闘技――否、格闘技に限らず、何かしらのスポーツを嗜んでいる者ならば分かるかもしれないが、人間というのは本来、腕の一本だけでも失くしただけで、体のバランスを殆ど保てなくなってしまうものなのだ。

人間は、この世に生を受け、四本足のよちよち歩きから、二本足で歩けるようになるまでに、かなりの時間を費やす（個人差はあるだろうが、平均で、およそ一年ほど掛かると言われている）。

とはいえ、大半の人間は、それを物心がつくよりも前に完遂してしまうので、殆ど覚えていないだろうが――とにかく、二本足で体を支えるというのは、なまじそれだけの時間と努力を必要とするだけに、とても繊細な作業でもあるのだ。

故に。

そう考えれば、先程の戦いにおいて、クー・フーリンに蹴り技を繰り出した時の、セトの体を支える為のバランスがかなり不安定な

ものであったであろう事は、想像に難くない。

それでなくとも、『脚で』『蹴る』という動作は本来、あまり実戦向きではないのだ――何せ、攻撃する瞬間には、必然的に、片足立ちになってしまうのだから、体のバランスをとるのが難しいのである。

勿論あの状況では、セトにそれ以外の攻撃手段はなかったのだろうから、その方法を選択した彼を責めることなど誰にも出来ないだろうが――それはともかく。

人間の足の力は、腕の三倍近くある――という定説は、それはそれで真実なのだろうが、だからと言って、（瞬間的とは言え）片足だけで全体重を完全に支えることが出来る人間など、そうはいない。

それが両腕を失った状態でとなれば尚更だ。この時のセトの立場が彼以外の人間だったら、おそらく、ロクに立ち上がることも出来なかっただろう。

彼だからこそ。

『人類最強のペルソナ使い』である、セトだからこそ――あそこまで戦えたのである。

「……やれやれだぜ」

やがて彼は、何とも気だるそうに、ゆっくりと上体を起こした。

こんな所で、いつまでも過ぎた事をうじうじと考えていても仕方ない。先ずは切断された両腕を何とかして、そのすぐ後にでも、こ

ことは別の戦いへと向かったカイドーの後を追うべきだ――と、彼が考えたその時。

その時だった。

『……随分、苦戦なされたようですね』

――と、どこからともなく、そんな神秘的な女性の声が聞こえたのは。

最初、セトはその声には応じず、視線だけを声がしたであろう方向にむけると――果たせるかな、そこには、1人の女性の姿があった。

夏という季節を考慮すれば、彼女の服装は些か暑そうに見えた。二の腕こそ露出しているものの、それ以外の殆どの部分が銅褐色（どうかっしょく）の鎧で覆われているし、下には、踝あたりまで丈のあるスカート（のようなもの）を履いている。肌は薄い緑色で、ウェーブのかかった青い髪を、後ろで束ねている。両耳には十字架のイヤリングをつけており――そして、背中からは、まるで『天使』のような、白い大きな翼が生えていた。

――否、『ような』ではなく、彼女は正真正銘の『天使』なのだ。セトと同じく、『神前の八天使』の一員であり、名を『ガブリエル』という。

しかし、ここまでの解説からも分かる通り――彼女は、同じ天使である『レミエル』とは違い、人間の体を借りてではなく、直接、生身のままでこの人間界へと降りて来ていた。

「……何で、お前がこんな所にいるんだ？　というか、レミエルみたいに、誰か人間と契約してないのか？」

数年前、セトが正式に『神』の配下になった際、天使達の中では、いくら、彼が『ペルソナ使い』としてズバ抜けた実力を持っているとは言え、本質的には『人間』である彼を『天使』の一員にすることに関して、随分と多くの賛否両論が交わされたものだ。

ガブリエルはレミエルと同じように、その時にセトを是非、自分達の仲間にするべきだ、と強く主張した数少ない天使の内の一人である。

セトは本来、例えそれが『神』や『メタトロン』から直々に与えられた任務であろうとも、天使とはあまり行動を共にはしないのだが、このガブリエルとだけは例外的に、レミエルと同じようにプライベートでの交流を持っていた。

『人間の体など、私には必要ありません』

ガブリエルが言う。その言葉尻や表情から、『人間』という種族に対して、少なからず偏見を持っているであろう事が伺えた。

『どうせ、またすぐに天界に戻りますから……。今回は、傷ついた貴方を治療しにきたのです』

「え……？　という事はお前、どっかから俺の戦いを見てたのか？」

キョロキョロと辺りを見渡しながら、セトが言う。

先程、クー・フーリンと戦っている最中にも、他に敵の悪魔がい

ないのかどうかを確かめる為に、一応、周りの気配を探ってはいたのだが……。ガブリエルが潜んでいる気配など、全く感じ取れなかった。

そんな様子のセトに対して、ガブリエルは、

『いえ、見ていたのでは私ではなく、【神】です。あの方が天界からこの地上を見下ろしていた時、たまたま貴方が酷く傷ついているのが見えたので、すぐに、その時近くにいた私に、貴方の治療をしに行け、と、そう仰ったのです』

「……ふぅん……」

たまたま、ねえ……と、セトはガブリエルの言葉に対して、少なからず疑問を抱いた。

もしかしたら実際には、天界で自分と話した後、『神』は自分の事を見張っていたのではないか――と。

『まあ、それはともかく』

無理矢理、それに関する話題を打ち切るように、ガブリエルが言う。

『早速、貴方の怪我の方の治療を開始しましょう。……切断された腕はどこですか？』

「ああ、あそこだ」

セトは、今座っている場所より、少し離れた位置に放置されてい

る、自分の右腕と左腕の方に向けて、顎をしゃくった。

元は自分の体の一部だった両腕は、既に中に入っていた血をあらかた失い、青白くなっている為、セトは思わず、道端で車に轢かれた猫を連想してしまった。

ガブリエルがヒョイッと指を動かすと、二本の腕が、まるでそれぞれが意思を持っているかのように、彼女の手の中に飛んできた。

ガブリエルは一旦、左腕を下の地面に置くと、右腕の方を自分の目の高さにまで上げ、その切断面をジロジロと見つめ始める。あまりにもジロジロと観察している為、それを傍から見ていたセトは何となく気恥ずかしくなった。

『ふむ……見事な切れ味ですね。流石は、魔剣士クー・フーリンと言ったところでしょうか。これならば、簡単な治癒魔法で難なく元通りにくっつくでしょう……。では、イザナギ、一旦、右肩の筋肉の力を緩めて下さい。先ずは右腕からです』

「了解、女神様」

セトはガブリエルに聞こえない程度の声量で、そのように呟くと、言われた通りに、右肩周りの筋肉の力を緩めた。

途端、筋肉が収縮されていたことにより、今までせき止められていた血液が、一気に外へと噴き出す。それを見たガブリエルは、一度眉をひそめた後、

『……では、始めましょう』

と言った。

ガブリエルは切断された右腕を、セトの肩へと慎重に近づけた後、やがて、噴き出している血液に栓をするかのように、ピタッとくっつけた。

『グチュッ』という不快な音が、接合面から発せられるが、しかしガブリエルは、一切表情を変えずに、小声で『ディアラハン』、と唱えた。

次には、右腕と肩の結合部分を、ぼうっと優しい青い光が包んだかと思うと、やがてセトの右腕は、元のように彼の肩にくっついていた。

結合した部分が、ミミズの節のようなピンク色に変色していたが、それ以外は、ほぼ完璧に切断されるよりも前の上体に戻されていた。

『動かしてみた下さい』

ガブリエルが言う。セトは言われた通りに、軽く握りこむように指先を動かして見せた。

まるで痙攣しているかのように、指先はプルプルと震えてはいたものの、それだけでセトは、後数分もすれば、何の問題もなく元通りに動かせるようになるに違いないと確信した。

「……オーケイ、流石だ。やっぱ、回復魔法を使わせたら、お前の右に出る奴はいねえな。いつ見ても惚れ惚れするぜ」

確かに、『ディアラハン』は回復系統に属する魔法の中でも、か

なり高等な部類に入るが――それでも、一度切断された腕を、ここまで見事に治療できる使い手となると（無論、そこにはセトの驚異的な新陳代射能力も、少なからず関係しているのだろうが）、そうはいないだろう。

ガブリエルはセトの褒め言葉に対し、一瞬、ほんのりと顔を赤く染めたが、すぐに気を取り直すと、『そんな事、奥さんに聞かれない方がいいですよ』、と言った。

『次は左腕です……。今度は、自分でくっつけて下さい』

「合点承知」

セトは、先程ガブリエルがやったように、自らの左腕を、肩の切断面に押し当てた。そこへ、ガブリエルが再び『ディアラハン』と唱えると、たちまち、左腕も元のようにセトの体の一部へと戻った。

『少々傷痕は残っていますが……まあ、貴方ならば、それさえもしばらくすれば元通りになるでしょう』

「いやー、ありがとよガブリエル。知ってると思うけど、俺、実は今、ちょっとペルソナが使えなくてさ。ほとほと困ってたところなんだよ。助かったぜ」

『別にこの程度、礼には及びません。人間とは言え、貴方もまた、私と同じように、【神】の配下なのですから。……ああそれと、分かってるとは思いますが、腕の神経伝達機能が完全に元通りになるまで、無理に動かそうとしないで下さい』

「へいへい」

そう言いながらも、セトはクイッ、クイッ、と両腕を何度も動かしていた。とても、今までその腕を切断されていた者の動かし方とは思えない。いくらガブリエルの回復魔法がずば抜けているとは言え、これは異常なことである。

セト――彼は最早、本物の怪物と言ってもよかった。

「ところでガブリエル、お前、有里淳（ありさとじゅん）って名前は知ってるか？」

まるで世間話でもするかのような口調で、セトが言う。それに対してガブリエルは、

『ええ……当然、知ってますよ。私に限らず、今や、全ての天使がその子の存在に気付いています。つい数時間ほど前に、【メタトロン】様が直々に、その事を皆に伝えましたからね……。そのせいで、天界は今、上から下への大騒ぎです。正直、私にしてもまだ、【彼】に息子がいたなどとは、とても信じられないぐらいですし……』

と言った。

「そうか……まあ、そうだろうな……」

その後、セトは何かを考え込むかのように、しばらく口を閉ざしていたかと思うと、やがておもむろに口を開いた。

「……ガブリエル」

『はい？』

ガブリエルは、セトの口調が、急に真剣味を帯びたことに気付いた。

「悪いんだけどさ、お前ちょっと、天界から『聖杯』を取ってきてくれるか？」

セトの言葉を受けて、ガブリエルはつかの間、衝撃を受けたかのように、大きく目を見開くと、

『【聖杯】……【聖杯ルシファー】ですか？』

と、驚きに満ちた声を上げた。

そんなガブリエルとは正反対な様子で、セトは、如何にも落ち着き払った声で、

「当たり前だろ？　他に何がある」

と言う。

――『聖杯ルシファー』。

かつて、この世に存在する全ての生物に『死』をもたらすと言われていた、最悪の存在――『ニュクス』から世界を救った、とあるペルソナ使いが使っていたとされる、伝説の魔剣。

『……何を言い出すんです？　アレに一体、何が封じられているのか、知らない訳ではないでしょう？　【彼】があの剣に施した封印も、年々弱まってきています。もし、ちょっとした弾みで封印が解かれて、【アレ】が出てきたら……！』

「とは言え」

ガブリエルの言葉など、まるで聞こえないとでも言うかのように、セトが話を続ける。

「……あの剣は、元々は先輩の物だ。それなら、いずれは実の息子である淳に預けるのが筋ってもんだろ？」

『確かにそうかもしれませんが……それでもやはり、今渡すのは、些か早計すぎます！　せめて、あの子が『ペルソナ使い』に目覚めてからにしたらどうです？　武器を使うのは、言うまでもなくその持ち主ですが――時に、強大過ぎる武器は、逆に持ち主を傷つける事もあります。大体――』

そこまで言うと、ガブリエルは一旦言葉を切り、セトとまっすぐ視線を合わせた。セトはそんな彼女の視線を、全く怯むことなく、静かに見つめ返している。やがて再び、ガブリエルが口を開いた。

『――大体、以前、貴方の娘さんが、貴方の武器である【十握剣（とおかのつるぎ）】を少し使おうとしただけで、一体何が起こったのか……忘れた訳ではないでしょう？』

「……」

セトは、そんなガブリエルの言葉に対して、一体どのように言い返せばいいのか、咄嗟に思いつかなかった。

それは――その出来事は、彼にしても出来れば忘れてしまいたい、苦い思い出だったからだ。

あの事件がきっかけで、セトの一人娘は『ペルソナ使い』に目覚めてしまい、そしてもう二度と――『普通の世界』には戻れなくなってしまったのだから。

「ああ……でも、俺はこう思うんだ」

何とか気を取り直して、セトが言う。

「『先輩』が――俺が十七歳の頃、八十稲羽に引っ越す前にあの剣を俺に預けたのは……もしかしたら俺と淳が、いずれこうして出会うのを見越していたからなんじゃないかって……」

『……』

ガブリエルは相変わらず、セトと真っ向から視線を合わせたまま、黙って彼の話を聞いている。

「だとしたら、この剣を託し、そして……『あの技』を淳に教える事が、『先輩』の意思なんじゃないかと、俺は思う」

『そうでしょうか……？いくら有里淳が【彼】の息子だとは言え、【あの技】を覚えるのは不可能かと思いますが……。そもそも、あんな技が果たして、あの子に必要なのですか？』

「……」

今度は、セトが黙る番だった。

『それ以前にやはり、【聖杯ルシファー】を、まだ【ペルソナ使い】

にすら目覚めていない人間に渡すなど、言語道断です。あの剣に封印された【アレ】は、すぐに有里淳の心と体を乗っ取ろうとするでしょう。もしそうなってしまったら必然的に、彼に受け継がれているであろう【死神（デス）】もまた、この世に解き放たれてしまうでしょう……。もしもそうなってしまったら、それこそ【彼】の意志……否、遺志に反しますよ？』

「それだよ」

セトが言った。

『はい？』

「そもそも、『先輩』はどうして――淳の体に『死神（デス）』を遺したんだ？」

『……？　別に、意図的にそうした訳ではないでしょう？　有里淳に【死神（デス）】が遺伝したのは、殆ど不可抗力のようなものです。あれは、彼が愛する女性――名前は、確か……」

「『岳羽（たけば）ゆかり』だ」

セトが助け舟を出した。

『そう、確かそんな名前でしたね――つまり、有里淳に【死神（デス）】が遺伝したのは、【彼】がその、岳羽ゆかりとか言う女性と子供と作った時に……つまり……ええと……』

再び、言葉を途中で濁らすガブリエル。しかし今度はどうやら、何か言葉を忘れたからではなく、そこから先の説明を、どのように

表現すればいいのか分からないからのように見えた。

その為、彼女に代わってセトが、

「つまり、『先輩』が岳羽先輩を孕ませた時、同時に『死神(デス)』の因子まで伝染(うつ)っちまったのは仕方がないって言いたいんだろ？」

『ハッキリ言わないで下さい！』

若干顔を赤くしながら、ガブリエルが言う。しかしセトは、そんなガブリエルのリアクションなど、どこ吹く風といった様子だった。

「まあ、お前の言いたい事も分かる……。けどな、それでも『先輩』には、『子供を作らないまま死ぬ』って選択肢もあった筈なんだ。そうすれば、『先輩』が死ぬと同時に、その体の中にある『死神(デス)』も、永遠の眠りにつく筈だったんだから……。にも関わらず、それでも『先輩』が岳羽先輩に淳を身篭らせたのは、何でだと思う？」

『さあ……？』

ガブリエルは、そんな事など見当もつかないという様子だった。

『或いは単純に、愛する女性(ヒト)との間に、子宝を授かりたいという当然の願望があったからじゃないですか？』

「その子供に『死神(デス)』が遺伝すると分かっていながら、か？」

『だからそれは……貴方もさっき認めたではありませんか。不可抗力だって……』

「いや」

セトはその場で、首を小さく横に振った。

「俺は昔、特別課外活動部（S.E.E.S）の一員として、何度も『先輩』と一緒に死線を潜り抜けてきた……。だからこそ分かる。あの人は何の意味もなく、自分の息子にそんな『重荷』を背負わせるような人じゃない」

いよいよ、話の核心に迫ってきたらしく、これまでよりも更に、真剣な口調になるセト。

「もしかしたら……だけど。あの人は、何か重大な事実を知っていて、だからこそ、子供に『死神』が遺伝するのを承知で、死ぬ直前に子供を作ったのだとしたら……？」

セトが言う――そして、直後に考えた。

思えば――自分がまだ月光館学園の生徒だった頃、『先輩』はしょっちゅう、『将来は好きな女性（ヒト）との間に子供を作って、幸せになりたい』、とか、そんな事を言っていたような気がする。

セトはその言葉を、『好きな女性（ヒト）と幸せに暮らしたい』、という意味だと受け止めていたが――今考えればむしろ、その言葉の本当の意味は、『何としてでも子供を作りたい』、というものだったのではないか？

だとするならば――。

『考え過ぎではありませんか？いくら何でも』

やがて、ガブリエルが言った。

「……」

そんなガブリエルの言葉を悠然と聞き流しながら、セトはこの時、『ある事件』を思い出していた――そもそも、『先輩』が『死神（デス）』をその身に宿すことになったのは、『あの事件』が原因ではなかっただろうか？

セトがその事を口にすると、ガブリエルは、

『ああ……【ポートアイランド・インパクト】の事ですか？』

と言った。

『確かあの事件は、【彼】の妻である岳羽ゆかりの父親――――つまり、有里淳の祖父にあたる人物である――岳羽詠一郎（たけばえいいちろう）が、実験中の桐条グループに反旗を翻したのが原因でしたね』

「ああ、確かに、その説が一番有力だ」

どこか含むところがあるような口調で、セトが言う。そんなセトの言い方に気付いたガブリエルは、片方の眉を吊り上げると、次のように言った。

『有力も何も……それが【真実】でしょう？　確か貴方は、その現場に遺された、岳羽詠一郎のテープを見た筈では？』

「ああ、確かに見た」

今度のセトの口調には、どこかイライラしているかのような様子があった。

「だが――つい最近になって、俺は、あの事件の裏には、何かもう一つ、別の真実があったんじゃないかって疑うようになったんだ」

厳密に言えば、最近どころか、ほんの数分前に、先程、セトが戦っていた相手――クー・フーリンの言葉を聞いた時に、初めてこの考えが浮かんだのだが、セトはあえてそれを口にはしなかった。

いずれは、『神』や『メタトロン』といった、彼の『上司』にあたる人物に、その事を伝えなければならないだろうが――先ずは、自分の心の中でだけで、一度考えを整理しておきたい、と思ったからだ。

『別の――真実？』

ガブリエルが言う。

『何を言っているんですか？　【真実】とは、ただそこにそれ一つしか存在しないからこそ、【真実】というのですよ？』

「だったら、今までに隠されていた、真実の更に詳しい部分――とでも言い換えるさ。……って、まあ、そんな事はどうでもいいだろ。要するに、俺が言いたいのは……あの事件を引き起こした人間は、岳羽詠一郎だけじゃなかったんじゃないかって事だ」

『……はい？』

「……」

少しの間沈黙した後、セトは言った。

「きっと……岳羽詠一郎は、裏で誰かに操られてたに違いない」

『……っ！』

セトの言葉を受けて、ガブリエルはしばらく唖然としていたが、やがて静かに、

『……根拠は？』

と言った。

「まず第一に、俺が気になるのは、あの人――岳羽詠一郎が引き起こした事件のせいで、何人もの人間が――『先輩』の両親も含めて――死んだってことだ。でも、俺はまず、ここから既におかしいんじゃないかって思う。残念ながら俺は、岳羽詠一郎とは直接の面識がないが……。それでも、あの人が非常に優れた研究員で、かつ明晰な頭脳の持ち主だったって事ぐらいは知ってる。で、ここからが重要なんだが……あの人程の頭脳があれば、上手く立ち回って、あれ程たくさんの犠牲者を出さずに桐条グループの悪策（あくさく）を止めることも、或いは可能だったんじゃないのか？」

『……』

咄嗟に反論が思いつかないらしく、ガブリエルは黙って、セトの

推理に耳を傾けている。

「それに――あの事件で、アイギス先輩が『死神（デス）』を封印しようとした時に、そこにたまたま、幼かった頃の、気を失った『先輩』がいただなんて……少し、話が上手すぎると思わないか？もし、あの場に『先輩』が倒れていなかったら、負傷したアイギス先輩に、『死神（デス）』をどうにかする事は出来なかっただろう。……後、それだけじゃない。どうして『先輩』は、『死神（デス）』程のシャドウを体にぶち込まれたにも関わらず、それから約十年もの間、あの人の体には何事も起こらなかったんだ？　普通の人間だったら、あんなものを入れられただけで、その場でショック死してもおかしくない。……うん、そう考えるとやっぱり、あの事件はちょっと出来すぎてる。まるで……」

――まるで、あの事件は最初っから、先輩に『死神』を封印する為だけに引き起こされたものであるかのように――と、セトはそのように続けた。

『……貴方が言う、岳羽詠一郎を裏で操っていた人物の目的が、まさに【それ】だった――という事ですか？』

ガブリエルが言う。

「ああ、そうだ」

それに対して、如何にも自信満々に答えるセト。

『では……その人物とは？　私としては、そんな、桐条グループを丸ごと手玉に取れるような人間が、この世にいるとは思えませんが……』

「いや、1人だけいる」

顎に手をかけ、ガブリエルの前を行ったり来たりしながら、セトが言う。

『はい？』

「……」

『……では、聞きますが……それは一体、誰なんですか？』

「……」

セトはしばらくの間、心の中で何かを躊躇っている様子だったが、やがて、一旦深く息を吸い込むと、次のように言った。

「その昔『セベク・スキャンダル』を解決したペルソナ使い……『藤堂尚也』だ」

それを聞いた途端、ガブリエルは思わず、口からフッと小さく笑い声を漏らしていた。

『まさか……ありえませんよ。彼は、とうの昔に死んだ筈では？』

「ああ、だけどそれはあくまで噂で、誰かが実際に、ソイツが死ぬところを目撃した訳じゃないだろ？」

先の戦いにおいて、クー・フーリンに言われた事とまったく同じ台詞を、今度はセトがガブリエルに向かって言う。

しかしガブリエルは、セトがそう言ってくる事を予め読んでいたらしく、間髪入れずに、

『しかし、【セベク・スキャンダル】が解決されてから、既に三十年近くの月日が経過しています。にも関わらず、その間、彼に関する情報は全く表に出てきてません。ならば、もはや既に死んだと考えるのが普通でしょう？』

と切り返した。

そんな、余りにももっとも過ぎる意見を受けて、セトは段々と、自分の推理に対して自信が持てなくなってきていた――やはり、これらは全て、自分の考えすぎになのだろうか？　幻想に過ぎないのだろうか？

『……あまり、余計なことを考えない方がよろしいのでは？　お願いですから、忘れないで下さい――貴方の本来の目的を』

ガブリエルが言う。

「まあ――そうだよな……。確かに、お前の言うとおりではあるんだけどさ……。ただ、それでもやっぱり――」

何か――嫌な胸騒ぎがするんだよな。

何か――重大な事を見落としているかのような、と。

瀬多総司はそう言った。

２ｎｄ　Ｄａｙ『出会い』

場面回想。

木原篤朗（きはらあつろう）の場合。

――――１年前の事である。

「お金を貸してください！」

そんな台詞を大声で言って、上体をきっちり４５度の角度で、前方にいるアツロウに向けて傾けている、１人の少年がいた。

まだ、月光館学園高等部に入学したばかりの頃の、有里淳（ありさとじゅん）――――である。

……であるからして当然、その時、彼に頭を下げられているアツロウもまた、この頃はまだ彼と同じ、１年生だ。

更に言うと、２人は同じクラスで、１年Ｆ組に所属している。

否――――正確にはたった今、１年Ｆ組に所属したところだった、と言うべきか。

何故なら、２人はつい先程、月光館学園の高等部に、正式に進学する為に必要な入学式を、たった今終えたところだったからだ。

それはともかく。

「頼む！　たった今初めて会ったばかりにも関わらず、いきなりこんなこと言うのも何だけど、俺、定期券を入れた財布をどこかでうっかり落としちゃって、だから、帰りの電車賃がなくて…マジで今、本当に困ってんだ！　助けてくれ！」

淳が言った。

ちなみに、場所はと言うと、体育館の入り口から少し出たところの位置である――現在その場所は、入学式を終えた直後特有の、大勢の人々の話し声による喧騒に包まれており、先程の淳の大声は、誰にも聞こえていないようだったが……。そんな事は、この時のアツロウにはどうでもよかった。

彼は困惑していた。

「えーと……」

何とかかろうじで、そんな言葉とも言えない言葉を口から発してみるが、そんな事をしても、彼は自らの動揺を紛らわす事は出来なかった。理由としては、第一に――先程、いみじくも淳が言ったように――アツロウと淳がまともに関わりを持ったのは、この時が初めてだったからである。故に、いきなり先程のような台詞を述べられて、戸惑わないほうがどうかしているというものだ。そして、第二の理由はと言うと――目の前にいる有里淳の外見が、とてつもなく奇抜なものだったからだ。

有里淳。

この時のアツロウは当然、まだ彼の事など知っている筈もないが、

この学園の人間――――少なくとも彼と同じように、中等部から高等部に上がってきた生徒ならば、例外なく知っている筈である。彼は、ある種の有名人だ。

何故、彼は有名なのか――――それは、もしこの物語が小説などではなく、漫画やアニメ等の類（たぐい）のメディアだとしたら、一目で分かるだろう。

まず、彼は異常と言っていい程に背が低かった。

本来の物語の時間軸でこそ、彼の身長は――――まあ、高いとまでは言わずとも――――決して、『チビ』と蔑称（べっしょう）される程ではないが、この時の彼の身長はまさしく、見た者全ての人間からそのように呼ばれても仕方ない（いや、道徳的な観点から見れば、断じて仕方なくはないが）ほどのそれだった。何となれば、アツロウがたった今、初めて彼の姿を正面から見た時、一瞬、『この子はきっと、小学校から飛び級してきたに違いない』、と思ったぐらいだ。具体的な数値をつけるなら、およそ１４０か、下手したらそれ以下かもしれない。高校１年生と言えば、大半の人間が、それまでの中学校生活において成長期を終えているだろうから、そう考えれば、この時の淳の身長の低さは、確かに異常ではある。

それだけでも十二分に目立つというのに、何故かこの時の淳は、更に人目を引くであろうファッションセンスを、惜しげもなく披露していた。服装などについてはある程度の規制が掛かっているに決まっている学校内において（しかもこの時は、普段より更に服装に気を遣わなければならない、入学式の直後なのだから恐れ入る）、ファッションセンスもへったくれもないだろうが、それについては、『有里淳は、校則という二文字の単語に含まれている意味を、全く重要だとは思っていない』とだけ言っておこう。

本来ならば、その極端に低い身長に合わせて、着る制服も特注の物にするところだろうが、何故か彼は、その手順を完膚なきなまでに省いたらしく、着ている制服は、ものの見事にブカブカだった。また、一見すると猫耳のような形をしたヘッドホンをつけており、そして極めつけは、その頭の上からすっぽりと被った、白いニット帽だった。こちらもまた、着ている制服と同じく、彼の小さな頭（『頭が悪い』という意味ではなく、物理的な意味でだ）には大きすぎるようで、髪の毛はおろか、青色の目を半分近く隠していた。

要するに――敢えて要する必要はないかもしれないが――何故、淳が有名なのかと言うと、彼は（外見的に）目立ちすぎるのだ。

対するアツロウはと言うと、こちらはまあ、何と言うか、とにかく『普通』だった。否、仮にこの時、彼に何かしら『特徴』と呼ぶべき個性があったとしても、先程のように、有里淳のような個性の塊のような男の説明が成された後では、どうしようもなく霞んで見えてしまうだろう。それでも、半ば無理矢理に特徴を述べるとするならば、彼の目が、少々猫のそれに似ている、という事ぐらいだ。

まあ――そんな感じで、つまりアツロウは、それほどまでに突飛な外見をした有里淳が、自分に声をかけてくるだなんて、夢にも思わなかった、という事だ。結果――彼は非常に動揺してしまい、そして、今に至るという事である。

とはいえ。

同時にアツロウは、少しだけ、嬉しくもあった――何せ、この時の彼には、まだ友人と呼べる人間が全くおらず、今までの学校生活においては例外なく、『友達の少ないパソコンオタク』という、

不名誉極まりないレッテルを貼られてきたからだ。何だよ畜生パソコンオタクの何が悪いんだ俺はパソコンを肌身離さず持ってないと落ち着かないんだよ文句あんのかばか野郎この野郎、と、彼は常々思っているのだが、勿論、そんな事は口には出さない。その言葉の１０分の１でも言葉にするだけの勇気があれば、少しは状況が違ったかもしれないのに――もしかしたら、友人が多い人間と、少ない人間との間には、そのような要素が多かれ少なかれ関わっているのかもしれない。

故に、彼は普段の学校生活においては、自分の席に座って、１人で黙ってノートパソコンの画面を眺めている事の方が多かった。だからこそ余計に、『パソコンオタク』などと言う蔑称が定着してしまっているという事に、果たして彼は気付いているのかいないのか――それは、彼のみが知る事である。

閑話休題。

とにもかくにも、アツロウは、同じ学校に所属する（事になった）誰かに、声をかけられたのが嬉しかった。だから、『お金を貸して欲しい』という、突然すぎる淳の頼みを、

「ああ、別にいいぜ」

と、快く引き受ける事にしたのだ。とはいえ、つい先程、彼がその事を頼んだ時に発した台詞を聞いていて、１つ疑問に思った事があった為、アツロウは続けて、

「…でも俺みたいな奴に頼んだりしなくても、ケータイとかで、知り合いに助けを求めればいいんじゃないのか？」

と聞いた。それに対して淳は、

「生憎と、そんな未知の機械を、俺は持ってない。母さんも、『高校生になるまでは、ケータイなんて必要ない』って言ってたし。だから、まあ、近いうちに買ってくれるだろうけど、とにかく、まだそれは持ってないんだ」

と答えた。

「あー…」

今時になっても、そんな親がいるのか、とアツロウは思った。

「…ん？　だったら、その親に頼めばいいんじゃないのか？　今日は入学式なんだから、両親――もしくは、そのどっちかが来てる筈だろ？」

続けて、アツロウが言う。しかしその途端、淳の表情が一気に暗いものへと変わってしまった為、アツロウは、何かまずい事を聞いてしまったのだろうか？と少し心配になった。

「親は……ちょっと、今日は来られなかったんだ」

淳が言う。

その口調から、あまり深く尋ねない方が良さそうだな、と悟ったアツロウは大急ぎで話題をかえることにした。

「ああ――ええと、奇遇だな。実は、俺の方も両親が来られなかったんだ」

「ははっ、なんだよ、じゃあ、俺と一緒じゃん」

アツロウの快い気遣いを悟ったのか、表情を今度は朗らかなそれに変えながら、淳が言う。

「いやでも、ほんと助かったぜ。最初は、一緒に入学した幼馴染みから借りようとしたんだけどよ――どうやら、先に帰っちゃったみたいでさ。そんな中、お前みたいな良い奴に出会えるなんてな。俺、有里淳って言うんだけど、お前は？」

「ん？　ああ…木原篤朗、だけど」

「そうかそうか、じゃあ、『アツロウ』でいいよな？アツロウも、俺の事は『ジュン』って呼んでいいからさ」

「お、おう」

余りにもフレンドリーな淳の態度に、少々たじろぎつつも、アツロウはそのように応じた。それにしても…と、アツロウは思う。何故か淳と話していると、心のどこかで安心感を覚えている自分がいる事を、先程から感じていた。まるで、こうして仲良くしているのが当たり前の事であるかのように――。

こんな感情を覚えたのは――中学生の頃、高城圭介（たかしろけいすけ）という少年に出会った時以来だった。

そう思いながら、アツロウが淳の顔をまじまじと見ていると、彼は――そんなアツロウの視線を、別の意味に解釈したのか――

「ああ、これか？」と言いながら、頭に被っている、彼にとっては

やや大きめなニット帽を指差した。

「……」

どうやら淳は、アツロウが自分のニット帽を物珍しい目で見ていると判断したらしいが、それならば普通、指を差すのはニット帽ではなく、その奇妙なデザインのヘッドホンの方ではないか、とアツロウは思った。

そのまま、特にアツロウが何かを促した訳でもないのに、淳は勝手に、何故自分がこのような帽子を被っているのかを説明し始めた。

「こうして帽子を目深に被ってるから分からないだろうけど、実は俺、髪の色が『青い』んだよ――ああ、念の為に言っとくけど、地毛だからな？　けど、先生達は信じてくれなくてさ、いっつも俺に説教垂れてくるから、いい加減うんざりして、こうして隠す事にしたんだ」

「……えーと…」

事情は分かったが、どの道、そんな帽子を被っていても目立つのは変わらないし、何より、それでは如何にも『髪を染めてるけど隠してます』と言ってるようなものだから、本末転倒もいいところじゃないか――とアツロウは心の中で激しい突っ込みをいれたが、それはあくまで心の中での言葉なので、口には出さなかった。

余談だが、何故、淳がこれほどまでに、アツロウに対して親しく接しようとしているのかと言うと、彼もまた、アツロウと同じく、極めて友人が少ないからだ。中等部の頃までは、『神取善久（かんどりよしひさ）』という、少々変わった知り合いがいたにはいたが、淳が中等部を卒業す

ると同時に、彼は家庭の事情とかで遠くに引っ越してしまった為、今のところ、淳が自ら友人と呼べる人間は――先程、彼が口にした幼馴染みくらいだった。

故に、この場所での出会いに、少なからず喜びを感じている人間は、何もアツロウだけではなかった、というわ訳だ――要するに、彼がここまで饒舌になっているのは、何とかアツロウと友達になりたいと思っているから、という事である。

例えるならば、知り合いなど殆どいない学校に入学、或いは転校した際、どうにかして友人を作ろうと思い、なんとか勇気を振り絞ってクラス内の誰かに声をかけた時の心境――と言ったところだろうか（長い上に分かり難いかもしれないが、比喩としては十分だろう）。

何はともあれそんな感じで、アツロウが嬉しさと困惑が入り混じった複雑な感情を抱いていると、淳は何やら意味ありげに、ウンウンと何度か1人で頷きながら、

「まあ、それはともかく！」

と続ける。

「こうして会ったのも、何かの縁――って、まあ、いくらなんでも、そんな言い方はクサすぎるけどさ。でも、『親切にしてくれた人には、ちゃんとお礼をしなさい』って、母さんが言ってたし…。よかったらちょっとこの後、俺の家に寄ってかないか？あんまり大したもてなしは出来ないかもだけど」

「あ、ああ…！　んじゃあ、そうさせて貰おうかな！」

アツロウは、心の底からそう思いながら言った。それが顔に出たのだろう、淳はニッコリしながら、「それじゃ、先に校門で待ってくれ――俺は、最後にもう1回だけ、さっき言った幼馴染みが本当に帰ったのかどうか確認してくるからさ」と言い残して、一旦、アツロウの前から去っていった。

てっきり、中学校を卒業するまでは、唯一の親友だった高城圭介がいない高校に進学したからには、どうせまた、以前のように孤独な学園生活を送る事になるのだろうな、と漠然と思っていたアツロウにとって、この時の淳との出会いは、とても嬉しい事だった。

彼は急に体が何倍にも軽くなったかのような気分を味わいながら、校門へと向かって行った――が、その幸せな気分も、長くは続かなかった。何故かと言うと、校門へと向かう途中で――如何にもありがちな展開で、大変恐縮だが――数人の、柄の悪そうな不良に絡まれてしまったからだ。来ている制服から判断するに、どうやら全員、アツロウと同じく、月光館学園の生徒らしい。

その内の1人の名前は、永瀬永戸と言い、有里淳と同じように、中等部から進学してきた1年生なのだが、当然のことアツロウは、彼の顔を見るのさえ今日が初めてである。しかし彼もまた、淳と同じように有名人だった。彼とは正反対に体格が大きく――いかしているとでも思っているのか――黒いサングラスをかけていた。金魚の糞のように、その後ろについてきている4人の生徒は、彼の舎弟である。弱い者を見つけては、特に理由もなく徹底的に苛めようとするが――その傍らで、1年生であるが故か、同じ不良の上級生などには、スネ○君よろしくペコペコへつらったりしている。とにかく手に負えない男であり、だからこそ彼もまた、淳と同じ有名人ではあるのだが、どちらの方が人付き合いする上で好ましい相

手であるかは、火を見るより明らかだった。

永瀬は、アツロウよりほんの数センチほど前にまで距離を詰めると、彼を（両方の意味で）上から見下ろしながら、

「よお…俺は、永瀬永戸っつーんだけどよぉ――――」

と、聞いてもいないのに名乗ってきた。

「…お前、有里淳ってガキ、知らねーか？　俺達、ちょっとソイツに用があるんだ」

「え、ええと…」

やばい、やばい、やばいやばいやばいやばいやばい！

今時、こんな古臭い不良がいたのか！？

ちらり、とアツロウが辺りを伺うと――――まさか気付いていない訳ではないだろうが――――周りにいる何人かの生徒は、全員例外なく、必死で自分がいる方に目を向けないようにしている光景が目に入った。それを見て、なんて薄情な奴らだ――――とは、アツロウは思わなかった。もし、自分が彼らの立場だったろしたら、きっと同じように、この光景から目を逸らそうとするに違いない、と思ったからだ。

とにかく、ここは妙に反抗的な態度を取らない方が無難だろう。そう判断したアツロウは、緊張の余り強張った口を無理矢理に動かす事で、

「し、知らないけど…」

と、なるべく無難な答えを返そうとしたが、その台詞を言い終わるか言い終わらないかというところで、永瀬が「あー、そういえば」と、わざとらしくアツロウの言葉を遮った。

「そういえば――お前さっき、有里の野郎と、なんか仲良さげに話してたよなあ？」

「……っ」

見られていた――らしい。

そして同時に、アツロウが淳を知っている事を分かっておきながら、先程のような質問をしてきたらしい――と、アツロウは悟った。

「あれぇ、なのに何で、さっきお前は『知らない』とか言いかけてたんだ？　おかしいよなぁ？んで、そんなついさっきの事なのに、忘れてたって事もねえよなぁ？　つまりお前は――」

言いながら、永瀬は突然、右手をぬっと伸ばしてアツロウの襟首を掴むと、口から発せられるくさい息がかかる距離にまで、アツロウに顔を近づけてきた。永瀬がその顔に意地汚いニヤニヤ笑いを浮かべた事で、アツロウは彼の歯の何本かが、不自然に欠けている事に気がついた。それは、以前まで乳歯だった歯が自然と抜け落ちた――と言うよりも、誰かに無理矢理折られたかのように見えた。

「――つまりお前は、俺に嘘をついたんだ。そうだろ？」

「……」

最早、今回で何度目か分からない三点リーダーを排出するアツロウ。

何と答えればよいのか――分からない。

否、仮に分かっていたとしても、今の彼では、それを口に出す事は出来ないだろう。

「で、だ。お前、俺に何かしなくちゃいけない事があるんじゃねえの？」

「え？」

いきなり、訳の分からない事を言い出した永瀬に対し、戸惑うアツロウ。

「決まってんだろーが、命乞いだよ、命乞い」

「……」

命っすか。

いつの間にか、随分とスケールのでかい話になっていた。

そして――そんな風に呆れつつも、アツロウは1つだけ確信した。

どうやら――目の前にいるこの不良は、かなりの下種（げす）らしい。

今までの人生の大半を、パソコンのモニターを前にして過ごしてきただけに、それに比例して人との関わりが他の人間よりも少ないアツロウではあったが――とはいえ、それぐらいの事なら、流石の彼にも理解できた。

「それと当然、さっきの話を聞いてたって事は、お前の名前も知ってるぜ――木原篤朗、だろ？なあ？アツロウ君」

気安く下の名前で呼ぶな――とは、やはり言えなかった。

淳の時とは違い、良い気分になど、全くならない（むしろ逆だ）。

同じ呼び方だというのに、言う人間が違うと、そこから得られる印象もここまで違うのか、とアツロウは思った。

永瀬の台詞は、誰に止められることなく続いていく。

「１つ言っといてやるぜ、アツロウ。あの有里って野郎は、どうしようもねえクソでクズでゲスだ。もしかしたら、さっきチラッと見えたかもしれねえが――俺は、自分の歯の半分近くを、アイツに折られてんだ。半分だぜ？半分。つまり、１０本かそこらだ。普通、どんだけ酷くボコッても、そこまで折らねえだろうがよ。マジ、イカレてるぜアイツは。見た目からして、既におかしいしよ――」

そこまで言うと、永瀬は４人の舎弟と一緒に、大声で笑った。

その途端、アツロウは胸の奥から、何か熱いものがグッとこみ上げて来るのを感じた。一瞬遅れて、その感情が「怒り」によるものだと、彼には分かった。気付けばアツロウは、思わず「オイッ！」

と怒鳴って、永瀬の事を睨みつけていた。

「あぁん？」

すると永瀬は、我が意を得たりとばかりに、そのニヤニヤ笑いを更に大きくしながら、凄みのきいた声で、アツロウを威圧しようとする。彼は、自分より弱い者を痛ぶるのが大好きなのだ。そして残念な事に、永瀬の身長は、どれだけ低く見積もっても、アツロウよりは１０センチ以上も高い。

「なんだぁ？　やっぱりお前、アイツの友達（ダチ）かなんかなのかぁ？　だったら、話は早え。この折られた歯の恨みは、お前で晴らすことにすっかな――」

そして永瀬は、空いた方の左手を握りこむと、一旦、大きく後ろに引いて、そのまま、アツロウの顔面に一気に振り下ろそうとした。周りに沢山の生徒がいようが、永瀬という男は、そこに教師さえ混じっていなければ何とも思わない。中学生の頃ならば、こんな時はケイスケがすぐに助けてくれたが、今はもう、そんな都合が良い展開は望めない。アツロウは、いずれ顔面を襲うであろう、鈍い痛みに耐える為に、ギュッと強く瞼を閉じた――。

と、その時。

「――正確には」

そんな声が、アツロウの耳に、届いた。

「友達（ダチ）じゃなくて、親友（マブダチ）だよ。ついさっきそうなったばかりだけどな。よくよくよ～く覚えとけ、このクソ野郎――！」

いつの間にか――アツロウにも、永瀬にも、永瀬の舎弟にも、そして恐らくは、その周りにいる生徒達にも全く気付かれないまま、その場にフッと現れた有里淳は、そう言葉を発するや否や、一気に跳んだ。

彼の声がした方に、アツロウがサッと顔を向けた時には――既に、淳の小学生のように小さな体が、まるで１６０キロの剛速球のように、アツロウの顔のスグ脇を猛スピードで通り過ぎていくところだった。

そしてそのまま――淳は、周りで見ている者達が、思わず芸術的だとでも評してしまいたくなる程に見事な角度で、左足による跳び蹴りを、永瀬の顔面に炸裂させた。

抵抗する間も――どころか、突然の淳の登場に驚く暇もなく、永瀬は、その蹴りの威力を余すことなく顔面で味わったかと思うと、さながらビデオをスローで再生したかのように、ゆっくりと仰向けに倒れた。

横たわった彼は白目を剥いており、口からは小さく泡を吹いていた。どうやら、気絶しているらしい。

その蹴りの反動を利用して、そこよりもう少しだけ高い位置に舞い上がった淳は、クルクルと如何にも身軽そうに空中で体を回すと、直後、猫のように、音もなく地面へと着地した。

そして、辺りにいる永瀬の舎弟達――突然の淳の登場と、突然の永瀬の（強制）退場を受けて、完全に動揺しきっていた――に顔を向けると、ギロリ、と凄まじい目つきで睨みつける。先程、初

めて会って笑顔を見せた時には、まるで子供のようにころころと笑っていたのに、今の彼は、怒れる獅子も顔負けの形相だった。

「それで？」

淳が言う。

「なぁに、やってんだよ、お前らは」

「……う……」

舎弟の内の1人が、思わずたじろいだような声を漏らす。

「な・あ・に、やってんだって聞いてんだぜ、俺は。んんん？　思わず、江古田口調で詰め寄りたくんるじゃねえか、んんん？」

「……」

誰だよ、ソレは。

ともあれ。

その後、リーダー格である永瀬があっという間に倒されたことで、完全に戦意を喪失した舎弟達は、気絶した永瀬を両脇から抱えると、「お、覚えてやがれ！」というお決まりの台詞を吐くこともなく、そのまますたこらさっさと逃げていってしまった。何とまあ、見事な雑魚っぷりである。

「よう――大丈夫か？アツロウ」

不良達の姿が完全に見えなくなったのを確認すると、若干ずれたニット帽の位置を両手で直しながら、淳が言う。

アツロウは未だに、急過ぎる展開に追いつこうと必死ではあったが、それでも、何とかかすれた声で、淳に「あ、ああ、ありがとう」と言おうとした――が、「ありが」の部分まで言った途端、逆に淳の方から、

「おいおい！　そうじゃねえだろう！」

と、大声で怒鳴られてしまった為に、その台詞は、無理矢理遮られる事になってしまった。

「……」

なんだか、今日は俺、あまり喋らない上に、たとえ喋ったとしても、途中で遮られてばっかだよな…と、アツロウはしみじみ思った。

「お前がそこで言う台詞は、そんなんじゃないんだよ！　お前は俺を助けてくれて、俺をお前を助けたんだから――だったら、もう言葉の上だけじゃなく、実質的にも、俺達は立派な親友だろうが！　親友っていうのは、そういう過程を踏んで、初めてできるものなんだって――母さんが言ってた！　だから、俺が『大丈夫か？』って聞いたら、お前は礼なんて言わずに、ただ『ああ、何とかな』とでも言えばいいんだよ！　親友っていうのは、助け合うのが当たり前――って、母さんが言ってた！」

「…あー…」

中々どうして、要所要所では間違いなく、ちゃんとかっこいい事

を言ってる筈なのに、同じカッコ内で2回も「母さんが言ってた！」という台詞を発してしまった為に、そのかっこよさも半減だった。

（…まさか……マザコンか？）

少し心配になるアツロウだった。

続けて、淳が言う。

「大体さ――――大きなお世話かもしれねけど、アツロウって少し、オドオドし過ぎだぞ？　そんなんだから、あんな連中に嘗められるんだ。もっと胸を張れ！　もっと自分に自信を持て！　ありのままの自分を誇れ！　お前は俺の親友なんだから、さ！」

そう言って、バシンとアツロウの腰の辺りを叩く淳。その言葉は、アツロウにとっては嬉しいものでもあったが――――同時に、少しムッとした部分もあった。別に、自分は普段からオドオドしている訳ではない。少なくとも、そんな自覚はない。だから、その意趣返しという訳ではないが、アツロウは思いつくがままに、

「…じゃあ聞くけど、お前のそのニット帽はどうなんだ？」

と言った。

「え？」

「さっき会った時、そんな帽子を被ってるのは、本当は染めてないのに、その青い髪が先生に見咎められるから、みたいな事を言ってたじゃんか。でもそれって、今お前が口にした『ありのままの自分を誇れ！』っていう台詞には反してないのか」

「なっ……！？」

ズガーンッ！　と、ジュンの顔が、衝撃で歪む。

第三者の視点から見れば、確かにアツロウが言う事はもっともな事ではあるのだが、あまりにも淳のショックの受け方が大き過ぎるので、アツロウは、今にも彼の背後の風景が白黒反転して、どこからともなくベートーベンの『運命』でも流れ始めるのでは、と心配でしょうがなかった。

「ふっ…、ふっ！」

やがて淳は、若干のショックを残したままではあるが――唐突に、不適な笑いを浮かべた。そして次に、アツロウの肩に手を乗せようとしたが――悲しいかな、この時の淳の背丈では、とてもアツロウの肩にまで届かなかったので、やむなく彼は再び、アツロウの腰の部分に、ポンと手を当てると、次のように言った。

「よくぞ言った…！　今のは、お前を試したのだ！」

「……」

あ、そう。

しかしアツロウは、そんな淳のリアクションが面白くなってきた為、更にそこから続けて、

「…じゃあ、俺が見事にそう言ったからには、そのニット帽はちゃんと外すんだよな？」

と言った。

「ぬぐっ…！」

再び、言葉に詰まる淳。

彼はしばらくの間、モゴモゴと何か言いたそうに口を動かしていたが、やがて、再びフッと不適な笑みを漏らすと（いい加減、アツロウはその笑い方にイラッとくるようになっていた）、

「そうかそうか…そんなにこの帽子が欲しいか」

と言った。

「……」

いや……別に？

しかし、アツロウがそう言うよりも早く、淳は矢継ぎ早に口を動かし始める。

「いやいや、君は本当にお目が高い。まさかこの帽子の真なる魅力に気付くとは、いやさ、本当なら、この貴重な帽子はそうそう簡単にはあげられはしないんだけど、でも、たった今親友になった記念として、これは仕方なく君に差し上げようではないか。いや、違うからね？　別に、ものの見事に、お前に言い負かされたからとか、そんなんじゃないからね？　あくまで、俺が友情の証としてお前にこのニット帽をあげるってだけで、絶対に、絶対に言い訳とかじゃ、ないんだからね！？　実を言うとさ、君を初めてみた時から、君な

らこの帽子の真の価値に気付くと思ってたんだよ、うん。まあ、俺としても、これ程の帽子をあげるのか些か忍びないけどさ、でも、まあ、他らなぬ大親友である君の為なら、ちょっと妥協してあげなくもないかなー、とか思っちゃったりする訳だよ、うん。俺はほら、大人だかね。それぐらいでいちいち文句言わない訳よ、流石に。まあまあ、君が言いたい事もわからなくはないけど、でも念の為にもう一度だけ言わせてもらえば…絶対に、お前に言い負かされたから、それをごまかす為に、無理矢理こんな主張をひねり出してる訳じゃ、絶対に、絶対にないんだからね！？」

「……」

長えーーっ！

心の中で、アツロウは叫んだ。

たった1つの言い訳の為に、どれだけの文字数を使ってるのだろう、この少年は。

しかも、言い方が若干、ツンデレっぽい。

気のせいかもだけど。

「それじゃま！　そんな訳で！」

言うと、淳は、とてつもない速さで手を動かし、がっとニット帽を掴んだ。そしてそのまま、まるでそれを外すのが、これ異常なく苦しい作業であるかのように、数秒程ほど顔を苦渋で歪ませたかと思うと、次には「ええい、ままよ！」と叫びつつ、それを一気に外した。

淳の髪の毛が外気にさらされた途端、アツロウは思わず目を見張った――確かに、青色の髪だった。ただし、ただの青色ではなく、限りなく美しい、宝石のような青色だ。どうして今までニット帽で隠していたのか、不思議なくらいである――まあ、外見的に美しく見える造形をもって生まれた人間ほど、逆にそれをコンプレックスに感じたりするものだから、それに関しては、とりたてて疑問を持つ程の事ではないのかもしれない。

実際、アツロウが思わず淳の髪に目を釘付けにしていると、彼はあからさまに嫌そうな顔をして、

「あーもう！　だから帽子で隠してたんだよ！　こっちの方が本当の理由でな――どいつもこいつも、俺が大っ嫌いで仕方ないこの青い髪を、こぞってそういう目で見やがる――！」

「…？　な、なんで嫌いなんだ？」

思わず、アツロウはそう尋ねたが、途端に、淳は一瞬口をポッカリと開けたかと思うと、次にはあわてて閉じ、目線を足元に向けながら、何かをブツブツと言い始めた。声が小さすぎる為、聞こえはしなかったが、アツロウは、淳の唇の動かし方から、「親父と同じ色だから…」と言っているのでは、と推測した。

「い、いいから！　受け取れ！」

グイッ、と、脱いだニット帽を、無理矢理アツロウの手に押し付ける淳。

「あ、ああ…」

いや、だから別に、俺はそんなニット帽、欲しくもなんともないんだが――と、アツロウは強く思ったが、同時に、取り立てて断る程の理由もない為、まあ、ただでくれると言うならありがたく貰っておくかとも思い、「じゃあ…まあ、貰っとくけど」と言って、すんなりそれを受け取った。

被ってみると――淳の場合は、彼の体格に比例して、頭が小さかった故にブカブカだったが――思いのほか、アツロウの頭にピッタリだった。まるで、何年も使い込んできたかのようである。淳は、そんなアツロウの様子を見て、満足そうに微笑んだ。その笑顔につられて、同時に、アツロウも何となく笑った。そして次には、お互いに何も喋らず、まっすぐ同じ方向へと向かって、並んで歩いていった。行き先は勿論、淳の家に向かうために必要になる、ポートアイランド駅である。

◆

◆

それ以来、木原篤朗は、有里淳の友人となった――『親友』ではなく、『友人』である。先程、淳はああ言ったが、アツロウに言わせれば、本当の友情とは、そんな簡単に芽生えるものではない。だが、それでも――ある程度の時間が経てば、アツロウとジュンはそう呼び合えるだけの仲になるだろう。それが1週間後か、1ヶ月後か、或いは1年後かは知らないが、しかし、この時の2人の様

子は紛れもなく、お互いを心から認め合った――『友人』同士のそれだった。

2nd Day『東洋アンズ前のバトル（1）―4』

――とまあ、長ったらしい回想はここまでにして。

時間と場所は再び元に戻って――時間は東京封鎖が決行されてから2日目の午後5時半過ぎ、場所は言わずもがな、東洋アンズ前の広場である。

とはいえ。

そこで繰り広げられている有里淳とその仲間達と、ベル・デルの配下である悪魔達による熾烈（しれつ）な戦いの場所は、厳密には、東洋アンズ前ではなく、東洋アンズ前の上空といった方が正確だろう。

現在、そこには4つの影があった。しかし、影は4つでこそあれ、実際に空中にいる人間――否、人間と悪魔の数は、人間が2人の、悪魔が4体である。人間である淳は仲魔の鬼女リリムに、後ろから持ち上げられる形で上空に滞空しており、アツロウの場合は、霊鳥モー・ショボーがその役割を担っていた。

そしてその正面には――まさしく、淳達が現在進行形で相手にしている敵悪魔、ビフロンズとカラステングがいた。カラステングが背中の黒い翼で空を羽ばたき、飛行能力などは持ち合わせていないビフロンズを、片手で脇に抱えているという構図である。一見すれば若干間抜けに見える格好だが、しかし淳もアツロウも、どちらもその緊張した面持ちを崩そうとする気配は見せなかった。

それは一重に、相手がこれまで戦ってきた相手とは明らかに一線

を画す実力の持ち主であるという事も、原因の１つのようではあるが――２人が、やたらと下の方にちらちらと視線を向けている事から察するに、どうやら、自分達が今いる場所が、どれぐらい地上より離れているのかが気になって仕方がないというのが、何よりの理由らしかった。まあ、敢えて彼らの疑問を明かすとするならば、そこは地上よりおよそ１０メートルも上の地点――つまりは、３階建ての学校の校舎の屋上と全く変わらぬ位置である為、そんな彼らの挙動は、至って自然なものと言っていいだろう。

「……」

淳は改めて、自分の足元に広がる風景を見た。本来の生活においては、そこにあって然るべき地面がなく、地上と淳の足の裏との間に広がる空間には、ごうごうと強い風が吹いている。いくらＣＯＭＰの『ハーモナイザー』によって肉体的強度が上がってるとは言え、この高さから落ちたら即死はまず免れないだろう。そう思って、淳はごくりと生唾を飲み込んだ後、

「……お願いだから、間違って落としたりしないでね？」

と、すぐ後ろで自分を支えているリリムに対し、静かながらも必死の思いで懇願（こんがん）した。リリムは悪戯っぽくクスリと笑うと、「だーいじょうぶよ。任せなさいって！」と言って、淳を安心させようとする。その気遣いが功を喫したのか、淳は、それまでに自分の心を覆っていた不安のいくつかが、音もなく消えていくのを自覚した。

なんとか元の余裕を取り戻してきた淳は、次にその視線を、地上にいるユズ達の方へと向けた。そこには彼女の他に、ＣＯＭＰを持たないミドリ、負傷したことにより、現在、淳達の仲魔である『エンジェル』による治療を受けているケイスケなど、とても淳達の方

の戦いには参加できそうもない仲間（と仲魔）達が集まっている。

その内の1人であるケイスケを見て、淳は少し不安になった。先程も述べたように、彼は現在、エンジェルの回復魔法による治療を受けている真っ最中である。つまり数分前に、敵悪魔の『ゴズキ』の斧による攻撃で受けた傷は、まだ治っていないという訳だ――まさか、それほどまでに深い傷なのだろうか？　と、淳は心配になった。

淳は、そんな彼の事を、上空からおよそ数秒ほどジッと観察した後、ケイスケの近くにいるユズに向かって、

「ユズ！　お前は皆を連れて、そのビルの中にある地下街へ行くんだ！」

と怒鳴った。

途端に、ユズの顔から、サッと血の気がひいていく。

「でも、ジュン――――！」

「るっせえ！　いいから早く行け！」

ユズが何か言おうとする前に、淳は、数時間ほど前での、東京タワー下の戦いにおいても口にした台詞を大声で発する事で、それを中断させた。

しかし、その後にユズが返した返事は、その時とは違い、

「いや、そうじゃなくて！　他の人達が非難してる場所に私達が仲

魔を連れて行っちゃったら、きっとパニックになっちゃうでしょ！？　それはどうするの！？」

――――というものだった。

「あっ……」

そう言えばそうだ、と淳は思った。勿論、淳達が使役している悪魔達は、（淳達がそのように命令しない限り）、罪のない一般人を襲う事は絶対にない。しかし、そんな事は事情を詳しく知らない民間人達にしてみれば、全く意味のない要素である。東京タワー下で会った女性や、この広場に来て初めて悪魔を喚び出した時のミドリのリアクションなどを思い返してみれば、それは明らかだ。

ならば、一旦、仲魔を全員ＣＯＭＰに戻せば問題はないのでは？という意見もあるかと思うが、そんな事をした途端に、淳とアツロウの目の前にいる2体の悪魔が、ユズ達に一気に飛びかかっていかないとも限らない。そして、もしそうなってしまったら、明らかに空中での機動力では劣ってるに決まってる淳とアツロウでは、それを咄嗟に防ぐ術がないのだ。

それに、どちらにせよ、まだケイスケの治療も終わっていないのだ。だとすれば尚更、まだ仲魔をＣＯＭＰに戻すべきではないだろう。

じゃあ、どうするか――――と、ジュンが必死で頭を回転させていると、アツロウが、

「それなら、地下街までは行かずに、せめてそのビルの扉より内側の位置にまで避難すればいいんじゃないか？　そうすれば、ケイス

ケの治療をしながら俺達が戦ってる様子も伺うことも出来るだろうし」

「ああ、そうだな！　それがいい――――ユズ！聞こえたか？」

ジュンが大声でそのように尋ねる。すると、地上にいるユズは「ＯＫ」とでも言いたげに、親指をびっと淳に向かって突きたてた。どうやら、ちゃんと聞こえたらしい。次には、ユズはミドリやその周りにいた仲間達を連れて、ビルの出入り口に向かって走って行った（ケイスケに限っては、エンジェルの肩を借りながら、よろよろとした足取りで歩いていった）。

その時、ジュンは、ミドリが何やら好奇心に満ちた目で、自分の方をチラッと見た事に気付いた――――『好奇心』である。ここで悪魔達と戦い始める直前、淳がＣＯＭＰから悪魔を召喚した時に見せたものとは、全く逆の視線だ――――つかの間、淳はそんなミドリの様子に疑問を抱いたが、すぐに気を取り直して、再びカラステング達へと顔を向けた。

それとほぼ同時。

「なかなか余裕じゃねーか。敵を前にして楽しくお喋りとは――――よっ！」

――――と、ビフロンズを抱えているカラステングが、片手にもった身の丈ほどもある槍を、凄まじい風切り音を発しながら、淳の方に目がけて一気に振りぬいた。

直後、その風切り音よりほんの一瞬ほど遅れる形で、その槍が振るわれた後の空間から、全てを切り裂かんとする旋風（つむじかぜ）が、次々に巻

き起こる。

それを見た淳は、大きく目を見開いた。

「やべっ…！リリム！」

「分かってるつーの！」

淳が何か明確な指示を出す前に、いち早く彼が何と言おうとしたのかを悟ったリリムは、相変わらずのギャル口調でそのように言いながら、グンッ！と、とてつもない勢いで、淳の体を抱えながら飛行する。何分、初めての空中戦のため（当たり前だ）、そんなリリムの回避行動によって、若干乗り物酔いにも似た感覚を覚えながらも、淳は、自分の足のすぐ裏を、カラステングの『ウインドブレス』が通り過ぎていくのを感じた。

やがてその旋風は、その先にある東洋アンズとは別のビルの壁へと激突したかと思うと、たちまち魔法が当たった部分の壁が、跡形もなく消し飛んだ。あともう少しでもリリムの行動が遅れていたら、自分達の体があなっていたのかと思うと、淳はぞっとした。

「――移動や回避は私がやるから、アンタは攻撃に専念して！」

リリムが言う。

「了解した――アツロウ！　援護してくれ！」

「任せろ！」

それから淳達とカラステング達は、幾度となく離れた位置から魔

法を撃ち合ったが、しかしやはり、空中戦における元々の経験値が違うのか、淳達が放った全ての魔法は、いとも簡単にかわされてしまう。淳、アツロウにしても、相手の魔法はまだ一撃も食らってはいないものの、カラステングのように悠々と回避していたという訳ではなかった。

いや、むしろ、その内の何発かは、厳密に言えば完全にはかわしておらず――あくまで掠める程度ではあるが、被弾していた。おかけで、しばらく経つと、淳とアツロウの全身は、擦り傷や切り傷で覆われていた。何度も率先して接近戦を挑もうとした為か、若干、淳の方がダメージの色が濃い（ちなみに、モー・ショボーとリリムは、淳達を背後から抱えているが故に、2人の体が意図せずして盾代わりになっていた為、殆ど外傷はなかった）。

だが――擦り傷だろうと切り傷だろうと、それが致命傷でない限りは、淳もアツロウも、決して諦めたりはしない。その程度では、2人の戦意は全く衰えなかった。淳達にしてもカラステング達にしても、相手を仕留め切る事が出来ない、という点では同じである。

「…やっぱ、遠距離からチマチマと魔法を撃ってたんじゃ、ラチがあかないみたいだな」

空中でアツロウと目を見交わしながら、淳が言う。

「リリム、接近戦だ」

「…え、マジ？」

リリムが、心底嫌そうな顔をした。

「嫌なら、このまま俺を放り投げてくれ」

「じゃあ、そうさせて貰うわ」

「え！？　あ、いや、ウソウソ！　冗談です！　でも出来れば、このまま相手に急接近してくれたらありがたいかなー、…なんて」

戦闘中であるにも関わらず、見事に主従関係が逆転した会話を繰り広げている淳とリリムだった。

まあ確かに、今のリリムならば、ちょっと手の力を緩めるだけで、淳をあの世目掛けてまっしぐらの旅に強制参加させる事が出来るので、この会話の仕方は妥当なのかもしれない。

ともあれ。

「はいはい、分かりました。それじゃあ…行くわよ！」

そう言うと同時に、リリムは淳を抱えたまま、カラステング達の方へと急接近する。

しかしそんな淳の作戦は、カラステングやビフロンズにとっても、願ったり叶ったりだった。彼等にしても、そろそろいい加減、離れた場所からパンパン魔法を撃ち合うだけの戦いには、飽き飽きしてきたところだったのだ。

だから、淳が自分の方へ急激な速さで向かってくるのを見ていたカラステングは、

「ふん、やっぱりそう来たか…。ビフロンズ、悪いがちょっと地上

に戻っててくれ、流石に、片手を封じたままでの接近戦はつらいぜ。そんな距離じゃ、アンタの『マハラギ』も使えないしな」

と言った。それに対してビフロンズが「ああ、分かった」と答える頃には、既にカラステングは、彼から手を離していた。ビフロンズが地上へと目掛けて落下していくのを、カラステングへと突貫（とっかん）しながら見ていた淳は、頭から落ちやがれと思ったが、その願いがちゃんと届いたかどうかを確認する暇はなかった。空中でのカラステングとの距離が、ほんの数メートルにも満たない位置にまできていたからだ。

「おおおぉぉおおおおおおおぉぉぉおおおっ！」

雄叫びと共に、淳は、右手を強く握り締めると、そのまま一気に物理スキル、『怒りの一撃』を繰り出した。

しかし、元々命中率が低いスキルの為か、或いは、ビフロンズを手放した今のカラステングの機動力が高過ぎる為か、淳が右拳をゴウッ！　という風切り音と共に突き出した時には、そこには既にカラステングの姿はなかった。

カラステングは、グルンと空中で縦に旋回する事で、淳の『怒りの一撃』を難無くかわすと同時に、彼の背後へと回ると――――「これで終わりだ！」とカラステングは叫んだ――――今まで片手で持っていた槍を両手で力強く握り、一切の間を置かずに、彼の背中目掛けて槍の切っ先を突き出した。

「やべっ…！」

思わず、淳は焦りに満ちた声を口から漏らした。とは言え、それ

は何も、自分の身が鋭い槍によって貫かれてしまう事が心配になったからではない。いや、勿論それも心配な事ではあるのだが――この時の彼には、それよりも更に緊急で解決すべき問題が発生していたのだ。

淳の背後――ということは、それはすなわち、彼を後ろから抱えている、リリムの背後でもある、という事である。

「……っ！！」

例えそれが『悪魔』であろうとも、それが仲間（ならぬ仲魔）であると言うならば、自分よりもそちらの命を優先させるのが、有里淳という人間だ。彼は、カラステングの動きに、未だに反応出来ていないリリムに肘打ちをするように、思いっ切り上体を捻り、力任せに空中でのリリムの位置を入れ替えた。突然の淳の行動に、「きゃっ！？」と驚きつつも、リリムはなんとか淳の服を掴み続けた。

今度は自分の心臓目掛けて向かって突き出される事になった槍から視線を外さないまま、淳は両手に魔力を集中させた。発動させる魔法は、『氷の乱舞』である――しかし今回は、相手に向けて放つのが目的ではない。

淳は、まるでカラステングに対して目くらましでもするかのように、パン！　と目の前で、両の手の平を打ち合わせた。次には、そのまま――自分自身の腕を凍らせる為に、『氷の乱舞』を発動する。

途端に、淳の両腕が、簡易的な氷の手甲によって覆われた。それでも、カラステングの槍撃（そうげき）を完全に防ぎきるまでには至らないが、何とか起動を逸らす事は出来たようだ。淳の顔のすぐ横を、身震い

したくなるような風切り音と共に、槍が通り過ぎていく。

だが、それに対して、ホッと安心する暇もなく、カラステングは第二手を繰り出していた。

「落ちろっ！！」

「……！！　しまっ……！」

――――た、と、淳が言葉を最後まで結ぼうとした時には、既に、カラステングの右足による下段蹴りが、淳の鳩尾に綺麗にヒットしていた。

今度こそ、防御も回避も間に合わなかった為、淳は昼間に食べたサンドイッチが喉元にまでせりあがってくるのを自覚しながら、その蹴りの威力によって、リリムもろとも地上へと勢いよく落下する羽目になった。あとほんの数秒もしない内に、淳達の体は、東洋アンズ前の硬いコンクリートの地面へと激突し、車に轢かれた蛙よろしくペシャンコになってしまう――――。

「～～～～っ！　リリム！！」

淳が叫ぶ。

「任せて！」

叫びながら、リリムは全ての意識を背中の方に集めると、渾身の力でその蝙蝠（こうもり）のような翼を羽ばたかせた。間一髪、彼女は何とか、地面よりほんの数センチというところで、元の飛行能力を取り戻す事に成功する。淳は、地面の少し上を滑るように飛行するリリムに、

相変わらずのように抱えられながら、そこよりも遥か上空にいるカラステングを、キッと睨みつけた。だが今のところ、カラステングが追撃してくる気配はない。

しかし。

それはあくまで、カラステングが追撃してこなかったというだけで、敵の攻撃自体が止んだ訳ではなかった。

カラステングとの戦いに熱中するあまり、淳は忘れていたのだ。

先程、淳と接近戦へと移行する為に、カラステングが地上へとへと落とした、もう1体の敵悪魔――ビフロンズの存在を。

直前とはいえ、その気配に気付いたのは流石だった。

地上スレスレを、リリムの力によって飛行してもらっていた淳は突然、自分達より少し前の方で、ビフロンズが手に持った燭台(しょくだい)から、全くの容赦なしに『マハラギ』を発動させようとしている光景を目にした。

だが、その光景を、ちゃんと光景として淳が認識するよりもずっと速く、ビフロンズは、淳とリリムを迎え撃つ形で『マハラギ』を放った。

「やべっ…！　おい、リリム！　前！　前！！」

咄嗟に、仲魔に呼び掛ける淳ではあったが――しかし、もはや既に遅い。辺りの酸素を手当たり次第に、かつ暴力的に食い散らかしながら向かってくるビフロンズの『マハラギ』と、自分達の体が

接触するまでにかかる時間は、ほんの数秒どころか、一瞬もかからないだろう。淳の声に反応したリリムに出来る事と言えば、せいぜい恐怖によって目を大きく見開く事ぐらいだ。淳は覚悟を決めた。あともう少しもしない内に、自分の体が地獄の業火によって、骨の髄まで焼き尽くされてしまう事に対して――。

しかし、結果から言ってしまえば、この時も、淳が死ぬことはなかった。何故なら――、

「俺の『親友』に何してんだ！　テメエはぁっ！！」

――という怒号と共に、アツロウが、淳達へと迫っていく業火の横の方から『雷の乱舞』を発動させ、『マハラギ』の軌道を直前で逸らしたからだ。

アツロウもまた、淳と同じように、仲魔のモー・ショボーの力を借りて、地面より少し上を飛んでいた。だが、倒すべき相手であるビフロンズが、既に上空にいないのを見て、自分までが空を飛び続ける必要性を感じなくなったのだろう。彼は片手だけでＣＯＭＰを素早く操作し、瞬時にモー・ショボーをそこへ『帰還』させると、そのまま牡牛（おうし）のようにビフロンズへと向かって突進した。

淳は、上空にいるカラステングへの警戒を一切怠らないように注意しながら、アツロウを援護する為、彼の後に続こうとした。しかし――

「やめろ！！」

応援しようとリリムと共に飛来した淳に対し、アツロウが叫んだ。

「ジュン――コイツは俺がやる！　お前の相手はあっちだ！！」

淳は、ここまで感情を剥き出しにしたアツロウを、今まで見たことがなかった。だからこそ、そんな彼の闘志を、ヒシヒシと感じ取る事が出来た。淳は、アツロウの覚悟を信じる事にした――。

「分かった…頼む！　リリム！　もう一度上に行ってくれ！！」

「ええ！！」

そこより５０メートルほど離れた場所にある、東洋アンズの入口近くから、ユズやミドリ、そして他の仲魔達は、いまや固唾（かたず）を飲みながら二組（ふたくみ）の戦いを見守っていた。有里淳　対　カラステングの空中戦。木原篤郎　対　ビフロンズによる地上戦だ。ユズは、加勢しなければと思う反面で、２人が発する闘志に心を奪われていた。加勢し、援護し、補助してあげたいが――しかし、今ここを離れたら、ミドリやケイスケを守る為の悪魔使いがいなくなってしまう。それに、自分なんかが助けにいったところで、大して力になれるかどうかも分からない。ユズは、自分の無力さに唇を噛み締め、両の手を強く握り締めた。そんな彼女のようすを、ミドリは少し心配そうな表情で見ていた。

淳が再び、上空にいるカラステング目掛けて上昇すると、すぐに彼の足より下の方で、アツロウとビフロンズの激闘が始まった。アツロウは『雷の乱舞』を、ビフロンズは『マハラギ』を、立て続けに放っている。どちらも、相手を本気で殺す勢いだ。たちまち、２人の間にある空間が、雷撃（らいげき）と炎撃（えんげき）による爆発と閃光で満たされる。淳とリリムは、間違ってもそれに巻き込まれないようにと、更に速度を上げて上昇した。

数秒後には、淳は再び、カラステングと同じ目線の高さにまできていた。体中に覇気を漲らせた淳を、しかしカラステングは、馬鹿にするような視線で見詰めている。

「…おいおい、薄情な奴だな。友人を見殺しにするつもりか？」

カラステングが言う。

「バーカ。俺の親友（アッロウ）をナメんじゃねえよ。アイツが、あんな鳥頭（とりあたま）に負けるか。それよりもお前は、自分の命の方を心配しとけ。なんせ――――」

淳は、右腕を前へと伸ばし、手の甲をカラステングの方へと向けると、そのまま挑発するようにクイッ、クイッと動かした。

「――――あいにくと、俺は今本気（マジ）モードなんでなっ！！」

淳のその言葉が、戦闘開始のゴングとなったのか。

「はっ――――ほざけよ！！」

カラステングは、あっという間に淳の近くへと距離を詰めると、ブゥン！　と、右から左へと槍を振るい、柄の部分で淳の頭を殴りつけようとする。淳はグッと背中を逸らす事で、何とかそれをかわした。

今度は淳の攻撃だった。右フックからの左足による蹴り上げ、返しの右ストレートと、教科書（何のだ）に載せたいぐらいの鮮やかさで、３つの攻撃によるコンビネーションを放つ――――が、しかしその内のどれ１つとして、カラステングの体を捉える事はなかった。

そんなカラステングは、全く慌てていない――――どころか、驚いた事に、その顔には余裕のある笑みさえ浮かべていた。

「はっ！　最初の方は不意打ちばっかだったから、何回か食らっちまったが――――あめえんだよ！　人間風情が！　こちとら、ベル・デル様の配下の悪魔の中でも、随一の武闘派として名を馳せてきたんだ――――こうして、ちゃんと正面から向かい合って戦えば、お前の攻撃のなんか、一度だって食らわない自信があんだよっ！！」

カラステングは、大声でその言葉を投げつけた。まるでそうすれば、淳が諦めるに違いないとでも思っているかのように。

だが、そんな言葉など、淳は聞いていなかった。

まるで、カラステングの口からどんな言葉が飛び出そうとも、それを信じさえしなければ、カラステングが諦めるに違いないと思っているかのように。

――――いや。

しかし、実際にはそうではないらしく。彼は本当に、カラステングの言葉など、聞こえてすらいなかったらしい。

やがて…。

「――――っだ…っ…、」

と。

素手と槍による激しい応酬の中、淳が、何かを呟いた。

同時に――気のせいか、彼の攻撃の速度が、僅かながらも上がったかのように見えた。

――否、気のせいではない。

何故なら。

「……つっ！」

ビッ！　と。

淳が放った左フックが――ほんの拳の先程度だが――カラステングの顎を掠めたからだ。

「なっ…？」

完全に、淳の動きよりも、自分のそれの方が上だと確信していたからだろう――カラステングの顔に、驚愕と焦りの表情が浮かぶ。

（マグレか？）

と、カラステングは思った。

だが、ほんの刹那ほどの時間も経たない内に、そうではなかった、と彼は知る事になる。

「――だ、だ、だだだだっ…！！」

――淳の左ジャブが、カラステングの頬を掠める。

――淳の右足による前蹴りが、カラステングの腹部を掠める。

――淳の右拳によるアッパーカットが、カラステングの顎を掠める。

「～～～～～っ！！」

いつの間にか、カラステングは――淳の攻撃を、完全に避ける事が出来なくなっていた。

「――くっ…！」

カラステングは確信する。

淳の攻撃が、気のせいでも勘違いでもなく、本当に速くなってきている事を。

「だ、だだ、だ、だ、だだだだだだっ…！」

淳が繰り出す嵐のような攻撃は、全く止みそうな気配がない。

気付いた時には、戦いは既に、『お互いの攻撃による応酬』ではなく、『淳の怒涛の攻撃を、カラステングが紙一重でかわし続けている』というものに変わっていた。

「ぐ、く、う、うぅうっ……！！」

もしや――と、カラステングは推測する。もしや、この『ジュン』とかいう人間は、尻上がりに実力を上げていくタイプなのか、

と。

しかし。

あえて、そんな彼の為に真実を述べるとするならば、実際には、有里淳は『尻上がりに力を引き出していく』タイプなどでは、決してない。

本気の実力など、彼は大分前から、既に発揮し続けている――――少なくとも、ケイスケがゴズキの手によって重傷を負った辺りから（仲間を攻撃された怒りによって）本気になっていたのは、まず間違いない。

しかし、それでは何故、カラステングは先程まで、淳の攻撃を完璧にかわし続けていたのに、途中から段々、それが出来なくなっていったのか。

淳が、カラステングの動きを読めるようになったからか？

否、そうではない。

疲労のせいで、カラステングの動きが鈍くなっていったからか？

否、否、そうでもない。

ならば――――やはり、先程、カラステングが言ったように、ただの偶然なのか？

否、否、否、そういう訳でもなく。

理由は1つしかない。

言うなれば、彼は『尻上がりに力を引き出していくタイプ』ではなく、『尻上がりに力を底上げしていくタイプ』だったのだ。

要するに――有里淳。

彼は――成長する。

戦いの中で――そして、凄まじい速さで！

『才能』――と言うより、他にない。

桐条美鶴や、真田明彦による訓練の賜物（たまもの）――とか、そんなものとは一切合財関係ない、有里淳が生まれながらにして持っている、圧倒的なまでの才能――！

やがて。

ドカッ、と。

ついに、一発の右ストレートが、カラステングの顔面を捉えた。

「がっ……！」

無論――たかが1発の右ストレートだけで、カラステングが負ける筈がない。そこまでのダメージが与えられる訳がない。

だが、それでも。

予期せぬ形で攻撃を受けた以上――――彼は、一瞬とはいえ、よろめかざるを得ない

当然、それは。

そこに出来た、『隙』は。

どれだけ小さなものであろうとも、有里淳にとっては、これ以上ない攻撃のチャンスとなる――――！

そして、次の瞬間には。

ゴキィッ。

――――と、鈍い、嫌な音が、辺りに響き渡った。

先程の攻撃から続けて放たれた淳の左フックが、カラステングの腹部を強打したのだ。

そして、淳は。

更に、殴る。

殴る、殴る。

時には蹴る。

有無を言わさずに殴り、慈悲など感じさせない蹴りを放つ。

「…！　…、…はっ！　あ、ぐ、ぐぅ！」

ただ手数が多いだけ、という訳ではない――――カラステングの体が、次第に異様な形に歪んでいく様を見れば、そこにどれだけの威力が込められているのかは明らかだ。

やがて。

「だ、だ、だ、だだだだだ、だだだだだだだだ、だだだだだだだだだだだらあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

ついに、淳の手技足技織り交ぜたコンビネーションの攻撃速度が、機関銃のそれにも負けず劣らずの速さにまで上がっていた。

殴る、蹴る、殴る、殴る、蹴る、蹴る、殴る、蹴る、殴る、殴る殴る殴る蹴る殴る殴る殴る蹴殴る殴る蹴る蹴殴蹴殴殴殴蹴――――！

「……っ！！」

カラステングは最早、反撃どころか、口から呻き声を出す事さえ出来なくなっていた。

「こ・れ・で…決まりだぁ！！」

淳が叫んだ。

永遠に続くかと思われていた怒涛のコンビネーションも、遂に終わりを告げる。

淳は、最後の締めとばかりに、流れる動作で、右足の踵を頭上にまで引き上げると――そのまま一気に、カラステングの頭頂部目掛けて振り落とした。

「――――――っ！！」

カラステングの声なき悲鳴が、東洋アンズ前に木霊（こだま）する――――。

◆

◆

――それより、ほんの数分前。

そんな感じで淳とカラステングが、上空にて凄まじい肉弾戦を繰り広げている時――アツロウとビフロンズもまた、地上にて、凄まじい戦いを繰り広げていた。

しかし、こちらは淳達の方とは違い、お互い、右へ左へ目まぐるしく動き回りながらの、魔法の撃ち合いによる戦い、というものではあったが。

「…それにしても」

――――と、

アツロウの『雷の乱舞』が右へ左へと跳ね回っていく中を跳び回りながら、ビフロンズは言う。

「ただの人間にしては――――しかも、まだ子供ときている――――中々やるではないか。もしや貴様、普段から、こういった戦いに満ちた生活でも送っていたのか？」

「はあ？　そんな訳ねえだろうが！」

アツロウが叫んだ。

そんな彼の左手から放たれた『雷の乱舞』を、ビフロンズは、サッと横に移動する事でかわす。

「…フン、という事はやはり…あの男の影響か」

ビフロンズが言っている『あの男』とは、当然、現時点において、上空でカラステングと戦っている有里淳の事である。

「全く…つくづく妙な男だ。いやがおうにも、無差別に周りの人間に影響を与えるという意味では――――まるで、『ワイルド』のようだな」

「…？　ワイルド？」

不意に、耳元に入ってきたビフロンズの言葉の意味が分からず、疑問符を浮かべるアツロウ。

だがビフロンズは、そんなアツロウの様子には構わず、何やら独り言をブツブツと呟いていた。

「…！　まさか…！　……あの男……青い…髪…似ている……いや、しかし……ありえん…『奴』に息子などいる筈が――」

「なーに…1人でブツブツ言ってんだ、よっ！！」

戦いの最中であるにも関わらず、まるで自分などそこいないかのような態度をとられたアツロウは、サッと頭に血を上らせると、次には、右手に全ての魔力を集中させる。

彼は――フルパワーの『雷の乱舞』で、一気にケリをつけようとしているのだ。

流石に、相対している敵の方に、大量の魔力が充満されていくのを感じ取ったのだろう。ビフロンズは一旦、自分の思考を中断させると、冷ややかに目をアツロウに向けながら、

「フン…図に乗るなよ！　少し前までは悪魔（われわれ）の存在さえ知らなかったガキが！！」

と言って、こちらもまた、フルパワーの『マハラギ』で迎え撃つべく、片手に持つ燭台に、魔力を集中させた。

そして2人が、それぞれが持つ最強の魔法を、最大の威力で同時に放とうとした――その時。

「「……っ！？」」

アツロウとビフロンズは――――それぞれ、最初から打ち合わせていたかのように、全く同時に、上空へと顔を向けた。

なんとなれば――――彼等は感じたからだ。

上空から無差別に発せられる――――ただらなぬ威圧感に。

まるで、心臓を直接わし掴みにされたかのような。

まるで、喉元に鋭利な刃物を押し付けられたかのような。

そんな――――思わず、『死』という単語を連想してしまいそうな威圧感を、感じたからだ。

そんな感覚を覚えた、アツロウとビフロンズが咄嗟に向けた視線の先では――――ちょうど、淳が右足の踵を大きく振り上げ、今まさに、そのすぐ正面にいるカラステングの息の根を止めようとしているところだった。

そんな有里淳の姿は、現在、太陽を背にしており、アツロウ達の方から見ると、黒く塗り潰されているように見える為――――まるで。

まるで、その姿は。

その時の、有里淳の姿は。

――――『死神』のように見えた。

「――――し、死神…っ！」

恐れ戦(おのの)いたビフロンズが、思わず、そのように呟く。

それと、上空にいる淳が、頭上にまで上げた踵を一気に振り落ろし、カラステングの頭頂部へと激しくめり込ませたのとは、ほぼ同時だった。

地上よりおよそ１０メートル近く離れた上空にて、悪魔にネリチャギを食らわせている男が、そこにいた。

カラステングの声なき悲鳴が辺りに響き渡るのと同時に、彼の顔は、元の形が分からないほど、派手に潰れ、歪み、爆ぜた。

そこから噴き出した血が、淳の体へと付着し、その内の幾つかが、地上にいるアツロウ達へと、まるで雨粒のように降り注ぐ。

数秒遅れて、淳に蹴り落とされたカラステングの体が――――未だに、悪魔である自分の仲間が、たかが人間に敗北した事実を受け止めきれずに呆然としている――――ビフロンズへと、激しく衝突した。

「ぐあっ！？」

ドカアッ！　という音と共に、ビフロンズはカラステングの骸（むくろ）と一緒に、クシャクシャになって地面に丸まった。

そこまできて、ようやくアツロウはハッと我に返った。彼は大急ぎで気を取り直すと、再び右手に魔力を集中させて、最大の威力を込めた『雷の乱舞』を放とうとする。対するビフロンズはと言うと――自分の体の上から、カラステングの体を必死でどかそうとしているところだった為、アツロウの魔法に対し、咄嗟に反撃の体勢を整えることが出来ないでいた。

まさしく、千載一遇のチャンスだった。

（――ここだ！）

そして――アツロウは、それを決して見逃さなかった。

ビフロンズがようやく彼の挙動に気付いた時には、既にアツロウは最大出力の『雷の乱舞』を発動させる為の、魔力の充電を終えていた――のみならず、彼の手から荒ぶる龍のように放たれた『雷の乱舞』は、ビフロンズとカラステングの、2体共の体を、同時に飲み込んでいた。

「おおおおおおおおおおおおっ！！」

アツロウは、体内に残っている全ての魔力を使い切るつもりで、『雷の乱舞』の威力を、より一層高めようとする。

どれぐらいの時間が経っただろうか――魔法を撃った本人であるアツロウには、それがよく分からなかった。ほんの数秒だったかもしれないし、或いは数時間だったかもしれない。気付いた時には、

アツロウは片手を前に突き出したままの、間抜けな格好で立ち尽くしていた。

そして彼は、そこより数メートルほど正面に離れた所で、頭のてっぺんから足のつま先まで丸焦げになったビフロンズの体が力無く横たわっているのを見て、ようやく、自分は『勝った』のだという自覚が湧いてきた。そう思った途端、フッと体から力が抜け、その場で倒れそうになった。どうやら、本当に全ての魔力を使い切ってしまったらしい――なるほど、魔法を使い過ぎるとこうなってしまうのか、と思いながらも、アツロウは、自分が未だに地面に倒れ込んでいない事に気付いた。ぼやけた視界を横に向けると、そこでは、彼と共にこの戦いを生き抜いた1人の戦友が、ニッとアツロウに笑いかけているところだった。

「やったな、おい」

いつの間にか、リリムをCOMPに戻し、地上に降りていた有里淳は、倒れそうになっているアツロウの体を両腕で支えながらそう言った。アツロウは本当に疲れていた為、ロクに返事の為の言葉を紡ぐ事さえ出来ずにいたが、それでも彼は、自分の事を歓喜と心配がないまぜになった視線で見詰めている淳に対し、ニッと笑い返した。

◆

◆

こうして木原篤朗は、親友である有里淳と共に、また1つの戦いを生き抜く事に成功した――『友人』ではなく、『親友』である。アツロウに言わせれば、会ったばかりの頃ならばともかく、これだけの苦難を共に乗り越えたのにも関わらず、本当の友情が芽生えない方がどうかしている。お互いに、疲れきった相手の体を支えあっている、この時の2人の様子は紛れもなく、お互いを心の底から認め合った――『親友』同士のそれだった。

2nd Day『東洋アンズ前のバトル（1）―5』

「…ふぅ～、ようやく終わったな！」

と。

友人であるユズや、自分達の仲魔の回復魔法によって、ある程度の体力を回復し、ある程度の傷を治した木原篤郎（きはらあつろう）は、もう懲り懲り（こりごり）だという感情を多分に込めながらそう言った。

そんな彼の隣には、一際大きな瓦礫の上に腰掛けた有里淳（ありさとじゅん）がいた。アツロウと同じように、仲間達の治療によって、大方の外傷はとっくの昔に消えているものの、体中にこびりついた大量の埃や血痕までは消す事は出来なかったらしい。いや、埃は払えば簡単に落とせるだろうが、問題は血痕である。今や、淳の衣服の面積の半分以上は、血で染められていると言ってもよかった。

淳は、現在自分が着ている上着に、チラッと視線を落とした。もはや、どの部分が自分の血で、どの部分が先程まで戦っていた敵悪魔達の返り血なのか、見分けがつかない。まあ、彼が着ている上着は黒色で、ズボンは紅色だという事を踏まえれば、第三者の目からはそれほど異常には映らないかもしれないが、それを着ている本人からしてみれば、とにかく衣服が素肌にベッタリと引っ付いてくる為、非常に不快である。そこまで考えて、淳は今すぐ着ている服を脱ぎ捨ててしまいたい衝動に駆られたが、生憎（あいにく）と、替えの服など都合よく持ってはいない。となれば、我慢するしかないだろう。淳は小さくため息をついた。

そんな中、アツロウが、

「何とか、ケイスケも助ける事が出来たし…、これで、ラプラスメールの惨劇も回避できたんだよな？」

と、誰にともなく聞いた。

ちなみに、現在の場の状況を、あえて詳しく説明すると、先程も言ったように、大きな瓦礫の上に淳が腰掛け、その隣にユズ、ミドリが座り、そして、そんな3人の正面にアツロウとケイスケが立っていると構図である。

ともあれ。

「うん…！　本当なら、５０人以上も犠牲者が出る筈だったのに…。私達って、凄いよね！」

先のアツロウの台詞に対し、そのように返すユズ。

「ま、俺達3人の手にかかれば、ザッとこんなモンだろ」

つい数分前、カラステングと激しい肉弾戦を繰り広げた際に、拳でも痛めたのか、右手の甲を左手で摩(さす)りながら、淳が言う。

「もー…可愛くないなぁ、素直に喜べばいいのに！」

ユズが口を尖らせながらそう言うと、今度はケイスケが、ポケットから取り出した眼鏡を、元のようにかけ直しながら、

「…ありがとう。助かったよ。君達が来なかったら、僕達は死んで

いたかもしれない」

と言った。

その言葉を受けて、「気にすんな」――――と、淳がそのように返そうとした、その時だった。彼の耳に、細い筒の中を風が通っていくかのような、「スーッ」という音が聞こえてきたのだ。続いて、「ピコンッ」という、小気味よい電子音。頭の上に幾つかの疑問符を浮かべながら、淳は、その音がしたであろう方向に目を向けた。

そして、彼は気づいた。自分の正面にいるアツロウの隣に立っているケイスケの『余命表示』が、つい先程までは『0』であったのに対し、現在は『5』と表示されている事に。

もしやと思って、淳がすぐ隣で、自分と同じように瓦礫の上に腰掛けているミドリの頭上に視線を移すと、彼女の余命表示も、今は『5』と表示されていた。ミドリもまた、ケイスケと同じように、先程までは『余命表示』が『0』だったのだ。

それを見てようやく、2人の命を何とか無事に救う事が出来たと確信した淳は思わず、口から安堵(あんど)の息を漏らしながら、ケイスケに向かって、

「よかったな、おい。余命が増えてるぜ」

と言っていた。

「うん…。本当に、君達のお陰だ」

次にケイスケは、まるで、急に自分の右の手の平に強い関心を示

したように、じっとそこに目を向ける。

「……『死』の運命を乗り越える事って……、出来るものなんだね……」

ケイスケのその言葉は、淳達にというよりは、まるで自分自身に言い聞かせているかのようだった。同時に、自分が無事にこうして生きている事が信じられない、という思いも滲み出ていた。無理もない、と淳は思った。昨日、『ウェンディゴ』という雪男の悪魔を倒し、初めて自分達の『死』の運命を変えた時は、自分も似たような感情を抱いたものだ。

と。

そう考えて――――淳がケイスケに向けて、何か励ましの言葉の1つでもを投げかけようとすると、突然、アツロウが、凄まじい剣幕でケイスケへと詰め寄った。

「バカヤロウっ…！　諦めながら戦ってんじゃねぇよ！」

余りにも大きい声でアツロウが怒鳴るので、淳も、ユズも、ミドリも、思わず唖然とした表情で、2人の様子を見詰めていた。ケイスケはと言うと、まるで悪戯が見つかった子供のように、ジッと自分の足元に視線を落としている。

「もう一度いうぞ…！　最初っから諦めながら戦ってんじゃねぇよ！　お前…昨日、俺達が運命を変えたの見てたんだろ!?　だったら…そんな簡単に、諦めてんじゃねぇよ!!」

「…そう…だね、ごめん。君達は本当に凄いよ。……まるで、映画

のヒーローみたいだ」

もしかしたらケイスケは、アツロウを落ち着かせる為にこの言葉を発したのかもしれないが、どうやら、全くの逆効果だったらしい。その言葉を聞いた後のアツロウの反応を見て、淳はそれを確信した。

「〜〜〜〜っ！　いや、そうじゃなくてだなっ！俺が言いたいのはつまり、昔のお前だったら――――」

「ま、まあまあまあ！」

流石にこれ以上、このやり取りを放置していては危険だと判断したのか、慌てて2人の間に割って入りながら、淳が言う。

「結果的に全員無事だったんだから、喧嘩はよせって。な？」

ユズもまた、そんな淳の言葉に続く形で、無理矢理、ケイスケとアツロウの会話を遮るかのように、

「そ、そうだよ！　ええと、ケイスケ君…だっけ？余命が増えて良かったね！」

と言った。

「うん…」

ケイスケは、どこか夢見心地（ゆめみごこち）な目で、自分の頭上に表示されている余命表示を見詰めている。

「僕の余命は……やっぱり『5』か。他の人と同じになったんだね

…」

その言葉を聞いて、一体、ケイスケが何と言おうとしているのかを察した淳は、彼が次の言葉を紡ぐよりも先に口を開いた。

「『5』日後…か。その時、この山手線の内側に、一体何が起こるんだろうな」

「……!?　昨日、秋葉原で言ってた、皆一気に死んじまうって話か！」

どうやら、アツロウも気づいたらしい。

「マジかよ…。自分達の余命を何とかするのに必死で、つい忘れてたぜ…」

「うん…カウントダウンは、確実に始まっている」

コクリ、と頷きながら、ケイスケが言う。淳達の周りからは既に、何とかケイスケとミドリを助ける事が出来たという安堵感は無くなっていた。

「…昨日までは『6』だった人達の余命が、今日見たら、一斉に『5』に減っていた。…まあ、予想通りの進行ではあるけど…」

「原因とかは分からないのか？」

淳の問いに対し、力無く首を横に振るケイスケ。

「…ごめん。昨日、君達にこの話題を話した後から、僕も色々調べ

てはみたんだけど…。まだ、何もわからないんだ」

直後、この世から全ての音が消えたかのような重い沈黙が、その場を支配する。

「……私達、やっぱり死んじゃうの？　だって、もし明日死ぬのを避けられても、5日後には死んじゃうんでしょ！？　どこに行っても悪魔でいっぱいだし…、もうヤダよ…家に帰りたい…」

ユズが絶望に満ちた目を淳へと向けた。言葉にしてしまうと、それが如何にも真実のように聞こえてしまう。だからこそだろう。淳は、キッと怒りの篭った目でユズを睨みつけた。

「へえ？　お前はもう諦めてるのか？　なあ――ユズ、もし分かってないなら教えて差し上げますがね、おい、俺達はまだ死んでないぞ！！」

ユズだけではなく、他の皆にも向けて、淳は叫んだ。そうだ、殺されてたまるか。死の運命なんてクソくらえだ。ラプラスメールだかベル・デルだか知らないが、自分達の人生は、現在、頭の上に表示されている、へんちくりんな数字によって決めれて良いものではない。それだけは確かだ。

そんな淳を見て、ケイスケは好感を持った。アツロウと淳のやり取りから察するに、恐らく、彼の歳は自分と同じぐらいの、16、7と言ったところだろう。それなのに――先程までの自分とは違い、彼は全く諦めていない。ケイスケは有里淳という少年の中に、努力では決して手に入らない、天性的な指導者としての資質を見た。淳の檄を受けたケイスケは、僕も彼も見習わなければと思い、今、自分に出来る事を考えようと、必死に頭を回転させる。

やがて、ケイスケは言った。

「…そうだね、ジュン君の言う通りだ。それに実は、5日後の『何か』から生き残る人が、何人かいるんだ。その人達のところに行ければ、何か分かるかもしれない…」

淳は、ケイスケの顔をマジマジと見詰めた。

「あー…、それって、自衛隊の事か？」

次にアツロウが、「そう言えばそうだよな」、と続ける。

「確かに、山手線を封鎖してる自衛隊員を見た時には、余命表示がなかった。昨日はそれどころじゃなかったから、あんま気にはならなかったけど…」

「――だから、私達は山手線の外側に出る方法を探してるんでしょ？あの人達に余命が表示されてないって事はつまり、山手線の外側は安全だって事だもん」

また、淳が突然怒鳴り出したりはしないかと、内心ビクビクしながら、ユズが言う。

「…ま、そりゃーそうだろうよ。大体、この封鎖を実行してるのは、まさにその自衛隊なんだ。だったら、わざわざ自分達（テメーら）に危険が及ぶような事をする筈が――」

「そうか！！」

唐突に発せられたケイスケの大声によって淳は、思わずビクッと体を震わせた。

「何だ――――？」

「そうだ…そうだよ！　何で今まで気付かなかったんだろう！　その可能性があったじゃないか…！」

「「……」」

淳とアツロウは、それぞれポカンと口を開けながら、お互いに顔を見合わせる。

「…おい、どうしたんだよ、ケイスケ。『可能性』って何の話だ？」

と、アツロウ。

ケイスケは一旦、皆の顔をグルリと見回すと、

「…5日後に起こる人々の死を、自衛隊が起こす可能性さ…！」

「……！」

ケイスケの言葉を聞いて、淳はまるで、猫だましでも食らったかのような顔をした。そんな彼の心の内を正確に読んだのだろう。ケイスケは一度、彼に向かって小さく頷くと、すぐさま自分の推理を次々と展開していく。

「…ああ、本当の本当に、どうして今まで気づかなかったんだろう？　悪魔の存在は別にしても、少なくとも自衛隊は、封鎖の中で起

こっている様々な問題については、容易に想像がついてる筈なんだ。…なのに、彼らは外の方から僕達を眺めてるだけで、この封鎖を解くどころか、中の様子を調査しようとさえしに来ない…。これでも、僕等の安全を確保する為の封鎖って、果たして言えるのかな？」

「言えないだろうな、うん」

間髪入れずに、淳が答える。その表情からは、封鎖の外にいる自衛隊に対する嫌悪感がハッキリと伺えた。

「全くアイツら、どうかしてるぜ！　俺達がこんなに苦労してるっつーのに、あの、おたんこなすのすっとこどっこいの――――」

「ま、まあまあ…」

かんかんになっている淳を必死に宥(なだ)めながら、アツロウが言う。

「……でも、確かに変だよな。……だとすると5日後に人々が死ぬのは、自衛隊のせい……なのか？」

「……それについては、まだ断言は出来ないけど…。とにかく、外側が内側より安全なのは確かみたいだね…」

「じゃあ、生き残る為にはやっぱり、なるべく早く山手線の外へ出た方がいいってこと…？」

ケイスケの言葉に付け加えるように、ユズが言う。次にはアツロウが、頭に被ったニット帽をグシャグシャと掻きながら、愚痴(ぐち)を漏らした。

「ああ、もうっ…！　余命は残り少ないし、悪魔の親玉は蘇るし、『セト』っつー詳細不明のおっさんは見つからねえし、極めつけは、山手線から出られなきゃ、５日後には死んじまうときてる…！」

はぁ…、と、ため息をつくアツロウ。

「…つーか…そうでなくても、あちこちでＣＯＭＰの持ち主が殺されたり、悪魔がＣＯＭＰを使ったりして、どんどん悪魔が増えてるってのに…、クソ…状況は悪くなる一方だぜ」

「えっ？　悪魔が…ＣＯＭＰを？」

どうやら、最後の部分の台詞が気になったらしく、僅かに目を大きく開きながら、ケイスケはアツロウへと顔を向ける。しかし、ケイスケの疑問に答えたのは彼ではなく、淳の方だった。

「ああ、連中はただの怪物じゃない。少なくとも、人間（おれたち）の道具を、同じように扱えるぐらいの知能は持ってるみたいだ。…ったく、チンパンジーかっつーの。アイツら、その辺の人間からＣＯＭＰを奪っては操作して、仲間を増やしてやがったんだ。……今思えばさっきの奴らも、きっとそれが狙いだったんだろうな」

淳の説明を聞いて、呆然とするケイスケ。

「そんな事が…。突然悪魔が増えたから、不審には思ってたんだけど…」

と、その時だった。突然、淳の真横から、

「ねぇ！　ねぇねぇねぇねぇ、ねぇ！」

――――という、大きな声が聞こえてきたので、淳がそちらに目を向けると、そこには、何やら期待と好奇心に満ちた目で、彼の顔を見詰めている小牧翠（こまきみどり）の姿があった。

「……」

それまでの淳達の会話には全く口を挟んでこなかっただけに、淳は「あー、そういえばいたなー、こんな奴」と思いながらも、ミドリの視線を正面から受け止める。

「あのさ…！　さっきＣＯＭＰ使ってたよね！？」

「……え？あ、うん。まぁな」

ミドリが余りにも興奮している様子なので、何だかマズイぞと淳は思ったが、当然、そんな淳の心境など全くもって知ったこっちゃないミドリは、ジリジリと淳へと詰め寄りながらも、言葉を続ける。

「じゃあ、私もそのＣＯＭＰを使えば、皆みたいに戦えるようになるの！？」

「ええと…」

昔から、こういう風にやたらとテンションの高い女性が苦手な淳は、「何とかしてくれ…！」と、懇願（こんがん）するような視線をアツロウへと向ける。そんな淳の視線に気づいたアツロウは、慌てて２人の会話に口を挟む形で、

「あ～まぁ、戦えなくはないと思うぜ？」

と言った。

「…もしかして、君もＣＯＭＰが欲しいのか？　まあ、昨日、青山霊園で拾ったヤツなら、１つだけ余ってる……どうあっ！？」

一瞬、全ての時間が止まったかのようだった。淳、アツロウ、ユズ、ケイスケ、４人全員が１人残らず、虚をつかれた表情で、ミドリがアツロウの手からＣＯＭＰを奪い取るのを見詰めていた。余りにも素早く、且つ流麗（りゅうれい）な動作だった為、全員が、彼女が今何をしたのかを理解するのに、数秒の時間を必要とした程だった。

「これ、ちょーだい！　ねぇ、どうなの？アタシにも出来るんでしょ！？」

「そ、それは…そうだけど…」

ほとほと困り果てたという表情で、ケイスケが言う。しかし、そのような曖昧な答えだけで、ミドリは大満足だったらしい。彼女は、それを見ている淳が、思わずイラッとしてしまう程に、顔をパアッと輝かせると、

「じゃ、アタシもやるっ！」

と、元気よく宣言した。

「え…えぇっ！？」

信じられない、という様子のユズ。

「ねぇ、お願いっ！　アタシにもやらせて！」

「ど、どうする？　ジュン…」

ハハハ…、と、乾いた笑いを上げながら、淳の意見を聞こうとするアツロウ。

それを受けて、淳はしばしの間、顔をしかめながらゆらゆらと頭を揺らした後、

「…う～ん、まぁ…戦う手段は持った方がいいだろ。今回起こった事を考えれば尚更、な」

と言った。しかし、言葉の上では淳はそう言っているものの、彼の本音は「もうめんどくさいからどうでもいいや」、というものだった。

「話せるじゃん！　それじゃ、これはアタシが貰う……じゃなくて、頂くからね！」

「その言い直しには、何か意味があるのか…？」

キラーン！　と目を輝かせるミドリを、まるで解析不能な未確認生物でも観察するような目で見ながら、淳が言う。

次の瞬間、ミドリは、「じゃ！　縁があったらまた会おうね～☆」と言いながら、軽やかな足取りで淳達の前から立ち去っていた。続いてケイスケが、「……あっ！　1人じゃ危ないよ！」と言いながら、彼女の後を追っていく。こうして、広場に残された人間は、淳、アツロウ、ユズの3人となった。

しばらくの間、3人は狐に摘まれたかのように呆然としていたが、やがて、いち早くそのダメージから回復したユズが、

「…だ、大丈夫かな？　ねぇ、ジュン。彼女（あの子）の余命、幾つだった？」

と言った。

「ああ、ケイスケと一緒の『5』だったけど」

そういや、余命表示って、この中では俺にしか見えないんだっけ――と、淳はぼんやりと思った。昨日の朝に届いたナオヤのメールによれば、今、自分達の頭の上に浮いている数字は、複数の人間で行動している場合、その中のリーダー格の人間にしか、目視する事が出来ないらしい。

「『5』かぁ…。だったらやっぱり、ＣＯＭＰの使い方を知っておいた方がいいかもね。……その5日の間に、一度も悪魔に襲われないって保障はないし…」

ミドリとケイスケの姿が見えなくなった辺りの場所に目を向けながら、ユズが言う。次にアツロウが、

「ん～、まぁ…。ケイスケはＣＯＭＰの使い方を知ってるし、アイツがついてるなら、任せても大丈夫だろ」

と言った。

「それにアイツは正義感が強いから、悪用させる事はないと思うぜ。あの子（ミドリちゃん）も、ＣＯＭＰを使いこなす事ができれば、俺達みたいに、余

命を増やす事が出来るかもしれないしな」

「……逆になんなきゃいいけどな」

ポツリ、と淳が言った。しかし、とてつもなく小さい声で呟いた為、その言葉にアツロウやユズが反応する事はなかった。

「さて…俺達も、そろそろ行こうぜ？とっとと出口を探さないと。……何しろ、余命も1だしな……」

アツロウが言う。

「そうだね…って、ああっ！」

いきなり、ユズが雷に打たれたかのような声を上げたので、淳は驚いた表情で「どうした！？」と尋ねた。まさか、また別の悪魔がどこからか現れたのでは、と思ったのだ。しかし、その後にユズの口から紡がれた言葉は、

「……地下街に逃げた人達は、どうするの？」

というものだった。

一瞬、淳は、ユズが何と言っているのか分からなかったが、すぐに、「あ…」と気づいた。そうだった、現在、自分達より少し離れた場所にある、東洋アンズの真下の地下街には、数分前まで大量に発生していた悪魔達の脅威から逃れる為に、大勢の民間人が避難しているのだった。淳がアツロウへと顔を向けると、彼は「あっちゃあ」という様子で、片手を顔に当てていた。

「何で、あの人達出てこないんだ？……って、ああ…そうか、地下にいるんじゃ、もう外には悪魔がいないだなんて、分かる訳ないか……」

ふう…と、疲れ切ったかのように、口から息を漏らすアツロウ。

「…俺達の方から出向いて、もう外は安全だって伝えるしかないよな？」

アツロウとユズの顔を交互に見ながら、淳が言う。２人はうんざりした表情で、ほぼ同時に、無言で頷いた。

◆

◆

――――『東洋アンズ前のバトルＰＡＲＴ１』終了時ステータス

●クラックしたスキル

＞『耐魔力』

●所持マッカ：２００１

●有里淳（？？）

・コマンドスキル
＞？炎の乱舞
　？氷の乱舞
　？怒りの一撃
・自動効果スキル
＞？耐魔力
　？毒追加
　？同族の心得・攻
・先制発動スキル
＞『Ｓ疾風の秘法』

●木原篤郎（人間）

・コマンドスキル
＞？アギ
　？絶妙打
　？雷の乱舞
・自動効果スキル
＞？一分の活水
　？同族の心得・防
　？封魔追加
・先制発動スキル
＞『Ｓ的中の秘法』

●谷川柚子（人間）

・コマンドスキル
＞？嵐の乱舞
　？クロスレイ
　？アムリタ

・自動効果スキル
＞？耐氷結
　？一分の魔脈
　？耐衝撃
・先制発動スキル
＞『S軽業の秘法』

●予備スキル
＞・ザン
・ブフ
・ディア
・ジオ
・英霊の加護

●仲魔
＞・モー・ショボー
・リリム
・サラスヴァティ
・エンジェル
・ジャックフロスト
・ジャックランタン
・トラロック
・スパルナ
・ネコマタ
・シーサー

――Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！

2nd Day『決意』

突如、自衛隊によって東京が封鎖されてから、およそ2日近くが経過した頃の表参道の周辺は、ほとんど無人に近い状態と言ってもよかった。

時刻は既に夕方の6時を過ぎようとしている――が、そのような時間でも当然、普段ならこの辺りは外食や夜遊びなどに洒落込(しゃれこ)もうとする人々によって、少しうるさいと思えるぐらい賑わっている筈だ。しかし、先程も言ったように、現在、東京は自衛隊に封鎖されている――それはどういう事かと言うと、東京の『中』から『外』へ出る事が出来ないのと同時に、東京の『外』から『中』へ入る事も、また出来ないという事を意味していた。

つまりは、大多数の飲食店や、その他の娯楽施設において必須となるシステム、『他の地域からの物資の運搬』が、現在は起動していないという事だ。そのような状態で、外食や夜遊びに行こうとしている人々の為に、果たしてそれらの店が通常通り営業されるような事があるのかと問われれば、もちろん否である。

そんな理由から、今日に限っては（まあ、厳密には今日だけではなく、昨日も似たような状態だったし、恐らくは明日も明後日(あさって)も明後日(しあさって)もこんな状況が続くのかもしれないが）ほとんどの住民が、都内に自宅がある者はその中で、そうでない者は芝公園などの、人が多く集まっている場所で、封鎖を取り締まっている自衛隊に愚痴を漏らしながら今この時を過ごしている事だろう。誰かがポイ捨てしたのであろう、コーヒーの空き缶が、カラカラと物悲しい音をたてながら、表参道にある、とある店の前を転がっていた。

その、とある店――表参道の路地にあるバー『ＥＩＪＩ』の扉の前に、１人の女が現れた。

女は、そこにいる（いないけど）人間全員が、思わず目を向けてしまいたくなるような、そんな派手とも、異常とも言える外見をしていた。

高級な整髪料を使っているかのように、美しいツヤのある赤い髪を肩の辺りまで伸ばし、左肩には薔薇（ばら）によく似た模様の、赤い刺青（いれずみ）が彫られている。着ている服は、一見すると白いチャイナ服の様ではあったが、肩、胸元、及びスリット部分の露出具合が尋常ではなかった。その為か、残暑も厳しい８月後半のとある１日であるにも関わらず、女は汗一つかかずに涼しげな表情をしていた。片手には、何やら黒い大きめのノートのようなものを持っており、よく見れば、それは彼女が後生大事（ごしょうだいじ）に持っているシーケンサーだと分かる。

女の名前は春沢芳野（はるさわよしの）。

インディーズとしては異例の人気の誇っている、『Ｄ－ＶＡ』というバンドのボーカルである。

「……」

彼女は考える。

ある――１人の少年の事を。

昨日の事だ。

場所は、プロのミュージシャンなどが、よくライブなどを公演している、武芸館前の広場である。

ハルがそこで、その昔、自分に『歌』を教えてくれたある1人の女性について物思いに耽(ふけ)っていると、突然、いたるところから、人を襲う異形の存在――『悪魔』が、次々と現れた。

彼女は『とある事情』から、一般的な日常を送っている人間ならば、絶対に知らないであろう――仮に知っていたとしても、まともな神経の持ち主ならば、とても信じないであろう――『悪魔』の存在を、前もって知っていた為、『悪魔が本当に存在していた』ということ自体に対する驚きは少なかったものの、とにかく、その数が尋常ではなかった。故に、ハルは一瞬、何が起こったのか分からず、思考が一時的に停止してしまった。

気がついた時には、ハルは、もはや逃げ道などないほどに、完全に悪魔達に包囲されていた。

流石にハルも覚悟を決め、私ももうダメかな、と思っていた、その時だ。

あの少年が。

あの――有里淳(ありさとじゅん)という少年が現れたのは。

まるで、映画でヒロインを助けに来たヒーローのように――彼は現れた。否、正確には、そこにやって来たのは淳だけではなく、彼の2人の友人が、その後から続くように現れたのだが――何故か、その時のハルには、淳の姿しか映らなかった。ハルは、あれから1日以上の時間が経過した今となっても、その時の彼の表情や仕草(しぐさ)

種、どのように悪魔と戦い、どのように自分を守ったのか、そしてその唇がどのような言葉を紡ぎ、自分へと向けられたのかえ、完璧に記憶していた。

ハルは淳に対し、奇妙な感情を抱いていた。

それはその時、彼女が悪魔に襲われるよりも数時間前に、初めて淳と会った時から抱いている感情だった。

（……なんで、かな……。あの子を見てると、どこか懐かしい気分になるんだよね）

まるで――ずっと前から、彼の事を知ってるような。

「そんな事、ある訳ないのに……」

思わず、ハルは小声で呟いた。

しかし――それよりも強く感じた感情（ことと）が、もう1つ。

その時、ハルがいた場所にあった建物――九段下の武芸館は、彼女にとってもお気に入りの場所である。それは一重に、自分もいつか、歌手として名を上げて、ここで大勢の人達に自分の歌を聴かせてあげたい、という思いからだ。

そんな場所で。

そんな、彼女にとっては思い入れの強い場所で、自分の命を救ってくれた淳に対し――バカバカしい台詞である事は百も承知だが――ハルは、運命を感じたのだ。

理由などはないし、そんなものは必要ない。

とにかく、運命を感じたのだ。

ハルには昔から、心から分かり合える知り合いというものが、極端に少なかった。掛け値なしに、片手で数える程しかいない。先程もチラッと出てきた、自分に歌を教えてくれた女性と、現在、自分の保護者的存在である、神谷詠司（かみやえいじ）の2人だけだ。それ以外では、まとに知り合いだと呼べるような人間すら、ほとんどいない。

が。

それがどうしてなのか、当のハルにも分からないのだが――何故か、淳となら、すぐにでも心から分かり合えると、いや、むしろ、本当の本当の意味で分かり合えるのは、彼――有里淳しか、この世に存在しないと思った。

その時、彼に命を救われてからのハルには、数分の内に1回は、必ず彼の顔を無意識に頭に思い浮かべてしまうという、奇妙な癖がついていた。しかし、彼女は何故か、そんな癖をうっとうしいと思わないどころか、むしろ心地好いとさえ感じていた。これもまた、ハルにとっては驚くべき感情（こと）だった。一体、自分はどうしてしまったのだろう？

自分でも理解出来ない感情を胸に抱きながら、ハルは目の前にある『ＥＩＪＩ』の扉を開ける。

彼女がこの時間に、この店へとやって来たのは、先程まで、暇を持て余して街中をブラブラと歩いていた際、ふと、このような異常

事態に見舞われた東京の中において、果たして、自分にとっては保護者同然であるジンは無事なのだろうか？　と心配になったからだ。

「ジン？」

名前を呼んでみるが、返事はない。

ただでさえ夕方の6時過ぎという時間帯である故か、太陽の光が少ない上に、停電によって、電気も点ける事が出来ない為、店内はまるで闇のように薄暗く、どこか長年使っていない物置のような陰鬱さを放っていた。

しかしそれでも、昔から、何度もジンの仕事を手伝う為にこの店へ足を運んでいたハルには、かなり細かい所まで店の中の様子を視認する事が出来た――――が、それでもやはり、彼女がどれだけ視線を巡らしても（少なくとも、現在の彼女の目が届く範囲内には）そこにジンの姿はなかった。

ハルは首を傾げた。いつもなら、この時間帯には、ジンは必ずいる筈なのだが…？　と、その直後に、彼女は気付く。今、自分達がいる、この東京内の様子は、どう考えても『いつも』のそれとは違うという事に。ジンにしても、客が来る訳がないと分かっているだろうし、それならば、彼が普段のようにこの店の中にいるという保障はどこにもない。

無駄足だったかな、と、ハルは心の中で舌打ちした。ここにいない以上、ジンは東京内の何処かへと外出しているのはまず間違いないだろうが、そうなると探すべき範囲が広すぎる。ならば、彼が帰ってくるまで、ここで待っているのが得策だろう。悪魔が我が物顔で街中を闊歩しているという現状を踏まえれば尚更だ。ハルは、カ

ウンターの上にシーケンサーを置き、その近くにある椅子の中から適当に1つ選んで、そこに座ろうとした――その時。

ガサゴソ――と、店の奥の方から、誰かが何かを探しているかのような、そんな音が聞こえた。椅子に手をかけていたハルは眉をひそめ、首だけを回して音がする方向に顔を向けながら、この先にいる確率が最も高い人物の顔を、頭の中で思い浮かべる。

（――ジン？）

「奥にいんのかな……？」

ハルは、引いていた椅子を元の位置へと戻し、再び片手にシーケンサーを持つと、スタスタと店の奥へと歩いていった。

◆

◆

ハルが予想した通り、ジンこと神谷詠司は、現在、自宅兼職場である、バー『ＥＩＪＩ』の奥にて、『ある物』を探していた。

彼の頬からは幾筋かの汗が流れ落ちているが、それはこの8月後半特有の暑さとは、一切関係なかった。自分が欲(ほっ)してやまない『ある物』を探し当てる為に、ジンはまるで何かに取り憑かれたかのように、そこにある物を右へ左へと動かしていく。

「……翔門会（しょうもんかい）もＣＯＭＰを使っている……」

そんな独り言のような（いや、『ような』ではなく、まごう事なく独り言だろう）台詞が、彼の口からブツブツと漏れ出ている。

「……そして『アヤ』は、失踪前に翔門会と接触していた……」

物探しに没頭する中、僅かに残った意識の片隅で、彼は思う。長かった、ここまで調べ上げるのに、一体どれ程の時間を要した事か。

「『東京封鎖』と『悪魔』と『翔門会』と……そして『アヤ』。……全ては、繋がっている筈だ……！」

そして遂に、彼は『それ』を見つけた。

彼が手にした『それ』は、簡潔に言うならば、最近、若者を中心に巷（ちまた）で流行している、１台の携帯ゲーム機だった。大きさはジンの手の平より若干大きいぐらいで、手帳のように開いたり閉じたりする事が出来る。画面は上と下とで２つに分かれているという珍しいタイプで、それもこのゲーム機が流行している理由の１つだった。また、ただゲームが出来るだけではなく、メールやブラウザなどの機能もある為、そういった意味では、ゲーム機よりも、むしろケータイに近いと主張する人間もいる。

しかし。

念のために言っておくが――ジンは決して、この店もロクに開けない状況で、やる事がなくて暇になったから、それを潰す為にこのゲーム機――『ＣＯＭＰ』を探していたという訳では、断じて

ない。彼はそれよりも遥かに（少なくとも、彼にとっては）重大な理由の元に、それを探していたのだ。

「あった…！　『あの客』が置いていったＣＯＭＰ…！」

『あの客』。

鼠色の髪に、赤い狐目。黒と緑の斑模様の長い羽織りに、足にはパンカラ下駄（げた）を履いていた、異様な男。

彼はジンの店の常連の１人だった。確か、プログラマーを生業（なりわい）としている、と、いつか言っていたような気がする。

彼は３日に１回ぐらいのペースでこの店に来ては、いつも同じ酒を一杯だけ飲んで帰って行くのだが、ある日突然、パッタリと姿を見せなくなった。それに対し、ジンは不思議に思ったものの、まあ恐らくは、何か大きな仕事に取り掛かっていて、忙しさのあまり酒を飲む暇もないのだろう、と、彼なりに納得出来る理由に解釈していた。となれば、その仕事が終われば、またこの店に来るだろう、とも。

そして実際、ジンの予想通り、数週間程の時間が流れた後、その男はフラリと現れた。今まで何をしていたのか、とさりげに聞いてみると、やはり彼は、何らかの大きな仕事に忙殺されていたらしい。

現在、ジンが手に持っているＣＯＭＰは、その時、店から出ていく際に、その男が置いていった物である。ジンは最初、それを単なる忘れ物だとしか思っていなかったが……。……しかし、今考えてみると……。

ジンは、まるでそこに神の啓示でも書かれているかのように、ジッと手の中にあるＣＯＭＰを見つめた後、

「…これを使えば…多分、悪魔を喚べる筈だ…！」

と呟いた。

カチッ、と、それらしいスイッチをスライドさせて、ジンは迷うことなくＣＯＭＰを起動させた。すると、如何にも次世代機らしい電子音をたてて、今まで沈黙を保っていた画面に、明るい文字で『Ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎ　Ｐｌａｙｅｒ』と表示される。次にジンは、その画面の片隅に表示されている、１つのアイコンへと目を走らせた。

「バッテリーは……十分にあるな……！　……よし、待ってろ、『アヤ』！」

いよいよだ、とジンは思った。今まで自分は、事態を把握していながらも、それに対して立ち向かっていくだけの度量もない、哀れで非力な男に過ぎなかった――が、今は違う。今の自分には、この『改造ＣＯＭＰ』という力がある。もう、自分の無力さに奥歯を噛み締めながら、漫然とした日々を過ごす必要はどこにもない。彼は心の中で激しい炎を燃やすと、一刻も早く店から出る為に、早足で出口の方へと向かった。

――が、しかし、その足の動きは、まだ彼が店の出口に辿り着くよりも前に、一時中断される事になる。今までいた物置から出ようとした途端、突然、彼の目の前に、１人の女性が現れたからだ。

「…？　…！　…ハル…！」

「ジン！」

春沢芳野は、いきなり目の前に現れたジンを見て、安堵と驚愕がない混ぜになったかのような、複雑な表情を浮かべていた。無論、驚いたという意味では、ジンにしても同じだが。

しかし次の瞬間には、ハルのその表情は、安堵と驚愕が入り混じったものから、一気に怪訝なそれへと変わる。この時の彼女の視線は、ジンが手に持っているＣＯＭＰへと注がれていた。

「…それ…って…この前の客が置いていった…？」

「ん？　あ、ああ…」

そう言えば、このゲーム機の存在自体は、ハルも知っていたんだっけか――と思いながら、ジンは咄嗟に、ＣＯＭＰをハルの目から隠すように、腰の後ろへと回した。別に、何か後ろめたい事をしている訳ではない筈だが、何故かこの時、彼は自分がこのゲーム機を持っているところを、ハルには見られたくないと感じたのだ。

しかし、次にハルの口から飛び出した台詞を聞いた事で、そんな彼の奇妙な感情は、跡形もなく払拭（ふっしょく）される事になる。

「…まさか…ジンも悪魔を喚ぶ気！？」

瞬間、ジンの双眼（そうがん）が、驚愕によって大きく見開かれる。

「……っ！　お前…、どうしてそれを…？」

「そんなの…外で散々見たよ！　……それより、どうしてジンまで！？」

ジンは、ハルが余りにも悲痛な面持ちで自分の顔を見詰めてくる為、何故、彼女がこのような改造されたＣＯＭＰから、悪魔を喚び出す事が出来るのを知っているのか、その理由を問いただそうとする気持ちが、心の中から失せてしまった。

「…今、思えば…」

やがて、ジンは話し始める。

「あの客は…多分、こうなると分かってて、このＣＯＭＰを置いていったんだと思う。…だったら、ありがたく使わせて貰うさ」

その言葉を告げるジンの口調は、彼自身が驚くほどに、冷たく、無機質なものだった。

対するハルは、そんな、普段の彼からは考えられない口調に、つかの間、面食らったものの、すぐに、何か反論をしようと思い、口を開ける。

「でも――」

「もう待っているのは疲れたんだ！」

突然のジンの大声。

これもまた――普段の彼からは、およそ想像もつかない口調だった。故に、ハルは一瞬、彼が何と言っているのかが、分からなく

なってしまう。

ジンはそんな彼女の様子には構わず、強い意思が篭った口調で、ハルに己の決意を伝えていく。

彼は嫌だった。

とにかく嫌だった。

いつも傍にいる筈の、かつての恋人が傍にいないという状況に慣れてきてしまっている自分が、とにかく嫌だった。

「…だから…俺から行動する！　何としてでも、アヤを探し出す！」

「けど……！」

「それに」

何か言おうとしているハルの口を無理矢理塞ぐ形で、ジンは言う。

「もし…このまま俺が…アヤと二度と会えないような事になったら……俺は、『あの人』に顔向けできない」

そう言って。

彼は、まるでハルの視界から逃げ出すように、勢い良くハルの前を通り過ぎると、そのまま、店の外へと走り去ってしまった。

「あっ…！　ジン！」

大慌てで彼の名を呼ぶハルだったが、ジンが戻ってくる気配はない。

後には、まるで置物のように、その場に呆然と佇(たたず)むハルだけが残された。

何故かハルは、今ここでジンを引き止める事が出来なかった事に対して、何か、取り返しのつかない失敗でもしたかのような、そんな敗北感にも似た感情を抱いていた――ハルは思う、ジンがこの店の外へと出ていくと同時に、彼は、自分には理解出来ないような世界へと飛び込んでいってしまったのではないか、と。そして、そんな世界に飛び込んでいった以上、もう、自分が知る神谷詠司という人間は、2度と自分の前に姿を現す事はないのではないか、と。

彼女はしばらくの間、ジンが出ていった後の、店の出入口を見詰めていた。まるで蹴破るような乱暴な動作で開かれた為、そこにある扉はキィキィと、聞く者を虚しい気持ちにさせるような音を響かせている。

いつしか、彼女の両目からは、透明な液体が流れ出ていた。が、しかし彼女は、それを拭おうともせずに、嗚咽(おえつ)が混じった声で、何かを話し始めた。

「…どこ、行ってるん、だよ…アヤさん…！　貴女(アナタ)が、いなくなってから、ジンも……アタシも……！」

無意識の内に彼女は、自分が手にしているシーケンサーを、ジッと見詰めていた。

ツツッ…と、まるで陶器でも扱うかのような優しい手つきで、そ

れの表面を指でなぞる。

「…せめて、このシーケンサーが動けば…！　アヤさんが残した歌に……触れる事が出来るのに……！」

そんな彼女の背後。

ちょうど――――先程、ジンがＣＯＭＰを探していた物置の出入口のすぐ横の壁に、沢山の写真が飾られていた。それらの写真は、今は田舎の方に住んでいるジンの母親が、彼の人生の所々を、記念に撮影したものだ。僅かに色あせている古い写真もあれば、つい最近撮ったとしか思えない、汚れ１つない写真もある。それぞれの写真には必ず、それがどのような状況で撮られたのかを表す文字が、黒いマジックインキで書かれていた。『中学１年生・修学旅行』『高校入学』『成人式』――――などなど。

そして、その内の１枚。

ちょうど、全ての写真の中心に近い位置に、その写真はあった。

そこには、どこかの商店街を背景に、３人の人物が写っていた。やや目つきの悪い、黒い短髪の少年――――まだ幼い頃のジンの隣に、恐らくは彼と同じぐらいの歳であろう、余り手入れをしていなさそうな、青い髪を肩まで伸ばした、どこか野生味のある少女が写っていた。そして、その背後に、ちょうど高校を卒業した辺りの青年が、２人の肩に手をかけながら、ニッコリと笑っている――――というのが、その写真の構図だった。

その右下の方に、恐らくはジン自身が書いたのであろう、針金のように尖んがった黒い文字で、その写真の説明が記されている。そ

ここには、こう書かれていた。

『２０１０．９．５　ポロニアンモールにて　アヤ、湊さんと』

2nd Day『ミドリとCOMP』

「――っかしいなぁ…」

水道橋にて、一旦『天界』へと戻って行ったガブリエルと別れたセトは、東洋アンズ前まで来たところで思わず立ち止まり、そのように呟いた。

言うまでもなく、現在、彼がいる場所は、つい数分前までは有里淳とその仲間達が、ベル・デルの配下である悪魔達と、激しい戦闘を行っていた場所でもある。実際にその現場に居合わせていた訳ではないが、しかし、あちこちに見られる瓦礫の破片や、何かが焦げたような跡、切断されたコンクリートの支柱、そして何より、僅かに辺りに漂っている魔力の残滓（ざんし）などから、セトは、つい先程まで、淳達はここで悪魔と戦っていたに違いないと確信した。

となれば。

当然、セトがベル・デルの配下の内の1体である悪魔、クー・フーリンと戦っている際に、淳達の戦いへと加勢しに向かった二階堂（にかいどう）征志（ただし）も、ここにいて然るべき筈だが――しかし、幾らセトが辺りを見渡しても、そこに彼の姿はなかった。

しかし、カイドーの姿こそ見えないものの、そこが全くの無人であるのかと言えば、実はそうではなかった。むしろ、その逆である。少なくとも――セトは、ザッとそこにいる人間の数を調べた――間違いなく民間人だと思われる人間が、総勢で５０人前後、東洋アンズの出入口から、疲れきった様子でゾロゾロと出てきていた。

中には、体の所々に酷い怪我を負った者もいる。その余りの人間の多さに、セトは一瞬、面食らってしまった程だが――しかし、そのすぐ後に、彼は何故、この場にこれだけ大勢の人々がいるのかについて、ある程度の推測がついていた。恐らく、この人々は、淳達と悪魔達の戦いに巻き込まれないように、東洋アンズの中か、その下の地下街へと避難していたのだろう、と。

セトはこの時も、赤い甚平にボロボロの草履と言う、わざと目立つようにしているとしか思えない格好をしていたが、不思議な事に、そこにいる全ての人間は、誰1人としてそんな彼の格好に怪訝な視線を送ろうとはしなかった――が、見れば、セトはその状況については、特に不思議そうな表情をしていなかった。何故ならば、この不可思議な状況を作り出している張本人は、他ならぬ彼だからである。セトは現在、『女神』の力の内の1つ、『混迷の霧』を使用し、自分の体を纏うように、幻覚作用のある濃霧を発生させているのだ――まあ、さながらカメレオンのように、自分の姿を近くの風景と同調させて、周りの人間に気づかれないようにしている、とでも認識してもらえれば、それでおおよそ間違いではない。

ともかく。

セトは念のため、もう1度辺りを見渡してみた――が、それでもやはり、そこには大勢の人々が、疲れきった表情で、それぞれの自宅や、芝公園へと向かって歩いている姿が見えるだけで、他には特に何の異常もなく、やはり、カイドーの姿も見られなかった。まあ、半ば荒れ地同然となったその広場に対し、『何の異常もない』という見識を持つのは如何なものかと思うが、少なくとも、セトの興味感心を引き付けるようなものはなかった。

（――いや）

訂正、1つだけあった。

セトが何ともなしに、まるでゾンビの大群よろしく、ゆっくりとした歩調で歩いている人々を眺めていると――ふと、彼は見覚えのある人物の姿を見つけたのである。

「…？　ショウジちゃん？」

紫色のスーツに、鋭い目付き。肩まで伸びた黒髪を後ろで纏め、胸元には社員プレートらしき物を付けており、そこには『東海林』と記されている――となれば、セトが見つけたその女性は、やはりショウジで間違いないだろう。

「……」

彼女の様子を見る限り――どうやら、今の今まで、ここを歩いている人々の何人かに、インタビューをしていたところらしい。彼女が手に持った手帳に、何やら凄まじい勢いで何かを書き込んでいる様子から、セトはそのように推測した。

相変わらず、仕事熱心な奴だなあ、と、こんな状況にも関わらず、自分なりに出来る事を精一杯やろうとしているショウジを見て、セトは僅かに微笑ましい気持ちになった――が、そのすぐ後には、ちょっとした焦燥感が、彼の胸中をジワジワと侵食し始めた。

（待てよ…？　今、ここにショウジちゃんがいるって事は……）

東京内では現在、『悪魔』という異形の存在が、その数を確実に増やしつつあるが、しかし、『東京封鎖』が決行されてからまだ2

日近くしか経っていない今は、まだその存在に気づいていない者や、耳にしてはいるものの、全くそれを信じようとしない現実主義者も少なくない。

無論のこと、セトは悪魔の存在については、封鎖初日どころか、それよりも遥か昔から知っていたが、ショウジは間違いなく後者――耳にしてはいるものの、全くそれを信じようとしない現実主義者――に属している人間の筈だ。

否――属していた、と言った方が正確かもしれない。彼女の表情からは、その内心を窺い知る事が出来なかったが――セトは恐らく、ショウジは既に、悪魔の存在に気づいているのではないか、と思った。セトが予想した通り、彼女が今までこの場所にいる人達から、先程までここで何が起こっていたのかを聞いていたとするならば、そのように推測するのが自然だ。

だとしたら――。

「……」

セトは考える――彼はこれまで、ショウジとは様々な情報交換を行っていたが、その中には、決して『悪魔』や、それに類する超自然的（オカルト）なものに関する単語を組み込ませたりはしなかった。そう、彼は意図的に、彼女が悪魔の存在を知る事を――つまりは、自分と同じように、『こちら側』の世界に入り込んだりしないように仕向けていたのだ。

それについて、何故？　と聞かれれば、正直、セトにしても返答に困ってしまう――そもそも、冷静な観点から意見を言わせて貰えば、そういつまでも、ショウジに対して『悪魔』の存在を隠し通

すことなど出来るわけがないのだ。確かに、彼女は少々、偏狭で頑迷なところがあるかもしれないが――しかし、決して馬鹿というわけではないだろう。そこに、確信するより他にないだけの情報があれば、それがどれだけ現実離れした事であっても、彼女はそれを真摯に受け止めようとする筈だ。

確かめなければ、と、セトは思った。彼女が今、どれだけの情報を握っているのか、そうでなくともせめて、今は悪魔という存在を信じているのかどうか、という事だけでも――何となれば、その内容いかんで、今後の、セトのショウジに対する接し方がガラリと変わってくるからだ。場合によっては、自分が『ペルソナ使い』であると明かし、その上で、彼女を守る為に、常に側についている必要が生じてくるかもしれない。今のセトにとって、ショウジは貴重な情報源だ。少なくとも、カイドーを手元に置いておく為に必要な、『連続吸血事件』の情報に関しては。

「……仕方ねぇ、か。やれやれだぜ」

まあ、いいか。と、セトは思った。少なくとも今回の場合は、自分が原因で他人が巻き込まれた訳じゃないんだし――と。

彼は、自分の体を覆っている『混迷の霧』を解くと（たちまち、周りにいる人間が、突然、そこにワープしてきたかのように現れたセトに対して、恐れと驚愕に満ちた目を向け始めた）そのまま迷う事なく、ショウジの元へと足を進めた。

◆

◆

ちょうどその頃。

「にゃはははは～☆　待ってなさい、悪魔どもめ～！　天罰を与えてあげるわよ～！」

そんな電波的な少女の声が、水道橋にて木霊（こだま）していた。

全体的にピンク色が目立つ、まさしく『魔女っ娘』とでも評すべき外見したその少女――小牧翠（こまきみどり）は、片手に持ったＣＯＭＰを高々と掲げながら、水を得た魚のような勢いで、東京ドーム前の通り道を、凄まじい勢いで駆け抜けていく。

そして、そんな元気ハツラツ状態のミドリより僅かに遅れる形で現れたのは、髪を七三に分け、横に長い形をした眼鏡をかけた少年だった――言うまでもなく、高城圭介（たかしろけいすけ）である。

ミドリとは正反対に、彼はまるでたった今何十キロも走り込んできたかのように、激しく息を切らし、体中から滝のような汗を流していたが、それでも何とか彼女との距離を必死に詰めようと、ミドリの後を追い掛けていた。

「待って！　待ってよミドリちゃん！　それはオモチャじゃないんだ！」

ケイスケは大声で彼女へと呼び掛けるが、しかしミドリは、そんな彼の言葉などまるで聞こえないかのように、ドンドン走る速度を

上げていく。つい先程まで、悪魔に対してビクビクと震えていたのが嘘のようだ。どうやら、アツロウから貰った（奪った）改造ＣＯＭＰは、ちょっとした刺激剤のような効果を、彼女にもたらしたらしい。

余計な効果だ…。

本気でそう思うケイスケだった。

いや、ともすれば、悪魔が大量にはこびっている現在の東京において、常に明るく元気である事は、これ以上なく良い傾向であるのかもしれないが、しかし、その結果として、まるでフルマンソンをしたかのような疲労感に襲われる事となったケイスケとしては、今のミドリのはしゃぎっぷりは、余り歓迎出来るものではなかった。

「ああ、もう！お願いだから、少しは僕の話を聞いてくれーーーっ！」

悲痛に満ちた叫びをあげながら、それまでと同じように、ミドリの後を追い掛けていくケイスケ。

そして。

そんな2人の様子を、少し離れた場所から見ていた人物達がいた。否、見ていたという言い方は、やや正確性に欠けるかもしれない。より詳しく言うならば、その人物達が、たまたまこの水道橋という場所を通り掛かった際に、慌ただしい様子で走っていく2人の様子を、偶然目にした、と言った方が適切である。故に、その人物達――淳、アツロウ、ユズが、その2人の正体が、ミドリとケイスケであると認識した時には、2人は既に、3人の視界の外へと、完全

に走り去ってしまった。

「あれ？　今のって…」

と、ユズ。

「ケイスケとミドリちゃんだな…」

アツロウが言う。

「何やってんだろ？　こっちにも気づかなかったみたいだし…」

不思議そうに首を傾げている、アツロウとユズ。だが、いちいち考えていても仕方ない事だと判断したのか、ユズはその疑問を振り払うかのようにフルフルと頭を振ると、

「まあ、でも、とりあえず無事みたいで良かったよね」

と言った。

「ああ…にしても、ケイスケの奴、見るからに振り回されてたな…」

その顔に苦笑いを浮かべながら、アツロウが言う。

「でも、私達が頑張ったから、あの子も助かったんだよね？　私達って、ちょっと凄い！」

ユズは、淳に顔を向けながらそう言ったのだが――しかし、待てども待てども、彼から何かしらの返事が返ってくる事はなかった。不思議に思い、ユズが淳の方に顔を向けてみると、彼はミドリとケ

イスケが立ち去った辺りの場所にジッと目を向けたまま、何やら神妙な面持ちで黙り込んでいた。

「……？」

余りにも彼の表情が険しいので、ユズは一度、同じように淳の異変に気づいたアツロウと目を合わせると、やや躊躇いながらも、

「……ジュン？　どうしたの？」

と、淳に向かって声をかけた。

それでも、彼はしばらくの間黙っていたが、やがてようやく、「…『2』だ…」と、ポツリと漏らした。

「え？」

「『2』になってた気がする」

今度は、かなりしっかりとした口調で、そのように、ユズとアツロウに告げるジュン。すると途端に、ユズが何かに気づいたかのように、ハッとした表情になった。

「それ…って…まさか、2人の余命…？」

「あ、いや」

そうじゃなくて、と言いながら、ユズに向けて小さく手を振る淳。

「『2』だったのは、小牧ちゃんの方だけだ。ケイスケの方は、さ

っき見た時と同じように、『5』のままだった…。…何でかは分からねえけど」

ポリポリと頭を掻きながら、淳が言う。

「クソッ…！　マジかよ…！」

自分の足元にある地面を、やたらと憎しみの篭った目で睨みつけながら、吐き捨てるように、アツロウが言う。

「…一応、ケイスケが一緒だし、大丈夫だとは思うけど…。次に会った時、もう1度確認してみて、もし、それが見間違いじゃなかったら、教えてやらないとダメかもな…！」

「ああ…そうだな」

しかし。

口ではそう返したものの――実を言うと、淳が急に黙り込んだのは、ミドリの余命表示が、先程までとは違っていたからという、それだけの事ではなかった。いや、それだけでも十分に驚くべき事だが、更にもう1つ、彼はこの水道橋において、気になるものを見つけていたのだ。

「……」

その正体を詳しく確認する為に、淳は無言で歩き出し、『それ』が見える場所へと向かっていく。やがて彼は、水道橋に置かれている、1つのベンチの近くまで来ていた。いや、ベンチだったものと言うべきかもしれない。淳が見る限り、それはもう、ベンチとして

は機能しないような状態にあった。

「おい、ジュン。急にどうしたんだ？」

そんな彼の元に、後ろの方から近づきながら、アツロウが言う。当然、すぐ近くにはユズの姿もあり、どちらもが、突然の淳の行動に対して、怪訝な表情を浮かべていた。

「これ」

淳は、目の前にあるベンチ（だったもの）を指差した。

「見てくれ」

「ん？」と言いながら、淳の顔の横から、アツロウがそのベンチをよく見ようと覗き込む。

そこにあるベンチは、まるで割り箸をへし折ったかのように、２つに割れていた――と、最初にアツロウはそう思ったが、しかし、すぐにそうではないと気づいた。よくよく見れば、そのベンチは『割れている』訳ではなく、『切れている』のであった。更に正確に言うならば、『切られている』、と言うべきだろうか。どう考えても、何者かによる人為的な力によって、そうなったとしか思えない状態である。

「なんだ？これ…？」

眉をひそめながら、アツロウが言う。

「多分、つい最近、ここで何か激しい戦闘があったんだと思う」

と、淳。

「昨日、私達があの雪男みたいな悪魔と戦った時に、何かの拍子で切れちゃったんじゃないの？」

アツロウと同じように、淳の顔の脇からその真っ二つにされたベンチを見ながら、ユズが如何にもそれらしい推測を述べるが、淳はとうの昔に、そうではないという結論を、心の中で出していた。

淳がそう言うと、ユズはあからさまに顔をしかめて、「何で？」と淳に言う。

「分からないじゃん。私達かあの時現れた悪魔達の内の誰かが、『ザン』とかでこのベンチを切ったのかもしれないし」

しかし、そんなユズの見解に対して異を唱えたのは、淳ではなくアツロウだった。

「いや…俺も、淳の言う通りだと思う。これは昨日、俺達が雪男と戦った時に切られたものじゃない」

ユズが片方の眉をつりあげながら、そんな彼の横顔を見つめてきた為、アツロウは、

「ホラ、見てみろよ。この切り口…」

と言って、真っ二つにされたベンチの切断面を指差した。

「まるで、熱したナイフでバターを切ったみてーだ…。切断面が滑

らか過ぎる。俺達の内の誰が『ザン』を放っても、こんな綺麗に切る事は出来ないし、あの時に襲ってきた悪魔達にしても同じ筈だ。具体的に言うと、『ザン』でこのベンチを切ったりしたら、切り口はチェーンソーで切ったみたいな、荒々しいものになる筈だ。となると、俺達以外の誰かが――いや、何かが、ここで激しい戦闘をして、その時、何かの拍子にこのベンチを切ったと見るのが妥当だろうな」

――と、アツロウとしては、かなり分かりやすく、懇切丁寧に説明したつもりなのだが、この手の難しい話が大の苦手であるユズは、そんな彼の台詞の途中から、パチパチと目をしばたかせ、不思議なものでも見るような目でアツロウの方に顔を向けるのが精一杯だった。

「…アツロウ、何か言ってる事が難し過ぎて、よく分からないんだけど。もしかして、熱でもあるんじゃないの？」

ユズが言う。

「いや、別にそんなんじゃねえよ！ていうか、どうして今の説明で分からねえんだよ！？えーと、つまりだなあ…」

後ろの方で、アツロウが必死に、自分の推理をなるべく分かりやすくユズに伝えようとしているのを聞きながら、淳は、つうっ…と、人差し指で、その切断面をなぞった。まるで、絹のような滑らかさだ。一体、どれだけ鋭く、かつ速く技を繰り出せば、これだけ見事な切り口になるのだろう？

果たしてこれが、『ザン』や『嵐の乱舞』などの、対象を切断するタイプの魔法よって出来たのか、はたまた何かしらの刃物で切っ

た事によって出来たのかは定かではないが、どちらにせよ、このベンチを切った張本人（或いは、人じゃないのかもしれないが）は、かなりの手練（てだれ）に違いない、と淳は思った。

（コイツは…強いな…。一体、どこのどいつだ？）

そう思いながら、淳はさりげなく辺りを見渡した――よくよく見れば、このベンチ以外にも、これに似たような切り口が、いたるところに見受けられる。とはいえ、この状況を作り出した人物（？）が誰であろうと、その実行犯は、既にこの場を立ち去った後だろう。

しかし、それでも――。

「…お前ら」

唐突に淳が言葉を発した事で、それまで言い争っていたアツロウとユズは、ピタリと口を止めると、黙って淳へと顔を向けた。

「ケイスケや小牧ちゃんの事は心配だけど…。とにかく、今はここを離れた方がいい。何か、嫌な予感がするんだ」

「…？　どういう事？」

ユズが言う。

「どういう事か…ね。どういう事なのか分からないからこそ厄介なんだが……」

「「…？？」」

そんな淳の言葉に、益々分からないという顔をするユズとアツロウ。

だが、淳に限っては、1つだけ分かっていた――それは、先程も述べたように、このベンチを断ち切った張本人の戦闘力が、尋常ではないという事である。

（少なくとも――）

淳は考える。

（コイツは…ヤバイな。かなりヤバイ。さっきの、東洋アンズでの連中や、昨日戦ったウェンディゴよりも……もっと強力な存在……！）

これはまだ、本人も知らない事だが……かつて、『ニュクス』という絶対的存在から世界を救った、伝説のペルソナ使いの血を受け継ぐ有里淳の、戦闘における非凡な才能――そんな彼の第六感が、自分達が来るよりも前に、ここで戦闘を繰り広げていたのであろう『何か』の強さの片鱗を感じ取り、一刻も早くこの場を離れろ、と警告しているのだ。

（ヤバいな…。こんなの久しぶりだ…。コイツにだけは絶対に勝てない――なんて、こんな気持ちになったのは…！）

すっくと、淳は切断されたベンチから目を離し、その場で勢いよく立ち上がる。

「いいから…、ホラ、さっさと行くぞ」

そう言って、何やら早足で、その場から立ち去ろうとする淳。そんな彼の後ろを、結局、何だったんだという表情で、アツロウとユズは着いていくのだった。

2nd Day『カイドーの行方』

セトと一緒に歌舞伎町の通りを歩いている間、ショウジは頭の内側から頭蓋骨をハンマーで叩かれているかのような頭痛の嵐を、ずっと堪えていなければならなかった。それくらい、隣を歩いているセトの口から発せられた情報の数々は、彼女にとっては極めて信じ難(がた)いことだった。

「この世界には、大まかに分けて2つの世界に別れてる」

セトはご親切にもこう言った。

「――と言っても、それぞれの世界に、何か固有の名称がある訳じゃないけどな。…まぁ、基本的には、普通の世界――今までショウジちゃんがいた世界の事だが――と区別して、俺達みたいなのが住んでる世界を、『こっちの世界』って呼んでる。と言っても、これは俺の視点からの言い方であって、ショウジちゃんの方からだと、『そっちの世界』とかって言うのが適切なのかもしれないが…」

「ちょ、ちょっと、ちょっと待って」

今まで、何とか話についていこうしていたショウジではあったが、余りにも矢継ぎ早に展開されていくセトの説明に対し、流石にそろそろ彼女の情報処理能力にも限界がきたのか、ショウジはセトの顔の前に手の平を広げて、「待った」をかける。

「えーと…何と言うか、まあ…とりあえず、この東京という街に…その…『悪魔』っていう存在が現れ始めているのは確かみたいだけ

ど…」

彼女がついに『それ』の存在を認めざるを得ないようになったのは、つい先程の事だが――――とはいえ、それらしい予兆自体は、前々からあった。

◆

◆

彼女――――ショウジこと東海林は、ジャーナリストである。

しかし――――現在の東京の中において、『職業』という肩書きは、あまり意味を成さない。誰もが誰も、仕事などをしている場合ではないからだ。完全に封鎖された東京。都内全域の、突然の停電という極限の状況にあっては、それも無理はないだろうが。

だがショウジは、そんな状況にあっても、何とか自分の職務をこなそうとしている、希少な人間の1人だった――――数時間前、東京タワー下や芝公園などで、多数の悪魔達から民間人を守ろうとした、とある警察官と同じ人種である。現在のような厳しい状況に巻き込まれているにも関わらず、その警官が、本来の職務にのっとり、できるだけ多くの民間人の命を守ろうとしたように――――ショウジは、ジャーナリストの本来の職務にのっとり、この封鎖の『裏側』について、出来るだけ多くの情報を掴もうとしているのだ。

といっても、停電のせいで、殆どの電子機器――つまりは、携帯なども使えなくなっている為、情報を集める為の手段は、自分で足を動かし、手当たり次第に出会った人々から話を聞くという、極めてアナログな方法に限られてくる訳だが――まあ、ショウジは普段から、幾らでも改竄が可能な、パソコンや携帯の画面に表示されている文字よりも、直接、目の前にいる人間の口から発せられた言葉からでしか真実は得られない、と思っているので、それに関しては、特に苦にはならなかったのだが。

とにかく。

何故、彼女がそこまでして、この封鎖について必死に調べ回っているのか…。その理由については、以前にもどこかで述べたと想うので、この際はバッサリと省略するが――そんな感じで、ショウジが足を棒にしながら、大勢の人々から、この封鎖についての意見などを聞いていったところ、その途中で、彼女は様々な『噂』を耳にした。

曰く――この封鎖は、『怪物を逃がさない為』のものだ、と。

流石に、最初その噂を聞いた時は、ショウジは信じなかった。彼女は昔から、根っからの現実主義者で、『悪魔』や『幽霊』などのオカルトの類は、全てただの幻想だと切り捨ててきたのだ。

しかし――時間が経つにつれて、彼女は段々と、現在の都内で流行っている、『街中で悪魔が現れ始めている』という噂を、一笑に付す事が難しくなっていった。

封鎖内にいる人間にしては珍しく、ショウジはまだ、『悪魔』の姿を実際に目撃した訳ではないのだが――それでも、『悪魔』と

いう存在を信じざるを得ないような情報の数々を、彼女は掴んでいた。街のあちこちに残っている、巨大な肉食獣が引っ掻いたかのような、大きな爪痕や、到底、人の力で行えるとは思えない方法で殺されいた、凄惨な死体の数々（具体的には、全身の皮を剥がれた死体や、四肢をだけを無理矢理もがれた死体などがそうだ）など――――早い話が、それら全てを実行したのが、悪魔だと仮定すれば全て納得出来てしまうような情報が、そこにはあった。

しかし、それらの情報の、ぞっとするような恐ろしさも、つい先程再会を果たした、セトの口から発せられた言葉から受けた衝撃に比べれば、まだマシだった。それまで、お互いに有益だと思われる情報を交換し合っていた銀髪長身の男が、実は、自分は『ペルソナ使い』という存在だったのだと打ち明け、今まで『悪魔』の事などを黙っていてすまなかったと、ショウジに向かって謝罪してきたのだ。

その後、彼はこう言った。『ペルソナ使い』や『悪魔使い』という存在は（少数ではあるものの）、世界各地に存在し、基本的には、その正体を隠しながら、人間社会に紛れている。総理大臣や防衛大臣などの、一部の政府高官は彼等の存在には気付いているが、よほどの事がない限り、お互いがそれぞれの世界に干渉する事はまずない――――と。セトがそのように、まるで推理小説で探偵に追い詰められ、全てを観念した犯人のように次から次へと、今までショウジが夢にも思わなかったような事を説明している間、彼女は、一言も言葉を発しなかった。

更にセトはこうも言った。この世には『悪魔』の他にも、『シャドウ』という、人間に害を及ぼすモノが存在し、それらの脅威から人々を守る為に、『悪魔使い』や『ペルソナ使い』といった人間が存在するのだ、と。しかし、それらを生業として生活を送る、自分

のような人間は極めて少なく、それ故に、人間は常に、悪魔やシャドウに対して常に一歩リードされているような状況にある為、個人的(セトに)には(してみれば)、それが悩みの種である、と。そしてセトは、あまりにも非現実的な話を突き付けられて、呆然としているショウジの肩を、まるで兄か父親の雰囲気で叩いたのである（まあ、実際、セトはショウジよりも１０歳近く年上である為、セトは本当に保護者的な感覚でショウジに接しているのかもしれないが）。

「ま、心配すんなって」

と、現在、２人がいる歌舞伎町にまで歩いてくる途中に、セトは言った。

「流石にこれ以上、俺の正体をショウジちゃんに隠したままにする事は出来ないと思ったから、こうして話したってだけで、この封鎖が無事に終わった後は、この事は綺麗さっぱり忘れちまっても構わねえよ。今のところは、俺達『ペルソナ使い』と、ショウジちゃん達のような『一般人』は、基本的に平和共存だからな。にしても――」

ここでセトは、不思議なものでも見るように、ショウジの顔を見た。

「――お前は、俺が今までに会ってきた一般人の中で、１番物分かりがいいよなあ。俺がこうして『こっち側』の世界に説明してやった人間の中には、俺のことを頭ん中がとち狂った精神異常者だとか言って、それ専門の病院に放り込もうとした奴もいたもんだ」

その時の事を思い出したのか、苦虫を噛み潰したかのような表情をするセト。

――と、ようやくここで、ショウジの言葉を発する為の機能が、正常な働きを取り戻してきたので、彼女は、

「それって――つまり――ええと――貴方が言ってる事は、全部『真実』だってこと？」

と言った。彼女としては、ここからセトが『なーんてな！　ハイ！　エイプリルフールでしたー！』とでも言ってくれた方が、まだマシだったのだ。

しかし、ショウジのそんな一縷（いちる）の望みとは裏腹に、セトから返ってきた答えは、

「残念ながら、そうだ」

というものだった。

「でも…急にそんな事を言われても…」

「信じられないか？じゃあ――ほれ」

と言って。

セトは、突然ショウジの目の前で、指をパチンと鳴らしたかと思うと、次の瞬間には、青い光と共に、彼の頭上に、まるで幽霊のように半透明な、人の形をした『怪物』が現れた。

「…あー…」

ショウジが、半ば真っ白になった頭を、何とか元の状態に戻そうとしている間に、セトがもう一度指を鳴らすと、その『怪物』はまるで煙のように消えてしまった。

「これが、今言った『ペルソナ』ってヤツだ。『悪魔』に関しては、まあ、実際に見た時のお楽しみって事で――勿論、会わずに済んだのなら、それにこした事はないけどな」

流石に、このようにハッキリとした証拠を突き付けられてしまうと、ショウジとしては、セトの言葉を信じるより、他になかった。しかしそのせいで、彼女は東京中で『悪魔』が出現し始めているという事に気付いてしまった為――情けない話ではあるが――しばらくは、体の震えが止まらなかった。だからこそ、その後にセトが言った『しばらくは、俺と一緒に行動した方がいい』という提案には、心底ありがたいと思ったものだ。

◆

◆

そして――現在に至る。

「えーと…何と言うか、まあ…とりあえず、この東京という街に…その…『悪魔』っていう存在が現れ始めているのは確かみたいだけど…」

歌舞伎町の通りを、セトと一緒に並んで歩きながら、ショウジが言う。

「それじゃあ…つまり、本当なのね？　『政府が東京を封鎖したのは、怪物を逃がさない為だ』っていう噂は」

「ああ、まあな。それで間違いじゃない」

何やら含みがありそうな言い方で、セトが言う。

その後、しばらくの間、2人は無言だったが、やがて、ショウジが口を開いた。

「1つ――――気になる事があるんだけど」

「1つだけか？」

茶化すように、セトが言う。

「いいから、黙って聞いてよ――――ねぇ、セトさん、この封鎖における、貴方の『立ち位置』は、どういうものなの？」

「うん？」

ピタリ、と足を止めて、怪訝な表情で、ショウジの顔を見詰めるセト。ショウジもまた、同じように足を止めて、下から見上げるような形で、セトと視線を合わせる。

「どういう事だ？　俺の『立ち位置』って」

「そのまんまの意味よ――――貴方はさっき、自分でこう言ったわ。『自分のように、【悪魔使い】や【ペルソナ使い】を生業としてして生きる人間は少ない』って。それってつまり、貴方はそうだという意味でしょ？　そんな貴方が、この封鎖の中にいるのは、偶然巻き込まれたからに違いないって思うほど、私は無能じゃないわ」

「……」

少しの沈黙の後――――

「まあ、な。確かに俺は、今回の『東京封鎖』を、前から知っていた」

と、セトは言った。

「どうしてそんな事を知っていたのかについて、聞いても大丈夫かしら？」

ショウジには何となく、どのような答えが返ってくるのか予想がついていたが、それでも、念のため聞いてみた。

案の定、セトは、

「いやあ…、やめた方がいいと思うぜ？」

と言う。

「世の中には、知らない方がいい事もあるもんだ。…まぁ、安心しろよ。ショウジちゃんに教えるべきだと判断した場合は、ちゃんと教えるから」

そう言って、再び歩き出すセト。

「『ちゃん』はやめてってば」

以前までのように、定番のやり取りが出来るぐらいには、ショウジの心は、段々と落ち着きを取り戻しつつあった。

「ところで…今、私達は、どこへ向かってるの？」

再び、セトの隣について歩きながら、ショウジが言う。勿論、何故彼が、この『東京封鎖』について、前から知っていたのか――その理由が気にならなくなった訳ではないが、ジャーナリストとしての彼女の勘が、これ以上踏み込んだ質問をしても、何の意味もない、と告げていた。むしろ、かえって墓穴を掘るだけだ、とも。

「いや、別にどこか目的地があって、こうして歩いてる訳じゃないんだけどな…。まぁ、強いて言うなら、人探しだ」

セトが言う。

「人探し？」

小首を傾げるショウジ。

「ああ…前にチラッと話さなかったけか？俺が『連続吸血事件』を調べてるのは、とある不良と手を組む為だって。その『とある不良』って奴の名前が、『二階堂征志』って言うんだ。で、ソイツに力を貸してもらう条件として、俺はその事件の犯人について調べ上げる事を要求されてるって訳」

「…？　何で、その二階堂って人は、『連続吸血事件』の犯人が誰なのかを知りたがってるの？」

「んー…」

セトは、果たして言ってもいいのだろうか、という様子で低く唸った後、

「何でも、ソイツの兄貴が、その事件の被害者らしい」

と言った。

セトの言葉を受けて、ショウジは一瞬、目を見開いた後、何やら憂鬱（ゆううつ）そうな表情になる。

「『復讐』…ってこと？」

それに対して、セトは黙ったままだったが、その表情には明らかに、「言うまでもないだろ」という、彼の内心が現れていた。

「そう言えば…思い出したわ…。私があの事件について調べてた時、確かに、被害者のリストの中に、『二階堂』っていう苗字の人がいた筈…。名前は…ちょっとよく覚えてないけど……」

ショウジが言う。

「首筋から、全身の血を流して死んでた――っていうのが、遺体の状況だったんだっけ？　酷（むご）いよなぁ…。自分の兄貴がそんな目に合わされたとあっちゃ、弟のアイツが犯人に復讐したいと思っても、

全く不思議じゃない」

いつになく暗い表情で、セトが言う。

実のところ、セトは、カイドーの『犯人に対する復讐』という、彼の最大の目的に対して、あまり賛成的な意見を抱いてはいなかった。何故ならばセトは、そういった感情に取り付かれた人間の辿る末路は、決してロクなものではないと知っているからだ。

「……」

セトの脳裏にはこの時、1人の少年の顔が浮かんでいた。とは言え、その少年が『少年』と呼ばれて然るべき年齢であったのはずっと昔の話で、恐らく今は立派な社会人へと成長している筈だ――年齢で言うならば、恐らく20歳後半といったところだろうか？

（もし…今のアイツ（カイドー）の姿を見たら、君は何て言うんだろうな…天田（あまだ）君）

天田乾（けん）。

それはかつて、セトがまだ、中学生だった頃――つまりは、特別課外活動部（S.E.E.S）の一員だった時代に、同じく、その部に所属していた、1人の少年の名前だ。

彼もまた――今のカイドーと同じように、復讐に取り憑かれた人間の1人だった。

基本的に、特別課外活動部に入部するメンバーの大半は、その身に宿した天性的な力（ペルソナ）をかわれて、その時、部に在籍しているメンバ

ーから勧誘を受けて入部するケースが多い。

しかし、天田の場合は例外で、彼は（それまでに様々な紆余曲折があったものの）自らの意思で、特別課外活動部に入部したのだ。

『ある男』に、復讐する為に。

それだけの――――為に。

結論から言うと、彼の復讐は失敗した。

最終的に、彼が憎んでやまなかったその人物は生き残り、幼き日の天田が、その手を血で染める事はなかった。

しかし、それでも。

間一髪のところで、彼はその身に『殺人者』という烙印（らくいん）を押さずに済んだものの――――結果として、その心には、深い傷痕が残ってしまった。

『罪悪感』――――。

もし、言葉で表すとするならば、それが1番適切な言葉だろう。

たとえ、そこにどのような理由があれうとも――――人を殺していい理由にはならない。勿論、世の中には、それでも自分と同じように生きている人間に手をかける輩（やから）が、少なからずいるが――――そういった人種が辿る末路は、大抵、惨めなものである。

そう。

人殺しは、どこまで行っても人殺し。

或いは――――そうなるのを免れただけでも、天田は運が良かったと言えるかもしれない。

もし、彼の復讐が達成された暁には――――彼は、もはや『人』として生きていく事は、不可能になっていただろう。

そう――――。

現在の、瀬多総司のように。

「……ん？」

と。

そこまで考えて――――セトは、唐突に足を止めた。横では、そんな彼の様子に当然の如く気付いたショウジが、同じように足を止め、「どうしたの？」と彼に尋ねている。セトはその問いには返事をせず、グルリと首を回して、現在、自分の目の前に広がっている風景を見渡した。

「……？」

一見すれば、そこにある風景――――既に時刻は、夜の7時を指そうとしている頃の歌舞伎町の風景には、特に変わったところはないように見える。いや、人っ子一人いない上に、目につく多く店の窓に、大量の血痕が付着している様は、『東京が封鎖される前の歌舞伎町の様子』からは遥かに掛け離れたものではあったが――――そんなものは、今のセトの興味を引く対象にはなりえなかった。

（…にも関わらず――――なんでだろうな？俺には、この風景の『何か』が引っ掛かる…。一体、何が引っ掛かるんだ？）

「…セトさーん？」

隣にいるショウジがそう言いながら、セトが着ている甚平（じんべい）の袖の端をチョイチョイと引っ張っているが、セトは未だに、そんな彼女の様子に構う気配を見せない。彼の意識は現在、『自分は今、一体この景色のどこに【違和感】を感じているのか？』という疑問の答えを見つける事だけに注がれていた。

そして――――。

「……？」

やがて、彼の視線は、ある一点に定められたまま、動かなくなった。が、次の瞬間には、彼は早足で、それがある場所にまで、早足で歩いて行っていた。

「あ、ちょ、ちょっと！」

そんな声を上げたショウジが、背後から慌てて自分の後を追ってくるのを気配で感じながら、セトは身を屈めて、それをマジマジと観

察した。

それは、言うなれば、一枚の黒いボロ布だった。一言で言い表すとしたならば、そう説明するしかないだろう。

しかし――セトには、その、一見すればどうという事はなさそうな黒いボロ布に見覚えがあった。

（これは…もしかして…）

その、一枚のボロ布は。

見ようによっては、カイドーが着ていた、黒い繋ぎの服に――――見えなくもなかった。

「おいおい…」

セトは無意識の内に、その布に手を伸ばして――間髪入れずに、すぐにまた手を離した。隣では、そんなセトの様子を、彼と同じように身を屈めたショウジが、怪訝な表情で見つめている。しかしその表情は、布から手を離した後の、セトの指に付着しているあるものを見て、あっという間に驚愕のそれへと変わった。

「それ…って、血？」

「多分な」

胸の中にある嫌な予感が、どんどん大きくなっていくのをハッキリと感じながら、セトは、指先についている赤い液体を、指同士で擦り合わせた。そこから伝わるヌルリとした感触から、セトは、ま

だこの血が外気にさらされてから、それほど時間は経っていない事を悟った。

セトは、ゆっくりと顔を上げた。その視線の先には、1つの路地の入口があった。彼は頭の中で考えをまとめるよりも遥かに早く、行動を起こしていた。

弾けるようにその場で立ち上がると、迷う事なくその路地の入口へと足を進めていく（そんなセトの後ろからは、「もう、一体何だって言うのよ！」と言いながら、ショウジがついて来ていた）。ただでさえ、路地裏と言えばどこか薄暗い印象があるのに、停電のせいで、その印象が更に際だっていた。

まるであの世にでも繋がっているのでは、と思う程に暗くなっている路地裏を、セトはどんどん進んでいく。彼は、自分が一歩、また一歩と足を動かす度に、周囲の温度が少しずつ低くなっていくかのような錯覚を覚えていた。

進みながら、セトは自分の鼻孔（びこう）に、明らかに血の香りとしか思えない、鉄のような匂いが入ってくる事に気づかない訳にはいかなかった。彼の胸の内で渦巻いている嫌な『予感』は、もはや『確信』に変わりつつあった。

「……何かしら、コレ？　何かを削ったような跡に見えるけど…」

そう言ったのは、ビクビクしながらセトの後ろをついて来ているショウジだ。セトが彼女と同じ方向に視線を向けると、確かに、そこの壁には何かで強く削ったかのような跡があった。しかも、辺りを見渡せばそこだけではなく、周囲にある壁の殆どが、まるで誰かが酷く暴れたかのように傷付けられている。

「…くそったれが」

思わず、そのように呟くセト。

やがて、彼とショウジは路地裏を抜けて、１つの開けた空間――『チネシティ広場』へと辿り着いていた。

そして、ついにセトは、それを見つけた。

……見つけてしまった。

その広場の中心に、彼はいた。

チネシティ広場の中心で、二階堂征志の体は、血だまりの中に沈んでいた。

2nd Day『チネシティ広場のバトル（2）』

「……っ！」

当然セトは、最初の方こそ、若干戸惑ったものの、すぐに気を取り直すと――――目にも止まらぬ速さで、それのすぐ側まで駆け寄った。

『それ』。

とは――――すなわち、チネシティ広場の中心にて、体から大量の血液を流しながら横たわっている、二階堂征志のことである。

「……あ、……え？　…ちょ、……これって、どういう――――？」

先程まで、セトが立っていた場所のすぐ近くでは、ショウジがそのような声を漏らしながら、混乱の極みに陥（おちい）っていた。世間一般で言うところの『平穏な日常』とは、これ以上なく掛け離れた状況を目の当たりにして、彼女は今、自分の状況把握能力を、正常に機能させることが出来なくなっていた。

そんなショウジには一切構わずに、セトは、倒れているカイドーの傍らでサッと身を屈めると、容態を確認する為に、彼の全身に目を走らせた。

現在、カイドーが大量の血を流している原因となっている傷口は、すぐに見つかった。見れば、右肩の位置に、まるで大きな釘を無理矢理打ち込んだかのような、ちょうど大人の人差し指1本分ほどの

穴が、円形状に残っていた。それは、見ようによっては、巨大な獣に噛まれたかのようにも見えた。

「…やっぱり、悪魔の仕業か」

ボソリ、とセトが呟く。

更に、これだけ近くでカイドーの容態を観察したことで、ここにきて初めて、セトは、カイドーの体が細かく震えている事に気付いた。恐らく、血液を失ったことで体温が低下し、それを補う為に、体の方が、自動的にシバリング（体を震わせて、体温を上げようとする人体の機能）を行っているだろう。

「だ、大丈夫なの？　その人」

ようやく、なんとか状況が飲み込めてきたのか――――いつの間にか、セトのすぐ近くにまで来て、彼と同じように、その場で身を屈めて、現在のカイドーの状態を、怯えた目で観察しながら、ショウジが言う。

セトは、それには答えずに、すぐさま、カイドーの傷の治療を開始した。とにかく、まずは止血をしなくては。彼はペルソナ『だいそうじょう』（骸骨が、位の高そうな山吹色の法衣（ほうい）を着たような姿のペルソナ）を召喚すると、そのまま高等回復魔法である『ディアラハン』を発動させて、その傷口を塞いだ。

何とか止血には成功したものの、既にかなりの血を失ってしまっているが為に、カイドーの顔色は、依然として優れないままだった。『ディアラハン』などの回復魔法は、ある程度の外傷を癒（いや）すのには、十分な効果を発揮するものの、一度失った体力や血液までは元に戻

すことは出来ないのが難点だった。

無理もない事だが――カイドーは、完全に気を失っていた。当然、その気になれば、セトは彼の意識を無理矢理目覚めさせる事も出来ただろうが、しかし、彼はそうしなかった。勿論それは、先程挙げた体力や血液の消費うんぬんの話も理由の1つではあるが――それよりも、セトが現在のカイドーについて心配したのは、肉体的ダメージよりも、精神的ダメージの方だった。

悪魔に襲われ、これだけの傷を負わされたという事実が、彼の精神面に与えた影響は、決して小さくない筈だ――仮に、傷をつけられるような事がなくとも、『悪魔に襲撃された』というだけで、並の人間ならば、かなりの精神的影響を受けるものだ。2日前、初めてCOMPから悪魔を喚び出した後の谷川柚子(たにかわゆず)の動揺の程を見れば、それは明らかである。

無論それは、カイドーにしても例外ではない。確かに彼は、大多数の人間よりは、遥かに強い心の持ち主ではあるのだろうが、これだけの精神的ダメージを――少なくとも、今日中に治すのは至難の業(わざ)だろう。ならば、ここで無理に彼を起こして、わざわざ悪魔に襲われた時の状況を思い出させるのは、全く意味がない――というのが、この時のセトの見解だった。

(――とにかく、先ずはコイツを、どこか落ち着ける場所で、ゆっくりと休ませないとな)

そう考えると、セトは、

「なあ、ショウジちゃんの自宅って、この封鎖内にあるのか?」

と、ショウジに尋ねた。それに対して、彼女は首を小さく横に振ると、

「ううん…ごめんなさい…」

と言う。

「そっか…」

ショウジの返事を受けて、セトはなるべく落胆を表に出さないよう、最大限の努力をしたつもりだったが、ショウジがますます申し訳なさそうな顔をしたところを見る限り、どうやら、あまり上手く隠しきれなかったらしい。まあ、男2人を自分の家に上げる事に対する抵抗感から、彼女が嘘をついているという可能性も、決して零（ゼロ）ではないだろうが――まさか、このような状況で、そんな理由でセトの頼みを無下にするほど、彼女も馬鹿ではないだろう。

まあいい、と、セトは思った。それならそれで、宮下公園や芝公園などのベンチの上に、ゆっくりと休ませればいいだけの話だ。決して、屋内よりは衛生的とは言えないが、カイドーの生命力ならば、その程度は全く問題にならないだろう、とも。

「……で、結局、この人は誰なの？　セトさんの知り合い？」

ややあって、ショウジが言う。それを受けて、セトは2、3度ほど目をパチクリさせると、

「何でそう思うんだ？」

と言った。

「なんとなく」

小さく肩を竦めながら、ショウジが言う。セトは、「鋭いな、相変わらず」と言って苦笑した後、次のように話した。

「実は、さっき言った『連続吸血事件』に関する情報を欲しがってる不良ってのは、コイツの事なんだ」

「あ…そうだったの？」

意外そうな顔をするショウジ。

「おいおい――『だったの』、なんて、過去形みたいな言い方はやめろよ。……今のコイツの容態じゃ、それもあんまり洒落（しゃれ）にならない」

片方の眉を吊り上げながら、セトが言う。それに対し、ショウジは、

「確かに…見れば見るほど、酷い怪我……だったわよね」

と返した。またも過去形の言葉を用いた彼女ではあったが、この場合は、『カイドーの傷は、セト（のペルソナ）によって完全に治療された』という意味なので、決して悪い意味ではない。

とはいえ。

それでも――先程まで、カイドーがどれだけ酷い怪我をしていたのかは、今もなお、彼の右肩に残っている複数の痣（あざ）を見れば、ハ

ッキリと窺い知ることが出来た。

ショウジの傍らで、セトは思う。

ペルソナの力は、どんな事でも思い通りになるような万能の力では、決してない。あまりにも、対象の肉体的損傷が深すぎる場合、例え、回復魔法でその傷口を癒したとしても、今のカイドーのように痣となって残るか、最悪、なんらかの後遺症が残ったり、治療自体が十分に出来ない場合もある（例えば、完全に生命活動が停止した人間を蘇らせる程の回復魔法の使い手は、この世には存在しない。セトが知る限り、その方面では誰よりも長けた能力を持つガブリエルでさえ、それは不可能だろう）。

「一体、誰がこんな酷い事をしたのかしら…？」

ショウジが言う。

「『誰が』っつーよりは、『何が』って言った方が正確だろうな。さっき、俺が聞かせた話を、もう忘れたのか？　カイドーをこんな目にあわせたのは、間違いなく――――」

と。

セトがそこまで言った、その時だった――――突如、2人の背後から、獣が低く唸っているかのような鳴き声が聞こえてきたのは。

当然の如く、それを聞き取ったセトが、ピタリと口を閉じる。隣では、ビクッとした様子でその方向に目を向けたショウジが、これ以上ない程の恐怖の表情を浮かべていた。

「せ――――セトさん！」

そんな風に、ショウジが慌てて、自分の名前を呼んだから――――という訳ではないが、セトもまた、ゆっくりと、ショウジと同じように、『それ』がいる方向へと目を向けた。

「――――カイドーをこんな目にあわせたのは間違いなく、『こういう奴』だろうよ」

セトが言う。

おかしいとは思っていた。

1つは、『この場所』。

そもそもカイドーが、数時間前、セトの元を離れた後、本当に東洋アンズの戦いへと加勢に行ったのだとしたら、なぜ彼は、このような場所に倒れているのか――――と。ここ、チネシティ広場（この広場がそのような名前である事を、セトは知らないのだが）という場所は、水道橋から東洋アンズまでの間にある道からは、大分離れた位置にあるのだ。

勿論、別にセトは、カイドーとは、『後で落ち合おう』と約束していた訳ではないので、東洋アンズでの戦いを終えた後、彼が、1人でこの辺りをブラブラしていたところを、突然、悪魔に襲われたという可能性もなくはないだろうが――――それを差し引いても、おかしい点はまだある。

それは――――カイドーが今、こうして、生きているという事だ。

まあ、言うまでもなく、だからといって五体満足であるという訳では、決してないのだが――それでも、もし彼が悪魔に襲われたのだとしたら、こうして生きている事自体が、本来ならありえないのだ。悪魔とはそもそも、一度対象に選んだ人間の命を完全に奪うまでは、その攻撃活動をやめるような事は（よほどの事がない限りは）ありえないのだから――それは、理屈や理由などといった話ではなく、『悪魔』という存在とは本来、そういうものだからである。

他に考えられる事があるとすれば、セトとショウジがここへ来る前に、他の何者かが、危うくカイドーが悪魔に殺されそうになった時に、間一髪のところで、彼を助けたという事などが挙げられるが――それでは、ロクに治療もされていないまま、深い傷を負ったカイドーが広場のど真ん中に放置されていた事に、説明がつかない。

「とくれば――考えられる事は1つだ」

セトは、目の前にいる『それ』から、倒れているカイドーと、ショウジを守るように、2人の前に一歩進み出ながら、そのように言う。

「やれやれだぜ――どうやら俺達は、まんまと嵌められたみたいだな」

そこには、1体の悪魔がいた。

獅子（しし）の顔と前足に、腹部から後ろの方にかけて、蟻（あり）の体を持つ悪魔。

妖虫『ミルメコレオ』――――である。

「……あえて襲った獲物を、傷つけながらも生かしておき――――血を流させる事で、他の仲間をおびき寄せる……。有名な戦術の内の1つだ。俺もやったことがあるから分かる」

パキパキと両の拳を鳴らしながら、セトは、油断なくミルメコレオを姿を見詰めている。

「こ……コイツが、『悪魔』…！？」

と、ショウジ。

「下がってな、ショウジちゃん」

しかし。

今までに見たこともないような、醜悪な外見をした生物を前に、完全に怯えきっているショウジとは違い――――不思議な事に、セトの方は、非常に落ち着いていた。

否、セトに言わせて貰えば、それは不思議な事でも何でもない――――彼自身には既に、その理由が分かっていた。目の前にいるミルメコレオ（この悪魔の名前がそういったものである事もまた、セトは知らないのだが）は、数時間前に、水道橋で戦ったクー・フーリンという悪魔よりは、遥かに見劣りする。セトはまだ、ミルメコレオの実力を目の当たりにした訳ではないが、ペルソナ使いとして、世界中で活動してきた長年の経験から、その程度の事は理解できた。

「下がってろ…って、まさか貴方、コイツと戦う気！？」

とはいえ――――当然、彼がそれほどまでの戦闘能力の持ち主である事を知らないショウジにしてみれば、今やすっかりバトルパートへと移行する気満々のセトを、正気じゃない、という様子で見ていた。

「何を言ってるの――――？　それよりも早く、ここから逃げましょう！　全力で走れば――――」

「――――何とか逃げ切れる筈だ、ってか？カイドーを抱えながらじゃ、それは多分無理だろ。誰かがこの場で人身御供（ひとみごくう）をかって出るって言うんなら、話は別だが」

ちなみに、『人身御供』とは、正確には、このような状況で使う言葉ではないのだが（なにせ、相手は悪魔なのだ）、残念ながら、それを指摘してくれる人物は、この場にはいなかった。

瞬間。

ゴガアアアアッ！！

――――と、ミルメコレオが、獣特有の獰猛（どうもう）な吠え声をあげた。それを聞いて、セトは反射的に、若干腰を落とすと、足を肩幅に広げ、相手の方から半身に見えるように構える事で、いつでもミルメコレオの動きに、即座に対応できるようにする。

「まあ、とにかくショウジちゃん、ここは下がってろって――――カイドーを頼む」

やがて、セトとミルメコレオは睨み合い、同時に、互いに距離を

取り合ったまま、ゆっくりと円を描いて動き出した。

ショウジは、ミルメコレオが今にも、セトの喉笛に噛み付いて、彼をズタズタにしてしまうのではないかと、心底恐ろしかったが――それでも、ジャーナリストとしての本能が、この戦いから目を逸らすな、と絶え間なく告げていた為、彼女は目を逸らずに、（怯えながらも）じっとその光景を見詰めていた。

しばらくして――お互いに、相手の顔を睨み合う事に飽きたのか、唐突に、セトとミルメコレオとの間にある、硬直した空気が崩れた。

先に動いたのはミルメコレオの方だった。カッ！と大きく口を開き、その中にズラリと生えそろっている牙に涎を滴らせながら、猛然とセトへと突っ込んでいき、先程、ショウジが危惧したように、彼の体を噛み砕こうとした。

その攻撃を、セトは、体をクルリと回転させながら、横に移動する事でかわすと――そのまま、回避中に強く握り込んでいた右拳で、ミルメコレオの横っ面を殴りつけた。セトに噛みつこうとしていた凶悪な牙は軌道を逸れ、先程、セトの顔があったところよりもややずれた場所で、カツンと音を鳴らした。

しかし、その様子とは裏腹にミルメコレオは、まるでダメージなど感じさせない様子で、すぐさま空中で体勢を取り戻すと、地面に着地するな否や、すぐに、再びセトへと向かって突貫した。

「――っと！」

てっきり、今の一撃で、広場の向こう側にまで吹き飛ぶであろう

と思っていたセトは、一瞬、反応が遅れてしまった。その為、回避動作には移らずに、先程、殴りつけた右腕を、咄嗟に顔の前にまで持ってくることで、ミルメコレオの牙を防いだ。

常人ならばあっという間に、骨ごと腕を噛み切られているところだろうが――しかし、セトの強靭（きょうじん）な筋繊維が、その鋭い牙を凄まじい圧力で締め付け、逆にミルメコレオの動きを抑えつけていた（それでも流石に、噛み付かれた部分からは、いくらかの血が噴き出していたが）。

セトは、自分の腕にかぶりつくミルメコレオを見て、何故か、一度「ハアッ」とため息をつくと、

「…弱えな。どこかの魔剣士より全然弱え」

と言う。

次にセトは、まるで、飼い犬の頭を優しく撫でようとするかのように――スッ…、と、空いた方の左手を、ミルメコレオの頭へと近付けた。

それだけで。

たった――それだけの動作で。

「……っ！！」

その手を向けられた、ミルメコレオは――戦慄（せんりつ）した。

そして、瞬間。

今もなお、セトの腕に歯を食い込ませている最中の、ミルメコレオの頭部が――――爆発した。

皮膚が断裂(だんれつ)し、

頭蓋骨が砕け、

血飛沫(ちしぶき)が舞い、

眼球がはみ出し、

脳漿(のうしょう)が飛び散り、

そして、当然の如く、ミルメコレオは、その一撃で、あっという間に絶命した――――。

――――と、思った、その時。

「ギャオンッ！！」

ミルメコレオは。

まだ――――セトの左手が、その頭に触れるか触れないかという内に、ミルメコレオは大急ぎで、今の今までは噛み砕こうとしていたセトの右腕から牙を抜き取り、弾けるように後方へと飛んで、セトとの距離を開けた。

その余りの勢いに、ミルメコレオの４本の足は、地面に着地した後も、数秒の間は、まるで着陸した直後の飛行機のように、チネシ

ティ広場の固い地面の上を滑っていた――その時に生じた摩擦熱によって、ミルメコレオの足と擦れた部分の地面から、チリチリと火花のようなものが飛び散る。

「……っ！　……っ！」

ハー…、ハー…、と、ミルメコレオは、それほど激しい運動をした訳でもないのに、絶え間無く口から酸素を出し入れしていた。

それほどまでに――先程、セトの左手が動いた時に、ミルメコレオが見た『幻覚』は、強烈なものだった。

『幻覚』――そう、『幻覚』だ。

今、セトが放った、ほんの僅かな『殺意』だけで。

ミルメコレオは――確信してしまった。

目の前にいる、1人の人間の雄（しょくりょうおす）と、悪魔である自分との間に広がっている、歴然とした、実力の差を。

今の、セトの手によって、頭が粉々に砕かれ、あっという間に命を奪われる――という出来事は、その実力差ゆえに、ミルメコレオが見た『幻覚（イメージ）』だったのである。

「……いい反応だ」

セトが言う。

とはいえ。

ミルメコレオが感じた印象とは裏腹に、たった今、セトが放った殺意は――――むしろ、彼の器量からしてみれば、それは『殺意』というほど大袈裟なものではなく、精々が、赤ん坊の我が儘に、親が苛立ちを覚える程度の、ほんの些細な激情に過ぎなかった。

しかし、それでも。

それによる結果は、ご覧の通り――――その微々たる『殺意』は、ミルメコレオを後退させ、ゆっくりと体勢を整えるには、十分過ぎる効果だった。

現在のミルメコレオの心境は、一体、如何なるものか。

つい先程までは、ただの食料としか見ていなかった人間に、ここまでの実力差を示された――――ミルメコレオの心境は。

そんなミルメコレオの様子など、どうでもいいというかのように、セトが言う。

「俺の一撃を受けたにも関わらず、咄嗟に反撃へと移れる程の、『昆虫』の耐久性に、『獣』特有の、今の反応の良さ――――なるほどなー。そのキモい見た目に反せず、ちゃんとそれぞれの生物の利点を受け継いでるって訳か」

流石に、クー・フーリンより上という事はありえないが――――それでも、このミルメコレオの実力が、悪魔の中でもそこそこのものである事は、セトには容易に想像がついた。

そして。

そんなセトの様子を――彼より数メートルほど離れた場所で、瀕死のカイドーの側につきながら、ショウジは、ジッと見ていた。

彼の――『ペルソナ使い』としての、セトの表情を。

ジッと――見ていた。

ミルメコレオが、セトの実力の程を確信したように、彼女もまた、こちらの方が、セトの本来の姿に違いない、と確信していた。

並の精神の持ち主ならば、一目散に逃げ出すに違いない、人外の光景を目の当たりにしながらも――しかし、ショウジは逃げなかった。そこには、負傷したカイドーと、自分達を守る為に戦っているセトを置いて、自分だけ逃げ出す事など出来ないという、良心からくるもっともな気持ちも当然、あるだろうが――それ以上に、目の前の現実から決して目を逸らしてはいけないという、ジャーナリストとしての『誇り』が、彼女の恐怖心を打ち破っていた、という事の方が、理由としては大きいだろう。

セトの実力を肌で感じた為か――先程までとは違い、ミルメコレオは、すぐには、彼に飛び掛かろうとはしなかった。低く唸りながら、セトを中心にゆっくりと、円を描いて歩いている。セトの方はというと、動物園の檻から逃げ出したライオンよりも、遥かに凶悪に違いない生物を前に、コキッ、コキッ、と暢気（のんき）に首を鳴らしていた。

そして、ショウジ――彼女は、微かな呼吸の音でさえ、普段の倍以上の大きさで聞こえてきそうな程の、ピリピリとした緊張感が漂うその光景から目を離さないまま、無意識の内に、１歩、脚を前

に踏み出していた――――もっとよく見たい。

何の前触れもなしに、セトの方が動いた。瞬間移動という言葉でさえ、まだ乏しく聞こえてしまいそうな程の速さで、一気にミルメコレオとの距離を零（ゼロ）にする。ミルメコレオがそんな彼の動作に気づいた時には既に、セトは左手を腰より後ろの位置に引き、十分に勢いをつけて、ミルメコレオの首に手刀（しゅとう）をお見舞いしようとしているところだった。

しかし、その左手が『死』を突き付けるよりも僅かに速く、ミルメコレオは回避行動を取り始めていた。今の今までその体があった場所に、まるで日本刀のように重い威力を持ったセトの手刀が、凄まじい風切り音と共に繰り出される。

ショウジはてっきり、セトが次の動作に移る前に、ミルメコレオが彼へと反撃を仕掛けるに違いないと思っていたが――――しかし果たせるかな、ミルメコレオは、そのままセトとの間の距離を空け、再び様子見に徹（てっ）し始めた。

「うん？」

――――と、そんなミルメコレオの様子を見て、疑問の声を上げるセト。どうやら、先程セトが放った『殺意』が、ミルメコレオの精神に与えた影響は、彼が思っている以上に大きかったらしい。

「…やれやれだぜ」

面倒だな、と思いながら、そのようにセトは呟く。

「中々どうして、回避能力だけは、そこそこ優秀じゃねえか――――

大方、今のままじゃ勝ち目がないと見て、何とか持久戦に持ち込み、俺が油断するのを待つって寸法か？」

如何にも「仕方ねえなあ」という様子で、セトが言う。

「まあ、俺の『殺意』を肌で感じておいて尚、まだ逃げようとしないだけでも、十分に及第点だが――生憎と、こっちは一刻も早くカイドーの治療をしなきゃならないんでな。下らねえ我慢比べに付き合ってる暇はねえんだよ。…悪いが、とっとと終わらせて貰うぜ」

そう言って――セトは、先程よりも遥かに純度の高い闘気を身に纏いながら、緊張に満ちた様子のミルメコレオへと、冷たい視線を向けた。

『悪魔』と『人間』の、人知を越えた戦いが、再び始まろうとしているのを見て、ショウジは、期待に胸を弾ませていた――やはり、真実を掴む為に、あえて危険をおかしてまで、この『東京封鎖』へと身を投じたのは、無駄ではなかった。そのお陰で、今まさに自分は、その『真実』と密接に絡んでいるに違いない『悪魔』と、そして『ペルソナ使い』とやらの戦いに立ち会う事が出来ているのだ。果たして、どのようにすれば、この奇跡のような光景を、多くの人々に伝える事が出来るのだろう？　自分の乏しい才能を恨みながら、ショウジは我を忘れて、目の前の闘いへと全ての意識を集中させた。

――と、その時だった。セトが再び、ミルメコレオとの距離を縮める為に、1歩踏み出そうとした瞬間、彼とミルメコレオとのちょうど中間の位置に、激しい轟音と共に、いくつもの落雷が降り注いできたのは。

「……っ！？」

当然――自然的な気候の変化によって落ちてきたものでは、断じてない。だからこそセトは、その落雷――『マハジオ』を発動させた張本人を見つけ出す為に、すぐさま辺りに視線を走らせたのだ。

やがて彼は、動かしていた目を、ある一点に向けたところで、ピタリと止めた。そこには、２つの人影があった。

より正確に言い表すならば。

１体の悪魔と。

１人の男性の姿が――そこにあった。

とくれば、必然。

その男性が、傍らの悪魔を使役し、『マハジオ』を発動させ、先程の落雷を落としたと見て間違いないだろう――と、セトは思った。

そんな彼より、コンマ数秒ほど遅れて、ミルメコレオとショウジが、そこにいる男性へと、目を向ける。

白いワイシャツの上に、黒いウエストコートを着込み。

下には、同じく黒いスラックスを履いている――その男。

神谷詠司（かみやえいじ）が、その両目に、混じりっけのない怒りの炎を点（とも）らせて。

1体の仲魔――幻魔『タケミカヅチ』と共に。

ただ単純に、そこに存在していた。

2nd Day『チネシティ広場のバトル（2）―2』

神谷詠司（かみやえいじ）。

彼をよく知る者達からは、親しみを込めて『ジン』とも呼ばれているその男は、チネシティ広場での、セトとミルメコレオとの闘いに介入するよりも数分前、廃（すた）れた歌舞伎町の通りを、得に何をするということもなく歩いていた。

見れば、この時の彼の様子は、どこかおかしかった。いや、『どこか』ではなく、ハッキリと『様子がおかしい』と断言した方が良いだろう。先程言ったような、普段から彼を『ジン』と呼ぶような人間ならば、今の彼の状態が、平時の時よりもどれだけ違うのかについて、すぐに気付く事ができた筈だ。普段は清潔さを保っている筈の、黒を基調とした衣服はところどころが破けており、口の端からは血を流し、その口で呼吸をする度（たび）に、肩が大きく上下している事から、現在、彼がどれだけ激しく息切れしているのかが分かる。その疲労の濃（こ）さと言ったら、まるでたった今、何十キロにも及ぶマラソンを終えてきたかのようだった。

それはさておき。

なぜ、この時――彼がこのような場所を出歩いているのかと言うと、勿論、そこにはれっきとした理由があった。

ジンの脳裏には、現在、自分が娘のように気にかけている、1人の女性の顔が浮かんでいた。

否、顔だけではなく。

つい先程――自分の職場であるバー『ＥＩＪＩ』にて、その女性が、自分に対して発した言葉も、だ。

『――そんなの…外で散々見たよ！　……それより、どうしてジンまで！？』

「……」

全く、後ろめたくなんかない――と言えば、それは嘘になる。

ふとジンは、現在、自分が左手に持っている携帯ゲーム機――通称『ＣＯＭＰ』へと視線を向けた。

それこそが、その女性――『ハル』が、ジンに対して、今のような台詞を発した、何よりの原因だった。

しかし。

それは、見た目こそは市販のＣＯＭＰと同じだが、その中に内蔵されている機能は、普通とは明らかに一線を画している――どころか、全くの別物だった。

結論から言ってしまえば、このＣＯＭＰはなんと、『悪魔』という人外の存在を、『魔界』から喚び出すことができる機能を備えているのである。

機械文明が極限にまで発達した現代においては、余りにも非現実的な事としか言いようがないが――それでも、本当なのだから仕方ない。と、ジンは思った。

何故ならば、信じるも何も、つい先程、自分は見てしまったのだから。

すこし前――まるで逃げ出すかのように、ハルを置いてバーから出て行った後、先ずは、このＣＯＭＰが本当にそういったものなのかどうかを確かめる為に、人気（ひとけ）のない場所で、予め（あらかじ）それに内蔵されていたプログラムを試しに起動させた――その時に。

要するに――その時点で、全ての改造ＣＯＭＰに共通して組み込まれている、初めて悪魔召喚プログラムを使用した際に、自動的に発生する、悪魔と『契約』する為のプログラムが、起動したのだ。

結論から言ってしまえば――ジンは何とか、その時、突然現れた悪魔を倒す事に成功した。

そして、彼は無事に（厳密には決して無事ではないが、命があっただけでもマシだと、ジンは思っていた）、その悪魔と『契約』を交わす事が出来た、という訳である。

しかしジンは、その時、自分が一体どのようにして、その悪魔を倒したのか――余りにも突然な出来事に、必死で対応するのに無我夢中だったので、それについては、全く覚えてはいなかった。

更に言うならば、彼がＣＯＭＰを起動させたのは、実のところ、ハルと口論をした直後の、むしゃくしゃした気分を何とかする為に――というのが、主な理由だったので、そのような心理的状態で

改造ＣＯＭＰを起動させたというのも、今思い返せば軽率以外の何物でもない、と、ジンは思った。

いや――――。

そんな、心の緩みを抜きにしても――――おそらく、あの時の自分に、召喚された（した？）悪魔に対して、冷静な対応をとる事はできなかっただらう。

恥ずかしい話――――ジンは、手にしたＣＯＭＰから突然、悪魔が現れ、そのまま自分を襲ってくる瞬間まで、あまりにも非現実的な光景を前に、これは、ある種の冗談に決まっていると思ってしまい、その時の状況を理解しようとすることで、頭が一杯だったのだ。

それでも。

こうして、何とか生き残れただけでも――――やはり自分は、運が良い人間の部類に入るに違いない、と、ジンは思っていた。全く前情報のない状態から、現在、自分が手にしているような改造ＣＯＭＰを起動させた場合――――恐らくは、大半の人間が（主に、心理的な理由で）生き残る事は出来ないだろう。

閑話休題。

大分、話が逸れてしまった。

ともかく――――そのような危険なＣＯＭＰを、バーから持ち出そうとしたところをハルに目撃されてしまったが故に、ジンは、彼女と口論をしてしまった、という訳である。本来ならば、『契約』によってすっかり疲弊しきった体を休める為に、今すぐでもバーへと

戻りたいところだったが、恐らく、ハルはまだ、あのバーにいるだろう。もしかしたら、自分が戻ってくるのを待っているのかもしれない。長年の付き合いから、ジンには、それが容易に推測できた。

ジンは、そんな彼女を気遣って、もう少しの間は、気を落ち着かせる為の時間を与えてやろうと思っていた。谷川柚子などから、「頼りがいのあるお兄さん」と言われるように、基本、彼はそういった他人への気配りが上手に出来る人間なのである。

だからこそ――彼はこうして、特に何の理由もなく、歌舞伎町の通りをブラブラと歩いて時間を潰している、という訳だ。

と。

如何にも、彼らしい――神谷詠司らしい、人間臭い優しさを、彼が発揮していた、その時。

ゴガアアアアッ！！

不意に、神谷詠司の鼓膜に、この世のものとは思えない、獰猛な吠え声が聞こえてきた。

「……っ！」

ピタリと、ジンは足を止め、辺りを見回す。

異常は――――ない。

少なくとも現在、ジンがいる位置から――――彼が見ることの出来る風景の範囲内には。

当然、その吠え声は、とある場所――――『チネシティ広場』にて、セトと向かい合っている悪魔、妖虫『ミルメコレオ』のものなのだが――――それは、この時のジンには預かり知らぬ事だ。

続いて、彼の耳に届いてきたのは、何者かの女性の声だった。当然、こちらはショウジのものである――――先程の、地球の裏側にまで届いたのではと思うような、馬鹿でかい吠え声とは違い、こちらの方は、それほど大きな声ではなかった。だからこそジンには、その声がどのような言葉を紡(つむ)いだのかを、正確に聞き取る事はできなかったのだが――――にも関わらず、こうして、おぼろげながらも耳に届いてきたということは、この声を出した女性(ショウジ)が、そう遠くない場所にいるからだ、と、ジンは思った。

そこから更に、『どこかこの辺りの場所で、誰かが悪魔に襲われているに違いない』、とジンが推測したのは、きわめて自然な流れだと言えるだろう。少なくとも、今の2つの声に、全く関連性がないと考えるような馬鹿はいない筈だ。

どこか、今の自分の位置からは見えない場所で、何か深刻な事態が起こっていると判断したジンは、それのより正確な位置を知る為に、耳を澄ませながら、

「クソ……！　こんな時に……！」

と、呟いた。

こんな時に――とは、つい数分前、『契約』の為に、ＣＯＭＰから出てきた悪魔と一戦を交えた、こんな時に、という意味だ。

しかしだからといって、ここで、この騒ぎの元凶を確かめずに、怖じけづいて自宅（バー）へと帰ろうとする神谷詠司ではない。それに、先程までとは違い、今の自分には、『仲魔（あくま）』という、心強い味方がついているのだ。今、どこかで人を襲っている（かもしれない）悪魔が、果たしてどれだけの強さを持っているのかは知らないが、決して、勝算は０ではないだろう。

そのようにジンが判断するのと同時に、彼の耳に、今度は男性の声が聞こえてきた――まさか、襲われている人間の数は、１人ではない？　――心臓の鼓動が、焦りによってどんどん速くなっていくのを感じるのと同時に、ジンは、今の男性の声を聞いた事で、騒ぎが起きているであろう場所の、正確な位置を知る事が出来た。

「……こっちか！」

ジンは、ＣＯＭＰを握っている方の手の力を僅（わず）かに強めると、先程までの疲れなど、微塵（みじん）も感じさせような速さで、チネシティ広場へと向かって、一気に駆け出した。

◆

◆

そして――現在に至る。

突然の乱入者であるジンと、その仲魔――『タケミカヅチ』に気付いたミルメコレオが、一旦、セトから目を離し、ジンの方へと飛び掛かろうとしたが、その時には既に、タケミカヅチが2度目の『マハジオ』を放っていた。

ジンは、果たしてその攻撃が、ミルメコレオにちゃんと命中したのかどうかも確かめようとせずに、真っ先に、今自分がもっとも気にかけるべきである、つい先程までミルメコレオに襲われていた、1人の男性の元へと走った。

いや、ジンがこの広場に駆け付けた時には、その男性はミルメコレオには襲われておらず、ただお互いに距離を保ちつつ、円を描きながら歩いていただけなので、厳密には、ジンはその男性が悪魔に襲われている瞬間を目撃した訳ではないのだが――少なくとも、自分がここに来るよりも前に、この男性が敵の悪魔に襲われていたのは間違いない、と、ジンは思っていた。何故ならば、その男性の右腕に、明らかに、今、タケミカヅチが相手にしている悪魔がつけたとしか思えないような大きな歯型があったからだ。

今やミルメコレオは、出現したタケミカヅチに、完全に気を取られていた。ミルメコレオは幾筋もの雷を紙一重のところで避けながら、凄まじい速さでタケミカヅチへと突貫していた。

悪魔同士の恐ろしい戦いに巻き込まれないように、細心の注意を払いながら、ジンはようやく、その男性のすぐ近くへとたどり着く

事が出来た。

しかし――そこまで来て、ようやくその男の全体像が、ハッキリと伺えるようになると、ジンは反射的に、果たしてこの男を、『一般人』という括りの中に入れてもいいものだろうか？と思ってしまった。それほどまでに、今、彼が目にしている男の姿は、『一般』という言葉からは掛け離れたものだった。

ジンの身長は１８７ｃｍと、日本人としての平均的それよりは、遥かに高いものではあったが――目の前にいる男の身長は、そんな彼よりも、更に高かった。まず間違いなく、１９０ｃｍはあるだろう。

他にも、この暗闇の中にあっても美しく輝いている、眉を隠す程度に伸ばした銀色の髪や、彫刻のように、ところどころに凹凸がある筋肉質な体、血のように赤い甚平服と、とにかく、何から何まで、その男の外見的特徴は、どう考えても『一般人』のものではなかった。

そんな外見をした、その男――セトの姿を見て、ジンは一瞬、言葉に詰まったが、すぐに気を取り直すと、

「おい、アンタ！大丈夫か！？」

と言った（それとほぼ同時に、２人のすぐ上を、タケミカヅチの『マハジオ』による１本の稲妻が通りすぎていった）。

「あ、ああ――まあな」

突然現れたジンに対して、戸惑いを上手く隠しきれないまま、セ

トが言う。それを見てジンは、無理もない、と思った。悪魔使いになろうと決心した時から懸念していた事ではあったが、やはり、そうでない一般人の視点から見ると、自分のように悪魔を使役している人間の姿は、異様なものに映るに違いない。

勿論、この時、セトが戸惑っている理由は、ジンが今のように懸念していたような事ではなく、単純に、突然目の前に、ジンが現れたからという、その一点に尽きるのだが――それはともかく。

「ところで、アンタは？」

セトが言う。その言葉を聞いて、ジンはようやく、その声の質から、セトが自分よりも年上である事を悟った為、

「あ――俺は、神谷詠司って言います」

と、敬語を使いながら、簡単に自己紹介をした。

しかし、次の瞬間には、そんな彼の表情は、『驚愕』の2文字で表すより他にないものへと、変貌を遂げる――その時のジンの視線は、セトではなく、彼よりも後方に数メートルほど離れた地点に向けられていた。そこには、紫色のスーツを着た、1人の見知らぬ女性と――1人の青年がいた。こちらの方は、女性の方とは違い、かなり見覚えがある顔だった。

「……？　……っ！！　タダシ！？」

叫ぶと、ジンはセトの脇を大急ぎで通りすぎ、カイドーの側まで行くと、その場で膝をついた。

「タダシ…！」

突然のジンの行動に驚いている様子のセトとショウジには目もくれず、ジンはカイドーの肩に手を置き、彼の体を揺り動かしながら、そのように呼び掛けた。

「タダシ……！　おい、タダシ！　目を覚ませ！」

何故？　と、ジンは真っ先にそう思った。何故、このような場所で、タダシが血まみれになって倒れているのか？　と――いや、出血自体はどうやら、何らかの処置を施したらしく、何とか止まっているようだが、その程度の要素だけでは、ジンの心は少したりとも落ち着いたりはしなかった。

そんな時、

「だ、大丈夫よ」

と、ジンと同じように、カイドーの側で膝をついていたショウジが言った。

「……？　……あ、貴女は…？」

ジンはまるで、そこにショウジがいる事に、たった今気付いたかのような反応を示した（というよりは、実際にそうなのだろう）。

「私はショウジ。ジャーナリストよ――まあ、そんな事はどうでもいいわね。とにかく、彼は大丈夫よ。止血はしたし、脈もあるもの――『彼』の治療のお陰でね」

言いながら、ショウジは、タケミカヅチとミルメコレオとの激しい戦いに、全ての神経を集中させているセトの方を、顎でしゃくった。

「そうか！良かった――つまり、生きてるんだな？」

勿論、一体、セトがどのような治療を施して、カイドーの命を救ったのかについて、全く気にならなかったと言えば嘘になるが――それよりも、この時にジンが抱いた感情の割合は、安堵感の方が多くを占めていた。

「ええ、そう思うわ」

ショウジが言う。と、その時、セトの大きな声が、彼女達の耳に響き渡った。

「お前ら、お喋りをしてる場合じゃないぞ！」

そう叫ぶと同時に、いつの間にか2人のすぐ近くにまで来ていたセトは、ショウジの右腕を乱暴に掴むと、そのまま自分の方に引っ張った。直後、今の今まで彼女の右手が置かれていた場所に、ミルメコレオの口から放たれた『マハラギ』が直撃し、地面がえぐれ、大きな穴が空いた。

3人共、急いでその場を離れた（カイドーはセトとジンが2人がかりで担いで運んだ為、正確には4人だが）。カイドーの右腕を自分の首の後ろへと回しながら、ジンは、仲魔であるタケミカヅチが、左手に持った短刀を、ミルメコレオの首に目掛けて振り付けるのを見ていた。

「ありがとう！」

３人の背後に隠れるようにしながら、セトの背中に向かって、ショウジは礼を言った。と、同時に、再び狙いが逸れたタケミカヅチの『マハジオ』が、４人の脇の方へと飛んでいった。タケミカヅチとミルメコレオの戦いの激しさは、今や最高潮にまで到達しようとしており、『戦える』人間ではないショウジの目には、２体の動きが霞んで見えた。

自分でも意識しない内に、セトは、チッと舌打ちをしていた――これだけの激しい戦いの中、ここにいる４人全員が最後まで無傷でいたら奇跡だ。少なくとも、負傷したカイドーと、非戦闘員のショウジだけは、一刻も早くこの場から離れさせなければならない。

そんなセトの意図を読んだのか、ジンが、

「ここは、俺に任せて下さい」

と言った。

「今すぐ、タダシをちゃんとした場所で休ませないと――――」

言いながら、ジンはカイドーの右腕を自分の肩に回したまま、彼に体を預けるように、サッと横に移動した。今までジンがいた場所を、２本の稲妻が通りすぎた。

「何だって！？」

タケミカヅチとミルメコレオの戦いによって生じている、幾多もの爆発音に負けないよう、声のボリュームを、普段よりもかなり大

きめにしながら、セトが言う。それに対して、ジンは、

「表参道の方に、『ＥＩＪＩ』というバーがありますっ！」

と言った。

「俺が経営してる店です――急いで、そこへタダシを連れていって下さい！　入口の上の方に、『ＥＩＪＩ』という派手なネオンが飾られているので、すぐに分かる筈です！」

今度は、セトが身をかわす番だった。触れた物全てを燃え尽くさんとする炎弾が、危うく彼の顔面に直撃するところだった。一瞬、頭に血が上り、セトはその魔法を放ったミルメコレオへと、『ペルソナ』で反撃を仕掛けようかと思ったが――すぐに思い直した。今の攻撃でさえ、別にセトを狙って放った訳ではないのに、ここで後先を考えずに反撃に転じて、ミルメコレオの注意をこちらへと向けさせるのは、あまり賢明な判断とは言えない……。そうでなくとも、こっちは１人、怪我人を抱えているのだから。

「お願いします――タダシを連れて、早く俺の店へと走って下さい！　あの悪魔は、俺が引き受けます！」

そんなジンの叫び声を聞き付けたのか、タケミカヅチの猛攻をスルリとかい潜ったミルメコレオが、逃がすかとばかりに、４人に向かって突進した。

「させるかっ！」

ミルメコレオが、自分達の方へと勢いよく跳躍してくるのを見て、ジンは、右の手の平をミルメコレオへと向け、そこに魔力を集中さ

せると、ここに来る以前に、改造ＣＯＭＰにセットしていた魔法（スキル）を発動させた。

「『護りの盾』！」

一瞬、ジンの目の前にある空間が、僅かに揺らいだかと思うと、次の瞬間には、そこに見えない障壁（バリア）のようなものが現れた。ミルメコレオは、不様（ぶざま）にもそこに頭を打ち付け、まるでテニスボールのように、広場の反対側にまで吹っ飛ばされた。それでも、頭がコナゴナに砕けないあたりは、流石と言うべきかもしれないが。

「よし――――タケミカヅチ！！」

更に追い撃ちをかけろ、という意味を込めてジンは、つい先程、仲魔になったばかりの悪魔に指示を出す。どうやら、彼の意思は的確に伝わったらしく、タケミカヅチはすぐさま、ミルメコレオが体勢を立て直すよりも前に、そこに向けて『マハジオ』を放った。

直後、ミルメコレオ目掛けて、何本もの落雷（らくらい）が降り注いだかと思うと、次には、そこを中心に巨大な爆発が起こった。巨大な火柱が立ち上り、辺りの空気を無差別に食い尽くさんとする。派生（はせい）して起こった爆音と爆風から身を守る為に、ある者は耳をふさぎ、またある者は顔を両腕で守っていた。

「今だ！　行け――――行くんだ！！」

敬語を使う事も忘れて、セトに向かって必死に叫ぶジン。そんな彼を見て、一瞬、セトは何かを迷うような素振（そぶ）りを見せたが、すぐに、どのみち、戦闘能力が皆無であるショウジに、カイドーを任せる訳にはいかないだろうと思い至った為、

「分かった――気をつけろよ！！」

と言って、カイドーを背中に負うと、そのままショウジと一緒に、チネシティ広場から出て行った。

3人が無事に自分の店に辿り着けるようにと、心の中で願いながら、ジンは、先程の爆発によって立ち上っている粉塵（ふんじん）の向こう側へと、鋭い視線を向けた。

「さて……」

そこには――あれだけの落雷を受けても尚、殆どダメージがない様子のミルメコレオが、その目にこれ以上ない程の狂暴（きょうぼう）さを湛（たた）えながら、ジンとタケミカヅチの両名（りょうめい）を、交互に睨みつけていた。

「……中々、手強いな…」

しかし――口ではそう言っているものの、それとは正反対に、ジンは、狼狽（ろうばい）の色さえ見せないどころか、僅かな恐怖さえ、その顔にちらつかせてはいなかった。

先程の爆発の音がまだ、オオオオオッ……、という、巨人の低い唸り声のような音を立てながら、チネシティ広場の周辺にある建物の壁と壁との間を反響していた。

「……まあいい」

と。

不意に――――信じ難い事に、ジンは、ニヤッと不敵に笑った。

まるで――――この程度の状況など、何という事はない、とでもいうかのように。

『アヤ』と再び会う為ならば、この程度の苦難（くなん）は――――いくらでも乗り越えてみせよう、というかのように。

そして、彼は言う。

相変わらず――――その顔に、不敵な笑みを浮かべながら。

「折角、こうして悪魔の力を手に入れたんだ――――今の俺の力がどれくらいのものか、ここで試してやる……！　行くぞ！　タケミカヅチ！！」

刹那。

ミルメコレオの、怒りに満ちた吠え声と、ジンの檄（げき）に呼応する形で発せられた、タケミカヅチの荒々しい雄叫（おたけ）びとが、チネシティ広場に、長々と響き渡った。

2nd Day『死神と歌姫』

それは、17年ほど昔の話である。

死を運ぶ者『ニュクス』が、とあるペルソナ使いの手によって封印され、危ういところで世界が救われた直後の話――である。

『東京封鎖』よりも――昔の物語。

場所は、日本の某都の、とある路上である。まあ、『某都』などと言ってしまったら、それが一体どこであるのかを、殆ど明言してしまっているようなものだが――それはともかく。

その日は、雪が降っていた。

そんな天気のせいであるかは分からないが、時刻は既に、夕方に差し掛かっているらしく、時間が経つにつれ、辺りは段々と薄暗くなっていっている。

そんな中で――辺りは薄暗く、雪が降っており、且つ人気（ひとけ）の少ない路上で、たったひとり、熱心に歌を唄（うた）っている、1人の少女の姿があった。

「――――♪――――♪」

その少女の身なりは、お世辞（せじ）にも綺麗なものだとは言えなかった――身に纏（まと）った衣服は、背後にある汚らしいコンクリートと同じ灰色だし、あまり手入れをしていないのか――艶（つや）のない青い髪は

伸び放題で、所々がピンと撥ねており、左腕には、薔薇によく似た模様の、赤い刺青が彫られている。目も、髪と同じ青色だ。最低限のお洒落のつもりなのか、両の手首には何本かブレスレットが巻かれていたが、よくよく見れば、それがただの黒い電線である事が分かる。服と同じく、肌も良い状態を保っておらずガサガサだったが――しかしその顔立ちだけは、もう少し身なりに気を使えば、かなりの美少女が出来上がるのではないかと思うほど、端正なものだった。

少女は、ただひたすらに、歌を唄う――要するに、路上ライブをしている訳だが、しかし、そんな彼女の歌声を聞いて立ち止まるような人間は、1人もいなかった――それ以前に、そこの路上を通り掛かる人間自体が、極端に少ないのだ。稀に、そんな人間が現れる事があっても――余りにも薄汚れた身なりをしている少女に対して、不愉快な視線を向けるだけという始末である。

にも関わらず。

少女は相変わらず、一心不乱に、歌を唄っている。

人に聞かせる為――という風ではない。それは、自分だけに向けられた――自分だけが、その歌の価値を理解出来てさえいれば、それでよいという、そんな様子で、少女は唄っていた。

しかし、他人に聴かせる気がないのなら、自分の家で、1人で唄っていればよいのではないか、という疑問が当然の如く、どこからともなく挙がってくるかもしれないが――それに対する答えは、実に簡単である。その少女には、およそ『自分の家』と呼べるようなものがないのだ。

彼女は――家なき子だった。

早い話が、ホームレスである――このような少女がホームレスというのも、中々珍しい。それが、世界的視点から見れば、相当に裕福な国と言われている日本の中でとなれば、尚更だ。

だからこそ、少女は仕方なく、このような寂れた路上で、ただひたすらに歌を唄っている、という訳である。

「――――♪――――♪」

それを立派な行いと言えば、まあ、確かに立派かもしれないが――随分、勝手な振る舞いだとも言えた。

と、そこに。

「ひどいな」

唄っている少女に向かって声をかける、1人の男がいた。

いつの間にか。

唄っている少女に気づかれる事もなく――いつの間にか、誰も来ないような路上に、その男は、どこからともなく現れた。

「まるで、ノイズだらけの音楽を聴いてるみたいだ――よくもまあ、そんな三流以下の器量で、自分の歌声を披露しようと『選択』する気になれるね。その『結果』がどういうものかなんて――火を見るより明らかじゃないか」

男は、まるで久しぶりに友人に再会したような調子で、少女に語りかけている。

しかし、少女の方はというと、そんな男に対し、何ら反応らしい反応は示さなかった――――もしかしたら普段から、こういった意地の悪い批評を聞くのには、日常茶飯事なのかもしれない。

だからこそ、少女は唄い続ける。

男の言葉など、耳に入らないかのように――――どころか、その存在にさえ、気づかないかのように。

が、男の方にしても、そんな風に自分を無視し続ける少女の態度を、特に気にせずに、

「言わせて貰うなら」

と言った。

「君の歌声には、およそ『心』と呼べるものが、まったく籠もってない。僕が君の歌を聴いたのは、当然の如く今日が初めてだけど――――それでも、その程度の事ぐらいは分かるよ。けど、何よりも最悪なのは、君が意図的にそうしている、という事だ」

それでも。

少女は、男の方には決して、顔を向けようとはしなかった。

先程までと変わらず、ただ、唄い続けるのみ――――である。

「――――♪――――♪――――」

「言っておくけど――そんな風に、遮二無二（しゃにむに）に唄ってたって、歌が上手くなるなんて事は、ありえないよ。歌が上手くなりたいんなら、まずは、その歌声を他の誰かに聴かせるところから始めないと。歌っていうのはそもそも、他の誰かに聴かせる為に存在するんだからさ。相手は誰でもいい。知人でも友人でも恋人でも家族でも、或いは赤の他人でもいい――とにかく誰でもいいから、自分以外の人間に、下手くそなりに、その歌声を聴かせるのをお勧めするよ。歌手っていうのはさ――それでようやく半々人前だ」

半々かよ。

と、心の中で、少女は突っ込んだ。

あと、ついでに――言いたい事を言い終わったのなら、とっとと帰りやがれ、とも。

まあ、それでも。

少女は、男に対して――少なくとも、目に見えるような反応は、やはり、示しはしなかったのだが。

しかし残念ながら、少女の思いとは裏腹に、男はまだ、その場から動く気配を見せなかった。

どころか――まだ、何か言いたい事があるのか――再び、口を開き始める始末である。

「何度でも言ってあげるよ」

男は言う。

「君のその歌声は、本当に酷い――――いや、歌声だけじゃない。君のその姿も、仕種も、生き方も生き様も、とにかく何から何まで、これ以上ないくらいに酷いよ。何ていうかもう、アレだね。あまりにも酷過ぎて僕は、軽く感動すら覚えてるぐらいだよ――――君のその姿を標本にして、『愚かな女』というタイトルをつけて、飽きるまで観察した後、最後にはゴミのように捨ててしまいたいね。一体全体これまでの人生で、どのような『選択』をすれば、そんな『結果』に辿り着くんだい？　それともまだ、『選択』している途中なのかな？　だったら、悪い事は言わない。君は今すぐ、『歌を唄う』以外の、別の『選択』をするべきだよ――――少なくとも、そんな気持ちで歌っている内は、ね」

「……そんな気持ち？」

そこで。

少女は、ピタリと唄うのを止めたかと思うと――――撥ねた部分を整える為に、雪のついた髪を、指で撫で付けながら、ゆっくりと、男の声がする方に顔をむけた。

どうやら――――ようやくのこと、少女は、男の言葉に興味を持ち始めたらしい。

そして、ここで初めて、少女は男の姿を確認する――――が。

その途端。

少女は、これ以上なく驚く事になった――――それは、男の顔立ちが、とても綺麗に整っていたから、という訳ではない。いや、確かに、その男の顔立ちは、思わず女なのでは間違えてしまいそうになるぐらい、美しく整っていたのだが――――しかし、少女が驚いたのは、それが理由ではなかった。

その男の容姿は――――少女のそれと、恐ろしく似ていたのだ。無論、既に述べているように性別が違うので、何から何まで全く同じという訳ではないが――――それでも、髪の長さや目の形などを差し引けば、男と少女は、確かにうりふたつだった。恐らく年齢は、あともう少しで成人に達するかどうかというところだろう。黒と白のゼブラ模様の長袖の服に、黒いジーンズを履いており、両方の手を、そこのポケットに入れているというのが、その青髪の男の出で立ちだった。

「あ、貴方は……？」

少女は流石に、戸惑いを禁じえない様子だった。

「ああ、やっぱり気になるかい？　僕と君の外見が、あまりにも似ている事が？　でもまあ、別に驚くほどの事でもないだろう？　よく言うじゃないか。世の中には、最低でも7人ぐらいは、同じ顔の人間がいる、って」

青髪の男が言う。

「――――ま、とにもかくにも、ようやく口を聞いてくれたね？　さっきは、色々と酷いことを言ってゴメンよ――――けど、ああでも言わなきゃ、君は僕の方に顔を向けようとすらしなかっただろう？」

「そう……」

少女は一通り、改めて青髪の男の外見を、マジマジと見詰めた後、

「でも、他にも色々、やり方はあったと思うけど」

と、不機嫌そうに言った。

あれだけの罵詈雑言（ばりぞうごん）を浴びせられては、それも当然だろうが。

青髪の男は、そんな少女の言葉を聞いて、「それもそうだね」と、肩を竦めつつ、おどけたように言った。

「でも――気のせいかしら？」

少女が言う。

「さっきの、貴方の言葉を聞いてると――まるで貴方が、私と話したがっている、みたいに聞こえたのだけれど？」

果たしてそれが、良いか悪いか――少女は、間違いなく勘の鋭（するど）い人間の内の1人だったようだ。しかし、青髪の男の方は、それを良いことだと受けとったらしかった。というのも、青髪の男が、今の少女の言葉を聞いて、ニッコリと笑顔を浮かべながら、

「ああ、その通りだとも」

と言ったからだ。

「でも、更に正確に言わせてもらうなら――僕は、『前々から君

と話したかった』、と言うべきだろうけどね」

「……？　前々から？　え、何それ？　お兄さん、もしかして今、私にナンパしてんの？」

突然、怪しい物でも見るような目つきで青髪の男を見ながら、少女が言う。

すると、青髪の男は更に、愉快そうに笑った。

「まさか――違うよ。その証拠に、ホラ」

青髪の男は、今までズボンのポケットに入れていた左手をスッと取り出すと、自分の顔の前まで上げて、少女の方からよく見えるようにした。そのお陰で少女は、男の左手の薬指に、金の指輪が嵌められている事に気づく事が出来た。今まで、他人との触れ合いが極端に少ないホームレス生活を送ってきた少女でも、それが意味する事ぐらいは理解できた。

左手の薬指に指輪、という事は、つまり――

「結婚してるの！？」

少したりとも驚きを隠そうともせずに、少女が言う。当然だ。先程、少女が『お兄さん』と呼んだように、彼女は、青髪の男の若々しい外見から、彼は少なくとも、まだ未成年に違いないと思っていたのだから。

「そういう事。だからまあ、そんなに警戒（けいかい）しないでおくれよ――僕には既に愛する妻がいるし、更に言うなら、その妻のお腹（なか）の中に

は、既に子供がいるんだ。元気な男の子――らしいよ。医者が言うにはね。名前はまだ考え中さ。まあ、それはともかく……」

元のように、左手をズボンのポケットの中へと収めながら、青髪の男が言う。

「繰り返して言うけど――僕は、君と話をしに来たんだ」

そう言う青髪の男の表情は、実に和やかなものだったが、それが返って少女の警戒心を煽ってしまったらしく、青髪の男の顔を見詰める少女の表情は、先程よりもずっと緊張しているように見えた。

「……貴方は何者なの？」

少女が言う。すると青髪の男は、やたら芝居がかった口調で、

「君が歌声が持つ、特別な力について知る者さ」

と言った。

瞬間、少女は弾けるように2、3歩ほど後ろに移動して、青髪の男との間の距離を広げた。心臓が、これまでよりも何倍もの早さで鼓動しているのを自覚しながら、少女は、必死で今の状況を理解しようとしていた――何だ？　この男はどうして、そのことを知っているのだ？

『そのこと』。

とは――つまり、先程、男が僅かに触れたように、少女の『歌声』が持つ、『特別な力』の事である。

そして、それは――幼い頃に、少女が両親から、文字通りの意味で捨てられる事になった、何よりの理由でもあった。

「あ、貴方は――知ってるの？　私が歌を唄うと、その――」

「君が歌を唄うと、何故か、度々おかしな事が起こる事について――かい？」

まだ途中の少女の台詞に被せる形で、青髪の男は言った。ハッと、少女が息をのんだ。

「いちいち説明するのもアレだから、結論から言おう」

と。

ここへきて、突然――青髪の男の目が、一気に鋭くなった。

「な、何――？」

「君は『悪魔使い』だ」

突然、段幕を下ろしたかのように、その場に一気に沈黙が訪れた。少女は凍りついていた。しかし、やがて自分が、阿呆のようにポカンと口を開けている事に気づいたらしく、慌てて閉じた。

「あ――悪魔、使い？」

囁くように、少女は青髪の男の言葉を反芻した。

「そのとおり。もっとも、君は一般的な『悪魔使い』とは、ちょっとタイプが違うようだけれど――まあ、悪魔を喚び出すという点では、意味は一緒だろう」

青髪の男が言う。

「じゃ……じゃ、もしかして……」

少女はしばらくの間、そこから先の言葉を口にする事に、酷く怯えているかのように、口をモゴモゴと動かしていたが、ややあって、

「じゃ……昔、何度か私が喚び出してしまった、あの怪物達は――『悪魔』だったの？」

と言った。

その言葉を聞いて、青髪の男は眉をひそめた。

「――という事はやはり、君は過去に、悪魔を喚んだ事があるんだね？　できれば、話してくれないか。君には一体、何が出来るのかを」

「それは――」

と、ここで、少女は言葉を切った。一旦、自分の両手を見詰めた後、次にはその視線を、青髪の男の顔へと向ける。しばらくの間、少女はそんな視線で――何かを詮索するような、そんな視線で、青髪の男を見ていたが、やがて、何かを決心したらしく、次のように言った。

「貴方は――――お兄さんは、今から、私が言うことを、信じてくれる？」

少女は、その言葉に滲ませた、哀願（あいがん）するような気持ちを隠しきれていなかった。

「ああ、信じよう」

キッパリと、青髪の男が言う。むしろその言葉には、まさに、少女がそう言うのを待っていた、という響きがあった。

「本当に？今から私が言う事が、どんなに現実離れした事であっても？」

「ああ、どんなに現実離れした事でも、必ず信じる」

「誓（ちか）って、本当かしら？」

自分でもしつこい思いながらも、少女は言う。対する青髪の男もまた、根気強く、

「誓って本当だ」

と、重々（おもおも）しく言った。

「僕は、君の話を――――それが、どんなに信じ難い内容でも、必ず信じる事を、ここに『選択』しよう。そこから導かれる『結果』がどうであれ――――ね」

しばしの間、少女は、青髪の男が言ったその言葉の意味を必死に

考えているようだったが、結局、何かを諦めたかのように、小さく首を横に振ると、

「分かった――話すわ」

と言った。どうやら少女の中で、青髪の男は、信用にたる人物だという結論が下されたらしい。これまでの男の奇妙な台詞の数々を思い返せば、それは中々に奇跡的な事だとも言えたが。

「私が8歳ぐらいの時よ」

少女が言う。

「その頃から、私は『歌手』という職業に憧れてた――テレビの画面の向こうで、何人もの観客を前に、自分の歌声を披露している人達が、これ以上なくかっこよく見えたの。だから私も、将来の夢は歌手だと決めていた――今思えば、中々どうして、如何にも女の子らしい夢だけどね――両親はそんな私を見て、近くの音楽教室に通わせてくれたわ。けど……」

「そこで――何かが起こった？」

青髪の男が、少女の言葉を引き取った。

「続けてくれ」

「確か、そこに通い始めてから、一週間ぐらい経った頃だと思う」

左腕に彫られている刺青（いれずみ）を、無意識に右手の指で撫でながら、少女が言う。

「その頃になると、段々、歌を唄う為のコツとかが分かり始めてきて、いつの間にか私は、歌を唄うのが、楽しくて仕方なくなった――そんな時よ。突然、教室に通っている他の子達と、一緒に唄っている時――急に、頭の中が真っ白になったの。そして、気付いた時には――」

再び、少女は言葉を切った。そして、何かを懇願するように、青髪の男の顔を見た。それは、出来ればここから先は話したくない、と訴えているようにも見えた。が、しかし、青髪の男は、ただ黙って少女の目を見詰め返しているだけだった。結果的には、少女の方が折れた、彼女は、観念したかのように、1度ため息をつくと、

「気付いた時には――何もかもが終わってた」

と言った。

「終わってた、ねぇ…」

青髪の男が言う。

「ええ、そうよ。私が目を開けた時――そこにはもう、生きている人間は1人もいなかった」

突然、少女の両目に、フッと暗い影が落ちた。

「でも――生きている人間はいなかったけど、それ以外の何かが、そこにいたの。でも、今思えば、それが――」

「『悪魔』だったんだろうな、間違いない」

青髪の男が言う。少女は、なんだかこの男は、自分の言葉を途中で遮ってばかりだな、という思いが禁じえなかった。

「その悪魔は、君の事は襲わなかったのか」

「ええ、そうよ――――何故か、その悪魔は、私の事だけは襲わなかったの。それが何を意味するのかは、まだ、その時の私には分からなかったけど――――でも、それから何度か、似たような事件が起きていく内に、流石に気付いたわ。……私が夢中に歌を唄うと、どういう訳か毎回、『変な事』が起こるってね」

そこまで言うと――――なんと突然、少女は、両目から大粒の涙を流し始めた。流石にこれには、青髪の男は若干、驚いたかのように、片方の眉を吊り上げた。

「だ――――だから、父さんも母さんも、私を捨てたのよ。わ――――私が、おかしいから。孤児院に預けようとさえしなかったわ。き、きっと、自分達の子供がイカれてるって事を、な、なるべく他の人達に、し――――知られたくなかったのね……っ！」

少女の足が震え、前のめりに倒れそうになった。危うく、顔面が地面に衝突する間一髪のところで、青髪の男は少女の体を支える事に成功した。

少女は体を震わせて、啜り泣き始めた。こぼれ落ちた涙が、地面に積もった雪に落ちて、僅かにその部分の雪を溶かした。青髪の男は、そんな彼女の肩を優しく叩いた。何の事情も知らない人間がその光景を見たら、恋人同士が抱き合っているように見えたかもしれない。しかし実際には、2人はつい先程、お互いに初めて会ったば

かりなのだ。そう考えると、現在の2人の状況は、あまりにも不自然なものに見えたが――少女にしても、これは不思議な事だった。何故かこの男ならば、信用してもいいという気になれた。長らく、人と喋る事がなかったせいで、見知らぬ人間に対する危機感知能力が衰えているのだろうか？或いは――この男と自分の外見が、これ以上なく似ている事と、何か関係があるのだろうか？

何分ぐらい経っただろうか――もしかしたら、何時間かもしれない――しばらくしてようやく、少女は泣き止んだ。それを確認すると、男は、

「さっきの、両親が君を、孤児院にさえ預けようとしなかった――って話だけど、それなら君の方から、そういった施設に名乗り出ても、そこの人達は、君を匿ってくれたんじゃないのかい？」

と言った。しかし、少女は予め、青髪の男がそのような疑問を投げつけてくる事を予想していたかのように、その台詞から殆ど間をおかず、次のように答えた。

「そんな事をしたら、今度は、そこの人達全員が、危険に曝される事になるわ――私の歌によって喚び出された『悪魔』に殺される、という危険に」

だから、私はこうして、誰とも関わりを持たないような、ホームレスになるしかなかったのよ――と、その少女は続けた。既に泣き止んでいる為、その口調は、先程よりはずっと滑らかであったものの、しかし実際には、言うほど楽な生活ではなかったに違いない、と、青髪の男は思った――彼女が一体、正確には何時から、そのような生活を始めたのかは知らないが、少なくとも、並大抵の精神力で生き抜けるような日常でなかった事だけは確かだ。

「と、いう事は――それが理由かい？　君が今、わざと心を籠めずに歌っていたのは。心の底から夢中になって歌ってしまうと、悪魔を喚び出してしまうから？」

青髪の男の、そんな問い掛けに対し、少女は、

「ええ、そうよ」

と頷いた。

「ふぅん……」

それなら、そもそも歌おうとさえしなければいいじゃないか――とは、青髪の男は言わなかった。恐らくこの少女にとって、『歌を唄う』という行為は、孤独に満ちた生活を、僅かに明るくする為の掛け替えのないツールだったのだろう。それを否定するような言葉をここで言うほど、青髪の男は良識（りょうしき）のない人間ではなかった。

「私は、他の人達とは違うんだって――ずっと昔から分かってた」

スッと青髪の男から体を離しながら、少女が言う。

「けど、私の『この力』が、具体的にどういうものであるかは、知らなかった……。今、貴方が教えてくれるまでは」

少女が真っ直ぐに視線を向けてきたので、青髪の男もまた、そんな彼女と、真っ向から目を合わせた。

「ああ、さっきも言ったように」

当たり前かもしれないが、青髪の男の顔に張り付いていた笑顔は、とうの昔に消えていた。

「君は悪魔使いだ――――まあ、これもさっき言ったように、君のようなタイプは珍しいけどね」

突然、少女の顔に、なんとも表現しがたい感情の波が現れた。それは興奮し、喜んでいるようにも見えたし――――恐れ、戦(おのの)いているようにも見えた。

「もしかして、とは思うけど……」

少女が緊張したように、ゴクリと生唾を飲み込んだのが、青髪の男の方からも確認できた。

「あなたも、その『悪魔使い』って奴なの？私みたいに、歌を唄うだけで、悪魔が喚べたりするの？」

しかし青髪の男は、首を横に振りながら、

「いや、僕は少し違う。僕は、いやゆる『ペルソナ使い』ってヤツだよ。まあ、『いわゆる』なんて言っても、君は当然、この言葉を今まで聞いた事がないだろうけどね」

と言った。

「『ペルソナ使い』…それは何なの？」

少女が言う。

「今ここで、その疑問に答えてあげてもいいけど――でも、それよりも前に、まずは、僕の頼みを聞いてくれるかな？」

「た――頼み？」

「そう、頼みだ――そして、これから君に頼む事こそが、まさに、今回僕が、君に会いに来た理由でもある」

そう言う青髪の男の両目を、少女は、チラチラと交互に見た。まるで、どちらかの目が、自分を騙そうとしていないか確かめているかのようだった。

「な――なんなの？」

「率直に言おうか」

青髪の男が言う。

「君のその『源初の言葉』が持つ力を、僕に貸して欲しい」

「な――何ですって？」

その言葉の意味がよく分からないという風に、少女が言う。

そんな彼女に対して、青髪の男は――ここで再び、クスリと笑った。

「実は、僕には今、やりたいことがあるんだ」

「やりたい――――こと？」

「そう、やりたいこと――――やり遂げたい事が、ね」

青髪の男は言う。

相変わらず、クスクスと笑いながら。

「僕は今、この先の未来、この場所で起こるであろう、ある『物語』に挑戦しているところなんだよ――――『東京封鎖』という名の、『物語』にね」

「……？　『東京封鎖』……って、え？　何それ？」

全く意味が分からないという様子で、少女が言う。

「……？　ね、ねえ、何なのよ？　その、『物語』っていうのは？」

少女が聞くが、青髪の男の答えは、

「『物語』は、『物語』さ」

と、にべもないものだった。

「僕の世界の物語に――――そして、君の世界の物語」

「……」

「さっき言ったね？　僕は今、『ある物語』に挑戦しているところだ、って――――僕はね、その物語の『本来の流れ（オリジナルストーリー）』を、徹底的にぶ

ち壊したいんだよ」

「……えっと……」

「いずれ、この先に起こる――『東京封鎖』という物語の、『本来の流れ』を、何とか書き換えたい――って、まあ、そういう事だよ。分かるかな？　僕の言ってる事？」

「……全然」

と。

無理もない事だが――少女は、突然、とてつもなく要領を得ない事を言い始めた青髪の男に対して、気味が悪いという視線を向けながら、僅かに後ずさりした。

そんな少女の心の内など、我関せずという調子で、

「その為には――君の『源初の言葉』が必要なんだ。君の歌声はいつの日か、きっと、僕の息子の役に立つ――僕はちょっとした理由から、予め、そのことが分かってるんだ」

「貴方の――息子？」

「うん、そう」

青髪の男は、堂々と頷く。

「僕がその、『東京封鎖』という物語に『挑戦』する為の計画は、既に最終段階なのさ――無事に、藤堂さんの協力は得られたし、

何とか、子供も作る事ができた。当然、この子はその『物語』巻き込ませる予定さ――で、残すところの仕上げは、あとは君だけなんだよ」

「……」

「当然、ただでとは言わないさ――君の衣食住は、全て面倒を見てあげるし、君のその『源初の言葉』の使い方も、出来る限り、僕が教えてあげるよ――とはいえ」

そこで、青髪の男は一旦言葉を切り、何かを考え込むように、顎に手をあてた。

「その為にはまず、僕の『召喚器』みたいに、何かしら、君の『源初の言葉』をコントロールする為の道具が、必要になるだろうけどね――そうだな……」

青髪の男は、しばらくの間、沈黙した後――少女はその光景を、足に根が生えたように棒立ちしながら、ただ黙って見ていた――不意に、パッと思い至ったように、

「ああ、そうだ、『シーケンサー』とかがいいかもしれないね。アレなら確か、自分で作った曲を、そのまま記録できただろうし――シンセイザーと同一のタイプがあれば、更に好都合だ。今度、平賀先輩あたりに持っていないか聞いてみよう」

と言った。

「……」

尚も、少女が沈黙していると――――青髪の男は再び、クスクスと笑った後、握手を求めるかのように、彼女に右手を差し出して――――

「さあ――――選びなよ」

「僕と一緒に――――『本来の物語』を、ぶち壊そうじゃないか」

◆

◆

それは、17年ほど昔の話である。

『東京封鎖』よりも――――昔の物語。

後(のち)に、『アヤ』と呼ばれる事になる女性と――――いずれ、この世に生まれる、有里淳(ありさとじゅん)という少年の父親、有里湊(みなと)との、これが馴れ初めであった。

2nd Day『チネシティ広場のバトル（2）―3』

と、まあ。

そんな風に――――時間と場所は元に戻って、本来会う筈がなかった2人が出会った時から、およそ17年経った後の、チネシティ広場。

『神谷詠司（かみやえいじ）』。

『タケミカヅチ』。

『ミルメコレオ』。

1人の人間に。

2体の悪魔。

そこにある様子は、ジンが、『悪魔使い』としてタケミカヅチを使役（しえき）し、敵の悪魔、ミルメコレオと対峙している――――というものである。

しばらくの間は、ジン達とミルメコレオとの、ジリジリとした睨み合いが続く。

無論、そのような前哨戦（ぜんしょうせん）は、魔界（まかい）にて、常に弱肉強食の環境に置かれ、激しい生存競争を経験してきたタケミカヅチやミルメコレオにしてみれば、既に慣れたものなのだろうが――――基本、滅多な事

がない限りは、『殺し合い』など経験する筈もない、至極一般的な『人間』であるジンにしてみれば、このような膠着状態は、酷く息苦しいものに感じられている事だろう。

夏とは言え、既に夜の7時を過ぎた頃だというのに、ジンは、体中から滝のように、とめどめなく流れている汗――冷や汗を、抑える事が出来ないでいた。

「……クッ……！」

ジンは――動かない。

否、動けない。

しかし、それは決して、ジンがミルメコレオに対して、精神的に遅れをとったから――という訳ではない。

彼は基本的に、感情に身を任せて戦う有里淳や二階堂征志のような人間とは違い、思慮深く、慎重な行動を心掛ける人間なのだ――故に、彼がこの時、『自分がここで、少しでも動こうとする様子を見せれば、敵は、即座にそれを迎え撃とうとするに違いない』、と推測し、そこから更に、『ならば、こちらの方から、迂闊に先手を撃つべきではない』、と考えたのは、それが合理的であるかどうかはともかく、極自然な判断だと言えるだろう。

いや。

例え、ジンのように慎重な性格でなくとも、殆どの人間は、この状況で、自分の方から、ミルメコレオに向かって行くような事はしないに違いない――どころか、腰を抜かすか、或いは、恐れをな

して逃げ出すというのが大半の筈だ。そう考えれば、今のように全く怖じけづかず、真っ向から睨み合っているだけでも、ジンは、遥かに度胸と勇気がある人間と言っていいだろう。

だが――目に見えるような、物理的攻防を繰り広げていないからといって、ジンが今、楽な思いをしているのかと言えば、決して、そんな事はない。こうしている内にも、彼は――少なくとも、精神的には――かなりのエネルギーを消費しているのだ。

（……クソッ！　一体、今どれだけの時間が経ったんだ!?　間違いなく、5分ぐらいは経ったぞ……！　いや、それとも、実はまだ、ほんの10秒も経過していないのか!?）

既に、先に述べた通り、確かにジンは、並の人間よりは、遥かに度胸と勇気のある人間だが――しかし、それはあくまで『人間にしてみれば』、という話である。

だからこそ、彼にしてみれば――このような様子見の時間は、タケミカヅチやミルメコレオよりも、遥かに長いものに感じられている筈だ。

（……いつまで……！　一体、いつまで続くんだ…!?この…今すぐ逃げ出したいくらいの、息苦しい緊張感の中を……俺は、あと、どれだけの時間堪えればいいけないんだ!?）

未だに――お互いに警戒し、距離を取ってジリジリと足を動かしながら、ジンは思う。

1秒――否、その10分の1にも満たない時間が経つ度に、彼の精神は、鉛筆をカッターで削るように、徐々に消耗されていく。

そして――それは同時に、彼が持つ本来の慎重さも、徐々に削り取っていく形となっていた。

だからこそ、彼は――

（～～～っ！！くそっ！こうなったら、こっちから――！）

と、考え、不用意に攻撃を仕掛けようとした――が、そんな彼の暴走を止めたのは、つい先程、彼の仲魔になったタケミカヅチだった。

「ジン殿っ！！」

不意に。

横の方から、そんな声が聞こえてきた事で――あとほんの少しのところで、ミルメコレオに向けて踏み出そうとしたジンの足が、ピタリと止まる。

「……！？」

つかの間、ジンは、その声がタケミカヅチのものである事に、気づけなかった――というのも、今の今まで、タケミカヅチにしても、ちゃんと人間と同じように喋る事が出来るのだという事を、スッカリと忘れていたからである。

「ジン殿」

と、自分の声がよく聞こえていないと心配になったのか、再度、

タケミカヅチは、彼の方に呼び掛ける。

「奴は『ミルメコレオ』と言う悪魔だ――――言葉を話す程の知能はないが、それでも、こと純粋な戦闘能力にかけては、他の有象無象（うぞうむぞう）の悪魔達を、遥かに凌ぐ。ゆめゆめ、油断なさるな」

しかし、その台詞を聞く限り、どうやら、タケミカヅチがジンへと言葉を発（はっ）したのは、決して、タケミカヅチが緊張しきってるジンを思ってという訳ではなく、単純に、今言った通り――――相手（ミルメコレオ）の力を見くびらないように、と、注意を呼び掛ける為だったらしい。

しかし、それにしても――――と、ジンは思う。この広場に駆け付けるより前には、自分とこの悪魔は、お互いの命を奪い合おうとしていたというのに、今となっては、すっかりその時の敵対心（てきたいしん）も薄れ、このように肩を並べて、同じ敵と一緒に戦っているなんて――――と、ジンにはそれが奇妙で仕方なかったが、しかし、タケミカヅチの方は、別にその事に関して、何の疑問も抱いてなければ、戸惑ってもいないように見えた。

まるで、それが当たり前の事であるかのように。

単純な価値観の違い――――と言えば、それまでだが。

（……まあ、いい）

何はともあれ――――今のタケミカヅチ呼び掛けのお陰で、ジンは、少し頭を冷やす事が出来た。

だからこそジンは、先程までの精神的な不安定さなど、微塵（みじん）も感じさせない程しっかりとした口調で、

「ああ――――分かってる。援護を頼むぞ」

と、答えたのだ。

しかし。

その途端、ジン達の間に流れた、僅かな気の『緩み』に気づいたのか――――ミルメコレオが、突然、耳を覆いたくなるような、凄まじい吠え声を上げた。

――――ガアアアアアアアアアアアアアアっ！！

「……っ！　チッ！　なんて声を出しやがる……！！」

まるで、口の中で何かが爆発したのではと思いたくなるような吠え声を聞いて、思わず、タケミカヅチは顔をしかめ、ジンは耳を両手で覆っていた。

が、両手で耳を覆う――――という事はつまり、自分の方から、両手を塞いでしまった、という事でもある。そしてミルメコレオは、その隙を見逃さなかった。

ミルメコレオはまるでロケットのような速さで、一気にその場から跳躍（ちょうやく）すると、ゴオッ！　という風切り音と共に、ジンへと急接近してきた。そして、ジンへと飛び掛かり、左右の前足の爪を彼の肩へと食い込ませると、そのままジンの体を、チネシティ広場を囲むように建っている店の１つの壁に、勢いよく叩き付けた。

ドカアッ！　という石が砕ける音と共に、ジンの背中が固いコン

クリートの壁へと激突すると、その部分に亀裂が入り、僅かに破片が飛び散った。

しかし、飛び散ったのはそれだけではなかった――――ＣＯＭＰの『ハーモナイザー』によって、幾らか肉体の強度が底上げされているとはいえ、やはり、攻撃を受ければそれ相応（そうおう）の痛みは感じる。その為、ミルメコレオの前両足と、背後にあるコンクリートの壁との間でサンドイッチになる形となったジンは、たまらず、口から血を吐き出した。

「――――がはっ！」

「ジン殿！」

それを見たタケミカヅチは、ミルメコレオが追撃を仕掛ける前にジンを助ける為、彼目掛けて走った。しかし、それを予想していたかどうかは分からないが――――赤肌の鬼神がジンの元へとたどり着くよりも前に、ミルメコレオは、その頭をタケミカヅチへと向け、大口を開けると、間髪入れずに『マハラギ』を放った。いくつかの炎弾（えんだん）が飛来し、タケミカヅチの体を焼き尽くそうとする。

「チィッ！」

タケミカヅチは何とか、それを危ういところでかわしたものの――しかし、ミルメコレオにしてみれば、少しの間だけでも足止め出来れば、それだけで良かったらしく、次に、開けたままの口を、未だに自分が抑えつけているジンの顔へと向けると、既に今回の戦いで何度目かの『マハラギ』を、容赦（ようしゃ）なくジンに放とうとした。

「ぐっ……！！」

当然、ジンは頭部を脳髄から丸焼きにされない為に、何とかミルメコレオの手から逃れようとするが――彼が渾身の力を込めても、その手から逃れる事は出来なかった。やはり、人間と悪魔とでは、筋力だけをとっても、そこには決定的とも言える差があるらしい。

当然、これだけの至近距離で魔法を放てば、ミルメコレオも無事ではすまないだろうが――『肉を切って骨を断つ』とは、よく言ったものだ――どのみち、1番の被害を受けるのは、悪魔よりも（基本的防御力で劣っている）、人間のジンの方だろうし、その程度のリスクは、ミルメコレオにしてみれば、わざわざ考慮に入れる程の事でもないのだろう。

このままではマズイ――そう思い、これまでに経験した事のない命の危険を察知したジンの脳裏に、突然、この窮地を脱する為の、とある考えが閃いた。ミルメコレオが、あとほんの数秒も経たない内に次の『マハラギ』を放つのは分かっていた為、果たしてそれが成功するかどうかも考えないまま、ジンは、半ばヤケクソ気味に、その考えを実行に移す事にした。

「――『護りの盾』！」

ミルメコレオの前両足に抑えつけられているせいで、普段よりもずっと空気の通り具合が悪い喉を根性で動かし、その魔法の名前を叫ぶ。もっとも、果たしてそれを口に出す事に、何かしらの意味があるのかと問われれば、正直、ジンにしても返答に困るところだが――何となく、その名称を言葉にしながら魔法を発動した方が、精度や威力が上がるような気が、彼にはしたのだ。まあ、要するに、気持ちの問題である。

それが功を喫したのかどうかは、当のジンにも分からないが――結果として、発動したスキル『護りの盾』は、彼が望んだ通りの効果を発揮した。ジンの体全体を、何か半透明の液体が包み込んだかのように、彼の周りにある空気が揺らいだかと思うと、次の瞬間には、ミルメコレオの体は、さながら磁石が反発するかのように、ジンの体から一気に弾き飛ばされていた。

あとほんの少しのところで『マハラギ』を放とうとしていた為に、その口から僅かに炎を吐き出しながらも――ミルメコレオは、吹き飛ばされた自分の体のバランスを空中で器用に立て直すと、次には猫のように、音もなく地面に着地した。もっとも、ミルメコレオのその外見を見れば分かるように、体の半分は獅子――つまりはネコ科の動物の特徴を受け継いでいる為、それはとりたてて驚く程の事ではないのかもしれないが。

ジンにしても、すぐさま、今の今まで自分の体が抑えつけられていた壁から背中を離し、2、3回程、苦しそうに咳をすると、ゆっくりと呼吸を調えていた――良かった、上手くいった。ほんの思い付きの作戦であった為に、正直、ちゃんと上手くいくのか不安だったのだが――どうやら『護りの盾』は文字通り、相手の魔法を、自分の身に届く前に防ぐ事が出来る『盾』にもなれば、自分の体に向けて発動する事で、『鎧』のように扱う事も出来るらしい。

魔法というものも中々どうして、奥が深い――と、ジンは思った。上手く使い方を知れば、まだまだ自分は強くなれる、とも。同時にそれは、目の前にいる悪魔を倒す為の、何かしらのヒントにもなる筈だ。

とはいえ――勿論、先程のように『護りの盾』を使うくらいなら、最初から、攻撃自体を受けないように気をつけた方が無難だ―

――何より、『魔法』というものは思いのほか体力を消耗する。厳密にはそれは、『体力』ではなく『魔力』なのだが――ジンはまだ、そのようなエネルギーの仕組みを、詳しく理解していなかった。まあ、『魔法を使い過ぎれば疲れるらしい』とだけ意識していれば、それだけで十分なのだろうが。

――と、ジンかそのような事を考えている間に、タケミカヅチは、ミルメコレオに向けて、何度か『マハジオ』を放っていた。そもそもこの魔法の利点は、一度で複数の敵を巻き込む事が出来る程の、その有効範囲の広さにあるのだが――しかし、ミルメコレオの機動力（スピード）は、それの更に上をいっていた。右へ左へと、足にバネでも仕込んでいるのではと疑いたくなるような速さで、タケミカヅチが放つ稲妻（いなづま）を、ことごとくかわしていく。

いみじくも、先程タケミカヅチがジンに忠告したように、確かにこの悪魔は、他の大多数の悪魔よりは、遥かに強い部類に入るらしい――と、ジンはここへきて、ようやくその言葉の意味を真（しん）に理解する事が出来た。少なくとも、『悪魔使い』になってから初めて戦う悪魔にしては、ややハードルが高いことは確かだ。

しかも、厄介なのはそれだけではない――いくら、太陽の出ている時間が1番長い季節である夏の夜だからといって、7時を過ぎれば、さすがに辺りは暗くなってくる。周りを高い建物で囲まれた、現在、ジン達がいるチネシティ広場のような場所ともなれば尚更だ。

そのような暗闇の中で戦うのは、正直、ジンのような『人間』にとっては、不利と言わざるを得（え）ないだろう――恐らくミルメコレオは、そんな彼とは違い、『嗅覚』や、野生の悪魔（けもの）特有の直感などで、ジンの位置を、常に正確に把握しているに違いないからだ。

しかし――ジンは考える。それに関しては、同じ悪魔であるタケミカヅチにしても言える筈だ、と。そうなれば必然、そういった『暗闇』のハンデを受けないタケミカヅチの攻撃が、今回の戦いにおいては頼みの綱になるのだが――しかし、これまでの戦闘の様子から分かるように、ただ闇雲（やみくも）に魔法を放っているだけでは、相手に有効打を与える事は難しいだろう。

どうやら、タケミカヅチも同じ事を考えていたらしく、彼は、ジンの側に移動すると、

「数を撃てば、いつかは当たると思っていたが――やはり奴は、そういった偶然をアテにして倒せるような悪魔ではないようだ。どうする？　ジン殿」

と言った。

それに対してジンは、

「何かいい考えが浮かんでいれば、とっくに実行しているさ」

と言う。それこそたった今、『護りの盾』を応用して、ミルメコレオの『マハラギ』を間一髪のところで防いだように――どのみち自分は、まだ悪魔使いになって間もない、実戦経験皆無の人間だ（逆に経験があったらあったで、ソイツは一体どんな人生を歩（あゆ）んできたんだよ、という話ではあるが）。下手に出し惜しみをしている場合ではない。使えると思う手は、どんどん使っていかねば。

と、その時。タケミカヅチが再び、ジンに対して声をかけてきた。

「ジン殿。おぬしはここに来る前の戦いで既に、いくらかの体力を

消耗しているだろう――――となれば、ここは私に任せてくれ」

「……」

いや。

『ここに来る前の戦い』、って――――要するにそれは、悪魔使いとして『契約』を交わす為に、俺とお前が戦った時の事を言ってるのか？　と、ジンは思った。だったら、今俺が疲れているのは、ほぼ間違いなく、お前のせいだろ、とも。

それを言葉にするのを、ジンはグッと堪えると、彼は代わりに、

「馬鹿を言え――――アイツがお前１人でどうにかなるのなら、これまでの戦いで、とっくに決着はついてただろ」

と言った。

次には、数メートルほど前方にいるミルメコレオから決して視線を外さぬまま、何度かパキ、ポキ、と拳を鳴らす。

（一体――――何年ぶりだ？）

ジンは思う。

（ここまで――――本気で喧嘩するのは）

いや、違う。

これは――――『喧嘩』などでは、ない。

どちらかが相手の命を奪うまでは、決して終わらない――純粋で、原始的な、『殺し合い』だ。

「つまり」

思考するのを止め――ジンは、隣にいるタケミカヅチに目を向けないまま、次のように言う。

「つまり――お前1人じゃ、手にあまるって事だ……。となると、俺も戦うしかないだろ。……構えろ、タケミカヅチ。2人で、一気に叩くっ！！」

２ｎｄ　Ｄａｙ『チネシティ広場のバトル（２）―３』（後書き）

●亜兎羅須のデビサバカードゲーム

＞ｉ１８８３８―１６６５＜

●『有里淳』

・効果モンスター

・戦士族、闇、☆４、ＡＴＫ：１８００、ＤＥＦ：１５００

・ウルトラレア

・このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊する度に、このカードの攻撃力と守備力は３００ポイントアップする。

＞ｉ１８８８９―１６６５＜

●『谷川柚子』

・効果モンスター

・魔法使い族、風、☆４、ＡＴＫ：７００、ＤＥＦ：２２００

・ノーマル

・自分フィールド上に『有里淳』が存在する場合、このカードの守

備力は５００ポイントアップする。

＞ｉ１８８８８―１６６５＜

●『木原篤郎』

・効果モンスター

・戦士族、光、☆４、ＡＴＫ：１４００、ＤＥＦ：１０００

・ノーマル

・自分のメインフェイズ時に、このカードの攻撃力を１００ポイントダウンさせる事で、相手の手札からランダムに１枚選んで、墓地へ送る事が出来る。また、この効果を発動した場合、自分フィールド上に存在する『有里淳』の攻撃力は、エンドフェイズ時まで５００ポイントアップする。

2nd Day『覚悟と信頼』

東海林ことショウジは現在、隣で、二階堂征志を背負っているセトと共に、青山にある通りを駆けていた。

理由は当然、負傷したカイドーを休ませる為に、表参道にある（らしい）、ジンが経営するバー『ＥＩＪＩ』へとたどり着く為である。

しかし現在のように、太陽が沈んだ状態である『夜』という時間帯は、大方の人間が何となく予想するように、『悪魔』が好き勝手に活動するには、うってつけの環境だ。故に、『ＥＩＪＩ』へと向かっているショウジ達を、これまでに悪魔が一度も襲ってこなかったのかと聞けば、当然のごとく、そんな事はないのだが――しかし、闇に紛れてコソコソと人を襲うような悪魔など（いくらカイドーを背負っているが為に、両手がふさがっているとはいえ）極めて強力なペルソナ使いであるセトの敵ではなかった。

ある悪魔はたった1発の蹴りで腸を道端にぶちまけ、またある悪魔は、彼がほんの少し殺気を放っただけで――つい数分前、チネシティ広場にてミルメコレオに向けたのと同じものだ――あっという間に逃げ出した。後者に関しては、セトが現在、ショウジやカイドーという足手まといがいる事が、敵悪魔達にしてみれば、都合よく働いたのだろう――もしそうでなかったら、セトは逃げ出した悪魔を、決してそのまま見逃したりはせず、瞬時に追い掛けてトドメを刺したに違いないからだ。

そんな中。

「ね――ねぇ！　セトさん！」

と、ショウジが、横で並んで走っているセトに声をかける。

チネシティ広場から出た直後こそ、（主に恐怖心のせいで）殆ど口を開かなかった彼女ではあったが――今となっては、セトというこれ以上なく頼もしいボディーガードの存在を認めた事で、その心に、いくらかの余裕が生まれてきたようだった。

「あの男の人……大丈夫かしら！？　1人で置いてきちゃって……！」

そんなショウジ問い掛けに対し、セトは、

「別に1人じゃねーだろ。他にも1体、あの兄（にい）ちゃんの『仲魔』らしき悪魔が1体いたし」

と答えた。

「屁理屈（へりくつ）は止めて――って！　ああっ！　そう！　それよ！　あの肌が赤い悪魔は、一体なんだったの！？　少なくとも、敵じゃなかったようだけど――どころか、あの男の人の命令に従っているようにも見えたけど――ああいう悪魔もいるの！？」

「ああ、いるよ――多分、あの兄ちゃんは『悪魔使い』だ。もっとも？　一昨日（おととい）の淳みたいに、まだ『なりたて』みたいではあったがな？」

「……え？　淳くん？」

何故、ここでいきなり淳の名前が出てくるのか――ショウジには分からなかった。

「あ、あ、あーー。まあ、今はそれについては気にすんな。えーと、あの兄ちゃんだけに、あの場を任せて本当によかったのか――って話だったっけ？　そんなもん、当たり前の如くよかったに決まってんだろうが」

セトが言う。

するとショウジは、その顔にハッキリと驚きの表情を浮かべて、

「……い、いや……決まってんだろうが…って、ちょっとセトさん！あの人が心配じゃないの！？　た…助けにいった方が……！」

と、言った。が――しかし、そんな彼女の台詞の途中から、セトは夜の静寂を破るかの如く、犬が吠えるように笑い出したので、ショウジは、最後まで言葉を言い終わらせる事が出来なかった。

「おいおい――冗談はよせよ、ショウジちゃん」

満足するまで高らかに笑ったあと、セトが言う。

「あの兄ちゃんは別に、俺が無理矢理『戦え』って命じたから、あの広場に残った訳じゃねえ――自分の意志で戦うと『選択』して、あの悪魔との戦いに望んだんだ。ケツの青いガキならともかく、あの兄ちゃんだって、もう立派な大人だろ――だったら、俺達だけを逃がして、自分だけが残って戦うという事が、どれだけ危険な事かは理解しているだろうし、当然、万が一の状況だって覚悟してる

筈だ」

「でも――――」

ショウジが何か反論を唱えようとするが、そんな彼女よりも先に、セトは「それにだ」、と言った後、次のように続けた。

「あの兄ちゃん――――なかなか、いい顔をしてたぜ。アレは腹を括った――――『覚悟』を決めた男の顔だ。今ここで助けに戻るのは、あの兄ちゃんの、そんな『覚悟』を侮辱する行為とさえ言える……。だったら、俺達に出来る事と言えば――――兄ちゃんが勝つと信じて、こうして安全な場所にまで退く事だけだろ」

「そ……そういうものなの……？」

あまり完全には納得していないらしいショウジが、そのように言う。――――が、少なくともその考えが、セトのある種の『美学』のようなものであるらしい事だけは分かった。同時に、彼はやはり、そういった世界で、随分長いこと戦ってきたんだな――――とも。まあ、後者の方に関しては、自分がまだ、あの広場にいた時の、セトの様子から、何となく予想はついていたが。

そう思いながら、ショウジが何となく、気絶したカイドーを背負いながら走る、セトの横顔を見詰めていると――――不意にセトが、

「お……？もしかして、アレじゃねえのか？」

と言った。それを聞いて、疑問に思いながら、彼と同じ方向へと視線を向けたショウジだったが――――すぐに、彼の言った事が理解できた。

そこには、壁をレンガ作りにし、入口の上の方には、『ＥＩＪＩ』というネオンがついている、一軒の店があった――言うまでもなく、神谷詠司が経営するバー『ＥＩＪＩ』である。どうやら先程の会話の最中に、いつの間にか、自分達は目的地へとたどり着いていたらしい。

「入口の上にある、この派手なネオン――まあ、停電中だから、今は光がついていないが――を見る限り、どうやらここで間違いはなさそうだな。……ったく、やれやれだぜ。これでようやく、カイドーをゆっくりと休ませる事ができるな――歌舞伎町から表参道までのマラソンは正直、俺みたいなオッサンには堪えるっつーの」

そんな軽口を叩きながらセトは、息を整えているショウジの目の前で（セトの方とは違い、こちらは本当に疲れているらしかった）、扉のドアノブに手をかけた――が、ここで問題が起きた。いくらドアノブを捻って押し開こうとしても、扉が開かないのだ。要するに、鍵がかけられているらしい。

「……？　あれ？おかしいな…。あの兄ちゃんが、あんな風に言うからには当然、店の入口の鍵は開けっ放しかと思ってたんだが……」

セトが言う。そして、同じく背後でキョトンとしているショウジと顔を合わせた。

が、その時だった――突然、入口の向こう側から、若い女性の声が聞こえてきたのだ。

「……！？　……誰…？　……あ、もしかして、ジン！？」

「んん？」

既に、別の人間が中にいるのか？　と思いながら、セトが怪訝な表情をしていると、ドアがガチャリと開いて、そこから、白いチャイナ服のような、胸元や太股などの露出が激しい服を着た、赤い髪の女性――――春沢芳野（はるさわよしの）が顔を出した。

「ああ、良かった！　ったく、いきなり改造ＣＯＭＰを持って出ていくだなんて、アタシがどれだけ心配したと――――」

早口にそこまで喋ったところで、ようやくハルは、正面にいるセトに目を止めた――――途端に彼女は、たった今、見たこともない大きな動物が玄関から入ってきたかのように、唖然（あぜん）として、その場に釘付けになった。果たしてそれは、長身銀髪に、赤い甚平（じんべい）姿という、セトの外見のせいなのか、或いは、そんな彼が背に負っている、ぐったりした状態のカイドーのせいなのかは、ハルのみぞ知る事だが――――どちらにしても、口をポッカリと開ける理由としては十分だっただろう。

「あー……どうも」

とりあえず、なるべく朗（ほが）らかな表情を作りながら、セトがそのように挨拶したものの、ハルは相変わらず、ポカンと口を開けたままだった。

とはいえ生憎、今のセトには、ハルが平静を取り戻すのをゆっくりと待っている程の時間的余裕は（主に、彼の背中の後ろで、現在も苦しそうに息をしているカイドーが原因で）殆どと言っていい程なかったので、こちらからさっさと用件を言う事にした。

「俺はセトって言うもんだ――――あー、突然で悪いけど、怪我人がいるんだ。ジンっていう兄ちゃんにはもう許可を取ったから、少し中で休ませて貰ってもいいか？」

ハルは2、3回程、目をパチクリさせた後、どうやら、目の前にいる男の姿が、ようやく幻覚ではないと判断したらしく、弱々しい声で、次のように言った。

「あ、ああ、そう――――えーと――――あ、うん……。分かった――――じゃ、まあ……とりあえず、入りなよ」

言って、ハルは、セト達が通りやすいように、自分の体を、入口の脇に退(ど)かした。そんな彼女の声を聞きながら、セトは、なんだかこの子の声は、何処かで聞いた事があるような気がするな――――と思った。が、そのすぐ後には、今はそんな事を気にしている場合ではないと、心の中で自分を叱責(しっせき)し、サッサと店の中に入る事にした。

ただでさえ、時刻は既に、夜の7時を過ぎている上に、停電のせいで電気も点いていない為、店内はかなりの暗闇に包まれていたが、ハルの案内のお陰で、セト達は何とか、置いてある椅子や机などに躓(つまづ)かずに、店の中を歩く事が出来た。

段々と目が慣れてくると、セトは、ジンが経営するこのバーは、今のご時世にしては、そこそこの売り上げを出しているらしい事がすぐに分かった。立地条件はいいし、面積は決して広くないものの（もっともそれは、セトがポロニアンモールの『エスカペイド』という店の広さに慣れてしまっているが為に、そう思ってしまっただけかもしれないが）、フロアは綺麗に掃除されており、そこそこの大きさの四角形のテーブルが、全部で5つ、床にボルトで固定されていた。そして、その先にあるカウンターの、さらに先には――――

なんと、いくつかのビリヤード台があった。これもまた、セトが、この店の経営は上手くいっている方だと判断した理由の1つだ――――当然、台があるという事は、キューやボールも、ちゃんとそれぞれの台の上に置かれている。

「……」

セトは、しばらくの間思考を巡らせた後、そのビリヤード台の内の1つにまで歩いていき、その上から全てのキューとボールをどかした後、そこにドスンとカイドーを下ろした。世に多数存在する、ビリヤードを愛する人々が見たら、すぐさま刹那五月雨撃(せつなさみだれうち)よろしく、一斉に彼目掛けてキューの先端を突き刺していくところだろうが――――無論の事、セトがそんな事を気にする筈もない。彼にしてみれば、少なくとも、床に置くよりは幾らかマシの筈だ、という判断なのだろう。

セトは一旦、カイドーの怪我の具合をザッと確認した後、結局、更に治療を施さぬまま、そこに寝かせたままにしておく事に決めた――――ある程度の処置は、既にチネシティ広場で済ませているし、カイドーの生命力ならば、それだけで十分だろう。明日、朝起きる頃には、ほぼ全快に近い状態にまで回復している筈だというのが、セトの見解だった――――少なくとも、体の方に関しては。

ハルはと言うと、そんな様子のセトと、後から入ってきたショウジの両名(りょうめい)に、それぞれ好きな椅子に座るように促しながら、相変わらず、落ち着かない様子でセトの事をジロジロと見た後、

「で――――えーと、アンタらは誰？　ジンの知り合い？」

と、セトに聞いた。もっともな疑問だった。それに対して、セト

は、

「ん？　ああ――――知り合いと言えば、まあ、知り合いだな。ついさっき、そうなったばかりだけど」

と答える。

「さっきも言ったように、俺はセトって言うんだ。よろしくな。えーと……」

そこまで言うと、セトは、何かを詮索するような目で、ハルの顔を見詰めた。彼女は、瞬時にその視線の意味を理解し、

「アタシは春沢芳野。ハルでいいよ」

と、自分の方から自己紹介した。

「そうかい。よろしくな、ハルちゃん」

初めてショウジと出会った時と同じく、早くも、初対面の女性に対して「ちゃん」づけで呼んだ後、セトは次に、

「んで、そっちにいるのが東海林で――――こっちで寝てる奴が二階堂征志だ」

と、残りの2人を紹介した。疲れきった様子で椅子に座っているショウジが、ハルに対して、小さく会釈した。

「タダシ君の方は知ってるよ――――ジンの知り合いなんだ。何度か話をした事もあれば、よくこの店にも来るし――――とはいえ、まだ

未成年だから、当然ジンは、彼に酒を飲ませたりはしないけどね」

ハルが言う。続けて彼女は、

「……って、そうだ。ジンと言えば――――アンタさっき、気になる事言ってたよね？ジンに許可を貰って、ここに来たとか何とか…。アレって、一体どういう事？」

とも言った。

「いちいち説明すんのめんどいから――――ショウジちゃん、よろしく」

勝手にカウンターの中に入り、どんな酒があるのかと、そこにある棚を物色しながら（ふざけんじゃねえよ、とハルは思った）、セトが言う。

「え？なんで私が？」

明らかに不意をつかれた様子のショウジがそのような反応を示すと、セトは、

「うるせえなー、文句言わねえで、早くそこのお嬢ちゃんに事情を説明してやれよ。こっちは、人間1人抱えながら走ってきた事で疲れてんだからさぁ」

と言った。

「ちょっ…！　それは私の方だって…！」

なんとも勝手な言い分に、ショウジは、考えるよりも先に反論が口から出かかったが、既にセトが自分の方を見向きもしないで、再び酒の物色に没頭し始めたのを見て、彼女は、どうやら自分が説明役を任せられるのは、ほぼ決定事項らしい――と、唖然としたままではあったものの、場の状況（と言うよりは雰囲気）を理解した。そうなると、いちいちムキになって反発するのも馬鹿らしくなってきたので、ショウジは諦めて、ハルに自分達がここへ来る事になった理由を話す事にした。それに何と言ったって、チネシティ広場でジンが駆け付けて来るまでの間に、自分をあの恐ろしい悪魔から守ったのは、他でもないセトなのだ。そう考えると、元より彼女には、彼の頼みに答える意外の選択肢などはなかったのでは、とも言えた。

ショウジは、約数分ほどの時間をかけて、何故、自分達のような見知らぬ人間（カイドー除く）が、突然この店に押しかけてくるような事態になったのかを、ハルに話した。

自分で言うのも何だが、『悪魔』やら『ペルソナ使い』などといった――自分でもまだ完全には理解しきれていない単語がポンポン出した割には、随分わかりやすく説明できたと思った。まあ、彼女の職業はジャーナリストという、複雑な情報を、人々に簡単に理解させるような事は日常的にやっているような仕事なので、当然と言えば当然だ。もっとも、セトがそこまでを計算に入れて、彼女に説明役を任せたのかどうかについては、甚だ疑問ではあるが。

ショウジの説明を一通り聞き終えた後、ハルは真っ先に彼女に対して、

「――じゃあ、つまり、何かい？アンタらは、その危険な悪魔をジン1人に任して、ここまで逃げて来たってこと？」

と言った。

「うっ……」

そこを突かれると、ショウジも弱かった。そこで彼女は、上手く弁明できない事をごまかす為に、「私も、彼にそう言ったんだけど……」と言いながら、いつの間にか今度は、1人でビリヤードに興じているセトにへと目を向けた。

そんな彼女と、ハルの責めるような視線に気付いたらしく、セトはキューの先で頭の横をコリコリとかきながら、2人に対して、

「あの兄ちゃんの方が、そうするように提案してきたんでな。それに、あそこではああする以外に選択肢がなかったのも事実だ――ショウジちゃん1人にカイドーを任せる訳にはいかないし、かと言って、怪我をしたままのカイドーを地面に放置したまま戦うってのも、決して安全とは言えなかったからな」

と言った。ハルは、しばらくの間は、眉間に皺をよせて、セトを睨みつけていたが、結局、何も言わなかった。いや、途中、何度か口を動かそうとしていたところを見るに、決して、率先してダンマリを決め込んでいた訳でもなかったようだが――その様子から、セトには彼女が、先程の説明の中から、何か自分を責める為のポイントを必死で探しているのだと分かった。

しかし、そんな彼女の様子は、結局のところ、知り合いであるジンの身を案じる心から来ているのだ――セトはまだ、彼女とジンが、娘と父親のような関係である事には気付いていなかったが、その程度の事は理解できた。

「……やれやれだぜ」

参ったように、今度は左手で頭の後ろをかきながら、セトが言う。あの状況では――――先程も言ったように――――こうして、自分とショウジだけでも、カイドーを連れてこの店にまで逃げて来るしかなかったとは言え、こうもハルの真っすぐな感情を見ていると、段々と罪悪感のようなものが湧いてきてしまう。それに――――あえて自分の非を、1つ挙げるとするならば――――もし、あの時、ジンが来る前に、自分があの悪魔を倒してさえいれば、このような状況には陥(おちい)らなかっただろう。

「……OK、分かった」

ややあって、セトは言う。

「こうして、無事にカイドーをここまで運ぶ事も出来たし、俺はこれから、あの兄ちゃんの――――ジン君の加勢に行く事にするよ。その代わり、いいか？　これだけは守れよ――――俺とジン君が戻って来るまでは絶対に、この店の中からは出るな。この時間の外は、もう殆ど、目に見える範囲全部が悪魔の縄張りみたいなもんだ――――多分、今2人が出て行ったら、あっという間にコマ切れだぜ？」

セトの言葉を聞いて、ショウジは「ええ、分かったわ」と素直に納得したものの、ハルの方は、

「それで、ジンが助かるならいいけど……でも、アンタの方は1人で大丈夫なの？」

と、あまりセトの事を信用していないのが見え見えの態度で、そのように言った。ついさっきまでのショウジの説明で、彼が『ペル

ソナ使い』という存在であり、かつ非凡な戦闘能力の持ち主であるという事を、ハルは聞いていた筈だが――どうやら、完全には信じていなかったらしい。まあ、いきなりそんな話を信じろと言うのも、無理な話だろうが。

「ま、心配すんなって」

ニヤッとした笑みを浮かべながら、セトが言う。

「――と言うより、むしろ心配なのは、俺やジン君よりも、お前らの方だっての。いくら屋内とはいえ、この店の中にまで悪魔が侵入してこない保障なんて、どこにもないんだからな」

言うと、セトはしばしの間、何かを考え込むかのように沈黙していたが――やがて、「よしっ、決めた」と言うと、次の瞬間には、ペルソナ、『ザオウゴンゲン』を召喚していた。

「え……っ!?　な……!?　ちょっ、あ、アンタも『悪魔使い』？」

途端に、ハルがそんな声を上げ、驚きと、僅かな恐怖がこもった視線を、ザオウゴンゲンへと向ける。ショウジにしても、別に、セトがペルソナを喚び出すのを見るのは、これが初めてではないにも関わらず、目を大きく見開いていた。

「違うよ。俺は『悪魔使い』じゃない――と、言いたいところだが……。まあ、今も悪魔と戦っているジン君の事を考えると、いちいち説明している時間も惜しいんでな。そう思いたければそう思ってもいい」

セトが言う。彼はたった今、自分が召喚したペルソナを親指で指し示すと、

「コイツは護衛として、この店に置いていく――――まあ、パッと見た感じじゃ分からないかもしれないが、こう見えても、かなり強力なペルソナなんだ。よほど桁違いな悪魔が来ない限りは、コイツ１体だけでもお釣りが来るだろうよ」

余談だが。

一般的に、『ペルソナ使い』が『ペルソナ』を使用するのは、それの特殊な魔法を使用する時だけである。何故かと言うと、それ以外のやり方――――例えば今のセトのように、常時ペルソナの召喚を維持し続けるのは勿論、一度の召喚で、２回連続で魔法を発動するのでさえ、かなりの精神力を消費するからだ。しかし、セトの表情からは、別に（少なくとも、外見上は）全く疲れた様子が見られなかった――――この辺りは、流石と言ったところだろう。伊達（だて）に、特殊（S）別課外活動部（E.E.S）に、１５歳の頃に入部してからの１９年間、ずっと『ペルソナ使い』として戦ってきていないという訳だ。

「ま、心配するなっていうのは、流石に無茶だったかもしれねえけど――――それでもせめて、無理矢理でもいいから、俺を信じててくれ。必ず、ジン君を生きたままここまで連れて来てやるよ」

そしてセトは、バーの出入り口にあるドアのところへと、迷うことなく歩いていく――――が、その途中で、ガシッ！と、何者かに右の手首を掴まれた。「？」となってセトがそちらを見れば、そこではハルが、今述べたように彼の手首を掴みながら、何とも表現し難（がた）い目で、セトの顔を見詰めていた。

「…？　なんだ？」

当然の如く、そのように、セトは頭の上にいくつかの疑問符を浮かべる。すると、ハルは一度、大きく息を吸い込んだ後、

「ジンを、お願い」

と、それだけを、言った。

「……」

セトにしてみれば、ミルメコレオ程度の悪魔など、それこそ、なんの比喩（ひゆ）でもなく、片手だけで倒せるような相手であるからして、故に、こうしてジンを手助けしに行こうとした時も、別段、気負いはせずに、むしろ少し面白そうなレクリエーションに赴（おもむ）くような、そんな軽い気持ちで、出入り口のドアを開けようとしたのだが――――いざ、そのように畏（かしこ）まった態度で頼まれてしまうと、何となく、そんな自分の若干緩んだ気持ちに対して、言いようのない恥ずかしさを覚えた。

同時に。

ほんの少しではあるが――――やる気が、出てきた。

「……任せとけ」

セトが言う。

「俺は昔から、女との約束は、必ず守る主義だ」

と、そう言って――――ここで不意に、セトとハルの目が、ピタリと正面から会った。

そして。

「……？」

そんな風に――――この時、ハルの顔を、正面から初めて見た事で、セトは彼女に、ある種の『違和感』のようなものを覚えた――――否、『違和感』という言い方は正確ではない。しかし、何かが気にかかったのは確かだ。こう、上手くは言えないが――――自分は、この子と『同類』の人間を、どこかで見たことがあるような気がする――――という、そんな、自分でもよく分からない事を、ハルの顔を見た瞬間、セトは思ったのだ。

「……？」

ハルはというと、いきなり黙って自分の事を見詰めてきたセトに対して、キョトンとした表情を作ると、

「……何？　どうかした？」

と、セトに聞いた。

「あー……いや、その……」

どう言っていいか分からず、口ごもるセト。基本、彼は相手が誰であろうと饒舌になれる男なのだが、女性と正面から顔を合わせながら話すのだけは苦手だった（それが親しい間柄である場合は別だが）。ちなみに、彼の親友である花村陽介は、そんなセトの事を『

口だけ番長』と呼んでいる。

というか――本当に彼は、自分でも、何故彼女を見て、こうも既視感（デジャヴュ）――そうだ。この感覚はまさに、既視感（デジャヴュ）と呼ぶに相応しい――のようなものを覚えているのか、上手く説明出来なかった。かといって、それをいちいち口に出して、結局「何言ってんだこのアホは」、的な眼差しをハルに向けられるのも、非常に癪（しゃく）なので、咄嗟に――慌てて、その場を取り繕う為に、無意識の内にセトは、

「あ、いや、何と言うか――君って、すっげえペチャパイだなーって」

と言った。

言ってしまった。

「……」

直後、ハルと――そしてショウジが沈黙し、両方ともが、殺意に満ちた視線をセトへと向ける。

が、次の瞬間ハルは、

「……悪かったね」

と、果てしなく冷たい声でそう言うと、武道の達人もなんのそのといった速さで、思いっ切り右拳を後ろに振りかぶり、そのまま一気に、セトに目掛けて突き出した。

「えっ！？　あ、ちょっ！　待っ…ストップ！　今のは少し口が滑」

――――『っただけだって』、と言葉を最後まで繋げるよりも前に、セトの視界は、これ以上なく固く握り込まれたハルの右拳によって、完全に閉ざされた。

やっぱり――――女と正面から話すのは苦手だ。

それが、バー『ＥＩＪＩ』から逃げるように飛び出す直前に、セトが思った事だった。

2nd Day『チネシティ広場のバトル（2）―4』

「なあ――タケミカヅチ。ちょっと、ソレ貸してくれないか？」

と。

既に、夜の帳が下りたチネシティ広場にて――唐突に、神谷詠司は、自分の仲魔であるタケミカヅチに向かって、そんなことを言った。

2人が立っている場所より、数メートルほど離れた場所では、未だに――流石に無傷とまではいかないものの――少なくとも、致命傷らしきものは負っておらず、まだまだ余力が残っている様子のミルメコレオが、ジン達を脅すように、「グルルルル…ッ！」と、喉を鳴らしていた。現在の歌舞伎町は、ほんの数日前とは違い、今となっては人々の雑踏や、多くの店の中から流れ出てくる、騒々しいとさえ言えるような音は何もない。だからこそ、そのミルメコレオの唸り声は、より一層不気味にジン達の耳に響いていた。

「……？　『ソレ』？」

一瞬、ジンの言っている言葉の意味が分からず、タケミカヅチは、僅かに眉をひそめる。

「ソレだよ――今お前が両手に持っている、その2本の刀の内の1本だ」

確かに、ジンが言う通りタケミカヅチは、刀身に雷を帯びた刀を

左右に1本ずつ、それぞれに握っていた。ちょうど数時間前に、ドーム球場前にて、クー・フーリンを相手にセトが使用した双剣『マルアーク』に、絶え間なく電流が流れているかのような――――そんな代物（しろもの）である。

「あいにく、俺はまだ、相手にダメージを与えられるような魔法は持っていない――――まあ、少し前にＣＯＭＰを起動させたばかりだから、当たり前と言えば当たり前だが――――かと言って、あんなケダモノに無策で立ち向かって行くっていうのも難儀（なんぎ）な話だ。だから、出来れば俺も武器を使って、あの悪魔に挑みたい」

だから、その両手に握っている刀の内の1本を、少しの間、俺に貸してくれ――――と。ジンはタケミカヅチに向かって、そう言っているのだ。

そこまで聞いて、ようやくジンの言いたい事を理解したタケミカヅチは、

「うむ、心得（こころえ）た」

と言って、ヒョイッと、左手に持っていた方の刀を、ジンに向かって軽く投げた。ジンは、それを器用にキャッチすると、2、3回程、試しに振ってみる。悪くない、とジンは思った。彼は刀を扱う事に関しては、これ以上ない程の達人――――という訳では当然ないが、例え素人であろうとも、相手を刃物で切れば、当然、そこに傷をつける事ぐらいは出来る。それが重要だった。

次にジンは、左足を前に出し、ミルメコレオから見て半身になり、僅かに腰を落としすと、タケミカヅチから借りた刀を、所在なさげにぶら下げるように構えた――――少し考えた結果、恐らくそのよう

に構えた方が、1番動きやすいのではと思ったのだ。同時に、こんな事ならば、普段からマメに運動していればよかった、とも。彼は運動オンチという訳ではないが、それでも、COMPの機能の内の1つである『ハーモナイザー』の恩恵(おんけい)を受けていない状態の身体能力は、決して『並』以上ではない。こうして刃物を持っている方が、先程までのように、持っていない時よりは幾らか不安が和らいではいるものの、それでも、完全に安心出来るというほどのものではなかった。

と、その時だった。突然、そんな彼の視線の先にいるミルメコレオが、妙な動作をし始めたのだ。『妙な動作』とは言ったものの、ほんの一瞬も経たない内に、ジンは、その動作――グッ…！と、ジンの方から顎が見える程にまで頭をのけ反(ぞ)らせ、何かを溜め込んでいるかのように、口を大きく膨らませている、ミルメコレオのその動作――の意味を、瞬時に理解した。今にもミルメコレオが、何か大きな魔法を放とうとしているのは明らかだった。

今までの攻撃が、殆ど予備動作なしのものが大半であった為に――ジンは、ミルメコレオのそんな『溜め』の動作に、これ以上ない切迫感(せっぱくかん)を覚えていた。そうでなくとても、この悪魔の『マハラギ』の威力は、決して馬鹿にならないのだ。

直後、ミルメコレオは、まるで極限にまで引っ張っていたゴムを突然離したかのように、凄まじい勢いでジン達がいる方向に顔を向けると、そのまま口の中から、これまでの比ではない程の火力を持った『マハラギ』を、一気に撃ち放った。

「ジン殿！」

「分かってる！」

タケミカヅチが警告を発した時には既に、ジンは体を動かしていた。体を大きく横に投げ出して、荒れ狂う炎の嵐の有効範囲から、必死で逃れようとする。タケミカヅチの方はというと、自分に正面に『ジオダイン』を発動して、まるで1枚の壁に隠れて突風をやり過ごすかのように、炎の波から身を守っていた。

ジンが予想した通り、その『マハラギ』にはかなりの魔力が込められていたらしく、威力が増加しているのは勿論の事、その魔法の最大の利点である攻撃の『範囲』までもが、これまで以上に広くなっていた。お陰で、あともう少し気付くのが遅れれば――タケミカヅチはともかく――ジンの体は、細胞の1つまで、跡形もなく燃やし尽くされていたところだろう。そう考えると彼は鳥肌がたったが――しかし、そういった大きな攻撃には、先程のような大きな予備動作が必要であり（だからこそ、ジンはからくも、今の攻撃を避ける事が出来たとも言える）、それは必然的に、その動作の大きさに比例した『隙』が、攻撃の直後に生まれる事を意味している。本格的な『殺し合い』については、当然、素人の部類に入るジンにしても、その『隙』に気付くのは、決して難しい事ではなかった。

だからこそ、彼は。

「おおおおっ！」

――と、気合いの声を上げながら、今まで、こんなに速く走った事はないのではと、自分でも驚く程の速さで、ミルメコレオへと突貫した。次にジンは、一旦、左手に持ったナイフを、右の脇腹から、背中の後ろにまで回す事で、十分に遠心力をつけると、そのまま、右から左に薙ぐように、ミルメコレオの頭を切り裂こうとする。幾ら悪魔とはいえ、生きている相手の頭に刃物を振るうというのは、

ジンにしても決していい気分ではなかったが、そうでもしなければ殺されてしまうのは自分達の方なので、躊躇（ちゅうちょ）している場合ではない、と、自分に言い聞かせながらの行動だった。

だが、そんな彼の心意気は、結局、無駄に終わる事になる――――突然、ガチィンッ！　という金属音が鳴り響いたかと思うと、刀を振っていたジンの腕が、ピタリと動きを止めたのだ。否、止められたと言うべきだろう。見れば、何と信じられない事に――――ミルメコレオは、ジンが握っている刀の刀身を、その鋭い牙で、ガッチリとくわえ込んでいたのだ。

「なっ……！？」

『悪魔』という存在を知ってから、その手の事に関しては、度々驚かされてきたジンではあったが、今回、彼が感じた驚きは、それまでのよりも一層大きなものだった。振り付けられた刀を歯――――いや、牙か――――で防ぐなど、一体、どれだけの牙の硬さと顎（あご）の力があれば、そんな芸当が出来るというのだ？　どうやら、こうしてタケミカヅチから刀を借りたところで、敵悪魔（ミルメコレオ）と自分との間に広がっている戦闘能力の差は、それほど大きくは縮まっていなかったらしい。

ジンが呆気（あっけ）にとられている隙に、ミルメコレオは、即座に反撃を開始していた。その自慢の牙でジンが持つ刀をくわえたまま、前の方の右足を大きく振るい、そこにある鋭い爪で、ジンを、何分割かにされたただの肉の塊（かたまり）に変えようとする。

だが、『ジンの刀をくわえながら』というのが、以外と大きな制約として働いたのだろう。その攻撃の速度は、今までのものよりは遥かに劣っていた。それ故に、ジンは何とか間一髪のところで、そ

れをかわす事が出来た。その際、（言うまでもなく）体を動かした為、必然的に握っていた刀から手を放してしまったが、そうでもしなければ今の攻撃から逃れる事は出来なかったので、やむを得ないだろう、とジンは思った。

その時だった、突然、彼の左の方から、

「ジン殿！　そこから離れろ！」

――――という声が飛んできたのは。いちいち確認するまでもなく、当然、それがタケミカヅチのものであることを悟ったジンは、そちらに目を向けようともせず、言われた通りに、大きく後ろに飛んで、ミルメコレオから距離をとった。

直後、タケミカヅチが離れた場所から投擲（とうてき）した刀が、ミルメコレオの頭へと真っ直ぐ向かっていった。ミルメコレオには、今まで一度も魔法攻撃が当たらなかったから、という、単純な理由からの純粋な物理攻撃だったが――――やはり、そんな浅はかな考えで何とかなるほど、甘い相手ではなかった。ミルメコレオもまた、ジンと同じく、投げつけられた刀を見ようともせずに、ザッ！　と後ろに動いてそれかわした。

しかし、だからと言ってその攻撃が無駄だったのかと言えば、決してそんな事はなかった。回避行動に移る際ミルメコレオは、思わずその口から、くわえていた刀を離したのだ。すかさずジンが動き、それをバッと拾うと、すぐにタケミカヅチに向かって投げ渡した（先程、タケミカヅチが投げた方の刀は、広場の向こう側にある、一軒の店の壁に突き刺さり、ビイイン…！　と小さく震えていた。流石に、それを取りに行く気にはなれなかった）。

「ったく…！　アイツめ…！」

ジンが言う。

「体こそは、それこそ見た目通り、ライオン並に大きいクセに、あのすばしっこさときたら、まるで猫さながらだぞ」

しかし、泣き声ばかりを言っていては、いつまで経っても事態は好転しない。だからこそ、ジンは考えた――何とか、ミルメコレオに攻撃を当てる事が出来る方法を。そう、ミルメコレオの攻撃力、防御力、機動力は、大多数の悪魔よりも遥かに高いが、中でも1番厄介なのが、3つ目の機動力なのだ。主に、こちらの攻撃がことごとくかわされてしまうという、そういった理由で。

1発だ。と、ジンは思った。

相手の素早さが生半可なものではないなら、手数にモノをいわせての攻撃は、どう考えても効率的ではない。その理由は、これまでの戦いの経過（けいか）を省（かえり）みれば明らかだ。

ならば――相手の動きを止めてその上で絶対に耐え切れない一撃を放つ方が、まだしも効率的だ。

そして、偶然か必然か――そう考えると同時に、ジンは、『その絶対に耐え切れない一撃』とやらを、今の自分は持っているという事を、思い出していた。

彼の改造ＣＯＭＰにセットされているスキルの内の1つ――『絶妙打』。

これを上手く使えば――ここまで、散々自分達を手こずらせてきた、目の前にいる悪魔を、1撃で倒すことが出来るだろう。

そこまで思考すると、ジンはほんの数秒も経たない内に、その案を実行に移すことを決断した。

しかし、その為には、幾つかの準備が必要だ。

だからこそ、彼は――

「……タケミカヅチ、少しの間だけでいい。アイツの動きを止められるか？」

と、タケミカヅチに向かって、そう言った。

今言った、『アイツ』――妖虫・ミルメコレオから、決して視線を外さぬまま。

「……何か、考えがあるのか？」

タケミカヅチがそのように言うと、ジンは、「まあな」とだけ返した。

しかし、タケミカヅチにしてみれば、そんな短い返事だけでも十分だった。

ここまでの短い攻防の中で――この悪魔もこの悪魔なりに、神谷詠司が、口先だけの人間ではない事を、理解したのだろう。そう考えれば――ある意味では、タケミカヅチが、こうしてジンの器量を認めたこの時に、初めて、2人は本当の意味での『契約』を果

たした、という事になるのかもしれない。

「アイツを、絶対に1撃で倒せる技を思い付いたんだ――――が、それを撃つには少し時間がかかる。しかも、確実に当てる為には、お前がアイツの注意を引き付け、そして最終的には、動きを止めなきゃいけないというオマケつきだ。……まあ、もっとも」

ニヤッ、と皮肉な笑みを浮かべながら、ジンが言う。

「お前が1人じゃ不安だって言うなら――――別の方法を考えてもいいけどな」

「フン……」

タケミカヅチもまた、そんな彼と同じように、ニヤッと笑いながら、

「余計な心配だ――――そんな暇があるならば、しっかりと力を溜める事に専念してくれ」

と言った。

そして次には、いよいよ作戦を開始する為に――――ジンが十分に力を溜めるのに必要な時間を稼ぐ為に、タケミカヅチが真っ直ぐ、ミルメコレオへと向かっていった。

「いくぞ！ミルメコレオ！」

ミルメコレオもまた、正面から迫ってくるタケミカヅチの気迫に応えるような形で、再び、耳をつんざくような吠え声を上げた。

――ガアアアアアアッ！！

そして、ジンもまた、タケミカヅチとミルメコレオが、激しい戦いを繰り広げ始めたのを確認すると同時に、自分もまた、行動を開始していた。

「『ディア』！」

彼は、ＣＯＭＰにセットした、『護りの盾』、『絶妙打』に次ぐ、３つ目のスキルである回復魔法を、自分自身に向けて発動した。それも、１度だけではなく、２度、３度と、立て続けに――だ。

それによって当然、先程ミルメコレオにより、壁にたたき付けられた際に負ったダメージは回復していくが――しかし、ジンの真の狙いはそこではなかった。彼は、そんな事の為に、大切な仲魔を１人で相手に向かわせ、危険に曝させるような男ではないのだ。

ジンが、自らの魔力が許す限り『ディア』を発動し、体力を出来る限り回復させている、本当の理由――それは、『絶妙打』の威力を、可能な限り高める為である。

何故ならば、この『絶妙打』という物理スキルは、『使用者の体力が多ければ多い程、その威力も高くなる』、という、奇妙な特性を持っているからだ――そう、実に奇妙だ。何をいまさらと言われればそれまでだが、返す返すもジンは、一体、この改造ＣＯＭＰを自分に渡した『あの男』は何者なのだ、と思わざるを得なかった。

しかし、まあ――そのスキルの特性が、いかに摩訶不思議なものであろうと、この際どうでもいい、と、ジンは思った。とにかく、

今タケミカヅチと1対(サシ)1で戦っているミルメコレオを倒せさえすれば、それでいい、とも。

だからこそ彼は、絶え間無く、自分自身に『ディア』をかけ続ける。

全ては――最後に放つ『絶妙打』の1撃で、ミルメコレオを、確実に仕留める為に。

そして。

彼の仲魔であるタケミカヅチもまた、そんなジンの作戦を成功させる為に、そこより数メートルほど離れた場所で、ミルメコレオと死闘を繰り広げていた。

まるで、体の中にあるものを全て吐き出しているかのように、ミルメコレオの口から次々と放たれる『マハラギ』を、タケミカヅチは何とかかわしていく。

その最中に、タケミカヅチは考えた。

ジンが言ったように――目の前の悪魔(ミルメコレオ)の動きを、少しの間だけでも止める為の方法を。

結論として――タケミカヅチは、自分が得意とする電撃系の魔法で、ミルメコレオを、『感電』の『状態異常』に陥(おちい)らせる事に決めた。『相手の動きを封じる』という事にかけては、それが1番ベストな方法だと思ったからだ。

だが――その為に相手に直撃させる必要がある『マハジオ』や

『ジオダイン』を放っても、動きの速いミルメコレオには、高い確率で避けられてしまうだろう（これは、非常に驚くべき事だ。何せ、これらの魔法が相手に向かっていく速度は、それこそまさに、雷と殆ど変わらないのだから）。

故（ゆえ）に。

タケミカヅチはまず、ミルメコレオのあらゆる『五感』を鈍らせようと考えた。

「……っ！」

そんな事を考えている間も、当然、ミルメコレオの怒涛（どとう）の攻撃が止む事はない。顔面目掛けて振るわれた凶暴な爪を、頭をグイッと横に反（そ）らす事で、スレスレのところで回避する。

「おぉおっ！！」

――と同時に、タケミカヅチは、右手に魔力を集中させると、ミルメコレオの目前で『ジオダイン』を発動させた。

しかしそれは、相手にダメージを与える事が目的ではなく――先程、タケミカヅチが考えたように、ミルメコレオの『五感』に影響を与える事が目的だった。

タケミカヅチはこの時、本来なら、相手に向かって飛来していく筈の雷撃（らいげき）を、右の手の平の中で握り潰したのだ。

結果、外に放たれる筈の『ジオダイン』は、タケミカヅチの手によって抑圧され、次には、その中で『爆発』した――瞬間、タケ

ミカヅチの右手を中心に、耳を覆いたくなるような爆音が鳴り響き、目を閉じたくなるような閃光が放たれた。

しかしそんな中でも、タケミカヅチには、ミルメコレオの口から、「ギャオンッ！」と、不意をつかれたような、情けない鳴き声が漏れたのがハッキリと分かった。理由は、考えるまでもない。『爆音』と『閃光』――爆音が『聴覚』を、閃光が『視覚』を鈍らせたのだ。仕組みはスタングレネード等の武器と一緒だ。これは、爆音と閃光を発する手榴弾の一種で、その有効範囲内にいる対象の視覚、聴覚および平衡感覚などを、一時的に麻痺させることが可能な武器である。

要するに――タケミカヅチはこの時、『ジオダイン』を相手にダメージを与える事を目的としてではなく、このスタングレネードと同じように、ミルメコレオの視覚や聴覚――つまりは、攻撃を避ける為に必要な感覚を奪う為に使ったのだ。

ちなみに、握り込んだ手の中で『ジオダイン』を発動した以上、通常ならば、それによって使用者の方が甚大（じんだい）なダメージを（主に手に）受けてしまう筈なのだが――タケミカヅチは、雷属性に対しては『反射』の耐性を持っている為、一切、ダメージを負っていなかった（むしろ、そのような耐性を持っていたが故に、手の中で『ジオダイン』がより強く爆発し、彼の作戦が更に効果的に実行されたとも言える）。

それはともかく。

画（かく）してタケミカヅチは、一時的にではあるが、ミルメコレオの視覚や聴覚などを鈍らせる事に、見事に成功した――そして次には、その効果が少しでも薄れてしまう前にと、次の行動を開始する。

（よしっ！奴に今、私は見えていない――――くらえ！！）

2度目の『ジオダイン』を放とうとするタケミカヅチ。今度は、正真正銘、相手にダメージを与え――――そして、『感電』させる為の攻撃である。

通常、電撃属性の魔法によって、相手が『感電』に陥る事は、かなり確率的なもので、本来なら狙って行えるようなものではないのだが――――しかし、現存（げんぞん）する悪魔の中では、最も電撃属性の魔法の扱いに長けていると自負しているタケミカヅチには自信があった。自分の電撃魔法ならば、確率がどうといった話ではなく、直撃さえさせれば、相手を確実に『感電』状態にさせる事が出来るという、そんな確信が。

直後、タケミカヅチの右手から、再度『ジオダイン』が放たれる。視覚も聴覚も封じられ、タケミカヅチが雷撃を放った際の光も音も確認する事が出来なかったミルメコレオは、無抵抗のまま、その攻撃を受ける事になった。ミルメコレオはたまらず、先程のジンと同じように、口から大量の血を吐き出した。

と、同時に、その体が、まるで見えない鎖でがんじからめにされたかのように、不自然な体勢のまま停止し、ピクピクと震え出す。タケミカヅチが攻撃の直前に抱いた確信が、今、ここに現実となった――――彼は見事、ミルメコレオを『感電』の『状態異常』にさせる事が出来たのだ。

「……ッッ！？　……ガ……ガ、ガガァッ……！？」

停止する。

ミルメコレオの動きが――停止する。

ここで1つ、『感電』というものについて、簡単な説明しておこう。

これには、2つの効果がある。

1つは――その名称からも想像できるように、被対象者の体の動きを、一時的に停止させる効果。

もう1つは、被対象者の、物理攻撃に対する防御力を、一時的に低下させる効果――である。

そして、タケミカヅチにしてみれば――むしろ、今述べた、2つ目の効果の方が重要だった。

何故なら――。

「……準備は整ったぞ。ジン殿」

言って。

『感電』し、体を硬直させているミルメコレオを置いて、タケミカヅチは、スッと、その場から離れた。

ミルメコレオの力量を考慮すれば恐らく、『感電』の状態が続くのは、もって後数秒といったところだろうが――しかし本格的な戦闘において、『数秒』という時間はもはや、永遠と同じである。

そして。

そんな――――これ以上ない好機を見逃す、彼ではない。

彼――――神谷詠司は、タケミカヅチがミルメコレオから距離を取り始めた時には既に、準備が整っていた。

「ようし、ご苦労さん」

いつの間にか――――タケミカヅチと入れ代わるように、ミルメコレオのすぐ側にまで接近していたジンが言う。

そんな彼は、タケミカヅチが、何とかミルメコレオの動きを、少しでもいいから止めようとしている間――――ずっと、回復魔法の『ディア』を、自分に向けて発動し続けていた。

『体力』。

そして、それが多ければ多い程、威力が上がるという――――『絶妙打』。

更に、ミルメコレオは現在、『感電』の状態異常に陥っている。

決して、相手の動きをかわす事が出来ず、そして、受ける物理攻撃のダメージが、通常よりも大きくなるという――――『感電』の状態に。

それら、全ての要素が合わさった、『絶妙打』をここで撃てば――――その威力は計り知れない。

そして、ジンは。

「……タダシの借りを、返させてもらう」

その、計り知れない威力を持った『絶妙打』を、ミルメコレオの頭部に目掛けて、一気に、撃ち放った。

対する、ミルメコレオには――どうする事も出来ない。

体の隅々まで『感電』し、神経の一本でさえ、上手く稼動させる事が出来ない、ミルメコレオに出来る事といえば、せいぜい――

「……ッッ！！」

と、声なき絶叫を上げるぐらいだった。

その後、何が起こったかなど、わざわざ語る必要もないかもしれないが――それでも、あえて語ろう。

「これで――終わりだっ！！」

そんなジンの声と共に、グシャアッ！　という、壮絶な炸裂音が、チネシティ広場に響き渡る。

ミルメコレオの頭が、ジンの拳によって粉々にされ、辺りに四散した。

後に残った、首から下の胴体は、つかの間、グラグラとダルマのように揺れたかと思うと、次には、糸が切れた人形のように、力なく地面に倒れ――それと同時に、黒い霧のようになって、跡形も

なく消えた。

◆　◆

戦いは、終わった。

つい数時間前まではごく普通の民間人だった、1人の男性の手によって。

神谷詠司。

これをもってして、彼は――――『ありふれた日常』という世界から離脱（りだつ）し、あらゆる常識が崩壊した『悪魔使い』としての『非日常』へと、足を踏み入れる運びとなる。

全てが、有里湊（ありさとみなと）の計画通りだった。

2nd Day終了

スタ、スタ、スタ、と。

神谷詠司（かみやえいじ）は、疲れきった体を持ち前の強靭（きょうじん）な意志で無理矢理動かしながら、チネシティ広場から歌舞伎町の通りへと出てきていた。

先程、ジンと共にミルメコレオなる悪魔と戦った、彼の仲魔――タケミカヅチは、既にＣＯＭＰへと帰還させている。

ジンのＣＯＭＰは、まだ使い始めたばかりであるにも関わらず、既に煤（すす）や土などに塗（まみ）れており、まるで長年使い込んできたかのような状態になっていた。それを見ただけでも、今まで、ジンがどれだけ激しい戦いを繰り広げていたのかが分かる。

今の彼の外見にしてもそうだ。先程の戦いの決め手となった『絶妙打』を放つ前に、魔力が許す限り回復魔法の『ディア』を自分自身に向けて発動させていた為、目に見える外傷は殆ど塞（ふさ）がっているものの、流石に、血で汚れたり、戦闘の際に傷ついた衣服のダメージまでは元には戻らない。今のジンの様子は、正にそれだった。

そんなこんなで――――体力的にはともかく――――外見的にはかなりボロボロの状態のジンは、新しい衣服に着替える為にもとっとと自分の店へと帰ろう、と考えていた。

彼はとりたてて几帳面という訳でもなければ潔癖症（けっぺきしょう）という訳でもないが、清潔なのと汚いのとどちらかを選べと問われたら、当然、前者を選ぶくらいの常識は持ち合わせている。

ちょうど薄暗い路地から（別に、路地に限らず、現在の時刻ではどこでも薄暗いだろうが）歌舞伎町の通りへと出た位置で、ジンは、注意深く辺りを見渡す。言うまでもなく、突然、夜の闇に紛れて悪魔が襲ってこないかどうかを警戒しての行動だ。

まあ、今戦ったミルメコレオに比べれば、その辺りに跋扈している悪魔の大半などはものの数ではないだろうし、タケミカヅチを召喚すれば迎え撃つのは更に容易だろうが、戦わずに済むならそれに越したことはない。

と、その時。

「お、見ーつけた」

という、そんな声が聞こえたかと思うと、突然ジンの目の前に、ただでさえ平均よりは背の高い彼よりも、更に背の高い、銀髪の男――セトが、どこからともなく現れた。

「貴方は……」

言って、ジンは僅かに目を見開く。

「てっきり、私の店に向かったものかと思いましたが…。どうして、また戻ってきたんですか？それに、タダシやあの女性は、一体どうしたんです」

「質問は1度につき1回にしてくれよ――ったく、やれやれだぜ。一旦、店には辿り着いたんだ。で、あー、そこにいた、アンタの知り合い――確か、ハルって名前だったか？　――に、少し頼ま

れてな。やっぱ、アンタ1人だけ残していくのは心配だから、様子を見に行ってくれ、って。そんな訳で、こうして俺がわざわざ来てやった訳だ――カイドーとショウジちゃんはお留守番さ。こう言っちゃアレだけど、あの2人がついて来たところで、役に立てる事はあまりないだろうしな。……いや、て言うか――」

一旦、セトはマジマジとボロボロになっている様子のジンを、頭のてっぺんから足の爪先にまで視線を走らせると、

「……え？　何？　兄ちゃん――まさか君1人で、あのライオン（ミルメ）もどき（コレオ）を倒しちゃった訳？」

と、言った。

「ん…？　……あ、ええ、まあ……ハイ、そうです」

これ以上なく疲れている為か、若干歯切れを悪くしながら――つまりは、上手く言葉を紡げない程度には、頭の回転が鈍ってしまっている――ジンが言う。

体力の方に関しては『ディア』である程度回復させているので、むしろ有り余っているぐらいかもしれないが――そのスキルを連続で使用する為に消費した魔力は、半端（はんぱ）なものではない筈だ。

それらの事から察するに、この時のジンの疲弊（ひへい）具合は、魔力の過剰（かじょう）な消費による精神的疲労が原因だろう。同時に彼は、「ああ、やっぱりハルは、まだ店に残っていたのか」とも思った。

ジンの返事を聞いて、セトはヒューッ、と感心したように口笛を吹いた後、

「驚き、桃の木。君って、案外凄いんだなあ」

と言った。

「……まあ」

肩を竦めながら、ジンが言う。

「……今回は、何がなんでもってやつでしたからね……。何より、あの悪魔には、タダシを傷つけた礼をしなくてはいけませんでしたから」

「ああ……」

そういう事か、と、セトは思った。

「ま……、そうだろうな。何となく、気持ちは分かるぜ」

ポスッ、と、握り込んだ右拳で軽くジンの肩を叩きながら、セトが言う。同時に、

（それにしても……）

と、彼は思った。

（淳にカイドーに、そして、このジン君といい……。若い芽が、順調に育ちつつあるな……）

セトの年齢は既に３４歳。一般的に見れば若いかどうかはともか

く、まだまだ先がある歳だろうが――彼のように、悪魔やシャドウといった人外の存在と日夜戦い続ける事を生業（なりわい）としている人種の中では、既に大ベテランとも言われてもおかしくない。

セトは、そろそろ自分のような老いぼれがお払い箱になる日もそう遠くはないかもしれないな――と、考えていた。

否、『かもしれない』ではなく――実際にそうなる可能性は、大いにある。

少なくとも。

『神』の目論み通りに、有里淳が『救世主』となったあかつきには――間違いなくそうなるだろう。

そして。

その時は――同時に、セトの『宿願』が成就（じょうじゅ）される時でもある。

――と、セトがそのように思案に耽（ふけ）っていると、唐突にジンが、

「ところで……。貴方も、『悪魔使い』なのですか？」

と、彼に尋ねた。

「……？　なんでそう思うんだ？」

訝（いぶか）しげな表情を作りながら、セトが言う。同時に、ハルも似たようなことを言っていたな――とも。

「いえ……ただ、この暗闇の中、野生の悪魔達に殺されずに、無事にここまで来たという事は、恐らくそうではないのか、と」

ジンの推測を聞いて、セトはクスクスと笑うと、次のように言った。

「まあ……それについては帰ってから話すさ。辺りがこんなに薄暗い中で立ち話すんのは、あまり懸命じゃないしな。とにかく今は、一刻も早く君の店へ戻るのが吉だ。ハルちゃんもカイドーもショウジちゃんも、皆そこで君の帰りを待ってる」

セトの言葉を受けて、ジンは一瞬何かを言おうとしたが、寸前で、思い直したかのように一度口を閉じると、

「……それもそうですね」

と言った。しかし次には、彼はセトの顔をマジマジと見ながら、

「……ところで、その顔の痣はどうしたんです？　やはり、途中で悪魔に襲われたのですか？」

と言う。見れば、確かにジンが言うように、現在、セトの顔には、まるで少し前に、誰かに殴られたかのような大きな痣があった。

「ん？　ああ、コレか？」

反射的に手で痣を摩りながら、セトが言う。

「いや、別にコレは、悪魔に襲われた事によって出来たって訳じゃあ、ないんだよ。うーん…。何と言うか、あまり、詳しい事情は言

いたくないんだが…」

実際、今のセトの表情はまるで、そんな感情をそのまま反映させたかのように、どこかどんよりとした雰囲気を漂わせていた。

「まあ、１つだけ言えるとすれば……。そうだな、ジン君」

やがて――ジンと一緒に並んで、彼の自宅でもある、バー『ＥＩＪＩ』へと向かいながら、セトが言う。

「あのハルって子の性格、少し矯正（きょうせい）した方がいいぞ――そうだな、少なくとも、少し冗談を言われたぐらいで、即座に人の顔面を殴ったりしない程度にはな」

◆

◆

同時刻。

「今日も…帰れなかったね…」

宮下公園にあるベンチの１つに腰掛けながら、ユズはそのように呟いた。

「…仕方ねぇよ。封鎖が解けるか、自力で脱出するまで俺達は、こ

の山手線の内側で生活するしかないんだ…」

そう言ったのは、そんな彼女の正面に淳と一緒に立っているアツロウである。

「あー、ほらほら、2人共、そんなしょげきった顔すんなって！」

アツロウとユズが、まるでたった今目の前で誰かが死んだのを目撃したかのように暗い表情になり始めたので、何とか場の空気を明るくする為に、なるべく元気な声で淳は言った。

「大体、今日、俺達の身に降り懸かった災難を思えば、こうして命があるだけでも奇跡みたいなもんだろ？　封鎖の抜け道を見つけだすにしても、先ずは命があってこそだからな」

「まあ、そうだな…」

白いニット帽の上から、頭をガシガシと掻きながらアツロウが言う。

「……これからも、こうして無事に生き残る為にはやっぱり、ラプラスメールに注目した方がいいだろうな。アレは1番の悩みの種であると同時に、俺達が『死』の運命を回避する為の重要なヒントでもあるんだからな」

「あのメール……。ただ胸クソが悪くようなニュースを教えるだけじゃなくて、『こうすればこの運命は変える事が出来るよ～』、みたいな事が書かれてあれば、かなり助かるんだけどな…。流石に、あの馬鹿（ナオヤ）に対して、そこまでのサービスを求めるのも無理な話か」

アツロウのバックの中から空のペットボトルを取り出し、それを片手に持って、近くの水のみ場まで歩いて行きながら、淳が言う。

「とはいえ――昨日は俺達3人が『雪男に殺される』で、今日は『東洋アンズにで50人以上の死傷者』ときてる。俺には何だか、ラプラスメールが教えてくれる未来の内容が、段々と酷いものになっていってるような気がしてならないんだよな…。この調子じゃ、明日は一体、どんな内容のメールが届いてくるのか……考えたくもねえな」

と、アツロウ。それに対してユズが、

「そうだよね…」

と言った。

「封鎖の内側を見てると、あんまり楽観的にはなれないし…。例えば…ホラ、改造ＣＯＭＰが思ったより出回ってるじゃない？そういう事とかさ…」

「そうだな…」

淳が水のみ場の蛇口を捻って、空のペットボトルに水道水をなみなみと満たしていくのを見ながら、アツロウが言う。

「翔門（しょうもん）会の連中は、プログラムを依頼した張本人だから持っていても不思議じゃないけど…。カイドーや、ホンダさん、ケイスケに…後は、放置されてたＣＯＭＰもあったな。なんか…ちょっと不自然なくらい出回り過ぎてるぜ」

「それに今朝のヤクザみたいに、ＣＯＭＰを悪用しようとする連中の事もある」

いつの間にか2人の元に戻ってきた淳が、水道水を補充したペットボトルを、アツロウのバッグに戻しながら言う。

「ただでさえ状況は最悪だっていうのに…。あんな連中がこのまま増えていったりしたら、それこそ手に負えないぜ。……危険過ぎる」

「ああ……。これからは、そういう奴らにも注意していかないとな……」

どこか遠くの方に視線に向けながらそのように言うアツロウに対し、ユズが口を開いた。

「でも……気にするべき事はそれだけじゃないよね。私としては、悪魔達が言ってた『ベル・デル』って奴が、凄く気になるよ……」

その名前を聞いた途端、淳が顔をしかめた。

「そりゃ、俺だって気にはなってるさ。今日遭遇した悪魔達の殆どが、その名前を口にしてたからな……」

「悪魔達は確実に、そのベル・デルって奴をこの世に喚び出す為に活動してる」

頭上に広がっている東京の夜空を落ち着かない様子で見上げながら、アツロウが言う。

「……つまり、連中は単に喚び出した人間に従うだけの存在じゃな

かったって訳だ」

「ああ……まあ、そんな事は、初めてこのＣＯＭＰを起動させた時から、分かってはいたけどな……」

淳は、２日前になんの事情も知らないまま、現在、自分達が持っているＣＯＭＰを起動させ、突然光り出した画面の中から悪魔が飛び出してきた時の衝撃を、まだ忘れてはいなかった。

「ベル・デルって奴が何者で、何をするつもりなのかも知らないけど……。そんな奴が出て来て、この状況がマシになる訳がないもんな」

忌ま忌ましそうに、淳は地面に唾を吐いた。

「それに、明日からもきっと悪魔の数は増え続けるだろうな。一般人じゃ、アイツらには太刀打ち出来ないだろうし、そうなると……」

「――俺達が何とかするしかないな、うん」

淳の台詞の最後の部分を、アツロウが引き継いだ。その直後に彼は、「……つーか、やる事多過ぎだろ……」、と続ける。

「……せめて、ナオヤさんの方から直接、何かしらの情報が得られればなぁ……」

儚(はかな)い望みだとは分かっているけど、という様子で、アツロウは言った。

「ほんと……あの人はどうして、俺達をこの封鎖に巻き込んだんだ

ろうな？　もし、それを知らないまま悪魔達に殺されるような事になったら、俺は死んでも死にきれないよ」

「むしろ、アイツを殺すね」

きっぱりとした口調で、淳が言う。

「明日……と言えば」

上の空な様子で、ユズが言った。

「ショウジさんの情報によると……封鎖のストレスによる暴動とかが起こるのも明日だって話だよね？」

「うえぇぇ……」

淳は、何かマズイ物でも食べたかのような顔をした。

「う～ん……。その予想は、出来れば当たって欲しくないなぁ……」

と、アツロウが言う。

「ホントだよ……。ただでさえ私達の余命は、明日で……」

「ああ、もう、やめろよ」

いい加減我慢の限界だというように、淳は言った。

「ベル・デル――とか、そんな顔も知らないような奴に黙って殺されてたまるかっつうの。安心しろよ、ユズ。俺が――じゃなく

て、俺達が守ってやるからさ」

途中からアツロウが眉を吊り上げながら淳の事を睨んできたので、彼は慌てて後半の方の台詞を訂正した。

ユズは一瞬、虚をつかれたような表情をしたが、すぐに、先程までは不安がっていた顔を綻ばせると、

「……あははっ、ありがとう。うん、頼りにしてるね！」

と言った。

「……本当にありがと……。ちょっと、元気でた……」

「別にいいって」

ユズに向けてヒラヒラと手を振りながら、淳が言う。

「まあ、とにかく」

そんな2人の様子を見ていたアツロウが、これまでの考えをまとめるように口を開いた。

「何か対策をたてようにも――まずは、明日のラプラスメールを読んでからだな。そこに、俺達が生き残る為のヒントがある筈だ」

「それもそうだけど」

まだ夜の7時であるにも関わらず、眠そうに瞼を擦りながら、淳が言う。

「あのオッサンを探す事も、忘れないようにしないとな」

「『あのオッサン』って……。一昨日、俺とユズが寝てる間にお前が会ったっていう、『セト』って人の事か？」

アツロウがそのように尋ねると淳は、「ああ、そうだ」と言って力強く頷いた。

「けどなあ……その人の場合もナオヤさんと同じぐらい、どこにいるのか、全く見当がつかないんだよな……。せめて、何か手がかりがあればいいんだけど……」

アツロウが言う。

「手がかりねぇ……。……って、あ、そういえば……」

そう言うな否や、淳は突然、アツロウのバッグに手を突っ込んだかと思うと、次には、その中から『あるもの』を取り出していた。

「……？　あれ？　それって……」

淳が取り出したものを見て不思議そうな顔をしながら、首を傾げているユズ。アツロウにしても同じような表情をしているのだろうと思いながら、淳は、手の平の上に乗っているそれを、マジマジと見詰めた。

そこにあるのは、何の変哲もなさそうな黒い縁の眼鏡だった。２日前の夜に、淳がセトと初めて会った時、セトが淳の前から去っていく間際に彼に預けたものである。

淳がアツロウとユズにその事を教えると、２人はあからさまに驚いた表情をした。２人共、その眼鏡の存在自体は知ってはいたものの、てっきり、淳がオシャレの為に封鎖前に買ったものだとばかり思っていたからだ。

「お前、何でそんな大事な事を黙ってたんだ？」

不満を一切隠そうともせずに、アツロウが言った。

「いや、別に意図的に黙ってた訳じゃねえよ。いま思い出しただけだ」

淳は正直に言った。

「つっても――――まぁ……」

淳は、手の平の上でコロコロと眼鏡を転がしながら、

「……あのオッサンがどうして俺にこんな物をくれたのか、俺には、未だに分からないんだけどな。確か――――何だったけか――――ああ、そうそう、『見るべきものが見えない時に使え』、……とかって言われて、これを渡されたんだけど……。どういう意味だと思う？」

淳は、アツロウとユズの両方に向けてそう尋ねたのだが、２人は、まるで淳の様子をそのまま鏡映しにしたかのように、『意味が分からない』、という表情を見せただけだった。

「ああ、畜生」

アツロウが唸った。

「そのセトってオッサンも、ナオヤさんと同じだ。何を考えてるんだか、さっぱり分からない――――いや、それとも実は、何も考えてないのか？　なあ、ジュン。俺には段々そのセトって人が、実は頭がちょっとおかしいだけのオッサンで、単に、お前をからかっているだけのように思えてきたんだけど……」

そこを突かれると淳は弱かった。だが実際には、そのように言われた時にどのように言い返すのかを、淳は予め決めていた

「うーん、まあ……。お前の言ってる事は確かに合理的ではあるんだけどさ」

淳が言う。

「でも、いいかアツロウ。何故か俺には、この人は何か重要な事を知ってるんじゃないかって分かるんだ。とにかく分かるんだよ。そう、それこそ例えば、さっきも言ったように、ベル・デルの倒し方だってな」

ハッキリとそのように言う淳に対して、アツロウはあからさまに、「ハイハイ、分かりましたよ」とでも言いたそうに、お手上げのポーズをした。

「……ま、お前がその人を信じるっつーんなら、俺も信じるけどさ。それになんにせよ、手がかりは1つでも多い方がいい」

そこまで言うと、アツロウは大きな欠伸をした。彼もまた淳と同じように、既に眠くなってきているらしい。最も、彼等が今日1日

に消費した体力はそれまでの日常の比ではないので、当たり前と言えば当たり前かもしれないが。

「……さて！まあ、とりあえず今日のところは、ここら辺で体を休ませとこうぜ。きっと明日もまた、かなり忙しくなるだろうしな」

「うん、そうだね。わ――――わ――――私も、すっごく眠くなってきたし……」

ユズは欠伸をしながらも、無理に台詞を言い切ろうとした為、その言葉は途切れ途切れだった。

ユズは、一度体をブルルッと震わせると、

「最初は、誰が見張りに立つの？」

と言った。

すぐさま、淳が名乗りを上げようとしたが、それよりも、そんな彼をアツロウが手で制する方が早かった。

「お前は先に寝てろよ、ジュン――――今日、１番体を動かしたのは誰かと言えば、それは間違いなくお前だ。それ自体はとやかく言わないけど、せめて、休める時には十分に休んどけ」

「馬鹿。変な気を遣おうとすんなよ。真田さんと桐条さんによって高められた、俺の体力をナメんじゃねーーーー」

そう言ってる途中に、淳は、突然目眩がしたかのように、体をふらつかせた。流石に、これはごまかせなかった。

「案の定、だな。お前は間違いなく疲れてる。さあ、とっととそこにでも横になって、ぐっすり眠っとけよ」

アツロウは近くにある大きな木の根本を指差しながら、ピシャリと言った。

そして彼は淳に背を向けると、そのまま梃(てこ)でも動かないというように、腕を組んで、辺りを見渡し始めた。先ずは自分が最初に見張りに立つ、という事らしい。

そんなアツロウを見て淳はムカッ腹が立ったが、流石に喧嘩(けんか)をする気にはなれなかったので、先程、アツロウに示された木の根本にドッカリと腰を下ろすと、そのまま幹(みき)の部分に背中を預けた。

彼は、ぼんやりとした表情で空を見上げた。東京の空は相変わらず、『東京＝空気が汚い』という、少々偏見的な公式が、あながち言うほど偏見ではないんじゃないかと思いたくなるぐらいに汚かったものの、少し探せば、キラキラと綺麗に輝くいくつかの星を簡単に見つける事が出来た。

普段の淳ならば、星空を見て感慨に耽(ふけ)るような事はないが、ここ数日の内に、あまりにも過酷な状況を何度も経験してきたせいか、ただ光っているだけの小さな星をジッと見ていると、何となく癒された。

つい数日前まではまさか、自分がこんな目に合うだなんて考えてもみなかったな、と、淳は思った。

（2日前……だったよな。ナオヤが作った改造ＣＯＭＰから、初め

て悪魔を喚び出したのは。あん時はビビったなー。で、その後、アイツからメールが何度か届いて……。アレ？そういや、その後は青山霊園に向かったんだけども、そもそも、どうしてそんな場所に行こうと思ったんだっけ……？）

淳は、しばらく頭の中でウーンと唸っていたが、すぐに、ある事を思い出した。

（ああ……そうだったそうだった。ナオヤから送られてきたメールの中に、青山霊園に向かえってのがあったんだった。でも、書いてあったのはそれだけじゃなくて……。えーと、そう、確か、『そこでお前達は、これからの行動に影響を及ぼす人間に会うだろう』、だったかな……？そんな事が書いてあったんだった）

とはいえ淳は、まあ――それは恐らく、アマネの事だろうな、と、彼なりの結論を下していた。アツロウとユズにしても同じ意見だし、何より、その霊園で会った人間の中で、如何にも、自分達に影響を与えそうだったのは彼女ぐらいだ――と。

そこまで考えたところで――「ん？」と、淳は思った。

（待てよ……）

本当に、そうだろうか？

霊園で会った人間の中で、如何にも、自分達に影響を与えそうだったのは――本当にアマネだけだっただろうか？

「いや、違う……」

今度は、ハッキリと声に出しながら、そのように呟く淳。

もう1人、いたではないか。

その場所、青山霊園で会った――――如何にも、自分達に影響を与えそうだった人物が。

セト。

銀髪で長身。黒い甚平（じんべい）を着込み、ボロボロの草履を履いた、あの男（厳密には現在、彼が着ている甚平の色は黒ではなく赤なのだが、それは淳には預かり知らぬ事だ）。

そうだ……あの男と出会った場所も、確かに青山霊園だったではないか――――！

「おいおい……！」

淳の体中を駆け巡っている血液の流れが、興奮によってどんどん早くなっていった――――そうなると、つまり、どうなるのだろうか？ナオヤのメールにあった、『これからの行動に影響を及ぼす人間』とは――――アマネではなく、実は、セトの方だったという事だろうか？

これは決して、勘違いと言えるほど間違った推測ではない筈だ――――何故ならばあの男にしたって、自分達の行動に影響を与えてるのは、間違いないのだから（むしろ、与え過ぎだ）。現在、自分達が、『ベル・デル』という悪魔の弱点を知る為に、彼を探している事からも、それが伺える。

今や淳の心臓は、バクバクとこれ以上ないぐらいに早鐘(はやがね)をうっていた――これまでにしてもセトという男の存在は、淳の意識の中でそこそこ重要なポジションを担(にな)っていたが、もはや今となっては重要どころか、自分達がこの封鎖を生き延びる為の鍵は、全て、彼が握っているのではないのかとさえ思い始めていた。

しかし。

その一方で、淳は――どうにも、奇妙な感覚を抱いていた。ここまでくれば、もうその考えを、『推測』から『確信』に変換してもよさそうなものなのに、どうも、その肝心の1歩を踏み出せない自分がいるのだ。

要するに彼は心のどこかで「実際には、その考えは間違っているのでは？」、と疑っているのだ。何故、そんな疑念を挟んでいるのかは、淳自身にもよく分からない。

しかし、今の推測を頭の中で浮かべる度に、まるで、喉に何かがつっかえているかのような感じがするのだ。言うなれば――そう、ナオヤのメールにあった人物が実はセトだったという事は、本来ならばありえないかのように。

「……ん？」

自分で考えておきながら――淳は、頭を傾げる。

本来ならば？

その『本来』とは、一体何の事なのか？、と。

同時に淳は、しかし――――分からないにも、分からないなりに――と、その単語について考えた。

（『本来』……ねぇ。何だろうな……。気のせいかもしれねえけど……この2文字は今回の封鎖において、何かとてつもなく重要な意味を持ってるような気がするんだが……？）

「……？」

先程までの興奮はどこへ行ったのか、淳は、自分で自分が何を考えているのか、分からなくなっていた。まぁ、今のような推測を立てた事で、より一層セトという男に再び会いたいという気持ちが強くなったが――――結局のところそれだけだ。実際には、頭を無駄に働かせて、余計な疲れを蓄積してしまっただけとも言える。

そろそろ寝るか、と淳は思った。こういう難しい問題は、明日の朝アツロウにでも相談した方が遥かに効率がいい。もっとも彼は、どうやらセトに対して少なからず猜疑心（さいぎしん）を抱いているようだから、先程淳が考えた事を相談しても、否定的な意見が返ってくるのがオチかもしれないが……。

自分達が持っている改造ＣＯＭＰには、『スキルクラック』という相対した悪魔の魔法などを、自動的に習得――――言わばコピーしてくれるような機能があるが、それが、自分の親友の頭脳にも適用されればいいのに、と淳は思った。彼は昔から、アツロウの頭の良さを羨ましく思っていた。

「くそっ」、と、淳は誰にともなく毒づいた。自分たちが知らないことがなんと多いことか。常日頃から『このような事態』に巻き込まれるかもしれないという可能性を本心から危惧するのは、相当

の中二病者だとわかっていても、淳は自分の無能さに腹立だしさを覚えずにはいられなかった。

世の中には、自分が出会ったことも、想像もしたことがないような出来事が数えきれないほどある。

どうして、ナオヤはもっと詳しく事情を話してくれなかったのだろう？2日前、青山のアパートの前で自分たちと別れたときには、次の機会に話せばよいとでも思ったのだろうか？今のように、東京内を無数の悪魔が徘徊するようになっても、自分たちなら生き残り続けると信じて？

確かに結果として、自分たちはまだ生き残ってはいるものの、じゃあ、この先も同じように生き残り続けることができるのかと問われれば、淳としては、自信に満ちた返事を返すことはとてもではないが出来ない。

アイツは間違っているのだ……ナオヤは……ナオヤのせいで……自分たちは……アイツめ……。昔から何を考えているのかわからない奴だとは思っていたけど……あのバカな従兄（いとこ）が、自分たちを巻き込んだんだ……。

もし今、目の前にアイツがいたら、力の限りぶん殴ってやる……淳は思った……もし今、目の前にいたら……。

少し離れた場所から、ユズの寝息が聞こえてきた。淳はそれを聞きながら、どうせ明日もヘトヘトになるまで東京内を駆けずり回るのは間違いない、と心の中でげんなりした。主に、ベル・デルのせいで……。ならば自分が見張りをする時までに、なるべく多くの休息をとった方が良いと判断した淳は、ナオヤに対する罵詈雑言を心

の中でまき散らしながら、今回の事件に巻き込まれてから3度目の眠りに落ちていった。

◆　◆

『ＦＲＯＭ：ＡＭＡＮＥ
ＳＵＢＪＥＣＴ：あなたは誰？

＞ＣＯＭＰに見慣れないアドレスが表示されていて驚きました。

あなたは誰ですか？

いえ、その前に私の方が名乗るべきですね。

私はＡＭＡＮＥ。翔門会で巫女をしています。ＣＯＭＰを持っているということは、あなたも悪魔を使役する素質をお持ちなのでしょう。

世界は神の裁きを受ける直前にあります。

その裁きを乗り切ることが出来たなら、人間は次の霊的ステージへと進むことが出来るでしょう。我々翔門会はそのために活動をしています。

あなたも協力して頂けませんか？』

『ＦＲＯＭ：Ｋ―Ｔ
ＳＵＢＪＥＣＴ：ケイスケです

＞どうも、アツロウの知り合いのケイスケです。キミのＣＯＭＰのアドレスが分かったから、メールしてみました。

夕方は助けてくれてありがとう。

キミたちがいなければ、守りきれなかったと思う。

そういえばあの後、少し困ったことになってさ……。

ボクの考えって、やっぱり甘いのかなぁ……。

またメールさせてもらっていいかい？』

『ＦＲＯＭ：ＹＵＺ
ＳＵＢＪＥＣＴ：夕方のアレだけどΣ（Ｔ□Ｔ）

＞ラプラスメールって、ナオヤさんの予知……じゃなくてプログラムなんだよね？　；―□―）！！

あそこまで的中するなんて驚きだよ！

本当に、あの人の頭の中って、どうなってるのかな。

それはともかく、夕方、私たちが戦ったことでメールの内容にあったことを変えられたのかな？最悪の事態は回避できたのかな？Ｏ（＾－＾）Ｏ』

『ＦＲＯＭ：ＡＴ－ＲＯＷ
ＳＵＢＪＥＣＴ：ケイスケのことだけど

＞ここから先は、俺なりに考えてみたことなんだけど……もしかしてナオヤさんは、悪魔を喚び出したっていうより、世に出てしまった悪魔を制御しようとしてるんじゃないのか？

まぁ、あの人の考え方はオレなんかには分からない。もっと別のことを考えてるのかもしれないけど……。

それにしても、まさかケイスケが悪魔使いだとは思わなかったよ。

しかも俺たちより前から、あのＣＯＭＰを持ってたみたいだな。

アレもナオヤさんに貰ったのか、それともほかのルートで手に入れたのか……？』

◆

◆

――神はかつて、７つのラッパを響かせ、世界を滅ぼした。

淳達の封鎖２日目は、こうして終わりを告げる。

既に２つ目の音色は奏でられた。

滅びの時までに残された音色は、あと５つ……。

〈２ｎｄ　Ｄａｙ：ｌｏｏｋ　ｆｏｒ　ｗａｙ　ｏｕｔ〉ｉｓ　ｔｈｅ　ＥＮＤ！！

デビサバ外伝―『３１年前』（前書き）

これは、本作の外伝であり、内容は、『女神異聞録ペルソナ』の主人公のとある一日を書いたものです。それでも「仕方ないから見てやんよ」という寛大な心を持つ方のみご覧下さい。

デビサバ外伝―『31年前』

『東京封鎖』よりも31年前。とある町に住む、とある男の話。

◆

◆

御影（みかげ）町。

数ヶ月前まで、この町は人の認識を遥かに越えた、それこそ知らない人に話せば、ただの下らない噂話だとすげなく一蹴されても文句が言えないような、そんな異常な『事件』が起こっていたのだが、それより大分月日が経った今では、徐々にではあるものの――数々の崩壊した建造物が修復されていくのと同時に、人々の心も、大分落ち着きを取り戻してきていた。

『セベク・スキャンダル』。

それが数ヶ月前、この町で起こった――否、引き起こされた事件の名称だった。

この事件を簡単に説明をさせて貰うなら、おおよそ、次のようになる。

それまではいたって普通の状態だった御影町が、突然、何の前触れもなく、外部から一切遮断されてしまったのだ。町の外から町の中に入る事ができないように、町の中から町の外に出る事もできなくなった。

これだけでも十二分に厄介だというのに――町に起きた異常はこれだけではなかった。なんと、『悪魔』と呼ばれる人外にして異形の存在が、町中を我が物顔で闊歩し始めたのだ。

町から出られないだけではなく、じっとしていればどこからともなく出現した悪魔に身を引きちぎられてしまうような状況に、多くの人々がパニックに陥った。

結果として、この事件はほんの数日もしない内に、事件が起こったときと同じように、何の前触れもなく解決する運びとなるのだが――誰が、どのようにして解決したのか。いや、そもそも、自然に解決したのか、それとも人為的に解決されたのかさえ、殆どの人々は理解していなかった。もっとも、彼等にとってはようやく平穏な日常に戻る事ができた安堵感が大きすぎて、そのような些事にまでは気が回らなかったのかもしれないが……。

それに、このような人々に、仮に本当の事を話したとしても――とてもではないが、彼等は信じないだろうし、それを責める事はできないだろう。

そう。

日本の歴史に残るような、異常な大事件を解決したのが、年端もいかない、たった数人の高校生だなんて――――。

しかし、これはまごうことなき現実である。

そして。

御影町を『セベク・スキャンダル』から救った、その高校生達の内の４人が、現在、『御影郷土資料館』なる建造物の中に佇んでいた。言うまでもなく、歴史的郷土品や、資料などを保管、展示する事を目的とした建物である。辺りにあるそういった郷土品の数々――所々にヒビが入った土器や、色あせた書物など――――からは、如何にも『気安く触って壊したら承知しねえぞオイコラ』というオーラが放たれている。

この資料館の展示場は、大きく分けて２つの部屋に別れているが、４人の高校生達は、入口から入った場所より１つ隣の展示場にいた。

そこにも入口近くの展示場と同じように、様々な歴史的物品の数々が置いてあるものの――――不思議なことに、１つだけポッカリと空いたスペースがあった。まるで、元々そこに置いてあった筈のものを、何者かが盗んだかのような――――。

そしてその空いたスペースこそが、この４人の高校生達が、この御影郷土資料館に訪れた理由でもあった。

「……何て言うか、ここに来たのはほんの数日前だってのに、もう何年もの年月が経ったような気がする」

そう言ったのは、所々が寝癖のようにピンとはねている青い髪に青い瞳、左耳にピアスをした、精悍な顔つきをした少年だった。その身に纏っている灰色の制服と、胸にある校章から、少年がこの御影町にある学園――『聖エルミン学園』の学生である事が分かる。

藤堂尚也。

それが、この少年の名前だった――同時に彼は、前述した、『セベク・スキャンダル』を救った高校生達の中で、リーダーを努めた少年でもあった。その点を踏まえて観察すれば、なるほど確かに、ここにいる4人の中では、如何にもリーダー格という風に見えなくもない。

しかし、尚也の隣にいる少年にしても、その点では負けていなかった。いや、社会的には実際に、この少年はそれこそ数え切れない程の人々の『上』に立っているのだ――なぜなら、彼はあの南条グループの御曹司なのだから。

聖エルミン学園の制服を着ているという点では尚也と同じだが、髪をオールバックにし、磨き抜かれた眼鏡をかけ、首に（そこにどういう意図があるかは彼のみぞ知るが）『1』と記された青いスカーフを巻いている様は、どこか軽い感じのある尚也とは正反対の印象を受ける。

「……そうだな」

先程の、ともすれば独り言のようにも聞こえる尚也の呟きを受けて、その少年――南条圭は、律儀にもそう返した。

次には、ただでさえ平時でも鋭い視線を更に鋭くすると、そのま

ま、隣にいる尚也とは別の少年に向かって、責めるような視線を向ける。

「もっとも、いくらたかが数日とは言え、由緒ある歴史的郷土品を盗み出した罪は大きいがな……」

途端に、そう話す圭の視線を受けた少年は、憤慨したような表情になると、彼に真っ向から反論を唱えた（冗談でも何でもなく、その気になれば世界にさえ大きな影響力をもたらす南条グループの御曹司に正面から突っ掛かるというのも、それはそれで勇気ある行動と言えるかもしれないが）。

「なっ……！　て、テメェ！　何、如何にも俺1人だけの責任みてえに言ってんだコラ！　あの時、この『破魔の鏡』を手に入れた事については、俺達全員が納得した上での行動だろうが！　つうか、『盗み出した』って何だよ!?　ちょっと借りただけだろうが！」

キッチリした――もしかしたら、キッチリし過ぎている圭の格好も変わっていると言えば変わっているが、それでも、そのように怒鳴った少年の外見に比べれば何ともない。印象が良いか悪いかはともかく――とにかく変わっているのだ。

髪を丸ごとスッポリ覆い隠している、赤いピンバッジをつけた黄色いニット帽に、背に負ったリュックサック（これまた黄色だった。もしや、彼のお気に入りなのだろうか？）の僅かに空いた開け口からは、緑やピンクといった様々な色のスプレー缶らしき物が何本か飛び出している。両目の下にはどこぞのインディアンが施していそうな、涙のような模様の刺青（？）があり、そして左耳は、尚也と同じように飾り付けされていた。もっとも、尚也が市販で売られていそうなごく普通のピアスであるのに対し、この少年が耳につけて

いるのは――――何を考えているのか――――どう見ても携帯用のキーホルダーにしか見えない、何かしらのキャラの小さなマスコットだという違いはあるが。

キーキーと喚くその少年、稲葉正男（いなば まさお）――――通称マーク――――に対して、相変わらず、鋭い視線で彼を見ながら、圭は次のように言った。

「ならば、用事が済んだらさっさと事情を話して返しにいくべきだろう、馬鹿め。それを数日とはいえ、さも自分の物であるかのように所持していては、盗んだと思われて当たり前だ。この馬鹿め」

圭の侮蔑（ぶべつ）が多分に含まれた言葉を受けて、瞬時に顔を赤くしていくマーク。

「わ、忘れてたもんは仕方ねえだろうが！　あと、同じ括弧内で『馬鹿』って2回も言うんじゃねえよ！　いくら温厚温和で、女神のごとき優しさがチャームポイントの正男くんも、流石に我慢の限界を迎えてしまうかもしれませんのことよ!?」

「ほう、それは怖いな。では、先ほど『馬鹿』と言ったのは取り消そう。……これで満足か？　サル」

「ムッキー！　取り消した意味まったくねえじゃねえか！　いや、むしろ酷くなってねえか!?　しかし！　それでも心優しい正男くんはお前を許して……やる訳ねえだろうがぁ！ぺぺぺぺぺ……っ！！」

完全に上からものを言っている圭の態度を前にして、すっかり頭を怒りで茹で上がらせたマーク。一風変わった、彼特有の掛け声と

共に、もう1つの自分――『ペルソナ』を喚び出そうとするマークだったが、そんな彼と圭の間に、おずおずとした様子で割って入る1人の人物がいた。

尚也ではない――その人物の身長は、彼よりも頭1つ分ほど小さかった。服の上からでも分かる曲線を描いた体型を見る限り、その性別が女性であることが伺える。太股の中間まで足の肌が露出しているスカートに、首からさげた青いネクタイが、聖エルミン学園の女子制服の特徴の1つだ。やや茶色の混じった髪を肩の辺りまで伸ばしており、ネクタイと一緒に首からさげている懐中時計程度の大きさのコンパクトが、館内の人工的な明かりを受けてキラキラと輝いていた。

園村麻希（そのむらまき）は、尚也と共に『セベク・スキャンダル』で戦ったメンバーの内の1人で、同時に、マークが密かに想いを寄せている相手でもあった。

「ま、まあまあ2人共……。こんなところで喧嘩なんかやめよ？ね？」

だからだろうか――仲裁に入った麻希のそんな言葉を受けたマークが、まるでよくしつけられた犬のように、あっという間に圭に対する怒りを納めたのは。

「な、な～に言ってんだよ園村！　大丈夫だって！　ちょっと楽しいお喋りしてただけだから……。な、なぁ？　南条」

と、圭に同意を求めるマーク。その表情には、明らかに「頼むから、園村の前で恥をかかせないでくれ！」という必死の願いが現れていた。普段の圭ならば、いっそ清々しいと言わんばかりにこの頼

みを断るところだが、しかし今回は、マークを叱責したい気持ちよりも、わざわざ気を遣わせてしまった園村に対する申し訳なさの方が勝ったのだろう。彼は、「ゴ、ゴホン！」と咳ばらいをした後、

「ウム……。まぁ、なんだ。園村、そうビクビクするな。別に、俺達はお前が危惧しているような危険な展開を迎えていた訳ではない」

と言った。

「そう？　ならいいけど……」

まるで、女神のような微笑みを浮かべながら、安心した表情を見せる麻希。その笑顔を見て、完全にハートを貫かれたマークが「グハアッ！？」とキュン死しているのを、「いっそそのまま本当に死ね」という目で見ている圭がいた。

そして。

そこより少し離れた場所で、尚也が――いったい、どうしたのか――額に手を当てて、僅かに苦しそうな顔をしていた。『苦しそうな顔』とは言っても、普段の彼の表情とは、殆ど変わっていないが――元々、マークや麻希のように、感情によってコロコロと表情を変えないタイプなのだ。

しかしそれでも、何度も共に死線をくぐり抜けてきた『仲間』には見抜かれてしまう程度には、今の尚也の表情は歪んでいたらしく――その時の尚也の様子に、その『仲間』の内の1人である圭が気づいた。

「……？　どうした？　藤堂。熱でもあるのか？」

「あ、いや――――」

必死で呻き声を上げないようにしながら、尚也が言う。見れば、圭の言葉によってそれに気づいたマークと麻希も、心配そうに尚也に目を向けていたので、彼は何となくバツが悪い気持ちになった。

「何でもない。……最近、よくあるんだ。何故かは俺にもよく分からないけど……。時々、こうして頭が急に痛むことが、な」

これは別に、3人に気を遣って嘘をついているという訳ではなく、厳然たる事実だった。時期的には、あの『セベク・スキャンダル』の一連の激闘を終えた辺りから――――1時間に数回ほどの割合で、突然、頭に痛みが走るという事が起き始めたのだ。殆ど気がつかない内に頭痛の波が過ぎていった事もあれば、何かに体を支えてないと、とても立ってはいられない程の激痛が走ったりと、痛みの度合いは様々だが――――どちらにしても、尚也にとってはここ最近の悩みの種だった。医者に相談したりもしたが、その時は『原因不明』という、思わず涙が出てしまいそうな診断結果が出ただけだった。

「おいおい、マジで大丈夫かよ?もしかして、あの事件の時に、悪魔に妙な魔法をかけられた事による後遺症とかじゃねえだろうな……?」

マークが言う。

「いや……。もしそうだとしたら、頭痛程度じゃ済まないだろ。……まあ、心配すんな。もう痛みは治まった」

どうやら、その言葉は嘘ではないらしく――――未だに、顔には脂

汗を滲ませたままではあるが――先ほどよりは大分落ち着いた表情をした尚也が、そこにいた。

「さぁ、そんな事よりも、とっとと用件を済ませようぜ――マーク、『破魔の鏡』を出してくれ」

◆

◆

ここまでの話の流れから大体分かるように、尚也、圭、マーク、麻希の４人が御影郷土資料館へとやって来たのは、元々はそこの展示品である『破魔の鏡』という代物を、資料館に返す為である。

元々、この４人を含む、『セベク・スキャンダル』を解決した聖エルミン学園のメンバーが、この鏡を資料館から拝借する事になったきっかけは、『ある人物』からそうするように告げられたからだ。

もっとも、『拝借』と言えば聞こえはいいが、実際には無断で持ち出した為、泥棒だと言われても文句は言えない。そういう意味では、圭がマークに対して言ったことも、あながち間違いではないだろうが……。

閑話休題。

実は、その『ある人物』こそが、尚也達に『ペルソナ』を与えた

――厳密には、『目覚めさせた』かもしれないが――人物なのである。『セベク・スキャンダル』における尚也たちの戦いはこの人物から始まり、この人物で終わったと言っても過言ではない。

再び閑話休題。

まぁ、そんな訳で――先程も言ったように尚也達は、今回の事件の最中に、その人物から『破魔の鏡』を見つけ出し、それを使用するようにと言われたのだ。自分達に『力』を授けてくれた――ある意味では『恩人』とも言える存在の言葉を、尚也たちは素直に信じ、そのアドバイス通りに御影郷土資料館から『破魔の鏡』を拝借した。

――と、まぁ、そこまではいいのだが。その際、『破魔の鏡』を持ち運ぶ役を担ったマークが、何と事件が終わった後も、それを持ちっ放しである事を忘れていたのである。期間にしてみればほんの2、3日といったところだろうが、いくら短い期間だろうと特に何の必然性もないのに、町の郷土品を無断で所持し続けていたとあれば、なるほど、それは確かに圭に『盗んだ』と指摘されても仕方ない。

勿論、当のマーク自身にはそんなつもりは一切なかったのだが、件の品を所持していたのをすっかり忘れてたという事を考慮すれば、彼にも責任があると言えるだろう。資料館に来る数時間前、放課後タイムに突入した学園にて、尚也が『そういえばマーク、あの鏡はもう資料館に返したのか?』と、それとなく尋ねていなければ、もしかしたら、これから先もマークは『破魔の鏡』をリュックサックに入れたままにしていたかもしれないのだ（余談だが、事件の際にこの鏡を持つ役が彼になったのは、その時物を入れる為のバックやリュックといった類を、彼しか持っていなかった為である）。

そして――現在に至る。

「……何とか、無事に返す事が出来たな」

うーん、と腕を真上に伸ばしながら、尚也が言う。

場所は先程とは変わって、資料館からの帰り道だ。自宅の方向が違うマークや圭とは既に別れており、現在、地平線に沈み始めた太陽のオレンジ色の光を受けているその通り道には、尚也と麻希の2しかいない。

「それにしても、南条君がいてよかったよね。もし、私達と稲葉君だけだったら、本当に泥棒扱いされてたかもしれないし」

尚也の隣にピッタリとついて歩きながら、麻希が言う。

「だな……」

『破魔の鏡』を資料館に返却するにあたってもっとも苦労したのが、言うまでもなく、資料館の館長を含む係員たちへの説明だ。しかしまさか、『あの時、悪魔を倒し、この町を救う為にはこの鏡が必要だったんです』と言う訳にもいくまい。係員達にしてもあの事件の被害者であるが故に、当然、悪魔などの存在などは知っているはずだが、流石にそのような話は信じないだろう。

そこで活躍したのか圭だ。元々学園内においても、しょっちゅう誰かに何かを説明している圭にしてみれば（更にそれが、様々な英才教育を受けた南条グループの御曹司ともなれば）、あの場で無難な説明をして、係員達を納得させるのは朝飯前だったのだろう。あ

の後、尚也は彼に対して『助かった』と礼を言ったのだが、その際の彼の『この程度、どうという事はない』という返事も、あながち謙遜でもないかもしれない。

「ねぇ、尚也君」

「ん？」

麻希の呼びかけに対し、顔は向けずにそのように返す尚也。実はこの時、またもや、彼の頭にはズキンズキンと、立て続けに鈍い痛みが走っていたのだ。もっとも、日常会話をする程度には、何ら支障はないが……。少なくとも、今はまだ。

「……もしかしてまた、さっきみたいに頭が痛むの？」

しかし、そんな尚也の虚勢は、麻希には通じなかったようだ。コイツは、見かけによらず中々鋭いところがある、と尚也は思った。

「……尚也くん、今、何か凄く失礼な事考えてない？」

「え？　あ、い、いや、別にぃ？」

……いや、ホントに鋭い。

しかし幸いにも麻希は、尚也の如何にも『やべぇ！　バレた！』という慌てた態度を、特に追求しようとはしなかった。まるで、それよりも気にすべき事があるとでもいうように。

「……どうかしたの？さっきの南条君や稲葉君じゃないけど、私の目から見ても、今日はかなり顔色が悪いよ？」

麻希にそう言われて、尚也は驚いた。自分では必死で頭痛をこらえて、今でも何とか平静な表情を作れていると思っていたからだ。

「ああ……ええと……」

つかの間、尚也は一体、何と言えばいいのか分からず、結局、小さな咳ばらいをしただけだった。何故なら外ならぬ彼自身にしても、まるでチックのように立て続けに起こるこの頭痛の原因が分かっていないのだ。

「……なぁ、園村」

ややあって、彼は言う。

「自分が今、ちゃんと起きてるのか――それとも、夢を見てるのか分からなくなる時ってないか？　もしかしたら今、俺達がこうして見ている道路の風景も、まだ現実では寝ている俺達が見ている、夢の中の一風景なんじゃないか、って……」

言いながらも、尚也は心底うんざりした――自分自身に対して、だ。こんな意味不明な見解を他人に話して聞かせるなんて、どうやら、自分は相当まいってるらしい。

もっとも、今言った台詞自体は、紛れも無く彼の本心だった。実際に彼は、ここ最近の自分――そして、自分の周りにある現在の環境に対して、ハッキリとした『違和感』を覚え始めていたのだ。

間違っている。

一体何が、という話ではない。この風景が、匂いが、聞こえる音も――――どころか、隣で麻希が歩いているだけで僅かに胸を弾ませている自分自身でさえ。

まるで――――自分の人生観さえ揺るがしかねない、それこそ、自分そのものとも言える大事な何かを忘れてしまっているかのように。

「……？　んー…。私はしょっちゅうあるけど？　ホラ、今までの生活がアレだったし」

「あ……」

麻希の言葉を聞いて、尚也は気付いた。しまった、自分は何て馬鹿なんだ。今までずっと、病院のベッドの上にいるだけの生活をしてきた彼女に対して――――しかも、今回の事件は、まさにその『夢』が原因で引き起こされたようなものだというのに――――デリカシーがないにも程がある。

「何ていうか、その、ゴメン」

決まりが悪そうな顔で、尚也が言う。

「ううん、気にしないで」

麻希は慌てたように、顔に前で手を振った。そんな彼女を見ている最中も、尚也の頭痛は、どんどん酷くなっていった。

と、その時。

思イダセ……。

突然、そんな声が尚也の頭の中に響いた。

「……っ！？」

咄嗟に尚也は、辺りに警戒を走らせるが――今、この道路にいるのは自分と麻希だけで、他には誰もいなかった。

イイカゲンニシロ……。

再び、そんな声。

（やっぱり……これは、俺の心の中から……？）

自分が。

……もう1人の自分が。

何かを、訴えている……？

イッタイ、イツマデ『夢』ヲ見テイル……。

（『夢』だと？）

そう（心の中で）言っているのは、外ならぬ自分であるにも関わらず――尚也には、その言葉の意味が全く分からなかった。今や、頭の痛みは最高潮にまで達しようとしていた。

（誰なんだよ……！　お前は！）

心の中で、尚也は憤慨する。

オレハ……『カイン』。

（『カイン』……？）

知らない名だ――否、厳密には、知らない筈の名前だ。

要するに尚也は、何となく、この名前に心当たりがあるような気がするのだ。

するとその時、全くもって唐突に、尚也の頭が、２つに割れた――少なくとも、そう錯覚してしまう程に、頭の痛みが強くなったのだ。隣にいる麻希が『ど、どうしたの尚也君！？　大丈夫！？』と声をかけているのを聞きながら、尚也はたまらず額を押さえ、目を閉じた。すると……。

『何故だ……！　何故、父は俺の供物ではなく、貴様の供物を選んだと言うのだ！？　貴様は、何か知っているのか？　弟よ……。さ

ぁ、答えろ！』

まるで古びたビデオを再生しているかのように、尚也の頭の中に、所々が乱れた映像が映し出された。

見れば、１人の鼠色の髪の男が、青い髪の男の腹部に槍のような物を突き刺しながら、怒りの叫びを上げていた。今の台詞から推測すると、その男に槍を刺されているほうの青髪の男は、叫んだ男の弟なのだろう。そう言われれば確かに、２人の顔立ちはどこか似ている気がしなくもない。

『何故……だって？』

青髪の男の息は絶え絶えだった。腹部を槍で刺し貫かれ、口から大量の赤黒い血を絶え間無く流し続けているとなれば尚更だ。むしろ、今もまだ、僅かとはいえこうして息があるのが不思議なくらいだ。

『馬鹿な事を聞くなよ……カイン兄さん。そんな…事、わざわざ…僕に聞かなくても…分かってるだろう？　…父さんが…兄さんを見限ったのは…兄さんの供物が…気に…入らなかったからじゃあ、ない……。兄さんが…持つ、【悪魔使い】の力を…嫌悪したからさ』

直後、青髪の男の目が見開かれた。

『……今さら僕を殺しても、もう遅い！　父さんが選んだのはアンタじゃない――僕だ！　【ペルソナ使い】の力を持つ、このアベルだ！　ハ、ハハハ――ガハッ！』

突然、青髪の男の口から、固体とも液体ともつかぬ血の塊が吐き

出された。槍を持つ男が、青髪の男の腹部に刺した槍を、より深く潜りこませたのだ。その顔は、怒りと悲しみでクシャクシャになっていた。

『俺達は――――親父の【尻拭い】をする為に作られた……！』

槍を持つ男が言う。

『【悪魔使いの開祖】として生み出されたこの俺……カイン。そして【ペルソナ使いの開祖】として生み出されたお前……アベル。……だが、父は最終的に、俺ではなくお前を選んだ……！』

今度は、槍を持つ男の目が見開かれる番だった。

『神たる父が生み出したペルソナ――――【ニュクス】を倒すのは、やはり、【悪魔使い】である俺の血族ではなく、同じ【ペルソナ使い】である、貴様の血族という事か――――弟よっっ！！』

カインが吠えた。しかし、相手に放つ迫力では、圧倒的に不利な状況にいる筈のアベルも負けていなかった。

『ああ！　そうさ――――全くもってその通り！　大体、少し考えれば分かるだろう？　【悪魔使い】であるアンタは、文字通り【悪魔】を使役（しえき）して戦う――――つまり、父（神）さんの敵を利用する訳だ！　わざわざ天敵の力を使って戦うような奴を、父さんが信用する訳がないだろうがっっ！！』

アベルの顔に、狂喜的な笑みが浮かんだ。

『さあ――――殺せ！　殺してみろよ！　兄さん！　けど最後に、1

つだけ教えてやる――例え、アンタがここで僕を殺しても、必ず！　百年後か、千年後か、一万年後か、或いはもっと先か……いずれにせよ！　僕の血を受け継ぐ、【アベルの因子】を持つ僕の子孫が、アンタの野望を打ち砕く！　父（神）さんに復讐してやるというアンタの野望は、永遠に果たされないっっ！！』

直後、カインの怒りが爆発した。ズボオッ！　とアベルの腹部から槍を引き抜くと、そのまま肉片がこびりついた刃の部分を、アベルの顔面目掛けて突き出す。

狂喜の笑みを浮かべたまま、アベルは絶命した。槍に貫かれた事で頭部は粉々になり、強い粘性を持つ脳漿（のうしょう）が、カインの顔に降り懸かった。魂の抜け殻と化したアベルの体が、力無く地面に横たわった。

しばらくの間、カインは何もせず、何も喋らずにジッと佇んでいた。彼の胸中には、満足感とも喪失感ともつかぬ感覚が、音もなく渦巻いていた……。

「尚也君…！　ねぇ、ちょっと…、一体どうしたの…？　尚也君ってば！！」

始まった時と同じように、頭の痛みが突然引いた。尚也の目には、事が始まる前の景色が戻ってきていた。オレンジ色の夕日の淡い光が差す、御影町の道路の景色が。

「ハアッ……！　ハアッ……！」

尚也は体中から、自分でも信じられない程の冷や汗を流していた。心臓が肋骨をへし折ってやると言わんばかりに、胸の内側で激しく鼓動をうっている。自分の状態をそこまで確認して、尚也はようやく、隣に麻希がいる事に気付いた。

（ああ……そっか、確か俺は……園村と一緒に帰ってる途中だったっけ……）

見れば麻希は、今にも泣き出しそうな顔をしていた。何て顔をしてるんだ、と、尚也は悪戯っぽくからかおうとしたが、声が出なかった。

「ねぇ――――尚也君。今すぐ病院に行こう？　今の尚也君、絶対に普通じゃないもん」

「あ――――ああ」

数回ほど、パチパチと瞬きしながら、尚也が言う。

「そうだな……うん、そうさせてもらうよ。これから、俺は病院に行くから……お前は先に帰っててくれ」

「ううん、私も一緒に――――」

「1人でいい」

『病院に行く』というのは嘘だった。実際には、どこかで1人になりたいというのが、尚也の本音だったのだ。今の彼の突き放すような口調は、そういった考えから出たものである。

それでも何か言いたそうな麻希と黙って別れて、尚也は別の道路へと歩いていった。その足取りは非常に不安定で、今にも倒れてしまいそうに見える。

そこは確かに病院へと続く道だったが、無論のこと、尚也は病院に行くつもりはない――どころか、彼自身、自分が一体どこに向かっているのかまったく考えていないように見えた。彼の頭の中は、先程見た奇妙な幻覚の事で占められていた。

「『カイン』に……『アベル』だって……？　それに……」

『悪魔使い』とは、一体何なのだ？　『ペルソナ使い』と似たようなものなのだろうか……？

自分に向けて放った問いに、しかし、尚也は答える事が出来なかった。

更に奇妙なことに、尚也は、あの映像の中の出来事が、とても人ごととは思えない――どころか、まるで、自分の過去を振り返っているような気がした。それがますます彼の心を混乱させた。

『セベク・スキャンダル』を解決してから、およそ数日。

どうやら自分だけは、まだ解決しなければいけない事が残っているらしい――と、尚也は直感した。

「俺の体に……いったい、何が起こってるんだ……？」

麻希と別れてから数分後、尚也は、自分でも気付かぬ内に御影町にある名所の一つ――『アラヤ神社』へとやって来ていた。

ここに来る度に、尚也はいつも思うのだが――神主などはいないし筈なのに、何故かこの神社は、いつ見てもマメに掃除されているかのように、ゴミの一つも落ちていなかった。尚也に言わせて貰えれば、これはちょっとミステリーだ。

古びた本殿の前で、特に何をする事もなく佇んでいる尚也。

『セベク・スキャンダル』の際は、何度かこの神社の中に入った事もあるが、あの壁一面に奇妙な仮面が飾れているような異質な空間に進んで入りたいとは、尚也は思わなかった。

「……色々あったな。ここでは……」

そう。

確かに尚也は――尚也だけではなく、あの事件で彼と行動を共にした仲間達は――この神社で、様々な経験をした。

（初めてこの神社の中に入った時は……そう、確か、園村のお母さんが倒れてたんだっけ……。『破魔の鏡』を手に入れろってアイツに言われたのもここ……。そして……）

園村の『本心』と対面したのも、確かここだったな――と、尚也

は思った。正確にはこの神社の中よりも更に奥、通称『アラヤの岩戸』と呼ばれる空間で、だが……。

――ズキン！

「……ッッ！」

バッ！　と、弾けるように、額に手を当てる尚也。

（またか……クソッ！　それにしても、今日は特に酷いな……。いや、というよりは、日に日に酷くなってきてるって感じか？）

尚也はジワジワと、自分の胸の中が、『不安』としか表現しようがない感情に、段々と侵食されているのをハッキリと感じていた。

（……まさか、マークが言ったように、本当にあの事件の時に、悪魔に妙な魔法をかけられたのか……？）

ありえない、とは言い切れない。あの事件にて尚也が経験した悪魔との戦闘の数は、どれだけ低く見積もっても裕に千は越える。

その際に、敵悪魔の何らかの魔法の影響を、自分でも気付かぬ内に受けてしまい、その後遺症が今になって発現し始めた可能性もゼロではないだろう。

しかし――。

（さっきの……あの妙な記憶は……そんな事じゃ説明できない）

一つだけ分かる事があるとすれば――あの時、麻希と並んで帰路

についている途中に見たあの幻覚は、決して『夢』などではないという事だ。これだけは断言できる。尚也は本能的に、それを理解していた。

（『アベル』……『カイン』……『悪魔使い』に……そして『ニュクス』……）

どれもこれも、尚也にとっては馴染みのない言葉だ。

にも関わらず、これらの情報が開示されたのは、紛れもなく彼自身の頭の中に違いないのだ。

それがますます、尚也を混乱させた。

特に、この内の『アベル』と『カイン』。この二つの単語を聞いただけで、今もまだ尚也を苦しめている頭痛は、より一層酷くなった。

しかし――あの時の幻覚を、『これは夢ではない』と断言すること自体には何ら抵抗はなかったが、当然、この世に生を受けてからの十七年間において、あの幻覚で見たような光景に出くわした事は、尚也にはない。

自分の手で誰かを殺した――なんて、そんな事をしたら、最早印象に残る程度の話ではないだろう。

少なくとも、それをきれいサッパリ忘れる事は出来ない筈だ。

「……ん？」

そこまで思考を巡らせたところで、尚也は眉をよせた。

自分の手で誰かを殺した？

自分の手で？

（いや――違う。そんな筈はない。俺は今まで、誰も殺した事はない……。少なくとも、神取以外は……）

第一、自分の髪は鼠色でもなければ、そもそも『カイン』という名前でもない。

それなのに何故、自分はあの幻覚で見た槍を持つ男の行動を、さも自分の事のように置き換えているのだ？

違う。

（俺は『藤堂尚也』だ。『カイン』じゃない）

それとも。

これまでの人生において、あの幻覚が見せた映像に全く身に覚えがないという事は――あれは、自分の前世に起きた出来事だとでもいうのか？

「……バカバカしい。そんな訳があるか」

とうとう混乱に極みに陥ろうとしたところで尚也は、半ば無理矢理にそのように吐き捨てた。

そうだ。

前世の記憶を引き継いだまま生まれ変わるだなんて――そんな事はありえない。

気のせいに決まってる。

この頭痛にしたって、あと数日もすれば、勝手に治るに違いない――。

と、その時。

「……やれやれ。せっかくパパの方から会いに来たって言うのに、どうしてそんな辛気臭い顔をしてるんだい？　もしかして、好きな女の子に振られでもした？」

「なっ……！？」

いつの間にか、尚也のすぐ後ろに、一人の男が立っていた。

声が聞こえたのと同時に、それを理解した尚也は、すぐさま弾けるように男から距離をとり、離れたところで体勢を整え、男の顔を見た――そして、再び驚愕した。その時に感じた驚きは、先程の比ではなかった。

何と、そこには――彼と、藤堂尚也と全く同じ外見をした男が立っていたのだ。

否、正確には『全く同じ』ではない。少なくとも、服装だけは違っていた。

尚也が聖エルミン学園特有の、灰色の制服を着ているのに対し――男の方は、上下を柄のない白で統一した、どう見ても部屋着にしか見えない衣服を着ている。

しかし、それ以外のパーツは――前述したように、まるで鏡で映したように全く同じだった。

所々がピンとはねた青色の髪に青い目、顔立ち、および目や鼻の位置など、それこそ比喩でも何でもなく、全く同じなのである。

「ま、何はともあれ――久しぶりだね、カイン。いくら父親である僕の言うこともロクに聞けないバカ息子とは言え、やっぱり息子は息子。それが気が遠くなるほどの年月を経て久しぶりに会ったとなれば、うーん、流石にジ～ンとくるものがあるよ。やっぱり、メタトロンやレミエルの反対を押しきってでも、こんなゴミ溜めみたいな世界に来たのは間違いじゃなかったね」

ニヤニヤと笑いながら、男が言う。

「……？　……？？」

突然現れて、突然意味不明な事を言い出した男に対して、尚也は辟易（へきえき）せずにはいられなかった。

（いったい――コイツは何を言ってるんだ？　いや、それよりも――『父親』？　『息子』？）

意味が分からない。

全くもって、皆無だ。

しかも最悪なことに、それについて深く考えられるほどの暇はなかった。

何故なら。

「……？　……！……ぐ、あ、あ……ッッ！？」

突如、ガンガンガン――！　と、尚也を苦しめていた頭の痛みが、より一層激しくなったからだ。

痛い。

痛い、痛い、痛い。

痛すぎる。

このままだと、自分はこの頭痛で死んでしまうのではないか――と、そう尚也が錯覚してしまいそうな程の、そんな痛み。

しかしそれでも、激痛に必死で耐えようとしている頭の片隅で――尚也は目の前にいる、自分と全く同じ容姿をしたこの男こそが、この痛みの原因であることを直感した。

だからこそ、尚也は、

「な、何なんだ。アンタは――いったい、誰なんだよ」

と、完全に動揺しきった口調で、そう男に尋ねた。

それに対して男は「んん？」と、訝しげな表情をする。

「『誰なんだよ』、って……ちょっとちょっと、いくら何でもそれはないんじゃないの？　それとも、僕に認められなかった腹いせに、如何にも僕の事を忘れたフリでもしてるわけ？　もしそうだとしたら――こう言っちゃ何だけど――お前、かなり器小さいよ？　僕は、お前をそんな小さい男に育てた覚えはないんだけどなぁ」

「育て……た？」

目の前にいる男が――この俺を？

藤堂尚也を？

何だ、それは。

ありえない。

自分とこの男は、今まで顔を合わせた事もない、今日初めて会ったばかりの人間だ。

きっと、目の前の男は、何か勘違いをしているに違いない。

その筈だ。

その筈、なのに――。

（どうして、俺はこんなに動揺してるんだ？）

そう。

尚也は動揺していた。

目の前にいる男を見て。

これ以上なく――動揺していた。

「……え？　あれ？　お前、もしかして……本当に覚えてないの？」

不意に、何かに気付いたかのように、男が言う。

「『覚えてないのか』……だと？」

体中から、滝のような冷や汗を流しながら、そのように返す尚也。

「さっきから――いったい、何を言ってるんだ、アンタは」

「……うわーお……。こりゃ、決定的だね」

恐れ入りましたという様子で、男が言う。

「うーん、おっかしいなー……。『カイン』の記憶は、薄れることなく代々引き継がれていく筈なのに……。何か、手違いがあったの

かな？」

しばらくの間、男はまるで哲学者のように、顎に手を当ててジッと考えていたが――やがて、ハッとしたように顔を上げた。

「ああ――そうか、そういう事か。お前、さてはつい最近、『フィレモン』の奴に会ってたりしてない？」

「フィ――フィレモン？」

頭の痛みに顔をしかめっ放しの尚也の返事は曖昧だったが、男はそれだけで、自分の問いに対する尚也の答えを理解したようだった。

「畜生！　やっぱりそうか！　あーもうアイツ、いくらニャルラトホテプの馬鹿を止めるとはいえ、余計な事し過ぎだろ！」

ハァ、とため息をつくと、男は続けて、次のように言う。

「参ったなぁ……。大方、お前はアイツの助力を得てペルソナ使いに目覚めたんだろう？　マズイねぇ。それはかなりマズイよ。あの馬鹿、きっとその時にお前から『カイン』の記憶を奪ったんだろうな……。元々、いつかは何かをしでかす奴だとは思ってたけど……。後でお仕置きしとかないと」

「おい……、いい加減にしろ」

イライラした様子で、尚也が言う。自分だけを置いて、こうどんどん話を先に進められては当然だ。

頭痛は、更に酷くなっていった。

「さっきから黙って聞いてれば、訳が分からない事ばかり言いやがって……！　言いたい事があるなら、さっさと――」

「言いたい事？　んー……いや、言いたい事とかは、別にないんだけどね？　僕が今回、この世界に来たのは、本当にただ、久しぶりに可愛い息子の顔を見たいからだし」

尚也の言葉の上から被せるように、男は言う。

その様子から尚也は、この男が完全に、自分より上の立場からものを言っている事に気付いた。

「けど……まぁ、そうだね。言いたい事があるかどうかはともかく、やりたい事だったら――出来たよ。たった今、ね」

頭痛は続く。

もしかしたら、自分は死ぬまで、この頭痛と付き合う事になるのではないか――と、尚也が不安を抱き始めた、その時だった。

「……ごめんね。今のお前にはまだ、事態がよく飲み込めないだろうけど――ちょっと、手荒な方法を使わせてもらうよ」

一瞬だった。

ほんの、一瞬で――男は、尚也との距離を、ほとんどゼロにまで縮めていた。

「――――っっ！！」

ドクンッ！　と、尚也の心臓が、胸の中で大きく跳ね上がった。

殆ど鼻が触れそうなぐらい近くにまで接近していた男の表情には、相変わらずのニヤニヤ笑いが浮かんでいたが――その青い瞳だけは、まるで氷で作られているかのように冷たかった。

「う、お、お――！」

刹那にも満たない時間の中でありながら、尚也は理解した。

コイツは、普通じゃない――とてつもなく危険だ、と。

（今すぐ、コイツから離れるべきだ――今すぐに！）

「ペル――！」

しかし、遅かった。

尚也が『ペルソナ』を召喚し、男を牽制するよりも遥かに速くに――男の方が先手を打っていた。

ガシイッ！　と。

男は、とても優しいとは言えない――むしろ、酷く乱暴な動作で、右手で尚也の頭を鷲掴（わしづか）みにしたのだ。

「がっ……！？」

男の握力は、その細腕からは想像もつかない程に強かった。ミシ

ミシミシ！　と、頭蓋骨が危険な音をたてる中、尚也は、それが始まるよりも前に、男が言った事を確かに聞いた。

「まったく、せっかく可愛い息子に会いにきたと思ったら、まさか、すっかり忘れられてるとはね。こんな事をするつもりで来た訳じゃないのに――駄目だよ？　カイン。せっかく僕が与えた『罰』を、そう簡単に忘れてもらっちゃあ」

直後。

頭を鷲掴みにしている男の右手から、尚也の頭の中へと――何かが流れ込んできた。

「……あ……ああ……っ！？」

頭に風穴を空けられ、そこから直接冷水を流されているかのような感覚。

しかしその感覚は、それほど長くは続かなかった。

時間にして、およそ数秒――といったところだろうか。

男はやがて、ゆっくりと尚也の頭から手を離す。

すると突然、尚也はがっくりと膝を折り、アラヤ神社の地面に手をついた。

見れば、彼はわずかに顔をしかめ、口からは苦しそうに吐息を漏らしていた。

まさか、これ以上は痛くならないだろうと思っていた頭の痛みが、より一層酷くなったからだ。

「……！？　……ハアッ！　ハアッ……！」

何が何だか分からない内に、呼吸が荒くなる。

額には血管が浮かび上がり、それがヒクヒクと動いている中、食いしばった歯の間からきりきりと音をたてる尚也。

次には、痛みを感じる場所は、頭だけに留まらなくなった。

体中を鋭い針で突き刺されているかのような――そんな痛みが、体中を駆け巡る。

「～～～～～っ！！」

先程から、何度も口を開いているにも関わらず――尚也の口からは、言葉らしい言葉が一度も出てきてない。

それでも、これだけの激痛に悲鳴を上げない辺りは流石と言ったところだろう。並の人間ならば、とうの昔に気絶しているか――最悪、ショック死していても不思議ではない。

「さあ、早く思い出しなよ、カイン。お前が犯した『罪』を――くだらない嫉妬心が原因で、実の弟（アベル）を殺した、その『罪』を。そして……それに対して、僕が与えた『罰』を、ね」

男が言う。

しかし――果たして今の尚也に、その声が聞こえているかどうか。

その時、彼の体は、まるで生まれたての子馬のように、激しく痙攣（けいれん）している最中だった。

たまらず体を小さく丸めるが、それでも激しい震えは止まらない。

しかし。

「……そろそろ、かな」

そう、男が小さく呟いた直後だった。

唐突に――それこそ何の前触れもなしに、痛みが失せた。

体の震えも――いつの間にか止まっている。

傍から見れば、とうとう激痛に耐え切れず、尚也が死んでしまったかのように見えただろう。

事実、痛みが治まった後もしばらくの間、彼は地面にうずくまったまま、微動たにしなかった。

ある意味で、その解釈は正しいと言えるだろう――少なくとも、そこにいるのは最早、先程までの藤堂尚也とは、まったくの別人だった。

この時、藤堂尚也という人間は死んだ。

その代わりに――。

「お帰り、カイン」

見事、自分の思惑通りに事が進んだ事を確信し、満足しきった笑みを見せながら、男が言う。

「……」

それでも、尚也――否、『ナオヤ』は無言だった。

まるで、今の今まで――それこそ、あの『セベク・スキャンダル』の際も、ずっと眠ったまま生きてきたかのようだった。

とんだ笑い話だ。

あの事件において、本当の自分を抑圧していたのは、ある意味では、あの事件の中心人物とも言える園村麻希ではなく――他ならぬ、自分自身だったという訳だ。

ナオヤは思い出していた。

この世に人類が生まれるよりも、遥か昔――『悪魔使いの開祖』として生み出された自分を。

弟と同じように、敬意をもって父親に供物を捧げたにも関わらず、何故か、その父に冷たく拒絶された自分を。

無事に供物を捧げる事ができ、父に褒められている弟に対し、激しく嫉妬した自分を。

その嫉妬心にかられ、弟を殺した自分を。

その『罰』として、父親から『永遠の記憶』という呪いをかけられた自分を。

そして。

フィレモンによって、一時的な遅れは出ていたものの――最早、何度目になるかも分からない『記憶の継承』を、たった今、ナオヤは終えたのだ。

「……ハ」

笑う。

「ハハハハハ……っ！」

ナオヤは笑う。

「ハハハハハ

「神いいいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！」

武術でも何でもない、それどころか、何の技術も使っていない、ただただ勢いを乗せただけの拳である――怒りに任せただけの拳である。

勿論そんな攻撃が、全知全能の存在である『神』に通じる訳がない。

「ハイハイ、何デスカー？　カイン君が大好きなお父さんはここですよー？」

案の定、スッと横に小さく移動しただけで、『神』はその攻撃をかわしてみせた。

突き出した拳の勢いを咄嗟に殺す事が出来なかったナオヤは、先程の頭痛の余韻もあってか、不様に地面に倒れ込む。

「まったく……ようやく思い出してくれたのかい？　まぁ、正確には、僕が無理矢理思い出させたんだけど。実の父親である僕にこんな面倒なことをやらせるなんて、お前は本当に親不孝な子だねぇ？」

「黙れ……！」

ゆっくりと立ち上がりながら、キッ！　と、『神』を睨みつけるナオヤ。

「よくも、俺の前にノコノコと顔を出せたな……！　『永遠の記憶』

なんて……こんなふざけた呪いをかけやがった恨みを、今ここで晴らしてやる……！」

「いや、だからそれは、お前の自業自得――」

「うるせえっっ！！」

もはや今のナオヤは、自分でも抑え切れない程の怒りに、完全に我を失っていた。

しかし、その一方で――感謝もしていた。

怨敵である筈の――目の前にいる、『神』に対して。

前世か、或いは、それ以前の『人生』であったなら、その時の自分には、『神』に歯向かおうとはしなかっただろう――いくら憎しみの念が強くとも、やはり、実の父でもある『神』と自分との間に広がっている実力の差は、とてつもなく広いのだ。

だが、今なら。

数日前の事件――『セベク・スキャンダル』において、フィレモンから『ペルソナ』を与えられた今回の自分なら。

十分に、神と渡り合う事が出来る――！

「……ん？　え？　何、その顔。もしかして、すっかり戦う気満々？　うわー参ったなぁ、これ間違いなく後で、メタトロンとかに『だから言ったではありませんか』って呆れ顔されるよ絶対！　僕はホントのホントのホントーに、久しぶりに可愛い息子の顔を見に来

ただけだっていうのにさぁ！」

こう見えて、僕は意外と親バカなんだよ？　と、そう言いながら――しかし『神』は、その言動とは裏腹に、確実に体の緊張感を高めていく。

「ま、いいか」

それでも。

ナオヤとまったく同じ外見をした顔に張り付けたニヤニヤ笑いだけは――最初の方から、一切変わっていない。

「人間の父親とかもさ、子供が小さい時は『きゃっちぼーる』とかってヤツをして遊ぶんでしょ？　だったら――僕達も、久しぶりの再会を祝して、かるーく、さくっと、てきとーに殺し合おうか？　カイン」

対して。

「俺の記憶を元に戻した事を、嫌というほど後悔させてやる……！」

『カイン』として目覚めたナオヤは完全に、怒りと復讐心に捕われた様子である。

「ぺ……ル……ソ……ナっ！！」

それは、もう一人の自分。

心の仮面。

『ペルソナ』。

この世の常識を越えた、人には過ぎた力である――しかし、目の前にいる『神』もまた、文字通り人間ではない。

だからこそ、一切の遠慮もせずに――思う存分、戦う事が出来る。

「『ヴィシュヌ』！！」

その声と同時に、ナオヤの頭上から、修羅のような仮面を被り、漆黒のマントを羽織った、一体のペルソナが現れる。

「おーおーおー！！　調和と維持を司る最高位の魔神、『ヴィシュヌ』じゃないですかぁ！　こりゃ、僕もちょっとばかり本気を出さないとマズイかもねぇっ！！」

「この場に弟（アベル）がいないのが残念だが……まずはお前からだ！　神ィいいいっ！！」

全知全能の存在である、天使達の長――『神』。

『セベク・スキャンダル』を解決した立役者であり、たった今、『カイン』の記憶に目覚めたペルソナ使い――藤堂尚也。

二人の戦いが、今、始まる。

『殺す』。

自分とまったく同じ外見をした『神』を、殺意に満ちた目で見つめるナオヤの頭の中は、その二文字だけに占められていた。

見れば、先ほどまでは青かった彼の瞳が――いつの間にか、赤く変色しているではないか。

当の本人がそれに気づいているかどうかは、甚(はなは)だ疑問ではあるが。

「おおおぉおおぉぉぉ

「『ガルダイン』っ！」

ナオヤの叫び声に呼応するかのように、ヴィシュヌは『神』に手に向けてかざすと、そこから強烈な鎌鼬（かまいたち）を放つ。

だが。

「ふぅん、『ガルダイン』か。中々悪くないけど――せめて、『万物流転』ぐらいの威力じゃないと、僕にダメージを与える事は出来ないよ？」

それに対して『神』がとった行動は、常識ではとても考えられないものだった。

フッ、と

疾風系統の中でも、かなりの威力を誇る『ガルダイン』に向けて――軽く息を吹き掛けたのである。

一見すればそれは、『ガルダイン』によって舞い上がった土埃のせいで、小さくクシャミをしただけのように見えなくもない。

だが――たったそれだけの事で、『ガルダイン』はいとも簡単に掻き消えた。

「何っ……！？」

つかの間、ナオヤは目の前でいったい何が起きたのか分からなかった。

『ガルダイン』をただの『呼吸』だけで無効化するなど――常識外れどころの話ではない。

再び、何事もなかったかのようにニヤニヤする『神』。

「ホラホラ、せっかく久しぶりにパパが構ってあげてるんだから、もっと甘えてきなって」

おちょくるようなその言葉が、更にナオヤの復讐心を煽る。

「いつまでもニヤニヤしやがって――ムカつくんだよ！　『ブフダイン』！」

ナオヤが切った次のカードは、相手に巨大な氷塊をみまう『ブフダイン』だった。

「やれやれ……。そんな離れた所から、チマチマ豆鉄砲みたいな攻撃を放ってないで、少しは自分で動きなよ」

軽口を叩きながら、『神』は左手を前に差し出すように掲げると、パッと指先を開く。

直後。

ズギャギャギャッ！！　という音と共に、その左手にヴィシュヌが放った『ブフダイン』が衝突した。

何と、今度は素手で――しかも片手で、ブフダインを受け止めるという荒業をやって見せる『神』。

『神』が受け止めた氷塊の体積は、どう見ても彼の二倍はある。

これだと、普通ならば腕力以前の問題として、物理的法則によって『神』の体が氷塊に押し負けるのは必然の理（ことわり）の筈だが――しかし結局、『ブフダイン』を受け止めている間、『神』の体は最初に立っていた位置から微動だにしなかった。

「だから、無駄って言ってるでしょ――って、あれ？」

再度、ナオヤをからかうような言葉を発しようとした『神』は、そこでようやく、自分の目に映る範囲の景色のどこを見渡しても、ナオヤの姿が見えない事に気づいた。

どうやら、『ブフダイン』があっさり無効化される事は、最初の『ガルダイン』がいとも簡単に防がれた時から、ナオヤにもある程度予想がついていたらしい。

そう、先程の『ブフダイン』は『神』に有効打を与えることを目的に発動させた訳ではない――それを防いでいる隙に、『神』との距離を一気に詰める為のものだったのだ。

ザンッ！　という、地面を強く踏み締める音を聞いて、ようやく『神』は、いつの間にか、自分のすぐ隣にナオヤが移動している事に気付いた。

「……あの事件での戦いは、お前を倒す為の準備運動にはピッタリだった」

ナオヤが言う。

「あり？」

対する『神』は、不思議そうな顔こそすれど、やはり、少しも驚いていない様子で――幼い子供がキョトンとしたような顔で、ナオヤを見ている。

「これならどうだ――『天驚地爆断（てんきょうちばくだん）』！！」

ナオヤと同じように、『神』のすぐ近くまで来ていたヴィシュヌの手から再び、先程の『ガルダイン』のような衝撃波が放たれる――今にも、『神』に体が触れてしまいそうな程の超至近距離で、だ。

相手の体を切り裂くという意味では同じだが、その威力は先程の『ガルダイン』とは段違いだった。

ヴィシュヌが持つ唯一の物理スキルは、まるで隕石でも墜ちたかのような凄まじい爆発音を辺りに響かせると同時に――なんと、神社の境内さえも、深々と切り裂いたのだ。

事情を知らぬ者が後でこれを見れば、それはあたかも、局地的な地割れが起こったのではと思うだろう。

だが。

「あ～…痛い、痛い」

それさえも――超至近距離で発動させた『天驚地爆断』でさえも、全知全能の存在である『神』には、それほど大したダメージは与えられなかったらしい。

今まで彼が着ていた、部屋着のような純白の衣服の方だけは、流石にズタズタに切り裂かれていたものの――当の『神』自身は、少したりともこたえていないようだった。

いや、よくよく見れば、攻撃が当たった部分の肌だけ、僅かに赤くなっているような気がしなくもないが――その程度では、とてもダメージとは呼べないだろう。

何より、

「うーん、それにしても、疾風系統の『ガルダイン』に、氷結系統の『ブフダイン』――そして、物理スキルの『天驚地爆断』か。随分とまぁ、色々な系統のスキルをお持ちのようで。その『ヴィシュヌ』ってペルソナ、やっぱり、かなり使い勝手がいいみたいだねぇ？」

――と、このような軽口を平然と叩いている事からも、それが伺える。

「……この化け物が」

忌ま忌ましそうに吐き捨てるナオヤ。

同時に、今まで召喚し続けていたヴィシュヌが、彼の体にスウッと溶け込み、ナオヤの心へと帰還していく。

「おいおい、そんな言い方はないだろう？　というか、これまでの人生の記憶を全て引き継いでるなんて、そんな桁違いな特性を持ってるお前がそういう事を言っても、まったく説得力がないんだけど

？」

ビキイッ、と。

その台詞を聞いた途端、ナオヤのこめかみに一筋の血管が浮かび上がった。

「……どの口が言ってやがる」

あまりの怒りに、強く握りこんだ拳から血が流れ落ちる程だった。

「俺をそんな体にしたのは……他ならぬ、お前だろうがあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

絶叫と共に、ナオヤは再び、心の内から『もう一人の自分』を喚び出す。

「来いっ！　『ショクイン』！！」

彼の背中から現れたのは、先程の『ヴィシュヌ』とは違う、別のペルソナだった。

彼の身の丈程もありそうな、巨大で禍々（まがまが）しい仮面から、龍のような、青い半透明の胴体が伸びている――そんなペルソナである。

「……んー」

『ヴィシュヌ』にしても、ペルソナの中ではかなり強力な存在だが――この『ショクイン』の能力はそれ以上である。

そして、『神』もまた、それを敏感に感じ取ったのだろう。見れば、彼の顔からはいつの間にか、あの鼻につくようなニヤニヤ笑いが消えていた。

「『ファイアブレス』！！」

ショクインの仮面に施されている、口のような部分が、カッ！と大きく開かれたかと思うと、次の瞬間には、そこから巨大な炎の波が、獲物を捕らえようとする大蛇のような狂暴さをもって、『神』へと襲い掛かる。

「いいねぇ……その気になれば、ちゃんと味のある攻撃も出せるじゃないっ！」

言いつつ、『神』は、右腕を後ろに大きく引くと、それを思いっきり体の左側へと振り抜いた。

途端、最初にナオヤが放った『ガルダイン』にも劣らない突風が巻き起こり、あとほんの数メートルで『神』に直撃するというところまで来ていた『ファイアブレス』は、誕生日ケーキの蝋燭の灯（ともしび）よろしく、あっという間に掻き消えた。

「……ていうかお前、なんか、僕が知ってる頃のカインとは、少し口調が違くない？」

振り抜いた右手をプラプラさせながら、『神』が言う。

「何て言うか、あの頃はもうちょっと、不遜というか高慢というか……相手の事を『貴様』って呼んでたりしたじゃん。それが今じゃ『お前』だし……って、あ、そうか」

ポンッ、と何かに気付いたかのように、開いた左手に右手を置く『神』。

「そうだったそうだった。『記憶』自体は引き継いでも、『性格』の方は、確かその人生によって違うんだったっけ。やっぱ、人生が違えば暮らしも違うから、当然、それによって性格も変わっていくって事かな？　……って、そういう風に『設定』したのって僕じゃん。マズイなぁ、これじゃあまた、メタトロンにどやされちゃうよ」

「何を、ごちゃごちゃ言ってやがる……！」

世間話でもしているような様子の『神』を見て、より一層、怒りの炎を激しくしていくナオヤ。

ショクインを召喚したまま、次の一手を放つ。

「『アイスブレス』！」

『神』に襲い掛かるは、氷の嵐。

辺りの温度を瞬く間に奪っていく程の冷気を伴った、マイナス数百度にもなる氷点下の息吹だった。

「おっとっと！」

若干慌てた様子で、体の前で腕をクロスさせる『神』。

瞬間、その腕に『アイスブレス』が激突し、更には『神』の体を、その時いた場所より、数十メートルほど後方へと下がらせるが――

「あら……よっと！！」

そのように、クロスさせていた腕を『神』がバッと開くと同時に、ショクインが放った氷の嵐もまた、空中で弾け、空気中へと霧散していく。

「炎の次には、氷ときたか……飽きさせないねぇ！　まったく！」

気のせいか――そう叫ぶ『神』の口調には、どこか喜んでいるかのような色があった。

まるで、久しぶりに会った実の息子の成長ぶりに、心の底から喜んでいるかのような――そんな感情。

「……こっちだ」

いつの間にか――ショクインと共に、またも『神』のすぐ近くにまで接近していたナオヤ。

そんな彼を見て、『神』は次のように言った。

「……成長したね、カイン。……僕は嬉しいよ」

それは。

その言葉は――紛れも無く、愛する息子の成長を喜ぶ、優しい父親のそれだった。

もっとも――そんな『神』の想いがナオヤへと伝わる事は、結局、最後までなかったのだが。

「『メギドラオン』！！」

ショクインの仮面にある、口のような紋様に、神々しい、青白い光が凝縮されたかと思うと、次には、それが一気に――さながら、一筋の光線のように、『神』へと放たれた。

ナオヤと『神』との間にある距離は、相変わらず、極端に短いままである。

そんな状況の中、『メギドラオン』などという最上級の威力を持つ魔法を放てば、『神』は勿論、魔法の使用者であるナオヤもまた、無事ではすまない。

それどころか――下手をすれば、『アラヤ神社』という場所が、この世から消滅する事さえありうる。

つまり、そういう事なのだ。

ナオヤにしてみれば――気が遠くなる程の長い年月の間、『神』を憎み続けていたナオヤにしてみれば、自分の命や、アラヤ神社の存在など、どうでもいい事なのだ。

心の底から。

本当に――どうでもいい。

それはそれで、ある種の覚悟だとも言えるだろう。

しかし。

結局、ナオヤのそんな覚悟は――次に『神』が取った行動によって、跡形もなく瓦解する事になる。

「やれやれ――こんなに近い距離に相手がいるにも関わらず、『メギドラオン』なんて撃ったら、お前も無事じゃいられないよ？　少し頭を冷やしなさい」

『メギドラオン』に対して『神』が使用した魔法は、その台詞に忠実に沿ったものだった。

言葉通り――ナオヤは、頭を冷やす事になったのである。

「『母なる大地』」

ごくごく小さい声で、『神』がそう呟くと同時に、それは起こった。

ガキィンッ……！　と、金属同士を強く打ち付けたかのような音と共に、二人の周りにある風景が、一瞬にして氷が支配する世界へと変貌を遂げたのだ。

氷結系統スキル――『母なる大地』。

この世に現存する――それこそ、天使や悪魔、シャドウやペルソナなどの存在を見渡しても、このスキルを使えるのは、他ならぬ『神』だけである。

ナオヤが召喚したペルソナ、ショクインも。

そのショクインが放った――本来なら、物理的には存在していない筈の、『メギドラオン』の光線も。

全てが――凍りついていた。

「……あっ……！　ぐっ……、ぐぅっ……う……！！」

当然――それは、ナオヤにしても例外ではない。

先程の『母なる大地』に寸前で気づき、慌てて距離をとろうとしたところで凍らされたのか――『神』のすぐ近くで、彼は、不自然に後方に傾いた姿勢で、体を凍らされていた。

首より上の部分だけは何とか無事である為、喋ったり視線を動かしたりすることは出来るものの――手足がまったく言うことをきかない。

これでは、まな板の上の鯉と一緒である。

「く……そっ……！！」

結果――彼が出来る事といえば、そう言いながら、目の前で平然としている『神』に対して、憎悪に満ちた視線を向ける事だけだった。

「まだ……届かないっていうのか……！」

『母なる大地』によってカチカチに凍らされたせいで、その部分の体の感覚が、早くもなくなってきていた。

「いやいや、別にそう落ち込む事はないと思うよ？　僕に『魔法』を使わせただけでも、お前は人間にしては、かなり強い部類に入ると思うけどね――」

ケラケラと笑う『神』の表情からはもはや、先程までの緊張感は一切伺えない。

まるで――既に、この戦いは終わったのだと、そう、暗に告げているかのように。

事実、現在の状況を見れば、その解釈は実に的を射ていると言えるだろう。

『神』　対　ナオヤ。

結果は――『神』の圧倒的勝利。

これは間違いないし――揺るぎようがない。

「それにしても……」

ハアッ、と小さくため息をつきながら、『神』が言う。

「そのぶっ飛んだ態度を見る限り――どうやら、弟（アベル）を殺した事については、まったく反省してないみたいだね？　いい加減、そろそろ自分の罪を認めたらどうだい？　今なら、まだ許してあげるけど？」

「誰がっ！！」

大きく目を見開きながら、狂暴な獣のような吠え声を上げるナオヤ。

もしこの時、体を凍らされていなかったら、彼は即座に『神』の首を絞めていただろう（もっとも、実際にそれが出来るかどうかは別問題だが）。

「あー、はい、はい、はい。分かりましたよ」

しかし、その迫力に気圧されたのか、それとも、単に呆れただけなのかは分からないが、二、三歩ほど後ろへと下がりながら、『神』が言う。

「まったく……反抗期にしては、ちょっと長すぎじゃないの？　まぁ、僕としては、アベルみたいにどこまでも従順な性格より、お前みたいに、ちょっとはツンツンした性格の方が可愛げがあっていいと思うけどね」

「お前……！！」

ギリギリと、強く歯軋りをするナオヤ。

「ここでお前を殺すのは、まったくもって簡単だ」

相変わらず、どこかおどけたような雰囲気を周囲に漂わせながら――『神』はそんな事を言う。

しかし、そんな態度が逆に、ゾッとするような畏怖の念をナオヤに覚えさせた。

「けどそれじゃあ、僕としてはちっとも面白くない。だから、もうしばらくの間、お前のわがままに付き合ってあげるよ。それに……お前の為に、ちょっとしたヒントも与えてあげる」

立てた右手の人差し指を口に当てながら、『神』が言う。

「ヒント……だと？」

「そ、ヒント。お前の『復讐』を手助けする為の、ね」

「ふざけんな……っ！　ナメてんのか！　テメエッ！！」

並の悪魔なら、それだけで尻尾を巻いて逃げてしまうであろうナオヤの気迫を前にしても、『神』の態度は、変わらず飄々（ひょうひょう）としたままである。

どころか、ナオヤの叫び声など、まったく耳に入らなかったかのように、勝手に話を進めていく始末だ。

「お前の弟の……『アベルの因子』を持つ人間が、『ポートアイランド』っていう場所にいる」

その言葉に。

突然、ナオヤは怒りに任せて喚くのをやめた。

どうやら、『神』が言う『ヒント』とやらに、純粋に興味を持ったようだ。

「アベル……」

ナオヤの――カインの記憶を引き継ぐ彼の、実の弟。

「本当は、こうしてお前に会った後に、彼に会いに行こうと思ってたんだけどね――気が変わったよ。今日はまぁ、お前だけでも十分に楽しめたし」

クルリと、『神』はナオヤに背を向けた。

「まぁもっとも？　『アベルの因子』を持つ人間は――お前とは違って――彼だけじゃなく、世界中に存在してるんだけどね？　でも、その『ポートアイランド』にいる子は、この世で一番、『それ』を

色濃く受け継いでいるんだ。これはつい最近気付いたことなんだけど、どうやら『アベルの因子』の遺伝の度合いも、個々によってまちまちみたいなんだよね――ま、メタトロンの受け売りだけどさ」

「……なんで」

堪え切れない様子で、ナオヤが口を開く。

「……なんで、俺にそんな事を教えるんだ？　もしかしたら俺は、この後すぐに、ソイツを殺しに行くかもしれないぞ？」

「そうしたければ、そうすればいいさ――もっとも僕は、お前がそんな事をする訳がないって確信してるけどね。何なら、理由を言ってあげようか？」

「……いらん」

チッ、と舌打ちしながら、ナオヤは『神』の背中に向けていた視線を、横に動かした。

『神』の言う通りだった。確かに、今のナオヤには、アベルを殺すつもりはない。

なぜなら――。

「ああ、そうそう」

途端、何かを思い出したかのように振り向き、『神』はナオヤへと視線を向ける。

「今まで、ここで散々暴れたけど――あらかじめ、この辺りには結界を張っておいたんだ。だから、騒ぎになる事はないから安心してね。ま、流石にフィレモンとかには勘づかれちゃうだろうけど――いやいや、ていうかこれってマジでやばいぞ。絶対、根に持たれちゃうってコレ。アイツ、元は人間のくせして、僕に対してもまったく遠慮しないからなぁ」

まぁいいか、と言いながら、『神』は肩を竦める。

そして――どうやら、いよいよこの場から立ち去るつもりらしく、スタスタと歩き出した。

「お前は殺す」

そんな『神』の背中に向かって、ナオヤは呟いた。

冷徹に、冷酷に。

しかし、それを聞いても、『神』は足を止めない。

彼が返した反応は、変わらず、アラヤ神社の鳥居へと歩いていきながら――ナオヤの方を振り向きもせず、次のように言っただけだった。

「……楽しみにしてるよ。いつの日か、お前が僕を殺せるようになる日をね」

◆

◆

いつの間にか、水平線にユラユラと揺れていた夕日は完全に落ち、アラヤ神社の境内を真っ暗な闇が支配していた。

その間に氷も溶け、アラヤ神社は、『神』とナオヤが再会を果たす前の、元の状態に戻っている。

まるで、何事もなかったかのように。

ナオヤは今、最初ここに来た時と同じように、何をする事もなく、神社の本殿の前で佇んでいた。

唯一違うのは――彼が、まるで瞑想でもしているかのように、長時間ジッと目を閉じたままでいるという事ぐらいだ。

やがて、ナオヤはポツリと呟く。

「俺は……今の今まで、『藤堂尚也』だった俺は死んだ」

両の手を、開いては閉じ、開いては閉じる。

「俺は……『カイン』だ。……ようやく思い出した」

数時間まで、散々彼を苦しめていた頭痛は、今や完全に消えていた。

当然だ。

その原因は、もはや完全に取り除かれたのだから。

「……もう、俺は戻れない」

迷いがないと言えば、それは嘘になる。

脳裏に思い浮かぶのは、『セベク・スキャンダル』において、共に戦ってきた仲間達。

マークや南条、ブラウンにエリー、綾瀬、黛（まゆずみ）、城戸（きど）――といった仲間達だ。

そして。

「園村……」

あの事件を通してナオヤは、否、尚也は――彼女の事が好きになっていた。

ともすれば、別にいいじゃないか、という思いも生まれてくる。

今回だけは、『神』への復讐などは忘れて、彼女と共に、これからの人生を共に歩むのもいいではないか、と。

しかし、彼はそうしようとは思っていなかった。

『尚也』から『ナオヤ』になった以上。

彼の心を埋めつくすは、『神』に対する復讐心のみ――である。

「当然だ……。今まで何百年――何万年もの間、ずっと憎み続けてきたんだ……。それが、ほんの数日の出来事で、そう簡単に覆されてたまるか」

そして。

「おい――聞いてるんだろうな！！」

突然、天に顔を向けて――ナオヤは叫んだ。

大気の全てを、外側から漆黒のカーテンで覆っているかのような空は真っ黒に塗り潰され、そこには、星の一つさえ映っていない。

しかし、ナオヤは確信していた。

自分が見つめるその先で、間違いなく『神』がこちらを見つめている事を。

「お前は絶対！　俺が殺す！　この俺が――お前の実の息子であるカインが！　これ以上ない苦しみを骨の髄まで味わわせた上でなっ！！」

『これ以上ない苦しみ』。

如何にすれば、『神』にそれを味わわせる事が出来るかを――既に、ナオヤは思いついていた。

「……」

闇を思わせる漆黒の空からは、返事はない。

それでも、ナオヤはその中で、何者かが薄く笑ったのを、確かに見たような気がした。

どれぐらいそうしていただろうか。

「……行くか」

『尚也』から『ナオヤ』へと変貌を遂げた彼は踵を返し、アラヤ神社に背を向け、迷いのない足取りでその場を後にする。

同時に彼は、思わず、次のような言葉を呟いていた。

「待ってろよ――弟（アベル）」

そして、彼は堕ちていく。

深い、深い、二度と這い上がることの叶わぬ、闇の世界へと。

◆　◆

この数ヶ月後。

具体的には、聖エルミン学園の卒業式の直後に、彼――ナオヤは、この御影町から姿を消す事になる。

彼の突然の失踪は、学園内――特に、『セベク・スキャンダル』で、彼と行動を共にした仲間達の間に、かなりの衝撃をもたらしたそうだ。

そして、この失踪事件よりもさらに二年後、ナオヤは、『アベルの因子』を持つ一人の少年――有里湊（ありさとみなと）と接触する為、ポートアイランドへと赴き、そして、その場所にある、とある会社に勤める研究員、岳羽詠一郎（たけばえいいちろう）と協力して、『ポートアイランド・インパクト』という、日本の歴史に残る大事件を引き起こす事になるのだが――それはまた、別の話である。

3rd Day開始

『東京封鎖』が始まってから、三度目の朝。

宮下公園。

その地面の上に直接寝そべる形で、今の今まで夢の世界にいた有里淳（ありさとじゅん）は、体勢はそのままに、ゆっくりと目を覚ました。

――と、同時に彼は、自分の体が、何か暖かいものに包まれている事に気付いた。

（……姉（アイギス）さん？）

そんな中、淳の脳裏にフッと浮かんだ情報がそれだった。

確かに、封鎖に巻き込まれる前まで、彼はおよそ週に二、三回程のペースで、自分にとっては姉のような存在である彼女（アイギス）を抱きまくら代わりにして、夜の床についていたのだが――冷静に考えれば、今この時、この場所に彼女（アイギス）がいる訳がないと、彼には分かった筈である。

しかし悲しいかな、まだ寝起きである為か、脳の機能を正常に働かせる事が出来ない淳は、そんなありえない勘違いを、いとも簡単に現実だと信じ込んでしまった。

「……うぅ～ん」

結果、彼はアイギスと寝ている時のいつもの癖で――その正体の分からない、自分を包んでいる何かに、スリスリと、迷うことなく頬擦りをしてしまう。

まるで、いつもそうやって、アイギスの胸の谷間に顔を埋めているかのように、だ。

淳の年齢が十六である事を踏まえれば、その行動は、どう考えても社会的にアウトでしかないが――残念ながら、物心がついた時から、そうやってアイギスと一緒に寝てきた淳には、まったく抵抗感らしきものが感じられなかった。

（……ん？）

だが、意識が覚醒し始めてから、時間にしておよそ数十秒という時間が経過したところで――今更ながら、淳は今、自分が頬擦りをしている相手が、アイギスである筈がない事に気付いた。

「……」

何か、根拠のない――しかし、それと同時にハッキリとした嫌な予感が、背中の後ろの方からジワジワと音をたてて迫ってくるのを確かに感じながら、淳は何とか冷静に、自分の体に密着しているものの正体を確かめようと試みる。

自分に密着している『それ』は、明らかに人の形をしていた。

前述したように、淳の体の上から覆いかぶさるように、彼の体に密着している『それ』からは、重く、生暖かい感触がすると同時に、どことなく甘い香りが放たれていた。

淳と違いまだ寝ているのか、規則正しい呼吸音と共に僅かに胸が上下しているのが、その胸に顔を押し付けている淳にも分かった。

（……ま、まさか……！）

バクバクと、左胸の下に納められている淳の心臓が、寝起きにしては不釣り合いな程に大きな音をたて始める。

そして。

目の前にある、星の形を模したネックレスを見て、淳の『予想』は『確信』に変わった。

要するに。

有里淳に、胸の谷間に顔を押し付けられている人物は、うっすらと頬を上気させた谷川柚子（たにかわゆず）だった。

「……ワッツ？」

明らかに、現在の自分の脳内の空き容量を超えた規模を誇る情報を前に、これ以上なく間の抜けたリアクションをとってしまう淳。

果たしてそれは寝相によるものか、或いはそれ以外のちゃんとした理由があるのか――どういう訳か、ユズは淳の後頭部に手を回し、その頭を自らの胸にかき抱くようにして、ぐっすりと眠っていたのだ。

更によくよく観察すれば、ユズの現在の衣装は、かなり露出の激しい物へと変わっていた。

と言っても、服装自体が別の物になっていたという訳ではなく――こちらはまず間違いなく、寝相のせいに違いないだろうが――着ている衣服が何とも大胆に定位置からズレていて、いつもは見えるか見えないかというところで留(とど)められている筈のチラリズム的な胸の谷間が、完全に外気にさされている、という形でだが。

これでは、殆ど下着と一緒である。

そして、（何とあろうことか）淳は、その谷間に顔を埋めてしまっていたのだ。

しかも、自分から。

「……っ！！」

ブワァッ！　と、淳の体全体から、脂汗とも冷や汗ともつかぬ、とにかく人が極度に緊張したことによって生み出される液体が流れ出る。

（お、落ち着け――落ち着け俺！　今まで、アイギス姉さんと寝てきた経験を生かせば、この程度の不測の事態は、難無くクリア出来

る筈だ……っ！！）

事情を知らぬ人間が、明らかに別の意味に捉えられてしまうような言葉を心の中で叫びながら淳は、何とかこの状況を無事に切り抜ける為の案を考える為に、脳みそをフルスロットルさせる。

未だにユズはぐっすりと寝ており、自分の腕の中にいる淳が今にも緊張感でどうにかなってしまいそうな状態でいる事には、まったく気付いていない。

現在の二人の位置関係は、淳の方が地面に仰向けに寝転がっており、そんな彼の頭の後ろに手を回しながら、ユズが上から覆いかぶさっているという構図である。

その時、少し離れた場所から、自分達以外の人物のものと思わしき、小さな寝息が聞こえてきたので、淳がそちらに顔を向けると、そこでは、彼の親友である木原篤郎（きはらあつろう）が、如何にも気持ちよさそうに眠り込んでいる最中だった。

確か、彼は現在の見張りの当番だった筈だが……？　と、心の中で小さく首を傾げる淳だったが、大方、見張りの途中で睡魔に負けてしまったのだろう、と勝手に結論づけた。

（……アツロウ。おい、アツロウ！）

極々小さい声で、絶賛爆睡中のアツロウにそう呼び掛ける淳。

しかし、相当に深い眠りについているのか、救いを求めるような淳の声を受けても、アツロウは一向に目を覚まそうとしない。

どうやら、彼に助けを求めるのは無理らしい――そんなアツロウを見て、とりあえず後でぶん殴っとこうと思う淳だった。

……もっとも、仮にアツロウが淳の呼び掛けに気付いたところで、彼に現在の淳の状況を何とかする事が出来たのかと言えば、それは甚だ疑問ではあったが。

ともあれ、とにかく今は、すぐにでもユズから離れる方が先決である――そう思った淳であったが、ユズの手は今もなお彼の頭をガッチリとホールドしており、一向に離そうとする素振りを見せない。

ならば、と、淳は頭の中で一つの打開策を思い付くと、すぐにそれを行動に移した。こちらもまた、彼女の背中に腕を回すと、ゆっくりと横にゴロンと転がり、静かにユズと体勢を入れ替える。

そして、そのままさりげなくユズの腕を頭からどかし、出来るだけ音をたてずに彼女から離れようとしたところで――それは起こった。

パチッ、と。

あまりにも突然に、谷川柚子が目を覚ましたのだ。

「……」

「……」

シーン……と、二人の周囲を、気まずいにも程がある沈黙が包み込む。

客観的に状況を整理しみると、次のようになる。

先程まで寝ている最中だった谷川柚子に覆いかぶさる形で、その胸に顔を押し当てながら、尚且つ、彼女の背中に腕を回している有里淳。

ついでに、寝相によって大分乱れたユズの衣服――それは見ようによっては、今の今まで、何者かが彼女の服を脱がそうとしていた風に見えなくもない。

（……ヤ、バイ……！　ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイっ！）

限界まで溢れ出た淳の冷や汗（もしくは脂汗）が、ユズの体に何滴が滴り落ちた。それが彼女の赤みが差した肌に水気をもたらし、何ともいえない艶っぽさを醸し出している。

が、それを見ても淳は少しも官能的な気分になる事は出来なかった。

それ以上に、嫌な予感と言うか何と言うか、まるで拳銃の銃口を直接こめかみに押し付けられてるような重圧（プレッシャー）に今にも神経がやられてしまいそうで、まったくそれどころではなかったのである。

「ジ、ジュン……？」

ヒクヒクと、明らかに無理矢理作ったとしか思えない笑みをその顔に浮かべながら、それでも必死に喉の奥から言葉を紡ぎ出すユズ。

しかし、そんな笑顔とは裏腹に、彼女の体からは、昨日マカーブルと戦った時にさえ見られなかった程の圧倒的威圧感が、とめどめなく溢れ出ていた。

何となれば、今にも、普段は優しいが目の前で親友を殺されたことによる怒りで、真の姿に目覚めたどこぞの金髪の戦士よろしく、その髪を逆立てて淳に襲い掛かってきそうだ。

「ユ、ユズサン！」

もはや、自分の未来は決定したようなものだと心のどこかで確信しつつも、それでも淳は、緊張のせいで若干ロボット的なものに変化した口調で、ユズに対して弁明を謀ろうとする。

「チ、違ウンデスヨ？　コレハ違ウンデスヨ？　ボ、ボクハ君ニ何モシテマセンヨ？　コレハ不慮ノ事故トイウカナントイウカ、ソモソモ最初ニ覆いカブサッテイタノハ君ノ方トイウカ、トニカク、ボクハ君ガイマ心配シテイルヨウナ事ハ何モシテイナイノデ――」

「ジュン」

低い。

とてつもなく、ひくーい声で、淳の言葉を遮るユズ。

今や、うっすらと赤みが差しているどころか、まるでトマトのように真っ赤になった顔で、その目に殺意を漲らせながら、彼女は淳を見ている。

そして、彼女は言った。

「何か、言い残したい事はある？」

「……」

あ、なるほど。

俺、今から死ぬんだ。

心の底からガタガタガタターッ！　と震えながら、呆然と、どこか客観的にそんな事を思う淳。

その一方で――彼は考えた。

この、もはやほぼ百パーセントに近い確率で、あと数秒後に自分の身に降り懸かるであろうユズの制裁から、どうすれば逃れられるかを。

結果、彼は何とかこの状況を、どこか軽いジョークのような流れで終わらせる為、次のように言った。

「え、えええと、その！　見事な張りと弾力でした！　ユズさんの胸の中で眠れて、僕は幸せ者です！！」

しかし、それは明らかに逆効果だったらしく、ユズの頭から、ブ

ツン！　と何かが切れる音が響き渡った。

「……正直に言えば、何でも許されると思わない方がいいと思う」

「ですよねぇ！？　今から死ぬ気で謝っても間に合うでしょうか！？　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさ――って、アレ？　そ、その手に満ちた尋常じゃない魔力は一体？　ハッ！？　まさか『嵐の乱舞』！？　ちょっと待ってよユズさん！　それはどう考えても同じ人間に向けていいものとは思えないんですがってぎゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

◆

◆

――表参道、バー『ＥＩＪＩ』。

ドアの間から差し込む優しい光を顔に直接受けて、何故か入口から入ったすぐ近くの場所で、座禅を組んでいるような姿勢で座ったまま寝ていたセトは、ゆっくりと目を覚ました。

現在、その室内にいるのは彼だけだった。昨晩、この店で夜を明かした他の四人――ジン、ハル、カイドー、ショウジ――は、恐らくは、こことは別の部屋で、まだ寝ている最中なだろう。セトが耳を澄ませれば、朝の鳥の鳴き声に紛れて、他の四人の寝息が微かに聞こえてきた。

昨日、夜の十時頃、全員がそろそろ体を休めようというムードに包まれたその時に、最初、ショウジが「安全の為、全員が同じ場所で寝た方がいいんじゃない？」という提案をしたが、セトとジンの両名が、それをやんわりと拒否した。

二人は突然、まるで事前に打ち合わせていたかのように、類い稀なる騎士道精神を発揮し、年頃の年齢の女性が、男と同じ空間で寝るべきではないと主張したのだ。

そんな訳で、ハルとショウジの二人がジンの寝室で、ジンとカイドーは物置代わりとして使っていた空き部屋で寝る事に相成ったのである。

セトがふと横を見ると、そこにはいくつかの灰皿と、それに山のように詰まれたタバコの吸い殻があった。すべて、セトが昨晩、見張りの際の眠気覚ましの為に吸い潰したものだ。

それらのタバコは、昨日、カイドーを助けてくれたお礼にと、ジンがセトに譲ってくれたものだ。セトもジンと同じくタバコをこよなく愛する男の内の一人だったので、これは有りがたかった。

だからといって、セトがヘビースモーカーであるという事ではない。今回のケースは例外であり、本来は、イライラした時や考え事が多過ぎて頭が一杯になった時などの、ちょっとした息抜きの為に時々吸うのが、彼は好きなのだ。

もっとも、現在の状況を見て分かる通り、結局、彼は睡魔に耐え切れず、最終的にグッスリと眠り込んでしまったのだが……。

「……やれやれだぜ。結局、寝ちまったのか……」

呟きながら、ふあーっと欠伸をして、セトは大きく体を伸ばした。前日は、テレビの世界でちょっとした用事を片付ける為に徹夜をしていたので、今回はかなりグッスリと眠れた気がする。

「……ううむ」

しかしそうなると、満足な睡眠を得られた事で、連鎖的に欲が出てきてしまい、今度はシャワーを浴びて気分を変えたい、という気持ちがセトの中で生まれてきた。

「いや、そうじゃなくても、やっぱシャワーは浴びたいかな」

何となれば、今回の『東京封鎖』という事件に介入してからの約三日間、彼は一度もそういった機会に恵まれなかったのである。しかもその間に、全身血まみれになるような、相当にスタイリッシュかつデンジャラスな戦いを何度も経験しているのに、だ。

流石に、少しは自分の体から発せられる匂いが気になってしまうセトだった。

「……つっても停電のせいで、多分冷水しか出ないだろうけどな……」

そう。

現在、この東京を襲っている事態は、何も『山手線沿いに東京を封鎖している』、というものだけではない。他にも、『都内全域の停電』や『悪魔の出現』など、様々な問題が発生しているのだ。

この内、『悪魔の出現』については、これから先もイヤと言うほど触れる事になるので、ひとまず置いておくが――それに負けず劣らず、『都内全域の停電』というのも、十二分に厄介だった。

明かりがない為、夜になると辺りが闇の世界のように真っ暗になるのは勿論のこと、冷蔵庫なども機能しなくなるが故に、その中に入っている食糧などはあっという間にダメになってしまう。そのせいで、今の東京では、満足に食糧を確保する事さえ難しいという状況なのだ。

脱衣所に入り、ボロボロの草履から足を抜き、うっすらと血痕（と言っても、大半が返り血だが）が残った赤い甚平（じんべえ）とトランクスを脱いで一糸纏わぬ姿になると、そのまま浴室へと入りシャワーを浴びる。

彼が予想した通り、やはり、停電のせいで水を温める為の何からの機器が動いていないせいか、そこから流れ出てくるのは、思わず鳥肌が立ちそうになる程に冷たい、文字通りの冷水だった。

もっとも、今は早朝でも汗が滲むような夏の季節の最中（さなか）。セトに言わせれば、むしろこれぐらいの冷たさの方がちょうどよかった。

極限にまで鍛え上げられた、セトの筋骨隆々の、岩のような体に水が当たる度に、それがパチパチとはねる。

およそ数分の間、室内であるにも関わらず、美しく輝いている銀色の髪を乱暴な手つきで洗うと、セトはやがてシャワーを止めた。

そして、正面にある、およそ彼の上半身ぐらいの大きさの鏡を見

る。

「……」

言うまでもなくそこには、全身に冷水を滴らせた自分の姿があった。

「十九年、か……」

ポツリと、セトは呟く。それは、彼が『ペルソナ使い』として歩いてきた、これまでの年月を表す数字だった。

（確か――きっかけは、俺がまだイギリスにいた時に、母さんから送られてきたメールだったな……。あのメールを見て、その年の夏に月光館学園に転校する事を、俺は初めて知ったんだ。どうして、急にそんな事になったのかは、今でも分からないけど……）

実際には、彼は『ある人物』の思惑によって、『本来の物語』を書き換える為に、月光館学園へと招かれたのだが――その事をセトが知るのは、まだ先の話である。

閑話休題。

何はともあれ、そんな経緯を経て、当時、まだ十五歳だったセトは、日本の、ポートアイランドという人工島にある、月光館学園へと転校する運びとなったのだが――。

（そこで――俺は『先輩』に会った）

彼の脳裏に思い浮かぶのは、一人の少年の姿。

有里湊（ありさとみなと）。

元特別課外活動部（S.E.E.S）のリーダーにして、『ニュクス』から世界を守った、偉大なるペルソナ使い。

そして――現在、この『東京封鎖』に巻き込まれている、有里淳の父親でもある。

正確に言うなら、彼と会ったのは、月光館学園の生徒として正式に転校した後ではなく、それ以前――彼が、巌戸台分寮という場所に向かう為に、終電近くの電車に乗っている際のその車内で、だが。

その後、彼と同じ『ペルソナ使い』として覚醒し、S.E.E.Sに入部したセト。

そして、そのメンバーとしてシャドウと戦う日々を通していく内に、彼は知ったのだ。

否、思い知らされた、と言うべきかもしれない。

彼の『強さ』を。

否、否――それを『強さ』と表現するのは、些か正確性に欠ける。

何となれば、彼の存在そのものが、一つの『強さ』なのだから。

善を、悪を、

努力を、才能を、

正当を、不当を、必然を、偶然を。

想像を、幻想を、希望を、絶望を、愛を、憎しみを、喜びを悲しみを哀れみを蔑みを現実を理想を合理を不合理を好意を悪意を規則を規律を終わりを始まりを、

有里湊の『強さ』は――それら全てを、跡形もなく破壊する。

今のセトを、『人類最強のペルソナ使い』と評するなら――有里湊は、『史上最強のペルソナ使い』と言えるだろう。

セトは、彼に心酔していた。

彼の、圧倒的強さに、圧倒的存在感に――心の底から、一分の隙もなく、心酔していた。

有里湊の為ならば、自分の命など、惜しくはない――と、そう、本気で考える程に。

なのに。

そこまで――想っていたのに。

「……どうして、死んじまったんですか……」

浴室にある鏡を見ながら、セトは言う。

まるで、今まさに、そこに有里湊（かれ）がいるかのように。

「……」

（暗くなり過ぎだ、この馬鹿）

心の中で――自分自身に対して、忌ま忌ましそうに、セトは呟く。

このまま、こうして全裸のまま、浴室で鏡を見つめていても、『先輩』が生き返る訳ではない。

それに対しては既に、自分なりに、心の中で決着をつけた筈だ。

だからこそ。

彼は――瀬多総司（せたそうじ）は、成人した後も、ペルソナ使いとしての人生を歩んで行こうと決めたのだ。

（……そろそろ出るか。にしても、朝食はどうすっかな。確か、あらかじめこの封鎖の為に持ち込んでおいた食糧とかが、東京中にある隠し場所にまだ保存したまんまだった筈だから、それを振る舞う事にすっか）

すっかり長風呂になってしまったなと、極めて小さな声で呟きながら、セトは、脱衣所へと通じるドアを開ける。

すると、そこには。

たった今、脱衣所に入ってきた様子のショウジが、目をパチクリ

させながら突っ立っていた。

「……？」

「……？」

余りにも（少なくとも彼等にとっては）現実離れした光景を見て、しばしの間、二人はまるで「アレ、こいつ誰だっけ？　つーか、何だコレ？」という感じで、キョトンと首を傾げる。

原因は恐らく、浴室にて、セトがシャワーを止めたまま、物思いに耽っていた事だろう――もし、彼がシャワーを止めていなければ、その際に発生する水の音に、ショウジは、脱衣所に入る前に気づいた筈だ。

その結果が、コレである。

つかの間、二人はそのまま、頭の上にいくつかの疑問符を浮かべ、ビデオを一時停止させたかのように沈黙を維持していたが――それからものの数秒もしない内に、二人は、ほぼ同時に理解した。

「……！？」

「……！？」

ビックゥ！！　と、これまた同時に、まったく同じリアクションをとるショウジとセト。

が、驚きの声を上げるのは、セトの方が早かった。

「な、な、なななああぁぁんで何の前振りもなく、突然俺の至福の朝シャンタイムに乱入してくるかなショウジちゃん!?　流石のセトさんも、この状況はちょっと予想外というか、つーか予想できたとしても全力で回避していた事はまず間違いなうというかっ!!」

「いやむしろそれはこっちの台詞よセトさん!　シャワー浴びてるんだったら、ちゃんと浴室の鍵くらいかけておきさない!!　つーか、早く服を着てっ!!」

「俺の自宅は温泉旅館で、そーいうのがなかったから、そのような便利機能の存在を忘れていたんですごめんねごめんねー!!」

「どこぞの芸人みたいな謝り方を披露してないで、まずは状況を理解しなさいよセトさん!　あと、今更だけど「ちゃん」を付けるのはやめてって何度も言ってるでしょうが!!」

「あ、ああ、ゴメン――って、え?　状況?」

一瞬、初めの時と同じようにキョトンとした表情を作るセトだったが、すぐに、ショウジが言いたい事を理解した。

つまり、こういう事だ。

『たった今、シャワーを浴びていたセト』＝『現在、彼は素っ裸』

。

そして、そんな状態の彼と、見事に鉢合わせてしまったショウジ。

見れば、彼女は必死で、その視線をセトの腰の下辺りから避けるように、ジッと彼の顔を凝視していた。

ならば、そもそも彼の体自体を視界に入れないように、顔を横に向けるなり、究極の解決策として、脱衣所から即座に出ていくなどをすればよさそうなものだが――逆に言えば、今の彼女はそれぐらい冷静さを欠いているということだろう。

「……」

「……」

再び、沈黙。

やがて――セトは、昨日の昼、以前まで着ていた黒い甚平から、今は足元に脱ぎ捨てられている、赤い甚平へと着替える際に、自分がショウジに言った言葉を思い出しながら、次のように言った。

「……だ、だから、覗くなって言ったジャン☆」

直後、ペルソナ使いでもない筈のショウジの体から、何やら得体の知れない、怒りに満ちたオーラが、ゴッ！　と立ち上(のぼ)る。

「だ・か・らっ！　とっとと服を着ろって言ってるでしょうがああああああああああぁぁぁぁぁぁっっ！！」

刹那。

ぎゃあああーっ！？　という悲鳴と共に、セトの左頬に、彼の妻、天城雪子（あまぎゆきこ）顔負けの、極限にまでスナップを効かせた平手打ちが、容赦なく襲い掛かった。

◆

◆

『悪魔使い』である有里淳と、『ペルソナ使い』であるセト。

いつ、どこで、何が起こるか分からない、そんな極限の状況にある『東京封鎖』の三日目は――こうして、二人の男の心からの絶叫と共に、静かに（？）幕を開けるのだった。

3rd Day『新しい仲間』

「……一体、何があったんだ？」

心地よい眠りから無事に覚めた木原篤郎（きはらあつろう）――通称アツロウは、目の前の状況を見て、重たい瞼をこすることも忘れ、そのように呟いた。

見れば、そこには何故か、一昨日に遭遇した強力な悪魔、ウェンディゴもかくやという程の威圧感を纏っている谷川柚子と、その傍らで（これまた何故か）ボロクズのような状態になった有里淳が、道端にポイ捨てされた空き缶よろしく、無造作に放置されていた。

いや、よくよく観察すれば、おかしいのはその二人の様子だけではない。

昨日までは何事もなかった筈の宮下公園の風景が、まるでたった今台風が通り過ぎましたと言わんばかりに、所々の土がえぐれ、公衆トイレの一部が瓦解（がかい）し、木の何本かが、文字通りの意味で根こそぎになっていた。

「……」

「え、ええと……？」

絶賛『返事がない。ただの屍のようだ』状態の淳はともかくとして、ちゃんと意識があるにも関わらず、何故か無言で仁王立ちしているユズに冷や汗をドバドバ流しながらも、それでもアツロウは、

なけなしの勇気を振り絞って、改めて彼女に尋ねた。

「……えと、あの、ソデコさん？　こ、この状況は一体？　ま、まさか、俺が知らぬ間に悪魔が攻めてきたのか？　な、何だよ、だったら、遠慮なく起こしてくれればいいのに……。ナ、ナハハハ……」

しかし、ユズは相変わらず無言だった。アツロウがこの状況を目の当たりにした時と同じように、威圧感たっぷりの仁王立ちを披露しながら、「こーほー、こーほー」という、怖すぎる呼吸音を口から発している。

「……」

お前はいつからロボ超人になったんだ。

そう思わずにはいられないアツロウだった。

次に、こりゃあ今のコイツに何を聞いても無駄だな、とも思ったアツロウは、相変わらず地面でのびている淳（だった物体）に声をかける事にする。

「……お～い、ジュン。ジュン君や～い」

「……」

＞返事がない、ただの屍のようだ。

「……おいってば、早く起きろっての。どうして、俺が知らぬ間にあのソデコがラ〇ウみたいになっちゃったのか、とっとと説明しろって」

「……」

＞返事がない、ただの屍のようだ。

「……ジュン、すぐ近くに、かなり露出度の高いメイド服を着たアイギスさんがいるぞ」

「何ですとーーっ!?」

＞ジュンは生き返った！

「ど、どこだ!?　およそ三日ぶりとなる、『姉(アイギス)さんのメイド服』ということこの世の奇跡は、今どこに――――――って、ぎゃあああ!?　ゆ、ユズさん!!」

「……？　『ユズさん』？」

彼が目覚めたのを見て、その身に漲(みなぎ)らせているより威圧感をより一層強めるユズを見て、どういう訳か、極度に怯えた反応をとる淳に、「？」と小首を傾げるアツロウ。

「なぁオイ、ソデコ。マジで何があったんだ？」

そんなアツロウの声には「いい加減、ちゃんと説明しろ」と言いたげな、どこかイライラしたような響きがあった。

まさかそんな彼に気圧(けお)された訳でもないだろうが、それでもユズは、極めて冷たい表情をアツロウへと向けると、

「別に。いきなり寝込みを襲ってきた痴漢（どっかのおバカさん）を撃退しただけよ」

「え……？　そ、それって、レイプされかけたって事か！？　マジかよクソ！　確かに、ショウジさんは今日辺りから暴動が始まるとかって言ってたけど、まさか、こんな朝早くからそんなバカが現れるだなんて……っ！」

まさかその痴漢の正体が、現在、ユズの視線から逃れるように、アツロウの背後に隠れてガタガタと震えている淳であるとは知らずに、極めてシリアスな表情で頭を抱えながら、アツロウは言う。

しかし、いくらかの時間が経過した事で、その身に染み込んだ恐怖が大分薄れてきたのか、淳は次のように言った。

「……な、なんだよなんだよ！　だ、黙って聞いてればサ！　さっきも言ったけど、最初に抱き着いてたのはユズの方なんだからな！　つ、つまり！　さっきのは紛れも無く不慮の事故であり不可抗力であったというか！　だから、どっちかっていうとレイプされたのは俺の方であって、つまり逆レイ――」

直後。

その言葉を聞いて顔を真っ赤にさせた谷川柚子は、両目からビッカアァ！　と、本当にロボ超人ような閃光を放つと、そのまま背後にダースベ〇ダーのＢＧＭを響かせて、ゆらりと有里淳へと迫って行った。

◆　◆

それより数分後。

「とりあえず、コレを見てくれ」

そう言ってアツロウが差し出したのは、メール画面を開いたままの彼のＣＯＭＰだった。

それを見た淳とユズは、思わずため息をつかずにはいられなかった。そこに何が映っているのか、容易に想像がついたからだ。

「分かってると思うけど、今日のラプラスメールだ……。俺が起きた時には、もう届いてた。お前らが突然、ヤンキー漫画顔負けのバトルを始めたから、さっきは見せそびれたけどな」

淳に言わせれば、それは決して戦いと呼べるようなものではなく、ただただユズが彼に一方的な攻撃を見舞わせるだけの、超過激なＳＭプレイといった感じだったのだが、アツロウから差し出されたＣＯＭＰの画面に映し出されている内容に意識を奪われているが為に、そう突っ込む余裕はなかった。

そこには、次のように書かれていた。

『ＦＲＯＭ：時の観測者
ＳＵＢＪＥＣＴ：ラプラスメール
＞おハハようごザいママす。
本日のニュースをお伝えしママすす。
？十八時頃　港区青山　青山霊園　不死の者　【ベル・デル】　の
復活　犠牲者　は　三百名　以上
みなサママ良■一日ヲ』

「何……これ……三百名って……そんな……！」

メールの内容に、ザッと目を通したユズが最初に見せた反応がこれだ。

そのせいか、どうやら先程までのちょっとしたトラブルによる怒りは、完全にどこかへと吹き飛んでしまったらしく、今は、隣にいる淳の服の裾を無意識に掴んでさえいた。

「ベル・デル、か……ついに来た、って感じだな……！　いよいよ、ラスボスの登場って訳だ」

淳が言う。

「ああ……悪魔の親玉だ。場所は青山霊園。覚えておいて損はないだろうな」

アツロウの表情もまた、淳やユズと同じく、まるで苦虫を噛み潰したかのようになっていた。

「確かコイツ、『不死身』とかっていう、チート的な能力を備えてるんじゃなかったっけ？」

「なかったっけ？」と言いつつも、淳はしっかりとその事を覚えていた。昨日出会った全ての悪魔達が、耳にタコが出来るほどそう言っていたとあれば、忘れろという方が無理だ。

「うん……少なくとも、悪魔はそう言ってたよね。どうすればいいんだろう……」

と、ユズ。

「どうするも何も……」

何か考え込んでいる時のいつもの癖で、白いニット帽の上から頭をガシガシと掻きながら、アツロウは、

「……出来ることなら、やっぱ戦いたくはないよな。とにかく、夕方までに山手線を出る方法を探そう。俺達には、時間がないんだからな……」

と言った。全員の頭上に浮かんでいる余命表示が『0』である事を思い出したユズは、すぐにその言葉の意味を理解する。

「……うん。絶対、死にたくないよ。早く逃げよう？」

と、ユズが言ったその時だった。淳の耳が、すぐ近くに、自分達以外の人物がゆっくりと近付いてくる音を聞き取ったのは。

まさか悪魔かと思い、すぐさま体の緊張感を高めながら、淳がその方向へ体を向けると、そこには――

「あ、ごめんね……。話し中だったかな？」

と、申し訳なさそうな顔をしている高城圭介（たかしろけいすけ）の姿があった。

高城圭介。

通称ケイスケ。

アツロウの中学時代の友人。

彼の姿を見て、最初に言葉を発したのはユズだった。

「……あ、ケイスケ君。どうしたの？」

「実は、君達を探してたんだ」

まさか、こんな早くに見つけられるとは思わなかったけど、と言いながら、右の人差し指で頬を掻くケイスケ。

「……？　俺達を？　何かあったのか？」

口ではそう言いつつも、しかし淳には何となく、何故、ケイスケ

がこんな朝早くに自分達の元を尋ねてきたのか、その理由に薄々感づいていた。

「……うん。ちょっと困ったことになったんだ。その、ミドリちゃんの事なんだけど……。彼女にＣＯＭＰを持たせたのは、失敗だったかもしれない……」

「え？　ど、どういう事？」

目をパチクリさせながら、ユズが言う。

「実はあの後、彼女はＣＯＭＰを使って、人助けをするって言い始めたんだ。……君達はきっと、彼女が悪魔から身を守れるようにと思って、ＣＯＭＰを渡したんだろうけど……」

厳密には渡したんじゃなく、いきなり横から奪われたんだけどな――という突っ込みは心の中だけにしておき、淳は、別の言葉を口にする。

「……もしかして、余命が減ったのか？」

今、淳の脳裏に浮かんでいるのは、昨日、ドーム球場前の道を元気に走っていたミドリの姿だ。あの時、彼女の頭上に浮かんでいた余命は、それ以前のものと比べると、確かに――

「やっぱり……君も気づいてたんだね」

ケイスケが言う。

「そう……人助けをするって言い始めてから、彼女の余命が……減

ったんだ」

「え、えぇっ……？」

そんな驚きの声を上げるユズを見て、一度だけ頷くと、ケイスケは話を再開する。

「だから、ＣＯＭＰを手放すように言ったんだけど、全然聞き入れてくれないんだよ……」

「う～ん、それは困ったな……って、アレ？」

ふと、何かに気付いたかのような表情になるアツロウ。

「でも……それっておかしくないか？　だって、ミドリちゃんは誰ともグループを組んでないんだろ？　だったら、自分の余命だって、バッチリ見えてる筈じゃ……」

しかし、彼の隣にいる淳が、アツロウの台詞の上から被せる形で、次のように言った。

「そうか？　俺には何となく分かるような気がするけどな」

「……？　どういう事だ？」

「俺達の頭上に、初めて余命が見えた時の事を覚えてるか？　あの時、俺は二人の頭の上に変な数字が見えるって言ったけど、お前らには――俺も含めて――その数字が何を意味するのか、サッパリ分からなかっただろ？　それと一緒だ。小牧ちゃんはきっと、頭の上にあるこれが――（淳は、頭上にある余命表示を、指で指し示した）

――自分の余命だなんて、まったく気づいていないんだと思う」

「ああ、なるほど」とアツロウが納得した面持ちで頷くのに合わせて、ケイスケもまた、「そうなんだよ……」と言う。

「それでも、僕も僕なりに、何とか説明しようとしたんだ……けど、彼女は全然聞き入れてくれなくて……。このままじゃ、明日には彼女が死んでしまう」

そう話すケイスケの表情には、彼が本当に、ミドリの身を心配している色があった。

それを見た淳は、普通なら、ここは自分も彼と同じようにミドリの事を気に掛ける場面であるとは分かっていても、昨日会ったばかりの人間に対して、そこまで親身になれるケイスケの人柄に感心せずにはいられなかった。

それが、時間が経てば、いとも簡単に我を失ってもおかしくない、今の『東京封鎖』という状況の中にあってとあれば尚のことだ。

「――だから僕は君たちに、何とかして彼女を説得するのに、手を貸して欲しいんだ……」

ケイスケが言う。

正面にいる、淳の目をまっすぐに見つめながら。

「どうする……ジュン、決めてあげてよ」

「ユズ……」

淳は、隣にいるユズの顔を見た。

一体、彼女はその言葉を、どのような気持ちで口にしたのだろう――と、そう思いながら。

今もまだ頭上にある余命表示を見ればわかるように、あと一日もしない内に、自分たちは死んでしまう――いや、厳密にはそれは、ハッキリと確定した未来ではないのだが、少なくとも、そうなる確率が限りなく高いのは確かだ。

もし、ここで自分たちがケイスケの申し出を受けて、ミドリの救出に手を貸したならば、その事に時間を奪われて、自分たちの余命のリミットが現実のものになってしまう確率も、より一層高くなる。

かと言って、まさかミドリを見捨てるわけには……。

「……」

自分一人で決めていい問題ではない、と結論づけた淳は、ユズの目を見つめたまま、言った。

「……助けてあげてもいいか？」

言いながら淳は、自分の事を最低だと思った。こんな言い方をすればユズが何と返すか、自分には容易に想像がついているというのに……。

案の定、彼女は、

「……気にしてくれてありがと。でも、いいよ。やっぱり、自分たちのために友達を見捨てるとか、何か違う気がするし、助けてあげよう？」

と言う。

彼女の言葉を聞いたケイスケはというと、何とも奇妙な表情をしていた。まるで、ホッと安心しきった態度を表に出さないよう、必死で堪えているかのようだった。

「……ありがとう。キミたちと知り合えて、本当に良かった。じゃあ改めて、僕のＣＯＭＰを君たちのグループに登録するよ。これで、僕は晴れて君たちの一員だ……」

「ああ――って、いや、ちょっと待てケイスケ、本当にいいのか？」

うっかり、彼を黙って自分たちのグループに加入させそうなった淳は、突然、頭の中を『ある事柄』が横切ったので、そのように尋ねた。

「……え？　どういう意味？」

しかしケイスケには、そんな淳の言葉の意味をよく理解できなかったようだ。怪訝な表情をしながら、小さく首を傾げている。

「ジュンが言ってるのは、余命のことだよ……。お前には、俺たちの余命が見えてるんだろ……？」

アツロウが言う。

まるで臨終の床についている知り合いを見つめるかのような様子の彼ではあったが――しかしケイスケの方はと言うと、それとは逆に、何とも拍子抜けだとでも言いたげな表情をしていた。

「ああ……なんだ、そんなことかい？」

「なっ……！　そんなことじゃねぇよ！　下手すれば、俺たちは今日死んじまうかもしれないんだぞ！？　それなのにお前……！」

「……」

アツロウの言葉に、何か思うところでもあったのか――しばらくの間、ケイスケは口を閉ざしていたが、やがて彼は、何か決心したのか、次のように言った。

「……変だよね、一度は逃げ出した僕が、君たちと運命を共にするんだ……。でも、分かったんだ」

「……？　分かったって？」

小さく首を傾げながら、淳が言う。

「君たちの強さ、かな……。本当に生きたいって気持ち、そして、他の人を助けたいっていう想い……。そんなものもなく、ただ逃げ回るより、僕は――ちゃんと生きたいんだ」

「ちゃんとって……」

淳としては、まさか自分たちがしてきた事が、そこまでの評価を受けるに値するものだとは思っていなかったので、何とも歯がゆい

気持ちだった。

アツロウにしても同じらしく、「ケイスケ……」と、何かを言いたそうな表情をしている。

やがて、ケイスケの頭上にある余命表示が、今となってはすっかり聞きなれた電子音と共に、『4』から『0』へと変わった。『0』とは言うまでもなく、淳達と同じ余命である。これはつまり――

「……さ、これで僕も、晴れて君たちの仲間だ。よろしく頼むよ、有里君」

そう話すケイスケの表情は穏やかなものだったが、その裏に揺るぎない覚悟の炎が激しく燃え盛っているのが、淳にはわかるような気がした。

ならば、これ以上は何も言うまい――ここで、さらにケイスケの事を気にかけるような言葉を投げかけるのは、彼の覚悟を侮辱することになる。だからこそ、淳はあえて、

「……足を引っ張らないでくれよ?」

と、どこかからかうような口調で、そう言ったのだ。

「あははは……。うん、役に立てるように頑張るよ」

そしてケイスケは、頭上にある――今の彼には、すでに見えていないだろうが――余命表示へと目を向ける。

「……余命表示が消えた。やっぱりだ」

「ああ、余命表示機能は、所属するグループのホストリーダーにしか見えないらしんだ……」

同じように、何も見えていないはずの自分の頭上へと視線を向けながら、アツロウが言う。

「うん……僕も聞いたことはあるよ。でも、実際に見たのは初めてだから……。さすがに君たちは詳しいね、『死の運命』を何度も乗り越えてきただけはあるよ」

「出来ることなら、そんな運命に遭遇すること自体、もうこりごりなんだけどな……。何より、今日もまた、余命は『0』だし……」

心の底からそう思っている様子で、淳が言う。

「あはは……僕も頑張るよ。絶対に生きて、ミドリちゃんを助けてみせる」

「うん、そうだね……。あ、そういえば、ミドリちゃんの余命が減ったって言ってたけど、具体的には、いくつになったの？」

ユズが言う。

「うん……ミドリちゃんが人助けをするって言い出した途端、だったかな……。突然、彼女の余命が『2』になったんだ」

淳は、何やら欠伸（あくび）を必死で我慢しているらしい様子で、

「となると、今頃は『1』になってる訳だ。ま、さっきまでの話を

聞いた限りじゃ、あの子は気づいてないんだろうけど……」

あのじゃじゃ馬が……と言って、その台詞を締めくくった淳だったが、あまりにも小さい声だったので、その言葉は誰にも聞こえなかった。

「……ま、出来ることはするさ。任せてくれ」

「うん……ありがとう、有里君」

そんな二人の会話を聞きながら、いつの間にか蚊帳の外にいたユズは、二人の顔を交互に見た後、

「うん……でも、まずは私たちの今日だよ。自分たちが死んじゃったら、明日のミドリちゃんも救えないんだからね」

「ああ、うん、勿論、それはわかってる」

慌てたように、顔の前で手を振るケイスケ。

「だからとりあえずは、僕らが今日生き残ることを最優先にしよう。でも、ミドリちゃんを見かけたら、説得するのだけは忘れないでほしい」

「だな。早くに気持ちが変われば、それが余命の延長に繋がるかもしれない」

そのようにして、ケイスケの台詞を後半から代弁していたアツロウだったが、突然、いつもユズをからかっている時のような壮絶なニヤニヤ笑いを浮かべると、続けて、次のように言った。

「――ところでさ、ケイスケ？　オマエ、なんでそんなにあの子にこだわるんだ？　もしかして……ははぁ、そういう事？」

途端に、顔を真っ赤にさせるという、普段の彼らしくもないリアクションを取るケイスケ。

「ち、違うよ！　ただ……その……僕は……」

「ただ？　その？　……なんだよ？　にっひっひっひ♪」

完全に酔っぱらったオヤジモードのアツロウ。それを見た淳は、さも「やれやれ、仕方ねぇなあ」とでも言いたげな表情をすると、

「おいおい、変なことを言うのはやめてやれよ、アツロウ。ケイスケは何も、そういう理由で小牧ちゃんを助けようとしてる訳じゃない」

と言った。

「ジ、ジュン君……」

やっぱり、君なら分かってくれるよね……！　と、感謝に満ちた視線を淳へと向けるケイスケ。今ここに、新たな友情が芽生えようしていた――のだが、

まるで聖母のような、慈愛に満ちた視線をケイスケに向けながら、淳はこう言った。

「ケイスケは小牧ちゃんが好きなんじゃない……あの魔女っ娘のコ

スプレが好きなんだろ？」

「絶対に違う！！」

ああ、やはり真の友情とは、そう簡単には築かれないものなのか……。目頭を熱くしながらそんなことを考えるケイスケだったが、どうやら、先ほどの否定の言葉は淳の耳には届かなったらしく、続けて彼は、

「いや、気持ちは分かるぜケイスケ。かくいう俺も、女性のコスプレという名の魔力の虜になった人間の一人だからな……。なんとなれば、よく家に来る金髪碧眼の美人お姉さんに、ちょくちょくメイド服を着せてしまうほどのなっ！！」

カッ！　と目を見開きながらそう得意げに話す淳に対して、思わずたじろぐケイスケ。

「き、金髪碧眼の美人お姉さんに、なおかつメイド服だって……？　バ、バカな……一体、君の家はどうなっているんだ……？」

「ふっふっふ、恐れ入ったかケイスケ。だが安心しろ。『魔女っ娘』というのも、メイド服に負けず劣らずの歴史を持つ、崇高なるコスプレの一つだ。お前の（魔女っ娘の衣装に対する）恋心を、俺は応援してるぜ」

「いやだから違うって！　そんなんじゃないって！　少しはこっちの話を聞いてよジュン君！」

「バカ野郎！！　自分の本心から目を逸らすんじゃねえ！　お前はそれでも男か！　まあ理想はさっき言った俺の姉（アイギス）さんみたいに、自

分の前でのみそのコスプレを披露してくれるような間柄になることだけどな……。だがしかし！　何事もまずは最初の一歩が肝心！　さあ、早く自分の本音に気づきたまえよケイスケ君っっ！！」

「どうして魔女っ娘のコスプレに欲情することが、立派な男になるための通過儀礼みたいになってるの！？　そんなこと初めて聞いたよ僕！」

「いや、ていうかさ、ジュン」

突然、横合いから話しかけてくるアツロウに対して「あん？」と反応する淳。そこより少し離れた場所で、そんな男共を冷たい瞳でユズが眺めていることに、一体誰が気づいただろうか。

見れば、何故かアツロウは、淳を労わるような……むしろ同情するかのような視線を、彼に向けているではないか。そんな彼の態度に何とも言えぬ不吉な予感をヒシヒシと肌で感じながら、淳は改めて、

「な、なんだよ、どうしたっていうんだよ？」

と、アツロウに聞いた。

「その……この事をお前に教えるのは、非常に忍びないんだが……」

アツロウはゴクリ、と一度だけ唾を飲み込むと、

「……アイギスさんはな、誰の前でもメイド服を着てるぞ」

な、なんですってえええぇぇっ！？　と、顔を真っ白にさせて、背

後に雷が落ちる効果を演出しながら、少女マンガのような驚き方をする淳。

「バ、バカな！　そんな訳がねぇ！！　ね、姉（アイギス）さんは、俺の前だけでしかメイド服を着ない筈なんだ！　お、俺以外の男の前で、メイド姿になるだなんて、そ、そんな事は……っ！！」

そのように、完全にショックで我を失っていると思われる淳に、相変わらず申し訳なさそうな表情のまま、さらに追い打ちをかけるアツロウ。

「……だって、一か月くらい前に、『いつも、ジュン君と仲良くしてくれてありがとうであります』とか言いながら俺の家に訪ねてきた時も、普通にメイド服だったし……」

次には、今までそんなくだらない（バカすぎる）会話を黙って聞いていたユズが、

「そういえば、前にデパートですれ違った時も、何故かメイド服だったよあの人（？）。そのせいで、かなり目立ってたけどね」

と言う。

「……」

淳は、（彼にとっては）あまりにも衝撃的な二人の発言を聞いて、丸々一分間ぐらいの沈黙を保った後、

「そ、．．。；@９７@そんな４－；¥；ｌｌ－馬鹿なｖｄっっ！！」

と、これ以上なく混乱し始めた。

「うわあーっ!?　やっぱりこうなったか畜生！　相変わらず、あの人（？）と母親の事になると人格変わるよなお前！」

言いながらも、決死の覚悟でジタバタ暴れる淳を羽交い絞めにするアツロウ。果たしてこの時、彼は淳の親友になったことを後悔しているのか否か……、それは、彼のみぞ知ることである。

「と、とにかくっ！」

ここまでの変（アホ）なムードをバッサリ断ち切るかのように、そう声を発したのはケイスケだ。

「僕は昨日、ミドリちゃんがＣＯＭＰを持つことを、阻止しようとしなかった。それどころか、彼女に言われるがまま、ＣＯＭＰの使い方を教えてしまったことで、彼女の余命を減らしてしまったんだ」

奥歯を噛みしめながら――脳裏によみがえる自分の失態を思い出しながら話すケイスケを見て、それまでぎゃーぎゃー騒いでいた淳とアツロウは、ピタリとその動きを止めた。

「僕は、彼女を助けたかった……。でもこのままじゃ、そんな僕のせいで、彼女を殺してしまうことになる……！」

「そう、か……」

アツロウが言う。

「……ま、お前らしいって言えば、お前らしい理由なのかもな！」

彼は――アツロウは、安心していた。

昨日まで彼は、今の親友（ケイスケ）は、中学時代の親友（ケイスケ）とは違うのではないかと危惧していたのだ。

だが、それは全くの杞憂だった。

やはり――自分の親友（ケイスケ）は、昔のままの親友（ケイスケ）だったのだ。

それを確信したアツロウは、胸の内から溢れてしまいそうな程の嬉しさを紛らわす為に、体の前でパン！　と両手を打ち鳴らすと、次のように言う。

「さて……それじゃ、行動開始だ！　ジュン、どうすんだ？」

既に先の会話でのダメージからは完全に回復したのか、淳は、一度力強く頷くと、

「やっぱ、十八時までに脱出経路を確保するのが先決だろ。その間に小牧ちゃんを説得できればベストだけど、まずは前者の方を優先して行動しようぜ」

と言う。

「ああ、そうだな。ベル・デルって奴がよみがえるまでに、出口を探して……。出来ればミドリちゃんや、他の奴らも探して、封鎖から出てやろうぜ！」

アツロウの宣言を受けて、改めて、今日自分たちが何をするべきかを再確認した淳達は、宮下公園の出口に向けて、力強く足を踏み

出した。

3rd Day『ホンダの正体』

しかし。

そんな風に確固たる意志を持って、力強い一歩を踏み出した有里淳一行ではあったが――宮下公園の出口へと続く階段を下りたところで、唐突に、その足を止める事になる。

そこで、見知った人物に出会ったからだ。

「……やぁ、君たち」

そんな、どこか疲れ切った様子の声を発したのは、一人の壮年の男だった。

全員が私服である淳達とは違い、汚れの少ない灰色のスーツをキッチリと着こなし、やや茶色がかった髪をオールバックにしているその男の名は――

「ホンダさん……無事だったんですね」

今日は何だか、朝っぱらから立て続けにいろんな人たちに会うなぁ、と思いながら、淳が言う。

ちなみに、彼の後ろの方では、ケイスケとアツロウが、

（……ねえ、アツロウ。この人は一体……？）

（あ、そうか、ケイスケは知らないんだっけか。この人は本多保行（ほんだやすゆき）さんって言ってな。俺たちと同じ悪魔使いの一人なんだ）

（あ、そうなんだ。へぇ……僕、君たちやミドリちゃん以外の悪魔使いを見たのは、これが初めてかもしれない）

（え？　そうなの？　俺たちなんかは、割と頻繁に会ってるけど……）

などと、ほとんど唇を動かさずに、ボソボソと話し合っていた。

そんな二人には気づかない様子で、淳は、

「ところで、カイドーの奴はどうしたんですか？　そういえばこの前、秋葉原で見た時も一緒にはいませんでしたけど……」

と言う。

「ああ、彼とは今は別行動中だよ。ま、その内にどこかでパッタリ会えるだろうさ」

「ふぅん……」

やっぱりこの人とカイドーって、ただ仲がいいから一緒に行動してるって訳じゃなさそうだな、と淳は思った。

「……彼は強い。恐らく、現在の封鎖内では、ダントツにね」

唐突に、ホンダはそんな事を言う。その、現在の封鎖内ではダントツに強い筈のカイドーが、昨晩、たった一匹の悪魔に敗北したと

も知らずに。

「だからこそ、彼と一緒にいれば、生きのびる可能性もグンと上がるだろう。……君たちも、友達同士で行動しているなら、頼れる人と一緒にいる心強さはわかるだろう？」

「……？　それって、ホンダさんにとって、カイドーは友達ってことですか……？」

疑問に思った淳が小首を傾げながらそう尋ねると、ホンダは一度「フフフ……」と、何やら小さく笑うと、次のように言う。

「友達というよりは、共闘する仲間かな？　少なくとも彼の好戦的な性格が、今の状況に向いていることは事実だ」

と、その時だった。淳の後ろにいるアツロウが、彼の服をクイックイッと引っ張ったのは。

「？」

怪訝な表情で淳がアツロウの方に顔を向けると、アツロウは、

「ジュン、ちょっといいか？」

と、彼にしか聞こえない程度の声で呟きながら、淳の前に進み出て、ホンダの正面に立つと、次のように言う。

「……ところでホンダさん」

「ん？」

後ろの方で、今度は淳とユズが『おい、いきなりどうしたんだコイツ』『さあ……？』とヒソヒソ話していることに気づかないまま、何やら言葉を選ぶように、アツロウは言う。

「その……ホンダさんって、封鎖に巻き込まれる前までは、一体何をしてた人なんですか？」

「……私かい？　私は、ただのしがない会社員だよ」

アツロウの質問に対して、薄く笑いながらそう答えるホンダ。しかし、その表情からは、どこか作り物のような印象があった。

果たして、そのことに気付いたのかどうかは分からないが、アツロウは続けて、

「えっと……正直な話なんスけど、普通の会社員には見えないんスよ。ＣＯＭＰもすんなり使ってたし……、こういう状況なのに、事態に慌ててる感じもない」

と言う。そこで一旦言葉を切ると、アツロウは、今度はホンダの目を正面から見つめながら、再び口を開いた。

「……もしかしてホンダさん、封鎖が行われるって事を、事前に知ってたんじゃないスか？」

「……どうして、そう思うんだい？」

ホンダの顔には、もはや先ほどのような作り笑いは浮かんでいなかった。

その後ろの方で、再び淳とユズ、そして今度はそこにケイスケが加わった三人が『いけっ！　アツロウ！　じっちゃんの名にかけて、たった一つの真実を犯人に突き付けてやれ！』『ちょっとジュン！　今はふざけてる場合じゃないでしょ！　あとついでに言わせてもらうと、別にあの人は追い詰められた殺人犯って訳じゃないし！』『それにしても今のアツロウ、何だか、いつになく真剣な表情だね……』とボソボソ囁き合ってる事にはやはり気づかないまま、本当に名探偵のような態度で、ホンダに対して自分の考えを話していくアツロウ。

「トランシーバーっスよ……。昨日、秋葉原であった時に見ちまったんです。ホンダさん、俺たちに気づいた途端に、すぐ隠しちまいましたけど……」

「参ったな……、中々鋭いんだね……」

観念したようにそう呟くホンダだったが、しかし、口で言うほど追いつめられたという意識はないらしい。両手を軽く上げながら、おどけたような作り笑いを浮かべていることからも、それが伺える。

「お願いしますよ、ホンダさん。俺たちも情報が欲しいんです」

アツロウに任せっきりにするのは申し訳ないと思ったのか――そう言ったのは淳だ。

彼の言葉を受けて、ホンダは一旦、その場にいる全員の顔をグルッと見渡した後、

「フム……、ウソをついても仕方がない、か」

と言う。そして、一呼吸の間を置いたかと思うと、ようやくアツロウの問いに対する答えを述べ始めた。

「……実は私は、『とある企業』に雇われた者なんだよ」

「雇われた……？」

と、淳。

「ああ、クライアントのことは話せないんだが……ＣＯＭＰの事は、事前に知っていた」

「……その情報は、一体どこから出たんですか？」

そう言って、ここへきてようやく会話に入ってきたのは、先ほどまではユズと一緒に沈黙を保っていたケイスケだ。

「それは私の知るところじゃない。私の役目は、サンプルとして悪魔を持ち帰ることだからね」

するとホンダは、スーツのポケットから件のＣＯＭＰを取り出すと、淳達に見えるように掲げてみせる。

「君たちも知っての通り、悪魔は、人間をはるかに超えた力を持っている。当然、その研究を望む企業は多い。今も昔もね。そして私は、それによって得られる莫大な利益を得るための尖兵として、ここに送り込まれたという訳だ……」

ま、結果は見ての通りだがね――と、肩を竦めながら、ホンダは

言う。

一瞬、その結果がどうとかいう言葉の意味がわからなかった淳ではあったが、瞬時にその言葉の意味を理解すると、彼は、

「……ああ、侵入に成功したのはいいけど、そのせいで封鎖から出られなくなっちゃったんですね？」

と言った。

「……随分はっきりとものを言うんだね、君は」

ハアッ、と疲れたように息を吐くホンダ――否、実際に、彼は疲れているのだろう。たった今淳が言い放ったような台詞に対する感情とは、また別の理由で。

「だが……まぁ、その通りだ。アリ一匹通れない警戒網のせいで、外に出ることもできやしない……。だから、まずは生き残ること。それが何においても優先だね」

きっと、今のホンダの脳裏には、手術を目前に控える、彼の子供の姿があるのだろう、と淳には予測がついた。

事実、彼は、

「……早くここを出て、手術を待つ子供の元へ行くんだ」

と、誰にともなく――まるで、自分に言い聞かせるように呟いた。

「すまないね。キミたちを騙すつもりはなかったんだ……」

「いや、まあ、別に気にしてませんけど……」

淳が言う。確かに、最初の方こそ――アツロウがホンダを問い詰めている時こそ、彼に対して全く不信感を抱いていなかったと言えばそれは嘘になるが、今となっては、それよりも同情心の方が勝っていた。

やがてホンダは、

「それじゃ、私はこれで失礼する。何かいい情報があったら、是非教えてくれ」

と言うと、まるで通夜にでも行くような雰囲気をあたりに放ちながら、淳達の前から去って行った。

「ホンダさんって、ＣＯＭＰを狙ってたんだね……」

そんなホンダの後ろ姿を見つめながら、独り言のように呟くユズ。

「……ああ、企業に雇われたって言ってたな。その企業、どういうつもりで悪魔を欲しがってるんだろう……。いいこととは限らない……。正直、怖いよな……」

アツロウが言う。そんな彼に続く形で淳が、

「ま、何事も使う人次第だからな……。むしろ、悪魔の力を目の当たりにすれば、恐怖するのは勿論のこと、そういう事を考える奴が出てきて当然だよな。むしろ俺に言わせれば、今までそれに気づかなった俺たちの方がバカだったんじゃないの？　って感じだ」

と言った。

「確かに……悪魔の力があれば、戦争や犯罪だってやり放題だろうしね」

ケイスケが言う。

「そっちの方じゃなきゃいいけど……。あのホンダさんって人には悪いけど、僕としては、あの人の仕事が成功しないことを祈るよ」

「まったくだ……。ま、純粋に脱出したいってんなら、いくらでも協力するけどな」

そんな淳の言葉を最後に、その場にいる四人の周囲を、何とも気まずい沈黙が覆い尽くした。

その状態がおよそ十秒ほど経過したところで、とうとう重くなり続ける空気に耐え切れなくなったのか、話題を変えるための意味も含めて、ユズが次のように言った。

「あ～…えっと……って、ていうかさ！　アツロウ、良くホンダさんが隠し事してるって分かったね！」

「ん？　ああ」

何か別の考え事をしているのか、アツロウの返事はどこか上の空だった。

「普通の会社員がたまたまトランシーバーを常備してるって、やっ

ぱりかしいだろ？　まぁ本当に間違ってたら、その時は、マジで頭下げて謝るしかないかなー、とは思ってたけどさ！」

その言葉を聞いて、ズルッとギャグ漫画のようにズッコケたのは淳だ。

「おいおい……、じゃあお前、何か？　もし間違ってたら謝るつもりでカマをかけたってのかよ」

淳はなるべく咎めるような口調でそう言ったつもりだったのだが、直後にアツロウが面白おかしそうに「なははははっ……！」と笑ったところを見ると、もしかしたら、単に面白そうな顔をしてただけかもしれない。

「ま、そういう事になんのかな？　さ、気にしないで行こうぜ！」

こうして、淳、アツロウ、ユズ、ケイスケの四人は、今度こそ宮下公園を後にした。

◆

◆

2014

――バー『ＥＩＪＩ』

その店内で、四人の人間が慌ただしく動き回っていた。

まるで、何か予想だにしない事態が起きたかのように。

やがて、その内の一人――銀髪長身の男、セトが、近くにいる鋭い目つきの男性に尋ねる。

「どうだ？　いたか？」

「……ダメです。こっちにはいません」

そんな、現在、彼らがいるバー『ＥＩＪＩ』のマスター、神谷詠司（かみやえいじ）の言葉に反応したかのように、近くの通路から、一人の女性が現れた。

「こっちもダメ。一応、この店の中はくまなく捜したつもりだったんだけど…」

ショウジが言う。

「つか、決定的でしょコレ。まったく、あんなケガで出ていくだなんて……タダシ君ってば、一体何を考えてんのかな？」

そう言って、ショウジの向かいにある扉を開けて現れたのは、春沢芳野――通称ハルという女性だ。

ジン、ショウジ、ハルの報告を受けて、セトはあからさまにため息をついた。

それは、つい先程に起こったことで――最初に気づいたのはジン

だった。

今まで、四人が店内を忙しく動き回っていた原因である、一つの事態――二階堂征志（にかいどうただし）の失踪に気づいたのは。

二階堂征志――通称カイドー。

渋谷を拠点とする不良グループ、『ダイモンズ』のリーダー。

今朝一番に起きた、セトとショウジとの間で起きたちょっとしたトラブルを聞きつけたジンが、二人の元へ駆けつけた結果、実はそれがまったくもってくだらない理由によって引き起こされたものであることに気づき、半ば呆れ気味に、今まで睡眠をとっていた部屋へと戻ろうとしたところで――彼は、いつの間にか、カイドーがいなくなっている事に気づいた。

まあ、ジンはカイドーと同じ部屋で寝ていたので、彼が突然姿を消したことに、まず一番最初に気づくのがジンであるというには、当然の理（ことわり）なのだが――重要なのは、ジンがショウジ達が騒いでる場所へ向かおうとした時には、カイドーはまだ、確かにそこにいた筈だという事だ。

最初はトイレか何かだと思ったジンだったが――どこからか調達してきた食料を元に、意外な家庭的（おかん）スキルを発動したセトが、簡単な朝食を作り始めた頃になっても、まだ彼の姿が見えないので、不審になって少し店内を歩きまわった結果、ようやく彼の失踪に気づいたという運びに相成ったである。

「まぁ……体の方の怪我は、俺が回復魔法をかけておいたし、一応は大丈夫だと思うけど……」

「けど……何？」

セトの言葉に、眉をひそめるショウジ。

「アイツの場合、むしろ精神的ダメージの方が心配だな……。アイツがどうして、あんな深手を負ったかは知ってるだろ？」

「ああ……確か、昨日一人で歩いていたところを突然、あの蟻ともライオンともつかぬ悪魔に襲われた……でしたっけ？」

昨晩、それこそ文字通りに、自分が命がけで戦った悪魔――妖虫『ミルメコレオ』の姿を思い出しながら、ジンが言う。

「そ、まあ、普通だったら、その時のショックが落ち着くまで安静にさせてやればそれで終わりなんだけど……アイツの場合はそうはいかない。アイツが今抱いてる感情は、『恐怖』よりも、むしろ『怒り』の方に近いはずだ」

「確かに…」

そう言ったのはハルだ。

「あの子の事だから、きっと、その悪魔を見つけ出してリベンジするだろうね。ジンがもうその何とかって悪魔を倒したことを、昨日ずっと気絶してたあの子は知らないだろうし」

「だろ？　……そして、だからこそマズイ」

「……？　何が？」

一旦、ハルの方に向き直ると、セトは、

「今のカイドーの状態だよ……。と言っても、体の方じゃねえぞ。俺が言ってるのは、相も変わらず『心』の方だ」

と言う。

「『心』…ですか」

何やら意味深な様子で頷くジン。

「今まで『こっちの世界』にいなかったお前らには、イマイチ分からないかもしれないが――簡単に言うと、今のアイツはちょっと……いや、かなり自暴自棄な状態にある」

セトは一旦、そこで言葉を区切り、ジンとハルの顔を交互に見ると次のように言った。

「……ところで、ジン君もハルちゃんも、アイツが『連続吸血事件』被害者の弟だってことは知ってるか？」

『連続吸血事件』。

体からすべての血を抜き取られた死体が立て続けに発見されているという、極めて残酷な――半年ほど前から発生している事件。

被害者たちの首筋には、決まって何かに噛まれたかのような小さな傷があるため、そのように呼ばれてる。

セトの問いを受けると、ジンとハルは、ほぼ同時に頷いた。

それを見てセトは、

「ああ、やっぱり二人には話してたのか。てっきりアイツの事だから、親しい連中にさえ、そういう弱音は吐かないと思ってたけど……。『ダイモンズ』の連中にも話してないみたいだしな」

と言う。

しかし、その解釈にはわずかに誤りがあるのか、懐から煙草の箱を取り出し、それをトントンと叩きながら、ジンは次のように言った。

「いえ、その予想は当たってますよ。アイツは確かに、そういった事は俺たちに話してません」

「……？　……ということは、調べたのか？」

その質問には、ジンではなくハルが答えた。

「いや、ここからタダシ君の家はそれなりに近いし、何より、言うまでもなくその事件はかなり有名だから、彼のお兄さんが被害に遭ったって事は、嫌でも耳に入ったんだ。……ていうか、それが今回の事件と、何か関係があるの？」

セリフを言い終わる頃になると、ハルは首を傾げていた。

「大アリだよ。アイツが悪魔使いになったのは一重に、そのクソッタレな犯人に復讐するためだからな」

言いつつ、セトはジンの手から煙草の箱をもぎ取ると、自分もそこから一本取り出し、それを口に加えた。

「……そして、そんな目に遭ったからこそ、アイツは『力』を求めてる。しかも、かなり貪欲にな」

口に加えた煙草の先に、セトが指を近づけると、途端に、その指にボッと小さな炎が点り、煙草に火がついた。

「さて問題だ。そのように力を求めまくってらっしゃったカイドー君ですが、そんな彼が一度でも悪魔にボコボコにされたら、彼はその後どういった行動に出るでしょう？」

「……」

四人が今集結している、決して広いとは言えない廊下を、つかの間の沈黙が支配する。その間、セトとジンがくわえた煙草に火が点っているジジッ…、という音が、四人にはやけに大きく響いて聞こえた。

「そう……ですね。もし俺だったら……たとえどんな事をしてでも、さらに強力な『力』を求めようとするでしょうね」

そう言ったのはジンだ。

もしかしたら――この時の彼には、カイドーの気持ちが、痛いほどよく理解できたのかもしれない。

それは、カイドーとは昔からの付き合いであるとか、そういう事

ではなく――彼もまた、『アヤ』という昔の恋人の情報を探る為、同じように、必死で『力』を求めているからという、そんな理由で。

「それって、ＣＯＭＰ以上の力って事……？　そんなのあるのかしら？」

ショウジが言う。

「まぁ、ＣＯＭＰを超える力の存在の有無はともかく――そうだな、俺もジン君と同じ意見だ。ある一つの信念を持ってる人間が、これ以上ない挫折を味わった時、その後にソイツが辿る道は大きく分けて二つだ。すっぱりとその信念に見切りをつけるか……」

「その悔しさをバネにして、より強い自分になる為に、くじけずに立ち上がるか……」

「そ、ショウジちゃんも中々分かってるじゃねえか」

セトは、一度満足そうに、ショウジに向かって頷くと、

「――けどアイツの信念は、『身内の敵討ち』っつー、中々に壮絶なもんだ」

と言う。

「ま、ここまで言えばだいたい分かるだろ？　要するに、今のアイツなら『力』を手に入れる為になら、なんでもするに違いない、って事だ――それこそ、文字通りの意味で、だ」

「……とりあえず、今のタダシ君が、ちょっと……いや、かなり危

険な状態にあるってことは分かったよ」

両手を軽く上げて、お手上げのポーズをとりながら、ハルが言う。

「もっとも、アタシに言わせりゃ、それほど長い付き合いでもないのに、そこまであの子の事を分かってるアンタの方に驚きだけどね」

ハハハ、と小さく笑うセト。

「ま、そこは伊達に、お前らよりも十年近く長く生きてはいないってトコかな？　自分で言うのもアレだけど、人を見る目には、それなりに自信がある」

「……いや、ていうか、結局どうするの？」

セトの顔を見ながら、怪訝な表情でそう尋ねたのはショウジだ。

「普通ならここで、彼が無茶しないように説得するのが、大人である私たちの義務なんでしょうけど……。話を聞いてる限り、とても、今のあの子――カイドー君が、私たちの言う事を素直に聞くとは思えないんだけど」

「同感ですね」

と、ジンが言う。

「むしろ、下手に宥めようとすれば、最悪、逆ギレされて、こっちが攻撃される可能性もありますよ」

そう話すジンを、ショウジやハルといった女性たちは「冗談でし

ょ？」という目で見たが、残念なことに、彼の表情は真剣そのものだった。

そして――セトもまた、ジンと同じような真剣な顔つきで、次のように言う。

「ま、そうだろうな……。だからこそ、俺たちが取るべき行動は一つだ」

それでも。

彼は、セトという男は、先程、ジンが言ったような危険などは顧（かえり）みずに、あの子を説得しようとするのだろうなと、ショウジなどはそう思ったのだが――しかし、次にセトの口から放たれた言葉は、それとはまったく別のものだった。

「……放っておけ。一つの事にしか目がいってないバカに構ってられる程、こっちだって暇じゃないんだからな」

それは。

少なくとも、十七年前までの彼なら――まだ、八十神高校の生徒として、その時に発生していた連続殺人事件を解決しようとしていた頃の彼ならば、およそ考えられないような台詞だった。

2024

3rd Day『ショウジと情報交換』

「あ、君たち……まだいたの？　赤坂のトンネルから、もう脱出したのかと思ってたわ」

と。

神田の方にある古書店街にて、偶然、有里淳（ありさとじゅん）と、その友人達に出会った東海林――通称ショウジは、淳達の顔を見るなり、そう切り出してきた。

「えっ……？　あ、え～と……」

そんな彼女に対して、そのようにアツロウが戸惑っているのは、突然、何の前触れもなく、ショウジと再会したから――ではないだろう。

いや、勿論、それもあるのだろうが――何よりもまず、先のショウジの質問にどのように返していいのか、見当がつかなかったのだ。

だからこそだろう――結局彼は、

「なんというか、まぁ……それが……その、な、なぁ？　ジュン」

と、これまた何の前触れもなしに、ショウジの質問に答えるという役割を、隣にいる淳に丸投げした。

しかし、何と答えればよいのか分からないのは、淳も同じである。

事実、淳は「はっ!?」と、分かりやすいぐらいにギョッとした反応を見せた。

（オイちょっと待てコラ！　どうしてそこで俺に振るんですか貴様は!?）

殆ど唇を動かさないまま、アツロウに聞こえる程度の声で、淳が言う。

（うるせえ！　たまにはいいだろ！　いつもは俺ばっかりが説明役を買って出てやってるんだからさ!）

（知るかそんなの！　別に俺らが強制させた訳じゃねぇし！　つーかどうすんだよオイ！　俺は一体、ここで何と答えればいいんだぁ!?）

（それこそ知らねぇよ！　つか、それが分からないから、こうしてお前にバトンタッチしたんじゃん!）

（あーもうこの子はーーっ！　少しは後先考えろバカ!）

（はぁ!?　お前がバカだバカ!）

「えーと……」

いつの間にか二人だけの世界に入って、静かなる激闘（ただのくちゲンカ）を繰り広げている二人に対して、何と対応していいのか分からず、途方に暮れるショウジ。

すると、そんな彼女の様子に気づいた淳は、アツロウのニット帽を乱暴に引っ掴んだまま、ハッ、とたった今その存在に気づいたかのように、ショウジの方に顔を向けると、次のように言った。

「え、えとあのその……赤坂のトンネルの方も封鎖されてましたヨ！？」

それを聞いたジョウジは、片方の眉を吊り上げると、

「そんなところまで封鎖を？　それは困ったわね……。でも、逆に言えばそれは、あのトンネルが封鎖の外に繋がっているという証拠でもあるわね」

「あ、あはは……」

ついでに言わせてもらいますと、そこには悪魔という常識では考えられない怪物がわんさかいて、俺らは危うく殺されかけましたけどネ☆　という言葉を心の中で呟きながら、外見上では、乾いた笑いを浮かべる淳。

この辺りもまた、先程、淳とアツロウが、ショウジの問いに対して何と返してよいのか分からなかった理由である。

何といっても、ただの一般人である彼女に『悪魔』などと言っても分からないだろうし、仮に言ったとしても信じてもらえないに違いないからだ。

そう、淳達は思っていたのだが――なんと、次にショウジは、まるで独り言のように、こう呟いた。

「……あるいは、そこにも悪魔が現れたから、急遽自衛隊が派遣された、とか……？」

「えっ……！？」

予想外にも程がるショウジの台詞を聞いて、淳は思わず、アツロウ、ユズ、ケイスケ、といった友人達と顔を見合わせる。

三人もまた、彼と同じように、驚きの表情を浮かべていた。

「……ショウジさん、どうしてそれを……？」

ややあって、ユズが言う。

「……実は、私も襲われたのよ。昨晩、歌舞伎町の辺りでね」

「よ、よく無事でしたね……」

淳は、いかにも恐れ入りました、という様子だった。

「そりゃ、流石に驚いたわよ。絵に描いたようなバケモノが突然、大口を開けて襲ってきたんだから……。ま、でも、たまたまその時、一緒に行動してたちょっと変なおじさんに助けてもらってね」

もっとも悪魔については、それよりも前に、その人からすでに教えてもらっていたのだけれど――と、そう言いながら、ショウジは肩を竦める。

「その後もまた、別の人が助けに来てくれてね。表参道の方でバーを経営してる人なんだけど。いやぁ、今思い出しても、やっぱ渋い

わぁ、あの人」

「はぁ……」

淳としては、果たして何と言って反応すればよいのか分からないので、そのように返すより他にない。

「ず、随分運がいいですね……」

そう言ったのはアツロウだ。

何の力もない（ハズ）の彼女に、突然悪魔が襲いかかったところに、偶然、二人の悪魔使いが居合わせた――となれば、まあ確かに、彼女は相当に運が良い人物と言っていいだろう。

（……というか、その後から来た人ってジンさんじゃないの？　その前にショウジさんを助けたのが誰かは分からないけど……）

そっと、淳の背後から、彼へと耳打ちするユズ。

そのすぐ後ろでは、ショウジとはこれが初対面であるケイスケが、彼女に向かって小さく会釈をしていた。ショウジもまた、そんな彼に会釈を返していた。

しかし、そうしながらも、ショウジはちゃんとユズの言葉を聞いていたらしく、すぐさま、バッと彼女に顔を向けると、こう言った。

「ん……何？　君たち知り合いなの？　いやぁ、格好良かったわよあの人！」

もし、この場にセトがいたならば「ねぇ俺は!?　俺は格好よくないの!?」と全力で彼女に突っ込んでいたに違いない台詞だが、もしそれが実際に起こったならば、ショウジは確実に「あいにくだけど、三十を過ぎた時点で、すでに私の有効範囲外よ」と、冷たいカウンターを食らわしていたであろう。

そう考えれば、この時、この場所にセトがいなかったのは――彼にとっては――ある意味では幸運だったと言えるのかもしれない。

「あ……いや、まだ分からないですけど」

相変わらず戸惑った様子で、淳が言う。

続けてアツロウが、

「あー…ところで、そのバケモノの話はどうなったんですか?」

と言った。

「え?　ああ……そうそう、ゴメン、話が逸れちゃったわね。まあとにかく、そんな訳で、この前に仕入れた話がデマじゃないって分かったの。やっぱりこの封鎖は、きっとあのバケモノを街から出さない為に行われているに違いないわ!」

キラーン!　と、まるで名探偵のように目を輝かせながら、ショウジは言う。

それを見た淳は、欲しい情報が手に入ったジャーナリストというのは、皆例外なくこういう目をするのだろうか、と内心ビビっていた。

「それにしても、本当に驚いたわよ。さっき言った悪魔もそうだけど、そんなバケモノと戦ってる、そのお兄さんにも……ああ、バーの人ね。その人が悪魔を倒してくれた（らしい）の。その時の姿があまりにも頼もしいもんだから、年甲斐もなく胸キュンしちゃったわよ、私」

「……」

前々から思ってたけど、この人、会話の端々に見せる言葉の一つ一つが、やっぱりどこか古臭いよなあ、と淳は思ったが、勿論、そんな事は口には出さない。

「胸キュン……。な、なるほど、そうだったんですか……」

アツロウが言う。

「ま、悪魔については、さっきもチラッと話に出した、変なおじさんの方が詳しいんだけどね。今はちょっと別行動中だけど……もし次に会ったら、もっと詳しく話を聞くつもりよ」

私はジャーナリストだからね――と、そう言って、ショウジは薄く笑う。

「ま、何はともあれ――さっきも言ったけど――政府が封鎖を行った理由は、やっぱり悪魔を閉じ込める為に違いないわね。まだ証拠はないけど、たぶん当たりよ」

「そ、そうかもしれないですね……」

ここへきてようやく発言したケイスケであったが、やけにテンションの高い彼女のペースに、彼も中々ついていけてないらしい事が、その歯切れの悪い台詞からも分かった。

「ま、何にしても、お互い無事でよかったわね」

そう言って、淳の肩をポンポンと叩くショウジ。

それによって――最初に思っていたよりも、彼女がずっと話しやすい性格であることに安心した淳は、やがて、次のように言った。

どうせ、彼女はもう悪魔について知ってしまっているのだから、何も隠す必要はないだろう。

「そうですね――ところでショウジさんって、『ベル・デル』っていう悪魔について、何か知りませんか？」

淳としては、彼女がジャーナリストという、『情報』のエキスパートである事もあって、それなりに期待を込めた上での質問だったのだが――残念ながら、その質問に対して彼女が見せた反応は、淳の意にそぐわないものだった。

「べる……何それ？」

小さく首を傾げながら、ショウジが言う。

「あっ……え～っと、ショウジさん、不死身の悪魔について、何か知らないっスか！？」

そのように、アツロウも淳に助け舟を出すが、ショウジが見せる

反応といえば相変わらず、

「不死身の悪魔？　さぁ……そんな話、聞いたことないけど？」

というものだった。

「あの……何でもいいんです！　ほんの些細なことでもいいので、何か知りませんか！？」

なるべく、今の自分たちは本当に困っているのだという気持ちを表に出しながら、懇願するようにケイスケが言う。

しかし、ショウジは「勘弁してよ」と言わんばかりに、顔の前で手を振ると、次のように言った。

「あ～、ダメダメ。私、大学は経済学が専攻だから。神様とか悪魔とかはからっきしダメなの。今回の事だって、さっき言った変なおじさんの話は別にしても、実際に目の前で見なきゃ、普通なら絶対に信じないタチなんだから」

「あ……そ、そうですか……」

先程までとは違って今度のケイスケは、なるべく、失望の色を表に出さないようにしていた。

「まぁ……知らないモンは仕方ないスよね」

アツロウが言う。

「悪いわね。力になれなくて……あ、でも……」

「？　何ですか？」

突然、ショウジが何かを思い出したような表情になったので、淳は思わずそう尋ねてしまった。

「いや、そのベルなんとかって悪魔の話じゃないんだけど……妙な噂なら、あちこちでよく聞くわよ？　何だったかしら……ああ、そうそう、『近いウチに世界が終わる』とかって、確かそんなヤツ」

「……あー……」

つかの間、何と答えてよいのか分からくなる淳。

その後ろでは早速、アツロウとケイスケが、小声でお互いの意見を交換し合っていた。

（……それってやっぱり、余命と何か関係があるのかな？）

（……どう、だろうな……。さっきのショウジさんじゃないけど、証拠は何もないし、まだ決めつけるのは早いんじゃないのか？）

「ま、まぁ、なんとなく分かります、かね……」

そんな中――ようやく淳は、しどろもどろながらも、そのように返事をすることが出来ていた。

「あ、そうなんだ？」

ショウジの態度は、いかにも「ま、私は信じてないけど」と言わ

んばかりだった。

「よ、良かったら、詳しく教えてくれませんか？」

ユズが言う。それに対してショウジは「ええ、勿論構わないけど……」と、若干驚いた表情で彼女を見つつも、やがて説明を始めた。

「……ええとね、なんでも、『あと四日で世界が滅びる』……って、そんな噂があるらしいの。ま、こういう状況だから、その手の『デマ』が流れるのは、ある程度は理解できるんだけど……。奇妙なのは、多くの人達は知らないのに、君たちが持っているのと同じ、そのＣＯＭＰを持っている人だけがそう言ってるって事よね……」

それを聞いて淳は、どうやらこの人は悪魔の事は知っていても、自分たちのＣＯＭＰがただの携帯ゲーム機ではなく、悪魔召喚を可能とする特別性であるという事は知らないようだ、と思った。

或いは、その事は知っていても、余命機能というシステムについては知らないのか……まぁ淳にしてみれば、どちらでもよいことではあったが。

「……ま、今のところはそんなとこかしら」

ややあって、ショウジが言う。彼女は一度、そこで大きく伸びをすると、

「それじゃ、私はもう少し取材を続けるから、お互い、次もまた生きて会いましょう。それじゃ、またね！」

と言って、十代である淳達にも負けず劣らずの――というか、そ

れ以上のやる気をその体から漲(みなぎ)らせながら、彼らの前から、意気揚々と去っていった。

「……ねえ、ケイスケ君。一番長い余命は、確か四日って言ってたよね……？」

ショウジが消えた後の道を見つめながら、ユズが言う。

「うん……恐らく、他のＣＯＭＰを持った悪魔使い達が、僕たちと同じように余命を見たんだろうね」

「そして、そんな洒落にならない噂が流れ始めた、と……。いや、まあ、このままじゃ本当に洒落じゃなくなっちゃうんだけどな」

淳が言う。

「ね、ねぇ、ホントに、四日で世界が滅びるのかな？」

怯えた表情で、誰にともなくそう尋ねるユズ。

「そこまでデンジャーな話かどうかは分からないけど、少なくとも、封鎖内にいる人間の余命が、全員四日であるのは確かだ」

淳の言葉に、アツロウが続く。

「封鎖の中で全員悪魔に殺されるとか、そんなトコロか……？」

「縁起でもないこと言うなよ……つか、それだったら、四日も待つことなく実現されそうだけどな」

そう話す淳の表情は、至極真面目なものだった。

ケイスケはというと、彼は彼で何か考えるべき事があるのか、何やら神妙な面持ちで、一人で小さく頷いている。

「……なぁ、ジュン」

やがて、アツロウが言う。

「んー？」

「俺……やっぱりもう一度だけ、あの赤坂トンネルに行ってみるべきだと思うんだけど……」

「ぶぶべぼっ！？」

それほど突飛なことを言われたわけでもないのに、何故か、盛大に動揺しきったように、大きく息を吐き出す淳。

「……マ、マジで？」

先程までとは打って変わって、彼の瞳には、混じりっ気なしの恐怖の色が浮かんでいた。

「いや、まあ、お前の気持ちはわかるよ」

そんな彼の心中を察したのか、アツロウが言う。

彼は今、昨日、自分たちが赤坂トンネルに向かった際に、そのトンネル内に（とある理由で）単独で入っていった淳が、そこにいた

自衛隊らしき女性から、酷い乱暴を受けたと喚(わめ)いていた事を思い出していた。

「つか、あれからもう大分時間が経ってるのに、お前は未だに、あの女の人にビビってる訳？」

と、アツロウ。

「べ、べべべべ別に、ビビってねぇよ！！」

口の上でこそそう言い放つ淳ではあったが、そのどもりようは疑いようがなかった。

それ程までに――彼にとって、トンネル内で出会ったその女性との思い出(トラウマ)は、非常に苦々しいものなのだ。

「とにかくだ」

反論は許しません！　とでも言いたげな口調で、アツロウが言う。

「お前もさっき、宮下公園で言ってただろ？　『まずは、十八時までにこの封鎖から脱出する為の経路を確保するのが先だ』って。でも、このまま地道に街中を練り歩いたところで、赤坂以外の抜け道を見つけ出すっていうのは、これまでの事を考えるとどうにも無理くさい。だったら、たとえダメ元でも、俺たちはもう一度、あのトンネルに行かなくちゃいけないと思うんだ」

「う、う～～……」

アツロウの言葉に対して、そのように唸る事しかできない淳。

それを見たアツロウは、今、淳がその頭をフルに回転させて、何か自分の意見に反論できる余地がないか、必死に探しているのだと分かった。

「そう……だね、私もそうした方がいいと思う」

「ゆ、ユズまで……！」

こうなったら、もう頼れるのはチミだけだ！　という気持ちを込めて、淳はバッとケイスケの方を振り向いたが、そんな彼に対するケイスケの答えは、

「なんていうか……事情はちょっとよく呑み込めないけど、とりあえずジュン君。わがままはやめた方がいいと思う」

というものだった。

「……」

しばらくの間、淳は誰か自分を支持してくれる人間はいないか、ぐるりと辺りを見渡したが、その結果は言うまでもなかった。

「――ああ、もう、ハイハイ、分かりましたよ……。どうやら、俺の意見は却下されるみたいだな」

もっとも、淳にしても、これ以上強く反対する気はなかった。

勿論、出来ることならば、再びあの凶暴な女（少なくとも、淳にはそう見えた）に会うのは何としてでも避けたいところだが、その

一方で、現状、今の自分たちに出来る事と言えば、アツロウが言うように、再びあのトンネルに向かう事ぐらいだと分かっていたからだ。

……が、しかし、

「じゃ、俺はどっかで時間つぶしてるから、とりあえず、君たちだけあのトンネルに向かってく――」

「よぉし！　それじゃあ行くか！　いざ、赤坂トンネルへ！！」

言いながら、淳の手首をガシッと掴み、そのまま彼をズルズルと引きずっていくアツロウ。

それにユズとケイスケが苦笑しながらも、「おー」と手を上げて答え、淳は「い、いやだぁ……！　俺、マジであの女が怖いんだよおおおぉぉぉ！！」と絶叫を上げた。

3rd Day『イヅナとの接触』

そんなこんなで、赤坂トンネルである。

流石にここまで来ると、もはや駄々をこねる気力も失せてきたらしく、今となっては、淳はアツロウ、ユズ、ケイスケより少し遅れて、三人の後ろをトボトボと歩いていた。

しかしそれでも、まだ完全に不満が消えた訳ではないのか――いやむしろ、現場まで来てしまったが故に、ここに来る事に対する不満がさらに増したのだと言えば、まだ頷ける――口の方では、なにやらブツブツと、グチグチと、小声で何かを呟いていた。

時々『逆レイプ』やら『もうお婿にいけない』などと言った、嫌な予感しかしない単語が、アツロウの耳にもちらほら届いていたが、それについては、彼はここまで聞き間違いに決まってる、と強く自分に言い聞かせる事で、その言葉の意味を淳に尋ねたい気持ちを、何とか抑えていた。

「……ここが、さっき言ってた抜け道？」

――と、相変わらず、大小様々な自動車類が、半分スクラップになったような状態であちこちに放置されているという、どう考えても普通ではない状況にある赤坂トンネルの入り口近くまで来たところで、誰にともなく、ケイスケが言う。

彼の問いに答えたのはアツロウだった。

「そ、この中に興味があるんだ」

「……？　……！　あ！　ひょっとして、一般車両は入れないっていう、秘密のトンネルって奴かい？」

「あれ？　ケイスケ君、知ってたの？」

意外そうな表情で、ユズが言う。

「一応、ね。噂で聞く程度には、だけど……」

「へえ、ケイスケは、こういう事にも詳しいんだなぁ……」

素直に感心するアツロウ。

「ま、そういうこと。さっき会ったショウジさんっていたろ？　あの人から以前、ここから地下鉄に繋がってるかも、って聞いてさ。だったら、外にも出れるんじゃないかって思って」

「そうか……そうだね。最初から一般人に知られていない場所なら、警備も手薄かもしれない」

今度は、ケイスケが感心したような表情になる番だった――が、しかし、そんな二人の人物の会話に、横槍を入れる人物がいた。

有里淳である。

「……そう上手くいくかね？　昨日なんか、危うく撃たれかけたし……。今回だって、そうならないとは――」

淳としては、最後の必死の抵抗という感じだったのだが――あらかじめ、淳がそう言いだすであろう事を予想していたのか、アツロウは、

「さぁてジュン！　さっそく入るとすっか!?　もしかしたら、昨日のアレはちょっとした偶然だったのかもしれないしなぁ!!」

と大声で言って、彼の台詞を半ば無理やりに中断させた。

恨みを込めた視線で淳がアツロウを見れば、顔でこそ彼は笑っているものの、目は本気だった。それを見て淳は、どうやら自分が何を言ったところで、再びこのトンネルへと入る事は、もはや決定事項らしい、と腹をくくった。

「オーケー、それじゃあ行こう」

怒ったように、淳が言う。

「精々、あの凶暴な女が、今はいない事を、心から祈らせてもらうとするさ」

しかし残念ながら、淳のこの淡い期待は、ほんの数分と経たずして、あっという間に――完膚なきなまでに打ち崩される事になる。

何故なら、

（ノーーッ！　やっぱりいるじゃねぇか畜生!!　ノーーッ！）

と、（小声で）心の底からの叫び声を上げる淳。

淳達が件の女性――かつて、このトンネル内で、淳を組み敷いた人物を見つけたのは、トンネルから入って、ほとんどすぐの位置だった。

もうハッキリと、入り口で待ち構えられていたようなものである。ともすればどうして、先程外から入ろうとした時に自分たちに見えなかったか、不思議な程の。

と、その時だった。

（……ん？　いや待て！　よく見ればあの女、まだ俺たちの存在には気づいてねえぞ！？）

と、相変わらずのヒソヒソ声で、すぐ近くにいるアツロウに耳打ちする淳。そんな彼にアツロウは、同じくヒソヒソ声で、次のように答えた。

（本当だ……！　どうする？）

（引き返す！）

（そんな選択肢はねぇよ！！）

（うるせえ馬鹿！　アイツが手に持ってるモンをよく見てみろ！どっからどう見ても機関銃にしか見えないブツを持ってらっしゃるじゃねえか！　とても話し合いなんかできる雰囲気じゃなねぇって！！）

（そうは言ったってな……！）

しかしそこで、二人の小声による壮絶な言い合いに、唐突にユズが割り込んできた。

（ちょ、ちょっと二人とも！　マズイよ！　あの人、こっちに気づいたみたい！！）

その言葉を受けて、淳、アツロウ、ケイスケの三人が、ギョッとした表情で、ユズが見ているのと同じ方角へと目を向ける。

見れば、そこには確かに、たった今、淳達に気づいた様子の例の女性が、今まで片手で下げていた銃を構え、こちらに銃口を向けているところだった。

ちなみに、彼女の余命は『4』と表示されていたが、淳としては、女性が自分たちの方に向けている銃口に意識を集中させるのに忙しかった為、とてもそんなものに意識を割く余裕はなかった。

「止まりなさい！」

女が言う。

「少しでもおかしな動きをすれば、即座に射殺します！！」

「わわ、わっ！　ちょ……ちょっとタンマ！　う、撃たないでくれ！！」

と、アツロウ。

その後ろでは、淳が、両の拳を閉じては開いたり、閉じては開いたりして、いつでも女に対処できるようにしていた。先程まではビ

ビってばかりの彼ではあったが、ここまで来た以上、もはや淳も怯えてばかりではいられなかった。

ガチャリ、と、女が銃口の位置を調整することによって、脅すような――無機質な音が、トンネル内に響き渡る。それを聞いたユズが、ヒッと小さく悲鳴を上げた。

「君たちが――少なくとも、そこの青い髪の子が悪魔を操ってる事は、既に分かっているわ！　さあ！　早く全ての悪魔を消しなさい！　君のせいで、多くの人々が危険にさらされてるのよ！！」

「……！　この……黙って聞いていれば……！」

あまりにも不当な言い分に、流石に頭にきてしまった淳は、女がこちらに銃を構えている事も忘れて、一歩、前へと進み出ていた。

絵的にはちょうど、アツロウ、ユズ、ケイスケの三人を守る為に、淳が女の前に立ちはだかっている、という様子だ。

「お、おい、ジュン……！　くれぐれも、早まった事はしないようにな……！」

そんな風に、淳の後ろからアツロウが忠告するが、果たして、それが淳に聞こえているかは甚だ疑問だった。

「オイ――アンタ、いい加減にしろよ！　昨日もそうだったけど、少しはこっちの話も聞けって！　悪魔を今すぐ消せとか……そんな事が出来たら、こっちだってとっくにそうしてるっつの！」

「え……？」

と、淳の言葉を聞いて、女は怪訝な表情を浮かべる。

「……？　それは、どういう意味？　悪魔を喚び出したのは、君たちじゃないの？」

「俺たちも被害者なんだよ！　たまたまＣＯＭＰを持ってて、生き残る為に操ってるだけだ！」

そう言ったのはアツロウだ。どうやら、先の淳の発言を受けて、いくらかの勇気を取り戻したらしい。

続けてユズが、

「そうよ！私たちはもう何度も悪魔と戦って、困ってる人たちを何人も助けてるんだから！」

と言う。

「……そのＣＯＭＰは、翔門会が作ったものよね？」

「……？　ああ、そうだけど……」

言いながらも淳は、果たして、自分たちは今までに、この女の前で、自分たちの改造ＣＯＭＰが、翔門会の作である事を話したことがあっただろうかと、心の中で首を傾げた。

「……という事は……君たちも翔門会の人間なの？」

「いや、そうじゃない。話せば長くなるんだが……」

どうやら、こちらの話をまったく聞かないという訳ではないようだ、と淳は小さく安堵すると、やがて、自分たちは翔門会とは無関係であること、自分たちはＣＯＭＰを悪用していない事を話した。

話が終わった後も、しばらくの間、女は銃口を淳へと向けたままだったが、淳は――ここに来る前までとは打って変わって――そんな彼女の視線を、真っ向から恐れずに受け止めた。

一秒、二秒と、二人が目を合わせたまま、永遠とも思える時間が流れていく。そして遂に、その緊張感が、いよいよ極限にまで達しようとしたところで――

「……なるほど」

と。

そう言うと、女はスッ……と、構えていた銃を下げて、肩のガンホルダーに仕舞い込んだ。

「……この状況になっても、悪魔を出さないのだから、君たちの話を信じてもよさそうね……」

流石に、今まで自分たちに突き付けられていた銃口がやっと下げられたとあれば、小さくとはいえ、淳は安堵の息をつかずにはいられなかった。

それと同時に彼は、ついでとばかりに、

「……封鎖の原因は悪魔なんですか？」

と尋ねる。

直後、女は、どこか拍子抜けしたとでも言いたそうに、小さくため息をつくと、次のように言った。

「……君たち、本当に何も知らないのね。……いいわ、答えられる範囲の事は教えてあげる」

そう言って、女は――もしかしたら、先程まで銃口を向けていたことに対して、少なからず罪悪感を感じているのか――どことなく優しい口調で『東京封鎖』の原因を語り始める。

「封鎖の原因は、君たちの予想通り、悪魔の出現によるものよ……。政府は『彼ら』が悪魔を使役している事に気づき、今回の封鎖を決定したの。……『彼ら』が東京に集まる、このタイミングを狙ってね……」

政府が悪魔の存在を知った上で封鎖を決定したというのは、淳達にしても、これまでの段階で既に気づいているので、今さら何も言わなかったが、一つだけ――今、女が言った『彼ら』という単語だけが気にかかった。

案の定、ユスが、

「『彼ら』……って？」

と、首を傾げながら、女に尋ねる。しかし、女はそれについては答える気がないらしく、ユズの言葉など聞こえなかったかのように、説明を再開した。

「……とにかく、状況が変わらない限り、君たちがこの封鎖を出られる可能性はまったくないわ。地上、地下、河川、上空……それら全てが、一分の隙もなく封鎖されているのだから」

よく注意して聞いていれば、そう話す女の表情が僅かに歪んでいる事に気づけた筈だが、しかし、それに気づけたのは淳だけで、ユズはというと、たちまち顔を赤くさせて、こう言った。

「な……！　わ、私たちは人間よ！　閉じ込めるなら、悪魔だけにすればいいじゃないの！！　それを山手線封鎖ですって！？　大勢の人たちを巻き込んで……正気とは思えない！」

今度こそ間違いない。女の表情に、ハッキリと苦痛の色が現れた。だからこそだろう。次に言い放たれた女の台詞には、これまでにはなかった程に、感情がこもっていた。

「何とでも言いなさい！　それでも我々は、悪魔の拡散を防がなければいけないのよ！！」

しかし、ユズも負けてはいない。

「そ、そんなの、私達には関係ないでしょ！　私はただ……！　……ただ、家に帰りたいだけなの！　そこを通してよ……！」

すると途端に、女の顔からフッと人間らしい感情が消え、代わりに、まるで機械のような、冷徹な表情が現れた。

「……だったら、これを使う事になるわ」

言って、女は、先程ガンホルダーに仕舞った銃を再び取り出し、それを淳達の方に構える。

「きゃあっ！？」

「お願い、引き金を引かせないで。……脅しじゃないの。多くの日本国民を守る為なら、君たちを殺す事ぐらい、ためらったり出来ないのよ……」

言われなくても分かってる、という言葉を、淳は寸前で飲み込んだ。

「う、うぅっ……！」

淳の背に隠れて、小さく呻き声を上げるユズ。

と、その時だった。女の肩口に止められた無線機が、ノイズ混じりの音声を伝えたのは。

女は耳につけたインカムに手をかけ、相変わらず、銃口だけはしっかりと淳達に向けたまま、無線機の向こう側にいるであろう人物とやり取りを始める。

彼女と淳達との距離は、それほど極端に離れている訳ではないが、それでも――意図的にそうしてるのか――女の声が極めて小さいが為に、淳は、その内容を断片的にしか耳にする事が出来なかった。

「……赤坂トンネル、了解……。警戒を続けろ……以上……」

やがて、通信が終わったのか、女はインカムを元の位置にも戻す

と、軽くため息をつき、四人に――というよりは、何故か、淳の方だけに目を向けた。その顔はやはり、どこか悲しげだった。

悲痛な面持ち、とも言える。

「……たった今、上野駅で封鎖を破ろうとしたデモの一部が、自衛隊に……」

「――射殺された？」

憤慨した表情を浮かべながら、女の言葉を、淳が引き取った。なんとなく、そんな気がしたのだ。

一瞬、女は驚いた様子で淳の方を見ると、次には、再び悲痛そうな面持ちになり、

「……ええ、そうよ」

と言った。

「え……え？　い、今なんて……？」

しかし、アツロウの方は、今女が何を言ったのか、よく理解できなかったようだった。淳にしてみれば、これは驚きだった。彼はアツロウの事を、自分たちの中で一番、常に落ち着いている――と言うよりは、落ち着いていられる人間だと思っていたからだ。

「だから」

イライラしたように、女が言う。

「――封鎖を破ろうとした一般人が、自衛隊に射殺されたって言ったのよ！　駅前へ押し寄せたデモ隊に、自衛隊が発砲……」

その言葉を聞きながら、いつの間にか、自分の口が開いたままになっているという事に淳は気づいていたが、しかし、それを閉じようという気さえ起らなかった。

「死者十名以上……負傷者は百名を超える大惨事よ……！　クソッ……！」

しかし、胸を締め付けられているかのような不快感を覚えているのは淳達だけではなかったらしく、女もまた、これで何度目か分からない、苦悶に満ちた表情を浮かべていた。

「さぁ……これで分かったでしょ……。我々は、どんな手段を使っても、君たちを外へ出すわけにはいかないの！」

「そんな……」

ユズは完全に、言葉をなくしてしまった様子だった。

「お願い……！　私たちも必死なの……分かって……！　……東京を封鎖すること自体が、政府としては既に、苦渋の決断なの！　封鎖による物資の不足と、送電の停止によって、病院の患者は切り捨てられ……、何の罪もない、多くの民間人まで、命の危険にさらすことになる……」

女の顔を見つめながら、淳は果たして、今、彼女が話していることも、先に言った『自分たちに教えられる範囲』とやらに入ってい

るのか、と訝しんだ。

少なくとも淳には、女は今、自らの胸の内に溜まっている不満を一気に吐き出す為に、ただひたすらに口を動かしているように思えた。

「――東京以外の地域だって、政治や経済の面で、様々な被害を受けているの。でも……それでも、悪魔の侵攻によって日本全土を失うよりはマシなのよ！　……活発化と表面化の進む悪魔の侵攻に対して、既存の武器は殆どといっていいほど、効果がないわ」

それを聞いた時、淳は「？」と思った。少なくとも昨日、自分がこのトンネル内で、偶然地面に落ちていたカービンを使った時は、ちゃんと悪魔相手にも通用したが……？　と。

だがすぐに、それは、あの時自分が、ＣＯＭＰのハーモナイザーの恩恵を受けていたからに違いない、と悟った。恐らくは、武器自体の威力を高めた訳ではなく、相手悪魔の戦闘力――ひいては、防御力を下げた事による結果なのだろう。

「……だからこそ我々は、奴らに対して有効な対抗手段を見つけ、そして可能であれば、悪魔が発生した理由を突き止めて……。なんとしてでも、悪魔を根絶しなければならないの！」

そこまで言ったところで、ようやく女は言葉を切ったが、しかしその姿は、低い唸り声をあげる獅子を連想させるには、十分すぎるほどの迫力があった。

「……お話は分かりました……。貴女は、一体誰なんですか？」

と、そう言ったのはケイスケだ。

女はしばらく、あからさまに警戒心を露(あらわ)にした目でケイスケを見ていたが、やがて、

「……私は飯綱(いづな)ミサキ一尉。悪魔を一掃するためにやって来た、『特別対策チーム』の一員よ……」

と言う。

「『特別対策チーム』……？」

眉をひそめるケイスケ。

「自衛隊……いや、警察の秘密部隊かな……？　でも、『一尉』って事は……」

「私たちは、自衛隊でも警察でもないわ」

キッパリとした口調で、イヅナは言う。

「ただし、現状においては、その両方に指示を出せる立場にある。各自の階級は、その時の作戦の指揮系統によって変化するの」

「と、いう事は……」

顎に手を当てながら、淳が言う。

「今、封鎖内を管理、警戒してるのは自衛隊だろうから……」

「ええ、そう。だから私は今、彼らの階級称に合わせて、一尉と呼ばれているのよ」

言うと、イヅナは開いた手で、自分の額をもみしだくような動作をする。もしかしたら、必要以上に喋り過ぎたと後悔してるのかもしれない、と淳は思ったが、同時に、今さら後悔したところで、後の祭りだろうよ、とも思った。

「……とにかく、もう時間がない……。もし君たちが、何か貴重な情報を持っていると言うなら、なんでもいいから、私に教えて欲しいの」

「いや、いきなりそんな事を言われてもな……」

淳の隣にいるアツロウはそう言って、これ以上なく困った顔をする。

淳には、そんな彼の気持ちが分かるような気がした。どちらかというと、今回は自分たちの方が情報を与えられる側であって、今の自分たちが持っている情報の中に、イヅナが興味関心を抱くようなものはないだろう、と、そういう事なのだろう。

が、それでも、淳はダメ元で、

「……なんつーか……四日後に『何か』が起こるらしいって噂は聞いてますけど……」

と言った。

しかし、意外なことにイヅナは、そんな淳の言葉を受けて、彼が

予想した以上の食いつきを見せた。

「……！　四日後……！？　それはもしかして」

次にイヅナは、何やら独り言をブツブツと呟き始める。

「……いえ、そんな筈はないわ……。私が絶対、そんな事はさせないから……」

「……？　何か知ってるんですか？」

淳が言う。途端に、イヅナはハッとしたような表情になると、次には、その視線を淳の顔へと向けてきた。

そのまま、二人はお互いの顔を見つめる。

しばらくして、イヅナは次のように言った。

「……ごめんなさい。これ以上話せる事は、もう何もないわ。貴方たちは、もう戻りなさい」

「……」

それでも、イヅナの顔を見続ける淳。しかしとうとう、そんな彼の視線が持つ、得体のしれない迫力を煩わ(わずら)しく思ったのか、イヅナは、先程よりも少しだけ語気を強くして、

「……行きなさい……早く！！」

と言った。今にも再び銃を構えてきそうな勢いのイヅナを前にし

て、この時の淳達には、ただその場から、黙って立ち去るという選択肢しか残されていなかった。

３ｒｄ　Ｄａｙ『失踪した知人』

――池袋。東洋アンズ付近。

淳、アツロウ、ユズの仲良し三人組改め、そこに新メンバーのケイスケを加えた四人組は、昨日、忘れようにも忘れられないほど激しい戦いを繰り広げた、東洋アンズ近くの通りを歩いていた。

チラリ、と淳がそちらに顔を向ければ、数ある建物の隙間の向こうに、半ば廃墟と化した東洋アンズの一部分が見えた。

時間にすれば、まだ十二時間かちょっとしか経っていないにも関わらず――昨晩も、寝る前にいろいろ考えていたせいだろうが――淳には最早、昨日の戦いが何十年も前のことのように思えた。

同時に、東洋アンズをあんな風にしてしまうほど暴れたにも関わらず、よくもまあ自分たちは無事に生き残ることができたよなあ、とも。

――と、淳がそんな事を考えていた、その時だった。

「ん？　……今のは……！？」

突然、何か気になるものを見つけたらしいアツロウが、そのように言ったのは。

「……？　アツロウ、どうかしたの？」

眉をひそめながら、ケイスケが言う。

しかし、中学時代の親友であるはずの彼の言葉を受けても、いまだアツロウはその視線の先にある『何か』に意識を奪われたままの様子だった。

それどころか。

「ちょっと、ゴメン……！」

と、ケイスケや淳に顔さえも向けないままそう言ったかと思うと、いきなり、何処かへと走り出したではないか。

「ちょ、ちょっと、アツロウ！？」

慌てたようなユズの声。

しかし、メロスもかくやという速度で駆けるアツロウは、彼女の視界の先にある曲がり角の向こうに姿を消すと、そのまま見えなくなった。

「……んもう！　いきなり、何処へ行くのよ！？」

突然のアツロウの奇行にユズがプンスカする中、その後ろでは、淳とケイスケが揃って首を傾げていた。

「……急にどうしたんだ？　アイツ……」

「さあ……？」

とはいえ、まさかこのまま彼を放っておくわけにもいくまい。

そう思い、やれやれとため息をつきつつ、すぐにでもアツロウを追いかけようとした淳だったが――結果として、その必要はなかった。

淳がアツロウを追いかける為に足を動かすよりも早くに、件の曲がり角から、疲れ切った様子のアツロウが戻ってきたからだ。

「クソ、見失った……」

と、アツロウ。

「おい、急にどうしたんだ？」

目をグリグリさせながら、淳が言う。

アツロウは、一度大きくため息をつくと、やがて、

「……知り合いに似てたんだ。……失踪しちまった人に、ね」

と言った。

「失踪？」

無意識の内に、淳はユズやケイスケの顔を見ていた。しかし二人もまた、たった今聞いた事は全くの初耳だったらしく、そこには、淳と同じように困惑しきった表情が浮かんでいるだけだった。

「……アツロウ、詳しく教えてくれる？」

ケイスケがそう尋ねると、アツロウは「ああ」と言って、次には、淡々とした口調で説明を始めた。

「プログラマーのコミュニティで知り合った人なんだ。ちょっと仲が良くてさ……」

やっぱりそっち方面かよ、と淳は思ったが、シリアスな場面なので口には出さないでおいた。

「ネットの中だけじゃなくて、たまに直接会ったりもするんだけど……」

そこまで言うと、何故かアツロウは、一旦言葉を途切らせてしまう。

「だけど……何だ？」

淳が言う。

「ん？　ああ、スマン……。ただその人、ある時、急に居なくなっちまったんだ。失踪前に、変な言葉を残してな……。正確には、生の言葉じゃなくて、メールでなんだけど」

「変な言葉？」

「そ、ええと、確か……『政府が秘密にしている、とんでもない事実を知ってしまった。全てが分かったら、また連絡する』……って、そんな感じの」

「それが……最後の連絡？」

意味が分からないという様子で、ユズが言う。

その隣では、ケイスケが「……どう思う？」と淳に尋ねていたが、彼は小さく肩を竦めて「俺が知るわけないだろ？」というサインを送っただけだった。

「ああ……そうだ。俺には結局、彼の言う『とんでもない事実』ってのが何なのかさえ、分かってない……」

「何か手がかりとかは残ってなかったのか？　今、お前が言ったメール以外で、だけど」

言いながらも、しかし淳は、次にアツロウが何と答えるか、おおよその見当がついていた。

案の定、彼は二、三度、小さく首を横に振ると、

「もちろん俺だって、必死になって、その手がかりを探しはしたさ。けど、何も分からなくてさ……」

と言う。

「何それ……そんなマンガみたいな事って、本当にあるの……？」

ユズの口調は、いかにも、まだ作り話だと言う方が信じられるとでも言いたげなソレだったが、それを聞いた淳に言わせれば、「いや……それを言っちゃったら、今まで俺たちが体験してきた、あんな事やこんな事はどうなんデスかユズさん？」と、逆に質問したく

て仕方なった。

「まぁ、それでもやっぱ心配になって、俺、一回彼の家に行ってきたんだ。そしたら……家族が、捜索願を出してて、逆に、居場所を知らないかって聞かれちまった……」

その台詞を言い終わった後のアツロウの顔があまりにも悲しそうだったので、つかの間、淳は何と言ってよいのか分からなかった。

「あ、でも……」

と、そこでアツロウが、急に、たった今何かを思い出したかのような顔つきになった。

「？　どうした？」

そう尋ねる淳だったが、しかしアツロウは「ちょっと待ってくれ」と言うと、肩から下げていたカバンを地面に下ろし、次にはそこから、彼の体の一部とも言えるノートパソコンを取り出した。

やがて、彼は慣れた手つきで、何度かカチャカチャとキーボードを叩くと、パソコンの画面を、淳、ユズ、ケイスケの三人に見えるように、彼らの方へと向けた。

「コレを見てくれ」

言われた通りに、淳達がそこに顔を近づけてみると、そこには奇妙なものが映っていた。

それは、いくつかの単語を所々に散りばめたような、一枚の用紙

だった。

とは言え、ワープロで打ったような、機械的な文字ではない。まるで、直接パソコンの画面に殴り書きしたかのような、明らかに手書きだと分かる文字面だった。

「……なんだコレ？」

「さっき、彼の自宅に行ってみたって言ったろ？　その時、家族の許可をとって、ついでに彼の自室を覗いてみたんだ。そしたら机の上に、慌てて走り書きしたようなメモがあったんだ。コイツはそれをスキャンした画像ファイルだ」

「ふぅん……」

別に、淳が知りたいのは、そんなメモ書きの出自ではなくて、そこに書かれている文字が何を意味するのかなのだが、恐らくアツロウにしても、この文字の意味を分かりかねているのだろう、と思った。

だからこそ今のような、どこかはぐらかすような説明をしたんだろうな、とも。

淳の後ろから、同じようにパソコンの画面を覗き込んでいるケイスケやユズにしても、怪訝な表情をしている。

それでも何か、アツロウが言う、その失踪した知人に関する手がかりが隠されていないかと、淳やユズ、ケイスケは元より、アツロウもが、そこに映っているいくつかの単語を、ジッと見つめていた。

そこにある文字の内容は、以下の通り。

『チップ』『兵器』『政府』『機密』『証拠隠滅』『ジャーナリスト』『口封じ』『命令』――

そして。

そのメモ書きの、一番下の方に――他よりも濃く、大きな文字で、次のように書かれていた。

『犯人』、『瀬多　総司』。

そう。

確かに、そこに書かれている文字の数々は、この時の彼らには、まったく意味の分からないものだった。

◆

◆

お久しぶりです、先輩。

と言っても、実際には二日ぐらいしか経っていないんですけどね。

まあ、先輩の事ですからきっと、そんな短い間にも、色々と無茶なことをしてるんでしょうけど。

久慈川（くじかわ）さんやクマさんが言ってましたよ？　「向こうの世界から、何か大きな力同士がぶつかってる気配がする」って。

きっと、それにも先輩が絡んでるんでしょう？

え？

ベル・ゼブブに……ベル・ベリト？

何ですか？　それ？

まあ、先輩が無事なら、なんでもいいですけど。

――ええ、大丈夫です。安心してください。先輩に頼まれたことは、ちゃんと調べてありますよ。

『セベク・スキャンダル』。

先輩も知っての通り、この事件は、一般的には『詳細不明のテロ事件』――という、なんとも曖昧な……そして、不可解な事件として知られています。

実際にどうかはともかくとして、です。

勿論、先輩も知っての通り、この情報の曖昧さは、政府が手を回した結果です。

まあ、あれだけの事件ですから、首謀者である神取鷹久（かんどりたかひさ）だけではなく、彼と個人的に繋がりのある、当時の政府高官の何人かが、事件後に手を回したんでしょう。

お陰で――先輩は、白鐘（しろがね）の力を使えば、何とか調べ上げることが出来るはずだと言ってましたけど――この事件を調べ上げるのは、そう簡単ではありませんでしたよ。

実際、アナログ的な意味でも、デジタル的な意味でも、かなりの苦労を強いられました。

それでも、何とか先輩の頼みを無事に遂行できたのは、あの人のお陰です。

あの人――南条グループの総帥、南条圭（なんじょうけい）さんの。

彼は、僕が御影町で色々調べまわっているうちに、僕の存在に勘付いて、そして、僕がなぜそんな事をしてるのか、その理由を調べ上げた上で、向こうからこっちに接触してきたんです。

勿論、最初は驚きましたよ。

何せ、いきなり見ず知らずの男性に声をかけられたと思ったら、実はあの南条グループの総帥だって言うんですから。

それに――実は、南条さんは、件の『セベク・スキャンダル』を解決した、ある高校生メンバーの内の一人なんです。

つまり、彼もまた、『ペルソナ使い』であるという事……それが一番の驚きでしたね。

でも同時に、僕はどこかで納得していました。

何で、四十を過ぎた初老の男性から、これ程の威圧感を感じるのかと、不思議に思っていたんですが……きっと、僕の中のペルソナが、無意識の内に、南条さんの力を感じ取っていたんでしょうね。

え？

ああ、すいません……調査の結果ですよね。

では、報告します。

ここから先は、殆どが南条さんからの受け売りなんですけど、彼が嘘をつく理由もありませんし、恐らく間違いはないでしょう。

結論から言いますと――これもまた、かなり驚きなんですが――この『セベク・スキャンダル』は、不気味なほどに、今回の『東京封鎖』と、事件の内容や過程が酷似しています。

一定区間内で封鎖された町。

どこからともなく、次々と現れる悪魔。

勿論こんな状況では、他の地域からの流通に頼ることは出来ませ

ん。

もっとも、封鎖内全域での停電というのは、そちらの『東京封鎖』だけであって、こちらの『セベク・スキャンダル』では、そういう事は起こらなかったみたいですけどね。

それと、もう一つ。

これは、恐らく先輩も知っているかもしれませんが――この『セベク・スキャンダル』でも、悪魔を召喚する特別な機器が使われていたそうです。

『D（デヴァ）・V・Aシステム』。

それが、その装置の名前です。

と言っても、そちらで出回っている悪魔召喚機器――COMP、でしたっけ？――よりも、ずっと無骨で大きく、とても携帯できる代物ではなかったようですが。

僕が南条さんから聞いたのは、ざっとこんな事ですけど……ほんと、不気味ですよね。

ちょっと、共通点があり過ぎるというか……。

南条さんにしても、その点は認めています。

もっとも、かと言って、だから何か分かったのかと言えば、そんな事は殆どなかったんですけど……。

え？

もしかして、今回の『東京封鎖』は、その『セベク・スキャンダル』を参考に引き起こされたんじゃないか、ですって？

それは……どうでしょう？　流石に妄想だと切り捨てたりはしませんけど……少し、考えすぎでは？

第一、もしそれが本当だとしたら、今回の『東京封鎖』を決行したのは、『セベク・スキャンダル』の詳しい内実を知っている人間という事になります。

言うまでもなく、決行したのは日本政府ですけど……当時、神取と繋がりのあった政府高官は、とっくに前線を退いていますし……。

……。

……。

……ええと、先輩。

実は僕、これ以外にも調べ上げたことがあるんです。

その……先輩の事を。

すいません。

勝手なことをした、というのは分かってます。

でも、どうしても知りたかったんです。

あの、十七年前の事件が終わった後、なぜ先輩は、他の皆と同じように、普通の生活に戻らずに、ペルソナ使いとしての、戦いに明け暮れる日々を送る事を選択したのかを。

やっぱり……『あの人』の為ですか？

あの……『有里（ありさと）　湊（みなと）』という――先輩が、八十稲羽に引っ越してくる前にいた学校の『先輩』の。

先輩の心の中には……それこそ、十七年前のあの事件を、皆で捜査している最中にも、ずっと、あの人の存在があったんでしょうね。

これは、桐条美鶴（きりじょうみつる）という女性から聞いた話です。

……本当にすいません。

要するに僕は、先輩の個人情報をコソコソと嗅ぎ回ったという事ですから……ここで、先輩に何を言われても仕方ないとは思ってます。

でも――重ねて言いますけど――それでも、僕は知りたかったんです。

なぜ先輩が、そこまでして戦い続けているのか……。

先輩には、天城（あまぎ）先輩という良き妻がいて、雪司（ゆきじ）ちゃんという、いい娘さんもいるというのに……。

それはきっと……今言った、有里さんの為なんでしょう？

桐条さんが言ってました。

先輩は……世界を救うという偉業を成し遂げた有里さんが、誰にもその事を知られることなく死んでいった事を、まるで我が身のことのように悔しく思っていた、と。

その気持ちは……僕にも分かります。

僕にしても、イザナミを倒した先輩の事を、大勢の人が知らないという事実に、これ以上なく悔しい思いを抱く時が、多々ありますから……。

ええ、先輩。先輩が言いたい事は分かってます。

自分は、別にあの人に強制された上で、この生き方を選んだ訳ではない――と。

僕も、有里さんが、そんなつもりで世界を救った訳じゃないというのは分かっています。

……なんて、有里さんと直接の面識もない僕が言っても、ただ偉そうなことを言ってるようにしか聞こえないでしょうけどね……。

でも……言わせて下さい。

そんな先輩の、彼に対する『想い』を知った上で、僕が思った事を。

僕の――考えを。

僕が思うに……有里さんは、別に、自らの行いを世界に知らしめたいが為に、世界を救った訳じゃないと思うんですよ。

これはきっと……皆のためにイザナミを倒した先輩なら、分かるでしょう？

だから……お願いですから、あの時、自分がもっとしっかりしていれば、なんて思わないでください。

自分があともう少し強ければ、あの人は死なずに済んだんじゃないか――だなんて。

有里さんはきっと、先輩の事を責めてなんかいません。

少なくとも、僕はそう思いますし――桐条さんも、そう言ってました。

もっとも桐条さんは、「これを彼に伝えるかどうかは、君が決めてくれ」と言った上で、この事を僕に教えてくれたんですけどね。

きっと、桐条さんは迷ってたんだと思います。

こんな事を伝えたところで、今さら、先輩は自分の生き方を曲げたりはしないでしょうから……。

ニュクスから世界を守った時、有里さんが一体何を考えていたのか、それは分かりません。

でも……少なくとも、自分の行いに気づいてすらいない、この世

界の人間を恨んで死んでいった訳じゃない――これだけは確かです。

きっと、有里さんは、こう思っていたのではないでしょうか？

世界中の人間が、自分の行いに気づかなくてもいいし、そもそも、自分の行いが世界にもたらした変化が、ほんの小さなものであっても構わない。

ただ、それまで一緒に戦ってきた仲間達にだけは――特に、先輩にだけは、自分の生き様を知っておいて欲しかったんだ、と。

……いえ。

僕がいちいちこんな事を言わなくても、先輩なら、もう分かっているでしょう？

ええ、そうです。

ここまで話せば、もう分かりますよね？

調査を進めていく内に、僕は知ってしまったんです。

先輩の『宿願』を。

十七年前から、先輩が夢見て――そして、今もまだ目指している、最終到達点を。

……別に、先輩が目指しているものについて、あれこれ意見をするつもりはありません。

先輩と有里さんは、まったくの違う人間ですし……。僕には、先輩が目指している『それ』を、悪だと決めつける資格はありませんから。

ただ、有里さんが、その命を終わらせる瞬間に、何を考えたのか……何を思って、この世を去ったのか……それをもう一度、先輩自身に考えてほしいんです。

そして……あともう一つ。

これだけは忘れないでください。

先輩は一人じゃありません。

花村先輩も、里中先輩も、天城先輩も、巽君も、久慈川さんも、クマさんも――皆、貴方の『仲間』だという事を。

それに――

私も、貴方が大好きですから。

◆

◆

直斗（なおと）……。

ありがとよ。

……こんな俺を心配してくれて……。

けど、ゴメン。

それでも。

それでも、俺は――

3rd Day『潜入』

『東京封鎖』が行われている山手線内から、およそ数十キロほど離れた地点。

その道路には、何台かのトラックが走っていた。

全てが、自衛隊が所持するトラックである。

つまり、その荷台に乗せられている何人もの人間も、全員が自衛隊員であるという事なのだが――それはともかく。

『彼』はその日、そんな数多くいる自衛隊員の内の一人に紛れて、トラックの荷台の片隅に詰め込まれていた。

『彼』の傍らには89式小銃が立てかけられており、トラックが道路の小さな隆起に乗り上げる度に、その銃身も、カタカタと揺れている。

カチッ、カチッ、と。

何故か、『彼』は先ほどから、もはや無意識のレベルで、右手に持っているそれ――金属製のライターを鳴らしていた。

『彼』は、同じトラック――『彼』が乗っているトラックに限らず、前や後ろを走っているトラックに乗っている人間全員に言えることなのだが――に乗っている人間たちと同じく、その身をグリーンを基調とした迷彩服で纏(まと)っていた。

ズボンや上着のいたるところに、大小様々なポケットが備え付けられており、その一つ一つに、傍らにある８９式小銃や、腰のガンホルダーに収納しているＰ２２０の弾薬、及び手榴弾やコンバットナイフなどが収められている。

どう考えても、どこぞのボランティアに参加するような恰好ではない。

アメリカやソ連を始め、多くの先進国が腐るほど所有している核兵器のお陰（？）で、第三次世界大戦など、もはやマンガやアニメなどの二次元でしかありえない現代における自衛隊の役割とは、他国からの侵攻を防ぐことよりも、最近ではむしろ、前述したボランティアなど、そちらの活動の方が多いというのに――そんな『彼』や、周りのトラックに乗っている人間たちの恰好は、いっそ異常であるとも言えた。

顔にガスマスクを被せているせいか、外見からでは『彼』の顔を伺い知ることは出来ない。

マスクの境目――後ろの首の付け根の部分――からはみ出している、若干赤味がかった茶色の髪が、特徴といえば特徴だが。

カチッ、カチッ、と。

全く飽きない様子で、何度もライターを鳴らす『彼』。

もっとも、トラックから断続的に発せられているエンジン音のせいで、『彼』がライターを打ち鳴らすその音は、『彼』の正面にいる別の自衛隊員にさえも聞こえてはいなかったが。

その日の天気も、昨日や一昨日と同じく、カラリと乾いた空気には全く水気がなく、地上にいる人間全員の体を、傍若無人な太陽の光が蝕んでいた。

複数のトラックが走っているその道は、どこにでもありそうなごく普通の公道だったが、どういう訳か、周りには人っ子一人見当たらない。

事情を知らぬ人間が見れば、一体何故、と思うこと間違いなしだろうが、しかし『彼』はその理由を知っていた。

間違いなく――これだけ閑散とした風景の原因は、間違いなく、これから自分が向かう先で起こっている『東京封鎖』なのだろう、と。

『東京封鎖』。

東京内に出現した、『悪魔』という人外の存在を外部へと侵攻させない為に、政府がとった苦肉の策。

そう言えば多少は聞こえがいいが――しかしそこで行われているのは、自衛隊による、山手線内沿いの、文字通りの『封鎖』だった。

しかも、無理に外へ出ようとする者は、たとえそれが何の武器も持たない民間人であろうとも、発砲を辞さないという徹底ぶりである。

事実、今より数十分ほど前に、上野駅を突破しようとした民間人によるデモのグループの内の数人が、そこを警備していた自衛隊員

たちに射殺されたという情報を、『彼』は入手していた。

『彼』を含む、その道を走っているトラック全てに乗っている自衛隊員たちの役割は、それが行われた東京へと赴き、そこでの山手線の警備に、増援として参加することだった。

今言った、上野駅での民間人のデモを受けて――という訳ではない。

単純に、出発開始地点などの影響で、彼らの到着だけが極端に遅れてしまった、というだけの話だ。

そう考えれば、『増援』という言葉も、どこか正確性に欠けるような気がしなくもないが――それはともかく。

『彼』もまた、他の隊員たちと同じく、封鎖内から民間人が脱出したりしないよう、山手線沿いの警備の増援として送り込まれた、隊員の内の一人であったが――しかし、それはあくまで、表向きの話だ。

『彼』の目的は、山手線沿いの警備にあらず――というより、そもそも彼は本来、自衛隊ですらない。

『彼』の本職は警察官だ。

一口に警察官と言っても、様々な種類があるので――『彼』が所属する部署の名前を、正確に述べるとするならば、『警視庁警備部警護課第二課』となる。

なんとまあ長ったらしい名称だが、その職務の内容は、主に国務

大臣や衆参両議院などの身辺警護――いわゆるＳＰというもので、当然、今回の『東京封鎖』における、自衛隊の増援として参加できるような人間では、断じてない。

にも関わらず、『彼』がこうして、増援に向かっている自衛隊員と一緒に、このトラックに紛れ込んでいるのには――当然、それ相応の理由がある。

一言で言うと、『彼』の目的は『東京封鎖への潜入』だ。

現在、封鎖内で、何かしらの企業の命を受けて、まさしくその『潜入活動』を行っているホンダなどを思い浮かべれば、大分イメージしやすいかもしれない。

もっとも『彼』の目的はホンダとは違い、『サンプルとして、悪魔を持ち帰ること』ではなく、それとはまた別のものなのだが。

勿論、政府の監視の目をかいくぐって、今のように、自衛隊という偽りの身分を名乗って『東京封鎖』へと潜入することなど、『彼』の力だけでは、とても出来はしない――『彼』は既に、警察官として二十年以上もの経歴を歩んできているが、まだ政府に気づかれないような情報操作が出来る程の地位は固めていなかった。

だからこそ――今回の件にあたっては、そういった地位を持つ、同じ警察官の知り合いの協力を『彼』は得ていた。

真田明彦（さなだあきひこ）。

堂島遼太郎（どうじまりょうたろう）。

そして、周防克哉（すおうかつや）――の、以下三名である。

とはいえ、警察内ではそこそこの権力を持つこの三人でも、今回、封鎖内へ潜入する『彼』に対して出来るサポートといえば、精々が政府の物資支援にかこつけて、『彼』を封鎖内への、自衛隊の増援リストに滑り込ませる程度の事しか出来なかったが――『彼』にしてみれば、それだけでも十分だった。

『彼』は本当に、封鎖内へと潜入できればそれでよい、と思っているのだ。

そこから先の事ならば、自分の力でなんとか出来る――とも。

と、その時だった。

細かく揺れる荷台の上で、突然『彼』は、バッと顔を上げた。

何故と聞かれれば――『彼』としては――『なんとなく』としか言いようがない。

それ程に、この時に『彼』が感じた予感は、ごく僅かなものだった――が。

ものの数秒も立たない内に――そんな『彼』の『予感』は、『確信』へと変わる。

基本的にはただの人間でありながら、それに気づいた『彼』の第六感は、非常に優れていると言えるだろう――事実、『彼』が確信を抱いてから、やはり、ほんの数秒と経たない内に、それは起こった。

グジュリ、と。

突然に、唐突に――『彼』が乗っているトラックの頭上にある空気が、音をたてて歪んだのだ。

それを見て『彼』が眉をひそめるのとほぼ同時に、次の変化が起こる。

この時、その変化に気づいているのは、まだ『彼』だけだった。

他の者達に関しては精々、『彼』と同じトラックに乗っていた自衛隊員の内の何人かが、突然その場で立ち上がった『彼』を、不審な目で見ていただけだった。

しかし次の瞬間には、『彼』が一体何を見て、そして何に気づいたのか――それをハッキリと、そして残酷に知ることになる。

何故なら。

『彼』の視線の先にある空気の歪みに気づいた何人かがそちらを見たと同時に――そこから、大量の悪魔が現れたからだ。

『悪魔』。

――が、実際にそれらが『悪魔』という名の生物であると気づいたのは、そのトラックに限らず、周囲にいる自衛隊員たちを見渡しても、『彼』だけだった。

今回、『東京封鎖』への増援に向かうにあたって、当然、彼らも

上官などから『悪魔』なる人外の存在は聞いてはいるが――『百聞は一見にしかず』とはよく言ったもので、耳で聞くのと目で見るのでは大違いなのである。

だからこそ、『彼』以外の自衛隊員たちは、目の前に突然『悪魔』が現れたという状況に見舞われても――最初の内は、ただ茫然としているだけだった。

しかし当然、そんな彼らの心情など、ただ殺戮の欲求を満たす為だけに現れた悪魔たちにはあずかり知らぬことだ。

戦闘はすぐに始まった。

いや、そこから先の展開を考慮するならば、むしろそれは『捕食』と呼ぶべきかもしれない。

ようやく何人かが、目の前にいる生き物が、あらかじめ耳で聞いていた『悪魔』という存在であると気づいた時には、既に何人かの隊員たちが、敵の悪魔――『ペンドラゴン』に、頭から丸かじりにされた後だった。

殺風景な道路に、それを間近で見た隊員の悲鳴がこだまする。

もちろん彼らとて、ただ怯えるばかりではない。

何といったって、彼らは自衛隊という名の組織に属する人間なのだから――言うまでもなく、何人かは傍らにある銃をペンドラゴンに向けて構えた。

が、実際に戦闘に参加できたには、精々、その内の半分がいいと

ころだった。

というのも、パニックに陥った隊員たちが冷静に銃の照準を相手に合わせる事さえできないまま、再び何人かの頭部がペンドラゴンの牙に噛み砕かれてしまったからだ。

『彼』の目の前にいた隊員の腹部が、間近に迫ったペンドラゴンの爪に切り裂かれ、あっという間にスライスしたトマトのようになってしまった。

その直前に『彼』はその隊員を助けようとしたのだが、別の悪魔――バジリスクが放った魔法を避ける為に、一旦その場で身を屈めてしまったせいで、救助に向かうまでの時間が、若干ロスしてしまったのである。

『彼』の周囲にいる隊員たちが、次々と悪魔の毒牙にかかっていく。

悪魔に関する知識は稚児(ちご)同然である隊員たちを、ただただ悪魔特有の本能に任せて殺戮していくペンドラゴンに――そして、バジリスク。

アマゾンにでもいそうなワニを、さらに一回り大きくしたような、巨大な悪魔がペンドラゴンで、鶏ともトカゲともつかぬ外見をした、緑色の眼球と黒い水玉模様が目立つ悪魔がバジリスクだ。

勿論、それらの名称にしても、今まさに命がけの戦いに身を投じている隊員たちの知識には収められてはいないし、仮にそうだったとしても、最早それどころではないだろう。

今彼らにとって重要なのは、この戦いを乗り切り、そして生き残ることなのだから。

こうした状況では、彼らがそれまでに培ってきた訓練など、まったく意味をなさない。

当然だ――入隊時前の訓練プログラムに、悪魔との戦いを想定した組織など、それこそ真田明彦が設立した『ペルソナ部隊』や、八年前に瀬多総司（せたそうじ）が設立した『特別対策チーム』ぐらいのものだ。

今まで公道を走っていたトラックは既に全台が停止し、荷台からも全隊員が地上へと降りていたが、その地上にしても、今や何人もの隊員の死体が、まるでポイ捨てされた空き缶のようにゴロゴロと転がっており、その内のかろうじで顔の半分が残った死体が、その虚ろな眼窩を、大声を張り上げて戦ってい生前の仲間たちに向けていた。

結局のところ、このような状況で役に立つのは、強靭な精神力と、そして自らの意思を貫き通す勇気だけだ。

そして『彼』は、そのどちらをも備えていた。

どこかで頭を吹き飛ばされた隊員の、ねっとりとした脳漿（のうしょう）が『彼』の顔に付着するが、勿論、そんな事には構っていられない。

自らの体に鞭をいれ、『彼』は一気に荷台から降りると、すぐ近くにいるペンドラゴンへと向かって走った。

次の瞬間、『彼』は腰からコンバットナイフを抜き、それを目の前にある太い緑色の首の後ろへと回すと、そのまま一気に横へと引

く。

その軌道上にあったペンドラゴンの首が真っ二つに裂け、噴水のように赤黒い血が、ドバッ！　と湯気を立てて吹き出す。

『彼』は咄嗟に、周囲に視線を巡らせて敵悪魔の数を確認した。

その数はおよそ二十体。否、たった今『彼』が仕留めた悪魔を除けば十九体だ。

――と同時に、三体のバジリスクが『彼』へと飛びかかった。

パックリと開かれたその口の中にある牙の数は異常とも言え、まるで鮫のようだった。

しかし『彼』は慌てない。ガンホルダーにあるＰ２２０をサッと抜くと同時に、照準を目で確認しないまま、迷うことなく引き金を引く。

バンバンバンッ！　という銃声が鳴り響いたかと思うと、飛びかかった全てのバジリスクが、叫び声も上げないまま後方に吹き飛ばされた。

続けざまに何体かの同悪魔が襲い掛かってくるが、『彼』は手に持っている武器を拳銃から８９式小銃へと変えると、それをフルオートで発射し、それら全ての悪魔をただの肉塊へと変える。

『彼』は何体かの死体を飛び越えて、一際激しい戦闘を繰り広げている地点へと飛び込んだ。

途中、横でウロウロしていたペンドラゴンの頭に弾丸をプレゼントし、念のため、新しいマガジンを装填する。

その時、突然爆発音が辺りに響き渡ったので『彼』がそちらに目を向けると、そこでは、先程まで後ろを走っていたトラックが、炎に包まれているところだった。

恐らくは、悪魔が放った何らかの攻撃がガソリンタンクに直撃したのだろう。周りにいた隊員たちのパニックが、さらに収拾がつかないそれへと変わっていく。

誰かが言った。

どういう事だ、こんなところに悪魔が出現しているという事は、結局、山手線内の封鎖は失敗したのか――と。

それを耳にした『彼』に言わせれば、とんだ勘違いもいいところだった。恐らくこれらの悪魔は、時間が経つにつれて魔力が充満していく、東京の禍々しい空気にあてられて出現した、いわば二次災害的な存在だろう。

となれば、これらの悪魔たちは、厳密には『封鎖内を超えてきた』ことにはならない為、『東京封鎖が失敗した』という事にはならない。

勿論、いくら『彼』でも、そんな事をいちいち説明している余裕はないが。

やがて、隊員たちの足元から、また別の悪魔が現れた。

その悪魔を見た『彼』は、一瞬、背中の辺りに冷たい感覚が走るのを抑える事が出来なかった。

まるで、出来の悪い西洋人形のようだ――というのが、最初にその悪魔を見た『彼』の感想だった。

もっとも、まともな神経を持つ人間ならば、どんなに手先が器用でなくとも、人形の頭の脇にクモの足を取り付ける事はないだろうが――要するに、その悪魔『ウブ』の外見はまさしく、そういうものだったのである。

カサカサと地面の上を這いまわるその姿は、まるでゴキブリのようだったが、少なくとも、丸めた新聞紙で叩けば死ぬような存在でないことは間違いない。

何が気に入らなかったのか――その内の何体かは、まるで予めそうするよう決めていたかのように、あっという間に『彼』との距離を詰めてくる。

悪魔に耐性が出来ているはずの『彼』でも、流石に、地面の上を赤ん坊の顔面が這い回っているという構図には、眉をひそめざるを得なかった。

その顔の脇から生えているクモの足が地面に触れる度に、カリカリという、耳障りな音が辺りに響き渡り――それがより一層、『彼』が抱いている不快感を煽り立てる。

だが、勘違いしてはならない。

この時『彼』が感じていたのは『不快感』であって、決して『恐

怖感』ではない、という事を。

『彼』は右手にＰ２２０を持ち、左手に８９式小銃を構えると、そのままひたすらに撃った。撃ち続けた。

赤くなった銃身の熱が『彼』の両手をジワジワと蝕んでいくが、それでも『彼』は撃つのをやめない。

次第に、辺りに横たわる死体の中に、隊員たちのものだけでなく、悪魔の姿もちらほらと見え始めた（もっとも人間界では、悪魔は死ぬと同時に黒い霧となって消えてしまうので、その姿を隊員たちが見る事が出来たのは、ほんの一瞬だったが）。

が、その死体の山を越えて、さらに多くの悪魔が、隊員たちへと殺到する。

次から次へと湧いて出てくる悪魔たち。

中には、先程『彼』が仕留めた悪魔と同類の、ペンドラゴンやバジリスクの姿もある。

その出現量は、『東京封鎖』内における魔力の浸透のほどを、暗に示していように見えた。

自分が想像している以上に、『東京封鎖』の行く末は、確実に人類にとって不本意な方向へと向かっている。

『彼』はそう思った。

途中からは弾丸を節約するために、段々とナイフだけで相手を仕

留める回数が増えてきた。

勿論、遠く離れた敵には銃を使用するが、黙っていても相手の方からどんどん寄ってくるので、そうする事は殆どなかった。

が、その『殆どない行動』――つまりは、『彼』が銃で敵悪魔を仕留めた瞬間を、偶然目に捉えた何人かの隊員は、思わず眉をひそめた。

おかしい、何故あの男の装備だけ、あそこまで威力が高いのか、と。

そう。他の隊員も当然、手に持っている銃を撃ち放ってはいるが、その攻撃による敵悪魔へのダメージは微々たるものだったのだ。

それは、銃口から放たれた弾丸が――偶然にせよ必然にせよ――見事に敵悪魔の頭部を捉えた時でも例外ではない。

隊員たちが放った弾丸は、思わず、この銃に装填されている弾丸はゴム製なのかと疑いたくなってしまうほど、その頭部を貫通しないまま、ポロリと地面に落ちてしまう。

だが実際には、隊員たちの攻撃がきかず、何故か『彼』が使用する兵器だけが、悪魔にダメージを与えられる事が出来ているのは――何も『彼』の装備だけが、他とは違う特別製だから、という訳ではない。

理由は単純にして明快。

それは――『彼』がペルソナ使いだからだ。

やがて『彼』は、それを証明するかのように――実際には、無限に続くのではと思われる悪魔との戦闘に、いい加減イライラしてきたというだけなのだが――その体から青い光を立ち上らせたかと思うと、次には、その背中から『もう一人の自分』を喚び出す。

同時に――ここへきて初めて、『彼』は、その口から言葉らしい言葉を発した。

「ペルソナ――」

顔に着けているガスマスクのせいか、その声は男とも女ともつかないような不明瞭なものになっているし、『彼』にしても、そこまで大きな声で言った訳ではないのだが――それでも、『彼』のその呟きは、その場にいる全隊員、および全悪魔の耳に、ハッキリと行き届いた。

「――『アポロ』！！」

それは。

『彼』の背から現れた、そのペルソナは――およそ、二十八年ほど前に、珠間瑠市（すまる）という都市で活躍した『ある男』のペルソナと、まったく同じ姿だった。

つまり、『彼』は。

『彼』の正体は――

「『ヒートカイザー』っ！！」

カッ！　と。

瞬時に、辺りの景色が、『彼』から発せられた青い閃光に支配されたかと思うと、次には、たちまちその光は赤い灼熱の炎へと移り変わった。

炎の波に、爆風。そして二度目の閃光。

それらと共に『彼』と、そして僅かに生き残っていた隊員たちの周囲に、赤黒い肉片が飛び散る。

全ての物音が消え――そして一瞬、静寂が辺りを支配した。

３ｒｄ　Ｄａｙ『千岳寺にて』

――品川、千岳寺。

１５６１年――永禄４年に、山村丹右衛門という男が、現在の目白台の付近で鬼子母神像（きしもじんぞう）なる物品を井戸から掘り出し、東陽坊に祀ったのが始まりと言われている。

１５７８年（天正６年）には現在の社殿を建立したという記録があり、当所における正式な『鬼子母神』という文字の表記では、『鬼』の上の点がない字体である事も有名だ。

そして。

そんな、由緒正しい寺の本殿の前にある石段に、一人の男が座っていた。

百八十はあるであろう長身に、鼠色の髪、足に下駄（げた）を履いたその男は現在、黒と緑で彩（いろど）られた羽織りを体に巻き付けるようにしている為、その全体的なシルエットを伺い知る事は出来ない。

目を閉じている上に、数秒毎に体が小さく上下している為、寝ている最中だという事が分かる。

大量の悪魔がはこびる現在の山手線内において、白昼堂々と惰眠（だみん）を貪るなど――もし、こんな光景を他の人間が見たならば、呆れを通り越して、むしろ感心してしまうに違いないような、そんな状況だった。

しかし不思議な事に、何故かこの時の千岳寺には、人の姿が見えなかった。いくら街中を悪魔が闊歩しているせいで、室内に避難する人間がどんどん増えてきているにしても、これは異常である。

むしろ――それこそ先日、衛国寺（えいこくじ）にて木原篤郎（きはらあつろう）が言ったように――神の住まう場所ならば悪魔も寄り付かないだろうという、そんな、ありもしない希望に縋った人間が、何人かいてもいいくらいなのだ。

その時。

「……んっ……？」

パチッ、と。

それまで、羽織りで身を包みながら寝ていた、その男――ナオヤは、唐突に目を開けた。何となれば、今の今まで寝ていたにも関わらず、自分の方へと近づいてくる何者かの気配を感じたからだ。

事実この時、ナオヤの目の前には、一人の男が立っていた。

いや、正確には、その男は『人間』ではなく『悪魔』なので、『一人』という言い方には些（いささ）か語弊があるかもしれないが――逆に言えばそれ程に、この悪魔の外見が人間に近いものであった、という事である。

もっとも、金色の輪を頭につけ、腰まで伸ばした青い長髪をなびかせている人間など、そうそう見かける事はないだろうが……。

不死の王『ベル・デル』の配下が一体。

幻魔クー・フーリン――である。

「……お前か」

クー・フーリンの方にちらりと顔を向けながら、ナオヤが言う。

「寝ていたのか？」

と、クー・フーリン。

「昔から、朝には弱くてな」

「……既に、朝という名の時間帯は過ぎているように思えるが……」

まあ、現在の時間帯を何と呼ぶべきかはともかくとして――確かにこの時、たった今夢の世界から抜け出したばかりのナオヤは、非常に眠そうな目をしていた。

パチパチとせわしなく目をしょぼつかせている様は、今にも二度寝を決め込もうとしているかのようにも見える。

仮にそうなってしまった場合、必然的に、自分が彼の目を覚まさせねばならない事を悟ったクー・フーリンは、それだけは御免だと思い、サッサと要件を済ませる事にした。

左手で片目をゴシゴシと擦っているナオヤの顔を真っすぐに見つめながら、事務的な口調で、

「……『例のもの』を確認しに来た」

と言う。

『例のもの』とは、また随分と曖昧な呼称だったが、しかしナオヤには、それが何なのかを理解出来たようだ。彼は右手を上に伸ばして、大きく欠伸をしながら、左手で自分が座っている場所より、少し横に離れた場所を人差し指で示した。

その場所にクー・フーリンが目を向けると、そこには、丁度彼の手の平に収まりそうなぐらいの大きさの、藍色（あいいろ）の機械が置かれていた。

人並みに世間に詳しい民間人ならば、一目でそれが『ＣＯＭＰ』という名の携帯ゲーム機であると、苦もなく分かった筈だが――そんな常識が悪魔であるクー・フーリンに通じる訳もなく、彼にしてみれば『人間が作り出した、娯楽の為の機械（からくり）』という認識が精一杯だった。

「既に設定した時刻を過ぎているから、もう届いている筈だ……」

ナオヤが言う。

その言葉を聞いているのかいないのか――クー・フーリンは無言で、閉じられた状態のＣＯＭＰが置かれている石段にまで足を進めると、迷うことなくそれを手に取り、何故か、ゆっくりとした動作で上下に開いた。

恐らく、普段から携帯ゲーム機に触れる機会などないが故に、どのように扱えばいいのか分からず、戸惑っているのだろう（それを見たナオヤが必死でクスクス笑いを堪（こら）えているのに、クー・フーリ

ンは気づかなかった）。

そこには、数時間前の宮下公園にて、有里淳一（ありさとじゅん）行が確認したのと全く同じメール――通称『ラプラスメール』が映し出されていた。

言うまでもなく、今日の――『東京封鎖』三日目に起こるであろう運命（ラプラス）の出来事を、非常に高度な演算によって計算し、予測したものだ。

そこにある内容を次々と黙読していくクー・フーリンだったが、不意に、メールの内容の内、ある一行を凝視したまま、ジッと動かなくなった。どうやら、彼にとっての重要な何かが、そこに記されているらしい。

「――『十八時頃、港区青山、青山霊園にて、不死の者【ベル・デル】が復活』……」

と、クー・フーリンが呟く。

残念ながら、『青山霊園』という地名を聞いたのさえ、この時が初めてであったクー・フーリンではあるが――それでも、人間界で言うところの十八時に、ついに自分の主であるベル・デルが、この封鎖内のどこかで甦る、という事ぐらいは理解できた。

「喜ぶといい」

ナオヤが言う。

「――お前が望んだ通りの結果だろう？　これでようやく、今日という日をもって、お前達の主であるベル・デルが甦る、というのだ

からな」

それに対して、しばらくの間クー・フーリンは無言だったが、やがて口を開いた。

「確かに……非常に喜ばしい事ではあるが……しかし……」

と、何故かそこで、首を小さく横に振るクー・フーリン。

「……私に言わせれば、これではまだ遅いぐらいだ。十八時とは……ベル・デル様にしても、これではとても満足なさらないだろう。事実、昨日の我々の任務が無事に成功してさえいれば、あのお方は、早ければ昨日の内に、この世界に現れていてもおかしくなかったのだ」

「……？」

それまでユラユラと頭を振っていたナオヤは、そこで訝(いぶか)しげに眉をひそめた。

「『昨日の任務』とは一体何の事だ？　それに失敗したとは？　あとついでに、その胸の傷はどうした？」

「そう矢継ぎ早に質問されても困る」

言って、クー・フーリンは、ナオヤに向かって眉を吊り上げた。

それでも、全ての質問に答える辺りから、彼なりの律儀さが伺える。

「昨日ベル・デル様より、その配下全員に、ある命令が下された。簡単に言うと、悪魔に対抗できる人間――『悪魔使い』をおびき出し、これを殺害せよ、との事だ。そして可能ならば、奴らが使用している悪魔召喚機器を回収しろ、と……」

そう言うとクー・フーリンは、ナオヤに向けて、手に持ったＣＯＭＰを小さく振って見せた。

「しかし、この任務を無事に遂行する為には、一つの大きな障害があった。それが――」

「――瀬多総司、か？」

自分の台詞を引き継ぐようにして言い放たれたナオヤの言葉を受けて、一瞬クー・フーリンはグッと唇を噛んだが、それでも何故、ナオヤが瀬多総司の存在に気づいているのかについては尋ねなかった。

「……そうだ。何故か此度の『神の試練』においては、『セト』などという偽名を使っているがな」

「あの男が仕事の先々で、それぞれ別の偽名を使って活動しているのは、最早周知の事実だろう」

揚げ足を取るようなナオヤの台詞を無視し、クー・フーリンは説明を再開する。

「とにかく、我々悪魔が大々的に人間界に侵行したとなれば、奴も黙ってはいないだろう――そう思ったが故に、我がその足止めを買って出たという訳だ。が、しかし……」

「――失敗した？」

再度、クー・フーリンの後半の台詞を引き継ぐナオヤ。しかも今度は、ニヤニヤとした笑みをその顔に張り付かせながらというオマケ付きだった。

「その胸の傷を見れば、一目瞭然だ」

それについてナオヤが指摘するのは、これが二度目だが――確かに、この時のクー・フーリンが、決して浅くはない傷を負っているのは明らかだった。

上半身にはいつもの白銀の鎧を着ておらず、代わりに――まるでミイラのように白い包帯を巻き、その胸の部分に赤い血が滲んでいるとあれば、百人中百人がそう思うだろう。

相変わらずのニヤニヤ笑いを浮かべているナオヤの顔を、クー・フーリンはキッと睨みつける。

「別に、失敗した訳ではない――確かに、私ではあの男には敵わなかったが、それでも足止め自体には成功した。結果的に、その先で繰り広げられている戦いに、奴が増援に向かう事はなかったのだからな。失敗したのはカラステング達の方だ。まさか、ベル・デル様の配下の中でも、特に熟達した悪魔である奴らが敗北するなど、私でさえ予想だにしていなかったよ」

言って――しかしクー・フーリンは、そこで二、三度、首を横に振ると、続いて小さくため息をついた。

「いや……それは言い訳だな……。確かに、あれは私の失態だった。私があの男に対して勝利を収め、カラステング達の手助けに向かっていれば、そこにいた悪魔使い達を殲滅できた筈だ」

その言葉を、どこか遠くの方を見つめながらという形で言わなければ、クー・フーリンは気づけた筈だ。

未だ石段に座ったままの状態であるナオヤが一瞬、先程のニヤニヤ笑いとは全く別の、薄く、冷たい笑いを浮かべていた事に。

「となると、その胸の傷は……瀬多総司につけられた、と解釈していいのか？」

「構わん。解釈も何も、それが真実なのだからな」

至極あっさりと、自らの失態を認めるクー・フーリン。

その殆どが自尊心の強い性格で知られる悪魔という種の中において、彼のような存在は珍しい。

「だからこそ、だ。まさか任務に失敗した上に、手ぶらでベル・デル様の元に戻る訳にもいくまい――地に落ちた名誉を回復させるという意味も込めて、何かしらの『手土産』を用意せねば」

その言葉を聞いて、ナオヤは首を傾げた。

「『手土産』……？」

「先程も言ったであろう。ベル・デル様が甦られるのに、十八時という時間は遅すぎる、と。それを早めるのに、役に立つ存在だ」

そして、クー・フーリンが言う。

「ベル・デル様の配下どころか、魔界においても、既にその噂で持ち切りでな――『原初の言葉』を持つ『歌姫』が、この地のどこかにいる、と」

「……」

何か、思うところでもあるのか――クー・フーリンの台詞に対して、ナオヤは何の言葉も返さなかった。

この時、彼の脳裏に浮かび上がっていたのは――かつて、ＣＯＭＰを制作する際に、何度か協力してもらった一人の女性の姿だ。

この世で、もっとも優れた『魔歌』の使い手。

青髪碧瞳の女性、アヤ。

恐らくクー・フーリンが言う『歌姫』とは、アヤの唯一の教え子である『彼女』の事だろう、とナオヤには想像がついた。

もっとも、それを口に出したりはしなかったが。

その代わりに、

「そうか、成功を祈っている」

と、ナオヤは言う。

実際に、心の中でどう思っているのかは別にして、だ。

次に彼は、クー・フーリンに向けて、スッと手を差し出す。

その動作の意味を理解したクー・フーリンはすぐに、それまで持っていたＣＯＭＰを、ナオヤの手に渡した。

ややあってクー・フーリンは、ナオヤに背を向け、ゆっくりとその場から立ち去ろうとする。

「もう行くのか？」

と、ナオヤが言う。

「ああ」

ピタリと、クー・フーリンは動かしていた足を止めた。

「善は急げ――否、悪は急げ、だ。あのお方がこの世に甦られる時間は、なるべく早い方がよい」

「そうか……残念だ」

と、ナオヤ。

「せっかく暇潰しに、将棋の相手でもしてもらおうかと思っていたのに」

「……生憎だが、貴様とそこまで親密な中になったつもりはない」

突き放すようなクー・フーリンの言葉を受けて、しかしナオヤは、「フッ……」と薄く笑っただけだった。

と、その時だった。

突然、バチイッ！　という音が辺りに響き渡ったかと思うと、次の瞬間には、クー・フーリンの右手に、彼の魔力で形成された、一本の『雷の剣（いかずち）』が現れた。

ゆっくりと、それの切っ先をナオヤの顔へと向けるクー・フーリン。

「言っておくが」

クー・フーリンが言う。

「私もベル・デル様も、貴様の事を完全に信用した訳ではない。先程確認したものの内容についてもそうだが……。あのお方に対して、何か一つでも偽（いつわ）りの情報を与えてみろ。その時は――」

「――殺す」

言うと同時に、ヒュッ！　という音が、千岳寺の境内（けいだい）にこだました。

目にも止まらぬ速さで、クー・フーリンが、手に持った雷の剣を振り抜いた音である。

それによって発生した衝撃波が、真っすぐナオヤの元へと向かっていき、彼の体を、熱したナイフでバターを切り裂いたかのように、アッサリと切断した――かのように見えたが、実際にはそうではなかった。

クー・フーリンが繰り出した剣撃は、ナオヤに当たるか当たらないかという擦れ擦れの位置を通り過ぎ、そのまま、彼が座っている石段の一部を、粉々に破壊したのだ。

勿論、『人類最強のペルソナ使い』であるセトを、後一歩というところまで追い詰めたクー・フーリンに限って、こんなつまらないミスはありえない。

彼は意図的に――あとほんの少しでナオヤに直撃するという位置に、斬撃を放ったのだ。

それと同時に、クー・フーリンの体から放たれた殺気の凄まじさには、筆舌に尽くしがたいものがあったが、しかし――それ程の殺気を向けられているにも関わらず、ナオヤは怯えるどころか、むしろ先程までと変わらず、薄く笑う程の余裕さえも見せた。

「ああ……楽しみにしている」

と、ナオヤが言う。

刹那、ゴオッ！　という強い風が吹き、それによって巻き上げら

れた砂埃から身を守る為に、一瞬とは言えクー・フーリンは、空いている方の腕で、顔を守らざるを得なかった。

やがて、風が収まった。しかし風だけではなく、先程までは確かにそこにいた筈のナオヤも、忽然と姿を消していた。

ほんの瞬きにも満たない、あれだけ短い時間の間に一瞬で姿を消すなど、とても人間の成せる技とは思えない。

しかし不思議とクー・フーリンは、あの男ならば、その程度の事はできて当たり前だと思えた。

「フン……」

無人となった千岳寺の本殿の前に佇みながら、ポツリと、クー・フーリンは呟く。

「藤堂尚也……食えん男だ」

やがてクー・フーリンも、止めていた足を再び動かし、千岳寺を後にした。

封鎖内のどこかにいるであろう『歌姫』――春沢芳野の元を目指して。

3rd Day『政府からの依頼』

防衛大臣は焦っていた。

いや、正確には彼だけではない――現在行われている『東京封鎖』の影響を受けて、一時的に、とある公共施設に『避難』している政府高官全員が、彼と同じように、ある者は頭を抱え、またある者は眼を閉じて低く呻くなどして、非常に困っていた。

困り果てていた、と言っていい。

事の発端は、彼らが秘密裏に抱えている、とある工作員からの連絡だった。

現在、封鎖内で着々と準備が進められている、『ある兵器』に関する情報を、同じく、封鎖内にいる人間――しかも単なる民間人――が手にしている、という事を、先程、防衛大臣は知ったのだ。

政府高官の内の誰かの汚職に関する事実が、ふとしたきっかけで世間に漏れたとあれば、それはそれで、何かのドラマのような話ではあったが、しかし防衛大臣に言わせれば、まだしもそちらの方が都合がよかった。

何故なら、今回その民間人に知られてしまった情報の機密レベルは、先程上げた例を軽く凌駕するし、また、そこからもたらされる危険度についても同様だったからだ。

もし、件の情報が世間に広く知れ渡ったあかつきには――冗談抜

きで、この日本という国の地盤が、根底から揺るがされかねないという、それ程までに、極めて重要、かつ危険な情報。

「クソっ……！」

珍しく、そのように悪態をつく防衛大臣の表情には、いくつかの冷や汗が流れていた。

結論から言ってしまうと、その情報を知ってしまったという、例の民間人を『処理』してしまった方が、手段としては一番手っ取り早い。

しかし――確かに、それが出来れば、これ以上に楽な解決策はないだろうが――これを実行に移すのは、中々難しい。

ここで重要になってくるのが、政府は確かに、今回の封鎖に大量の人員を送っているが、そのほとんどが、東京とその外側との間にある境界線の警戒にあたっている、という事だ。

勿論、例の民間人の口封じは、現在の防衛大臣にしてみれば、最優先で解決すべき問題ではあったものの、かと言って、それでは先に言った、封鎖の境界線に対する警戒を緩和（かんわ）してよい理由にはならない。

もし、例の民間人を殺害する為に、境界線に配置されている自衛隊を動かすとなると――山手線内の面積と、事態の重さを考えれば――最低でも、一個小隊程度の人員を動かさなければならないだろう。

しかし、そんなことをすれば、当然その隙を狙って、封鎖からの

脱出を考える人間が出てくる。

それもまた、防衛大臣にとっては――というより、政府にとっては、何としても防がなければいけない事態だった。

もしそのような事が起きれば、東京内にいる人間全員が『裁きの雷（いかづち）』とやらを受けて殺されてしまう――とあれば、尚のことだ。

もっとも、件の情報が一般人に知られてしまったのは、今回が初めてではない。

そう、前例があったのだ。

しかし、その時はまだ封鎖が開始されていなかった為に、政府が裏で手を結んでいる『ある男』に依頼し、その男を『処理』するだけで、事は済んだ。今回のソレとは、まるで状況が違う。

だが。

「……！　待てよ……？」

そこまで考えて、ふと、防衛大臣の脳裏にある二つの事柄が浮かび上がった。

一つは、もしや、今回その情報を掴んだ例の民間人は、もしかしたら、以前情報を盗んだ男の仲間なのではないか、という事。

そしてもう一つが――よく考えれば、今回の件を解決するためにもっとも簡単な手段が、先に挙げたものの他に、あともう一つだけあるではないか、という事。

言うまでもなく、この時の防衛大臣にとって優先して考えるべきことは、後者の方だった。

そのことを彼が知ったのは、およそ二日ほど前の、主な政府高官達による会議でのことだ。

ある一人の男が――ある『ペルソナ使い』が、現在の東京に紛れている、と。

元より、その男は確か、裏では政府や企業からの依頼を受けて、それによって得られる報酬を元に生計を立てている人間だった筈だ。

彼が過去にこなした『仕事』の中には、単純に人助けをするようなものもあれば、それとはまったく逆の事をするものもある事を、防衛大臣は知っている。

何より、その男は――いつの頃だったか――かつて『ポートアイランド・インパクト』という事件の秘密資料が、当時のテロ支援国家に居を構える犯罪集団に盗まれるという、今回の事と極めて似た事件を、前総理大臣の依頼によって、解決している。

二日前の会議でこそ、防衛大臣は他の政府高官に、さも自分がその男について知ったのは、現在の地位についてからの事だ、という風に振る舞ったが――実際には、そうではなかった。

彼は『ある理由』から――『防衛大臣』という役職につくよりも前から、その男の事を知っていたのだ。

……なんだか、どうも先程から「ある」とか「その」などといっ

た曖昧な表現を多用しているが、決して、それの詳しい設定をまだ考えていないという訳ではないので、どうか安心して欲しい。

閑話休題。

とにもかくにも、そこまで考えた後での、防衛大臣の行動は早かった。

彼は、すぐさま懐から携帯電話――ではなく、なにやら、黒い無線機のようなものを取り出すと、その男へと繋がるよう、三ケタの番号を指で押した。

◆

◆

短期間とはいえ、少しの間はともに行動をしていたセト達ではあったが、まだ未成年である淳達とは違い、彼らは立派な大人。既に自分の事は自分で考え、責任をもった判断を自分なりに下すことができる年だ。

当然、それだけの責任能力を持てるだけの年月を生きてきた以上、セトは勿論、他の三人――ジンやハル、ショウジも立派な大人であり、また同時に、それはつまり彼ら、あるいは彼女らの考えは個人個人でそれぞれ異なるということも意味していた。

まあ要するに、現在の彼ら――セト、ショウジ、ジン、ハルの四人は、それぞれ別行動をとっている、という事だ。

ジンは何やら調べものがあると言って、朝食を手早く済ませた後とっとと店から出て行ってしまうし、ハルは特に何かやりたい事があるわけではないようだが、だからこそハッキリとした目的を持つセトやショウジの邪魔をしたくないという理由で、彼女もまた、ジンのすぐ後に店から出て行ってしまった。

セトやショウジにしても、それぞれにまったく異なる目的を胸に抱いている為、特になにか別れの言葉を交わすこともなく、まるでそれがごく自然な流れであるかのように、いつの間にか別行動をとっていた。

セトは、せめて負傷したカイドーが目を覚ますまでは他の四人の面倒を見てあげてもいいと考えていたが、そのカイドー本人が突然姿を消してしまった以上、もはやその必要はなくなってしまったので、ショウジ達とはそこで一旦別行動をとるのは、セトにしてみれば当然の事だった。

（……ま、縁があれば、またその内会えるだろ）

今となっては誰もいない宮下公園前の道路を歩きながら、セトは思う。

昨晩、悪魔使いに目覚めたらしいジンはともかくとして、戦闘に感じてはズブの素人であるショウジやハルが心配でないと言えば、それは嘘になるが――元々、全員がそれぞれ全く別の考えを持って、今回の封鎖に臨んでいる以上、いつまでもずっと一緒に行動していられる訳がないし、何より、偶然知り合っただけの人間全員の面倒

を見ていられるほど、セトは暇な人間ではないというのも事実だった。

実は、つい先程まで彼は、その宮下公園内にて、高校時代の友人である白鐘直斗（しろがねなおと）と、連絡を取り合っていたところだった。

その事実を証明するかのように、現在、彼の右手には黒い、無骨なデザインの、トランシーバーらしき機械が握られており、セトはそれを、指先の上でボールを回すように、クルクルと弄びながら道を歩いていた。

セトは、ショウジ達と別れた後すぐに、いくつかの食料品や武器と一緒に、この通信機を、封鎖内にあらかじめ用意しておいた隠し場所から回収しておいたのだ。

勿論、現在の東京内では、並の携帯電話などは（何故か）例外なく圏外であるため、外部とまともに連絡を取り合うことは出来ない。

当然、これもまた、政府の方の手回しによるものなのだが……。昨日、秋葉原にて、ホンダのトランシーバーが普段通りの機能をまったく発揮しなかったことからも、それが分かるだろう。

しかし、その封鎖を監視している自衛隊のものとなれば、話は別だ。

今回の封鎖に駆り出された自衛隊員は、全員が、今回の封鎖においても、通常通りの機能を損なわせないまま使用することが出来る、特別性の無線機を使用している。

そしてセトは、過去に、政府の要人から何度もペルソナ使いとし

ての仕事を請け負っていた時に作った人脈を利用して、今回の封鎖に介入する際、その特別性の通信機とやらを持ち込んでいた。

ここ数日の間、封鎖内であるにも関わらず、白鐘直斗などと何度か連絡を取る事が出来たのは、全てこの通信機のお陰である（とはいえ、これだけ特別な代物となると、その分、通話できる相手も自然に限られてしまうのが難点ではあったが）。

もっとも、先程セトには、ショウジ達とは違う目的があって今回の封鎖に臨んでいるなどと言いはしたが、現時点において、彼に何かやることがあるのかと言えば、実はそうではなかった。

『神』や『レミエル』からの頼み――ひいては自分の『宿願』を成就させる為に行動するにしても、今セトに出来ることは特に何もないし、現在、彼がしている事と言えば、精々が前日、自分の『同属』の『ガブリエル』という天使に調達を頼んだ『聖剣ルシファー』なる武器が、無事に自分の元に届けられるのを待つことぐらいである。

先程、直斗に対して、あれだけ大層な事を言ったにも関わらず、こうなってしまうと、セトは本当に暇だった。

勿論、先日『神』に言われたように、不死の者ベル・デルがこの世に甦ったとなれば、流石にここまでのんびりとはしていられないだろうが、いっそのこと、それまではどこか適当な場所で昼寝でもして時間を潰そうかなー、という、余りにもだらけきったことを彼が考えていた――その時。

唐突に、今の今まで彼が弄んでいた通信機から、ピピピ、という電子音が鳴った。

言うまでもなく、何者かから、セトに対して連絡が入ってきたのである。

「ん……？」

また直斗からか？　と思いつつ、通信機の小さなモニタに目を通したセトだったが、すぐに違うと分かった。そこには、『ある組織』からの連絡を意味する『登録４』という文字が映し出されていたからだ（ちなみに、白鐘直斗から連絡がきた場合は、『登録２』と表示される）。

とはいえ、別にその組織とやらが、民間人にその正体を隠している、某秘密組織という訳ではない。むしろ、その逆だ。あっさりと正体を明かしてしまえば、今、セトに連絡を入れた組織は、他らなぬ――

「……？　日本政府から……？　こんな時に、なんの用だ……？」

疑問に思いつつも、とりあえず通信機の通話ボタンを押すセト。

彼のこの通信機の番号にかけてくる人間は、政府内ではそれほど多くない筈だが……？

『……お久しぶりです』

「……ああ、アンタか」

その老人のようなしわがれた声を聞くや否や、すぐに、セトは納得したような表情になる。

「何か用か？　防衛大臣さんよ」

セトは言う。

勿論、彼が何の変哲もない一般人であったなら、仮にもこの日本という国の『軍事』を管理している彼――防衛大臣に対して、このような口を聞ける筈がない。

しかし勿論、彼は『何の変哲もない一般人』ではないし、むしろ、この防衛大臣が今その座についていられるのは、過去にセトが、裏で彼の為に色々と手を回したからなのだ。

よって、年齢で言えば防衛大臣の方がはるかに上だが、だからといってセトは、自分がこの男に礼儀正しくしなければいけない理由を見出す事は出来なかった。

セトの言葉に対して防衛大臣は、しばらく何も答えなかった。

その沈黙に、思わずセトは眉をひそめた。何分、通信機を通しての会話なので相手の顔をうかがい知ることは出来ないが、それでもセトには、今まさに、防衛大臣が何か話そうとしているものの、それを逡巡している様子が、ハッキリと想像できた。

「……？　おい、どうした？　イタデンなら切るぞコラ」

相変わらず、とても防衛大臣に対する気遣いなど微塵も感じさせない態度で、セトが言う。

しかし、防衛大臣は気にしない――どころか、そんな、どこかイ

ライラしたようなセトの口調にビクッ！　と怯えた反応を通話口越しに示すと、やがて、次のように言った。

『その……あまりにも急で申し訳ないのですが、一つ、仕事を頼まれてくれないでしょうか？』

思わず、セトはプッと噴き出した。

今さらではあるが、仮にもこの国の政府高官である人間が、自分のような――公式的な記録では、ただのしがない翻訳家である自分に対して、いやにかしこまった態度をとっているというのは、やはりどこかおかしかった。

「何だ、随分かしこまった様子じゃねぇの――ったく、やれやれだぜ。でもまあ、良かったな。お前は運が良い。今はちょうど、俺にしては珍しく暇してたところなんだ。その仕事にかかるであろう時間にもよるが、今なら三割引きの報酬でその仕事を請け負ってやるよ。暇つぶしには丁度いい。……で？　その仕事の内容は？」

しかし。

その台詞を言ってから、ほんの数秒と経たないうちに、セトは、そのニヤニヤ笑いを即座にひっこめる事になる。

なんとなれば――先のセトの発言を聞いて、安堵したのか――防衛大臣が、先ほどよりもずっと落ち着いた口調で、次のように言ったからだ。

『実は、ある男を殺して頂きたいのです』

「……あ？」

悪ぃ、もう一度言ってくれるか？　と、周りにこの通信を聞いている人間がいないかを注意深く警戒しながら、セトは、あからさまに顔をしかめる。

『ですから、その封鎖内にいる『ある男』の始末を、貴方に頼みたいのです――いわゆる【暗殺（ウエット・ワーク）】……というヤツですよ』

3rd Day『盗聴』

――品川駅。

この駅にしても山手線内に含まれる施設には変わりない為、当然そこにも、何人もの自衛隊員が、どこからか封鎖からの脱出を企む民間人がやってきはしないかと、ギラギラした視線を周囲に走らせていた。

と、不意に、警戒に当たっている隊員達の耳に、獣が低く唸るような車のエンジン音が聞こえてきた。

『東京封鎖』が決行される以前から『悪魔』という存在を認知し、また、その脅威についても、ここ数日の間に十分思い知っていた彼等は、視線よりもまず、手に持っていた89式小銃をそこへと向ける。

壮年のベテランから、まだ成人したばかりだと思われる青年まで全員が、だ。歳の差に関係なく、どの隊員もがこれまでの数々の異常事態を受けて、皆（みな）、一定以上の成長を遂げているのだろう。

しかし彼等は、すぐにその銃口を下げた。耳につくエンジン音の正体が、確かに自分達の同胞が運転する車両によるものだと分かったからだ。

封鎖の境界線よりも、少し向こう側に離れた地点で、キッという音と共に車両が停止する。次にはその荷台から、続々と――元々、品川駅にいる隊員達とは別の――何人もの自衛隊員が出てきた。

しかし。

「ん……？」

品川駅にいた隊員達の内、もっとも年配と思われる風貌をした男が、そんな光景を見て、ふと眉をひそめた――先程『続々と』という表現を用いはしたが、それでも、彼の目に映る増援部隊の人数が、予め『上』から聞いていた人数よりも、遥かに少なかったからだ。

おかしいのはそれだけではない。増援の内の何人かは足を引きずっていたし、体のあちこちに、どうみても『血』としか表現できない液体を付着させている隊員もいる。

……何かがあったのだ。

長年にも及ぶ自衛隊員としての勘が、頭の中で、年配の隊員にそう告げた。

「一体どうした？」

年配の隊員は開口一番、挨拶もなしに、真っ先に下りてきた増援の内の一人にそう切り出した。

予め（あらかじ）そういった質問がなされる事を予想していたのか、その隊員は、全く慌てる事なく冷静に、ここに来るまでに起きた出来事を説明し始める。

そして。

その隙に――他の者達の意識が、少しでも周囲に分散しているその隙に、一人の自衛隊員が、まるで猫のように音もなく地面へと降り立った。

次には、ほんの一秒たりとも同じ場所にいる事もなくサッと足を動かすと、他の隊員の視界から隠れるように、近くの物陰へとその身を踊らせる。

正確には――品川駅が生み出す、薄暗い日陰の中に、だ。

『彼』は空を見上げた。

数日前から企(くわだ)てていた『東京封鎖への潜入』がようやく成功したこの時の天気は、驚く程の晴天だった。馬鹿げた表現であるのは百も承知だが――それでも、空一面に広がる青空を見た瞬間『彼』は、天候さえもが、自分に味方しているかのように思えた。

もっとも、自分とは違い、この『東京封鎖』で既に三日という時間を過ごしてきた人々の心の状態は、この澄み切った青空とは程遠いものに違いない。

そう思うと『彼』の心は僅かに痛んだが、すぐに、その痛みを意識の外へと追いやった。これから自分がまっとうすべき『使命』の内容を考えるに、余計な雑念を持ったまま臨んだとしても、成功する確率は極めて低いと言わざるを得ないだろう。

『彼』は僅かに体を動かし、他の増援が現地の隊員達と合流している光景をチラッと眺めた。

言うまでもなく、『彼』が忽然(こつぜん)と姿を消した事に他の隊員達はす

ぐ気づくだろうが、ここにくるまでに起きた悪魔達との戦いで『ペルソナ』を召喚してしまった事を考えると、どの道、自分は不審の目で見られていただろう、と『彼』は思った。

いくら、その時は上手くごまかし、何とか無事にここまで来る事ができたとしても、だ。

「……」

今、自分がいるこの場所が、大量の悪魔がひしめく『東京封鎖』の範囲内であるかと思うと、流石に緊張する。

だからこそ『彼』は、気持ちを落ち着かせるという意味で、ガスマスク越しに大きく息を吸い込んだ。青色のレンズと無機質なデザインが不気味なマスクではあったが、他の隊員達の中にも（まさか、お洒落のつもりではないだろうが）、何人か同じマスクを着けている人間がいたので、これまでの道中では、それほど目立ってはいなかった。

もっとも、この時『彼』が緊張していた理由は、実はそれだけではなかった――何となれば、以前から自分がマークしておいた『ある男』が、この東京内のどこかにいる、という情報を掴んでいたからだ。

そう、『彼』が今回の『東京封鎖』に潜入したのは一重に、その『ある男』に会う為だったのだ。公式な筋から手に入れた情報ではないが、それでも情報の提供者が、他ならぬ真田明彦（さなだあきひこ）であるという理由から、『彼』はその情報が真実である事を確信していた。

やがて、『彼』は腰の後ろに取り付けているウエストポーチから、

二つの小型機器を取り出した。

一つは、長いコードがついた黒いヘッドセット。

そしてもう一つが、巷(ちまた)で流行中の、りんごマークが特徴の会社から発売されている、やや大きめの携帯電話のような電子機器だ。

その場で屈み込み、一旦それらを地面に置いた後、まず最初に『彼』が手をつけたのは、黒いヘッドセットの方だった。

慣れた動作で耳に装着すると、耳あての部分から伸びているマイクの位置を調整する。次に携帯電話のような機器を手に取ると、反対側の方から伸びているコードのプラグを差し込んだ。

それに反応したのか、自動で機器の画面に映像が映し出される。一見するとタイムカウンターのように見えるが、実際には、通信機などで使われるような周波数の設定画面だ。

『彼』が指で画面をなぞると、それと共に、映し出されている周波数も動く。

しばらくして、『彼』は指を動かすのを止めた――と同時に、装着したヘッドセットに通信が入ってきた。

聞こえてくるのは、しわがれた老人の声と、精悍(せいかん)な外見を彷彿(ほうふつ)とさせる、壮年の男の声。

それは、数十分程前にこの東京内で交わされた、『ある通信』を傍受したものだった――リアルタイムで盗聴している訳ではなく、その時に盗聴したものを保存しておき、その内容を、『彼』は今改

めて確認しているのだ。

男の方の声が聞こえてきた。時折、小さなノイズ音も混じってはいたが、それでも『彼』には、その会話の内容を――大まかにだが――把握する事が出来た。

『何……用か？　防……臣……さんよ』

『その……あまりにも……申し訳ないのですが……仕事を……か？』

『……が良い……今……うど……ては珍しく……なんだ……その……よるが……その仕事を……やるよ暇つぶしには……内容は？』

『実は……殺して……のです』

『……？　……ワリィ……言って……か？』

『ですから……』

そこまで聞くと、『彼』は盗聴の音声を消した。

ヘッドセットを外し、電子機器からプラグを抜くと、元のように、ウエストポーチの中へと仕舞い込む。

次に、大きく息をついてから――『彼』はこう思った。

（――間違いない）

（――瀬多（せた）は今、この東京にいる）

狙うべき『ターゲット』の存在をハッキリと認識した事で、無意識の内に、『彼』の全身に力がこもる。

だからこそ『彼』は、それにつき動かされる形で、すぐにその場を後にしようとしたのだが――ふと、なにやら妙な気配を感じ、ピタリと足を止めた。

「……？」

ガスマスクの下で眉をひそめながら、あらぬ方向へと顔を向ける『彼』。

東京という都市には、かなり多くの建造物が乱立している。故に、現在の『彼』の位置からでは、それらに阻まれて見る事は出来ないが――実は、その視線の先には、翔門会の施設があった。

『彼』はそこから妙な気配を感じ、こうして、その方向に視線を向けている、という訳だ。

妙な気配。

まるで汚泥を啜るような、恐ろしく、おぞましく――同時に、どこか懐かしい気配。

「……」

もし『彼』が単なる一般人であったなら、ここは気のせいで済ませてしまっても良いところだろうが――しかし、『彼』は『ペルソナ使い』だ。

ペルソナ使いとは、つまりは『心』の使い手。

その為、彼等はこと直感力――いわゆる第六感などによる危機感知能力に、これ以上なく長けている。

その内の一人である『彼』が、ハッキリと得体の知れぬ気配を感じたのだ――これを見てみぬ振りするなど、正気の沙汰ではない。

が。

「……」

と。

ややあって――『彼』は、今の今まで視線を向けていた場所から、スッと顔を背けた。

何故なら『彼』には、他にやるべき事があるのだから。

正直それは、心の内にいるペルソナが必死に、今すぐそこへ向かえ、と訴えかける程の禍々(まがまが)しい気配だったのだが――それでも『彼』は、余計な寄り道などせず、本来の目的を遂行する事を選択した。

既に『彼』は、後先を考えず、感情に任せて行動を起こすような年齢ではないのだ。

だからこそ『彼』は、半ば無理矢理に――それを気のせいだと思い込み、目先の『使命』を優先すべき、と判断したのである。

再度、余計な雑念を頭から取り払うと、『彼』は――『使命』を

まっとうする為にはまず、どこかで装備品を補充する必要がある、と判断した。

先の悪魔達との戦いで――なるべく弾丸を節約したにも関わらず――Ｐ２２０のマガジンや、その他の細かい装備が、ほとんど底をつきかけていたからだ。

ペルソナ使いである『彼』にとって、武装というのはあくまで補助的な役割しか果たさないが、これから望む『使命』の内容を考えると、出来ることはなんでもやっておくべき、と『彼』は思った。

「……」

一番手っ取り早いのは、現地の自衛隊員などから、少々手荒な方法で借りるというものだが――まさか、これだけ多くの自衛隊員がひしめいている品川駅で騒ぎを起こす訳にもいくまい。

勿論、仮にそうしたとしても、『彼』には確実に生き残れる自信があったが――どうせやるならば、なるべく少人数の隊員しか配備されていないような場所が望ましい。

やがて。

「……」

一旦、『彼』は正面を向いたかと思うと、次には、陸上選手と同等か――或いはそれ以上の速さで、一気に駆け出した。

直接『ターゲット』の元へと向かうのではない。

『彼』の頭の中には既に、ここに来る以前に入手した、東京内に配備されている自衛隊員の情報が入っていた。『彼』はその中から、もっとも距離が近く、そして人員の少ない地点へと向かっているのだ。

厳密に言えば、そこに配備されているのは、普通の自衛隊員ではなく、特別機動部隊――通称『ＳＴＦ』と呼ばれる、自衛隊の中でもトップクラスの機密レベルを誇る部隊なのだが――それはともかく。

ヒュン、と。

そのスピードからは想像もつかない程の小さな音しかたてないまま、『彼』は品川駅から最も近い場所にあるビルの壁を駆け上がった。

一瞬でビルの屋上へと到達する『彼』。

高さにして、およそ三十メートルと言ったところか。

山手線内のほぼ全域を見渡す事が出来るその場所から、『彼』は『ある地点』へと視線を向ける。

そこは赤坂トンネルという、政府が秘密裏に開発した『抜け道』が用意されている場所だった――その機密性ゆえに、一般の自衛隊員にはその存在は知られておらず、代わりに、何人かのＳＴＦが配備されているされている、という訳だ。

そこまでの正確な距離と方角を頭に刻み込むように、『彼』は数秒の間、ジッとその場所を見詰めると――やがて視線を外した。

同時に。

そこにいるＳＴＦの隊員達の事を思いながら、『彼』はポツリと呟く。

「……悪く思うな」

周防達哉（すおうたつや）の姿がビルの屋上から消えたのは、それとほぼ同時だった。

3rd Day『野外音楽堂のバトル（1）』

「あれ……？」

そう言って。

東京のとある時間、とある場所にて――谷川柚子（たにかわゆず）は、急に何かを思い出したかのように、ふと足を止めた。

……いや、よくよく考えれば、ここで時間や場所を秘密にする意味はまったくもって皆無なので、やはり、ここははっきりと言っておこう。

時間は『東京封鎖』が始まってから三日目の、午前十時二分。場所は東京、野外音楽堂へと続く公園の入り口である。

「どうしたんだ？　ユズ」

と、そんな彼女に声をかけたのは、有里淳（ありさとじゅん）という少年である。

それまでは、そこよりも少し離れた位置で「なぁ……アツロウ。俺は一体どうすれば、姉さん（アイギス）を落とす事が出来るんだ？」と、少なくとも、その相談を現在進行形で受けている木原篤郎（きはらあつろう）にしてみれば、死ぬ程どうでもいい事を話していた淳だったが、今はその視線を、ユズと同じ場所――野外音楽堂へと続く公園へと向けていた。

だが、いちいちユズが返事をするのを待っている必要はなかった。何故、急に彼女が、ある一点に目を向けたまま動かなくなったのか

――その理由は、彼女が見ている先と同じ場所に目を向けた瞬間、淳にもハッキリと分かったからだ。

彼の親友であるアツロウと、そして彼の中学時代の知人であるケイスケもまた、それに気づく。

やがて、アツロウが言った。

「な、何だぁ!?　悪魔が団体さんでどっかに向かってる……!」

そう。まさに彼の言うとおりだった。淳の視界に入るだけでも、裕に十から二十体近くの悪魔が、野外音楽堂――何故か淳には、それらの悪魔たちが、そこに向かっているに違いないと確信できた――へと向かっていた。

「おいおい……まさかこの先で、悪魔限定のライブでもやるのか?」

ヒューッ、と口笛を吹きながらそう言う淳だったが、すぐに、ユズにたしなめられた。

「バカ!　そんな呑気なこと言ってる場合じゃないでしょ!」

「あっちって……確か、野外音楽堂があったような……」

そう言ったのはケイスケだ。

と、次の瞬間、その言葉を聞いたユズの顔が、サーッと青ざめた。

「野外音楽堂……!?」

一瞬、何故、ユズがそこまで怯えた反応を示しているのか、いまいち分からなかった淳だったが――途端に、彼の脳裏にも、ハッとある考えが浮かび上がった。

野外音楽堂と言えば、当然、歌を唄う場所だ。

そして、『歌』と言えば――

ともすれば、それはあまりにも短絡的な思考と言えたが、かと言って、絶対にそれはない、と否定できる材料がある訳でもない。

「……なーんか、嫌な予感がするな……」

淳が言う。その言葉に、ユズが続いた。

「うん！　そうだよね……。私もそう思う！　皆、行ってみよう！」

次には、普段の彼女からは想像もつかないような速さで、一気に、野外音楽堂へと駆けていくユズ。

普段のユズならば、それこそ、今まさに、目の前で罪のない民間人が殺されてしまう直前という状況でもなければ、大名行列よろしくの悪魔の行進など、間違いなく見た瞬間にUターンをしそうなものだが――逆に言えば、彼女はこの時、それだけ危機感を持つべき何かを、その視線の先に感じた、という事だ。

「オーケイ……！　変なモヤモヤを胸に抱いたままにしとくのもアレだし、一つ、体を動かす事にしますか！」

そう言って、すぐにユズの後に続く淳。そんな彼の背中を、

「よし……！　俺らも行くぞ、ケイスケ！」

「了解！！」

というやり取りをしたアツロウとケイスケが、ダンッ！　と強く地面を踏みしめながら、素早く追いかけた。

が。

この時、淳は――結局、彼はその事を口には出さなかったが――ある奇妙な感情を抱いていた。

それは胸の真ん中のあたりでグルグルとうずまき、淳にはそれが永遠に続くような気さえしたが、今はそれどころではないと思い、頭の中から余計な感情を振り払うと、より一層、走るペースを速めた。

◆

◆

――東京、野外音楽堂。

通称『野音』の名で知られているこの場所には、大・小の２つの

席があり、客席数・使用用途なども、それぞれで異なっている。

また、そこより少し離れた場所にある『初代の野音』は、明治時代――当初は小音楽堂のみだったが――に作られた音楽堂であり、日本においては最古の歴史を持つ、由緒ある野外音楽堂として有名である。

騒音等による近隣への迷惑を考えて、コンサートは土日、及び休日にしか行えないが、それでもこの場所でコンサートをするアーティストは後を絶たず、毎年五月一日の『メーデー』や――他には、消費税反対集会など、あまり音楽とは関係なさそうな行事も行われていたりしている。

そして。

そんな――客席数は椅子席二千六百六十四、立見席が四百五十の大音楽堂のステージの上で、一人の女が歌っていた。

美しい、ツヤのある赤い髪を肩の辺りまで伸ばし、左肩には薔薇（ばら）によく似た模様の、赤い刺青（いれずみ）が彫られ、やけに露出の激しい、白いチャイナ服のような衣装を着こんだ、その女。

春沢芳野（はるさわよしの）――である。

「――――♪――――♪」

彼女は、ただひたすらに、歌を唄う。

が、しかし。そんな彼女の歌声を聞いて立ち止まるような人間は、一人もいなかった――もっとも、現在の東京の状況を考えれば、そ

れも当然だろうが。

――にも関わらず。

ハルは相変わらず、一心不乱に、歌を唄っている。

人に聞かせる為――――という風ではない。

それは、自分だけに向けられた――――自分だけが、その歌の価値を理解出来てさえいれば、それでよいという、そんな様子で、ハルは唄っていた。

しかし。

「……ハアッ……たく……全然ダメだ」

そう言って――ハルは、まだ途中であるにも関わらず、その口から歌声を発するのをやめてしまう。

保護者である神谷詠司（かみやえいじ）が経営するバー『ＥＩＪＩ』で、ジン、シヨウジ、そしてセトという、この上なく怪しい銀髪長身の男と別れてから、いくらかの時間が過ぎていた。

彼らと別れた後、すぐにハルはこの場所へと赴き、そして、かれこれ三時間もの間ずっと、何曲も歌を唄い続けているのだが――結局、一度として、最後まで歌い終えた曲はなかった。

その全てにおいてハルは、先程のように、サビのところまで歌ったかと思うと、すぐに、何かが気に入らなかったかのように中断させてしまう――というサイクルを繰り返していたからだ。

「……こんなんじゃ、いつまで経っても、アヤさんに追いつけやしない……」

ハルの脳裏に浮かぶのは、彼女が尊敬してやまない、一人の女性の姿。

その昔、絶望のどん底にいた自分に、生きる希望と、そして歌の道を歩むきっかけを与えてくれた人物。

青髪碧眼の女性――『アヤ』。

そこまで考えて、フッと、ハルは笑った。

二日前の武芸館前といい、どうも自分は、歌を唄うたびに、否が応でも、あの人の事を思い出してしまうらしい――と。

或いは、それを望んでいるからこそ、彼女はこうして、暇さえあれば、歌を唄い続けているのかもしれないが。

滑稽だ、とハルは思う。

心の底から――滑稽だと。

ほんの少し、自分の師匠である人物の姿が、中々見られなくなったからという――それだけの理由で、ここまで心を陰鬱にさせている、自分自身を。

いくらなんでも――我ながら、心が弱すぎる、とも思った。

言うまでもなく、原因は彼女――アヤの、突然の失踪だ（ジンは、歌の勉強をするために海外に留学しているなどと言っていたが、ハルはあまり信じていなかった）。

少なくとも、彼女が自分の前から黙っていなくなる前までは――自分の歌声は、もっとマシだった気がする。

ただ、歌う事だけに夢中になっていた、あの頃。

「……いや、違う……」

独り言をつぶやきながら、ハルは小さく、首を横に振る。

歌う事に夢中になっていたのではない。

その歌をアヤに聴かせ、彼女を喜ばせる事だけに、ハルは夢中になっていたのだ。

あの頃の自分にとっては――それだけが、ハルの全てだった。それだけで、ハルの心は、これ以上なく満たされた。

「……『心』、か……」

ポツリと、ハルは呟く。

同時に、そういえば――と、彼女は思った。『心』と言えば……アヤさんは「その人の歌の価値っていうのは、その歌に、どれだけ自分の『心』を込められるかなんだよ」と、いつもよく言っていたなぁ、と。

なるほど、と、一人で頷くハル。

つまりは、そういう事。

恐らく――と言うよりはきっと――彼女（アヤ）が消えた時、それに同調するかのように、自分の心には、ポッカリと大きな穴が空いてしまったのだろう、と。

もしそうだとしたら、当然、今の自分の歌には『心』がこもっていないという事であり――同時に、アヤに言わせてみれば、そのような歌にはまったく価値がない、という事にもなる。

「だったら……」

ハルは思う。

自分が師と仰ぐ人物の姿は見えず、唯一の生きがいである歌もロクに歌えないようになってしまった自分には、果たして――

生きている価値など、あるのだろうか？

――と。

その時。

「……っ！！」

突然――それこそ、何の前触れもなく『ある気配』を感じ取ったハルは、バッ！　と後ろを振り向く。

見れば、なんと――いつの間にかハルは、数えるのさえ面倒な程の数の悪魔に、完全に包囲されていた。

まあ、包囲とは言っても、実際には、それほど極端に距離を詰められているという訳ではなく、まだ、ハルから見て遠くにある客席の端から、チラホラとその姿が見え始めた程度だが――それでも、もしここでハルが逃げようと思えば、すぐさまその進路を防げるであろう位置に悪魔たちはいたので、やはり、これはもう包囲されているとしか言いようがない。

少なくとも、逃げ場がないという意味では同じだ。

「……見ツケタ！　見ツケタゾ……っ！！」

と、そんな悪魔たちの内の一体――緑色の、袖のない法衣を着た、馬が二本足で立ったような姿をした悪魔、戦鬼『メズキ』――が、そんな事を言う。

悪魔たちが何を考えているかなど、ハルにとっては毛ほども興味はないが――それでも、今の台詞を聞いただけで、この悪魔たちが、自分の『何か』を狙って、わざわざこんな場所にまでやって来た、という事だけは分かった。

「ウフフ、この子なのね……この娘が、『原初の歌』を……」

そう言ったのは、背中から蝙蝠（こうもり）のような羽を生やした、女性型の悪魔であるリリムだ。

「……」

しかし。

実を言うと、つい先程、ハルが感じた気配は――この悪魔たちのものではなかった。

それは、とても悪魔に出せるとは思えない――どこか懐かしく、そして……恐ろしい気配。

知っている、とハルは思った。

自分は、この気配を放つことが出来る『人間』を知っている、と。

同時に、自分がこの気配を感じとる事が出来たのは、偶然ではなく、必然なのだと。

何故なら。

自分と『彼』は――『同類（おなじ）』なのだから。

ハルが目を向けているのは、ある一点。

全ての座席の後ろにある、立見席の入り口に――『彼』はいた。

「ハルさんっ！！」

と、その少年――有里淳が、まずはハルの姿を見て、そして次には、その周りに群がり始めている悪魔たちの姿を見て、そのように叫んだ。

当然、淳の周りには、彼の友人であるアツロウやユズ、そして、この時のハルはまだ面識がない、ケイスケの姿もあったが――どういう訳か、この時のハルには、淳の姿だけが、やけに目立って見えた。

「アンタは……」

ハルが言う。

「一体、どうしてこんな所に……？　いや、そんな事よりも、早く逃げた方がいいよ。ここ、すげー悪魔だらけだからさ……」

その言葉を聞いて、淳の隣にいるユズが、立見席にある手すりから身を乗り出して、次のように言う。

「ダメだよっ！　諦めないで！　今助けるから……っ！」

「……あ、うん……」

しかし、そんなユズの激励を受けても、いまだにその視線を淳と、まっすぐに合わせているハルには、曖昧（あいまい）な返事を返すことしか出来ない。

「なっ……何だよ、この悪魔の数……！」

と、そう言ったのはアツロウだ。

「ハルって、タダのインディーズの歌手だろ!?　なのに、昨日といい今日といい……どんだけ悪魔に狙われてるんだよ!!」

途端、その台詞を聞いたユズが、キッ！　と怒りのこもった視線を、アツロウへと向けた。もしかしたら、同じインディーズの歌手でも、ハルは『ただの』インディーズの歌手などではない、と言いたかったのかもしれない。

が、それを今この場で熱く議論されたらたまったものではないので、淳は大急ぎで口を開いた。

「と・に・か・くっ!!　まずはあの人を助けるぞ！　分からない事を考える時間は、その後でタップリ取ればいい！」

そんな淳の意見に、ケイスケも同意する。

「そうだね……！　とにかく今は、目の前の悪魔を片付けようっ！」

3rd Day『遭遇』

そんな風に。

有里淳（ありさとじゅん）とその仲間たちが、野外音楽堂にて、大勢の悪魔達と死闘を繰り広げ始めた頃――『特別対策チーム（STF）』の一員である飯綱（いつな）ミサキ一尉は、赤坂トンネルへと続く道を歩いていた。

本来なら、一般には知られていない赤坂トンネルから離れず、そこを守る事を任務としている彼女が、なぜ、今まで赤坂トンネルを離れていたのか――という疑問の声がどこからともなく上がってきそうだが、勿論、残酷な現実に堪えられず、途中で任務を投げ出した、という訳ではない。

原因は――有里淳一行が彼女の元を訪れたのとほぼ同時刻に上野駅で起きた、民間人のデモ行為だ。

そして、現場でそのデモに対応していた自衛隊のほぼ全員が、民間人に対して発砲している。

それを受けてイヅナは、後に、既に同じ報告を受けていた伏見（ふしみ）三佐から、『念のため、現場の状況を直接確認してこい』という指示を受けていた。

彼女は今、その指示を無事に遂行し、そして、本来自分がいるべき赤坂トンネルへと戻っているところなのである。

ついでに――現状においては、警察と自衛隊の両方に指示を出せ

る立場を利用して、現場にいた隊員達から、いくらかの装備品を譲ってもらっていた。

だからこそ、現在彼女は、左肩にかけたショルダーバッグの中からガチャガチャという音を発しながら、赤坂トンネルへと続く道を歩いているという訳だ。

それに関して言えば、伏見三佐の指示ではなく、イヅナの独断によるものなのだが――伏見三佐いわく『悪魔に対して既存の兵器は殆ど役に立たない為、自分達が持っている武器は、ただの飾りでしかない』だそうだ――これから先の事を考えると、装備品はいくらあっても足りはしない、とイヅナは考えていた。

（……それにしても）

再び、イヅナの思考は、少し前に起きた上野駅での惨状へと傾いていく。

本来なら国民を守るべき自衛隊が、その国民へ銃を向けるとは、なんと皮肉な話だろうか。

厳密に言えば、横暴とも言えるその行為にしても、封鎖を決意した政府にしてみれば『日本という国を守る為』、という事になるのだろうが――しかし、つい先程まで、件のデモ行為が行われた現場を見てきたイヅナにしてみれば、そんな政府の決意に対して、真っ向から否定する気はなくとも、全面的に肯定する気には、とてもなれなかった。

『封鎖内からの脱出』。

それが、民間人の一団が、デモを起こした理由である。

勿論、それを臨んでいるのは、彼らだけではない――有里淳一行と同じく、東京に閉じ込められた民間人の多くが、彼らと同じく、封鎖からの脱出を渇望している事だろう。

彼らが起こしたデモ行為など、そんな、何万人という民間人の願いの上澄みが、ほんの少し表面化しただけに過ぎない。

要するに――もっと酷い事が起きていてもおかしくはなかった、という事だ。

（そう考えれば）。

イヅナは思う。

（今回のデモの結果――『十人以上の民間人を、自衛隊が射殺した』という結果は、まだ被害が少ない方だと言えるのかしら……）

――いや。

違う。

もはや使い物にならない、様々な自動車類が辺りに放置されている中を歩きながら、イヅナは首を振る。

人が百人死ぬよりも、十人死ぬ方がまだマシ、という――そんな考え方は、ありえない。

死んだ人間の数が何人であろうと、そんな事は関係ない。

人は人だ。

自衛隊は勿論、『特別対策チーム』の一員である自分もまた、何よりも優先して守らなければならない筈なのだ。

この国の――日本の国民を。

それを。

「まさか、私達の手で殺す事になってしまうなんてね……」

ハア……と、イヅナはため息をつく。

先程から何度も言ってるように、彼女は『特別対策チーム』の一員だ――チームの創設者である『ある男』を始め、様々な上官から、政府の命令には絶対服従でなければならない、と厳しく言われてきている。

にも関わらず。

こうして、先のデモにおける自衛隊の対応に、少なからずの不満を抱いている自分は――まだまだ、兵士としては半人前である、という事なのだろうか？

数分ほど歩き続けると、周りで横転している車両の数が、さらに多くなってきた。

本来、イヅナが担当している地点――赤坂トンネルが近い証拠である。

そこへと近づくにつれて、イヅナは、つい数時間ほど前に、自分と話をした、ある少年達の事を思い出していた。

否、『少年達』ではなく、ただ一人の少年――有里淳を、だ。

彼、及び他三人の名前は、彼らがイヅナの前から去る際に、彼女に教えてくれたものである。

その時は、淳達の方から自発的に立ち去ったのではなく、殆ど、イヅナが無理矢理追い払ったようなものである為、去り際に残したそれらの名前も、かなり早口で言い残されたものではあったのだが――それでもイヅナは、彼ら四人の名前をしっかりと把握していた。

どちらにせよ彼らは、『東京封鎖』が決行されて以来、初めてイヅナが出会った悪魔使い（ターゲット）なのだ。

となれば――常に、何よりも任務の遂行を最優先事項としている飯綱ミサキが、彼らの名前を聞き逃すなどありえない事だった（結果として、彼らはターゲットではなかったが）。

閑話休題。

とにかく、有里淳だ。

有里淳。

イヅナが彼と初めて出会ったのは、つい先日の事だ。

もっとも、その時の出会いの内実は、悪魔と激しい戦いを繰り広

げていた有里淳を、イヅナが背後から無理矢理組み伏せたという――（少なくとも、された側である有里淳にとっては）中々に衝撃的なものではあったが。

勿論それは、この時、イヅナがまだ、有里淳が自分のターゲットだと誤認していたが為に起こった事ではあるのだが――しかし、よく考えて欲しい。

仮にその時、有里淳が、イヅナの目前で悪魔を召喚していたとしても――果たして、まだ成人にも達していない少年を、戦闘のプロである飯綱ミサキが、突然、何の前触れもなく組み伏せるなど、ありえるだろうか？

仮にやるとしても、普通ならそこは、背後から銃を突き付けるのが一般的であるにも関わらず――それらの手順を一気に省いて、イヅナは自らの武力を行使して、その場で有里淳を拘束したのだ。

が。

イヅナに言わせれば――あれでもまだ、手緩いぐらいだった。

実は、それまで彼女は、トンネル内で、有里淳が多数の悪魔と戦っている場面の一部始終を見ていたのだ。

ありえない。

それが、その時の光景を見て、イヅナが抱いた印象だった。

『ただの一般人』が、悪魔に対して、あれほどの戦いを繰り広げられるなど、ありえない――と。

しかも、イヅナの目から見る限り、彼の年齢は、恐らく十七歳かそこらというところだろう――これもまた、イヅナにとっては驚きの事実だった。

（いくら、『悪魔使い』としての力があるといっても――）

（それでも、彼は異常過ぎる）

もっともその時、有里淳は、戦いの終盤辺りで悪魔からの不意打ちを受け、その手に持っていたＣＯＭＰを弾かれてしまったが故に、一時的に『悪魔使い』としての力を失っていたのだが――それでも、（なんと）彼は素手で戦い続けた。

結果として、その戦いは、イヅナが物陰から悪魔の頭部を銃で狙い撃ちした事で終局を迎えたものの――それでも、僅かな間とはいえ、まだ成人にも達していない少年が、複数の悪魔に対して、徒手空拳で立ち向かった事に変わりはない。

否――成人になっていないなっていない以前に、そもそも、素手で悪魔と対峙しようとする人間自体、ごく少数だろう。

これまでＳＴＦの一員として、並の人間よりは、遥かに多くの悪魔と遭遇しているイヅナだからこそ、それが分かる。

頭の中で悪魔を思い描くのと、実際に目の当たりにするのとでは――まったくの大違いであるという事を。

『才能』というやつだろうか？　とイヅナは思った。

もっとも、イヅナにしても、僅か二十六歳という年齢で、ＳＴＦのエースを務める、紛れも無い天才なのだが――そんな彼女の目から見ても、有里淳という人間はずば抜けていた。

恐らく彼は、生まれついての戦士なのだろう、とイヅナは推測する。

数時間ほど前に、自分がジッと見つめた、あの青い目に宿った強い意志を思い出せば明らかだ。

あれは紛れも無く、一人前の『戦士』の目だった――あればかりは、どれだけの訓練を積もうとも、手に入れられるものではない。

日常社会では何も目立った特徴がなくとも、一度戦場に上がると、どんなに不利な状況ものともしない、兵士のエキスパートへと『進化』する人間は、たまにいる。

そして有里淳は、そんな希少な人間の内の一人なのだろう。イヅナもまた、そういった『進化』を遂げる人間を何人も見てきたし、また彼女自身も、そういう過程を経て兵士へと『進化』した人間だった。

もっとも――それにしたって、若干十七歳にして、そんな才能に目覚めるなど、やはり、これ以上なく驚くべき事ではあったが。

（そういえば……）

そこまで考えたところで、イヅナはふと、ある事を思い出した。

（十九年近く前に、『ニュクス』という存在から世界を救った、あ

の『ペルソナ使い』も、当時の年齢は確か、十七歳ぐらいだったっけ……）

と。

その時だった。

考えている内に、ようやく、赤坂トンネルの入口近くまでたどり着いたイヴナだったが――彼女はそこで、ある『違和感』に気づき、ピタリと足を止めた。

『違和感』。

と言っても、この時イヴナが感じたそれは、本人にしても、まだ気のせいだと言われても仕方ない、と思う程に微かなものだった――が。

しかし。

そこから一瞬の時間も経たない内にイヴナは、そんな自分の疑念に、ハッキリとした確信を抱いた。

当然だ。

何故なら――彼女の視線の先では、何人もの人間が、気を失った状態で倒れていたのだから。

「……っ！！」

すぐさまイヴナは、近くの物陰にバッと飛び込み、その身を隠し

た。

コンマ数秒たらずも呆然とせずに、そのような行動に出れたのは、流石は飯綱ミサキと言うべきだろう――倒れている人間を見て、すぐに、それがまだ『気を失った』状態であることを見抜いた事にしても然りだ。

昨日までは隣で一緒に戦っていた人間が、次の日には悪魔の手によって殺される事など、日常茶飯事であるＳＴＦ所属のイヅナにしてみれば、むしろ、その程度のスキルは持ってて当然だと言えた（勿論どう考えても、それはごく普通の日常生活においては、まったく不要のスキルではあったが、それを彼女に言うのは酷だというものだろう）。

しかしだからと言って、じゃあ、倒れている人間が全員死んでいた場合よりも、今の彼女の精神は安定しているのかと言えば、残念ながら、そんな事はまったくなかった。

理由は二つ。

一つは、倒れている人間全員が、自分と同じＳＴＦの一員である、という事。

そしてもう一つが――その全員が、殺さない程度に手加減されている、という事だ。

しかも、ＳＴＦに属する人間は、全員が、並の自衛隊員よりは遥かに多くの戦場を経験し、かつ非常に高い戦闘能力を持っているとなれば、尚更だ。

これが果たして、単独によるものか、あるいは複数の人間による犯行かは分からないが――どちらにせよ、未だ姿が見えない『敵』の実力は、相当なものに違いない、とイヴナは思った。

倒れている人間の中には、イヴナが顔と名前を把握している人間も何人かいたが――しかし、その程度の事では、イヴナは冷静さを欠いたりはしなかった。

もし仮に、彼らが殺されていた場合でも、イヴナは同じように冷静でいただろう。彼女は体力だけでなく、その精神力も鍛え上げられているのだ。

タイミングが悪い、とイヴナは思った。

倒れている人間の中に、彼女の上司である伏見三佐の姿はなかったが、それ自体は別に、なんら不思議な事ではなかった――なんとなれば、上野駅の様子を見に向かうよう、イヴナに指示を出した直後、伏見は彼女に、自分も他の部隊の状況を確認する為に、これから、山手線内の各駅へと見回りにいかなければならない、と言っていたからだ。

数時間前に、有里淳達とイヴナが会話していた時は彼女しかいなかったのにも関わらず、この時に限って、他に何人かの隊員がいるのも、それが理由だ――まさか、いくら民間人に秘密にしているとはいえ、数少ない封鎖からの抜け道に対する警戒を、少したりとも緩める訳にはいくまい。

だからこそイヴナは、上野駅へと行く前に、他の地点に配置されている隊員に、応援を頼んだのだ。

もっとも――現状を見る限り彼等は、それほど忠実に任務を果たせた訳ではなさそうだが。

（私だけで何とかするしかない、か……）

勿論、倒れている者達を襲撃した何者かが、既にこの場を去った後だというなら、後は気絶している人間から事情を聞けば済む話なので、そちらの方が楽ではあったが――流石に、そこまで楽観的な希望を抱けるほど、イヅナは愉快な人間ではなかったし、何より、戦士としての彼女の本能が、敵はまだここにいる、と、先程からしきりに訴え続けていた。

やがて。

懐からＰ２２０を引き抜いたところで、イヅナはある事に気づいた。

先程まで彼女は、倒れている人間全員が気を失っていると思っていたが、よく見てみると、実はそうではなかった。一人だけ、まだ意識が残っている。

イヅナは右手にＰ２２０を持ったまま、今度は左手で、腰の鞘に収められているダガーナイフを取り出した。

次には、辺りを警戒しながら、中腰で、なるべく早く、まだ意識のある隊員の元へと向かっていく。

その隊員は壮年の男で、唇の端からは、赤黒い血が流れていた。苦しそうに顔を歪め、片手で腹部を押さえている。その様子を見てイヅナは、恐らく、肋骨を折られたのだろう、と思った。

ナイフだけを鞘に仕舞い、Ｐ２２０を右手に持ったまま、イヅナは、その男性隊員の傍らにひざまついた。

「どうしたの？　誰にやられたの？」

男の声は、咳き込みながらの上に、かなり小さく囁くようなものだったので、非常に聞き取りにくかったが――それでもイヅナは何とか、男の言っている事を把握する事が出来た。

「ば……化け物……あれは……化け物だ……」

直後、彼の首からフッと力がなくなり、その頭が、ゴトリと地面に落ちた。慌てて首筋に指を当てるイヅナだったが、すぐに安堵（あんど）した――どうやら、気絶しただけらしい。

それとほぼ同時だった。イヅナの背後から、何かを探るような、ガサゴソという音が聞こえたのは。

「――――っ！」

自分がまだ気づかない内に、見えざる『敵』に背後を取られてしまった事で、戦々恐々となるイヅナ。

――が、実際にはそうではなかった。いや、確かに『敵』は彼女の背後にいたのだが、その『敵』とイヅナとの距離は十メートル近くも離れていたし――そもそも『敵』は、イヅナの存在にさえ気付いていないように見えた。

恐らくは、先程までの一連の行動を、なるべく静かに行ったお陰

だろう。

再び、近くの物陰に身を隠しつつも、イヅナは改めて、その『敵』の姿を確認する。

そこに、『彼』はいた。

ガスマスクを被り、全身を黒い戦闘服で身にまとった『彼』が。

（あの男は、一体……？）

またも、何かを探るようなガサゴソという音が聞こえたので、一体、先程から何をしているのかと思い、イヅナは物陰の隙間から、コッソリと『彼』の様子を伺った。

『彼』は地面に片膝をつき、傍らにある『何か』を手で漁っていた。

さらにイヅナが目を懲らしてみると、その『何か』は――気を失って路上に倒れている隊員の内の一人だった。

唐突に、『彼』の手がその隊員から離れた、そこには、いくつかの手榴弾や、Ｐ２２０のマガジンなどが握られている。

どうやら今の今まで、隊員が気絶している内に、奪えるだけの装備品を奪っている最中だったらしい。

イヅナの中で、『彼』のその行動と、周りで気を失っている隊員達との姿が、一本の線で繋がった。

（今しかない……！）

『彼』が自分の存在に気づく前にと、イヅナはすぐに行動を開始した。

音をたてず――かつ、素早く移動し、ほんの数秒も経たない内に、『彼』の背後へと身を踊らせる。次には手に持っていたＰ２２０の銃口を、『彼』の後頭部に突き付けた。

これまで、何百何千回と繰り返されたイヅナのその行動には、まったく無駄がなかった。だからこそだろう――『彼』はこの時になってようやく、背後にいるイヅナの存在に気づいた。

イヅナの方からでは後ろ姿しか見えないという事もあったが、それ以上に、『彼』がつけているガスマスクの眼球レンズ部分が青く、鈍く光っており、それが不気味だった。

が――勿論、その程度では、イヅナは怯まない。

「それを捨てなさい」

未だ『彼』が手に持っている、先程、倒れている隊員から奪った装備品を顎でしゃくりながら、イヅナが言う。

「……」

『彼』は素直にその指示に従った。装備品を持った片手と膝とをそっと下ろし、それらを地面に置く。そんな『彼』の、こちらの言葉に対する従順過ぎる行動が、逆にイヅナを不安にさせた。

案の定、『彼』はすぐに、イヅナの思惑とは違う行動に出た。

無抵抗の意志を示す為に両手を上げる、ここまではいい。が、その直後に、地面から膝を上げながら、ゆっくりとイヅナの方に体を向けるという動作は、どう考えても余計だろう。

「動かないで！」

鋭い、猛獣が威嚇しているかのようなイヅナの声。同時に、ガチャッ！　と脅すように銃を鳴らす――が、それでも『彼』はうろたえる様子を見せない。

目の前で立ち上がられた事で、ここへきて初めて、イヅナは『彼』の身長が、日本人にしては遥かに高い部類にある事に気づいた。百八十か……もしかしたら、百九十はあるかもしれない。少なくとも、イヅナよりも頭一つ分以上大きいのは確かだ。相当に鍛え抜かれた体つきをしており、ガチガチに着込んだ戦闘服の内側からも、それらの筋肉の盛り上がり具合が分かった。

イヅナがその気になれば、いつでも頭を吹き飛ばされてしまうような状況であるにも関わらず、軽く手を上げている『彼』の姿には、どこか余裕があるように見えた。

首を傾げてまでいる『彼』の様子からはまるで「そんな玩具（おもちゃ）で、

一体何が出来るというのか」と、暗に馬鹿にされているような気もして、それが、イヅナは気にくわなかった。

だからこそイヅナは、不快そうに眉をひそめた訳だが――そのせいで、一瞬とはいえ、僅かな隙が生まれてしまった。

そしてすぐに、その代償を支払う事になってしまう。

突然、『彼』の体がバッ！　と動いたかと思うと、次にはＰ２２０と、それを握る手首の片方を掴まれ、イヅナの体は、そのまま強引に『彼』の懐へと引っ張られた。同時に、『彼』の強烈な膝蹴りが、彼女の腹部に襲い掛かる。たまらず、口から大量の息を吐きだしそうになるが、直後、頭部に放たれた『彼』の肘打ちのせいで、それすらも叶わなかった。

ここまでの攻防に、ほんの数秒もかかっていない――否、これでは『攻防』とさえ言えないだろう。実際にはイヅナは、『彼』が仕掛けてくる全ての攻撃に対し、ろくに反撃する事も出来ていないのだから。

『彼』の足払いがイヅナの左足を捕らえた。なす術もなく地面にたたき付けられた彼女は、今の攻撃で頭蓋骨が割れたのではないかと思いつつも、出来る限り素早い動作で、腰にあるダガーナイフを抜き取った。

――しかし、イヅナがそれを振るうよりも遥かに早くに、『彼』は次の行動に移っていた。

その時、イヅナの目の前にあったのは『彼』自身の姿ではなく、『彼』が構えた銃口だけだった。あともう少しで鼻に触れるか触れ

ないかというところに銃口を突き付けられていたので、地面で腰を落としている状態のイヅナにはそれしか見えなかった。

「……くっ……！」

そして――そんな状況にあっては、いくらイヅナと言えども、反撃の為にナイフを振り抜こうとしたその手を止めざるを得ない。

見れば、『彼』が突き付けているＰ２２０は、つい先程まではイヅナの手にあった筈のものだった。彼女が扱っている装備は――名称は同じでも――その内の細かな構造など、全てがＳＴＦの特注である為、これは間違いない。

一体、いつの間に奪い取ったというのか。

彼女の唇の端からは、ゆっくりと赤黒い血が流れていたが、それさえも、この時のイヅナには気にならなかった。

顔に傷をつけられたとあれば、ごく一般的な女性なら間違いなく大騒ぎするところだろうが、彼女はここで大騒ぎするどころか、最後に自分の外見に気を遣ったのはいつの事だったのかさえ覚えていないような女だった。

銃口を頭部に向けられつつも、何とか隙をついて反撃の糸口を掴もうとイヅナは考えていたが、その隙さえ――ほんの少したりとも――この時の『彼』からは見当たらなかった。

「……」

そのまま、たっぷり一分ほどの時間をかけて、ようやく、もはや

自分に勝ち目はないと悟ったのか、イヅナは、体から徐々に力を抜いていく。

この男が何者かは知らないが、既に、自分は殺されたも同然だろう。

『彼』がほんのちょっと引き金を引くだけで――それだけで、飯綱ミサキという存在が、この世から消滅してまうのだから。

それでもイヅナは、みっともなく命乞いをしたりはしなかった。

彼女の精神は、そこまでやわなものではなかったのだ――事実彼女は、体から力を完全に抜いた後になっても、未だに、その目に宿らせた敵意だけは、まったく緩める事なく『彼』へと向けたままだった。

（……ここまでね）

イヅナは覚悟を決めた。

『死』を受け入れる覚悟を。

あとほんの数秒と経たない内に、『彼』が撃ち放った銃弾が、自分の頭部を粉々にした時に備えて。

どれだけ不利な状況であろうとも、最後の最後まで諦めやいという姿勢は、確かに立派なものだろう。

しかしイヅナは、それが兵士にとってもっとも必要な気概であるとは思っていなかった。仮に戦場で、そんな『余計な感情』を優先

した結果、前線から退かざるを得ず、かつ命を落とさないような中途半端な傷を負ってしまったらどうする。

その場合は、負傷した兵士の手当てをする為に、最低でも他に一人の兵士の手を借りなければいけなくなり、更に戦況は悪くなるだろう。

それならば、最初から素直に死んでいた方が、まだしも味方の為になろうというものだ。

そう。兵士に要求される真の気概とは、最後まで諦めない姿勢ではなく――そのような感情を抱く前に、自らの手で命を絶つことなのだ。

だからこそイヴナは、この残酷な現実を受け入れる為に、強く覚悟を決めたのだ――が、しかし。

ここで、予想外の事態が起こった。

スッ……、と。

『彼』が、イヴナの頭部から銃口を外したのだ。

「えっ……？」

呆然となるイヴナ。

一瞬、せっかくの優位な状況を、アッサリと放棄した『彼』の神経を疑いかけた彼女ではあったが、次の『彼』の行動を見て、そんな疑問はすぐに消し飛んだ。

まず最初に、『彼』は空いた方の手でイヅナを指し、自分の顔を指し――そして最後に、同じ手の親指で、自分の首を掻き切るような動作をした。

一言も喋らない上に、ガスマスクのせいでその表情さえも伺えないが、それでもイヅナには、『彼』が何を言いたいのかがハッキリと分かった。

今回は見逃してやる――

だが、次は容赦しない――

そして『彼』は――あろうことか――バッとイヅナに背を向けると、そのまま、次の気絶している兵士の装備を漁りに行く為に、ゆっくりと歩き出した。

「……！　……このっ……！」

今度こそ完全に、イヅナのはらわたが怒りで煮え繰り返った。言うまでもなく、ここまでコケにされながら黙って引き下がるような兵士では――否、女では――彼女はなかったからだ。

故に彼女は、立ち上がると同時に、握っていたナイフを『彼』の背中目掛けて突き出した。

背後から、心臓へ一突き。

それが、この時のイヅナの狙いだった。

そして。

宣言通り――イヅナに対する反撃という形で繰り出された、今度の『彼』の攻撃には、まったく容赦がなかった。

ゴッ！！　という鈍い音が、赤坂トンネル前の空間に響き渡る。

体を振り向かせると同時に放った『彼』の裏拳が、イヅナの頭部を違わず捉えた音だ。

「あ……がっ……！？」

見えなかった。

まったく――見えなかった。

糸が切れた人形のように、イヅナの体が、夏の日差しによって熱せられた道路へと倒れ込む。

と、同時に、自分の意識が、急速に失われつつあるのを自覚しながらも、イヅナは確かに聞いた。

倒れた自分を見下ろしながら――ここへきて初めて放たれた、『彼』のその言葉を。

「……悪く思うな」

その言葉を聞いたのを最後に、飯綱ミサキの意識は、完全に途絶えた。

3rd Day『野外音楽堂のバトル（1）―2』

――東京、野外音楽堂。

「『炎の乱舞』！」

ボッ！！　という音と共に、地面に向けられた有里淳（ありさとじゅん）の右手から、凄まじい威力の火炎魔法が生み出される。

「うおっ！？」

「きゃあっ！？」

そのせいで、たまたま近くにいたアツロウとユズにいくつかの火の粉が降り懸かってしまったものの、勿論、現在の二人には、その程度の事はダメージにはならない。

そもそもこの時、淳は『攻撃』を目的としてその魔法を放った訳ではないのだ――地面に向けて撃ち出した魔法の推進力を利用して、即座に春沢芳野（はるさわよしの）の元へと移動する為である。

淳と、そして、そんな彼の視線の先で、今まさに悪魔に襲われようとしているハルの頭の中を過（よ）ぎるのは、つい二日前の出来事。

あの時――今と同じように、武芸館前で、大量の悪魔に囲まれていたハルを助けようとした時も、淳はまず最初に、このように魔法を地面に撃ち出し、その勢いを利用して彼女の元へと移動したものだ。

もっともその時は、そんな無茶な移動方法のせいで上手く体のバランスがとれず、最終的には、みっともなく体勢を崩してしまったのだが。

しかし、今は違う。

今。

あれから既に、二日ばかりの時が経過した『今』となっては――当然、有里淳の実力も、いつまでも未熟なままではない。

何より。

かつてニュクスを退けた、伝説のペルソナ使いの才能を受け継いでいる彼に対し――二日という期間は、あまりにも長すぎる。

事実彼は、空中でまったく体勢を崩す事なく、ハルがいる場所より少し離れた位置に難無く着地したかと思うと――次には、すぐ近くにいたメズキの頭部に、強力な肘打ちを叩き込んだ。

「ガッ……！？」

メズキが反撃する前にと、淳は、さらに次の行動へと移行した。

体勢を崩したメズキの右腕を自らの左脇で抱え込むと、そのまま柔道の技術を応用して、別の悪魔がいる場所へと投げ飛ばす。思わぬところからそんな奇襲を受けた数体の悪魔達が、さながら、ドミノが倒れていくかのように、投げ飛ばされたメズキと共に地面に叩きつけられた。

「あ、相変わらずスゲェな、ジュンの奴……」

その一部始終を見ていたアツロウが、思わず感嘆の声を上げる。

ユズやケイスケにしても彼と同じ心境のようで、今もなお周囲には大量の悪魔がいるという現状さえも忘れて、淳の行動に見入っていた。

その間に、バッとハルのすぐ近くにまで身を踊らせる淳。

まごうことなく、二日前の、武芸館前での戦いの再現である――ただ一つ、有里淳の実力が、当時とは比べものにならない程に成長しているという、その一点を除いては。

「大丈夫ですか!?」

ハルの体のどこかに傷がついていないかを確認しながら、淳が言う。

先程までの彼の動きを見て、少々――というよりはかなり面食らっていたハルだったが、それでも何とか、

「あ、ああ……まぁね」

と答えた。

「そうですか……よかった……」

心底ホッとする淳。

と、そんな彼の耳に、未だ立見席のエリアにいるアツロウの声が聞こえてきた。

「ジュン！」

「どうした！？」

周りでは悪魔の唸り声なども間断なく響き続けているので、二人はかなりの大声を出さなければならなかった。

「ハルさんの無事を確認できたら、すぐに一緒にそこから離れろ！！」

「ハアッ！？　何言ってんだこのオタクロウが！　お前らだけ置いて尻尾を巻いて逃げるとか、そんな事できる訳――」

「そうじゃねぇ！　とにかく動けつってんだよ！　いくらお前でも、それだけの数の悪魔を相手に、一カ所に止まったまま相手にする事は出来ねえだろ！」

「……っ！」

悔しいが、アツロウの言う通りだった。確かに、淳の実力は二日前に比べれば段違いなものではあったが、それ以上に、現在周りにいる悪魔の数は大過ぎる。

少し目を動かしただけでも、視界に映るのはとにかく悪魔、悪魔、悪魔だ。これだけの数の相手をまともに相手どって、それでハルが無事でいられたら、それは奇跡以外のなにものでもない。

そして有里淳は、そういった――『奇跡』などというくだらないものは、一切信じていない人間だった。

「ハルさん！」

言って淳は、彼女の方に左手を差し出す。それを見たハルは、一瞬ためらうかのような素振りを見せるが、今は照れている場合ではないと判断すると、すぐにその手を掴んだ。

ハルと手を繋いだ淳がステージの端へと走り出すと同時に、周りにいた悪魔達も、まるで砂鉄が磁石に引き寄せられるように、ワッと動き出した。

その余りの数の多さを見て、ここまでは終始、どこか達観しきったかのような、冷静な態度を取り続けていたハルも、流石に自分の頬が勝手に引き攣るのを止める事が出来なかった。

「あー……何か、具体的な考えはあるのかい？」

「とにかく走りましょう。連中との距離を少しでも開けるんです」

「そりゃ、名案だね」

目をグリグリさせながら、ハルが言う。立見席の方では、淳とハルを追う悪魔をさらに追う形で、アツロウ達も行動を開始していた。

「俺達も行くぞ！」

アツロウの声を受けて、ユズとケイスケの二人が、懐からＣＯＭＰを取り出す。

「うん！」

「了解！」

三人が戦闘に参加するその様子を、ハルの手を引きつつ、淳は視界の端で見ていた。

しかし、そんな僅かな隙を突かれたのか――突然、彼の体に何か重い物がぶつかってきた。

ハルを巻き込まない為に、咄嗟に彼女の手を離した淳ではあったが――そのせいで、受け身を取ることも出来ないまま、その『何か』によって地面にたたき付けられる事になる。後頭部がコンクリートの地面に直撃し、自分の目からいくつかの火花が飛び散るのを、淳は確かに見た。

「なん――！？」

だ、と言葉を続ける前に、その『何か』が淳の顔面目掛けて次の攻撃を仕掛けてきた。

咄嗟に首を捻ってそれをかわすと同時に、淳はここへきてようやく、自分に不意打ちを仕掛けてきたのが、ハルの元に駆け付ける前に、自分が投げ飛ばしたメズキである事に気づいた。

メズキの顔は先程受けた屈辱を百倍にして返してやると言わんばかりの怒りの表情に満ちており、ただでさえ赤い顔が、今は更に赤くなっていた。

「アイツ……今までは見なかった悪魔だけど……もしかして、出てくる悪魔が、日に日に強くなってきてるのか……！？」

どこか離れた場所から、ＣＯＭＰから悪魔を召喚した際のバシュッ！　という音と共に、そんなアツロウの声を耳にした淳ではあったが、当然のごとくこの時の彼には、呑気に相槌を打っている暇はなかった。

「こ……の……！」

しばらくの間、地面の上で、淳とメズキによる揉み合いが続く。

と、そうこうしている内に――

「有里君！　ハルさんが！」

「……っ！」

どこからともなく聞こえてきたケイスケの声を受けて、淳は反射的に、ハルがいるであろう場所に目を向けた。

考えてみれば、淳と交戦中のメズキはともかく、彼がハルから離れているこのタイミングを、他の悪魔達が見逃す筈もない。

案の定、ハルは現在、数体の悪魔に詰め寄られ、ステージの台の部分の壁にその背を預けているところだった。

彼女の心臓の太さは相当なものであるらしく、悲鳴の一つも上げないのは立派だったが、それでも、その頬に一筋の冷汗が流れているのが、淳の方からでも確認出来た。

「クソッタレ……！」

淳に馬乗りしている（洒落ではない）メズキの力は相当なものらしく、真田明彦や桐条美鶴によって鍛え上げられた彼の腕力をもってしても、短時間でこの悪魔の束縛から逃れるのは至難の技だった。

かといって、今魔法を撃てば、まず間違いなくハルを巻き込んでしまうだろう――それ程までに、彼女と悪魔達との間にある距離は短かった。

――となれば、やるべき事は一つだ。

「ハルさん！」

そう呼び掛けると同時に、淳はズボンのポケットに手を入れ、そこからＣＯＭＰを取り出した。

次には迷うことなく、ハルへ向かってそれをほうり投げる。

一つ間違えれば、ＣＯＭＰは固い地面に落下し、最悪、故障していただろうが――しかしハルは片手で、それを見事にキャッチして見せた。

が、ここで問題が起きた。

「ちょっ……どうしろっていうのさ！？」

困り果てたようなハルの声。

（あ……しまった！　ハルさんはＣＯＭＰの使い方を知らないんだった！）

すぐに使い方を説明しようとした淳ではあったが、仲間の中で、一番彼の近くで悪魔達と交戦していたユズが、それよりも早く、

「画面を開いて、カーソルを『悪魔召喚』に合わせるだけです！早く！」

と言った。

当然、ハルはすぐにその指示に従った。彼女から言われた通りにＣＯＭＰを操作すると、そこから淳の悪魔を召喚する。上下の画面から眩ばい光が発せられた事で、彼女に詰め寄っていた悪魔達が目をくらませ、一瞬、その動きを止めた。

ＣＯＭＰから召喚されるのとほぼ同時に、有里淳の仲魔である女神サラスヴァティは、すぐに『嵐の乱舞』を放った。ハルを中心に一陣の風が巻き起こり、それによってあと一歩というところまでハルに迫っていた悪魔達が、風に当てられた木の葉のように遠くへと吹き飛ばされる。

ただしそれには、それほど遠くない場所でメズキと揉み合っていた有里淳も含まれていたが……。

「――ってうおぉい！　おかしいだろコレ！　何で俺まで吹き飛ばされてんだ!?」

「申し訳ございません、主。一刻の猶予もない事態でしたので、手加減できませんでした」

と、サラスヴァティが言う。

「そ、そうか……。いや、それならいいんだ。ただ、てっきり俺は、昨日『サラちゃん』なんてあだ名をつけた事で、お前がキレたんじゃないかと思ってサ……」

「それがまったく要因にないと言えば嘘になりますが、割合はせいぜい九分九厘程度です」

「ほぼ全部だよね！？　嫌なら嫌って最初から言えや！」

何やら状況に似合わないトークを始めた淳とサラスヴァティの両名だったが、言うまでもなく、敵の悪魔達にしてみればそんな茶番に付き合ってあげねばならない義理などまったくない。

事実、先程淳と一緒に客席まで吹き飛ばされたメズキが、今度はハルに向かってその足を動かし始めた。

しかし、今度は淳にも用意が出来ていた。

ほんの少しの間とはいえ、彼からハルに狙いを移したのが、メズキの運の尽きと言えるだろう。

淳は、驚く程の速さでメズキのすぐ後ろへと移動すると、その勢いを利用して、メズキの首に強力な後ろ回し蹴りを見舞わせた。淳にとってメズキの長い首は、どうぞいつでもへし折って下さいと言われているのと同じだった。

首をおかしな方向に曲げ、ガクンと膝を落とすメズキの体を踏み

台にして、淳は一気にハルの元へと跳躍した。

そして再び彼女の手を掴み、移動を再開する。

「一緒に来てくれ！」

サラスヴァティの方に顔を向けながら、淳が言う。

自分の主からの命令を受けて、当然、言われた通りにするサラスヴァティではあったが、何故か彼女は、淳とハルが手を繋いでいる様子を、どこか羨ましそうな目で見ていた。

ここまでに淳が倒した悪魔は、さきほどマッチ棒のように首をへし折ったメズキの一体だけだったが――実際にこの場からいなくなった悪魔の数は、それよりも明らかに多かった。

言うまでもなく、アツロウ、ユズ、ケイスケらの三人が、ここまでの間に奮闘してくれた結果である。

淳だけではなく、アツロウやユズにしても、ＣＯＭＰから初めて悪魔を喚び出した時と今では、その動きがまるで違っていた。

勿論、二日間も同じような事を続けていれば、どんな人間でも多少は成長するだろうが、それ以上に、これまでの戦いが全て『命懸け』のものだったという事が上手く作用しているのだろう、と淳は思った。体の奥底に眠っている生存本能が、二人の成長を促したのだろう、とも。

勿論、命懸けの戦いなど、経験しないで済むならそれに越した事はないが……。

そして、ケイスケも負けてはいない。

正直なところ淳は、先日の東洋アンズ前での戦いで、ゴズキの一撃で戦闘不能に陥ったケイスケの実力を、心のどこかでそれほど高くないと思っていたのだが――とんでもない。

今この瞬間をもって淳は、そんな自分の予想が、まったくの見当外れであると理解した。

ケイスケの戦い振りは、アツロウやユズと同等か――あるいはそれ以上のものだったのだ。

思えば、今まで淳達が三人で悪魔と戦ってきたのに対し、彼はたった一人でここまで生き延びてきたのだ。そう考えると、今淳の目に映っている、少しの恐れも見せずに悪魔に立ち向かうケイスケの姿は、ある意味で当然と言えるのかもしれない。

と、その時、

（――っと！　人の心配してる場合じゃねぇか！）

間一髪、大口を開けて突っ込んできたマカラを、ハルの手を引きながら慌てて移動する事で回避する淳。

かなりの不意打ちだったが、しかしこれでも、まだマシな方だろう、と彼は思った。

アツロウ、ユズ、ケイスケが他の悪魔達の注意を引き付けてくれていなければ、淳とハルに群がる悪魔の勢いは、こんなものではな

かった筈だ。

それでも、先程の攻撃の勢いを殺しきれず、派手な音をたてて客席へと突っ込むマカラの後ろから続々と現れてくる悪魔の数は、およそ五体近くもいたが。

それらの悪魔に、牽制をかける形で広範囲に『炎の乱舞』を撒き散らしながら、淳が叫ぶ。

「あーもう！　こう次から次から湧いて出てこられると、流石に疲れるっつーの！　何ですかコレ!?　これがＤ－ＶＡのボーカルの集客力ってヤツですか!?」

淳に負けじと、ハルも叫び返した。

「そんな訳ないだろ！　いや、まぁ、確かに、コイツらが来る前までは歌ってたけどさ……つかアンタ、一昨日も似たようなこと言ってなかったかい!?」

「さぁて――覚えてません、ねっ！！」

言いながらも淳は、右足を自分の頭よりも高い位置に上げると、そのまま一気に振り下ろした。

ズガシャァッ！！　という破壊音と共に、彼の右足がコンクリートの地面にめり込み、その周りに亀裂が走る。

と同時に、そこから身も凍るような冷気が立ち上ったかと思うと、それよりも一瞬遅れる形で、地面から巨大な氷塊が次々と突き出した。

有里淳の十八番、魔法の応用である――通常は手から発する筈の魔法を、足から発動しただけではなく、地面より下を魔法の発動地点にすることで、見えない場所からの奇襲を可能にしたのだ。

それによって二人に襲い掛かろうとしていた全ての悪魔が絶命し、その身を黒い霧へと変えて、消滅していく。

確かに、敵の悪魔の数は多いが――それでも、状況は確実に、自分達に有利な方向に向かってきている、と淳は確信した。

……いや。

厳密に言えば、淳はこの時、今述べたほど確固たる自信を持てた訳ではなかった。

（くそ……！）

淳は思う。

（確かに状況は、こっちにとって有利に進んでる筈なんだ！　……筈、なのに……！）

なのに。

何故か、淳は――先程から嫌な予感がして堪らなかった。

（クソ……！　一体何なんだ？　この感じ……！）

何か、大事な事を見落としているかのような――背中に纏わり付

いて離れないような、そんな、薄く粘(ねば)っこい不安。

どういう訳か――この時の淳の脳裏では、いつか見た『ある光景』がフラッシュバックして仕方なかった。

先日の事だ――太陽が地平線の下に落ちる夕暮れ時に、ふと東京ドーム前を通りかかった淳は、そこで気になるものを見つけた。

それは、奇妙な声を上げながら疾駆する小牧翠(こまきみどり)という少女を、ケイスケが必死に追い掛ける姿――ではない。

いや、確かに、それはそれで大いに気になる光景ではあったが――その時、淳の目についたものとは、それではなかった。

先程から、彼の脳裏に浮かび上がっている光景とは――その東京ドーム前にて、何者かが激しく争った跡の方だ。

「なーんか、嫌な予感がするな……」

「え？」

突然、妙な事を言い出した淳に対し、ハルが疑問に満ちた視線を投げかけるが、淳は短く「何でもない」とだけ言って、それをやり過ごした。

しかし。

かと言って、やはり、彼の状況把握能力が欠如しているという訳ではなかった。

しつこいようだが――確かに、どこからどう見ても、状況は、淳達にとって有利なものになりつつあるのである。

最優先で守るべき存在であるハルはともかく、彼女を身を呈して守っている淳や、アツロウ、ユズ、ケイスケまでもが、ここまで傷らしい傷をまったく負わされていないのだから、それは間違いないだろう。

……今のところは。

と、その時だった。

周りからどんどん集まって来ている悪魔の内の一体――戦鬼ゴズキ――が、次のように言ったのは。

「ウタダ……歌ヲ寄コセ！　『始マリノ歌』ヲ、我ラガ主――『ベル・イアル』様の為に！」

「あ……？」

それまで、今自分が感じている、この嫌な予感の原因は何なのかと必死で考えていた淳は、思わずその作業を一旦停止させた。

どうやら、少し離れた場所で、たった今別の悪魔を仕留めたらしいアツロウにも聞こえたらしく、彼もまた、淳と同じように眉をひそめていた。

「今、アイツ『ベル・イアル』って言わなかったか……？」

アツロウが言う。

そう、それが問題だった。

てっきり淳は、ここにいる全ての悪魔が、昨日までに遭遇した悪魔達と同じように、今日、自分達が会うであろう『ベル・デル』という悪魔の配下に違いないと思っていたのだ。

しかし、淳の目の前にいるメズキは先程、確かに『我が主』『ベル・イアル』という二つの単語を口にした。辺りでは敵や仲間達が放つ魔法の爆発音がこだましている為、聞き間違いという線も皆無ではないが、淳は本能的に、そうではないと感じ取っていた。

（……？　どういう事だ？　『ベル・イアル』……俺達が知ってる『ベル・デル』と似た名前だけど、何か関係があるのか……？）

しかし残念ながら――当然と言えば当然だが――それについてじっくりと思考を巡らせている時間はなかった。考えてみれば、数分おきに周りから次々と悪魔が現れるという状況は、静かに考え事をするのに向いている訳もない。

だからこそ淳は、ゴズキが持つ、大きくて無骨な斧を防ぐ為に、『氷の乱舞』による即席の盾を作らなければいけなかったという訳だ。

当然、ゴズキの斧による凶撃は、淳が生み出した氷に阻まれ、彼に傷の一つも負わせる事が出来なかったが――しかし。

結果として、そんなゴズキの、ここまでの一連の行動が、戦況に大きな変化をもたらした。

もしも、ゴズキが『ベル・イアル』などという言葉を口にしなければ。

もしも、ゴズキが淳に攻撃を仕掛けなければ。

淳は――もう少しだけ長い間、それまでに感じていた、正体不明の『嫌な予感』について考える事が出来た筈である。

そうすれば――。

次に起こった『予想外の出来事』にも、即座に対応できた筈なのだ。

「――『妖花烈風（ようかれっぷう）』」

世界が爆発した。

勿論、実際に世界が――地球が爆発した訳では、断じてない。

しかし、有里淳が、そのように錯覚してしまう程に強力な『何か』が、野外音楽堂全体に襲い掛かったのは事実だ。

ゴオッ！　と。

突然、強烈な突風が吹き荒れ、淳達の体を吹き飛ばした。

「――――――っ！！」

何の前触れもなしに、局地的な台風が発生したようなものだ――突風が生み出す余りの空気の圧力に、淳達の肺は押し潰され、叫び声を上げる事さえ彼等には出来なかった。

全てが順調だったのに――大勢の悪魔達から、順調にハルを守り抜いていたというのに、ほんの一瞬の間に、すべての状況が逆転した。

淳は、自分の体が空中に放り出されたのを実感したが、それでも、ハルの手を離したりはしなかった。どころか、彼女の体を両腕でかき抱き、少しでも落下時の衝撃から守ろうとする漢気さえ見せた。

普段は他人に触れられる筈もない、ハルの体の各部が淳の体と密着するが、当然、空中を高速で移動している二人に、それを実感している時間はなかった。

ユズの悲鳴やアツロウの怒号、自分の名前を呼ぶケイスケの声なども聞こえたが、この時の淳には、三人の安否さえ確認する事が出来なかった。

そして。

やがて――始まった時と同じく、余りにも突然に、それまでは荒

れ狂っていた世界が、元の静けさを取り戻した。

もしかしたら、ほんの少しの間だけ気を失っていたのかもしれない――どうやら、ステージの上まで吹き飛ばされてしまったらしく、淳の体の半分は、そこにあったドラムやスピーカーの類に埋もれていた。未だにハルの体を抱きしめたままの状態で、だ。

淳は大急ぎで彼女の安否を確認したが――淳の体がクッションの役割を果たした為か――奇跡的にもハルの体には、外傷らしき外傷が殆どなかった。精々が、露出した腕や足のあちこちを、軽く擦りむいている程度だ。

「だ――大丈夫、ですか？」

いつの間にか口に入っていた埃のせいで、淳の台詞は、激しく咳き込みながらのものになってしまった。

「何とかね……」

淳の体の上で小さく頭を振りながら、ハルが言う。

アツロウ、ユズ、ケイスケも何とか無事だった。アツロウの唇の端からは血が流れ、ユズは片腕をさすり、ケイスケの髪はまるで寝起きのように乱れてはいたが、それでも、何とか命だけは無事だった。

「一体、何が……」

その内の一人である、ケイスケがそう言った。

当然、同じくそれが気になっていた淳も、サッと辺りを見渡したが――彼は、すぐに原因を理解した。

否、理解させられた、と言うべきが。

「……これは驚いた」

「……っ！？」

ゾンッ！！　と。

どこからともなく、そんな声が聞こえたのと同時に――淳の体を、まるで突然、体全体に冷水を浴びせられたかのような寒気が走り抜けた。それが、自らが本能的に感じた『恐怖』という名の感情だと彼が理解するのに、少しばかりの時間が必要だった。

見れば――まるで、初めから既にそこにいたかのような自然さで――跡形もなく破壊され尽くした客席の中央に、一体の悪魔が存在していた。

「あ……あ……？」

カタカタと、無意識の内に、淳の歯が情けない音をたてる。

この時、淳がそこにいるそれを『悪魔』だと認識できたのは主に、彼の並外れた直感力が要因にあると言えるだろう――なんとなれば、その悪魔は、今までに淳達が見てきた同類の連中に比べれば、限りなく人に近い姿をしていたからだ。

事実、この時に至っては、アツロウ、ユズ、ケイスケなどはまだ、その悪魔を悪魔だとは思っておらず、『ちょっとおかしな格好をした人間』などという、見当外れも甚だしい認識を抱いていた。

「う、あぁ――――――？」

歯だけではない、今や、淳の体全体が、小刻みに震えていた。

突然現れた謎の悪魔から発せられている、ただならぬ威圧感を受けて。

その悪魔が言う。

「まさか、ベル・イアルの配下達が、こうも早く行動を開始していたとはな……。あの男のいう通り、確かに『本来の物語』に、既に多くの『矛盾』が生まれ始めているらしい」

その悪魔が言う。

「どうやら、あの男が開発した『ラプラスメール』とやらは、既に何の利益も生み出さない、と見て間違いなさそうだな。まぁ、『始まりの歌』を持つ女が、それに記されていた通りの時間と場所にいただけでも、十分役に立ったと言えるが」

その悪魔が言う。

「まぁ、何はともあれ、間に合って何よりだ。昨日の失敗に続き、『歌姫』の取得までもをベル・イアルの部下に先を超されたとなれば、腹を切る程度では済まぬからな――」

その悪魔が言う。

「しかし、気になるな……君達は一体何者だ？　先程までの戦いを見たところ、どうやら悪魔使いのようだが――しかし『ラプラスメール』とやらには、君達のような者の存在を示す事柄は書いていなかった」

その悪魔が言う。

「まぁ……いい」

そして――

その悪魔は、

「君達がどこの誰であろうと――私がすべき事は一つだ」

雷（いかづち）の――剣。

魔力によって生み出した、雷の剣を右手に握り、

その切っ先を――有里淳へと向けた。

「率直に言う。そこにいる『歌姫』を、こちらに渡してもらおう。……抵抗は考えるな」

『東京封鎖』三日目。

午前十時十三分二十四秒。

不死の王、ベル・デルの従者にして――現時点の東京内にいる悪魔達の中では、間違いなく『最強』の部類に入る存在。

幻魔クー・フーリンが。

有里淳と。

出会った。

3rd Day『野外音楽堂のバトル（1）―3』

「私の名はクー・フーリン――不死の王『ベル・デル』様に使える悪魔が一体だ」

人は死ぬ直前、それまでの人生を振り返るというのは、何とまあ、ありふれた話ではあるが――しかし実際のところ有里淳（ありさとじゅん）は、そんな事は漫画やアニメの中だけの話であって、現実世界では起こりえないと思っていた。

仮に本当だとしても――自分なら、そんな悠長に過去の出来事を回想する暇があるならば、少しでも生きる為の努力をしようとするに違いない、と。

有里淳は、そう思っていた。

……これまでは。

「聞こえなかったならば、もう一度言おう」

と。

その悪魔――幻魔クー・フーリンは言う。

底無し沼を思わせる、深く、暗い目を、淳へと向けながら。

「君の後ろにいるその女性の身柄を、こちらに引き渡せと言っているのだ。これもまた、先程言った事ではあるが――抵抗は考えるな」

ゆっくりと、ゆっくりと。

非常にゆっくりとした動作で、クー・フーリンは、淳と――そして、彼の背後にいる春沢芳野（はるさわよしの）との距離を詰めてくる。

クー・フーリンが言うように、淳は現在、ハルを守るようにして、片膝を地面に置いた状態で、彼女とクー・フーリンの間に身を置いているところだった。

が、しかし。

これが、この時の淳に出来る、精一杯の抵抗だった――それ以上の行動を起こすのは、自ら命を絶つに等しい行為だと、彼は本能的に理解していた。

距離が近くなってきた事で、今や淳には、その悪魔の全体像を細部まで確認する事が出来た。

腰まで伸ばした青い長髪に、青い目。細身だが、それでいて極限にまで鍛え上げられた、岩のような筋肉。腰より下には白銀の鎧を身につけていたが、どういう訳か、上半身には何も着ておらず、代わりに、ミイラのように白い包帯をグルグルに巻いていた。その胸の部分に浮かび上がっている血の滲みを見る限り、何らかの怪我を負っているのは間違いない。

が。

それでも――例え、一目でクー・フーリンが万全の状態ではないと判断できたとしても、淳は全く安心する事が出来なかった。それ

程に、クー・フーリンから放たれている威圧感は、常軌を逸していた。

ズン……ッ！！　と。

クー・フーリンが足を踏み出す度に、まるで、巨大な怪物が地面を踏み鳴らしているかのような音が、淳だけでなく、その場にいる全員の頭に響き渡る。

勿論、そんな音が人の精神に良い影響を与える訳もなく――ユズなどは、先程からずっと、体全体を小刻みに震わせる事しか出来ずにいた。

もっとも淳にしても、似たり寄ったりの状態ではあったが――自分の体中から滝のように冷や汗が流れ出ている事を、彼はハッキリと自覚していた。

突然、自分の身にかかる重力の強さが何十倍にもなったかのような、そんな感覚。

それでも。

「ふざ……けんな……！」

と。

あらん限りの力を振り絞って、淳はそう言った。

クー・フーリンの圧倒的な重圧（プレッシャー）に当てられて、それでも尚、かろうじで口をきけたのは――そこにいる人間の中では、彼だけであっ

た。

それを受けてクー・フーリンは、ピタリと足を止めた。

「……懸命な判断とは言えない」

と、彼は言う。

「今、君の目前には、幾つかの選択肢がある筈だ――そして私は、その中でもっとも穏便に、もっとも犠牲の出ない解決策を提示したつもりでいる。にも関わらず、君は――それを理解をした上で、今のような発言をしたというのかね」

まるで、言うことを聞かない駄々っ子をあやすようなクー・フーリンの口調に、淳は唇を噛み締めた――事実、この悪魔から見れば、自分にはその程度の価値しかないのだろう。

「もしそうならば――あえて言わせて貰おう。君はもう少し、冷静に状況を判断する能力を磨いた方がいい。さもなくば、まだ先のある人生を、ここで終わらせる事になってしまうぞ」

「……っ！」

クー・フーリンの余りの物言いに、ギリギリと歯を鳴らす淳ではあったが――そこで、ふと気付いた。

（……？）

静か過ぎる、と。

最初の方こそ、その理由が分からなかった淳ではあったが――すぐに理解した。

悪魔がいない。

今、淳の視線の先にいるクー・フーリン以外には、一体も。

それまでに、淳達が相手にしていた大勢の敵悪魔だけではない――淳達がＣＯＭＰから召喚していた何体かの仲魔も含めて、だ。

（まさか……！）

突然、周囲の悪魔達の姿が消えた事と、先程の凄まじい突風――そして現在、クー・フーリンが右手に持つ、雷の剣とを淳が頭の中で結び付けるのに、それほどの時間はかからなかった。

考えつつ淳は、咄嗟に辺りに視線を走らせる――もしかしたらどこかに、自分達のように紙一重のところで被害を免れた仲魔がいるかもしれないと、そう思いながら。

あれだけいた悪魔の内、自分達の味方だけがたまたま無事でいるなど、それこそ、普段の彼らしくもない――淡い『希望』に縋（すが）るような考えではあったが、

「無駄だ」

と、クー・フーリンが言う。

「先程放った『妖花烈風（ようかれっぷう）』によって、先程までここにいた悪魔達は

――君達の支配下にいる者達も含めて――全て、私が蹴散らした。君達となるべく穏便な交渉を謀るにあたって、少なくともベル・イアルの配下達の存在は、決して好ましいものとは言えんからな――」

そこまで言って。

ようやく――クー・フーリンは、ピタリと足を止めた。

そこから淳とハルがいる場所まで、およそ十メートルたらずと言ったところか。

現実的に考えれば――少なくとも、肉弾戦においては――決して短い距離とは言えないが、あくまでそれは現実的に考えれば、という話だ。

そして言うまでもなく、このクー・フーリンという悪魔の力量は、相当に現実離れしている。彼にとって十メートルとは、殆ど間近で顔を付き合わせているような状態に違いない、と淳は思った。

（けど……）

チラッと、淳は、背後にいるハルが持っている自分のＣＯＭＰに、僅かに意識を傾けた――どうやら、先のクー・フーリンの奇襲に見舞われてた際も、離さずにちゃんと持っていてくれたらしい。

勿論、あのような状況で冷静に思考を働かせられる人間がいるとは思えないので、もしかしたらそれは、彼女にとってはほぼ無意識の内にとった行動の一つに過ぎないのかもしれないが――それでも淳は、そんなハルに対して、どっと愛情の念が湧くのを感じた。

しかし当然、そのような感情を悠長に抱いている暇などある訳がなく――

「『歌姫』を渡せ」

と、再度、クー・フーリンが言う。

「言っておくが――今のが最後の警告だ。次に、君達の内の誰かが最初に取った行動を見て、今の問いに対する返答を判断させて頂く。勿論、私が推奨するのは『一切の抵抗をせず、歌姫を引き渡す』というものだ。そうすれば――」

そこで一旦、クー・フーリンは言葉を切ると、

「そうすれば――誰も死なずに済む」

「……っ！！」

ぞっとした。

一切合財掛値なしに、それこそ、比喩でも何でもなく――淳は、今のクー・フーリンの一言を受けて、自分の体温が一気に下がっていくのを確かに感じた。無理もない。今のクー・フーリンの台詞は「抵抗すれば殺す」と、暗に宣告しているようなものだ。

体中から流れ出ている冷や汗のせいで、着ている衣服が素肌にベッタリと張り付くのを感じながらも淳は、先程から、何故か後ろにいるハルが無言である事に、僅かに疑問を抱いたが――恐らく、アツロウ達と同じく、クー・フーリンの凄まじい威圧感にあてられて、口を動かす事さえままならないのだろう、と思った。

（クソッ……！　ユズやケイスケだけじゃなく、アツロウまで動けねえってのか！？　だったら……！）

自分がやるしかない。

自分が――ハルを守るしかない、と。

淳は、思った。

元より、クー・フーリンの問いに対する答えなど――文字通りの意味で、答えるまでもない。

だからこそ淳は、ギリギリと奥歯を噛み締め、ザンッ！　と力強く、一歩足を踏み出し、大きく口を開けて、

「ふざけ――――――！」

――んな、と言おうとしたのだが、その瞬間。

その瞬間に。

「そうか、あえて血肉の争いを選ぶか」

――後ろ、から。

声、が、聞こえた。

「……ッッ！？」

「しかし――それにしては、君は些か、背後に隙があり過ぎるな」

「――　。　……！！」

もしかしたら。

もしかしたら、淳は――その時、何かを言ったのかもしれない。

しかし、それの内容がどうであれ、結局、彼は言葉らしい言葉を発音する事が出来なかった。

何故なら。

ドッ！！　と。

淳が何かを言う前に――クー・フーリンの一撃によって、彼の体が、数十メートル以上もの距離を吹き飛ばされたからだ。

「ジュンッ！？」

という、アツロウの叫びが聞こえる。

同時に、淳の体が、今は見る陰もなくなった野外音楽堂の客席へと、一気に突き刺さった。

理由は簡単。

目にも止まらぬ速さで淳の背後に移動したクー・フーリンが、その背中を、軽く小突いた、というだけの話だ――それだけの話だが、しかし、まともな常識を押さえている人間ならば、たかが小突くというだけでは、人の体がピンボールのように吹き飛ぶ筈がない、という事に気づくだろう。

つまりは、そういう事。

それだけ、力の差がある――という事だ。

凄まじい衝撃波。

そして爆音。

それらと同時に、周囲にあった瓦礫が、激しく宙を舞う。

――が、信じ難い事に、それでも淳は生きていた。

煙幕のように舞い上がっている粉塵の中、フラフラと立ち上がりながら、という頼りない姿を晒してはいたが――それでも生きていた。基本的な身体能力に加え、ＣＯＭＰのハーモナイザーの恩恵も受けている今の彼の耐久力は、とうに人の限界を超えているのだ。

しかし、

「……がっ、はっ！！　げふっ！！　ごほっ！！」

突然、彼の口から、液体とも固体ともつかぬ、赤黒い、ヌメヌメ

した何かが、大量に吐き出された――もしかしたら、内臓のどこかをやられたのかもしれない。早急に回復魔法による治癒を施す事が出来れば、それが最善だ。

しかし残念ながら、今の相手の力量を考えれば、状況は間違いなく『最悪』だった。

「まだまだだ」

そう言って。

いつの間にか、再び淳との間にある距離を零にしていたクー・フーリンが、次の攻撃を繰り出す。

かろうじで淳が目を向ければ――いつの間にかクー・フーリンの手からは、例の雷の剣が消えていた。

（俺が相手なら……武器も必要ないってか!?）

「こ……の……！　ナメんじゃねえっ!!」

――と、そう言おうとした淳ではあったが、今回も、頭の中で描いた言葉が、そのまま口から出てくる事はなかった。

それよりも、クー・フーリンの二撃目――左拳によるアッパーカット――が彼の顎に届く方が、遥かに早い。

バキンッ!!　と。

とても――ただ顎を殴られたという、それだけの事によって鳴る

とは思えない音が、淳の耳の奥で鳴り響く。まるでスローモーションのようにゆっくりと宙に舞い上がった彼の体は、やがて、地球の引力に従って、激しく地面へとたたき付けられた。

そして。

ようやく――そこまで経ってから淳は、その口から音を発する事が出来た。

とはいえ、それは――およそ『言葉』と呼べるものではなかったが。

「ぐっ……がァあああああああああああああああああああああああああッ！？」

今度こそ淳は、自分が受けたダメージの程を確信できた。先のアッパーカットの際に聞こえた音はきっと、顎の骨が砕かれた音に違いない。

次には、

「お、オイッ、アンタ！　大丈夫かい！」

という、彼女にしては珍しい、感情を露（あらわ）にしたような――本気で、淳の身を心配しているようなハルの声が、彼の耳に届いた。

だが――その声に答えたのは、淳ではなく、なんとクー・フーリンの方だった。

「安心するといい」

と、クー・フーリンが言う。

「先程までの、彼の見事な戦い振りは見ていた……。まさか、この程度の攻撃が致命傷になったりはしないだろう」

そこで一旦、クー・フーリンは「だが」と言って、言葉に区切りをつけると、

「それでもこれ以上、彼が私に傷つけられていく様を目にしたくなければ――私と来い。『源初の言葉』を持つ者よ」

「……っ！？」

無論、どちらかといえばハルは、そんな言葉には従いたくはない。

確かに彼女は現在、様々な理由から、この先、自分が生きていく事に何の価値も見出だせないような状態になってはいるものの――かと言って、こんな形でたった一回の人生に終止符を打つのは避けたかった。

まあ、「クー・フーリンについていく」＝「人生の終わり」という方程式は、いささか短絡的過ぎるような気もするが――しかし、何と言ったってこのクー・フーリンという悪魔は、ここ数分の間に、野外音楽堂を跡形もなく破壊するような存在なのだ。そんな輩が執拗に自分の身を狙っているとなれば、ハルがそこまでマイナスな思考を抱いてしまうのも、無理らしからぬ事なのかもしれない。

もっとも、正確にはクー・フーリンが狙っているのは、彼女の身柄ではなく、彼女の『歌声』の方なのだが――それはともかく。

「おい――ふざけんなよっ！　テメエッ！」

と。

不意に、そう叫んだ人物がいた――と言っても、淳ではない。

彼の一番の親友である、アツロウである。

彼にしては珍しい、極めて乱暴な口調で。

それを聞いた淳とハルが目を向ければ、彼だけではなく、ケイスケやユズまでもが、再びＣＯＭＰから悪魔を召喚しようとしているところだった。

彼等とて――淳と同じく――黙ってハルをクー・フーリンに渡す気は、さらさらないのである。

言うまでもなく、先のクー・フーリンの一撃で瀕死になった悪魔達を参戦させる事は出来ないが、何、彼等の仲魔は、何も二体や三体だけという訳ではないのだ――こういう時の為に、予め『デビオク』等を活用して、他に何体かの悪魔をストックしてあるのである。

「……」

が、どういう訳かクー・フーリンは、そんな三人の方に、顔を向けさえもしなかった。

ただ黙って、未だハルの方を見つめ続けるだけである。

やがて彼は、

「……やめておけ」

と、静かに言う。

ただし。

凄まじいまでの殺気を、アツロウ達がいる方向に放ちながら、だが。

「……っ！！」

直後に、まるで全身を冷えたナイフで串刺しにされたような感覚が、アツロウ達の体中を駆け巡る。それを受けて今まさに、悪魔召喚プログラムを起動させる為に、ＣＯＭＰのボタンを押そうとしたその姿勢のまま――アツロウ達の体が、ピタリと静止した。

次には、膝がガクガクと震え――遂には、そのまま力無く、腰を地面に下ろしてしまう。まるで、見えない何かに、前から体を押されたかのように。

「……！！　ハアッ……！　ハアッ……！」

特に何か激しい運動をした訳でもないのに、アツロウの口は、必死に酸素を補給しようとしていた――ユズやケイスケにしても、似たようなものである。

（く、くそっ……！）

まるで、足の裏を地面に縫い付けられたかのように、一歩たりとも前に進む事が出来ないアツロウ。

（な、なんだよ……コイツ……！）

勿論、『東京封鎖』に巻き込まれてから既に三日もの時間が経過しているとあれば、アツロウにしても、悪魔に対する恐怖の感情というは、これまで幾度となく抱いてきている――二日前のウェンディゴや、昨日の赤坂トンネル前の戦いなどでも、彼は、それをハッキリと自覚していた。

が。

（コイツは……何なんだ？）

と、アツロウは思う。

ウェンディゴやビフロンズなども、他の大半の悪魔に比べれば、遥かに強力な個体ではあったが――しかし、

クー・フーリン。

コイツの実力は、人間どころか――それらの悪魔達と照らし合わせても、比べものにならない。

力が強い、とか、動きが速い、とか、最早そんなレベルではない――いや、それもあるだろうが――ただ単純に、そして決定的に『強い』。

現在、アツロウが知る言語を用いる事で、この時のクー・フーリ

ンに対して抱ける感想は、この程度のものだった。

（マジかよ……！　ジュンの奴、さっきまで、こんな化け物と戦り合ってたってのか……！？）

いや。

細かい事を言うようだが――この時のアツロウの感想には、若干の誤りがある。

先程まで、ジュンとクー・フーリンが戦っていたのではない。

まだ――戦っている最中なのだ。

その証拠に。

「……っけんなよ……」

と。

そう言って――クー・フーリンの視界の端で、有里淳が、ゆっくりと起き上がった。

「……」

酷くつまらないものでも見るような視線を、クー・フーリンは淳へと向ける。

「……ア、アンタ……」

ハルの方はと言うと、それこそ、文字通りの意味でボロボロの状態でありながら、未だに戦おうとする淳に対して――思わず、こう言った。

「や、やめときなよ……もう……」

勿論、ここで淳が諦めるという事は、それすなわち、ハルがクー・フーリンに連れ去られてしまうという事と同義なのだが――それでもハルは、これ以上、淳が傷つけられていく様を見ていたくはなかった。

普段から、他人はおろか、自分の身さえも『どうでもいい』と思っている彼女にとって――これは、非常に珍しい事である。

しかし、既に意識が朦朧（もうろう）とし始めている淳の耳には、そんな言葉さえ届いていなかった。

「ふっ……ざけんじゃねえええええええええええええええええええええっ！！」

天を貫くような、怒号。

――と共に、固く拳を握った淳が、クー・フーリンの元へと疾駆する。

武術でも何でもない、それどころか、何の技術も使っていない、ただただ勢いを乗せただけの拳である――怒りに任せただけの拳である。

勿論そんな攻撃が、『人類最強のペルソナ使い』こと瀬多（せた）総司（そうじ）を

後一歩というところまで追い詰めたクー・フーリンに通じる訳もない。

案の定、スッと横に小さく移動しただけで、クー・フーリンはその攻撃をかわしてみせた。

突き出した拳の勢いを咄嗟に殺す事が出来なかった淳は、そのまま、不様に地面に倒れ込む。

ちなみに――この辺りの一連の行動は、三十一年ほど前に、彼の従兄であるナオヤが『神』に対してとった行動とほとんど被っていたが、勿論、そんな事をこの時の淳が知っている筈もない。

頭に完全に血が上っている淳は、たった今、自分の攻撃がいとも簡単にかわされた事も忘れて、すぐさま次の攻撃へと移行する。

「フム」

対してクー・フーリンは、相変わらず無表情なまま、鷹揚（おうよう）に頷いた。

「なるほど、君の得意な戦闘分野は無手か？　ならば私も――それに合わせてやろう」

余裕をたっぷり残されたまま、あえてこちらの戦い方に合わせられるなど、淳にとっては、これ以上なく屈辱的な事に違いないだろう――勿論この時の彼に、それだけの状況把握能力が残っていれば、の話だが。

そして。

ドゴンッ！　という――鈍く、同時に不吉な音が、野外音楽堂に響き渡った。

音が鳴ったのは、たった一度だけだ――にも関わらず。

にも関わらず――ありえない事に――淳の腹部には、幾つもの拳を打ち込んだ跡が残されていた。

真実を明かせば、単純に、音さえも追いつけような速さで、クー・フーリンが何発ものボディーブローを放ったというだけの話だが――勿論そんな芸当が、言葉で言うほど簡単に行えるものである筈もない。

「……あ……？」

打たれた側である淳でさえもが、つかの間、今、自分が何をされたのか自覚できない程の速さ。

勿論、いつまでも痛みを感じない訳もなく――

「……！？　あ、がっ、ぐあああああああああああああああああああああっ！？」

まるで、内臓を直接グチャグチャに掻き混ぜられているかのような痛みが、淳の体へと襲い掛かった――並の人間ならば、それだけでショック死してもおかしくないような、そんな痛みが。

たまらず、再び彼の口から、大量の血液が吐き出される。

冗談でも何でもなく、この数分間の間に彼が吐いた血の量は、それこそ既に、間違いなくバケツ一杯分にはなるだろう。

しかし、幸いな事に――いや、不幸な事に、かもしれないが――有里淳は、その程度では諦めなかった。

未だに、親の仇でも見るような激しい敵意の視線を、クー・フーリンへと向けている。

「諦めろ」

対して、血を吐くどころか、汗の一つさえかいていないクー・フーリンは、静かに言う。

「それが、今の君に出来る、唯一の事だ――諦めて『歌姫』をこちらに差し出せ。そうすれば、君達の命の方は見逃そう」

「……、……」

それに対して、淳は何かを言った――が、まるで蚊が鳴くようなその声を聞き取る事は、流石のクー・フーリンにも出来なかった。

「……？　何だ？」

聞かれて。

淳は一度、口元の血を拭った後――こう言った。

「寝言は寝て言え、クソ野郎」

それが。

先程の「諦めろ」というクー・フーリンの言葉に対する、淳の答えであった。

「……」

数秒ほど、クー・フーリンはそんな彼をじっと見つめた後、

「……そうか」

と言った。

「それが君の『選択』だと言うならば――是非もない」

「それによってもたらされる『結果』を、身を以て知れ」

3rd Day『仮面の内側』

『東京封鎖』三日目の暑さときたら、まるで地上にいる人間全員をバターのように溶かしてしまうのでは、と思わず疑いたくなる程の激しさだった。

更に現在の山手線内は、『悪魔』なる人外の生物の出現だけではなく、『都内全域の停電』という、まさしく泣きっ面に蜂とでも言うべき状況にある為、クーラーも扇風機も利用する事が出来ない。

となれば唯一、暑さを凌げる場所と言えば、精々が公園などにある木陰や、風通しのよい、ヒヤッとした路地裏などだが――甘い甘い。確かに、それらの場所なら『暑さ』を凌ぐ事は可能かもしれないが、そのどちらにおいても、呑気にじっとしていようものなら、現在の山手線内でもっとも危険な存在――『悪魔』が大口を開けて襲ってきかねない。

故に、そう長い間、同じ場所に留まり続ける事は出来ず――そこが核シェルターの中だとでもいうなら、話は別だが――例え燃え盛る太陽の下に身をさらしてでも体を動かさなければならない、という訳だ。

今や封鎖内にいる人間の誰も彼もが、体中から滝のような汗を流して不快な思いをしているものの、やはり、命には代えられない。

しかし、どれだけ太陽が凶悪な日光を地上に放射しようと、どれだけ大量の悪魔が封鎖内を闊歩（かっぽ）していようとも、東林海ことショウジの熱意をくじかせる事は出来なかった。

一体何の熱意かと言うと――当然、『東京封鎖の裏にある真実を掴み、それを世間に公表する』という熱意だ。

ショウジの職業はジャーナリストだ。

そう考えれば、彼女のそんな願いは、職業上、至極まっとうなものだと言えるかもしれないが、しかし仮に、この封鎖内に彼女以外にジャーナリストを生業（なりわい）とする人間がいたとしても、このような状況において、なおも自分の職務を遂行しようとする人間はきっと、このショウジだけだろう。

それほどまでに、彼女の意思は強い――が、

しかし。

昨晩、ついに――ある出来事によって――『悪魔』、および『悪魔使い』や『ペルソナ使い』なる存在をハッキリと認識する事になったショウジではあったが、午前十時八分という時間に、表参道の通りを歩いているこの時ばかりは、そのご自慢の熱意も、僅かに緩ませざるをえなかった。

何となれば現在、彼女の隣を、一人の元気な――もしたしたら元気過ぎる――少女が、ショウジに付き従うように歩いていたからだ。

ショートカットの黒い髪。俊敏そうな、細身の体型。明るい緑色の目に、その身に纏っている青と白を基調とした制服のスカートは、やたら丈が短かった。

鮫美海狗（はやみ みく）――というのが、少女の名前である。

「――それでそれで？　ショウジさん！　昨晩は一体、それからどうなったんですか！？」

ミクが言う。

「えーと、ね……」

そんな彼女に対しショウジは、一体どうすれば、なるべく失礼にならないように、この少女を自分の側から離れさせる事が出来るかについて、必死に頭を巡らしていた。

というのも、どういう訳かこの少女――まるで、これまでの出番の無さを帳消しにするかのように――つい先程、とある曲がり角で偶然、バッタリと遭遇した直後からずっとショウジに付き纏っては、今までで何か変わった事はなかったか、と矢継ぎ早に質問してくるのだ。

その勢いときたら、下手したら、昨晩チネシティ広場で遭遇したミルメコレオよりも凄い。二日前に知り合ったセトという男から初めて悪魔の事を聞いた時は、彼女も大概、セトに質問の嵐を浴びせたものだが、あの時の自分でも、絶対にここまで激しくはなかった、とショウジは思った。

「――それにしてもそれにしても！　セトさんがまさか、実はそんなにストロングなお人だとは思いませんでしたよっ！」

と、ミク。

「まぁ、初めて会った時、辺りに無数の人間の死体が転がっている

中、片手に日本刀をぶら下げたまま平然としていた時は、流石にちょっと変だなー、とは思いましたけど！」

「断言するわ。そんな異常人物を『ちょっと変』で済ませられる貴女の方が、もっと変よ」

一瞬、先程ミクが言い放った台詞の内容について、音をたてて自らの思考を回転させかけたショウジだったが、すぐにやめた。あの壮年の男がただ者ではない事など自分はとっくに知っているし、そうでなくとも、彼について分からない事は、それこそまだ山のようにあるのだから。

「で？　で？　ショウジさんショウジさん！　さっきも言ったかもですげと――その後は、一体どうなったんですか！？」

「ああ、はい、はい。もう――分かったわよ。分かったから、もうそんな激しく質問攻めにするのはやめにしてくれる？　ミクちゃん」

とうとう、ショウジはやれやれと首を振って、先程まで中断させていた――昨晩、自分の身に起きた出来事に関する話を再開させた。

少なくとも、息を弾ませながら怒涛（どとう）の質問を繰り返すミクの相手を黙ってするよりは、（精神的に）そちらの方が遥かに体力を温存できるだろう。

「その後は――ええと――『カイドー』って子を例のバーにまで送ったの。そう、今話した、渋いお兄さんの職場よ。もっともそこには既に先客がいたけどね」

「先客？」

「うん。確か……『ハル』、だったかしら？　あんまりよく覚えてないけど、まだ成人したばかりって感じの、若い女の人だったわね」

まさか、その若い女の人とやらが、現在、そこよりいくらか離れた場所にある野外音楽堂にて、クー・フーリンなる悪魔に襲われている真っ最中だとは知らずに、ショウジは言う。

「まぁ、その後は特に、面白い事は何もなかったわよ。カイドー君を店で休ませた後、やっぱり、今言ったお兄さんが心配になって、わざわざ例の広場まで行ったセトさんが、無事に、そのお兄さんと一緒に戻ってきて――それでおしまい」

「ふおぉ……」

まさしく変人そのものの、感嘆のため息を漏らしながらミクは、

「ここまで色々な事を聞いて、その度にかなり驚きましたけど――やっぱり、一番びっくりしたのは、セトさんの正体が『ペルソナ使い』っていう、へんちくりんな魔法使い的存在だって事ですかねー」

「もし本人に今の台詞を聞かれてたら、まず間違いなく首の骨を折られるから、間違ってもセトさんの前で「へんちくりん」とかって言わない方がいいわよ」

ミクの言葉を遮るように、ショウジが言う。

もっとも、セトの正体が――へんちくりんであるかどうかはともかくとして――『ペルソナ使い』という、人の常識を超越（ちょうえつ）した存在である事は、ショウジにとっても驚くべき事実だった。

ともすれば、もしその情報が口から伝え聞いただけのものだったならば、自分は絶対に信じなかっただろうと、ショウジ自身がそう思ってしまう程の。

しかし、それはまぎれもない事実だった。何といっても、実際に目の前で『あの力』を見てしまえば、流石のショウジでも、粛々（しゅくしゅく）と現実を受け入れるしかない。

と、そこへ。

なんと、たった今、彼女達の話に挙がった当人（セト）が――二人の視線の先から、まっすぐ歩いてきた。

相変わらず、今では若干汚れてしまった赤い甚平を着ており、それが銀色の髪と何ともミスマッチである。

「あ！　噂をすれば――セトさんですよ！」

ミクも気付いたらしい。

やがて、セトと二人との間にある距離が、声を掛けるのに不自然ではない程に短くなってくる。

ショウジは少し前に、神田の古書店街にて、有里淳とその仲間たちの前で、次にセトに会ったら、彼から更に悪魔などについて詳しく聞くつもりだと言っていた事もあって（実際にはショウジは、彼の名前を直接出した訳ではないが）、すぐさま彼に声をかけようとしたのだが――

「あら、こんな所で奇遇ね。セ……」

「……」

「……ト、さん……？」

すぐさま様子がおかしい、とショウジは思った。

今のセトの様子は、明らかにおかしい――と。

先程述べたように、外見上においては、特に変化らしい変化は見られないが――何よりもまず、その身から放たれている雰囲気が、いつもの彼とはまるで違っていた。

ミクにしても、やおら久しぶりに会った（実際には、それほど久しく顔を合わせていなかった訳ではないが）だけに、一瞬、開口一番、何かとっておきのギャグでも披露してやろう的な顔をしたが――それを言葉にするには、余りにも場違い雰囲気だと悟ったらしく、すぐにその口をつぐんだ。

『無』。

もし、今のセトをたった一言――どころか、たった一文字で表すとしたら、それほどに相応しい言葉もないだろう。

『無』い。

表情が、『無』い。

『無』表情。

ほんの数秒――時間が流れる。

その間に、ショウジ達とセトとの間の距離は、更に短くなる。

が。

「……」

――と、それでも彼は、何も言わない。

誰だ。

一瞬、ショウジはそう思った。

これだけ背が高く、銀髪で、こんな暑い夏の日に、素肌の上から直接甚平を羽織っている男など、そう多くいる筈がないのに――だ。

それほどまでに。

この時の、セトは――あまりにも違っていた。

そして。

結局。

「……」

――と、なんとセトは、ついに最後まで何も喋らないまま、思わず道を開けた二人の脇を、スッと通り過ぎた。

「あ、あのー……セト、さん……？」

今さらながら――恐る恐る、そう声をかけるショウジではあったが、やはりセトは、そんな彼女の方に顔を向ける素振りをまったく見せない。

ほどなくして――ショウジ達がいる位置よりも、やや後方にある曲がり角へと、セトは姿を消した。

彼が今、一体どこに向かっているのか――勿論、そんな事は、ショウジにもミクにも分かる訳がない。

しばらくの間、二人はただただ呆然と、セトが消えた辺りの場所を凝視していた。

ショウジは思う。

少なくとも、単に暇を潰す為に、ブラブラと散歩をしていた――という訳ではなさそうだった、と。

何故、そんな事が彼女に分かるのかというと――それはもう、彼女に言わせれば、つい先程まで、自分のすぐ近くで放たれていた、セトの雰囲気を見てとれば、誰でも一目瞭然だという話なのだろうが――それでも、あえて別の理由を挙げるとすれば、彼の『目』などが挙げられる。

目。

目つき。

視線。

いつもは、どこか『深い』感じのする、セトの視線が、今日だけは、ハッキリ『暗い』と表現してよいそれだった、と。

ショウジはそう思った。

暗いというか、虚ろというか。

まるで――そう。

『心』が、抜けてしまったかのように。

そのように――ショウジには、見えた。

「……っ」

一瞬ショウジは、セトの事を追い掛けようと、数歩、足を動かしたが――しかし、すぐに中断した。

何故？　と問われれば、それはもう、この時のショウジとしては『何となく』としか言いようがない。

が。

しかしこれは、彼女にしてみれば非常に珍しい事だった――普段はジャーナリストとして感情に流されたりはせず、ただ冷静に、周りの状況だけを見て、自分が何をすべきかを判断できる、彼女にしては。

逆に言えば。

そんな彼女の行動を押し止めてしまう程――先のセトの豹変（ひょうへん）振りは、尋常ではなかった、という事だ。

（……ううん、違う）

ショウジは思う。

それを『豹変』と呼ぶのは些か正確性に欠ける、と。

何故なら自分は、セトの『本質』というものを、まだ殆ど知らないのだから――と。

何やら、セトと初めて顔を合わせたのが、既に何年の昔の事のような気さえするが――それは気のせいだというものだ。実際には、ショウジとセトが初めて会ってからは、まだ三日しか経っていないし、その程度ではセトという男の『心（けってん）』を見抜く事は、誰にも出来ないだろう。

つい先日、彼が『ペルソナ使い』という、世界的に見ても極めて稀な人種である事を知ったショウジではあったが――それにしたっ

て、彼の『全て』という訳ではあるまい。

やがて。

「……」

と、ショウジは、セトが消えた曲がり角から、スッと視線を外した。

関係ない、と彼女は思う。

彼（セト）が何をしようと、自分には一切関係がない――と。

どうせまだ、ほんの数日の間に、何度か顔を合わせた程度の関係でしかないのだ。

だから――

（私には、関係ない）

セトの事を気にかければいけない理由など、自分にはない。

ある訳が、ない。

ない……筈だ。

そして。

「あ、あわわわわわ……！」

ややあって、ミクが言う。

かなり芝居がかった表情を、その顔に浮かべながら。

「た、大変ですよショウジさん！　セトさんのあの顔、まるで、今から誰かを殺しにいくかのようでしたよおおおぉぉぉっ！」

「貴女の妄想力は異常よ」

まさか。

実は、そんなミクの冗談が、あとほんの数時間と経たない内に、冗談ではなくなってしまう事など予想だにしないまま――ショウジは小さくため息をついた。

３ｒｄ　Ｄａｙ『野外音楽堂のバトル（１）―４』

有里淳が倒れていた。

傷だらけで。

血まみれで。

ピクリとも動かないまま。

まるで。

まるで――死んでいるかのように。

現在の彼の状況を一言で言い表すならば、ざっとそんなところである。

「……」

その光景を、春沢芳野（はるさわよしの）は黙って見ていた。

アツロウやユズ、ケイスケなども同様である。

死んでいるような――と言うならば、この四人の表情こそ、まさに死んでいるかのようであるし、事実彼ら、及び彼女らは、いっそそうなってしまいたいと思いたくなる程の思いを抱いていた。

特に、淳とはすでに長い付き合いの、アツロウやユズ。

二人は現在、こう思っていた――

友人が一方的に傷みつけられていく様を、黙って見ている事しか出来なかった自分達など――死んだ方がいいのではないか、と。

「もう終わりか」

如何にも拍子抜けだという様子で、クー・フーリンが言う。

彼は実に几帳面な性格らしく、血によって赤く染まった自らの両手を、どこからともなく取り出した白い手拭きで拭っていた。

言うまでもなくそれらの血は、クー・フーリンのものではなく――全てが、有里淳のものである。

「見たところ――」

クー・フーリンは、血を拭き取った手拭きを懐に仕舞うと、

「右小指、左薬指、右肋骨、下顎骨、右前腕、左上腕の完全骨折と――」

と言って、

「頭蓋骨、左前腕、右上腕の不完全骨折に――」

と言って、

「脳内出血に、全身打撲、他には幾つかの裂傷と……ああ、後、鼓

膜も破れたか？　まぁ――とにかく、そんなところだろう。現在、君が抱いている傷は」

と言った。

「……」

それでも尚、倒れている淳が一言も喋らない事から分かるように――それだけの傷を負っているならば、尚更、淳が生きている可能性は低いような気がしたが――しかしクー・フーリンは、まるで、彼が生きているとハッキリ確信しているかのように見えた。

「普通なら、これから先、他の人間の手を借りなければまともな人生さえも遅れない程の重傷だが――何、君の回復力と、仲魔の回復魔法とを合わせれば、何とかなるだろう」

言いながら、ゆっくりとクー・フーリンは、ある方向へと体を向ける。

そもそもが――自分がこの場所に来る理由となった、『歌姫』の方へと。

しかし。

その『歌姫』こと、春沢芳野は――そんなクー・フーリンの所作など気にもかけない様子で、ただジッと、倒れている淳の方へと視線を向け続けていた。

「……んで……」

ポツリと、独り言のように、ハルは呟く。

「なんで……なんで……おかしいじゃん……なんだよ……コレ……こんなの……こんなの……ありないだろ……」

次に、ハルは、

ゆっくりと、ゆっくりとした動作で立ち上がった後、音楽堂のステージから下りて、まるで夢遊病者のように――フラフラと、淳の元へと歩いていった。

「……」

その際、彼女はクー・フーリンのすぐ近くを通り過ぎる事になるのだが――意外な事に彼は、ハルの行く手を阻むような真似をしなかった。

そしてハルは、淳のすぐ近くで腰を下ろし、その肩を手で掴んで、軽く揺さぶる。

「ねえ……おい……アンタ……起きろよ……」

「……」

淳は動かない。

「起きろって……こんなの……なんで……こんな……頼むから……」

淳は動かない。

「クソッ……！　畜生……！　おい、頼むよ……！　起きてっ……！」

それでも――

淳は動かない。

「……っ！」

それを受けて。

ついに。

ハルは、

「だから……だから、最初に言っただろうが！！　逃げた方がいいって言っただろうが！！　それなのに、カッコつけて、ヒーローを気取って……結局、アンタは倒れてんじゃないか！！　ふざけんじないよ！！　そんなんで……そんなんで私が納得できる訳がないだろうがァァァあああああああああああああああああああああああああああッッ！！」

絶叫し――ハルは、より一層強い力で、淳の体を揺さぶる。

そこまで強く揺さぶってしまったら、それこそ、更に淳の容態が悪くなってしまうに違いないというのに。

それでもハルは、彼の体を揺さぶらずにはいられなかった。

それに伴って、完全に力の抜けきった淳の体が、グラグラと動く。

それでも、

やはり、結局、相変わらず、

淳は動かない。

「……で」

と――しばしの間、そんな光景の一部始終に目を向けていたクー・フーリンではあったが、不意に、アツロウ達の方へと顔を向けた。

「君達はどうする？」

「「「……！！」」」

ビクウッ！　と、その言葉に、三人の体が一気に反応する。

クー・フーリンとしてはまったく害意など込めず、むしろ緊張を和らげるように、やや軽めな口調で尋ねたのだが――悲しいかな、アツロウ達の過剰な反応はまるで、今この場で死ねと言われたかのようだった。

「ど、どうする、って……」

カタカタと歯を鳴らしながら、アツロウが言う。

「戦わないというなら、それもいい――それも一つの勇気だ」

クー・フーリンは一度頷くと、

「君達は優秀だ――そこで倒れている彼よりもな」

と言って、現在もハルに揺さぶられている、淳の方を指差した。

それも受けて、カッとアツロウの頭に血が上るが――しかし、あくまで感情よりも、冷静に状況を判断する事を主としている彼では、精々、ピクリと肩を動かすぐらいが関の山だった。

「慌てなくとも、人はいつか必ず死ぬ」

と、クー・フーリン。

「それが人間という種の『弱さ』であり――同時に『強さ』でもあるのだが――故に、わざわざ死に急ぐ必要はまったくない。私に対して真っ向から向かってきた彼の気概は、確かに素晴らしいが――しかし、一つだけ言っておこう」

勇気と無謀は違うのだ――と。

クー・フーリンは、言った。

そして突然、興味を無くしたかのように、アツロウ達から視線を外す。

「ぐ……ぅ……！」

アツロウ達の方はと言うと、そんなクー・フーリンに対して、何も言い返す事が出来ない。

次にクー・フーリンが視線を向けたのは、ハルと淳がいる方である。

見れば、ハルの方は未だに、淳の肩を掴んだままだった。

流石に、もう揺さぶるのは止めにしたようだが。

「さて――もういいか？」

しかし、ハルは答えない――クー・フーリンの存在にさえ気づいてかのように、彼女の目は、血まみれになった淳の顔へと向けられたままである。

この時の彼女には、最早、彼の顔しか見えていなかった。

自分のような女の為に戦って、そして、倒れてしまった――有里淳の顔しか。

「……ふん」

既に、これで何度目か分からない、うんざりしたようなため息をついてから、クー・フーリンは、ゆっくりとハルの方へと歩み寄った。

両手の指を、パキパキと鳴らしながら。

間違いなく――いつまで経ってもこちらの問いに答えようとしないハルを、少々手荒な方法で連れていくつもりである。

「は、ハルさん！」

敏感に危険を察知したユズが声を張り上げる。

残念ながら――その声さえも、この時のハルには聞こえていなかったが。

どんどんハルとの距離を詰めていくクー・フーリン。

アツロウ、ユズ、ケイスケ。

三人の内の誰もが、もう間もなく目の前で起こるであろう惨劇を覚悟した。

「詰みだ」

クー・フーリンが言う。

「……」

ハルは――何も言わない。

そして。

そして。

そして。

有里淳が立ち上がった。

ボロボロのズタズタで、傷だらけの血まみれではあったが、

それでも――彼は立ち上がった。

「……っ！」

これには流石に、クー・フーリンも驚いた。

ここへ来て――彼が初めて見せる、驚きの表情だった。

（なんと――）

（まだ、立ち上がってくるというのか――）

しかし、ハルやアツロウ達の驚きは、それ以上である。

「お、おい……」

ハルは一瞬、彼が生きていた事に喜ぶべきか、それとも、そんなボロボロの状態で尚も戦い続けようとしている彼に対して怒りを覚えるべきか、分からなくなった。

対して、クー・フーリンの方はと言うと。

「……おい」

と言って、視線だけをアツロウの方へと向けた。

「……っ！」

再度、体をビクッと震わせるアツロウ。

「な――何だ？」

「これまでの君達の台詞から察するに――この少年の名は、『ジュン』で良いのか」

そう尋ねるクー・フーリンの真意が読めないが故に、アツロウとしては「あ、ああ……」と言って頷くしかない。

「そうか」

クー・フーリンが言う。

「見事だ、ジュン」

彼の右手から現れるは、雷の剣。

膨大な魔力を帯びた、禍々（まがまが）しい凶刃。

それは。

クー・フーリンが――目の前にいる、『ジュン』という人間の力を、心から認めた証であった。

「まさか……イザナギ殿の他にも、これほどの人間がいるとは思わなんだ」

ヒュン、とクー・フーリンが剣を持った方の腕を振れば――それだけで、ゴオッ！　という風が吹き、その方向にあった瓦礫の山が、あらかた吹き飛ばされる。

「君という一人の『人間』に敬意を表し――」

「――少しだけ、私の『全力』をお見せしよう」

瞬間。

フッと、クー・フーリンの姿が、唐突に消えた。

「……！」

そして。

それと同時に、淳のすぐ近くにいたハルは、確かに聞いた。

よくよく考えれば、この時クー・フーリンが姿を消してから、次の出来事が起こるまでに、それほど長い時間があった筈がないにも

関わらず――それでも、ハルは確かに聞いたのだ。

微かに動いた淳の唇が紡いだ、その言葉を。

――必ず助けます。

「……っっ！」

偶然にも、それは。

二日前に――武芸館前にて、今と同じように、ハルを守っていた淳が彼女に投げかけたのと、まったく同じ台詞だった。

「何……を……」

（こんな時まで、何カッコつけてんだよ、アンタは――！）

そして。

「――――『妖花烈風（ようかれっぷう）』」

一瞬で。

有里淳の体が。

野外音楽堂の向こう側まで。

……ぶっ飛んだ。

「～～～～～っ！！」

声なき叫びを上げる淳。

ほぼ同時に、凄まじい轟音が起こり――そして、立見席よりも遠い場所へと吹き飛ばされた彼の姿が、見えなくなった。

「ジュ、ジュン君……」

と、ケイスケが言えば、

「フム」

と、クー・フーリンが言う。

「普通なら、今の一撃を受けて生きていられるとは思えないが、しかし――」

見れば、クー・フーリンは未だに、右手に雷の剣を握ったままで

ある。

「しかし、彼の事だ。ここから再び立ち上がる事もあるかもしれない。となれば――」

一応、念を押した方が良いだろうな、と。

そう言って――淳の元へと向かおうとするクー・フーリンを見て、口を開いた者がいた。

ハルである。

「待って！！」

「……？」

先程までは、完膚なきなまでに無視されていた事もあってか――怪訝な表情で、ハルの方に首を動かすクー・フーリン。

そして、ハルは。

「分かったよ……行くよ……」

と言った。

「アンタについて行く……どうしてアンタら悪魔が、そこまでアタシを必要としてんのかは知らないけど……とにかく行くよ……。だから……」

だから、どうか。

淳と、他の者の命だけは、見逃してやって欲しい――。

そう言おうとしたハルではあったが、それを口にする事さえ、今のハルには堪えられなかった。

唇を噛み締め、全身を小さく震わせている事からも、今の彼女の心情が伺える。

「……」

しかし、クー・フーリンはどうやら、ハルが何を言いたいのかを敏感に察知したらしい。

その証拠に彼は、ブンッ……！　という音を経てて、雷の剣を、空気中に霧散させた。

「素晴らしい判断だ」

チラリと淳が吹き飛ばされた方向に目を向けながら、クー・フーリンが言う――彼が再び、この場に現れる気配は全くない。昨日の任務失敗の汚名を晴らす為に、確実に『歌姫』を連れていくには、今しかないだろう。

「では、行こうか――残念ながら、私も暇ではないのでな。覚悟が決まったのなら早急に、私と共に魔界へ来て欲しい」

「……」

クー・フーリンの「魔界へ来て欲しい」という一言は、中々どう

して、ハルの心を深く恐怖でえぐったが、かと言って、自分ではそれに意見する事も出来ないという事を、彼女はとうに自覚していた——最早こうする以外に、自分が淳を救う方法はない。

既にクー・フーリンは、何も言わずに、野外音楽堂の出口へと足を進めていた。

まるで、ハルがその後をついて来るのを、確信しているかのように。

事実ハルは、その通りにした。

決して早くはないクー・フーリンの歩調に、すぐさま追いつく。

「は、ハルさん……」

と、アツロウ。

しかしクー・フーリンは勿論の事、ハルさえも、その言葉に返事を返したりしなかった。

「ち……畜生……畜生……！」

アツロウ達だって分かっていた。

このまま、ハルを行かせてはならないというぐらい——このまま、ハルを悪魔の手に渡してはならないという事ぐらい。

分かっているのに——。

それでも――クー・フーリンに対する恐怖のせいで、三人は、ハルを追い掛けるどころか、小指の一本たりとも動かす事が出来ない。

「……」

そんな三人の様子に気づかないまま、ハルは、最後に一度だけ、淳がいるであろう方向へと顔を向けた。

「……、……」

そのまま彼女は、唇を殆ど動かさずに、何かを言う。

遠く離れた場所にいる淳には勿論、すぐ近くを歩いているクー・フーリンにさえ聞こえない程、小さな声だ。

それでも、ハルには確信があった。

どれだけ離れた場所にいようとも――気を失っていようとも、自分がハッキリとした意思をもって言葉を発した以上、彼の耳には、ちゃんと届いている筈だと。

何故なら。

自分と彼は――『同類（おなじ）』なのだから。

投げかけたのは、感謝の言葉。

最後の最後まで、自分を守ろうとしてくれた有里淳に対する――愛情の念。

――ありがとう。

そして。

春沢芳野はクー・フーリンと共に、野外音楽堂から姿を消した。

◆

◆

――『野外音楽堂のバトルＰＡＲＴ１』終了時ステータス

●クラックしたスキル

＞『パララレイ』

●所持マッカ：３２１５

●有里淳（？？）

・コマンドスキル
＞？炎の乱舞
　？氷の乱舞
　？怒りの一撃
・自動効果スキル
＞？耐魔力
　？毒追加
　？同族の心得・攻
・先制発動スキル
＞『Ｓ疾風の秘法』

●木原篤郎（人間）

・コマンドスキル
＞？アギ
　？絶妙打
　？雷の乱舞
・自動効果スキル
＞？一分の活水
　？同族の心得・防
　？封魔追加
・先制発動スキル
＞『Ｓ的中の秘法』

●谷川柚子（人間）

・コマンドスキル
＞？嵐の乱舞
　？クロスレイ
　？アムリタ

・自動効果スキル
＞？耐氷結
　？一分の魔脈
　？耐衝撃
・先制発動スキル
＞『Ｓ軽業の秘宝』

●高城圭介（人間）

・コマンドスキル
＞？パララレイ
　？ディア
　？ジオ
・自動効果スキル
＞？耐電撃
　？耐火炎
　？英霊の加護
・先制発動スキル
＞『――』

●予備スキル
＞・ザン
　・ブフ

●仲魔
＞・モー・ショボー
　・リリム
　・サラスヴァティ
　・エンジェル
　・ジャックフロスト

・ジャックランタン
・トラロック
・スパルナ
・ネコマタ
・シーサー

――Mission failed……

3rd Day『愚者の足掻き』

不意に。

有里淳は――自分の名前を呼ぶ声を、どこか意識の遠いところで聞いたような気がした。

瞼（うっ）すらと目を開けてみた淳だったが、混濁する意識のせいで、まるでモザイクがかかったように視界は不明瞭だった。

次には頭の方を動かそうとしてみたが、途端に、ナイフを突き立てられたような激痛が彼に襲い掛かる。

否、頭だけではない。手、足、腹――とにかく、神経の通っている彼の体の器官の全てが、蓄積されたダメージを無視して体を動かそうとする淳に対して、一斉に抗議の声を上げていた。

再び――自分の名前を呼ぶ声が、淳の耳にこだまする。

「おい……ろよ……起きろって……ジュンッ！　起きろっ！！」

「……？　アツロウ……？」

掠れた声で、淳は応じる。

頭の中で思い描いた言葉を正確に口にする事さえ、この時の彼には困難だった。

一瞬、なんでアツロウの声が聞こえるのか？　と淳は不思議に思った――いつも朝に弱い自分を起こしてくれるのは母親（ゆかり）かアイギス、そして（ごく稀に）有里澪（ありさとみお）の内の誰かと言うのに……。

しかし次の瞬間には、意識の底に沈みかけていたこれまでの記憶が、淳の脳内を一気に駆け巡った。

真っ先に思い出されるのはやはり、先程のクー・フーリンとの戦いである。

「あれ……？　俺……生きてる……？」

淳はそう言った。

あれだけ一方的に、あれだけ無惨に痛みつけられた本人である彼にしてみれば、自分にまだ命がある事が不思議で仕方なかった。

その言葉からは、未だに現状を正確に把握出来ていない事が伺える。

やがて彼は、その後数秒ほどの時間をかけてようやく、今となっては見る影もなくなった野外音楽堂の観客席に自分が倒れており、そして、そんな自分の顔を、アツロウ、ユズ、ケイスケの三人が心配そうな表情で覗き込んでいる、という現状を理解した。

「ああ、そうだよ、生きてるよ。クソ、心配させやがって……。今度という今度は、もうホントに駄目かと思ったぜ」

そう言うアツロウの体は、大量の土埃のせいで酷く汚れていた。

刹那、淳の脳裏を、嫌な予感が通り過ぎる。

「まさか……お前もあの悪魔に……？」

「馬鹿、ちげぇよ。これは、お前を瓦礫の海の中から引っ張り出す時についた汚れだ――大体、あんな化け物と戦って、俺みたいなインドア派が生き残れる訳ないだろ。つうか、そんなのお前ぐらいのもんだ」

「……」

アツロウの言葉を受けて――勿論、アツロウの方に、そんな意識はないだろうが――改めて、自分が無惨に敗北した事を認識する淳。

口の中で奥歯をグッと噛み締める彼ではあったが、すぐに、今は悔しがっている場合ではないと思った――自分には、すぐにやらなければいけない事がある。

「ちくしょう……オイ、ハルさんはどうした？」

「……ッ」

淳の問いを受けたアツロウは、途端に、気まずそうに顔を背けた。

そのまま、いくばくかの時が過ぎていく。

「おい……」

いつまで経っても何も言わないアツロウを見て、再び自らの胸の内で――先程とはまた別の――悪い予感が急速に膨らんでいくのを

自覚しつつも、淳は、次にはユズ、ケイスケへとその視線を移していく。

しかし残念ながら、その二人にしても、この時の淳に対しては精々、

「「……」」

と、声なき返事をするのが精一杯だった。

だが、こと直感力という点において、四人の中でもっとも優秀な素質を持つ有里淳は、そんなアツロウ達の様子を見ただけで、現在、自分が思い描いている最悪の予想が的中している事を確信した。

「畜生っ！！」

叫び、その場で勢いよく立ち上がろうとする淳。

しかし、途端に先の戦闘におけるダメージが体中を駆け巡った為、途中で大きくふらついてしまった。

「お、おい。無理すんなよ、ジュン」

そんな彼を見て、慌てて彼の肩に手を置くアツロウ。

「さっきのクー・フーリンっていう奴のせいで、お前の体はもうボロボロだ。一応、ケイスケが『ディア』で限界まで回復させてくれたけど、それでもまだ治療が追いつかないくらいなんだ。だから――」

「……大人しく横になってろってのか？　ハルさんがさらわれたってのに！！」

凄まじい怒声を淳が上げれば、たちまち、ユズとケイスケがビクッと体を震わせる。

しかし、その声を一番近くで聞いていたアツロウだけは、奇妙に無表情をだった。

当然――アツロウの一番の親友である淳が、そんな彼の様子に気づかない筈もない。

「……？　なんだよ？」

怪訝そうに眉をひそめながら、淳が言う。

ややあって、アツロウは次のように言った。

相変わらず――奇妙に無表情なままで。

「なあ……ジュン。お前、これからどうするつもりなんだ？」

「……あ？」

つかの間、淳はアツロウの言っている事が理解出来なかった。

眉をひそめる淳を無視する形で、続けてアツロウは、

「多分――というよりはきっと、今すぐにでもハルさんを助けにいくつもりなんだろ？」

と言った。

「おい……」

何となく、淳にはアツロウの言いたい事が分かったような気がした。

同時に、疑惑に満ちた視線を、ユズやケイスケへと向ける――が、途端に二人は、そんな彼から顔を逸らしてしまった。

なんとも――気まずそうに。

後ろめたそうに。

顔を――逸らした。

「……行くぞ」

ポツリと、淳が言った。

それを聞いて、アツロウ達は驚いたような顔をする。

「時間がない。あのクー何とかって悪魔がハルさんをどうするつもりかは知らないけど、どう考えてもいい事である筈がねえ。多分、俺があの悪魔にやられてから、それほど時間は経ってないんだろ？だったら、まだそう遠くには行っていない筈だ――」

「ジュン……」

と、自分の考えを述べ始めた淳に対して、辛そうな表情で呼び掛けるアツロウだったが、淳はそれを無視した。

「とは言っても、闇雲に探し回っても見つかるとは思えないしな……。よし、それぞれ一人ずつで手分けして探そう――いや、ケイスケに限っては俺を回復させた事で魔力をかなり消耗してる筈だから……そうだな、ユズ、お前が一緒に行ってやってくれ」

「おい、ジュンってば……」

再度呼び掛けるアツロウの声を――

――やはり、有里淳は無視する。

「さあさあ、プランが決まったらとっとと行動に移すぞ。何、そもそもハルさんもあの悪魔も、相当に目立つ外見をしてるし、かなりの確率で二人の姿を見た奴もいる筈だから、道行く人に聞きまくればきっとなんとかな――」

「ジュンッ！！」

と。

遂に、たまり兼ねたようにアツロウが大声を発すれば――流石に、淳と言えども台詞を中断せざるを得ない。

「……何だよ」

言いつつも、しかし淳は、今からアツロウが何を言いだそうとしているのか、ハッキリと分かっているように見えた。

そして、アツロウは、

「……無理だろ」

と、言った。

辛そうに。

出来れば、口にはしたくない――と、そんな様子で。

「無理？　何が無理なんだ？」

淳が言う。

そして、アツロウは――

「無理だろ、ハルさんを助けるなんて」

「……」

「俺はお前の親友だし、お前も俺の親友だ。だから今、お前が何を考えてるのか、俺には何となく分かる――けど待てよ、そりゃ無理だろ。あんな――」

「このままじゃ、ハルさんが悪魔の手に落ちちまう」

アツロウの台詞を遮る形で、淳が言う。

「完全に状況が決まるまでに、何とかしなきゃならない」

「――あんな奴に、勝てる訳ねぇだろうが！！」

ガアッ！　と、アツロウは怒鳴った。

相変わらず、辛そうに――それでいて、これだけはハッキリと言わなければならない、という風に。

「見ろよ！　この状況を！　アイツは、ほんの一瞬でこの辺りを瓦礫の山に変えちまうような、正真正銘の化け物だぞ！　さっきはお前一人だったけど――仮に俺達四人……。いや、それに俺達の仲魔を加えた全員で一斉に挑んでも、アイツには勝てねえよ！！」

「おい……ふざけんなよテメェ！　いいのか分かってんのか！？悪魔なんて人間の常識が一切通用しない連中に、それも女であるハルさんが捕まったらその後どうされちまうのか、お前にはちゃんと理解できてんのか！？」

「じゃあ、お前はあの化け物に勝てるってのかよ！？」

真正面から切り返されて、途端に、喉に何かが詰まったように、淳の台詞が止まった。

「ああ、そうだよ！　分かってんだよ！！　お前が正しいって！！本当なら、今すぐにでもハルさんを助けに行くべきなんだって！！　でも、それでも無理だろ！！　どうやったって勝てる訳がねぇ！！　勝てる気がしねぇ！！　アイツは前に戦ったウェンディゴやビフロンズ達とは格が違う！！　正真正銘の化け物だ！！　分かってないなら言うけどな、お前と戦ってる時、アイツは全然本気じゃなかったぞ！？　もし、アイツがその『本気』を出したとしたら、

俺達みてえな人間は、あっという間に消し炭になってそれでおしまいだ！！　それぐらい……それぐらい、お前なら分かってんだろうが！！」

どんどん激化していく淳とアツロウの口論に、流石にユズが「ちょ、ちょっと、二人とも落ち着きなって！」と慌てたように声をかけるが、当然、その程度の事で心を落ち着かせる彼等ではない。

「――るっせえんだよ！！」

アツロウに負けじと、淳は叫び返す。

しかし不意に、彼の言葉は、そこで唐突に途切れてしまった。

勢いに任せて叫んでみたものの――具体的に何と言って反論すべきか、全く思いつかなかったのだ。

（……くそっ！　畜生！！）

悔しさを抑え切れずに唇を噛み締めれば、そのあまりの強さに、口の端から一筋の血が流れ落ちる。

綺麗事。

確かに、その通りだ。

先程、アツロウは淳の方が正しいと言ったが――逆に淳の方はと言うと、それほど自分が正しいとは思っていなかった。

いや、むしろ、アツロウの方が正しいとさえ思っていた。

木原篤郎の言う事は、いつも正しい。

先程もアツロウが言ったように、彼の親友である淳には、それがよく分かっていた。

毎度感情に任せて動く自分よりも、どんな状況においても冷静に物事を判断できる彼の方が、正しいに決まっている――と。

だからこそ、自分はコイツとつるんでいるのだと。

それでも、

「……庇(かば)ったんだろ？」

「あ？」

突然、意味不明な事を言い出した淳に対して、眉をひそめるアツロウ。

「あの人は――ハルさんは、俺を庇って……俺を助ける為に、自分から進んで、あの悪魔に捕まったんだろ？　よくよく考えれば、ボロクソに負けたにも関わらず、それでもこうして俺が生きてるっつーこの不可解な状況には、それぐらいしか説明がつかねえ」

流石に、その問いに対する答えをハッキリ言うのは残酷すぎると思ったのか、アツロウは固く唇を閉ざす。

しかし淳にしてみれば、それだけで十分な答えだった。

「だったら、俺はあの人を助けなくちゃいけない」

淳が言う。

「あの人が、戦闘能力なんか全くもって皆無のあの人が、お前が言うところの『化け物』の前に立ちはだかって俺の事を守ってくれたっつうんなら、今度は俺があの人を守らなくちゃいけない。それが、どれだけ無謀な事であってもだ」

「……」

「――ああ分かってる!! 綺麗事だってのは分かってる!! 夢みてえな事言ってんじゃねぇって、自分でも思うよ――けどな、それでも、俺はあの人を助けないといけないんだよ!! 相手がたとえ化け物だろうが人外だろうが、それでも! 絶対に! 何をしてでも、もう一度あの人を日の当たる世界に戻してやらなきゃいけんだ!!」

そうだ。

そうなのだ。

実際に、クー・フーリンと相対した淳にはよく分かる――あの悪魔の前に立ちはだかるという事が、一体どれだけ勇気のいる行動かという事を。どれだけ命懸けな行為かという事を。

あの、押し潰されそうな程の重圧感。骨の髄から凍りついてしまいそうな程の恐怖。

正直――淳にしたって、出来る事ならば、またあんな化け物と戦

う事は避けたい。

彼だって人間なのだ。

死ぬか、生きるか。

どちらかを選べと言われたら――間違いなく、後者を選ぶぐらいの常識は持ち合わせている。

だが。

しかし。

それでも。

ハルは――その『生きる』という選択肢を捨ててまで、淳を守ったのではないか？

彼でさえ――かつての特別課外活動部（S.E.E.S）のリーダーの血を引く有里淳でさえ怯えてしまうような悪魔から、彼を守ったのではないか？

卑怯だ、と淳は思う。

少し前までは、さんざん死んだ魚のような目をしておきながら――他人の事となると、その命を助けようとするなんて、と。

それじゃあ、自分は――何が何でも、貴女を助けなければいけないじゃないか、と。

淳は考える。

これから、自分は何をすべきか――何を『選択』すべきか。

いや。

そんな事は、文字通りの意味で考えるまでもない。

彼が頭の中で決断を下すまでに、ほんの数秒もかからなかった。

「……俺のＣＯＭＰは？　確か、あの時はハルさんに渡してたと思うけど、まさかそれも一緒に、あの悪魔に持ってかれっちまったのか？」

彼がそう言うと、アツロウが立つ位置よりも少し後方にいるケイスケが、ピクリと肩を動かした。

それを目敏く見てとった淳は、サッと彼へと視線を走らせる。すると案の定、ケイスケの右手には、今や埃だらけとなった淳のＣＯＭＰが握られていた。恐らくは、彼が気を失っている間に回収してくれていたのだろう。

「……寄越せ」

ケイスケの方へと手を差し出ながら、淳が言う。

それを受けて戸惑ったケイスケに対して、淳は再び、

「とっとと寄越せつってんだろうが！！」

と叫ぶと、彼の右手から、無理矢理自分のＣＯＭＰをもぎ取った。

画面を開き、すぐ安堵する――どこか故障しているという様子はない。どうやら、まだコイツは自分の役に立ってくれそうだ。

それが――もしやこれは、激しい戦闘の際にもそう簡単に壊されたりしないよう、従兄であるナオヤが特別な設計を施したお陰かと思うと、少々癪であったが。

「こ、ここから出ていく時、ハルさんがコッソリ置いていったんだ」

とケイスケが言うが、果たして今の淳に、その声が聞こえているかどうか。

そして――そんな、既に意思を固めた淳を見て、アツロウは顔を強張らせる。

「……マジで行く気か？」

これ以上ない苦笑いを浮かべながら、アツロウは言う。

「例えＣＯＭＰがあったって、そんなもん、なんの役にも立たねえぞ！！　お前まさか、あの悪魔の規格外っぷりを忘れた訳じゃねえだろう！？」

「分かってる」

念のため、ＣＯＭＰの他の機能に異変がないかをチェックしながら、上の空な調子で、淳が答える。

ユズやケイスケはと言うと、相変わらず気まずそうな表情で、淳とアツロウの口論の成り行きを見守っていた――いや、どちらかと

言うと、わざと二人の会話に加わらないように、頑として無言を貫いている、という感じだ。

「……っ」

すると突然アツロウは、淳の両肩を掴み、無理矢理自分の方へと向かせた。

そんな事をされては、淳も流石に、彼へと意識を傾けざるを得ない。

「現実を見ろ」

ハッキリとした口調で、アツロウが言う。

「俺は悪魔の事なんかよく知らないし、出来れば、知りたくもないが――それでも、この封鎖に巻き込まれてから三日も経てば、流石に分かる事がある」

見れば――アツロウの左目からは、一筋の透明な液体が流れ出ていた。

まるで、自分で言っておきながら、その言葉の意味に耐え切れない、というように。

「人間は……悪魔に勝てない」

と。

アツロウが、言う。

「……」

しばらくの間、気まずい沈黙が野外音楽堂全体を支配する。

が――唐突に、有里淳が、その静けさを打ち破る形で、こう言った。

「だから何だ」

と。

「え……？」

それを受けて、ポカンとするアツロウ。ユズやケイスケにしても、似たような表情である。

「さて――話を戻すぞ。随分時間を無駄にした。手分けしてハルさんを探すんだ。言うまでもなく、全員がそれぞれ全く違う方向へ探しに行った方がいい。ああそれと、途中でジンさんやホンダさん、カイドーやアマネとかの知り合いを見かけたら、すぐに事情を話して協力してもらってくれ。少なくとも、ジンさんなら間違いなく協力してくれる筈だ」

「お……おい、お前、俺の話を聞いてたのか！？」

慌てたような、アツロウの声。

それを無視する形で、淳は続けて、

「もう一度言うぞ――俺はこれから、ハルさんを助けに行く。あの悪魔がハルさんをどこに連れてったか分からない以上、かなりの手間がかかるだろうが――あの人は、俺達にとって貴重な存在だ。そう簡単に放棄できるもんじゃない」

「……？　『貴重な存在』？　どういう事だ……？」

「頭を使え！！」

普段の彼らしくもないアツロウの頭の回転の悪さに、淳は心底イライラしているように見えた。

「よく考えろ！！　どうして、ハルさんはあの悪魔に連れ去られた！？　どうして他の悪魔達が、ハルさんを執拗に狙ってたんだ！？　それは、あの人が悪魔達にとって、それだけ重要な『何か』を持ってるからだ！！　だったらその『何か』が、もしかしたら俺達にとっても有益な『何か』なんじゃないかって――そんな事も、今のお前には分からないのか！？」

「……」

一度、アツロウは自分の足元へと視線を向けた後、

「……そして、ハルさんが持つその『何か』は、俺達がこの封鎖を終わらせるのに役立つかもしれない――そう、お前は言いたいのか？」

と言った。

「ああ、そうだ」

「……けど、それはあくまでお前の推測であって、まだ確証はないんだよな？」

「ああ、そうだ」

「……そんな不確かなモンの為に、お前はまた、あの化け物と戦うって――そう言うんだな？」

「ああ、そうだ」

「……もし、もしもだ……。もう一度、アイツにボロ雑巾みたいにされたとしても――お前はきっと、また同じ事を言って、同じ事をするんだろうな？」

「ああ、そうだ」

「……」

アツロウは一瞬、呆れてものも言えない、という表情をするが――それでも、淳の様子は変わらない。

それを見てアツロウは、

「おい……ジュン！？　正気――」

「じゃあ！　俺達はどうやって、この封鎖から抜けるっていうんだ！！」

逆に淳に叫び返されて、再び口ごもるアツロウ。

と同時に、淳は、彼の両肩を強く掴む――絵面的には、淳とアツロウが、お互いの肩を両手で掴み合っているという形だ。

「教えてくれアツロウ!!　他にどうすれば、このクソッタレな状況を打開する事が出来る!?　どうすれば俺達は、この封鎖から抜けられる!?　どうすれば俺達は、悪魔の圧倒的な力に対抗する事が出来る!?」

「……っ」

「忘れんな!!　今俺達がすべき事は、何もハルさんを助け出す事だけじゃねえ!!　その後は『ベル・デル』っていう悪魔が待ってるし、何より、この封鎖を解決する為の手がかりを探さなきゃならないんだ!!」

そして。

淳は――その、『封鎖を解決する為の手がかり』とやらに、心当たりがあった。

それこそが――

「そして……ハルさんが持つ『力』ってヤツこそが、その手がかりかもしれない」

そう。

それこそが――答えだ。

絶望のどん底に追い込まれた淳達に唯一残された、最後の希望だ。

「よく考えてもみろ！！　あのクー・フーリンって悪魔が――あれ程の悪魔が、あそこまで執拗にハルさんを狙ってたのはどうしてだ！？　決まってる！！　あの人には、それだけの『何か』があるからだ！！　それこそ、もしかしたらこの封鎖の原因を根本から取り除けちまう程の『何か』が！！」

「そ、そうかもしれないけどよ、でも……」

「ああ、確証はない」

既にアツロウが何を言うのか予測していたかのような調子で、淳が言う。

「もしかしたら、俺が言ってる事は何もかもが的外れの夢物語かもしれない――どれだけ頑張ったところで、決して報われる事がねえっつー最悪な現実が待ってるかもしれない」

でもな、と淳が言う。

「もし、俺が言ってる事が全部当たってるとしたら、あの人は――ハルさんは、人類にとって貴重な存在だ。ＣＯＭＰさえあればいい俺達『悪魔使い』と違って、多分、あの人の代役なんて存在しないだろうからな」

「……具体的に、どうすんだよ」

ポツリと、アツロウが言う。

「仮にハルさんを助けに行くとして！　何か、あの人を助け出す為の案はあんのかよ！？　ある訳ねえだろ！？　あんな……あんな化け物に勝つなんて……そんな事、誰にも出来ねえよ！！　出来る訳がねえ！！」

ともすれば、非常にみっともないとも取れるアツロウの台詞ではあったが――だからこそ逆に、それが彼の本心であり、そして紛れも無い真実なのだと、その場にいる全員が理解した。

事実、彼の後ろで気まずそうな表情をしているユズやケイスケにしても、同じ気持ちだった。

あんな悪魔に――クー・フーリンに。

勝てる訳がない、と――。

だが。

「……それでも、やるしかない」

と、淳は言った。

アツロウ達の表情に、変化はない――恐らくは、既に淳を説得するのを諦めたのだろう。その一方で、彼等は未だに、再びあの悪魔に会いたくはないと思っている。もう二度と、自分の命が危険に曝される状況には飛び込みたくないと思っている。

だからこそ、彼等は――再び口を閉ざし、淳の言葉を黙って聞き始める。

しかし、どうやらアツロウ達が思っている程、淳は、三人の気持ちを理解していなかった訳ではないらしい。

その証拠に、彼は、

「無茶なのは分かってる」

と言った。

「けどな……もう、俺達にはこれしかないんだ。ハルさんが持ってるつーよく分からない『力』の為に……命を投げ打つ事しか」

「……」

命を投げ打つ。

その言葉を聞いて――アツロウ達の表情が、僅かに歪んだ。

「……惨めだろ？」

と、淳。

「けど、仕方ねぇ……。これが『現実』ってヤツで――俺達に出来る事なんか、精々そんなもんだ……」

これが――現実。

そう。

確かにジュンの言う通りだろう――と、アツロウは思った。同時

に、

（どうやら……俺は少し、勘違いをしてたみたいだな）

とも。

先程まで彼は、この状況に、『東京封鎖』という名の『地獄』に変わり果てた世界に絶望していたが――そうではないのだ。

地獄になったのではない。

自分が自覚していなかっただけで――この世界は、元から地獄なのだ。

簡単な事だ。

強い者が、弱い者を殺す。

強い者が、弱い者を支配できる。

あの悪魔――クー・フーリンが『強い者』で。

自分達人間が、『弱い者』。

簡単な理屈だ――簡単過ぎる理屈だ。

弱肉強食。

それだけの、事。

（けど……）

肩を掴んでいた手を離し――アツロウは、目の前にいる親友を見た。

（コイツは――それを理解していながらも、それでも、そんな『地獄』で足掻こうとしてやがる）

何故、とアツロウは思った。

何故、そこまで足掻こうとするのか――と。

……いや。

そんな事は、聞くまでもない。

一番の親友であるアツロウには、とっくに分かっている。

「なあ――ジュン」

「……何だ？」

それでも、アツロウは聞かずにはいられなかった。

聞かなければいけないと思った。

「お前は……」

それを聞けば。

それを聞きさえすれば――自分も、この親友と同じように、『強く』なれるような気がしたから。

「お前は、どうして――」

見れば、ユズやケイスケにしても、アツロウと似たような――どこか、覚悟を決めたような顔をしていた。

恐らくは二人も、アツロウと同じように、意思を固めたのだろう。

そして、アツロウは、

「お前は、どうして――こんな『地獄』の世界で、そんなに頑張れるんだ？」

と、聞いた。

そして、

「そんなの……」

淳は、

「そんなの……決まってんだろ」

次のように、答えた。

「俺が、俺だからだ」

◆　◆

余談だが。

この時、有里淳一行を絶望のどん底にたたき落とし、彼等とは反対に、その圧倒的な力をもって、見事目的を果たしたクー・フーリンではあったが――彼は、一つだけ小さなミスを犯した。

野外音楽堂から立ち去る以前、アツロウに淳の名を尋ねた時――クー・フーリンは、彼の姓の方も聞いておくべきだったのだ。

そうすれば、彼は気付けた筈だ。

その少年が――有里淳が、あの伝説のペルソナ使いの実の息子である事に。

かつての特別課外活動部（S.E.E.S）のリーダーであり、

死を運ぶ者、ニュクスから世界を救った英雄であり、

全ての不可能を可能にする、『史上最強のペルソナ使い』――有里湊（みなと）の息子である事に。

気付けた――筈なのだ。

「よし……じゃあ、行くぞ！」

「ああ！」

「うん！」

「勿論！」

そして、四人の心は一つになる。

春沢芳野（はるさわよしの）という、ただ一人の女性を助ける為に。

ただ――それだけの為に。

「行くぞ！！　ハルさんを助けに！！！」

虚弱で脆弱で貧弱な人間の子供であり、同時に、勇敢な心を持った四人の反撃が、今、始まる。

3rd Day『10-BIT』

――新宿、チネシティ広場。

強烈な日差しが降り注ぐその場所に、一人の男が佇んでいた。

既にどこを歩いても『人っ子一人ない』という表現が当たり前となってしまった東京内において、この広場もまたその例にご多分に漏れず、人の姿というものが全く見当たらなかった。

先程までは。

だが、今は違う――この広場は四方の殆どを何かしら建物で囲まれている為、どのような時間、状況であろうと必ずどこかに日陰が出来ているのが特徴だった。

そして先程も言ったように、その日陰の最も薄暗い位置に――つまりは、傍からは最も見えにくい位置に、その男は佇んでいた。

薄い紫色のワイシャツ、首に巻いた黒いネクタイの先端を胸のポケットに収め、下には同じく黒いパンツ、足には茶色の革靴を履いており、頭の黒髪はスポーツ刈りと言うにはやや長めで、鬱すらと細められた目と人の良さそうな顔立ちから、一目で彼が戦闘行為というものからは縁遠い場所にいる人間だと分かる。

ただし――今となっては、そのどれらの特徴よりも、体中についている酷い汚れの方が目立ってしまっていたが。

（……ここまでか）

と、１０－ＢＩＴは思った。

『１０－ＢＩＴ』。

勿論、これが本名である筈もない――これは、彼が普段から趣味の大半に費やしている、ネット内で使用しているハンドルネームをそのまま引用しただけのものだ。彼が現在のような『立ち位置』に身を置こうとした際、他に都合の良さそうな偽名が思いつかなかったのだ。

もっとも、日頃からネット内で使用しているハンドルネームというのは、いざ偽名として使用するには、余りにも第三者に素正が暴かれやすいもののような気もするが――それに関しては、元より彼は『そちら側』について詳しい人間ではない、と言うしかない。

そう――どちらかと言えば彼は、本来は至極まともな方の部類に属する人間だった。

少なくとも、悪魔だの悪魔使いだのシャドウだのペルソナ使いだの――そういった存在からは全く関わりのない生活を過去に彼が送っていたのは事実だ。

「……」

１０－ＢＩＴは一度長々しく息を吐き出すと、次には服の袖で額の汗を拭う。

しかし、

（拭っても拭っても、後から汗が出てくる……。日陰にいるというのにこれだ。どうやら、暑さのせいだけじゃないな……）

彼の推測を裏付けるように、その体からは次々と汗が溢れ、肌を滴り落ちていく。

――何故、１０－ＢＩＴという男がこの時、この場所にいるのか。それは彼の人間性を紐解く上では、実に欠かせない要素だ。しかも話せば長くなる。

１０－ＢＩＴが今のように、他には誰もいないチネシティ広場の薄い日陰の中に身を置き、非常に疲れ切った様子で体の汗を拭っているそもそもの原因は全て、数ヶ月前、とある友人と共に日本政府の『禁忌』を垣間見てしまったのが原因だった。

１０－ＢＩＴの職業自体は、どこにでもいる、ごく一般的なサラリーマンだ。少なくとも、彼自身はそう思っていた――高校時代からの付き合いである友人から、あるメールが届くまでは。

その友人の方の職業は、世の中にある真実を探り出し、それを国民へと広く伝える――いわゆるジャーナリストというものだ。

仕事に就くようになってから既に日も長く、今では何人かの後輩もいる、という話を１０－ＢＩＴは聞いていた。その際、いや、真面目に仕事さえしていれば、黙っていても後輩は出来るだろうと１０－ＢＩＴは思ったが――まあそれはともかく。

その友人にとって、ジャーナリストという職業に就いていた事が、その後の一連の出来事の、全ての始まりであったと言えるだろう。

いつものように世の中の真実を探し回っている際に、彼は知ってしまったのだ――日本政府の『禁忌』を。

『禁忌』。

ごく平凡な日本国民なら、本来は感づく事さえ許されないようなタブー。

にも関わらず、１０―ＢＩＴの友人は『それ』を知ってしまった。

知ってしまったからこそ、政府から追われる身となってしまった。

それこそ――本来の時間軸である『東京封鎖』三日目の今日、池袋にて谷川柚子（たにかわゆず）が言ったようにマンガのような話ではあるが、事実なのだから仕方ない。

彼は逃げた。逃げ続けた。

政府の追っ手から。

勿論、考えなしにただ走り続けていた訳ではなく、時には隠れ、時には紛れるなどして追っ手の追跡を逃れていた１０―ＢＩＴの友人ではあったが、幸か不幸か、彼はどちらかと言うと、並の人間よりは知能が優れている方だった。

だからこそ、彼は悟った。

このまま逃げ切る事など不可能だ、と。

このままではいつか必ず捕まってしまう、と。

いや――彼に限らず、一般的な常識を持ち合わせている人間なら、政府という『群』に対して、たった一人の人間である『個』が敵う筈がないと分かるだろう。

要は、それを理解するのが早いか遅いかの違いである。

１０―ＢＩＴの友人の最も優れた点は、それを理解しても尚、何とかして自らが掴んだ『真実』を世間に公表してみせると決断した、その強靭な精神力にある。

では、具体的にはどうやって？

最終的に彼は、他ならぬ一番の友人――そう、１０―ＢＩＴその人へと、過去に自分が掴んだ、政府の『禁忌』という名の情報を譲り渡す事にしたのである。

希望と共に。

仮に、政府の追っ手が自分に何かをした場合でも、いつの日か、その『禁忌』を『真実』として、１０―ＢＩＴという友人が国民に知らせてくれるだろうと――そう信じて。

別の見方をすれば、それは本来なら無関係な筈の友人を、わざわざ危険地帯に招き入れてしまったという、実に良識から離れた行為とも言えるが――そんな事は、１０―ＢＩＴの友人にしても重々承知していた。

だが、彼は同時にこうも思っていた。

世の中には、時に自分自身よりも――友人の身の安全よりも、それ以上の事を考える必要がある、と。

そして、１０－ＢＩＴもそれを理解していた。

理解したからこそ、突然姿を現した友人の口から放たれた、それまでに至る経緯の説明を信じ、その上で、差し出された政府の『禁忌』を素直に受けとったのだ。

その後、残酷にも友人の推測は的中し、程なくして、彼は政府の追っ手によってたった一つの命を奪われてしまう運びとなったのだが――それでも、彼の強靭な意志は、未だ１０－ＢＩＴの中で生き続けている。

少なくとも、今はまだ。

そして、現在に至る――という訳である。

（くそ……！）

と。

時間と場所は元に戻り――『東京封鎖』３日目の午前１１時過ぎ、チネシティ広場の日陰の中にて、そのように、１０－ＢＩＴは心の中で呟いた。

（一体、何なんだ!?　アイツらは……！）

その『アイツら』に１０－ＢＩＴが初めて遭遇したのは、ほんの

数十分前。

人間の常識が通用しない、闇の世界を生きる者達。

つまりは、悪魔。

１０―ＢＩＴが彼らを『アイツら』と表現したのは、当然、それらの正式な名称が『悪魔』だという事を知らなかったからだ。

いや、確かに、とてもこの世の者とは思えない連中の姿を目の当たりにした時は、本能的に、彼の脳裏を『悪魔』という名の二文字が全く通り過ぎなかったと言えばそれは嘘になるが、しかし、余りにも非現実的な内容であるが故に、本能ではなく理性の部分が、彼らをあからさまに『悪魔』と呼ぶのを拒否したのだ。

これは１０―ＢＩＴが社会人になってから既に久しいから出る意見かもしれないが、悪魔という呼び方は、どうしても質の悪い映画やゲームなどのイメージが受かんできて、真面目に捉えられないのである。彼もまたショウジと同じように、その事実を直接目の当たりにでもしなければ、そういったオカルトめいた事は一切信じない人間だった。

しかし、これもまた、まごうことなく現実である――残酷な現実である。

今回の『東京封鎖』にしてもそうだ。

今となっては既に『一般人』という枠組みから外れかけている１０―ＢＩＴではあったが、それでも、瀬多総司（せたそうじ）や九頭竜天音（くずりゅうあまね）などと……比べれば――先ほども同じような事を述べたが――遥かにまともな

部類に入るのは間違いない。

だからこそ――という言い方は変かもしれないが――１０―ＢＩＴは知らなかった。

今回の『東京封鎖』について。

彼は、全く事前に情報を仕入れていなかった。

（まさか、こんな事になるなんて……）

そう。要するに、此度（こたび）の『東京封鎖』に彼が巻き込まれたのは、全くの偶然という事だ。

山手線沿いに張り巡らされた自衛隊のバリケード。外界とのあらゆる交通、通信手段を断絶され、孤立した東京。

それが更に、１０―ＢＩＴの胸の内の焦燥（しょうそう）感を煽り立てる。

現在１０―ＢＩＴが抱えている目下の悩みは、『時折遭遇する悪魔』と『封鎖された東京』、そして『政府からの追っ手』という３つであったが、この中で彼にとって最も厄介なのは『東京封鎖』だった。

その正確な数さえ把握できない悪魔や政府の追っ手に対して必死の逃亡劇を繰り広げるには、東京という街はあまりにも狭すぎるからだ。

状況は絶望的と言っていい。

それこそ、並の人間ならば、もういっそのこと、自らの手で自分の命を断ってしまった方が楽なのではないか、と――そう思ってしまってもおかしくない程に。

しかし――幸か不幸か彼の精神力は、友人の死という過酷な経験を乗り越えた事で、既に『並』ではなくなっていた。

（せめて……『これ』を彼女に渡すまでは……私は死ぬ訳にはいかない……！）

心に乗しかかってくる不安を跳ね退け、彼は、改めて今、自分が何をすべきかを再確認する。

というのも――そもそも今回、彼が東京を訪れていたのは、この街でやらなければいけない事があったからだ。

よくよく考えれば、現在では例の友人に代わって政府から追われる身である彼が、わざわざその政府の本拠地ともいえる東京にいるとなれば、何かしらの理由がある筈なのである。

スッと、１０－ＢＩＴは、自分の右手の中にある1台の携帯ゲーム機――通称『ＣＯＭＰ』に視線を落とす。

これまでの様々な展開から考慮すれば、それもまた普通のＣＯＭＰではなく、悪魔召喚プログラムの組み込まれた改造ＣＯＭＰという事になりそうだが――しかし今１０－ＢＩＴが持っているそれは、本当に、普通に店で売っているような市販のＣＯＭＰだった。

そこそこ大きい電気量販店などに行けば、すぐに見つけられる代物である――当然、悪魔召喚プログラムなどというトンデモ機能が

搭載されている訳もない。

だが、そのＣＯＭＰには、他のものとは決定的に違う点が一つだけあった。

というのも――実は、１０―ＢＩＴの友人が入手した日本政府の『禁忌』の情報の全てが、このＣＯＭＰに詰まっているのだ。

そういう意味では、そのＣＯＭＰは、ある意味で１０―ＢＩＴの命よりも貴重な物であると言えた――少なくとも、１０―ＢＩＴ自身はそう思っていた。

事実、これまでの過程で彼の衣服は完全に汚れきっていたが、そのＣＯＭＰだけは極めて清潔な状態を保っていた。

自分の身がどうなろうとも、このＣＯＭＰだけは守らなければいけないと彼が奮闘してきた結果である。

１０―ＢＩＴの目的。

それは、その『禁忌』の情報が詰まったＣＯＭＰを、ある一人の女性に渡す事であった。

女性の名前は東林海、通称ショウジ。

今は亡き、１０―ＢＩＴの友人の職場の後輩である。

これに関しては、その友人から指示された事ではなく、１０―ＢＩＴの独断によるものだったが――しかし彼はある理由から、既に自分には時間がない事を悟っていた。

それが何に関する時間かなど、言うまでもない。

とにかく、今はショウジに会うのが先決だ。

そもそも、政府に追われる身でありながら、たった1人で活動すること自体無理があったのだ。10―BITの友人が同じように1人で活動し、そして最終的に非業の死を遂げてしまった事からも、それは伺える。

しかし、同時にそれは、ショウジという1人の『一般人』までも（厳密には、彼女もまた既に一般人とは呼べなくなりつつあるのだが、この時の彼が、その事を知る筈もない）、自分と同じような危険な境遇に招き入れるという事でもあるのだが――最早、そういった不安要素について深く考える余裕さえ、今の10―BITにはなかった。

それほどまでに、この時の彼は追い詰められていたのだ。

――ズキンッ、

「……っ」

途端、左肩の後ろ辺りに鋭い痛みが走った為、10―BITは思わず顔をしかめた――どうやら自分に残された時間は、本当にあと僅かしかないらしい。ショウジを探し出し、『禁忌』の情報が詰まったCOMPを渡すなら、なるべく早い方がいいだろう。

どうせもう、残り少ない命。

ならば、ショウジに『禁忌』の情報を渡した後は、少しでも自分が政府の目を引き付けられれば更に良い。

ショウジは恐らく、１０―ＢＩＴについては、件の友人から話で聞いている程度の知識しかないだろうが、１０―ＢＩＴの方はというと、その友人から渡された、ショウジの映っている写真のお陰で、彼女の外見などについても把握していた。

念を押しておくが、別に１０―ＢＩＴの友人が、実は職場の後輩に対し妙な感情を抱いていたとかそういう訳ではなく、単純に、所属していた出版社の行事の際に撮ったらしい社員の集合写真を渡されただけの話である。

その写真も既に、スキャンした後『禁忌』の情報と共にＣＯＭＰのデータフォルダへと保存している為、いつでも好きな時に確認する事が可能だ。

「……そろそろ行くか」

呟き、若干体をふらつかせながらも、１０―ＢＩＴは立ち上がる。

同時に、彼の脳裏に1人の人物の姿が思い浮かんだ――と言っても、ショウジではない。

１０―ＢＩＴ自身も、何故、この時自分がその人物の姿を想像したのか説明がつかなかったが――それは、彼がネット内で知り合ったもう1人の友人、木原篤郎（きはらあつろう）という少年の姿だった。

「……」

よくよく考えれば、『禁忌』の情報を渡すのはショウジではなく、その少年にという手もなくはない。

しかし、頭の中でそう考えた後すぐに、１０―ＢＩＴは自分でその選択肢を放棄した。

確かに、彼はとても自分より年下とは思えない程デジタルな面に関する知識は深いし、『禁忌』のように危険、かつ重要性の高い情報をどのように扱えばいいのかすぐに理解できる能力も持ち合わせているだろうが――何と言ったって、彼はまだ１７歳なのだ。現在自分が体験しているような、過酷な運命を味わわせるにはまだ若過ぎる、と１０―ＢＩＴは思った。

――思った、その時だった。

ドバッ！！　と、

１０―ＢＩＴの視界の端にあるコンクリートの壁が、突然吹き飛ばされた。そして、その砕けた残骸の後から、１体の『異形』が現れる。

『異形』。

というよりは――間違いなく『悪魔』だ。

「クソッ！！」

穏やかな性格の彼らしくもない、乱暴な口調で毒づきながらも、すぐに１０―ＢＩＴは足を動かす。

これがもし、悪魔については何の知識も持ち合わせていない数日前だったら、余りの出来事にしばらくは思考がフリーズしていただろうが、この時の１０―ＢＩＴには、既に異常な出来事に対してある程度の耐性が出来ていた。

その悪魔は、１０―ＢＩＴが今まで見たことがない外見をしていた――と言っても、それ自体は取り立てて珍しい事ではない。彼もまた有里淳（ありさとじゅん）と同じく、悪魔という存在を認知してからまだそれ程の月日は経っていないのだから。

しかし、それでも――１０―ＢＩＴはこう思わずにはいられなかった。

（何なんだコイツは！？）

驚くのも無理はない。

理由は、その悪魔の外見。

体の形自体は、人のそれと全く同じだ。身長の方も、大の大人よりも少しだけ高いぐらいだろう。

ここまではいい。

だが、その全身が灼熱の炎で覆われているというのは、一体どういう事だろうか？

「ぐっ……！」

一瞬にして、１０―ＢＩＴの喉が干上がる。

悪魔の名は『インフェルノ』。

全てを燃やし尽くす地獄の業火を身に纏う、『悪霊』の種族に分類される悪魔である。

勿論、ここで『戦う』などという選択をする程、１０―ＢＩＴは愚かではない。

考えるよりも先に体を動かし、全速力でインフェルノから逃れる。

インフェルノの方も、そんな１０―ＢＩＴを黙って逃しはしない。ガラガラという、不明瞭な呼吸音を喉の奥から発しながら、まるで地面の上を滑るように１０―ＢＩＴの追跡を開始する。

（全く――とことんついていないな、私は！！）

とは言え、インフェルノの方は、特に１０―ＢＩＴを狙ってここまでやって来たという訳ではないだろう。単純に『何となく訪れた場所に人間がいたから、とりあえず襲っておこう』という認識しかないに違いない。

これがもし、政府が差し向けた追っ手だったならば話は別だが――彼らと違い、悪魔にとって１０―ＢＩＴとは他の人間達と同じく、

自分達の殺戮の欲求を満たすだけの生物に過ぎないのだ。

「くそっ！！　運動は苦手だと言うのに！！」

チネシティ広場を飛び出すと同時に口にしたその言葉に違わず、確かに、１０―ＢＩＴの走る速度は決して速いとは言えなかった。

しかもどういう訳か、走る際に左腕を殆ど動かしていない。そんな不自然な体勢で走れば、例え彼でなくとも大したスピードが出ないのは当たり前である。

後ろを追ってくるインフェルノとの距離が開く気配はない。どころか、段々と縮められているような気さえする。

こうなってくると、『東京封鎖』という事態を受けて、どこに行っても大抵の場所には人気がないという状況は１０―ＢＩＴにとってはかえってありがたい。

少なくとも、彼の目が届く範囲に人の姿は見当たらなかった――もしいたとなれば、１０―ＢＩＴはそれらを避けながら走らなければならなかっただろうが、インフェルノの方は、そんな事は気にもしないだろう。

いずれにせよ、とにかく今は走るしかない。

既に残り少ない命の時間を、更に短くしたくなければ。

3rd Day『それぞれの行動』

――秋葉原。

一旦、野外音楽堂（だった場所）にて親友である有里淳（ありさとじゅん）、及び谷（たに）川柚子（かわゆず）や高城圭介（たかしろけいすけ）らと別行動を取る事になった木原篤郎（きはらあつろう）は現在、秋葉原にいた。

件の野外音楽堂にて突然現れた悪魔、クー・フーリンにさらわれた1人の女性、春沢芳野（はるさわよしの）を見つけ出し、あわよくば救出する事。

それが、この時のアツロウの目的である――今は近くにいない淳やユズ、ケイスケにしても同じ事だ。

しかし、

「クソ、一体どこにいるってんだ……！」

――というアツロウの言葉からも分かるように、どうやら彼の捜索活動は、それほど目立った成果を上げられずにいるようだった。

クー・フーリンがハルと共に野外音楽堂を後にした際、誰もその後をついていかなかったが故に、2人がどこに向かったのかは、ようとして知れない。

だからこそ淳の提案により、決して狭くはない山手線内を三手に別れて探す事にしたのだが――アツロウは早くも、自分の胸の中で諦めにも似た感情が滲み出てくるのを自覚していた。

「ちっ……！」

舌打ちして、空を見上げるアツロウ。

彼は淳とは違い、決して暑いのが苦手という訳ではなかったが、かといって、取り立てて好きという訳でもなかった。

それが、約２０分もの間街中を走り回った後で、体中から大量の汗を流している状況でとなれば尚の事だ。

着ている衣服が汗のせいで肌にベッタリと張り付き、それが何とも不快だった。喉もカラカラに渇いている。

（それにしても……）

アツロウは考える――どうして自分は未だに、クー・フーリンとハルの姿を見つけられないどころか、その足取りさえ掴めていないのだろうか？　と。

一応、淳に言われた通り、途中で見かけた何人かの民間人にも、２人の姿を見かけはしなかったかと尋ねてみたりもしたのだが、それも全てが空振りに終わっていた。

どころか、意外にも、未だに悪魔の存在を知らない――もしくは認めない人間が多かった為、逆に不審な目で見られる事の方が殆どという始末である。

しかしこの場合は、この作戦を立案したジュンに非があると言えなくもないかもしれない、とアツロウは思った。

そもそもこの、とにかくすれ違った人々にやたらめったらハルとクー・フーリンを目撃したかを聞きまくるという、下手な鉄砲数撃ちゃ当たる作戦（今、命名）は、2人がわざわざ人目に付きやすい所を移動していたらと仮定しての話だ。

そして残念な事に、今もハルと共にどこかにいるであろうクー・フーリンが、そのような愚かな行動を取る確率は、極めて低いだろう――あの悪魔は、そこまで馬鹿ではない。

そう。

それこそが重要だった。

確かに、あのクー・フーリンという悪魔の力には、アツロウの想像を遥かに絶するものがあったが――彼がクー・フーリンを見て脅威だと思ったのは、何もそれだけではない。あの悪魔には明らかに、他の悪魔とは一線を画す程の『知性』がある。

いや。

（単純に『物事を考える』程度の能力だったら、ウェンディゴやビフロンズにもあった。となるとクー・フーリンのそれは、『知性』というよりは『社会性』って言った方が適切かもしれねえ）

と、アツロウは思う。

『東京封鎖』という状況で過ごしてきたこれまでの3日間、アツロウもそれなりの数の悪魔と遭遇してきたが――その殆どが、獣程度の知能しか持っていないか、仮に人並みの知性を持っていたとし

ても、明らかにその人格――悪魔に対して『人格』という表現が適切かどうかは疑問だが――に問題がある場合が殆どだった。

いや、問題があるというよりは、もういっそのこと破綻（はたん）している、と言った方が良いかもしれない――先に述べたウェンディゴやビフロンズにしても然（しか）りだ。

（けど――あのクー・フーリンって奴は違う。明らかに違う）

ただ知性があるだけではない。あのクー・フーリンという悪魔は、それを完璧にコントロールするだけの冷静さをも備えている。単純に知力だけを比べるならビフロンズ辺りとそう変わらないかもしれないが、そのビフロンズにしたって、少なくとも戦闘の際には悪魔としての本性を剥き出しにしていた。

しかしクー・フーリンには、そういった荒々しさは全く見受けられなかった。

もっとも、それについては単純に、野外音楽堂にてクー・フーリンと、それと戦っていた有里淳との力量にかなりの差があったから、という事もあるかもしれないが――それを差し引いても、である。

今までの、常に本能を優先させていた悪魔達とは、根本的に違う。少なくとも、単なる戦闘バカ（バトルジャンキー）という訳ではないだろう。

（厄介だな……）

言うなれば、完璧に訓練され、屈強な肉体と柔軟な思考、そして主に対する絶対的な忠誠心を兼ね備えた番犬。

この時アツロウがイメージしたのはそれだ。

ここで言う『主』とは、当然ベル・デルの事である。アツロウが淳とクー・フーリンの戦いを目にしていたのは、時間にしておよそ数十分にも満たない間でしかなかったが――それでも、あの悪魔のベル・デルに対する忠誠心の深さは、その口から放たれた言葉の端々からも窺い知る事が出来た。

（……とにかく）

と、一旦そこで、心の中で自分の思考に区切りを入れるアツロウ。

（いつまでも敵の凄さに感心してても仕方ねえ。こうしている内にも、ハルさんはあの悪魔に、魔界に連れていかれちまうかもしれねえんだ。手がかりがねえっつうんなら、もうとにかく、頭よりも足を動かすしかないだろ！）

しかし。

――フン。

と、頭の中で小さな、意地悪な声がした。

――けどお前は、本当はもう2度とあの悪魔には会いたくないと思ってるんだ。そうだろ？

「……っ」

途端に、アツロウは唇を噛み締め、ハルを探す為に動かそうとしていた足を止めた。

「そんな事はない」

思わず、そのように呟く。

が、

――嘘をつくな。

再び、そんな声。

――だったらどうして、野外音楽堂で、お前は淳を助けようとしなかった？　お前がしていた事と言えば精々、自分も同じように痛い目に合うのを恐れて、ガタガタ震えていた事ぐらいじゃないか……。

苦痛に顔を歪めて、アツロウは両手で顔を覆った。日頃から、本能よりも冷静に状況を判断することを優先する彼のこと、本能に嘘をつくことは出来ても、それが本心となれば話は別だ。

自分に嘘はつけない。

もし仮に、自分が有里淳の親友でなかったら、春沢芳野（はるさわよしの）が凶悪な悪魔にさらわれたと聞いても、自分はきっと傍観者を決め込んでいただろう。

それこそ、学校内で起こっているイジメに対して、他の生徒が見て見ぬ振りをするかのように。

何よりも――先程、野外音楽堂で意志を固めたばかりだというの

に、クー・フーリンのあの圧倒的強さを思い出せば、それだけで、再び足が情けなく震え出してしまうのは、どうしようもない事実なのだ。

（……クソッ！　弱気になんな！　アイツは――ジュンの奴は、そんな化け物にズタボロにされたってのに……それでもまだ、何とかしてハルさんを助けようとしてるんだぞ！）

そう思い、バシンッ！　と、先程まで顔を覆っていた両手で頬を強く叩いて、自分に喝を入れるアツロウ。

（お前が頑張ってるつーのに……親友の俺が弱気でいてどうすんだよ！　なあ――ジュン！！）

そう。

今は自分が――木原篤郎が、有里淳の『親友』なのだ。

だからこそ――淳が頑張っているというのなら、アツロウも頑張らねばならない。淳が覚悟を決めたというのなら、アツロウも覚悟を決めなければならない。

それが、有里淳を支える者としての務めだと――そう、アツロウは思った。

（この際だ。素直に認めちまおう。俺は確かに、あのクー・フーリンって悪魔に心底ビビってる。出来る事なら、もう2度と会いたくねぇとさえ思ってるよ。けど……）

けど――そんな事は関係ない。

自分の気持ちなど関係ない。

有里淳がその命を懸けて、１人の女性を助けようとしている。

自分が彼と同じように命を懸ける理由など、それで十分ではないか。

そして。

「……よし！　それじゃ、次の場所に行くか！！」

と、アツロウがそう言った――その時だった。

「行く？　一体どこに逝くっていうんだ？」

どこからともなく、そんな声が聞こえた。

「……っ！」

バッ！　と、弾けるようにアツロウは振り向く。

そこには１人の男が立っていた。

◆　◆

同時刻。

永田町、国会議事堂近くの通り道。

有里淳（ありさとじゅん）もまた、クー・フーリンに連れ去られたハルを救い出すべく、凶悪な日光によって熱せられたアスファルトの上を、凄まじい速度で駆け抜けていた。

元より桐条美鶴（きりじょうみつる）、及び真田明彦（さなだ あきひこ）によって過去にその体を鍛え上げられていた彼のこと、そこへ更に、この3日間に及ぶ度重なる強敵との戦いを経て、彼の基本的な身体能力は既に、人間レベルにおいてはトップクラスにまで達しようとしていた。

あくまで人間レベルでは、という話だが。

野外音楽堂にてクー・フーリンから受けたダメージの影響など、最早、今となっては微塵も感じられない。

勿論それは、ハルを捜索する前に淳の体の傷を『ディア』で癒してくれたケイスケの手柄でもあるのだが――それを差し引いても、凄まじい回復力である。

そのケイスケはというと、今はユズと共に、淳やアツロウ達とは別の場所で、同じようにハルを探している最中である。

淳、アツロウと違い、彼にだけユズという付添人（つきそいにん）が付いているのは、先に述べた淳に対する『ディア』の使用のせいで、彼の魔力が尽きてしまった為だ――全ての魔力を使い果たさなければいけない程、野外音楽堂で受けた淳の傷は深かったのである。

つまりユズは、魔力を失い、今となっては著しく戦闘能力が低下してしまったケイスケの護衛役という訳だ。

相変わらず、凄まじい速さで走り続ける淳。息切れもせずに風を切っていくこの時の彼の速度は、下手すれば軽自動車ほどもあるかもしれない。

しかし特筆すべきは、その移動速度だけではない。

それは、

（……こっちか！）

と。

そう思い――ギュバァッ！！　という摩擦音を靴と地面の間から発し、バイクがドリフトしたかのような迫力で、途中で目にした曲がり角へと足を動かしていく淳。

その足取りには、一切の迷いがない。

まるで、ハルとクー・フーリンがどこにいるのかを、既に把握し

ているかのように。

そして実際に、淳は確信していた。

現在、ハルがどこにいるのか。

正確に、精密に――把握していた。

そう。これこそが、もう1つの特筆すべき点である。

普通ならば、クー・フーリンとハルが今どこにいるかなど、この時の淳には知る筈もないからだ。

何となれば、野外音楽堂からクー・フーリンがハルと共に何処(いずこ)かへと去っていた際、淳はまだ気を失っている最中だったし、そうでなかったアツロウ達にしても、野外音楽堂を後にした時間に、クー・フーリン達とは決定的なタイムラグがあった為である。

本来ならば、今も山手線内のどこかにいるアツロウやユズ、ケイスケなどと同じように、とにかく足を動かしてしらみ潰しに探すくらいしか手はない筈なのだ。

にも関わらず、今の淳がハルとクー・フーリンの居場所を把握出来ているのは何故か？

説明の前に1つだけ訂正を加えておくと、正確には、淳は2人の居場所を同時に把握している訳ではない――ハルの居場所だけを把握しているのだ。

同属本能、というやつである。

或いは集合的無意識、とでも言うべきか。

例えるならば、同じ種類の狼がどれだけ仲間と離れていようとも、その位置を正確に把握する事が出来るように――有里淳もまた、春沢芳野という『同類』が今どこにいるのか、何となく分かるのである。

ただの勘と言えばそれまでだが――しかしそれにしては、淳の表情は余りにも確信に満ちているように見えた。

もっとも、それならば、野外音楽堂においてアツロウ達と別行動をとる必要もなかったのではないか、という話ではあるのだが――それについては、その時はまだ、淳は今のような同属本能を自覚出来ていなかったから、と言うより他にない。

（間違いねぇ――ハルさんは、この先のどこかにいる！！）

まるで強力な磁石に引き寄せられるかのように――有里淳は走る。ただ、走る。

「間に合ってくれよ……」

先に述べたように、体の傷自体は癒えているものの、服に付いた血や汗、泥などによる酷い汚れの問題については、全く解決していない――そのせいで、時にはヌルリと、時にはザラリとした感触が直接肌に伝わってきて不快だったが、今はその汚れを何とかしようとする時間さえ惜しかった。

と。

その時。

突然、淳の視線の先から、１人の男が現れた。

いや、厳密には、淳が先の曲がり角に入った時には既に、その男が向かい側から走ってきていた、という感じだ。

淳に負けず劣らず、男の走る速度もかなりのものである。

両者の間にある距離は、およそ５０メートルといったところだろうが――２人の尋常ではない走力によって、その距離もあっという間に縮んでいく。

普段の淳ならば、例え目を向けなくとも裕に気配を察知できる距離だが――しかし、この時の淳の頭の中は、さらわれたハルの事で一杯だったが故に、視界の端にその姿を捉えても尚、男の存在に気付けずにいた。

日本人にしてはかなり高い身長に。

全身に様々な装備品を取り付けた、黒い戦闘服で身に纏った――『彼』の存在に。

淳は、気づいていなかった。

しかし。

ついに、横から見て、淳と『彼』の姿が擦れ違ったところで、

ようやく――淳は、『彼』の存在に気づく事が出来た。

次には、

「……っ！？」

と――その場で急停止した後、凄まじい勢いで、擦れ違った『彼』の方へと体を向ける。

そのような行動を淳が取ったのは、決して、『彼』の外見が珍しかったから、という訳ではない――『東京封鎖』に巻き込まれて以降、度重なる異常事態に遭遇し続けてきた為に、既に彼の心臓は、少々の事ではびくともしない程に太くなっていた。

淳がハルの捜索を一時中断してまで、『彼』の方を振り向いた理由。

例えるなら。

突然、頭のてっぺんから足のつまさきにまで、電流が走り抜けたかのような。

見えない所から、重い鈍器で頭を殴られたかのような。

それほどまでに衝撃的な何かが――『彼』と擦れ違った際、淳の体内を駆け巡ったからだ。

（今のは……！？）

しかし。

残念ながら、淳が今度こそしっかりと『彼』の姿を視界に納めようとその体を振り向かせた時には、既に『彼』は別の曲がり角へと姿を消してしまった後だった。

「……」

淳は考える――今の男は一体何者だったのか、と。

先ほど擦れ違った際に感じた、あの妙な感覚。

どこか懐かしいような――そんな感覚。

（懐かしい……？）

「まさか」

いや――そんな筈はない、と淳は思った。

気のせいに違いない、と。

今の淳は、野外音楽堂にてクー・フーリンに惨めに叩きのめされた事と、その後、みすみすハルがさらわれるのを許してしまった事の罪悪感で、心にぽっかりと大きな空洞が出来てしまったかのような感覚に陥っていた。

それは裏を返せば、同時に、空いた部分を埋める為の何かを、この時の淳は求めていた、とも言える。

だからだろうか――先程の『彼』の姿と、淳の記憶の中にいる1

人の男の姿とが、重なって見えたのは。

だが、

「やっぱ、気のせいだよな……」

言って、淳は再び、体をハルの気配がする方向へと向けると――再び、彼女の捜索を開始する。

同時に、彼は改めて、自分の心に言い聞かせた。

気のせいに決まってる。

こんな所に、あの人がいる筈がない。

自分にとっては名付け親でもあり、ナオヤと同じく、兄にも等しい存在である周防達哉（すおうたつや）が、こんな所にいる筈がない――と。

淳はそう思った。

３ｒｄ　Ｄａｙ『友の為に』

――秋葉原。

「久しぶりだな――と言っても、最後に会ってからまだ１日も経っていないが」

物静かな声がした。

アツロウがぎくりとした表情で振り返ると、その視線の先では１人の男が、すぐ近くにある電柱に背を預けてこちらを見ていた。

黒いスーツを身に纏った、小柄で、全体的にひ弱な印象を持つ黒髪の男である。一見すれば、特に取り立てて特徴のない、ごく普通のサラリーマンという印象だったが――しかしその外見に、アツロウは見覚えがあった。紛れも無くあの人物だ。

「アンタは……確か昨日、ハルを探してた……あの時のオッサンか！」

アツロウの言葉を受けて、男は口の端を吊り上げると、そのまま小さく頷いた。

「ああ。私はまさしく、あの時のあの男だよ――けど出来れば、『オッサン』っていう表現は控えてくれないか？　こう見えてもまだ２０代なんでね」

男の言葉を、アツロウは無視した。

「……まだハルさんを狙ってんのか？」

フン、と軽蔑するかのように鼻を鳴らしながら、アツロウは言う。

「だったら生憎だったな。アンタが何かするまでもなく、とっくにあの人は悪魔にさらわれちまったよ」

「知ってるよ」

欠伸を噛み締めているかのような表情で、男はアツロウの言葉に応じる。

そんな男の姿を、アツロウは改めてジッと見つめた。彼がこのサラリーマン風の男を目にしたのは、これで3度目だ。

1度目は表参道で、2度目は東京の日谷比公園――つまりは、先程までアツロウとその仲間達がいた野外音楽堂のすぐ近くで、だ。どちらも昨日の事である。

そして、その2度の遭遇を受けて、既にアツロウは、男の目的がハルである事を把握していた。

が、

「安心しろ。今の私の狙いは、もはやあの女にはない。……あの『歌姫』は既に、忌ま忌ましい事にベル・デルの配下であるクー・フーリンの手に落ちてしまった――そうだろ？」

「……」

黙って男の言葉を聞きながらもアツロウは、何故、この男は先程起こったばかりの出来事を知っているのだろう？　と疑問に思った。そして同時に、ある可能性の存在に気づいた。もしやこの男は、あの時の光景をどこかからこっそりと伺っていたとではないか、と。

（――となると、今こうして俺がこのオッサンと顔を合わせてるのも。とてもまったくの偶然とは思えねえ。……まさか、野外音楽堂からずっと俺の後をついて来たってのか？）

しかし、そんな事はどうでもよかった。

今の彼には、他にやるべき事がある。

「一体、何を考えてるかは知らねえけど……」

アツロウは言う。

「野外音楽堂での件を知ってるってなら、当然、今の俺が決して暇じゃない事も知ってるよな？」

クルリと、男に背を向けるアツロウ。次にはその足を、再びハルを探す為に動かす。

「生憎と、今はアンタの無駄話に構ってる時間さえ惜しいんだ。大した用もないってんなら、俺はこれで――」

しかしその時、彼の背後から『何か』が高速で近付いてきたかと思うと、やがてそれはアツロウの頬を掠め、彼の視線の先にある地面に着弾した。

聡明なアツロウはすぐに、その『何か』の正体が小規模な火炎魔法――『アギ』だと確信する。着弾した部分の地面が黒く焼け焦げているという時点で、その推測に対する裏付けは十分だった。

「……っ！？　っつ、ぁ……！？」

ジュワッ、と、魔法が掠めた右の頬から不吉な音が発せられる。

たまらず、その部分を片手で押さえるアツロウ――何本もの針で刺されたかのような痛みをこらえながらも、彼は再び、男の方へと体を向ける。

今の攻撃は、決してアツロウにダメージを与える事を目的としたものでない――彼の動きを止める為の攻撃だ。

男がその気になれば、今の『アギ』をアツロウの頭部に命中させ、彼を即死に至らしめる事も可能だった筈だ。された側であるアツロウの方も、それを理解していた。だからこそ、男の方に体を向けたのだ――そうでもしなければ、男は必ず『その気』になってしまうだろう。

「まぁ、そうつれない態度を取るなよ。良ければ、少し話をしないか」

アツロウとは対象的に、男の方は、いかにも余裕タップリといった表情である。対するアツロウは、キッ！　と敵意に満ちた目で男を睨みつけると、

「悪魔使い、か……！！」

火傷した頬を手で押さえ、男の顔を睨みつけながら、忌ま忌ましそうにアツロウが言う。

「ああ、そうだ」

特に否定する事もなく、男はすんなりとアツロウの言葉に対して首肯する。

「そうだ。私は悪魔使いだ――お前も見ていただろう？　昨日、あの青髪の少年に対して、私が魔法を使用したところを」

「……」

（なるほど、やっぱあの時、ジュンが突然コイツから手を離したのは、コイツから何かしらの魔法攻撃を受けたからなんだな……）

1人、心の中で納得するアツロウ。

が、次の瞬間には、こめかみに欝すらと青筋をたてながら、

「……アンタに構ってる暇はねえっつってんだろ！！　下らない話だったらまた次の機会に聞いてやるから、今は俺の邪魔をすんじゃねぇ！！」

それは、彼にしては珍しい、強く感情をあらわにした声だったが――しかしアツロウにしてみれば、これが当然だった。何と言ったって、今、自分は大事な親友である有里淳の頼みでハルを捜索している最中だし、それを邪魔される事ほど、彼にとって腹立だしい事はないからだ。

――が、男の方は相変わらず、その顔にニヤニヤとした笑みを浮かべながら、

「いやいや、お前には悪いけど、私としては、今だからこそお前と話したいんだ」

と言う。

アツロウは怪訝な表情で男の顔を見つめた。男の意図がさっぱり分からない。有里淳一行の中では最も観察眼、及び推理力に優れた彼でさえも、だ。

アツロウとしては、先に言ったように、出来ればこんな男の話には付き合わず、サッサとハルの捜索を再開したいところだったが――それで男と戦闘に突入し、そのせいで時間を長々と浪費してしまうというのも、非常につまらない展開ではある。

だからこそアツロウは、あえて男が話しやすいように、今は黙って男の話を聞いている事にした。

しかし、

「実は、お前に聞きたい事がある。あの、青い髪のガキ――有里淳についてだ」

――という男の言葉を受けて、早くもアツロウは、反射的にその口から疑問の声を発してしまった。

「……？　何で、アイツの名前を……？　いや、というより、どう

してアイツの事を知りたがるんだ？」

「質問は1度につき1回にしてくれないか？　頭が混乱してしまう」

実際にはそんな事はまったくなさそうな様子で、男が言う。

「まぁ、名前の方については、特に疑問を抱く必要もないんじゃないか？　あのガキの名前は――少なくとも、天界においては――かなり知れ渡っているようだしな。魔界の方はそうでもなさそうだが……」

男の言葉に、アツロウは眉をひそめる。

「有名……？　……アイツが？」

と言うより、そもそも『天界』とは何だ。言葉から察するに、『天国』と似たようなものだろうか。

しかし、それならば何故、アツロウの親友の名前が天国なんかに知れ渡っているのか、という話になる――有里淳がこれまでしてきた功績から考えるに、この場合はむしろ、魔界の方に彼の名が広まっているのが妥当ではないだろうか？

「昨日、私があのガキに対して言った事を覚えているか？　『私がお前の正体に気付いてないとでも思ったか』と――そう言っただろう？　そう。私はあの時から既に、あのガキの正体を大まかにに把握していた。……もしかしたら君達は上手く隠し通しているつもりだったかもしれないが、私には丸分かりだったよ」

そのように、さも得意そうに話す男ではあったが、アツロウには

何が何だかサッパリである。

「アイツの……正体？　オイ……アンタ、マジでさっきから何言ってんだ？　もう少し分かるように話せよ」

「……？」

いい加減ウンザリだとでも言いたげなアツロウの様子を見て、ここで初めて、男はその顔からニヤニヤ笑いを消すと、不可解そうに眉をひそめた。

が、それもつかの間。

次の瞬間、男は、

「く……くっく、ははっ！！」

と、

失笑を、

実に、愉快そうに——失笑を漏らした。

「そうか……そういう事か！！　なるほど、どうりで話が噛み合わないと思ったら……ははっ！！」

「な、何だってんだよ……」

男の、口元を吊り上げた表情から発せられる僅かな狂気を受けて、思わず2、3歩ほどその場から後ずさってしまうアツロウ。

「さて、さて、さて」

対する男は、今度はまるで貪るような視線をアツロウの顔に注ぎ始める。

「どこから話すべきか……。そして、どこまで話すべきか……悩みどころだな？　何故なら世の中には、お前のような子供が知らなくてもいい――と言うよりは、知ってはいけない事が、確かにあるのだから……」

それからしばらくの間、男は無言だった。アツロウもまた、そんな男の顔を黙って見詰めていた。

（コイツ……）

アツロウは疑問に思った――と言っても、それは先程から男が言っている言葉に対して、ではない。いや、確かに、これまでの男の言動については、それはそれで疑問が多い――というよりは、どこをとっても疑問にしか思えない内容ではあったが、この時、アツロウの頭に引っ掛かっていた事はそれだけではなかった。

彼が疑問に思ったのは、目の前にいる男の落ち着き払った態度についてだ。

前述したように、アツロウはまだ、この男とは過去にたった2回しか顔を合わせていない――故に、彼が男の人間性について詳しく把握しているのかと言えば決してその限りではないのだが、それでも、男がその身に纏っている雰囲気が、以前までとは全く違うものであることぐらいは分かる。

（このどこか高慢な性格といい、一見すればひ弱なサラリーマンにしか見えない外見といい、このオッサンが、昨日会った、ハルを探す怪しい男と同一人物なのは間違いない。けど……それにちゃ、やっぱどこかおかしい）

曰く。

今のこの男の態度は――あまりにも落ち着き過ぎている、と。

（前に会った時は、こう……如何にもザコっぽい、ちょっと刺激しただけですぐビクつくような奴だったのに……今のコイツの落ち着きようは何なんだ？　まるで……）

まるで男の精神に、全く別の存在が乗り移っているかのような――。

が、そうアツロウが疑問に思っている内に、男は再び口を開き始める。

「まあ……そうだな。まず、お前は『ペルソナ使い』という存在を知っているか？　私達『悪魔使い』と同じく、悪魔などの人外の存在に対抗しうる、特殊な力を持った連中のことなんだが」

「……ああ」

少したりとも警戒心を緩めないままそう言うアツロウに対し、男は「へぇ？」と驚いたような表情をする。

「何だ。さっきはああ言ったが、お前は随分と色んな事を知ってる

みたいじゃないか。もしかして、私は今、余計な事を言っているのかな？　んん……まぁ、いいか。ここまで言ってしまったんだ。最後まで教えてやる――そうだな、例えば、こんな話はどうだ？」

男は、ピッと人差し指を立てると、

「既に使い古されたような言い方ではあるが――その昔、1人の男がいた。その男は生れつき素晴らしい才能を持っていた。それが『ペルソナ』だ。精神の意識下に潜む、『もう1人の自分』を操る者達。それが『ペルソナ使い』だ。……一気に話したが、ここまでは大丈夫か？」

「……何とかな」

言いながらもアツロウは、

（コイツがここまで言い放ってきた言葉の、大部分の内容はサッパリ分からねえが――少なくとも、今言った『ペルソナ使い』の説明については、前に淳から聞いたアマネの話と殆ど一緒だ。……なら、今のところはコイツの言う事を信じても大丈夫、か？）

と思ったが、その間にも、男の話は続く。

「本来なら、その『ペルソナ使い』という力だけでも、十分な『才能』だ――同じ人種内での力の優劣に関係なく、その力に目覚めた者は、ある意味では全員『天才』と言えるだろう」

男の言葉は、とても今考えたばかりとは思えないほど流暢（りゅうちょう）なもので、まるで、予め暗記していた文章を読み上げているかのようだった。

「しかし、私が最初に言った『ある男』が持つ『ペルソナ使い』の才能は、そういった者達の中でも、明らかに群を抜いていた――あの男に対しては、天才という言葉さえ軽過ぎる。多くの者は、彼の事を『怪物』や『超人』、『神童』などと呼んでいたよ。言うなれば、それは突然変異のようなものだ――それほどまでに、その男が持つ『ペルソナ使い』としての力量はずば抜けていた」

「……」

一体、この話が最終的にどういった結論へとたどり着くのか。それさえもこの時のアツロウには分からなかったが、それでも彼は、もうここまで聞いてしまったのだから、いっそのこと最後まで聞いてしまおうと思い、黙って男の言葉に耳を傾け続けた。

「さて、この男について語るには――いや、いい加減、こういう言い方はよそう。段々とめんどくさくなってきた……。この際、ちゃんとした名前で言い表すとしよう――有里湊（ありさとみなと）、とね」

「え……？」

一瞬、アツロウには、男が何と言っているのか理解出来なかった。キョトンとした表情で、何度か目をパチクリさせる――しかし、自分の耳が確かならば、目の前にいる男は確かに、『有里湊』という単語を呟いた筈だ。

有里湊。

『有里』。

その単語を聞いてアツロウが思い浮かべられる人物と言えば、１人しかいない――自分の親友である、有里淳しか。

では、有里湊というその男は、淳と何かしらの関係がある人物なのだろうか……？

「――この有里湊という男について語るには、もう１つ、別の存在について話さなくてはならない……。ある意味で、全てはこの存在から始まったとも言えるからな」

男が言う。

「その存在の名前は『ニュクス』と言った。詳しい説明は省くか――私も、全ては知らんのでな――簡単に言うと、悪魔とはまた別の、人類を脅(おびや)かす存在だ。そして、その力が余りにも強大だった。それこそ、冗談でも何でもなく、全人類を一晩で滅ぼせてしまう程のな」

男は一旦、そこで言葉を区切ると、

「そこで立ち上がったのが、有里湊という男だ」

と言う。

「彼は何人かの仲間の協力を得て、最終的には見事、ニュクスを討ち滅ぼした――いや、正確には封印したんだったか？　まあ、そんな事はどうでもいい。重要なのはその時、有里湊という男は、紛れも無く世界を救ったという事だ」

「世界を救った、って……」

自分の予想を遥かに上回る話の内容に、アツロウは、段々と自分の脳の働きが鈍くなっていくのを感じていた。

そんなアツロウの様子に気付いているのかいないのか、男はカラカラと笑うと、

「全く素晴らしい男だよ、有里湊という男は。愚かな人間を大切にするという、その考えは少したりとも理解出来ないが――それでも、その凄まじいまでの力、凄まじいまでの才能だけは、間違いなく驚嘆に値する」

（……っ！　コイツ……！）

その有里湊という人物がどれだけ偉大かについては、未だにハッキリとは理解出来ないアツロウだったが――それでも、男の先の『愚かな人間』という言葉から、この男が人間側（みかた）よりは、むしろ悪魔側（てき）に属する人間である事ぐらいは分かった。

印象としては、昨日の午前中、東京タワー下にて出会った、改造ＣＯＭＰを悪用しようとするヤクザ達が１番近い――が、タチの悪さで言えば、おそらくこの男の方が数段上だ。

「そしてだ。ここから先が、私には今いち分からんのだが……今話したニュクスとの戦いが終わってからしばらくして、有里湊は死んでしまった。何故彼は死んだのか？　真相を知る者は数少ない。或いは、当時、彼と行動を共にしていた仲間達なら知っているかもしれないが……。最も有力な説は、有里湊はニュクスと戦った際に何か強力な呪いのようなものかけられ、そのせいで死んでしまった、というものだ。まぁ、呪いというのは些か陳腐（ちんぷ）過ぎる表現かもしれないが――少なくとも、彼の死の原因がニュクスと戦いの中で生ま

れたのは間違いないだろう」

その時、閃光にも似た速さで、アツロウの頭の中である考えが駆け巡った。先程まではあやふやだった、男が言う有里湊という人物と、自分の親友である有里淳との間にある関係が、1本の線で繋がったのだ。

思い出されるのは、まだ自分達が『東京封鎖』に巻き込まれたばかりの封鎖初日にて、淳の口から放たれた言葉だ。

『俺んとこも、ユズと変わらず母子家庭だよ。父親が離婚じゃなくて亡くなってるってのが、唯一の違いかな』

（まさか……）

自然と、心臓の鼓動が早くなる。

亡くなってる。

あの時、淳は確かにそう言った。

つまりは、

自分の父親は、既に死んでいる、と――。

そして、先程、男の口から放たれた言葉。

その昔、ニュクスという存在と戦い、そして死んでしまった、有里湊という男の物語。

（マジかよ……！　そんな馬鹿な事がある訳……！）

しかし。

よくよく考えれば、今の男の話に出てきた、『ニュクス』という言葉を聞くのも、これが初めてではない――先日、日谷比公園で、アツロウも淳やユズに言った事だが――１９年ほど前、『ニュクス教』という怪しい信仰が、アツロウの地元である巌戸台付近を中心に流行した筈だ。

１９年前。

ニュクス教。

（もしも……そのニュクス教の正体が、今コイツが言った『ニュクス』って怪物の存在と力を信じた人間を中心に広がったものだとしたら？　そしてちょうどその時期に、例の有里湊って奴とニュクスの戦いが起こったとしたら？）

何より。

何より――１９年前と言えば、淳が生まれる前の話ではないか？

『いや、別にいいよ。父親なんて、物心ついた時からいなかったから、特に悲しさっつー悲しさは抱いてない』

「……っ」

何1つとして証拠はない、まだ憶測の域を出ない話ではあるが――それでも、考えれば考えるほど辻褄（つじつま）が合ってしまう。

「何てこった……」

呆然と、アツロウは呟く。それを目敏（めざと）く見て取った男は、

「ん？　その表情は……さては気付いたな？　今の話に出てきた有里湊という男が、お前の親友――有里淳の実の父親である事に」

「ちっ……！」

予想していた事ではあるが――頭の中で好き勝手に憶測を巡らすのと、実際に第三者の口からその憶測を裏付けられるのとでは、また違った衝撃があった。

今まで側にいた親友が、実は、世界を救った英雄の息子――だなんて、この3日の間に、ある程度は異常な物事に対して耐性が出来始めていたアツロウでも、半ば信じられないような話だった。

「……まぁ、もっとも私にしたって、その事を教えて貰ったのは、つい最近だがな」

「教えてもらった？」

男の独り言のような言葉に、思わずアツロウが反応する。

しかしそんな彼に男が返した対応といえばせいぜい「気にするな」、と短く呟きながら顔の前で小さく手を振るぐらいだった。どうやら、余りその事については触れられたくないらしい。アツロウにしても、特に何が何でも知りたい情報という訳ではないので、それ以上深く尋ねたりはしなかった。

再び、男が口を開く。

「彼の事をもっと知らなければ、と私は思った。出来れば会って話がしたい、とも。私自身の好奇心を満たす為に――そして何よりも、偉大なる『ベル・イアル』様の為に」

「『ベル・イアル』……」

再度、男の台詞を反復するアツロウ。

『ベル・イアル』――その名前を聞くのは、これで2回目だった。野外音楽堂の時は確信が持てなかったが、今度は間違いない。今まで散々耳にしてきた名前であり、そして恐らくは、今日、自分達が戦う事になるであろう『ベル・デル』の名前と酷似しているが、何か関係があるのだろうか？

「ん……？　ああ、まだ言ってなかったか？」

そんな風に思考を巡らせ始めたアツロウを見て、男は静かに言う。

「私はあの、『聖なる邪炎』の異名を持つ悪魔――ベル・イアル様の傘下に属する者だよ。……別に驚くような事でもないんじゃないか？　君がそのＣＯＭＰで悪魔を使役している以上、逆に悪魔が人間を使役していても不思議じゃないだろう？」

アツロウは目を見張って男を――否、イアルの信者の顔を見た。

人間が悪魔を使役するのではなく、悪魔が人間を使役する。男はそう言うが、アツロウとしてはまったく実感が湧かなかった。

同時に、しかし悪魔と人間との間にある力量差を考えれば、むしろそちらの関係の方が自然なのかもしれない、と。

「フン、まぁ、そんな事はどうでもいいだろう。今ここで重要なのは、お前の大事な友人についてだ」

話の流れを変えるかのように、イアルの信者が言う。

「あのガキは、今どこにいるんだ？　さっきも言ったように、出来れば直接会って話がしたい。見たところ、今の君は１人のようだが……。いつもあのガキと行動を共にしている、という訳ではないのか？」

「今は違う」

切り捨てるように、アツロウが言う。続けて彼は、

「けど、一応これだけは聞いといてやる。仮にアンタが淳に会ったとして、アンタはアイツに何て言うつもりなんだ？」

「そうだな」

イアルの信者は愛想よく微笑しながら、

「色々とあるが――何よりも優先して言いたいのは勧誘の言葉だな。良ければ私達の仲間にならないか？　とね。あの伝説のペルソナ使い――有里湊の息子だと言うのならば、それだけで、あのガキには十分に利用価値がある。もしかしたら、あの『歌姫』よりもずっとな」

それを聞いたアツロウは、ギュッと拳を固く握り締めた。

男の言う『歌姫』とは、恐らくハルの事だろう。そう思うと同時にアツロウは、過去に見たある一場面を思い出さずにはいられなかった――2日前に六本木の通り道で、そのハルの事を、目の細い翔(しょ)門会(うもんかい)の幹部らしき男が、しつこく何かの勧誘をしていた時の事を。

（……今、コイツは間違いなく、『利用価値』って言いやがった――つまりコイツは、淳やハルの事を、そういう風にしか見ていないって事だ）

アツロウは、自分の脳が停止したような気がした。

次には彼の体内を、奇妙な――それでいて強烈な何かが駆け巡り、それが、友人を物のように扱われた事に対する怒りだとアツロウが理解するのに、幾らかの時間が必要だった。

「……無理だな」

やがて、そのようにアツロウは呟く。

「アンタをがっかりさせて悪いけど、淳がアンタの言うベル・イアルとかって奴の下につく事は、絶対にない。アンタがいくら甘言を唱えたところで、それで簡単に説得されるほど、アイツの心はヤワじゃないんだ」

「ああ、それについては、私も同意見だ」

意外にも、イアルの信者はアッサリと認めた。

「以前の表参道や日谷比公園での接触で、私もあのガキの性格については、ある程度は把握したつもりだからな――こちらがどれだけ強大な力を振りかざしたところで、奴を完全に服従させるのは難しいだろう」

途端に、イアルの信者は、それまでのニヤニヤ笑いとは全く異なる、邪悪でいびつな、歪んだ笑みをその顔に浮かべると、

「だからこそ、私はこう考える――あのガキがどうあってもこちらの勧誘に応じないような『駒』だというならば、1つ、『交渉材料』でも用意しておいた方がいいんじゃないか、と」

「『交渉材料』……」

面倒な言い回しだ、とアツロウは思った。イアルの信者が何を言いたいのか、この時のアツロウは既に理解していたからだ。

「つまり、お前の事だよ」

案の定、イアルの信者はそう言いながら、ピッとアツロウを指差した。

「私にはサッパリ理解出来ないが――お前とあのガキとの間に固い友情が結ばれているのは、とっくに分かっている。そして、あのガキにはそういった攻撃が1番有効だという事も」

イアルの信者の貪欲そうな顔を見て、アツロウは、今にもこの男の口から、蛇のように赤く、細い舌がチロチロと現れるのではないかと思った。

「奴を従順な駒としてこちらに引き入れる事は難しい。かと言って、『有里湊の実の息子』という、それこそ文字通りの意味で天地を揺るがしかねない程の才能を放置しておく程、こちらも呑気ではない。モタモタしていたら、ベル・デルやベリトの勢力までもが奴の捕獲……いや、鹵獲に動き出す事も有り得るからな。だからこそ、私はお前の身柄を『交渉材料』として使う事で――」

「もういい」

と。

遮るように、アツロウは言った。

イアルの信者を見る彼のその目には、万感の憎しみが込められているように思えた。

「……あ？」

アツロウが身に纏う空気が、先程までとは明らかに違うものになった事を悟ったのか、イアルの信者は眉をひそめる。

「もう……それ以上、口を開くな」

自分でも驚くほど低い声で、アツロウは言う。

それを聞いたイアルの信者は、しばらくはキョトンとしていたが――やがて、大きく口を開けて笑い出した。似つかわしくない、冷たく、甲高い笑い声だった。それを受けてアツロウの背筋を何か冷たいものが走り抜けたが、それでも彼は、依然として鋭い視線をイアルの信者に注ぎ続けた。

「おいおい――まさか、私とやり合うつもりか!?　君が？　この私と？　ハッ!!」

「……」

「思い上がりも甚だしい――これだから最近のガキは!!　まさか、昨日の日谷比公園での1件で、私の実力の全てを把握したつもりじゃないだろうな――私がその気になれば、貴様など、何でもないんだよ!!」

瞬間、イアルの信者の手が素早く動いた。速い。ようやくアツロウが反応した時には既に、イアルの信者は懐から取り出した改造ＣＯＭＰを操作して、２体の悪魔――龍王『ベンドラゴン』、鬼神『ナラギリ』を召喚した後だった。

「また、見たこともない悪魔だな……」

イアルの信者の両脇に立つそれらの悪魔を交互に見ながら、アツロウが言う。

「最後のチャンスだ」

と、イアルの信者が言う。

「言っておくが、これは交渉ではない。ただの一方的な命令だ。おとなしく無抵抗の意思を提示して、ベル・イアル様の為にその身を捧げるといい。私としても、出来れば、なるべく貴様に傷をつけたくないんだよ。貴様は大事な交渉材料だ――あのガキをベル・イアル様のものにする為の、な」

いつの間にか、イアルの信者の自分に対する呼び方が『お前』から『貴様』になっているのを聞いて、アツロウは、先の言葉とは裏腹に、この男の思考が既に戦闘モードに切り替わっている事を悟った。

まぁ、

（それに関しちゃ――俺も、人の事は言えないか）

その時、

「1つだけ、いいか？」

アツロウの顔から、フッと、表情という名の表情が消えた。

まるで蝋人形のように、作り物めいたものへと変わったアツロウ

の顔からは、どんな感情も窺い知る事は出来ない――が、それが逆に、その無表情な仮面に下で渦巻いている彼の激情がどれ程のものかを、如実に物語っているように見えた。

そして、彼は言う。

「寝言は寝て言え、クソ野郎」

それが、

先程、イアルの信者が言った『最後のチャンス』とやらに対する、アツロウの回答だった。

同時にそれは、数十分前の野外音楽堂にて、有里淳が――アツロウの親友である有里淳が、クー・フーリンに対して言い放った台詞と、全く同じものだった。

といっても、別にアツロウは、それを意識して言った訳ではない――無意識の内に、何を考えるまでもなく、反射的に今のような言葉が出たのだ。

が、すぐにアツロウは、その事に気付く。

同時に彼は、

（ああ……そっか）

と、思った。

（こういう事だったんだな）

野外音楽堂にて、ハルがクー・フーリンに連れていかれた後、淳が彼女を助けにいくと言った時、正直アツロウは彼のことを、頭がおかしいんじゃないか？　と思ってしまった。あんな化け物のような強さを誇る存在に、一体どのようにして抗うつもりなのか、と。

それは一重に、彼と淳とでは物事に対する考え方が根本的に違う、という事もあったが――それを差し引いても、アツロウにはその時の淳が、ただその命を意味もなく散らそうとしている特攻隊員にしか見えなかった。

だが、

（今なら分かるぜ――ジュン。お前があの時、どうして、あそこまで必死にハルさんを守ろうとしたのか。どうして、あそこまで必死にハルさんを助けようとしたのか）

酷い差別、と言えばそれまでだが――ハルがクー・フーリンの手に落ちた時とは違い、自分の親友である淳が、目の前の怪しい男に狙われていると知って初めて、アツロウは気付いた。

春沢芳野を助ける為に、クー・フーリンの前に立ちはだかった時の、有里淳の気持ちを。

きっと――あの時の淳も、今の自分と同じような気持ちだったに違いない。

正直な話、実は、淳がかつて世界を救った英雄の息子であるというイアルの信者の話を、アツロウは殆ど信じていなかった。確かに――先程、アツロウが思ったように――下らないと一蹴するには、いくつか辻褄が合う点が多過ぎるが、かと言って、それを裏付ける証拠は何もない。

だが、これだけは分かる。目の前にいるこの男は間違いなく、何かよからぬ目的で、有里淳を利用しようとしている。実は、伝説のペルソナ使いの息子だとか――それ以前に、自分にとってはかけがえのない存在である有里淳を、だ。

そして。

そんな事を黙って見過ごすような、木原篤郎ではない。

「ふぅん？」

ややあって、イアルの信者が、そのように口を開く。

「何だ、君は意外と熱血漢なんだな。てっきり、何時でも冷静に現実を見定めるようなタイプかと思ってたんだが」

「ああ、そうだよ」

すんなりと、アツロウは認める。

「確かに俺には、こんな少年漫画の主人公みたいなキャラは似合わ

ねぇよ。そういうのは、むしろジュンの役目だ――けどな」

バッ！　と彼の手が、肩から下げているショルダーバッグの中へと動いた。すぐさまアツロウの意図に気付いたイアルの信者が、チッと舌打ちしてそれを阻止しようとしたが、アツロウのＣＯＭＰから悪魔を召喚する挙動もまた、先のイアルの信者に負けず劣らず相当に速く、次の瞬間には、アツロウを両脇から守るように、幻魔トラロックと霊鳥スパルナが佇んでいた。

「……けどな、そんな俺にだって、譲れないものの１つや２つくらいはあるんだよ」

そんな彼の行動が決定打となったのだろう。イアルの信者もまた、不自然な程の速さでその顔から表情を消すと、目をスッと細め、そのままアツロウの顔を見据える。

「あくまで、ベル・イアル様に歯向かうつもりらしいな……」

ゴッ！　と、２人の間にある空気を、正体不明の強烈な何かが渦巻き始める。

アツロウの脳内から、徐々に『合理的思考』という機能が抜け落ちていく。次にはその空いた空間を埋めていくかのように、実に彼らしくもない、原始的な怒りがフツフツと沸き上がり始めた。

「……だったらどうした？　ふざけんなよ。お前は、人の友達を何だと思ってやがる……っ！」

バキンッ！　と彼の口の中から、何かを噛み潰したかのような音が聞こえた。

やがて。

目の前にいる、憎むべき男を睨みつけながら――アツロウは、ゆっくりと口を開く。

まさか、自分がこのような言葉を使う事になるなど、アツロウは思ってもみなかった。これまでの人生において、たびたび学校でイジメの対象にされてきた彼の事、他人からその言葉を向けられることはあっても、まさか、自分がそれを口にする日がくるだなんて。

そして、彼は言う。

その言葉を。

この一言が、これからの自分の人生を左右しかねない程の運命の一歩だと、ハッキリと自覚しながら。

「……ぶっ殺す」

戦いが、始まる。

春沢芳野の為ではない。

全ては、有里淳の為に。

木原篤郎は、常軌を逸した悪魔使い同士の戦いへと、その身を投じていく――。

３ｒｄ　Ｄａｙ『銀色の殺人』

半年前のことである。

「おい――■■■」

そこは東京内のどこかにある、人気のない廃工場の中だった。

ここで『どこか』などという曖昧な表現をしたのは、１０－ＢＩＴ自身、その時、自分が今どこにいるのかを、正確に把握していなかったからだ。

あらかじめ明確な目的地を決めていた訳でもなく、ただ無我夢中に逃げ回った挙げ句に辿りついたような場所なので、それも無理はないかもしれない。

辺りの景色を照らす光は、今となっては夜空から降り注ぐ淡い月明かりのみとなっており、地平線の向こう側に日が沈んでから、既にいくらかの時間が経過していた。

いや。

正確には、その時、１０－ＢＩＴがいる廃工場の中を照らしていたのは、月明かりだけではなかった。

燃えている。

メラメラと、燃えている。

１０―ＢＩＴの周りの景色を、

炎が、埋め尽くしている。

燃え盛って――いる。

廃工場内に火がついたのは、１０―ＢＩＴがそこに逃げ込んだのとほぼ同時だった。彼がその事に気付いた時には既に、逃げ道という名の逃げ道が、戻り道という名の戻り道が暴力的な業火によって遮断され、文字通りの意味で八方塞がりの状態に陥った後だった。

まるで、火の方が確固たる意志を持って、予め（あらかじ）獲物の来訪を予測していたかのようなそのタイミングの良さに、１０―ＢＩＴは、この突然の火災と、自分達をここまで追い込んだ『ある男』との存在とを、頭の中で結び付けずにはいられなかった。

自分達。

とは――つまり、この時、廃工場に逃げ込んできたのは、１０―ＢＩＴだけではないという事である。

事実、辺りを覆う熱気のせいで、苦しそうな表情で息をしている１０―ＢＩＴの隣には、１人の男がいた。

彼の――友人が。

これまで、日本政府の『禁忌』を人々に公表すべく、共に活動してきたジャーナリストが。

そこに、いた。

「■■■――よく聞け」

と。

燃え盛る業火が辺りの気温を凄まじい勢いで高めていく中、そのジャーナリストは言う。

「我ながら月並みな台詞だとは思うが――どうやら、俺はここまでらしい」

すぐさま、そんな事を言うな、諦めるなという言葉が、１０―ＢＩＴの口から放たれる。

額から流れ落ちる汗を拭おうともせずに、どこか達観したかのような表情をしているジャーナリストのその姿が、１０―ＢＩＴの胸の内にある不安を更に煽り立てていた。

「いや、お前の気持ちはありがたいけどよ――流石に、この状況はもう決定的だ。これ以上ないくらいに手詰まりだ。一体どうすれば、ここから状況を覆す事が出来るのか――俺には見当もつかねえ」

そんな事は。

そんな事は――１０―ＢＩＴにも分かっていた。

確かに、この状況は絶望的だろう。どうしようもなく、絶望的だろう。

今、こうしている間にも、自分達をここまで追い詰めた『あの男』は、確実に自分たちの元へと近づいてきている筈だ。

しかし、

だからと言って――そんな事は、かけがえない親友を見捨てていいような理由にはならない。

ふざけるな、と１０－ＢＩＴは思わずにはいられなかった。

余りにも理不尽な現状を前に怒りが込み上げ、噛み締めた歯の間から、ギリギリと音が鳴る。

が、そんな１０－ＢＩＴの様子には全く気付いていないかのように、

「けどなぁ――■■■」

と、ジャーナリストは口を開く。

「最終的には、こんなくっだらねえ結末を迎える事になっちまった訳だが――それでも俺は、俺が今までやってきた事に対して、全く後悔しちゃいない」

何故、と１０－ＢＩＴは思った。

少なくとも、彼は後悔していたからだ。

巨大な組織である日本政府に対し、たった1人で無謀な戦いを挑んできたジャーナリストを、止めようともしなかった事を。

どころか――逆に、その手助けをしてしまった事を。

「まあ、結果だけ見れば、今回の俺は、どうしようもなく『失敗』しちまったんだろうけど――それでもな、これだけは断言できる。俺がこれまでやってきた事は、きっと正しい事に違いない、ってな。いやいや、言っとくけど、これは死ぬ間際の強がりとかじゃねーぜ？　本当に、俺はそう思ってるんだ。それに、何より――」

ジャーナリストは言う。

「――こうやって、最後に最後に■■■の顔を見る事が出来たんだから、それで良しとするか」

だから。

そう簡単に――諦めるなと言うのに。

これで『最後』だなんて――そんな事は、冗談でも言って欲しくない。

と、その時、

「ん……？」

不意に、ジャーナリストがあらぬ方向へと視線を向け、眉をひそめた――彼が見ている先では、ただ激しく炎が燃え盛っているだけで、それ以外に取り立てて目を引くようなものは何もない。

が、すぐに１０－ＢＩＴも気付いた。

ジャーナリストが目を向けているその先から、小さな足音が聞こえてくる事に。

そして、その音が、少しずつ大きくなってきている事に。

『あの男』だ。と、直感的に、１０－ＢＩＴはそう思った。

冷静に考えれば、辺りで勢いよく燃え上がっている炎が轟々（ごうごう）と大きな音を響かせている中では、そんな足音などいとも簡単に掻き消されてしまい、１０－ＢＩＴ達の耳に届く筈もないのだが――それが逆に、その足音の主の存在感を如実に表しているように、１０－ＢＩＴには思えた。

それを受けて、１０－ＢＩＴの隣にいるジャーナリストは、

「ちっ、あのヤロウ、こんな所まで追い掛けてきやがったか。まるでストーカーだな。まぁ、この火にしたって――どんなトリックを使ったかは知らねえが――きっとアイツの仕業なんだろうけど」

と言う。

やがてジャーナリストは、ハアッ、と小さくため息をついてからズボンのポケットに手を入れると、そこから何かを取り出し、それを１０－ＢＩＴの方に差し出した。

見ればそれは、１枚のメモリーカードだった。

「お前確か、アレ持ってたよな？　ＣＯＭＰってヤツ。コイツは、それ専用のメモリーカードだ――俺が今まで政府について調べ上げ

てきた内容の全てが、この中に入ってる。さっきも言ったように、俺はもう、きっとここでおしまいだ。けど、だからと言って、これまでに費やしてきた時間を無駄にするつもりはない。だから■■■。コイツはお前に託す。あわよくば、いつの日かお前が、俺の代わりにこの中の情報を世の人々に知らせてくれる事を、俺は願ってるよ」

そんな、ジャーナリストの言葉。

願ってるよ。

それに対し、一体どこで？　と問いたい衝動を、かろうじて１０―ＢＩＴは抑え込んだ。

今はそんな事を議論している場合ではない、というのも勿論あったが――しかし、この時彼が感じていたのは、もっと別の事。

それを聞いてしまったら。

何か、取り返しのつかない事が起こってしまいそうな――そんな気がしたから。

いっその事、そんな思いも含めて、腹の内にあるもの全てぶち撒けてしまえば、即座に解決できるような問題ではあったが――すぐ近い未来に大切な友人を失ってしまうかもしれないという恐怖で、この時の１０―ＢＩＴは、そんな簡単な事さえ出来ずにいた。

そして。

ジャーナリストは――ここで初めて、１０―ＢＩＴに向き直った。

「■■■。お前は一旦、そこのロッカーにでも隠れてろ。何、心配すんな。この工場から俺と『アイツ』がいなくなる頃には、まだ周りの火もここへは回ってこないだろ」

言って――ジャーナリストは、うろたえる10―BITの腕を掴むと、そのまま強引に、すぐ近くにある鉄製のロッカーの中へと、彼の体を押し込んでいく。

「もっとも、あのヤロウだったら、きっと隠れてるお前の存在にも気付くだろうが――何、それについても心配すんな。アレは中々どうして、本質的には甘い性格をしてるらしいからな――お前が表立って反抗しなければきっと、アイツはお前には手を出さない筈だ。あくまでアイツの狙いは、政府の極秘データを持っている俺の命だけだろうからな」

まぁ、その極秘データにしても、今お前に預けたところなんだけどな――と、そう言いながらジャーナリストは、ガチャンと、10―BITを押し込んだロッカーの扉を閉める。

直後だった。

突然、ゴオッ！！　と凄まじい突風がどこからともなく吹き荒れたかと思うと、次の瞬間には、先程までは周囲で燃え盛っていた筈の炎が跡形もなく消えていた。

全ての酸素を燃やし尽くそうとする炎の音が一斉に消えた事で、一瞬、不気味な程の静寂が辺りを支配する。

そして、

「ったく……やっぱり来やがったか」

と、ウンザリしたように呟くジャーナリストの視線の先から――1人の男が現れた。

筋骨隆々の鍛え抜かれた体つきに、１９０はあろう長身。その右手には、明らかに時代と場所を間違えているとしか思えないような、身の丈程もある日本刀が握られており、その刀身が、夜空から降り注ぐ月明かりを受けて、不気味なほど美しく輝いていた。

『あの男』だ。と、１０―ＢＩＴは思った。

これまで自分達を追い続けてきた、『あの男』だと。

かび臭いロッカーの中で――頭のてっぺんから足のつま先まで震えながら、そう思った。

しかしジャーナリストの方はというと、何と怯えるどころか、逆に、どこかこの状況を楽しんでいるかのような様子で、

「よお、奇遇だな」

と、そんなとぼけた事を言う。

その光景を、ロッカーに元々空いている細い穴から見ていた１０―ＢＩＴは、バクバクと鳴っている自分の心臓の音が男の方に聞こえはしないかと気が気ではなかった。

案の定、男は――その原因が１０―ＢＩＴの心臓の音にあるかどうかはともかくとして――チラッと、１０―ＢＩＴが隠れている鉄

製のロッカーへと目を向けた。

その、とても人間のものとは思えない冷徹な視線を受けて、まるで全身が金縛りにあったかのような錯覚に陥る１０―ＢＩＴだったが、意外にも、男はすぐに彼から視線を外した――どうやら、ジャーナリストが言った通り、本当に、抵抗さえしなければ１０―ＢＩＴを殺そうとするつもりはないらしい。

そして。

１０―ＢＩＴの友人であるジャーナリストと、彼らを追ってきた男。

真っ正面から、２人は対峙する。

先のジャーナリストの台詞に対して、男は全く応じようとしなかった。

今はジャーナリストと一定の距離を保ったまま、ジッと、鉄のように感情のこもっていない表情で、ジャーナリストの顔を見続けるのみ――である。

やがて――まさか、そんな男の態度に苛立ちを覚えた訳でもないだろうが――ジャーナリストは、どこか刺のある口調で、次のように言った。

「おい――言っとくけどなぁ、あんまいい気になるんじゃねぇぜ？」

「……」

最初の方こそ、ジャーナリストの言っている事がよく理解できなかったのか、男は小さく首を傾げていたが――やがて、その口から小さく失笑を漏らした。数秒ほど思考を巡らせた結果、恐らく男の中では、今のジャーナリストの言葉は単なる負け惜しみでしかないと判断されたに違いない。

ジャーナリストの方も、その事は理解しているのだろう。事実、次に彼は、

「ああ――そうだな。アンタの考えてる事は分かるよ。確かに、今の俺にはもう何も出来ない。今からきっと、アンタは俺を殺すんだろうが、対する俺に、それを防ぐ手立ては全くねえ。かといって、こっちが覚悟を決めて、それこそ玉砕覚悟（ぎょくさいかくご）であらゆる攻撃を浴びせたとしても、アンタはきっと眉の１つも動かさずに、その全てを防いでみせるんだろうな――おいおい、一体どういう事だよコレは。果たして同じ人間同士で、ここまでの格差が出るもんなのか？　天は二物を与えずとはよく言うけど、アンタは場合は、どう考えても与えられてるのは二物じゃ足りねえだろ」

それを相変わらずロッカーの中から聞いていた１０―ＢＩＴは、それだけ長々と喋るだけの余裕があるのならさっさと逃げろ、と思わずにはいられなかった。少なくとも、自分ならそうするに違いない、とも。

「けどな」

ジャーナリストは言葉を続ける。

目の前にいる男の顔を、正面から睨みつけながら。

「けどな――それでも俺は、アンタに負けちゃいねーんだ。……何でだか分かるか？」

「……」

男は答えない。

ジャーナリストの方も、最初から答えが返ってくるとは期待していなかったのか、大して気にしていない様子で、

「なぜならアンタは、何1つとして俺に勝てちゃいねーからだ。アンタにとってはどうだか知らねえが――少なくとも俺にとっては、ここでアンタがその手に持ったおっかない刀で俺の体をズタズタに引き裂いたところで、それでもアンタは俺に勝った事にはならねーんだよ」

と言う。

「ま、思いっ切りただの負け惜しみになるけどな。……でも、結局アンタは最後の最後まで、俺に後悔させる事が出来なかった。俺の価値観から言わせてもらえば、それならやっぱり俺は負けちゃいねーし、アンタだって、俺に勝てちゃいねーんだ」

ミシリ、と。

気のせいか――男の刀を握る力が、僅かに強まったかのように見えた。

「確かに、アンタは強かった――でも、結局はそれだけだ。どこまでいっても、アンタはただ強いだけなんだよ」

それに対し、

「……、……？」

と――ようやくここで、男は口を開いた。しかしロッカーの中に隠れている１０－ＢＩＴには、その詳細を聞き取る事が出来なかった。

なぜなら、

いや、もしかしたら、聞きたいとさえ思わなかったのかもしれない。

なぜなら、その男は――もう間もなく、目の前にいるジャーナリストを殺すのだから。

１０－ＢＩＴにとっては大事な友人である、そのジャーナリストを、

殺して、しまうのだから。

そんな男の言葉など――聞きたくもない。

思い出したくもない。

――それなのに、何故、

ジャーナリストを見ながら、１０－ＢＩＴは思う。

――何故、君はそんな風に、どこか勝ち誇ったような表情でいら

れるのか、と。

「例えここでどれだけ体中の骨を折られようとも、どけだれ血反吐（ちへど）を吐く事になろうとも――俺はきっとこう言うぜ。俺のやった事は正しかった、ってな」

そんなジャーナリストの台詞を受けて、今度こそ、男の表情に変化があった。まるで不快な物でも見るように、その顔を歪ませたのだ。その顔には、ジャーナリストに対するハッキリとした嫌悪と――そして、戸惑いの色があった。

そのまま、いくばくかの時間が流れる。

ただその光景を隠れたまま見る事しか出来ない１０－ＢＩＴにとって、この時の時間は永遠にも等しい程の長さだった。

冷静に考えれば、この時の１０－ＢＩＴには、すぐさまロッカーの中から飛び出し、友人であるジャーナリストを男から守る、という選択肢もあった筈だ。

いや、冷静に考えるも何も――道徳的な観点から見れば間違いなく、すぐにでもそうするのが１番正しい筈だった。それは、１０－ＢＩＴも理解していた。

しかし、１０－ＢＩＴはロッカーから飛び出す事が出来なかった。

出来ないまま――ただジッと、恐怖に駆られた目で男とジャーナリストの横顔を交互に見ていた。

何が正しいのかを頭の中で判断するのと、それを実際に行動に移す

のとでは、全く次元が異なる話だ。それが、向かっていくべき相手が、その気になれば、邪魔する人間全員を情け容赦なく殺害するような非情な存在であれば尚の事である。

しばらくして。

「どうした……？　やれよ」

と、そんなジャーナリストの言葉が、重い沈黙を破る。

「やればいい。とっとと俺は殺せばいい。その手に持った刀を振るって、今すぐ俺の首を刎ねるといい。……ああ、勘違いすんなよ？　別に俺は、今の状況に対して嘆いている訳でも、絶望してる訳でもねーんだ――本当に心の底から、もうそろそろアンタに殺されてもいいかなーって思ってたんだよ。だって――」

だって――これまで散々、アンタの『警告』を無視した上で、俺は今ここにいるんだからな、と。

ジャーナリストは、そう言った。

「ったく――アンタも甘いよな。こんな事なら、最初会った時から、とっとと俺を殺してればよかったんだ。にも関わらず、アンタはあくまで、言葉で今回の件を解決しようとした――あくまで平和的な方法を用いる事で、俺を説得しようとした。今まで見てきたものは全部忘れろ。そして、誰にもその事は言うな。そうすれば、命だけは助けてやる――って、そう言ってな」

男の表情が、どんどん歪んでいく。

まるで、ジャーナリストのその言葉自体が、１つの攻撃として、男に苦痛を与えているかのように。

こめかみ辺りに鬱(うっ)すらと浮かぶ青筋からも、彼が腹の底から沸き上がる怒りを必死で抑えているらしい事が、傍から見ていた１０－ＢＩＴにも分かった――同時に、もうそろそろ、そんな男の忍耐が限界に達しつつある事も。

一体男が、これまでのジャーナリストの言葉のどこに、それ程の怒りを覚えたのか――そこまでは、１０－ＢＩＴには分からなかったが。

「全く、返す返すも残念な話だぜ。俺はアンタみたいな人間が、決して嫌いじゃなかったんだけどな――それが例え、アンタが政府の命令で俺達の命を奪いにきた刺客(しかく)であっても、だ」

ザッ、と。

ここで初めて、男が動いた。

と言っても、ただジャーナリストの方に向けて、足を1歩踏み出しただけという、それだけの動作だったが――１０－ＢＩＴにはそれが、まるで男が、自分の友人に対して死刑宣告を放ったかのように思えた。

やがては1歩だけでなく、2歩、3歩と、男はジャーナリストへと近付いていく。

男がそんな行動に出たのは果たして、ジャーナリストの長話に対し、遂に痺れを切らしたからか――それとも、もうそれ以上、ジャ

ーナリストの言葉を聞く事が堪えられなかったからか。

それは、１０―ＢＩＴにも分からない事ではあったが。

ジャーナリストの方も、そんな男の行動の意味を理解したのだろう――事実彼は、片方の眉を吊り上げると、

「ああ、悪いな、長々と無駄話をしちまって――これが最後だからか、俺もつい、お喋りが過ぎちまったぜ」

と言って――あろう事か、その顔に不敵な笑みを浮かべたかと思うと、そのまま、その場で大きく手を広げたではないか。

まるで、今から起こる出来事の全てを、一切抵抗する事なく受け入れて見せる、と――そう言っているかのように。

そして、

ヒュッ、という音が、１０―ＢＩＴの耳に届いた。

まるで、何かを振るったかのような。

今まさに、男が、手に持った身の丈ほどもある刀を、素早く振るったかのような――そんな音が。

思わず、ロッカーの中で、１０―ＢＩＴは目を逸らした。

しかしどうせならば、耳を塞ぐ、等もするべきだったかもしれない。

そうすれば、

男が振るった凶刃が、大事なジャーナリストの首を切り裂いた音も。

その首が、鈍い音を立てて床に落ちる音も。

それより遅れて、残った体の、切断された首の断面から血が噴き出す音も。

全部――聞こえずに済んだのかもしれないのだから。

「……」

全てが終わった後、しばらくの間、男は無言だった。

いや、もしかしたら、何か小声でブツブツと言っていたのかもしれないが――その時は１０－ＢＩＴも、とてもすぐには受け入れる事の出来ない現実を目の当たりにしたせいで、周りの音をまともに聞く事さえ出来ずにいたのだ。

しかし。

しかし――これだけは覚えている。

最後の最後まで、隠れている１０－ＢＩＴには気付いていないフリをしつつ、やがては彼の視界から去っていった男がその時に言い残した、１つの言葉だけは。

ハッキリと――覚えている。

１０―ＢＩＴは、忘れない。

その言葉を。

かけがえのない友人を殺した男の、その言葉を。

彼は――決して、忘れない。

「……やれやれだぜ」

半年前の事である。

３ｒｄ　Ｄａｙ『逃亡の果てに』

そして。

そんな風に、目の前で友人が殺された日から、約半年の月日が経った今も尚――１０－ＢＩＴは東京にいた。

封鎖された東京の、山手線内。

その内にある、池袋の通り道を――彼は走っていた。

背後から迫って来る、１体の悪魔――悪霊『インフェルノ』の脅威から逃れる為に。

走り続けて、いた。

息が苦しい。

体が重い。

視界が霞(かす)む。

加えて、東京全体を溶かしてしまいそうな程の猛暑。

さらに――何かしらの傷でも負っているのか、走っている間も、１０－ＢＩＴの左腕は殆ど動いていなかった。彼が１歩１歩足を踏み出す度に、まるで洗濯物が風で靡(なび)くかのように、その左腕がブラブラと揺れている。

対して、右腕の方では、１台のＣＯＭＰをその手で後生大事そうに握り締め、それを胸に抱えながら、彼は走っていた――つまりこの時の彼は、両腕を殆ど動かさないまま走っていた、という事だ。

元々、取り立てて運動能力に優れている訳でもない彼のこと、そんな状態では、大した速度を生み出せる訳もない。

事実、１０―ＢＩＴとインフェルノとの間にある距離は、最初に彼が逃げ始めた時よりも、大分狭まっているように見えた。

劣悪な体調（コンディション）に、最悪の環境。

当然、これまでの人生の大部分をごく普通の民間人として暮らしてきた１０―ＢＩＴが、そんな事に慣れている訳もない。

そのせいか、逃げている内に何度も、体の方よりも先に心が折れてしまいそうになった。

しかし、全てを諦めて足を止める事などとても出来ない。

それは即ち（すなわ）、同時にインフェルノによってもたらされる死を意味するという事もあったが、それ以上に、今ここで自分が殺されてしまうと同時に、手に持っている――日本政府の『禁忌』に関する情報が入った――ＣＯＭＰが破壊されてしまう事を、彼は恐れたのだ。

（……くそっ！　せめて、誰かに托す事が出来ないまでも、このＣＯＭＰをどこか安全な場所に隠すまでは、私は絶対に死ねない……！）

ゼィゼィと口から荒い息を吐きながらも、彼は思う。

例え今、右手に持ったＣＯＭＰを誰かに渡す事が出来なくとも、どこかに隠しておいたりすれば、何かの偶然で他の誰かがそのＣＯＭＰを見つけた後、中に納められているデータを見た事で、１０－ＢＩＴや彼の友人の意志を継いで、その情報を世の人々に伝えようと決心してくれるかもしれない。

勿論、そんな事が起きる確率は、かなり低いと言わざるを得ないだろう――残されたＣＯＭＰを誰かが見つけ出すというのは勿論、その中にある政府の情報を見るには、１０－ＢＩＴが設定したパスワードが必要になる為、尚更、彼の意志を他の第三者が受け継ぐという確率は低い。

偶然というよりは、もう殆ど奇跡にも等しいレベルだ。そんなものに頼るなんて、どうかしている――しかし逆に言えば、それぐらい、この時の１０－ＢＩＴは追い詰められていたという事だ。

ボオオオッ！！　と、インフェルノが体に纏っている炎が酸素を焼き尽くす音が１０－ＢＩＴの耳に響き、それが更に、彼の恐怖感を煽りたてる。

（ま……ずい……っ！　頭がボーッとしてきた……！）

段々と、彼の顔の色が紫色へと変色し始めた。

チアノーゼ――要するに、１０－ＢＩＴの疲労の進み具合に彼の血液の機能が追いつかず、体内に酸素を十分に送る事が出来なくなってきているのである。

危険な状態なのは間違いない――が、勿論、そんな１０―ＢＩＴの状態など知った事ではないインフェルノは、彼との距離を確実に詰めていく。

このままでは、追いつかれるのは時間の問題だった。

しかし、

「……っ！」

そうしている内にも、彼の左肩に再び、鋭い痛みが走った。

唇を噛み締めて、１０―ＢＩＴはその痛みに耐える――先程までいたチネシティ広場で、インフェルノに遭遇する前からずっと続いている痛みだ。しかも１回１回の間隔が、少しずつ短くなりつつある。

一体、どこまで逃げればいいのか――いや、そもそも逃げ切ること自体、出来るかどうかも分からないまま、１０―ＢＩＴは必死の逃亡を続ける。

もはや、この時の彼は、体力で走っている訳ではなかった――胸の奥底にある１つの『支え』が、彼の心を震わせ、その体をつき動かしていた。

彼を支えているもの。

右手に持つ――友人から授かった、１台のＣＯＭＰ。

自分の大事な友人は、半年前、例の『あの男』に殺されてしまっ

た。それは間違いない。１０―ＢＩＴにしても、その時の光景をその目で見ている。

だが、その友人から渡されたＣＯＭＰを今、こうして持っているだけで、１０―ＢＩＴは、今の自分は１人ではないと自覚する事が出来た。最も頼もしい仲間が側にいて、今この時も自分を必死に励ましてくれているような、そんな気がしたのだ。

（諦めるな！！）

ここまで、そんな言葉を何百回も、何万回も自分に言い聞かせながら、１０―ＢＩＴは走ってきた――必ず、日本政府が国民に隠している事実を、今は亡き友人の代わりに、全ての人々に伝えてみせると、その固い決意だけを原動力にして。

が、

そんな彼の決意が、一瞬にして粉々に打ち砕かれそうになる。

背後から追ってくるインフェルノが放った、１発の炎弾によって。

撃ち出された炎の塊から放たれる熱気によって、その魔法が自分の体に直撃するよりも一瞬早く、１０―ＢＩＴは後方から向かってくる炎弾の存在に気付く事が出来た。

一瞬にして喉を干上がらせると同時に、その体を大きく横に投げ出す。

爆発が起こった。

大の大人の体が１０メートル以上も吹っ飛ばされ、通りの脇にある乗り捨てられた軽自動車へと激突する。

危うく命よりも大事なＣＯＭＰが粉々になるところだったが、空中で無理矢理体の向きを変え、背中の方からぶつかる事で、かろうじてそれを防いた。

「かっ……はっ……！」

途端に、全身の骨がギシギシと軋むと同時に、喉の奥からせり上がってくる血の味を感じ取る１０－ＢＩＴだったが、残念ながら、叫び声を上げている時間も、痛みに悶えている時間も今はなかった。

すぐさま体を起こし、地獄のマラソンを再開させようとする。

が、その時には既に、インフェルノが彼の目の前に回り込んだ後だった。

恐怖で心臓を直接わしづかみにされたような感覚を味わうと同時に、１０－ＢＩＴは疑問に思った。自分の目の前に回り込むだけの時間があるなら、どうして、再び先の炎弾を放ってさっさとトドメを刺さなかったのか、と。

しかし、そのすぐ後に１０－ＢＩＴは理解した。自分は遊ばれているのだ、と。この悪魔は、自分が怯え、戸惑う様を見て楽しんでいるのだと。その光景を出来るだけ長く味わう為だけに、すぐに自分を殺そうとはしないのだと。

「～～～～っ！」

猛烈な勢いで悔しさと惨めさが腹の底から沸き上がってくる１０―ＢＩＴだったが、それを無理矢理意識から切り離すと、ただひたすら足を動かそうとする。

自分の無力さに腹を立てたところで生き残る事など出来はしない。とにかく、今はこの悪魔から逃げるのが先決だ。

かと言って、流石に目の前にいるインフェルノのすぐ横を通り過ぎる気にはとてもなれなかった１０―ＢＩＴは、視界の右の方にある別の逃走経路の存在に気付くと、すぐさまそこへ向かって足を動かした。

１０―ＢＩＴの視線の先にあるそこは、もう殆ど路地裏のような、太陽の光も十分に届かない程の狭い通路だった。

先程までの道とは違い、決して逃走に向いたルートとは言えなかったが――狭いとはつまり、移動できる範囲が短いという事であり、追跡者にしてみれば、逃走者の行動範囲をかなり制限できるからだ――この際、細かい事は気にしていられない。

だが、結果的に、彼がその脇道へと入っていく事はなかった。

なぜなら。

その薄暗い道の入口のすぐ近くに路上駐車されていた軽自動車が、突然、巨大な爆発を起こしたからだ。

原因はインフェルノが放った、２発目の炎弾。

爆発が発生した位置を中心に熱風が巻き起こり、凄まじい衝撃波

が辺りを駆け抜ける。

「――――っ！！」

それを見た１０―ＢＩＴの呼吸が一瞬止まったが、幸いにも、まだそこより大分離れていた場所にいた彼が直接、その爆発による被害を受ける事はなかった。

しかし、それによって生じた余波となれば話は別だ。

爆発によって弾かれた細かい瓦礫などが弾丸のような速さで周囲へと飛んでいき、その内の１つが１０―ＢＩＴの頭部へと直撃する。

途端、そこから何か生暖かい、ドロリとした液体が顔をつたって流れ落ちてくるのを自覚し、苦痛の表情を浮かべる１０―ＢＩＴだったが、すぐに、むしろこの程度で済んで運が良かったと判断し、再び足を動かそうとする。

爆発した軽自動車は今や炎に包まれ、そこから黒い煙が立ち上っていたが、それでもまだ、先程まで１０―ＢＩＴが通ろうとしていた脇道の入口を完全に塞ぐには至っていない。

ほんの少しでも可能性が残っているなら、絶対に諦めない。

そう思い、頭部の傷など構いもせず、再び走りだそうとした１０―ＢＩＴだったが――そんな彼を嘲笑（あざわら）うかのように、離れた位置にいるインフェルノが、３度目の『アギラオ』を放った。

今度は避けきれなかった。

数千度以上もの熱を誇る邪炎が、１０―ＢＩＴの右足へと直撃する。

「ぐあああああああああああああああああああああっ！？」

自分の絶叫で鼓膜が破裂しそうになる。それ程の激痛だった。

あっという間に直撃した部分を覆っていたズボンの一部と皮膚が炎に蝕まれ、ジワジワとその侵攻領域を広げていく。

そのせいで急速に頭の中がパニック状態へと陥っていくのと平行して、未だメラメラと燃え続けている右足を、１０―ＢＩＴに対し、インフェルノに地面へと擦りつけた。

相変わらず、すぐに殺す事よりも、少しでも長く彼を苦しませる事を第一としているのか、そんな１０―ＢＩＴは必死が次の攻撃を仕掛けてくる気配はない。

足の炎を消すのにかかった時間は、およそ１０秒程だった。まるで焼き過ぎたステーキのように黒焦げになってしまった右足を無理矢理に引きずりながらも、やはり１０―ＢＩＴは例の小道へと入っていこうとする。

そして。

そんな彼の正面に、再びインフェルノが回り込んだ。

顔もまた炎に包まれているせいで、その表情を伺う事は出来ないが――それでも、この時の１０―ＢＩＴには、その炎の下で、インフェルノが邪悪な笑みを浮かべているのが何となく分かった。

お遊びは終わりだ、と。

そう――言っているかのように。

「ぐっ……！」

１０―ＢＩＴが目指していた脇道の入口は、インフェルノによって、今や完全に塞がれてしまっていた。

体中から流れ落ちる汗は既に暑さからによるものではなく、全てが冷や汗へと変わっている。

炎に包まれた体を持つインフェルノの対抗策して、殴る、蹴るといった選択肢は存在しない。そんな事をすれば今度こそ確実に、１０―ＢＩＴは、ただの人の形をした、焼け焦げた肉の塊へと変わり果ててしまうだろう。

（くそっ……！　誰か、誰か……！）

目尻に涙すら浮かべながら、１０―ＢＩＴは思う。

しかしそれは、死に対する恐怖ではない。既にこの時の彼の精神は、自分の命が尽きる事にさえ恐怖を感じない程の領域に達しつつあった。

本当に恐いのは、別のこと。

友人から授かったＣＯＭＰを握る右手に僅かに力をこめながら、１０―ＢＩＴは思う。

（本当に恐いのは……私が今からコイツに殺されると同時に、このＣＯＭＰまでもが破壊されてしまうという事だ。それだけは、何としてでも防がなければ……！）

しかし、一体どうやって？

すぐさま、そんな疑問が頭の中に浮かび上がり、同時に、遂に心が折れてしまいそうになる１０－ＢＩＴだったが、ギリギリのところで、彼はそれを堪えた――まだ諦める訳にはいかない。

ジリジリと、インフェルノから距離をとっていく１０－ＢＩＴ。

が、その途中で道に放置されていた瓦礫に足を引っ掛けてしまい、そのまま、彼は仰向けに倒れてしまう。

後頭部が地面にたたき付けられ、目から火花が飛び散った。

そうしている内にも、インフェルノは確実に彼との距離を詰めてくる。

「まだ……だ……！」

今更逃げ出したところで、恐らく結果は変わらない。

そもそもこの悪魔は、その気になればいつでも１０－ＢＩＴを殺せるだけの能力があったにも関わらず、これまでは彼が苦しむ姿を少しでも長く見る為に、わざと手加減していただけに違いないのだ。

だからこそ１０－ＢＩＴは、右手のＣＯＭＰを今度は両腕で胸に

抱き抱えるようにし、そのまま覆いかぶさる事で、自分の体を盾にしてＣＯＭＰを守ろうとした。

そんな事をしたって、インフェルノの魔法は彼の肉体ごと易々（やすやす）とＣＯＭＰを破壊するという事を認識しながらも、しかし彼は迷わなかった。

一瞬、インフェルノは、そんな１０―ＢＩＴの行動の意味が分からず、不可解そうに首を傾げたが、すぐに、それを諦めか降伏のポーズに違いないという誤った認識を抱くと、右手を上空に掲げ、そこへ自分が持つ全ての魔力を充満させていく。

それが、今までの魔法とは明らかに規模が違うものである事が、固く目を閉じている１０―ＢＩＴにも分かった。

１０―ＢＩＴの脳内で、これまでの彼の人生の記憶が、次々と映し出されていく。

今まで１０―ＢＩＴは走馬灯などというものを信じていなかったが、数十分前、クー・フーリンと対峙した時の有里淳と同じく、彼は、嫌がおうでもその存在を認識する事になってしまった。

インフェルノが掲げた手の平から、１つの小さな火球が現れる。やがてそれは練り上げられた魔力が増大していくのと比例して膨張し、ほんの数秒も経たない内に、１人の人間がすっぽり収まってしまう程の大きさになっていた。

（……頼む）

最早この時の１０―ＢＩＴに出来る事といえば、体中を恐怖で震

わせながら、ただ奇跡を願う事だけだった。

（私の事はいい……。私の命なんかどうでもいいんだ……！　でも、せめてこの手に持ったＣＯＭＰを、誰か預かってくれ。　誰か今すぐ颯爽（さっそう）と現れて、このＣＯＭＰだけでも、目の前の悪魔の脅威から遠ざけてくれ。私の友人がこの世に残した遺志を、どうか守り抜いてやってくれ……！）

そんな都合の良い出来事が起こる訳がないという事ぐらい、１０―ＢＩＴにも分かっている。半年前、目の前で友人が殺されてきた時から、とっくに理解している。

それでも、彼は祈らずにはいられなかった。そうするより他がなかった。

これだけは、

このＣＯＭＰだけは、

絶対に、

（失って……たまるか！！）

そして、

離れた位置にいるインフェルノが、遂に、最大まで威力を高めた『アギラオ』を、１０―ＢＩＴへ向けて、一気に放った。

絶対絶命。

そんな言葉が、１０―ＢＩＴの脳裏に浮かび上がる。

と、そこへ、

突然、ゴオッ！！　と凄まじい突風が、どこからともなく吹き荒れた。

それはたった今撃ち出されたばかりの『アギラオ』ごとインフェルノの体を薙ぎ払い、結果として、１０―ＢＩＴの命を助ける形となった。

一瞬、何が起こったのか、１０―ＢＩＴは正確に理解する事が出来なかった。

（助かった……？）

まさか今の現象が、自然的に発生した、突発的な強風という事はないだろう――突然、この場に現れた、１０―ＢＩＴでもインフェルノでもない第三者が行使した何らかの力、と見るのが妥当（だとう）だ。

そこまで１０―ＢＩＴが考えた時には既に、彼の視界からインフェルノの姿は完全に消え失せていた。インフェルノにしてみれば恐らく、痛みすら感じる暇もないままの最期だったに違いない。

１０―ＢＩＴは考える。

誰がやったのかは知らない――だが、これだけは言える。間違いなく、誰かが自分を助けてくれたのだ、と。

安心感が体の内側から少しずつ全体へと広がっていき、ようやく、彼は自分が生き残ったという現状を理解する。

冷静に考えれば、今の現象は何らかの魔法によるもので、つまりは、今まで自分を殺そうとしてきたインフェルノの同類――悪魔が発動したものである可能性が１番高い。

が、それでもこの時の１０―ＢＩＴは、命の危機から何とか逃れる事が出来たという安堵感から、この際、自分を助けてくれたのが悪魔であろうとも構わない、とさえ思っていた。

だからこそ彼は、その、自分を助けてくれた何者かに礼を言う為に、辺りを見渡した。例えそれが悪魔であろうとも、まずは一言礼を言っておこう、と――そう思いながら辺りに視線を巡らせて、

「……やっぱり、アンタだったか」

ゾンッ！！　と。

１０―ＢＩＴの全身を、先程、インフェルノに遭遇した時以上の恐怖が貫いた。

聞き覚えのある声だった。

更に言うなら、たった今吹き荒れた、突然の強風――それにしても、１０―ＢＩＴはかつて、似たような現象を目の当たりにした事があった。

半年前、共に日本政府の裏の顔を探っていた仲間であり、同時に、自分にとってはかけがえのない存在である１人の友人を失った『あの日』に。

（ま……さ……か……っ！）

再び全身を震わせ、ガチガチと歯を鳴らしながら――声がした方へゆっくりと顔を向ける１０―ＢＩＴ。

そう。

結局、奇跡など起こらなかったのだ。

なぜなら。

そこにいたそいつは、決して、１０―ＢＩＴを助けに来た訳ではないのだから。

むしろ――その逆。

１０―ＢＩＴの頭の中で、半年前の、友人が殺された時の記憶が、ゆっくりと浮かび上がってくる。

その男の髪は銀色だった。

その男の目も銀色だった。

どう考えても、どこにでもいそうな風貌の人間ではない。少なくとも１０―ＢＩＴは、そのような外見の人間を、これまでたった１人しか見た事がなかった。

男は鍛え抜かれた岩のような肉体の上に、若干薄汚れた赤い甚平を身に纏い、その体の半分以上に、赤黒い液体がベットリと付着していた。

が、それは男のものではない。その程度の事は、１０―ＢＩＴにもすぐ分かった。男の右手に――恐らくは、ここに来るまでの道中に始末してきたのであろう――悪魔の生首が握られていたからだ。

「とうとう……来たか……っ！」

１０―ＢＩＴの喉の奥から、掠れきった声が絞り出される。

心の底から――というよりは、魂の底から震え上がりながら、彼は視線の先にいる、憎むべき男の顔を見つめた。

その顔には表情という表情がなく、まるで氷のように冷たい印象があったが――それでいて、まるで自らの感情を無理矢理に抑えつけた上で作りあげたかのような不自然さが、そこにはあった。

「１０―ＢＩＴさんよぉ……。半年前は、アンタの友人の顔に免じて、わざわざ見逃してやったっつーのに、まぁだ政府に盾突くなんて危険行為に身を投じてんのか？　勘弁しろよ。俺だってなぁ、別にあのキャベツ野郎みたいな快楽殺人者って訳でもねぇし、出来ればこれ以上人を殺したくはないんだから、よぉ――ったく」

そして。

半年前、１０―ＢＩＴの友人に手をかけ、今も尚、彼を絶望のどん底に追いやろうとしている、その男――瀬多総司（せたそうじ）は、こう言った。

「やれやれだぜ」

3rd Day『静かなる葛藤』

――新宿、明治神宮野球場。

かのプロ野球チーム、東京ヤク○トスワローズの所有球場であり、通称『神宮球場』の名としても知られているその場所には、しかし当然の事、今は試合中のような賑わいは全く見られず、まるでこの世から全ての音が消えてしまったかのように、実に閑散（かんさん）としていた。

そして、

その1塁側のベンチに、春沢芳野（はるさわよしの）は座り込んでいた。

「……」

訳が分からない。

それが、この時、この状況における、ハルの率直な気持ちだった。

何故、自分のようなD―VAのボーカリストが、野球場などという、何とも場違いな場所にいるのかというのもあったが――何より、今もまだ、自分が何の傷も負っていないという事実が、彼女には意外で仕方なかったのだ。

（……アイツは敵の筈だ）

と、視線の先にいる1体の悪魔を見つめながら、ハルは思った。

不死の王『ベル・デル』の配下であり、この球場にまでハルを連れてきた存在――幻魔『クー・フーリン』。

その身を白銀の鎧で固めた、碧眼青髪の魔剣士。

もっともこの時、クー・フーリンが白銀の鎧を纏っているのは下半身のみで、上半身の方はと言うと――どうも何か深い傷を負っているらしく――胸の辺りを中心に、白い包帯でグルグル巻きにしていたが。

そのクー・フーリンはと言うと――どういう訳か――今は、ピッチャーマウンドの辺りで、魔力によって生み出した雷の剣を手に、黙々と素振りをしていた。

「はっ！」

と、ピッチャーマウンドから鳴り響く、クー・フーリンの裂ぱくの声。

と同時に――もうこれで何度目だろうか――ボッ！！　という、通常では考えられない風切り音と共に、クー・フーリンが持つ剣が、上から下へと振るわれる。

「……」

いや、

本当に、これは一体どういう状況なんだろう――と、相変わらず1塁側のベンチに座ったまま、ハルは思った。

数十分ほど前、野外音楽堂において有里淳を文字通りの意味で半殺しにし――先程も述べたように――その後、ハルをこの神宮球場にまで連れて来たクー・フーリンではあったが、結局、彼はここまで、ハルに対して何の危害も加えてはこなかった。

これは、ハルにしてみれば実に驚くべき事だった。

というのも、彼女は、良くても鎖などで全身を縛られたままの連行――悪ければ（考えるだけでもゾッとするが）、常識など全く知らない悪魔達に囲まれた挙げ句、色々な事をされてしまうのでは、と、それぐらいの事は覚悟していたからだ。

しかし、クー・フーリンは彼女に何もしなかった。

ここに至るまでの道中も、ただ、彼女より少し先の方を歩いて、道の案内をするだけである。

今のハルは、言うなれば戦時中に捕われた捕虜（ほりょ）のようなものだ。

そして、この時彼女が受けている扱いは――傍から見れば、間違いなく、捕虜としては最上級のものに違いない。

が、当のハルとしては、そこまで楽観的な見解を持つ事が出来なかった。

その対応が決して、クー・フーリンの『優しさ』という部分からきている訳ではない事を、ハルは理解していたからだ――彼女にしてみれば、それは暗に「逃げようとしたところで、いつでも捕らえる事が出来る」と宣言されているようにしか思えなかった。

だからこそ、ここに来るまで、ハルは逃げようとする事が出来なかった。

この言葉の意味を、正確に捉えて欲しい――逃げる事が出来なかったのではなく、逃げようとする事が出来なかったのだ。

ただそこにいるだけでハルにも感じ取れてしまう程のクー・フーリンの存在感が、鎖などで体を縛るまでもなく、ハルの行動を制限していたのである。

やがて、

「……ねぇ」

と、

遂に、何もしていない時間に耐え切れなくなったのか――ここへきて、ハルはクー・フーリンに声をかけた。

ちなみに、野外音楽堂を出てからここに来るまでの間に、彼女がクー・フーリンに声をかけたのは、これが初めての事である。

しかし、ハルが次の言葉を放つ前に、クー・フーリンの方がそれを遮る形で、

「何だ？　厠に行きたいというのならば、別に構わんぞ」

と言った。

相変わらず、ブンッ、ブンッと、一心不乱に剣の素振りを続けながら。

「……」

ちなみに厠というのは、今で言うところの便所――つまりはトイレの事である。

そして、寡聞にもその事を知っていたハルは、女に対してそういう事を聞くのはどうなんだと思ったが、同時に、そもそも人間と悪魔とでは、物事に対する価値観が全く異なるという事を思い出し、あえて口には出さなかった。

故にハルは、余計な手順などは踏まずに、さっさと本題に入ろうとする。

「……いや、そうじゃなくてさ。一体いつになったら、アタシを――その、何だっけ――『魔界』とかって場所に連れて行くんだい？」

ともすればそれは、聞きようにとっては、ただ自分の寿命を無駄に縮めてしまうような台詞でしかなかっただろう――いや、正確には、クー・フーリンに魔界に連れていかれる事と、死ぬ事とは必ずしもイコールではないのだが、それでも、今までの『人間らしい生活』を送れなくなってしまうのは間違いない。

普通ならば、まだかろうじて人間界に留まれている今のような状況は、ハルにとっても喜ぶべきものの筈だった。

が、

実際にはハルは、どうせならば一刻でも早く、クー・フーリンが言うところの『魔界』とやらに行きたいと思っていた。

何というか。

尊敬する歌の師を失い、

慣れ親しんだ街には大量の悪魔が溢(あふ)れ、

そして、彼女にとっては『特別な存在』である有里淳が、目の前で半殺しにされた今となっては、

流石に――もう、疲れた。

生きている事に。

疲れて、しまった。

そんなハルの心情に気付いているのかいないのか、クー・フーリンは一旦、そこで剣を振るのをやめ、ピッチャーマウンドからベンチに座っているハルの顔へとその視線を向けると、

「いや、まだ君を魔界に送る事は出来ない」

と言った。

「……？　どういう事？」

疑問に思うハル。

そんな彼女に対して、クー・フーリンは説明を始める。

「君でも分かる通り、魔界と人間界とは、本来は全く別の次元に存在する世界だ。……この人間界にも、君達は扱う言語や肌の色の違いによって、国境という、動物の縄張りにも似た境目をそれぞれの生息地域に設けているようだが――それにしたって、山を越えれば、海を渡れば、空を飛べば好きな時に越えられてしまうようなものだろう？」

だが魔界は違う、とクー・フーリンは言う。

「人間界と魔界を隔(へだ)てているのは、山でも、海でも、空でも、目に見えない境界線(ルール)でもない。『次元の壁』と言う、絶対的な『仕切り』だ。跨(また)げば越えられる、押せば開く、といった類(たぐい)のものではない――この2つの世界を繋ぐには、まずはその『次元の壁』を歪ませるところから始めなければならない」

「……？　よく分からないけど……それってつまり、人間界と魔界を繋げる為に、その間にある壁をぶっ壊す、って事？」

自分の言葉に、ハルは背筋が寒くなっていくのをハッキリと感じた。

しかし、クー・フーリンは、

「繊細(せんさい)さのかけらもないな、歌姫」

と、いかにも素人臭いハルの推測を、バッサリと切り捨てた。

「君はもしや、『次元の壁』といものが、手で触れたり、目で見た

り出来るものだとでも考えているのか？　触れる物しか感じようとせず、見える物しか信じようとしないのは、昔から数多くある人間の短所の内の１つだ」

クー・フーリンは一瞬ここで間を置き、いちいち説明しないと分からないのか、とでも言いたげに、小さくため息をついた。

「次元とは物質ではない。好きな時に触れたり、見たい時に見たりする事は出来ない。つまり次元とは、目に見えないが故に、あくまで理解する事しか出来ない、極めて曖昧なものだ――少なくとも、今君が言ったように、『破壊する』『取り払う』等といった事は不可能だ。そもそも、その存在を認知する事さえ出来ないのだからな」

コキコキと、話すのに疲れた様子で、首を鳴らすクー・フーリン。

「……だが、ある一定の条件の元、定められた手順を踏む事で、その『次元の壁』を歪ませ、本来ある筈のない２つの世界を繋ぐ『通り道』を作る事が出来る、というのは本当だ。例えば私が知るある男は、『こんぷ』なる珍妙な機械（からくり）を用いて、『ねっとわーく』という架空の空間から人間の『想い』を魔界にいる悪魔に捧げる事で、極めて簡易的な悪魔召喚術を組み、その悪魔をこちらの世界に喚ぶ事を可能にしている。本来、悪魔を召喚するには、それこそ『アッピンの赤い本』や『ソロモン王の壺』、『グラン・グリモア』などの特殊な魔具を用いらなければならないというのに、だ。いい時代になったと言えばそこまでだが、それ以上に、やはりあの男の知能は計りしれん。いくらベル・デル様の為とは言え、あの男を手を組んだのは、果たして本当に良かったのかどうか……」

最後の辺りの台詞は、殆ど独り言のような口調だった。

残念ながら、クー・フーリンが話す説明の大半を、オカルトには疎い（と、本人は思っている）ハルには分からなかったが、それでも、黒いロープを身に纏った老魔術師が、地面に描いた奇っ怪な紋様を前に、ブツブツと怪しい呪文を唱えているという、童話の世界のような光景が、彼女の頭の中で生々しく浮かび上がった。

「じゃあ、さっきアンタが言った『手順』ってのは、例えば――」

ややあって、ハルが言う。

「――さっきそこに書いた、よく分からない模様とかのこと？」

そう。

この時、クー・フーリンがいる神宮球場の内野領域には、ピッチャーマウンドを中心に、半径１５メートルかそこらの円が描かれており、その内側には何らかの星型の記号（正確には五芒星と言うのだが、それさえも、ハルには良く分からなかった）が記され、外側には英語とも絵文字ともつかない奇妙な言葉が、円を取り囲むようにズラリと書き綴られていた。

それだけを見れば、如何にもたった今から常軌を逸した魔術を発動させます的な予感を、その方面には疎いハルでも感じ取る事ができたかもしれないが、しかしこの時の彼女は、それら全ての紋様が、たまたま球場の道具置き場に置いてあったライン引き――要は、ただの石灰で描かれたものである事を知っていた為、とてもそのような感覚を抱く気にはなれなかった。

「……」

流石にその模様が何らかの魔術（オカルト）の類である事ぐらいは分かるハルではあったが――それに用いる道具が、たまたま目についたライン引きでも充分だというのは意外だった。

「まぁ、そうだ」

得に隠すつもりもないのか、ハルの推測に対して、クー・フーリンは素直に頷く。

「人間界と魔界を繋ぐ術式については、昔から様々な方法があるが、今回は『魔界から人間界に悪魔を召喚する』のではなく、『人間界から魔界に人間を送る』という極めて難易度の高い作業を行う為、私が知る術式の中で最も安全、且つ確実な方法をとらせてもらう。ここに描いた模様は――」

言って、クー・フーリンは、地面に描かれた星のマークを指差しながら、次のように言葉を続ける。

「――五芒星（ペンタグラム）という、本来は主に、人間界（このせかい）のヨーロッパという地方に伝わる模様だ。魔術に用いる紋様の中では、もっとも多く用いられる様式かもしれんな」

「……ああ、クリスマスツリーのてっぺんとかに飾ってある、アレかい？」

とりあえず、いつまでも会話の主導権を握られるのは何だか癪（しゃく）だからという、そんな理由で、ハルは口を開く。

が、それに対するクー・フーリンの対応は、

「……その『クリスマスツリー』なる固有名詞の意味は私の知るところではないが、『クリスマス』という単語から察するに、恐らくそれは『ベツレヘムの星』の事ではないか？　確かその昔、歴史上数多く存在した『アベルの因子』を持つ人間の中でも、極めて優秀な能力を持った男――通称『救世主（キリスト）』が生まれた際、夜空に輝いたと言われている星の事だが……。いずれにせよ、それと今回私が用いている術式との間に、関連性は全くない」

という――相変わらず、実に意味不明、かつぶっきらぼうなものだった。

（……ったく）

どうやら、いくら他の連中よりはまともであるとは言え、結局、悪魔は悪魔。

人間である自分では、まともにコミュニケーションをとる事など、とても出来はしないらしい――と、改めて、ハルは思った。

（……ま、別に、始めから期待してた訳じゃないだけどさ）

そんなハルには構わず、クー・フーリンは説明を続ける。

「今回、術式に使う紋様が一般的なものならば、その術式自体もまた、よく使われるものだ――宇宙（そら）に君臨する星座の力を借りる事で、ここに描いた紋様付近の魔力を増幅させ、私の使役下に置く。その上で、この、五芒星を取り囲むように描いた『地獄門の警告文（ラ・ダビナ・コマンディア）』の詩を私が唱える事で、いよいよこの世界と魔界とを繋ぐ事が出来る、という訳だ」

相変わらずクー・フーリンの説明はハルの理解を完全に越えていたが、それでも、今から彼が行おうとしている何らかの魔術に、星座が関係している事ぐらいは分かったので、思わず、彼女は首を傾げた。

「星座……って、今は昼だし、星なんか出てないけど？」

言いつつ、彼女は空を見上げる。現在の東京の空は雲ひとつない澄み切った青空が支配しており、当然、今の時刻が正午近くである以上、1番星でさえ目にする事は出来ない。

「それは単に見えていないだけだ。見える物しか信じようとしないのは、昔からある君達人間の欠点の内の1つだと、先ほど言った筈だが？　我々の方から見えるか見えないかは問題ではない。要は、そこにあるのかないのか、そして、私がそれを認識出来るのか出来ないのか、ただそれだけだ」

つまらなそうに、クー・フーリンは言う。

次には彼も、ハルと同じように空を見上げた。そして、その視線をゆっくりと動かしていく。

まるで、今の時間では見えない筈の星空を『認識』し、そこから何かを探し当てようとしているかのように。

やがて、その視線がピタリと止まった。

「目的地の正確な位置が分からずとも、地図の通りに進めばいつかは必ずそこに辿りつけるように、今日の人間界単位の暦（こよみ）と太陽の位置さえ把握出来れば、あの濁った空気の層の向こうにある星座の位

置を捉える事は、十分に可能だ。私が描いた五芒星（ペンタグラム）が司るのは、主に木星、水星、火星、土星、金星だが――今回は、地母神イシュタル殿の管轄（かんかつ）である、金星の力を借りるとしよう」

ここで、顔を上に向けたまま、クー・フーリンは横目でチラリとハルの方を伺うと、

「本格的に術式を発動できるのは、この惑星の公転、及び自転の速度から計算すると、最短で……そうだな、あと１５分程だ。午後１２時１５分――その時をもって、君はこの世界に別れを告げ、我ら悪魔が住まう魔界へと足を踏み入れる事になる」

その言葉を聞いて、ザクッ、と、ナイフで胸を刺されたような感覚が、ハルに襲い掛かった。

分かっていた事だ――分かっていた事だが、それでも、実際に、これまで住み慣れた世界を離れる事になる時間を正確に告げられると、いくら『生』に対して執着の薄いハルでも、僅かな恐怖を覚えずにはいられなかった。

それでも、そのような感情を少したりとも表に出そうとしない辺り、彼女もまた、並の人間よりは遥かに強靭な精神を持ち合わせた人物だと言えるが。

「……」

だが、

（……まあ、いいか）

と、ハルは思った。

元より、今の自分は、生きながらにして死んでいるようなものだ。

『アヤ』。

自分にとっては歌の師匠であり――そして、恋人のような存在でもある彼女がいなくなってしまった、その時から。

別にハルは、『命』というものの価値が分からない異常者ではない。

知り合いが目の前で死んだりすれば当然悲しいし、そうでなかったら、野外音楽堂で有里淳の命を助ける為に、自分の身柄をクー・フーリンに提供するような事はしなかっただろう。

しかしそれは、こういう言い方をする事も出来る。

曰く、

自分の命を何とも思っていないからこそ、そのような行動を取る事が出来たのだ、と。

そして、実際にその通りだった。

春沢芳野は自分の命に対して、価値があるとは全く思っていなかった。

（それに……）

ハルは考える。

（それに……もしかしたら、この東京に悪魔が溢れ出したのは、私の歌のせいかもしれない）

それは、聞く人によっては余りにも後ろ向きな考えとも言えたが、それでも、ハルとしてはそう思わずにはいられなかった。

そうとしか思えなかった。

彼女とて、馬鹿ではない。

これまで自分の身を狙ってきた悪魔や、クー・フーリンに言われるまでもなく、よく分かっている。

自分の『歌』には、何か不思議な力が宿っているという事を。

既に、彼女は自覚している。

それが一体、どのようなものなのか――そこまでは、ハルにも分からない。

しかし、それでも、自分の歌声には何かがある、という――その事に気付ける程度の頭は、ハルも持っていた。

一昨日、そして今日と、2度の悪魔達の襲撃を受け、その際に「お前の歌を寄越せ」というニュアンスの言葉を何度も言われたとなれば、気付くなという方が無理だ。

故に、そこから連想する形で彼女は、こうも思っていた訳だ――突然、東京に悪魔が現れ始めたのと、自分の歌声とは、きっと何か関わりがあるに違いない、と。

（……だから）

彼女は思う。

（私が生きているのと死んでいるの、どっちの方がいいって言ったら……）

きっと、後者に決まっている――と。

ハルは、そう思った。

定められた制限時間（リミット）は、残り15分。

こうして日の光が当たらないベンチに腰を落としている今も、確実に運命の時は迫ってきている。

にも関わらず、ハルの表情には悲壮感のかけらもない――勿論、全く恐くないと言えば嘘になるが、それでも、『悲しい』という感情は少したりとも沸いて来なかった。

『恐怖』と『悲しみ』。一見似ているようで、しかし実際のとこ

ろ、この2つは全く別の感情であるという事を、ハルはこの時知った。

ハルの視線の先では、一通り術式の説明を終えたクー・フーリンが、再び雷の剣で素振りを行っていた。

その表情は真剣そのもので、もしも、今のような状況でなかったら、ハルはそんな彼の姿をかっこいいとさえ思っていたかもしれない。

が、この時彼女が考えていたのは、別の事。

その脳裏に浮かび上がるのは、1人の少年の姿だった。

偶然にも――視線の先にいるクー・フーリンと同じく、青い髪に、青い瞳の、自分より年下の少年。

有里淳（ありさとじゅん）。

「……ったく」

思わず、ハルは小さくため息をついた。

（てっきり、あの子は私と『同じ』だと思ってたけど……。そいつも、少し怪しいかもね）

少なくとも、クー・フーリンの魔手から自分を必死に守ろうとしていた、あの時の有里淳の気持ちが、ハルには理解出来なかった。

自分のような人間なんて、死んだ方がいいのに。

得体の知れない『歌声』を持っている自分なんて、死んだ方がいいに決まっているのに。

その方が、他の皆の為になるに決まっているのに。

――それなのに何故、あの少年は、あそこまで必死になって、自分を助けようとしたのだろうか？

分からない。

とにかく――分からない。

だったら最初から考えるなと、ハルは自分に言い聞かせた。

分からない事をいくら考えても仕方ない、と。

仮に分かったとしても、それで何か状況が変わる訳でもないのだから、とでも言うように。

しかし、

（けど、それなら……）

と、ハルは思う。

（一体どうして、私はさっきから、あの子の顔ばかり思い出してる

んだろう？）

もし、本当にそれが何の価値もないものだと言うのなら、わざわざ思い出す必要もない筈だ。

にも関わらず、生きるのを諦めたハルの脳裏には、有里淳の顔ばかりが浮かび上がってきて仕方ない。

それは何故か。

「……」

ハルには分からない。

分からないが――

（出来れば、最後にもう１度だけ、あの子の顔を見ておきたかった……かな……？）

有里淳の顔が、春沢芳野の頭に焼き付いて離れない。

彼の事を思い出している間、その目から透明な液体が溢れ出ている事に、この時のハルは気付いていなかった。

時刻はもう間もなく、１２時１５分を指そうとしていた。

３ｒｄ　Ｄａｙ『弱者への賞賛』

再び、地獄の鬼ごっこが始まった。

『東京封鎖』が開始されてから――というよりは、政府に盾突き始めた時から、もはや何度目か分からない必死の逃走によって、１０―ＢＩＴの体力は既に限界に達しつつあった。

ともすれば、このまま膝から崩れ落ちそうになる。１０―ＢＩＴ自身も、いっその事、そうなってしまえればどんなに楽だろうかと、先程からずっと、心のどこかでそう思っているくらいだった。

背後から迫ってくる『恐怖』がもたらす忘却の世界を、約束された虚無と無感覚の到来を、１０―ＢＩＴはむしろ歓迎したい程だった。

だが、

（うる……さいっ……！）

と、そんな風に、心の底から沸き上がってくる甘い誘惑を、１０―ＢＩＴは強い意思で押さえ込む。

右手に持つ――半年前、友人から預かった――ＣＯＭＰがなければ、今頃は彼の体力も気力も、とっくに底をついてただろう。

１０―ＢＩＴにとってこのＣＯＭＰは、政府に対抗できる唯一の手段であると同時に、精神安定剤のような役割も果たしていた。

それこそ、春沢芳野のシーケンサーと同じように。

ザッ、ザッと、背後から鳴る足音が、規則正しく１０―ＢＩＴの耳に届いてくる。

彼にはそれが、まるで時限爆弾のカウントダウンのように思えた。

相変わらず、定期的にやってくる左肩の痛みは更に強くなり、その１回１回の間隔も短くなってきているものの――最早、今の１０―ＢＩＴにはそれさえも気にならなかった。

この時の彼は、ただひたすらに足を動かし、一刻も早くこの地獄から逃げ出す事しか頭になかった。

そして、

「……やれやれだぜ」

「ッ！？」

氷のように冷たい声が、１０―ＢＩＴの精神に圧倒的な恐怖を植え付ける。

追跡者との距離はまだ随分と離れているにも関わらず、後ろを振り返ろうともせずに、１０―ＢＩＴは大きく横へ飛んだ。

それが正解だった。

彼が不自然な体勢のまま体を地面にたたき付けた途端、ゴオッ！

！　と凄まじい突風が吹き荒れたのだ。

それはたった今まで１０―ＢＩＴがいたアスファルトの地面をあっという間に破壊し、まるで局地的に大きな地割れでも起きたかのように、その場に深い亀裂を作り出していた。

「が、あっ！？」

しっかり避(よ)けたにも関わらず、その衝撃だけで、１０―ＢＩＴの体が５メートル以上も吹っ飛ばされた。

まるで全身をヤスリにしたかのように、肉体を覆う皮のあちこちが擦(す)りむけ、すぐさまそこから血が滲み出てくるが、命を失うよりは遥かにマシだと思い、彼はすぐさま地面から起き上がると、再び足を前に動かそうとした。

が、

「……勘弁しろよ。こっちはアンタと違って、とっくに若さの峠(ピーク)を越した３０代のジジイなんだ。この炎天下の中、ずっとアンタの尻(ケツ)ばかり追ってる訳にもいかないんだよ」

次の瞬間には、１０―ＢＩＴの目の前に、冷酷な笑みを浮かべた銀髪の男――セトが立っていた。

（……っ！！　なぁ――！？）

１０―ＢＩＴが驚きの声を上げる前に、セトは彼の襟首をガッチリと掴むと、そのまま大の大人である１０―ＢＩＴの体を無造作にブン投げた。

それこそ、空き缶を後ろ手に放り投げるような気軽さで。

「～～～～っ！！」

叫び声を上げる暇もなく、ドカァッ！！　と１０―ＢＩＴの体が、偶然、その場にあった１台の軽自動車に背中からたたき付けられる。

「がっ……！！」

それによって肺を圧迫され、口から大量の息を吐き出す１０―ＢＩＴ。

ついでに嘔吐感も込み上がってきたが、それだけは何とか堪えた。今の状態で吐瀉物を撒き散らしたら、それこそ、内臓ごと吐き出してしまいそうな気がしたからだ。

（こ……こは……？）

これまで無我夢中にセトから逃げ切る事だけを考えて走り続けてきた為、今、自分がどこにいるのか、１０―ＢＩＴはそんな事さえも正確に把握していなかった。

体中を駆け巡る激痛に顔を歪めつつ、サッと周囲に視線を走らせると、やがて彼の視線がある一点で止まった。

そこには、周囲に立ち並ぶ建物の中でも、一際目立つ巨大なデパ

ートが建っていた。そしてその入口には、『Ｓｕｎｓｅｔ　Ｃｉｔｙ』というロゴが取り付けられていた。

（サンセット通り……。という事は、このデパートは東洋アンズか……？　いつの間にか、こんな場所にまで来ていたなんて……！）

池袋――東洋アンズ。

先日、有里淳一（ありさとじゅん）行が、不死の王『ベル・デル』の配下であるカラステングやビフロンズと、壮絶な死闘を繰り広げた場所でもある。

その時だった。

ザッ、という足音が聞こえてきた。

戦慄（せんりつ）に駆られて１０―ＢＩＴが視線を自分の正面に向けた時には、既に遅かった。

再び――いつの間にか、彼のすぐ正面に、セトが立っていた。

この時の１０―ＢＩＴは軽自動車に背中を預ける形で地面に座り込んでいた為、ちょうど１０―ＢＩＴがセトを見上げ、セトが１０―ＢＩＴを見下ろす形となる。

まるで、２人の間にある絶対的な力量差を、そのまま如実に現しているかのように。

「さて」

そんな状況で、セトが口を開く。

「当然、どうして俺が、こうしてアンタに会いに来たのかは分かってるよな？」

セトの言葉に対し、１０－ＢＩＴは何の答えも返さなかった。

しかし、それは意図的にセトの言葉を無視している訳ではない。

というのも、この時の彼は、どうすればこの蟻地獄の様に絶望的な状況から抜け出す事が出来るのか、その答えを導き出すのに必死になっていたからだ。

セトにしても、最初から、１０－ＢＩＴがまともに言葉を返すとは思っていなかったのだろう。自分の台詞が無視された事などまるで気にする風もなく、続けて彼は、

「率直（そっちょく）に言わせてもらうぜ――アンタが大事に抱えてる、そのＣＯＭＰを渡せ」

と言う。

流石に、この時ばかりは聞き流す事は出来なかった。

その台詞の内容と、セトの口調の冷たさにゾッとしたものを覚えて、１０－ＢＩＴは大きく目を見開く。

しばしの間、周囲を沈黙が支配する。

１０－ＢＩＴはセトの次の言葉を待っていたが、どうやら、彼の方も先の問いに対する１０－ＢＩＴの答えを待っているらしい。

このまま１０―ＢＩＴが黙っていたら、彼の方もずっと黙ったままでいそうだった。

そして、２メートル近い大男が冷たい視線で自分の姿を見下ろしたままずっと押し黙っているという状況は、如何に１０―ＢＩＴと言えどもそういつまでも堪えられるものではない。

こうして沈黙を保っているだけでも、自分の寿命が少しずつ減っていくのを、１０―ＢＩＴは自覚していた。

やがて――今から自分が何を言うべきか、考えに考え抜いた挙げ句、彼はゆっくりと口を開く。

「嫌だ……と、言ったら？」

これが、１０―ＢＩＴの答えだった。

熟考の末に言い放ったにしては、それは余りにも簡素な言葉だった。

同時にそこには、まるで鉄のように固い、彼の意思がこもっていた。

「ああ……」

しかしセトは、そんな彼の言葉の重みに気づかないまま――或いは気づいているにも関わらず、わざとそれを無視しながら、ゆっくりと首を横に振った後、

「……言わない方がいい」

ゾンッ！！　と、

もう、今日これで何度目か分からない恐怖の波が、１０―ＢＩＴの全身に襲い掛かった。

「グッ……！」

それだけで今にも気を失いそうになる１０―ＢＩＴだったが、血が出るほど強く唇を噛み締める事で、彼は何とかそれを堪えた。

次には、負けてたまるか、とばかりに敵意に満ちた視線を、冷酷な笑みを浮かべているセトの顔に向けようとして、

刹那（せつな）、セトが無造作に繰り出した蹴り技が、１０―ＢＩＴの脇腹に突き刺さった。

と言っても、果たしてそれを蹴り『技』と称していいかどうかは、甚（はなは）だ疑問ではある――と言うのも、セトのそれは、まるでサッカーボールを遠くに蹴り飛ばすかのような、実に無造作なものだったからだ。

言うまでもなく、人の体はサッカーボールとは全く違う――にも

関わらず、１０―ＢＩＴの体は、まさに蹴り飛ばされたボールのように、およそ２０メートル以上も吹き飛ばされた。

「――――っ！！？」

攻撃を受けた瞬間こそ痛みを感じなかった１０―ＢＩＴではあったが、地面に体を強く打ち付けると同時に、ようやくそれまでに蓄積された痛みが、一気に襲い掛かってきた。

「グ、ェッ……！！」

雑巾を絞ったかのような雑音を喉から発すると同時に、たまらず、１０―ＢＩＴは口から何滴かの血と、そして黄色い胃液とを吐き出す。

この時、彼が感じている痛みときたら、まるで、直接腹部に巨大なネジでも刺しこまれたかのようだった。少し気を抜いただけで、何もかも吐き出してしまいそうな程である。

１０―ＢＩＴが僅かに顔を上げれば、やはりそこには、音もなく彼のすぐ近くにまで移動したセトの姿があった。

「そう大袈裟（おおげさ）なリアクションをする程でもねえだろ。こう見えても、かなり手加減したつもりだぜ？」

相変わらず、口元に薄い笑みを浮かべながら、セトが言う。

しかし１０―ＢＩＴが見る限り、どうもそれは弱い者をいたぶる事によって得た加虐心（かぎゃく）からではなく、今にも胸の内側から溢れ出そうとしている何らかの感情を、無理矢理抑え込んでいるかのようだ

った。

その目が。

冷たいとか、暗いとか、そういう類のものではない。まるで、魂が――心が抜けきってしまったかのようなセトの瞳が、１０―ＢＩＴの目には奇妙に印象的に映っていた。

しかし、そんな１０―ＢＩＴの様子を、恐怖に駆られたものだと思ったのか、セトは、

「やれやれだぜ。そうビクビクすんなよ。別に、とって食おうって訳じゃない」

「……似たようなものだろう」

吐き捨てるように、１０―ＢＩＴは言う。

半年前、他ならぬ、このセトという男に目の前で友人を殺されたとあっては、彼がそう考えるのも無理はない。

しかし、セトは、

「いやいや、嘘じゃない。俺は本当に、まだアンタを殺すつもりはねえんだ」

一瞬、１０―ＢＩＴは、セトが何と言っているのか分からなかった――先程、セトは１０―ＢＩＴが持つＣＯＭＰを寄越せと言ってきたが、彼が狙っているものは、何もそれだけではない筈だ。

（もし、政府が本当に、このＣＯＭＰに納められている『禁忌』を、世間に隠し通すつもりなら……）

１０―ＢＩＴが持つ、ＣＯＭＰ内に納められている政府のデータと、

そして――１０―ＢＩＴの命。

この２つこそが、目の前で佇んでいる男の狙いだと、そう、１０―ＢＩＴは思っていた。

それこそ半年前、彼の友人を殺した、あの時と同じように。

だからこそ、１０―ＢＩＴには分からなかった。自分の耳が確かならば、今、自分を見下ろすこの男は確かに、まだアンタを殺すつもりはない、と――そう言ったのではないか？

「な……に、を……？」

何を言ってるんだ？　というニュアンスの言葉をセトに言い放とうとした１０―ＢＩＴではあったが――いかんせん、今も体中を駆け巡っている激痛のせいで、上手く喋る事が出来ない。

しかし、どうやらセトは、１０―ＢＩＴが何と言いたいのかを悟ったらしく、次に１０―ＢＩＴが何かを言う前に、

「ん……？　なんでそんな意外そうな顔をしてんだ？　……って、あ、そうか」

ポン、と胸の前で両手を合わせて、何かに気付いたかのような表

情になるセト。

「アンタもしかして、半年前の『あの事』を思い出しながら、そんな事を言ってんのか？　……ったく、やれやれだぜ。勘弁しろよ。別に信じなくてもいいけど、俺だって、出来ればあんなやり方で終わらせたくなかったんだぜ？　アンタだって知ってるだろ？　俺があああするよりも前、俺はアンタの友人に、何度も平和的に口での交渉を試みてたんだ。言うなりゃ、警告ってヤツだな。けど……」

セトは一旦、そこで言葉を切ると、

「あろうことか、アンタの友人は、それでも俺に――日本政府に対抗し続けた。そうなっちまったら、言葉じゃどうにもならない以上、俺としても『最後の手段』を取らざるを得ないだろ？　だから、まぁ、無理かもしれないけど――あの時、俺がアンタの友人を殺したからといって、アンタが俺を恨むのはどうかと思うぜ？」

ふざけるな、と１０―ＢＩＴは思わずにはいられなかった。

例え、どんな理由があろうと――どれだけ、目の前の男が自分の友人に『警告』を出し続けて、そして、それを友人が無視し続けてきたとしても、

そんな事が、

自分の、かけがえのない友人を殺していい理由になるものか――と。

１０―ＢＩＴは、そう思った。

「まぁ……世のため人のために、例えそれが何であろうと、全ての『真実』を世間に公表しようっつーアンタらの気概は買うけどよ――よりにもよって、目をつけちまったのが『それ』だったとはな」

言いながらセトは、１０―ＢＩＴが持つＣＯＭＰに人差し指を向ける。

「今まで数え切れない程アンタの友人に言ってきた台詞だし、いい加減、俺も飽き飽きしてきたところなんだが――それでも一応、アンタの方にも言っておくか。……『それ』の内容を民衆に伝えるなんて、馬鹿な真似はよせ」

「何、だと……？」

ジロリと、蓄積されたダメージのせいで上手く体を起こす事が出来ないまでも、それでも、強い意思のこもった目で、セトの顔を睨みつける１０―ＢＩＴだったが――当然、自分よりも遥かに戦闘力が劣る相手に、そのような視線を向けられたぐらいで怯えるセトではない。

「何度でも言うぜ――『それ』の内容を民衆に伝えるなんて、そんな馬鹿な真似はよせ。これはアンタの為でもあるし、同時にアンタ以外の何も知らない民間人の為でもある――念を押しておくが、これは安っぽい脅しとかじゃねえ。『それ』は、何も知らない奴の目には絶対に触れちゃならない、そういう類のものなんだ」

セトは未だ、１０―ＢＩＴが持つＣＯＭＰに人差し指を向けたままだった。

「俺は昔から、ある事情で各国の政府機関から、とても表には出せ

ない――さっき、アンタも見ただろうが――『悪魔』やら『シャドウ』やらが絡んでる依頼を受けてきた。だからこそ、俺は『それ』の内容を知っちまった訳だが、知っちまえるポジションにいた訳だが――だからこそ分かる。『それ』の内容が日本全国に公表されたら、一体、どれだけの大混乱が起こるか、どれだけのものを失う事になるのかを、な」

「……」

１０―ＢＩＴは黙っていた。

閑散とした東洋アンズ前に、セトの言葉だけが響いていた。

やがて、

「そのＣＯＭＰを渡せ」

結局、話はそこに戻る。

「そうすりゃ、命だけは助けてやる。俺に今回の事を依頼した政府のお偉いさんは、アンタをちゃんと殺せって言ってたけど……。まぁ、それについては安心しろ。さっきも言ったが、俺は、出来ればアンタを殺したくない――アンタみたいな人間を、殺したくはないんだ。幸い俺は、連中に対して、かなり大きなコネを持ってる。たかが１人の民間人のちょっとした暴走を無かった事にするぐらい、どうって事ねえさ」

「……」

それでも、１０―ＢＩＴは黙ったままだった――が、それが逆に、

セトの要求には決して屈しないという、１０―ＢＩＴの強い意思を如実に物語っていた。

セトの方も、そんな１０―ＢＩＴの心情に気付いたのか――やがて、彼は小さくため息をつくと、

「頼む」

と、そう言って、

「これ以上、俺に人を殺させるな」

直後、岩の様に固く握りこまれたセトの右拳が、１０―ＢＩＴの胸部に打ち込まれた。

何かが折れたような音がした。

１０―ＢＩＴの肋骨（ろっこつ）の内の１本が、セトの右拳によってへし折られた音だった。

「……ッ！！　が、あ、あぁぁ！！？」

どの道、自分の体は既にボロボロなので、今更、負傷箇所が１つぐらい増えたところで――と、一瞬そう思った１０―ＢＩＴだった

が、甘かった。そんな余裕のある考えを浮かべる事が出来ない程に、肋骨が折れた事による痛みは凄まじいものだった。

余りの痛さに苦悶の表情を作って、１０―ＢＩＴは、ゴツン、と頭を地面に落とす。

見ようによっては、それは、まるで１０―ＢＩＴが土下座しているかのような――セトに対して、必死に許しを乞(こ)いているかのような、そんな光景にも見えた。

「そのＣＯＭＰを渡せ」

内容こそ同じだったが、その声の冷たさときたら、先程までとはまるで比べものにならなかった。

「もう、いいだろ？」

セトは言う。

「アンタも、アンタの友人も、マジで良くやったよ。誰が最初にそう言ったのかは知らねえが――『人類最強のペルソナ使い』と呼ばれる俺に、ここまで言わせたんだ。誇っていいぜ、この事実を。それまでの生活を全て捨てて、大切な友人を失ってまで勝ち得た、この事実を。誇りに思って――そのまま、諦めちまえ。今のアンタを責められる奴なんざ、誰もいねえよ。だから、な？　とっととそのＣＯＭＰを、俺に渡しちまえ」

しかし、

１０―ＢＩＴは、

「ふざ……ける、な……！」

何とか、彼は立ち上がろうとする。

歯をガチガチと鳴らし、

痙攣（けいれん）したかのように、足を細かく震わせつつも、

それでも――立ち上がろうとする。

「君みたいな人間を相手に、私が降参する理由なんて――」

「生憎だが」

１０―ＢＩＴの言葉を、セトはシャッターでも降ろしたかのように遮る。

「俺は、同じ事を何度も言うのが嫌いだ」

ズドッ！！　と、

再び、セトが繰り出した右拳が、１０―ＢＩＴの胸部に、正確に突き刺さった。

肋骨が、折れる。

これで――２本目。

当然、いくら２度目であるとはいえ、そう簡単に慣れるものでは

ない。

だからこそ１０―ＢＩＴは、

「が、あああァァァあああああああああああああああああああッ！！？」

と、凄まじい絶叫を上げた。

「２４本――これが何を意味する数字か、アンタに分かるか？」

足元でのたうち回る１０―ＢＩＴの姿を冷たい表情で眺めながら、セトは言う。

「人間の、全部の肋骨の数だよ。右に１２本の、左に１２本。合計２４本だ。もっとも、アンタの場合、俺が既に2本へし折ったから、残りは後２２本だけどな」

まるで予め録音しておいたテープを再生しているかのように無機質な口調で、セトは淡々と告げる。

「つっても、勘違いすんなよ――別にこれは、アンタにはまだ２２回チャンスが残されてる、って訳じゃねえぜ？　勘弁しろよ。俺は一体どこのマゾヒストだ？　後２２回も警告を続けてたら、その間に俺の我慢が限界を迎えるのは間違いないだろうが」

ドン、と、１０―ＢＩＴの体を、セトがつま先で軽く押せば、それだけで、今までは地面を向いていた１０―ＢＩＴの体が仰向けになる。

「それでも、ホラ、何と言ったって、俺はアンタよりも年上だしな

――だからここは1つ、年上らしく、後もう何回かだけチャンスを与えてやる」

「……」

仰向けの状態で、今なお続いている肋骨の痛みに身をよじりながら、10―BITはセトの顔を見上げる。

セトと10―BITとの距離は、およそ距離、とよべる程の間隔もない。冗談抜きで、手を伸ばせば、すぐに相手の体に触れられる距離だ。

（分かってる……！）

10―BITは思う。

（分かってる。今更、私が何をしたところで、この最悪の状況が好転するなど、ありえないという事ぐらい！　私がどんな攻撃を浴びせようしたところで、この男はきっと、眉1つ動かさないままその全てを受け流すに違いない、という事ぐらい！　が――）

しかし、

（それが……どうした！）

ゆっくりと、

10―BITは、先程からずっと動かす事が出来ない左手を無理矢理動かすと、そのまま、そちらの方の手に、右手に持っているCOMPを持ち替える。

そして、

１０―ＢＩＴは、その場で勢いよく立ち上がると同時に、

空いた方の右手を、固く握り締めると――そのまま、セトの顔に目掛けて、一気に突き出した。

この男と自分とでは、まるでモノが違う。

（だが――せめて、一太刀（ひとたち）！！）

それが、この時の１０―ＢＩＴの思いだった。

「う、おおおおおおおおおおおぉぉぉぁあああああああああああああああっっ！！」

だが、

結果など――始めから知れている。

案の定、

「……おいおい、いくら俺より年下とは言え、アンタだって、もう２０を過ぎたいい大人だろうが。少しは状況ってモンを理解しろよ――ったく」

セトは、呆れたように小さくため息をついた後、

「殺れ殺れだぜ」

頭蓋骨が割れたかのような痛みが、１０―ＢＩＴの頭部に襲い掛かった。

糸の切れた人形のように力無く地面に倒れるまで、彼はその事に気付けなかった。

「……っと、危ねえ危ねえ」

セトが言う。

さながら、クロスカウンターのように１０―ＢＩＴの顔面に打ち付けた左手を、プラプラと振りながら。

「思わず、ちょっとだけスイッチが入っちまったぜ――つーか、マジで勘弁しろよ。もう何度も言ってるじゃねえか。俺は、出来ればアンタを殺したくない。アンタにしたって、親から貰ったたった１つの命を、こんな所で無駄にしたくはないだろ？」

「……」

「なあ、頼む」

もしこの時、１０―ＢＩＴが顔を上げたならば、彼はきっと驚愕

の表情を浮かべたに違いない。

なぜなら――そこには、先程までは無理矢理押し殺していた筈の感情を僅かに露(あらわ)にした、セトの姿があったからだ。

セトは、キュッと唇を噛むと、

「いい加減、諦めてくれ――俺はもう2度と、アンタみたいな人間に手をかけたくない。……半年前の、アンタの友人みたいな強い意思を持った人間を、殺したくはないんだ」

「……っ！！」

今度は、１０―ＢＩＴが唇を噛む番だった。

そして、

「どうして……」

と、１０―ＢＩＴは言った。

「どうして……貴方は、こんな事をするんだ。どうして、ここまで酷い事が出来るんだ」

「……」

「瀬多(せた)総司(そうじ)」

その名を、１０―ＢＩＴは言う。

彼は、ＣＯＭＰを持った左手を、わざとセトから見えやすい位置に動かしながら、

「私はこれまで、このＣＯＭＰに入っている『禁忌』の詳細な内容を知る為に、貴方が殺した友人と共に、幾度となく、政府の裏の顔というものを覗いてきた。そうして得た情報の中には、本来、私達にとっては全く必要のないものでありながら、それでいて、非常に興味をそそられるものも数多くあった。例えば１９年前、巌戸台（いわとだい）という地域で起こった『無気力症状』に関する事件や、そして……１７年前、八十稲羽（やそいなば）という田舎で起きた、猟奇連続殺人事件などがそれだ」

ピクリと、セトの眉が僅かに動いた。

「更に、私が知った情報にはこうあった。驚くことに、その殺人事件を解決したのは警察ではなく、当時はまだ成人にさえ達していなかった、何人かの高校生のグループだと。……流石に、最初は信じなかったが、しかし冷静に考えれば、政府の情報ベースに嘘が載っている訳がないし、かと言って、他の極秘情報から私達の目を逸らす為の嘘（ダミー）にしては下手過ぎる」

それで更に興味が湧いた１０―ＢＩＴは、その後、幾度となく政府の監視の目をかい潜っては、その情報について調べていき――やがては、とうとう、前述した高校生グループの内の、何人かの名前を把握する事に成功する。

「その中の１人が、貴方だ」

キッ、と細い目を僅かに見開きながら、１０―ＢＩＴはセトの顔を見る。

セトの表情は再び、無理矢理感情を押し殺しているかのようなそれへと戻っていた。

「瀬多総司――当時は高校2年生だった貴方は、その事件を解決する際、かなりの多くの人の命を救ってきた筈だ。多くの人の笑顔を守ってきた筈だ。なのに……」

ギリギリと、強く奥歯を噛み締める音が、１０―ＢＩＴの口の中から響く。

「なのに……どうして！　どうして貴方は今、こんな馬鹿な事をしてるんだ！　１７年前と言えば、私がまだ年端もいかない――それこそ、小学生くらいだった頃から、貴方は数え切れないほど大勢の人々の『日常』を守ってきたというのに、どうして、今になってここまで堕ちてしまったんだ！！　私の知識にある『瀬多総司』という男の人間性と、今ここにいる男の人間性とが、全く一致しない！！　一体どうすれば、人間というのはここまで変われてしまうというんだ！！」

腹に溜まった物を一気に吐き出すような勢いで、１０―ＢＩＴは言う。

「教えてくれ……！　いや、教えろ！！　一体、貴方は何者なんだ！？　『瀬多総司』という、かつては多くの人々の命を救った『人間』か！？　それとも、他の政府の連中と同じく、他人の命を奪っても何とも感じない、人の皮を被った『化け物』か！？」

「……」

セトは――或いは、瀬多総司は答えられない。

この時の彼は、果たしてどちらなのか。

沈黙が、場の空気を支配する。

微かな呼吸の音さえ、やたら大きく聞こえる。

この時、その場にいる2人は何を思い、何を考えたのか。

何を願い、何を望んだのか。

やがて、

ゆっくりと――2人の内の片方が、その口を動かした。

「……何と言うか、まあ、アレだな」

そう言って、セトは重い沈黙を破ると、

「俺としちゃ、そんな他人の過去を聞かされても、マジで迷惑な上に腹立だしいだけなんだが？」

「……っ！？」

一体、セトが何を言っているのか、１０―ＢＩＴには理解出来なかった。理解する暇もなかった。

次の瞬間には、彼の体は、再び宙を舞っていた。

否、『舞う』という表現は、この場合、あまり正確ではない――例えるなら、それはまるで、１０―ＢＩＴ自身が砲弾になったかのようだった。そう比喩してもおかしくない程の勢いで、先程までは大分離れた場所にあった筈の東洋アンズの外壁に、１０―ＢＩＴの背中が打ち付けられた。

「がァああああああああああああああああああッッ！？」

『激痛』。

そんな言葉さえ生温（なまぬる）く感じられる程の感覚が、背中から全身へと、一気に駆け巡り――１０―ＢＩＴの口から、絶叫がほとばしる。

だからこそ、彼はすぐには気付けなかった。

いつの間にか、自分の手から、政府の『禁忌』に関する情報が詰まったＣＯＭＰが無くなっている事に。

先程、１０―ＢＩＴの体を蹴り飛ばす際に、セトが、その手から素早く奪い取っていた、という事に。

「いい事を教えてやろう」

奪ったＣＯＭＰを顔の前で小さく振りながら、セトが言う。

「どうして俺が、このＣＯＭＰをアンタから奪おうとしてたのか、って事だが――言っとくが、これは別に、政府の連中に依頼されたからだとか、そんな理由じゃねえぜ？　確かに今回、俺がこうしてアンタに会いにきた事については、それが事の始まりだが――かと言って、それが全てじゃない。むしろ、理由の内の９割ぐらいは、俺の個人的感情によるところが大きい。流石に、それが何なのかについてまで話すつもりはないが――少なくとも、俺が今、こうしてアンタの前に立っている状況については、どれもこれも、全部俺が選んだ『道』だ。って事は言っといてやる――誰に強制された訳でもない。１から１０まで、俺が選んだ『道』なんだってな」

しかし、まるで陸に打ち上げられたばかりの魚のように苦しんでいる１０―ＢＩＴには、その言葉を正確に聞き取る事さえ出来ない。

「まあ……要するにアレだ。このＣＯＭＰの中にある『あの兵器』の情報が世間に漏れたりしたら、俺としても、かなり困るって事だ。……何せその昔、『あの兵器』の基盤を築いたのは、俺がこの世で最も尊敬してる『先輩』なんだからな。あの人が秘密裏に『あの兵器』に関する技術を政府に提供した以上、きっと、そこには何らかの意味があるんだろうぜ。だったら、俺は全力で、あの人のそんな意思を守り通すだけだ。アンタに――アンタなんかに、『先輩』が残した『あの兵器』の情報を、動物園のパンダよろしく大衆の目に晒（さら）させるだなんて、そんな真似はこの俺が許さねえよ」

僅かに、

セトが、『先輩』という言葉を発したその時だけ、僅かに――セトの表情に変化があった。

視界の端でそんなセトの顔を見上げていた１０―ＢＩＴではあったが、本当にごく小さな変化であった為、それが一体どのような感情によって成されたものだったのか、彼には分からなかった。

「さて、ＣＯＭＰも手に入れたし、普通なら、これでミッションクリアってとこなんだが……。防衛大臣のオッサンから頼まれた依頼の正確な内容は、見られた情報が記録されたメディアの回収と、そして……その内容を知る人間の『処理』だからな。となると、ここから更にアンタの首をへし折るなりして、初めてミッションクリアになる訳だが――」

ゆっくりと、再び開いた１０―ＢＩＴとの間の距離を詰めながら、セトが言う。

「けど、何もあのオッサンの為に、俺がそこまでする必要はねえよな。とは言え、またしばらく経った後、回復したアンタにコソコソ周りを嗅ぎ回れるってのも、俺としてはかなりめんどくさい展開ではあるし――」

やがて、１０―ＢＩＴの前に佇むセト。

「だから、約束しろ」

また一段と、セトの口調が、更に冷たいものへと変わっていく。

「これまでの事は――当然、このＣＯＭＰに入ってる『あの兵器』の情報も含めて――全部忘れると、ここで約束しろ」

「……」

「そうすりゃ、アンタが『あの兵器』について探りを入れない以上、政府の連中にしても、最早アンタは死んだも当然だ。勿論、ここでアンタが俺の要求を飲んだ事を知ったところで、ハイそうですかって素直に手を引くような連中じゃないが――何、それについては心配すんな。あの馬鹿共には、俺の方からキツく言い聞かせといてやるよ。連中は俺には逆らえないしな」

「……」

「……おい」

いつまで経っても返事を返さない１０－ＢＩＴに対して、流石に、少し苛ついた様子を見せるセト。

「いい加減にしろよ――これじゃあまるで、俺が独り言でも喋ってるみてえじゃねぇか。……ったく、やれやれだぜ。まあ、こっちの言葉さえちゃんと聞こえてりゃ、別にいいけどさ――ていうか、聞こえてるよな？　流石にもう、耳が正常に働く程度には痛みから回復してるだろ？」

コツン、と地面でうずくまっている１０－ＢＩＴの体を、セトは足のつま先でつく。

当の１０－ＢＩＴはと言うと、そんなセトの無礼極まりない行いに対して、文句の１つもいう気になれなかった。

しかしセトの言う通り、確かに、彼の言葉をちゃんと聞くぐらいの事は出来た。

地獄のような状況の中で提示された、唯一の逃げ道。

周りから無数の銃口を突き付けられているような心境に陥っている１０―ＢＩＴには、それが非常に魅力的に思えて仕方なかった。

ジワジワと、彼の脳内が『いっそのこと』という言葉から始まる、１つの欲望に蝕(むしば)まれていく。

そもそも、自分が命を賭(と)してでも守るべきＣＯＭＰは、既に奪われてしまった。

ならば、ここで自分がどれだけ足掻こうとしたところで、そんな行為はまさしく『無駄』の２文字で表すより他にない。

何かそれに見合うだけの理由があるならばともかく、それすらも見出だせないまま、自ら危険な領域に足を踏み出そうとするなど――正気の沙汰(さた)ではない。

「悪いが、これ以上は待てねえ。そろそろ答えを聞かせてもらおうか」

そんなセトの言葉が、全てを諦めようとしている１０―ＢＩＴの思考を、更に後押しする。

やがて１０―ＢＩＴは、ゆっくりと唇を動かした。

最後の言葉を、紡ぐ為に。

「……何？」

それを聞いたセトは、途端に、不可解そうに眉をひそめた。

と言っても、それは、１０―ＢＩＴの声が、あまりにも小さかったから――という訳ではない。

むしろ、その逆だった。その言葉がハッキリと聞こえたからこそ、それに含まれる意味をハッキリと理解したからこそ、彼は不可解そうな表情をしているのだ。

「聞こえなかった、のか……？」

唇の端からポタポタと血を流しながら、１０―ＢＩＴが言う。

「私は諦めない、と……そう言ったんだ」

それが、１０―ＢＩＴが導き出した『答え』で、

それが、１０―ＢＩＴが選んだ『道』だった。

今は亡き友人と共に、日本政府が民衆に対して隠している『禁忌』を、いつの日か白日の元にさらそうと決意したその時から、彼は『選択』していた。

例えその『結果』が、今のように、『人類最強のペルソナ使い』に命を奪われそうな状況に陥っているという、壮絶（そうぜつ）で凄絶（せいぜつ）ものであろうとも――しかし、そんな事は関係ない。

今ここで、友人から受け継いだ意思を捨ててまで、自分の命を優先させるのか。

或いは、最後まで――否、最期まで、それを貫き通そうとするのか。

１０―ＢＩＴにとって重要なのは、ただ、それだけ。

「……」

しばしの間、セトは無言だった。

が、やがて、

「……分かったよ」

ブン、という奇妙な音が、一瞬、辺りに響き渡った。

次の瞬間には、セトの右手に、１本の剣が握られていた。

彼の愛剣――十握剣（とおかのつるぎ）。

それは、既に覚悟を決めた筈の１０―ＢＩＴに、思わず寒気を覚えさせる程の迫力を纏って、ただそこに存在していた。

「それが……アンタの答えなんだな？」

ゆっくりと、剣を握った右手を後ろへと振りかぶるセト。

彼の視線は、足元から自分を見上げている１０―ＢＩＴの、その首の部分に止まっていた。

「……ここまで散々、俺はチャンスを与えてきた。半年前には見逃して、今回も、こっちの要求さえ飲めば、ちゃんと見逃すつもりだった」

ボンッ！！　と、セトの鍛え抜かれた右腕の筋肉が、凄まじい勢いで膨張する。

「けど、アンタはあくまで、俺に抗う道を選んだ。……馬鹿じゃねえかと思う反面、凄えとも思う。心の底から、な」

まるで、俺になる前の俺を見てるみたいだ――と、そんな訳の分からない事を言った後、セトは、

「でも、だからこそ……。凄えと思ったからこそ、キッチリここで『ケジメ』をつけておかなきゃ、な……」

と言う。

「だからここでお別れだ。あばよ英雄（ヒーロー）。大袈裟でも何でもなく、アンタの事は一生忘れねえ」

思わず、１０―ＢＩＴは固く目を瞑（つぶ）った。今の彼には、それぐらいの事しか出来なかった。

ボッ！！　と空気が爆発し、殺人の刃が、１０―ＢＩＴの首へと振るわれる。

そして、

3rd Day『本音』

――新宿、神宮球場。

12時15分。

宣言通りクー・フーリンは、その時間が訪れると共に、春沢芳野（はるさわ よしの）を魔界に送る為の術式を展開させた――少なくとも、その時の彼の様子を見ていたハルは、そう思った。

というのも、定められた時間になった途端、クー・フーリンは「時間だ」と短く呟いた後、突然、予め奇妙な紋様を描いていた地面に手の平を押し当て、ブツブツと、意味不明な言葉を発し始めたからだ。

それこそまるで、怪しい魔術を発動させる為に必要な――そう、いわゆる『呪文』を唱えているかのように。

「『我を過ぎれば憂いの都あり。我を過ぎれば永遠の苦患あり。我を過ぎれば滅亡の民あり。義は尊きわが造り主を動かし。なる威力、比類なき智慧。第一の愛、我を造れり。永遠の物のほか物として我よりさきに造られしはなし。しかして、われ永遠に立つ。汝等、ここに入るもの、一切の望みを棄てよ』」

変化はすぐに起きた。

つかの間、ピッチャーマウンドを中心に、淡い、橙色の光が溢れ出しかと思うと、次には、それがゆっくりとグラウンド全体に広が

っていく。

しかし、それはすぐに消えた。まるで、蛍光灯のスイッチを消したかのように。

もしや、失敗したのでは？　と一瞬思ったハルだったが、すぐにそうではないと分かった。

続いて起きた異変は、足元から伝わる小さな『震動』だった。

最初は気のせいかと思える程に小さいものだったが、やがてそれは、たった今からこの世は真っ二つに裂けてしまうのでは、と思う程の大きな揺れとなった。

ゴゴゴゴゴッ！！　という轟音が神宮球場を覆い尽くし、それと共に、大地が大きく縦に揺れる。

「～～～～～っ！？」

それまで1塁側のベンチに座っていたハルは、堪らず、その背もたれの部分を両手で掴んで、揺れの衝撃を必死に堪えた。

やがて――どれほどの時間が経ったのか――唐突に、揺れが収まった。

「……っ」

自分の両足がちゃんと地面にくっついている事を確認しつつ、ハルはゆっくりと目を開ける。

頭の中まで激しく揺さぶられた事で、しばらくは視界も不明瞭（ふめいりょう）だったが、やがてハルは、その視線の先に、明らかに今自分がいる場所には不似合いな『異物』が、いつの間にか現れている事に気付いた。

それは、言うなれば『門』だった。余りにも簡素な表現だが、それでも、視線の先にある『それ』を一言で表せと言われたら、ハルとしては『門』と表現するより他なかった。

更に詳しく言うなら、古風、且つ西洋風で、重圧そうな石造りの門、と言ったところか。大きさは……そのすぐ近くで佇んでいるクー・フーリンの身長を１８０とすると、恐らく3メートルかそこらではないか、とハルは思った。どういう訳か取っ手がなく、門のあちこちには、空を舞う天使や悪魔と、それらから逃げようとしている大勢の人々の姿が彫刻されていたが、それより何と言ってもハルの目を引いたのは、閉開する扉部分の上中央に彫られている、小さな石像だった。足を組んで座り、何か思案にふけっているかのように頬に手を当てているその石像は、ハルでさえ一度は見た事があるものだった――世界的にも有名なブロンズ像、オーギュスト・ロダン作の『考える人』である。

（これが……魔界への入口）

そこから放たれるただならぬ重圧（プレッシャー）に、思わず冷や汗を流してしまうハル。

と、その時だった。

突然、ハルの頭を鋭い痛みが走り抜けた。その痛さときたら、ハルが、たった今、自分の頭が大きく裂けてしまったのではと錯覚し

てしまう程だった。

（……っ！？　何……？　いっ、たい……！？）

思考をまとめるどころか、痛みに耐え兼ねて叫び声を上げる事さえ出来ない。気付けばハルは、ガクンと片膝を地面に落としていた。

「大丈夫か？」

そんな彼女のすぐ側で、心配そうに声をかける存在があった。

勿論、その正体はクー・フーリンの他にいない。

「スマン、説明するのを忘れていた」

言いながらクー・フーリンは、ハルの片腕を掴み、ゆっくりと、その場で彼女を立ち上がらせた。

「たった今、君に頭痛を与えたものの正体は、この辺り一帯の空間に、瞬間的に溢れ出た魔界の空気だ。言うまでもなく、先ほど私は、この世界と魔界とを何とか繋げる事に成功した訳だが――いくら適切な手順を踏んだとしても、やはり、元は異なる世界を無理矢理結合させた事に変わりはない。……拒絶反応、というヤツだ」

未だ続いている頭痛に顔をしかめつつも、ハルは、それはもしかしたら、冷蔵庫を開けた際に、冷えた空気が外に流れ出るようなものだろうか？　と思った。程度の違いはあれど、恐らく理屈は一緒だろう、とも。

さながら、赤一色のキャンパスに青い絵の具をぶちまけるかのよ

うに、明らかに『質』の異なる2つの世界を接触させた事で、その近辺の空間に大きな『異変』をもたらしたのだ。

「今回、私が術式を発動するにあたって、この場所を選んだのも、一重（ひとえ）にそれが理由だ。今述べた魔力の波は、悪魔である私には何の影響も及ぼさないのは勿論、君のように特殊な体質を持つ人間ならば、今のように、せいぜい頭が割れそうな程の傷みしか感じないが――しかし、信仰心の薄い並の人間となれば話は別だ。間違いなく発狂するか……下手をすれば、その場で絶命してしまう可能性もある」

自分で言ったその言葉の内容が酷く気にくわなかったのか、一度、クー・フーリンはそこで顔をしかめた後、

「……私は自分の邪魔をする者には容赦しないが、それでも――例えそれが人間であれ――『敵』でない者達を巻き込むような事はしない。だからこそ、この場所を選んだのだ。ここならば、『人払い』の魔法さえかけておけば、邪魔する者が存在せず、術式を展開する為に必要な空間を簡単に確保できるからな」

ハルは驚いて隣にいるクー・フーリンの顔を見た。彼が最後辺りに言った『人払い』とやらについてはよく分からないが、その前の内容については、おおよそ理解する事が出来たからだ。

――『敵』でない者達を巻き込むような事はしない。

この悪魔は今、確かにそう言った。

（コイツ……）

それまでのハルが、クー・フーリンに対して抱く印象から考えれば、おそらく、もっとも彼にそぐわない言葉ではあったが――しかし、だからこそハルは、それが偽りのないクー・フーリンの『本心』なのだろう、と素直に受け止める事が出来た。

（コイツは……）

先程の、頭痛のせいで膝をついたハルを僅かに気遣うような所作（しょさ）といい、

やはり――この、クー・フーリンという悪魔は、今までの連中とは、明らかに違う。

しかし、

そう思うハルの様子には気づかず、クー・フーリンは、

「さて……心の準備はいいか？」

「……っ！！」

ドクンッ！！　と、ハルの心臓が、胸の内側で大きく跳ね上がった。

無意識の内に、足が震える。

それに気付いたハルは、舌打ちすると同時に、片方の手で足を押さえ付けた。

（ハ、ハ……、ったく、なっさけねぇ……）

どうやら――ここへきて、自分はまだ、この世を去る事に『恐怖』を感じているらしい。

（……！！　バッカ野郎……何、ビビってんだよ！！　最初から、こうなるって分かってただろうが！！　今さら、怖じけづいてんじゃねえよ……！！）

しかし、そこまでの恐怖を自覚しながらも尚、ハルの頭の中で『逃げる』という選択肢が浮かぶ事はなかった。

そんな事をしたって、自分がクー・フーリンから逃げ切る事など不可能だし、万が一それが成功したとしても、その途端にクー・フーリンが「逃げるというのならばやはり、あのジュンという少年は殺しておこう」などと言い出したら本末転倒（ほんまつてんとう）もいいところだ。

そもそも、今回ハルがこうしてここにいるのは、全てが、そのジュンという少年――有里淳という少年の命を救おうとした事が、そもそもの契機（けいき）なのだから。

だからこそ、ハルは、

「ああ……いつでもいいよ」

と、明らかに強がっているのが見え見えの言葉を放ちながら――ゆっくりと、1塁側のベンチから出て行こうとしたのだ。

が、その際に彼女は、ふと、先程まで自分が座っていたベンチの隣にある、1台のシーケンサーの存在に気付いた。『アヤ』という、かつて自分に、『歌』という名の生きる希望を与えてくれた女性が、

ハルに残していったものだった。

もはや全てを失っても構いはしない、という覚悟をたった今決めたばかりのハルではあったが――流石に、コレを置いていく気にはなれなかった。

「ええと……コレとか、持っていっても大丈夫かい？」

ハルが言う。

そんな彼女の視線の先で、既に『地獄門』の正面にまで移動していたクー・フーリンは、ゆっくりと彼女の方に顔を向けると、

「……別に構わん。もっとも、魔界の空気は非常に濃度の高い魔力で形成されている為、そのような、こちらの世界の機械（からくり）は一切、正常には機能しなくなってしまうがな」

と言う。

やがてはハルも、クー・フーリンの横に並ぶ形で、『地獄門』の正面に立った。

先程までもそうだったが――改めて、こうしてすぐ近くで見ると、そこから放たれる恐ろしいまでの重圧（プレッシャー）が、ハルには、更に強く感じられた。

「……」

ハルが黙っていると、やがて、隣に立つクー・フーリンが、横目で彼女の事を伺いながら、次のように聞いた。

「まだ、自分が生まれたこの世界にいる内に、何か、言い残したいことはないか？　1度我々の世界に入ったら、恐らくもう2度と『こちら側』に戻る事は出来んぞ」

「……別に」

短く答えるハル。

心残りなんてない。

ある筈が、ない。

しかしクー・フーリンは、先のハルの返事など聞こえなかったかのように、

「もし……最後に、あのジュンという少年に会いたいと言うのならば――それほど、多くの時間はとれないが――別に構わんぞ。どうせあの少年の力では、私の行いを止める事など出来はしないしな」

思わずハルは、キッ！　とクー・フーリンを強く睨みつけると、

「……何で、そこであの子の名前が出てくるんだい？　別にアタシは、あの子に対して何も特別な感情は抱いちゃいないよ」

そう。

確かに、今、ハルがこうしてここにいるのは――先程も述べたように――有里淳の命を救おうとした事がきっかけだが、それはあくまで、一昨日、武芸館前で自分の事を助けてくれた彼に対し、ハル

が『恩』を感じていたからだ。

今回はたまたま、その対象が有里淳だったというだけで、究極的な話、それが木原篤郎や谷川柚子、高城圭介の内の誰かだったとしても、きっと、自分は同じようにその命を助けようとしていたに違いない――と、ハルは思っていた。

だから、

（アタシが……あの子の事をよく思っているだとか、そんな事はない）

ある訳が、ない。

「……」

しかし、隣にいるクー・フーリンは、未だ横目でハルの顔を見つめたままである。それはまるで、先のハルの言葉に対して、本当か？　と疑っているようにも見えた。

その視線に何とも言えない苛立ちを覚えたハルは、思わず、

「……本当だっつーの」

と、不愉快そうに口走ってしまう。

「大体、あの子とは成り行き上、ちょっと親しくなっただけなんだから――正直、あんまり親切にしてくるもんだから、少しうざったいとさえ思ってたくらいなんだよ」

――まあ、それでも、初めてあの少年の顔を見た時、どういう訳か、心臓の鼓動が少し早くなったのは確かだが。

「つうかさ、私は本当に、この世に未練とか、そんなモンは全くありゃあしないんだよ。今まで言ってなかったけど、もういっその事、自殺でもしようかなー、ってぐらいに、この世界には飽き飽きしてたぐらいだし」

――勿論、そんな事をすれば、自分があの少年の顔を見る事は、もう2度と出来なくなってしまうだろう。そう思うと、どういう訳か、何か胸にチクリと刺さるような感覚を覚えはしたが。

「……そもそも、今さら私があの子に会いに行くとか、マジでありえないだろ。どの面下げて会いに行けってんだい。あの子は、私を命懸けで助けようとしくれた。にも関わらず私は、あの子のそんな気持ちを踏みにじってまで、こうしてアンタに連れていかれる道を選んだんだ。だから、今の私にはもう、あの子とまともに顔を合わせる資格なんて、ない……」

――それはつまり、僅かながらも、これまで築き上げてきたあの少年との接点を、ここで全て断ち切るという事だ。あの変な形をしたヘッドホンも、艶のある青い髪も、女性と間違えてしまいそうな程に整った顔立ちも、まるで太陽のように眩しいあの笑顔も、それら全てを再び目にする機会を、ここで永遠に失うという事だ。まあ確かに――自分も含めて――あれほど女性の気を引く少年と2度と会えないのかと思うと、少しだけ……ほんの少しだけ、残念ではあったが。

「ハハッ……まぁ、いいや」

そして、ハルは小さく笑う。

まるで、今まで気付けなかった『何か』を、たった今悟ったかのように。

「要するに、私は、あんなヤツの事なんて――」

『い、いやあの！　ちゃんと聴いてましたよ!?　もー俺、完全にファンになっちゃった！　今度、貴女のＣＤをまとめ買いしちゃおうかなーとか思っちゃったり！』

「あんな……ヤツ……」

『Ｄ－ＶＡのボーカルも大変ですね、こんな奴らに付き纏われて。相手は選んだ方がいいですよ?』

「あん……な……」

『……必ず助けます』

「……っ！！」

そして、

ハルは、

「……ゴメン」

そう言いながら、クー・フーリンの方に顔を向けると、

「やっぱ、アンタとは一緒に行けねーわ」

と、

そう――言った。

「……何？」

突然、先程とは全く逆の事を言い始めたハルに対し、怪訝な表情をするクー・フーリン。

「だって……」

そんな彼には構わず、ハルは言葉を続ける。

「だってアタシ、あの子の事が大好きみたいだし」

きっと。

きっと――この時、春沢芳野は気付いたのだろう。

結局、自分は少したりとも『死にたい』とは思っていなかった事に。

むしろ、その逆だという事に。

有里淳に、また会いたいと思っている、という事に。

そして――もし、それが叶うのならば、

これからもずっと、あの少年の側にいたいという事に。

気付いて、しまったのだろう。

「……」

しかし、

勿論、そんなハルの意見をあっさり認める程、クー・フーリンという『悪魔』は甘くない。

「……あのジュンという少年といい、君といい、どうもこの世界の住民は、場の状況を把握する能力に著(いちじる)しく欠けているようだな」

ハアッ、と、彼は小さくため息をつくと、

「1つ、言っておこう」

ブンッ！！　と、

そんな、空気に電流が迸(ほとば)しる音と共に、クー・フーリンの右手から、雷の剣が現れた。

「私にとって――正確には、私の主であるベル・デル様にとって、君は貴重な存在だ。つまり、例えどのような間違いが起ころうとも、私がここで君を殺す事は許されない」

しかし、とクー・フーリンは言う。

「しかしこれは、逆にこう言い表す事も出来る――殺しさえしなけ：

れば、私は君を好きなように出来る、と。……この言葉の意味が分かるか？　歌姫」

ゴアッ!!　と、クー・フーリンの体を中心に、明確な狂気が、辺りへと四散する。

「……っ」

それはまるで、見えない無数の腕でハルの体を掴んでいるかのように、生きようと覚悟を改めた彼女の全身を、余すところなく拘束した。

ゆっくりと、右手に剣を持ったまま、ハルの方へと、クー・フーリンは向き直る。

それを受けて、思わず、ハルは2、3歩ほど後ろへ下がったが――残念ながら、それが限界だった。それ以上何か別の動作をする事は、クー・フーリンの重圧に縛られた彼女には不可能だった。

「足を切り落とす」

それだけを、クー・フーリンは言った。

「その直後に、私の電撃系魔法で切断面を焼いて止血する為、失血死するような事はない。故に、その程度の事なら、今の私には許される。だが――」

スッ……と、クー・フーリンは、右手に持った剣の切っ先を、ハルの足へと向けると、

「――当然、その際には、想像を絶する程の激痛が、君の身に襲い掛かるだろう。そして、すぐにこう思う筈だ。自分はなんて、馬鹿な事を言ってしまったのだろう――とな」

クー・フーリンは、ハルの目を見る。

ハルもまた、そんなクー・フーリンの視線を、真っ向から受け止める。

「だからその前に、1つだけ頼んでおこう。……大人しく、私と一緒にベル・デル様の元へ来い。そうすれば君も、あのジュンという少年も、誰も傷付きはしない」

「……」

それに対し、ハルは何も答えなかった。

ただ、挑むようにクー・フーリンへと向けている、強い意志がこもったその視線が、何よりも明確に、この時の彼女の心情を表していた。

「……なるほど。既に心は決まっている、という訳か」

言って、クー・フーリンは薄く笑う。

「いい目だ……。その心意気、賞賛（しょうさん）に値する」

それでもやはり、ハルは何も言わなかった。

言葉にするまでもなく、この時の彼女の心は、既に揺るぎないも

のへと変わっていた。

惨めであろうとも構わない。殴るなり、蹴るなり――とにかく、何でもやってやる、と。

……生きるためならば。

しかし――結局のところ、ハルがそのような行動を取る事はなかった。

なぜなら、

「――だからこそ、残念でならない。その素晴らしい表情を、たった今から、恐怖と屈辱にまみれたものへと変えねばならないのかと思うと、な」

そう言った直後のクー・フーリンの一連の動作を、ハルは、全く視界に捕らえる事が出来なかったからだ。

（……っ！？　速……過ぎる……！）

そう思った時には、既に手遅れだった。

何かが切り裂かれる音がした。

まるで一輪の花が咲いたかのように、神宮球場のグラウンドに、湯気を立てる深紅の血潮（ちしお）が飛び散った。

3rd Day『開戦』

――秋葉原。

「『雷の乱舞』ッ！！」

そんな木原篤郎（きはらあつろう）の気迫の声と共に、正面に突き出した彼の右手から、幾筋もの雷撃が轟音をたてて放たれる。

その先には、今、アツロウが最優先で倒すべき敵として認識している、イアルの信者の姿があった。

イアルの信者は、1度「チッ」と小さく舌打ちした後、

「おい」

と言って、すぐ脇にいる自分の仲魔、龍王『ペンドラゴン』の足を強く蹴る。

それに応じたペンドラゴンの動きは速かった。

ペンドラゴンは、アツロウが発動させた『雷の乱舞』と、信者との間に割って入ると、ズラリと牙が生え揃った口を大きく開き、そこから『炎の乱舞』を撃ち放ったのだ。

2つの魔法が、秋葉原の通りの中央で真っ向から衝突する。

結果、

ドンッッ！！　と、凄まじい爆発音が、その場にいる全員の鼓膜（こまく）を揺さ振った。

「――――っ！！」

ほぼ反射的に、アツロウは両腕で顔を守る。

が、それは大気を揺るがす程の爆発の威力を恐れて、という訳ではない。それ以上に彼が恐れたのは、その際に発せられる閃光に目を潰されてしまう事だった。

「ぐ、うぅっ！」

その代わりに、盾代わりにした腕に、爆発の際に飛び散った火の粉の内のいくつかを浴びながら、アツロウは考える。

（――ったく、本当なら、今頃は俺も、急いでハルさんを探してる最中だったっつーのに、まさか、こんな事になるなんてな……！　でも……）

２つの魔法が衝突した場所は、今や巨大な炎の渦が立ち上っており、まるで道を塞ぐように、かなり広い範囲を支配していた。

（……でも、むしろ、コレはチャンスだ！）

キッ！！　と、突如上昇し始めた熱気にジリジリと肌を焼かれながらも、イアルの信者がいるであろう方向に鋭い眼差しを向けるアツロウ。

（俺は未だ、さっきまでコイツが言ってた事の半分も理解できちゃいないが――つーか、したくもないが――それでも、コイツがジュンを利用して、何か良くない事を企んでるって事ぐらいは分かる！）

刹那、アツロウの視線の先で燃え盛っている炎の壁が、一瞬、陽炎のようにユラリと動いた。

次には、アツロウがその現象に疑問を抱くよりも遥かに早く、そこからイアルの信者の仲魔である、鬼神『ナラギリ』が炎の壁を破り、凄まじい勢いでアツロウの元へと向かって来た。

しかし、ほんの数メートル先まで敵悪魔が迫ってきているという状況にも関わらず、この時のアツロウの表情には、全く焦りの色がなかった。

まるで、この程度の事は既に予想していた、とでも言うかのように。

（……だったら、俺がコイツと戦うような展開になったのは、むしろ運がいいと見るべき！！　今、ここで俺がコイツを無力化しておけば、これから、俺達がこの封鎖の原因を解除する際のリスクが、大きく減少する！！）

ボッ！！　という炸裂音と共に、アツロウの顔面へ向けて、ナラギリが大きく振りかぶった右拳から、『捨身の一撃』が放たれる。

「――――っ！！」

咄嗟に首を動かし、皮一枚のところでそれをかわすアツロウ。

ニット帽からはみ出した彼の黒髪の何本かが焼かれ、耳元を通り過ぎる風切り音が、ナラギリの拳の威力の程を、正確にアツロウへと伝える。

「く、ぅ……！　スパルナ！！」

そんなアツロウの呼び掛けに、彼の仲魔である霊鳥『スパルナ』は素早く反応した。

ナラギリが次の攻撃へと移行する前に、その両足の爪でアツロウの両肩を優しく掴むと、そのまま空高く舞い上がる。

間一髪、ナラギリの2度目の『捨身の一撃』が、アツロウの足のすぐ下を、凄まじい速さで通り過ぎた。

冷や汗を流しつつも、アツロウは再び、先程まで展開させていた思考を、頭の中で巡らせ始める。

（コイツを無力化させる為に、俺が出来る事は2つ！！）

改めて、上空から、地上にいるイアルの信者を睨みつけるアツロウ。

（1つは、コイツを気絶させた上で、その後ＣＯＭＰを破壊する事！！　……でも、コレじゃ駄目だ！　そんな事をしたところで、コイツがジュンの事を諦めるとは思えないし、何より、何かの偶然で、コイツがまた別の改造ＣＯＭＰを手に入れちまう事も有り得る！　いや……むしろ、ここでの敗北を機に、きっとコイツも慎重になるだろうから、かえってジュンに対する危険が大きくなる可能性の方が高い！！）

「食らっとけ！！」

空中での、決して慣れる事のない不安定な体勢にも関わらず、自分の真下にいるナラギリへ向けて、今回2度目の『雷の乱舞』を、アツロウは放つ。

次には、ナラギリがそれを回避する為に、大きく後ろへと飛び退いた事で空いたその空間へと、アツロウは迷わず飛び降り、着地した。

（そして、2つ目は……やっぱり、何らかの方法でコイツを気絶させた後、コイツの身柄をイヅナさんか……或いはバリケード近くにいる自衛隊員に引き渡すこと！！　事情を話した上でコイツが持ってたＣＯＭＰを見せれば、連中もきっと、コイツを危険人物とみなして、その場で拘束する筈だ！！　そうすりゃ、例えその後コイツが目を覚ましても、預けた人達が見張っててくれるだろうから、そうなりゃもう、コイツは危険でも何でもない！！）

「トラロック！！」

叫ぶと同時に、先のナラギリと同じように、アツロウもまた、大きく後ろへと跳んだ。

すると、ちょうど彼と位置を入れ替えるかのように、先程までアツロウがいた場所にトラロックが踊り出る。

抜群のコンビネーションを発揮すると同時に、間髪入れず、トラロックの右の手の平から『炎の乱舞』が放たれた。

そこにある酸素をあっという間に燃やし尽くしながら、全てを無に還さんとする炎の嵐が、真っ直ぐイアルの信者へと向かって行く。

しかし、イアルの信者は動じない。

「下らん」

落ち着き払ったそんな声と同時に、パチンと、彼が軽く指を鳴らすと、それに呼応するかのように、イアルの信者の周りで『マハザン』が発動した。

さながら鎧のように、イアルの信者の周りを凄まじい勢いで突風が吹き荒れ、たちまちトラロックの『炎の乱舞』を無力化していく。

（何より……）

しかし、その様な一進一退の攻防を繰り広げつつも、未だアツロウは先程までと同じ事を考えていた。

体は熱く、頭はクールに――ある意味で、命懸けの戦いにおける基本中の基本であるそれを、この3日間の内に、アツロウは会得していたのだ。

（……何より、ここで俺が、コイツの身柄をイヅナさんか自衛隊員のどちらかに預ける事に成功すれば、もしかしたら連中が、『自分達に協力してくれた善良な一般市民』として、俺の顔を覚えててくれるかもしれない！！　すうすりゃいつか、いざ連中と何かしらの交渉をするような展開になった場合、そういった印象がきっと役に立つ筈だ！！　……どう考えても、こっちの方法の方が、あらゆる観点から見ても1番効率がいい！！）

が、

しかし、

「……」

と、急にアツロウは、その場でピタリと動きを止めた。

「……？」

そんな彼の異変を、何か考えがあっての事だとでも解釈したのか、イアルの信者とその仲魔達は、すぐにはアツロウに手を出そうとはしなかった。

やがて、

（クソッ……馬鹿か俺は！！　例えそこまでしたところで、コイツの危険性がゼロになるとは限らないだろうが！！）

ギリギリと、自分自身に酷く腹をたてた様子で、強く歯を食いしばるアツロウ。

（仮にコイツを気絶させた後にＣＯＭＰを取り上げて、そのままイヅナさん達にコイツを預けたとしても……。それはつまり、今度はイヅナさんか自衛隊員のどっちかが、コイツの手にかかる危険が生まれるって事じゃねえか！！　いくら理不尽であるとはいえ、それでもあの人達が、これまでの３日間、悪魔が東京の外に出ていくのを防いでくれていたのは確かなんだぞ！　そんな人達に、こんな危険人物を預けようだなんて……どうかしちまってんのか俺は！！）

瞬間、アツロウの頭の中で、ある残忍な考えが浮かび上がった。

いや、厳密に言えば、その考え自体は、戦闘を開始した時から常に、アツロウの頭にあった。しかし、『それ』を実行に移そうなどとは、アツロウは少したりとも思っていなかった。

少なくとも――今、この時までは。

しかし、

（けど……そうでもしなけりゃ、いつかきっと、コイツのせいで、親友（ジュン）の身が危険にさらされちまう！！）

アツロウは一旦、ギュッとその場で強く目を閉じた後、すぐにまた、その両眼を大きく見開く。

（やるしか……ねぇ！！）

この時のアツロウの瞳には、それまでの彼からは想像もつかない程に暗く――それでいて危険な『何か』が宿っていた。

（ＣＯＭＰを奪って破壊した後、その上で、ここでコイツを始末する！！　……それが１番確実だろうが！！）

迷いがない、と言えば嘘になる。

突然の『東京封鎖』に巻き込まれてからこれまでの３日間、アツロウは、その時に使役していた仲魔と共に、数え切れないほど多くの『敵』悪魔達を殺してきたが――しかし流石に、自分と同じ『人

間』を手にかけてきた事はなかった。

それでも、

（それ位じゃなきゃ……。それ位の事も出来なかったら、俺がアイツの『仲間』である意味がない！！　ましてや、これからも『親友』として肩を並べるなんて、もっての他だ！！）

――そう思った木原篤郎の判断は速かった。

「うっ……ォォォおおおおおおおおおおおあああああああああああ！！」

そして、『それ』を実行に移すのも。

右の拳を、万力のように強く握り締め、アツロウは突貫（とっかん）する。

その先に広がるのは、修羅（しゅら）の道。

しかし、どこにでもいる筈の１７歳の少年は、強い意志をもってその道を進む。

視線の先にいる、自分の親友を脅（おびや）かそうとしている、１人の敵を『殺す』為に。

◆

◆

――池袋、東洋アンズ。

「……？」

おかしい、と１０―ＢＩＴは思った。

いつまでも経っても、予想した筈の痛みがやってこない、と。

もしや、自分は既に殺された後なのでは？　と思った１０―ＢＩＴだったが、どうやら、そういう訳でもなさそうだった。

というのも――彼がその場でゆっくりと目を開ければ、そこには、１０―ＢＩＴの首の皮に触れるか触れないかというギリギリのところで、振るった剣の刃を止めているセトの姿があったからだ。

止まっていた。

まるで、ビデオを一時停止させたかのように、全ての時間の流れが――止まっていた。

（……？　一体、何が……？）

訝（いぶか）しむ１０―ＢＩＴではあったが、しかしセトの方はと言うと、そんな彼の様子など全く意識していないようだった。

その２つの銀色の瞳だけを未だ１０―ＢＩＴの首元に向けたまま、その『注意』の方は、既に全く別のものへと向けられていた。

何かが起こったのだ。

セト程の人物でさえ――かつて、八十稲羽という街を謎の猟奇連続殺人事件の恐怖から救った、瀬多総司ほどの人物でさえ注意を向けざるを得ない程の『何か』が。

「……くそったれが」

ポツリと、セトは呟く。

「え……？」

「くそったれが！！」

突然だった。

セトは、一旦１０―ＢＩＴの首筋から剣を離すと、次には、恐るべき速さでその場から大きく後ろへと跳躍していた。余りの速度に、１０―ＢＩＴはその残像さえ肉眼で捉える事が出来なかった。

予想外の展開に、１０―ＢＩＴは咄嗟に体を動かす事も忘れ、その後も、しばらくは地面に座り込んでいた。

あともう少しのところで命を奪われていたに違いないという状況の中、何の前触れもなく訪れた千載一遇のチャンス。この隙に逃げようとしないなんて、どうかしている。

が、それが正解だった。

ボアッッ！！　と、

そんな音と共に、１０―ＢＩＴのすぐ目の前を、巨大な炎の塊が通り過ぎたからだ。

それこそ、先ほど下手に動いていたら、間違いなく、１０―ＢＩＴの体に直撃していたに違いないと思うぐらいの至近距離を、だ。

とは言え、元よりその炎弾は、１０―ＢＩＴを狙ったものではなかった。

通り過ぎたのは、１０―ＢＩＴの目の前。

つまりは――つい先程まで、セトが立っていた場所である。

「……やれやれだぜ」

１０―ＢＩＴよりおよそ２０メートルほど離れた地点で、セトはウンザリしたように呟く。

その視線は、東洋アンズのすぐ脇にある高架の下にできた、大きな日陰へと向いていた。

否、正確には、その影の中にいる――いつの間にか現れた１人の男へと、だ。

ハアッ、と、セトは大きくため息をついた後、

「参ったなぁオイ……。もしかしてコレが、クー・フーリンの野郎が言ってた『物語の矛盾』ってヤツなのか？　もしそうだってんな

ら、確かに、コレは明らかに『矛盾』してやがる。……流石の俺も、この展開は予想外だっつーの」

やがて、ゆっくりと――非常にゆっくりとした足取りで、高架の下にある影の中から、その男は……『彼』は、姿を現した。

「……仮に、今回の俺の『宿願』を邪魔しに来るペルソナ使いがいるとしたら、それはきっと、アイギス先輩か真田先輩かのどっちかだと思ってたんですが……。まさか、アンタ程の『大物』が出て来るなんてね」

ニイッ、と。

明らかに予想外の事態に遭遇したにも関わらず――しかしセトは、むしろそれを心の底から喜んでいるかのように、笑う。

それと同時。

「……」

ようやく――ここへきて『彼』は、高架の影の中から、その姿を現した。

『彼』は、既にマスクを外していた。

最早、コソコソと顔を隠している必要がなくなったからだ。

赤い目。

赤い髪。

セトと同等か、或いはそれ以上の長身。

紛れもなく『敵』として現れた『彼』を前にして、セトは満足そうに頷く。

右手に持つ『十握剣（とおかのつるぎ）』を、改めて強く握り直す。

「……アンタの出る幕ですか？　達哉先輩（・・・・）」

かつて『この世界』と、そして、それとはまた別の『向こうの世界』という2つの世界で、その『太陽神』の力を振るった、日本でも屈指の実力を持つペルソナ使い。

周防達哉（すおうたつや）が。

ただ鮮烈（せんれつ）に、そこに君臨していた。

◆

◆

――新宿、神宮球場。

「……ッ」

終わった、とハルは思った。

そう思うだけで精一杯だった。最後の最期まで抵抗しようと決めたというのに、だ。

それ程の速さで、クー・フーリンの剣は自分の足に向かって振るわれた。

どういう訳か、この時の彼女はまだ、痛みを全く感じていなかったが――それも間もなく終わりだ、と彼女は思っていた。後ほんの一瞬と経たない内に、自分の体は、想像を絶する程の激痛にさらされる事になるだろう、と。

先ほど聞こえた、何かを切断した際の乾いた音が、その残酷な事実を彼女に教えていた。

いずれ訪れるであろうその瞬間を、『痛み』という、余りにも原始的な『恐怖』の到来を、ただ固く瞼(まぶた)を閉じて、ハルは待っていた。

しかし、幸運の女神は、そう簡単に彼女が死ぬ事を許してはいなかった。

ハルの磨き抜かれた真珠(しんじゅ)のように美しい肌には、傷の1つさえついていなかった。

（え……？）

何が起きたのか、ハルには理解出来なかった。

理解するよりも前に、声が聞こえた。

今、彼女がいる場所よりも大分離れた位置から、クー・フーリンの声が。

「……妙だな」

と、彼は言う。

「そこにいる歌姫をここに連れてくるまでの間、私は常に、自分達の後を追う者がいないか気を配っていた。その結果として、私はそんな者などいない事を確信していた」

だからこそ、とクー・フーリンは続ける。

「だからこそ、君が我々の追跡者となってここまで来た訳ではない、という事は分かる。そこまではいい」

やがて――雷の剣を振り切ったままの状態で静止していたクー・フーリンは、ゆっくりと顔を動かし、その青い目を、ハルがいる方へと向ける。

否、正確には、その視線はハルの顔に向けられたものではなかった。

この時、彼が見ていたもの。

それは、

「……だが、そこから先が分からない。一体君はどうやって、我々がここにいるという答えを導き出したのだ？　いや、仮にその問題を無視したとしても、分からない事はまだある。私は予め、何人（なんぴと）たりとも邪魔が入らないように、この場所一帯に『人払い』の術式を施しておいた。なのに、何故……」

カッ！　と。ついに、そこにある事実に理解が追いつかなくなったかのように、クー・フーリンは大きく目を見開くと、

「――何故、貴様が今、ここに現れる!?」

ようやく。

ようやく――ハルは、今の自分が、突然この場に現れた『誰か』に抱き抱えられた状態である事に気づいた。

そこには、１人の少年がいた。

その少年の髪は、青かった。

その少年の瞳も、青かった。

そして、その頭には、猫の耳を模した、奇妙な形のヘッドホンがつけられていた。

ハルは、知っている。

その少年の名前を、知っている。

「あ……」

自分より3つ以上も年下の少年の前だと言うのに、思わず、ハルの目から、ジワッと涙が溢れ出た。

それがゆっくりと頬を伝う感覚さえ、今のハルには気にならなかった。

ここにいる少年は、最後まで諦めず、自分を助けにきてくれた。

その単純な事実が、ハルには嬉しくて仕方なかった。

しかし――その少年の目は、ハルには向いていなかった。

明確な怒りを帯びたその視線は、ただ静かに、ハル達の方を見つめるクー・フーリンの顔へと向けられていた。

「……知らねぇよ」

見れば、少年の額からは、大量の血が流れ出ていた。

恐らくは、先ほどハルを助けた際に、僅かにクー・フーリンの斬撃を浴びてしまったのだろう。

しかし、それさえも気にならない様子で、少年は言う。

「……まぁ、実際には、例えどんなに離れ離れになったとしても、俺にはこの人の居場所が何となく分かるっつー、確かなんだか不確かなんだか分からねえ理由があるにはあるけど……とにかく知らねぇよ。何せ今の俺は、そんな事も考えられないぐらいに、もう自分でもどうしようないぐらいにブチ切れてんだから、よ――」

ゆっくりと――その少年は、ハルの体を地面へと下ろした。

次には、まるで彼女を守るかのように、1歩、前へと進み出る。

「なぁ……お前……今、何しようとしてた……？」

ワナワナと震えるその言葉から、その少年が現在抱いている尋常ではない怒りが溢れ出し、辺りへと充満していく。

そして、

その少年は、

彼は、

有里淳（ありさとじゅん）は、

自分の心の奥底から湧き上がってくる激情（げきじょう）には一切逆らわず、ありったけの力を込めて、こう叫んだ。

「――人が惚れた女に、何しようとしてたのかって聞いてんだよ！！　このくそったれの悪魔野郎がぁっっ！！」

◆

◆

奪う者。

救う者。

襲う者。

守る者。

進む者。

阻む者。

全員の思惑が交錯し、今、ここに１つの物語が紡がれる。

その先に待つのは、破滅か、救済か。

生きるとは、戦い続ける事。

今こそ、反撃の時。

３ｒｄ　Ｄａｙ『東洋アンズ前のバトル（２）』

――池袋、東洋アンズ前。

どれぐらいの時間が経っただろうか。

急激な変化を迎えた東洋アンズ前のその光景を、地面にはいつくばるようにしながら、黒髪に、薄い紫色のスーツを着た男――１０―ＢＩＴは見ていた。

彼の視線の先には、２人の男がいた。

やがて、２人の内の片方がゆっくりと口を開き、その場を支配しようとしていた重い沈黙を破る。

「その格好……」

と、片手で霊剣『十握剣（とおかのつるぎ）』を握りながら、銀髪長身のその男――瀬多総司（せたそうじ）は言う。

この時の彼の視線は、およそ３０メートル離れた場所にいる、１人の赤髪の男へと向けられていた。

「……昔、まだ俺らがＳＴＦにいた頃の装備ですか。……懐かしいですね。なるほど、それを見ただけでも、今回、貴方がどういう手を使って、この封鎖に紛れ込むことに成功したのか――おおよその見当がついてきましたよ」

「……」

赤髪の男は答えない。

総司の身長は１９５センチと、日本人にしてはかなり高い方だが、しかし、赤髪の男もまた、総司に負けず劣らず、相当に身長が高かった。

彼と同等か――或いはそれ以上。そこに元々身に纏っている威圧感も相まって、通常よりも更に大きく見える。

が、それは総司にしても同じ事だ。彼等がいる東洋アンズ前という場所は決して狭い場所ではないが、それでも、２人がただそこにいるというだけで、２体の巨獣が、一分の隙間もなくその場を占領しているかのような錯覚を、離れた場所からその光景を見ている１０―ＢＩＴは覚えた。

「にしても……貴方が、こんな民間人の肩を持つなんてね。まさか貴方も、『先輩』が考案した『あの兵器』の情報を狙ってるクチですか？」

総司が言う。

それでも、赤髪の男――周防達哉（すおうたつや）は、しばらくの間は黙ったままだったが、やがて、ゆっくりとその口を動かし始めた。

「いや……」

達哉は、その場で２、３度ほど首を横に振ると、

「今回、俺がお前に会いに来たのは、いくつかお前に聞いておきたい事があったからだ。……その為にこの東京内を走り回っている際に、偶然、正気を失った暴漢（ぼうかん）が、罪のない民間人を今にも殺そうしている光景（シーン）に遭遇したから、咄嗟に助けた――と、ただそれだけの話だ」

「あー、はい、はい、ソウデスカ」

相変わらずの英雄体質（ヒーロー）ですね、と言いながら、呆れたようにお手上げのポーズをとる総司。

「ま……そこにいる兄ちゃんの事を『罪なき民間人』、と一概に決め付けるのはどうかと思いますけどね」

クイッ、と顎で１０―ＢＩＴのいる方を指し示す総司。

それに対し、

「……いずれにしても、力がある者が、力のない者を一方的に痛みつけていた事に変わりはないだろう」

と、達哉は言う。

表情こそは極めて冷静さを保っているかのようなそれであるものの――しかし、時折額に浮かぶ眉間のしわの深さが、彼の心の奥底から間断なく沸き上がってくる激情を、如実（にょじつ）に表していた。

「ま、そうかもしれませんが」

ポリポリと頭をかきながら、総司が言う。今の彼はまるで、悪戯

が見つかってしまった中学生のようだった。

「けど、まあ――要するに、何か詳しい事情を知って、俺のしてる事に横槍を入れてきた、って訳じゃないんですね？　だったら悪いんですけど、これ以上はもう邪魔しないでくれますか？　別に俺にしたって、伊達や酔狂でそこの兄ちゃんを『処理』しようとしてた訳じゃないんですよ」

つとめて事務的な口調で紡がれる総司の言葉を受けて、彼よりも離れた場所で地面にはいつくばっている１０―ＢＩＴは、ビクッ！　と、怯えたように体を震わせた。

「……」

一方、先の総司の台詞の『処理』という辺りのくだりで、ビキッ、と達哉の額に１本の青筋が浮かび上がったが、それでも、彼は極めて冷静な口調で、

「一体、どういう事情があって、君がそういう風になってしまったかは知らないが――そんな事を、俺が黙って見過ごすと思うか？」

と言った。

それを受けて、ウンザリしたような表情になる総司。

「勘弁して下さいよ……。そこの兄ちゃんの首をここでちゃんと刎ねておかないと、この俺、瀬多総司は、尊敬する『先輩』に対して顔が立たないんですよ。マジでお願いですから、どうか、邪魔ァしないでくれますかねぇ……？」

ズッ……！　と。

そんな総司の言葉と共に――まるで、漏れ出た重油が大海を浸蝕していくかのように、彼の体を中心に、尋常ではない重圧（プレッシャー）が、東洋アンズ前の広場を覆い尽くしていく。

見れば、彼の額にも、幾つかの血管が浮き上がっているではないか。

どうやら、今にも爆発してしまいそうな怒りを後一歩のところで必死に抑え込んでいたのは、何も達哉だけではなかったらしい。

「……」

並の人間ならば即座に気を失ってしまうであろう総司の圧力を、しかし達哉は真っ向から受け止める。

勿論、達哉とて、ただ黙って総司の『威嚇（いかく）』を受け止めている訳ではない――彼もまた、先程からずっと、総司に対して無言の圧力を絶え間無くかけ続けていた。

そういう意味では、むしろ現在のこの状況は、そんな達哉の『威嚇』に対して、とうとう痺（しび）れを切らした総司が、負けじと『威嚇』を返した事によって作り出されたもの、とも言える。

まるで、同じ檻（おり）に閉じ込められた2体の獣が睨み合っているかのように、2人の間を、ピリピリとした緊張感が支配していく。

「あーあ……すっかり戦（や）る気満々な顔しちゃって……」

ややあって、総司が言う。

しかし、その言葉とは裏腹に、彼の顔に浮かぶのは、呆れではなく、笑みだった。

この、今にも心臓を握り潰されてしまいそうな程に重苦しい状況を、心の底から楽しんでいるかのような――そんな表情。

「……本気ですか？　達哉先輩」

クイッ、と首を傾げる総司。

「いくら、『向こう側』とは別の過程でペルソナ使いに目覚めたとはいえ、『向こう側』の貴方ならともかく、『こちら側』の貴方じゃ、今の俺に勝つ事は出来ませんよ」

「……？　『向こう側』？」

「ん？　あ、ああ、いや、何でもありません。気にしないでください」

不可解そうに眉をひそめる達哉に対し、若干慌てた様子を見せる総司。

辺りに充満していた緊張感が、僅かに緩む。

しかし、それはほんの一瞬。

再び総司が口を開いた時には、２人の間にたちこめる空気もまた、まともに呼吸をする事さえ難しいそれへと戻っていた。

「まぁまぁ、少し落ち着きましょうよ、達哉さん。ね？　見てくれこそクールなままですが、今すぐぶっ殺してやるってオーラがこっちまでビシバシ伝わってきてますよ。勘弁してくれませんかね。そんな鋭い視線にいつまでも見つめられたら、思わず胸やけしちゃうじゃないですけか。俺には既に妻もいれば、来年になればもう高校生になる可愛い娘もいるんですけど？　まぁ、そういう障害があった方がかえって燃え上がるって人もいるんでしょうが、相手が貴方となれば、物理的な意味でも燃やされる危険もあるから、中々どうして、難易度が高いですよね」

勿論、そんな総司の冗談（と、信じたい）に乗っていく周防達哉ではない。

「念のため、聞いておく」

片目を閉じ、もう片方の目で総司の顔を睨みつつ、離れた場所にいる１０―ＢＩＴを親指で示しながら、達哉が言う。

「さっきも言ったように、詳しい事情は知らないが――あそこにいる男の命を、何とかして見逃す、という選択肢はないのか？　どうも、俺の目から見た彼は、わざわざお前が手にかける程の悪人には見えないんだが」

「……やれやれだぜ」

無意識の内にいつもの口癖が出たとかそういう事ではなく、心からそう思っている様子で、総司は何度か首を横に振った後、

「……しっかりして下さいよ、達哉さん。俺達ペルソナ使いにとっ

て、人間を外見で判断するのは愚の骨頂でしかないってのは言うまでもない事実でしょう？　それに、悪人じゃなかったら殺す必要はない、っていうその甘々な理論も頂けません。余りにも甘過ぎて――反吐が出る」

瞬間、総司の目に、言葉に言い表せないような暗い光が宿り、それがまっすぐ、達哉の顔へと向けられる。

「……答えはとっくに出てるでしょ？　俺は、俺のやるべき事をやるだけです。確か、今回この台詞を言うのは、これでもう3度目だと思いますが――お願いですから、邪魔しないでくれますかね。ただでさえ、こっちは今、1人の勇敢な民間人を手にかけなきゃいけない事で、気分最悪だっていうのに、この上、かつての職場の先輩まで土に還したりしちゃったら、罪悪感の余り、当分は眠れない日々が続いちまうじゃないですか」

「……」

しばらくの間、達哉は、まるで今の総司の言葉をじっくりと吟味するかのように押し黙ったままだったが、やがて、

「……1つ、いいか」

と、言う。

そして、

彼は、

まるで、裁判官が罪人に判決を言い渡すかのように――ハッキリ

と、告げる。

「年下のクセにいちいち年長者に逆らってんじゃねぇよ、クソガキ」

それが、合図。

ドッ！！　という爆音が、東洋アンズ前に響き渡った。

筆舌に尽くし難い程の衝撃波の嵐が、音がした場所を中心に発生し、その付近にある幾つもの瓦礫が、まるで強風に当てられた紙屑（かみくず）のように、遥か彼方（かなた）へと吹き飛ばされる。

「……ッッ！！」

先程の音の正体。

それは、達哉の言葉を引き金に、完全に意識を戦闘モードへと移行させた総司が、下手をすれば音速さえも凌駕（りょうが）しかねない程のスピードで、達哉の元へと突貫（とっかん）した際に発せられた音だった。

その余りの脚力に、先程まで総司が立っていた部分のコンクリートの地面が、まるで小規模な爆発を起こしたかのように、粉々に吹き飛ばされていた。

総司が取った行動はシンプルだった。

右手に持つ『十握剣（とおかのつるぎ）』を岩の様に固く握り締め、その切っ先を、真っ直ぐ達哉の顔面へと突き出す。

瀬多総司と、周防達哉。

超人同士の戦いの幕開けには申し分ない、実に強力な1撃を――しかし達哉は、眉1つ動かさないまま、真っ向から受け止めた。

どこからともなく取り出した、身の丈程もある大剣によって。

「……っ！？」

突然現れた達哉の剣に対して、総司が何らかのコメントをするよりも遥かに早く、互いの刃が衝突する。

刹那、

――――ッッッッ！！！！　と、音なき爆音が、辺りへと鳴り響いた。

「……ッ、その剣は……」

至近距離における鍔（つば）ぜり合いの中、総司がポツリと呟く。

やがて、総司は一旦、その場から大きく後ろへと跳躍し、達哉から距離を開けた。

そして改めて、達哉が取り出したその剣を見る。

「流石の俺も、丸腰でお前の相手をしようなんて思っちゃいない」

そう言って達哉は、わざと総司に見せ付けるように、自らの顔の前で、手に持った剣の刃を小さく左右に振る。

その剣は、見るからに異様だった。単に、総司の十握剣と同じぐらいの大きさを誇っているから、という訳ではない。

というのも、その剣の刀身で、メラメラと、灼熱の炎が絶え間なく燃え上がっているからだ。まるで、その炎自体が剣である、と主張しているかのように。

「『レーヴァテイン』、ですか」

その名は『ラグナロク』という、古い北欧の伝承にて登場する。かつて、黒き炎の精霊スルトが、世界に存在するありとあらゆる存在を焼き尽くす際に用いたとされる、伝説の炎剣だ。

「なるほど、コイツはちょっと厄介そうですね……」

実際には余りそう思っていなさそうな様子で、総司が言う。

達哉が持つ霊装（れいそう）に目をやるこの時の彼は、警戒心よりも、むしろ相対している敵が、予想していたよりも強力だという事に対する喜びの方が勝っているように見えた。

ギュッ……と、総司は改めて、手の中にある十握剣を握り直す。

こちらもまた、達哉のレーヴァテインに負けず劣らず、由緒正し

い歴史を持つ霊剣だ――別名『天之尾羽張剣（あめのおはばり）』とも呼ばれ、大昔の日本に存在した男神イザナギが、『神産み』においてカグツチという火の神を斬る際に用いた剣であり、また、同じくイザナギが、黄泉の国においてイザナミに対し、後ろ手に振って彼女から逃れる為に使用した剣とも言われている。

『レーヴァテイン』と『十握剣』――それぞれに纏（まつ）わる伝承に違いはあれど、それでも、どちらの剣にしたって、とても生身の人間が使用して無事に済むような代物ではない、という点では同じだ。

武器とは、優秀であれば優秀であるほど、時として、使用者に牙を向く可能性も大きくなるからだ――そもそもどちらもが、本来は人の理（ことわり）を超えた『神』という存在が使用する為に作られた武器なのだから、当然と言えば当然だが。

しかし、この東洋アンズにて睨み合う2人の戦士は、それをいとも簡単に制御し、操る。

『神』とまではいかなくとも、どちらもが、人類のみならず、ペルソナ使いという『異常者』達の中ですら、更に抜きん出た存在。

この2人に扱い切れないような武器など――それこそ、今は亡き有里湊（ありさとみなと）が用いていた、『聖剣ルシファー』ぐらいのものだ。

「行くぞ」

その言葉と同時に、今度は達哉の方から総司の元へと突っ込んでいき、同時に、手に持った大剣レーヴァテインを、まるでテニスのラケットのように軽々と振るう。

と、

ここで、そのレーヴァテインが持つある『能力』が発動した。

ボオッ！！　と、一瞬、その刃を纏っていた炎が膨張したかと思うと、次には、その炎がまるで蛇のように大きく宙へと伸び上がり、そのまま、総司の方へと突っ込んでいったのだ。

「チッ！」

実に面白くなさそうな様子で、総司が舌打ちしたのも無理はない。

これが、ちゃんとした『物質』として存在する、剣の刃による攻撃となれば、ただ単純に、こちらも手に持った剣で防御すれば済むが、『炎』といった不定形な攻撃が相手となれば話は別だ。

よって、真っ向から攻撃を受け止める、という対処法を取る訳にはいかない。

総司は地面の上をスライドするかのように、鮮やかな足運びで横にサイドステップし、その炎をかわす。

狙いを外した炎の波は、そのまま地面に衝突し、消えた。

（……どうやら、何かしらの追尾機能がある、って訳でもないみたいだな）

となれば、達哉が持つレーヴァテインは、剣というよりはむしろ、かなりのリーチを誇る炎の鞭と認識した方が懸命かもしれない――と、総司は思った。

勿論、総司とて、ただ黙って相手の攻撃を許すような性格（タマ）ではない。

達哉が次の一手を繰り出す前に、素早く大股で彼の懐へと踏み込み、無防備な胴目掛けて必殺の1撃を繰り出す。

「――――っ！」

間一髪。

無理矢理上体を後ろへと引っ張る事で、どんな物さえ一刀両断しかねない一振りを、達哉は何とかかわす。

そして、

「ふっ！！」

攻撃を終えた直後の総司の一瞬の隙を突く形で、達哉もまた、レーヴァテインを横薙（よこな）ぎに振るった。

「――――っと！」

慌てて振った剣を手元に戻し、その刃を盾にする事で――先の達哉と同じく――間一髪のところで、それを防ぐ総司。

「……ったく、やれやれだぜ！！　貴方ってば相変わらず、クールな外見とは裏腹に、意外と喧嘩っ早いですよね……っと！！」

軽口を叩きつつも、しかし総司は、少したりとも攻撃の手を緩め

ない。

瞬きするだけの隙さえあれば、その度に、一瞬で相手の命を刈り取るであろう1撃を繰り出していく。

「……！！」

対する達哉は、元々が、あまり無駄口を叩くのを好まない性格であるが故に、先の総司の言葉にいちいち反応を示したりしなかったが、その代わりとばかりに、レーヴァテインを振るうと同時に、そこから立ち上る灼熱の炎の鞭を、容赦なく総司の体に見舞わせようとする。

ドガガガギギガッギギギ！！　と、互いの刃が複雑に絡み合い、その度に、火花が爆発する。

2人の愚者（ワイルド）による、常軌を逸した剣技の応酬。

どちらも、未だ相手にクリーンヒットを与えるには至っていないが――しかし、1撃1撃が、身の毛もよだつ程の威力を誇っていた。

「……なるほど、とりあえず、久しぶりにかわいい『後輩』の顔を見に来た、って訳じゃない事ぐらいは分かりましたよ」

目前まで迫って来たレーヴァテインの刃を、首を捻って回避しながら、総司が言う。

それに対して、

「……あいにくと、俺は今まで1度たりとも、お前の事を『かわい

い』と思った事はない」

と、心臓目掛けて突き出された十握剣の切っ先をレーヴァテインの刀身で受けながら、達哉は応じる。

ここまで2人は、互いに剣を振るうのに丁度いい中距離の位置から、殆ど足を動かさずに攻守を入れ替え続けている――どころか、ペルソナの1体さえも出さないでいた。

どちらもが、普段はこういった武器でのやりとりよりも、そこにペルソナのスキルを交えた高度な魔術戦の方を得意としている筈にも関わらず、だ。

先ずは力勝負。

要は、そういう事。

これが、まだペルソナの力に目覚めたばかりの未熟者（ビギナー）同士の戦いならばともかく、総司も達哉も、ペルソナの存在を初めて知った時から、既にかなりの時が経過しており――当然、その間には、シャドウや悪魔といった人外の存在とは勿論、同じペルソナ使いとの戦いも何度か経験している。

だからこそ、2人には分かる。

こういった『真剣勝負』においては、足を使いながらの魔法の掛け合いといった『小細工』よりも、文字通りの意味での『力ずく』で主導権を握った方が、その後の戦いを有利に進められる、という事を。

永遠に続くかと思われた断続的な金属音は、いつの間にか消えていた。

代わりに、

ボッボボボボッボボボボッッ！！　という、互いの剣技が空を切る音が目立つようになる。

通常、剣や槍などといった武器の攻撃を、完全に『回避』する事は、極めて難しい――言うまでもなく、素手では届かない所まで攻撃が伸びてくるからだ。

その分、次の攻撃に素早く転じられないというデメリットもあるが、それでも、相手からすれば、届く筈がないと思った位置から攻撃を浴びせられるというのは、それを補って余りある程の効果があるものだ。

しかし、

瀬多総司と周防達哉という2人の『怪物』は、そんな常識さえも真っ向から否定してしまう。

（信じられないな……！　これだけの速さで、これだけの長い時間攻撃を続けているというのに、全く当たる気がしない！！）

と、達哉が驚愕の表情を浮かべれば、

（だークソ！！　やれやれだぜ！　この人、下手したら陽介（ようすけ）並にスピードがあるんじゃねぇか！？　一体、いつになったらこっちの攻撃を貰ってくれんだよ！！）

と、心の中で総司が憤慨（ふんがい）する。

しばしの間、刹那ほどの油断も許されない、紙一重の攻防が続く。

オープニングヒットを取るのは、果たして――

やがて、

ついに、

「――――ッッ！！」

と、２人の内の片方が、息を飲んだ。

理由は明白。

ザシュッ！　と、

片方が振るう刃が、ついに、相手の体を切り裂いたからだ。

とはいえ、それは決して致命傷になるような深い傷ではなく、せいぜい剣の切っ先が、僅かに頭部の薄皮を削り取った程度のものだったが――それでも、『先に攻撃を当てた』という、戦いにおいて非常に大きなアドバンテージを、２人の内の１人が勝ち得た事には変わりない。

結果。

浅くとも――何とか攻撃を当てる事に成功したのが瀬多総司で、浅くとも――先に相手の攻撃を受けてしまったのが周防達哉だった。

「ぐっ……！？」

ブシュッ！　と、攻撃が掠めた部分の皮膚が裂け、そこから僅かに血を噴き出す達哉。

そのせいか、一瞬バランスが崩れ、攻撃の手が緩む。

そこへ、

すかさず、

（いただきっ！）

ゴオァッ！！　という、尋常ではない風切り音と共に、総司の持つ十握剣が、素早く振るわれる。

「……っ！！」

驚愕の表情を浮かべる達哉。

（マ……ズイ……！　これは、避けられない！！）

総司の攻撃に対して、脳が発する危険信号に素直に従う事にした達哉は、咄嗟にレーヴァテインを逆手に持ち替えて、剣の腹の部分でその攻撃を受け止めようとする。

刹那、

ズッギャアアアアァァァッ！！　と、聞いた者全員の鼓膜を破裂させかねない程の金属音が、東洋アンズ前を覆い尽くした。

何とか達哉は、間一髪のところで、総司の攻撃を防御する事に成功した。

いや、厳密には、それは成功したとは言えないかもしれない。

なぜなら、

（ぐ……ぅ……！？）

再び、鍔ぜり合いをする事になった達哉の、剣を持つ手が震える。

対して、剣を握る総司の右腕では、ビキビキと表面に血管が浮き上がり、まるで風船が膨らむかのように筋肉が膨張していく。

（なんて……馬鹿力だ……！！）

元々、先制を許してしまって、僅かに体勢を崩した状態で攻撃を受け止めてしまったのだ。そう長い間はもたなかった。

「オラァッ！！」

そんな雄々しい声と共に、人の常識を超えた腕力によって、総司は、達哉の体もろともレーヴァテインを弾き飛ばす。

その長身に違わず、決して軽くはない達哉の体が、およそ１０メートル以上も吹き飛ばされた。凄まじい腕力である。

「ちっ……！！」

何とかバランスを取って地面に着地すると同時に、忌ま忌ましそうに舌打ちする達哉。

未だ、攻撃を受けた方の腕が、骨の髄からビリビリと痺れている。

対する総司は、挑発するかのように、ブンッ！　と１度剣を横に振るうと、

「様子見はしませんよ――貴方の実力は、嫌というほど理解してるつもりですから」

と言う。

「ゴリゴリ押しまくってあげますから、せいぜい覚悟しといて下さいよ！！」

「上……等だ！！」

そして２人のペルソナ使いは、再び激突する。

戦いは、まだ始まったばかり。

3rd Day『神宮球場のバトル（1）』

――新宿、神宮球場。

「……いい目をしている。先程の彼女と同じ目だ」

――と、有里淳（ありさとじゅん）の後ろにいる春沢芳野（はるさわよしの）の方にチラッと目をやりながら、幻魔クー・フーリンは言う。

「……だが、よもや先の劇場にて、私に半殺しにされた事を、既に忘れてしまった訳ではあるまい」

「……ああ、あれか？　あれな、なんか、気付いたら治ってた」

コキコキと首を鳴らしながら、淳が応じる。

勿論、実際には自然に治った訳ではなく、仲間である高城圭介（たかしろけいすけ）の『ディア』の重ねがけによって、何とか動ける状態にまで戻して貰った――というのが実情だった。

この『何とか動ける状態にまで』、という部分が重要である――つまり、外見こそは全快しているように見えても、その実、骨や内臓などの見えないところの幾つかは、やはり完全には治っていなかったのだ。

普通ならば、今すぐにでも病院へと直行し、然（しか）るべき処置を受けなければいけない程の――それ程の状態なのである。

（くそったれが……！　気を抜くと、ここで倒れちまいそうだ……！！）

当然、そんな弱気な感情を少したりとも表に出したりはしないが――要は、そういう事。

いつかどこかで似たような事を述べたとは思うが――ペルソナや悪魔による魔法（スキル）などは、どんな願いでも叶えてくれる夢の力などではない。

裂けた皮膚を元の状態に戻し、何とか止血する事には成功したとしても、やはり、本来人間が持つ自然回復力の限界を超えたダメージまでは、完全に治す事はできない。

この時の淳の顔からは大量の汗が滴り落ちていたが、恐らくそれは、何もその身を焦がすほどの夏の炎天下のせいだけではないだろう。

ちなみに先程、淳が、後ろにいるハルを助ける際に、僅かに受けたクー・フーリンの斬撃によって額から流していた血に関しては、既に止まっていた。

元々が、剃刀（かみそり）で綺麗に切り裂いたかのように鮮やかな傷であったが故に、治りも早かったのだ。

有里淳と、クー・フーリン。

しばらくの間、２人はその場から動かず、ジッと睨み合っていた。

「念のために言っておこう」

ややあって、クー・フーリンが言う。

「自分で言うのもどうかと思うが――私は強い」

「……」

「そして、君は弱い」

「……」

「その覆(くつがえ)しようのない事実を正しく理解した上で、尚、そこにいる『歌姫』の為に、命を賭(と)して戦うと言うのならば、私は全力で、それを受け止めてみせよう。最早、これ以上の警告はしない――その覚悟に見合うだけの人間の可能性(ちから)とやらを、ただ無言のままに、私に証明してみせろ」

ユラリ、と。

クー・フーリンが、僅かに動く。

それは単に、淳に向けて、1歩だけ小さく足を踏み出すという、ただそれだけの動作だったが――右手に握る雷の剣を構える為に行ったその行為だけでも、神宮球場のグラウンドに漂う空気が、ガラリと変わったかのような錯覚を、淳は覚えた。戦いのゴングが鳴るまで、もはや何分も残されていないと、彼は本能的に理解していた。

「……っ！！」

戦慄(せんりつ)し――淳もまた、慌てて構えを取る。

腰を僅かに落としながら、左足を前に出して半身になる、という形で。

そんな中、

「……ハルさん、ちょっと離れてて下さい。これから、かなり激しい運動をしますので」

と、背後にいるハルだけに聞こえる程度の声で、淳が小さく呟く。

「貴女がアイツにとっても貴重な存在である以上、直接邪魔さえしなければ、それだけで、貴女の命は保障される筈ですから」

「……っ、でも……」

淳の台詞に対し、ハルは何か言いたそうな顔をしたが、淳が「早く！」と強い口調で催促（さいそく）すると、やがてはゆっくりと、その場から2、3歩ほど後退した。

「ひとまずは、それで十分です」

言って、淳は改めて、視線の先にいるクー・フーリンへと意識を集中させる。

そして、

「……」

「……」

と、やがて2人は――ゆっくりと、その場で大きく、円を描くように動き始めた。

数十分前の野外音楽堂にて、既に言葉以上のものを交わしあった2人に、もはや開戦の言葉はいらなかった。

クー・フーリンが、剣道でいうところのすり足で横に滑るように移動すれば、

それに合わせる形で、淳もまた、ボクサーのように小さくステップを踏みながら、クー・フーリンとは逆の方向へと体を動かす。

「……」

「……」

そのまま、いくらかの時間が経過する。

特に、どちらかが目立った動きをした訳ではないものの――2人にとって、戦いは既に始まったも当然だった。

時を同じくして、ここより大分離れた場所にて展開されている、瀬多総司と周防達哉の戦いとは違い、恐ろしいほど静かな立ち上がりである。

時折沈黙を破るのは、ザッ、ザッと、2人が足を小さく動かす音のみ。

動かない。

まだ――動かない。

淳も、クー・フーリンも、果たしてそれが、何か考えがあってまだ動かないでいるのか、或いは、相手に隙を見せるのを恐れているが故に、下手に動く事が出来ずにいるのか――それは、本人達のみが知る事ではあるが。

「……」

「……」

睨み合ったまま――ついに1周し、自分が元いた場所にまで戻ってきた2人。

間にある、何もない空間を中心とした円は未だ狭(せば)まる事なく、既に安全圏（と、本人は思っている）にまで離れているハルでさえもが、キリキリと、胸を締め付けられるような感覚を覚えていた。

（何だ、コリャ……。一体、いつになったら動くんだよ？）

そう、彼女が思うのも無理はない。

まるで『先に動いた方が負け』という暗黙の了解でも交わされているかのような、そんな状況。

並の使い手ならば、その空気の重さに耐えられないまま、無理にでも飛び出してしまうであろうその状況を――しかし2人は、未だ維持し続ける。

ピリピリと、少しずつ、空気が張り詰めていく。

先に仕掛けるのは、果たしてどちらか。

やがて、

（ちっ……）

と、クー・フーリンが、心の中で小さく舌打ちした。

（先の戦いとは身に纏っている空気が違うから、一体何がどう変わったのか見定めるつもりでいたが……。まさか、向こうも動かないままでいるとは、少々予想外だ）

ふぅー……、と、口から静かに息を吐き出すクー・フーリン。

（臆病風（おくびょうかぜ）に吹かれたのか、或いは、何か策でもあるのかは知らんが……これではラチが明かんな）

仕方がない、とクー・フーリンは思う。

（ならば――こちらから圧力（プレッシャー）をかけ、無理にでも動かすまで）

すうー……、と、今度は吐いた息を体内へと戻すと、クー・フーリンは、静かに行動を開始する。

ザリッ……、と、僅かに軸足を動かし、

そして、

ドンッッ！！　と、

恐るべき速さで足を動かし、まるでロケットのような勢いで、１つの影が、目の前にいる相手の懐へと飛び込んだ。

突然の出来事に対して、接近を許してしまった相手の顔に驚愕（きょうがく）の色が浮かぶ。

しかし、勘違いしてはならない。

相手の懐へと飛び込んだのが有里淳で、

驚愕の表情を浮かべたのが、クー・フーリンだ。

「な……っ！？」

先制を取ろうと思っていたクー・フーリンの目が、大きく見開かれる。

が、いつまでも驚いている暇はない。

そうしている間にも淳は、自らが得意とする接近戦で、渾身の1撃をクー・フーリンの顔面へ放とうとする。

結果として淳は、別に臆病風に吹かれたから動かないでいた、という訳ではなかった――彼の狙いは、まさにコレだったのだ。

ただ単純に相手より先に突っ込んだだけでは、間違いなく、野外音楽堂の時の展開が再現されていただろう。

しかし、相手の動きにカウンターを合わせる形で、それより更に速い動きで突貫する、という戦法ならばどうだろうか？

淳は未だ、単純な機動力では、自分はクー・フーリンには敵わないと自覚していたが――その反面で、こうも思っていた。

相手よりも速く動けないと言うのならば、それを補う程の速さで、相手よりも速くスタートを切ればいい――と。

結果、

「ぬぅっ！！」

と、クー・フーリンは慌てて、咄嗟に雷の剣を振ろうとする。

が、その時にはすでに、淳は最初の攻撃のモーションに入っていた。

ビュオッ！！　という風を切る音と共に、淳の『怒りの一撃』と、クー・フーリンの刃とが交差する。

どちらの攻撃が先に届いたのかなど、言うまでもない。

ゴッ！！　という鈍い音と共に、クー・フーリンの顔が、体ごと大きく後ろへと弾けた。

「ぬ、ぅ……！？」

ガクッ、と、思わず膝を落としそうになるクー・フーリン。

当然、今の1撃だけで致命傷を負わされるような事はないが、それでも、淳の拳は、クー・フーリンの顎を正確に撃ち抜いていた。

（おの……れ……！！）

歯を食いしばり、更に足で強く地面を踏み締める事で、クー・フーリンは、何とか受けたダメージに屈しないよう体を支える。

（先の戦いで、あれほど徹底的に力の差を見せつけたというのに、懲りずに接近戦、だと……！？）

「ナメるなよ……！」

勿論、クー・フーリンとて黙ってはいない。

文字通りの、返す刀で――否、返す剣で、淳の細身ながらも引き締まった肉体を、腕の立つ料理人が魚を捌くように、一瞬で切り裂こうとする。

目前にまで迫ってきた刃の存在を認める淳。

しかし、彼は、

「う、お、おぉっ！！」

ギュバァッ！！　と、強く地面を踏み締める音がした。

既に限界と思われるその近さから、淳が更に、クー・フーリンの懐へと踏み込んだのだ。

その余りの近さに、淳の肩とクー・フーリンの厚い胸板とが、勢いよくぶつかる。

同時に、淳の頭の上を、クー・フーリンの斬撃が通り過ぎた。

先制を取られたにも関わらず、すぐさま反撃してきたクー・フーリンに対して驚いた淳だったが、しかし、対するクー・フーリンの驚きはそれ以上である。

（信じられん……！　あくまで……この私と、接近戦を望むというのか！！）

驚きつつも――しかし、クー・フーリンは確信した。

言葉で示されなくとも分かる。

胸板に押し付けられた肩の力の強さから、この距離からは絶対に退かない、という淳の強い意思が、クー・フーリンにはハッキリと

感じ取れた。

肩を相手に押し付けているだけの、今の淳の体勢は一見、隙だらけのように見えるが――しかしその実、クー・フーリンは手が出せずにいた。

ここまで距離が近いと、下手に攻撃を繰り出したら、その威力がそっくりそのまま自分に跳ね返ってくる事もありうるし、避けられる危険性も高いからだ。

どれだけ、スピードに差があろうとも関係ない――剣技を主流にして戦うクー・フーリンにとって、そういうものは本来、中距離においてこそ真価を発揮できる要素なのだから。

（なるほど……どうやら、怒りで完全に我を忘れている、という訳でもなさそうだな。以前の敗戦から、多少は何かを学び取ったか）

勿論、クー・フーリンがハルを傷つけようとしたにも関わらず、淳が全く怒りを覚えていない、と言えばそれは嘘になるだろうが――恐らく今の淳は、そういった激情すら完全に制御していのだろう。

まるでフィルターにかけるように、激しい怒りと、戦闘で勝利を収めるのに必要不可欠な冷静さ（クレバー）とを振り分け、戦いに望んでいるに違いない。

再び、沈黙の時間が訪れた。

肩を押し付け合う形で――まるで、相撲をしているかのように、神宮球場のグラウンドの一点で、２人の戦士は固まる。

「ぬっ……！」

「ぐっ……！」

クー・フーリンは胸板を、淳は肩を――互いに上半身を圧迫される事で、2人の口から、思わずうめき声のような音が漏れる。

しかし、その膠着状態が解かれるまで、さして時間はかからなかった。

（あれほど壮絶な敗北を受けても尚、決して引こうとしない、その心意気やよし！　だが――）

クー・フーリンは思う。

同時に、淳も思った。

（……っ！　くそっ……！　今までは、悪魔とこうして体を押し付け合ったりはしなかったな……！　でも、下手に距離を離したら、コイツの剣による攻撃で、すぐにケリがつくのは目に見えてる！！　だったら、この距離で勝負するしかねえ！！　けど……）

ジリジリと、

少しずつ――淳の体が、後ろへと追いやられていく。

（く、っそ……！　スピードだけじゃねぇ……！　体の大きさは勿論、押しの強さも向こうの方が上だ！！　これ以上は、もう……！）

直後、

ドカッ！！　という音と共に、先程までは前傾（ぜんけい）していた筈の淳の体が、勢いよく後ろへと弾き飛ばされた。

「が、っは……！！」

それによって、口から大量の酸素を吐き出す淳。

「あいにくだが――至近距離においても、私の土俵である事に変わりはない」

クー・フーリンの静かな声が、淳の耳に響く。

そして、そのまま淳は、距離を開かされてしまった事で、一瞬の内に、クー・フーリンの剣によって、体を八つ裂きにされてしまった――かのように見えた。

が、

（退が……るな……！）

ギュムッ！！　と、足で地面を強く踏み締める事で、吹き飛ばされた体に無理矢理ストップをかける淳。

そして、

（こんな時こそ……前に出るんだ！！　どうせこの距離じゃ、俺に勝ち目はねぇ！！）

「お、おぉ、あっ！！」

ドッ！！　と、再び淳は、クー・フーリンの懐へと飛び込んだ。

「……っ！！」

チャンスとばかりに剣を振るおうとしていたクー・フーリンだったが、思わず、彼はそこで手を止めた――これだけの至近距離では、いくら速く剣を振ろうとも、その刃が淳の体に届く事はないと悟ったからだ。どれほど優秀なバッターであろうとも、ホームベースの上を通過してしまった後のボールをホームランに出来ないのと一緒だ。

「おおおお

フーリンの懐へと飛び込んでいく淳。

一方で、衝撃を受けた腕の骨を細かく震わせ、淳の拳の威力の程を、その身で正確に把握するクー・フーリン。

（何という威力……！　この少年、体術だけなら、カラステングよりも上か！！）

そう思うクー・フーリンだったが、もう遅い。

次の瞬間には、恐るべき速さで繰り出された、淳の3度目の『怒りの一撃』が、クー・フーリンの顔面を捉えていた。

「――――っ！！」

そのまま、クー・フーリンの体が宙を舞い、やがては、背中から地面へとたたき付けられる。

「や、やった……！」

2人から離れた場所で、思わず、ハルがそんな喜びの声を上げるのも無理はない。

それほど、見事な1撃だった。

が、

「……流石に、そこまで甘くはないでしょうよ」

と――淳が言う通り。

残念ながら――たった1撃で沈んでしまう程、クー・フーリンの肉体はやわではなかった。

彼はまだ、気を失ってないどころか、殆どダメージらしいダメージを負っていない――今、こうして倒れているのだって、単に、淳の攻撃による物理的法則に逆らえなかった、というだけの話だ。

淳にしても、それは分かっていた――分かっていたが、それでも、彼は薄く笑っていた。

ここまでの攻防によって、彼は相手に深い傷を負わせるよりも、更に意味のある事を成し遂げられたからだ。

少なくとも、

（実際の実力差はともかくとして――コイツは倒れてて、俺は立ってる）

そんな今の状況は、先の野外音楽堂において苦汁を飲まされていた淳にとって、ある意味では、クー・フーリンの魔手からハルを完全に救い出すのと同じくらい、価値のあるものだった。

「出来れば、後もう少しだけ、こうしてお前を見下ろしていたいけど――オイ、とっとと立てよ。このロン毛野郎」

パキパキと両の拳を鳴らしながら、淳が言う。

「人間（おれたち）と悪魔（おまえら）との、格の違いってやつを見せてやる」

3rd Day『神宮球場のバトル（1）』（後書き）

●亜兎羅須の質問コーナー

※これは、『ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－』アンケートにて投稿された質問に、亜兎羅須がお答えしていくコーナーです。ちなみに、（Ｄ）は『読者』を、（Ａ）は『亜兎羅須』を表しています。

（Ｄ）女神異聞録デビルサバイバーに出会った経緯を（笑）
Ｐ．Ｎ暁　亮

（Ａ）はい、記念すべき質問第1号は、暁　亮さんからです。内容の方も、正に1番最初に答えるべきものにふさわしいですね（o＾∀＾o）。で、僕が『女神異聞録デビルサバイバー』に出会ったきっかけについてですが、いやぁ、本当にもう、些細でつまらないもんですよ（＾。＾；）？　単純に、少しお金に余裕が出来たから「何か暇だし、ゲームでも買おうかにゃ～」と思ってフラリとパンツ一丁で近くの電気屋に侵入したところ、最初に目についたのが皆が愛する『デビサバ』だったというだけで（＾∀＾）ノ。でも、今思えば、アレこそが僕と『デビサバ』の、俗にいう『運命の出会い』って奴だったんでしょうね（我ながら、くさい言い方だ）。あの出会いがなければ当然、僕は今、こうして『ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－』を書いていなかったでしょうから（＾―＾；）。

んー！　まあ、最初の質問に対する回答はそんな感じで！　暁亮さん、どうもありがとうございました（－＾〇＾－）！　他の方

々も是非、物語やキャラで気になる事があったら、どんな些細な事でもいいのでどんどん質問して下さいね。思わず噴いてしまうようなアホな質問も大歓迎ですよ（ｂ＾ー。）！！

亜兎羅須でしたっ！

行間『祝☆1周年！！』

『ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－』をお読みになって下さっている皆さん、こんな作品に目を通して下さってありがとうございます。

亜兎羅須（あとらす）です。

なんと驚く事に、『ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－』が初めて『にじファン』に掲載されてから、早くも1年が経ってしまいました。

かくいう私が1番驚いております。「え？　もう1年？」って感じです。

まあ、別に漫画の週刊誌などとは違い、打ち切り制度がある訳でもないので、読者の方々に言わせれば、別にそれほど驚くような事ではないかもしれませんが、それでも、自分にとっては驚きなのです。

1年も同じ物語の続きを書き続けた、というのが特に。我ながら「何だコイツ……。引くわー」って感じです（苦笑）。

……まあ、その割には物語の進行が極端に遅く、未だに原作（オリジナル）の物語の半分にさえ到達していませんが、これは一重に、自分の更新速度、或いは執筆速度の緩慢（かんまん）さが如実に表れてしまった結果かと思われます。どうもスイマセン（汗）。

こんな駄作に目を通して下さっている方々には、まったくもって頭が上がりません。本当にありがとうございます。

もし、本作が少しでも読めるようなものになっているとすれば、それは紛れもなく皆様のお陰です。

本作における作者の力など本当に微々たるもので、割合としては、精々1パーセントと言ったところでしょう。

そして残りの99パーセントが、今、この文章を読んでいる貴方を含む、読者の皆さん方の力です。

その中でも特に、自分の力となって下さったちゃあるずさん、シュンさん、マークさん、やさぐれさん、ホッピーさん、黄泉傀儡さんの皆さんには、1人1人に対し、以下のようなイラストを送らせて頂きます。

下手すればゾウムシにも劣る自分の力になって下さった皆様に対する、亜兎羅須からのささやかなお礼です。どうか、拝見なさって下さい。

＞i27911―1665＜

恐らくは、数いる読者の中で最も本作を応援して下さっている、シュンさんに送るイラストです。

たくさんの感想を書いて下さってありがとうございます。

そんなシュンさんには、僕が本作の中で最も好きなキャラクター2名で感謝の意を示したいと思います。どうか、これからも『ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－』をよろしくお願いいたします！！

＞ｉ２７９１４―１６６５＜

ちゃあるずさんには、ペルソナ2において、自分が最も好きなカップリングのイラストを送りたいと思います。

またちゃあるずさんは、自分と同じく『なろう』にて『一面の霧の中で』という、ペルソナ3とペルソナ4を混同させた素晴らしい出来の二次創作小説を投稿しておりますので、これを読んでいる方々は是非、そちらの方にも目を通してみてください。

＞ｉ２７９１５―１６６５＜

デビルサバイバーとペルソナ、2つの『女神異聞録』を冠（かん）する作品にて登場する、2人の『ナオヤ』のイラストは、マークさんに送りたいと思います。

まだまだ完結には程遠い『ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－』ですが、どうか、これからもよろしくお願い致します。

＞ｉ２７９１３―１６６５＜

やさぐれさんには、ある意味で本作の物語において、全ての始まりである『彼』のイラストを送りたいと思います。

まだまだ本編内での登場回数も極端に少なく、本作では色々と謎が多い『彼』ですが、これから少しずつその謎も明かしていきたいので、どうか温かい目で『ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－』を見守ってやって下さい。

そして、やさぐれさんもまた、『なろう』にて『よくばり』という、非常に完成度の高いペルソナ３二次創作小説を書いておられます。

これを読んでいる方々、是非１度（と言わずに何度でも）目を通して頂いて、その見事な文章構成と世界観に酔いしれて下さい。圧巻です。

＞ｉ２７９１２―１６６５＜

ビバ、筋肉！！（笑）　という訳で、この物語のもう１人の主人公であるセトさんのイラストは、黄泉傀儡さんに送りたいと思います。

かつて八十稲羽を救い、今や『人類最強』と言われるまでに成長した１人のペルソナ使いがこれからどこへ向かって行くのか、その行く末を、是非見届けてやって下さい。

また、黄泉傀儡さんは、ディスガイアシリーズの二次創作である『地獄戦記ディスガイア』という小説を、同じく『なろう』にて書かれております。皆さん、是非一度目を通してみて下さい。

にしても……ディスガイア……あれ、実は１度限界までやり込もうとした事があったのですが、その余りのボリュームを前に即効で

断念しました。……って、自分、根性なさ過ぎですね、はい……。

＞ｉ２７９１６―１６６５＜

ホッピーさんに送るのは、淳君の大親友であるアツロウ君の雄々しい姿に重きを置いた、熱いイラストです。

淳君やセトさんとは違い、何ら特別な『能力（ちから）』を持たない彼ですが、だからこそ、『ごく普通の日常において、同じくごく普通の人間が突然、異常事態に巻き込まれたら』という前提における、本作での『一般人』の中で、彼は代表的とも言える立ち位置にいます。

そういう意味で彼は、淳君、セトさんに次ぐ『３人目の主人公』とも言えるでしょう。

まだまだ活躍するシーンの少ない彼ですが、これからどんどんかっこよく書いていく予定なので、どうか、本作において彼が何を見て、学び、勝ち取っていくのか、それを見届けてやって下さい。

以上で、１周年を記念した作者の独り言的なこの話は終わりです。

そして改めて、この作品を読んで下さっている読者の方々には、最大級の感謝を。

どうかこれからも、『ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－』をよろしくお願い致します！

亜兎羅須でしたっ！

本編において現在進行している、３つの戦いの結末や如何に……！？

3rd Day『東洋アンズ前のバトル（2）―2』

――池袋、東洋アンズ前。

瀬多総司（せたそうじ）。

周防達哉（すおうたつや）。

2人の戦士は再び、一定の距離を空けて睨み合っていた。

最初の内は汗の一滴さえ流さず、涼しい顔をしていた2人も、今やその体は汗どころか、大量の血や泥で汚れており、常に肩を大きく上下させる程、息も荒くなっていた。

「……」

そして、

いつの間にか――その片方である総司の右手には、序盤の頃に使用していた愛剣『十握剣（とおかのつるぎ）』ではなく、それとは全く別の武器が装備されていた。

ここで『握られていた』ではなく、『装備されていた』という表現を用いたのは、文字通り、その武器が防具や――昨日、水道橋にて総司が使用した具足『モーセの奇跡』等のように、直接肌に装着するタイプの武器だからだ。

（……やれやれだぜ。まさか、あんなフカフカ生物の武器まで使う

羽目になるなんてな）

そう思いながら、自分の右手に装着されているそれに、チラッと目を向ける総司。

一言で言うならば、それは手甲（てっこう）だった。

しかし、それを手甲本来の目的である『手の甲を覆い、保護するもの』という目的で作られた武具だと思う者は、殆どいないだろう。

と言うもの、総司の手を覆っている部分――さながら、ボーリングのように、握り拳よりも少し大きいぐらいの、丸みを帯びた純白の球体から、防御とは明らかに無関係な、４本の『牙』が伸びていたからだ。

１本１本の『牙』の流さはおよそ２０センチ程で、それぞれが別の色をしており、全部で赤、青、緑、黄の４色があった。

かつて、総司が高校２年生だった頃、八十稲羽（やそいなば）という街で非公式に結成していた小組織――通称『自称特別捜査隊』のメンバーの内の１人（厳密には１匹と称するべきかもしれないが）、『クマ』が使用していたその武器の名は、『精霊牙（せいれいが）』と言う。

（見てくれはちとダサいが……。性能の良さで言えば、過去のメンバーが装備してた武器の中でも、間違いなくダントツだ）

総司は時折、それを装備した右手首を軽く振りながら、円を描くようにジリジリと横に動きつつ、現時点では『敵』である達哉の顔を睨みつけていた。

そんな達哉はと言うと、

「……」

と、総司と同じように、相変わらず大剣『レーヴァテイン』を握りながら、ゆっくりと横に動きつつ、時々横目で、自分がいる場所より大分離れた位置へと視線を送っていた。

そこには、人の体程の大きさもある巨大な瓦礫（がれき）があり、そしてその陰には、1人の男――通称10―BITが、体の半分をその瓦礫に隠しながら、ジッと総司と達哉の戦いの様子を見守っていた。

もっとも、この時の達哉は、そんな風にしている男の名前（？）が『10―BIT』というものである事など、知ってはいなかったが――それはともかくとして。

（さて、どうするか……）

口から何度も酸素を出し入れしながら、達哉は考える。

達哉と10―BITが顔を合わせたのはこれが初めてだし、究極的な話、ここで10―BITを見捨てるという選択肢もなくはなかったのだが、それでも、初めてこの東洋アンズ前に来た時から、達哉は、命にかけても10―BITを守ると決めていた。

それは、これまでの総司の行動を知るためには、10―BITの協力が必要不可欠だという事もあったが――何より、達哉はこれ以上、総司が闇に堕ちていくのを見たくなかったのだ。

（……まったく、本当にどうしようもないな、俺は）

そう思い、１人、達哉は苦笑する。

（１度は必ず殺すと決意した筈なのに――どうやら未だ、かつての職場の後輩を、可愛いと思っているらしい）

とにかく、今は１０―ＢＩＴだ。

「……」

一瞬、いつまでもこんな所にいないで、早く逃げろと言おうとした達哉だったが――寸前で思い止まった。

確かに、瀬多総司と周防達哉という、２人の『怪物』が本気の『殺し合い』を繰り広げている、この東洋アンズ前という場所は、今や、下手したらどんな地獄よりも危険な領域と化しているかもしれない――が、それは同時に、野性の悪魔達もまた、２人の戦いを恐れて、この場所に近づこうとしない、という事を意味していた。

（……だとすれば、まだ俺の目がギリギリ届く今の場所に居続けて貰った方が、下手に他の場所に動かれるよりも、遥かにマシだろう）

そう思い、達哉は、

「おい」

と――ここへきて初めて、１０―ＢＩＴに声をかけた。

さして大きな声でないにも関わらず、どことなく精悍さを滲ませる達哉の声は、しっかりと１０―ＢＩＴの耳に届いたらしく、瞬間、

ビクッ！　と驚いたように体を震わせる１０―ＢＩＴだったが、そんな彼の態度には一切構わず、達哉は、

「事情はよく分からないが……ここは、俺がアンタを守ってやる。だから、他の場所には行こうとせず、今はそこでジッとしていろ」

と言うと、少しして、１０―ＢＩＴが頷いた事さえ確認しないまま、改めて、『敵』である総司に意識を集中させた。

（……問題は、俺か総司の奴のどちらかの攻撃が、あの男を巻き込んだりはしないかという事だが――そこは、何とかするしかないな。勿論、あの瀬多総司が相手となると、手加減なんて出来る訳もないが……）

と――達哉がそこまで考えたところで、不意に、彼の思考に、総司の声が割り込んできた。

「あー、そう言や達哉さん。確か、何か俺に聞きたい事がある、って最初に言ってませんでしたっけ？」

総司の口調は、まるで、気心の知れた友人に対して声をかける中学生のように気軽なものだった。

「……聞けば、教えてくれるのか？」

訝（いぶか）しそうに首を傾げながら、達哉が言う。

「まぁ、内容にもよりますがね。だからもし、答えられない時があったら、そこは了承して下さい。勿論、俺は嘘をつきませんよ」

「そうか。それじゃあ、遠慮なく聞かせてもらおう」

言って、達哉は改めて、大剣『レーヴァテイン』を握る右手に力を込めると、

「……お前は一体、何を企んでる？」

と言う。

「はぁ？」

途端に総司は、いきなり何を言い出すんだこの人は、とでも言いたそうな顔をした。

しかし先の質問を聞いた瞬間、総司の肩が僅かにピクリと動いたのを、達哉は見逃さなかった。

「何ですか、それは？　もう少し、具体的な質問でお願いしますよ。生憎と俺は、以心伝心は親友と妻と娘だけ、と決めていますのでね」

総司が言う。

当然達哉は、総司のそんな軽口に乗ったりはしなかった。

「分からない訳がないだろう」

しばらく達哉は、ジッと総司の顔を凝視していたが、やがて口を開いた。

「総司……。お前がＳＴＦを除隊してから、今までの間に、多くの

事を実行し、成し遂げてきた事は知ってる。……けど俺は、その内の半分も信じたくない気持ちだ。得に、兄さんの件に関しては……」

瞬間、総司の顔が、まるで急遽取り繕ったかのような、無表情なそれへと変わった。

「克也さん、ですか」

総司は一旦、口からフー……ッと、大きく息を吐き出した後、

「まるで喧嘩した後のような小学生みたいな言い訳で申し訳ないですけど――しかしですね、達哉さん。あれは、克也さんが悪いんですよ？　あの人の全身の骨をへし折った俺が言うのも何ですが」

「……それだけじゃない。内臓の幾つかが潰れ、筋肉の半分以上が断裂していた。……今は病院のベットの上で小さな手術を繰り返す毎日だが、そうして命を取り留めている事さえ奇跡と言っていい程、お前が兄さんに負わせた傷は深かった」

そう言う達哉の目にはまるで、その中で炎が燃え上がっているかのような激しさがあった。

しかし、総司は臆さない。

「奇跡、というのは些か言い過ぎでしょうよ。そもそも俺は最初っから、あの人を殺すつもりはありませんでしたし。向こうがどうだったかは知りませんが――流石の俺も、相手がＳＴＦの初代総隊長ともなれば、多少の敬意は払いますよ」

「……あそこまでする必要が、本当にあったのか？」

「ありましたね」

迷いなく、即座に答える総司。

「相手がペルソナ使いに目覚めたばかりの、特別な力に酔いしれて自分の力を過信している雑魚（アマチュア）ならともかく――克也さんは正真正銘の強者（プロ）です。そんなプレイヤーが相手ともなれば、手を抜く理由なんて、どこにもないでしょうよ」

いつの間にか2人は、動かしていた足を止めていた。

体中を伝っていた血も、汗も、今やすっかり止まっている。

睨み合う視線だけをそのままにしつつ――ややあって、総司が口が開いた。

「あの人が素直に、政府高官の潜伏場所のデータさえ渡してくれれば、あんな事をせずに済んだんですがね。『神』様が言うに、今回の『東京封鎖』を実行するには、どうしてもそれが必要不可欠だったみたいですから。……ま、偉大な事を成し遂げる際には、いつだってこういった『小競り合い』がつきものです。この事は、貴方もご存知でしょう？」

「偉大、だと？」

達哉は如何にも、耳を疑うという様子だった。

「お前は本当に、自分の行いの先にあるものが『偉大』な事だと、そう信じているのか？」

達哉は若干、どこか遠回しな言い方をした。

「ええ、勿論です」

薄い笑みさえ浮かべながら、再び、総司は即答する。

「もっとも、俺と『神』様とじゃ、目指しているものの内容が若干、異なりますがね……。勿論、俺が『偉大』だと思っているのは、自分が目指している方のやつですよ」

「『神』、か」

ポツリと、達哉が呟く。

「少し昔から、お前がそういった存在の下に就いて活動している、という情報は聞いていたが……。流石に、こうして直接、当人の口から聞くまでは信じていなかったな」

「『ペルソナ』や『悪魔』、『シャドウ』とかがいるんですから、『神』って存在がいても不思議じゃないとは思いますけどね。……まぁ、俺も直接顔を合わせたのは、昨日が初めてでしたけど――案外、普通の外見でしたよ？　ああそれと、1つ訂正させて貰いますと、俺は別に、あの人（？）の下に就いてる訳じゃありません。ただ、互いが目指しているモノを実現する為に必要な過程が似たようなものだったから、成り行きで手を組んでるってだけです」

「……そうか」

達哉は1度、そんな事はどうでもいい、とばかりに頷くと、

「それじゃあ、その内の、お前が『目指しているモノ』ってヤツについて教えてくれ。……俺が最初にした質問は、そういう意味の内容だ」

「ああー……っと」

無表情な顔から一転、総司は、どこか痛いところを突かれた、という顔をすると、

「すいませんねぇ、達哉さん。最初の質問だっつーのに、残念ながら、俺はそれに答える事が出来ません。俺の『宿願』ってヤツは、別に喋ったら実現不可能になる、って類のものじゃありませんけど――かと言って、そうペラペラと人に聞かせるようなものでもないんですよ」

と言う。

「まあ、ベル・デルとかの、悪魔の内の何人かは、薄々感づいているとは思いますが――」

不意に、総司はそこで言葉を止めた。

いつの間にか達哉が、右手に握ったレーヴァテインの切っ先を、自分の顔に真っ直ぐ向けている事に気付いたからだ。

「……そんな答えで、俺が納得するとでも思っているのか？」

剣の切っ先と一緒に、炎さえも凍らせかねない程の冷たい眼差しを総司の顔に向けながら、達哉が言う。

対する総司は、クイッと小さく首を傾げると、

「……するしかありませんね」

と言った。

「それとも、何ですか？　俺が克也さんにそうしたように、暴力に訴えて、無理矢理ゲロさせてみますか？　悪くありませんよ――俺は昨日、キザな魔剣士と戦り合ったせいで、少しばかり体力が落ちてますし、何より、貴方はそこそこ強いですから」

「……」

明らかに挑発と分かる総司の言葉を受けて、しばらく達哉は黙っていたが――やがて彼は、ゆっくりと口を開いた。

「……お前は、変わったな」

「……」

「今のお前にはもう、昔の俺が、その類稀なるペルソナ使いの才能を買って、ＳＴＦに勧誘した時の面影はどこにもない。……未熟なお前を鍛えたり、叱ったり、兄さんや真田君と一緒に楽しく酒を飲めるような時代は、とうの昔になくなってしまった。……総司。俺は、出来る事ならまた、そういった時間を過ごしたいと思ってる……出来る事なら……」

直後だった。

ドンッッ！！　という爆音が、辺りに響き渡った。

総司が地面を強く蹴り、音速もかくやという程の速さで、達哉の懐へと飛び込んだ音だった。

そのまま総司は、無言で精霊牙を装備した右手を、達哉の胸目掛けて一気に突き出し、その内側にある心臓を、えぐり出そうとした――が、何とかそれに反応した達哉が防御の為に剣を構える方が、僅かに早かった。

耳をつんざくような金属音が辺りに鳴り響き、先程までよりも遥かに近い距離から、２人は睨み合う。

ギリギリと、互いの武器による激しいせめぎ合いをしつつ、達哉は総司の顔を見た。

そこには、形容しがたい程の激しい怒りが顔の隅々にまで広がっており、先程までは確かに銀色だった彼の目が、今や――どういう訳か――金色に輝いていた。

「その目……」

と、達哉が何かを言う前に、その上から被せる形で、総司が口を開いた。

「それで？　周防さん」

いつの間にか総司は、達哉の事を「達哉さん」、と名前で呼ばなくなっていた。

「それが、貴方の最期の言葉なんですか？」

彼は、それだけを言った。

その短い台詞の中に、全てが凝縮されていた。

「……ああ、その通りだ、瀬多」

対する達哉もまた、総司の事を、今までのように「総司」とは呼ばなかった。

「そうですか」

総司が言う。

「じゃあ――もうお互いに、言う事は何もありませんね」

「そうだな、何もない」

言って、達哉は、レーヴァテインを握る両手に一際力を込めると、ギィンッ！！　という金属音を鳴らしつつ、精霊牙もろとも、総司の体を弾き飛ばした。

「お前の『宿願』がどういったものであろうと、もう、そんな事は

どうでもいい」

まるで、これまで築き上げてきた瀬多総司という男との関係を、ここで全て放棄するかのように、達哉が言う。

「そのくだらない考えもろとも、ここでお前を終わらせてやる」

「……くだらない？」

その言葉が酷く気に障ったかのように、ビキィッ、と額に青筋を浮かべる総司。

「……そりゃ、まぁ、貴方にとっちゃ、くだらない事かもしれませんが」

彼は1度、精霊牙を装着した右手を大きく後ろへと引くと、

「生憎とこっちは、そのくだらない考えの為に、19年も命を懸け続けてきてんですよ……！　たかが『旧世代』のワイルドの癖に、『新世代』に盾突いてんじゃねえっっ！！」

そのまま、一気に——再び、達哉の懐目掛けて、大きく足を踏み出した。

最早、言葉はいらない。

本当の意味で袂を分かった2人が、純粋な殺意を携えて、互いの信念をぶつけ合う。

主導権争いを制したのは、瀬多総司。

しかし、この先は？

最後に立っているのは、果たして。

3rd Day『東洋アンズ前のバトル（2）―2』（後書き）

●亜兎羅須の質問コーナー

※これは、『DEVIL SURVIVOR－PERSONA CROSS－』アンケートにて投稿された質問に、亜兎羅須がお答えしていくコーナーです。ちなみに、（D）は『読者』を、（A）は『亜兎羅須』を表しています。

（D）亜兎羅須先生に質問です。『女神異文録ペルソナ』『ペルソナ2 罪』『ペルソナ2 罰』『ペルソナ3（FES・P含）』『ペルソナ4』『女神異聞録デビルサバイバー』でそれぞれ好きなキャラクターを、主人公以外で教えて下さい。ちなみに私の場合、南条君、栄吉・克哉、順平、4未プレイの為割愛、未クリアですがマリ姉、となっております。なんかまるでバトンのようですね。お暇な時に気が向いたらバトンノリで教えて下さい。

P．Nやさぐれ

（A）はい！　という訳で、今回は自分と同じく、にじファンにてペルソナ3の二次創作小説を書いておられる、やさぐれさんからの質問です！　いやー、知ってる人からの質問だと、思わずテンション上がっちゃうなぁ、もう（≧≦）！　なんて、そんなウザトークもそこそこに、質問の方に答えていきたいと思います！　しかも、相手が尊敬すべきやさぐれさんという事で、それぞれの作品で1番好きなキャラを1人ずつどころか、1作品につき、好きなキャラを3人ずつ、ベスト3で答えていっちゃうZE（＾3＾）－☆Chu！！　それじゃあいってみよう！　やさぐれさんが挙げた作品群そ

れぞれの中で、亜兎羅須が好きなキャラベスト3は……これだ
あっ……（ザ・ベストハウス1・2・3！　のノリで）！！

●女神異聞録ペルソナ
？城戸玲司（じょうとれいじ）
？サトミタダシの店長
？くちさけ

●ペルソナ2　罪・罰（両作品で同じキャラ、同じ順位）
？吉栄杏奈（よしざかあんな）
？『ラーメンしらいし』のおばちゃん
？リサの父親

●ペルソナ3
？岳羽（たけば）ゆかり
？男性主人公の屋久島でのナンパイベントの際に、2番目にナンパする女性
？小野先生が頭につけてる兜（かぶと）

●ペルソナ4
？白鐘直斗（しろがねなおと）
？キツネ
？雪子の影と戦闘する際に出てくる白馬の王子

●女神異聞録デビルサバイバー
？春沢芳野（はるさわよしの）
？ときのおきな
？初めて青山霊園を訪れた際、真っ先にウェンディゴにぶっ飛ばされた信者

え～、言っておきますが、このベスト3に対する突っ込みは一切受け付けません（笑）。いいかいチミ達、世の中にはねぇ、聞きたくても絶対に聞いちゃいけない事が存在するのだよ！　人は、そういうものを乗り越えて大人になっていくのだよ（；、皿´）！！……という訳で、いかがでしたか？　やさぐれさん。満足しましたかw（どや顔）？　また、お気軽に質問して下さいね（≧≦）？

あ、それと最後に、前話での暁　亮さんや、今回のやさぐれさんの質問は、『ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－』アンケートや、感想ページから受け付けていましたが、アンケートの方に関しては、質問コーナーのみを独立させて、同じようトップページや最新話の末尾に載せるように設定しました（ｏ＾∀＾ｏ）。というのも、今までのやり方ですと、アンケート内の回答必須の項目に答えないと質問を載せられないので、それじゃあ『気軽』に質問出来ないんじゃね？　と思ったからです（＾。＾；）。という訳で皆さん、改めて、新しく設置した『ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ－ＰＥＲＳＯＮＡ　ＣＲＯＳＳ－』質問コーナーにて、どんどん『気軽に』質問してくださいね？

以上、亜兎羅須でしたっ！

3rd Day『子供の救出』

――渋谷、宮下公園。

谷川柚子（たにかわゆず）、そして高城圭介（たかしろけいすけ）の2人は現在、宮下公園の近くを通り掛かっていた。

全体的にピンク色の服でコーディネートし、赤い髪を同じくピンク色のパンダナでポニーテールにしている少女が谷川柚子――通称ユズで、

若干茶色がかった髪を七三分けにし、黄色いTシャツに、黒いジーンズを履き、細い目の上から黒い縁（ふち）の眼鏡をかけているのが、高城圭介――通称ケイスケである。

「……う～ん、確かにこっちから聞こえたと思ったんだけど……。どこだろう？」

と、ユズが言う。

元は有里淳（ありさとじゅん）、そして木原篤郎（きはらあつろう）らと一緒に行動を共にしていた2人は、野外音楽堂にてクー・フーリンに連れ去られた春沢芳野（はるさわよしの）という女性を見つけ出し、あわよくば救出する為に、今は淳やアツロウとは行動を別にしていた。

もっとも、救出についてはともかく、ハルを見つけ出すという事に関しては、既に、神宮球場にて、淳が達成してしまっているのだが――どういう訳か、封鎖された東京内では、携帯電話による通話

が一切出来ないという現状において、ユズやケイスケが、そんな事を知る訳もなかった。

それはともあれ、

「……ねぇ、谷川さん。本当に子供の泣き声なんて聞こえたの？少なくとも、僕には聞こえなかったけど……」

どことなく疲れた様子の、ケイスケのそんな言葉を受けて、ユズはいかにも、ムッとしたように頬を膨らませると、

「……ほ、本当だってば！　つべこべ言わないで、ケイスケ君も探してよ！」

と言った。

ほんの数分前の事だった。

相変わらず、連れ去られたハルを何とかして見つけだす為に、何か、どこかに手がかりはないかと、２人が宮下公園の近くを通り掛かったところ、突然ユズが、どこからともなく子供の泣き声が聞こえてくる、と言い始めたのだ。

残念ながら、一緒に歩いていたケイスケには、そういった声は一切聞こえなかったが――先程までのやり取りは、２人のそんな認識の齟齬（そご）が原因となったものである。

実際ケイスケの方はと言うと、結局これは、ユズの単純な聞き間違いという、何ともつまらない結果に終わるのでは、と思っていた。

と言うのも――先程、確かに子供の声が聞こえたと主張したユズだったが、そう言った時の彼女の頬を、一筋の冷や汗がつたっていくのを、ケイスケは確かに見たような気がしたからだ。

が、結局のところ――正しかったのは谷川柚子で、間違っていたのは高城圭介だった。

何故なら、

「……あっ！　ホラ、見つけた！」

という言葉と共に、ユズが指し示した場所に、ケイスケが視線が送ると――なるほど、そこには確かに、グスグス泣いている子供の姿があったからだ。

どうして泣いているのかというと、

「何かの理由があって木に登ったはいいけど、降りられなくなっちゃったのか……」

ポツリと、ケイスケが言う。

ちなみに、この時の2人がいる場所は、宮下公園内の、水飲み場近くにある、やや大きめの木の根本だった。

ユズが聞いた子供の泣き声の発信源を探している内に、いつの間にか、こんな場所にまで来ていた――という訳である。

正直、つい先程までは、いい加減、確証のない情報に惑わされている暇があったら、早くハルさんの捜索に戻ろう、と言おうとして

いたケイスケだったが――流石に、こうして目の前で涙をボロボロ流している子供の姿を見せられたとあっては、彼としても、今はその子供を助けようと思わざるを得ない。

いくらハルの身が心配であるとは言え、ここでアッサリ目の前で困っている子供を見捨てていく程、彼は人間を捨ててはいないのだ。

（それにしても……）

と――そんな、名も知らない子供の姿を見ながら、ケイスケは思う。

「これ……よく登れたね。あそこまで、軽く5メートルはあるんじゃないかな？」

「ん～、そう？　ジュンが幼稚園ぐらいの頃には、もう、これくらいの高さの木なら、普通に登れるようになってたけど？」

「……とりあえず、彼の常識を、他の人達のそれと一緒にしない方がいいと思う」

冷静に突っ込みつつ、ケイスケは改めて、子供の方へと目を向けた。

5メートル――勿論、メジャーなどを使って正確に計った訳ではないが、それでも、子供の姿を視界に収める為に、この時の2人が、ほぼ地面と垂直になる程に、首を上に向けなければいけないのは確かであり、お陰で、ケイスケは早くも首が痛くなってきていた。

「……って、感心してる場合じゃないって！　早く助けてあげない

と！」

ハッとした様子で、ユズが言う。

「分かってはいるけど……」

相変わらず心配そうに、泣いている子供へと目を向けながら、ケイスケが言う。

「一体、どうやって助けるんだい？　分かっているとは思うけど、僕達があそこまで登っていく、っていうのは無理だよ？　いや、登ること自体は決して不可能じゃないけど、その後の、子供を無事に下ろす作業がかなり難易度高いだろうし……」

そもそも、５メートルというのはどう考えても、大人子供に限らず、人が落ちたら無事で済むような高さではない。

平均的な建物の１階分の高さがおよそ３メートル程だと言えば、或いは分かりやすいのではないだろうか。

「う～ん……」

助けようと意気込んだはいいものの、ユズにしても、どうやって子供を無事に救出するべきか、悩んでいるようだった。

或いは――有里淳ならば、先程ケイスケが言った、「子供がいる場所まで登れたとしても、その後無事に降りるのは難しい」という鬼門（きもん）を、その持ち前の身体能力で難無くクリアしてしまうだろうし、木原篤郎ならば、いつものように、何かいい案を即座に思いつきそうなものだが、残念ながら、その２人の内のどちらも、今はこの場

にいない以上、ここは自分達で何とかするしかない、と、ユズとケイスケは思った。

「そう、だね……。やっぱりここは、仲魔に手伝ってもらうしかないんじゃないかな？　悪魔の力を使えば、あそこまで登るのも難しくないと思うし」

ややあって、ユズが言う。

が、ここで異を唱えたのがケイスケだ。

「え……？　だ、ダメだよ！　もし、悪魔を召喚してるところを他の人に見られたら、きっと、色々と誤解を招くだろうし……！」

再び、不機嫌そうに、プクゥッと頬を膨らませるユズ。

「もう、そんな細かい事言ってる場合じゃないでしょ！　こうしてる今も、ハルさんはあの変な悪魔に、『魔界』とかって場所に連れて行かれちゃってるかもしれないんだし、やるべき事は早く済ませなきゃ！」

「う、う～ん……」

咄嗟に反論できず、ケイスケが言葉に詰まっている内に、ユズはさっさと行動を開始した。

懐（ふところ）から改造ＣＯＭＰを取り出し、実に手慣れた様子でボタンを押すと、『悪魔召喚プログラム』を起動させる。

「う……い、いいのかぁ……？」

未だ眉をひそめ続けるケイスケだったが、彼がそうしている内にも、ＣＯＭＰから召喚されたユズ達の仲魔、霊鳥『モー・ショボー』は、木の上で必死に幹にしがみついている子供を何とか助け出し、無事に地上に下ろす事に成功する。

ちなみにこの時、先程までは『１』だった子供の『余命残数』が『４』へと増えたのだが、残念ながら、グループのホストリーダーではない２人に、その変化を見て取る事は出来なかった。

ユズ達が持つ改造ＣＯＭＰの機能の内の１つである『余命表示』は、そのグループのホストリーダーにしか確認できず、そして、この時のユズ達のホストリーダーは有里淳なのだが――前述したように、今、彼はこの場にいないからだ。

閑話休題。

何とか子供を救出する事に成功したユズはと言うと、子供に向けて、にっこりとした笑顔を送っていた。

それを傍から見ていたケイスケは、少しマズイぞと思った。この先の展開が、まさに手にとるように分かったからだ。

案の定、この時、子供がその顔に浮かべていたのは感謝の表情ではなく、明らかな恐怖の表情だった。

「ひっ……！　あ、ありがとう……！」

子供の様子に気付いたユズは、ケイスケの予想と一切違わぬ、ショックを受けた表情をしていた。

「え？　あ、ちょ、ちょっと！」

ユズが何か言う前に、子供は脱兎のごとき勢いで宮下公園の出口へと走っていった。

子供の姿が見えなくなった直後、明らかに階段を下りている途中で子供が転んだかのような音が聞こえたが――流石に、心配になってそれを見に行こうという気には、この時のユズとケイスケにはなれなかった。

「そっか……。そうだよね……。助けて貰ったとは言え、やっぱり悪魔は怖いよね……」

ハアッ……、と、召喚したモー・ショボーがＣＯＭＰの中へと帰還していくのを見ながら、まるで通夜にでも通うような表情で、ため息をつくユズ。

「……ま、仕方ないと言えば仕方ないよね……。もし、私が悪魔使いじゃなくて、その上で、あの子と同じ立場だったりしたら、きっと同じようなリアクションをしたと思うし……」

まあ、流石に階段で転ぶような事はないと思うけど、と言いながら、ユズは隣にいるケイスケの顔を見る。

そんなケイスケはと言うと、しばらくの間は、子供が去っていった辺りをジッと見つめていたが、やがて、

「……ねぇ、谷川さん。これからも、今みたいな人助けをするつもりなの？」

と言った。

「え？」

咄嗟にはケイスケの言葉の意味を理解できず、初めて鏡を見る猫のように、小さく首を傾げるユズ。

「なんていうか、さ」

そんな彼女を置いて、再び、ケイスケが口を開く。

「当然、人助けは悪い事じゃないし、有里君やハルさんみたいに、悪魔に抵抗のない人だったら、何も問題ないと思う。でも……」

そこで一旦、ケイスケは言葉を区切ると、

「でも……やっぱり普通の人は、悪魔を恐れると思うんだ。当然、その悪魔を使役する『悪魔使い』も……。それこそ、さっきの子供みたいにね。普通の人には、ただの悪魔と僕らの仲魔なんて、区別はつかないだろうから……」

「ど、どういう事？」

ユズは未だ、ケイスケが何を言いたいのかを、上手く理解できていないようだった。

「つまり、僕が言いたいのは――」

1度、ケイスケは大きく息を吸い込むと、次のように言った。

「――下手をすれば、今回の事件が、悪魔使いの仕業だと見られてしまうかもしれない、って事なんだよ。まぁ、僕達が未だこの封鎖の『真実』を全て把握しきれていない以上、実際にそうである可能性も否定できないけど――少なくとも僕らは、普通の人達に、悪魔を使っているところとかを、あんまり見られちゃいけないと思うんだ……。少なくとも、僕はそうしてきた……」

「う、う～ん……」

途端に、ユズは酷く難しそうな顔をした。

しかしそれは、ケイスケの意見に反対だからと言うよりも――それ以前の問題として――彼の台詞の内容が難しくて、上手く理解する事が出来ないからのように見えた。

しかしケイスケは、そんなユズの表情を、明らかに不機嫌なものだと勘違いしたのか、

「あ……、ご、ごめん」

と言う。

「別に、君を責めたかった訳じゃないんだ。ただ……ミドリちゃんの事が気になって……」

「ミドリちゃん、って……」

しばらくの間ユズは、何か考え込むかのような仕種を見せた後、

「あ……そっか、そういえばあの子、ＣＯＭＰを使って人助けをする、とかって言ってるんだっけ？」

と言った。

小牧翠（こまきみどり）。

通称ミドリ。

一昨日にユズが――ケイスケの場合は昨日だが――初めて出会った、魔女っ娘のコスプレが目立つ、天真爛漫（てんしんらんまん）を絵に描いたような、１５歳の少女である。

「そうなんだよ……」

実に憂鬱（ゆううつ）そうな表情で、改めてため息をつくケイスケ。

「ミドリちゃんは、自分の事を正義の味方だとか言って、悪魔を見せびらかしてる。勿論、本人にそのつもりはないだろうけど……。結果としてそうなっている以上、このままじゃ……」

そこまで言うと、途端にケイスケは、急いで先の自分の言葉を訂正するかのように、２、３度ほど首を横に振った後、

「……ごめん、何言ってるんだろう、僕。忘れてくれていいから」

と言い、次には、ポリポリと頭の後ろを掻きながら、公園の出口へと向かって歩き出した。

早く、元のようにハルさんを探しに行こう、という意思表示らし

い。

それを理解したユズが、慌ててケイスケの後を追おうとした――その時だった。

ズンッッ!!　と、

余りにも唐突に発生した地響きが、２人の体を――否、東京中を激しく揺さぶった。

「……っ!!」

「きゃあっ!」

驚いたものの、２人は何とか両足で強く地面を踏み締め、不様に倒れないようその場で体勢を保つ。

が、始まった時と同じぐらい唐突に、揺れは収まった。

まるで、今の出来事は全て夢だったのでは、と疑いたくなるほどの呆気なさだった。

しかし勿論、本当に今のが夢の出来事だと思い込むほど、２人の脳は愉快に出来てはいない。

「今のは……？」

頭を小さく振りながら、ケイスケが言う。

ユズも、しばらくは呆然としたが、やがて、次のように言った。

「……もしかして……ジュン、アツロウ……。大丈夫かな……？」

「……ッ」

息を呑むケイスケ。

勿論、今の揺れの中心点に、有里淳か木原篤郎のどちらかがいるとは限らない。

というより、普通に考えれば、そうでない可能性の方が遥かに高い。別に、騒ぎの中心には必ず彼等がいなければならない、というルールがある訳でもないのだから。

しかし――もし、仮に、万が一、彼等の内のどちらかが、既にハルを連れたクー・フーリンと接触しているとしたら？　という仮定が、唐突に、ケイスケの心の中で芽生えた。

もしそうだとしたら――今頃は必ず、2人の内のどちらかが、クー・フーリンと戦っている最中だろう。

少なくとも、平和的に言葉で解決するとはとても考えられない、と、ケイスケは思った。

確かに、あのクー・フーリンという悪魔は、ケイスケが見た限り、これまで自分が出会ってきたどの悪魔よりも、人の話を理解する事が出来そうではあったが――理解こそすれど、和解するような事は決してないだろう。

その事が、ケイスケには何となく分かっていた。

「……行こう」

ポツリと、ケイスケが言う。

「どうせ、今はまだハルさんに関する手がかりは何1つとしてないんだ。だったら、少しでも怪しいと思った場所は、徹底的に調べた方がいい」

恐らくは、現状、ハルを見つけだすのに最も有効な案を呈したケイスケに対して、ユズは、心配そうな面持ちから一転して、「うん、そうだね！」と元気よく頷く。

「僕達が着くまでに、何とか持ちこたえてくれるといいけど……」

「大丈夫……！」

不安の余り、思わず縁起でもない言葉を呟いたケイスケに対し、グッ、と力強く両の拳を握り締めながら、ユズが言う。

「1度負けたとしても、ジュンは絶対、同じ相手に2度も負けたりはしないし――アツロウだって、いつもはただのオタクロウだけど、こういう時は、意外と頼りになるんだから！」

「うん……！　そうだね……！」

一瞬、「オタクロウ」というネーミングの由来について激しく問い詰めたい衝動に駆られたケイスケだったが、今はそんな突っ込みを入れている場合ではない、と思い直すと、

「揺れが起きたのは……多分、北の方角だと思う。新宿か、池袋のどっちかかな……？　よし、すぐに行こう！」

と言い、ユズと共に、急いで宮下公園を後にした。

現在時刻、１２時２５分。

3rd Day『神宮球場のバトル（1）―2』

――池袋、東洋アンズ前。

「イルダーナ！！　『アギダイン』！！」

突然、そう叫ぶ周防達哉の背中から、片手に白い剣を持ち、同じく白い鎧に身を包んだ、1体の『怪物』が現れた。

まるで達哉の背後霊の如き様相を示しているその怪物は、手に握った剣の刃に灼熱の炎を纏わせ、次の瞬間には、それを炎弾に変えて、勢いよく、目の前にいる1人の男――瀬多総司に向かって撃ち出した。

「……ッ！！」

今の今まで、その右手に装着した、『精霊牙』という刃付きの手甲で、達哉を切り刻もうとしていた総司だったが、達哉が発動させた『アギダイン』を見て、すぐに思考のベクトルを『攻撃』から『防御』へと転換させると、すぐさま、目の前に左手をかざし、何もない筈の空間から、青白く輝くタロットカードのようなものを取り出すと、

「アヌビス！　『マカラカーン』！！」

という声と共に、そのカードを握り潰し、まるでエジプトの壁画にでも描かれていそうな、金色の装備を身につけた、黒い犬面の『ペルソナ』を喚び出した。

瞬間、達哉のペルソナ、イルダーナが放った『アギダイン』と総司の体との間に、不可視の障壁――『マカラカーン』が展開され、２つの魔法が、東洋アンズ前にて激突する。

ドンッッ！！　という爆音が大気を揺さ振り、同時に、その空間から全ての空気を奪い去った。

それにより、２人のペルソナ使いが互いにぶつけ合った魔法は、その場で消滅した――訳ではなかった。

理由は、その片方である総司が発動させた、『マカラカーン』という魔法にある。

そもそもこれは、相手の魔法を『防御』する為ではなく、『反射』させる為の魔法なのだ――その強力な効果ゆえに、物理攻撃には一切効力を発揮しない、というのが欠点ではあったが。

「なっ……！？」

ゴォッ！！　という空気を焼き尽くす音と共に、今度は自分に向かって飛んできた炎弾を見て、慌てて、横に体を転がす事で、それを回避する達哉。

が、総司の反撃は、それでは終わらなかった。

「お兄さん、こっちこっち」

そんなふざけた声を聞いて、すぐさまその方向へと顔を向ける達哉だったが――すぐに、その目を大きく見開く事になる。

なぜならそこには、再び、達哉の体を切り裂く為に精霊牙を振りかぶっている、総司の姿があったからだ。

ギュォアッ！！　という音と共に、血肉を求める凶撃が、達哉の顔目掛けて放たれる。

「う、ぉ、おっ！！」

間一髪。

達哉は何とか、首を限界まで捻る事によってそれをかわすと、次には、すぐ近くにいる総司の衣服の袖を乱暴に掴み、そのまま、さながら柔道で言うところの一本背負いのように、１００キロ近くある総司の体を豪快に投げ飛ばした。

「……っ！！」

ドガッシャァアアアンッッ！！　という破壊音が、まるで花火を撃ち鳴らしたかのように、辺りに響き渡る。

総司が投げ飛ばされたその先には、１台の放置された軽トラックがあり――それが、投げ飛ばされた総司の体によって、まるでスクラップにかけられたかのように破壊されたのだ。

人類最強のペルソナ使いの姿が、軽トラックの残骸に埋もれ、見えなくなる。

が、それはほんの一瞬。

刹那、総司の体が軽トラックと衝突した時以上の轟音と共に、完全に形を崩した車体が、まるで爆発を起こしたかのように、その場で辺りに弾け飛んだ。

それによって発生した凄まじい衝撃波によって、大量の埃が巻き上がり、その場にいる全員の視界を奪う。

そして次には、非常にゆっくりとした足取りで、その大量に舞い上がった埃の向こう側から――まるで、何事もなかったかのように――涼しい顔をした瀬多総司が、姿を現した。

「……なるほど、最後に会った『あの時』より、ずっと強くなっているようだな」

それを見て、心の底からうんざりした様子で、達哉が言う。

対して、総司は薄く笑い、悪戯っぽく舌の先を出しながら、

「そりゃ、お互いさまでしょうが。……けど、残念ながら、周防さん。最初に言ったように、アンタじゃ俺には勝てませんよ」

と言う。

その言葉に対し、不可解そうに眉をひそめる達哉。

そんな彼に構わず、総司は言葉を続ける。

「それは、今のアンタは『向こう側』について何も覚えていない、というのも勿論ありますが――もう1つ、アンタじゃ俺に勝てない、決定的とも言える要因があるんですよ」

その場で何度か精霊牙を装着した右手を振り、ヒュン、ヒュン、と、聞く者にいやがおうでも不吉感を与える音を鳴らしながら、総司は言う。

「周防さん……俺とアンタとじゃ、『見ているモノ』が違う。……この言葉をちゃんと理解して、克服しない限り、アンタは絶対に、俺に勝つ事は出来ませんよ」

◆

◆

――新宿、神宮球場。

そのグラウンドのセンターに当たる位置で、幻魔クー・フーリンは、大の字になって倒れていた。

そして、そんな彼を見下ろす形で、そこよりも少し離れた場所で仁王立ちしている、１６歳の少年――有里淳（ありさとじゅん）。

どちらの方が優勢であるかなど、誰にでもすぐに分かりそうな構図だったが――しかし、追い詰めている筈の淳の顔色は優れない。

そして、

「……なるほど、見事な才能だ」

と、言いつつ――人工芝によって覆われた地面から、ゆっくりと上体を起こすクー・フーリンの表情もまた、とても追い詰められている者のそれとは思えなかった。

やがては、完全に地面から起き上がり、再び、両の足で地面を踏み締めるクー・フーリン。

「――そして、残念だったな」

腰に装着した鎧に付いている、僅かな土汚れをパンパンと払いながら、クー・フーリンが言う。

「あ？」

その台詞を受けて、何とも不愉快そうに眉をひそめる淳。

「……なんだ、そりゃ？　負け惜しみか？」

「フム、まぁ、そう受け止められても仕方はないだろうが」

コキ、コキ、と首を鳴らしつつ、鋭い視線を淳へと投げかけるクー・フーリン。

「しかし――君とて、薄々は分かっているだろう？　……今の1撃で、私を仕留められなかった事が、君にとって、どれほど大きな痛手であるのか、という事ぐらい」

「……」

「惜しかったな」

心の底からそう思っているかのように、クー・フーリンが言う。

「今のが――君が私に打ち勝つ事の出来る、最初で、最後のチャンスだ」

「……たった今まで、不様に地面に倒れながら空を見上げてた奴がそんな事を言っても、全く説得力がねぇよ」

眉間にしわを刻みながら、そのように言い返す淳。

しかし、言葉とは裏腹に、彼の顔には、現在の夏の暑さとは無関係な大量の冷や汗が流れ落ちていた。

「なるほど、それもそうだな」

意外にも、あっさりと淳の言い分を認めるクー・フーリン。

「では、言葉ではなく――行動によって、それを証明してみせるとしようか」

言って、

グッ……！　と、クー・フーリンは、その場で僅かに腰を落とした。

「……ッ！」

明らかに雰囲気が変わったクー・フーリンの様子を受けて、途端に、顔から流す冷や汗の量を倍にした淳もまた、慌てて僅かに腰を落とし、半身になってクー・フーリンを見据える。

大急ぎで臨戦態勢を取りつつ、淳は横目で、チラッと自分がいる場所よりも大分離れた位置へと目を向けた。

その視線の先には、ちょうどホームベースの辺りで、心配そうにこちらの様子を見ているハルの姿があった。

そんなハルに対し、こちらから「大丈夫です」と視線で伝えつつも、淳は、果たして、今から自分がクー・フーリンと戦って、彼女に危害が及ぶ事はないだろうか、と僅かに心配になった。

ついでに、ハルよりもまた少し離れた位置にて、地面から生えるようにしてその存在を主張している、禍々しい石製の巨大な門が少々気になったが――それについては、今は考えない事にした。

……少なくともあの門が、自分やハルにとって都合のいいものである筈がない、という事ぐらいは分かったが。

「安心しろ」

不意に、そんな事を考えている淳に対して、クー・フーリンが声をかけてきた。

「……ッ」

それを受けて、ほんの少しとは言え、隙を見せてしまった自分を激しく責めつつ、淳は慌てて、再びクー・フーリンへと顔を向ける。

「あの『歌姫』の身の安全は、私にとっても決して無視できない、非常に重要な事項だ。少なくとも、こちらから意図的に危害を加えるような真似は――必要でさえなければ――決してしない」

或いは、つい先程、クー・フーリンの背中を地面へと叩きつけた淳の1撃の成功の裏には、そういった要素も少なからず関わっているのかもしれない。

というのも――もし、ハルがこのグラウンドにいなければ、クー・フーリンは、先の野外音楽堂にて初めて出会った時と同じように、『妖花烈風（ようかれっぷう）』などの大規模な魔法で、一瞬で淳の命を刈り取っていた可能性も十分に考えられるからだ。

「……よく言うぜ。ついさっきまで、あの人の足を真っ二つにしようとしてた奴がよ」

吐き捨てるように、淳が言う。

「仕方がなかろう」

そう応じるクー・フーリンの言葉には、罪悪感のかけらもなかった。

「先程までは素直に私に従っていたというのに、どういう訳か――突然、やはり私と共に魔界に行きたくはない、と言いだしたのでな。むしろ、切ろうとしたのが腕でないだけ――否、命を取ろうとしなかっただけでも、随分マシだと思うが？」

「……ん？」

クー・フーリンの台詞を聞いた淳は、途端に、何か引っ掛かったかのような顔をした。

「……ちょっと待て。お前、今、何て言った？」

「……？　だから、命を取らないだけマシだと――」

「違う、そこじゃねえ。もう少し前だ」

苛々した様子で、淳が言う。

「お前と一緒に、魔界に行きたくはない――って、ハルさんは、本当にそう言ってたのか？」

「……ああ、言っていた」

クー・フーリンの表情は、如何にも「それがどうした？」とでも言いたげなそれだった。

「そうか……」

呟き――その後、しばしの間、淳は無言だった。

しかし、

やがて、

有里淳は、

「はは……」

と、笑った。

心の底から沸き上がってきた歓喜を、とても抑え切れないかのように――笑った。

そして、改めて、ハルがいる場所へと目を向ける。

先程までは緊張感に満ちていた表情から一転して、今度は突然、その顔に笑みを浮かべている淳に対して、ハルは実に戸惑った様子を見せていたが――そんな事は、淳にはどうでもよかった。

嬉しかった。

ただ、嬉しかった。

野外音楽堂での戦いで、ハルがクー・フーリンと共にその場を後にした時、淳は惨めにも気を失っていたが――それでも彼は、おおよその事情を把握していた。

つまり――ハルは、自分をクー・フーリンから守る為に、わざとその身を差し出したのだ、という事を。

自ら――まだまだ先のある残りの人生を投げうってまで、自分を助けたのだ、という事を。

（だからこそ、俺は不安だった）

淳は思う。

（俺がしている事は、もしかしたら、あの人の『決意（おもい）』を踏みにじってるだけなんじゃないかって。……綺麗事だろうと何だろうと、大した力もない以上、俺はただ黙って、あの人が命懸けで守ってくれた自分の命を、大事にするべきなんじゃないかって）

勿論、普通に考えれば、こうした淳の、ハルを救出する為の行為は、間違いでも何でもない――むしろ、大多数の人間が、彼が圧倒的に正しいと支持する筈だ。

しかし、その一方で――それこそ、数十分前にアツロウが言ったように、このままハルの覚悟を無駄にせず、自分の命を大事にする、という選択がある意味で『正論』である事も確かだった。

その事は、淳も理解していた。

残酷だろうと薄情だろうと、そんな事は関係ない。

現実問題、ハルを連れて行ったクー・フーリンの力は余りにも強大で――そして、そこからハルを救い出せるだけの力を自分が持っていない以上、自分がどれだけ必ず助けると言ったところで、結局、それは『綺麗事』でしかないのだから、と。

しかし、

（……これでもう、そんな事をいちいち考える必要はなくなった）

なぜなら、

（もし、目の前にいるこのロン毛野郎の言ってる事が正しいとした

ら、ハルさんは、1度は俺の命を救う為に飲みかけたコイツの要求を、確かに『拒否』した筈なんだ……！　つまりあの人は、結局、死にたいなんてこれっぽっちも思っちゃいねえって事だ！！）

それが、淳には嬉しかった。

どうしようもなく――嬉しかった。

実はと言うと、初めてハルに出会った時から、淳はひそかに心配していたのだ――常に、その顔のどこかに、全てを諦めたかのような表情を浮かべているハルを見て、もしかしたらこの人は、昔の自分の母親と同じように、生きるのを諦めているんじゃないか、と。

しかし、結局のところ、それは杞憂（きゆう）だった。

春沢芳野は、生きる事を諦めてなどいなかった。

「……何だ？　何がおかしい？」

そんなクー・フーリンの疑問の声さえ、淳の耳には届いていなかった。

「は、はは……」

良かった、と淳は思った。

（俺は……間違ってなんかいなかった……！）

つまりは、そういう事。

「ははは、は……！」

有里淳が、春沢芳野を助ける為に、ボロボロの体を動かしてまで
ここまで駆け付けてきたのは、正解だったのだと、

自分は、彼女を助けようとしてもいいのだと。

たったそれだけの事を、
たったそれだけの事実を、

淳は、ハッキリと確信した。

そして、

淳は、

「ははははは っ！！　たっまんねぇな！！　マジでたっっまんねぇなあオイ！！　何だよ何だよ、結局は、超簡単な話だったんじゃねぇかよ！！　ははははは っ！！」

「なぁっ……！？」

突然の淳の豹変（ひょうへん）振りに、完全に呆気に取られるクー・フーリン。

離れた場所から2人の様子を見守っていたハルもまた、似たような表情を浮かべている。

しかし、淳の笑いは止まらない。

止まる訳が、ない。

「あはははははははははははっ！！　はははははははははははははははははっっ！！」

それは、

その様は、まるで――『東京封鎖』が決行される前夜に、彼が青山霊園にて出会った、『ある男』のようだった。

「なっっるほどなぁ……！　何となく分かったぜ、オッサン！！　理由はともかく――あの時、アンタが一体、どういう気持ちだったのかがな！！」

ガンッ！　ガンッ！　ガガガンガンッッ！！　と、その場で何度も、胸の前で握り込んだ両拳を打ち付ける淳。

「……気でも狂ったか？」

片方の眉を吊り上げながら、そのように尋ねるクー・フーリンだったが――しかし、淳は応じない。

応じなければいけない理由など、ない。

やがて、

グンッ！！　と、

淳はその場で、まるでクラウチングスタートを切る前の短距離走者のように、上体を低くする。

「……いいんですよ。ハルさん」

勿論、現在の自分とハルとの間にある距離を考えれば、普通ならば、その声がハルの耳に届く筈もないが――しかし、不思議と淳は、自分のこの声は、間違いなく彼女に届いているだろう、と確信していた。

「それでいいんですよ。アンタは、生きていていいんです。他の奴らと同じように、嬉しい時には笑ったり、ムカついた時には怒ったり、悲しい時には泣いたりしてもいいんです。……それぐらいの権利は、貴女にもあるんです」

グググッ……！　と、少しずつ、前に出した足の親指へと、全ての脚力を集中させていく淳。

「逆に――それを奪う権利なんざ、誰にもありません」

だから、と言って、次に淳は、右手に岩の如き硬さの拳を形成し、それをゆっくりと、後ろへと引いた。

そして、

「貴女が『それ』を望んでいると分かった以上――もう、俺は迷い

ませんし、何も恐れません。誰にも負けませんし、誰にも屈しません。だから……とにかく安心して下さい。何と言ったって――」

ドッッ！！　と、

溜めに溜めた脚力を親指から一気に爆発させて、淳は、弾丸のような勢いでクー・フーリンの元へと飛び込んでいく。

「自分で言うのもどうかと思いますが――何と言ったって、こうなった俺はメチャクチャ強いですからね！！　たかが頭のいかれた悪魔の1匹や2匹、どうって事はありませんよ！！」

「む、ぅっ……！」

なぜ、こうも突然に淳の様子が変わったのか、クー・フーリンには理解出来ない。

理解出来ないが――それでも、今、目の前にいるこの少年に、決して隙を見せてはならない、という事ぐらいは分かった。

これまでの自分の生涯（しょうがい）における、万を越える戦闘の経験が、その事を、クー・フーリンに本能的に理解させていた。

（――となれば、こちらも、気持ちを切り替えねばなるまい……！　この男は、他の有象無象（うぞうむぞう）の人間達とは、明らかに『格』が違う！！）

先程まで開いていた距離を、淳が半分ほど詰める頃には既に、クー・フーリンにも迎撃の態勢が整っていた。

相手から見て半身になって構え、剣の切っ先を地面に向けて構える――という、さながら、過去における日本（このくに）の『侍』を思わせるその構えが意味するのは、

（問題ない……！　ある程度威力を抑えれば、『歌姫』に攻撃の余波が及ぶ事もない筈だ！！）

淳の右拳に凝縮されるのは、全てを凍らせ、破壊せんとする、『氷』の魔力。

対して、クー・フーリンが握る剣の刃に形成されるのは、あらゆる物を切り裂き、塵（ちり）に変えんとする、『嵐』の魔力。

そして、

次の瞬間、

「『氷の乱舞』！！」

「『妖花烈風』！！」

轟音が、炸裂した。

互いの魔法が正面から激しく衝突し、一瞬、神宮球場という場所

から、全ての音が消え去った。

3rd Day『秋葉原のバトル（1）』

――秋葉原。

木原篤郎（きはらあつろう）。

イアルの信者。

2人の戦いが開始されてから、既にいくらかの時間が経過していた。

と、いう事はつまり、それに応じて、戦況もある程度は変化しているという事であり――だからこそ、

「ハァッ……！　ハァッ……！」

と、2人の内の片方であるアツロウは、そんな風に、苦しそうに息を切らしている、という訳だ。

「くそっ……！」

思わず、そのように毒づく彼の全身は、大量の埃や汗で汚れきっており、服の襟から露（あらわ）になっている素肌の部分には、いくつもの切り傷や擦り傷がついていた。

唇の端からは赤黒い血を流し、相変わらず、肩を激しく上下させるほど大きく酸素を出し入れしているその様からも、現在、彼がどれ程の疲労をその身に蓄積させているのかが伺える。

そして、

「……本気で勝てるとでも思っていたのか？」

と、平坦な口調で彼に問い掛けるイアルの信者の表情はというと、アツロウとは逆に、如何にも涼しげなそれだった。

この真夏の炎天下の中、流石に汗の一滴もかいていない、という事はなかったが――それでも、アツロウとは違い、彼は息切れもしていなければ、唇の端から血を流していたりもしなかった。

これまでの、２人が戦うようになった経緯を知らない人物でも、今の彼等の様子を見たならば、１００人中１００人が、どちらが優勢で、どちらが劣勢なのか、一目で分かってしまいそうな――そんな構図である。

「たかが、高校生のガキが……。少し特別な力を持ったくらいで過信するから、こんな事になる」

軽蔑しきった表情でアツロウの事を見据えながら、イアルの信者が言う。

「……ッ」

思わず、ギリッ……！　と奥歯を噛み締めるアツロウ。

と、そんな様子の２人ではあったが――実はと言うと、今、この秋葉原にいるのは、厳密にはこの２人だけではなかった。

いや、今、そこにいる『人間の数』は何人か、と問われたら、それは間違いなく彼等『2人』なのだが――より正確に言うならば、そこには2人の『人間』と、その他に、4体の『怪物』が存在していたのだ。

怪物――通称『悪魔』。

木原篤郎に、イアルの信者。

彼等は、それらの悪魔を使役し、自らの手足として操る、『悪魔使い』――という存在なのである。

それぞれが、自分の傍に2体ずつ――悪魔を従えている。

が、同じ『悪魔使い』であろうとも、そこには当然、人間によってある程度、能力の『個体差』というものがあり――当然その差は、直接戦う事によって、もっとも強く表れる。

そして、アツロウとイアルの信者の場合、その『差』が表れた結果が、現在の『この状況』、という訳だ。

「……」

グッ、と口元の血を拭うアツロウ。

最初こそは、ある程度は善戦できた。

が、途中から、段々と『ごまかし』が効かなくなってきた。

つまりは、戦闘が開始されてから、時間が経つにつれて、段々と

アツロウの方が追い詰められていったという訳だが――理由は明白。

「分かるか？　これが、私と貴様の、悪魔使いとしての経験（キャリア）の差、という訳だ。貴様が悪魔使いとして目覚めたのは、恐らくつい最近の事だろうが――私は、それよりもずっと前から、既に悪魔使いとして覚醒していたのだよ。……それでなくとも、ただの高校生かそこらのガキである貴様と、ベル・イアル様の配下である私とでは、そもそも基本能力（スペック）の方から、差があり過ぎる」

要は、そういう事。

同じ分野で勝負する場合、経験で勝っている者の方が、相手よりも有利に事を進める事が出来る――小学生でも分かる方程式だ。

勿論、アツロウにしても、それは理解していた。

が、しかし、

彼は、

「うる……せぇ……！」

と、言う。

強い意志のこもった視線を、イアルの信者に投げかけながら、言う。

「大体……」

ベッ！　と、血の混じった唾を地面に吐き出すアツロウ。

「お前が、俺よりもずっと、悪魔使いとして過ごしてきた時間が長いって事も……！　お前が、そのベル・イアルって奴の配下であるって事も……！　何１つ……俺に勝てる根拠にはなってないだろうが……！」

「……」

対して、イアルの信者は、しばらくの間、そんなアツロウの事を、実に冷めた目で見つめた後、

「生意気なガキが……」

と、言う。

「貴様のように、悪魔使いに覚醒したばかりの人間は、全員そうだ……。多少、特別な力を得られたというだけで、己の力を過大に評価し、つけあがる……」

ぞぞぞぞっ……！　と、イアルの信者を中心に、目に見えない、得体の知れない負のエネルギーが、辺りに拡散していく。

「殺し合いという名の『戦場』で生き残るのは、決まって『強い者』か――あるいは、冷静に状況を見定め、時には相手に背を向けて逃げ出す事も躊躇わない『賢い者』だけだ。……貴様のような、勇者気取りの『馬鹿』が最終的にどうなるのか――昔から、相場は決まっている」

次には、スッ……と、開いた右手をアツロウへと向けるイアルの信者。

「もし、ここまで痛みつけても尚、それが分からぬというのなら……これから、私が教えてやろう」

下手すれば、その言葉自体が1つの凶器であるかのような、冷たい刃物の如きイアルの信者の台詞にも、しかし、アツロウは全く臆する様子を見せない。

「……やってみろよ」

自分のようなパソコンオタクには似合わない台詞だと自覚しつつも、アツロウは言う。

「出来るもんならな」

「言われなくとも」

直後だった。

「『マハザン』」

そんな、殆ど独り言のような、小さな呟きがアツロウの耳に届くと同時に――彼に向けられたイアルの信者の右手から、一陣の烈風が巻き起こった。

それは不可視の刃となって、その軌道上にある障害物を切り裂きつつ、真っ直ぐアツロウへと向かっていく。

このまま黙ってその攻撃を受け入れれば、間違いなく、アツロウの体は、さながら、スライスされたトマトのようになってしまうだ

ろう。

が――勿論、そんな残酷な未来を甘んじて受け入れる程、彼は自分の人生を投げ捨ててはいない。

「……ッ！　『雷の乱舞』！！」

そんな叫びと共に、彼の右手から、幾つもの雷撃が、まるで蜘蛛の巣を張るかのように放たれる。

互いの魔法が衝突するまで、一瞬もかからなかった。

それぞれのＣＯＭＰにセットされた、イアルの信者の『嵐』を司るスキルと、アツロウの『雷』を司るスキルとが、互いの威力を打ち消し合い、轟音と共に、その場で大きく爆ぜる。

同時に、ゴッ！！　と、尋常ではない衝撃波が辺りに発生し、それによって舞い上がる砂埃に視界を奪われないよう、慌てて左腕で顔を守るアツロウ。

次に動いたのは、イアルの信者のすぐ脇にいる、彼の仲魔――龍王『ペンドラゴン』だった。

緑色の鱗で覆われた蜥蜴を、ライオン並に巨大化させたかのような風体のその悪魔は、アツロウの頭をたった一口で丸呑みにしてしまいそうな程に大きい口を限界まで開き、その喉の奥から、大量の炎弾を吐き出す――通称『炎の乱舞』なる魔法を発動させる。

それを見て、アツロウは、

「頼む！！」

と――すぐ近くにいる、自分の仲魔――幻魔『トラロック』に対し、そんな、指示とも言えぬ指示を叫んだ。

が、ちょうどランプの精とでも言うべき、気体とも固体ともつかない、人型の、青色の煙のような姿をしたトラロックは、そんなアツロウの叫びの意図を正確に理解したらしく、その手に持った壷から大量の炎弾を撃ち出すというやり方で――同じく、『炎の乱舞』でペンドラゴンの魔法を撃ち消そうとする。

再び、爆発。

そして、爆音。

が、元々『炎の乱舞』という魔法が、本来は正確な狙いをつけにくい――どちらかというと、複数の炎弾を撒き散らすという形で、広範囲に効果を及ぼす為の魔法である為か、ペンドラゴン、トラロックの両者が放った炎弾の全てが、途中で相殺された訳ではなかった。

早い話――その内の炎弾の幾つかは、相手の魔法を素通りし、そのまま、互いの陣営へと飛来していったのだ。

「お……っと！！」

まるで、地上で巨大な花火が爆発したかのように、辺りに炎弾が四散するのを見て、慌てて、少し離れた場所にある電柱の陰へと飛び込むアツロウ。

ちなみに相手の方はと言うと、再び、イアルの信者が『マハザン』を発動させる事によって風の障壁（バリア）を形成し、向かってきた炎弾を全て掻き消していた。

体中から大量の汗を流しつつ（それが夏の暑さや疲労によるものなのか、あるいは冷や汗なのかは、当のアツロウにも分からなかった）、その光景を電柱の陰から見ていたアツロウは、

（ったく……！　あの風の魔法が厄介だな……！　攻撃にも、防御にも転じられる。俺の『雷の乱舞』と違って、随分と使い勝手のいい魔法を持ってやがる……！）

と思い、何とか、例の風の魔法――『マハザン』を打ち破り、イアルの信者にダメージを与える事は出来ないだろうか、と思考を巡らせる。

（普通に中距離からポンポン魔法を撃ってるだけじゃ、決定的なダメージは与えられそうにねぇ……！　となると、打開策があるとすれば、相手も迂闊には魔法を使えない接近戦って事になるんだろうが――かと言って、俺にはジュンみたいな運動能力も格闘術もないし……。何か一工夫する必要があるな……！）

「――おいおい、最初の頃の威勢はどうした？　隠れてばかりでは、私を倒す事は出来んぞ？」

知恵熱が出るのでは、とばかりに頭を唸らせるアツロウの耳に、相変わらず、人を小馬鹿にするかのようなイアルの信者の声が届く。

（くそ……！　好き勝手言いやがって……！　こちらと、つい最近までごく普通の高校生だったんだよ！　ジュンの奴じゃあるまい

し、そう簡単に『こんな状況』に慣れてたまるかってんだ！）

そう思いつつ、電柱の陰からキッ！　とイアルの信者を睨みつけるアツロウだったが――そこで彼は、ふと、ある違和感に気付いた。

先程まではイアルの信者の側にいた、ペンドラゴンとは別の、赤色の体に、人型の象のような姿をした、彼のもう1体の仲魔――鬼神『ナラギリ』の姿が、どこにも見当たらないのだ。

が、その疑問に対する答えは、すぐにやって来た。

「……っ！！」

――と、そのように、突然、アツロウが自分の頭上へと視線を向けた理由は、あえて言うなら「なんとなく」、と言うより他にない。

本来、そういった第六感的なものは、普段から余り信じないようにしているアツロウだったが――今回は、それが正解だった。

なぜなら――彼が自らの頭上を見上げたその先には、まるで忍者のように電柱の側面に足を貼り付けたまま、今まさに、アツロウの頭蓋を叩き割る為に、固く握り締めた拳を、背中の後ろへと振りかぶっているナラギリの姿があったからだ。

無論、不意を突かれたからと言って、それを黙って見ている筈もなく、すぐに回避動作に移ろうとするアツロウではあったが――

（やっべ……！　間に合わ……！！）

彼が行動に移すよりも、頭上から、ナラギリが『捨身の一撃』を

繰り出す方が、僅かに速かった。

（くそっ……！　こんな所で……！）

覚悟を決め、いずれ来るであろう激痛に――いや、もしかしたら、痛みなど感じる暇もないかもしれないが――耐える為、唇を噛み締め、固く目を閉じるアツロウ。

やがて、ナラギリの岩の様に握り込まれた拳は、そのまま、アツロウの頭部を、その白いニット帽の上から、粉々に打ち砕いた――かのように見えた。

が、結局は、そうならなかった。

刹那、ナラギリの拳が自らの体に触れるか、触れないかというところで――突然、自分の体が、フワッと宙に浮かされる様な感覚を味わうアツロウ。

それが、トラロックとはまた別の仲魔である、霊鳥スパルナが、自分の肩をそのかぎ爪で優しく掴み、空中に引き上げた事によって生じた感覚であるとアツロウが理解するのに、いくらかの時間が必要だった。

人間界に存在する、普通の鳥よりも遥かに大きいサイズを誇るだけでなく、悪魔でもあるスパルナにしてみれば、人間1人を掴んで空中に浮かべる事など、造作もない。

「油断、スルナ！」

そんなスパルナの口から、一瞬とは言え相手に隙を見せた主人（アツロウ）に

対し、叱責の声が飛ぶ。

「あ、ああ、ワリィ、助かった！」

言って――宙に吊り上げられたまま冷や汗を流すアツロウを見て、離れた場所からその様子を見ていたイアルの信者が、さもおかしそうに笑った。

「我々『悪魔使い』にとっては道具同然の悪魔に命を救われるとは、情けない奴もいたものだ――その仲魔がいなければ、君はきっと、今頃はこの世にはいなかっただろうな。えぇ？」

アツロウがスパルナによって地面に下ろされるまで、ひとしきり、冷たい、甲高い声で笑っていたイアルの信者だったが――やがて彼は、１度は懐にしまったＣＯＭＰを再び取り出すと、

「さて……こうして君をいたぶり続けるのも悪くないが――あいにく、私も際限なく暇な訳ではない」

と言い、一体、何のつもりなのか――自分の仲魔であるペンドラゴン、ナラギリの２体を、バシュッ！　という音と共に、ＣＯＭＰに帰還させたではないか。

「モタモタしていたら、『歌姫』を獲得したベル・デルに、我が主の先を行かれてしまうのでな――であるからして、私の方もさっさと、ここで君を『交渉材料』として捕らえて、あの有里淳（ありさとじゅん）とかいうガキを、こちらの手駒にする為の準備を整えさせて貰おう」

「んだと……！」

と、

先のイアルの信者の台詞に対し、アツロウが何か文句を言う前に、変化は起きた。

再度、バシュッ！！　という音がアツロウの耳に響くと同時に、イアルの信者のＣＯＭＰから、新たに１体、別の悪魔が召喚されたのだ。

「……！？」

その悪魔が、これまで自分が見てきた他の悪魔とは明らかにレベルが違うであろう事は、アツロウにもすぐに分かった。

先程まで召喚されていたペンドラゴンと同等か、或いはそれ以上の体格。全身を黄色い体皮で覆い、豚の頭に、蜥蜴（とかげ）の体を持つ外見は荒々しくもあるが、同時に、金色の装飾が施された冠（かんむり）を被り、同じく金色の杖を右手に握ったその姿は、ある種の優雅さも兼ね備えていた。

その身に纏う、ただらなぬ威圧感を辺りに放ちながら、やがて、その悪魔が口を開く。

「ククククッ……！　我は魔神オーカス。死を司る神だ……！」

やがて、そのオーカスという悪魔は、傍らにいるイアルの信者へと顔を向ける。

「さぁ……我をこの世に喚び出した者よ、一体、我に何を望む？」

それを受けて、イアルの信者は、クイッと顎でアツロウの方を示しながら、

「アイツを殺せ」

と、簡潔に言う。

自らの殺戮の欲求を満たす為の対象を示された事で、ニヤァッ、と、その顔に残忍な笑みを浮かべるオーカス。

「承知した……！」

やがて――ゆっくりと、自分の方に向けて足を動かし始めたオーカスを見て、元々高まっていた危機感を、更に極限にまで引き上げるアツロウ。

ここへきて、突然、その姿を現したオーカスに対抗する為に、彼もまた、行動を開始した。

（仕方ねぇ……！　出来れば、『コイツ』は使わないでおきたかったけど……！）

実は、

今回、イアルの信者と戦闘を行うよりも以前に、アツロウは、デビルオークション――通称『デビオク』と、『邪教の館』という、２つのＣＯＭＰの機能を駆使して、新たに強力な仲魔を１体、手持ちに加えていた。

が――彼はあえて、ここまで、その仲魔を召喚していなかった。

勿論、それには理由がある。

そもそも今回、アツロウが『その悪魔』を仲魔にしたのは、いずれその力を、仲間（悪魔の方の『仲魔』ではなく、淳やユズ、ケイスケなどの方の『仲間』だ）の内の誰かが、自分達を現在のような状況に陥れた、例の魔剣士――クー・フーリン戦う際に、きっと必要になると思ったからだ。

ここで1つ説明しておきたいのが、彼のＣＯＭＰと、淳やユズが持つＣＯＭＰとのデータは共有されている（ケイスケのＣＯＭＰについては確認していない為、アツロウには何とも言えないが）、という事だ――つまり、ここでアツロウが『その悪魔』を召喚してしまうと、離れた場所にいる淳やユズなどが、いざクー・フーリンと遭遇した際に、『その悪魔』を召喚出来なくなってしまうのである。

だからこそアツロウは、ここまで、『その悪魔』を召喚してはこなかった。

が、新たな『敵』としてイアルの信者が召喚した、邪神オーカスなる悪魔から放たれる威圧感を受けて、アツロウは最早、そんな事を言っている場合ではないと悟った。

ややあって、彼は、

「お前ら、一旦戻れ！！」

と言って、先程のイアルの信者と同じように、トラロック、スパルナをＣＯＭＰに戻すと、新たに、『その悪魔』を召喚する。

「来い！　マハカーラ！！」

アツロウの声が辺りに響き渡るのと、ＣＯＭＰからまゆばい閃光とが放たれるのと同時に、彼の目の前に、『その悪魔』――魔神『マハカーラ』が現れる。

「人間、か……」

と、マハカーラは言う。

初めて仲魔として召喚したからか――その口調にはどこか、アツロウの器を見定めるかのような響きがあった。

「我は魔神マハカーラ。人間よ、貴様が我を従える力を持つならば、我は千の刃となり、敵を討とう」

そんなマハカーラに対し、しかしアツロウは、

「……生憎だけど、普段は何の変哲もない高校生である俺に、お前を従えられる程の力があるかどうかなんて、我ながら、かなり怪しいと言うしかねぇよ」

と言う。

そう、

確かに、この17歳の少年は、普段は何の変哲もない、ただの高校生でしかない。親友である有里淳のように、何かとんでもない才能が眠っているという事はないし、背中から突然、白い翼が生える等という事も、勿論ない。そんな、絶体絶命の状況に追い込まれた

週刊少年ジャンプの主人公のような立ち位置には、彼はいない。本当の、本当の、本当に――傍から見た通りの、ただのパソコンオタクでしかないのだ。

しかし、

「けど……頼む」

マハカーラに向けて、アツロウが言う。

「今だけでいい。今だけでいいから……。お前の力を、俺に貸してくれ！　俺は何としてでも、大事な親友（ともだち）の為に、あそこにいる『敵』を倒さなきゃならないんだ！」

しかし――木原篤郎。

その心に、命を懸けてでも守るべき、1人の親友（とも）の姿がある限り、

彼の精神（こころ）は、肉体（からだ）は、そう簡単に砕かれはしない。

３ｒｄ　Ｄａｙ『東洋アンズ前のバトル（２）―３』

――池袋、東洋アンズ。

合図と呼べるような合図はなかった。

片方が動いた時には、既に、もう片方も動いていた。

やがて、

瀬多総司（せたそうじ）と、周防達哉（すおうたつや）。

『ペルソナ使い』としてはこの世でトップクラスの実力を持つ２人が、真正面から激突する。

総司の右手に装着された、刃付きの手甲――『精霊牙』が空を切り、

達哉の右手に握られた、身の丈程もある炎剣――『レーヴァテイン』が唸（うな）る。

刹那。

ゴッ！！　と、

東洋アンズ前の空間に、強烈な衝撃波が発生した。

その余りの激しさたるや――激突した２人よりも離れた場所にあ

る東洋アンズの外壁に、ビシッ！　と、大きな亀裂が出来る程だった。

が、それで終わりではない。

終わりな訳がない。

ズギャ！！　ギギギギギッ！！　ギギギギンッッ！！　と――休む間もなく、総司と達哉、互いの武器が、音さえも置き去りにしかねない程の速さで、その場で何度も標的へと襲い掛かり、そして、弾かれる。

音速のジャブを放つプロボクサー顔負けの、さながら、マシンガンの様な速さで何度も精霊牙を突き出す総司も凄まじいが、重量ではそれよりも遥かに勝るレーヴァテインを、似たような速さで振り回す達哉もまた、恐ろしい。

が、２人の戦いは、ただ近距離から武器を打ち付け合うだけには留まらない。

武器を使用するのと同じぐらいの頻度で――同じぐらいの速さで、時には炎の波が、氷の弾丸が、風の刃が、雷の槍が、２人の内のどちらかから放たれ、相手へと向かっていく。

主導権争いをしていた最初の頃とは違い、今度は、ペルソナのスキルも積極的に織り交ぜながら戦う２人。

が――互いが、それら全てを完全に無効化できる程の実力を持っているが故に、中々勝負が決まらない。

人知を超越した両者の力が激突する度に、２度、３度と、何度も衝撃波が発生し、その度に、辺りにある幾つもの瓦礫が、まるで爆発した際に飛び散る手榴弾の破片のように、辺りへと吹き飛んでいく。

そして、

「う、わわっ……！！」

現在、この東洋アンズ前にいる、３人目の人物――通称１０―ＢＩＴと呼ばれる男は、そんな幾つもの瓦礫の弾丸に頭を吹き飛ばされないよう、必死の思いで両腕で頭部を覆いながら、少しでも総司と達哉が戦っている場所から離れようとしていた。

そんな１０―ＢＩＴの様子を、視界の端でとらえた達哉は、１度、チッと面倒そうに舌打ちすると、

「もう少し離れてろ！！」

と、手短に叫んだ。

それに対し、離れた場所で、その指示の通りに行動しようとしている１０―ＢＩＴの口から、「動くなと言ったり、離れろと言ったり、一体全体、貴方は僕をどうしたいんだ！？」という、至極もっともな抗議の声が聞こえてきたが、それを無視して、達哉は、

「いくぞ――フェンリル！！」

という声と共に、『運命』のアルカナに属する、赤い体毛を持つ巨大な犬のような外見をしたペルソナ、『フェンリル』を召喚する

と、

「『ファイアストーム』！！」

と叫び、総司に向けて、灼熱の炎の嵐を発生させた。

まともに食らえば当然、皮が爛れ、肉が焼け焦げてしまうだろう――いや、それどころか、即座に命を失ってもおかしくはない。

しかし、

それに対して総司がとった行動は、それらのリスクを加味した上で考えれば、およそ考えられないようなものだった。

一瞬、ニヤッ、とその顔に微かな笑みを浮かべる総司。

そして、次の瞬間、

――ッッドン！！　と、

何と総司は、螺旋を描くその炎の嵐を避けるどころか――自ら、灼熱の世界へ向けて、大きく足を踏み出したのだ。

「……ッ！！」

それを見た達哉は、流石に驚きを禁じえない様子の表情を自らの顔に浮かべながら、

（クソッ……またか！！）

と、狼狽（ろうばい）する。

そんな達哉の目前で、一瞬も経たない内に、その全身を炎の渦の中へと飛び込ませる総司だったが――再び姿を現すのも、それと同じくらい速かった。

しかも驚くべき事に、あれだけ激しい灼熱の世界を通ってきたにも関わらず、その体には殆ど、ダメージらしいダメージが見当たらない。

いや、勿論、全くの無傷という訳ではなく、所々に、それなりに深そうな火傷を負っていたりもするのだが――それぐらいの怪我は日常茶飯事の生活を送っている瀬多総司の事、その程度の事で足を止めたりはしなかった。

次には、

「――らぁっ！！」

という気迫の声と共に、総司は、達哉の顔目掛けて、勢いよく精霊牙を振るう。

「ちっ……！」

若干、不意を突かれたとは言え、そこは流石、周防達哉と言ったところか――その場で大きくバックステップする事で、達哉は、何とかその一撃を回避する。

が、

「まだまだですよ」

という言葉通り――総司の攻撃は、その程度では終わらなかった。

彼は、空いている左手に青白く光るカードを出現させ、一瞬の内にそれを握り潰すと、

「ナラシンハ！！　『五月雨斬り』！！」

という声と共に、顔はライオンで、体は人間のような姿をしたペルソナ『ナラシンハ』を召喚すると、間断置かず、『五月雨斬り』という強力な物理スキルを発動させる。

後ろへと飛ぶ達哉を追う形で飛んでいく、幾筋もの斬撃。

「ぐ、ぅっ！！」

勿論の事、それを何とか避けようとする達哉だったが、元々取っていた回避動作が終わらない内に追撃をかけられた、というのが悪かったのだろう――後一歩という所で僅かに回避が間に合わず、ナラシンハの『五月雨斬り』によって放たれた幾つもの斬撃の内の１つが、達哉の左肩の一部を、大きくえぐり取った。

「――――っ！！」

比喩でも何でもない。文字通りの意味で、肩の肉をゴッソリと持っていかれたのだ――みっともなく叫び声を上げたりはしなかったが、だからと言って、それで痛みが和らぐ訳ではない。

「は、ぁっ……！！」

堪らず、口から大量の酸素を吐き出す達哉。

恐らく、心臓の弱い人間が今の達哉の左肩を見たならば、余裕で即座に気を失えてしまうであろう程に、彼が受けた傷は深かった。

肩の中央辺りから、丁度腕の向きと平行に、一直線に――まるで段ボールをカッターで乱暴に切り裂いたかのような傷が、そこにはあった。

元々その部分を覆っていた黒い戦闘服は勿論、体皮や筋肉までもが完全に切断され、その下の、何本もの赤黒い血管や、黄色い脂肪の層に――果てには、白くて固い、骨のようなものさえ見えた。

「……ッ」

試しに左腕を動かそうとしてみる達哉だったが、残念ながら彼の左腕は、既に、まともに機能しなくなっていた。

いや、厳密には、握り拳を作るぐらいの事はかろうじで出来るのだが――そこから肘を動かし、腕全体を思い通りに動かすという動作が、全く出来なくなっていたのだ。

笑えない。

如何に周防達哉と言えども、この状況は、全く笑えなかった（もっとも、彼は元より、滅多な事では笑顔を見せたりはしない性格ではあったが）。

だからこそ、すぐに達哉は、

（マ……ズイ、すぐに回復を――！）

と思い、ペルソナの回復系魔法でその傷を癒そうとしたのだが、残念ながら、そんな彼の意図を読んだのか、

「させませんよ！！」

という言葉と共に、更に激しさを増した総司の猛攻によって、それさえも叶わなかった。

「ちぃっ！」

忌ま忌ましそうに舌打ちしつつ――何とか、右手に握ったレーヴァテインだけで、そんな総司の攻撃を防いでいく達哉。

が、

（クソッ……！　流石にコイツ相手に、片手だけじゃ分が悪過ぎる！！）

と、達哉が思った通り――彼は、例の左肩の傷を負う前ほど、総司の攻撃に渡り合う事が出来なくなっていた。

ズバッ！　ブシッ！　と、時折、その体に刻まれる小さな切り傷などがいい証拠である。

「どうしたんですか？　周防さん――さっきよりも随分、動きが鈍くなってますよ」

理由など、分かりきっている癖に――達哉とは違い、実に涼しげな表情のまま、総司が言う。

そんな彼の声を聞きながら、達哉は考える。

疑問を、感じる。

（どう、して……）

左肩の傷口からの出血と、総司の猛攻を防ぐ度に蓄積される疲労のせいで、自らの思考が段々と半濁していくのを自覚する達哉。

（どうして……さっき……コイツは、フェンリルの……『ファイアストーム』に……対して……真っ正面から……突っ込んだ？　そして……何故、その結果として……殆ど……ダメージらしいダメージを……負っていない！？）

不遜な考えかもしれないが――達哉は、自分の『ペルソナ使い』としての実力は、他の者達のそれよりは遥かに『上』である、と自覚していた。

自意識過剰、と言われればそれまでかもしれないが――達哉に言わせれば、自らの力を認め、信じるというのも、立派な『強さ』の内の１つだ。

少なくとも、自分に自信を持てず、いつまでも自らの心の殻に閉じ込もっているような連中よりは、遥かにマシだろう、と。

だからこそ、達哉は納得出来なかった。

先程のファイアストームを受けて尚、それほどの外傷を負っていない総司の耐久力――引いては、『防御力』について、だ。

（一体、どういう……？　ただ……体が……頑丈と……いうだけでは……説明が……つかない……！）

単純に考えれば、先程のファイアストームを受ける際に、総司が『ワイルド』の特性を活かして、火炎属性の魔法に耐性のあるペルソナに憑け替えた、と考えるのが妥当であり、実際、それはそれで論理的にも非の打ち所がない推測ではあるのだが――達哉は本能的に、そうではない、と確信していた。

いや、本能的にというより、実は、ある種の根拠のようなものも、あるにはあるのだ。

というのも、実は――総司が達哉の魔法を意にも介さなかったのは、先程のファイアストームに関する件が初めてではなく、ここまでの攻防の間にも、何度か似たような事があったからだ。

そしてその中には、明らかに、ペルソナを憑け替える隙も与えず複数の属性の魔法を与えたにも関わらず、同じように、総司が殆ど応えた様子を見せない場合もあった。

だからこそ、達哉が繰り出す攻撃を瞬時に見極め、そのつど、総司がペルソナを憑け替えている、という事は考えにくい。

また、これまで、何度も別のペルソナを使用している事からも、弱点のない――どころが、全ての系統の魔法に対して耐性を持つペルソナを憑けている、という事もないだろう。

となれば、何かしらの『トリック』のようなものを使っている、と考えるのが妥当だ。

（じゃあ……その……正体は……？）

と、

そんな、疑問に満ちた達哉の表情を、相変わらず、凄まじい速さで精霊牙による連撃を繰り出しながら見ていた総司が、ニィッ、と、悪戯っぽく笑った。

「不思議そうな顔をしてますね」

と、達哉の心を読んだのかように、総司が言う。

「知ってますか？　周防さん。昔から、その希少価値の高さで――まあ、風花先輩やりせみたいな『索敵型』程じゃありませんが――知られる、俺達のような『ワイルド』のペルソナ使いではありますが、近年では、段々とその『対応策』っつーもんが確立されてきてるって事に」

――ゥオンッ！！　という、獣の唸り声のような音と共に、総司の精霊牙による攻撃が、達哉へと放たれる。

それを、レーヴァテインを持つ右腕の筋肉に全ての力を集約する事で、何とか受け止める達哉。

が、その衝撃の余波だけで、左肩の傷口から更に大量の血が溢れ出し、一瞬、達哉の視界がぼやける。

「本来、アンタのような『旧世代』であろうと、俺みたいな『新世代』であろうと、結局のところ、数多く存在するペルソナ使いの種類の中でもワイルドが『最強種』と呼ばれる由縁は、どんな状況においても、自由にペルソナを憑け替え、弱点や耐性を即座に変更出来る、その『応用性』にあります」

何を今更、という気もするし、そもそもこれは、既にどこかで述べたかもしれないが――ここで1つ、ペルソナの『相性』というものについて説明しておこう。

と言っても、そう難しい話ではない――要は、この世に数多く存在するペルソナには、それぞれ火、氷、雷、風などの、得意な属性、苦手な属性などがあり、相手から攻撃を受けた場合、それが得意な属性による攻撃だった場合は通常よりもダメージが軽減され、逆に、苦手な属性による攻撃だった場合は、通常よりも大きなダメージを負ってしまう、というだけの話だ。

だからこそ本来、ペルソナ使い同士が戦う場合には、何よりもまず、相手の弱点属性を知る事が重要になる――仮に、相手との間にかなりの実力差があろうとも、それを先に把握するだけで、戦局をかなり有利に進められるからだ（尚、先程総司がチラッと述べた『索敵型』のペルソナ使いが重宝されるのは、その推察が容易に行える為だが、その説明については、今は割愛しておく）。

が、しかし、

同じペルソナ使いでも、今回の総司と達哉の戦いのように、ワイルドを相手取る場合は、その戦術は全くと言っていい程当て嵌まらない――理由は勿論、先に述べたように、ワイルドは状況に応じて、自由に別の相性を持つペルソナに憑け替える事が出来るからだ。

とは言え、そんな風に、一見、無敵とも言えるワイルドではあるが――先程、いみじくも総司が言ったように、今となっては、それに対する『対応策』というものも、ちゃんと存在する。

「実はですね、周防さん――俺が今装備している、この精霊牙っつー変てこなデザインの武器には、『ある特性』があるんですよ」

総司が言う。

「それがまた、アンタや俺のようなワイルドに対しては、ある意味『天敵』とも言える特性でしてね――早い話、この武器を装備しているだけで、その人間は、火、氷、雷、風の４つの系統の魔法に対して、耐性を持つ事が出来るんですよ」

「……っ！」

それを聞いて、達哉は全てを理解した。

（そういう……事か……！　相変わらず……とんでもない……奴め……！）

ギインッ！　と、最早、これで何度目か分からない総司の精霊牙による攻撃をレーヴァテインで弾きながら、達哉は思う。

（１００点に近い――『ワイルド対策』だ！！）

相手にペルソナを召喚させる隙を与えない程の、手数と速さにおける攻撃か――もしくは、常に弱点のないペルソナを降魔、或いは、弱点を補強（カバー）する武器を装備すること。

それが――近年確立され始めてきた、『ワイルド』のペルソナ使いを相手にする際の、定石にして鉄則だ。

くどいようだが――ワイルドは、あらゆる状況において、自由にペルソナを憑け替える事で、そのスキルや、自らの弱点の種類を変更する事が出来る為、通常、ペルソナは1人につき1体という原則（ルール）に縛られている『並』のペルソナ使いや、他の存在がワイルドを相手取る際には、どうしても、その『応用性』の前に倒れてしまう事が多い。

無論、同じワイルドである総司ならば、『そういった結末』もある程度は回避する事は可能だが――それでも彼は、無策で突貫したりはせず、あえて堅実な道を選んだ。

それこそが、

「……ただ装備してるだけで、４つの属性の魔法に耐性を持つ事が出来るこの武器を用いる事で、ワイルドの最大の脅威である『いつ、どんな状況でもこちらの弱点をつける程の万能性』を、容易に防ぐ事が出来ます」

というものである。

「――ふっ！」

「っ……！」

首筋へと向けられた総司の精霊牙を、今度は半ば無理矢理にスウェーバックする事で『回避』する達哉。

左肩の傷からの出血のせいで、全身のどこにも上手く力を込める事が出来ない達哉は最早、総司の攻撃を今までのように『防御』する事さえ難しくなっていた。

ともあれ――『精霊牙』。

もっとも、厳密に言うならば、この武器がカバー出来る系統は、既に何度も述べているように火、氷、雷、風の４属性のみなので、物理や闇、光など、その他の属性の攻撃にまでは、いくら『精霊牙』と言えども耐性をつける事は出来ないのだが――それはつまり、逆に言えば、『それ』にさえ気をつけていれば、ある程度はペルソナの憑け替えが可能、という事である。

無論この戦法は、弱点のないペルソナを降魔し続けるというやり方でも十分に実行可能ではあるし、実際、そういったペルソナも総司の手持ちの中にいるにはいるが――それでは、今度は使用出来るペルソナやスキルがかなり限定されてしまう為、相手にこちらの戦い方の法則（パターン）を読まれてしまう可能性がある。それが、周防達哉ほどの実力者が相手ともなれば、尚の事だ。

普段の立ち振る舞いからは想像しにくいかもしれないが――瀬多総司という人間は本来、木原篤郎等と同じく、冷静に思考を働かせ、常に状況を見極めながら戦うタイプなのだ。

ちなみに達哉の場合は、それとは逆に、その持ち前の天性の勘を用いて、本能に任せて戦っていくタイプである――総司のように、何のワイルド対策もとっていないにも関わらず、彼がここまで何度もペルソナを憑け替えながら戦っているのはその為だ。

が、それとは別に、達哉には、総司のようにワイルド対策をとっていない、れっきとした理由があった。

一言で言うなら、それは『慣れない戦術は、その難易度が高ければ高い程、逆に自らの身を滅ぼしかねない』というものだ。

そして、ワイルド対策というものは、その難易度が非常に高い。

そういう意味でも、達哉は再び、別の疑問を感じずにはいられなかった。

というのも――総司の戦い方が如何にも、ワイルドとの戦いに慣れているように見えて仕方なかったのだ。

だからこそ、達哉は訝しげに眉をひそめた。

これまた、ここまでに何度も触れてきた点ではあるが――世界的観点から見ても、ワイルドというのは非常に希少な存在だ。

故に、よほど特殊な環境に身を置いてでもいない限り、一生の内にその姿を目に出来る回数も限られてくる筈だが……？

相変わらず、幾度となく放たれる総司の攻撃を防御、或いは回避しつつ、一瞬、そんな疑問に対して思考を巡らせる達哉だったが――しかし、

（そう、いえば……）

と、すぐに納得した。

彼は思い出したのだ。

過去に、瀬多総司という男が、その『よほど特殊な環境』とやらに身を置いていた、という事を。

「……ッ！　そう、か……確か、君は……かつては……『彼』と……共に……行動……して、いたん……だったな……！」

達哉が言う。

「ええ、その通りですよ」

再び、ニヤリと笑いながら、総司が応じる。

『彼』。

直接の面識はないものの――同じペルソナ使いとして、達哉も、『彼』の噂は何度も耳にしていた。

１９年前、死を運ぶ者――『ニュクス』という存在を打ち破り、この世界を破滅の危機から救った英雄。

青髪青眼の、史上最強のペルソナ使い。

有里湊（ありさとみなと）。

そして、瀬多総司はかつて――具体的には、彼がまだ１５歳ぐらいの頃に――その、有里湊という男がリーダーを務める、『あるグループ』に所属していた。

その辺りの事情が加味された事で、総司は他の大多数のペルソナ使いよりも、ワイルドの戦い方を深く理解していた、という訳だ。

そして、その経験を元に、ワイルドに対して最も有効な戦略を組み、それを実行に移せる程の実力も、彼は持ち合わせていた。

「なる……ほど、お前の……戦術は、理解した」

左肩から夥(おびただ)しい量の血液を流しながらも、それでも、ある程度はダメージから回復し、口調を元に戻し始めた達哉が、そのように言う。

と同時に、互いの武器がぶつかり合い、ギィィインッッ！！　と、何度目かの金属音が辺りに響き渡った。

そのまま、ギギギギッ……！　と、激しい鍔ぜり合いを始めた事で、つかの間の膠着状態へと入る2人。

「……だが、その程度の策じゃ……俺に勝つ事なんか――」

「出来ますよ」

達哉の台詞の上から被せる形で、総司が言う。

確信に満ちた口調で、言う。

「互いの策がどうこうとか、そういう問題じゃありません――さっきも言ったでしょ？　アンタと俺じゃ、『見ているモノ』が違うって。それを理解して克服しない限り、アンタじゃ絶対に、俺に勝つことは出来ない、とも」

「何……？」

達哉が眉間にしわを寄せるかどうかという内に、ガギンッ！　と、総司の精霊牙が達哉のレーヴァテインを弾き、同時に、２人は後ろへ跳んで、僅かに、互いに距離をとる。

「安心して下さいよ。……分からないって言うなら、これから嫌でも教えてあげますから」

が、次の瞬間には再び、総司が、その圧倒的脚力を用いて、達哉の懐へと飛び込んだ。

続けて――当然の如く、精霊牙による一撃を繰り出す総司。

こうも早く、総司が再び距離を詰めてくるとは思っていなかったからか――或いは、まだ左肩の傷が完全に癒えていないからか、とにかく達哉は、そんな総司の攻撃に対する反応が、僅かに遅れた。

「ちぃっ……！」

それでも、ちょうど精霊牙の４本の刃の間にレーヴァテインの刀身を差し込む形で、何とかその攻撃を凌ごうとする達哉だったが、

「残念、その防ぎ方は失敗です」

クルッ、と、その場で、精霊牙を装着した右の方の手首を動かす総司。

それによって必然、精霊牙の４本の刃は、更に強くレーヴァテイ

ンの刀身を拘束する事になる。

「……！　しまっ……！」

総司の意図を達哉が理解した時には、もう遅かった。

次には、

「よっとっ！」

という声と共に、総司はレーヴァテインの刃を捕らえた精霊牙を天に振り上げる事によって、その炎剣を、遥か上空へと弾き飛ばしたのだ。

その際、せめてもの抵抗とばかりに、達哉が剣を握る手にかなりの力を込めた為か、総司の精霊牙の刃が、バキンッ！　という音と共に折れ、使い物にならなくなってしまうが（17年前から使っている武器なので、耐久性が低下していたという線もなくはないが）――そんな事は予想の範囲内だとでもいう様子で、総司はその場で右手を強く振り払う事で、精霊牙を乱暴に取り外すと、即座に、次の攻撃のモーションをとる。

ここまで総司の猛攻から自分の身を守ってくれた炎剣が、そのまま、あらぬ方向へと飛んでいくのを、一瞬、焦った様子で目で追う達哉。

（マ……ズイ！　一旦、態勢を……！）

慌てて、そんな事を考える達哉ではあったが――もう遅い。

「勝敗は一瞬の隙ですよねぇ――そうでしょ？　周防さん」

直後、並の人間が受ければばたった一発で体に風穴が空いてしまうであろう程の威力を伴った総司の右ストレートが、達哉の顔面に炸裂する。

ぐじゃあっ！！　と、

余りにも不吉過ぎる音が、総司の右拳が突き刺さった達哉の顔面から響き渡った。

「――――――ぁッ」

悲鳴は上げなかった――が、だからと言って、受けたダメージをごまかす事など出来ないし、いつまでも、顔の痛みに意識を傾けている暇もなかった。

続けて放たれた総司の左のショートアッパーが、達哉の顎を跳ね上げたからだ。

「周防さん――貴方は確かに、極めて強力なペルソナ使いだ。持って生まれた資質だけなら間違いなく、俺よりも遥かに上でしょう」

攻撃を受けた部分が、ボーッと熱を帯びていくのを感じている達哉の耳に、総司の声が響く。

「でも、結局の所、もう1人の自分……。つまりは、『心の仮面（ペルソナ）』を用いて戦う俺達ペルソナ使いにとって1番重要なのは、何よりもまず、『心の強さ』――つまりは『戦う動機』です。……本来、身体能力やペルソナの基本性能なんかは、二の次なんですよ」

再び、総司の攻撃。

鮮やかなコンビネーションで繰り出された右のフックが、達哉の脇腹に、針の穴に糸を通すかのような正確さをもって突き刺さる。

「がっ、はっ……！」

ゴボッ！　と、僅かな粘性をもった赤黒い大量の液体が、達哉の口から溢れ出る。

それが返り血という形で自らの体に付着した事に気付きつつも、しかし、総司は攻撃の手を止めない。

「そして、周防さん。今回における、アンタの『戦いの動機』は――余りにも弱い。どうしようもなく、弱い」

達哉も達哉で、何度も反撃しようとしたり、或いは距離を取って少しでも態勢を整えようとしているのだが――急激な勢いで蓄積されていくダメージのせいで、結果として、そうするよりも先に、総司の攻撃を次々と貰ってしまう。

「大方、アンタが今回、俺に会いに来たのは、どうして俺が、克哉さんと戦ったのか――そして、俺の『宿願』ってのが一体なんなのかを知る為とかっつー、たかがその程度の理由でしょう？　そんな、何の『覚悟』もない、あやふやな動機で戦ったところで、俺達ペルソナ使いが、大した力を出せる筈がないじゃないですか」

ガガガガガッ！！　と、恐ろしい速射性と連射性を兼ね備えた総司の左ジャブが、何度も、何度も、達哉の頭部を彼の後方へと弾く。

「俺にしたって、今回アンタと戦うようになったのは、予想外としか言いようがありませんけど――それでも、アンタ以上の『覚悟』をもってこの戦いに望んでいる、という確信はありますよ」

最早、何度目か分からない――肉が潰れ、骨が歪む音が、東洋アンズ前に鳴り響く。

左で距離を測ってから、ドンピシャの右。

もはや達哉の顔は、その髪と同じくらい――いや、それ以上に真っ赤に染まっていた。

これがもし公式な格闘技の試合だったなら、とっくに、審判が2人の間に止めに入っているであろう程の――それ程の有様である。

「あの日……この世から『先輩』がいなくなったあの日に、俺の心の中で、ある『願い』が生まれました。そして時が経つにつれて、それはいつの間にか、俺にとって『宿願』と呼べるほど大きなものにり、以降俺は、その『宿願』を叶える為だけに、これまでずっと――19年もの間、ずっと1人で戦ってきました」

顔、顔、顔、腹、肩、顔、腹、と――達哉の体の内の至るところに、総司の拳が炸裂する。

「……ッ」

既に達哉は、悲鳴はおろか、呻き声さえ上げられないような状態になっていた。

「相手が誰であろうと、俺はいつだって、『先輩』の為に考えた、その『宿願』を叶える為に戦ってきました――いつだって、あの頃の『先輩』の姿を思いながら戦ってきました」

ブラン、と、

達哉の動かなくなった左腕が、まるで地に落ちる寸前の果実のように、力無く、肩から下に向けて垂れ下がる。

「そんな俺に――いつだって、文字通りの意味で命を懸けながら戦ってきたこの俺に、アンタみたいに、覚悟とも呼べない覚悟しか持たない人間が、勝てる訳ないでしょうが」

突然、嵐のような総司の連撃に、つかの間の静寂が訪れた。

が、それは決して、達哉への攻撃を止めたからではない。

トドメの一撃を放つべく、固く握り込んだ拳を背中の後ろまで引き、そこに、全ての力を溜め込む為だ。

それが完了するまで、そう長い時間はかからなかった。

そして、

ドンッッ！！　と、

達哉の鳩尾（みぞおち）に、総司の渾身のボディブローが、これ以上ない角度

で炸裂した。

「～～～～っ！」

ガクガクと足を揺らしながらも、何とか、その場で姿勢を保とうとする達哉。

が、結局、それは叶わなかった。

（これ……が……）

ドスッ、と、

（これが……コイツが言う……『見ているモノ』の……『差』、か……）

やがて、ついに、耐え切れるダメージの限界量を越えた達哉の体が、糸の切れた人形のように、地面へと崩れ落ちた。

そんな――既に見る影もなくなった、かつての職場の上司を冷徹に見下ろしながら、総司は言う。

「ロクに『覚悟』も決めないまま、これまで常に、『覚悟』を決めて戦い続けてきた俺に、牙を向いた事。……それが今回の、才能で上回るアンタの敗因です」

３ｒｄ　Ｄａｙ『神宮球場のバトル（１）―３』

――新宿、神宮球場。

有里淳（ありさとじゅん）の『氷の乱舞』によって生み出された、幾つもの氷の弾丸と、クー・フーリンの『妖花烈風（ようかれっぷう）』によって発生した巨大な鎌風とが、真っ正面から激突する。

ズンッッ！！　と、

音が、遅れて聞こえた。

次には、まるで、巨人が強く足を踏み鳴らしたかのような、凄まじい地響きが発生し、それが神宮球場全体を、細かく揺さぶる。

淳とクー・フーリンの魔法が衝突した地点では、今や大量の砂埃が濛々（もうもう）と立ち上り、２人の姿を完全に覆いつくしていた。

（あの子、は……？）

と、

そこから大分離れた場所で、先の地響きで体を倒さないよう、両手、両膝を地面に下ろしながらその光景を見ていた、１人の女性――春沢芳野（はるさわよしの）はそう思ったが、結局のところ、有里淳の身を案ずる彼女のそんな心配は、まったくの杞憂（きゆう）だった。

ボッ！！　と、

直後、大量に舞い上がった砂埃の一部を吹き飛ばし、殆ど外傷らしい外傷を負っていない様子の有里淳が、凄まじい速さで移動しながら、その姿を現したからだ。

一瞬遅れて、右手に雷の剣を握ったクー・フーリンもまた、その青い長髪をなびかせながら、淳とほぼ同じか――或いはそれ以上の速さで、姿を現す。

つかの間――互いに、相手の顔を睨み合いながら、自動車も顔負けのスピードで横に移動していた2人だったが、やがて、

「貰っとけ！」

という声と共に、有里淳が、先に仕掛けた。

まるで拳銃を構えるように、親指と人差し指を擦り合わせた右手をクー・フーリンの顔に向けて突き出すと、そのまま、パチンッ！！　と指を鳴らす。

すると――果たして、どうやったのか――彼が鳴らした指の間から、1本の炎の槍が形成され、次にそれは、まるで弾丸のような速さで、クー・フーリンの顔へと飛んで行った。

が、それに対してクー・フーリンは、さして意外そうな顔も見せず――それどころか、

「ふん」

と、小さく鼻で笑う余裕さえ見せながら、首を小さく動かしただ

けで、難無くそれをかわした。

とは言え、淳の攻撃は、それで終わりではない。

彼が続けて繰り出した攻撃は、それまでの移動の勢いを利用して、その場で小さく跳躍し、再度、クー・フーリンの顔に目掛けて、空中から回し蹴りを放つ、というものだった。

しかし、またもクー・フーリンは、首を僅かに動かしただけで、それを難無くかわした――かのように見えた。

奇妙な事が起こった。

確かに、先の蹴り技をかわしたと確信したクー・フーリンの顔が、ゴッ！！　と、『何か』に強く弾かれたのだ。

（何……！？）

その不可思議な出来事を受け、一旦体勢を整えるべく、慌てて、淳から大きく距離をとるクー・フーリン。

そうする事で、改めて淳の様子を全体的に見れるようになったクー・フーリンは、先程、確かに避けたと思った筈の攻撃を、何故自分が受けたのかを理解した。

見れば、淳の右足の膝から、足のつま先にまでかけて、まるで具足のように、分厚い氷が纏っているではないか。

（なるほど……。攻撃の瞬間に自らの足を氷結系魔法で凍らせ、僅かに蹴りのリーチを長くしていた、という訳か……）

攻撃を受けた部分である右の頬をさすりながら、クー・フーリンは考える。

（器用な奴だ……。恐らく、その前の炎の槍にしても、火炎系魔法の威力を押さえつつ、代わりに細かいコントロールをしながら発動した結果だろう）

次には、雷の剣を握っていない左手の指を、ゴキゴキと鳴らすクー・フーリン。

（だが……その炎の槍にしても、今の氷結系魔法を利用した蹴り技にしても、明らかに威力不足だな……）

そんな事を彼が考えている内に、ドッ！！　と、再び、淳が動いた――元より、いつまでも思案に耽っているクー・フーリンに付き合わなければいけない義理など、彼にはないのである。

僅かに距離を詰めたところで、淳が再び『氷の乱舞』を発動させれば、それによって飛んできた幾つもの氷弾を、クー・フーリンが、右手に握った雷の剣を恐るべき速さで何度も振るう事で、全て弾き落とす。

（素質は認める……が、実践経験はほぼゼロのようだな。……よくもまぁ、ここまでデカい口を叩けたものだ）

次に淳は、クー・フーリンが氷弾を防いでいる内に、彼との間にある距離を更に詰め、まるでプロのボクサーのように恐ろしく無駄のない動作で、右のストレートを繰り出す。

それを、今度は体ごと横に移動する事で回避するクー・フーリン。

そのような攻防を繰り広げつつ、一方で、有里淳もまた、考えていた。

（……俺とコイツとじゃ、経験にも、実力にも差があり過ぎる。普通に戦ってちゃ、まずダメージは与えられないだろう、が……）

この時、淳がその頭に思い浮かべたのは、彼に体術全般を叩きこんだ――つまりは、彼の師匠とも言うべき、2人の人物の姿だった。

（あの2人なら……美鶴（みつる）さんや真田（さなだ）さんなら、間違いなく、こんな相手でも――いや、こんな相手だからこそ、迷わず突っ込めって言う筈だ！！　たとえ……）

そんな自分の考えに素直に従い、回避動作を終えた直後のクー・フーリンに対し、続けて、大きく弧を描くように、左のロングフックを放つ淳。

（……たとえその結果、絶対に返り討ちにあうって分かってるとしても！！）

直後、

「最初こそは驚いたが……。やはり、遅いな。昨日、イザナギ殿と戦ったからか、更に遅く見えるぞ」

――と話すクー・フーリンの声を淳が耳にした時には、既に、彼の視界から、クー・フーリンの姿は消えていた。

（な……！？　消え……！？）

――た、と心の中で文章を完結させる事は、結局、淳には出来なかった。

なぜなら、

ズドンッ！！　と、

いつの間にか、恐るべき速さで淳の背後に移動していたクー・フーリンの裏拳が、淳の脇腹に直撃し、彼の思考を強制的に中断させたからだ。

「――――っ！！」

それによる痛みを淳が感じたのは、自らの体が宙に吹き飛ばされたのを、彼が自覚した後だった。

そのまま、2度、3度と、それこそ、野球の試合で外野にまで転がっていった打球のように、何度も地面の上をバウンドしつつ――やがてはその背中を、外野のフェンスに激しく激突させる淳。

一瞬、フェンスの辺りで静止し、やがて淳の体は、ドスッ、と、乾いた音をたてて、地面へと落ちた。

それだけの事が起きてようやく、彼は、たった今受けた痛み（ダメージ）がどれ程のものかを味わう事になる。

「……！！　げ……ぇ、あっ……！！」

たまらず淳は、大量の血と共に、黄色い、ドロリとした液体ごと、胃袋の中身を、盛大に口から吐き出した。

同時に、どこか遠くの方から、ハルが自分の名を心配そうに叫ぶのを聞いたような気がしたので、淳は、

「来る……な……！」

と、無理矢理、喉の奥から声を絞り出した。

（クソッ……たれが……！　初めて、真田さんのボディブローを貰った時と、同じ感覚だ……！　痛過ぎて、逆に意識がハッキリしてやがる……！！）

地面にうずくまりながら、腹部から伝わってくる激痛に唇を噛み締めつつ、ゆっくりと、首だけを動かす淳。

（けど……）

やがて淳は、その目にクー・フーリンの姿を捕らえ、ギラッ！と、憎しみに満ちた視線を、その方向へと向ける。

（けど……何とか、時間を稼ぐ事は出来た……な……。となりゃあ、もうそろそろ大丈夫か……！？）

一方――序盤の頃とはうって変わって、あっという間に窮地（きゅうち）に追い込まれた淳とは違い、クー・フーリンの方はというと、殆ど息切れもしておらず、実に平然とした表情を浮かべていた。

「残念だが、これが現実だ」

と、クー・フーリンが言う。

「人間では、悪魔に勝つ事は絶対に不可能――とは言わん。現に、人間が我ら悪魔を打ち倒すような『事実』は、神話や伝説といった形で、昔から数多く存在する」

ザッ、ザッ、と。

ゆっくりと、自分の方に向かって、クー・フーリンが足を運ぶ音を耳にする淳ではあったが――先程の攻撃によるダメージがまだ残っているのか、地面でその身をうずめたまま、彼は、少したりともその場から動こうとする様子を見せなかった。

「……が、それはあくまで、その人間が、ある程度の『力』を持っているか、或いは、どんなに強大な悪魔でも圧倒してみせる程の『知』を備えている場合にのみ、起こる事象だ。……故に、そのどちらも持ち合わせていない『ただの人間』では、結局、我ら悪魔を倒す事など、出来はしない」

やがては、ついに、ほんの数メートルもない位置にまで、淳へと接近するクー・フーリン。

「……それこそ、今の君のようにな」

「……」

一方的に自らの見解を延べ続けるクー・フーリンに対して、しかし、淳は口を挟まなかった。

それは、未だ腹部を中心に襲ってくる痛みのせいで、上手く口を動かす事が出来ないからか、

それとも、

「ここまで、君はよくやった。特に、最初の攻撃の数々に関しては、素直に賞賛の言葉を送らせてもらおう」

心の底からそう思っているかのように、足元でうずくまっている淳の頭に向かって、クー・フーリンは言う。

「……が、結局は、これが現実だ。……そもそも、君と私とでは、今まで生きてきた『環境』が違う」

決して、全てが幸せとは言えないまでも、それでも、『殺し合い』などとは全く関わりのない毎日を生きてきた有里淳と、

生まれた時から、弱肉強食の世界で生きる事を強制され、『殺し合い』が当たり前の毎日を過ごしてきた、幻魔クー・フーリン。

「我々悪魔が住まう魔界は、完全な『実力主義』の――言うなれば、『力が全て』の世界だ。故に、そこで生き残る為にはどうしたって、それだけの『力』が必要になる」

例えば、

毎日、周囲から鳴り響く爆音を聞きながら暮らしつつ、時には、近くを通る民間人に銃を向け、その荷物を奪う事さえ辞さない戦争孤児と、毎日、何の不自由もなく暮らしてきた『ごく普通の』子供とが、ひとたび喧嘩を始めた場合――勝敗はともかく――どちらが

有利であるかぐらいは、どんな馬鹿でも分かるだろう。

そして、クー・フーリンは言う。

「……君も、ここまでの攻防で、よく身にしみた筈だ。我々『悪魔』と――」

まるでその言葉が、絶対であり不変の、この世の『真実』であると告げるかのように。

「――こんな弛(たる)みきった世界で生きている君達『人間』との、桁違いの戦闘力の差が……！！」

「……」

何か言い返す代わりに、ギロッ……！　と、怒りに満ちた表情で、地面からクー・フーリンの顔を見上げる淳。

「……が、それでも尚、まだ私に牙を向くだけの気力が残っているというならば――とっとと立て、ジュン」

そんな淳とは逆に、実に冷たい表情で、クー・フーリンが言う。

「悪魔(わたしたち)と人間(きさまら)との、格の違いというやつを見せてやる」

「……！」

明らかに、数分前に自分が言い放った台詞を意識したクー・フーリンの言葉を聞いて、淳は、眉間に寄せているしわを、更に深くした。

（……ったく、言ってくれるぜ。野郎……意趣返しのつもりかよ……！）

次に淳は、グッ、と、地面につけた両手に力を込め、上体を浮かせると、やがてはそのまま、ゆっくりと――クー・フーリンに言われた通り（勿論、本人にそのつもりはないだろうが）、その場で立ち上がった。

（……つーか、アツロウやナオヤならともかく、お前みたいな奴が、俺の事を、さりげなく名前で呼んでんじゃねえよ……！！）

現在の、有里淳とクー・フーリンとの間にある距離は、およそ何メートルもない。

が――そんな状況であるにも関わらず、チラッと、一瞬、淳はクー・フーリンから目から外し、ある方向へと視線を向けた。

つまりは――元々今回、彼がこの神宮球場に来る原因となった、春沢芳野という女性へと。

（……よし、大丈夫だ……！　あれだけ距離が離れてれば、ここで俺が『奥の手』を使ったところで、それにあの人が巻き込まれる事はない……！）

そんな事を思った後――元のように、クー・フーリンへと顔を向ける淳。

やがて、

「少し、いいか？」

と、彼は言う。

「……何だ？」

淳は1度、その場でゴキゴキと首を鳴らすと、

「お前、さっき言ってたよな？　『ただの人間』じゃ、悪魔（おまえら）を倒す事は出来ない、って」

「……違うとでも言いたいのか？　現に、君は今こうして、再び、私に圧倒的な敗北を喫（きっ）する直前にまで追い込まれているというのに」

僅かな希望を抱く事さえ許さない、というクー・フーリンの口調に対し――しかし、意外にも淳は、薄く笑った。

「いや……そっちについては、特に意見を唱えるつもりはねぇよ。ただ……1つだけ、訂正しておこうと思ってな」

そして、

「俺は、『ただの人間』じゃねえ」

淳は、

「俺は『悪魔使い』だ」

直後だった。

ゴオッ！！　と、

2人がいる場所より、大分離れた場所にある――ちょうど、ライトスタンド辺りの位置から、凄まじい勢いで、氷弾の嵐が吹き荒れた。

いや、それだけだはない――見れば、反対側のレフトスタンドからも、同じように、クー・フーリンに向かって、氷弾の嵐が向かっていっているではないか。

（何……！？）

完全に、意識を目の前にいる淳へと向けていたクー・フーリンは、それに対する反応が、僅かに遅れた。

「くっ……！！」

結果、回避は無理だと悟ったクー・フーリンは、咄嗟に、その場で独楽（こま）のように体を回転させつつ、右手の雷の剣を勢いよく振り抜く事で、それによって生じる斬撃のバリアを形成し、何とか、それらの奇襲から身を守る事に成功する。

（何とか、防ぎきったか……？）

ちなみにこの時、彼の周りでは、先程の、氷弾の数々が、斬撃のバリアによって弾かれた際の摩擦熱よって――さながら山中の霧のように、白く、濃い水蒸気が漂っていた。

そんな中、

（いや……彼の事だ。まさか、これで終わりではないだろう）

と、クー・フーリンは考える。

ここまでの攻防で、彼は、有里淳という人間の性格を、ある程度は理解したつもりだった。

だからこそだろう。

ボッ！！　と、

目前の水蒸気を、恐ろしい勢いで掻き分けながら突っ込んできた有里淳に対し、クー・フーリンは、何とか反応する事が出来た。

「やはり、そう来たか――が、あまい！！」

そう何度も不意打ちが成功してたまるか、とでも言いたげに、目の前の有里淳に向かって、素早く、雷の剣を振るうクー・フーリン。

いや、

厳密に言えば、それは有里淳ではなかった。

一瞬後、クー・フーリンが一刀両断したそれは――よく見れば、

人の大きさほどに作られた、ただの氷の塊だったのだ。

「な……っ！？」

それを見て、クー・フーリンが驚愕の表情を浮かべたのと同時、

「何が甘いって？」

と、そんな声が、どこからともなく聞こえてきた。

それが自分のすぐ後ろから放たれた声だと気付き、バッ！　と、クー・フーリンがその方向に体を向けるが――もう遅い。

「『氷の乱舞』！！」

刹那――見事、不意を突く形で、淳の手の平から放たれた幾つもの氷弾が、クー・フーリンの全身へと襲い掛かった。

今度こそ、防御も回避も間に合わなかったクー・フーリンは、有里淳が発動したその魔法を、まともに受ける事になる。

「ぐっ……！」

しかし流石に、1度の戦いで2度も倒れる訳にはいかないと思ったのか、クー・フーリンは、体のあちこちに赤い痣（あざ）を残しつつも、両足にグッ、と力を込める事で、何とか、その場で体を支える。

これまでに出会ってきた悪魔達ならば、間違いなく、とっくに息絶えているに違いない攻撃の数々を受けても尚、倒れるどころか――未だその両足で地面を踏み締めているクー・フーリンを見て、呆

れたようにため息をつく淳。

「……ったく、これでも、まだ倒れないのかよ……」

続けて、そのように呟く淳の方へと顔を向けたクー・フーリンは、いつのまにか、淳の両脇に、それぞれ1体ずつ――計2体の悪魔が姿を現している事に気づいた。

1体は、白い死装束（しにしょうぞく）のような衣装を身に纏い、青い髪を腰元まで伸ばした、女性型の悪魔――鬼女『ユキジョロウ』。

そしてもう1体が、緑色の肌と、緑色の長髪に、赤いシルクの服を着た、同じく女性型の悪魔――妖精『シルキー』。

淳に寄り添うように佇む、それら2体の悪魔の存在を認めたクー・フーリンは、全てを理解した。

（なるほど……先程、囮として使われた氷弾も、その前の、私を挟み撃ちにした魔法も、両方ともが、奴らの仕業だったか。まさか、私の前に姿を現すよりも以前に、既に召喚して、今までは待機させていたのか……？）

同時に、クー・フーリンは思い出していた。

先における、野外音楽堂での戦いから、ここまでの攻防において、体1つで自分に向かって来たその姿からは、些か想像しにくいが――有里淳。

彼は、『悪魔使い』であるという事を。

目には目を、歯には歯を――悪魔には悪魔を用いる事で、戦いに活路を見出す事を専門としている人間だという事を。

3rd Day『東洋アンズ前のバトル（2）―4』

――池袋、東洋アンズ前。

その中央で、畏怖（いふ）の王の如き様相で佇む瀬多総司（せたそうじ）の足元では、まるで陸に打ち上げられたばかりの魚のように、周防達哉（すおうたつや）が、体をビクビクと震わせていた。

まるで、ほぼ同時刻、ここより大分離れた位置にある神宮球場という場所にて行われている、有里淳（ありさとじゅん）とクー・フーリンとの戦いを、そっくりそのまま再現しているかのようではあったが――しかしこの時、達哉がその身に被（こうむ）っているダメージは、淳のそれとは桁違いである。

何故かと言うと、

「が、はっ……！　がっ……！！」

ビクンッッ！！　と、地面に体を横たえたまま、1度、その場で大きく体を震わせる達哉。

（なん、だ……！　何なんだ、コレは！？）

口からは大量の赤い液体を吐き出し、それが小さな水溜まりのようになって、自分の顔を濡らしているのを感じつつも、改めて今、自分がどれ程の深手を負っているのか、達哉は、冷静に分析しようとする。

しかし、腹部から休む間もなく襲ってくる激痛と、それに伴う強烈な吐き気のせいで、そんな簡単な事を考える作業さえ、今の達哉には困難になっていた。

それでも、何とか彼は、

（肋（あばら）が……粉々に……粉砕された……！！　なんて、威力だ……！！　コイツの、拳は……鋼で、出来てるのか……！？）

というところまでは理解するが――すぐに、

（いや……違う！！　これは、ただ単純に……骨が折れただけじゃ、ない……！？）

と、推察する。

と言うのも達哉は、つい一瞬程前から、自分の腹部――つまりは、たった今総司の一撃を受けた部分――の内側で、『何か』がモゾモゾと動いているのを感じ取ったからだ。

まるで、体の中に隙間なく収められている内臓と内臓との間に、無理矢理巨大な異物を捩込（ねじこ）まれたかのような、そんな感覚。

早い話が、

（折れた骨が、内臓に突き刺さってやがる……！！）

自分でそうハッキリと認識して、僅かに、背筋の部分を、何か冷たい液体が伝っていくかのような感覚を味わう達哉。

今すぐ、病院に行くべき――と言うよりも、仮にそうしたところで、果たして命をつなぎ止める事が出来るのかどうかさえ疑問の、それ程の重症である。

しかし、並の人間よりも、肉体的強度や代謝能力が遥かに優れている周防達哉ならば、或いは、それが出来れば助かる可能性も十分にあるだろう。

それが出来れば。

「……っ！！」

ズブッ……！　と、

そうしている内に、へし折られた肋骨の内の何本かが、ゆっくりと――しかし確実に、更に深く内臓に食い込んでいくのを感じて、その痛みに耐えるべく、あらん限りの力で歯を食いしばる達哉。

一方、対する総司はと言うと、

「……」

と、足元で悶絶している達哉を、実に冷めた目つきで見下ろしていた。

が、やがて彼は、その場でゆっくりと身を屈めると、右の手の平を、達哉の頭に押し当てる。

未だ、先の総司から受けた攻撃による激痛に身をよじらせている達哉は、その手を振り払う事さえ出来なかった。

「ユルング、『マカジャマ』」

そのように総司が小さく呟けば、たちまち、彼の背中から、蛇ともミミズともつかない、巨大な回虫のような姿をしたペルソナが現れ、横たわる達哉の全身に向けて、何かしらの魔法を発動する。

一見、それによる達哉の肉体的変化は、傍からは全く見てとれなかったが――それでも、

「――――っ！！」

と、息を呑み、1度だけ、その場で大きく身を震わせる達哉。

「……実はつい最近、俺はとあるキザな魔剣士と戦って、その際、『魔封』――つまりは、魔法を全く使えない状態にされて、苦しめられた経験がありましてね。……敵のやった事を真似するのは癪ですが、まあそれでも、戦術として有効なのは確かです。だから、今回は俺の方が、その経験に則って、アンタを『魔封』の状態にさせてもらいましたよ」

総司が言う。

常人ならば間違いなく致命傷である程の傷を負い、更には、それ

を回復する為のペルソナの魔法さえ使えない。

要は、そういう事。

達哉にしても、それは『マカジャマ』を受けた直後から、何となく理解してはいたが――それでも、当事者である総司の口から、改めてその事を告げられると、更に希望を削がれたような気分になった。

そんな彼の頭に、未だ手を置いたまま、再び、総司が口を開く。

「……ま、ここまですれば、ほぼ勝負は決まったようなもんですが――それでも、相手がアンタ程の人間ともなれば、念を押しておくにこした事はありません。ですので……」

そこまで言うと、総司は再び、

「ギリメカラ、『ポイズマ』」

と、象が2本足で直立したかのような、深緑色の巨体を持つペルソナ『ギリメカラ』を召喚し、達哉の体目掛けて、また先程とは別のスキルを発動する。

「～～～っ!?」

それを受けて、無言の叫びを上げる達哉。

原因は、先に総司が発動させたスキル――『ポイズマ』の、相手を『毒』の状態異常に陥らせる、という効果にあった。

一口に『毒』と言っても、この世には実に数百から数千もの種類の毒が存在するが、この時、達哉がその身に受けた『ポイズマ』の毒は、主に『神経毒』というものに大別されるもので――早い話が、常時、対象に激痛を与え続ける種類の毒なのだ。

その結果、並の人間ならばおよそ数分から数十分程で『最悪の事態』に陥り、それにある程度耐性を持っている筈のペルソナ使いでも、何の処置も施さないまま放置すれば、やがては同じ道を辿るという――そういった効果を持つ毒である。

「……っ！　……っっ！！」

ヒュー、ヒュー、と、口から情けない呼吸音を漏らす達哉。

「さて、と……」

達哉の頭から手を離し、次には、スッ……と、その場で立ち上がると、しばらくの間、無言で足元にいる達哉を、総司は見つめる。

「かつては、あの『這い寄る混沌（ニャルラトホテプ）』と対等に渡り合ったと言われるアンタも、こうなっちゃ形無しですね。……まぁ、『向こう側』の記憶を失った、『不完全』な状態のアンタじゃ、むしろ、これが当然なのかもしれませんが」

と、総司が言った、その時だった。

「お、おい……！」

と、

２人よりも、大分離れた場所からその光景を見ていた、１人の男――１０―ＢＩＴが、心配そうに、達哉に向かって声をかけてきたのだ。

（……っ！　あの……馬鹿……！）

それを聞いて、一気に、意識を現実の世界に引き戻す達哉。

口の中から大量の血が溢れている事もあり、上手く口を動かせない状態にありながら――それでも彼は、１０―ＢＩＴに対し、

「逃げ……ろ……！　早……く……！！」

と、必死の思いで指示を飛ばす。

それを受けて、途端に、どこか戸惑ったような表情を浮かべる１０―ＢＩＴ。

「え……？　で、でもアンタ、さっきは、ここにいろって……」

対して、次に達哉が言い放った台詞には、僅かに苛立ちの色が混じっていた。

「いい……から……早く……！　俺じゃ、もう……アンタを……守れない……！　だから、今の内に……とっとと……逃げてくれ……！！」

果たして、今の自分の声は、ちゃんと彼に届いているだろうか、と一瞬不安になる達哉ではあったが――どうやらそれはいらぬ心配だったらしく、つかの間、１０―ＢＩＴは何か躊躇うような表情を

見せたが、やがては、達哉に背を向け、その場から走り去ろうとする。

が、しかし、

直後、

「……ゴルゴン、『ブフーラ』」

と、総司が呟けば――たちまち、彼が召喚した、上半身が人間の女性で、下半身が蛇の体であるペルソナ『ゴルゴン』の氷結系魔法が、退避しようとしていた１０―ＢＩＴの足を凍らせ、彼の動きを強制的に停止させた。

「――つ、ぁっ！」

一瞬で足を氷づけにされた事で、無数の針で刺されたかのような痛みをそこから感じた１０―ＢＩＴが、短い叫びの声を上げる。

「……っ！　お前……！！」

すぐに、たった今総司がとった行為に気づき、まるで親の仇でも見るような目で、地面から総司の顔を睨みつける達哉。

が、そんな視線を受けても、総司はまるで意に介さない様子で、

「嫌ですねぇ、そんな恐い目でこっちを見ないで下さいよ。まさか、ここで俺の事を一方的に『悪』だと決め付ける程、アンタも馬鹿じゃないでしょうに」

と言う。

そこから更に、「残念ですけど」と言って、一方的に――達哉の頭部に視線を注ぎながら――総司は口を動かし続ける。

「少なくとも、アソコで足を凍らせてる兄ちゃんだけは、確実に『処理』させて貰いますよ。そもそも、それこそが今回、日本政府から依頼された仕事の内容だから、っていうのもありますが――何より、あの兄ちゃん自身が、そうなってもいい覚悟を持って、そうなるような道を選んだんですからね」

チラッと、一旦、達哉から視線を外し、次には、自分の動きを拘束している足の氷を何とかしようとしている10―BITへと顔を向ける総司。

「……だったら、ここであの兄ちゃんを見逃すという事は、すなわち、その『覚悟』を侮辱した事になります。だからこそ、ここでちゃんとケジメをつけておく事が、せめてもの礼儀ってもんです――そうでしょ？　周防さん」

そのように総司が問い掛けても、しばらくの間、達哉は何も言わなかった。

が、やがて彼は、

「なん……で……」

と言う。

「？」

怪訝そうに眉をひそめる総司に対して、続けて、達哉は次のように言った。

「なん、で……こんな……事を……！　一体……何が……お前を、そこまで……変えたと、いうんだ……！！」

「……」

「ＳＴＦを……抜けた、後、一体……お前に、何があった……？　さっき、言ってた……『宿願』ってヤツと……何か……関係が……あるのか……？」

「……その言葉については、２つほど訂正があります」

首を小さく横に振りながら、総司が言う。

「まず１つ、そもそも俺は、ＳＴＦを抜けた後何かがあったからじゃなくて、何かがあったからこそＳＴＦを抜けたんだということ。２つ、そもそも俺は変わった訳じゃなく、その『何か』によって目覚めただけだということ」

そこまで言うと、一旦、言葉を切り、不思議そうに小さく首を傾げると、総司は、

「……アレ？　ていうか、周防さん。さっきは俺の『宿願』が何であろうと、そんな事はどうでもいい、みたいな節の事を言ってませんでしたっけ？　なのに、どうして今更、俺の『宿願』の内容なんかが気になるんですか？」

「問題……あるのか……？」

総司の圧倒的な聴力をもってしても、微かにしか聞き取れないほど小さな声で、達哉が言う。

「どうせ……ペルソナを封じられ……毒に侵された俺には……もう……お前を、倒す術が……ない……。だったら……最後に、１つぐらい……こっちの質問に、答えてくれるぐらいの気概は……見せてくれても……いいだろう……？」

「……」

そんな達哉の言葉を聞いて、総司はあからさまに、達哉に対して、疑念に満ちた視線を向けた。

というのも――既に何度か触れているように――総司は一時期、達哉と共に同じ仕事をこなしていた時期があり、故に、彼の性格を、ある程度は理解していたからだ。

例えどれだけの劣勢に追い込まれようとも、絶対に弱音を吐かず、最後まで諦めない、という――そのクールな表情（かめん）の裏に隠された、達哉の性格を。

だからこそ、総司は疑問だった。

こんなのは――こんな風にアッサリと負けを認める周防達哉は、自分の知る周防達哉ではない、と。それとも、自分がＳＴＦを去ってからの１０年間、彼の性格に、何かしらの変化があったのだろうか？　とも。

「……まぁ」

が、一体何を思ったのか――結局、総司は、

「何を企んでいるかは知りませんが――まぁ、いいでしょう。さっきも言ったように、俺の『宿願』ってヤツは、別に、喋ったら実現不可能になる、って訳じゃありませんし」

と言う。

が、その後で彼は「もっとも、その場合、余計な事を知ったアンタも、あの兄ちゃんと一緒に、ここで『処理』させて貰いますけどね」と、心の中で台詞を続けたが、それを口に出したりはしなかった。

ＳＴＦで一緒に活動していた頃ならばともかく、今となっては、達哉の為にそこまでしなければいけない義理など、総司にはなかったからだ。

やがて、

「とは言っても――聞いたところで、どうせ拍子抜けするのがオチだと思いますよ？　俺の『宿願』ってのは、少し力に溺れた人間なら、誰もが思い描くようなものですし」

と――そのように、自らの『宿願』とやらの内容を、総司はとつとつと話し始める。

「『改革』ですよ、一言で言えば」

「……」

「今でこそ、一般には広く知られてはいない、異能者こと『ペルソナ使い』ではありますが――実は、過去の歴史においては、外国では『魔術師（ザ・マジシャン）』や『精霊使い（スピリット・サマナー）』、そしてこの国、日本では『陰陽師（おんみょうじ）』等と呼ばれ、割と広く世間に認知されていました」

あえて、その中でも特に有名な例を述べるとするならば、外国ならば（これは、どちらかと言うと『悪魔使い』の部類に入る話かもしれないが）、かのメフィストフェレスを喚び出したゲオルク・フォウストなどがそうだし、日本では、十二神将と呼ばれる、多数の式神を自在に操ったとされる安倍晴明（あべのせいめい）などが、第一義に挙げられるだろう。

もっとも、そのどちらもが、実はペルソナ使いとして極めて高度な力を持った人物の功績が、様々な紆余曲折を経て、現在人々の間で知られているような伝承へと変わっていった、という事まではあまり広く知れ渡ってはいないが。

「……とは言え、実際のところ、その2人みたいに、そうやって良くも悪くも人々に語り継がれるような存在になる事は、当時はむしろ稀で、まだ『ペルソナ使い』という名称さえ生まれていなかった頃、大抵の地域じゃ、彼等は『悪魔』や『妖怪』と同一視される程の、忌み嫌われる存在でした――理解しずらい力ほど、人々からの迫害の対象になるってのは、今も昔も一緒ですしね。……ここまでは大丈夫ですか？」

「……」

生来の性格からか、或いは総司から受けた傷が体に影響を与え過ぎて、もはや上手く口を動かす事さえままならないからか――とにかく、そんな総司の問いに対し、小さく頷くという動作だけで応じる達哉。

それを受けて総司は、離れた場所で、足を凍らされて身動きがとれなくなっている10―BITを、油断なく視界の端に納めつつも、

「こういった、ある意味で『人種差別』とも言える問題から起こった事件ってのは、昔からウンザリするほど多く存在します」

と言う。

「特に有名なのが、15世紀から18世紀ぐらいの間に起きた、『魔女狩り』――ひいては、アメリカの『セイラム魔女裁判』とかですかね。一般的には、当時、不思議な力を持つとされる、『魔女』と疑われていた人々が、言われなき罪の元、そういった能力を恐れた人間達によって、次々と極刑に処されていった、と言われるこれらの事件ですが――実はこの『魔女』と言われた人々こそが、後に『ペルソナ使い』と呼ばれるような存在だったんですよ」

つまりその昔、多くの国で行われていた『魔女狩り』っていうのは、それらの超常的な力を恐れた人々が、当時の『ペルソナ使い』を次々と排斥（はいせき）していった、というのが真実な訳です――と、総司は続ける。

「……」

言っている事は理解できるが、しかし、それが果たして、総司が目指す『宿願』とやらとどう繋がるのか、この時の達哉には見当も

つかなかった。

そんな中、総司が再び口を開く。

「まぁ、こんな事件が、その頃だけに起こった、一時的なものであれば良かったんですが――いや、良くはありませんけど。当時、刑にかけられた人々の気持ちを考えれば、絶対に良くはありませんけど――残念ながら、こういった『悪い歴史』は、今でも、世界各地に僅かに残っているんですよ」

それを――そんな忌まわしき風潮を、瀬多総司は、過去にはＳＴＦとして、その後は政府ご用達のペルソナ使いや、『神』の下部（しもべ）として活動していく内に、少しずつ知っていった。

「ちっ……」

――と、そのように、その事を理解した達哉が、心底いらついたように舌打ちしたのは、そもそも、過去に総司がＳＴＦに入隊するきっかけを作ったのが、他ならぬ彼自身だったからだ。

自分があの時、優れたペルソナ使いとして知られる総司の噂を聞き付けて、勧誘（スカウト）の為に八十稲羽（やそいなば）を訪れたりしなければ、彼は『そんな事』を知らずに済んだのかもしれないのに――とでも思ったのかもしれない。

「『セベク・スキャンダル』、珠間瑠（すまる）市での『ジョーカー様』事件、巌戸台を中心に広がった『無気力症状』に、八十稲羽の連続猟奇殺人事件」

指折り数えながら、総司が言う。

「それらの事件では例外なく、ペルソナの能力に覚醒した複数の人間によって解決され、そして、そういった人達は今、ちゃんと職に就いて人並みの幸せを得る事に成功してはいますけど、本来――世界的視点から見れば――1度ペルソナ使いに目覚めた人間が、その後、そういった『普通の生活』を送れるようになるのは、極めて稀な事なんですよ」

理由など、言うまでもない。

大半の人間は、ただペルソナ使いであるというだけで、覚えのない中傷や差別を受ける事が、しばしばあるからだ――人類の悪しき歴史の1つである、アメリカでの黒人に対する差別などを思い浮かべれば、或いはイメージしやすいかもしれない。

「それを俺は、10年前――まだ俺がSTFにいた頃の時代にこなした、『ミサキ』って女の子を助けた事件で、よくよく思い知りました。……もっとも、この事件に関しては、当時別の仕事を担当してたアンタには、覚えがないでしょうけど――少なくとも俺にとっては、極めて重要な事件でしたよ。……何せ、その事件をきっかけに、俺は、自分の『宿願』を叶えようと、本格的に考えるようになったんですからね」

自分で話している内に、僅かに心が沈んできたのか、傍から見ても無理矢理だと分かる作り笑いを、その顔に浮かべる総司。

「日本やアメリカ、カナダやドイツといった、そういったオカルトさえ、科学的に解明しようとする先進国ならともかく、それ以外の――例えば未だに、さっき言った『魔女狩り』の文化が僅かにでも残ってる開発途上国では特に、ペルソナ使いに対する差別は顕著で

す」

総司は一旦、そこで一呼吸の間を置くと、

「……おかしな話だとは思いませんか？　過去に何度か、人類を滅亡の危機から救ってきたペルソナ使いが、そういった仕打ちを受けているだなんて」

と言う。

「そして――世界各国で『そんな光景』を実際に見ている内に、ふと、俺は思っちまったんですよ。……19年前のあの日、あの人が――『先輩』が命を懸けてまで守った世界が、こんな有様でいいのか？　って。あの人は、こんな世界を守る為に死んだのか？　って。特にショックだったのが、その2年後に、八十稲羽でイザナミの馬鹿が起こした、一連の事件です――ちなみに周防さんは、どうして、アイツがあんな事件を起こしたのか知っていますか？　簡単に言うと、アイツ曰く『人の望みを見極めるため』、だそうです。んで、その結果アイツは、人の望みを『霧に包まれた世界』だと判断した、と……」

ハハハ……と、1人、乾いた笑い声を上げる総司。しかし、彼の足元で体を横たえている達哉は、その笑いの中に、彼の失望と憤りの念がどれだけ込められているかのを敏感に感じ取り、思わず冷や汗を流した。

「落ち込みましたよ……。ええ、そりゃあもう、情けないくらいに。これがそんじゃそこらの、単なる小悪党が勝手に下した判断ならともかく、相手はそういった私情を一切挟まない『女神』ですからね。だからこそ――それを知った時、俺はこう思った訳です。ニュクス

の脅威が去ってから、僅か2年たらずでそんな判断を下されるだなんて、それじゃあ、余りにも『先輩』が浮かばれない、ってね……」

或いはそれこそが、彼が『宿願』を立案する際の『種』となったのか。

達哉は考える。

今、自分の目の前にいる瀬多総司という男は、かつて、彼がいう『先輩』――つまりは、有里湊（ありさとみなと）が、ニュクスという存在から世界を守ってみせたのを実際に目の当たりにした、数少ない人間の内の1人だ。

当然、有里湊がそんな偉業を成し遂げるまでに、どれだけの苦労をしたのかも、深く理解している筈である。

だからこそ、彼には――総司には、我慢ならなかったのかもしれない。

尊敬している自分の『先輩』が、その尊い命（とうと）を犠牲にしてまで救ったこの世界が――と言うよりも、人類が、実際には、それよりもたった2年後に、イザナミからその存在を全否定されてしまう程にどうしようもない生き物だった、という事が。

それが――総司の人間性をある程度把握している達哉には、よく理解出来た。

理解出来たが――しかし、

だからといって、

「それ、で……？」

と、

ここへきて、ようやく――達哉が、その口を開いた。

「それで……お前は、結局……何を、するつもりなんだ……？」

長ったらしい前置きはもう十分だ、とでも言いたげに――周防達哉は、一気に核心へと迫っていく。

つまりは、瀬多総司が言う『宿願』の、その内容へと。

「まさか……さっき、言ったような……世界各地で起きてる……ペルソナ使いに対する差別をなくして……誰も彼もが、平等な……平和な世界でも……作るつもりか……？」

勿論、達哉はそれを、総司に否定させた上で、手っ取り早く、彼の口から『宿願』の内容を聞く為の冗談のつもりで言ったのだが――しかし、次の瞬間、総司の口から放たれた言葉は、そんな達哉の予想を大きく裏切るものだった。

「ええ、まあ、それは勿論ですが――その為にはまず、幾つかやらなきゃいけない事があります」

「……っ！？」

達哉の目が驚愕に見開かれている内に、それに気付いているのかいないのか――総司は、一方的に話を続けていく。

「誰も彼もが平等って言うんなら、そこには当然、俺達『ペルソナ使い』も含まれてなきゃなりませんし、それに――」

自分の手で徹底的に痛みつけた達哉の体を見下ろしながら、総司が言う。

「――それに、更に言わせてもらうなら、世界を破滅の危機から救ったにも関わらず、それが世界中の殆どの人間に認知されていない、っていうのも、明らかに『不平等』ですよね？」

つまり、

「結論を言いましょう。俺の狙いは、大きく分けて2つ。1つは、有里湊が、19年前に、ニュクスからこの世を救った『救世主（メサイア）』であるという『事実』を、何としてでも世界中の人間に認めさせること。そして2つ目は、それをきっかけに、『ペルソナ使い』という存在を世界の流れに組み込み、ペルソナ使いの、ペルソナ使いによる、ペルソナ使いの為の世界を――全てのペルソナ使いが安心して暮らせる世界を創ること。……それがこの俺、瀬多総司の『宿願』です」

３ｒｄ　Ｄａｙ『神宮球場のバトル（１）―４』

既に、これまで何度か触れてきているように、有里淳（ありさとじゅん）という人間は、彼の親友である木原篤郎（きはらあつろう）などとは違い、常に、持ち前の天性的な野生の勘を利用し、本能に任せて戦うタイプである。

何やら堅っ苦しい説明になってしまったが――要するに彼は、いちいち頭を働かせながら戦うのが苦手、という事だ。

が、これは決して、デメリットという訳ではない――少なくとも、有里淳にとってはそうではない。

彼ほどの天性の資質を持つ場合、頭を働かせながらの戦いは、むしろそういった自らの才能（ちょうしょ）を、スポイルさせてしまう事になりかねないからだ。

とは言え、である。

そうした戦い方を得意とする有里淳であり、また、彼自身もそう自覚してはいたが――しかし、だからと言って、そんな彼にしたって、毎回、全く何も考えないまま、戦いに臨んでいる訳ではないのだ。

そもそも、彼がなるべく頭を働かせず、本能に任せて戦うのは、あくまでも戦っている最中であり――近い未来、自分が誰と戦うのかさえ分かっていれば、彼だって、少しは頭を働かせたりもするのである。

ちなみに――これまで、彼のそのような姿が中々見られなかったのは、今までの悪魔達との戦いの殆どが、彼の予想だにしない形で起こったものだからだ。

そんな淳に対して、不注意だという意見もあるかもしれないが、これまでの16年間、特にそういった『非日常』とは関わりなく生きてきた、ごく普通の人間である淳に言わせてみれば、もし自分と同じ立場にありながら、日頃から『もしかしたら、近い内に自分は悪魔に襲われるかもしれない』などと考えている人間は、本気で、自分の人生を今一度冷静に見直した方がいい、と思っていた。

閑話休題。

とにかく――ここで言いたいのは、いくら、有里淳が普段、本能に任せながら戦う人間であるからと言って、近い内に、自分がどんな相手と戦う事になるのかさえ分かっていれば、少しくらいは頭を使う事もある、という事だ。

特にそれが、いつも通りの戦い方をしただけでは、到底歯が立たないような存在が相手ともなれば、尚の事である。

そう。

それこそ今回、彼が戦っている相手である、不死の王『ベル・デル』の配下――幻魔クー・フーリンのように。

意外かもしれないが――実は、野外音楽堂でアツロウに言われるまでもなく、淳は、クー・フーリンという悪魔の、文字通り意味で桁外れの力量を、誰よりも深く理解していた。

いや、よくよく考えれば、それは意外でも何でもないのかもしれない――何と言ったって、野外音楽堂にてクー・フーリンと唯一拳を交えたのは（厳密には、拳を交えるほど拮抗した戦いを繰り広げた訳ではないが）、他ならぬ彼自身なのだから。

だからこそ、つい先程――神宮球場に向かうまでの道中、連れ去られたハルの身を案じながらも、その一方で淳は、一体どうすれば、自分はクー・フーリンに勝つ事が出来るのだろうか？　という事を、必死で考えていた。

そして最終的に、彼はこう結論した。

曰く――自分1人の力だけでは、とてもあの悪魔に勝つ事はできない、と。

ならば、自分以外の誰かの手を借りればいい、とも。

そう考えれば、淳が真っ先に思い浮かべたのは、アツロウやユズ、ケイスケといった『仲間』であるが――しかし、その3人は現在、少し前までの淳と同じように、連れ去られたハルを見つけだす為に、東京の各地で彼女の捜索にあたっている為、先の考えを淳が頭に思い浮かべた時には、3人は、彼の傍にはいなかった（わざわざ、方々に別れて捜索にあたっているのは勿論、そうした方が効率がいいからである）。

故に淳は、もう一方の、自分の信頼出来る、改造ＣＯＭＰに登録されている方の『仲魔』に頼る事にした。

しかも、同機に内蔵されている『デビオク』や『邪教の館』を駆使して、それらの面々の戦闘力を増強した上で、である。

そして、

場所は、相変わらず――新宿、神宮球場。

現在、そこにいる有里淳の両脇に、忠実な従者のように佇んでいるのが、そういった過程を経て、新たに彼の仲魔に加わった、妖精『シルキー』と、鬼女『ユキジョロウ』――である。

「……」

フウー……、と、軽く息を吐きながら、淳は、

（……珍しく、頭を捻ったかいがあったな）

と、思った。

もっとも、そのように、彼が頭を捻って考えついた策とは、何も、単純に仲魔を強化して、真っ正面からクー・フーリンに突っ込んでいく、というものではない――クー・フーリンの実力は、そんな安易な考えでどうにかなるようなものではない。

だからこそ、淳は奇襲をかけた。

まず彼は、神宮球場へと突入する寸前に、シルキーとユキジョロウを召喚しておき、自分が考えついた策を2体に教えた後、それぞれに行動を開始させる。

その後で、淳は単身、神宮球場のグラウンドに足を踏み入れ、そこで最初の数分間のみ、持てる力と技術の全てを出し切り、何とか

自分1人でクー・フーリンの相手をしつつ、クー・フーリンの注意が完全に自分に向けられたと判断したところで、予めライト、レフトの両スタンドで待機させていたシルキーとユキジョロウに、不意を突く形で、高威力の魔法を放たせたのである。

結果、

現在、淳の視線の先では、クー・フーリンが――致命傷には至らないまでも、その全身に、打撲をしたかのような青い痣をいくつも作っている、という訳だ。

「……迂闊だった」

と、クー・フーリンが言う。

「まさか、君がこれほどの実力を備えていたとは……」

対して淳は、つまんねえ言い訳すんな、とでも言いたげに、フン、と小さく鼻を鳴らすと、次には、側にいるシルキーに向かって、

「シルキー、たった今喚び出しといて何だけど、お前は、このままハルさんの所にいって、あの人の側についててやってくんないかな」

と言う。

それを受けて、純粋に疑問そうな表情を浮かべるシルキー。

「しかし……ここで私が彼女の元に向かえば、もし、この先貴方が傷を負った場合、それを癒す者が、1人、いなくなってしまいますが……？　相手はあの『魔剣士』ですし、回復要員は、なるべく多

い方が良いかと……」

「ああ、確かにな」

と、淳が応じる。

「けどなシルキー、俺達の本来の目的を忘れるな。そもそも、俺達が今ここにいるのは、あそこにいる――（淳は、離れた場所にいるハルの方に、チラッと視線を送った）――ハルさんを、今日の前にいるクソッタレの手から救い出す為だ。だったらまずは、俺なんかよりも、あの人の身を第一に考えるべきだろ。今のところは、まだそういった事は起きてないけど――この球場にも、いつ野生の悪魔が入ってきて、俺とロン毛が戦っている間に、ハルさんにいらない『ちょっかい』を出さないとも限らないしな」

すると、どういう訳か――途端にシルキーは、どこかからかうような笑みをその顔に浮かべると、次のように言った。

「……随分、あの女性の事を気になさっているのですね？　なるほど、主はそこまで、彼女の事が――」

「……っ！　あーもう！　いいから、とっととあの人の所に行けっての！！」

シルキーの台詞が言い終わらない内に、彼女が言わんとしている事を敏感に察知した淳は、顔を首元まで真っ赤にすると、慌てたように、シルキーに大声で指示を飛ばす。

父親譲りの青い髪のせいか、顔を朱に染めたこの時の彼の姿は、まるで純白の紙に一滴の墨汁を垂らしたかのような不自然さがあっ

た。

ちなみに、そんな彼の隣では、ユキジョロウが口元に手を当てて必死に笑いをこらえていたが、何か疑っているかのようなシルキーに対して、必死に弁明を図っている淳は、全く気付いていなかった。

と、

そんな風に、まだ戦闘中であるにも関わらず、今にも軽いコントが繰り広げられそうな淳達の様子を見兼ねたのか、唐突に、クー・フーリンが、

「……それは杞憂というものだ、ジュン」

と、淳とシルキーの会話に口を挟んできた。

途端に淳が「だから……気安く名前で呼ぶんじゃねえよ」と、露骨に不快感を露にした声で言葉を返してきたが、それには構わず、再び、クー・フーリンは口を開く。

「『歌姫』を魔界に連れていく儀式の途中で、余計な邪魔が入らないよう、一応、この辺り一帯には、簡易的な『魔除け』の術式を施してある。ここまで散々大きな音を響かせてきたにも関わらず、未だ、1体もの悪魔が我々の戦いに介入して来ないのは、その為だ。故に、君がそこまで、あそこにいる『歌姫』の身を案じる必要は――」

「うっせえ黙れこの腐れムキムキロン毛野郎」

「……」

ズバッと浴びせられた淳の言葉に対し、思わず閉口してしまうクー・フーリン。

そんな彼の様子には一切構わず――横目でシルキーがハルの所に向かっているのを確認しつつも――淳は続けて、

「生憎と俺は、たった今『殺し合い』をしてる最中の相手が言う台詞を、はいソウデスカってアッサリ信じる程、馬鹿じゃねえんだよ」

と言う。

「……なるほど、賢明な判断だ」

面白いものでも見るような目を淳に向けつつ、クイッ、と小さく首を傾げるクー・フーリン。

「しかし、妙だな。揚げ足を取る訳ではないが――先程の君の台詞に則って言うならば、ここで私と戦っているよりも、そこにいる仲魔達の力を借りて、『歌姫』と共に、ここから逃げる事に全力を尽くした方が、まだしも、君の『本来の目的』とやらを達成するには、効率が良いと思うが……？」

「……」

しばらくの間、自分の方を見つめるクー・フーリンの鋭い視線を、真っ向から、同じく鋭い視線で受け止める淳。

しかし、やがて彼は、

「いや……ダメだ」

と言った。

「？」

「そんなんじゃ、俺が満足出来ねえ」

「満足……？」

「そうだ」

脇に下げた両の拳をパキパキと鳴らしながら、淳は言う。

「確かに――いくら敵の言った事とはいえ――お前の言う事も、ある程度は的を射てると思う。けど……」

次に淳は、キッ！　と、クー・フーリンに向けた視線の鋭さを、より一層強くした。

「けど、生憎と俺は、そういう事よりも、自分の感情を優先させちまう『馬鹿』なんでな。だからどうしても、俺はここで、お前に『ある事』をしなきゃ気が済まねえんだよ」

「……」

有里淳が言うところの『ある事』。

それは、

「お前は、ハルさんを『魔界』とかっつー、訳分かんねえ場所に連れて行こうとした。お前は、ハルさんを傷付けようとした。お前は、ハルさんを悲しませた」

淳が言う。

「それが――俺にとっては、ムカついて、ムカついて、ムカついてしょうがねえ」

「……ならば、どうする？」

「決まってんだろ」

ギリッ……！　と、決して近くはない、離れた位置にいるクー・フーリンにさえ聞こえかねない程の強さで、歯を食いしばる淳。

「――だからお前だけは、ここで、力一杯ぶん殴って『落とし前』をつけなきゃ、俺の気が収まらなねえっつってんだ。……逃げるなんて、さらさらありえねえよ」

「……！　フフッ……！」

と、

何がおかしいのか――淳の台詞を聞いて、クー・フーリンが薄く笑う。

「死にたがりの『馬鹿』なのか……。それとも、その『理想』を『現実』に変えるだけの力を持つ、あの男と同じ『強者』なのか……判断がつきかねるな、君は」

「別に、どっちでも構いはしねえよ」

言いながら、僅かに腰を落とし――淳は、これで、今回の戦いで何度目かの戦闘の構えをとる。

「けど……『力がないから』なんていうのを理由に、目の前で色んなモンが失われていくのを、ただ黙って眺めてるぐらいだったら、俺は――」

ギンッ！！　と、貫くような視線を、クー・フーリンへと向ける淳。

「俺は、一生『馬鹿』でいい」

その台詞が言い終わるのと、淳が行動を開始したのとは、ほぼ同時だった。

「『炎の乱舞』！！」

と、クー・フーリンにその手を向けながら、淳が大声で言い放てば――たちまち、彼が突き出した手の平から炎の嵐が巻き起こり、ゴウッ！！　と、憎むべき相手へと勢いよく向かっていく。

（ん……？）

その瞬間、迫りくる炎の熱に、ジリジリと肌を焦がしつつも、クー・フーリンは、ふと疑問に思った――と言うのも、目前の淳が『炎の乱舞』を放った瞬間、彼の腰の辺りで、『何か』がチカッと光ったような気がしたからだ。

しかし、今はそんな疑問を解消するよりも、まずは淳の攻撃を何とかする方が先決だと判断したクー・フーリンは、

「消えろ」

と小さく呟くと同時に、鎌風（かまかぜ）を生み出す程の速度で雷の剣を大きく振るい、淳の渾身の『炎の乱舞』を、いとも簡単に消し去ってしまう。

あっという間に、自らの攻撃を無力化されてしまった淳ではあったが――しかし、彼は怯まない。

「まだまだ……ユキジョロウ！！」

「任せて――『マハブブ』！！」

間近で淳の指示を聞き、即座に彼の意図を察知したユキジョロウが、氷結魔法の『マハブブ』によって、目の前に巨大な氷塊（ひょうかい）を形成する。

当然、それはクー・フーリンにも確認出来たが、

（……？　こっちに飛んでこない……。ただ、その場に氷を生み出

したただけ、だと？）

そう、本来なら、先程の淳の『炎の乱舞』と同じように、クー・フーリンへと向かっていく筈の氷塊は、ただその場に存在するだけで、ピタリと静止していたのだ。

が、それはほんの一瞬。

「だ……りゃあっ！！」

次の瞬間、淳は――ＣＯＭＰに登録していた物理スキルである『怒りの一撃』によって、その氷塊を粉々に打ち砕いた。

（……っ！　また……！？）

同時に、再び――具体的には、淳が『怒りの一撃』を放ったのと同時に――淳の腰の辺りで、何かが小さく光ったのを見て、小さな疑問を覚えるクー・フーリン。

が、今回もまた、それを深く考えている時間はなかった。

直後――必然的に、淳の拳による破壊の衝撃に曝（さら）された氷塊が、まるで散弾のように、クー・フーリンへと飛来する。

（……っ！　氷塊を砕いて、幾つもの飛礫（つぶて）に変えたのか！？）

しかし当然、その程度で息の根を止められるようなクー・フーリンではない。

ドッ！　ガッ！　ガガガガ、ギンッ！！　と、１番最初に飛んで

きた物から順に、雷の剣と左拳とで、氷の飛礫を次々と弾き飛ばし、冷静に対処していく。

が――そうして、全ての飛礫を弾き終えると同時に、クー・フーリンは、ある事に気付いた。

先程までは、確かに自分の視線の先にいた筈の有里淳の姿が、いつの間にか消えていたのだ。

（奴は……！？）

「こっちだ」

「っ！！」

そのように――突如真近から発せられた、恐ろしいほど冷たい声に、クー・フーリンが反応すれば、

「『炎の乱舞』！」

と、淳が再び、開いた右手から炎の嵐を生み出し、クー・フーリンの体を焼き尽くそうとする。

そして、

（……っ！）

その瞬間、クー・フーリンは確かに見た。

これまでとは違い、かなり近い位置から魔法を発動された為か―

―今度は、今まで以上に、クー・フーリンにはハッキリと、『それ』が確認できた。

つまりは、先程、淳が『炎の乱舞』を発動させた瞬間、彼の腰の辺りにある『何か』――否、彼がズボンのポケットに納めている『改造ＣＯＭＰ』のランプが、一瞬チカッと光った、その瞬間を。

（そう……か……！　そういう事かっ！！）

淳の手から放たれた大量の炎を全身に浴びる刹那、クー・フーリンは、全てを理解した。

「うっ……！」

一方、淳の方は、余りにも近い距離で『炎の乱舞』を放ったのが原因で、自らが発動した火炎魔法を僅かにその身に浴びてしまい、慌てて、クー・フーリンから距離を取る。

次にはクー・フーリンが、

「――むんっ！！」

と、僅かな間その身を焼いていた業火を、『風』の特性を帯びた魔力を全身から展開する事で、跡形もなく吹き飛ばした。

上半身に巻いていた白い包帯こそ、黒く煤けてボロボロになっているものの、軽い火傷を負っただけで、殆どダメージらしきものを受けた様子がないクー・フーリンを見て、流石に、ウンザリしたような表情になる淳。

「クソッ……！　少しは応えろよ……！！」

淳が言う。

「……私とて、仮にもあのベル・デル様に仕える悪魔の内の1体だ。……この程度で倒れるなど、断じてありえん」

既に、先日、とあるペルソナ使いによって負わされた、胸の傷口を抑える役割を果たせなくなった包帯をその身から引きはがしながら、クー・フーリンが言う。

「それにしても……なるほど、ようやく分かったぞ。君のその、人間にしては異常とも言える戦闘能力の秘密が……」

「あ……？」

訝し気に眉をひそめる淳。

「そもそも、少し前から、私は疑問に思っていたのだ――『ペルソナ使い』ではないにも関わらず、とても常人には出しえない身体能力を発揮している君に対して、な」

以前にもどこかで述べたように、この世で稀に見かける『ペルソナ使い』という存在には、その身に宿した『ペルソナ』の霊的恩恵を授かり、基本的な身体能力を全体的に底上げするという能力を――全員が、例外なく持っている。

しかし、現時点ではまだ『ペルソナ使い』ではない淳は、当然、そんな能力を備えている筈もない。

にも関わらず、ここまでクー・フーリンが見てきた限り、腕力、脚力、瞬発力、耐久力など――それらの淳が持つ身体能力は、人間の常識というものを明らかに超越していた。

それは何故か。

「おおっ！！」

クー・フーリンの台詞を受けて、突然、胸の内で何か不吉な予感が急速に膨れ上がっていくのを自覚した淳は、そんな負（マイナス）の感情を打ち消すかのように、またも、クー・フーリンに向けて魔法を放つ。

彼の右手から放たれるのは、その身に宿る魔力によって形成された、何本にも及ぶ雷の槍。

それらが真っ直ぐクー・フーリンの体へと向かっていき、今度こそ、その肉体を破滅の道へと誘（いざな）おうとする。

「……しかし、もしも君が『そういった力』を、その身に付加させる霊装か何かを持っていると言うならば、全て辻褄（つじつま）が合う」

――が、クー・フーリンは、僅かにその身を何度か捻るだけで、淳の『雷の乱舞』によって作り出されたそれらの魔法の槍を、いとも簡単に回避していく。

「……何だ？　何が言いたいんだ？　お前」

そう言う淳ではあったが――しかし、その顔から次々と流れ出てくる冷や汗の存在に、彼は気付かずにはいられなかった。

そんな淳の心に、ただ淡々と真実のみを告げるクー・フーリンの言葉が、不可視の刃となって、淳を精神的に追い詰めていく。

「先程から、君が魔法を扱う度に、何やら微小な光が点滅していた事からも、疑いようはない――君が持つ、その『こんぷ』とやらが、君の人間離れした戦闘能力を生み出す源泉となっているのだろう？」

確信に満ちた表情で、クー・フーリンが言う。

「正直、盲点だった――てっきり、私は今まで、その機械（からくり）を、ただ、使用者に一部の魔法が使えるようにするのと、悪魔召喚の術式を簡易的に行う為だけの道具だと思っていたからな。事実、その機械（からくり）の開発者である『あの男』は、そんな機能があるなどとは、私には教えなかった」

しかし――ここへきてとうとう、クー・フーリンは、その事実に気付いた。

気付いて――しまった。

「ハッ……」

『それ』を理解された事が、どれだけ自分にとって痛手なのかをハッキリと自覚しつつも、しかし淳は、気丈にも、その顔に薄く笑みを浮かべる。

「……もしも仮に、本当に、俺の改造ＣＯＭＰにそういった機能があったとして――だったら、それがどうしたっていうんだよ？」

対するクー・フーリンもまた、笑みを浮かべていた。

しかしそれは、現在、淳が無理矢理浮かべているような作り笑いではなく、何かしらの確信に満ちた――戦場において、絶対的優位に立った者のみが浮かべる事が許される、そんな類の笑みだった。

「君の事だ。もうとっくに気付いているとは思うが――まあいい」

ユラッ……、と、

僅かに、クー・フーリンの体が、前へと傾いた。

同時に、彼は言う。

「つまり、私はこう言いたいのだよ――君が持つその『こんぷ』とやらさえ破壊してしまえば、ここで君を討ち滅ぼす事が、限りなく容易になるのではないのか、とね」

直後だった。

フッ、と、

淳の視界から、クー・フーリンの姿が、何の前触れもなく消え失せた。

勿論、実際に、クー・フーリンの存在そのものが消失した訳ではない――その余りの移動速度に、淳の目が追いつかなかっただけだ。

その『事実』を理解したからこそ、淳には悟る事が出来た。

つまりは、

（コイツ、今までは本気じゃ――！？）

ギュアッ！　という音が、どこからともなく聞こえた。

一瞬の内に、淳のすぐ近くにまで移動したクー・フーリンが、同じく、凄まじい速さで、右手に握った雷の剣を振るった音だった。

本能的に、『それ』によってもたらされる絶望的な未来を予測した淳が、咄嗟に、ズボンのポケットに納めたＣＯＭＰに手を伸ばそうとするが――もう遅い。

そして、

ガシャンッ、と。

信じられないほどに軽く、恐ろしいほどに乾いた音と共に、有里淳の改造ＣＯＭＰが破壊された。

3rd Day『遊び人風の男』

――新宿、歌舞伎町。

先程、宮下公園の近くで、東京全体で同じ事が起こったのではないのか、と思ってしまう程の強い揺れを感じとった谷川柚子（たにかわゆず）と高城圭介（たかしろけいすけ）は、現在、歌舞伎町へと続く道の入口近くにまで来ていた。

何となれば、その揺れの中心地に、自分達の仲間である有里淳（ありさとじゅん）か、木原篤郎（きはらあつろう）のどちらかが――怨敵（おんてき）である悪魔クー・フーリンと戦っているのではないのか、と思ったからである。

「確か、この辺りから響いてきたような気がするんだけど……」

キョロキョロと辺りを見回しながら、ケイスケが言う。

しかし実際のところ、今の彼の発言は、それほどの自信があって放たれたものではなかった。

先程感じた地響きによって、その震源地の大まかな方角は分かっても、その距離や、ましてや正確な位置ともなれば、話は別だ。先程、揺れの中心地を探し始めてから、既に30分以上もの時間が経過した今となっては、ケイスケの中では、もしや、自分達は知らない内に、目的地を通り過ぎてしまったのではないか、という疑念さえも生まれてくるようになっていた。

と、彼が内心、辟易（へきえき）としていた、その時だった――傍らにいたユズが、突然、ある一点に視線を向けたまま、

「え……今のって……ナオヤさん……？」

と呟いたかと思うと、次には突然、その方向に向かって勢いよく駆け出したのだ。

「……え？　ちょっ……谷川さん！？」

しばしの間、突然のユズの行動の意味を図りかねて、呆然としていたケイスケだったが――すぐに我に戻ると、彼もまた、走り出したユズの後を追う為に、足を動かし始めた。

そのまま、歌舞伎町の通りへと入っていく2人。

それからしばらくして、ユズは、僅かに息を切らせながら立ち止まると、

「ああ、もうっ！　見失なっちゃったみたい！！」

と言う。

それから少し遅れて、彼女に追いつくケイスケ。彼は左手の甲で額の汗を拭うと、ゆっくりと口を開いた。

「谷川さん……。とりあえず落ち着いて……」

次には、フー……と、一旦、大きく息を吐き出すケイスケ。

「と言うより……今言ってたナオヤって……。もしかして、有里くんの従兄だっていう、あの……？」

「うん……」

足こそ止めはしたものの、未だ視線だけはどんなに僅かな変化でも見逃さない、とばかりに辺りへと走らせながら、ユズは小さく頷く。

「あの人と話さえ出来れば、今回の一連の事件についての情報が、何でも手に入るんじゃないのか、っていうぐらいの重要人物だって私達は踏んでるんだけど……。はぁ……昨日に続いて、今日もまた見失なっちゃうなんて……。しかも、どういう因果か、場所も同じだし……」

と、ユズがそこまで言った、その時だった。彼女とケイスケの近くに、全身を紫色のスーツで包み、滑らかな黒髪で片目を隠した男が現れたのだ。

顎に僅かに髭を生やし、全体的にどこか遊び人的な雰囲気を漂わせているその男は、ユズとケイスケの姿を認めるや否や、

「おや？　君……可愛い子を連れてるね。ボクにくれないかな？」

と言う。

当然のように、顔を赤くし、額から汗を流しながら、ススッ、と男から距離を取るユズ。

「な、何言ってるの？　この人……！」

一方、ケイスケの方はというと、そんな彼女とは対象的に、一歩、

遊び人風の男に向かって足を踏み出すと、やがては、ゆっくりと口を開いた。

「あの……貴方は？」

露骨に不信感を露にするケイスケに対して、しかし、全く気にしないどころか、何故か、そんな彼の態度を、どこか面白そうな目で見る遊び人風の男。

「あははっ！　オーケー、オーケー。そんなに怪しまないでよ、僕はホラ、見ての通り、ただの、どこにでもいる遊び人だからさぁ」

「……」

確かに、遊び人自体はどこにでもいるだろうが、しかし、『悪魔』という人外の存在がはこびる現在の東京に関しては、話が別なんじゃないのか――と、心の中で突っ込みを入れるケイスケ。

もっとも、何だかそれをいちいち指摘するのも馬鹿らしいと思ったので、あえて言葉にはしなかったが。

「……？　あれ……？　よく見たら、君……」

やがては――ふと、そのように呟いて、ズイッと上半身だけを乗り出すように前に傾けつつ、ユズの顔を見つめる遊び人風の男。

当然のように、再び、そんな男の視線から逃れるかのように、僅かに足を後ろに動かしながら、ユズは眉をひそめる。

「な……何ですか……？」

しかし、遊び人風の男はそんなユズの問いなど聞こえなかったかのように、そのまま更に数秒の間、彼女の顔をジッと見つめた後、やがては、何かを確信したかのように頷いた。

「おやおや、そうか……。なるほど、さては、君がユズちゃんだね？　ナオヤ君の従弟である、ジュン君の幼なじみの……」

その言葉を聞いたユズは、途端に、先程までのどこか怯えたような態度が嘘であるかのように、

「え……？　ふ、2人を知ってるの！？」

と、勢いよく尋ねた。

それを受けて、遊び人風の男は、実に嬉しそうな表情をする。

「そりゃあ知っているよ！　何たって、僕は2人のファンだからね！　……いや、正確には、2人の『血筋』のファン、かな。特に、ジュン君のお父さんについては、個人的に、色々と『思い出』もあるしねぇ……」

「……？　ジュンの……お父さん……？」

それを聞いたユズに言わせれば、どうして、そこで淳の父親が話に出てくるのか、全く分からなかった。勿論それには、彼女自身、淳の父親については殆ど知らないから、というのもあったが（淳の父親について彼女が知っている事といえば、精々が――2日前、当の本人の口から聞いたように――彼がまだ生まれるよりも前にこの世を去っている、という事ぐらいのものだった）。

もっとも、遊び人風の男の方は、その話題については余り話したくようで、一旦、「まあまあ、とりあえず今は、それについてはいいじゃない」と言うと、次には、

「ところで……君達は、自分の『未来』や『運命』について、考えた事はあるかい？」

と、急に話題を変える。

「君達の余命……今は『0』だねぇ？　つまり、もうすぐ君達は死ぬ。それも、確実にねぇ……」

「「……っ！！」」

分かってはいた事だが――しかしそれでも、改めて『現実』を知らされて、思わず言葉を失ってしまうユズとケイスケ。

が、遊び人風の男は、そんな2人の様子になど全く気付かない様子で、言葉を続ける。

「君達に死をもたらす者は、幾多もの悪魔達を束ねる嘆(なげ)きの長、不死の者……『ベル・デル』」

「『ベル・デル』……」

小さく復唱するケイスケ。

「そう……奴の出現を妨(さまた)げる事は、もはや誰にも出来はしない。あの『魔剣士』が動いているとなれば、尚の事だ。……もう間もなく

始まるんだよ……血の宴がね……」

そう話す遊び人風の男の口調からは、むしろ、そうなってくれればどれだけ面白いだろうか、という様子が見え見えだった。

そのまま――どこか恍惚（こうこつ）としたような表情で、遊び人風の男が言う。

「人間共は嘆きの中、ベル・デルの餌食となり……その死者の中には、君達の顔もある。勿論、ジュン君の顔もねぇ……」

「え……！？」

突然、自分の想い人がいずれ死ぬなどと言われて、当然のように取り乱すユズ。

が――次には、まるで別人のように強い意志の篭（こも）った視線を、遊び人風の男の顔に真っすぐに向けると、

「ジュンが死ぬなんて……！　……ダメ！　そんなの、絶対にさせない……！」

しかし遊び人風の男は、相変わらず、ユズの態度や心情など一体どこ吹く風、という様子だった。

「あっはっは。そうだろうねぇ？　誰だって、自分は勿論、知り合いまでもがいずれ死ぬと分かった時には、当然、何とかして、それを阻止しようとするよねぇ……？　しかもそれが、自分が恋心を抱いてる相手ともなれば、尚の事だ」

途端に、ボッと、これから湯気でも出し始めるんじゃないのか、と傍らにいるケイスケが心配してしまうぐらいに、顔を赤くするユズ。

「な……っ！　こ、恋心って……そ、そんな……！」

緊張した面持ちから一転して、途端に夢見る乙女モードに入るユズを見て、そんな事は至極どうでもいいとばかりに、小さく肩を竦める遊び人風の男。

「さて……まぁ、せっかく会えたんだ。１つ、サービスしちゃおうか？」

「サービス……？」

未だ、不信感を微塵たりとも弱めないまま、遊び人風の男の顔を見つつ、ケイスケは首を傾げる。

「そう、サービスだよ、サービス。いいかい、よく聞いててくれよ……？　不死の者ベル・デルは、その昔、この世に存在する全ての者達に、自分と霊的な契約をするようにと申し出た。結果、彼はその行為によって、彼と契約した、如何なる者にも、傷つけられる事はなくなったんだ……」

「……ッ」

遊び人風の男の説明に対し、何か口を挟もうとするユズではあったが――直後、そんな彼女を手で制しながら、『最後まで聞いた方が良い』、とケイスケが目で訴えてきたので、寸前で思い止まった。

「でもねぇ……、実は、彼と契約を成していない、たった1つの存在が、この封鎖の中にあるんだよ。それを見つけ出す事が出来れば、或いは、君達でも生き残ることが出来るかもしれない――」

その時だった。遊び人風の男は、突然、それまでの軽薄そうな顔を、どこか緊張感に満ちたそれへと変えると、次にはその顔を、あらぬ方向へと向ける。

「おや？　この感じは……もしかして……『ニュクス』……？　いや……まさか……そう簡単に、封印が解ける筈が……けど……もし、考えられるとすれば……」

「……？　あ、あの……」

何の前触れもなく様子がガラリと変わった遊び人風の男に対して、たまらず口を挟もうとするユズだったが、そんな彼女の言葉を遮る形で、遊び人風の男は、

「……悪いね、君達。出来れば、もう少し話をしていたいけど――どうやら、急用が出来てしまったようだ。また今度にしよう」

と言う。

刹那、ゴオッ！　と、突然、強い風が辺りに吹いた為、反射的に目を閉じるユズとケイスケ。

そして、次に2人が目を開けた時には、いつの間にか、遊び人風の男の姿が消えていた。

まるで――先程までの会話が、全て夢であったかのように。

「……？　消えた……！？　今の人は、一体……！？」

ケイスケが言う。

「ナオヤさんの事も知ってたし、ベル・デルとも言ってた……。普通じゃないよね……」

未だ遊び人風の男が姿を消した辺りの位置に視線を向けながら、ユズが言う。

「それにしても、さっきの話って、一体……？」

「……？　ああ……谷川さんが、有里君の事を好きだって話かい？」

「ち・が・い・ま・す」

柄にもないギャグ発言をしたケイスケに対して（彼の事だから、或いはギャグではなく、本気でそう思って言った可能性もあるが）、威圧感たっぷりの声で応じるイオ。

「もう……そうじゃなくて、ベル・デルを倒す為のカギ、でしょ？」

プクゥ、と可愛らしいく頬を膨らませながらそのように言うと、続けて、ユズは口を開く。

「契約をしていない、たった1つの存在……だっけ？　この封鎖の内側にあるって言ってたけど、本当かな……？」

「……分からない。少なくとも、ただの軽薄そうな男じゃない、っ

ていうのは確かみたいだけど……。何か、味方なのかもしれないけど、一応、さっき教えられた情報だけでも、覚えておいて損はないんじゃないかな？」

少なくとも、有里君やアツロウの耳には入れておいて、その後、2人の意見を聞くぐらいの事はしないとね――と、ケイスケは続ける。

それに対してユズは、1度小さく頷くと、

「うん……何より、ベル・デルなんかに会わずに脱出できれば、それが1番だけど……。さっきの話を聞いてると、何だか、どう考えても無理っぽいし……」

と言う。

「……まあ、ベル・デルが現れるっていう今日の内にこの封鎖から脱出するのは至難だろうし、そして、この封鎖内に身を置く以上、ベル・デルとの接触は避けては通れないだろうからね。……やっぱり、さっきの男が言ってた通り、ベル・デルと契約していないただ1つの物、っていうのを探す必要があるみたいだ」

「その意見には賛成だけど……。でも、具体的には、どうやって探すの？　まさか、闇雲に探したって、見つかる訳ないだろうし……」

「あ……」

そう言えばその通りだ、と思うケイスケ。少なくとも、道行く人に手当たり次第に聞いていく、等という安直なやり方では、とても見つけ出す事は出来ないだろう。まだ『東京封鎖』が開始されてか

ら3日しか経過していないという事もあってか、人々の中には、未だ悪魔の存在を否定し続ける人間も少なくないし、仮にそうでなくても、今朝のショウジのように、ベル・デルに関してだけは何も知らない可能性が高いからだ。

それを踏まえて、ケイスケは考える。

となると――まだ試しておらず、しかし効果的で、他に考えられる策としては……、

「悪魔に聞く……とか？」

我ながら凄い事を言ってるなぁ、と思いつつ、そのように呟くケイスケ。

「あ、悪魔にぃ……！？」

案の定、ユズはそんな反応をする。

しかし、彼女は驚きこそすれど――代案を思いつかない自分に対して、何か後ろめたさでも感じてるのか――ケイスケの発言の全てを否定したりはしなかった。

「……ま、まぁ、悪魔も一応、話せはするけどさ。大丈夫かなぁ……？」

ユズがそう言うのも無理はない、とケイスケは思った。お互い、この数日の間に、それなりの数と種類の悪魔に出会ってきてはいるが、それらの殆どは、喋れこそすれど、とても、自分達人間に対して、友好的な関係を築こうなどとは望んでいないような連中ばかり

だったからだ。

しかし、それについてはあえて口には出さず、ケイスケは、

「そう……だね。ん～……後は情報、情報……か」

と、努めて前向きに、ベル・デルの弱点を見つけ出す為の案を模索しようとする。

が、そんな中、

「うん……。ん……？　ちょ、ちょっと待ってケイスケ君！　私達って、今はジュンやハルさんを探してる筈じゃなかったの！？」

と、ユズが慌てて、本来の自分達の目的をケイスケに思い出させようとする。

とはいえ、それについての心配は無用だった――というのも、ケイスケは決して、本来の目的を忘れた訳ではなかったからだ。

その証拠に、彼は言う。

「あ……ごめん。ただ……そっちの方が『効率』がいいかな、って……」

「こ、効率って……」

如何にも「そういう問題なの？」とでも言いたげな表情をするユズ。

「うん……少なくとも、アツロウならそう言った筈だと思うから」

頷きながら、ケイスケが言う。

「……」

「情けない話だけど、正直、ハルさんを攫っていった、あの『クー・フーリン』って悪魔の実力は――少し前にアツロウが言ってたように――明らかに、これまで会ってきた悪魔達とは次元が違う。多分、仮にこのままそいつと会ったとしても、僕達じゃ何も出来ないだろう。……それこそ、有里君のような不確定因子でもない限りはね」

とつとつと、自分の考えを述べていくケイスケ。

「だからこそ、僕はこう思うんだ――この場合、有里君かアツロウのどっちかが、ハルさんを見事に救出した時の為に備えて、僕達も、ここはベル・デルの弱点を探しておいた方がいいんじゃないのか、って」

「……」

未だ、自分の考えに対して口を挟んでこないユズに対して、ケイスケは、

「君が決めてくれ」

と言う。

「……？　え……わ、私？」

案の定、頭の上にいくつもの疑問符を浮かべるユズ。

そんな彼女に対して、ケイスケは言葉を続ける。

「僕はあくまで、今言った自分の案が、これから僕達が取る行動としては、最善のものだと思ってる。でも……、一度は君と、そして、アツロウや有里君の余命を見て逃げ出した僕に、君達にこうした方がいい、って強く言う資格はない」

そこで一旦、ケイスケは言葉を切ると、次のように言った。

「――だから、僕の案をいざ実行に移すかどうかは、谷川さんに決めて欲しいんだ。僕は、それに従う」

「……」

しばしの間、じっと目を合わせたまま、互いの真意を探ろうとする2人。

ややあって、

「……うん」

と、何か満足したかのように、ユズが頷く。

その両目には、何かを固く決意したかのような、強い意思の炎が宿っていた。

「うん……分かった……！　いいよ！　私も、ケイスケ君の案に乗る……！　私は戦う事には向いてないけど……。そんな私でも出来

る事があるんだって、あの2人に証明してあげなくちゃ！！」

「……ありがとう、谷川さん」

1つ小さく頷きながら、彼女に対して礼を述べるケイスケ。

一方ユズは、1度は放置してしまった問題を解決する為に、

「でも――話を戻すけど――具体的にはどうやって、ベル・デルの弱点を探すの？　確かさっきは、悪魔に聞くとか何とかって言ってたけど……」

と言った。

「それについては、考えがある。さっき『情報』って呟いた時に、ピンときたんだけど――でも、とりあえず、今は場所を変えよう。この辺りにはまだ、悪魔が多く現れるから……どこか、今後の展開についてゆっくり考えられる場所に移動しなきゃ」

ケイスケの言葉に対して、「うん……それもそうだね！」と応じるユズ。

「よ～し！　見てなさいよ、ジュン、アツロウ……！　絶対にベル・デルの弱点に関する情報っていうのを見つけて、あっと驚かせてやるんだか！！」

そう言って、足早にその場から移動し、率先して歌舞伎町の出入口へと向かっていくユズ。

そんな光景を見て、先のユズの台詞を思い出しながら、ケイスケ

は考える。

先程ユズは、自分にも出来る事があると、淳やアツロウに証明してみせる、という旨の発言をしていたが――別に、その必要はないんじゃないか、とケイスケは思っていた。

あの2人は――有里淳と木原篤郎は、もうとっくに、谷川柚子にも出来る事があると認めている筈だ、と。

そうでなければ、野外音楽堂にて、淳に何度も回復魔法をかけた事によって、すっかり魔力を使い果たしてしまった自分を守る役目を、任せたりはしない筈だ――と、

ケイスケはそう思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7794m/

DEVIL SURVIVOR-PERSONA CROSS-

2011年9月20日19時18分発行